福島県文化財調査報告書第262集

東北横断自動車道遺跡調査報告12

屋　敷　遺　跡

1991年12月

福島県教育委員会
財団法人福島県文化センター
日本道路公団

東北横断自動車道遺跡調査報告12

屋敷（やしき）遺跡

序　　文

東北横断自動車道いわき～新潟線は，太平洋側のいわき市と日本海側の新潟市を結ぶ，延長210kmに及ぶもので，そのうち152kmは福島県の路線であります。

この道路は，いわき市西部に広がる台地，郡山盆地，猪苗代湖岸の丘陵地，会津盆地及びそれらの周辺地区をほぼ東西に横断する計画であり，その路線のなかには多くの埋蔵文化財包含地が存在しております。そこで福島県教育委員会では昭和53年と昭和57年に整備計画路線となった郡山～猪苗代間，猪苗代～会津坂下間につきまして路線予定地内の表面調査による遺跡分布調査を実施しました。その結果，両区間の横断自動車道路線内に22ヵ所の遺跡を確認しております。

これらの遺跡のうち昭和63年度に着工されました猪苗代～会津坂下間の15遺跡につきましては，発掘調査を行い記録保存することになり，平成２年度は調査３年次として３遺跡の発掘調査を，財団法人福島県文化センターに委託して実施してまいりました。

今回報告いたします会津若松市屋敷遺跡は弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての集落と墓域がまとまって発見され，さらに平安時代では長さ約100ｍの溝跡に囲まれた内外に大規模な集落が発見されました。特に井戸の枠が良好な状態で出土し今後の基礎資料となることと思います。

これらの貴重な資料をまとめました本報告書が，広く県民の方々に文化財についての認識を深めるため役立てていただくとともに，研究資料としてご活用いただければ幸いと存じます。

最後に，この遺跡の調査から報告書の作成にあたり，ご協力いただいた関係機関，関係者各位に対して感謝の意を表すものであります。

平成３年12月

福島県教育委員会
教育長　渡　辺　忠　男

あいさつ

東北横断自動車道いわき～新潟線は，平成７年度の全面開通を目指して，建設工事が急ピッチで進められております。平成３年８月には，磐梯熱海～猪苗代間の供用が開始され，猪苗代～会津坂下間も平成４年10月に供用開始が予定されています。本県の交通網もこのように整備されつつありますが，開発にともなって先人の残した貴重な文化遺産が消滅することも否めません。

東北横断自動車道用地内には，数多くの遺跡が確認されており，用地内に所在する埋蔵文化財については，開発機関の協議に基づいて，当センターが記録保存のための発掘調査を進めているところであります。平成２年度は，会津若松市から西会津町に所在する５遺跡，および郡山市に所在する３遺跡について発掘調査を実施しました。

本報告書は，このうち会津若松市の屋敷遺跡の調査成果をまとめたものであります。今回の調査では，東北地方では初めての弥生時代の方形周溝墓や平安時代の大規模な集落など貴重な資料が多数発見されまして，会津地方の当時の人々の生活を知る貴重な手がかりになると考えられます。本報告書が，今後更に歴史を解明するための基礎資料として，また郷土を理解するための資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に調査にあたり，ご協力いただいた日本道路公団仙台建設局会津若松工事事務所・福島県関係各課・関係市町村及び教育委員会・工事関係者・地元の皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成３年12月

財団法人　福島県文化センター
館　長　佐　藤　昌　志

例　　言

1．本書は，東北横断自動車道いわき～新潟線にかかる遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書には，平成２年度，猪苗代～会津坂下間で発掘調査を実施した３遺跡中，会津若松市に所在する屋敷遺跡の調査成果を収録した。

3．当遺跡調査事業は，福島県教育委員会が日本道路公団の委託をうけて行ったものである。

4．福島県教育委員会は，発掘調査の実施を財団法人福島県文化センターに委託した。

5．財団法人福島県文化センターでは，事業第２部遺跡調査課の次の職員を配し調査にあたった。

＜平成元年度＞　文化財主査　佐原崇彦　　文化財主査　大越道正　　文化財主事　藤谷　誠
文化財主事　西山真理子　嘱　　託　高村朋子

＜平成２年度＞　専門文化財主査　木本元治　　文化財主査　中野康夫　文化財副主査　芳賀英一
文化財副主査　香内　修　　文化財主事　伊藤勝彦　　文化財主事　藤谷　誠
文化財主事　小野田義和

6．本報告書は、担当調査員が分担して執筆した。執筆者名は文末に示した。

7．弥生土器・須恵器・土師器の胎土分析は，奈良教育大学教育学部教授三辻利一氏に依頼した。

8．植物遺体の鑑定は，福島大学名誉教授鈴木敬治氏に依頼した。

9．鉄滓については，分析を川鉄テクノリサーチ，考察を大澤正己氏に依頼した。

10．木製品の樹種同定は，福島県立博物館主任学芸員松田隆嗣氏に依頼した。

11．墨書土器の判読については，国立歴史民俗博物館助教授平川南氏の指導を受けた。

12．本書に掲載した地形図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の地形図を複製したものである。（承認番号：平３東複第30号）

13．本書に収録した発掘記録及び出土品は，福島県文化センターで保管の予定である。

14．発掘調査及び報告書作成にあたり，次の機関や方々に助言と協力を得た。

福島県立博物館　　会津若松市教育委員会　　北塩原村教育委員会　　新鶴村教育委員会
石川県立埋蔵文化財センター　　富山県埋蔵文化財センター　　石川県高松町教育委員会
長岡市教育委員会　　折戸靖幸　　北野博司　　久々忠義　　駒形敏朗　　坂井秀弥
佐藤信行　　田中敏　　次山淳　　辻秀人　　板木英道　　藤田三郎　　藤原妃敏　　古川利明
三浦純夫　　豊岡卓之　　森幸彦　　吉田博之　　柳沼賢治　　中村五郎　　赤澤徳明

凡　　例

1．本書の遺構図の用例は，次の通りである。

(1) 方　位　　図中の方位は真北を示す。土坑については上を真北とした。

(2) 縮尺率　　原則として住居跡・掘立柱建物跡・土坑・特殊遺構は1/60，周溝状遺構は1/120で採録した。

(3) ケ　バ　　遺構内の傾斜部はTのケバで表現した。

(4) 焼　土　　焼土の範囲はアミ点で表示した。

(5) 柱　痕　　柱痕はアミ点で表示した。

(6) 土　層　　遺跡内堆積土はローマ数字で，遺構内堆積土は算用数字で示した。

2．遺物の実測図は次の用例による。

(1) 縮尺率　　各遺物の大きさに合わせて縮尺率を選定したが，土器については，拓本を2/5・1/3，実測図を1/2・・1/31/4，石器・石製品は2/3・1/2・1/3，鉄器は1/3，古銭は1/2，木器は1/10で採録した。

(2) 土器断面　縄文土器・弥生土器・土師器の断面は白抜き，須恵器についてはベタ黒で表示した。また，粘土の積み上げ痕は，一点鎖線で表示した。

(3) 墨書土器　墨書部分については，底部はそのまま，体部は平面に投影した形で採録した。また，墨書部分にかかる割れ口は一点鎖線で表示した。

(4) 遺物番号　土器とそれ以外の遺物とに分け，それぞれ通し番号をつけた。

3．本文中及び遺物整理に使用した略号は次の通りである。

会津若松市……ＡＷ	屋敷遺跡……ＹＳ
掘立柱建物跡……ＳＢ	竪穴住居跡……ＳＩ
溝跡……ＳＤ	土坑……ＳＫ
ピット……Ｐ	井戸跡……ＳＥ
特殊遺構……ＳＸ	柱列……ＳＡ

目　　次

第１章　調査経過と遺跡の環境

第１節　調査に至るまでの経過……1
第２節　地理的環境……2
第３節　歴史的環境……4
第４節　調査経過……7
第５節　調査方法……8

第２章　遺構と遺物

第１節　基本土層と遺構の分布……9
第２節　竪穴住居跡……14
第３節　掘立柱建物跡……30
第４節　土　坑……91
第５節　井戸跡……161
第６節　周溝状遺構……203
第７節　溝　跡……235
第８節　埋設土器……247
第９節　ピット群……254
第10節　柱　列……255
第11節　畝状遺構……258
第12節　特殊遺構……259
第13節　遺構外出土遺物……284

第３章　考　察

第１節　縄文時代の遺構と遺物について……333
第２節　弥生～古墳時代の遺物について……335
第３節　弥生～古墳時代の遺構について……354
第４節　平安時代の遺物について……357
第５節　平安時代の遺構について……364
第６節　遺跡の立地について……368
第７節　まとめ……370

付編１　屋敷遺跡出土土器の蛍光Ｘ線分析……374

付編２　屋敷遺跡出土植物遺体分析……384

付編３　屋敷遺跡出土鉄滓の金属学的調査……385

付編４　屋敷遺跡井戸跡の木材について……389

挿　図・表　目　次

〔挿　図〕

第１図　東北横断道(いわき～新潟線)路線図……1
第２図　地質柱状図，月別気温・降水量……3
第３図　周辺遺跡分布図……5
第４図　屋敷遺跡工事計画図……折込み
第５図　基本土層柱状図……9
第６図　屋敷遺跡周辺地形図……10
第７図　Ⅰ区遺構配置図……11
第８図　Ⅱ区遺構配置図……12
第９図　Ⅳ区遺構配置図……13
第10図　１号住居跡出土遺物……14
第11図　１号住居跡……15
第12図　２号住居跡炉跡……16
第13図　２号住居跡……17
第14図　２号住居跡出土遺物……18
第15図　３号住居跡……19
第16図　４号住居跡……20
第17図　５号住居跡……21
第18図　５号住居跡出土遺物……21
第19図　６号住居跡出土遺物……22
第20図　６・７号住居跡……24
第21図　９号住居跡……25
第22図　10号住居跡……26
第23図　11号住居跡……27
第24図　11号住居跡出土遺物(1)……28
第25図　12号住居跡出土遺物……28
第26図　11号住居跡出土遺物(2)……29
第27図　12号住居跡……30
第28図　１号建物跡……31
第29図　２・３号建物跡……33
第30図　４号建物跡……34
第31図　５号建物跡……35
第32図　６号建物跡……37
第33図　７号住居跡……38
第34図　８号住居跡柱配置図……39
第35図　８号建物跡……41
第36図　９号建物跡……43
第37図　10号建物跡出土遺物……44
第38図　10号建物跡……45
第39図　11号建物跡出土遺物……46
第40図　11号建物跡……47
第41図　12号建物跡……48
第42図　13号建物跡……50
第43図　13号建物跡出土遺物……51
第44図　14号建物跡出土遺物……52
第45図　14号建物跡……53
第46図　15号建物跡……54
第47図　15号建物跡出土遺物……55
第48図　16号建物跡……56
第49図　17号建物跡……57
第50図　18号建物跡……58
第51図　19号建物跡……60
第52図　19号建物跡出土遺物……60
第53図　20号建物跡出土遺物……62
第54図　20号建物跡……63
第55図　21号建物跡出土遺物……64
第56図　21号建物跡……65
第57図　22号建物跡……66
第58図　23号建物跡……68
第59図　24号建物跡……69
第60図　25号建物跡……71
第61図　25号建物跡出土遺物……72
第62図　26号建物跡……73
第63図　26号建物跡出土遺物……74
第64図　27号建物跡……75
第65図　28号建物跡(１)……76
第66図　28号建物跡(２)……77
第67図　28号建物跡出土遺物……78
第68図　29号建物跡出土遺物……78
第69図　29号建物跡……79
第70図　30号建物跡……80
第71図　30号建物跡出土遺物……81
第72図　31号建物跡……82
第73図　32号建物跡……83
第74図　33号建物跡出土遺物……84
第75図　33号建物跡……85
第76図　34号建物跡……87
第77図　35号建物跡……89
第78図　36号建物跡……90
第79図　11号土坑出土遺物……91
第80図　13号土坑出土遺物……92
第81図　18号土坑出土遺物(１)……93
第82図　18号土坑出土遺物(２)……94
第83図　21号土坑出土遺物……95
第84図　32号土坑出土遺物……96

第85図　34・37号土坑出土遺物……97
第86図　43号土坑出土遺物……98
第87図　59号土坑出土遺物……99
第88図　72号土坑出土遺物……100
第89図　108号土坑出土遺物……101
第90図　112号土坑出土遺物……101
第91図　121号土坑出土遺物……102
第92図　126号土坑出土遺物……102
第93図　133号土坑出土遺物……104
第94図　134号土坑出土遺物……104
第95図　152号土坑出土遺物……105
第96図　164号土坑出土遺物……106
第97図　210号土坑出土遺物……107
第98図　254号土坑出土遺物……109
第99図　261号土坑出土遺物……109
第100図　272号土坑出土遺物……109
第101図　275号土坑出土遺物……111
第102図　291号土坑出土遺物……112
第103図　1～10号土坑……120
第104図　11～17号土坑……121
第105図　18～25号土坑……122
第106図　26～32号土坑……123
第107図　33～41・43・115号土坑……124
第108図　42・44～54号土坑……125
第109図　55～63・75号土坑……126
第110図　64～74・76号土坑……127
第111図　77～92・111号土坑……128
第112図　93～106号土坑……129
第113図　107～110・112～114・116・177号土坑……130
第114図　117～133号土坑……131
第115図　134～146・148号土坑……132
第116図　147・149～153号土坑……133
第117図　154～166号土坑……134
第118図　167～176・178号土坑……135
第119図　179～190号土坑……136
第120図　191～203号土坑……137
第121図　204～215号土坑……138
第122図　216～226号土坑……139
第123図　227～237・239号土坑……140
第124図　238・240～250・253号土坑……141
第125図　251・252・254～256号土坑……142
第126図　257～265号土坑……143
第127図　266～273号土坑……144
第128図　274～283号土坑……145
第129図　284～292・294号土坑……146
第130図　293・295～304号土坑……147
第131図　305～318号土坑……148
第132図　1・2・4・6・7号土坑出土遺物……149
第133図　9・12・15・22・24・25号土坑出土遺物……150
第134図　29・30・39・48・50・53・56・58・
61・62号土坑出土遺物……151
第135図　63～65・67・68・70・74号土坑出土遺物……152
第136図　75・76・82号土坑出土遺物……153
第137図　82・92・96・97・99・103・105・
106号土坑出土遺物……154
第138図　38・110・111・113・125・
153号土坑出土遺物……155
第139図　159・161・169・171・172号土坑出土遺物……156
第140図　172・176・177・182・183・185号土坑
出土遺物……157
第141図　118・187・189・218・219・221・224・228・
232号土坑，8号井戸跡出土遺物……158
第142図　235・237・252・255・260号土坑出土遺物……159
第143図　263・268・270・281・285・287号土坑出土遺物……160
第144図　304・307・311号土坑出土遺物……161
第145図　3号井戸跡井戸枠概略図……162
第146図　1～5号井戸跡……163
第147図　3号井戸跡出土遺物(1)……164
第148図　3号井戸跡出土遺物(2)……165
第149図　3号井戸跡井戸枠(1)……166
第150図　3号井戸跡井戸枠(2)……167
第151図　3号井戸跡出土木製品……168
第152図　5号井戸跡出土遺物……170
第153図　6号井戸跡出土遺物……171
第154図　7号井戸跡出土遺物……171
第155図　6～9号井戸跡……173
第156図　9号井戸跡出土遺物……174
第157図　10号井戸跡出土遺物……176
第158図　10・12号井戸跡……177
第159図　12号井戸跡井戸枠概略図……178
第160図　12号井戸跡出土遺物(1)……179
第161図　12号井戸跡出土遺物(2)……180
第162図　12号井戸跡井戸枠(1)……181
第163図　12号井戸跡井戸枠(2)……182
第164図　12号井戸跡井戸枠(3)……183
第165図　11・13・14号井戸跡……185
第166図　14号井戸跡出土遺物……186
第167図　14号井戸跡出土木製品(1)……187
第168図　14号井戸跡出土木製品(2)……188
第169図　15号井戸跡……189

第170図　15号井戸跡井戸枠概略図……189
第171図　15号井戸跡出土遺物……190
第172図　15号井戸跡井戸枠(1)……191
第173図　15号井戸跡井戸枠(2)……192
第174図　15号井戸跡井戸枠(3)……193
第175図　15号井戸跡井戸枠(4)……194
第176図　15号井戸跡井戸枠(5)……195
第177図　15号井戸跡井戸枠(6)……196
第178図　15号井戸跡井戸枠(7)……197
第179図　16号井戸跡出土遺物……198
第180図　17号井戸跡出土遺物……199
第181図　19号井戸跡出土木製品……200
第182図　16～20号井戸跡……201
第183図　19号井戸跡出土遺物……202
第184図　20号井戸跡出土遺物……203
第185図　1号周溝状遺構……204
第186図　1号周溝状遺構出土遺物……205
第187図　2号周溝状遺構……205
第188図　3号周溝状遺構……207
第189図　3号周溝状遺構出土遺物……208
第190図　4号周溝状遺構……209
第191図　4号周溝状遺構遺物出土位置……210
第192図　4号周溝状遺構出土遺物(1)……211
第193図　4号周溝状遺構出土遺物(2)……212
第194図　5号周溝状遺構……213
第195図　5号周溝状遺構出土遺物……214
第196図　6号周溝状遺構……214
第197図　6号周溝状遺構出土遺物……215
第198図　7号周溝状遺構(1)……216
第199図　7号周溝状遺構(2)……217
第200図　7号周溝状遺構遺物分布図……218
第201図　7号周溝状遺構出土遺物(1)……219
第202図　7号周溝状遺構出土遺物(2)……220
第203図　7号周溝状遺構出土遺物(3)……221
第204図　7号周溝状遺構出土遺物(4)……222
第205図　8号周溝状遺構……224
第206図　8号周溝状遺構出土遺物……224
第207図　9号周溝状遺構……225
第208図　9号周溝状遺構出土遺物……226
第209図　10号周溝状遺構出土遺物……226
第210図　10号周溝状遺構……227
第211図　11号周溝状遺構……228
第212図　11号周溝状遺構出土遺物……229
第213図　12号周溝状遺構……230
第214図　12号周溝状遺構出土遺物(1)……231
第215図　12号周溝状遺構出土遺物(2)……232
第216図　13号周溝状遺構……233
第217図　13号周溝状遺構出土遺物……234
第218図　43号溝跡出土遺物……235
第219図　46号溝跡出土遺物……236
第220図　70号溝跡出土遺物……237
第221図　153号溝跡出土遺物……238
第222図　2・4・7・9・16・20・38・39・41・51号
溝跡出土遺物……244
第223図　51・53・56・58・62・68号溝跡出土遺物……245
第224図　59・68・73・82・86・91・97・104・109・112・118・
121・123・145・147号溝跡出土遺物……246
第225図　1号埋設土器……247
第226図　2号埋設土器……248
第227図　3号埋設土器……249
第228図　1～5号埋設土器……250
第229図　4号埋設土器(1)……251
第230図　4号埋設土器(2)……252
第231図　5号埋設土器……253
第232図　ピット群出土遺物……254
第233図　1～3号柱列……256
第234図　畝状遺構……258
第235図　1・2号特殊遺構……260
第236図　1号特殊遺構出土遺物(1)……261
第237図　1号特殊遺構出土遺物(2)……262
第238図　3号特殊遺構……264
第239図　6号特殊遺構出土遺物……265
第240図　4～6・8号特殊遺構……266
第241図　6号特殊遺構出土遺物……267
第242図　7号特殊遺構……268
第243図　7号特殊遺構出土遺物……269
第244図　8号特殊遺構出土遺物……270
第245図　9号特殊遺構遺物分布図……272
第246図　9号特殊遺構出土遺物(1)……273
第247図　9号特殊遺構出土遺物(2)……274
第248図　9号特殊遺構出土遺物(3)……275
第249図　10・11号特殊遺構……276
第250図　12号特殊遺構……277
第251図　12号特殊遺構出土遺物(1)……278
第252図　12号特殊遺構出土遺物(2)……279
第253図　12号特殊遺構出土遺物(3)……280
第254図　12号特殊遺構出土遺物(4)……281
第255図　14・15号特殊遺構出土遺物……281
第256図　13・14号特殊遺構……282
第257図　2・4・10・11・13号特殊遺構出土遺物……283

第258図　遺構外出土遺物（１）……285
第259図　遺構外出土遺物（２）……286
第260図　遺構外出土遺物（３）……287
第261図　遺構外出土遺物（４）……288
第262図　遺構外出土遺物（５）……289
第263図　遺構外出土遺物（６）……290
第264図　遺構外出土遺物（７）……291
第265図　遺構外出土遺物（８）……292
第266図　遺構外出土遺物（９）……293
第267図　遺構外出土遺物(10)……294
第268図　遺構外出土遺物(11)……295
第269図　遺構外出土遺物(12)……296
第270図　遺構外出土遺物(13)……297
第271図　遺構外出土遺物(14)……298
第272図　遺構外出土遺物(15)……299
第273図　遺構外出土遺物(16)……300
第274図　遺構外出土遺物(17)……301
第275図　遺構外出土遺物(18)……302
第276図　遺構外出土遺物(19)……303
第277図　遺構外出土遺物(20)……304
第278図　遺物分類図１　縄文土器……333
第279図　遺物分類図２　壺（１）……335
第280図　遺物分類図３　壺（２）……337
第281図　遺物分類図４　壺（３）……338
第282図　遺物分類図５　小型壺……339
第283図　遺物分類図６　小型丸底壺・小型鉢……340
第284図　遺物分類図７　高杯（１）……343
第285図　遺物分類図８　高杯・器台……344
第286図　遺物分類図９　鉢・蓋・注口土器・ミニチュア土器……345
第287図　遺物分類図10　小型甕・台付甕……346
第288図　遺物分類図11　甕（１）……347
第289図　遺物分類図12　甕（２）……349
第290図　遺物分類図13　甕（３）……350
第291図　検出方形周溝墓……356
第292図　屋敷遺跡・大戸Ｍ25須恵器杯分布……360
第293図　遺跡別須恵器杯形態比較……361
第294図　時期別建物配置……365
第295図　屋敷遺跡井戸跡模式断面図（Ⅴ区）……370

〔表〕

第１表　周辺遺跡地名表……６
第２表　１号建物跡ピット計測表……32
第３表　２号建物跡ピット計測表……32
第４表　３号建物跡ピット計測表……33
第５表　４号建物跡ピット計測表……33
第６表　５号建物跡ピット計測表……34
第７表　６号建物跡ピット計測表……36
第８表　７号建物跡ピット計測表……37
第９表　８号建物跡ピット計測表……40
第10表　９号建物跡ピット計測表……42
第11表　10号建物跡ピット計測表……44
第12表　11号建物跡ピット計測表……46
第13表　12号建物跡ピット計測表……49
第14表　13号建物跡ピット計測表……50
第15表　14号建物跡ピット計測表……52
第16表　15号建物跡ピット計測表……54
第17表　16号建物跡ピット計測表……55
第18表　17号建物跡ピット計測表……56
第19表　18号建物跡ピット計測表……58
第20表　19号建物跡ピット計測表……59
第21表　20号建物跡ピット計測表……61
第22表　21号建物跡ピット計測表……64
第23表　22号建物跡ピット計測表……67
第24表　23号建物跡ピット計測表……67
第25表　24号建物跡ピット計測表……69
第26表　25号建物跡ピット計測表……70
第27表　26号建物跡ピット計測表……74
第28表　27号建物跡ピット計測表……75
第29表　28号建物跡ピット計測表……76
第30表　29号建物跡ピット計測表……78
第31表　30号建物跡ピット計測表……80
第32表　31号建物跡ピット計測表……81
第33表　32号建物跡ピット計測表……83
第34表　33号建物跡ピット計測表……84
第35表　34号建物跡ピット計測表……86
第36表　35号建物跡ピット計測表……88
第37表　36号建物跡ピット計測表……88
第38表　土坑一覧表……113～119
第39表　遺跡一覧表……240～243
第40表　１号柱列ピット計測表……255
第41表　２号柱列ピット計測表……257
第42表　３号柱列ピット計測表……257
第43表　遺物観察表（１）土器……305～330
第44表　遺物観察表（２）木製品……331
第45表　遺物観察表（３）石・金属製品……332
第46表　ロクロ土師器杯・椀分類……358
第47表　遺構別出土遺物一覧（平安時代）……362

〔付図〕

Ⅲ・Ⅴ区遺構配置図

第１章　調査経過と遺跡の環境

第１節　調査に至るまでの経過

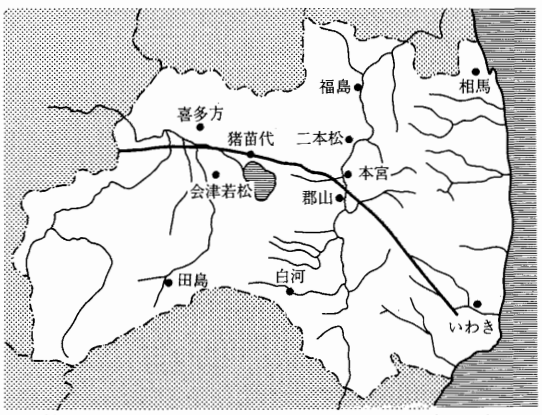
屋敷遺跡は，昭和35年分布調査の埋蔵文化財調査台帳によれば，昭和30・31年の圃場整備工事に際し発見され，広範囲から多量の弥生時代後期の土器片や土師器・須恵器の破片が出土したことが記録されている。この分布調査をもとに，昭和36年度刊行の『福島県遺跡地名表』には福島県843「弥生土器・土師器・須恵器包含地　屋敷遺跡」として登録された。また昭和42年度刊行の『会津若松市史１』「ひらかれた会津」にも弥生土器出土遺跡として記載されている。

その後は，遺跡の大部分が水田化して採集できる遺物の量も少なくなってしまったこととあいまって，あまり注目も受けず昭和46年の『福島県遺跡地名表』，昭和49年の文化庁の埋蔵文化財地図「福島県」，昭和59年の『福島県埋蔵文化財分布図』に掲載されたのみであった。

昭和57年の東北横断自動車道建設に伴う分布調査の折りには，地区内の遺跡として確認されなかった。その後，昭和62年度の補足分布調査で圃場整備工事により一部破壊はされているが，弥生・古墳・平安時代の大規模な遺跡が確認され，表面から推定される面積は31,000㎡とされた。

この遺跡の所在は，会津若松インターチェンジ予定地であり，工事がかなり進んだ段階で東北横断道用地内遺跡としての確認が行われたため，工事計画の変更は不可能であった。そこで，道路公団と協議の上，平成元年度は工事の優先部分の発掘と，遺跡の範囲確認調査もあわせて行うこととした。その結果，要調査面積は23,000㎡であることが確認された。その内9,000㎡は平成元年度に調査が完了したので，平成２年度は14,000㎡の調査予定であったが，途中で県道バイパスとの間の法面部分800㎡が追加され，最終的調査面積は23,800㎡となった。

ところで，従来の遺跡分布地図における遺跡の範囲は，調査区の南にある墓地を中心とした東西180ｍ・南北270ｍであった。しかし，今回の試掘により，さらに北に150ｍ程延びていることが確認され，また，遺跡の北西の範囲も県道バイパス予定地の若干西側，東北横断自動車道本線の南側付近まであることが確認された。（木本）



第１図　東北横断道（いわき～新潟線）路線図

第２節　地理的環境

発掘調査が行われた屋敷遺跡は，会津盆地のほぼ中央部に位置している。会津盆地の東側には猪苗代湖およびその平野部もふくめた猪苗代盆地が，さらには奥羽脊梁山脈が南北に連なっている。会津盆地と猪苗代盆地とは，背中炙(せあぶり)高原と呼ばれる丘陵性山地によって隔てられており，猪苗代湖からの唯一の排出河川である日橋川の流域が最も高度が低く(200～500ｍ)，南側が漸次高度を増しながら，頂高のそろったなだらかな地形となっている。会津盆地の北東部は，猫魔火山および更新世中期の火山性堆積物等により盆地側に向かって緩やかに傾斜した地形を形成している。一方，盆地の西側は，砂礫層を主とする七折坂層などからなっている。地形的には頂面が非常によくそろい，全体として東側に向かって緩やかに傾斜する面をもつ丘陵が発達している。この丘陵は阿賀川の付近では高度300ｍで最も低く，北と南に向かって徐々に高くなる。

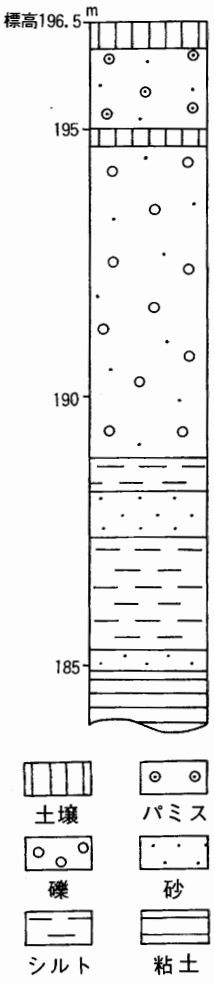
会津盆地は，面積が約300㎢，標高は180～220ｍ程である。中央部の阿賀川から流れ出す一番低いところは標高170ｍである。盆地内は全体として沈降傾向にあるため，比較的古い更新世の堆積物は縁辺部の一部を除き埋没してしまっている。そのため古い段丘地形の一部は明確には残っていない。それで盆地内は高低差の少ない比較的平坦な地形となっている。福島・郡山盆地等の段丘が発達した地形とは対照的である。会津盆地内の平野部を作る沖積面については高位沖積段丘面・低位沖積段丘面と河川ぞいの氾濫原に区分されている。高位沖積段丘面は低位沖積段丘面から２～４ｍぐらい高い所にあり，盆地の縁辺部の一部にのみ分布している。氾濫原は低位沖積段丘面から１～２ｍほど低いところに，現在の川筋に沿って分布し，主に砂礫層から成っている。これは盆地内の阿賀川流域に大きく広がっている。

屋敷遺跡は，低位沖積段丘面上に立地しているものと考えられる。遺跡の標高は195～197ｍで非常に緩やかな角度で北北西方向にわずかに傾斜している。遺跡の周辺についてもほぼ同様である。西方1.5㎞を旧湯川が北流し，さらにその西側の３㎞を阿賀川(大川)が流れ，これら河川の川床との比高差はそれぞれ約２ｍ・４ｍである。また東方１.5～1㎞ほどを流れている不動川・吹矢川・金山川が合流して瀬川(せせらぎ)となっている中小河川の川床との比高差は－４～２ｍである。

屋敷遺跡付近の地質は，第２－ａ図に示すように，表土・沼沢浮石質砂層(層厚約1.5ｍ)・暗褐色シルト(層厚0.3ｍ)・砂礫層(層厚5.5ｍ)・シルト・粘土層……と続いている。このうち砂礫層の上部以上は露頭で観察したものだが，以下はボーリング資料によるものである。図で示した中で最下位のシルト・粘土層は，屋敷遺跡東方2㎞に位置する船ヶ森西遺跡付近で見られる最下層の泥層に対比できるものと考えられる。したがって最終氷期の堆積物であろう。寒冷な沼湿地の環境下で堆積したものと判断される。さらに上位には中～大礫を含む砂礫層が堆積している。

このうち上部の一部は沖積低位段丘に相当する堆積物と考えられる。その上位には暗褐色シルトが堆積している。有機物を含んだ砂質のシルトで，いわゆる埋没土壌に相当するものであろう。これは礫層堆積後，しばらくは地表となり，河川等によって運ばれた細粒物が土壌化したことを意味するものと考えられる。その上位には沼沢浮石質砂層となる。この層は約5,000年前の沼沢火山の噴火に伴い二次的に形成されたものである。噴火の際，大量の軽石流とその二次的流出物が只見川や阿賀川の峡谷部に流下堆積したため，一時的なせき止めが生じた。そのため河川の水位が上昇し，盆地内では，標高が約200ｍ付近まで，一時的に水域が生じたと考えられている。この水域に周辺から降灰した軽石が流れ込み，堆積したものである。

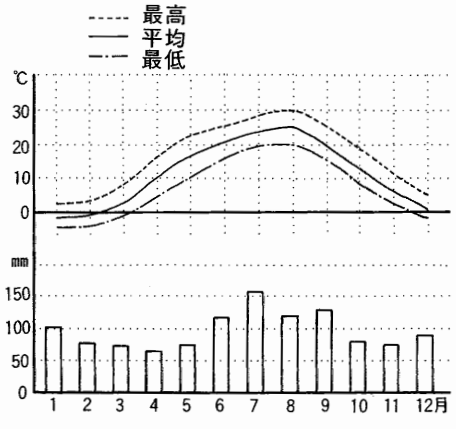
一方，屋敷遺跡の南西2.5km，北西３kmで大川の東側に位置する神指城跡（標高200ｍ）・横沼西遺跡（標高191ｍ）においては沼沢浮石質砂層はまったく観察されず，礫層上に直接表土が重なっている。またこれらの遺跡は，氾濫原あるいは氾濫原と同時期に形成された自然堤防上に立地しているものと考えられる。したがって観察される礫層は比較的新しいものといえよう。前述の沼沢浮石質砂層は当時の氾濫原上に堆積はしたが，その後侵食され新たに礫層が堆積したものと考える。



第２－ａ図
地質柱状図

屋敷遺跡の東方の船ヶ森西遺跡付近は標高が200ｍ以上であり，当時の水域より高いため，沼沢浮石質砂層が堆積しなかった。また西の現在の氾濫原における地域においては堆積はしたものの，その後侵食されてしまった。そのため現在，沼沢浮石質砂層が堆積しているのは低位沖積段丘面上で，この付近では屋敷遺跡を中心とした南北に長い地域といえるであろう。

第２－ｂ図は会津若松の30年間の月別平均気温・降水量である。会津若松はいわゆる日本海式気候に属する。しかし前述したように海岸から離れた内陸部に位置した盆地である。そのためか雪解け後の４月には最低気温も０℃を上回り，夏季もかなりの高温となる。



第２－ｂ図　月別平均気温・降水量

降水量は，冬季間の降雪により多量にもたらされる。一方，夏季にも毎月100㎜以上の降水量があり，冬季間より多い。

第３節　歴史的環境

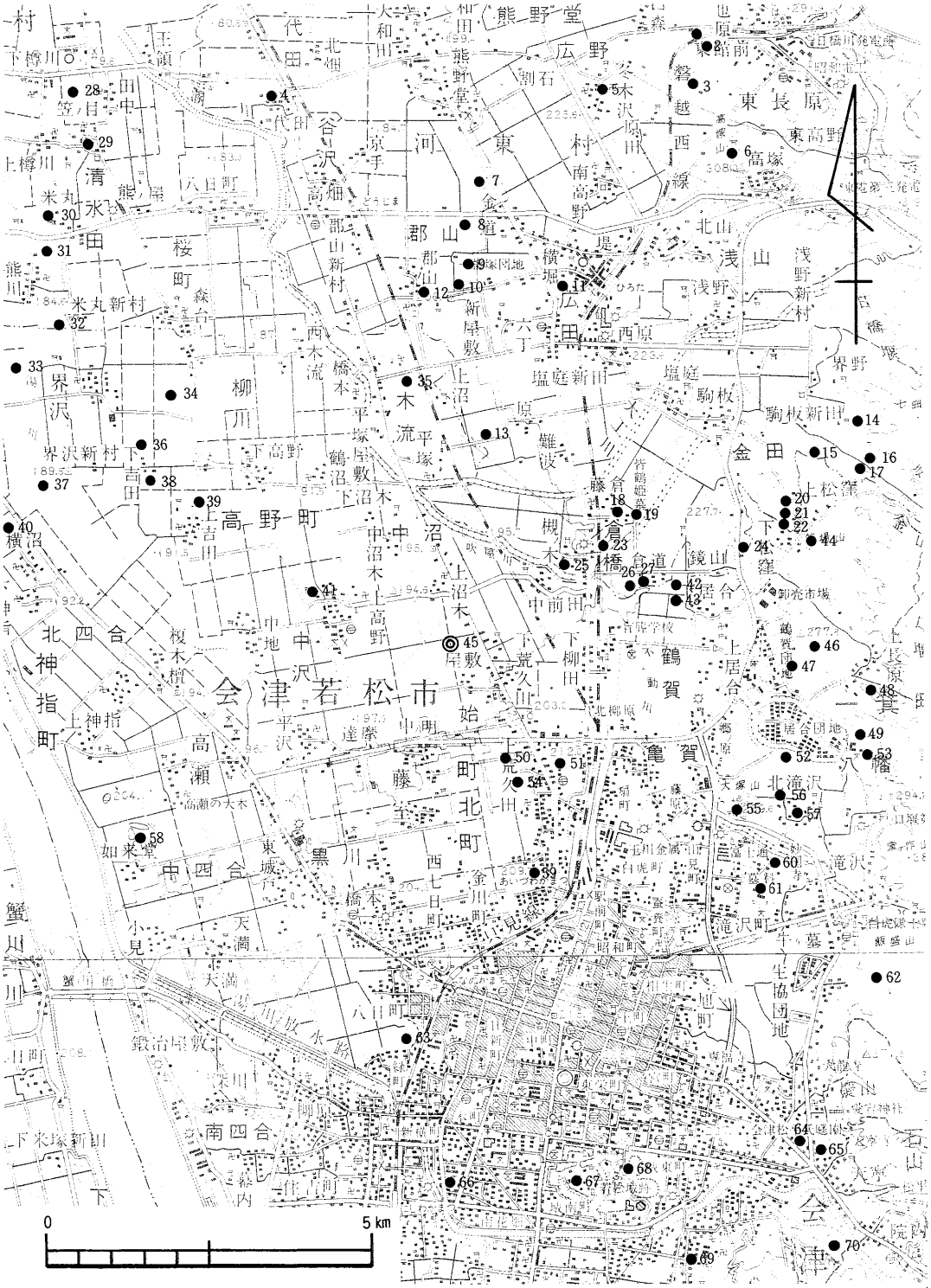
屋敷遺跡は縄文時代から平安時代にまたがる複合遺跡である。ここでは，屋敷遺跡の所在する会津若松市北部から，河東町西部にかけての遺跡の分布について見てみることとする。

旧石器時代の遺跡として，会津若松市湊町の小石ケ浜遺跡が知られており，細石器や船底型石核などを出土した。縄文時代の遺跡として，河東町では，大野原Ａ・Ｄ遺跡(早期)，戸波遺跡・大野原Ａ・Ｃ遺跡(前期)，田中原遺跡・八田道下遺跡(中期)，姥清水遺跡・清水原遺跡・金谷遺跡(後期)，横手遺跡(晩期)などが知られている。縄文時代の遺跡は会津盆地東縁の丘陵地帯に多く分布することがわかる。

稲作農耕が開始された弥生時代の遺跡としては，淡水産の貝塚が発見された河東町の田中原遺跡や金屋遺跡・南原遺跡・横江遺跡・杉ノ先遺跡などがある。会津若松市の主な弥生時代の遺跡としては，墓料遺跡・木流遺跡・二ツ釜遺跡・川原町口遺跡，また標高500ｍの地域にもかかわらず弥生土器が発見された戸ノ口遺跡などがある。

４世紀後半になると，会津盆地にも古墳が造営されるようになった。大塚山古墳，近年調査された堂ケ作山古墳などの山上墳があり，さらに，東北地方第二位の規模の会津坂下町の亀ケ森古墳や鎮守森古墳のような巨大古墳が会津地方においても出現した。しかし５世紀も終りに近づくとこの様な巨大古墳は姿を消し，６世紀以降は，小型の円墳や横穴墓が見られるようになる。会津盆地東縁は古墳の密集地帯を形成しており，前記の大塚山古墳・堂ケ作山古墳の他にも多数の古墳群が集中している。昭和63年には河東町の駒板新田の29基の横穴墓が調査された。７世紀前半から８世紀にかけての造営とみられる。なお，近年，会津坂下町の杵ヶ森古墳から，古式土師器の一括資料や，古式古墳が発見され，古墳文化の起源をめぐり種々検討が進められている。

奈良・平安期の遺跡としては，会津若松市の船ケ森西遺跡・横沼西遺跡などがあり，竪穴住居跡とともに掘立柱建物跡が検出されている。河東町熊野堂の南原遺跡から墨書銘のある土師器片が40点と円面硯が出土している。墨書銘土器は屋敷遺跡でも出土しているが，東北横断道の工事に伴って，平成元年度に調査された会津若松市の上吉田遺跡からは700点近い墨書銘土器が出土した。同遺跡の墨書銘土器の多くは，河川流路跡から出土している。この時期，会津地方は律令政府の中央集権の強化政策のもとで，陸奥の国の会津郡として位置づけられていった。会津郡の郡衙の所在は不明である。河東町郡山地区がその候補地として注目されている。昭和51年には同地区内の小宮・金屋遺跡等の調査が行われたが，郡衙跡の遺構は発見できなかった。屋敷遺跡をはじめ，この地域の遺跡の調査がさらに進めば何らかの指針が得られるものと思われる。（中野）



第３図　屋敷遺跡周辺遺跡分布図　（国土地理院：1/5万）

第１表　屋敷遺跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	遺跡の種類・時期	番号	遺跡名	遺跡の種類・時期
1	姥清水遺跡	散布地（縄文）	36	矢玉遺跡	散布地（弥生・奈良・平安）
2	融通寺跡	社寺跡（平安）	37	向川原遺跡	散布地（奈良・平安）
3	草倉山遺跡	散布地（縄文）	38	下吉田遺跡	散布地（弥生・奈良・平安）
4	荒木館跡	城館跡（中世）	39	上吉田遺跡	散布地（奈良・平安）
5	権現塚遺跡	散布地（平安）	40	横沼西遺跡	散布地（古墳・奈良・平安）
6	高塚	塚（近世）	41	上高野遺跡	散布地（縄文）
7	南原遺跡	集落跡（古墳～平安）	42	船ヶ森北遺跡	散布地（古墳・奈良・平安）
8	金屋遺跡	散布地（縄文・古墳～平安）	43	船ヶ森西遺跡	散布地（奈良・平安）
9	明石塚館跡	館跡（中世）	44	松窪古墳	古墳（古墳）
10	本宮館跡	館跡（中世）	45	屋敷遺跡	散布地（弥生・奈良・平安）
11	地蔵堂跡	社寺跡（近世）	46	長原古墳群	古墳（古墳）
12	古宮遺跡	散布地（古墳）	47	内林古墳群	古墳（古墳）
13	宮ノ腰遺跡	散布地（弥生・古墳）	48	東原古墳群	古墳（古墳）
14	狐窪遺跡	散布地（古墳・奈良・平安）	49	小敷沢北古墳	古墳（古墳）
15	蟹沢遺跡	散布地（古墳・奈良・平安）	50	宮下遺跡	散布地（奈良・平安）
16	駒板新田横穴群	古墳（古墳）	51	村北遺跡	散布地（弥生・奈良・平安）
17	大作堰上遺跡	散布地（奈良・平安）	52	小敷沢瓦窯跡	窯跡（奈良・平安）
18	藤倉館跡	城館跡（中世）	53	小敷沢南古墳	古墳（古墳）
19	倉橋供養碑	石造物（中世）	54	村西遺跡	散布地（弥生・奈良・平安）
20	東平塚	塚（中世・近世）	55	大塚山古墳群	古墳（古墳）
21	新田山窯跡	窯跡（奈良・平安）	56	石佛古墳	古墳（古墳）
22	新田山塚群	塚	57	北滝沢遺跡	散布地（縄文～奈良）
23	東畑遺跡	散布地（古墳・奈良・平安）	58	神指城跡	城館跡（近世）
24	鏡山古墳	古墳（古墳）	59	鶏林遺跡	散布地（弥生・奈良・平安）
25	清松寺跡	社寺跡（中世）	60	墓料遺跡	散布地（縄文～平安）
26	壇ノ前遺跡	散布地（奈良・平安）	61	門田遺跡	散布地（奈良・平安）
27	庄司口遺跡	散布地（古墳・奈良・平安）	62	狐石遺跡	散布地（縄文）
28	畑田遺跡	散布地（平安）	63	二ツ釜遺跡	散布地（弥生）
29	笠ノ目館跡	城館跡（中世）	64	餓鬼免遺跡	散布地（縄文）
30	堂北遺跡	散布地（平安）	65	正法寺遺跡	散布地（縄文）
31	一本木遺跡	散布地（平安）	66	川原町口遺跡	散布地（弥生）
32	村前遺跡	散布地（平安）	67	若松城跡	城館跡（中世・近世）
33	東高久遺跡	散布地（弥生・奈良・平安）	68	鶴ヶ城三ノ丸遺跡	散布地（弥生）
34	千刈遺跡	散布地（弥生・奈良・平安）	69	黒岩遺跡	散布地（縄文）
35	橋本木流古墳	古墳（古墳）	70	牧沢遺跡	散布地（縄文）

（遺跡の名称及び種類・時期は『福島県埋蔵文化財一覧』を基に付加補充した。）

第4節　調査経過

屋敷遺跡の調査は，平成元年度と2年度の2年にわたって実施された。全調査面積23,800㎡のうち，初年度はⅠ・Ⅱ・Ⅳ区とⅢ・Ⅴ区の一部の9,800㎡について，2年度は残りのⅢ区の一部とⅤ区の大部分の14,800㎡について調査を実施した。

平成元年度は，4月24日より現地調査を開始した。遺跡は踏査時の面積が31,000㎡と広大であり，東北横断道工事部分にかかる地区について，正確な要発掘調査面積を算出するために工区内に30mグリッドを設定し，更にグリッドに沿って重機を用いて(一部は10×2mのトレンチを手掘りで)，3m幅のトレンチを設定し試掘を実施した。範囲確認のための調査は5月25日で終了し，要発掘調査面積は，23,000㎡とされた。調査区は，道路及び水路等を目安にⅠ～Ⅴ区に区分し，調査は本線部分の橋脚にかかるⅠ・Ⅱ区を最優先とし，更に進入路にかかるⅢ区東側とⅣ区を次に行うこととした。

5月23日より，Ⅰ区の表土削除を開始する。表土削除作業はこれより6月19日まで行われ，Ⅰ～Ⅳ区とⅤ区の一部の14,000㎡について表土削除作業を終了する。

5月23日Ⅰ区遺構検出及び精査を開始し，6月9日に終了する。

6月12日Ⅱ区の遺構精査及び遺構検出を開始する。調査員は3名となり，6月9日に終了する。

7月4日Ⅲ区の遺構精査を開始する。平成元年度は，進入路にかかる水路東側，農道南側，中央部東側の計9,000㎡について調査を実施した。7月26日道路南側部分で住居跡が検出される。7月27日より上吉田遺跡の調査が開始されたため，調査員は2名となる。Ⅲ区の精査は，8月21日に終了する。

8月4日よりⅣ区の精査をⅢ区と並行して開始する。上吉田遺跡に続いて横沼西遺跡も8月5日より調査を開始する。工事用進入路部分にかかる両遺跡の調査は最優先であるため，屋敷遺跡の調査をⅣ区の精査が完了した8月31日で一時中断する。

11月2日Ⅴ区道路南側部分について調査を再開し，11月29日終了する。

平成2年度は，Ⅲ区北側とⅤ区の大部分の地区の調査を実施した。工事の都合上Ⅲ区の調査を優先させ，Ⅴ区南側，Ⅴ区北側，Ⅴ区中央部の順で調査を実施した。

4月17日，調査員2名でⅢ区の精査を開始し，建物跡群・土坑群が検出される。4月24日より調査員が2名増員され，4名体制でⅢ区の遺構群の精査を継続する。6月19日，更に和泉遺跡の調査を終えた2名の調査員が合流し，6名体制で調査を行う。Ⅲ区の調査は7月25日に終了し，同日バルーンを利用した空中写真撮影を行う。

5月10日Ⅲ区の調査と並行して，Ⅴ区の道路南側拡張部分の調査を行う。南側の調査は，5月

25日で終了する。Ⅴ区中央部の遺構精査は，５月21日より粗掘りを開始し，６月13日より溝の掘り込みを開始する。Ⅴ区中央部については，南側・中央部・北側の３つの地区に分割し，各地区に調査員２名を配して精査を行った。６～７月は，南側土坑群と北側掘立柱建物群の精査を中心に行う。８月に入り，中央部掘立柱建物群の精査も開始される。９月12日，Ⅴ区西側の道路法面部分800㎡の表土削除作業を新たに行う。９～10月は，北側から中央付近の掘立柱建物群と，周溝状遺構群の精査を中心に実施する。10月12日調査員１名が新たに加わり７人体制で調査を実施する。11月中は中央部掘立柱建物跡と西側拡張部の調査を中心に行う。11月22日全ての調査を終了し，２回目の空中写真撮影を行う。（藤谷）

第５節　調査方法

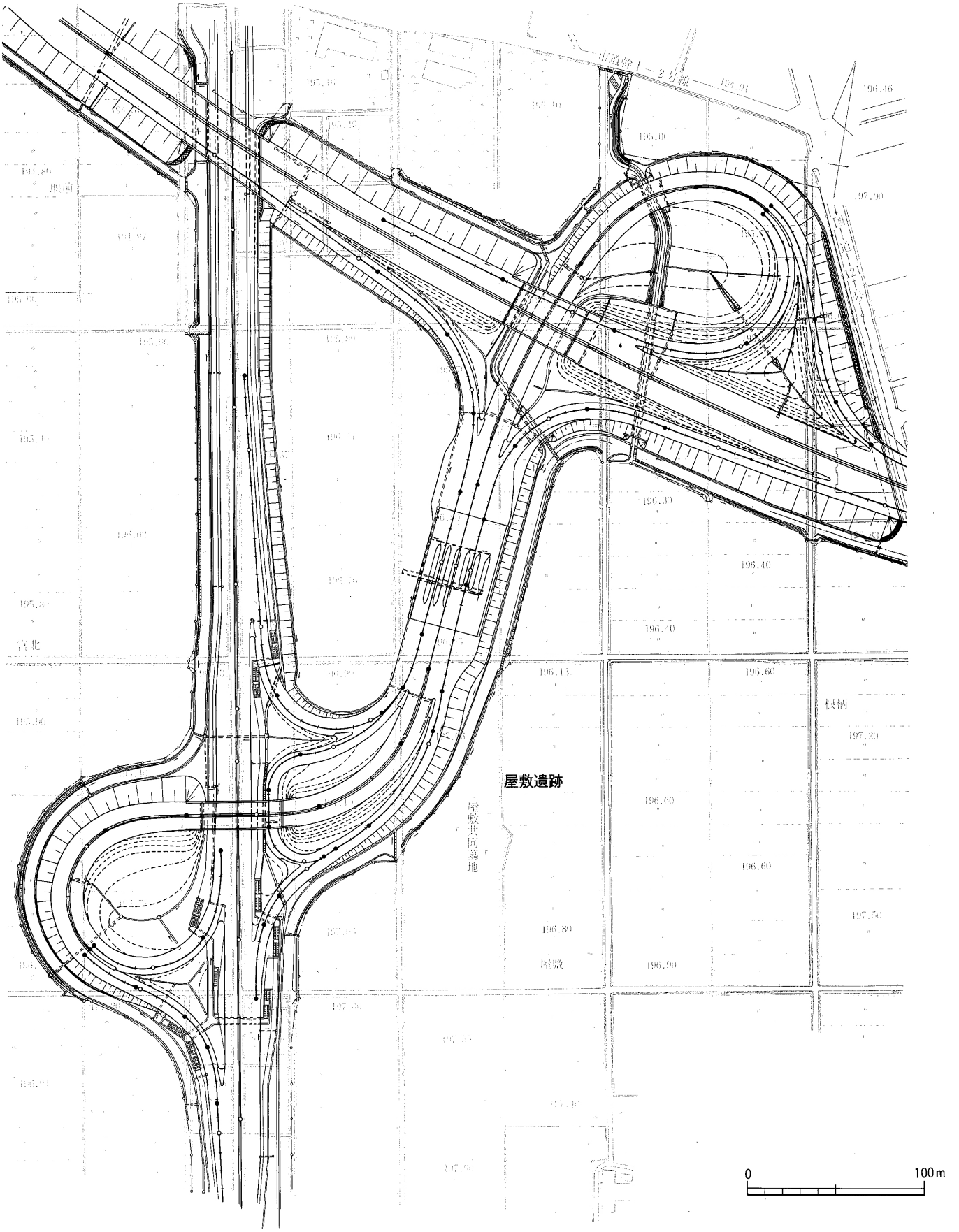
屋敷遺跡の調査対象面積は広大であるため，最初に国家座標のＸ＝79,020，Ｙ＝169,080を原点として，30ｍの大グリッドを設定した。遺跡内の位置は，この原点を基準として各方位の１ｍごとにＮＳ，ＥＷの組み合わせで表した。更に30ｍの杭間に10ｍごとに杭を打ち，調査区の東西方向について西側からアルファベット順，南北方向について北側からアラビア数字を番号順につけ，それを組み合わせたものをグリッド番号とした。

調査区内の標高は，調査区南側のＲ121ＢＰＢＭ２杭（標高197.882ｍ）を基準として，標高移動を行い，調査区内に基準杭を設定した。

調査区の土層については基本土層を「ＬⅠ・ＬⅡ‥‥」，遺構内の土層については「ℓ１・ℓ２‥‥」で表現した。遺構内よりまとまって出土した遺物は，「№１……」で表現した。

調査区内の遺構は，遺構密度の薄いⅠ・Ⅱ・Ⅲ区の一部，Ⅳ区では，それぞれ遺構ごとに，竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑については１／20，溝跡については１／40の縮尺で，平面図・断面図ともに実測を行った。遺構密度の濃いⅢ区の一部とⅤ区については，調査区を７ｍ×10ｍの１／20図面に分割し，それに合わせて平面図を作成した。また，断面図は前出の調査区同様の縮尺で実測を行った。これら以外で，特に遺構内で遺物の密集している部分については，１／10の縮尺で実測を行った。

写真は，原則として35㎜カメラ用のモノクロとカラーリバーサルフィルムの双方を用いて撮影記録を行った。更に竪穴住居跡・掘立柱建物跡や枠組のある井戸跡，調査区の全景については，６×4.5判用のモノクロフィルムを用いて撮影記録を行った。この他，Ⅲ・Ⅴ区についてはバルーンを利用して，13地点から空中写真撮影を行った。空中写真フィルムには35㎜カメラ判用のカラーリバーサルフィルム，６×９判用のモノクロとカラーリバーサルフィルムを用いた。（藤谷）



第４図　屋敷遺跡工事計画図

第２章　遺構と遺物

第１節　基本土層と遺構の分布

調査区内の基本土層は，Ⅰ・Ⅱ区とⅢ～Ⅴ区に大別され，それらの調査区内では大きな違いは認められず，基本的に同一である。

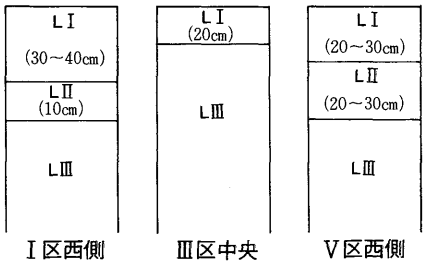
Ⅰ・Ⅱ区の基本土層は，ＬⅠ暗褐色粘質シルト(表土)，ＬⅡ暗茶褐色粘質シルト，ＬⅢ明灰褐色粘質シルトの３層となっている。ＬⅡは，Ⅰ区西側とⅡ区北東隅に分布しており，薄いながらも土師器細片を混入する遺物包含層となっている。これ以外の地区では，表土直下がＬⅢとなっている。ＬⅢはやや粘性のある硬質な土層で，鉄分をやや多めに含んでいる。

Ⅲ～Ⅴ区の基本土層は，ＬⅠ暗褐色シルト(表土)，ＬⅡ黒褐色シルト，ＬⅢ暗黄褐色砂質シルトの３層である。ＬⅡは，Ⅲ区東側調査区以外の調査区に一様に分布している。特に堆積の厚い地区は，Ⅴ区中央部～北側の西半分で，Ⅴ区中央部の掘立柱建物跡群の一部はＬⅡ下部で検出することが可能であった。ＬⅢは小レキ・パミスを混入しており，Ⅲ～Ⅴ区のほとんど全ての遺構の検出面となっている。

検出遺構のうち，竪穴住居跡は11軒を数えた。縄文時代のものはⅢ区中央部東側の土坑群の中に位置している。他の住居跡は，弥生時代～古墳時代初頭のもので，調査区全体の中でもⅢ区道路南側，Ⅳ区，Ⅴ区南側等，遺跡の中でも南側にまとまっている。

掘立柱建物跡は､36棟検出されており，ほとんどが平安時代のものである。Ⅲ区では，北側に４棟，東側に２棟がまとまっている。Ⅴ区では，西半部の河道西側に最大のまとまりがあり，16棟が集中している。この他には，北側に５棟，南側に２棟，河道東側に３棟のまとまりがある。

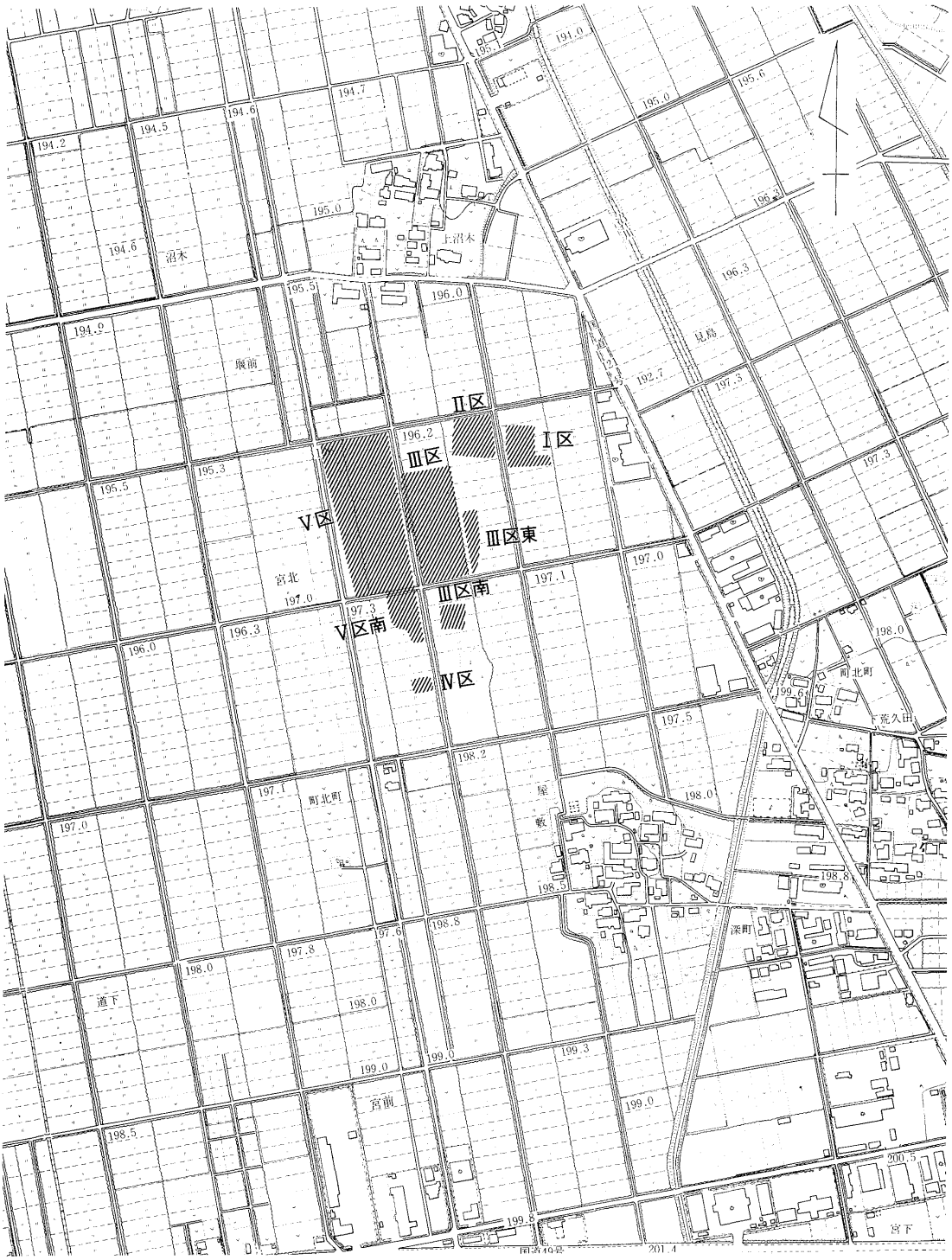
土坑は，縄文晩期の土坑群がⅢ区中央部東側とⅤ区南東側に，弥生中期の土坑群がⅢ区南側に，弥生後期～古墳前期の土坑群がⅣ区とⅤ区南側に，平安時代の土坑群がⅤ区中央の河道西側にまとまりをもっている。



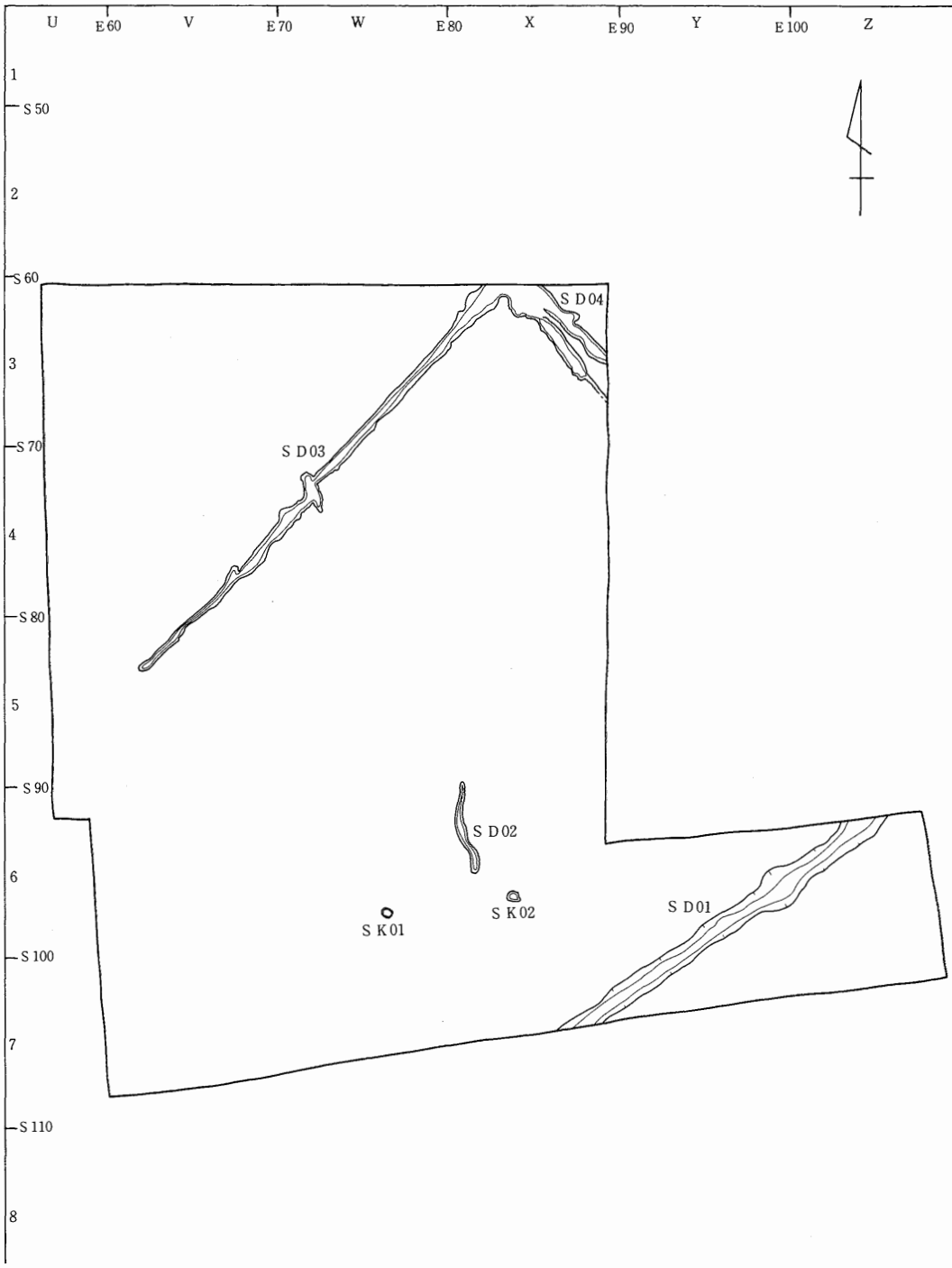
第５図　基本土層柱状図

井戸跡は，Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ区から検出されている。弥生時代の２基，それ以外の18基のうち，15基までが，Ⅴ区中央の建物跡が密集する地区に分布している。

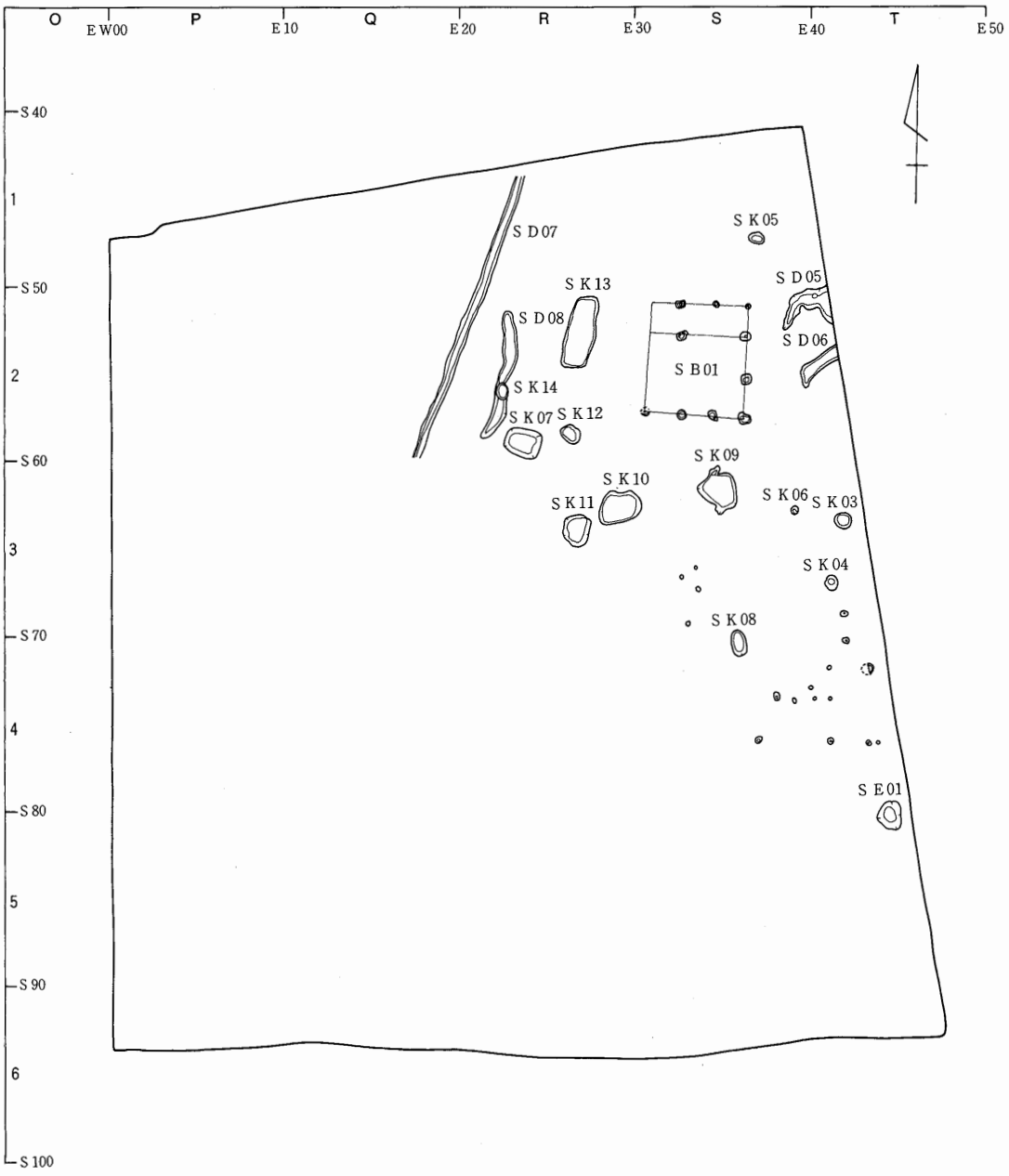
この他周溝状遺構はⅢ区道路南側の地区とⅤ区南半部にまとまって位置している。Ⅴ区南半部の中でも特に中央部の平安時代の建物跡群の南側の地区には，６基が集中している。



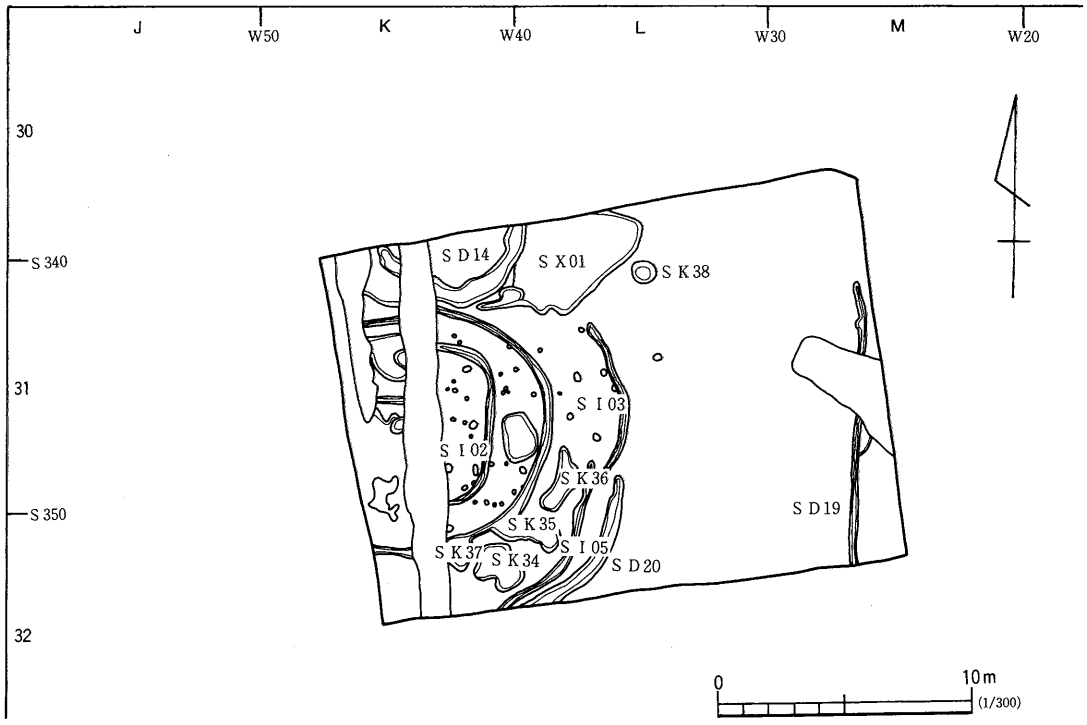
第６図　屋敷遺跡周辺地形図


U
E60
V
E70
W
E80
X
E90
Y
E100
Z
1
S50
2
S60
3
S70
4
S80
5
S90
6
S100
7
S110
8
S D04
S D03
S D02
S K01
S K02
S D01
0
10m
(1/400)

第７図　Ⅰ区遺構配置図


O
EW00
P
E10
Q
E20
R
E30
S
E40
T
E50
S40
1
S50
2
S60
3
S70
4
S80
5
S90
6
S100
SD07
SK05
SK13
SD05
SD08
SD06
SB01
SK14
SK07
SK12
SK09
SK10
SK11
SK06
SK03
SK04
SK08
SE01
0
10m
(1/400)

第８図　Ⅱ区遺構配置図



第９図　Ⅳ区遺構配置図

また，溝跡は各調査区に分布しているが，特にⅤ区に集中している。70号溝跡は，Ⅴ区西側の掘立柱建物跡を中心とする遺構群を取り囲む最大の溝跡である。このような区画溝はⅤ区からのみ検出されている。

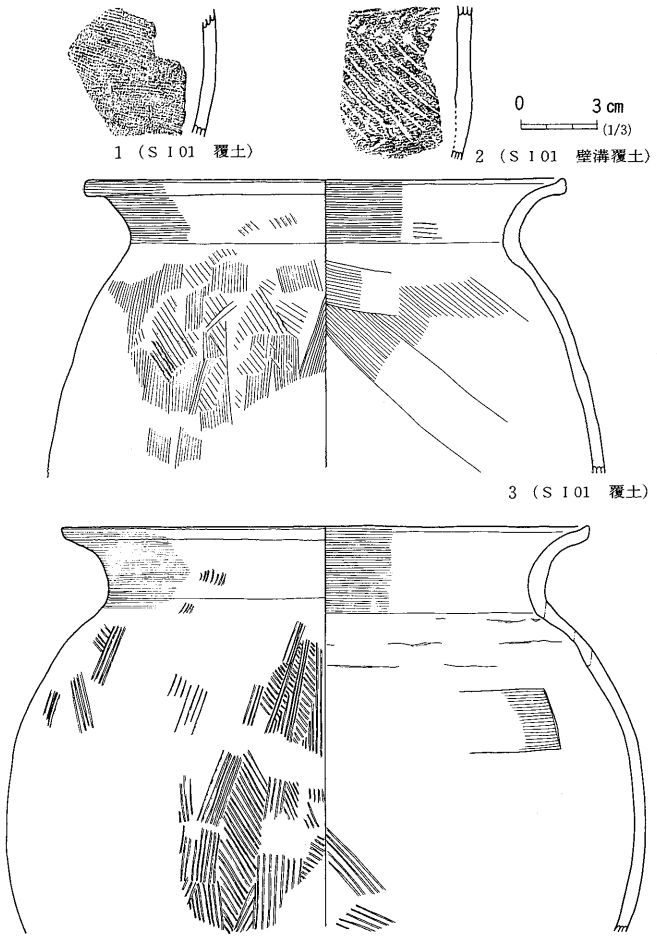
この他の遺構では，埋設土器はⅢ・Ⅴ区に分布しており，Ⅲ区南半部とⅤ区南半部に点在している。ピット群はⅢ区東側，Ⅴ区南側の他に，Ⅴ区70号溝跡区画内に特に集中して分布している。畝状遺構はⅤ区北西部に分布している。　（藤谷）

第2節　竪穴住居跡

１号住居跡　ＳＩ01

遺　　構（第11図，図版５）

１号住居跡は，Ⅲ区南側のＯ－23・24，Ｐ－23・24グリッドから検出された。検出面はＬⅢ上面で，壁溝と柱穴のみ遺存していた。形態は南北に長い隅丸長方形を呈する。住居跡の規模は南北軸の東辺が8.90ｍ，西辺が8.15ｍで，短軸の南辺が6.10ｍ，北辺が6.75ｍで，壁溝内の総面積は54.5㎡である。柱穴は壁溝内に17個，壁溝外に２個の合計19個ある。このうちＰ１・３・４・13・18・19の６個が主柱穴と考えられる。柱穴の深さは10～40㎝で，平均すると20㎝程になる。堆積土は黒褐色シルトと暗褐色シルトの２種類がある。壁溝は，その幅が最大45㎝，深さが東辺中央の最深部で35㎝となっている。堆積土は，上部が黒褐色シルト，下部が暗茶褐色シルトである。



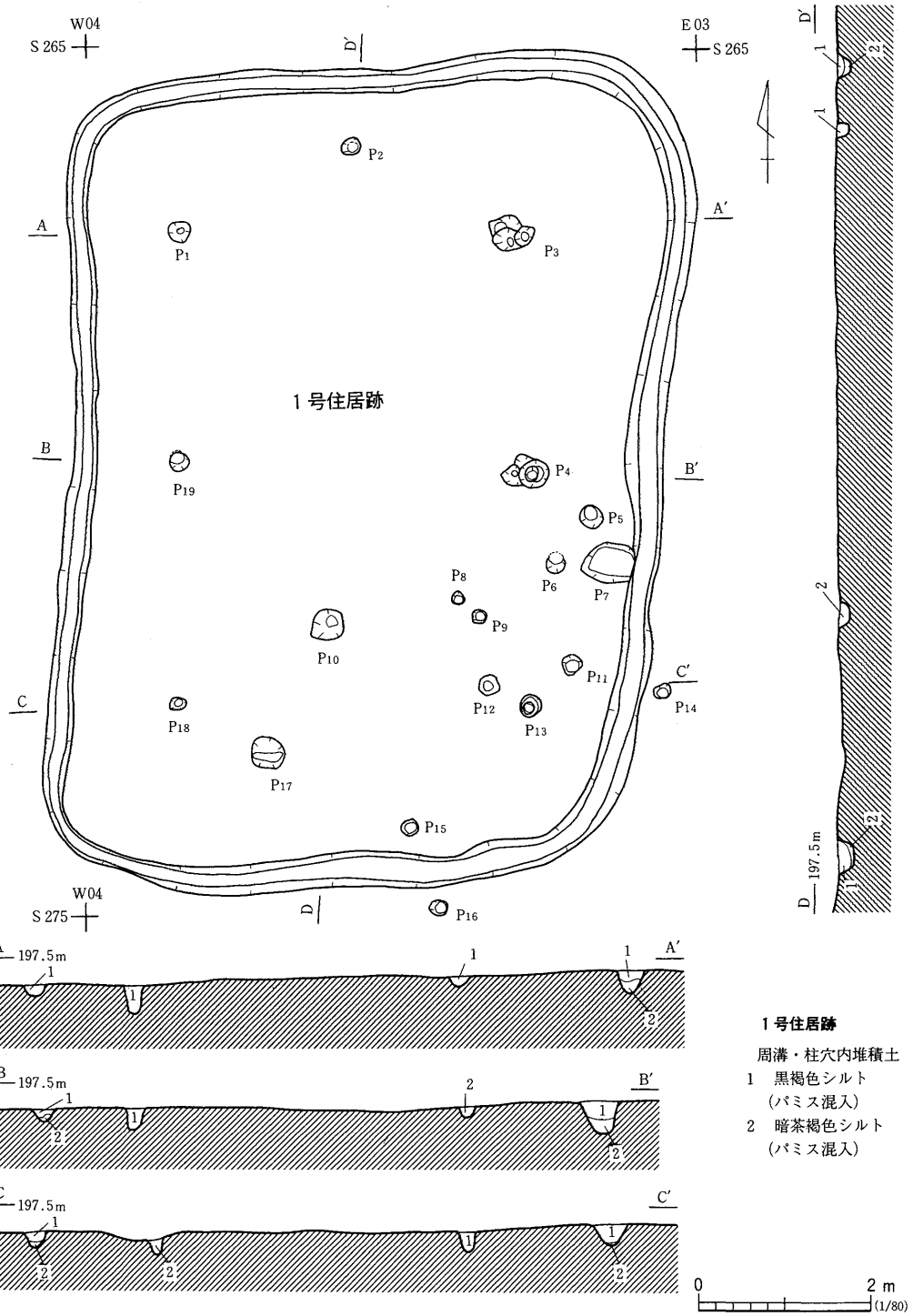
第10図　１号住居跡出土遺物

遺　　物（第10図）

遺物は，柱穴及び壁溝内の堆積土中より弥生土器と土師器が出土している。図示資料では，２が撚糸文が施された弥生土器の壺の体部で，１・３・４が土師器の甕である。３・４とも口縁部が外反し，口縁端部がつまみ出された形態で，体部には外面にハケメ，内面にナデ及びヘラナデが施されている。

まとめ

本住居跡は，不整隅丸長方形を呈するやや大型の住居跡であり，出土遺物より，その年代は古墳時代前期であると考えられる。（藤谷）



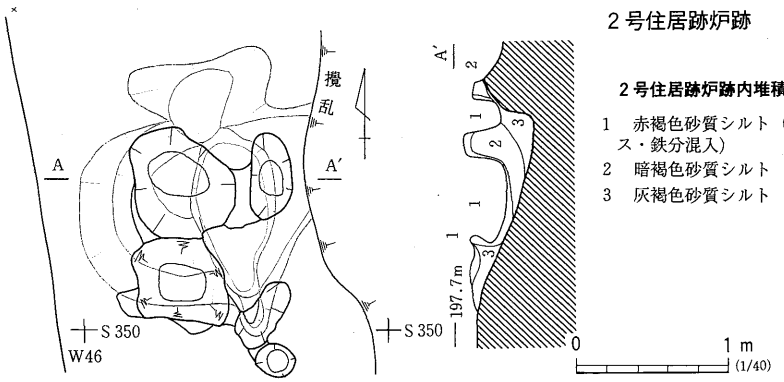
1 号住居跡

周溝・柱穴内堆積土

1　黒褐色シルト
（パミス混入）

2　暗茶褐色シルト
（パミス混入）

第11図　１号住居跡



第12図　２号住居跡炉跡

２号住居跡　ＳＩ02

遺　　構（第12・13図）

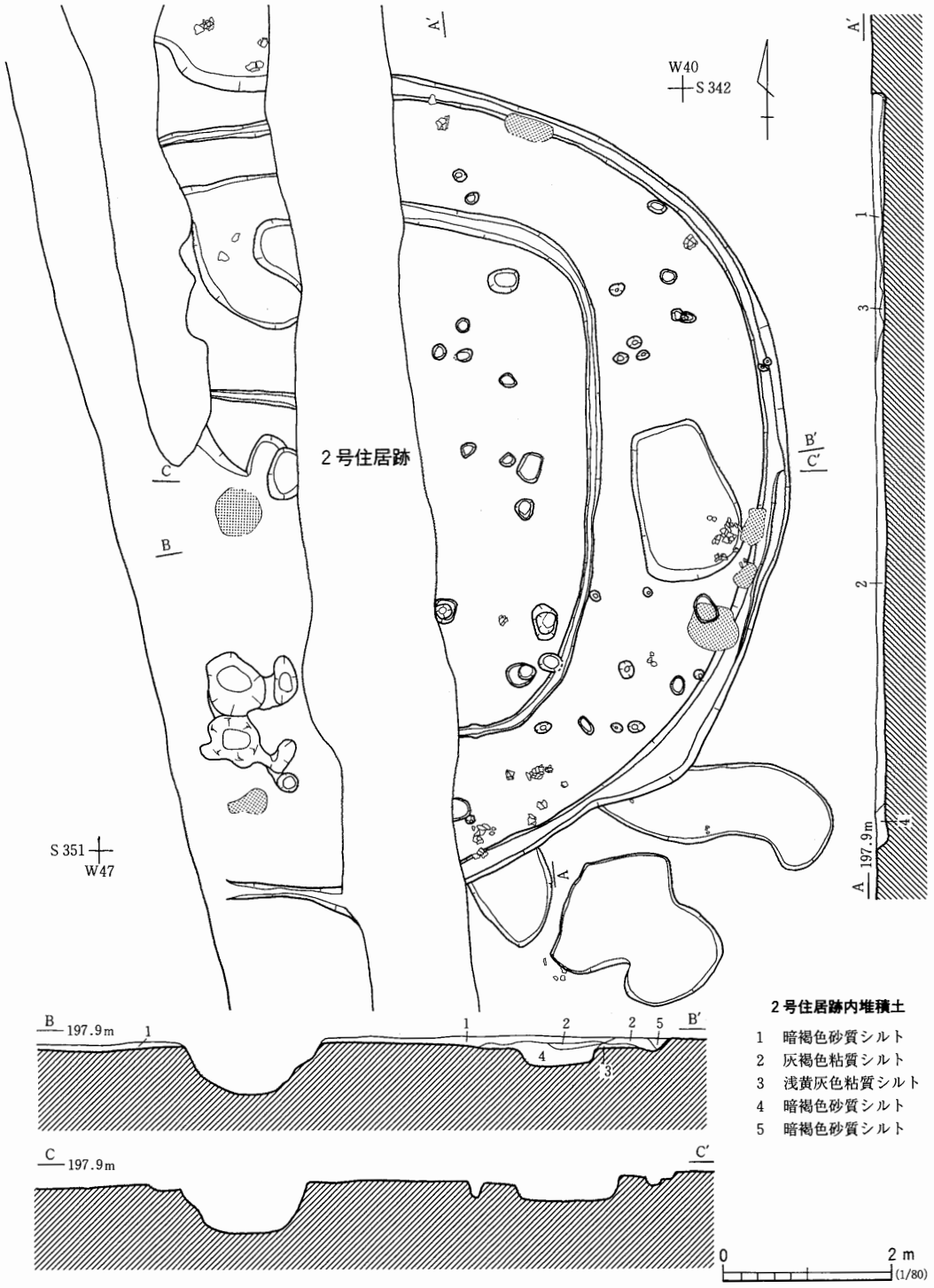
２号住居跡は，Ⅳ区東側のＫ－31・32，Ｌ－31グリッドから検出された。遺構検出面はＬⅢ上面で，遺構中央部と西側に溝状の撹乱を受けている。また，南東側では35・37号土坑と切り合い関係があり，それらを切っている。住居跡の形態は，遺存部で円形を呈しており，南北の直径は9.90ｍとなっている。検出面から床面までの深さは，最深部で16㎝である。堆積土は５層からなり，ℓ１・２・５が暗褐色砂質シルト，ℓ３が灰褐色粘質シルト，ℓ４が黄灰色粘質シルトである。

壁の立ち上がりは，緩やかである。床面はほぼ平坦で，踏み締まり等硬質な部分は認められなかった。床面には炉跡・柱穴等の施設がある。炉跡は，住居跡中央部より南西寄りの地点で検出された。地面を掘り窪めて作られた地床炉で，上部は熱変を受けており，硬質である。柱穴は床面上に35個あり，これらのうち床面からの深さが他の柱穴よりも深く，主柱穴となるのは，Ｐ６・９・20・21・34の５個である。また，Ｐ19は堆積土の状況より，住居廃絶時には開口していたと考えられ，その規模から住居に伴う貯蔵穴であると考えられる。

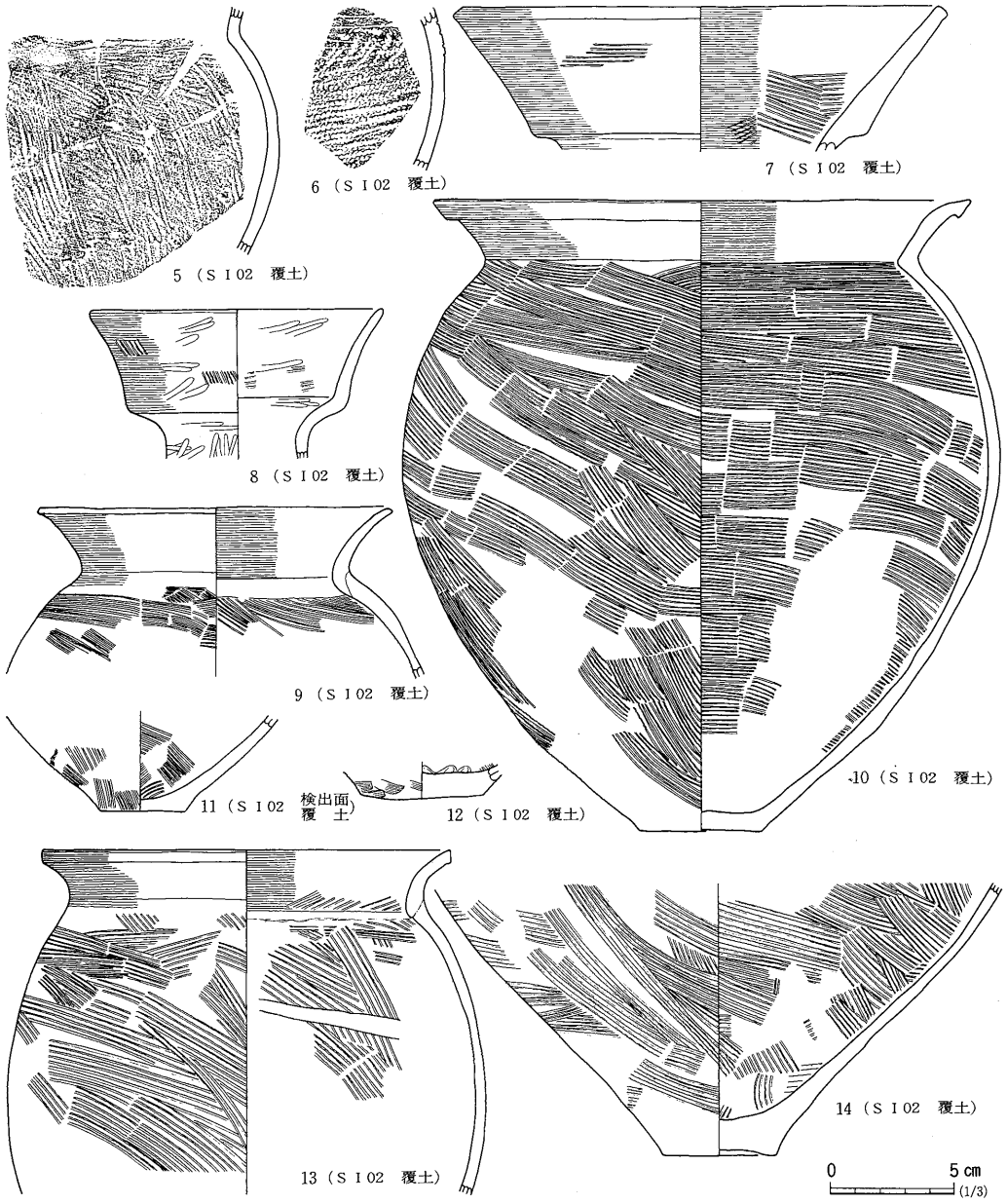
壁溝は内外二重になっており，竪穴の周壁下に巡る壁溝の他に，内側の中央に方形プランを呈する壁溝が存在する。外側の壁溝は，最大幅が47㎝，床面からの深さが平均６㎝となっている。これに対して内側の壁溝は，最大幅25㎝，床面からの深さが平均12㎝と，外側の壁溝に比べると深くなっている。

遺　　物（第14図，図版６・７・63・67・68）

遺物は，堆積土中・壁溝・柱穴内及び床面上から出土している。住居跡内では，北側と南側の壁溝付近とＰ19の堆積土中から比較的大きな破片が出土している。遺物の種類は，弥生土器壺・

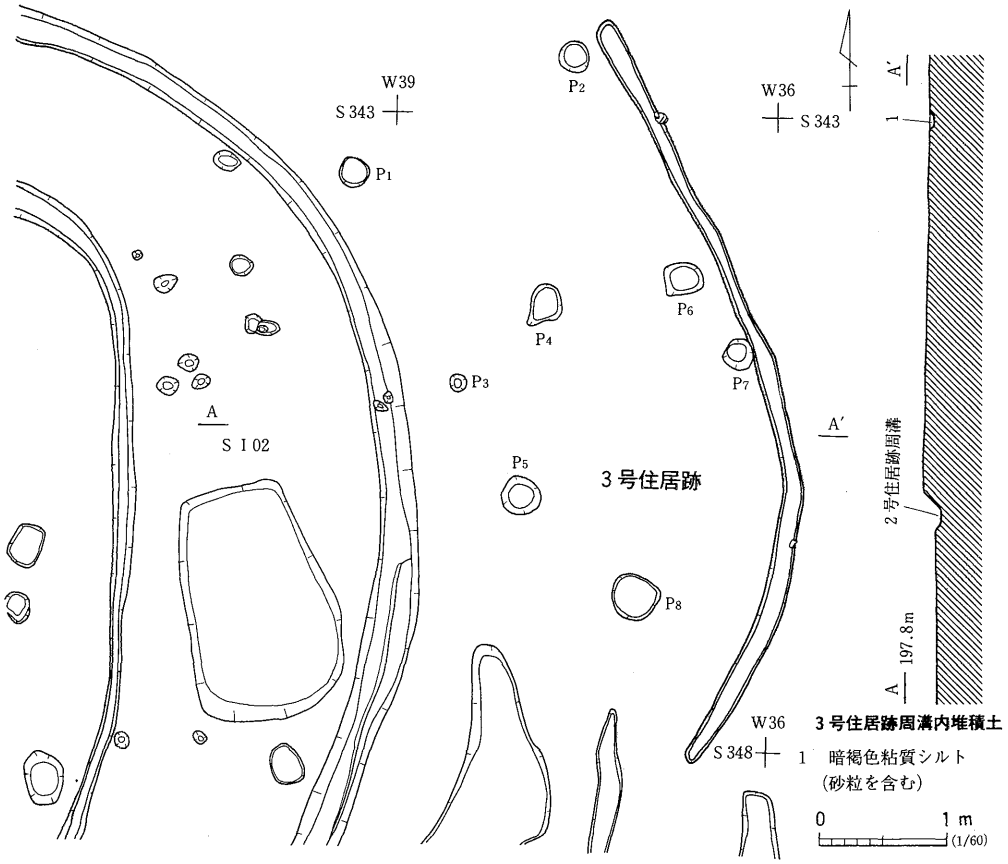

２号住居跡
W40
S 342
S 351
W47
A
A′
B
B′
C
C′
197.9m
2 号住居跡内堆積土
1　暗褐色砂質シルト
2　灰褐色粘質シルト
3　浅黄灰色粘質シルト
4　暗褐色砂質シルト
5　暗褐色砂質シルト
0
2 m
(1/80)

第13図　２号住居跡



第14図　２号住居跡出土遺物

甕，土師器壺・甕が出土している。図示資料では，６が弥生土器の体部，７・８が土師器壺，５・９～14が土師器甕である。土師器壺は，口縁部にハケメが施された後，ヨコナデあるいはヘラミガキが加えられている。土師器甕では，口縁外面が面取りされているものといないものがある。体部の調整は，内外面ともにハケメで，ハケメを施した後，ナデが加えられているものと加えられていないものがある。底部は，12を除いて平底である。



第15図　３号住居跡

まとめ

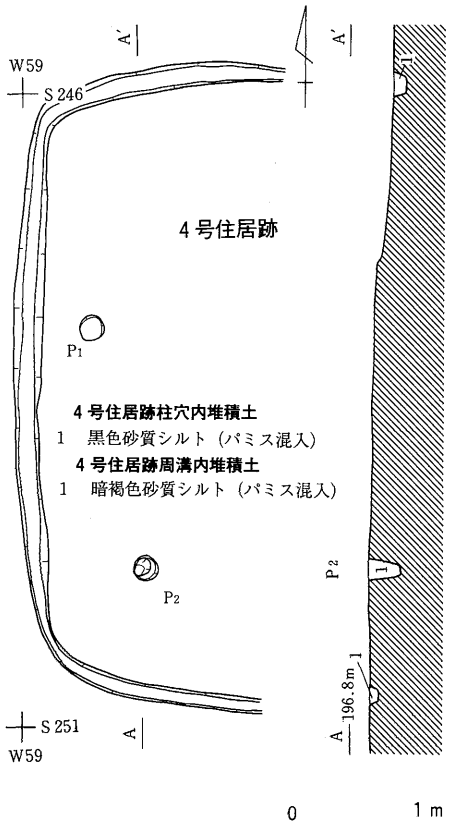
本住居跡からは，底面より古墳時代前期の土器が出土しており，その年代も古墳時代前期であると考えられる。また，円形を呈する平面プランの内側に方形の壁溝が巡り，なおかつ断面の状況で切り合い関係が認められないところから，方形プラン→円形プランの１回の住居の拡張が行われたと考えられる。（藤谷）

３号住居跡　ＳＩ03

遺　　構（第15図）

３号住居跡は，Ⅳ区中央のＬ－31グリッドにて検出された住居跡で，遺構検出面はＬⅢ上面である。壁溝及び柱穴の一部のみが遺存していた。西側には，２号住居跡が位置しており，本来切り合い関係をもっていたと考えられるが，２号住居跡検出時には，本住居跡に伴うと考えられる壁溝が検出されなかったことから，２号住居跡のほうが新しいと考えられる。

壁溝は，長さ5.85ｍにわたって遺存しており，検出面からの深さは，最深部で９㎝，平均で



第16図　４号住居跡

６cm程である。壁構内の堆積土は，暗褐色粘質シルト１層であった。柱穴は，２号住居跡の外側に８個が遺存しており，30cm以上の深さがあるＰ２・７が主柱穴になると考えられる。また，２号住居跡内部のピットの中には本住居跡に伴う,ものも存在したと考えられるが，いずれがそれに伴うかは不明であった。

まとめ

遺物は，壁溝内から出土しておらず，本住居跡の正確な所産年代は不明である。しかし，検出面からは弥生後期～古墳前期の土器が出土しており，２号住居跡にも切られると推定されるところから，その頃に作られた可能性が高い。（藤谷）

４号住居跡　ＳＩ04

遺　　構（第16図）

４号住居跡はⅤ区南側のＩ－21・22，Ｊ－21・22グリッドから検出された住居跡である。遺構検出面は，ＬⅢ暗黄褐色砂質シルト上面となっている。遺構周囲には，南西側に古墳時代の土坑群が，北側には11号住居跡と３・４号周溝状遺構が位置している。

住居跡は上面がかなり削平を受けており，壁溝西半部とピットの一部のみが遺存していた。西側の壁溝南西隅から北西隅までの長さは4.45ｍである。壁溝の幅は最大で24cm，検出面からの深さは，最深部で７cm，平均４cmとなる。堆積土は，パミスを混入する暗褐色砂質シルトである。ピットは２個あり，Ｐ１は径20cm，深さ24cm，Ｐ２は径19cm，深さ24cmである。

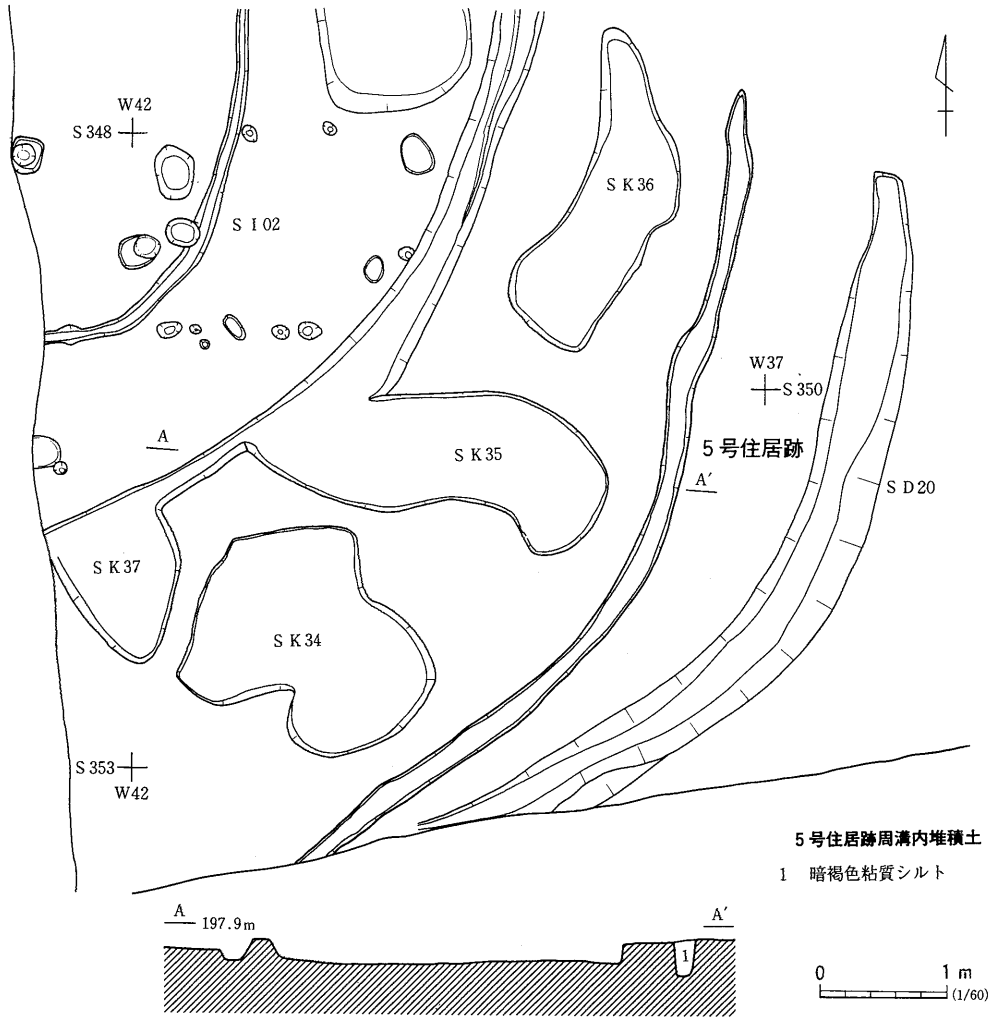
まとめ

本住居跡は，西半部の壁溝と柱穴が遺存しているのみで，遺存状況が悪く，遺物の出土もなかった。しかし，弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構が集中している地区に位置しているところから，その頃に作られた可能性が高いと考えられる。（藤谷）

５号住居跡　ＳＩ05

遺　　構（第17図）

５号住居跡は，Ⅳ区南側のＫ－32，Ｉ－31・32グリッドに位置する住居跡で，壁溝の一部のみが遺存していた。住居跡の北西側には２号住居跡，その間には34～36号土坑が位置している。本



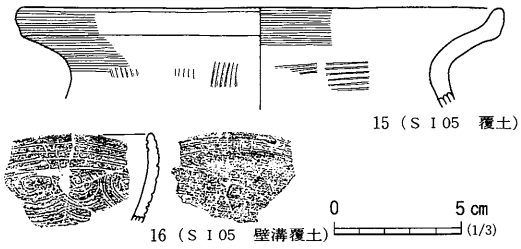
第17図　５号住居跡

来２号住居跡及び３号住居跡とは切り合い関係をもっていたと考えられ，２号住居跡よりも古い可能性が考えられる。また，３号住居跡との切り合い関係は不明である。

壁溝は，長さ7.0ｍにわたって検出されており，検出面はＬⅢ上面となっている。幅は最大で24cm，平均すると15cm前後となっている。検出面からの深さは，最深部で17cm，平均では８cm前後となっている。

遺　　物　（第18図，図版77）

遺物は，壁溝より弥生土器・土師器が出土している。土師器では甕が出土しており，図示資料が土師器甕で，頸部から口縁部にかけて強く外反し，口縁端部が上方につまみ出された形態



第18図　５号住居跡出土遺物

を呈し，内外面ともヨコナデ・ハケメが施されている。

まとめ

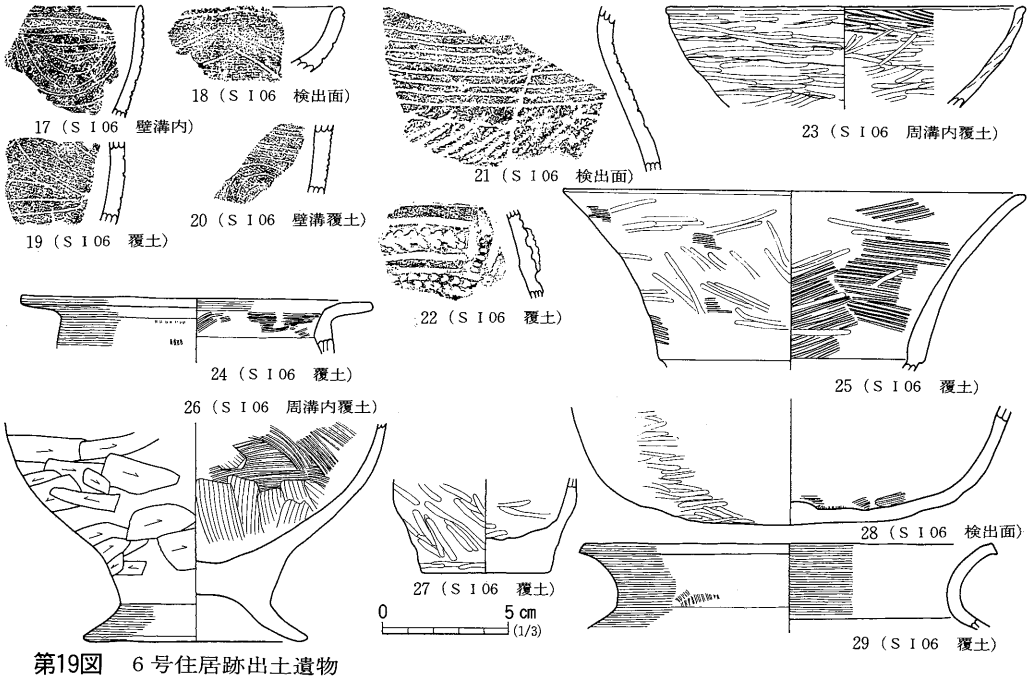
本住居跡の所産年代は，壁溝から出土した遺物により古墳時代前期であると考えられるが，検出面での３号住居跡との切り合いは明確にできず，その新旧関係は不明である。　（藤谷）

６号住居跡　ＳＩ06

遺　　構（第20図，図版８）

６号住居跡は，Ⅴ区南側のＩ－24・25，Ｊ－24・25グリッドに位置しており，検出面はＬⅢ上面である。また，北端部では７号住居跡と切り合い関係をもち，それを切っている。平面プランは，隅丸方形を呈しており，その規模は東辺9.05ｍ，西辺9.08ｍ，南辺6.95ｍ，北辺6.56ｍである。

床面は削平されて残っておらず，壁溝と柱穴のみが遺存している。壁溝は，西辺南側で50㎝ほど切れているが，ほかは全周する。壁溝の幅は，最大で36㎝，平均すると22㎝前後となる。検出面からの深さは，北西隅で最大32㎝，平均すると15㎝前後となる。壁溝の堆積土は，パミスと炭化物を混入する黒色シルトである。柱穴は，壁溝内外に計40個ある。北東側のものについては７号住居跡に付随する施設もあると考えられるが，いずれがそれにあたるかは不明であった。これらの中で主柱穴と考えられるのは，深さと位置関係から考えてＰ３・20・28・38・40と考えられる。また，北西隅及び南側には，溝状のピットが認められる。Ｐ１については，壁溝と明確な切



第19図　６号住居跡出土遺物

り合い関係が認められないところから，住居跡に付随する施設となる可能性が高いが，Ｐ30については不明であった。

遺　　物（第19図，図版77・83）

遺物は，壁溝・ピット内から出土している。遺物の種類は，弥生土器・土師器である。図示資料では，17～20までが川原町口式の壺，21が同じく甕，22が天王山系の壺である。土師器では23が杯，25が壺，27が鉢，24・29が甕，26が台付甕である。25は口縁部内外面にハケメが施された後，ヘラナデとナデが加えられている。26は，体部下位の外面にヘラケズリ，内面にハケメが施された後，ヘラナデとナデが加えられている。23は，内外面にヘラミガキが加えられており，内面にはヘラミガキされる前にハケメが施されている。

まとめ

本住居跡は，１号住居跡同様隅丸長方形を呈しており，その時期は，壁溝・柱穴内出土遺物から古墳時代前期と推定される。（藤谷）

７号住居跡　ＳＩ07

遺　　構（第20図，図版９）

７号住居跡は，Ⅴ区南側のＩ－24，Ｊ－24グリッドにて検出された住居跡で，半分以上を６号住居跡に切られている。遺構検出面はＬⅢ上面である。遺存状況は悪く，西側及び北東側の壁溝及びピットの一部が遺存しているのみである。平面形は，円形を呈すると推定され，その規模は南北の径が7.45ｍとなっている。

壁溝は，西～南側と北側で遺存しており，その幅は最大28㎝，平均すると20㎝となっている。検出面からの深さは，最深部で19㎝，平均６㎝と比較的浅い。壁溝内の堆積土は暗茶褐色シルトであった。

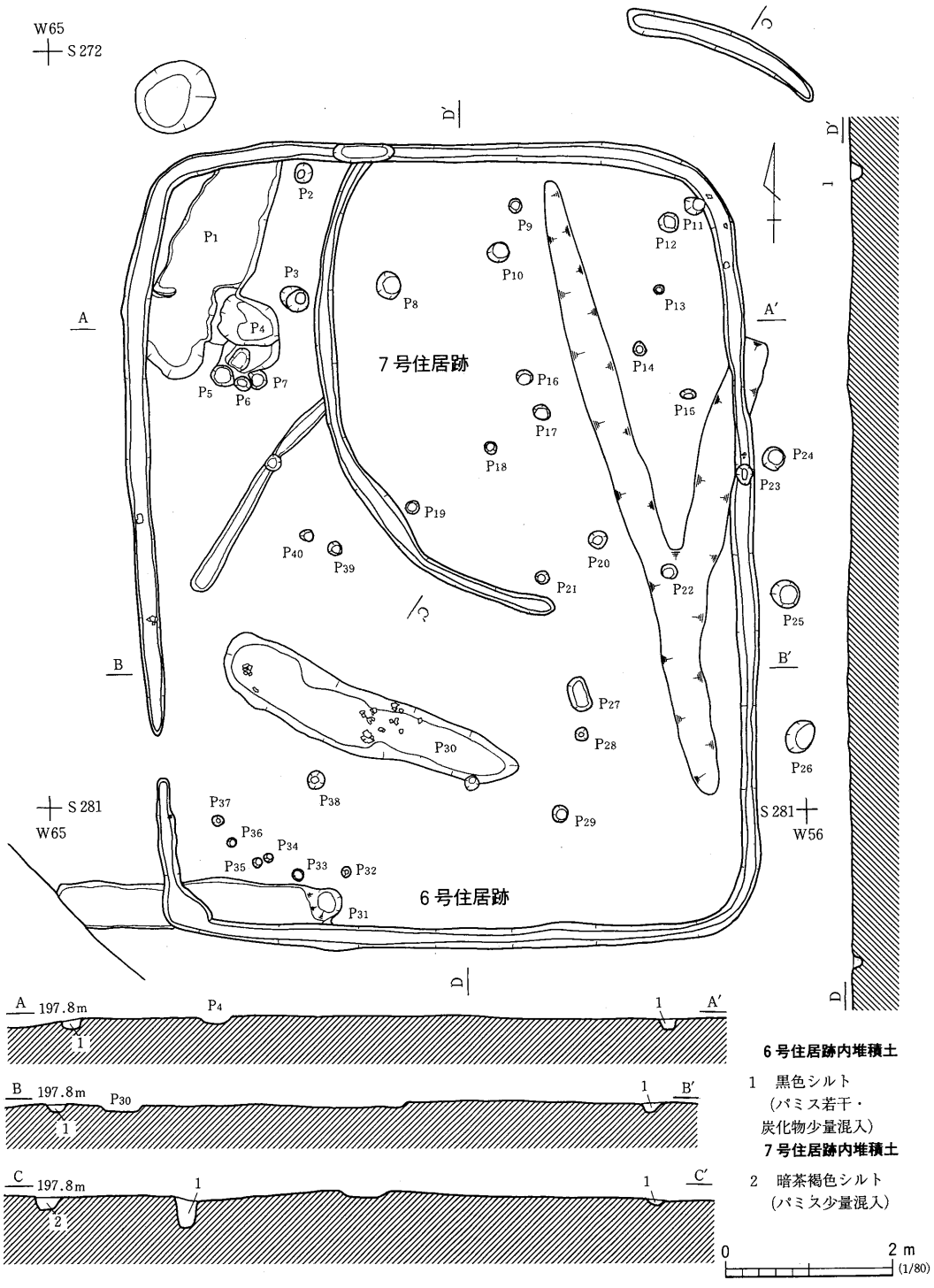
まとめ

７号住居跡では，検出面付近から少量の弥生土器・土師器が出土しているのみで，壁溝内からは，遺物は出土していない。遺構の年代は，６号住居跡が作られる以前と考えられるが，正確な年代は不明である。（藤谷）

９号住居跡　ＳＩ09

遺　　構（第21図）

Ⅴ区Ｉ－８グリッドにおいて検出された遺構で，ＬⅢ暗黄褐色砂質シルト上面において確認された。一部，旧河川跡と考えられる粗砂帯にかかっており検出作業の際，上面が削られている。住居跡の南側には11号住居跡・４号周溝状遺構が，北側には５・６号周溝状遺構が立地している。

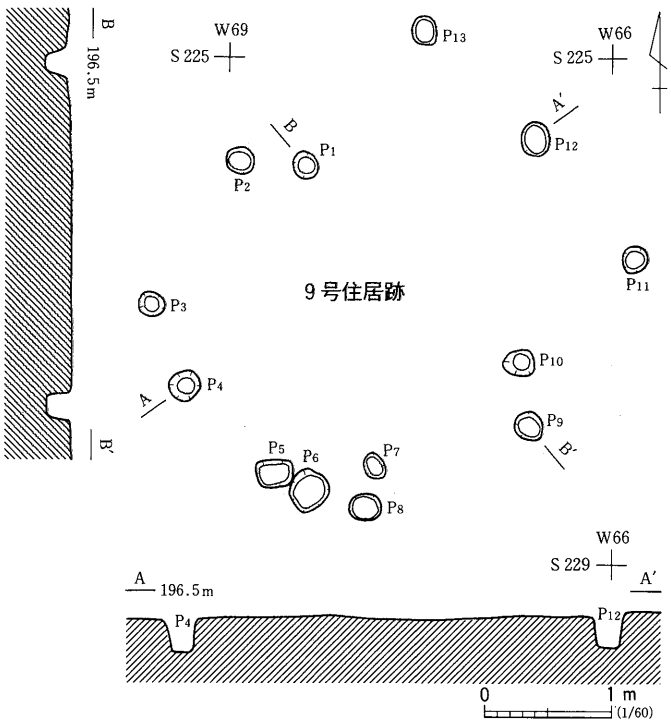

W65
S 272
7号住居跡
6号住居跡
S 281
W65
S 281
W56
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
P32
P33
P34
P35
P36
P37
P38
P39
P40
A 197.8m
B 197.8m
C 197.8m
6号住居跡内堆積土
1　黒色シルト
（パミス若干・
炭化物少量混入）
7号住居跡内堆積土
2　暗茶褐色シルト
（パミス少量混入）
0
2 m
(1/80)

第20図　６・７号住居跡

住居跡は，検出段階で床面以下まで削平を受けており，柱穴のみが遺存していた。柱穴の深さは検出面から22～62cmで，平均すると29cmとなる。柱穴の直径は10～32cmで，平均24cm前後となる。柱穴は全部で13個あり，このうちＰ２・４・６・11が主柱穴になると考えられる。主柱穴内の堆積土は，パミスを少量混入する暗灰黒色シルトである。

まとめ

本遺構は壁と床が削平を受けており遺物が出土していない。よってその時期については不明である。　（小野田）



第21図　９号住居跡

10号住居跡　ＳＩ10

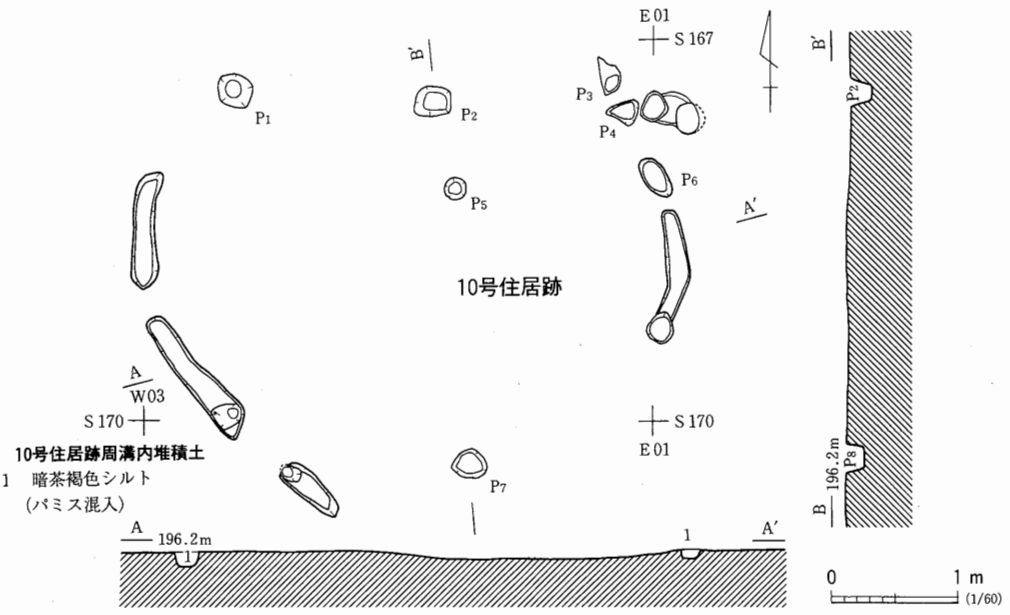
遺　　構（第22図）

10号住居跡は，Ⅲ区中央部東側のＯ－13・14，Ｐ－13グリッドに位置している。南側に縄文晩期の土坑群が位置している。

住居跡は，床面が削平され，壁溝と柱穴の一部のみしか遺存していないが，平面形は円形を呈していたと考えられる。その規模は，東西の壁溝間で4.38ｍである。壁溝は，東側と西側で断続した形で遺存している。その幅は最大で20cm，平均すると17cm前後となっている。検出面からの深さは最深部で21cm，平均すると10cm前後となる。柱穴は合計９個ある。検出面からの深さは最深部で25cm，平均すると15cm前後となる。壁溝の堆積土は，パミスを混入する暗茶褐色シルト１層である。

まとめ

本住居跡の南～西側にかけては，縄文晩期（大洞Ｃ２式が中心）の貯蔵穴群が住居跡をとりまくように位置している。住居跡の壁溝・柱穴からは，遺物が出土しなかったが，このような位置関係より，その所産年代は縄文晩期であったと考えられる。　（小野田）



第22図　10号住居跡

11号住居跡　ＳＩ11

遺　　構　（第23図，図版10）

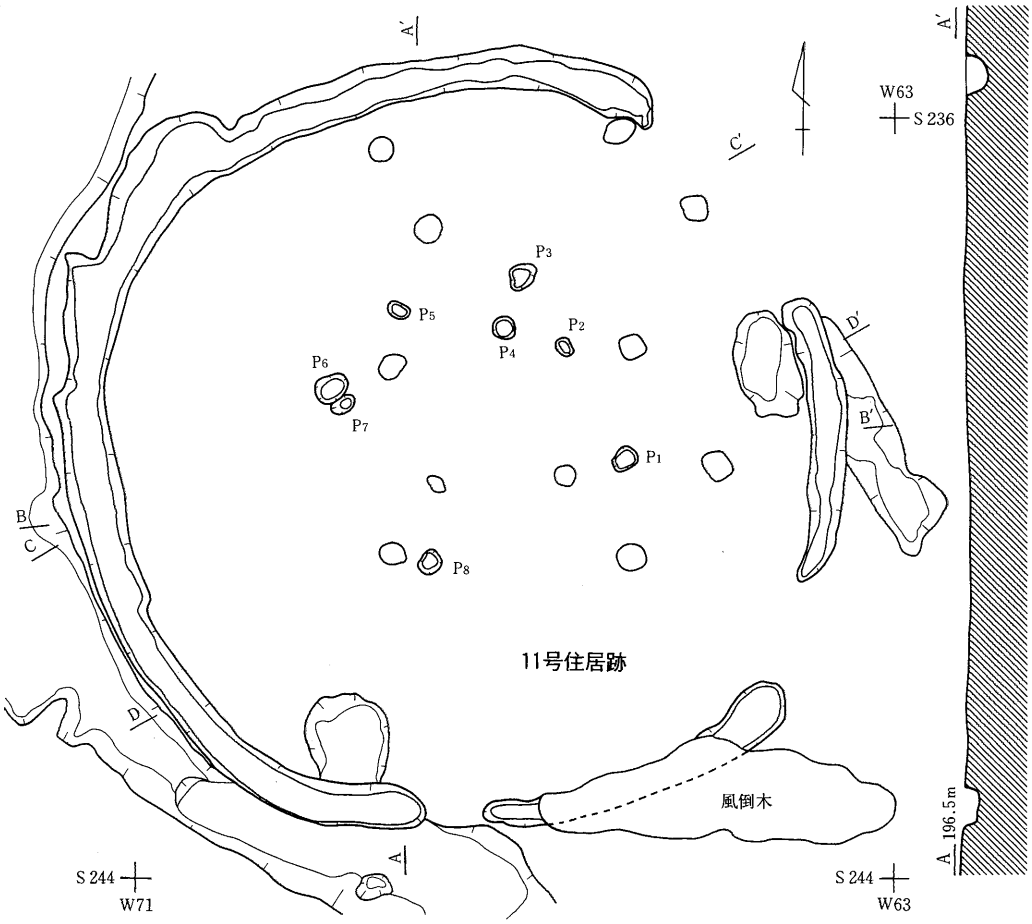
11号住居跡はⅤ区南端のＨ・Ｉ－20・21グリッドで検出された。遺構検出面はＬⅢ上面である。また，遺構南端部で４号周溝状遺構を切り，また遺構東側では91号溝跡を切っている。

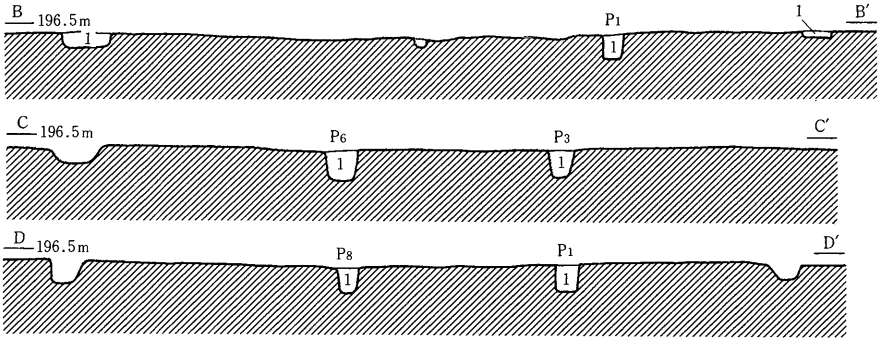
遺構の平面形は，ほぼ円形で直径約8.1ｍである。床面は削平を受けており，壁溝と柱穴のみが遺存している。壁溝は最大幅80㎝，平均すると40㎝前後となる。検出面からの深さは最深部で30㎝，平均すると20㎝前後である。壁溝内の堆積土は暗灰褐色砂質シルトで，パミスが混入する。柱穴は，本遺構に直接関係あるものは７つ認められる。そのうち，Ｐ１・３・６・７が主柱穴をなすと考えられる。柱穴の検出面からの深さは10～28㎝，平均で21㎝である。

遺　　物　（第24・26図，図版58・68・77）

本遺構の遺物は，すべて壁溝内の堆積土からの出土であり，柱穴内からは出土していない。出土遺物は，甕・壺・器台などである。

30は体部上半から口縁にかけてのもので，外面はハケメ調整を行い，口縁部にナデを施す。内面の体部はヘラナデ，口縁はナデが施されている。口縁は有段口縁である。31は甕体部下半から底部にかけてのもので外面はハケメ，内面はユビナデを施している。34・35は太い沈線によって区画されたもの，36は粘土紐を貼り付け連続した押圧が加えられたもの，37は口縁部に押圧が加えられたものである。38・40・51は羽状の付加条縄文，39・41・42・44は単節縄文を施す。45～





11号住居跡周溝・柱穴内堆積土

1　暗灰褐色砂質シルト

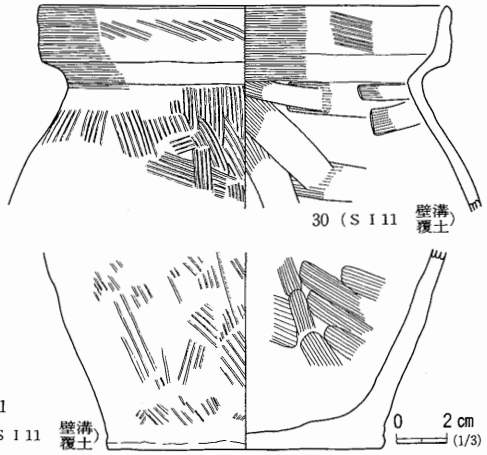
0　2 m
(1/80)

第23図　11号住居跡

48は外面ハケメ調整したものである。54は斜位と横位の直線を組み合わせた文様を持つものである。50は台付き甕と考えられ，ハケメをナデで消している。52は甕底部で，外面ヘラケズリ後ナデが，内面はヘラナデが施されている。

まとめ

本住居跡の壁溝内の遺物の中には，４号周溝状遺構と近接した時期のものがあり，本住居跡も，４号周溝状遺構に比較的近い時期に作られたものと考えられよう。本住居跡の時期は，弥生時代後期～古墳時代と考えられる。　（小野田）



第24図　11号住居跡出土遺物（１）

12号住居跡　ＳＩ12

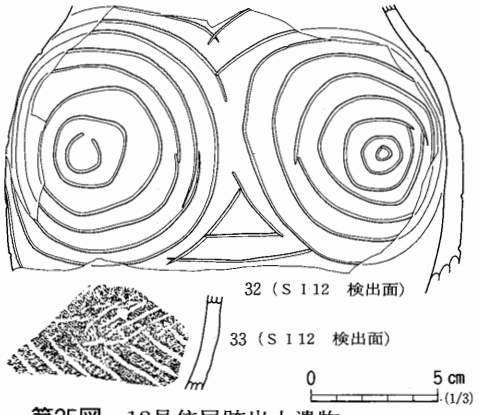
遺　　構（第27図，図版11）

Ⅴ区西端のＤ・Ｅ－17・18グリッドにおいて検出された遺構で，遺構検出面はＬⅡ黒褐色シルト下部である。遺構周辺には，271号土坑・272号土坑が点在している。

住居跡の平面形は，比較的整った円形を呈し，その規模は直径5.8ｍである。床面は削平を受けており，壁溝と柱穴のみが遺存している。壁溝は最大幅45㎝，平均すると30㎝前後である。検出面からの深さは最深部で12㎝，平均５㎝である。柱穴は，壁溝の内側に６個，外側に１個あるが，検出面からの深さは，最深のものでも33㎝，平均的でも５～10㎝と非常に浅くなっている。壁溝の堆積土は，暗褐色シルトでパミスが混入している。

遺　　物（第25図，図版83）

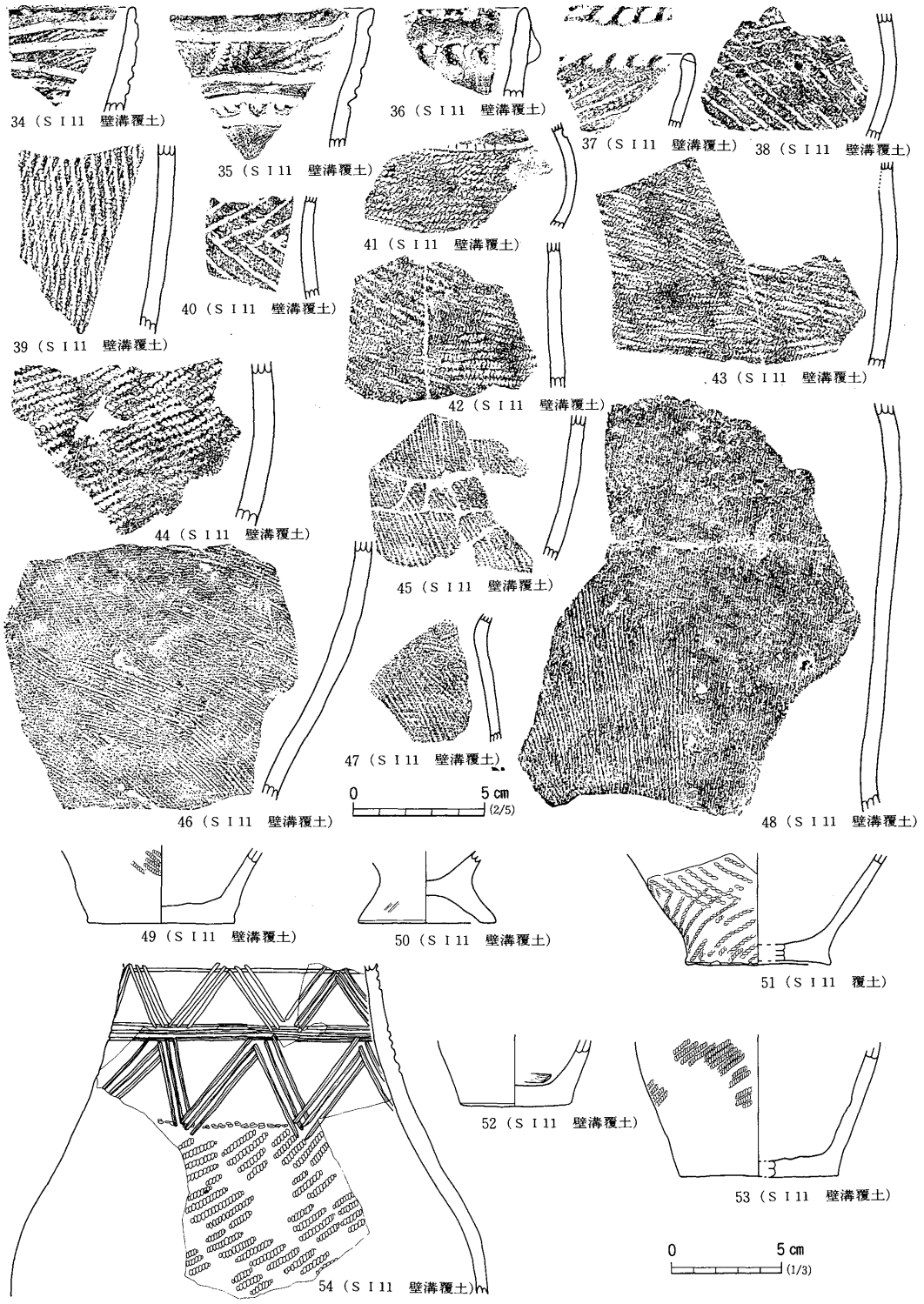
遺物は，住居跡北西隅と，遺構検出面から出土している。32は壺の体部で，北西隅の床面に突き刺さる様な状態で検出された。体部には，同心円文と三角文が施されており，一区画おきに赤色塗彩されている。33は遺構検出面から出土している。地文は撚糸文である。



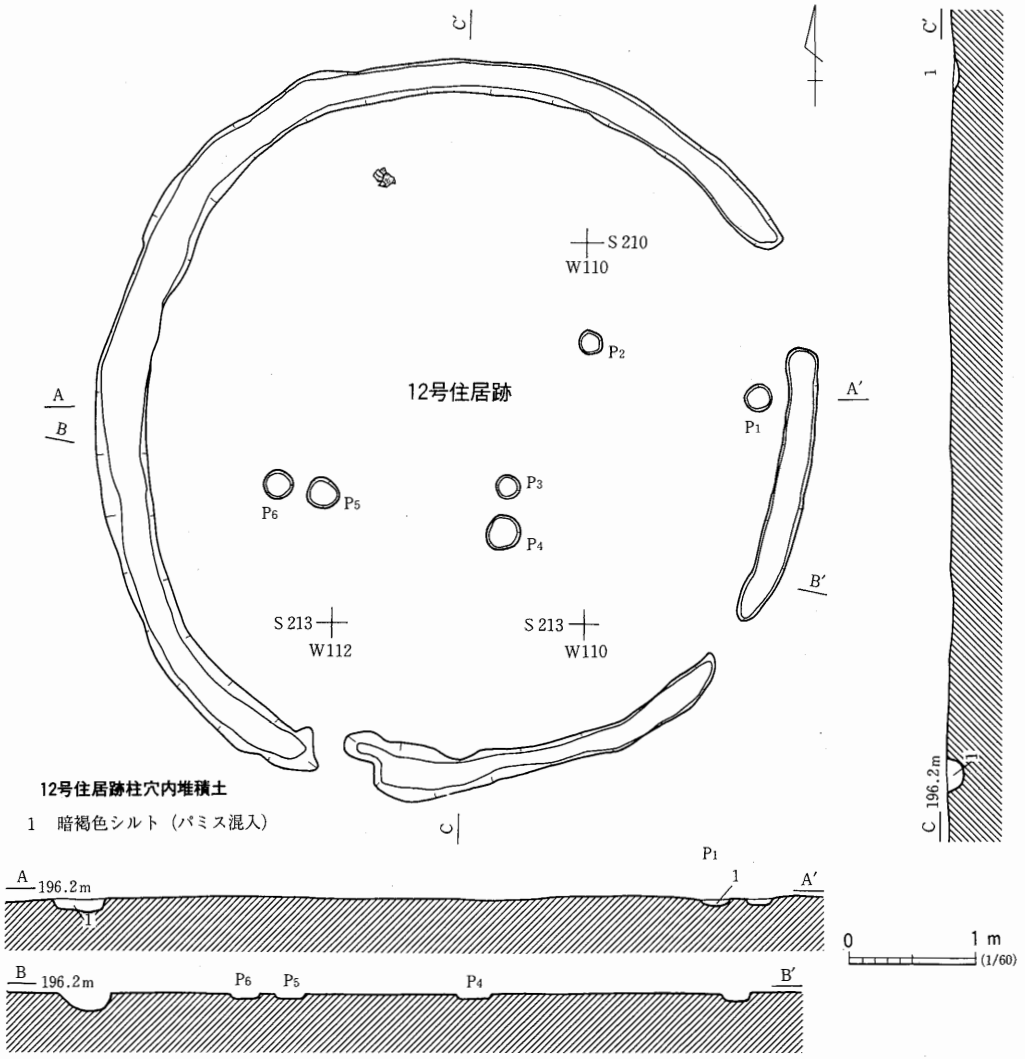
第25図　12号住居跡出土遺物

まとめ

本遺構の遺存状況は悪く遺物も僅かであったが，遺物の出土状況およびその時期から，弥生時代中期後半と考えておきたい。　（小野田）



第26図　11号住居跡出土遺物（２）



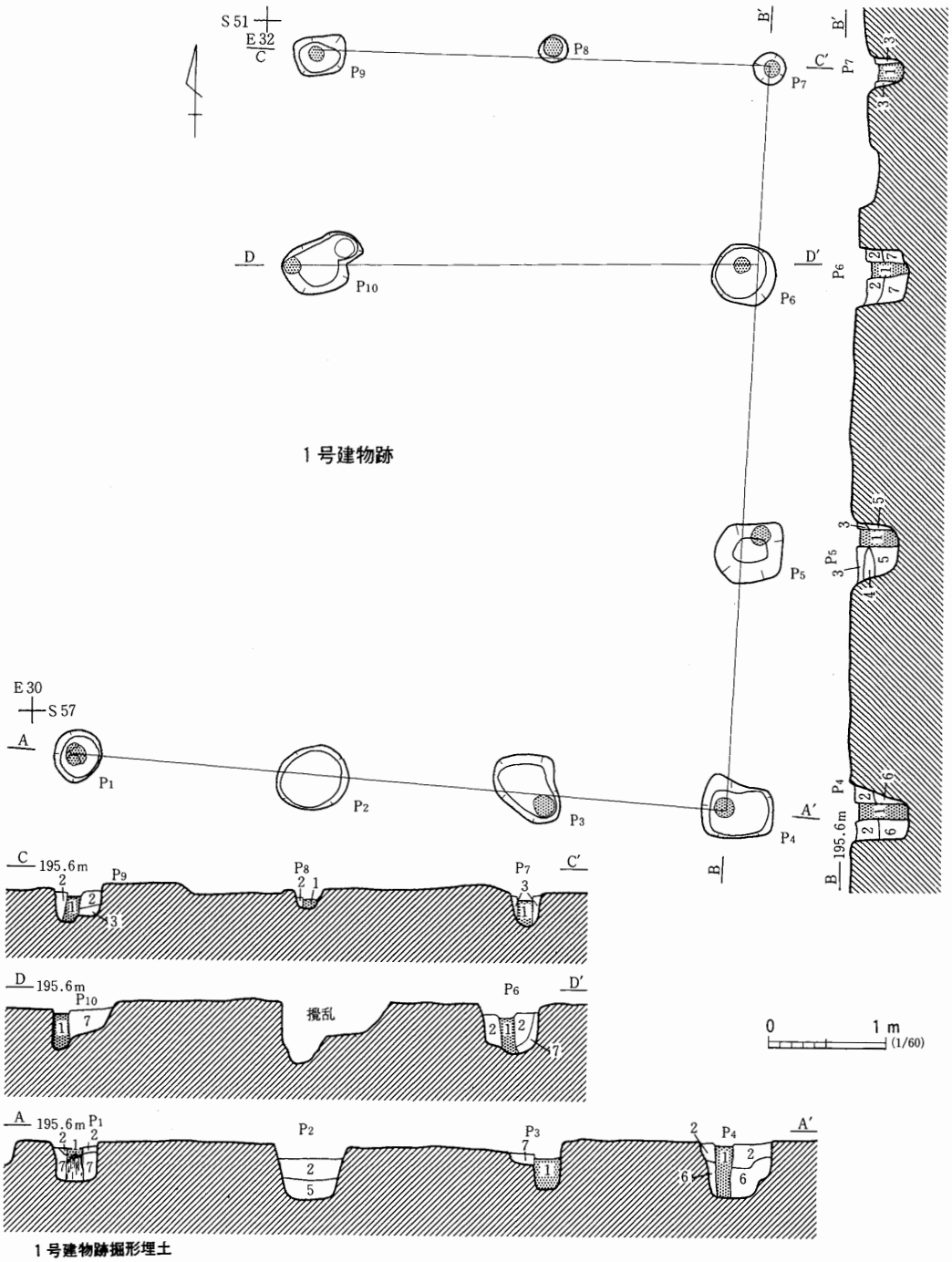
第27図　12号住居跡

第３節　掘立柱建物跡

１号建物跡　ＳＢ01

遺　　構　（第28図）

１号建物跡は，Ⅱ区北東よりのＳ－２グリッドにて検出された建物跡で，遺構検出面はＬⅢ上面となっている。西側柱穴は削平を受けており，遺存していない。建物の西～南側にかけては，



1号建物跡掘形埋土

1　暗褐色粘土質シルト（炭化物・パミス混入）
2　暗褐色粘土質シルト（パミス・灰白色砂土ブロック混入）
3　暗褐色砂質シルト
4　暗褐色砂土ブロック
5　暗灰色粘土質シルト
　　（黒褐色粘土ブロック・灰白色粘土ブロック混入）
6　黒褐色粘土（炭化物・灰白色粘土ブロック混入）
7　灰色砂質シルト（パミス・暗灰色シルトブロック混入）

第28図　1号建物跡

同じ時期のものと考えられる土坑群が位置している。

第２表　ピット計測表　単位(cm)

PNo	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
長軸	46	64	60	62	59	56	29	26	45	70
短軸	42	55	53	46	51	54	29	24	34	47
深さ	34	49	44	50	42	47	31	18	33	41
柱痕	有	無	有	有	有	有	有	有	有	有

建物跡の規模は，桁行き３間・梁行き２間の東西棟建物跡で，北側に１間の廂が付いている。建物の主軸はＮ－２°－Ｅである。柱穴掘形は，不整円形・隅丸方形を呈するものが多く，その規模は，平均すると長軸50cm前後となる。このうち，Ｐ２を除く柱穴より柱痕が検出されている。また，Ｐ１からは，柱材が検出されている。

柱間は，東妻の柱痕芯～芯で北より2.32ｍ＋2.38ｍ，南側柱列では東より1.59ｍ＋2.0ｍ＋2.04ｍとなっている。また，廂は東側柱列北端より1.75ｍのところに付き，東より1.86ｍ＋2.05ｍとなっている。したがって，桁行きは５尺＋6.5尺＋6.5尺，梁行きは８尺＋８尺と解釈しておきたい。

まとめ

本建物跡の柱穴からは，遺物が出土しなかった。しかし，周辺には建物跡に伴うと考えられるゴミ穴である７～９，13号土坑が位置しており，そこからは，平安時代の遺物が出土している。したがって，本建物跡は，平安時代(９世紀代)の所産と推定される。　(藤谷)

２号建物跡　ＳＢ02

遺　　構　(第29図)

２号建物跡は，Ⅲ区南側ほぼ中央のＮ－16グリッドに位置しており，遺構検出面はＬⅢ上面である。建物跡の西側には11号溝跡が接している。

建物跡は，桁行き２間，梁行き１間の東西棟建物跡である。柱穴は径20cm前後の円形を呈するもので，検出面からの深さは，最深のＰ３で45cmである。

第３表　ピット計測表　単位(cm)

PNo	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
長軸	20	14	24	25	26	25	28	23
短軸	18	14	22	25	23	24	24	23
深さ	33	23	45	22	30	31	26	28
柱痕	無	無	無	無	無	無	無	無

柱穴寸法は，東妻の柱間が2.24ｍ，西妻の柱間が2.20ｍ，南側柱列は東より1.40ｍ＋1.82ｍ，北側柱列は東より1.42ｍ＋2.13ｍとなっている。

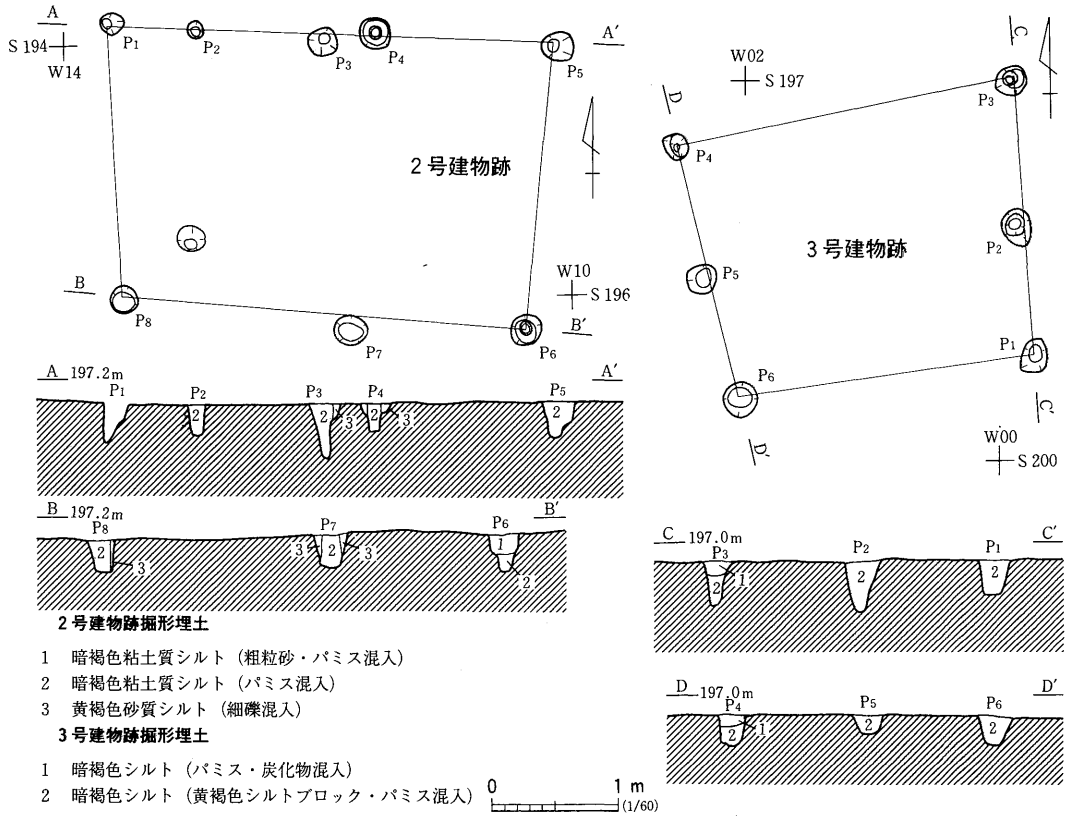
まとめ

本建物跡の柱穴からは遺物が出土しておらず，その年代・性格は不明である。　(藤谷)

３号建物跡　ＳＢ03

遺　　構　(第29図)

３号建物跡は，Ⅲ区のＯ－16，Ｐ－16グリッドに位置しており，遺構検出面はＬⅢ暗黄褐色砂質シルト上面となっている。建物跡は，桁行き２間，梁行き１間の南北棟建物跡である。柱穴は，



第29図　２・３号建物跡

２号建物跡と同様にほぼ円形を呈する小型のもので，検出面からの深さは，最深のＰ２で40cm，平均で22cm前後となっている。柱間の寸法は，南妻の柱間が2.37ｍ，北妻の柱間が2.67ｍである。東側柱列が，北より1.13ｍ＋1.08ｍ，西側柱列が，北より1.07ｍ＋1.02ｍとなっている。

第４表　ピット計測表　単位(cm)

Pno	P1	P2	P3	P4	P5	P6
長軸	27	31	26	22	24	29
短軸	20	23	23	18	23	28
深さ	28	40	34	23	15	23
柱痕	無	無	無	無	無	無

まとめ

本建物跡の柱穴からは遺物が出土しておらず，その年代・性格は不明である。（藤谷）

４号建物跡　ＳＢ04

遺　　構　（第30図）

４号建物跡は，Ⅴ区南側のＫ－26グリッドに位置する建物跡で，検出面はＬⅢ上面である。建物は南側柱列の一部を除いて遺存しており，その規模は，東西１間×南北１間の東西棟建物跡である。柱穴は，ほぼ円形を呈する小型のもので，径は平均して30cm前後，検出面からの深さは，最深のＰ３で36cm，平均すると29cm前後となる。柱穴のうち，柱痕が認められた

第５表　ピット計測表　単位(cm)

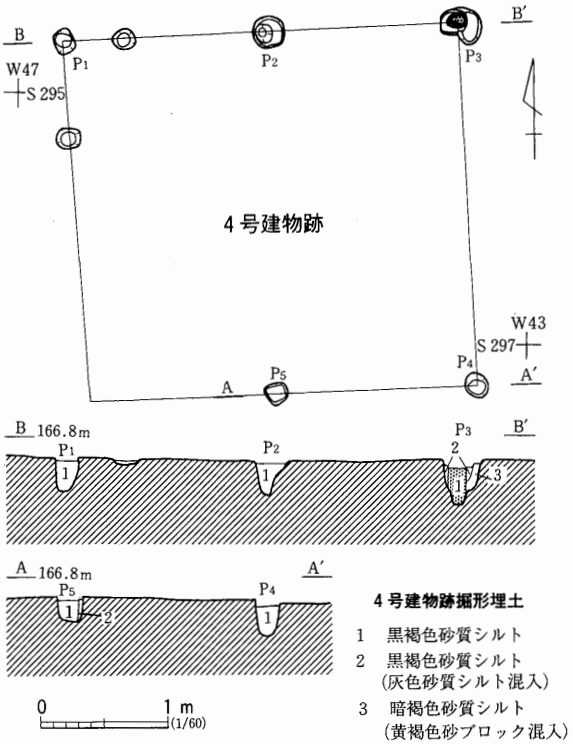
Pno	P1	P2	P3	P4	P5
長軸	20	26	33	22	18
短軸	16	26	22	18	17
深さ	29	24	36	29	23
柱痕	無	無	有	無	無

ものは，Ｐ３とＰ５の２ヶ所であった。

柱間寸法は，東妻柱穴間が2.92ｍ，東西柱列間が北側の東より1.53ｍ＋1.57ｍ，南側が1.60ｍとなっている。

まとめ

本建物跡はＶ区南側に単独で存在する建物跡である。周辺には小規模なピット群が存在しておらず，柱穴からは遺物が出土していない。したがって，その年代は不明であり，性格についても詳細は不明である。（藤谷）



第30図　４号建物跡

５号建物跡　ＳＢ05

遺　　構（第31図，図版12）

５号建物跡は，調査区Ⅲ区，北側の東部Ｎ－９グリッドに位置している。検出面は他の遺構と同様，ＬⅢ上面である。柱穴の一部を削平されており遺存状態は悪い。

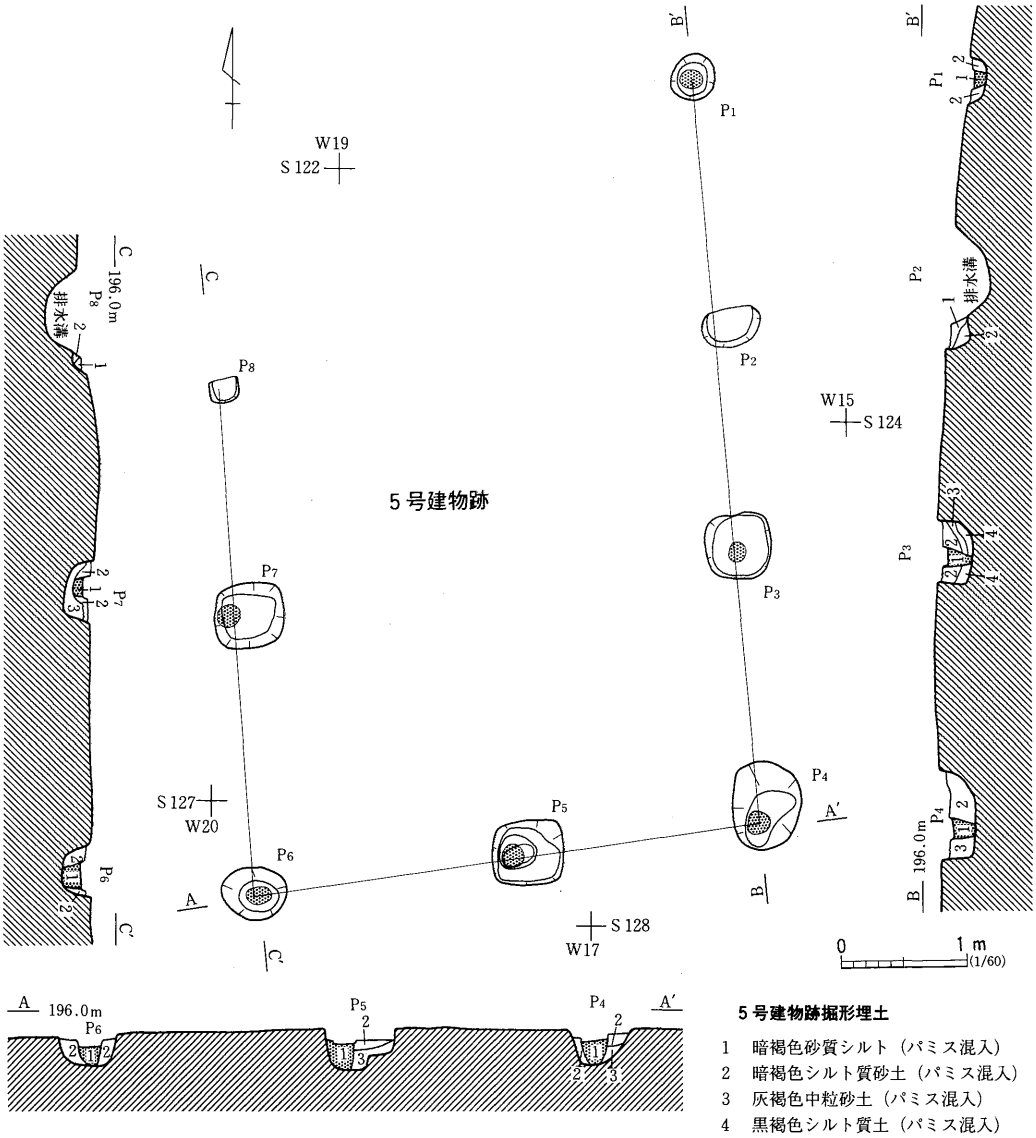
５号建物跡は，35号溝跡を切っており，Ⅲ区に位置する次の掘立柱建物跡とはほぼ一致した方位をもつ。北西15ｍに位置する７号建物跡，南西９ｍに位置する９号建物跡，さらにその西側9.5ｍに位置する８号建物跡，南南東24ｍに位置する10号建物跡，さらにその南に隣接する６号建物跡である。プランは東側柱列が３間，南側柱列が２間，西側柱列は２間分確認されたのみである。これから判断すると桁行き３間，梁行き２間の南北棟と考えられる。東側柱列の方位はＮ－５°－Ｗである。柱穴の掘形は22㎝×(18㎝)～69㎝×54㎝で隅丸の方形もしくはやや不正な楕円形である。深さは12～32㎝である。柱痕は直径16～22㎝の円形であり，Ｐ２・Ｐ８を除くすべての柱穴から検出された。柱痕はＰ７を除き掘形の底面まで達しており，暗褐色砂質シルトである。

第６表　ピット計測表　単位(㎝)

PNo	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
長軸	38	48	50	69	56	52	56	22
短軸	35	29	50	54	50	42	51	18
深さ	15	19	28	27	32	25	24	12
柱痕	有	無	有	有	有	有	有	無

掘形埋土はℓ２～ℓ４に分けられる。主としてパミス，明褐色土粒を含んだ暗褐色～褐色のシルト質砂土である。

柱痕の間隔は，東側柱列の芯芯で北より(1.96ｍ)＋(1.80ｍ)＋2.13ｍ，西側柱列で(1.81ｍ)＋2.24ｍ，南妻で東より1.96＋2.03ｍ



第31図　５号建物跡

である。したがって梁行きは6.5～７尺，桁行きは６～７尺間隔と考えられる。

まとめ

遺物は掘形埋土・柱痕から土師器の小片が出土している。５号建物跡は，遺存状態は悪いが残存部から，桁行き３間，梁行き２間の南北棟が推定できる。また，時期については８号建物跡を中心とした遺構群の一部とも考えられることから，10世紀前半に機能していたものではないかと判断される。　（香内）

6号建物跡　SB06

遺　　構（第32図，図版13）

6号建物跡は，Ⅲ区東端中央部，O・P－12・13グリッドのS156～161，E2～W6の間で検出された建物跡で，遺構検出面はLⅢである。

この建物の西寄りの2柱列は，北3.5mの位置にある10号建物跡の中央および東側柱列の延長線上にほぼ沿う位置にある。しかし，両建物の間隔はほぼ12尺であり，柱列の方位は若干異なったものとなっている。

建物のプランは梁行き2間・桁行き4間で，西側中央部に2個の柱穴があり，このため半分が総柱という変則的な東西棟で床束の可能性もある。方位は，桁方向でN－88°－Eである。

柱穴の掘形はおおよそ60cm×70cm～70cm×90cmの長方形で，深さは約22～30cmの間である。柱痕は，P6を除いた西側総柱部分で検出された。直径12～20cmの円形のもので，全て掘形の底面まで達している。東側の柱穴では確認されなかった。P14は東西に各1個あるピットを切ってその中央に掘り込まれている。両ピットは，堆積土がP14のℓ2と似通っていることから，柱の位置をきめる際の移動の痕跡かとも考えられる。P4は小ピットを切っており，逆にP12は小ピットに一部を切られている。ともに抜き取り痕とは考えられない。

第7表　ピット計測表　　単位(cm)

P№	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14
長軸	73	72	84	84	70	71	66	82	84	86	68	94	70	86
短軸	66	64	68	72	61	67	57	64	70	72	63	76	64	50
深さ	22	28	30	32	30	24	28	30	30	30	24	26	26	28
柱痕	無	無	無	無	有	無	有	有	有	有	有	無	有	有

柱穴の間隔は，東妻が北から2.07m＋1.50m，西妻が同じく北から1.80m＋1.88m，南側柱列が西から1.61m＋1.78m＋1.25m＋2.36m，北側柱列が同じく西から1.60m＋1.84m＋1.48m＋2.55m，中央南北柱列が北から1.94m＋1.69m，中央東西柱列が西から1.64m＋1.74m，西寄り2列目の南北柱列が北から1.86m＋1.78mである。従って，東側は7尺＋5尺，西側は6尺＋6尺，南側は5尺＋6尺＋4尺＋8尺，北側は5尺＋6尺＋4尺＋8尺と考えられる。

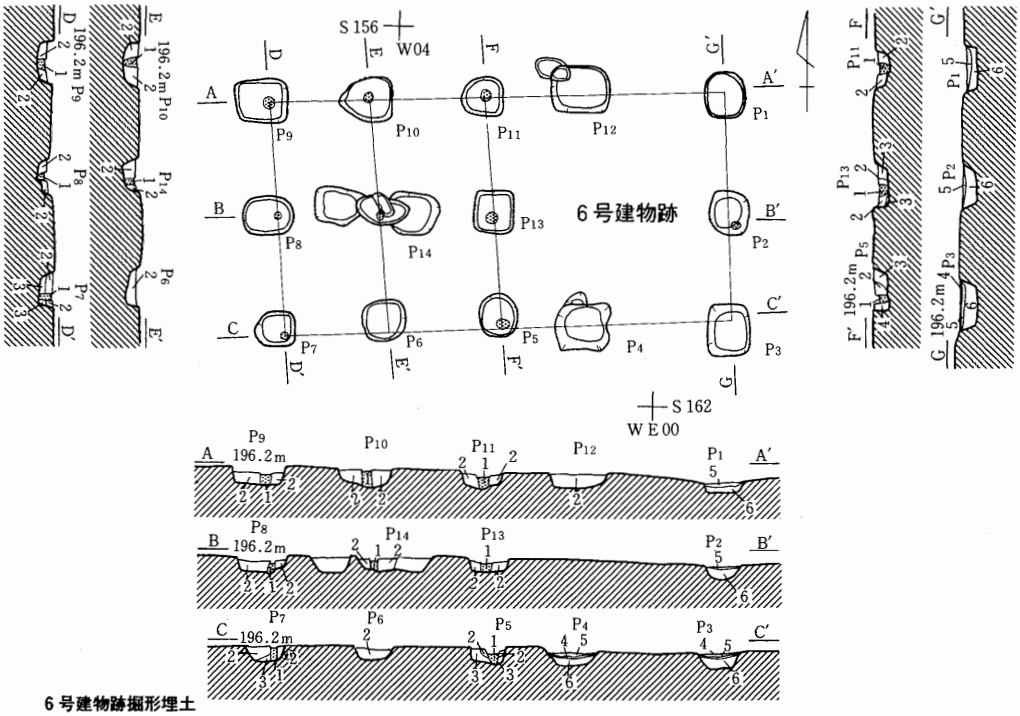
まとめ

本建物跡の柱穴からは，ロクロ土師器杯の細片が少量出土しているが，図化できるものはなかった。本遺構の機能年代は出土遺物より平安時代と考えられる。また，西半分が床貼りの可能性のある特殊な構造の建物跡である。（佐原）

7号建物跡　SB07

遺　　構（第33図，図版14）

7号建物跡はⅢ区北西隅，L・K－8グリッドのS115～122，W34～47の間で確認された建物



６号建物跡掘形埋土

1　黒褐色粘土質シルト（黒色粘土ブロック・パミス混入）
2　暗褐色シルト（黒色粘土ブロック・黄褐色シルトブロック・パミス混入）
3　黄褐色砂質シルト（黄褐色シルトブロック混入）
4　灰褐色粘土質シルト（砂混入）
5　暗褐色粘土質シルト（砂混入）
6　灰褐色砂質シルト（黒色粘土ブロック・黄褐色シルトブロック混入）

第32図　６号建物跡

跡で，遺構検出面はＬⅢである。

この建物の東～南の半径15ｍ内に，５・８・９号建物跡がある。これらは，その南北軸の方位がほぼ同じ傾きであり，また，後述するが，柱穴よりの出土遺物が同時期のものであることから，何らかの関係をもったものと判断される。

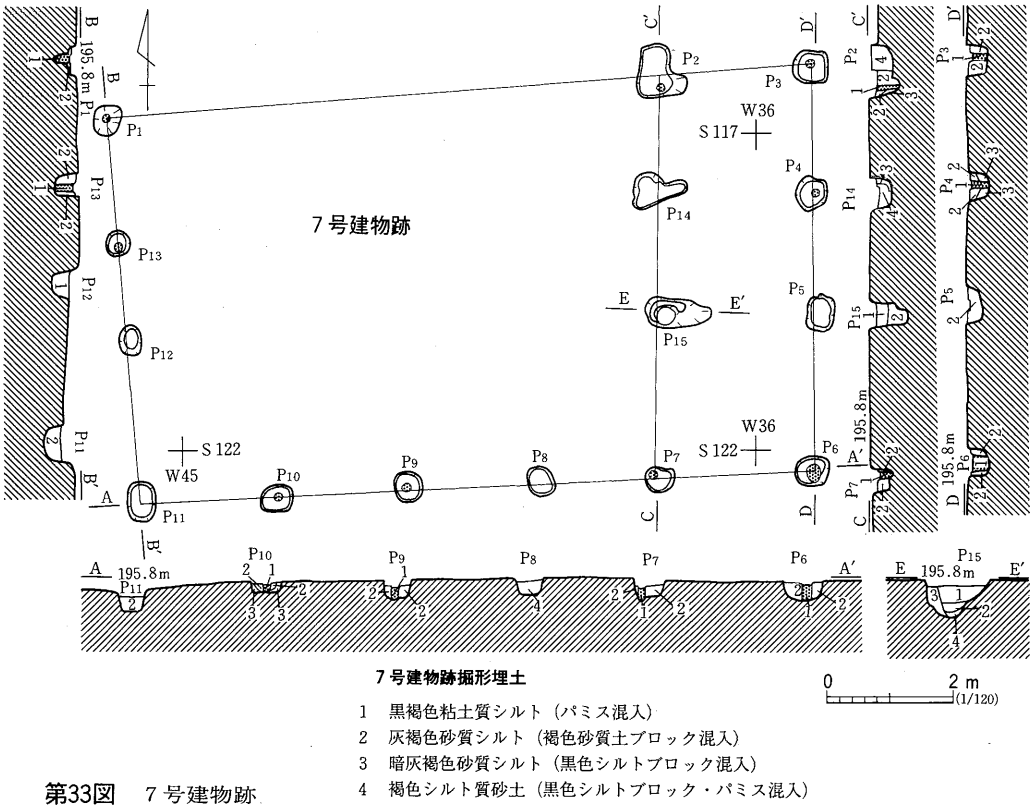
建物のプランは，北側が攪乱を受けているため，全容は不明であるが，梁行き３間・桁行き５間の東西棟である。方位は南側柱列でＮ－87°－Ｅである。

Ｐ14・15は抜き取り痕跡と考えられるため，当初は桁行き４間であり，後に東に１間延長された建物かと思われる。

柱穴は全部で15個検出された。これらのうち，Ｐ13～15を除いて，おおむね東西軸が約35～55㎝，南北軸も約35～55㎝で，形態は隅丸の方形または長方形を呈している。深さは，約20～60㎝である。Ｐ14・15

第８表　ピット計測表　　単位(㎝)

Pｎo	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15
長軸	48	88	58	60	62	56	50	50	50	52	64	50	42	88	104
短軸	44	82	54	52	44	50	42	46	48	44	48	38	42	56	48
深さ	38	50	36	36	28	38	36	30	32	20	32	44	40	34	62
柱痕	有	有	有	有	無	有	有	無	有	有	無	無	有	無	無



第33図　７号建物跡

はその構造から，柱が東側に抜かれたものと思われる。柱痕は９個の柱穴で確認され，いずれも，掘形の底面まで達していた。Ｐ６のみ楕円形であるが，他は円形である。また，Ｐ３・４には柱材が遺存していた。

他の遺構との重複は，Ｐ５が98号土坑を，Ｐ７が99号土坑を，Ｐ14が97号土坑をそれぞれ切る関係になっている。

柱穴の間隔は，東妻が北から2.05ｍ＋1.90ｍ＋2.50ｍ，西妻が北から2.05ｍ＋1.45ｍ＋2.45ｍ，南側柱列が西から2.15ｍ＋2.05ｍ＋2.15ｍ＋1.75ｍ＋2.50ｍである。従って，東妻が７尺＋６尺＋８尺，西妻が７尺＋５尺＋８尺，南側柱列が７尺＋７尺＋７尺＋６尺＋８尺となる。また，北側の間隔は11.1ｍ，37尺である。

まとめ

遺物は，Ｐ４からロクロ使用の土師器片，Ｐ14から内黒の杯の一部が出土しているが，ともに小片であり，図化できなかった。

本建物跡は，その周辺の建物跡の遺物から，おおむね平安時代（９～10世紀代）に帰属するものと考えられる。前述したが，５・8・9号建物跡とは，主軸方向がほぼ一致するところから，同時期になんらかの関係をもって存在した可能性が高い。ことに，８号建物跡の北側柱列と本遺構の

南側柱列はほぼ並行しており，その距離も12.1m，約40尺であることから，両遺構に強い結びつきがあったと判断される。（佐原）

8号建物跡　SB08

遺　構（第34・35図，図版15）

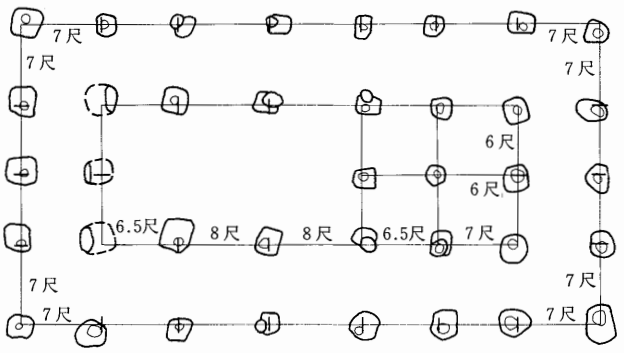
8号建物跡は遺跡の中央東半部のJ・K－10・11グリッドS134～143・W40～56より検出された建物跡である。遺構検出面は身舎の西妻より東の部分は，すでに上面が削平されており検出面はLⅢの黄褐色砂質土となっており，軟弱な層に掘り込まれている。身舎の南西隅柱（P28），南柱の西より2番目および西廂の柱列は旧農道下にあり，20cm程高い削平の少ない部分で黒褐色粘土質シルト（LⅡ）から掘り込まれており，安定した面となっていた。

この建物跡の南東隅柱は35号溝跡を切り，東約10mに9号建物跡，北12mに7号建物跡が位置する。9号建物跡は北妻柱列と身舎北側柱列の柱筋が通っており，東廂から9号建物跡の北西隅柱までの距離は9.5mを測り，約32尺と考えることができる。7号建物跡は西妻柱列が身舎の東から1間目（廂の東から2間目）と柱筋が通っており，北廂から7号建物跡の南西隅柱まで12.1mを測り，約40尺の間隔と考えられる。

建物のプランは，身舎が梁行き2間，桁行き5間の東西棟で，東から1・2間目にそれぞれ1間の床束と間仕切り柱があり，この身舎の周りに1間の廂が付く，東西7間・南北4間の大きな物となる。方位は梁方行でN－4.5°－Wを指す。

柱穴の掘形は97cm×71cm～40cm×32cmの隅丸方形から不整円形を呈し，深さは検出面から22～73cmと様々である。しかし，底面は標高198.4～198.7mで，最も削平の少ない部分の遺構検出面は標高199.1mなので，実際の深さは40cmを越えるものと考えられる。このうちP5・P14・P15・P25・P32には柱の抜き取り穴が付いている。焼土・炭化物等が出土したのはP7の柱痕のみであった。

柱間隔は柱痕の芯芯で，身舎の南側柱列で東より2.0m＋(1.9m)＋(2.5m)＋2.35m，北側柱列で東より2.0m＋1.9m＋(2.5m)＋(2.5m)，東妻で南より1.8m＋1.7mを測る。床束は身舎の東から1間目中央にあり，南より1.9m＋1.7mを測る。間仕切り柱は東より2間目中央部にあるが，柱痕



第34図　8号建物跡柱配置図

は不明である。廂は南側柱列で東より2.25m＋1.8m＋2.1m＋2.55m＋2.2m＋2.1m＋2.0m，北側柱列で東より1.95m＋2.3m＋1.8m＋2.4m＋2.5m＋1.9m＋2.05m，東側柱列で南より1.85m＋1.8m＋1.8m＋2.0m，西側柱列で南より2.15m＋1.8m＋1.8m＋2.25mを測る。

第9表　ピット計測表　　単位(cm)

P№	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19
長軸	97	86	76	74	58	61	68	66	70	86	76	90	66	66	60	60	52	64	60
短軸	71	70	66	70	46	54	65	65	68	72	70	74	40	62	46	39	48	46	55
深さ	54	50	45	50	43	41	57	55	63	38	57	58	29	38	41	38	24	32	30
柱痕	有	有	有	有	無	有	有	有	有	有	有	有	有	無	有	有	有	有	有
P№	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30	P31	P32	P33	P34	P35	P36	P37	P38
長軸	76	74	62	76	68	52	61	80	56	49	70	66	64	52	54	60	64	40	52
短軸	56	60	56	70	52	40	58	72	28	10	24	62	62	44	52	58	60	38	49
深さ	32	40	41	46	34	50	43	36	32	38	16	39	42	48	24	58	36	46	39
柱痕	有	有	有	有	無	無	有	有	無	無	無	有	無	有	無	有	有	有	無

これらのうち南廂柱列は総長で15.0mを測り，50尺であったものと推定される。同じく北廂も14.9mで50尺と考えられる。東と西の廂について見ると，東廂は総長で7.4m，西廂では8.0mを測り，それぞれ24.7尺，26.7尺となり，切りの良い数字は得られず2尺の差が出る。そこで東西両廂の南1間および身舎と，南廂の柱間隔の明らかな身舎東妻と東から1・3・4間とそれに対応する廂柱の間隔を見ると東より1.85m・2.1m・1.95m・2.1m・2.2m・2.15mとなり，平均2.06mが得られる。同様に東西両廂北の1間・身舎東妻・東より1・2間目を見ると，東より2.0m・2.1m・2.15m・2.1m・2.25mで平均2.12mを得る。したがって，南と北の廂は7尺であったと推定される。東廂についても同じ操作を行うと，南より2.25m・2.25m・2.1m・2.1m・1.9mで平均2.13mが得られ，7尺と考えられる。西廂については，身舎西妻の柱穴がほとんど後世の溝により切られ正確な柱間隔は不明であるが，南廂の西1間目が2.0m，北廂では2.05mとなるので7尺と考えて良いと思われる。したがって廂は4面とも7尺と推定される。

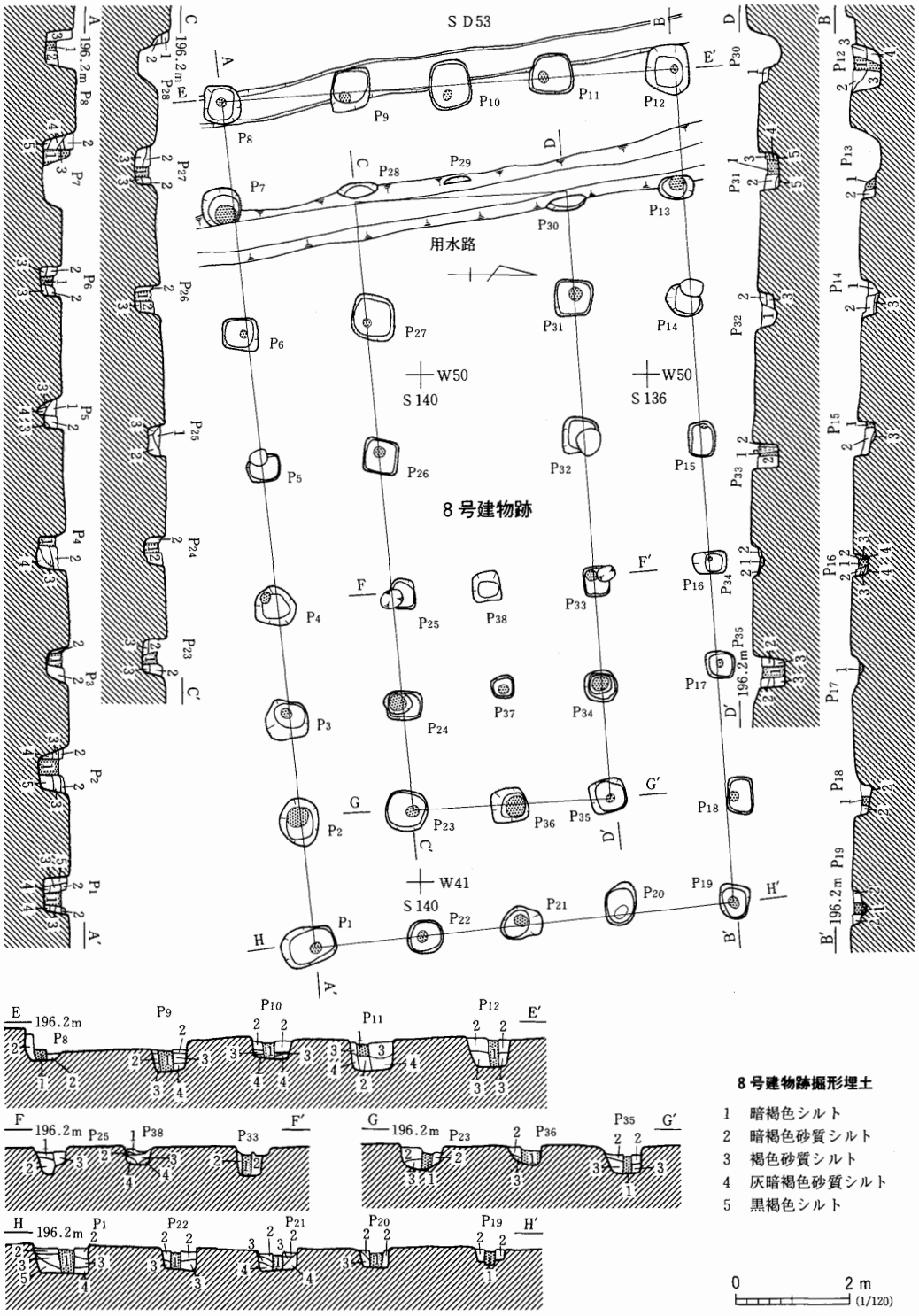
以上のように7尺の4面廂と考えれば，身舎の桁行きは廂の東西長から東西の廂分14尺を引いた36尺と考えなければならない。身舎の梁行きは身舎東妻の柱間隔が南より1.8m・1.7m，東西両廂の真ん中2間が1.8m＋1.8mとなるので，6尺＋6尺と考えられる。とすれば，廂の南北長は12尺＋14尺の26尺となる。その場合北東の隅柱が南に，北西の隅柱が北にややずれるが，全体のバランスから東西50尺・南北26尺の建物としておきたい。身舎の桁行きの柱配置は柱痕の間隔より，東から7尺＋6.5尺＋8尺＋8尺＋6.5尺と推定される。以上を図に示すと第34図のようになる。

遺　物

遺物は掘形埋土・柱痕から土師器・須恵器の破片が出土しているが，小片で数が少ないため時期決定には用いられない。

まとめ

8号建物跡は桁行き5間・梁行き2間の東西棟の身舎に4面廂が付くかなり大きな建物で，そ


S D53
用水路
8号建物跡
W50
S 140
W50
S 136
W41
S 140
196.2m
8号建物跡掘形埋土
1　暗褐色シルト
2　暗褐色砂質シルト
3　褐色砂質シルト
4　灰暗褐色砂質シルト
5　黒褐色シルト
0　2 m
(1/120)

第35図　８号建物跡

の東と北に柱筋の通った７・９号建物跡があるが，規模・構造からこの８号建物跡が中心と考えられる。また，９号建物跡の柱筋南の延長上に36ｍ(120尺)に３号井戸跡があり，これも８号建物跡を中心とした遺構群の一部と考えられよう。この井戸の底からは10世紀前半の土器群が出土しており，８号建物跡を中心としたこれらの建物群も10世紀前半に機能していたと考えられる。

(木本)

９号建物跡　ＳＢ09

遺　　構　(第36図，図版16)

９号建物跡は，調査区Ⅲ区北側の中央のＬ・Ｍ・Ｎ－９・10グリッドに位置している。検出面は他の遺構と同様，ＬⅢ上面である。

９号建物跡は，他の遺構との直接の切り合い関係は見られない。この建物の北妻柱列と８号建物跡の身舎北側柱列の柱筋が一致し，北西隅柱から８号建物跡の東廂までの距離は9.5ｍである。これは約32尺と考えることができる。また，北北西16ｍに位置する７号建物跡，北東９ｍに位置する５号建物跡，東南東15ｍに位置する10号建物跡，更に，その南に隣接する６号建物跡ともその方位が一致している。また，本建物の西側に平行に29号溝跡が位置する。更にその西側には，平安時代の土坑である56号土坑が位置している。

プランは南北方向に５間，東西方向に南妻で２間，北妻で４間分の柱穴が並ぶ。北妻のＰ２・４は，Ｐ１・３・５の柱痕を結ぶラインよりもやや外側に位置する。また，同様に浅い柱穴である。したがって，この２つの柱穴は建物本体を直接的に支持する柱を埋めたものではないものと考える。ここでは梁行き２間，桁行き５間の南北棟と解釈したい。方位はＮ－４°－Ｗを指す。

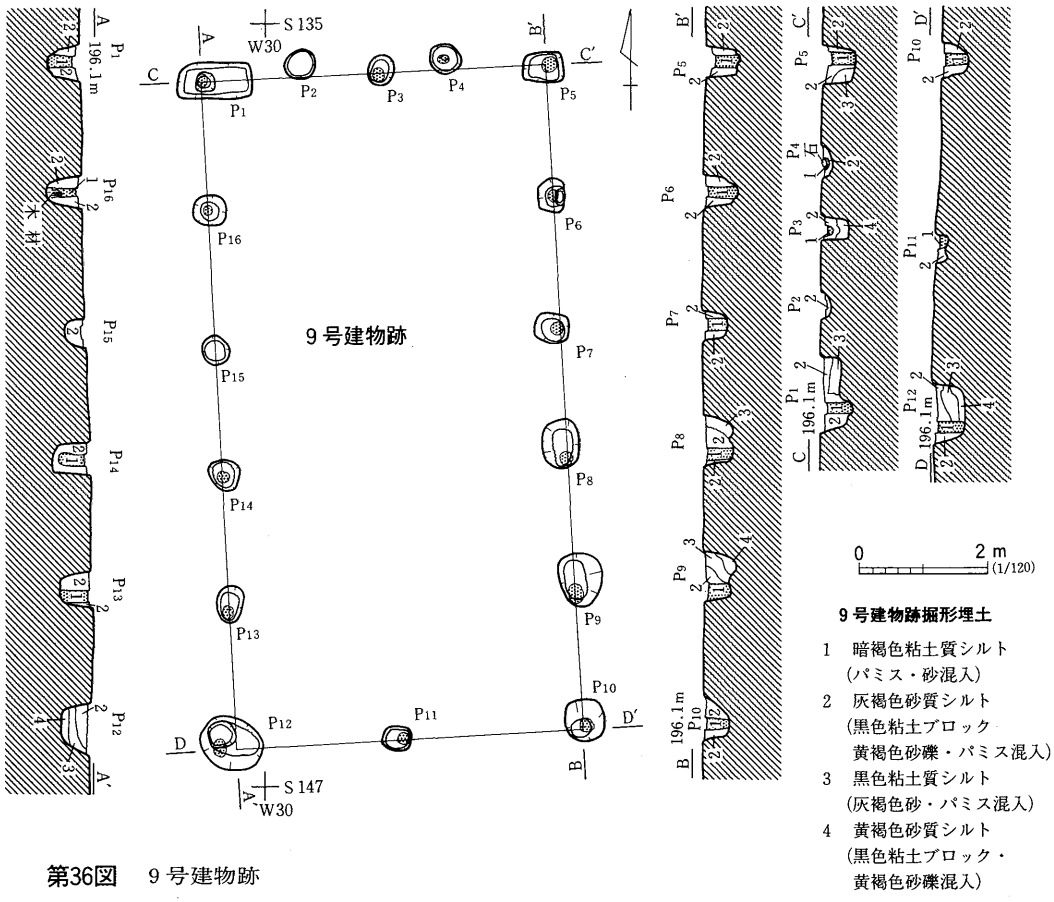
柱穴の掘形は，120㎝×47㎝～83㎝×40㎝である。平面形はＰ１・５が東西方向に長軸をもつ整った長方形，他は柱筋方向に長軸をもつ楕円形，ないしはやや不正な多角形状を呈する。深さは16～62㎝である。特にＰ２・４・11は他の柱穴の33～60㎝の深さと比べると浅い。柱痕は直径18～22㎝の円形であり，Ｐ２・15を除きすべて検出された。柱痕は，Ｐ３・４・14を除き掘形の底面まで達している。柱痕は暗灰褐色の粘質土である。

第10表　ピット計測表　　単位(㎝)

Pno	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16
長軸	120	50	50	54	65	57	53	79	87	70	50	100	59	55	47	58
短軸	58	43	42	48	49	40	48	58	68	61	40	83	41	47	42	48
深さ	53	16	44	19	53	58	41	45	57	42	18	46	50	62	33	59
柱痕	有	無	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	無	有

掘形埋土はℓ２～ℓ４に分けられる。パミス，黒色粘土ブロック，黄褐色砂礫を含んだ灰褐色の砂質シルトである。

柱痕の間隔は北妻の芯芯で(かっこ内は柱穴の中央からの値)西より(1.60ｍ)＋(1.21ｍ)＋1.06ｍ＋1.67ｍ，Ｐ１～Ｐ３，Ｐ３～Ｐ５間は2.81ｍ＋2.70ｍ，南妻で2.93ｍ＋2.87ｍ，東側柱



第36図　９号建物跡

列で北より2.07ｍ＋2.12ｍ＋2.06ｍ＋2.13ｍ＋2.07ｍ，西側柱列では2.06ｍ＋(2.10ｍ＋2.10ｍ)＋2.14ｍ＋2.15ｍを測る。したがって，梁行きは9.5尺等間隔，桁行きは７尺等間隔と考えられる。また，北妻のＰ２・４については，それぞれ両側より5.5尺の等間隔で配置されていたものと解釈した。

遺　物

遺物は掘形埋土・柱痕から土師器・須恵器の破片が出土している。特にＰ８からの出土量が多い。他からは，数点のみである。

まとめ

９号建物跡は，桁行き５間・梁行き２間の南北棟である。西側の柱筋が通った８号建物跡を中心とする建物群の一部と考えられる。また，柱筋南の延長上に15ｍ(50尺)に３号井戸跡があり，これも８号建物跡を中心とする遺構群の一部と考えられよう。この井戸の底から10世紀前半の土器群が出土していることから９号建物跡も10世紀前半には機能していたと考えられる。また，29号溝跡はこの建物のいわゆる雨落ち溝であろう。　(香内)

10号建物跡　ＳＢ10

遺　　構（第38図，図版17）

10号建物跡は，調査区Ⅲ区，中央の東側，Ｏ－12グリッドに位置している。検出面は他の遺構と同様，ＬⅢ上面である。

10号建物跡は，この建物の周辺に密に分布する小ピットと，直接の切り合い関係を持っている。このうち，Ｐ３が東側のやや大きめのピットを切っており，Ｐ８・９が小ピットを切っている。この南に隣接する６号建物跡とは，間に塀を挟むが，その方位はほぼ一致している。また北西16ｍに位置する９号建物跡，その西側９ｍに位置する８号建物跡，北東35ｍに位置する７号建物跡，さらに北北西24ｍに位置する５号建物跡ともほぼ一致した方位をもつ。

プランは東西方向に２間，南北方向に３間分の柱穴が並ぶ。南側の東西方向の柱列は，目隠し塀と考えられる。これは南北方向の柱列の間隔が東側では北より1.78ｍ＋1.57ｍ＋2.80ｍ，中柱列で1.78ｍ＋1.56ｍ＋2.83ｍ，西側では1.63ｍ＋1.85ｍ＋2.74ｍとなり，南側の柱列の間隔のみが他の柱列より長いためである。したがって，この建物は梁行き２間，桁行き２間の総柱建物と考えたい。また後述するように，南北方向よりも東西方向の間隔が長いので，東西棟と判断しておく。方位は東妻でＮ－６°－Ｗ，北側柱列でＮ－85.5°－Ｅを指す。

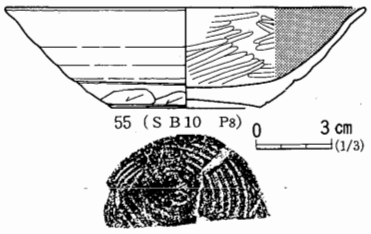
柱穴の掘形は，108㎝×91㎝～70㎝×60㎝である。平面形は，方形もしくはやや不整な長方形である。深さは27～48㎝である。柱痕は直径13～25㎝の円形であり，すべての柱穴より検出された。柱痕はＰ６を除き掘形の底面まで達している。柱痕は黒褐色シルト質砂土または黒褐色砂質シルトである。掘形埋土はℓ１～ℓ４に分けられる。主としてパミス，明褐色土粒を含んだ暗褐色～褐色のシルト質砂土である。柱痕の間隔は北妻の芯芯で西より1.81ｍ＋1.85ｍ，中柱列で1.92ｍ＋1.68ｍ，南妻で1.88ｍ＋1.87ｍ，塀が1.92ｍ＋2.21ｍ，南北方向については前述のとおりである。したがって，総長は北妻が3.66ｍ，南妻が3.75ｍ，東側柱列が3.35ｍ，西側柱列が3.48ｍである。したがって，梁行きは６～5.5尺，桁行きは６～6.5尺等間隔と考えられる。また，塀は建物本体よりも，９～9.5尺離れて6.5～7.5尺の等間隔で配置されていたものと解釈できる。

第11表　ピット計測表　　単位(㎝)

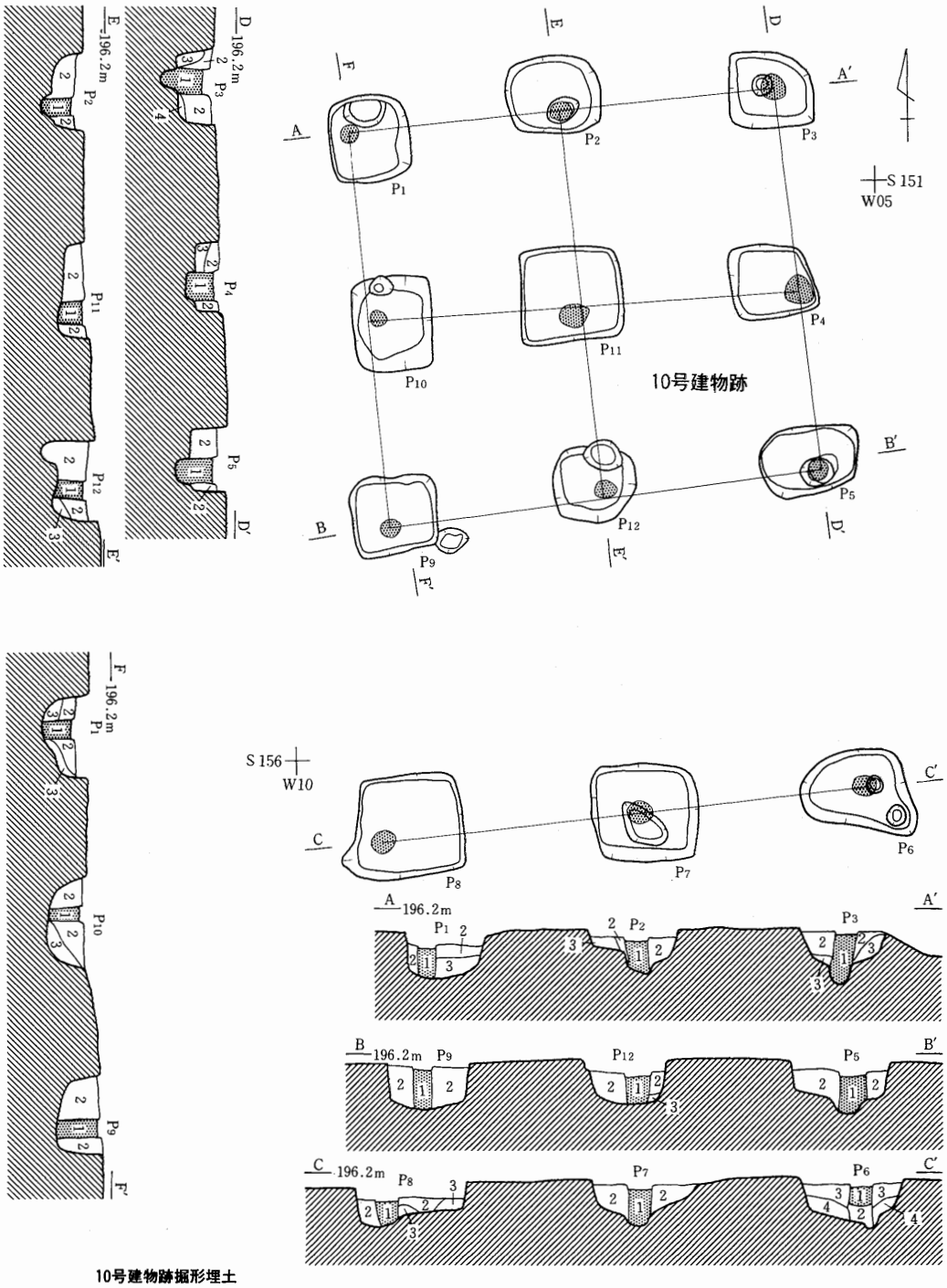
Pno	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
長軸	76	80	73	73	88	101	91	108	74	81	87	70
短軸	70	76	65	65	60	70	86	91	69	68	83	68
深さ	40	39	48	31	46	45	40	34	40	36	27	48
柱痕	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有

遺　　物（第37図）

遺物は掘形埋土・柱痕より土師器・須恵器の小片が出土している。図示資料では55が土師器の杯である。底部は回転糸切り，内面にはミガキが施されている。



第37図　10号建物跡出土遺物


10号建物跡
S 151
W05
S 156
W10
196.2m
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
10号建物跡掘形埋土
1　黒褐色砂質シルト土
2　暗褐色シルト質砂（明褐色砂ブロック混入）
3　明褐色シルト質砂（暗褐色シルトブロック・パミス混入）
4　明褐色砂土（パミス混入）
0
1 m
(1/60)

第38図　10号建物跡

まとめ

この建物は２間×２間の総柱建物跡で東西棟と考えられる。時期は，出土遺物が９世紀後半～10世紀初頭に位置づけられることと，本建物跡が８号建物跡及びその一群の建物跡に含まれるところから，10世紀前半に機能していたものと考えられる。（香内）

11号建物跡　ＳＢ11

遺　　構（第40図）

11号建物跡はⅤ区中央部，Ｆ・Ｇ－11・12グリッドのＳ146～154・Ｗ88～92にかけて検出されており，検出面はパミスを含む暗黄褐色砂質シルトのＬⅢ上面である。

この建物の東側柱列が48号溝跡を切り，西側柱列が70号溝跡により切られている。また，北３ｍに35号建物跡，西４ｍに27号建物跡があるが，方位は異なる。

第12表　ピット計測表　単位(cm)

Pｎｏ	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
長軸	84	88	99	89	91	93	80	90	88
短軸	64	80	40	80	84	79	72	72	76
深さ	33	39	39	30	35	40	35	22	43
柱痕	有	有	無	無	無	有	有	有	有

プランは桁行き３間，梁行き２間の南北棟建物で，南西の隅柱は70号溝跡に完全に切られている。柱穴のうち南西隅柱は70号溝跡に切られて無くなっており，西側柱列の中２本はほぼ半分が切られ，全体の形は不明である。これらを除く柱穴掘形の形は長軸80～99㎝，短軸64～84㎝の長方形または不整長方形を呈している。遺構検出面から底面までの深さは22～43㎝を測り，底面の標高は195.65～195.80ｍの間でほぼ一定している。柱痕は直径20～28㎝のほぼ円形を呈している。

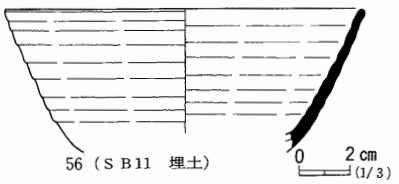
柱間隔は柱痕の芯芯で南妻Ｐ１・２が2.73ｍ，北妻が西より2.6ｍ＋2.65ｍ，東側柱列は北より2.55ｍ＋1.9ｍ＋2.05ｍを測る。次に梁行き・桁行きの長さを見ると北妻は5.25ｍで17.5尺となるが，Ｐ６の柱痕はその中央に位置している。ただし，ここでは柱痕内で最大5.45ｍを取り得るので，梁行きは5.4ｍ(７尺＋７尺)としておきたい。桁方向は東側柱列で6.5ｍであるが，6.6ｍを取り得るので22尺と解釈しておきたい。とすれば，北より９尺＋６尺＋７尺と考えることができる。方位は桁方向でＮ－６°－Ｅを指す。

遺　　物（第39図）

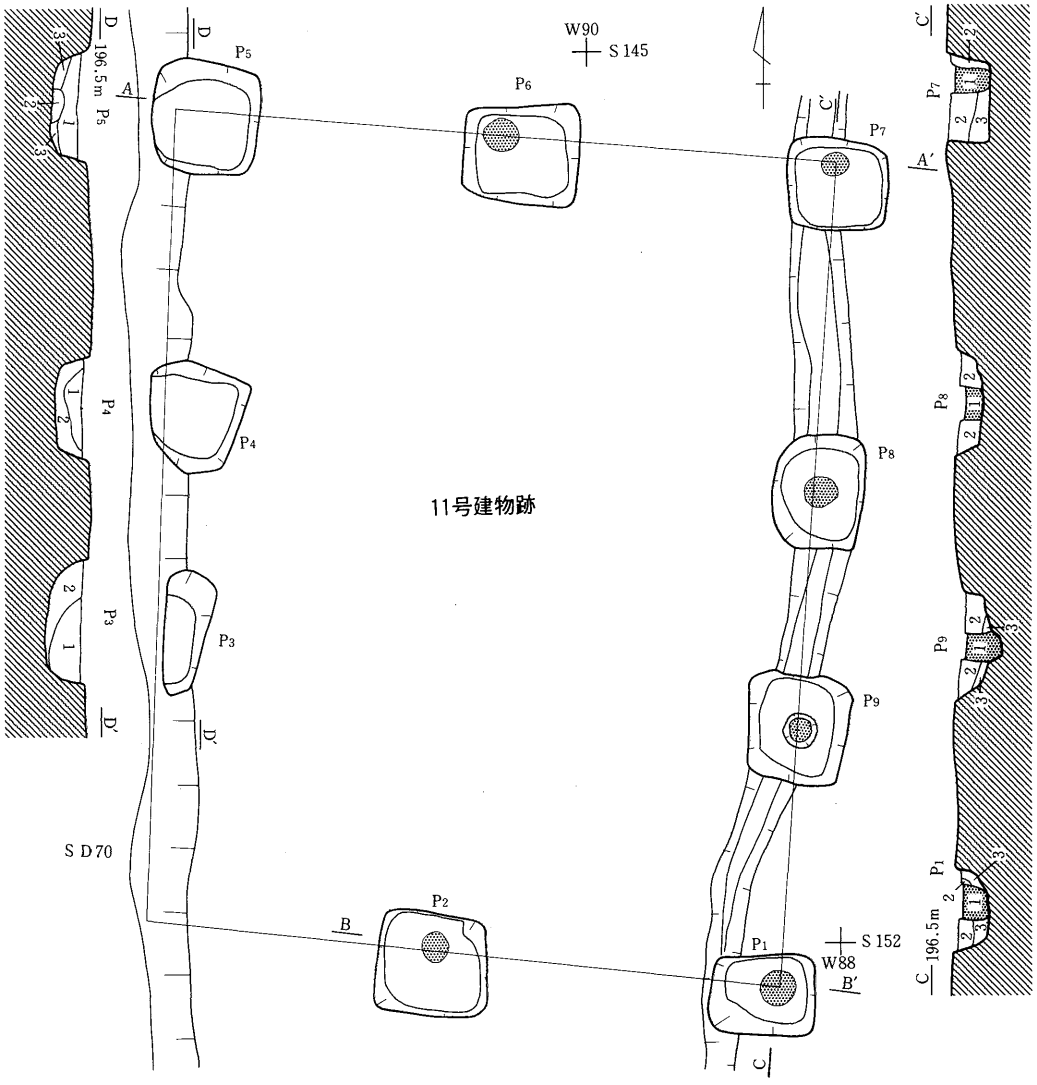
柱穴掘形埋土中から土師器・須恵器の破片が出土している。土師器杯はロクロ調整で内黒のものであるが，小片のため実測は出来なかった。須恵器はＰ６掘形埋土出土のものが１点実測が出来た。深めの杯であり，底部は欠損している。

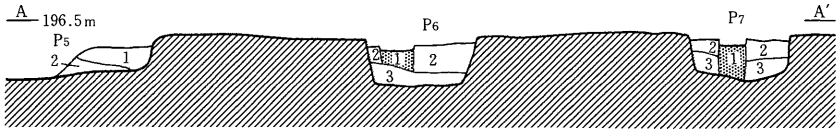
まとめ

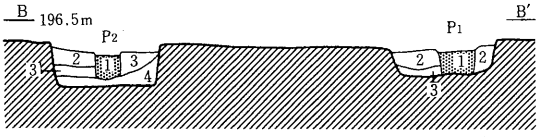
本建物跡は，出土遺物より平安時代(９，10世紀代)の所産と考えられる。（中野）



第39図　11号建物跡出土遺物





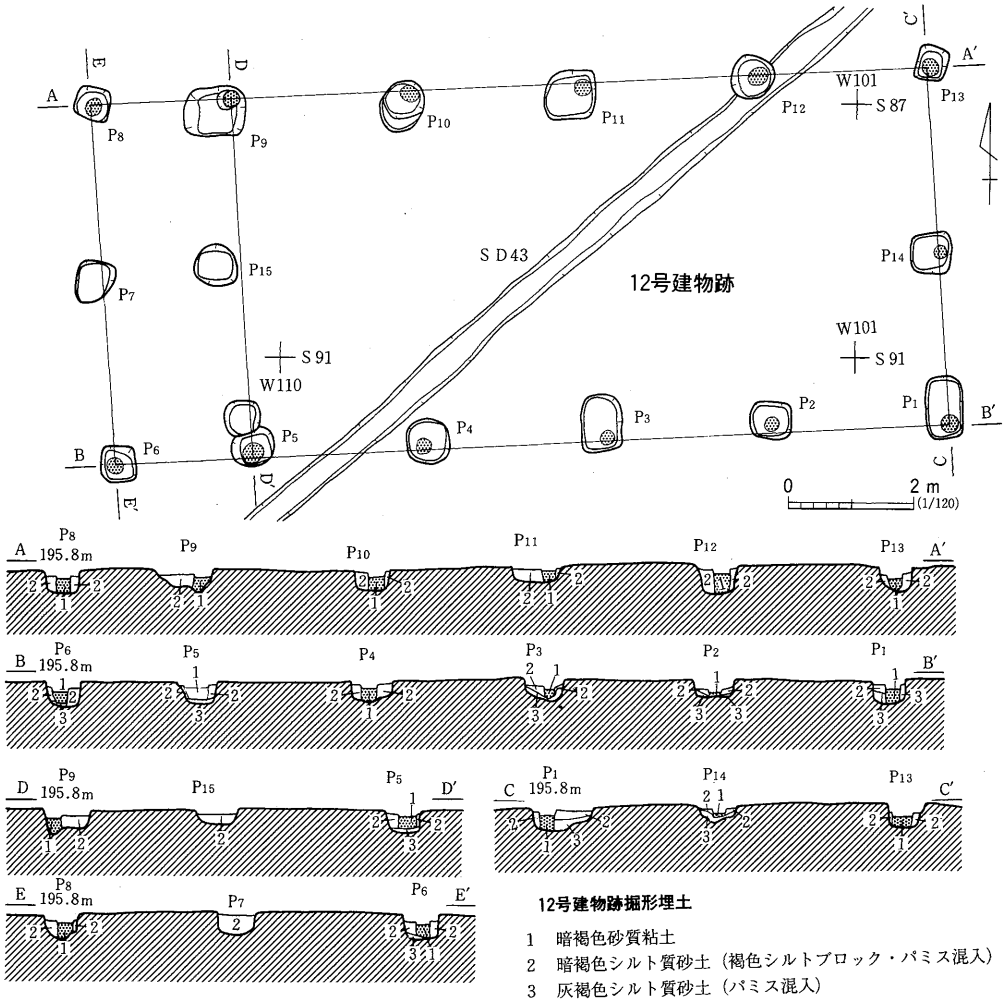


11号建物跡掘形埋土

1　黒褐色シルト
2　暗褐色シルト
3　暗黄褐色砂質シルト
4　褐色砂質シルト

0　1 m
(1/60)

第40図　11号建物跡



第41図　12号建物跡

12号建物跡　ＳＢ12

遺　　構　（第41図，図版18）

12号建物跡は，調査区Ⅴ区，北側の中央，Ｄ・Ｅ・Ｆ－５・６グリッドに位置している。検出面は他の遺構と同様，ＬⅢ上面である。

12号建物跡は，13号建物跡・43号溝跡と重複関係にある。43号溝跡を12号建物跡の柱穴であるＰ12が切っており，12号建物跡のほうが新しい。また，南西部で13号建物跡の東北部と重複しており，その方位も一致しているが，柱穴間の切り合い関係が見られない。したがってその新旧関係は決めることはできない。

プランは南北方向に２間，東西方向に５間分の柱穴が並ぶ。西側の南北方向に走る２列の柱列

で囲まれた部分は廂か間仕切りと考えられる。東西方向の柱列の間隔が，北側では西から2.20ｍ＋2.77ｍ＋2.72ｍ＋2.73ｍ＋2.71ｍ，同様に南側では2.19ｍ＋2.68ｍ＋2.91ｍ＋2.61ｍ＋2.81ｍとなり，東西方向の西から１間目の柱列の間隔は他の間隔に比べて短い。したがってこの建物のプランは梁行き２間，桁行き４間＋廂１間の東西棟と考える。方位はＮ－87°－Ｅを指す。

柱穴の掘形は，身舎の部分が57㎝×50㎝～100㎝×73㎝である。平面形は長方形、隅丸の方形，ないしはやや不整な多角形状を呈する。深さは23～44㎝である。柱痕は直径22～35㎝の円形であり，Ｐ７・15を除きすべて検出された。柱痕はＰ７・14を除き掘形の底面まで達している。廂の柱穴の掘形は，54㎝×51㎝～70㎝×58㎝ほどで，柱痕は25～28㎝である。柱痕は暗褐色の砂質粘土またはシルト質土である。掘形埋土はℓ１～ℓ３に分けられる。主としてパミス・黄褐色砂礫を含んだ暗褐色のシルト質砂土である。

第13表　ピット計測表　　単位(㎝)

Ｐ№	Ｐ1	Ｐ2	Ｐ3	Ｐ4	Ｐ5	Ｐ6	Ｐ7	Ｐ8	Ｐ9	Ｐ10	Ｐ11	Ｐ12	Ｐ13	Ｐ14	Ｐ15
長軸	98	78	90	73	70	59	70	54	100	83	84	72	57	65	72
短軸	58	64	65	70	56	55	58	51	73	67	75	65	50	64	68
深さ	38	27	35	31	33	41	37	37	39	33	24	44	40	23	26
柱痕	有	有	有	有	有	有	無	有	有	有	有	有	有	有	無

柱痕の間隔は北側柱列の芯芯で西より2.77ｍ＋2.72ｍ＋2.73ｍ＋2.71ｍ，南側柱列が2.68ｍ＋2.91ｍ＋2.61ｍ＋2.81ｍ，東妻では北より2.90ｍ＋2.71ｍ，西妻では(カッコ内は柱穴の中央からの値)(2.63ｍ)＋(2.98ｍ)を測る。したがって梁行きは９～9.5尺，桁行きは９尺の等間隔となる。廂を支える柱列は，北から(2.75ｍ)＋(2.91ｍ)で９～9.5尺となる。また西側柱列と廂を支える柱列との間隔は北から2.20ｍ＋(1.98ｍ)＋2.19ｍで７尺となる。

まとめ

遺物は掘形埋土・柱痕から土師器・須恵器の小片が出土している。

12号建物跡は，身舎が桁行き４間・梁行き２間の東西棟で，西側には間仕切りまたは廂が付くものと考えられる。時期については平安時代(９世紀代)と考えられる。　(香内)

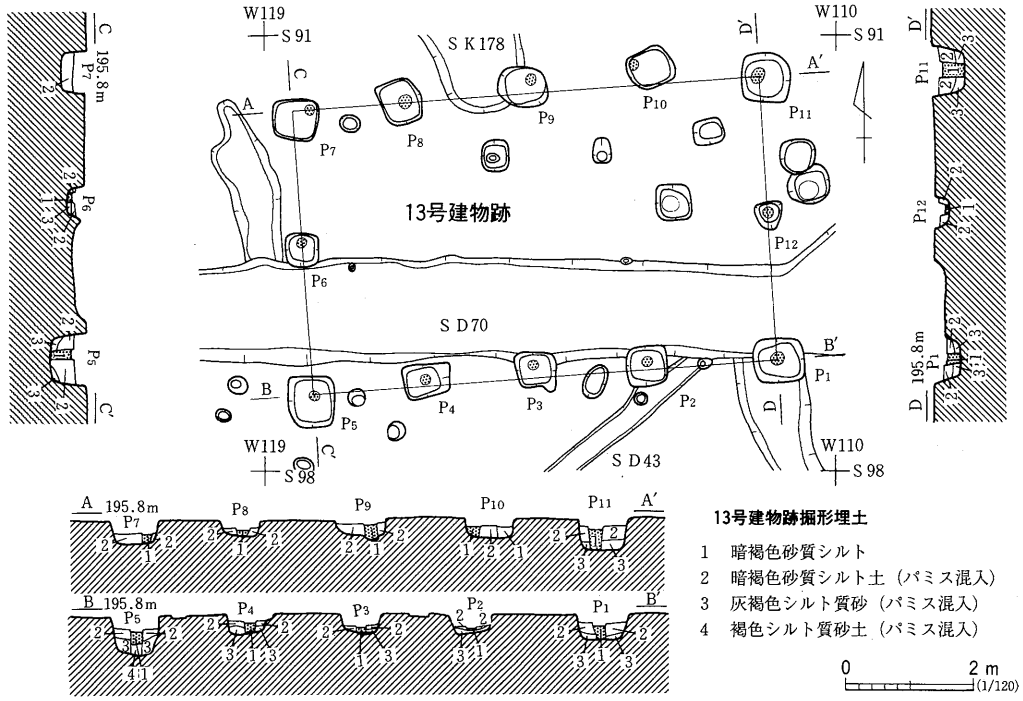
13号建物跡　ＳＢ13

遺　構　(第42図)

13号建物跡は，Ⅴ区北側の中央，Ｄ－６グリッドに位置している。検出面は他の遺構と同様，ＬⅢ上面である。

13号建物跡は，12号建物跡，70・43号溝跡，178号土坑と重複関係にある。13号建物跡の柱穴が178号土坑，および43号溝跡を切っており，70号溝跡に13号建物跡の柱穴が切られている。13号建物跡は，北東部で12号建物跡の南西部と重複しており，その方位も近似しているが，柱穴間の切り合い関係が見られない。これからその新旧関係は決めることはできない。

建物のプランは梁行き２間，桁行き４間の東西棟であり，方位はＮ－27°－Ｅを指す。柱穴の



第42図　13号建物跡

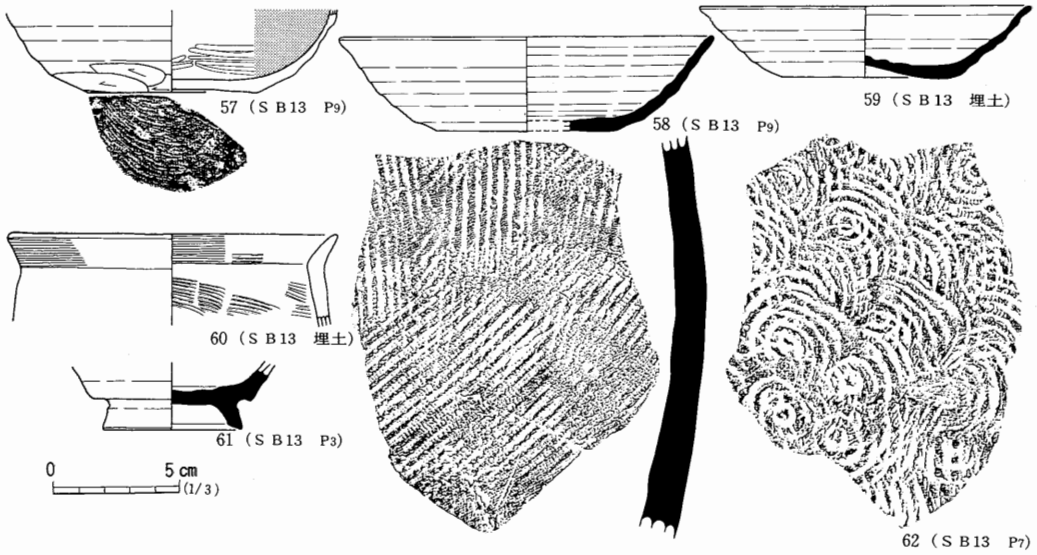
掘形のうち特に四隅はやや大きく，82cm×74cm～74cm×69cmのほぼ長方形を呈し，深さは61～40cmである。他の柱穴の掘形は80cm×77cm～45cm×36cmのほぼ長方形を呈し，深さは24～37cmである。柱痕は直径18～22cmの円形であり，Ｐ２を除きすべて掘形の底面まで達している。柱痕は暗褐色のシルト質土又は粘質土である。掘形埋土は１層ないしは２層に分けられる。主としてパミスを含んだ暗褐色～褐色のシルト質砂土であり，暗褐色の砂質シルトが上部になることがある。柱痕の間隔は，東妻の芯芯で北より2.22m＋2.35m，西妻で2.15m＋2.45m，南側柱列で東より2.04m＋1.79m＋1.74m＋1.80m，北側柱列では1.98m＋1.62m＋2.04m＋1.54mを測る。したがって梁行きは7.5尺＋７尺，桁行きは6.5尺＋６尺＋6.5尺＋6.5尺と考えられる。

第14表　ピット計測表　　単位(cm)

PNo	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
長軸	80	65	70	75	82	57	74	72	80	71	80	45
短軸	72	64	56	52	74	52	69	63	62	60	77	36
深さ	42	34	32	33	61	28	40	25	37	34	54	24
柱痕	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有

遺　　物　（第43図）

遺物は，掘形埋土・柱痕から土師器・須恵器の小片が出土している。図示資料では57が土師器の杯で，底部は回転糸切り，体部下部に手持ちヘラケズリ，内部はヘラミガキが施されている。60は土師器の甕で，外面にナデ・ヨコナデ，内面にはハケメ・ヨコナデが施されている。58・59は共に須恵器の杯で，回転ヘラキリ後ナデが施されている。61は須恵器の高台杯である。



第43図　13号建物跡出土遺物

まとめ

13号建物跡は，桁行き４間・梁行き２間の東西棟である。年代については，出土遺物より平安時代と考えられる。（香内）

14号建物跡　ＳＢ14

遺　　構（第45図，図版19）

14号建物跡は，調査区Ⅴ区北側の西部，Ｃ・Ｄ－７・８グリッドに位置している。検出面は他の遺構と同様，ＬⅢ上面である。

この建物は西側の15号建物跡，ならびに南西に位置する16号建物跡と一致した方位をもっている。14号建物跡の西側柱列は15号建物跡の東側柱列とほぼ平行で，その間隔は約１ｍである。建物跡の主軸方位は，Ｎ－89°－Ｗである。また，16号建物跡の北東隅柱とは1.3ｍ離れており，その方位もほぼ一致している。14号建物跡は，柱穴が64号溝跡に切られており，123号溝跡を切っている。建物のプランは，梁行き３間，桁行き５間であり，東西棟と考えられる。

柱穴の掘形は140㎝×80㎝～42㎝×33㎝の長方形ないしは隅丸の方形を呈し，深さは56～22㎝である。Ｐ１のみ不整な多角形を呈する。Ｐ１・６・13・14には１段の掘り込みがある。柱痕はＰ４・５・９以外すべて検出された。直径は14～27㎝の円形であり，Ｐ２を除きすべて掘形の底面まで達している。柱痕は暗褐色の砂質シルトである。掘形埋土は１層ないしは２層に分けられる。パミスおよび褐色砂の小ブロックが混じった暗褐色～褐色のシルト質砂土が主体となっている。

柱痕の間隔は，東妻の芯芯で北より1.56ｍ＋1.37ｍ＋1.37ｍ，西妻で1.35ｍ＋1.40ｍ＋1.58ｍ，南側柱列遺存部で東より1.31ｍ＋1.47ｍ，北側柱列では同じく遺存部で1.53ｍ＋1.30ｍ＋1.40ｍを測る。また，総長は東妻で4.30ｍ，西妻は4.33ｍ，北側柱列は6.93ｍ，南側柱列は6.88ｍである。したがって梁行きは4.5尺等間隔，桁行きも4.5尺等間隔と考えられる。

第15表　ピット計測表　　単位(cm)

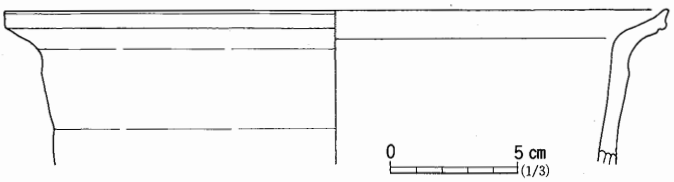
P№	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16
長軸	140	80	95	66	42	72	54	39	56	36	46	44	67	63	78	49
短軸	80	68	72	42	33	61	53	39	53	27	43	35	51	60	60	45
深さ	56	32	29	32	22	41	32	38	24	31	30	25	42	40	40	30
柱痕	有	有	有	無	無	有	有	有	有	無	有	有	有	有	有	有

遺　　物　(第44図)

遺物は掘形埋土・柱痕から土師器・須恵器の小片が出土している。図示資料では63が土師器の甕で，口縁部が外傾している。

まとめ

14号建物跡は３間×５間の東西棟で15号建物跡・16号建物跡とほぼ同時期に機能していたものと考える。年代は平安時代(９世紀代)である。　　(香内)



63（ＳＢ14　Ｐ16）

第44図　14号建物跡出土遺物

15号建物跡　ＳＢ15

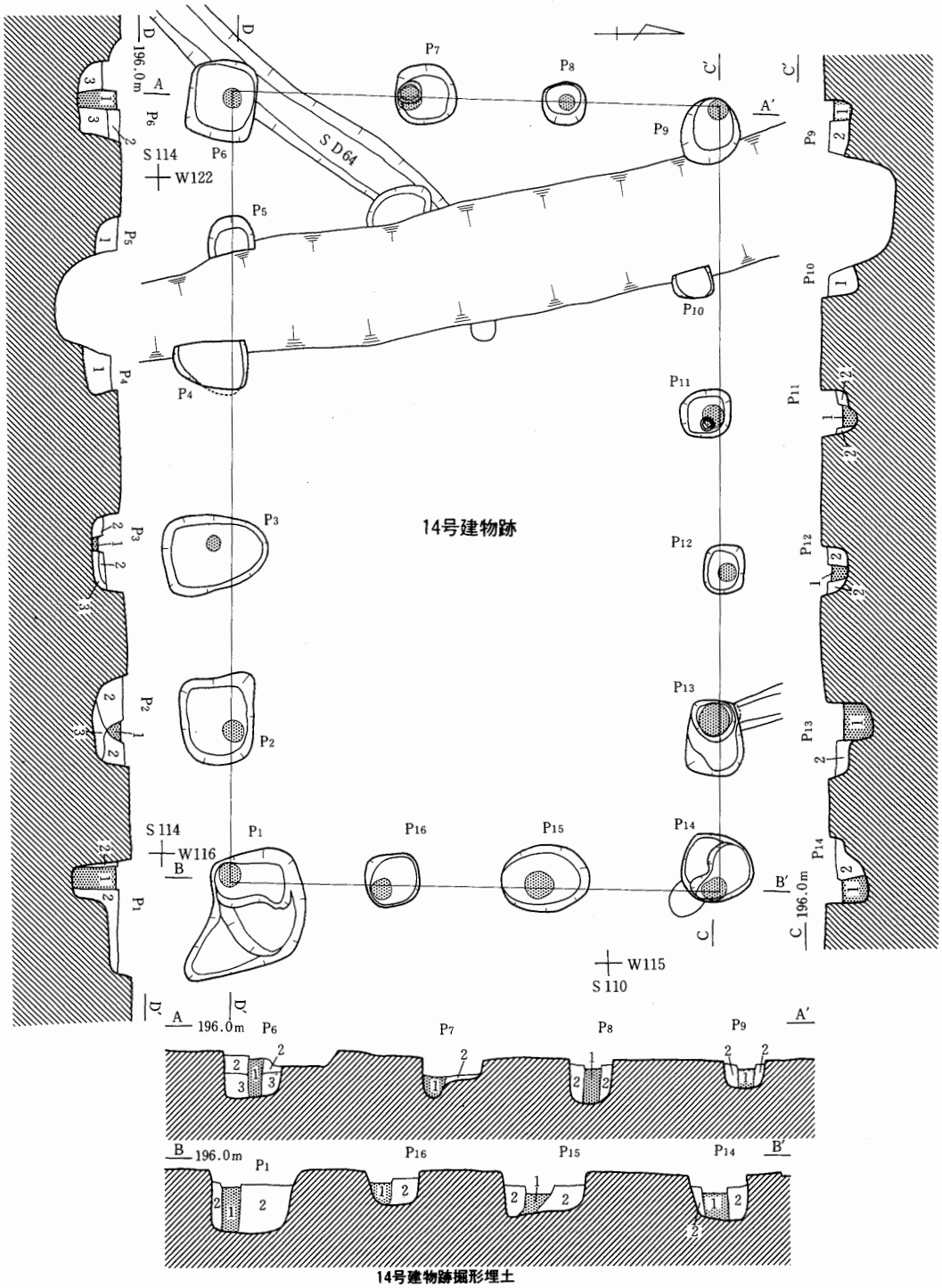
遺　　構　(第46図，図版20)

15号建物跡は，Ⅴ区北側の西部，Ｃ－７・８グリッドに位置している。検出面は他の遺構と同様，ＬⅢ上面である。

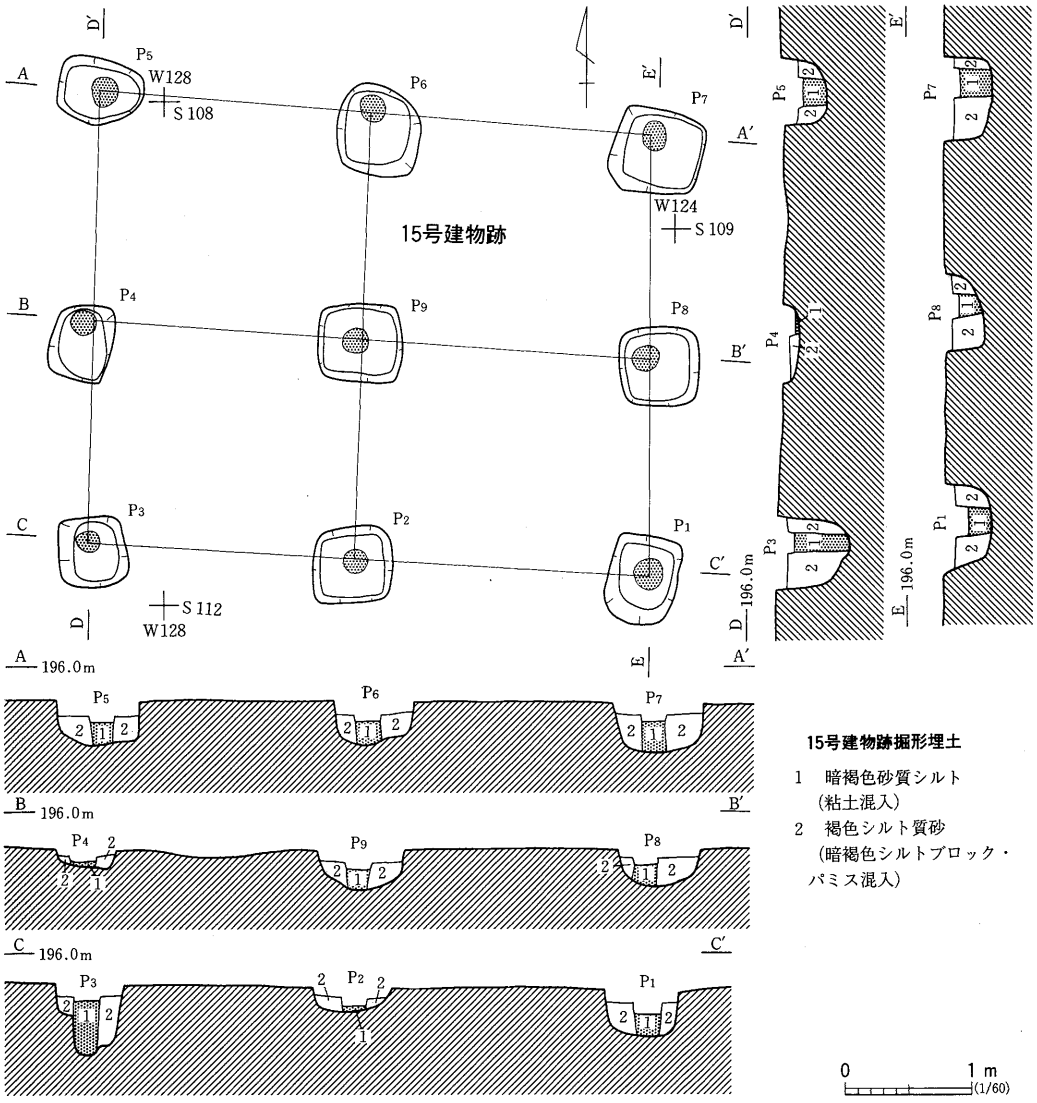
この建物は東側の14号建物跡，ならびに南に位置する16号建物跡と一致した方位をもっている。15号建物跡の東側柱列は，14号建物跡の西側柱列とほぼ平行で，その間隔は１ｍ程度である。15号建物跡の東側柱列は16号建物跡の東側柱列と，15号建物跡の中柱列と16号建物跡の西側柱列はそれぞれ柱筋が通っており，その南側延長上2.1～2.4ｍに位置している。15号建物跡の柱穴が43号溝跡を切っている。

建物のプランは，梁行き３間，桁行き３間の総柱建物である。後述するように東西棟と考えられる。また南側柱列の方位はＮ－87°－Ｗ・東妻でほぼ真北を指す。

柱穴の掘形は，72㎝×68㎝～55㎝×49㎝の方形ないしは長方形を呈し，それらの向きも各柱筋と平行である。深さは16～58㎝である。特に四隅のものは深く36～58㎝となっている。柱痕は直径が18～24㎝の円形であり，すべて掘形の底面まで達している。柱痕は暗褐色の砂質シルトである。掘形埋土は，パミスおよび褐色砂の小ブロックが混じった暗褐色～褐色のシルト質砂土と


14号建物跡
S D64
S 114
W122
W116
W115
S 110
196.0m
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
14号建物跡掘形埋土
1　暗褐色砂質シルト
2　暗褐色シルト質砂（パミス混入）
3　暗褐色シルト質砂（暗褐色シルトブロック混入）
0　1 m
(1/60)

第45図　14号建物跡



第46図　15号建物跡

なっている。

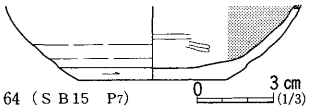
柱痕の間隔は，東妻の芯芯で北より1.75m＋1.70m，中妻で1.85m＋1.74m，西妻で1.84m＋1.74m，南側柱列で東より2.31m＋2.12m，中柱列では2.27m＋2.15m，北側柱列では2.22m＋2.12mを測る。また，総長は東妻で3.45m，西妻は3.58m，北側柱列は4.34m，南側柱列は4.43mである。したがって総長の長い東西方向を桁行きと判断した。したがって梁行きは６尺等間隔，桁行きは７尺又は7.5尺間隔と考えられる。

第16表　ピット計測表　　単位(cm)

P№	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
長軸	72	64	55	62	68	72	70	63	66
短軸	54	60	54	49	52	66	68	62	63
深さ	36	20	58	16	36	36	38	30	33
柱痕	有	有	有	有	有	有	有	有	有

遺　　物（第47図）

遺物は掘形埋土・柱痕から土師器・須恵器の小片が出土している。図示資料では64が土師器の杯で，底部～体部下部にかけて回転ヘラケズリが施されている。



第47図　15号建物跡出土遺物

まとめ

15号建物跡は，３間×３間の総柱建物跡で東西棟である。14号建物跡・16号建物跡も東西棟であり，柱筋の方向もほぼ一致することなどから，これらと同時期に機能した建物と考えられる。年代は平安時代（９世紀代）であろう。（香内）

16号建物跡　ＳＢ16

遺　　構（第48図，図版21）

16号建物跡は，Ⅴ区北側の西部，Ｃ－８グリッドに位置している。検出面は他の遺構と同様，ＬⅢ上面である。

この建物は北側の15号建物跡，ならびに北東に位置する14号建物跡と一致した方位をもっている。16号建物跡の東側柱列は15号建物跡の東側柱列と，16号建物跡の西側柱列は中柱列とそれぞれ柱筋が通っており，その南側延長上2.1～2.4ｍに位置している。また，14号建物跡の南西部とは1.3ｍ離れている。16号建物跡は，柱穴が64号溝跡に切られている。

建物のプランは，梁行き２間，桁行き２間であり，後述するように東西棟と考えておく。また，北側柱列の方位はＮ－81°－Ｗ・東妻でＮ－５°－Ｅを指す。

柱穴は掘形69㎝×60㎝～45㎝×32㎝の長方形ないしは不整な多角形を呈し，深さは34～51㎝である。柱痕は直径15～22㎝の円形であり，Ｐ３・６を除きすべて掘形の底面まで達している。柱痕は暗褐色の砂質シルトである。掘形埋土は１層ないしは２層に分けられる。パミスおよび褐色砂土小ブロックを含んだ暗褐色～褐色のシルト質砂土が主である。

第17表　ピット計測表　単位(㎝)

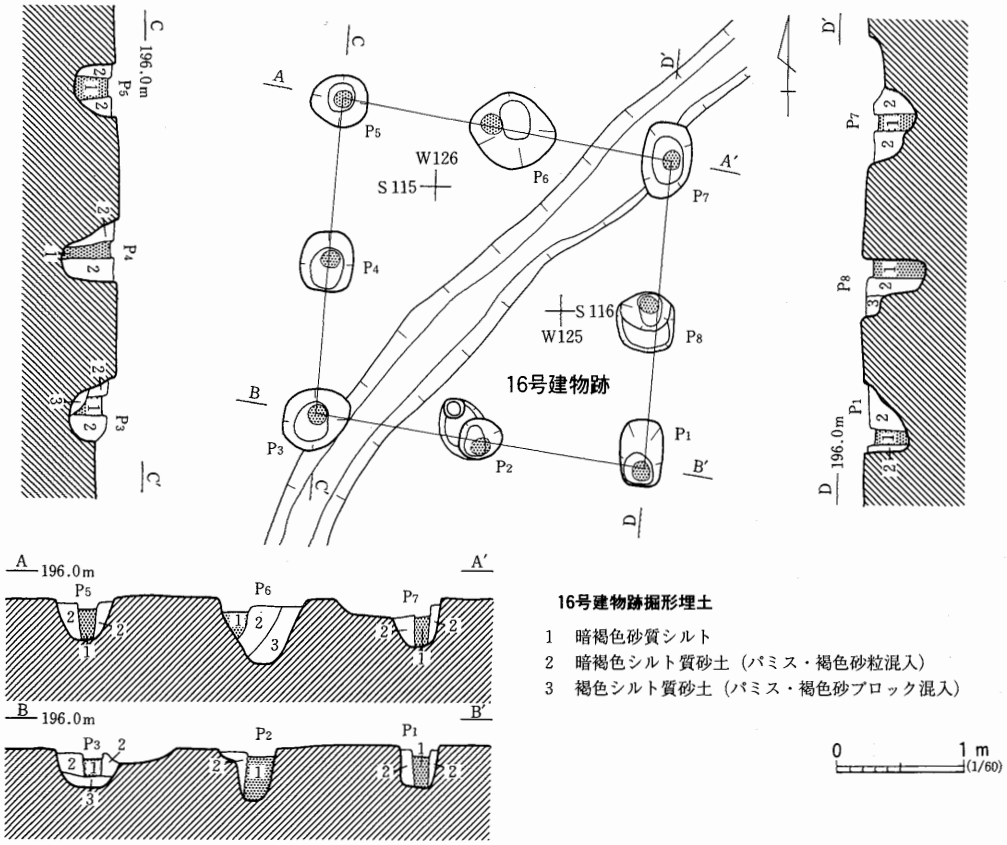
Ｐ№	Ｐ1	Ｐ2	Ｐ3	Ｐ4	Ｐ5	Ｐ6	Ｐ7	Ｐ8
長軸	54	35	57	47	45	69	60	49
短軸	32	37	48	42	43	60	38	44
深さ	35	41	36	46	34	51	38	51
柱痕	有	有	有	有	有	有	有	有

柱痕の間隔は東妻の芯芯で北より1.16ｍ＋1.33ｍ，西妻で1.26ｍ＋1.25ｍ，南側柱列で東より1.26ｍ＋1.36ｍ，北側柱列では1.50ｍ＋1.16ｍを測る。したがって，東妻は総長2.49ｍ，西妻は2.51ｍ，北側柱列は2.66ｍ，南側柱列は2.62ｍであることから，総長の長い東西方向を桁行きと判断した。したがって梁行きは４尺等間隔，桁行きは４～4.5尺と考えられる。

まとめ

遺物は，掘形埋土・柱痕から土師器・須恵器の小片が出土している。

16号建物跡は，２間×２間の東西棟である。隣接する14号建物跡・15号建物跡も柱筋の方向が



第48図　16号建物跡

ほぼ一致し東西棟であることなどから，これらと同時期に，南側に建てられた小規模な建物と考えられる。年代は平安時代（９世紀代）であろう。　（香内）

17号建物跡　ＳＢ17

遺　　構　（第49図，図版22）

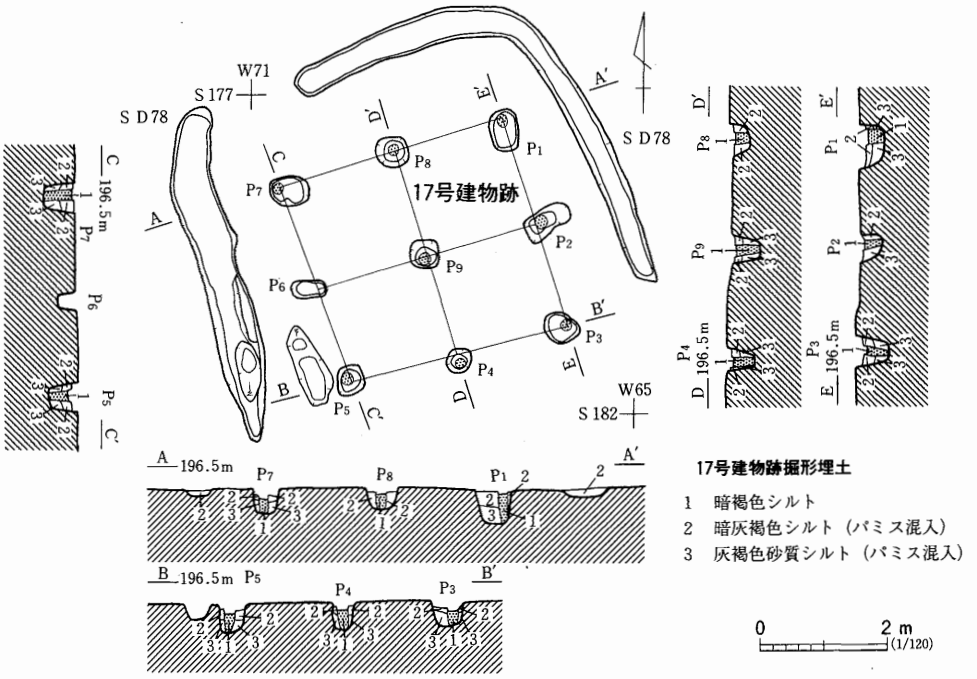
Ⅴ区西側やや南寄りＨ・Ｉ－14・15グリッドで検出した建物跡である。78号溝跡が東・西・北側を囲むように位置している。遺構検出面は，ＬⅢ黄褐色砂質シルトであり，他の遺構との切り合い関係は認められない。

建物のプランは，桁行きとなる東西柱列が２間，梁行きの南北柱列が２間の総柱建物跡であり，主軸線はＮ－17°－Ｗをもつ。

柱穴掘形の規模は，長軸が42～78㎝，短軸が30～49㎝である。平面形は概ね方形といえるが不整方形を呈するもの

第18表　ピット計測表　　単位(cm)

PNo	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
長軸	68	78	57	42	48	58	64	53	47
短軸	46	40	48	39	44	30	49	49	46
深さ	52	36	54	46	48	32	42	30	48
柱痕	有	有	有	有	有	無	有	有	有



第49図　17号建物跡

もある。深さはピット最深部で30～54cmを示す。堆積土は上層が暗灰褐色シルト，下層が灰褐色砂質シルトであり，どちらもパミスを含んでいる。柱痕はＰ６を除き確認でき，Ｐ１が楕円形である以外は円形を呈する。径は16～20cmとほぼ同じ値を示す。柱穴の距離は東柱列で北より1.68ｍ＋1.72ｍ，西柱列で北より1.68ｍ＋1.72ｍ，北柱列で東より1.80ｍ＋1.88ｍ，南柱列で東より1.80ｍ＋1.80ｍを測る。間尺は，桁行きで６尺等間，梁行きで5.7尺等間と考えられ，６尺を基本にして建物が建てられたと考えられる。

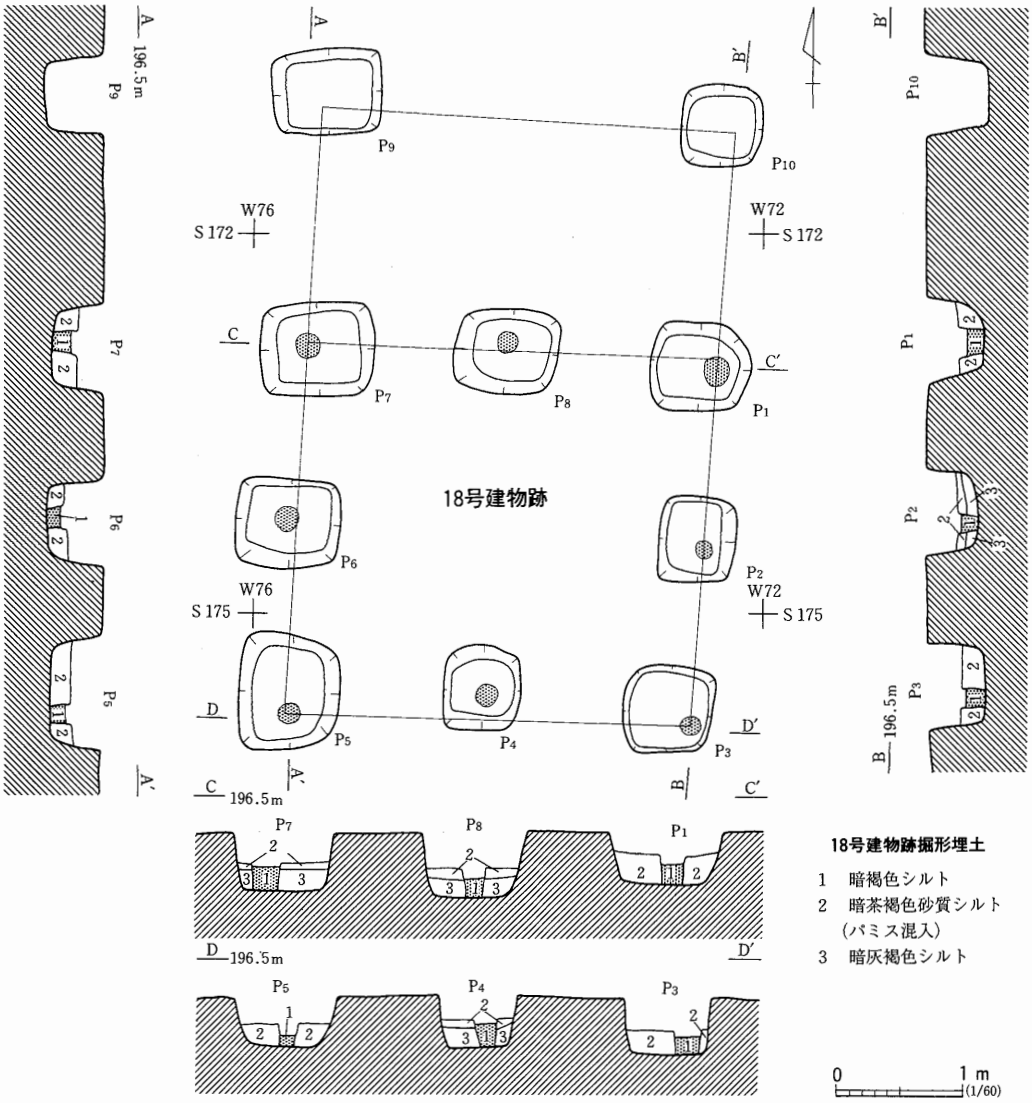
まとめ

各柱穴の掘形埋土・柱痕および78号溝跡はともに，出土遺物は認められなかった。17号建物跡は，南側を除く三方向に溝を巡らしている。同じように溝を巡らしている建物跡として31号建物跡が，他の建物跡には見られない特徴を示しているといえる。溝の役割については，恐らく雨水の排水のために使われたと考えられる。また，北西方向で溝が一端切れるが，これは陸橋と考えるべきであろう。出土遺物がないために明確な判断はできないが，17号建物跡は平安時代（９，10世紀代）に存在したものと思われる。　（伊藤）

18号建物跡　ＳＢ18

遺　　構　（第50図，図版23）

Ⅴ区西側やや南寄りＨ－14グリッドで検出された建物跡である。遺構検出面はＬⅢ黄褐色砂質



第50図　18号建物跡

シルト上面である。周溝をもつ17号建物跡と31号建物跡に南北を挟まれるように位置しており，77号溝跡が約１ｍ西を南北方向に走っている。他の遺構との重複関係は認められなかった。

建物のプランは，南北列が２間で東西列が３間であるが，東西柱列の柱間隔が東柱列で北より1.94ｍ＋1.42ｍ＋1.44ｍ，西柱列で1.94ｍ＋1.40ｍ＋1.52ｍであり，東西柱列の一番北側の柱間隔が２・３番目の柱間隔より長いことから考えて，Ｐ９・10は廂または塀と解釈したい。したがって，桁行き×梁行きが２間×２間の建物跡と考えられる。南北柱列の柱間隔は北側，南側と

第19表　ピット計測表　　単位(cm)

PNo	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
長軸	80	68	71	68	92	84	92	84	87	66
短軸	70	61	69	62	80	72	75	68	69	65
深さ	45	42	46	42	40	45	47	53	47	50
柱痕	有	有	有	有	有	有	有	有	無	無

もに1.6m＋1.6mである。間尺は東西柱列でほぼ5尺等間，南北柱列で5.5尺等間と思われ，5尺を基調に建物が建てられたと考えられる。軸線はN－85°－Wの傾きを持ち，東西方向を向いている。同じ方向を向く建物跡は近接した地域では発見できなかった。

柱穴掘形の規模は，長軸が66～92cm，短軸が61～80cmであり，深さは40～50cmを測る。平面形は方形を呈しており，他の建物跡に比べ掘形が大きい。堆積土は上層が暗茶褐色砂質シルト，下層が暗灰褐色シルトであり，どちらもパミスを含んでいる。柱痕はいずれも円形で，直径16～20cmを測る。

まとめ

各柱穴の掘形埋土・柱痕ともに，出土遺物は認められなかった。

18号建物跡は，2間×2間の北面廂建物跡もしくは北面に塀が付属する建物跡と考えられる。出土遺物がなく遺物からの判断はできないが，17・31号建物跡となんらかの関わりがあるものと思われる。（伊藤）

19号建物跡　SB19

遺　構（第51図）

19号建物跡は，V区の中央部西側で検出された。遺構はH－15・H－16グリッドの範囲に位置している。遺構検出面はLⅢ上面である。19号建物跡は，南北2間，東西2間の総柱建物である。切り合い関係では，14号井戸跡・20号建物跡・240号土坑を切っている。

柱穴の掘形は74cm×64cm～110cm×96cmの方形である。柱痕はすべての柱穴で確認されており，その大きさは直径15～28cmである。

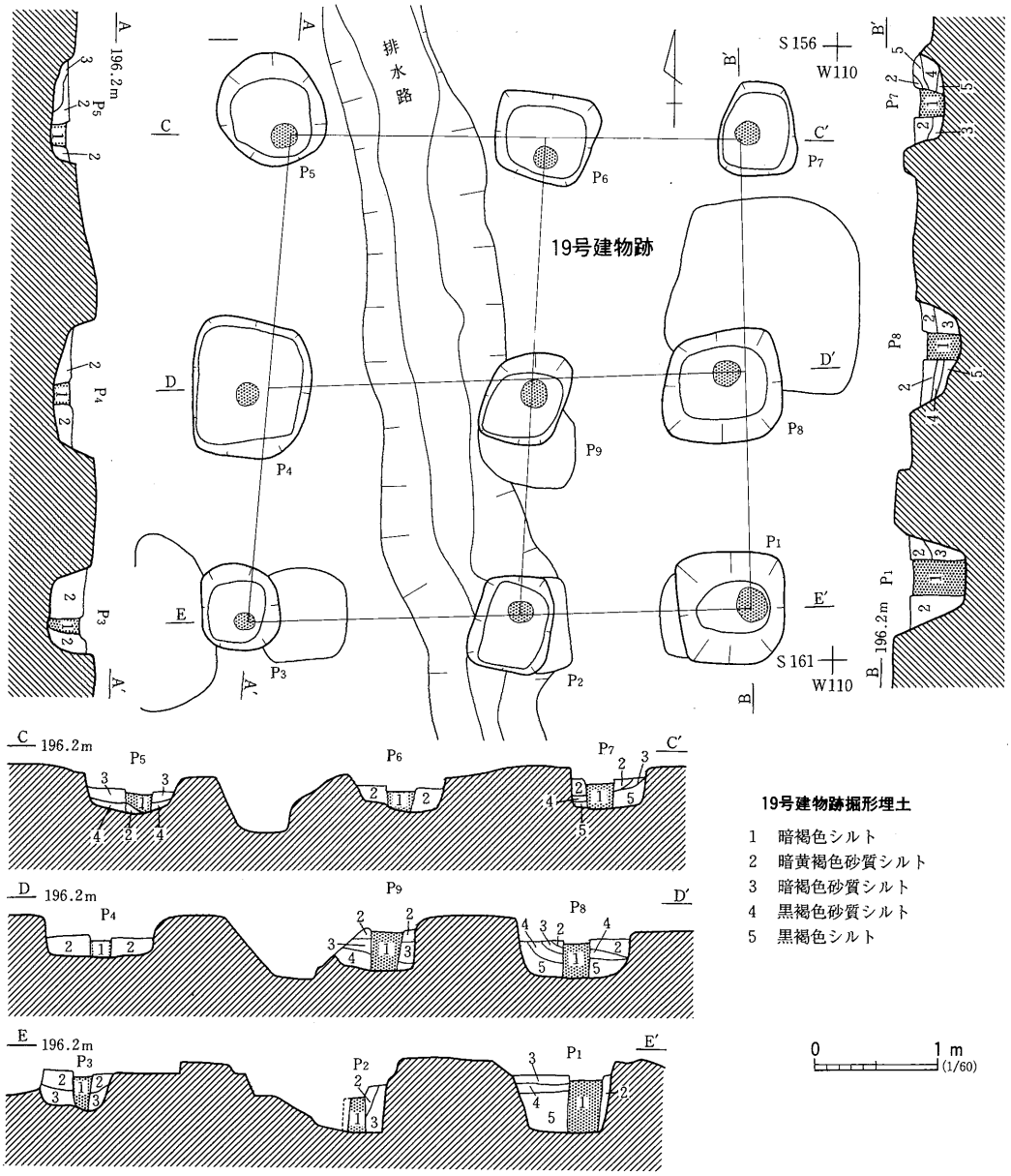
第20表　ピット計測表　単位(cm)

P№	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
長軸	91	84	72	110	92	80	74	97	79
短軸	87	65	64	96	88	69	64	91	64
深さ	60	60	32	34	35	31	34	40	40
柱痕	有	有	有	有	有	有	有	有	有

建物の方位は，東西方向の柱列では，北柱列はN－89.5°－E，南柱列はN－88°－Eである。南北方向の柱列では，西柱列はN－4°－E，東柱列はN－2°－Wである。

各コーナーの柱穴を結んだ線の長さは，北柱列では3.78m，南柱列では4.17m，東柱列では3.85m，西柱列では3.98mで，この線をつないだ形は歪んだ方形となり，桁行きと梁行きがどの方向かは決定することができない。

柱間隔は，東西方向の3本の柱列の北柱列は，西から測って2.14m＋1.64m，中央の柱列は2.37m＋1.96m，南柱列では2.30m＋1.87mである。南北方向の3本の柱列の西柱列では北から測って2.12m＋1.86m，中央の柱列は1.94m＋1.80m，東柱列は1.93m＋1.92mとなり，東西方向では西から1番目の柱間は7～8尺の間で，2番目は5.5～6.5尺の間でバラつきがある。南北方向は北側の柱間は6.5～7尺，南側の柱間は6～6.5尺の間でバラつきがあり，間尺については，



第51図　19号建物跡

確実な数値で説明することは困難であろう。

遺　　物　（第52図）

遺物は，柱穴から土師器・須恵器が出土している。65はＰ３の埋土から出土した須恵器杯である。底部が欠落しており，色調が灰色を呈している。また，体部に「比」の墨書がある。

第52図　19号建物跡出土遺物

まとめ

19号建物跡は，Ｈ－15・16グリッドで検出された南北２間，東西２間の総柱の掘立柱建物跡である。柱痕の芯芯を結んだ線によって描かれる平面形は歪んだ方形となり，桁行きと梁行きの方向を決定することはできなかった。また，間尺についてもバラつきがある。切り合い関係から，本遺構は20号建物跡・23号建物跡・24号建物跡・14号井戸跡よりは新しいといえる。本遺構が機能していた時期は，14号井戸跡の埋土から出土した須恵器杯が９世紀前半に位置するので，14号井戸跡を切る本遺構はそれ以後の平安時代（９，10世紀代）ということになる。　（中野）

20号建物跡　ＳＢ20

遺　　構（第54図，図版24）

20号建物跡はＶ区中央部西よりＤ－13グリッドのW110～116・Ｓ161～165から検出された掘立柱建物跡である。遺構検出面は暗黄褐色砂質シルトＬⅢの上面であるが，中央部を南北に走る最近の用水路に切られ，その壁面から検出された柱穴もある。

20号建物跡周辺は遺構の密集した部分で，東に22～25号建物跡，西に34号建物跡・20号井戸跡，南に21号建物跡・２号柱列，北に19号建物跡・14号井戸跡がある。このうち20号建物跡と重複しているのは19・22・23・24号建物跡・２号柱列であり，19・22号建物跡・２号柱列が20号建物跡を切り，23・24号建物跡が20号建物跡に切られている。さらに，23号建物跡は22・24号建物跡に切られ，19号建物跡と22号建物跡の前後関係は不明である。プランは桁行き４間・梁行き２間の東西棟の建物と考えられるが，南側柱列の東から２本目と３本目が南にずれている。方位は梁方向でＮ－１°－Ｗを指す。

第21表　ピット計測表　単位(cm)

P_{No}	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}
長軸	75	56	78	88	94	90	80	74	80	62	108	88
短軸	76	(22)	(43)	64	78	65	74	70	64	26	91	78
深さ	34	33	41	30	45	47	30	39	68	58	40	36
柱痕	有	無	無	無	有	有	有	有	無	無	有	有

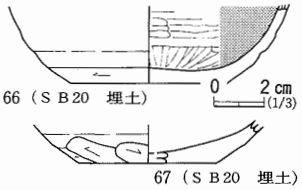
柱穴掘形の完全な形のわかるものは東妻の３基，西妻の南２基，他の遺構に切られてもおおよその形がわかるのは北西隅柱・南北側柱列のそれぞれ西より１間目の２基，他の４基は別の遺構や用水路に大きく切られている。形態の判る柱穴掘形は不整方形～隅丸長方形を呈し，最大のものは北東隅柱のＰ11で108cm×91cm，最小は北側柱列西２番目のＰ８で74cm×70cmを測る。柱痕は東妻・西妻・Ｐ８に残っており，直径12～25cmの円形を呈する。遺構検出面からの深さは30～68cmを測るが，底まで残るものは標高195.7～195.8ｍとなりほぼ一定している。

この建物で柱間隔が明らかなのは東妻と西妻，南北両側柱列の全長および北側柱列の西一間である。柱痕の芯芯間の距離は東妻で南より2.0ｍ＋1.7ｍの3.7ｍ，西妻では2.15ｍ＋1.5ｍの3.65ｍ，南側柱列全長は6.1ｍ，北側柱列では6.25ｍ，北側柱列の西１間であるＰ７～Ｐ８では

1.75ｍを測る。梁行き全長は東西妻それぞれの柱痕内で3.6ｍを取り得るので12尺と考えられ，西妻では南より７尺＋５尺と解釈できるが，東妻では柱痕が中間にあるため，この他６尺等間とも解釈できるが西妻に合わせておきたい。桁行きは両側柱列で共に取り得るのは6.3ｍのみで，全長21尺と解釈できる。また，西１間目は北側柱列より６尺と考えられるので，その東３間は，５尺＋５尺＋５尺の可能性が高い。

遺　　物（第53図）

柱穴掘形埋土中から土師器・須恵器の破片が出土している。土師器杯はすべてロクロ調整・内黒のもので，再調整・切り離し技法は回転ヘラケズリのもの３点，手持ちヘラケズリのもの１点，回転糸切りの後体部下端と底部周縁を回転ヘラケズリしたもの１点(66)，回転糸切りの後体部下端を手持ちヘラケズリした底径の小さなもの１点(67)がある。土師器甕は口縁部にロクロ調整を加えたものと，体部外面にタタキメが見られるものがある。



第53図　20号建物跡出土遺物

まとめ

遺物のうち，須恵器杯は比較的底径が小さく，回転ヘラキリのもの２点がある。土師器杯で回転糸切り＋手持ちヘラケズリで底径の小さいものは９世紀後半頃に出現するもので，ここでは最も新しいと考えられるので建物の年代は９世紀後半かその後と考えられる。（木本）

21号建物跡　ＳＢ21

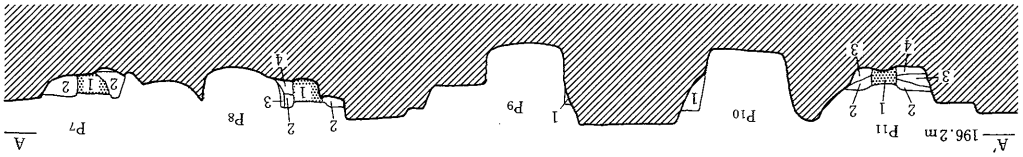
遺　　構（第56図，図版25）

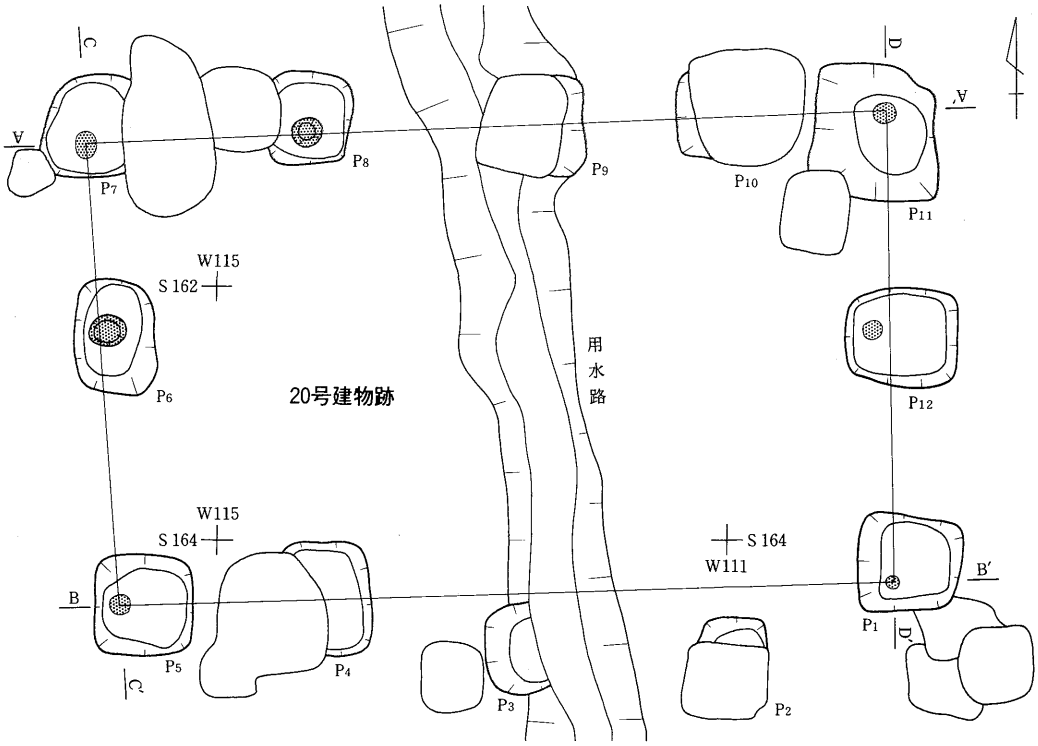
21号建物跡は，Ⅴ区の中央部西側で検出された。遺構はＨ－15・16，Ｇ－15・16グリッドに位置している。遺構検出面はＬⅢの上面である。

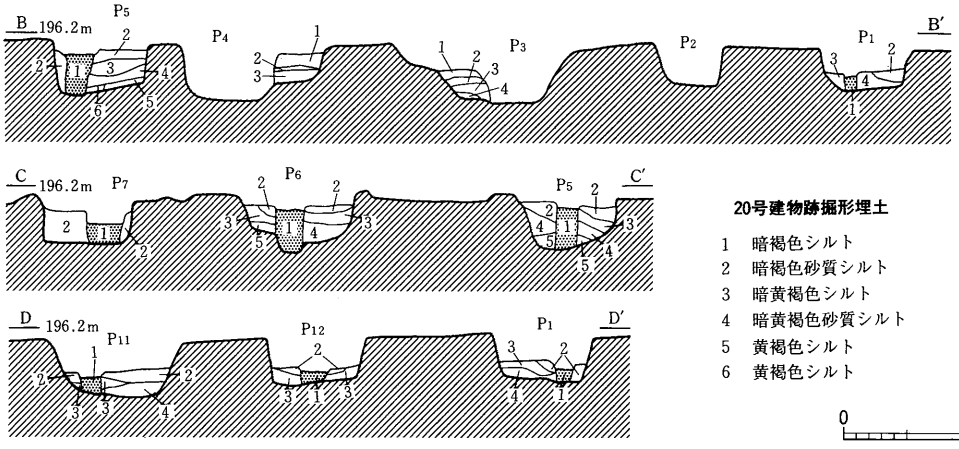
21号建物跡は，９号周溝状遺構・１号柱列を切っているが，167号溝跡に切られている。また，最近まで使用されていた溝によって，西から２列目の南北柱列はほとんど破壊されていた。

建物の規模は，東西３間，南北３間の南北棟の総柱建物である。建物の方位と桁方向は，西側柱列，東側柱列ともにほぼ南北方向に並んでおり，24号建物跡の方位と一致する。また，本建物跡の東側柱列掘形の延長上に，24号建物の西側柱列の掘形が重なる。２棟の建物の距離は柱痕の芯を基準に測って1.9ｍ離れており，この距離は，21号建物跡では２つの柱間の距離である。柱穴の掘形は78㎝×76㎝～108㎝×91㎝の方形である。柱痕は遺存状態のよい柱穴では，ほとんど検出されている。柱痕の大きさは直径20～24㎝である。この建物の四隅の柱穴の柱痕の芯芯間の距離は，西側柱列では6.31ｍ，東側柱列では6.10ｍであり，北妻の長さは5.12ｍ，南妻の長さは5.01ｍである。

柱間の距離は，桁方向では西側柱列で北から測って，2.16ｍ＋2.02ｍ＋2.17ｍ，東側柱列は







20号建物跡掘形埋土

1　暗褐色シルト
2　暗褐色砂質シルト
3　暗黄褐色シルト
4　暗黄褐色砂質シルト
5　黄褐色シルト
6　黄褐色シルト

0　1 m (1/60)

第54図　20号建物跡

2.18m＋1.91m＋1.95m，東から２列目の柱列は2.18m＋1.90m＋2.18mとなる。梁方向は，北妻では3.26m（２間分）＋1.87m，同様に北から２列目は3.06m＋2.06m，３列目は3.22m＋1.95m，南妻は3.0m＋1.51mとなる。間尺はバラつきがあり決定することは困難である。

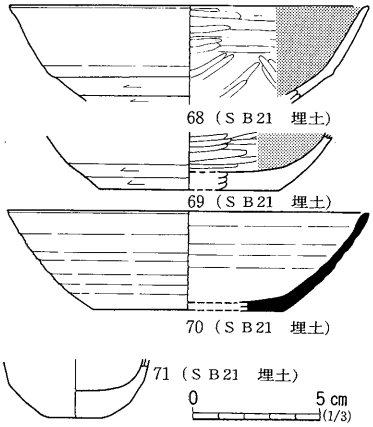
第22表　ピット計測表　　単位(cm)

P№	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14
長軸	90	86	96	90	99	104	109	82	81	93	84	90	84	78
短軸	78	80	(48)	80	84	91	78	(20)	79	90	72	78	70	76
深さ	64	51	49	63	51	54	68	64	65	61	57	65	59	48
柱痕	無	有	無	有	有	有	有	無	有	有	有	有	有	有

桁方向の柱間隔をみると，北から２番目の柱間，つまり中央の柱間はその両側の柱間よりやや狭く，北側の柱間は測定不可能な西から２列目を除いて，３列ともほぼ同じ距離の2.16～2.18mである。桁方向中央部の柱間では，東端と東から２列目の柱間隔がそれぞれ1.91cmと1.90cmで，桁方向北側の柱間の西端と東側から２列目は，それぞれ2.17mと2.18mでほぼ同じ間隔の柱間を持つ。しかし，建物全体はやや歪んでいるため，すべての柱間隔が同じにはならない。

遺　　物（第55図）

遺物は柱穴の埋土から出土した４点を図示した。土師器杯２点，土師器の小型土器が１点，須恵器杯が１点である。69は土師器の杯でP11の埋土から出土している。外面の底部および体部下端の調整は回転ヘラケズリである。内面はヘラミガキにより調整され，黒色処理が施されている。68の土師器杯は，外面の調整が回転ヘラケズリ，内面はヘラミガキで黒色処理が施されている。71は土師器の小型土器である。70は須恵器杯で，底部の切り離しは回転ヘラキリである。



第55図　21号建物跡出土遺物

まとめ

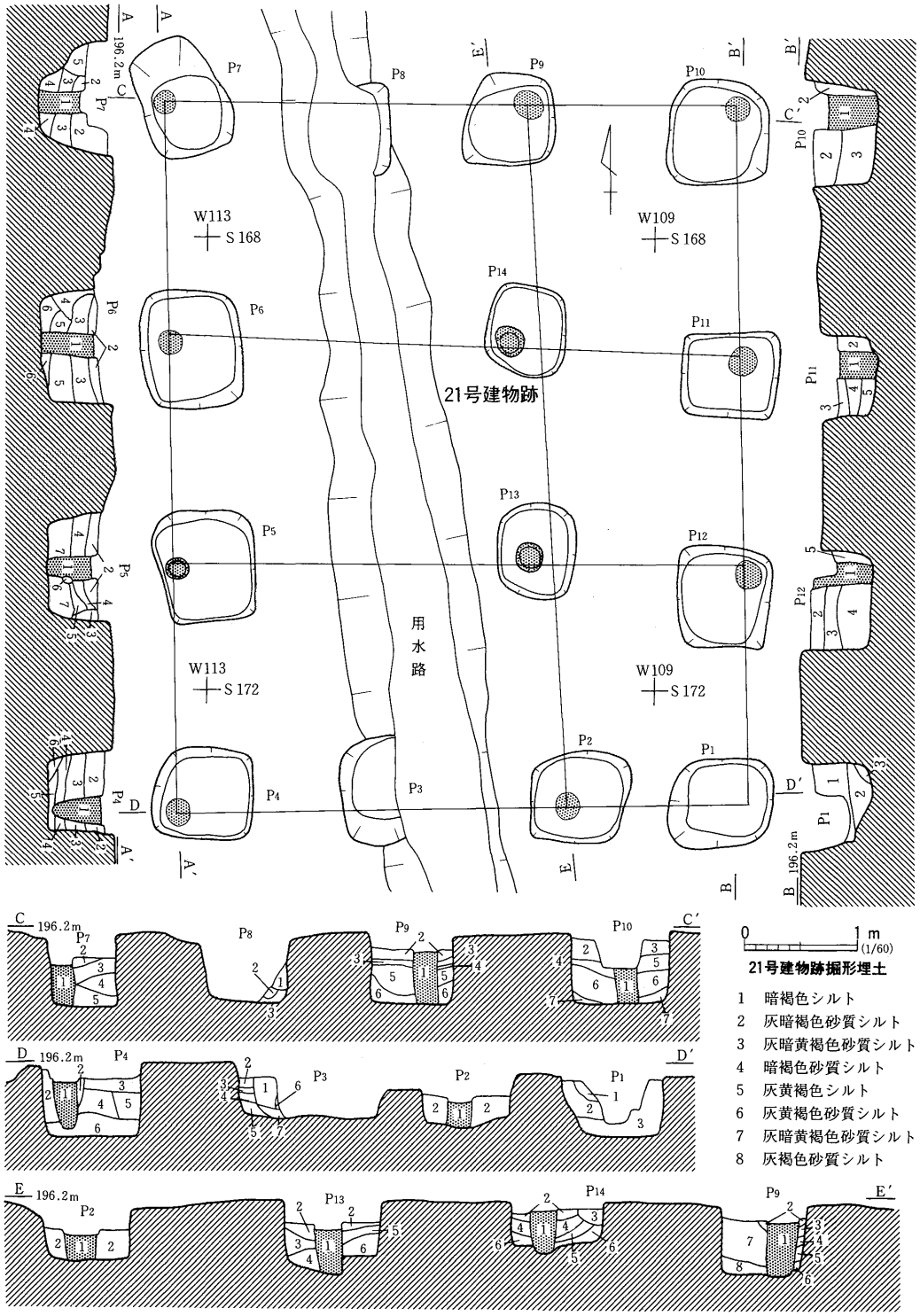
本遺構は南北３間，東西３間の南北棟の総柱の建物跡である。方位は正確に南北方向に並ぶ。また，24号建物跡の方位と一致し，距離も１間分離れている。間尺は柱間の距離にバラつきがあり，決定できない。柱穴の埋土から出土した土器は９世紀前半に属するので，本建物が機能していた時期はそれ以後の平安時代（９，10世紀）になる。　（中野）

22号建物跡　S B22

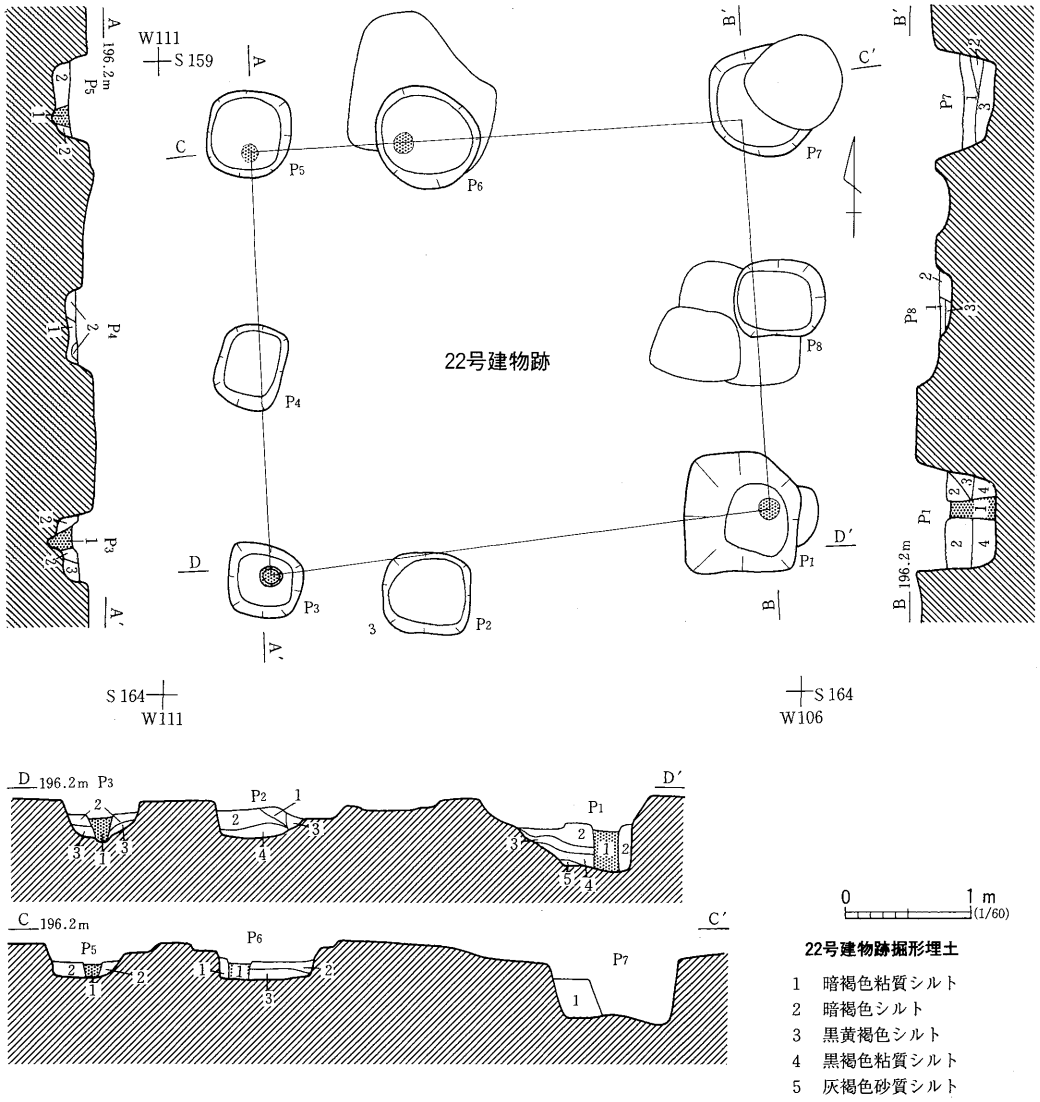
遺　　構（第57図）

22号建物跡は，Ⅴ区の中央部西側で検出された。遺構はG－15・16，H－15・16グリッドに位置している。遺構検出面はLⅢの上面である。

22号建物跡は20号建物跡および23号建物跡・24号建物跡の３棟を切っており，これらの建物跡とは重複関係にある。24号建物跡は20号建物跡に切られているので，22号建物跡は24号建物跡よ


21号建物跡
用水路
W113
S 168
W109
S 168
W113
S 172
W109
S 172
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
196.2m
0
1 m
(1/60)
21号建物跡掘形埋土
1　暗褐色シルト
2　灰暗褐色砂質シルト
3　灰暗黄褐色砂質シルト
4　暗褐色砂質シルト
5　灰黄褐色シルト
6　灰黄褐色砂質シルト
7　灰暗黄褐色砂質シルト
8　灰褐色砂質シルト

第56図　21号建物跡



第57図　22号建物跡

りも新しいといえる。

22号建物跡の規模は，東西２間，南北２間である。東西の長さは，南柱列で3.94ｍ，北柱列で4.00ｍ，南北の長さは東柱列で3.20ｍ，西柱列で3.30ｍであり，東西間の長さのほうが南北間より長いので，桁行き２間，梁行き２間の東西棟の建物ということになる。柱痕の芯芯を結んで得られる平面形はやや歪んでおり，東柱列はＮ－2.5°－Ｗ，西柱列はＮ－１°－Ｗを指している。また，南柱列はＮ－83°－Ｅ，北柱列はＮ－84.5°－Ｅを指している。

柱穴の掘形は，60㎝×56㎝～108㎝×90㎝の方形を呈している。８基の柱穴のうち，柱痕が確認されているのは４基である。柱痕の大きさは12～18㎝で，その間隔は，北側柱列で西から1.2ｍ

＋2.80ｍ，南側柱列では1.40ｍ＋2.54ｍ，西妻で北から1.65ｍ＋1.65ｍ，東妻は1.58ｍ＋1.63ｍである。Ｐ２のように柱痕が柱筋からずれるものもある。間尺は，桁行きには規則性がないため不明であるが，梁行きは5.5尺＋5.5尺と考えられる。

第23表　ピット計測表　単位(cm)

Pｎｏ	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
長軸	108	75	60	68	70	82	84	70
短軸	90	66	56	52	68	80	74	58
深さ	64	30	30	22	30	28	42	12
柱痕	有	無	有	無	有	有	無	無

まとめ

遺物として土師器・須恵器の小片が10数点出土しているが図示しうるものはない。本建物跡はＧ－15・16，Ｈ－15・16で検出された，桁行き２間，梁行き２間の東西棟の建物である。間尺は，桁行きは不明であるが，梁行きは5.5尺＋5.5尺であろう。切り合い関係から23号建物跡・24号建物跡より新しく，20号建物跡よりは古いことがわかる。したがって９世紀前半以降の平安時代ということはできる。（中野）

23号建物跡　ＳＢ23

遺　　構（第58図）

23号建物跡はⅤ区中央やや西寄りのＥ－12・13グリッド，Ｗ104～109・Ｓ157～161から検出された掘立柱建物跡である。遺構検出面はパミスを含む暗黄褐色砂質シルトのＬⅢ上面である。

この付近は遺構が密集しており，他に20・22・24・25号建物跡が重複している。そして，23号建物跡は20・22・24号建物跡に切られ，24号建物跡は20号建物跡に切られ，20号建物跡は22号建物跡に切られている。したがって遺構の変遷順序は23号建物跡→24号建物跡→20号建物跡→22号建物跡となる。25号建物跡は重複しているが直接の切り合いが無いため前後関係は不明である。

プランは桁行き２間・梁行き２間の東西棟であるが，南西・北西の隅柱・北側柱列の中柱は全面が切られており検出出来なかった。また，全体で掘形の間隔が東西方向に長いため東西を桁方向とした。方位は柱痕が検出されたのが北東隅柱のみなので，正確なところは不明であるが，柱穴の配置からしてＮ－２°－Ｅ～Ｎ－７°－Ｅと考えられる。

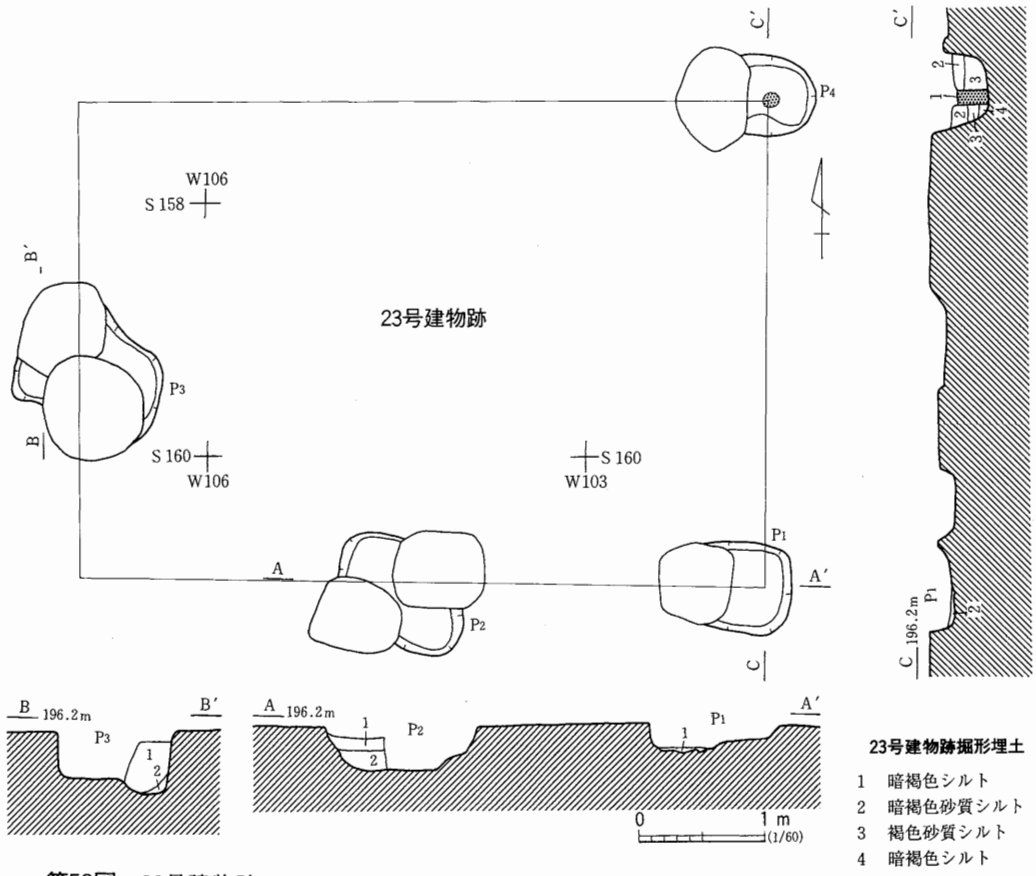
柱間隔も柱痕が北東隅柱１ヵ所のため不明であるが，東妻では3.6～4.2ｍ，東西柱列では4.9～5.7ｍを取り得る。また，北東隅柱の柱痕から東妻の各掘形中央までを測ると1.8ｍ＋2.1ｍとなる。1.8ｍ＋1.8ｍも可能であるが，ここから直角に折り返した場合，推定南西隅柱位置からずれてしまう。そこで，梁行きは南から６尺＋７尺と推定される。桁行きは明確な根拠は無いが北東隅柱の柱痕から5.4ｍを取ると，Ｐ３および推定掘形位置のほぼ中央にくるので，９尺等間の可能性が高い。

第24表　ピット計測表　単位(cm)

Pｎｏ	P1	P2	P3	P4
長軸	70	118	118	64
短軸	(49)	61	112	(55)
深さ	24	36	48	32
柱痕	無	無	無	有

まとめ

柱穴内から遺物は出土しなかったが，周辺の遺構の時期より，本建物の作られた年代は，平安



第58図　23号建物跡

時代の９世紀後半～10世紀前半と考えられる。　（木本）

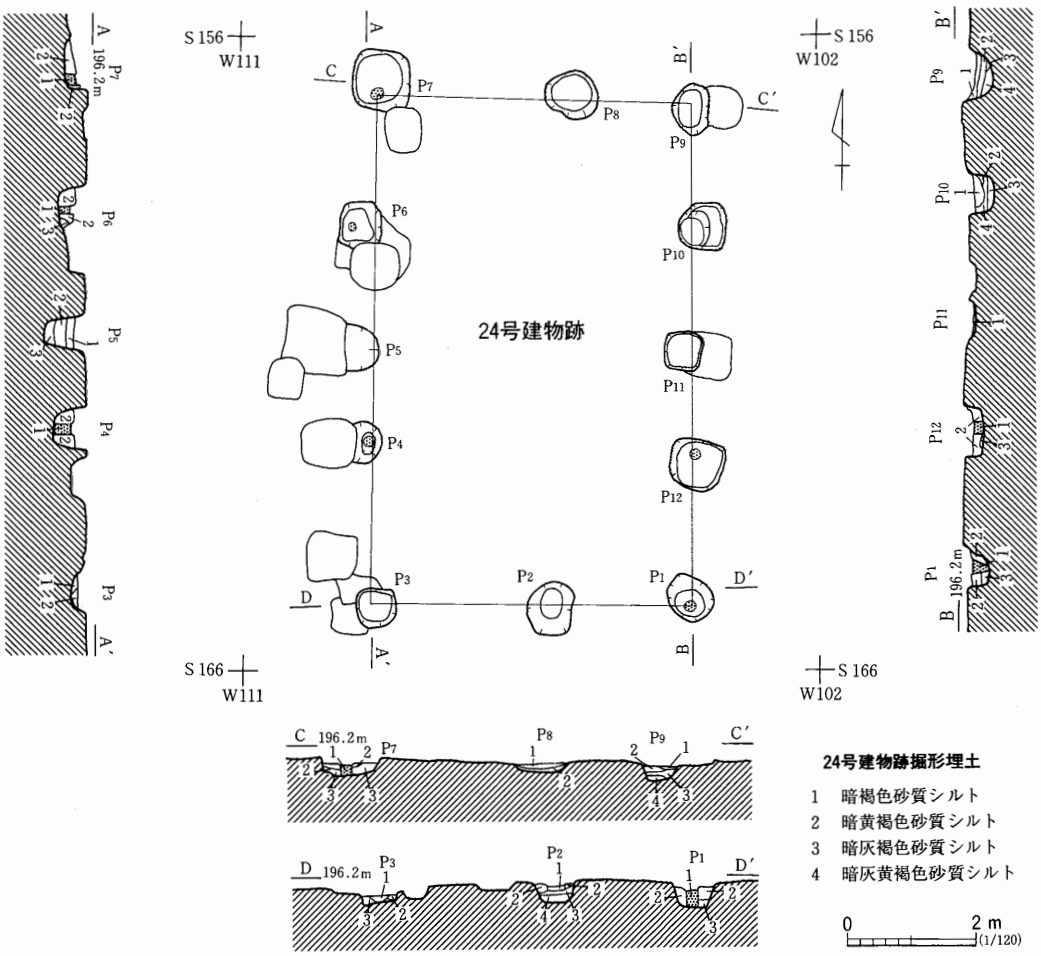
24号建物跡　ＳＢ24

遺　　構　（第59図，図版26）

24号建物跡は，Ⅴ区の中央部西側で検出された掘立柱建物跡である。遺構はＧ－15・16グリッドにまたがるＳ157～165・Ｗ103～110の範囲に位置している。遺構検出面はＬⅢの上面となっている。

また，24号建物跡は22号建物跡・23号建物跡・24号建物跡・25号建物跡と重複関係にあり，切り合いは，24号建物跡は23号建物跡を切っているが，20号建物跡・22号建物跡・２号柱列に切られている。

24号建物跡は，桁行き４間，梁行き２間の南北棟である。建物の方位は，桁行きはほぼ南北方向に平行し，梁行きもほぼ東西方向に一致する。また，21号建物跡と方位は一致し，21号建物跡の東柱列の掘形の間隔で，24号建物跡の西側柱列の掘形が重なるので，ほぼ同時期に建っていた



第59図　24号建物跡

と見ることができよう。

柱穴の掘形は，60㎝×56㎝～86㎝×76㎝の方形または不整隅丸方形である。12基の柱穴のうち，柱痕が確認されたのは5基のみである。柱痕の大きさは14～18㎝である。柱痕間の距離は東側柱列では，北から測って1.98m＋1.90m＋1.60m＋2.40mとなる。西側柱列は同様に測って2.06m＋1.95m＋1.45m＋2.48mである。したがって，桁側の間尺に規則性はないが，東西側柱列のそれぞれ対応しあう柱穴の間隔は，比較的近接した数値となる。P6のように柱筋から外れるものもある。梁行きは南妻で西から測って2.80m＋2.00mとなり，間尺ははっきりしない。北妻は同様に測って3.03m＋1.86mとなり，間尺は10尺＋6尺であろう。南妻と同じように西側の柱穴の間隔の方が，東側の柱穴の間隔より長くなっている。

第25表　ピット計測表　　単位(㎝)

P№	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
長軸	80	84	61	68	72	74	96	86	82	74	60	86
短軸	68	72	60	(42)	(52)	64	90	76	56	73	56	86
深さ	39	36	20	55	68	44	28	18	38	46	14	32
柱痕	有	無	無	有	無	有	有	無	無	無	無	有

遺　　物

柱穴の埋土から土師器小片が10数点と，須恵器小片が数点出土しているが，図示できるようなものはない。

まとめ

本建物跡はＧ－15・16グリッドから検出された掘立柱建物跡で，規模は桁行き４間，梁行き２間の南北棟である。本建物は，21号建物跡と方位が一致しており，距離も21号建物跡の１間分北にあり，ほぼ同じ時期に建っていたと見れば９世紀後半～10世紀といえよう。　（中野）

25号建物跡　ＳＢ25

遺　　構（第60図）

25号建物跡はⅤ区の中央部西側で検出された。遺構はＧ－15・16グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢの上面である。他の遺構との関係は，22号建物跡・23号建物跡・24号建物跡・167号溝跡・248号土坑・249号土坑・250号土坑・310号土坑・319号土坑・334号土坑・336号土坑と重複関係にある。このうち，切り合い関係は，25号建物跡は248号土坑・249号土坑・250号土坑・310号土坑を切っており，167号溝跡に切られている。しかし，他の掘立柱建物跡とは切り合い関係がない。

25号建物跡は，南北５間，東西２間の南北棟である。建物の方位は，桁行きがほぼ南北方向を指し，西側柱列はＮ－0.5°－Ｗ，東側柱列はＮ－１°－Ｗである。梁行きは南妻でＮ－88.5°－Ｗを指し，北妻ではＮ－86°－Ｗを指す。

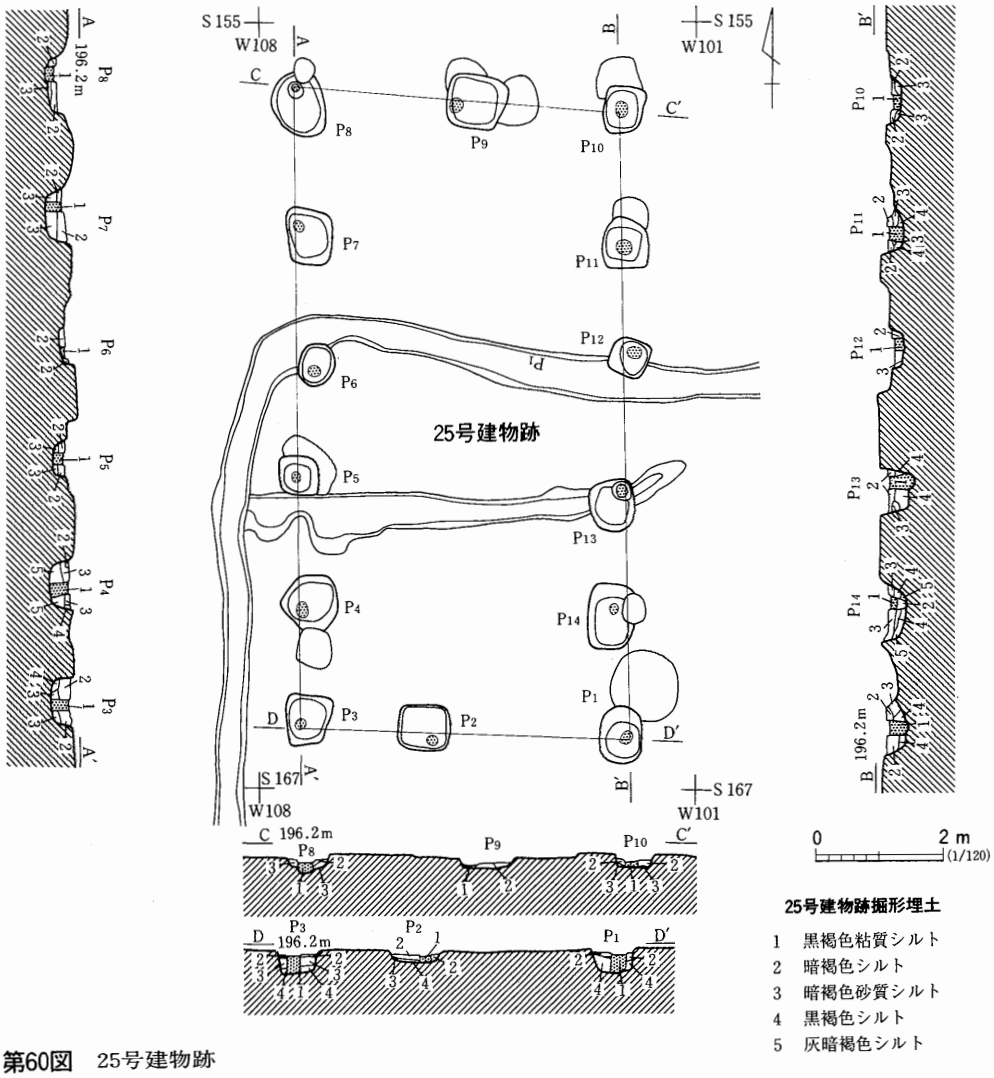
柱穴の掘形は，64㎝×62㎝～104㎝×83㎝の方形または不整隅丸方形である。柱痕はすべての柱穴で確認されており，その直径は18～26㎝である。柱痕間の距離は桁行きでは，西側柱列は北から測って2.16ｍ＋2.18ｍ＋1.54ｍ＋2.08ｍ＋2.02ｍとなり，東側柱列では同様に2.08ｍ＋1.66ｍ＋1.81ｍ＋1.86ｍ＋2.03ｍである。したがって，間尺は，西側柱列では北から７尺＋７尺＋５尺＋７尺＋７尺，東側柱列では７尺＋5.5尺＋６尺＋６尺＋７尺と考えられる。梁行きは，南妻で西から測って2.13ｍ＋3.17ｍ，北妻では2.63ｍ＋2.56ｍとなり，したがって，間尺は南妻では７尺＋10.5尺，北妻では8.5尺＋8.5尺と考えられる。

第26表　ピット計測表　　単位(cm)

Pﾅﾝﾊﾞｰ	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14
長軸	90	84	82	94	64	70	87	104	93	72	82	65	80	106
短軸	68	70	72	90	62	57	70	83	83	64	74	61	70	72
深さ	44	24	40	41	42	26	44	34	20	23	39	41	55	41
柱痕	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有

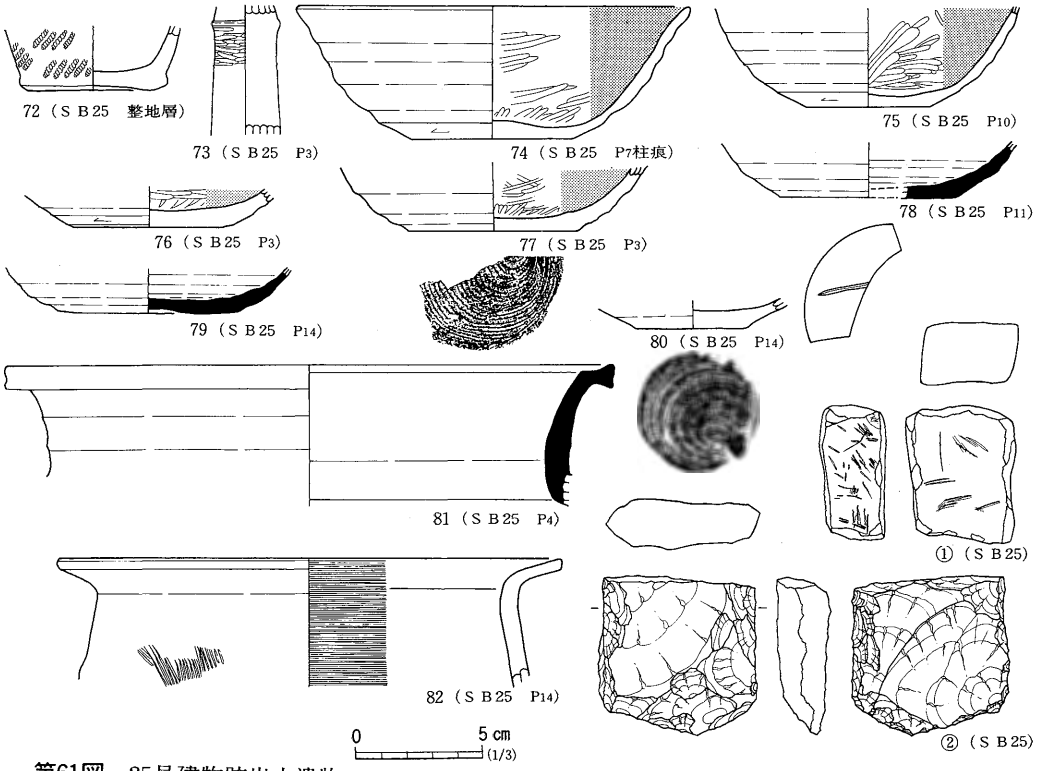
遺　　物（第61図）

遺物には，土師器杯・土師器甕・土師器高杯・支脚と須恵器杯・須恵器甕がある。76の土師器杯はＰ３から出土した。底部から体部下端にかけては回転ヘラケズリ，内面にはヘラミガキによ



第60図　25号建物跡

る調整が施され，黒色処理がなされている。77の土師器杯はＰ３から出土した。底部は回転糸切りによって切り離されている。内面はヘラミガキ調整が施され，黒色処理がなされている。80はＰ14から出土した土師器杯である。底部は回転糸切りによって切り離されている。74の土師器杯はＰ７の柱痕部から出土した。建物が廃絶した後に流れ込んだと思われる。体部はロクロ成形で，体部下端から底部には回転ヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。75はＰ10の埋土から出土した土師器杯である。ロクロ成形である。体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリによる調整が施されている。内面はヘラミガキにより調整され，黒色処理が施されている。83はＰ14から出土した土師器甕である。体部外面はハケメにより調整され，内面はカキメにより調整されている。口縁部は強く外反している。73はＰ３から出土した土師器高杯または支脚である。外面はヘラミガキにより調整されている。81は須恵器甕でＰ４から出土した。



第61図　25号建物跡出土遺物

79はＰ14から出土した須恵器杯である。底部は回転ヘラキリによって切り離されている。78はＰ11から出土した須恵器杯で，底部は回転ヘラキリによって切り離されている。また，①は砥石②は打斧である。

まとめ

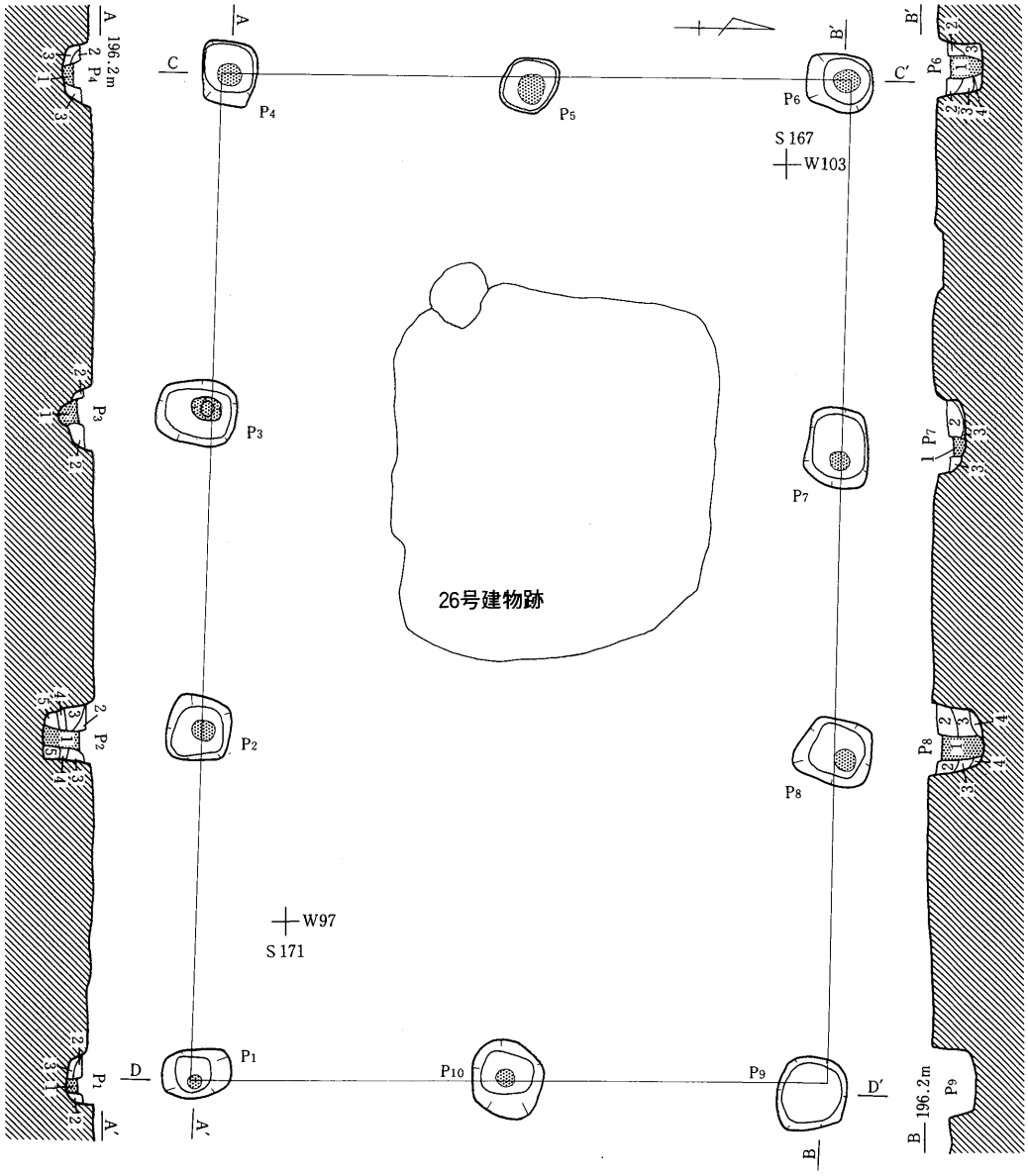
本建物跡は，Ｇ－15・16グリッドで検出された南北５間，東西２間の比較的規模の大きな南北棟の掘立柱建物跡である。建物の桁行きは，ほぼ南北方向を指す。他の掘立柱建物跡との切り合い関係はない。本建物が機能していた時期は，柱穴埋土からの出土遺物からみて，９世紀後半頃ということになろう。（中野）

26号建物跡　ＳＢ26

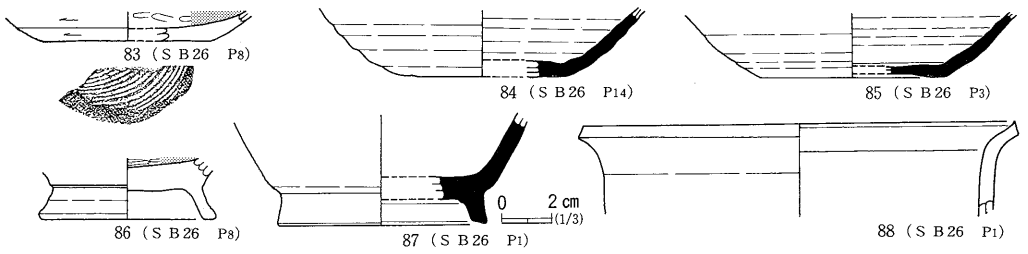
遺　　構（第62図）

26号建物跡は，Ⅴ区の中央部西側で検出された。遺構はＧ－16・17，Ｆ－16・17グリッドに位置している。遺構検出面はＬⅢの上面である。

26号建物跡と切り合っている遺構はないが，５号特殊遺構が建物内に位置している。プランは南北２間，東西３間の東西棟である。建物の方位は梁方向で真北を指す。柱穴の掘形は48cm×44cm


A 196.2m
A
A′
B
B′
B 196.2m
C
C′
C 196.2m
D
D′
D 196.2m
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
S 167
W103
S 171
W97
26号建物跡
0
1 m
(1/60)
26号建物跡掘形埋土
1　黒褐色シルト
2　暗褐色シルト
3　黄褐色砂質シルト
4　褐色砂質シルト
5　黒褐色シルト

第62図　26号建物跡



第63図

～64cm×52cmの隅丸方形～隅丸長方形である。Ｐ９を除き柱穴に柱痕が見られる。柱痕の大きさは，直径11～20cmである。

桁方向での柱間隔は，北側柱列は西から測って3.01ｍ＋2.40ｍ＋2.72ｍであり，南側柱列は同様に2.66ｍ＋2.48ｍ＋2.80ｍとなり，北側柱列の間尺は西から10尺＋８尺＋９尺であろう。南側柱列の間尺はばらつきがあり明確ではない。梁行きは，西妻が北から測って2.47ｍ＋2.40ｍで，東妻は2.44ｍ＋2.46ｍで，西妻・東妻ともに間尺は８尺＋８尺と考えられる。

第27表　ピット計測表　　単位(cm)

Pｎｏ	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
長軸	54	52	64	50	48	53	64	58	60	64
短軸	40	50	52	42	44	46	48	52	55	54
深さ	22	41	28	23	13	38	26	44	34	32
柱痕	有	有	有	有	有	有	有	有	無	有

遺　　物（第63図）

遺物では，83がＰ８から出土した土師器杯である。底部は回転糸切りにより切り離され，体部下端の調整は回転ヘラケズリである。86はＰ８から出土した土師器高台杯である。外面の調整はロクロナデである。内面の調整はヘラミガキで黒色処理が施されている。88はＰ１から出土した土師器甕である。85はＰ３から出土した須恵器杯である。底部は回転ヘラキリで切り離し，ナデで調整している。84はＰ14から出土した須恵器杯である。底部は回転ヘラキリで切り離し，ナデで調整している。87はＰ１から出土した須恵器高台杯である。

まとめ

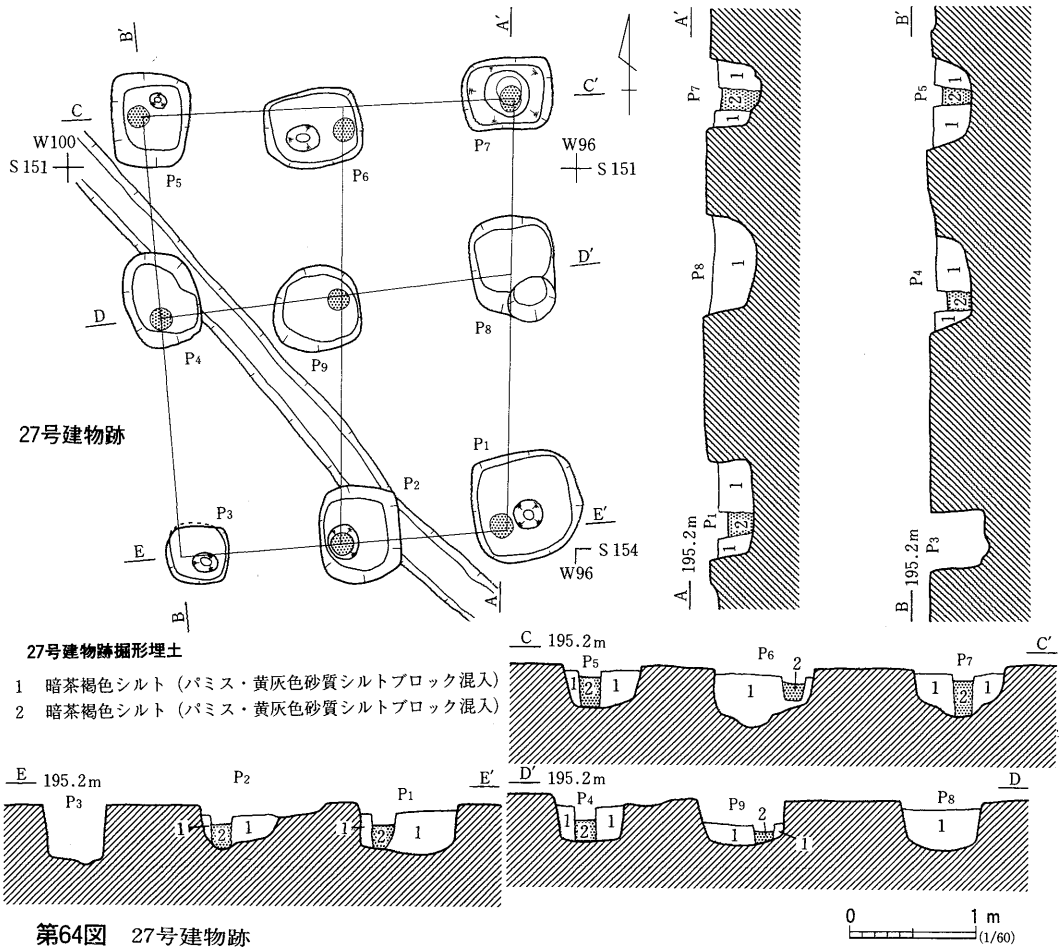
本建物跡は，Ｇ－16・17，Ｆ－16・17グリッドで検出された掘立柱建物跡である。建物の規模は桁行き３間，梁行き２間の東西棟である。他の建物跡との切り合い関係はない。出土した遺物から，本建物が機能していた時期は，９世紀後半と考えられる。（中野）

27号建物跡　ＳＢ27

遺　　構（第64図，図版27）

27号建物跡は，Ⅴ区ほぼ中央のＦ－11・12グリッドに位置している。西側が近世以降の溝に切られている。周辺には，70号溝跡をはさんで東側に11号建物跡が位置し，西側には28～30号建物跡が位置している。遺構検出面はＬⅢ上面である。

建物跡は，桁行き２間，梁行き２間の南北棟の総柱建物である。建物の主軸はＮ－５°－Ｗと



第64図　27号建物跡

なっている。柱穴は，楕円形もしくは隅丸方形を呈するもので，長軸は平均すると75cm前後で，検出面からの深さは，平均すると40cm前後である。柱痕は，７個から検出されており，その径は17cm程となっている。柱穴の埋土は，地山ブロックを混入する暗茶褐色シルトである。柱間隔は，南妻のＰ１柱痕芯とＰ３柱穴間が東より1.28ｍ＋1.29ｍである。北妻では東より1.32ｍ＋1.62ｍである。東側柱列間は北より1.40ｍ＋2.02ｍ，西側柱列間は北より1.60ｍ＋1.90ｍである。また，中柱列は北より1.35ｍ＋1.94ｍである。したがって桁行き５尺＋５尺，梁行き５尺＋6.5尺と考えておきたい。

第28表　ピット計測表　　単位(cm)

Pno	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
長軸	87	77	51	75	75	78	73	82	72
短軸	86	64	46	59	62	63	57	66	72
深さ	31	36	46	37	42	48	42	51	38
柱痕	有	有	無	有	有	有	有	無	有

まとめ

本建物跡から遺物は出土していないが，周辺の遺構との関係から，その時期は平安時代（９世紀代）と考えられる。　（藤谷）

28号建物跡　ＳＢ28

遺　　構　(第65・66図，図版28)

28号建物跡は，Ⅴ区中央のＥ－11・12グリッドに位置しており，29号建物跡と北西側で重複している。29号建物跡の柱穴とはＰ11のごく一部で接しているのみで，遺構の上からその新旧関係を捉えることはできなかった。建物跡周辺には，主軸がほぼ同一な30号建物跡が西側５ｍに位置している。遺構検出面は，建物跡南東側のＰ９～11付近がＬⅡ(黒褐色シルト)下部であった他は，ＬⅢ上面であった。

建物は，桁行き２間，梁行き３間の南北棟の総柱建物である。建物の主軸は，Ｎ－５°－Ｅである。柱穴は，Ｐ12を除き隅丸長方形を呈するもので，周辺にある建物群の中では最も規模の大きいものである。平均するとその長軸は１ｍ，深さは53cmとなる。柱痕はＰ10を除いて検出されており，その径は20cm前後となっている。柱穴の埋土は地山ブロックを多量に混入する暗褐色・暗茶褐色シルト，暗黄灰色砂質シルトである。

第29表　ピット計測表　　単位(cm)

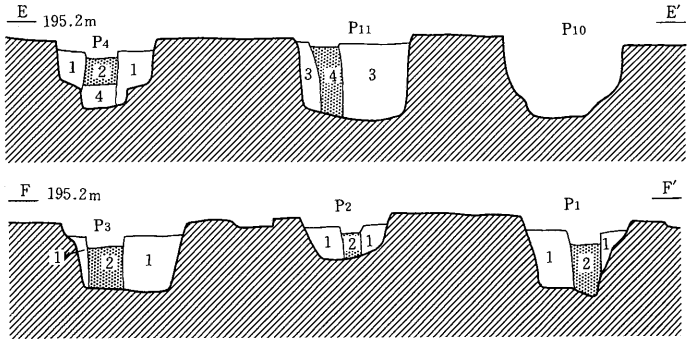
Pﾅﾝﾊﾞｰ	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
長軸	94	68	99	98	98	110	84	120	124	103	127	77
短軸	85	59	83	83	94	102	80	107	106	96	95	73
深さ	63	34	50	53	63	46	44	62	65	69	68	43
柱痕	有	有	有	有	有	有	有	有	有	無	有	有

柱間隔は，南妻の柱痕芯芯で，東より1.85ｍ＋1.96ｍ，同じく北妻では東より1.80ｍ＋1.72ｍである。

また，東側柱列では北より1.82ｍ＋1.92ｍ＋2.79ｍ，西側柱列では北より1.74ｍ＋1.68ｍ＋3.02ｍ，中央柱列では北より1.75ｍ＋2.10ｍ＋2.80ｍである。したがって，柱間寸法は梁行き６尺＋６尺，桁行き６尺＋６尺＋９尺と考えておきたい。

遺　　物　(第67図)

遺物は，柱穴掘形から，土師器杯・甕，須恵器杯・甕の破片が出土している。図示資料では89・90が回転ヘラケズリが施された土師器杯の底部で，90は体部に墨書，底部にヘラ記号がある。また，91は須恵器杯，92は瓶類の底部である。

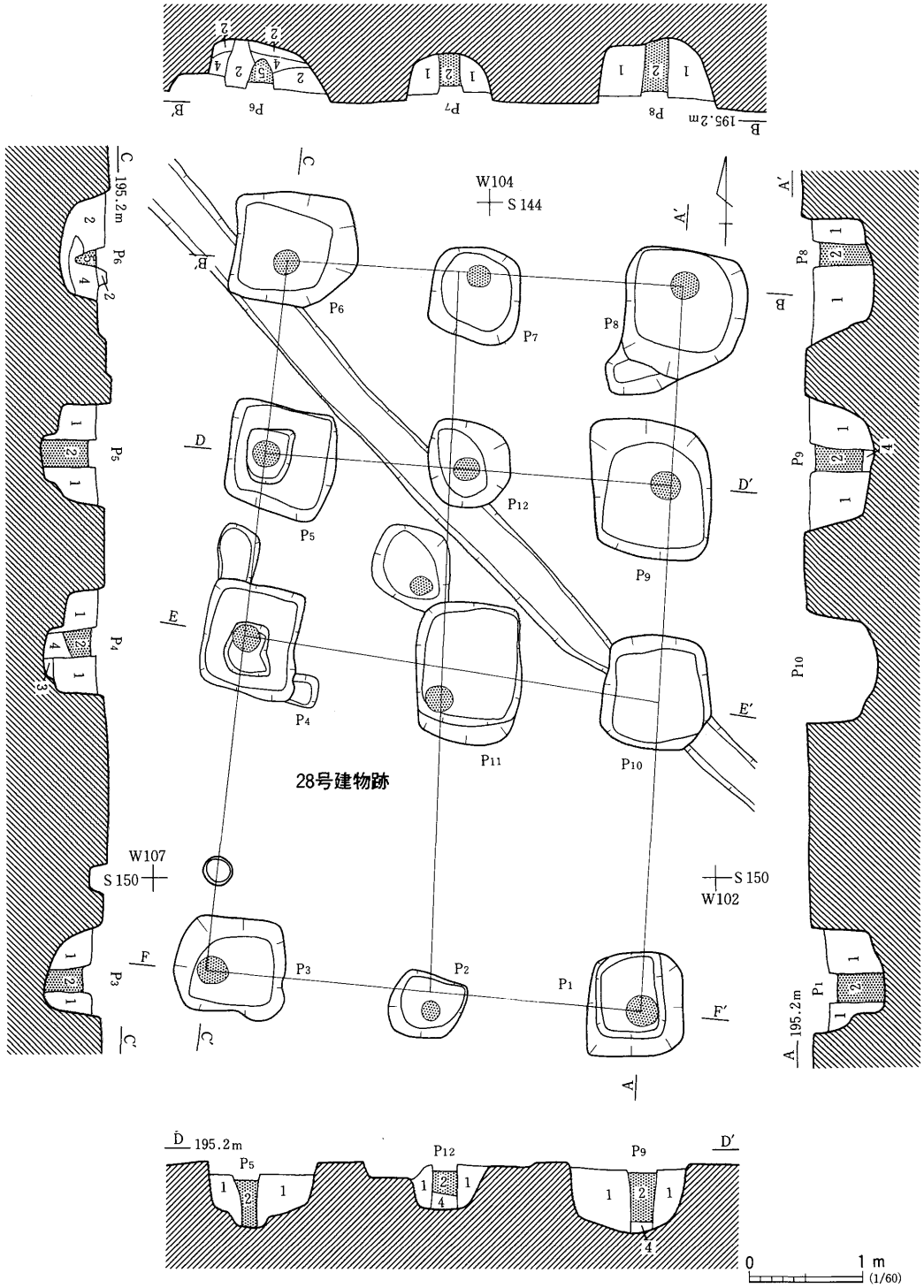


28号建物跡掘形埋土

1　暗褐色シルト（パミス・黒褐色シルトブロック・暗黄灰色砂質シルトブロック混入）
2　暗褐色シルト（パミス・暗黄灰色シルトブロック混入）
3　暗茶褐色シルト（パミス・暗黄灰色砂質シルトブロック混入）
4　暗黄灰色砂質シルト（黒褐色シルトブロック混入）
5　暗褐色シルト（パミス・暗黄灰色砂質シルトブロック混入）

0　1 m
(1/60)

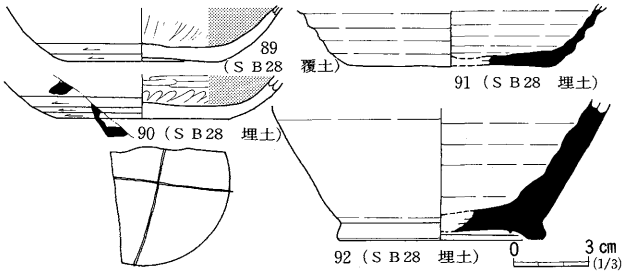
第65図　28号建物跡（１）



第66図　28号建物跡（２）

まとめ

本建物跡は，出土遺物より，その所産年代は平安時代(９世紀代)と考えられる。また，付近に存在する建物群の中では，30号建物跡と主軸方向が一致し，同時期に存在した可能性が高い。また，その性格は，掘形の規模，柱穴の配列から倉庫的なものと考えられる。(藤谷)



第67図　28号建物跡出土遺物

29号建物跡　ＳＢ29

遺　　構　(第69図，図版29)

29号建物跡は，Ⅴ区中央よりやや西側のＥ－11グリッドに位置しており，この南東部で28号建物跡と重複している。新旧関係については，柱穴の重複からは判断できなかった。建物跡の北側には６号井戸跡が，西側には30号建物跡が位置している。遺構検出面は，ＬⅢ上面である。

建物は，東西の桁行き２間，南北の梁行き２間の南北棟建物で南妻中央の柱穴が欠落している。建物の主軸は，Ｎ－２°－Ｅである。柱穴は，楕円形を呈するものがほとんどで，その規模は長軸の平均で74cm，深さ38cmである。柱穴の埋土は地山ブロックを混入する黒褐色シルトと灰褐色砂質シルトである。柱痕は，Ｐ９を除く柱穴から検出されており，その径は，平均17cmである。柱間隔は，南妻の芯芯間が4.34m，北妻が東より2.18m＋2.35m，東側柱列が北より2.03m＋1.89m＋2.07m，西側柱列が北より1.95m＋1.95m＋1.95mとなっている。したがって，柱間隔は梁行き７尺＋７尺，桁行き6.5尺＋6.5尺＋6.5尺と考えられる。

第30表　ピット計測表　　単位(cm)

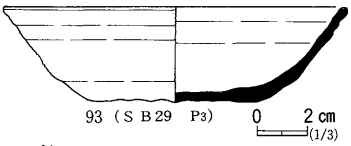
PNo	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
長軸	70	76	64	73	66	66	72	92	70
短軸	70	62	48	67	56	55	67	82	63
深さ	50	50	32	33	39	37	43	41	33
柱痕	有	有	有	有	有	有	有	有	無

遺　　物　(第68図)

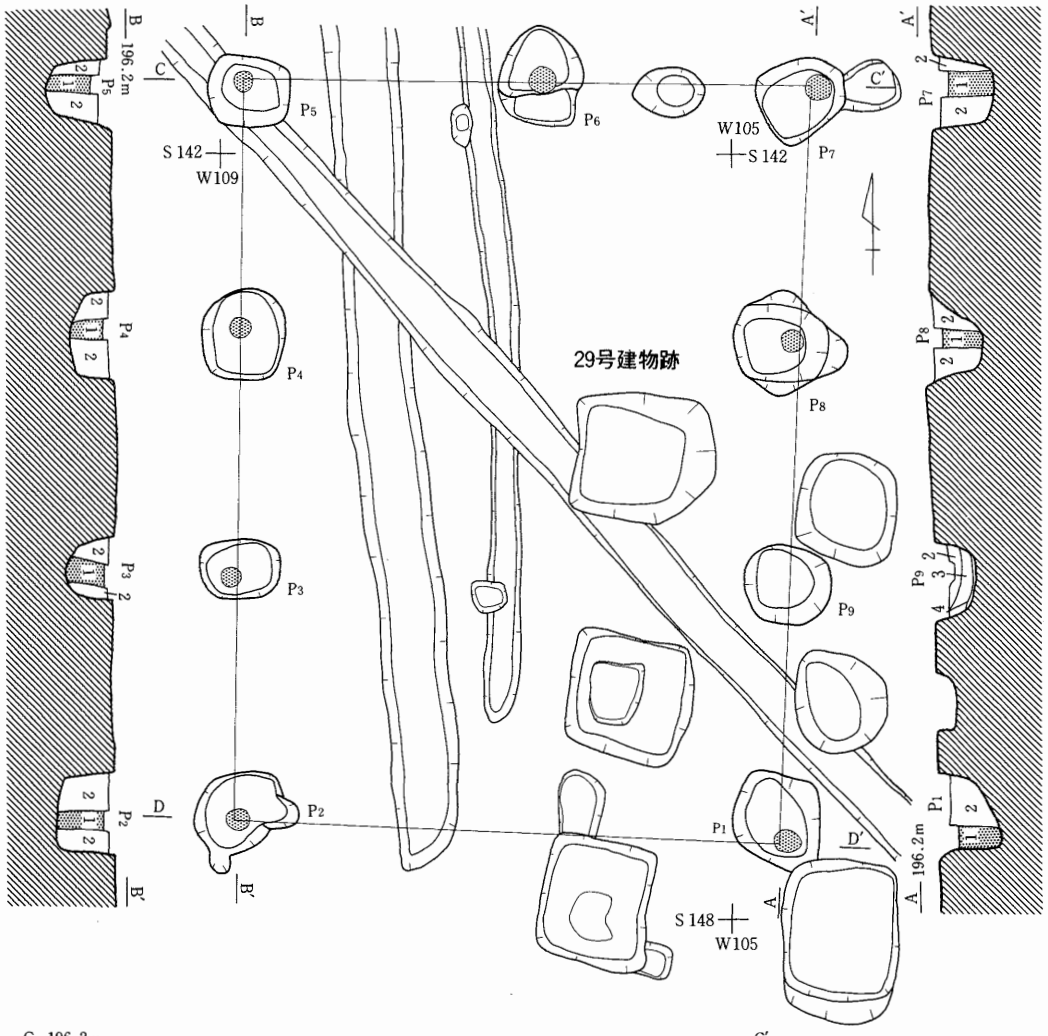
遺物は掘形より，土師器杯・甕・須恵器杯，大甕の小破片が出土している。93はＰ３より出土した須恵器杯で，底部は回転ヘラキリされている。

まとめ

29号建物跡は，28号建物跡と重複関係をもつが，明確な切り合い関係がある柱穴が存在しないところから，その新旧関係は不明である。また，その年代は，出土遺物より平安時代(９世紀代)と考えられる。　(藤谷)



第68図　28号建物跡

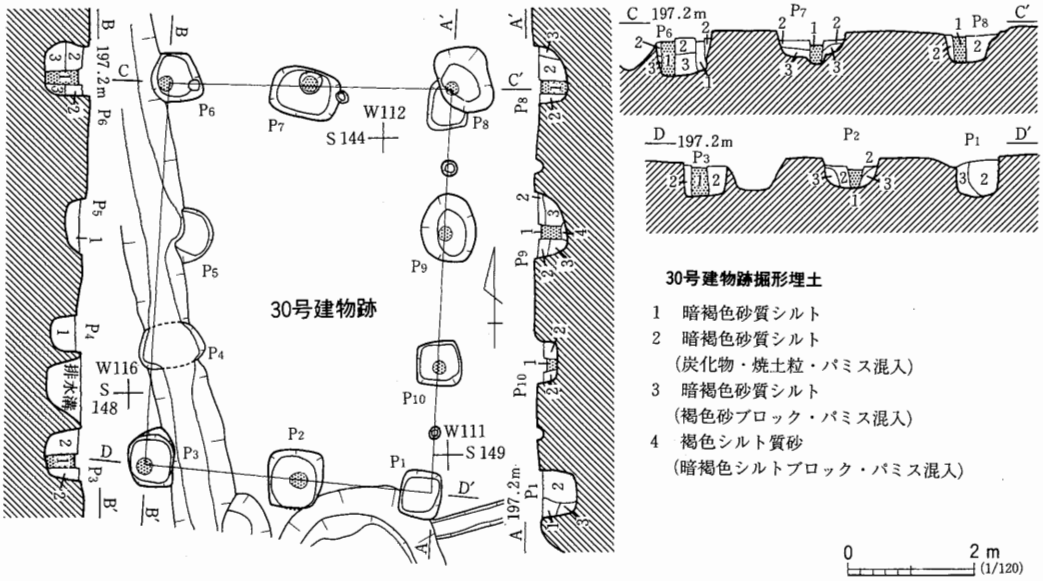


29号建物跡掘形埋土

1　暗褐色粘土質シルト（炭化物・パミス混入）
2　黒褐色シルト（炭化物・パミス・暗黄褐色シルトブロック混入）
3　灰褐色砂質シルト（パミス・暗黄褐色砂質シルトブロック・黒褐色シルトブロック混入）
4　暗茶褐色シルト（パミス・暗黄褐色砂質シルトブロック混入）

0　1 m
(1/60)

第69図　29号建物跡



第70図　30号建物跡

30号建物跡　ＳＢ30

遺　　構（第70図）

30号建物跡は，Ⅴ区中央より西側のＤ－11グリッドに位置しており，遺構検出面はＬⅢ上面となっている。建物跡は，西側柱列がⅤ区西側を南北に走る近世以降の溝跡に切られており，また，南東隅の柱穴は，９号井戸跡に切られている。建物跡の５ｍ東側には，主軸方向がほぼ同一な28号建物跡が位置している。

建物平面プランは，東西の梁行き２間，南北の桁行き３間の南北棟建物である。柱穴は隅丸方形あるいは楕円形を呈している。その規模は，長軸が平均95㎝，検出面からの深さが51㎝である。柱痕は７個の柱穴で検出され，その径は平均すると21㎝となる。埋土は，地山ブロックを混入する暗褐色砂質シルトと褐色砂質シルトである。また，Ｐ３の柱痕埋土には焼土粒が混入していた。柱間隔は，北妻の芯芯間で，東より2.29ｍ＋2.28ｍ，南妻では同じく2.12ｍ＋2.42ｍとなっている。東側柱列では，北より2.30ｍ＋2.10ｍ＋2.02ｍとなっている。したがって柱間隔は，梁行き7.5尺，桁行き7.5尺＋７尺＋７尺と考えられる。

第31表　ピット計測表　　単位(㎝)

PNo	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
長軸	78	94	100	108	86	80	110	108	108	74
短軸	66	86	71	(68)	(64)	74	80	82	90	72
深さ	60	45	50	44	38	70	54	44	54	36
柱痕	無	有	有	無	無	有	有	有	有	有

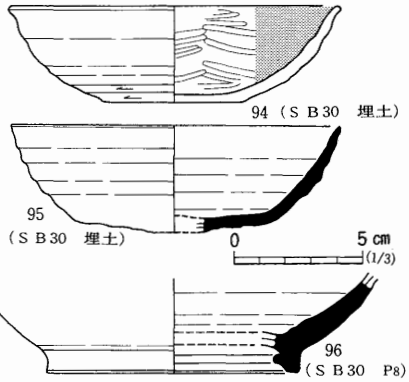
遺　　物（第71図）

遺物は，掘形の埋土より，土師器杯・須恵器杯等が出土している。図示資料では，94が体部下端に回転ヘラケズリが施された土師器杯，95は底部が回転ヘラキリされた須恵器杯，96は須恵器

瓶類の底部である。

まとめ

本建物跡は，Ｐ１・Ｐ２が９号井戸跡に切られており，９号井戸跡が９世紀中頃から後半に位置付けられているので，９世紀前半と考えられる。　（藤谷）



第71図　30号建物跡出土遺物

31号建物跡　ＳＢ31

遺　　構（第72図，図版30）

31号建物跡は，Ⅴ区の南半部のＨ－14区で検出された掘立柱建物跡である。遺構検出面は，ＬⅢ上面であり，77・108号溝跡と重複し，建物跡の外周三辺(西・北・東)に「コ」の字形の109号溝跡がめぐっている。各遺構の新旧関係は，77・108号溝跡が31号建物跡より新しく，109号溝跡は，その配置から31号建物跡に付属する雨落ち溝と判断される。遺構検出面は，ＬⅢ上面である。

31号建物跡付近には，南方5～10ｍのところに17・18号建物跡がある。17号建物跡は，31号建物跡と同様に建物跡の三辺をめぐる「コ」の字状の溝を有しているが，建物の方向，柱筋は一致しない。18号建物跡も建物の方向は異なる。また，31号建物跡の東側には８号特殊遺構が隣接している。

第32表　ピット計測表　　単位(cm)

P№	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
長軸	45	35	38	34	62	46	41	40	38
短軸	43	34	32	24	42	31	38	35	37
深さ	34	26	45	33	52	39	31	46	31
柱痕	有	有	有	有	有	有	有	有	有

建物のプランは，梁行き２間，桁行き３間の南北棟側柱の建物であるが，西側の柱列の南から２本目の柱穴が欠落している。柱穴が存在すると思われる部分をＬⅢ以下まで掘り下げ精査したが，掘形・柱痕ともに全く検出できなかった。建物の方位は桁行きの柱筋でＮ－５°－Ｗを指す。柱穴の掘形は24cm×34cm～43cm×62cmの方形や楕円形を呈しており，比較的規模は小さい。柱穴の深さは，26cm～52cmであり，柱痕は直径22cm～28cmの規模を有する。

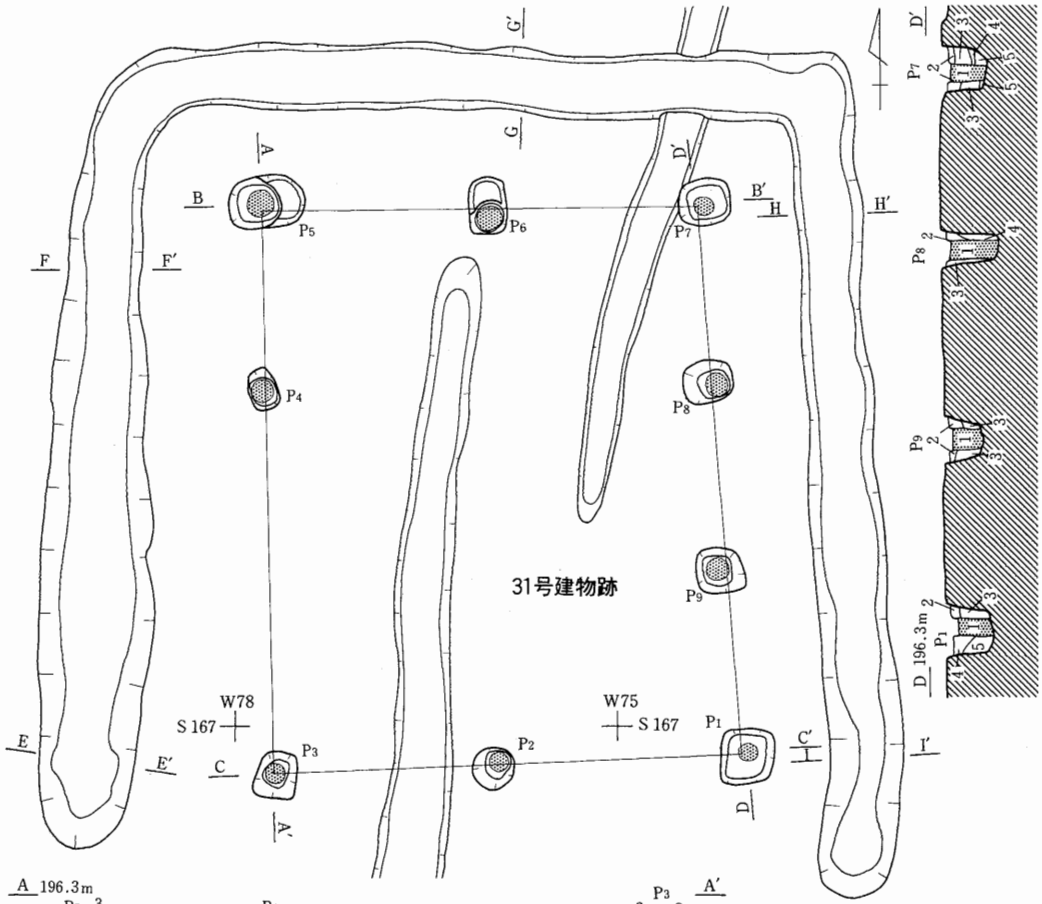
柱痕の間隔は，東側柱列の芯芯が北より1.44ｍ＋1.46ｍ＋1.46ｍ，北妻の芯芯が西より1.80ｍ＋1.66ｍを測る。

遺　　物

各柱穴内からは，若干の遺物が出土している。堆積土内出土遺物は弥生中期後半から後期後半にかけての土器が全てで，建物跡の構築に関係する時期の遺物の出土は全くなかった。31号建物跡に付属すると考えられる109号溝跡からは，西南端部付近を中心に９世紀後半の土師器・須恵器の破片が出土している。

まとめ

31号建物跡は，２間×３間の建物跡で３周に雨落ち溝(109号溝跡)をめぐらしている。西側柱



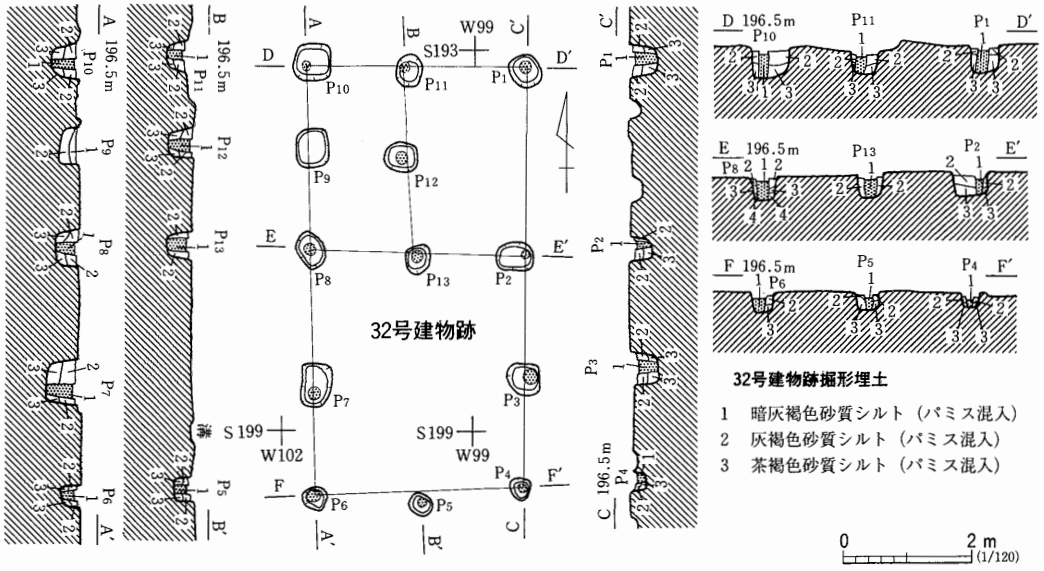
31号建物跡掘形埋土

1　黒褐色シルト（砂粒混入）
2　暗黄褐色シルト（パミス混入）
3　黒褐色シルト（炭化物・焼土粒混入）
4　暗黄褐色シルト（パミス混入）
5　黒褐色シルト（パミス混入）
6　暗褐色シルト（パミス混入）
7　暗黄褐色シルト

31号建物跡周溝内堆積土（109 号溝跡）

1　黒褐色シルト（焼土粒混入）
2　黒色シルト（パミス混入）
3　灰赤褐色シルト（炭化物・焼土粒混入）
4　暗灰褐色シルト（炭化物・焼土ブロック混入）

第72図　31号建物跡



第73図　32号建物跡

列の一部が欠落している特色があり，建物跡の年代は，109号溝跡から出土した遺物から判断して９世紀後半頃と考えておきたい。　（芳賀）

32号建物跡　ＳＢ32

遺　　構　（第73図）

Ⅴ区南半部北寄りＥ・Ｆ－16グリッドで検出した建物跡である。遺構検出面はＬⅢ黄褐色砂質シルトである。北側で７号周溝状遺構と，西側で143号溝跡と，南側で79号溝跡とそれぞれ重複関係にある。新旧関係は32号建物跡が７号周溝状遺構および143号溝跡を切っており，79号溝跡に切られている。

建物のプランは，基本的に東西列が４間，南北列が２間の桁行き×梁行きが４間×２間の建物跡である。北半部に間仕切りと床束を有する。東西柱列の柱間隔は，東柱列で北より2.96ｍ＋1.92ｍ＋1.80ｍ，西柱列で1.28ｍ＋1.60ｍ＋2.32ｍ＋1.64ｍであり，南北柱列の柱間隔は，南柱列で東より1.60ｍ＋1.72ｍ，北柱列で1.84ｍ＋1.60ｍを測る。したがって，間尺は，西側柱列で４尺＋5.5尺＋８尺＋5.5尺，北側柱列で5.5尺＋5.5尺と考えられる。軸線は東柱列で真北を向き，西柱列でＮ－２°－Ｗの傾きを持つことから考えて，Ｎ－１°－Ｗと考える。

第33表　ピット計測表　　単位(cm)

Pｎo	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13
長軸	54	60	52	38	40	42	71	58	63	60	53	54	46
短軸	48	46	52	32	34	40	49	46	53	60	42	48	40
深さ	46	38	46	26	34	34	52	40	34	46	37	42	42
柱痕	有	有	有	有	有	有	有	有	無	有	有	有	有

柱穴掘形の規模は，長軸が38～71cm，短軸が32～60cmであり，深さは26～52cmを測る。平面形はＰ３を除き方形を呈しているが，大きさは

まちまちである。柱痕は形状が円形で，直径12～24cmを測る。

まとめ

32号建物跡は，４間×２間を基調とした間仕切りと床束を有する建物跡である。機能した時期は，出土遺物がなく明確ではないが，周辺の遺構の年代より平安時代（９世紀代）と思われる。

（伊藤）

33号建物跡　ＳＢ33

遺　　構（第75図，図版31）

Ⅴ区南半部北寄りＦ・Ｇ－15・16グリッドで検出した建物跡である。遺構検出面は，ＬⅢ暗黄褐色砂質シルトである。70号溝跡および７号特殊遺構との切り合い関係が確認された。新旧関係は33号建物跡が70号溝跡および７号特殊遺構に切られていることから，33号建物跡は70号溝跡および７号特殊遺構に先立つものである。

建物のプランは，東側を旧水田用水路により破壊されてしまったため，その全容を明らかにすることができなかった。遺存している部分では，東西柱列が３間，南北柱列が２間検出できた。南北柱列については，さらに延びる可能性もあり，主軸線は不明である。

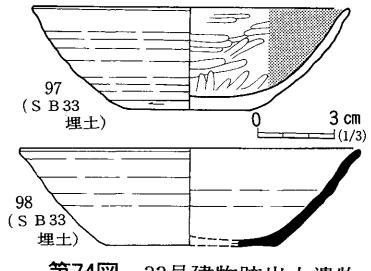
第34表　ピット計測表　単位(cm)

Pno	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
長軸	90	72	84	66	(51)	78	77
短軸	67	69	61	66	(64)	68	59
深さ	49	48	55	17	14	44	32
柱痕	有	有	有	無	有	有	有

柱穴掘形の規模は，長軸が66～90cm，短軸が59～69cmであり，平面形は方形を呈する。深さは最深部で14～55cmを測る。他の遺構に切られているために深さに違いがでたが，掘り込みの深さはほぼ同じである。堆積土は上層が暗灰褐色シルト，下層が茶褐色砂質シルトであり，どちらもパミスを含んでいる。柱痕は円形を呈し，径は20～26cmを測る。ピット間の距離は東柱列は前述した通り破壊されてわからないが，西柱列で北より2.00ｍ＋2.00ｍ＋2.20ｍ，北柱列で東より2.50ｍ＋2.38ｍ，南柱列で2.50ｍを測る。間尺は，東西柱列で７尺等間，南北柱列で８尺等間と考えられる。

遺　　物（第74図）

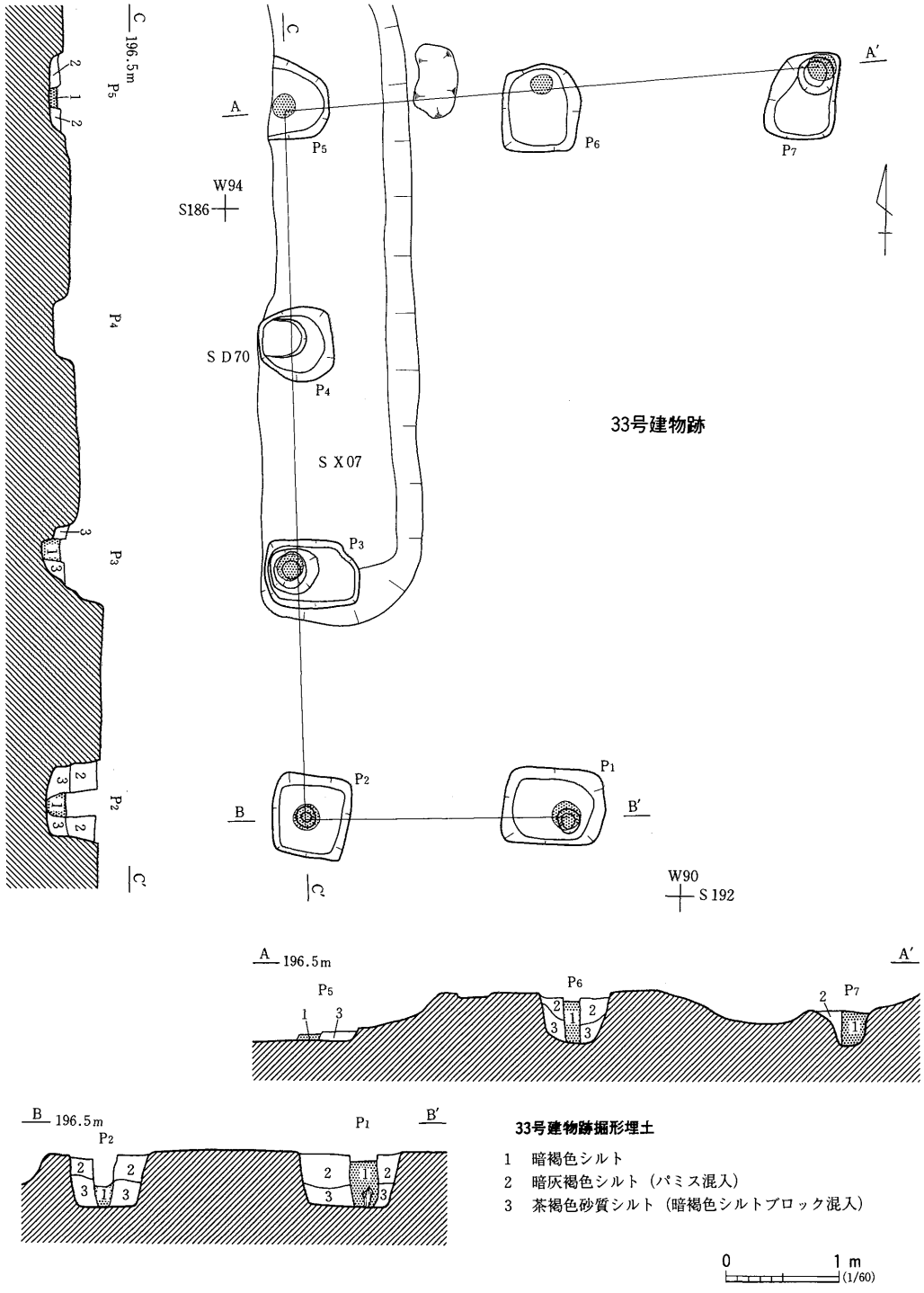
遺物は，Ｐ６より土師器・須恵器が出土している。図示資料では，98が底部を回転ヘラキリされた須恵器の杯で，97が内面黒色処理・ヘラミガキされた土師器杯で，底部下端に回転ヘラケズリが施されている。



第74図　33号建物跡出土遺物

まとめ

33号建物跡の全容を明らかにすることはできなかった。12号建物跡や34号建物跡のように東西方向に延びる建物跡もあり，33号建物跡が西に延びていた可能性もあると思われる。33号建物跡が機能した時期は，70号溝跡および７号特殊遺構との重複


C
196.5m
P5
P4
P3
P2
A
A′
P6
P7
W94
S186
S D70
S X07
33号建物跡
B
B′
P1
W90
S192
196.5m
196.5m
33号建物跡掘形埋土
1　暗褐色シルト
2　暗灰褐色シルト（パミス混入）
3　茶褐色砂質シルト（暗褐色シルトブロック混入）
0
1 m
(1/60)

第75図　33号建物跡

関係及び出土遺物から，9世紀初めから中頃にかけてと思われる。（伊藤）

34号建物跡　SB34

遺　　構（第76図）

34号建物跡はⅤ区中央部西端のB・C・D－12～14グリッド，S158～175・W117～130より検出された掘立柱建物跡で，その西の一部は調査区外に延びており，全体の規模は確認することが出来なかった。

遺構検出面は暗黄褐色砂質シルトのLⅢ上面であったが，東妻付近は後世にかなり攪乱を受けP11・P12付近は他より20㎝程度低くなっており，LⅢ下部のパミスを含んだ砂が出ている。

他の遺構との関連は，攪乱以外に直接の切り合いはないが，P2・3の北側の建物プラン内に20号井戸跡が検出されており，時期が異なるものと考えられる。また，この建物跡の東にある23号建物跡は，方位がN－6°－Eのこの建物とほぼ一致し，また，東柱列が34号建物跡の15.1m東にあり，東50尺に建てられていたと考えられる。

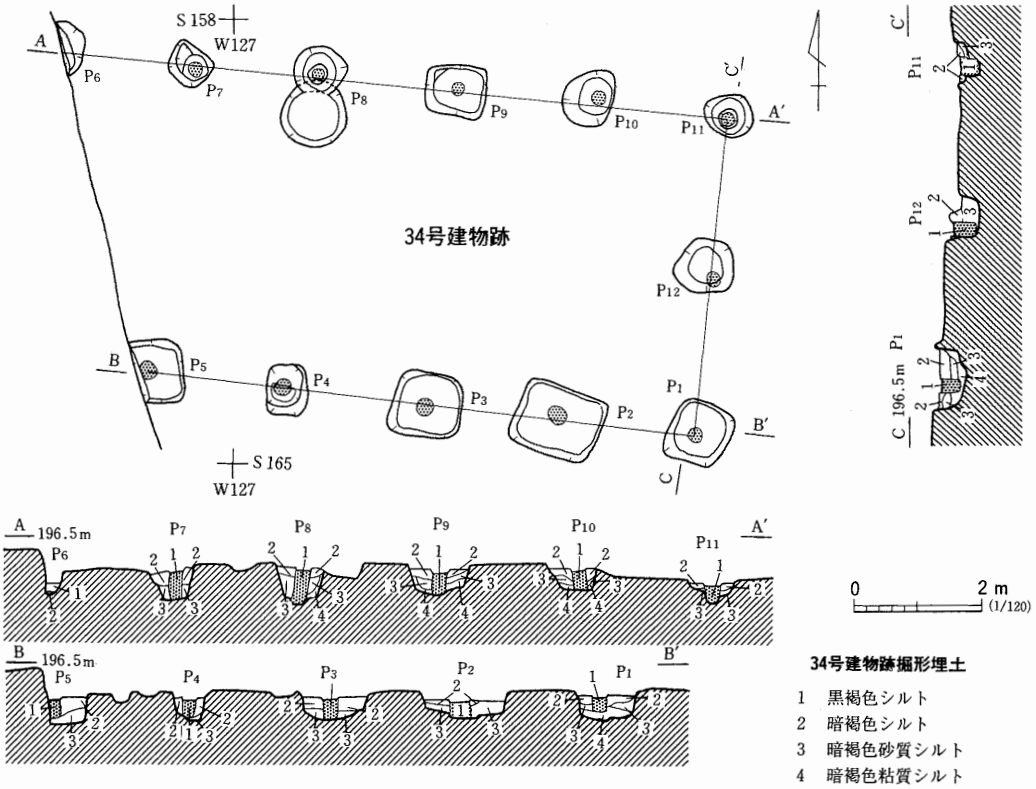
プランは梁行き2間，桁行きが5間もしくはそれ以上の東西棟の建物で，西妻の部分は調査区外となる。

柱穴掘形は比較的大型であり，長軸が68～127㎝，短軸が40～108㎝程度である。このうちP1・2・3・5・9は比較的大きく方形もしくは長方形を呈し，他はやや小型で形も不整形である。柱穴の大部分が調査区外のP6を除いて各柱穴とも柱痕があり，直径が23～35㎝の円形を呈する。この内P1・2・10の柱痕埋土には焼土が含まれている。柱穴の深さは40～66㎝とかなりばらつきがあるが，これは部分的削平のせいであり，底面は標高195.4～195.65mの間に収まる。

第35表　ピット計測表　　単位(cm)

P№	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
長軸	96	127	108	82	98	86	68	81	92	88	76	94
短軸	95	108	100	64	66	40	58	76	79	76	66	84
深さ	50	41	42	50	50	38	60	66	44	42	40	53
柱痕	有	有	有	有	有	無	有	有	有	有	有	有

柱間隔は柱痕の芯芯間で，東妻は南より2.45m＋2.55m，南側柱列では東より2.15m＋2.05m＋2.25m＋2.1m，北側柱列では東より2.1m＋2.15m＋2.25m＋1.95mを測る。この数値より柱間寸法を計算すると，梁行きは東妻で南より8尺強＋8.5尺となり，柱痕内では8尺＋8尺，8尺＋8.5尺，8.5尺＋8.5尺と3通りの解釈が可能であるが，8尺等間では北側柱列でのずれが大きくなるので，一応等間として8.5尺＋8.5尺としておきたい。桁行きは，南側柱列で東より7尺＋7尺＋7.5尺＋7尺と解釈され，北側柱列では東より7尺＋7尺＋7.5尺＋6.5尺となるが，4間目も柱穴内で7尺を取ることが可能であり，そうした場合次の5間目を7尺とするとP6のほぼ中央が柱位置となる。また，この建物を桁行き5間と見た場合中央が7.5尺，その両側2間が7尺ずつで均整のとれた形となるので，7尺＋7尺＋7.5尺＋7尺と解釈しておきたい。



第76図　34号建物跡

まとめ

遺物は，柱穴掘形埋土中から土師器・須恵器の小片が出土しており，図示しなかったが，土師器杯はロクロ調整・内黒のもので，土師器甕は外面にタタキメのあるロクロ調整のものである。

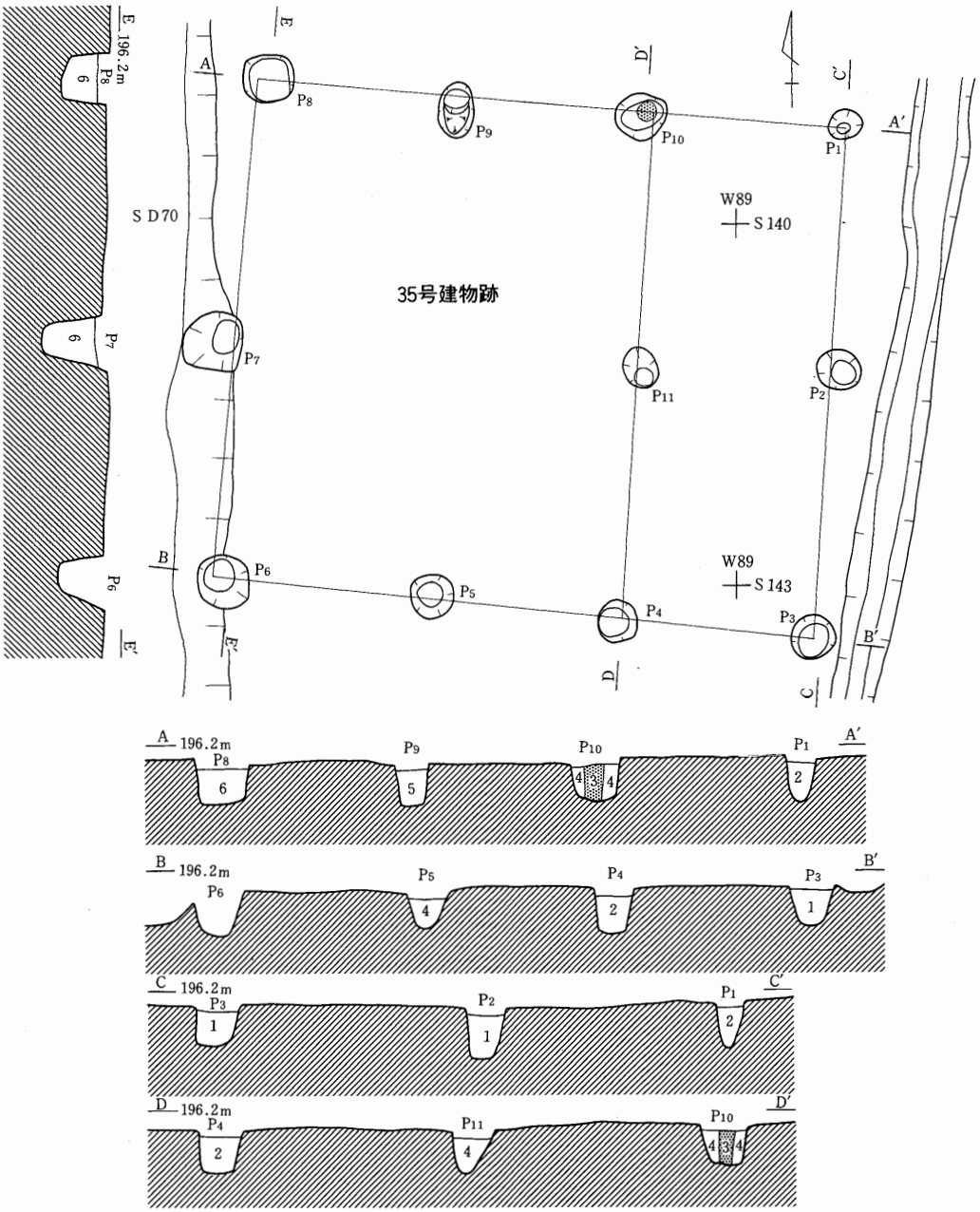
34号建物跡は遺跡中央西側に建てられた掘立柱建物で，23号建物跡の50尺西に作られている。この建物は全体を検出したわけではないが，柱間の配置からして南北２間・東西５間の可能性が大きい。時期は出土遺物から９世紀か10世紀であろう。　（木本）

35号建物跡　ＳＢ35

遺　　構　（第77図）

35号建物跡は，Ⅴ区ほぼ中央のＦ－10・11，Ｇ－10・11グリッドに位置しており，西側柱穴の一部は70号溝跡に切られている。建物跡周辺には，南側に11号建物跡が位置している。遺構検出面は，ＬⅢ上面となっている。主軸は，Ｎ－85°－Ｗである。

建物の平面プランは，南北の梁行き２間，東西の桁行き２間の東に廂がつく南北棟建物跡である。柱穴は円形を呈する小型のもので，その規模は，平均すると径38㎝，深さ38㎝である。柱痕はＰ10のみで検出され，その径は17㎝である。柱穴の埋土は，地山ブロックを混入する暗茶褐色



35号建物跡掘形埋土

1　暗茶褐色シルト（パミス・暗褐色粘土質シルトブロック混入）
2　暗茶褐色シルト（パミス・暗灰色砂質シルトブロック混入）
3　暗茶褐色シルト（パミス混入）
4　暗茶褐色シルト（パミス・暗黄灰色砂質シルトブロック混入）
5　暗茶褐色シルト（パミス・暗褐色砂質シルトブロック混入）
6　暗茶褐色シルト（パミス・暗褐色砂質ブロック混入）

0　1 m (1/60)

第77図　35号建物跡

シルトである。

柱間隔は，東側柱列の柱穴間で北より2.04m＋2.25m，西側柱列で北より2.22m＋2.0mである。南妻では，東より1.77m＋1.80m，北妻では，同じく1.60m＋1.60mとなっている。また東側廂では北より2.04m＋2.24mとなっている。したがって，柱間隔は，桁行き7尺＋7尺，梁行き5.5尺＋5.5尺となり，東に5.5尺の廂が付く。

第36表　ピット計測表　単位(cm)

PNo	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11
長軸	29	38	38	36	38	44	50	44	46	42	34
短軸	25	34	38	32	36	42	48	40	30	39	28
深さ	41	46	31	46	33	41	57	39	38	37	38
柱痕	無	無	無	無	無	無	無	無	無	有	無

まとめ

35号建物跡からは，遺物は出土しておらず，直接その年代を推定することはできない。しかし，柱穴の形態がV区の他の建物群とは明確に異なるところから，それらに伴う時期ではなく，むしろ建物跡としての配列が不明であったピット群と同時期であった可能性が高い。（藤谷）

36号建物跡　SB36

遺　構（第78図）

36号建物跡は，V区中央部西側のC－11・12グリッドに位置している。遺構検出面は，LⅢ上面となっている。建物跡周辺には，南側に34号建物跡，東側に10号井戸跡が位置している。

建物の平面プランは，南北2間，東西2間の総柱建物跡である。建物の主軸は，N－5°－Eである。柱穴は楕円形を呈するもので，その規模は，平均すると径43cm，深さ47cmである。柱痕はP4・8・9で検出され，その径は平均15cmである。柱穴の埋土は，パミスを混入する暗褐色シルト2層である。

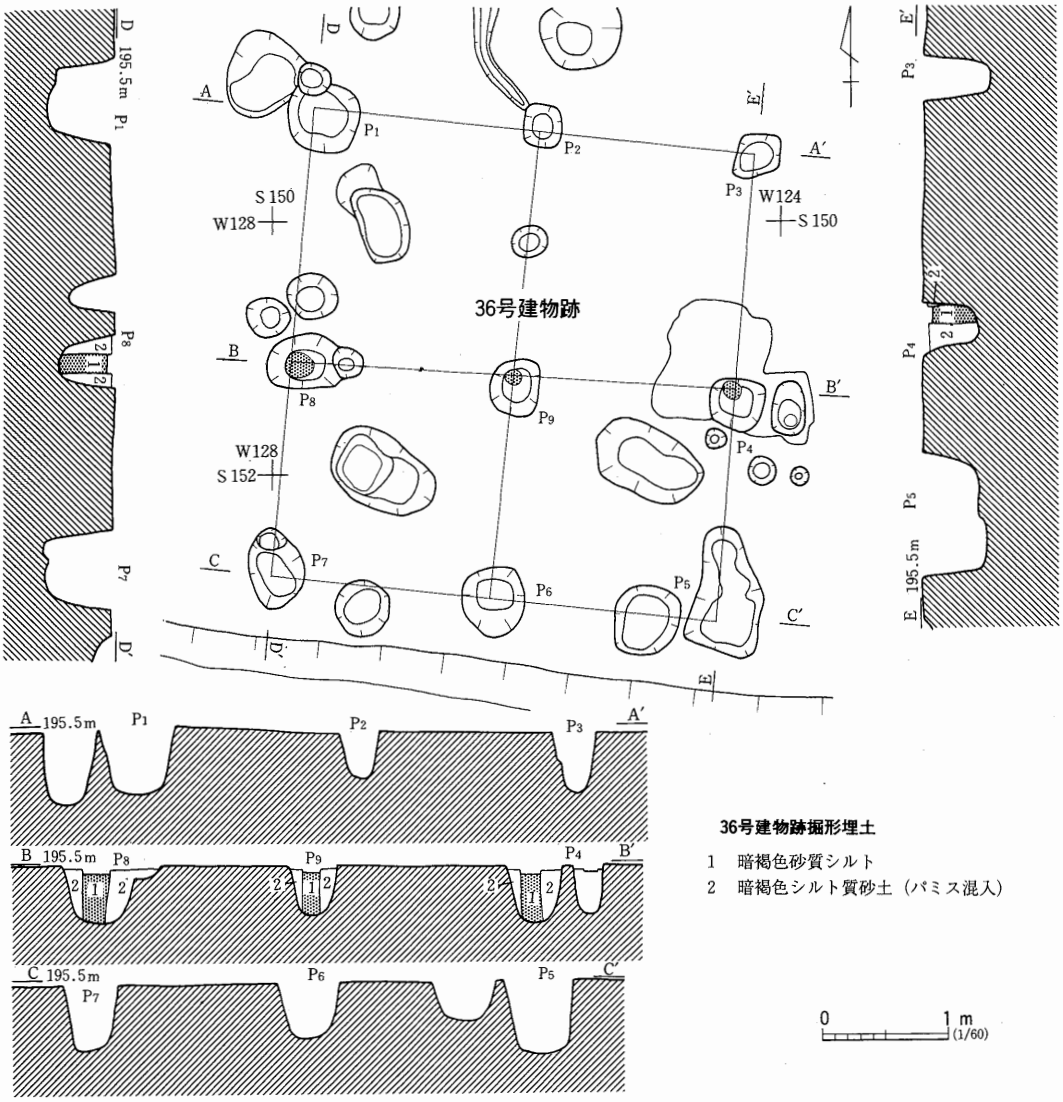
柱間隔は，東側の柱穴間で北より1.98m＋1.70m，西側で北より1.98m＋1.77mである。南側柱列間では，東より1.77m＋1.82m，北側柱列間では，同じく1.77m＋1.72mである。また中央柱列では同じく1.71m＋1.76mである。よって，柱間隔は，6尺等間隔になると考えられる。

まとめ

36号建物跡の柱穴からは，ロクロ土師器の細片が少量出土しているが，図化できるものはなかった。本建物跡の時期は，出土遺物から平安時代(9世紀代)と考えられる。また，34号建物跡と主軸方向がほぼ一致することから，同時存在した可能性がある。（藤谷）

第37表　ピット計測表　単位(cm)

PNo	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
長軸	57	35	35	45	98	56	55	76	46
短軸	56	31	35	40	52	50	45	45	39
深さ	55	36	47	45	59	44	50	45	40
柱痕	無	無	無	有	無	無	無	有	有


36号建物跡
S 150
W128
W124
S 150
W128
S 152
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
195.5m
1
2
36号建物跡掘形埋土
1　暗褐色砂質シルト
2　暗褐色シルト質砂土（パミス混入）
0
1 m
(1/60)

第78図　36号建物跡

第4節　土　　坑

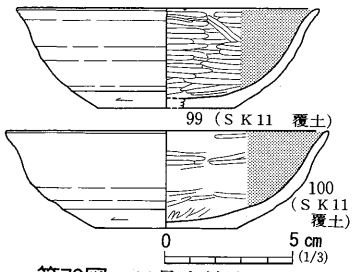
11号土坑　ＳＫ11　(第79・104図)

11号土坑は，Ⅱ区中央よりやや東側のＲ－３グリッドにて検出された。遺構検出面はＬⅢ上面となっている。東側には10号土坑が位置している。

遺構の平面形は，南北に長い不整楕円形を呈している。周壁の立ち上がりはやや急で，底面はほぼ平坦である。堆積土は４層からなり，特に南側ではℓ２とℓ３の層理面に漆が膜状となって存在していた。

遺物は堆積土中より土師器杯・甕，須恵器杯・大甕の破片が出土している。図示資料では99・100が土師器杯で，底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整が施されている。

本土坑は，１号建物跡に付随する平安時代(９世紀代)のゴミ穴と考えられ，堆積土中の被膜状の漆，土器類は廃棄物と考えられる。　(藤谷)



第79図　11号土坑出土遺物

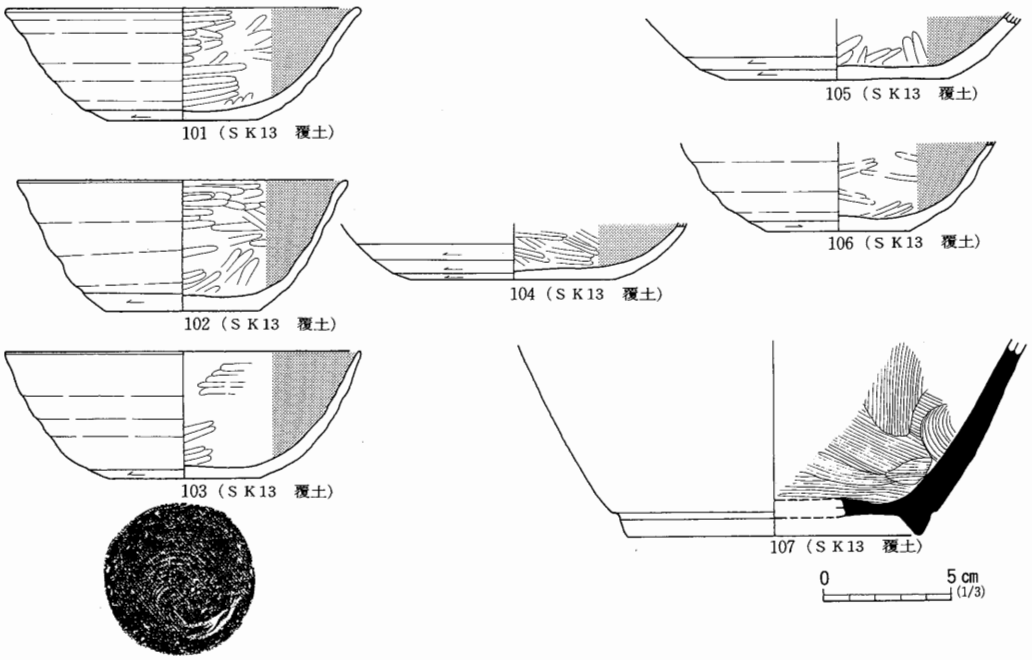
13号土坑　ＳＫ13(第80・104図，図版69)

13号土坑は，Ⅱ区北西側のＲ－２グリッドで検出された。遺構検出面はＬⅢ上面となっている。また，本遺構周辺には，土坑群と１号建物跡からなる遺構群が位置している。このうち，１号建物跡は，東側３ｍに位置している。

遺構の平面形は，南北に長い不整隅丸長方形である。遺構の規模は，長軸4.00ｍ，短軸1.65ｍ，検出面からの深さは，北側最深部で49㎝，平均すると40㎝前後となる。周壁の立ち上がりは急で，断面は箱形を呈する。また，底面はほぼ平坦である。堆積土は７層からなり，地山ブロックと炭化物を混入する人為的な埋土である。

遺物は，埋土中より土師器杯・甕，須恵器杯・甕・大甕が出土している。図示資料では101～106が内黒の土師器杯で，ともに底部～体部下端に回転ヘラケズリ調整が施されている。このうち，106の底部には，中央部に回転糸切り痕が明瞭に残っている。107は須恵器の瓶類で，内面はナデられている。

本土坑は，Ⅱ区の１号建物跡周辺に位置する土坑の中でも最も規模が大きく，遺物の出土量も多かった。特に，堆積土中に炭化物・焼土が混入し，堆積状況も人為堆積であるところから，１



第80図　13号土坑出土遺物

号建物跡に伴うゴミ穴であった可能性が高い。　（藤谷）

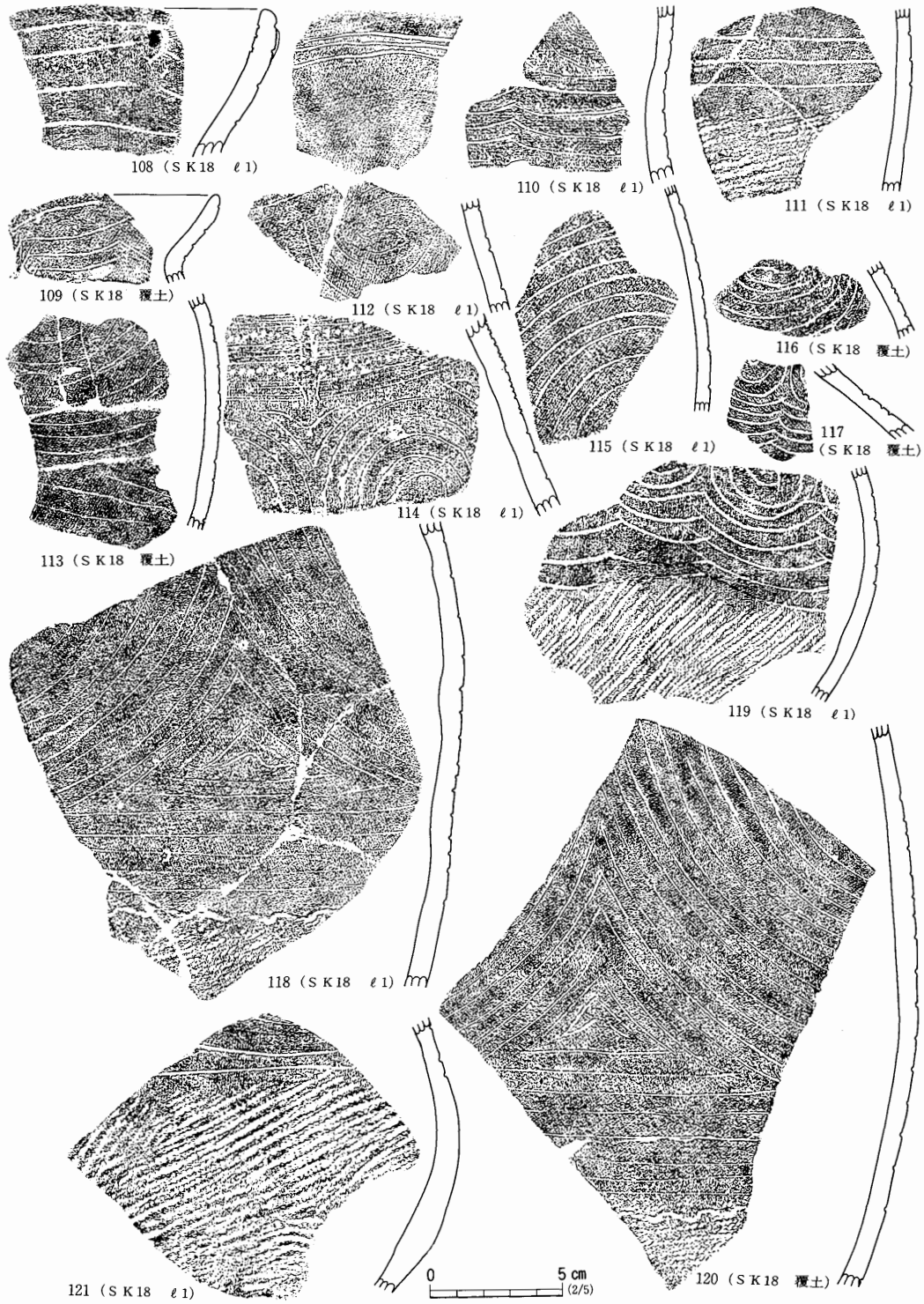
18号土坑　ＳＫ18（第81・82・104図，図版77・78）

18号土坑は，Ⅲ区南側のＯ－19グリッドにて検出された土坑で，遺構検出面はＬⅢ上面となっている。遺構周辺には，北側にピット群，西側に19号土坑が位置している。

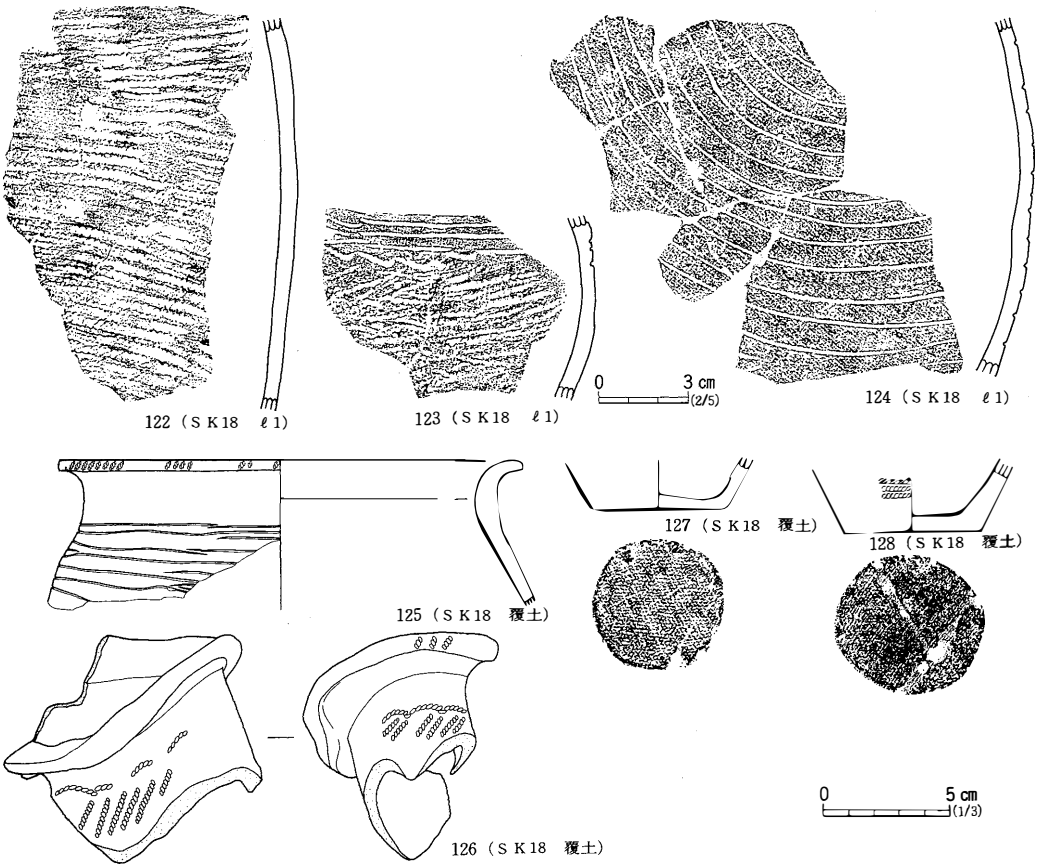
遺構の平面形は不整円形を呈する。その規模は，長軸2.21ｍ，短軸2.08ｍとなっている。検出面からの深さは，南側最深部で42㎝，平均すると38㎝となる。周壁の立ち上がりは，南側が急な他は，ゆるやかである。底面は，北東から南西方向に向かって若干傾斜しているが，ほぼ平坦である。堆積土は８層からなり，明灰褐色～暗灰褐色の粘質シルトである。堆積土には地山ブロックが間に入ることから，人為的な埋土と考えられる。

遺物は，堆積土中から，比較的多くの弥生土器の壺・甕の破片が出土している。図示資料では拓108～124が壺で，108・109は口縁部でヘラ描き沈線による連弧文が施されている。114は頸部の破片で上部には平行沈線文が施され，沈線間には刺突が加えられている。その他は体部で，渦文が施されている。125・126は甕である。ともに口縁部が屈曲する形態のもので，125は体部上位に平行沈線文が施され，126は綾繰文が施されており，熱変を受けてねじ曲がっている。127・128は小型の壺の底部で，ともに布圧痕が認められる。

本土坑は，出土遺物より，弥生時代中期の川原町口式期の土坑と考えられる。その性格は，形



第81図　18号土坑出土遺物（1）



第82図　18号土坑出土遺物（２）

態より墓坑の可能性が考えられる。（藤谷）

19号土坑　ＳＫ19　（第105図）

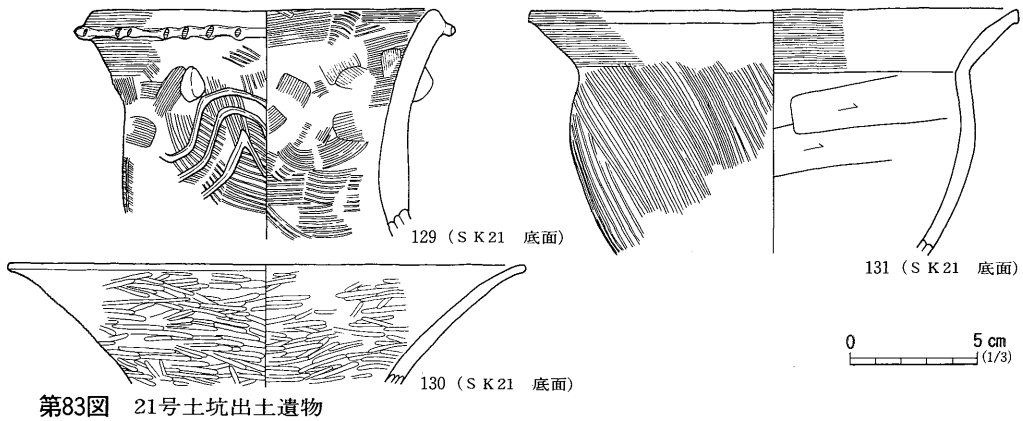
19号土坑は，Ⅲ区南側のＯ－19グリッドにて検出された土坑であり，遺構検出面はＬⅢ上面となっている。また，本土坑の東側には18号土坑が位置している。

遺構の平面形は，円形を呈し，その径は約74㎝である。検出面からの深さは，最深部で59㎝である。周壁の立ち上がりは急で，底面はほぼ平坦である。堆積土は５層からなり，堆積状況は自然堆積と考えられる。

遺物は堆積土中から弥生中期の土器片が出土しており，本土坑の年代は弥生時代中期であると考えられる。（藤谷）

21号土坑　ＳＫ21　（第83・105図）

21号土坑は，Ⅲ区南側のＯ－16，Ｐ－16グリッドにて検出された。遺構検出面は，ＬⅢ上面と



第83図　21号土坑出土遺物

なっている。また，遺構のすぐ南側には，３号建物跡が位置している。

遺構の平面形は，東西に長い不整円形である。その規模は，長軸1.76ｍ，短軸1.00ｍ，検出面からの深さは，最深部で11㎝，平均８㎝程である。周壁の立ち上がりは，全体的になだらかで，底面はほぼ平坦ながらも若干の凹凸が認められる。堆積土はパミスを混入する黒褐色シルト１層で，堆積状況は，自然堆積と考えられる。

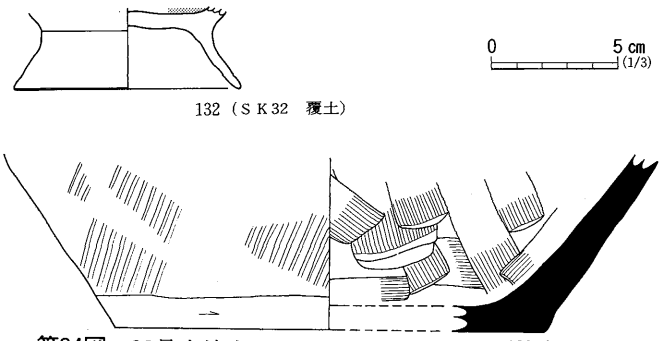
遺物は，底面より弥生土器壺・甕・高杯が出土している。129は壺で，内外面にハケメ調整が施された後，外面の口縁付近と内面の一部にナデが加えられている。器面の装飾として，口縁部には，口縁下に隆帯が巡り，その上部にハケの原体によるキザミが加えられている。頸部には１ヵ所に瘤状の粘土貼付けと波状の文様が描出されている。130は，内外面ヘラミガキされた高杯の杯部で，外面と内面上部が赤彩されている。131は甕で，口縁部にヨコナデ，体部にハケメ，内面にヘラケズリが加えられている。

本土坑の年代は，底面出土の遺物より，弥生時代後期と考えられる。また，その性格については不明である。　（藤谷）

32号土坑　ＳＫ32　（第84・106図）

32号土坑は，Ⅲ区ほぼ中央よりやや西側のＫ－12，Ｌ－12グリッドで検出された土坑で，遺構検出面はＬⅡ下部である。土坑は中央部が50号溝跡に切られている。

遺構の平面形は，東西に長い不整楕円形である。その規模は，長軸4.02ｍ，短軸3.19ｍである。更に，土坑の中央部分は，長軸1.65ｍ，短軸1.38ｍの規模で不整楕円形状に一段低い形態となっている。検出面からの深さは，中央の底部までが40㎝，その周囲までが同じく平均22㎝である。周壁の立ち上がりは比較的ゆるく，底面には若干の凹凸が認められる。堆積土は６層からなり，炭化物・灰・焼土と地山ブロックが混入するところから，一挙に埋められた人為的な埋土と考え



第84図　32号土坑出土遺物

られる。

遺物は，堆積土中から，土師器杯・高台杯・甕・須恵器杯・甕・大甕が出土している。図示資料では，132が土師器高台杯，133が須恵器大甕の底部である。

本土坑の年代は，出土遺物より，９世紀と考えられる。またその性格は，堆積土の状況から，周辺に位置する建物跡廃絶時に掘られたゴミ穴である可能性が高い。（藤谷）

34号土坑　ＳＫ34（第85・107図）

34号土坑は，Ⅳ区南側のＫ－32，Ｌ－32グリッドで検出された土坑で，２号住居跡の南側に位置し，３号住居跡の内側に位置している。

土坑の平面形は，不整楕円形を呈し，その規模は，長軸2.00ｍ，短軸1.80ｍ，検出面からの深さは平均すると８㎝前後となっている。壁面の立ち上がりはやや急で，底面は比較的平坦である。堆積土は，明黄灰褐色砂質シルト１層のみである。

遺物は，堆積土中より，弥生土器・土師器の破片が出土している。図示資料では，134・135は弥生土器壺で，135は口縁下に撚糸文が施され，更にその下部の隆帯には，キザミが加えられている。

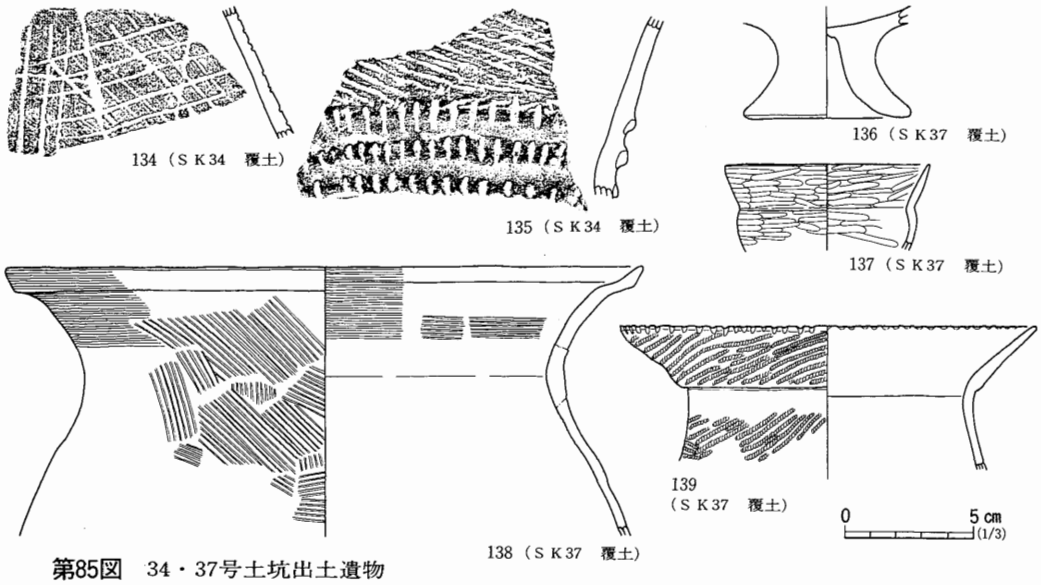
本土坑の年代は，出土遺物より，古墳時代前期と考えられるが，その性格は不明である。（藤谷）

37号土坑　ＳＫ37（第85・86・107図，図版59～62・65・66・68）

37号土坑は，Ⅳ区南側のＫ－32グリッドに位置し，北側が２号住居跡に切られている。遺構検出面はＬⅢ上面である。土坑は北側で２号住居跡に切られており，遺存部での平面形は，不整楕円形を呈している。その規模は，長軸121㎝，短軸95㎝で検出面からの深さは10㎝である。壁面の立ち上がりはやや急で，底面は平坦である。

遺物は，堆積土中より，土師器・弥生土器が出土している。図示資料では，138が土師器甕，136が土師器高杯，137が土師器小型丸底壺，139が弥生土器壺である。138は口縁部が上方につまみ出され，口縁下に稜線をもつ形態を呈し，口縁内外面にヨコナデ，体部外面にハケメ，内面にナデが施されている。

本土坑の年代は出土遺物より，古墳時代前期と推定されるがその性格は不明である。（藤谷）



第85図　34・37号土坑出土遺物

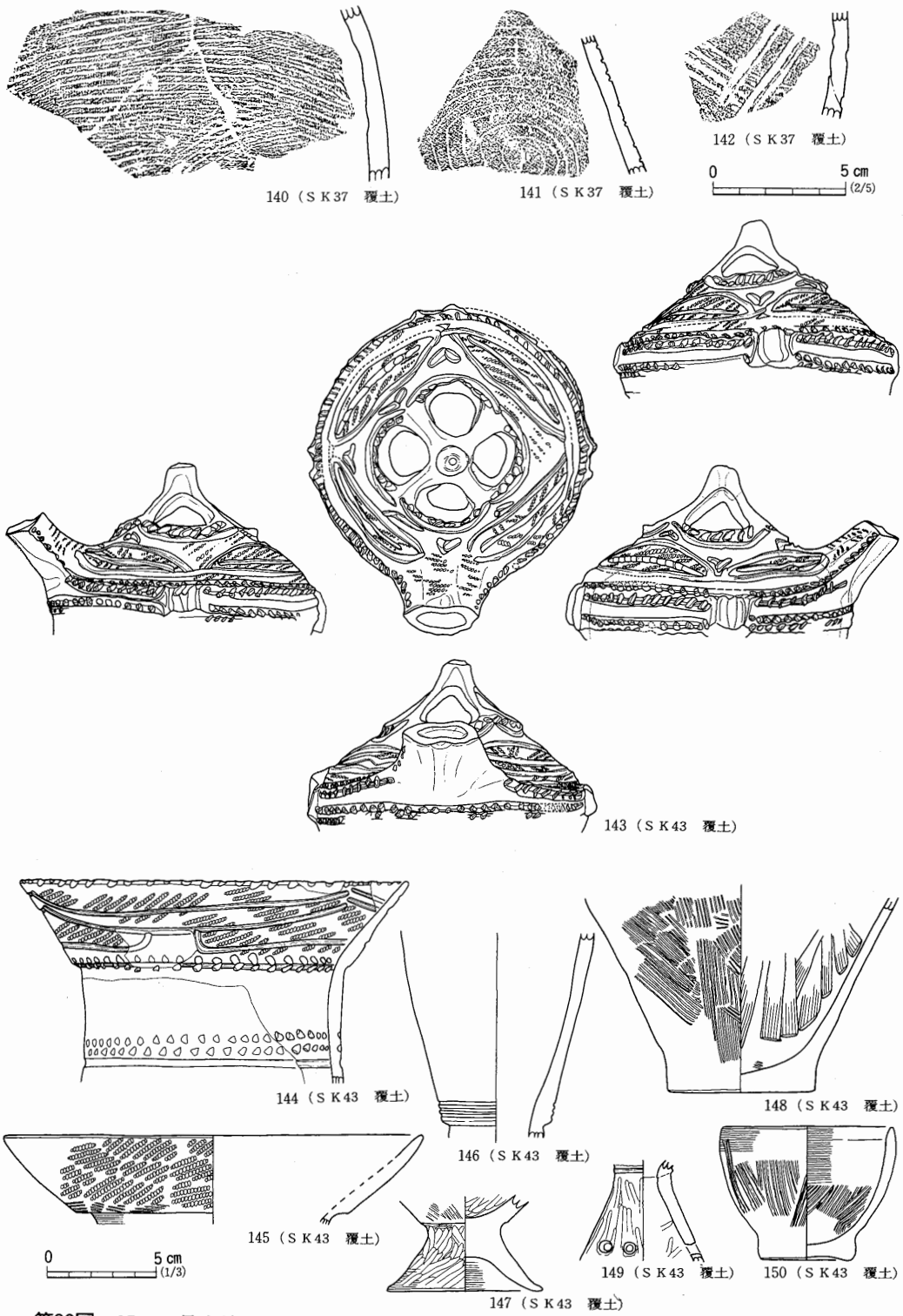
43号土坑　SK43　（第86・107図）

43号土坑はV区南側のI－23グリッドに位置し，検出面はLⅢ上面である。切り合い関係は39号土坑を115号土坑が切り，さらにそれを43号土坑が切っているので，39号土坑→115号土坑→43号土坑の順となる。土坑の規模は長径1.56m，短径1.08m，検出面からの深さは24cmである。平面形は不整方形である。壁は，北・東側では緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分けられる。堆積状況は自然堆積と考えられる。

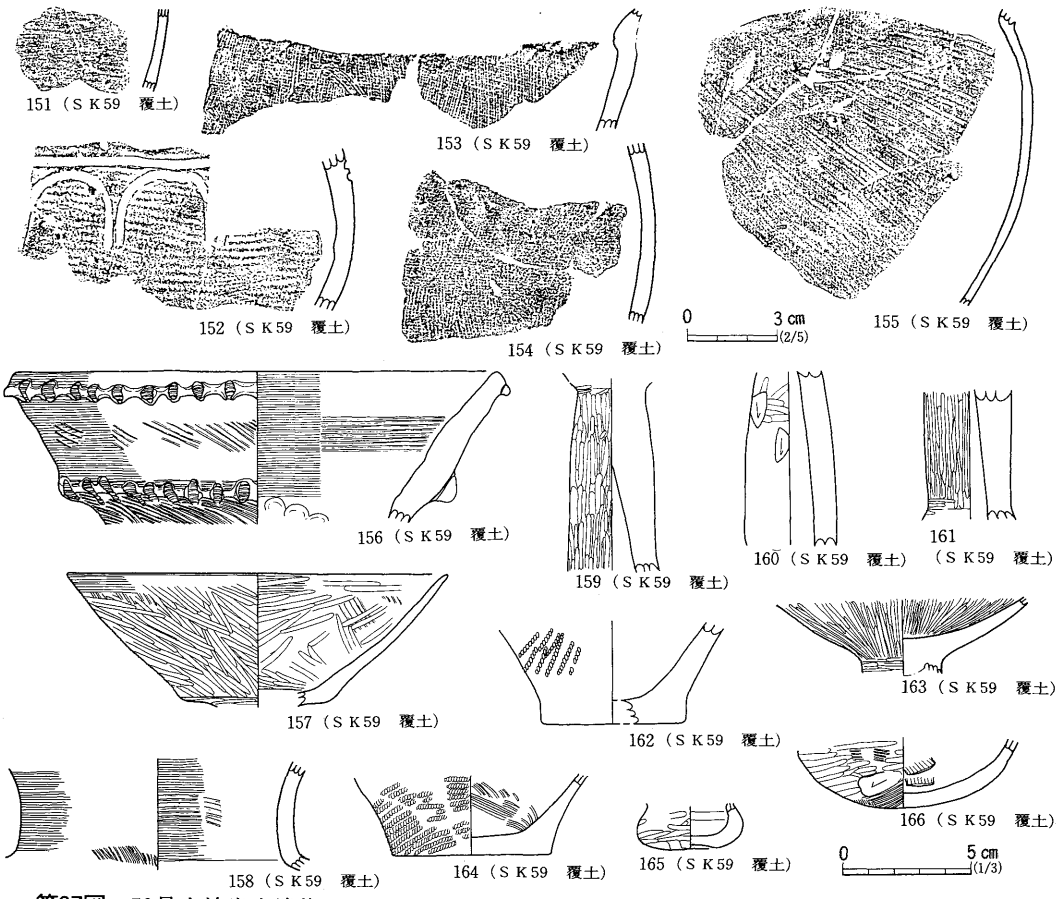
遺物の143は弥生の注口土器で，堆積土中から出土した磨消縄文系の土器である。体部下半は欠損している。上部には吊り手状の把手がついている。4本の把手は，4つの孔によって分けられる。体部上半の形は円錐形に近く，頂部は突出しており，中心には孔を有する。4つの孔の形は隅丸三角形で，その外側を4本の沈線で縁取っており，孔と沈線の間には刺突が巡らされている。体部の文様は，縄文の上に4単位の弧状の沈線を入れ，沈線間にはナデを施し，注口から体部にかけては刺突文が施してあり，刺突文は体部をほぼ一周している。真上からこの土器をみた場合，中心部に小さな円があり，中心で直交する十字で4分割される円または円に近い隅丸方形がその外側にあり，その外側には方形がある。方形の4つの角は，さらにその外側の円に内側から接しておりくずれた工字文が表現されている。

144・145は弥生土器の壺で，堆積土から出土している。145は口縁部で，ハケメの後に縄文を施している。頸部にはヨコナデも見られる。144は外面には交互刺突文がある。

146～150は北陸系の弥生終末～古墳前期の土器で，堆積土中から出土した。147は高杯で，杯



第86図　37・43号土坑出土遺物



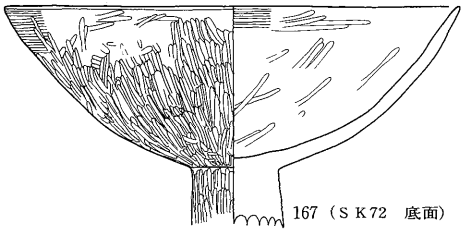
第87図　59号土坑出土遺物

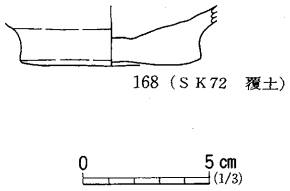
部外面ハケメ，内面はヘラミガキで調整され，脚部は外面はヨコナデの上にヘラミガキを行っている。また杯部と脚部の接合部はヘラケズリにより調整されている。底面はヨコナデにより調整されている。148は甕で，外面の調整はハケメで，内面はヘラナデ，底部の一部はハケメにより調整されている。150は小鉢で，内外面の調整はヨコナデとハケメである。146は長頸壺で，赤色顔料が塗られている。149は器台で，内外面ともにヘラミガキで調整されている。脚部に穿たれた２つの孔があり，欠損した部分に，この孔と対応する孔があったと考えられるが，孔の位置が２窓～４窓のどれかは不明である。ただし，この孔が小さな孔の２つ組みになっているのは珍しい。

本土坑からは弥生時代の２系統の遺物が出土しているが，本土坑は弥生時代の末期に埋没した可能性が高い。注口土器はその時に流れ込んだと思われる。　（中野）

59号土坑　ＳＫ59　（第87・109図）

59号土坑はⅤ区南側のＩ－23グリッドに位置し，検出面はＬⅢ上面である。規模は長径3.60m，





第88図　72号土坑出土遺物

短径1.88ｍの不整楕円形で，最北部を75号土坑に切られている。底面は平坦で，最大の深さは検出面から20cmである。堆積土は２層で炭化物を含んでいる。

遺物が堆積土から出土しており，16点を図示した。弥生土器は156・162・164で，３点とも壺である。162・164は外面に縄文が施してあり，164の内面はハケメで調整してある。156の外面はハケメ・ヨコナデ・ハケメとハケの端部を使った刺突文の順序で調整してある。内面の調整はハケメ・ヨコナデである。指頭痕も見える。

土師器は157～161・163・165である。165は小型丸底壺である。体部はヘラミガキ，底部はヘラケズリの後ヘラミガキ，内面はユビナデで調整している。また，内面には黒色の被膜が付着しているが，これは炭化物と考えられる。166は壺で外面はヘラケズリの後ハケメ，その後ヘラミガキ調整し，内面はヘラナデ調整している。157・159～161・163は高杯である。157・163は杯の部分が，159～161は脚の上部の部分が残っている。157は外面・内面ともにハケメ・ヨコナデ・ヘラミガキの順に調整している。163は外面・内面ともにヘラミガキで調整している。159・161は外面の調整はヘラミガキである。160は，外面はヘラミガキの後ヘラケズリで調整している。

遺物は弥生土器と土師器で，本土坑の時期は古墳時代前期と考えられる。　（中野）

72号土坑　ＳＫ72　（第88・110図）

72号土坑はⅤ区南地区のＩ－22グリッドに位置し，検出面はＬⅢ上面である。規模は長径56cm，短径52cmの隅丸方形の平面形をもつ。底面は周辺部は浅く，中央部付近で急に深さを増す。最も深いところで検出面から28cmである。堆積土は黒色砂質シルトの単層である。

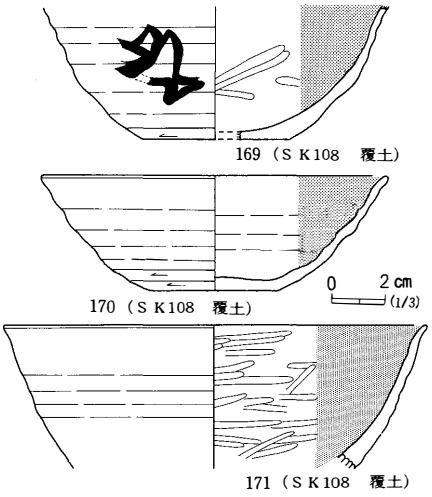
出土遺物は土師器で，167は高杯の杯部から脚部上端にかけての部分である。内外面の調整はヨコナデ・ヘラミガキである。168は甕の底部で内面の調整にナデが見られる。遺物は底面からの出土である。本土坑の時期は，古墳時代前期と考えられる。　（中野）

84号土坑　ＳＫ84　（第111図）

84号土坑は，Ⅲ区Ｏ－14グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。規模は長径76cm，短径74cmで平面形は円形に近い。深さは52cmで，底面は平坦である。底面は上端部より広く，長径84cm，

短径72cmで，壁は急に立ち上がり，ややオーバーハングしている。堆積土は2層に分けられ，ℓ1には炭化物が混入している。

出土遺物はないが，その形態から縄文晩期の貯蔵穴であると考えられる。（中野）



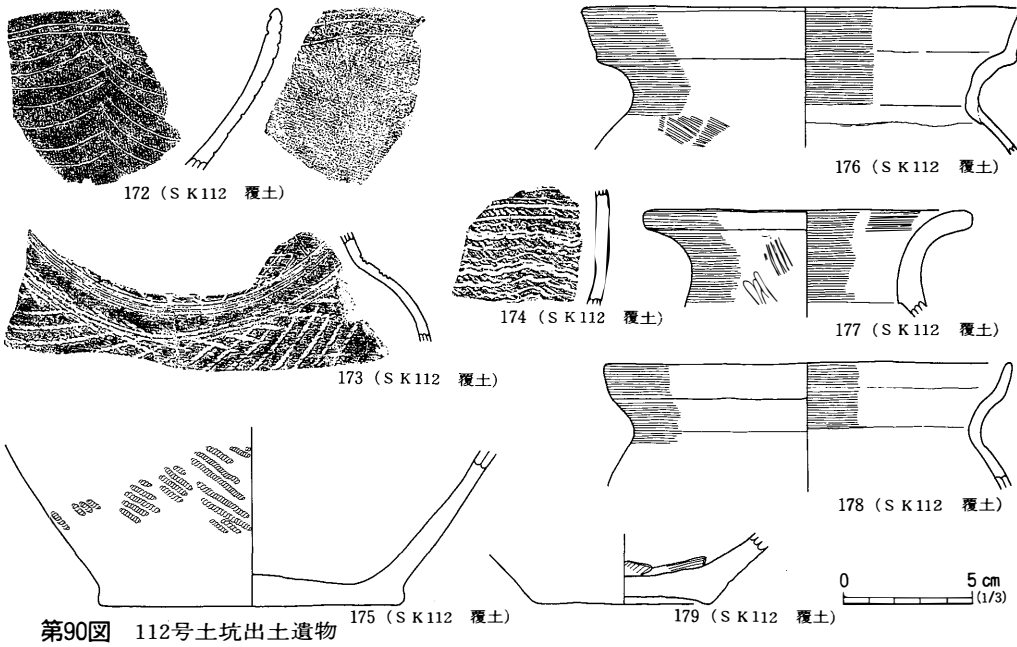
第89図　108号土坑出土遺物

108号土坑　S K108(第89・113図，図版69・88)

108号土坑はⅢ区L－12・13グリッドに位置し，LⅢ上面で検出した。50号溝跡を切っている。また，108号土坑の南東約1.5mに3号井戸跡がある。規模は長径2.56m，短径2.08mで，平面形は不整楕円形である。深さは28cmで，底面には緩やかな起伏がある。壁は遺構の西側では緩やかな傾斜となっている。堆積土は3層に分けられる。

遺物は，土師器・須恵器が出土しており，底面から出土した土師器の杯を3点図示した。169・170は土師器の杯で体部下端から底部にかけては回転ヘラケズリ，内面はヘラミガキ調整し，黒色処理が施してある。また，169の体部には「比」の文字の墨書がある。171も内面はヘラミガキで調整し，黒色処理が施してある。

遺物は9世紀前半のものであるので，本土坑の時期もほぼ同様の時期と考えられる。（中野）



第90図　112号土坑出土遺物

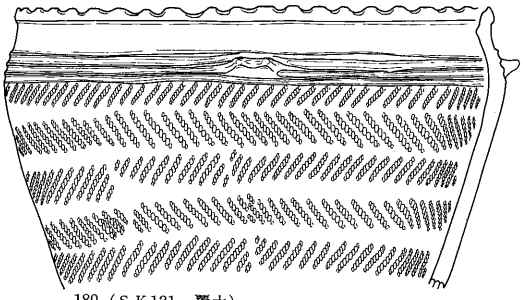
112号土坑　ＳＫ112　（第90・113図）

112号土坑は，Ⅴ区南側のＪ－23グリッドに位置しており，平面プランは，不整形を呈する。遺構検出面は，ＬⅢ上面となっている。その規模は，長径176cm，短径142cm，検出面からの深さは55cmである。断面形は船底形を呈し，壁面の立ち上がりは急である。堆積土は，６層に分かれ堆積状況は，自然堆積と考えられる。

遺物は，堆積土中から縄文土器・弥生土器・土師器が出土している。図示資料では，172～174が弥生土器の壺，176～178が北陸系の弥生終末～古墳前期の土器の甕である。

本土坑は，出土遺物より弥生時代終末に埋まったと考えられるが，その性格は不明である。

（藤谷）



第91図　121号土坑出土遺物

121号土坑　ＳＫ121　（第91・114図）

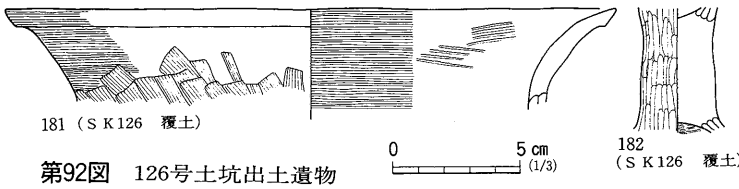
121号土坑はⅢ区Ｍ－11グリッドに位置し，９号建物跡の南東隅柱穴の南東方向約1.2mの位置にある。検出面はＬⅢの上面である。規模は長径88cm，短径80cmで，平面形はほぼ円に近い。検出面からの深さは40cmである。底面は平坦で，壁は急な立ち上がりとなり，途中までオーバーハングしている。堆積土は４層に分けられる。

遺物は１点を図示した。180は堆積土中から出土した縄文土器の深鉢である。口縁にキザミをもち，体部には羽状縄文が施してある。縄文晩期に属する土器である。

本土坑の時期については，出土遺物より縄文晩期と考えられる。　（中野）

126号土坑　ＳＫ126　（第92・114図）

126号土坑は，Ⅴ区南端部Ｊ－20グリッドで検出され，ＬⅢ暗黄褐色砂質シルト層で確認された。本遺構は３号周溝状遺構の北溝を切っている。平面形は不整方形を呈する。堆積土は暗灰黒色シルト・暗黄褐色砂質シルト・暗黒色シルト・暗茶褐色シルト・黒色シルトの５層に分けられる。最下層を除きパミスが混入している。底面は平坦で，断面の形態は鍋底形をしている。



第92図　126号土坑出土遺物

本遺構から遺物は，ℓ1より5点，ℓ2より2点出土している。図化できたものは2点のみである。181は土師器甕の口縁部分である。ヨコナデを行った後にハケメ調整を施している。182は，土師器高杯の脚部分で入念にミガキが加えられている。色調は明るい橙色である。

本土坑の年代は，遺物が出土しているものの，遺構に直接伴うものではないため，遺構の年代を直接決める材料とならないが，3号周溝状遺構より新しいことから，古墳時代前期と考えられよう。（小野田）

131号土坑　SK131　（第114図）

V区J－18・19グリッドにおいて検出され，LⅢ暗黄褐色砂質シルト層にて確認された遺構である。本遺構は，132・135・127・147号土坑などに隣接する。平面形はほぼ円形である。堆積土は黒褐色シルト，暗褐色シルトの2層に分けられ，2層ともパミスが混入する。底面は平坦で，断面は鍋底状を呈する。

遺物は出土していないが，その形態がⅢ区の縄文晩期の土坑と近似しており，本土坑も縄文晩期の貯蔵穴である可能性が高い。（小野田）

132号土坑　SK132　（第114図）

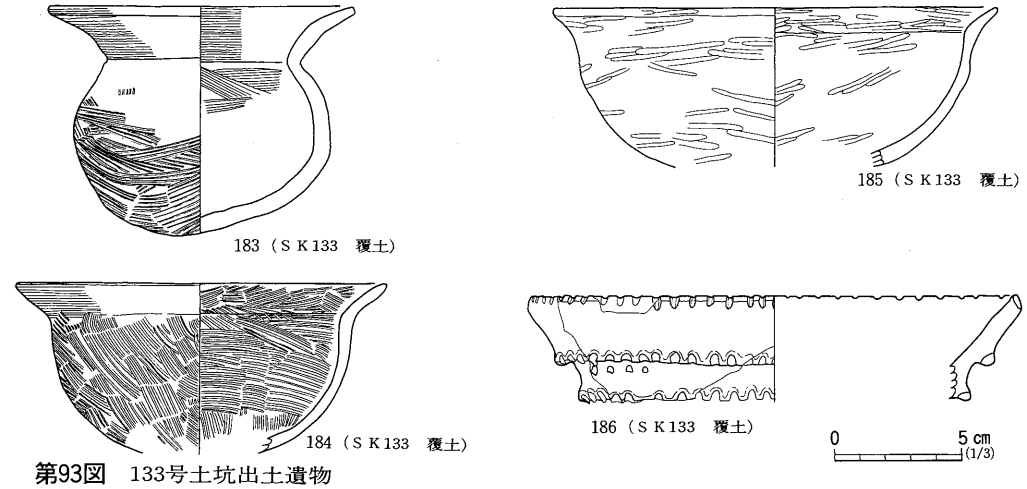
V区J－18・19グリッドにまたがって検出され，LⅢ暗黄褐色シルト層で確認された遺構である。本遺構は131・147号土坑と隣接する。平面形は南側部分がやや突出する不整な隅丸方形である。堆積土は黒色シルトの1層のみでパミスを混入する。底面は平坦で断面は鍋底形である。

遺物は出土しておらず，時期については不明である。（小野田）

133号土坑　SK133（第93・114図，図版66）

V区I－19グリッド北辺において検出された遺構で，LⅢ暗黄褐色シルト層で確認された。本遺構は，134・136号土坑と隣接する。平面形はほぼ円形である。堆積土はパミスが混入する黒色シルトの1層である。堆積状況は，自然堆積と考えられる。底面は平坦で，断面は舟底形である。

遺物は186を除き，やや浮いた状態で一括して出土している。186は弥生土器壺の口縁部分で，内側の大部分は剝離しているが，かすかにナデの痕跡が認められる。外面は粘土紐を2本貼り付けた後にヨコナデを施し，口縁と粘土紐貼り付け部分に棒状工具によって連続した押圧が加えられている。色調は，表面が橙色，裏面は灰青色で，二次焼成を受けている。183は小型の甕である。丸底の底部，上下につぶれた球形の体部をもち，口縁は外反気味に立ち上がる。外面は，ヨコナデ後，底部から頸部のやや下側まで，下から上に向かってのハケメ調整が行われている。口縁内



第93図　133号土坑出土遺物

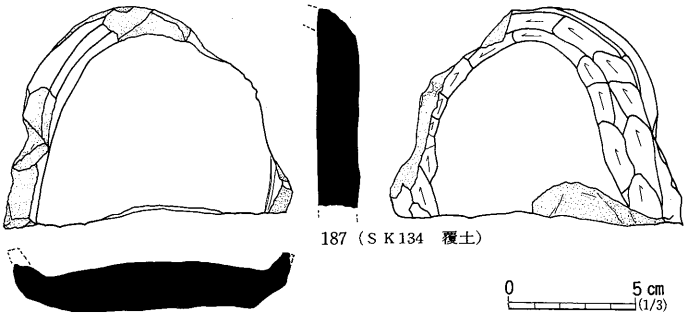
側はヨコナデとユビナデが施されている。184は鉢の可能性がある。胎土及び調整方法から同一個体と考えられる平底の底部が出土しているが，接続する箇所が欠損のため，同一個体とならなかった。外面はナデを施したあとに底部から口縁のくびれ部分までハケメ調整を上から下にむかって行っている。内面は横にハケメを施した後，底部は放射状に，くびれ部分は斜めに，ハケメを施している。外面と内面の口縁部分のハケメは密であるのに対して，内部のそれは粗である。焼成は良好で，外面は赤褐色，内面は褐色である。185は土師器の鉢である。内外面とも丁寧なヘラミガキを施すが，焼成が不良のため器面は脆い。内外面とも黒褐色を呈している。

本土坑の年代は，出土した遺物から古墳時代前期と考えられる。　（小野田）

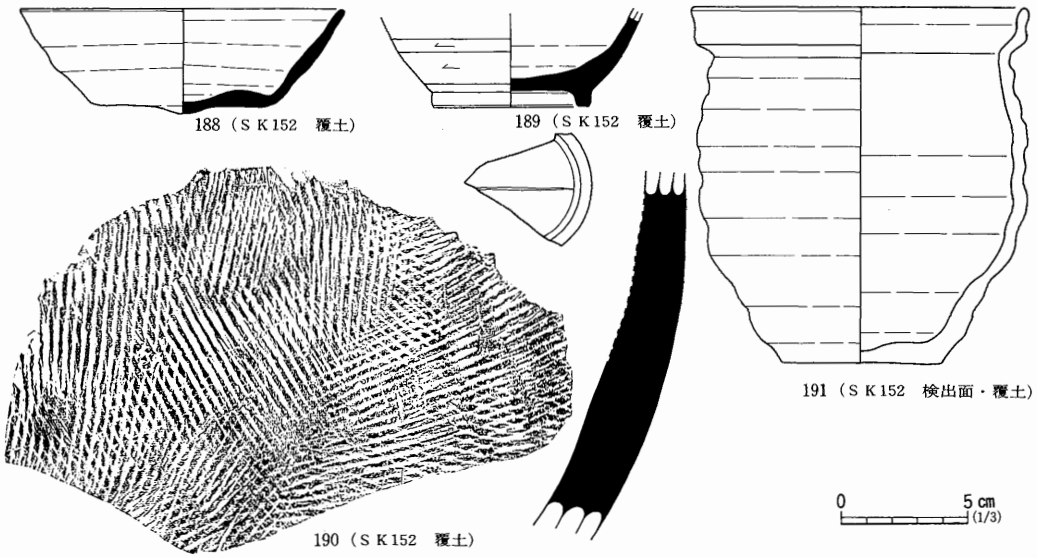
134号土坑　S K134（第94・115図，図版76）

V区I－18グリッドにおいて検出された遺構で，L Ⅲ暗黄褐色砂質シルト層で確認された。本遺構の周囲には133号土坑，5号周溝状遺構などが存在する。平面形は不整円形を呈している。堆積土は黒色シルトと黄灰色シルトの2層に分けられ，ともにパミスが混入している。底面は平坦で，断面形は鍋底形である。

本土坑からは縄文土器片と須恵器の風字硯が出土している。縄文土器は，羽状の縄文が施された鉢であるが，図化出来なかった。風字硯（187）は底部外面周縁にヘラケズリが施されているものである。



第94図　134号土坑出土遺物



第95図　152号土坑出土遺物

本土坑の作られた年代は，出土遺物から平安時代（9世紀代）であると考えられるが，その性格は不明である。　（小野田）

140号土坑　S K140　（第115図）

Ⅴ区J－20グリッドにおいて検出された遺構で，LⅢ暗黄褐色シルト層において確認された。139号土坑と近接するが，重複はしていない。本遺構の上面は攪乱のため，やや不整な円形を呈している。堆積土は黒色シルト・黄灰色シルトの2層に分けられる。遺構の一部が袋状を示すことと，堆積土を考え合わせると本来は袋状の土坑であった可能性がある。底面は平坦で，断面は鍋底形と一部袋状である。

本遺構から出土遺物はなく，時期は不明である。　（小野田）

152号土坑　S K152（第95・116図，図版73・74）

152号土坑は，LⅢ上面で，Ⅴ区北部で検出された。E・F－5グリッドに位置する。152号土坑は46号溝跡に切られ，43号溝跡・61号溝跡を切っている。

平面形は東西に伸びる楕円形状を呈し，長軸が4.33m，短軸が2.03m，深さ86cmを測る。西壁はやや緩やかに立ち上がるが他はやや急な角度で立ち上がる。堆積土は5層に区分した。ℓ3は粘土質のものであり，水中で堆積したものとも考える。他は大部分がパミス・砂を含む暗褐色シルト質土である。すべて自然堆積であろう。

堆積土中より，土師器・須恵器の小片が出土している。図示資料では188が須恵器の杯で，回

転ヘラキリ後ナデが施されている。189は須恵器の高台杯である。191は土師器の甕で，内外面共にロクロナデが施されている。

本土坑は出土遺物より，平安時代の9世紀に機能していたものと考えられる。性格については不明である。（香内）

160号土坑　ＳＫ160　（第117図）

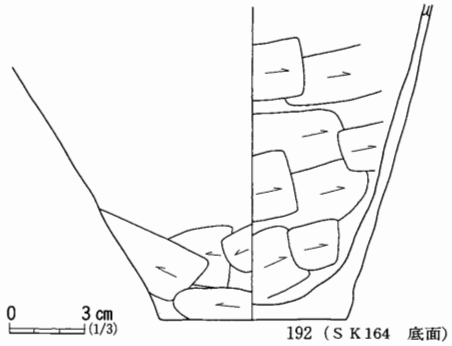
160号土坑は，Ⅴ区の南半部北北西側Ｄ－17グリッドで検出された。約80㎝南側を68号溝跡が東西方向に走っている。他の遺構との切り合い関係は認められなかった。検出面はＬⅢ黄褐色砂質シルトである。規模は上端の長径58㎝，短径が46㎝，下端が46㎝×38㎝で，深さは44㎝を測る。平面プランは隅丸方形を呈している。断面形は箱状で，底面は平坦である。堆積土は2層で，ℓ1は灰褐色砂質シルトで，ℓ2は灰茶褐色砂質シルトである。どちらもパミスを含み，人為堆積土と考えられる。

出土遺物は認められなかった。本土坑の時期および性格については，出土遺物がないため判断できない。（伊藤）

164号土坑　ＳＫ164（第96・117図，図版68）

164号土坑は，Ⅴ区の南半部ほぼ中央のＨ－19グリッドで検出した。検出面はＬⅢ黄褐色砂質シルトであり，東から西に向かってなだらかに傾斜している。70㎝東を57号溝跡が南北に走り，西側は旧河川跡と接している。形状は平面形で上端・下端とも東西方向に僅かに長い楕円形を呈している。規模は，上端の長径136㎝，短径112㎝，下端が112㎝×92㎝を測る。深さは最深部で20㎝を測り，最深部より壁は20°～25°で緩やかに立ち上がっていく。断面形は皿状である。堆積土はパミスを含む暗褐色シルトで，人為堆積土である。

遺物については，弥生土器が出土している。192は甕で，底部から胴部にかけて遺存し，床直上で底部を上にして検出された。胴部は直線的に外傾しながら立ち上がっている。調整は内外面ともにヘラケズリを施し，外面にはナデを行っている。器厚が3㎜と大変薄い。内面にヘラケズリを施していることから考えて，西日本～北陸の影響を受けている可能性が高い。このほか，図示できなかったが，体部上半に刺突文が施された北陸系の土器の影響を受けているものと思われる甕が出土している。



第96図　164号土坑出土遺物

本土坑は，旧河川跡によってかなり削平を受けて

いるものと思われる。出土遺物から，弥生時代末から古墳時代初頭にかけて機能したものと考えられ，性格については，堆積土の状況からゴミ穴の可能性が高い。（伊藤）

202号土坑　ＳＫ202　（第120図）

202号土坑は，Ⅴ区の南側の，Ｆ・Ｇ－20グリッドで検出された。４個のピットが周りを囲むように存在する。東約５ｍには旧河川跡，南西2.6ｍには200号土坑がそれぞれ存在する。検出面はＬⅢ黄褐色砂質シルト上面である。平面形は不整円形を呈し，規模は上端の長径168cm，短径が152cm，下端が72cm×64cmを測る。検出面から底部までの深さは76cmと比較的深い。底面は上面に比べ極端に狭くなり，最深部から上端へは曲線的に立ち上がり，断面形は船底状を呈している。堆積土は５層よりなり，どの層にもパミスを含んでいる。自然堆積土と考えられる。

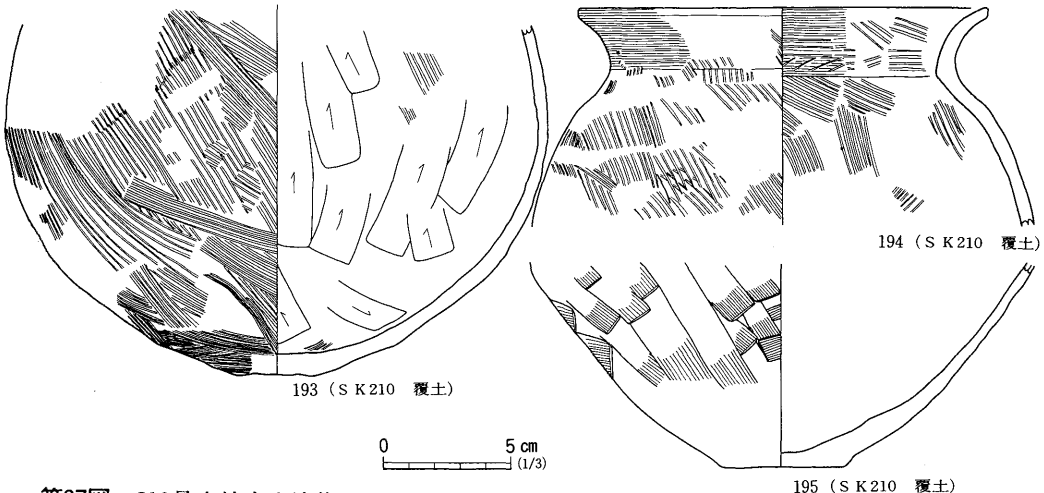
遺物は，どの層からも出土しなかった。本土坑の時期は，出土遺物もないことから判断することはできない。性格については，４つのピットが周りを囲むことから，なんらかの目的で本土坑に屋根をかけ使用した可能性も考えられる。（伊藤）

210号土坑　ＳＫ210（第97・121図，図版68）

210号土坑は，Ⅴ区Ⅰ－７グリッドで検出された遺構で，ＬⅢ暗褐色シルト層において確認された。209号土坑と近接しているが，上面が削られているため，重複関係は明らかでない。また，73号溝跡は遺物の出土状況から考えて，本土坑に切られているものと考えられる。

堆積土は，黒色シルト１層のみである。平面形は不整な楕円形である。底面は平坦で，断面は舟底形を呈している。

本遺構からは，土師器の甕２個体分がつぶれた状態で出土している。193は甕の底部から体部



第97図　210号土坑出土遺物

下半にかけてのものである。底部からハケメによって全体を調整している。内面は強いハケメ調整の跡が見られる。194は甕の体部上半から口縁までのものである。外面はヨコナデされた後，口縁部にかかるほどハケメ調整を施している。内面は，口縁から体部の一部にかけて横位にハケメ調整を施している。193と194は同一個体である可能性が高い。195は甕の底部から体部下半のもので底部が193よりも広く平坦である。外面はヘラナデ，内面はユビナデが施されている。

本遺構の年代は出土した遺物から，古墳時代前期と考えられる。（小野田）

214号土坑　ＳＫ214　（第121図）

214号土坑は，Ｖ区の南半部北側中央のＦ－15グリッドで検出された。北西側に11号井戸跡，南西側に７号周溝状遺構，東側に70号溝跡が位置している。検出面はＬⅢ黄褐色砂質シルトで，切り合い関係は認められなかった。規模は，上端の長径100㎝，短径が80㎝，下端が60㎝×44㎝を測り，平面形で南北にやや長い楕円形を呈している。断面形は鍋底状で深さは上端から底面で48㎝を測る。底面はほぼ平坦といえる。壁面は全体的に急な立ち上がりを見せるが，北側壁は深さ12㎝でテラス状の平坦面を作る。堆積土は２層に分かれ，ℓ１はパミスを含む灰茶褐色シルトである。ℓ２は暗灰褐色シルトで，堆積状況から自然堆積土か人為堆積土かは判断できない。

出土遺物は，土師器杯・甕，須恵器杯・甕である。いずれも破片であり，図示するまでには至らなかった。本土坑は，出土遺物より平安時代（９世紀代）に機能したと考えられるが，性格については不明である。（伊藤）

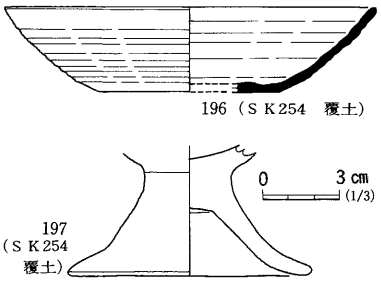
215号土坑　ＳＫ215　（第121図）

215号土坑は，Ｖ区の南半部北側中央Ｆ－14グリッドで検出された。北側に12号特殊遺構，南西側に11号井戸跡，東側に70号溝跡が存在している。検出面はＬⅢ黄褐色砂質シルトで，切り合い関係は認められなかった。規模は，上端幅で80㎝×64㎝，下端幅で44㎝×40㎝を測り，平面形で南北に長い楕円形を呈する。深さは最深部で64㎝を測り，壁は垂直に近い急な立ち上がりを見せる。断面形は鍋底状といえる。堆積土は３層に分層される。ℓ１・ℓ２はパミスを含む茶褐色シルトと灰茶褐色シルトである。ℓ３は暗灰褐色シルトで，堆積状況から自然堆積土か人為堆積土かは判断できない。

出土遺物は，弥生土器片，土師器の杯片，須恵器杯・長頸瓶片である。長頸瓶頸部破片の胎土の中に白色微粒を含むことから，大戸窯址群産の特徴を示しているといえる。本土坑の時期および性格については，平安時代初めから中頃にかけてのゴミ穴と考えられる。（伊藤）

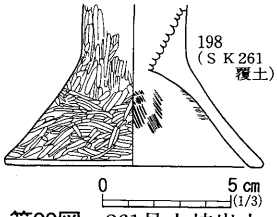
254号土坑　ＳＫ254　(第98・125図)

254号土坑は，Ⅴ区Ｂ－８グリッドに位置し，検出面はＬⅢの上面である。324号土坑を切っている。規模は長径3.24ｍ，短径2.54ｍで平面形は楕円形である。検出面からの深さは20cmと浅く，底面には緩やかな起伏があり，壁もなだらかに立ち上がる。堆積土は単層で炭化物を含む。人為堆積と思われ，本土坑は廃棄坑と考えられる。



第98図　254号土坑出土遺物

出土遺物は２点図示した。堆積土中からの出土である。197は土師器の高杯の脚部で，器面が荒れているため内外面の調整は不明である。古墳時代の遺物と思われる。196は須恵器の杯である。底部は回転ヘラキリの後，ナデて調整している。９世紀後半のものと思われ，本土坑はそれ以降に埋った可能性が強い。　(中野)



第99図　261号土坑出土遺物

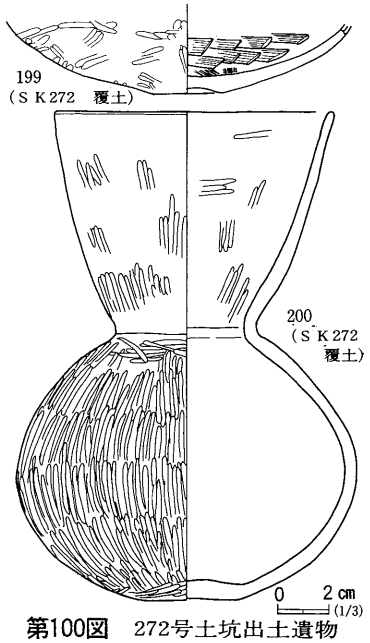
261号土坑　ＳＫ261(第99・126図，図版64)

261号土坑は，Ⅴ区Ｂ－９グリッドに位置し，検出面はＬⅢの上面である。規模は長径1.04ｍ，短径0.94ｍで平面形はほぼ円形に近い。検出面からの深さは35cmで，底面は中心部に向かってなだらかに傾斜している。堆積土は３層に分けられる。ℓ１には炭化物が混入している。198は堆積土中から出土した土師器の高杯である。外面はヘラミガキ，内面はハケメ・ナデによって調整されている。また外面には赤色塗料が塗られている。本土坑は遺物から，古墳時代に埋ったと考えられる。　(中野)

272号土坑　ＳＫ272(第100・127図，図版63)

272号土坑は，Ⅴ区Ｅ－17グリッドで検出され，ＬⅡ黒色シルト下層で確認された。周囲には12号住居跡が隣接している。堆積土は暗黒茶褐色シルト・暗黒色シルトの２層に分けられ，２層ともパミスが混入している。平面形は，ほぼ円形を呈している。底面は北側が高く，南側にいくにしたがって低くなっている。

本土坑からは，小型丸底壺１点，壺底部と甕底部４点，甕口縁部３点，胴部27点が出土している。遺物は，特にℓ２より集中して出土している。うち，図化したものは２点である。200は小型丸底壺で，土坑中段の壁面に接して出土したもの



第100図　272号土坑出土遺物

である。胴部は下膨らみで，頸部から口縁下部にかけては丁寧なヘラミガキがなされ，朱彩されている。口縁内面は，ナデとヘラミガキを併用している。199は壺底部から体部下半にかけてのものである。底部は，ヘラによって円形に窪められている。外面はヘラミガキ，内面はハケメ調整とヘラナデが加えられている。器面は同じ高さできれいに割れており，意識的に割った可能性があると考えられる。図化できなかったもののうち，底部資料には，内外面ハケメ調整で底径の小さいもの，弥生土器の底部などが含まれている。

本土坑の時期は，出土した遺物から考えて古墳時代前期であると考えられる。（小野田）

273号土坑　ＳＫ273　（第127図）

273号土坑は，Ⅴ区の南半部北西側のＤ－16グリッドで検出された。116号溝跡および117号溝跡と重複関係にあり，273号土坑は116号溝跡および117号溝跡を切っている。検出面はＬⅢ黄褐色砂質シルトである。規模は，上端の長径176cm，短径が120cm，下端が164cm×92cmで，深さは28cmを測る。平面プランは滑らかな凹凸のある不整方形を呈している。壁は上端から最深部に向かって東西壁からなだらかに下っていく。そのため断面形は南北方向で鍋底状，東西方向で船底状となる。覆土は３層に別れる。ℓ１は明茶褐色シルトで焼土ブロックを含んでいる。ℓ２は黒褐色砂質シルトである。ℓ３は暗灰黒色シルトで人為堆積土である。

遺物は，土師器杯片および須恵器杯・甕片が多数出土している。小片がほとんどで図示するまでには至らなかった。本土坑は，116号溝跡および117号溝跡に切られており，その出土遺物より平安時代に機能したゴミ穴と考えられる。（伊藤）

274号土坑　ＳＫ274　（第128図）

274号土坑は，Ⅴ区の南半部北西側のＤ－16グリッドで検出された。273号土坑と275号土坑の中間に位置している。115・117号溝跡および12号周溝状遺構と重複関係にあり，274号土坑はそれらを切っている。検出面はＬⅢ黄褐色砂質シルトである。形状は平面形で上端・下端とも北西から南東にかけて長い長方形を呈している。長軸方向はＮ－27°－Ｗである。規模は上端の長軸で172cm，短軸148cm，下端で148cm×108cmを測る。深さは最深部で34cmを測り，底部から上端へは比較的に急な立ち上がりを見せている。堆積土は３層に分層される。ℓ１は暗茶褐色シルト，ℓ２は暗黄褐色砂質シルトで，ℓ３は暗灰黒色シルトである。３層ともにパミスを含んでいる。

出土遺物は，弥生土器片，土師器の杯・甕片，須恵器杯・甕片などである。小片がほとんどで図示するまでには至らなかった。弥生土器片については，12号周溝状遺構と重複関係にあることから流れ込みと考えられる。須恵器甕片の胎土の中に白色微粒を含むことから，大戸窯祉群産の

特徴を示しているといえる。

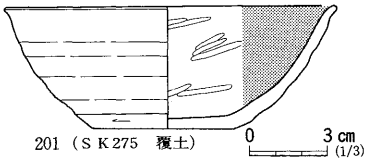
本土坑の時期および性格については，平安時代初めから中頃にかけてのゴミ穴と考えられる。

（伊藤）

275号土坑　ＳＫ275（第101・128図，図版69）

275号土坑は，Ⅴ区の南半部北西側Ｄ－16グリッドで検出された。17号井戸跡と北側で隣接している。12号周溝状遺構と重複関係にあり，12号周溝状遺構を切っていることが確認された。検出面はＬⅢ黄褐色砂質シルトである。平面形は，ほぼ円形といえる。規模は上端の長径128cm，短径が120cm，下端が116cm×100cmで，深さは6cmを測る。断面形はⅢ状で，底面は平坦である。堆積土は１層で，パミスおよび炭化物・焼土を含む暗灰褐色シルトである。堆積土含有物から人為堆積土と考えられる。

出土遺物は，土師器の杯・甕片，須恵器の杯・甕片である。図示資料(201)は内黒の土師器の杯で底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施されている。



第101図　275号土坑出土遺物

本土坑の時期および性格については，平安時代初めから中頃にかけてのゴミ穴と考えられる。

（伊藤）

284号土坑　ＳＫ284　（第129図）

284号土坑は，Ⅴ区の南半部北北西側Ｄ－15グリッドで検出された。288・289号土坑が北側に近接している。本土坑南半部は11号周溝状遺構と重複関係にあり，11号周溝状遺構を切っていることが確認された。検出面はＬⅢ黄褐色砂質シルトである。規模は上端の長径72cm，短径が56cm，下端が60cm×48cmで，平面プランは南北方向にやや長い隅丸方形を呈している。深さは40cmを測り，壁は平坦な底面よりほぼ垂直に立ち上がっていく。堆積土は３層に分けられる。ℓ１は暗褐色シルトである。ℓ２は炭化物・灰を含む暗灰黒褐色シルト・ℓ３は暗褐色砂質シルトである。ℓ１・３はパミスを含んでいる。

出土遺物は，土師器の杯・甕片，須恵器の杯片であり，ℓ２から出土している。いずれも小片であるため図示していない。本土坑の時期および性格については，平安時代初めから中頃にかけてのゴミ穴と考えられる。

（伊藤）

288号土坑　ＳＫ288　（第129図）

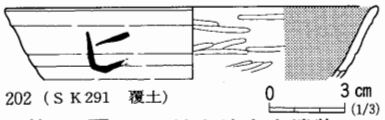
288号土坑は，Ⅴ区の南半部北北西側Ｄ－15グリッドで検出された。約１ｍ内に284・287・289号土坑が近接しているとともに，13号周溝状遺構が南側約60cmに位置している。検出面はＬⅢ黄褐

色砂質シルトである。形状は平面形で上端・下端とも北西から南東にかけて長い不整長方形を呈している。規模は上端で76cm×44cm，下端で64cm×36cmを測る。深さは最深部で32cmを測り，南壁は北壁に比べ鋭く立ち上がっていく。底面はほぼ平坦であり，断面形は鍋底状と言える。堆積土は１層で，パミスおよび細砂粒を含む灰褐色砂質シルトで人為堆積土である。

出土遺物は，土師器の杯，須恵器の杯であるが，いずれも小さな破片である。出土遺物より平安時代に機能したと考えられるが，性格については不明である。（伊藤）

291号土坑　ＳＫ291　（第102・129図）

291号土坑は，Ⅴ区Ｅ－12グリッドに位置し，検出面はＬⅢの上面である。規模は長径2.66m，短径1.08mで平面形は不整楕円形である。検出面からの深さは24cmで，底面は中心部に向かって緩やかに傾斜している。壁は西側では比較的急に立ち上がる。堆積土は２層で大部分はℓ１の黒褐色粘質シルトである。暗黄褐色シルトや暗褐色粘質シルトをブロック状に含んでおり，ℓ２には炭化物が混入している。人為堆積の可能性があると思われる。



第102図　291号土坑出土遺物

遺物として202の土師器の杯がある。内面はヘラミガキで調整し，黒色処理を施している。また，体部には「比」の墨書がある。遺物から，本土坑が埋ったのは９世紀以降と考えられる。（中野）

第38表　土坑一覧表

土坑番号	挿図番号	位置 区	位置 グリッド	平面形	規模 (cm) 長軸	短軸	深さ	堆積状況	出土遺物	遺物挿図	時期	備考（重複関係）旧 → 新
1	103	Ⅰ	X－6	不整方形	76	62	13	自然	土師器・須恵器	132	平安	
2	103	Ⅰ	W－6	隅丸方形	66	55	11	人為	弥生土器	132	弥生中期	
3	103	Ⅱ	T－3	円形	101	97	31	自然	縄文土器		縄文	
4	103	Ⅱ	T－3	楕円形	73	61	23	自然	縄文土器	132	縄文	
5	103	Ⅱ	S－1	楕円形	82	68	14		縄文土器		縄文	
6	103	Ⅱ	S－3	隅丸方形	51	48	9	人為	縄文土器	132	縄文	
7	103	Ⅱ	R－2	隅丸方形	218	165	44	人為	土師器	132	平安	
8	103	Ⅱ	S－3・S－4	楕円形	144	91	23	人為	土師器		平安	
9	103	Ⅱ	S－3	不整形	194	200	46	人為	土師器・須恵器	133	平安	
10	103	Ⅱ	R－3・S－3	隅丸長方形	230	155	27	人為	土師器		平安	
11	104	Ⅱ	R－3	不整楕円形	189	147	43	人為	土師器・須恵器	79	平安	
12	104	Ⅱ	R－2	隅丸方形	115	91	18	人為	土師器	133	平安	
13	104	Ⅱ	R－2	不整隅丸長方形	400	165	49	人為	土師器・須恵器	80	平安	
14	104	Ⅱ	R－2	楕円形	81	51	17	人為	土師器		平安	SD08→SK14
15	104	Ⅲ	O－15	不整楕円形	210	138	16	人為	弥生土器・土師器	133		
16	104	Ⅲ	O－15・O－16	隅丸長方形	156	106	15	人為	縄文土器			
17	104	Ⅲ	O－17・P－17	円形	112	97	34	人為	縄文土器			
18	105	Ⅲ	O－19	不整円形	221	208	42	人為	弥生土器	81・82	弥生中期	
19	105	Ⅲ	O－19	円形	75	73	59	自然	弥生土器		弥生中期	
20	105	Ⅲ	N－17	隅丸方形	69	54	52	人為				
21	105	Ⅲ	O－16・P－16	不整円形	176	100	11	自然	弥生土器	83	弥生後期	
22	105	Ⅲ	O－17・P－17	不整形	522	135	46	人為	土師器	133	平安	
23	105	Ⅲ	O－15	円形	66	66	24	自然	弥生土器			
24	105	Ⅲ	O－15	隅丸方形	62	50	25	自然	弥生土器	133		
25	105	Ⅲ東	Q－16	不整楕円形	200	139	38	人為	弥生土器	133	弥生中期	
26	106	Ⅲ東	Q－15	隅丸方形	93	85	19	人為	弥生土器			
27	106	Ⅲ東	Q－15	不整形	159	108	19	人為	弥生土器		弥生中期	
28	106	Ⅲ	K－11	円形	113	113	25	自然	縄文土器			
29	106	Ⅲ	N－15	不整方形	114	97	37	人為	縄文土器	134	縄文	
30	106	Ⅲ	N－15	隅丸方形	150	109	51	自然	縄文土器	134	縄文	SK30→SD11
31	106	Ⅲ	N－16	不整方形	148	124	36	自然				
32	106	Ⅲ	L－12・K－12	不整楕円形	402	319	40	人為	土師器・須恵器	84	平安	SK32→SD50
33	107	Ⅲ	M－15・L－15	円形	139	123	65	自然				
34	107	Ⅳ	L－32・K－32	不整楕円形	200	135	16		弥生土器・土師器	85	古墳前期	
35	107	Ⅳ	L－32・K－32	不整形	270	92	16		弥生土器		古墳前期	SK35→SI02
36	107	Ⅳ	L－31	不整形	200	68	23	自然				
37	107	Ⅳ	K－32	不整楕円形	121	95	10		弥生土器・土師器	85 86	古墳前期	SK37→SI02
38	107	Ⅳ	L－31	隅丸方形	97	83	27	人為		138		
39	107	Ⅴ	I－23	隅丸方形	123	103	18	自然	弥生土器	134	弥生後期	SK39→SK115→SK43
40	107	Ⅴ	J－22	不整長方形	78	48	12		弥生土器			
41	107	Ⅴ	K－25	不整形	(96)	81	19					
42	108	Ⅴ	K－26	円形	130	127	37	自然				
43	107	Ⅴ	I－23	不整方形	156	108	24	自然	弥生土器	86	弥生後期	SK39→SK115→SK43
44	108	Ⅴ	J－21	不整形	73	57	9	人為				
45	108	Ⅲ	N－10	円形	126	117	28	自然			縄文	
46	108	Ⅲ	N－10	円形	110	98	40	人為	縄文土器		縄文	

土坑番号	挿図番号	位置 区	位置 グリッド	平面形	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	規模(cm) 深さ	堆積状況	出土遺物	遺物挿図	時期	備考(重複関係) 旧→新
47	108	Ⅲ	N－10	隅丸方形	126	124	31	自然	縄文土器		縄文	
48	108	Ⅲ	N－10	隅丸方形	119	100	54	人為	縄文土器	134	縄文	SD31→SK48
49	108	Ⅲ	N－10	不整形	80	57	50				縄文	SD31→SK49
50	108	Ⅲ	O－11	円形	97	97	37	自然	縄文土器	134	縄文	SD31→SK50
51	108	Ⅲ	M－9	隅丸方形	90	(86)	36	自然			縄文	
52	108	Ⅲ	N－11	不整方形	107	84	36					SK52→SD34
53	108	Ⅲ	K－15	不整長方形	120	112	61	自然	弥生土器	134	弥生	SK53→SD10
54	108	Ⅲ	L－9	不整長方形	128	97	25	人為	土師器			
55	109	Ⅲ	L－11	不整長方形	153	108	33	人為	土師器		平安	
56	109	Ⅲ	L－10・L－11	不整方形	158	135	39	人為	土師器	134	平安	
57	109	Ⅴ	I－25	隅丸方形	95	80	32	自然				
58	109	Ⅴ	I－23	不整形	79	53	18	自然	弥生土器・土師器	134		
59	109	Ⅴ	I－23	不整長方形	360	188	20	人為	弥生土器・土師器	87	古墳前期	SK59→SK75
60	109	Ⅴ	I－23・24	不整形	154	44	9		弥生土器・土師器			
61	109	Ⅴ	I－22	隅丸長方形	249	87	20	自然	弥生土器・土師器	134		
62	109	Ⅴ	I－22	不整形	102	58	17		弥生土器・土師器	134		
63	109	Ⅴ	I－21・I－22	不整形	180	104	28	自然	弥生土器	135		10号周溝→SK63
64	110	Ⅴ	I－24・25	不整形	357	77	16		弥生土器・土師器	135	古墳前期	
65	110	Ⅴ	H－22	不整方形	184	131	14	人為	弥生土器・土師器	135	古墳前期	
66	110	Ⅴ	I－22	不整形	171	90	20	自然				
67	110	Ⅴ	I－22	不整形	180	72	19	自然	弥生土器	135	弥生後期	SK68→SK67
68	110	Ⅴ	I－22	隅丸方形	134	126	40	自然	弥生土器	135	弥生後期	SK68→SK67
69	110	Ⅴ	I－22	不整長方形	97	59	9		土師器			
70	110	Ⅴ	I－22	不整形	127	89	21	自然	土師器	135	古墳前期	10号周溝→SK70
71	110	Ⅴ	I－22	不整長方形	265	50	13	人為				
72	110	Ⅴ	I－22	隅丸方形	56	52	28	人為	土師器	88	古墳前期	
73	110	Ⅴ	C－12	円形	57	53	25					
74	110	Ⅴ	I－22	不整形	130	88	27		弥生土器	135		
75	109	Ⅴ	I－22・23	不整形	273	70	28	自然	弥生土器	136	弥生	SK59→SK75
76	110	Ⅴ	I－22	不整形	216	143	52	自然	弥生土器	136	弥生	SK76→SK68
77	111	Ⅴ	J－23	不整形	70	62	41	自然				SK 111→SK77
78	111	Ⅲ	P－14	不整円形	51	(31)	38	自然				
79	111	Ⅲ	P－14	隅丸方形	58	47	45	自然				
80	111	Ⅲ	P－14	不整形	70	43	44	自然				
81	111	Ⅲ	P－14・O－14	楕円形	112	93	45	人為				
82	111	Ⅲ	P－14・O－14	円形	136	116	72	自然	縄文土器	136 137	縄文	
83	111	Ⅲ	P－14	不整楕円形	65	55	34	自然	縄文土器		縄文	
84	111	Ⅲ	O－14	円形	76	74	52	人為				
85	111	Ⅲ	O－14	隅丸方形	66	59	26	自然				
86	111	Ⅲ	O－14	楕円形	90	79	14	自然				
87	111	Ⅲ	O－14	不整形	58	43	35	自然				
88	111	Ⅲ	O－14	不整長方形	94	57	42	自然				
89	111	Ⅲ	O－14	円形	49	47	53	自然	弥生土器			
90	111	Ⅲ	O－14	不整形	123	84	31	自然				
91	111	Ⅲ	O－13	隅丸方形	92	78	25	自然				
92	111	Ⅲ	O－13	不整楕円形	173	133	50	自然	縄文土器	137		

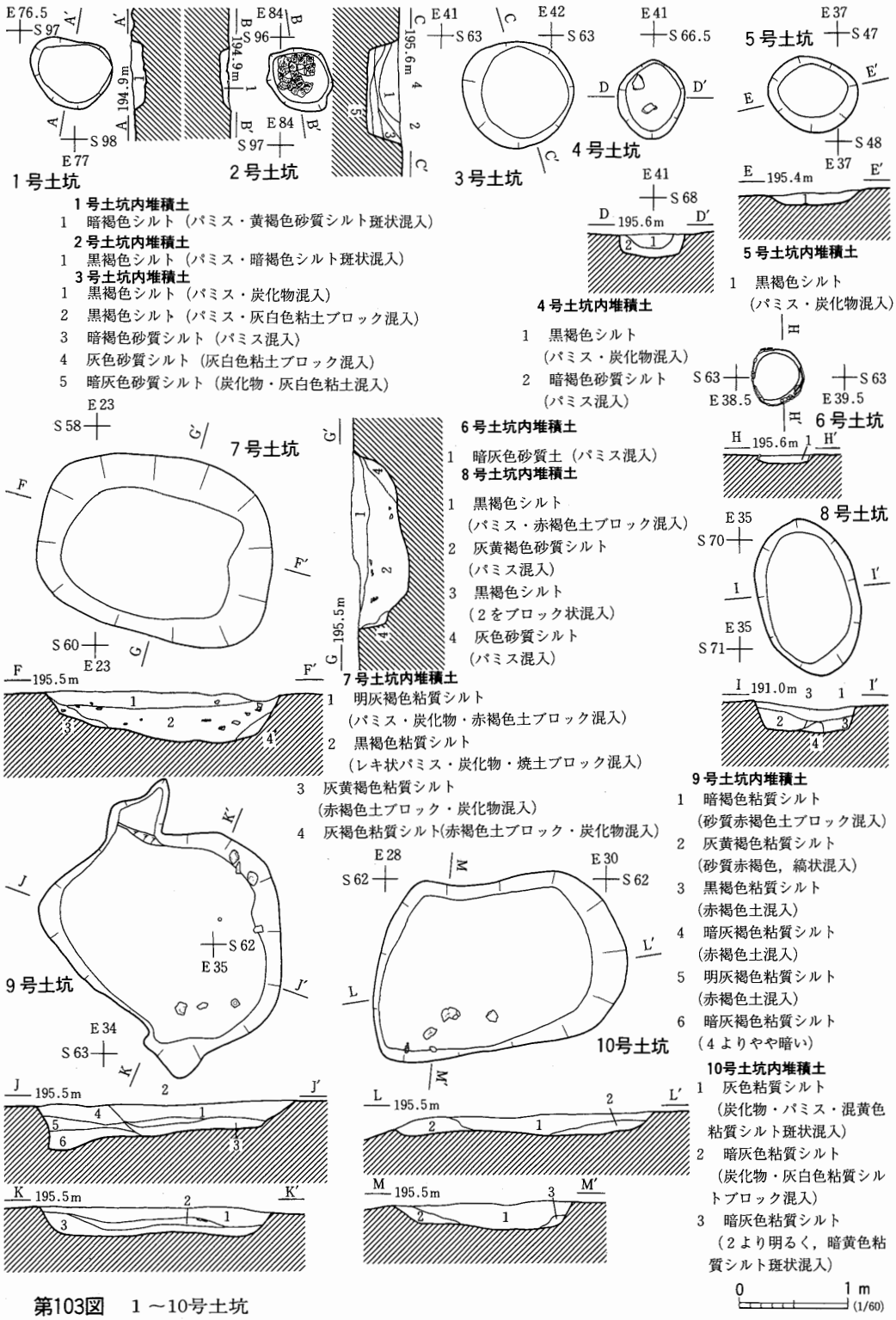
土坑番号	挿図番号	位置 区	位置 グリッド	平面形	規模 (cm) 長軸	規模 (cm) 短軸	規模 (cm) 深さ	堆積状況	出土遺物	遺物挿図	時期	備考（重複関係）旧→新
93	112	Ⅲ	O－13・O－14	不整円形	77	58	27	自然				
94	112	Ⅲ	O－13	円形	67	65	23	自然				
95	112	Ⅲ	N－14	不整形	118	99	13	人為				
96	112	Ⅲ	L－8	不整形	88	43	22	自然		137		
97	112	Ⅲ	L－8	不整長方形	240	68	34	自然	弥生土器	137		S K97→S B07
98	112	Ⅲ	L－8	隅丸方形	122	86	24	人為				S K98→S B07
99	112	Ⅲ	L－9	不整楕円形	212	152	52	人為	弥生土器	137		S K99→S B07
100	112	Ⅲ	J－9	不整楕円形	115	110	44	自然				
101	112	Ⅲ	O－11	円形	80	70	33	自然	弥生土器			
102	112	Ⅲ	N－12	不整形	151	90	14	自然	土師器			
103	112	Ⅲ	N－12	不整形	159	47	19	人為	土師器・須恵器	137		
104	112	Ⅲ	N－11・N－12	円形	114	110	45	自然				
105	112	Ⅲ	O－11・N－11	楕円形	130	109	44	自然		137		
106	112	Ⅲ	O－11・N－11	楕円形	84	75	34	自然		137		
107	113	Ⅲ	N－11	不整方形	145	117	72	自然	弥生土器			
108	113	Ⅲ	L－12・L－13	不整楕円形	256	208	28	人為	土師器	89	平安	S D50→S K108
109	113	Ⅲ	N－11・12	不整形	381	90	15	人為				
110	113	Ⅴ	K－23	隅丸方形	137	113	67	自然		138		
111	111	Ⅴ	J－22・23	隅丸長方形	(157)	133	24			138		S K111→S K77
112	113	Ⅴ	J－22	不整形	176	142	55	自然		90		
113	113	Ⅴ	K－25・26	隅丸方形	91	88	40	自然		138		S K113→S D22
114	113	Ⅴ	K－25	隅丸長方形	(139)	69	25	自然				S K114→S D22
115	107	Ⅴ	I－23	楕円形	86	60	24	自然	弥生土器		弥生後期	S K39→S K115→S K43
116	113	Ⅴ	H－16	円形	149	126	34	人為			近代	
117	114	Ⅴ	H－15	不整方形	69	63	34	自然				
118	114	Ⅴ	D－12	不整方形	146	113	23	自然		141		
119	114	Ⅴ	K－19	隅丸方形	77	73	28	自然				
120	114	Ⅴ	J－18	不整形	56	31	11	自然				
121	114	Ⅲ	M－11	円形	88	80	40	自然	縄文土器	91	縄文晩期	
122	114	Ⅲ	L－13・K－13	不整円形	147	(79)	14	自然				
123	114	Ⅴ	J－20	不整形	49	26	19					
124	114	Ⅴ	J－19	隅丸方形	58	54	13	自然				
125	114	Ⅲ	J－9	隅丸長方形	73		26	自然	土師器・須恵器	138		
126	114	Ⅴ	J－20	不整方形	88	80	53	自然	土師器	92	古墳前期	3号周溝→S K126
127	114	Ⅴ	J－18	不整形	153	121	57	人為				
128	114	Ⅴ	J－18	不整形	59	43	15	自然				
129	114	Ⅴ	J－19	楕円形	100	59	6	自然	土師器・須恵器			
130	114	Ⅴ	J－19	不整形	78	46	12	自然				
131	114	Ⅴ	J－18・J－19	円形	106	99	56	人為				
132	114	Ⅴ	J－18・J－19	隅丸方形	144	128	67	人為				
133	114	Ⅴ	I－19	円形	102	95	30	自然	弥生土器・土師器	93	古墳前期	
134	115	Ⅴ	I－18	不整円形	143	135	51	自然	縄文土器・須恵器	94	平安	
135	115	Ⅴ	J－19	円形	110	103	65	自然				
136	115	Ⅴ	I－19	隅丸方形	86	78	26	自然				
137	115	Ⅴ	K－19	隅丸方形	76	63	20	自然				
138	115	Ⅴ	K－20	円形	82	80	25	自然				
139	115	Ⅴ	J－20	不整形	127	89	48	自然				

土坑番号	挿図番号	位置 区	位置 グリッド	平面形	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	規模(cm) 深さ	堆積状況	出土遺物	遺物挿図	時期	備考(重複関係) 旧→新
140	115	Ⅴ	J－20	不整円形	159	143	53	自然				
141	115	Ⅴ	J－20	隅丸方形	81	77	32	自然	弥生土器		弥生	
142	115	Ⅴ	J－20	不整円形	45	40	18	人為			近代	
143	115	Ⅴ	K－20	長方形	76	33	11	人為			近代	
144	115	Ⅴ	I・J－20	円形	128	123	26	自然				
145	115	Ⅴ	J－20	方形	42	39	7	自然				
146	115	Ⅴ	K－20	不整形	149	51	16	自然				
147	116	Ⅴ	J－18	不整方形	150	125	61					
148	115	Ⅴ	F－3	不整形	250	86	31	自然				
149	116	Ⅴ	E－3	隅丸長方形	316	45	38	自然				
150	116	Ⅴ	E－3	隅丸長方形	208	51	34	自然				
151	116	Ⅴ	D－4・D－5	不整形	314	104	53	自然				SK151→SD54
152	116	Ⅴ	F－5・E－5	楕円形	433	203	86	自然	土師器・須恵器	95	平安	SD43,61→SK152→SD46
153	116	Ⅴ	E－5	隅丸方形	62	54	24	自然	土師器・須恵器	138 139		
154	117	Ⅴ	E－5	隅丸方形	75	69	59	人為				
155	117	Ⅴ	E－5	不整形	310	100	48	自然				SK155→SD46
156	117	Ⅴ	F－7	隅丸方形	59	57	29	人為				
157	117	Ⅴ	I－15	隅丸方形	42	37	50	自然				
158	117	Ⅴ	E－7	円形	112	105	57	人為	土師器・須恵器			
159	117	Ⅴ	E－7	楕円形	95	70	33	人為	須恵器	139		
160	117	Ⅴ	D－15	隅丸方形	58	46	44	人為				
161	117	Ⅴ	E－7	隅丸長方形	113	46	30	自然	土師器・須恵器	139		
162	117	Ⅴ	F－7	不整方形	65	46	35	人為	土師器・須恵器			
163	117	Ⅴ	J－15	不整方形	129	102	53	自然				
164	117	Ⅴ	H－19	楕円形	136	112	20	人為	弥生土器	96	弥生後期	SK164→旧河跡
165	117	Ⅴ	G－19	円形	95	95	41	人為				SK165→旧河跡
166	117	Ⅴ	I－15	不整形	115	51	18	自然				
167	118	Ⅴ	E－8・D－8	不整長方形	472	81	9	自然	土師器・須恵器			
168	118	Ⅴ	D－8	楕円形	173	85	22	人為	土師器・須恵器			
169	118	Ⅴ	G－10・F－10	隅丸方形	110	91	17	自然	土師器・須恵器	139		
170	118	Ⅴ	F－6	隅丸長方形	77	39	11					
171	118	Ⅴ	E－6・E－7	不整長方形	268	59	33		土師器・須恵器	139		
172	118	Ⅴ	E－6	不整方形	109	65	20	人為	土師器・須恵器	139 140		
173	118	Ⅴ	E－6	隅丸方形	75	48	15	人為				
174	118	Ⅴ	E－6	隅丸方形	77	73	9	人為	土師器・須恵器			SK234→SK174
175	118	Ⅴ	D－7	隅丸方形	107	87	13	自然				
176	118	Ⅴ	C－6	楕円形	119	91	28	自然	土師器・須恵器	140		
177	113	Ⅴ	K－25	隅丸長方形	73	49	14	自然		140		
178	118	Ⅴ	D－5・D－6	不整楕円形	315	200	31	人為				
179	119	Ⅴ	E－9	隅丸方形	134	103	29	人為	土師器・須恵器			
180	119	Ⅴ	I－15	隅丸方形	56	46	15	自然				
181	119	Ⅴ	E－12	不整長方形	113	72	46	自然				SK181→SB25
182	119	Ⅴ	F－9・F－10	不整長方形	434	110	28	人為	弥生土器・土師器	140		
183	119	Ⅴ	F－9	隅丸方形	158	157	21	自然	土師器・須恵器	140		
184	119	Ⅴ	F－9・E－9	不整形	160	80	25	自然				
185	119	Ⅴ	E－8・E－9	隅丸長方形	250	125	30	自然	土師器・須恵器	140		SD80→SK185
186	119	Ⅴ	E－9	隅丸方形	85	82	41	自然	土師器・須恵器			

土坑番号	挿図番号	位置 区	位置 グリッド	平面形	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	規模(cm) 深さ	堆積状況	出土遺物	遺物挿図	時期	備考(重複関係) 旧→新
187	119	V	D－9	楕円形	117	90	25	人為	土師器	141		
188	119	V	H－17	隅丸長方形	65	32	13	自然				
189	119	V	H－16	隅丸長方形	99	41	15	自然	土師器・須恵器	141		
190	119	V	C－10	隅丸方形	129	103	48					
191	120	V	G－19	隅丸方形	60	59	29	人為				SK191→SD55
192	120	V	G－19	隅丸方形	85	82	30	人為				SK192→SD55
193	120	V	E－12	方形	50	43	21	人為	弥生土器			柱穴
194	120	V	F－21	楕円形	74	50	17	自然				
195	120	V	F－21	隅丸方形	62	62	12	自然	弥生土器			
196	120	V	F－21	不整形	141	109	25	自然	土師器			
197	120	V	E－6	不整形	97	50	14	人為		141		SK197→SD70
198	120	V	F－20	不整形	145	108	20	自然	弥生土器			
199	120	V	F－21	隅丸長方形	100	49	11	自然				
200	120	V	F－20・21	不整長方形	231	66	8	自然	弥生土器			
201	120	V	C－12	円形	46	43	31		土師器・須恵器			
202	120	V	F－20・G－20	不整円形	168	152	76	自然				
203	120	V	G－19	不整方形	107	98	36					SK203→SD56
204	121	V	G－19	隅丸方形	79	77	23	自然				
205	121	V	G－18・19	隅丸長方形	183	85	21	自然	土師器			
206	121	V	F－18	不整方形	37	28	23	自然				
207	121	V	F－20・G－20	不整形	257	99	19	自然	土師器			
208	121	V	G－21	不整形	141	94	16	自然	弥生土器			
209	121	V	J－17	隅丸方形	81	71	15	自然				SD73→SK209
210	121	V	I－17	不整楕円形	66	42	17		土師器	97	古墳前期	SD73→SK210
211	121	V	I－18	不整形	98	70	16	自然	弥生土器			5号周溝→SK211
212	121	V	I－20	隅丸方形	101	97	13	自然				
213	121	V	E－15	隅丸方形	108	50	17					
214	121	V	F－15	楕円形	100	80	48	自然	土師器・須恵器		平安	
215	121	V	F－14	楕円形	80	64	64	自然	弥生土器・土師器・須恵器		平安	
216	122	V	E－15	不整形	153	－	37	人為	弥生土器・土師器		平安	SD68,13号周溝→SK216
217	122	V	E－15	楕円形	74	39	37	人為	土師器・須恵器		平安	ゴミ穴
218	122	V	E－15	隅丸方形	101	90	23	自然	弥生土器・土師器	141	平安	SK218→SD68
219	122	V	E－19	円形	62	59	31	自然	弥生土器	141	弥生	
220	122	V	E－10	楕円形	101	84	65	人為	土師器・須恵器			
221	122	V	E－10	隅丸方形	85	78	30		土師器・須恵器	141		
222	122	V	F－11	不整方形	140	125	29	人為	土師器・須恵器			
223	122	V	F－11	不整形	(206)	115	21	人為				SK223→SD70
224	122	V	F－11	隅丸長方形	152	63	21		土師器	141		
225	122	V	E－12	不整方形	179	139	18	人為				
226	122	V	F－10	楕円形	73	64	58	人為				
227	123	V	C－12	隅丸方形	56	52	29		土師器・須恵器			
228	123	V	E－11	円形	104	93	19	自然	弥生土器	141		
229	123	V	D－11・D－12	楕円形	130	86	40	人為	土師器・須恵器			SE10→SK229
230	123	V	E－10	隅丸長方形	179	33	7	人為				
231	123	V	F－8	不整形	81	73	21	自然				
232	123	V	E－12	不整方形	160	128	25	人為	土師器・須恵器	141		
233	123	V	I－17・18	不整形	68	55	23					SK233→SD73

土坑番号	挿図番号	位置 区	位置 グリッド	平面形	規模 (cm) 長軸	規模 (cm) 短軸	規模 (cm) 深さ	堆積状況	出土遺物	遺物挿図	時期	備考（重複関係） 旧 → 新
234	123	Ⅴ	E－6	不整形	167	82	23	人為				SK234→SK174
235	123	Ⅴ	B－6	隅丸方形	102	96	17	人為	土師器・須恵器	142	平安	
236	123	Ⅴ	C－6	不整形	136	86	25	人為	土師器			
237	123	Ⅴ	C－5・C－6	円形	100	90	49	人為	土師器・須恵器	142		
238	124	Ⅴ	B－6	円形	61	59	12	自然	土師器・須恵器			
239	123	Ⅴ	B－6	隅丸長方形	595	132	45	人為	土師器・須恵器			SK239→SD70
240	124	Ⅴ	D－13	不整長方形	141	75	33	自然				SK240→SB19・SB20
241	124	Ⅴ	D－13	不整形	153	115	34	人為				9号周溝→SK241
242	124	Ⅴ	F－13	不整形	265	90	37	自然				SK242→SB26
243	124	Ⅴ	D－13	不整方形	136	122	24	自然				SK243→SK244
244	124	Ⅴ	D－13	隅丸方形	66	56	37	自然				SK243→SK244
245	124	Ⅴ	E－12	隅丸方形	73	58	36	自然	土師器・須恵器			SB24→SK245
246	124	Ⅴ	E－12	隅丸方形	62	47	32	人為				
247	124	Ⅴ	E－12	隅丸方形	77	69	13	自然				SD165→SK247
248	124	Ⅴ	E－12	隅丸方形	57	－	21	自然				SK248→SB25
249	124	Ⅴ	E－12	隅丸方形	－	73	9	自然				SD165→SK249→SB25
250	124	Ⅴ	C－7・B－7	不整方形	97	91	48	人為	土師器・須恵器			SK250→SB25
251	125	Ⅴ	C－6	不整形	487	159	38	人為				SD70・畝状遺構→SK251
252	125	Ⅴ	B－6・B－7	不整形	(520)	168	21	人為	土師器・須恵器	142		SK252→SD120→SD70
253	124	Ⅴ	D－6	不整形	261	77	27	人為	土師器・須恵器			SK253→SD70
254	125	Ⅴ	B－8	楕円形	324	254	20	人為	土師器・須恵器	98	平安	SK294→SK254
255	125	Ⅴ	C－8・B－8	楕円形	239	228	19	人為	土師器・須恵器	142		
256	125	Ⅴ	B－7	楕円形	179	106	27	人為	土師器・須恵器			
257	126	Ⅴ	B－8	不整長方形	193	97	22	人為	土師器・須恵器			
258	126	Ⅴ	A－7	円形	84	－	18	自然				
259	126	Ⅴ	B－8	隅丸長方形	337	134	32	人為				
260	126	Ⅴ	C－8・C－9	不整形	402	109	31	自然	土師器・須恵器	142		
261	126	Ⅴ	B－9	円形	104	94	35	人為	土師器	99	古墳	
262	126	Ⅴ	B－9	不整形	438	47	25	人為				
263	126	Ⅴ	C－12	楕円形	106	70	34		土師器・須恵器	143		
264	126	Ⅴ	B－8	不整形	150	65	14	自然				
265	126	Ⅴ	D－13	不整方形	74	56	42	自然	土師器			SK265→用水路
266	127	Ⅴ	D－9	半円形	95	－	60	人為				SK266→用水路
267	127	Ⅴ	E－13	不整形	105	94	53	自然				SK267→SB22
268	127	Ⅴ	C－11	円形	138	123	69	自然(＋人為)	土師器・須恵器	143		SD138→SK268
269	127	Ⅴ	C－10	長方形	271	157	12	自然	土師器			SD131→SK269
270	127	Ⅴ	F－16	不整形	145	105	14	自然	土師器	143		SK270→SD79
271	127	Ⅴ	E－18	不整方形	89	83	42	自然				
272	127	Ⅴ	E－17	円形	104	84	64	自然	弥生土器・土師器	100	古墳前期	
273	127	Ⅴ	D－16	不整方形	176	120	28	人為	土師器・須恵器		平安	SD116・117→SK273
274	128	Ⅴ	D－16	長方形	172	148	34	自然	弥生土器・土師器・須恵器			SD115・117・12号周溝→SK274
275	128	Ⅴ	D－16	円形	128	120	6	人為	土師器・須恵器	101	平安	12号周溝→SK275
276	128	Ⅴ	D－16	不整方形	84	68	30	自然	土師器・須恵器			SK277→SK276
277	128	Ⅴ	D－16	不整方形	62	54	51	自然	土師器			SK277→SK276
278	128	Ⅴ	D－16	不整長方形	175	69	43	自然	土師器・須恵器			SD147→SK278
279	128	Ⅴ	D－15・16	円形	122	110	45	人為	土師器・須恵器			SX15→SK279
280	128	Ⅴ	E－13	楕円形	58	50	35	人為				(柱穴)

土坑番号	挿図番号	位置 区	位置 グリッド	平面形	規模 (cm) 長軸	規模 (cm) 短軸	規模 (cm) 深さ	堆積状況	出土遺物	遺物挿図	時期	備考（重複関係） 旧 → 新
281	128	V	D－16	楕円形	134	113	30	自然	弥生土器	143		S D115→S K281
282	128	V	C－10	楕円形	226	137	25	人為	土師器・須恵器			
283	128	V	D－16	不整形	96	68	50	人為	土師器			
284	129	V	D－15	隅丸方形	72	56	40	人為	土師器・須恵器		平安	11号周溝→S K284
285	129	V	E－8	隅丸長方形	(85)	65	44	人為	土師器・須恵器	143		S K285→S E12
286	129	V	D－17	円形	113	106	16	人為				
287	129	V	D－14	隅丸方形	93	70	63	人為	土師器・弥生土器	143		S D113→S K287
288	129	V	D－15	不整長方形	76	44	32	人為	土師器・須恵器		平安	
289	129	V	D－14・D－15	楕円形	60	47	42					
290	129	V	F－12	隅丸方形	99	85	50	自然	土師器・須恵器			S D70→S K290
291	129	V	E－12	不整楕円形	266	108	24	人為	土師器・須恵器	102	平安	S D169→S K291
292	129	V	F－12	隅丸方形	101	93	22	自然				S K292→S D70
293	130	V	C－11	不整方形	222	175	42	自然	土師器・須恵器			S D138→S K293
294	129	V	C－8・B－8	不整形	(498)	165	19	人為				S K294→S K254
295	130	V	B－8	不整形	(412)	159	24	人為	土師器・須恵器			S D43→S K295
296	130	V	D－13	隅丸方形	90	70	51	人為	土師器・須恵器			
297	130	V	D－13	隅丸方形	55	46	25	自然	土師器・須恵器			
298	130	V	D－12	隅丸方形	73	66	20	自然				S D165→S K298
299	130	V	E－13	不整方形	93	90	62	人為				S K299→S B25
300	130	V	E－13	隅丸方形	76	59	51	自然	弥生土器・土師器			
301	130	V	E－16・17	不整形	(191)	152	37	自然	土師器・須恵器		平安	S K301→S D118
302	130	V	D－16	隅丸長方形	128	83	28	人為	土師器・須恵器		平安	12号周溝→S K302
303	130	V	D－16	不整形	(120)	(60)	18	自然				
304	130	V	E－14	楕円形	133	113	10	自然	弥生土器		平安	
305	131	V	E－16	不整方形	(70)	70	49	自然	土師器		平安	S K305→S D115
306	131	V	D－15	楕円形	83	(61)	26	人為				11号周溝→S D306
307	131	V	D－16	不整形	315	(139)	54	自然	須恵器・弥生土器		平安	12号周溝→S K307 →S X11・S D144
308	131	V	D－13	方形	62	65	44	自然				S K316→S K308
309	131	V	E－12	不整方形	(46)	66	34	人為				S D152→S K309
310	131	V	D－13	不整方形	48	46	22	人為	土師器・須恵器			S K310→S B25
311	131	V	F－13	隅丸方形	73	53	33	人為				S D168→S K311
312	131	V	E－13	不整方形	67	62	41	人為				
313	131	V	E－12	不整方形	85	75	47	人為				S K314→S K313
314	131	V	E－12	不整形	(62)	(33)	26	自然				S K314→S K313
315	131	V	D－13	方形	52	42	47					S D165→S K315
316	131	V	D－13	隅丸方形	80	69	36	人為				S K316→S K308
317	131	V	G－14	不整形	220	102	7					S K317→S X12
318	131	V	I－15	不整形	128	45	16	自然	土師器			



1号土坑内堆積土
1　暗褐色シルト（パミス・黄褐色砂質シルト斑状混入）

2号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト（パミス・暗褐色シルト斑状混入）

3号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト（パミス・炭化物混入）
2　黒褐色シルト（パミス・灰白色粘土ブロック混入）
3　暗褐色砂質シルト（パミス混入）
4　灰色砂質シルト（灰白色粘土ブロック混入）
5　暗灰色砂質シルト（炭化物・灰白色粘土混入）

4号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト
（パミス・炭化物混入）
2　暗褐色砂質シルト
（パミス混入）

5号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト
（パミス・炭化物混入）

6号土坑内堆積土
1　暗灰色砂質土（パミス混入）

7号土坑内堆積土
1　明灰褐色粘質シルト
（パミス・炭化物・赤褐色土ブロック混入）
2　黒褐色粘質シルト
（レキ状パミス・炭化物・焼土ブロック混入）
3　灰黄褐色粘質シルト
（赤褐色土ブロック・炭化物混入）
4　灰褐色粘質シルト(赤褐色土ブロック・炭化物混入)

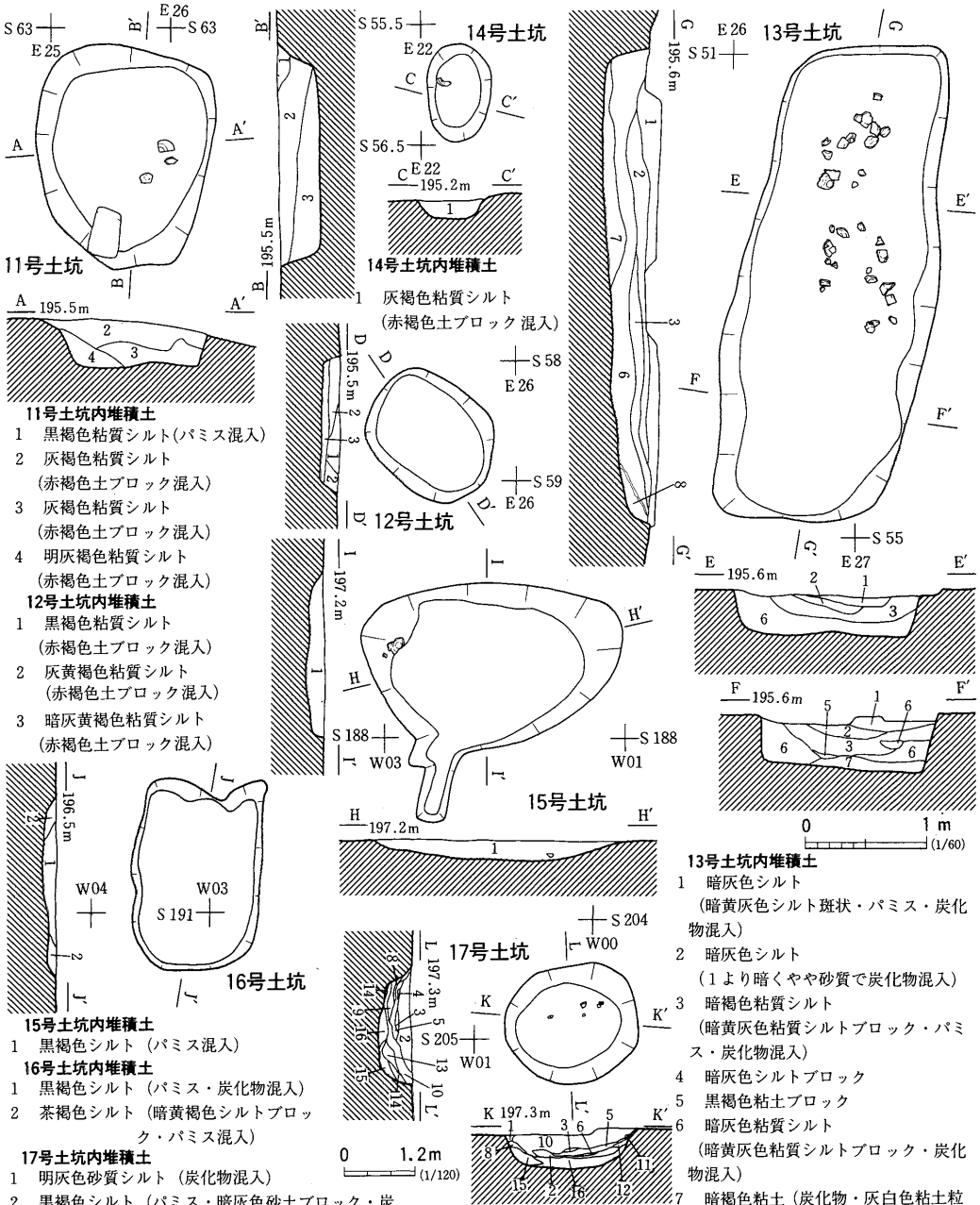
8号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト
（パミス・赤褐色土ブロック混入）
2　灰黄褐色砂質シルト
（パミス混入）
3　黒褐色シルト
（２をブロック状混入）
4　灰色砂質シルト
（パミス混入）

9号土坑内堆積土
1　暗褐色粘質シルト
（砂質赤褐色土ブロック混入）
2　灰黄褐色粘質シルト
（砂質赤褐色，縞状混入）
3　黒褐色粘質シルト
（赤褐色土混入）
4　暗灰褐色粘質シルト
（赤褐色土混入）
5　明灰褐色粘質シルト
（赤褐色土混入）
6　暗灰褐色粘質シルト
（４よりやや暗い）

10号土坑内堆積土
1　灰色粘質シルト
（炭化物・パミス・混黄色粘質シルト斑状混入）
2　暗灰色粘質シルト
（炭化物・灰白色粘質シルトブロック混入）
3　暗灰色粘質シルト
（２より明るく，暗黄色粘質シルト斑状混入）

0　1 m
(1/60)

第103図　１～10号土坑



11号土坑内堆積土
1　黒褐色粘質シルト(パミス混入)
2　灰褐色粘質シルト
（赤褐色土ブロック混入）
3　灰褐色粘質シルト
（赤褐色土ブロック混入）
4　明灰褐色粘質シルト
（赤褐色土ブロック混入）

12号土坑内堆積土
1　黒褐色粘質シルト
（赤褐色土ブロック混入）
2　灰黄褐色粘質シルト
（赤褐色土ブロック混入）
3　暗灰黄褐色粘質シルト
（赤褐色土ブロック混入）

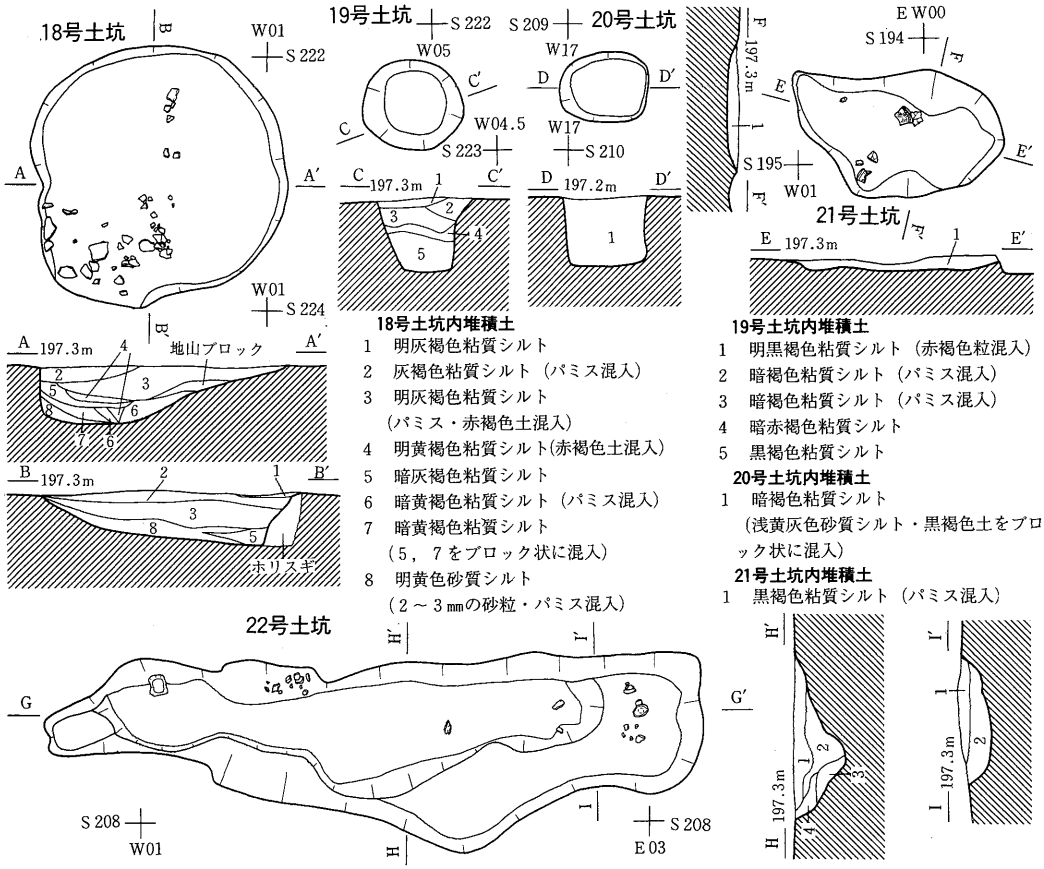
13号土坑内堆積土
1　暗灰色シルト
（暗黄灰色シルト斑状・パミス・炭化物混入）
2　暗灰色シルト
（1より暗くやや砂質で炭化物混入）
3　暗褐色粘質シルト
（暗黄灰色粘質シルトブロック・パミス・炭化物混入）
4　暗灰色シルトブロック
5　黒褐色粘土ブロック
6　暗灰色粘質シルト
（暗黄灰色粘質シルトブロック・炭化物混入）
7　暗褐色粘土（炭化物・灰白色粘土粒混入）

15号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト（パミス混入）

16号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト（パミス・炭化物混入）
2　茶褐色シルト（暗黄褐色シルトブロック・パミス混入）

17号土坑内堆積土
1　明灰色砂質シルト（炭化物混入）
2　黒褐色シルト（パミス・暗灰色砂土ブロック・炭化物混入）
3　明灰色砂質シルト（暗灰色砂土ブロック・パミス混入）
4　明灰色砂質シルト（3に近似するが黒褐色シルトブロック混入）
5　黒褐色シルト（黄灰色シルトブロック・炭化物混入）
6　茶褐色シルト（黄灰色シルトブロック混入）
7　暗茶褐色シルト（パミス・炭化物混入）
8　暗灰色砂質シルト（パミス混入）
9　暗灰色砂質シルト（明灰色砂土ブロック・パミス混入）
10　明灰色砂質シルト（暗茶褐色シルトブロック・パミス混入）
11　暗灰色砂質シルト（パミス混入）
12　暗灰色砂質シルト
13　黒褐色シルト（パミス・炭化物混入）
14　明茶褐色砂質シルト（明灰色砂土粒・パミス・炭化物混入）
15　明灰色砂土（黄灰色の根しみ）
16　暗茶褐色砂質シルト

第104図　11～17号土坑



18号土坑内堆積土

1　明灰褐色粘質シルト
2　灰褐色粘質シルト（パミス混入）
3　明灰褐色粘質シルト
（パミス・赤褐色土混入）
4　明黄褐色粘質シルト(赤褐色土混入)
5　暗灰褐色粘質シルト
6　暗黄褐色粘質シルト（パミス混入）
7　暗黄褐色粘質シルト
（5，7をブロック状に混入）
8　明黄色砂質シルト
（2～3㎜の砂粒・パミス混入）

19号土坑内堆積土

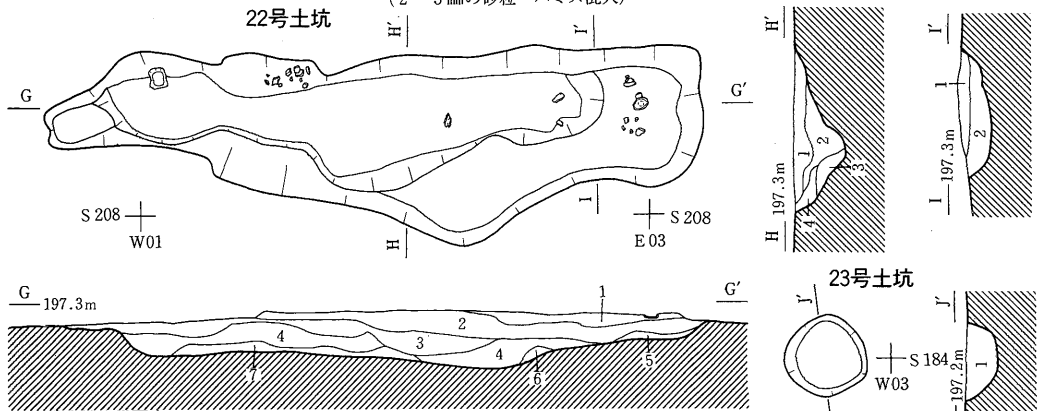
1　明黒褐色粘質シルト（赤褐色粒混入）
2　暗褐色粘質シルト（パミス混入）
3　暗褐色粘質シルト（パミス混入）
4　暗赤褐色粘質シルト
5　黒褐色粘質シルト

20号土坑内堆積土

1　暗褐色粘質シルト
（浅黄灰色砂質シルト・黒褐色土をブロック状に混入）

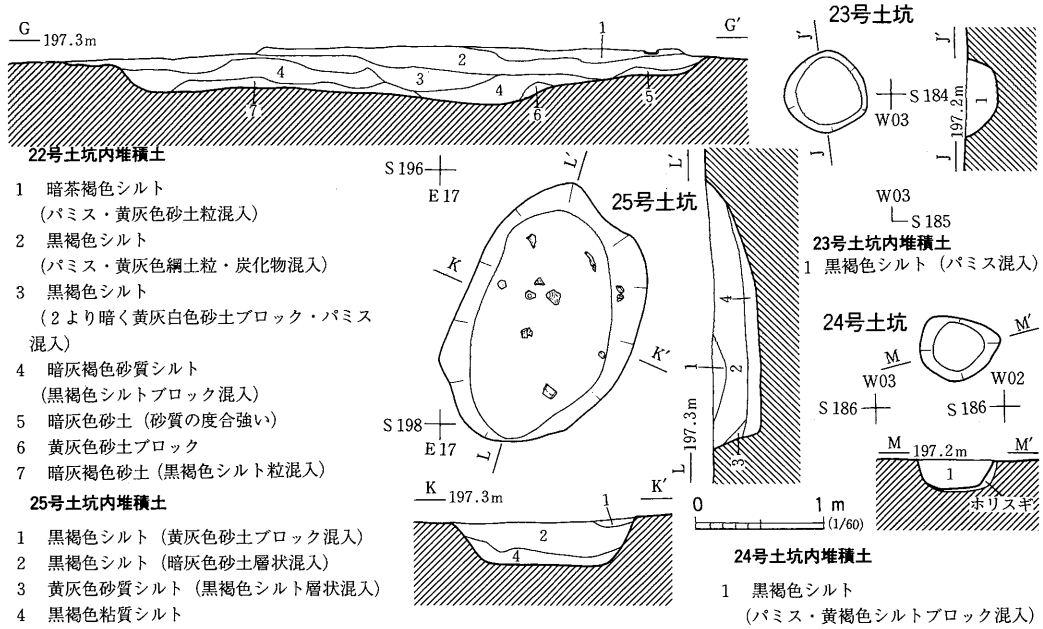
21号土坑内堆積土

1　黒褐色粘質シルト（パミス混入）



22号土坑内堆積土

1　暗茶褐色シルト
（パミス・黄灰色砂土粒混入）
2　黒褐色シルト
（パミス・黄灰色綱土粒・炭化物混入）
3　黒褐色シルト
（2より暗く黄灰白色砂土ブロック・パミス混入）
4　暗灰褐色砂質シルト
（黒褐色シルトブロック混入）
5　暗灰色砂土（砂質の度合強い）
6　黄灰色砂土ブロック
7　暗灰褐色砂土（黒褐色シルト粒混入）



23号土坑内堆積土

1　黒褐色シルト（パミス混入）

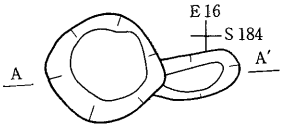
25号土坑内堆積土

1　黒褐色シルト（黄灰色砂土ブロック混入）
2　黒褐色シルト（暗灰色砂土層状混入）
3　黄灰色砂質シルト（黒褐色シルト層状混入）
4　黒褐色粘質シルト

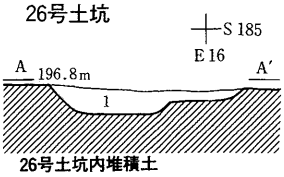
24号土坑内堆積土

1　黒褐色シルト
（パミス・黄褐色シルトブロック混入）

第105図　18～25号土坑

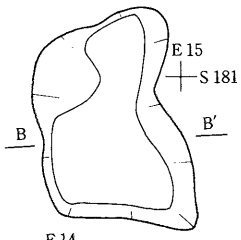


26号土坑

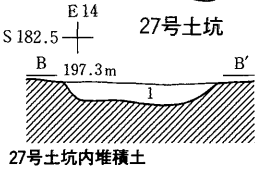


26号土坑内堆積土

1　暗褐色シルト
（暗灰色砂土ブロック混入）

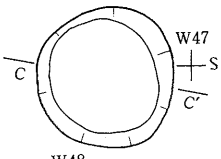


27号土坑

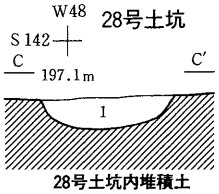


27号土坑内堆積土

1　暗褐色シルト
（黒褐色シルトブロック・灰色砂土ブロック・黄灰色砂土ブロック混入）

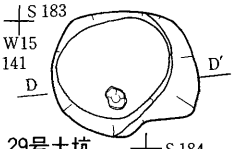


W48　28号土坑

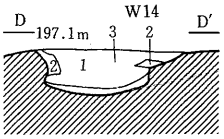


28号土坑内堆積土

1　暗茶褐色シルト
（パミス・暗黄褐色シルト粒・炭化物混入）

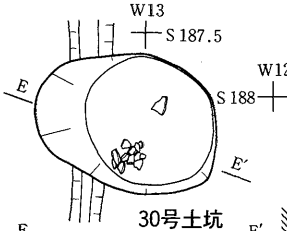


29号土坑　S 184



29号土坑内堆積土

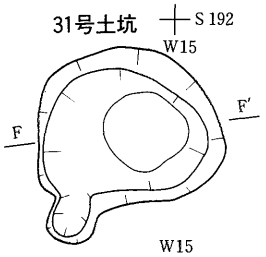
1　黒褐色シルト
（パミス黄褐色シルトブロック斑状・炭化物混入）
2　暗黄褐色砂質シルト（パミス混入）
3　暗茶褐色シルト（1より明るく，パミス混入）



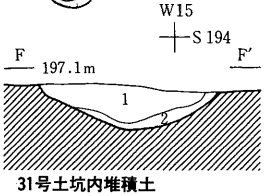
30号土坑

30号土坑内堆積土

1　黒褐色シルト
（パミス・黄褐色シルト斑状・炭化物混入）
2　暗茶褐色砂質シルト
（パミス炭化物混入）

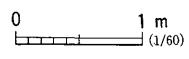


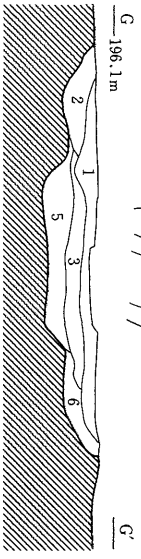
31号土坑

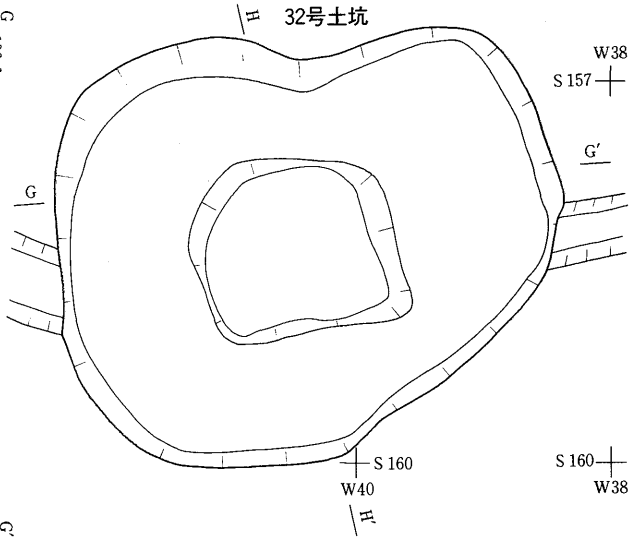


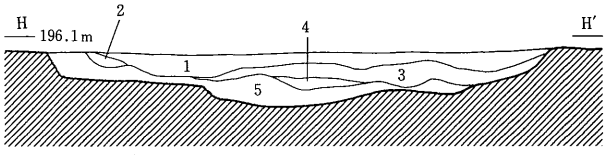
31号土坑内堆積土

1　黒褐色シルト
（パミス・炭化物混入）
2　暗茶褐色シルト
（パミス混入）





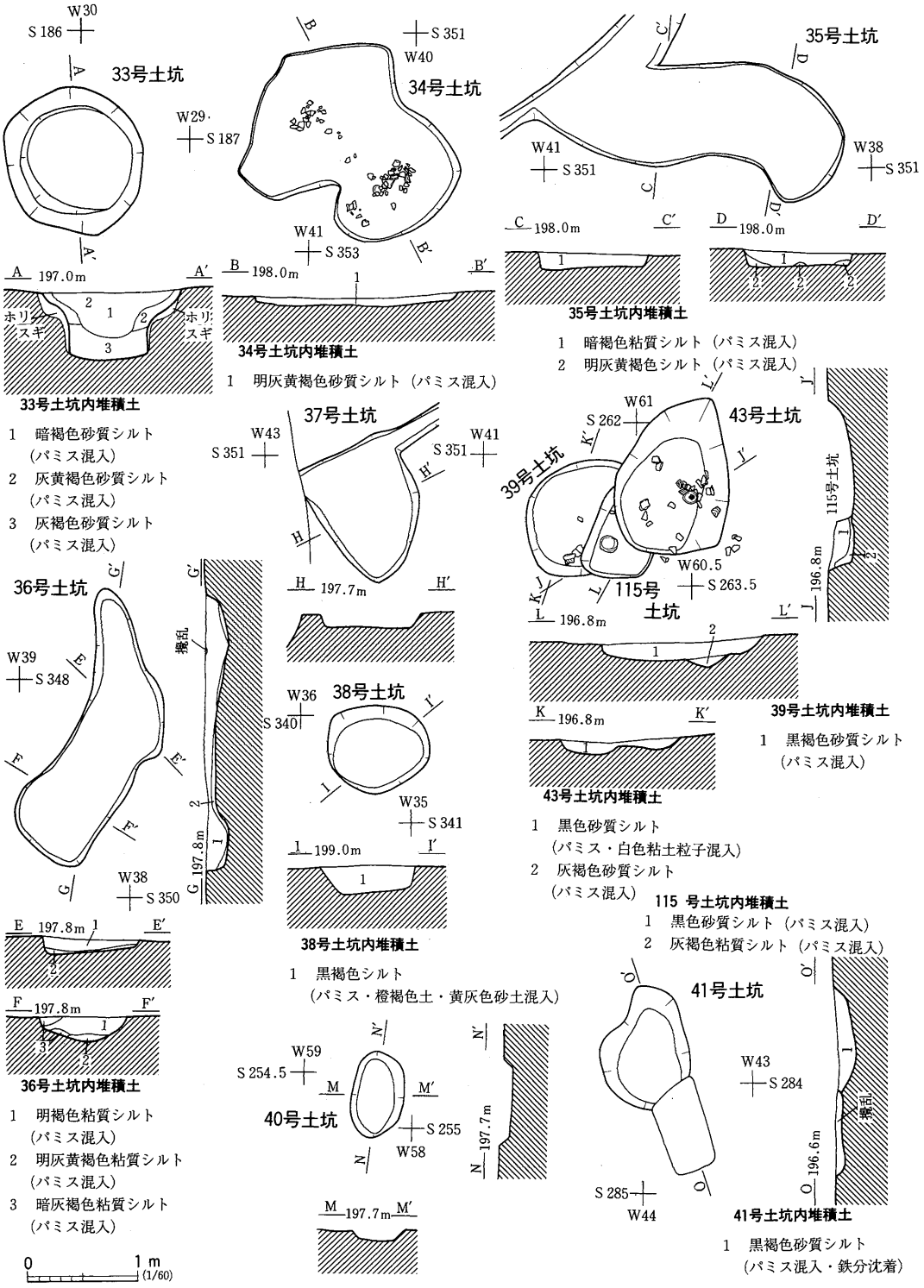




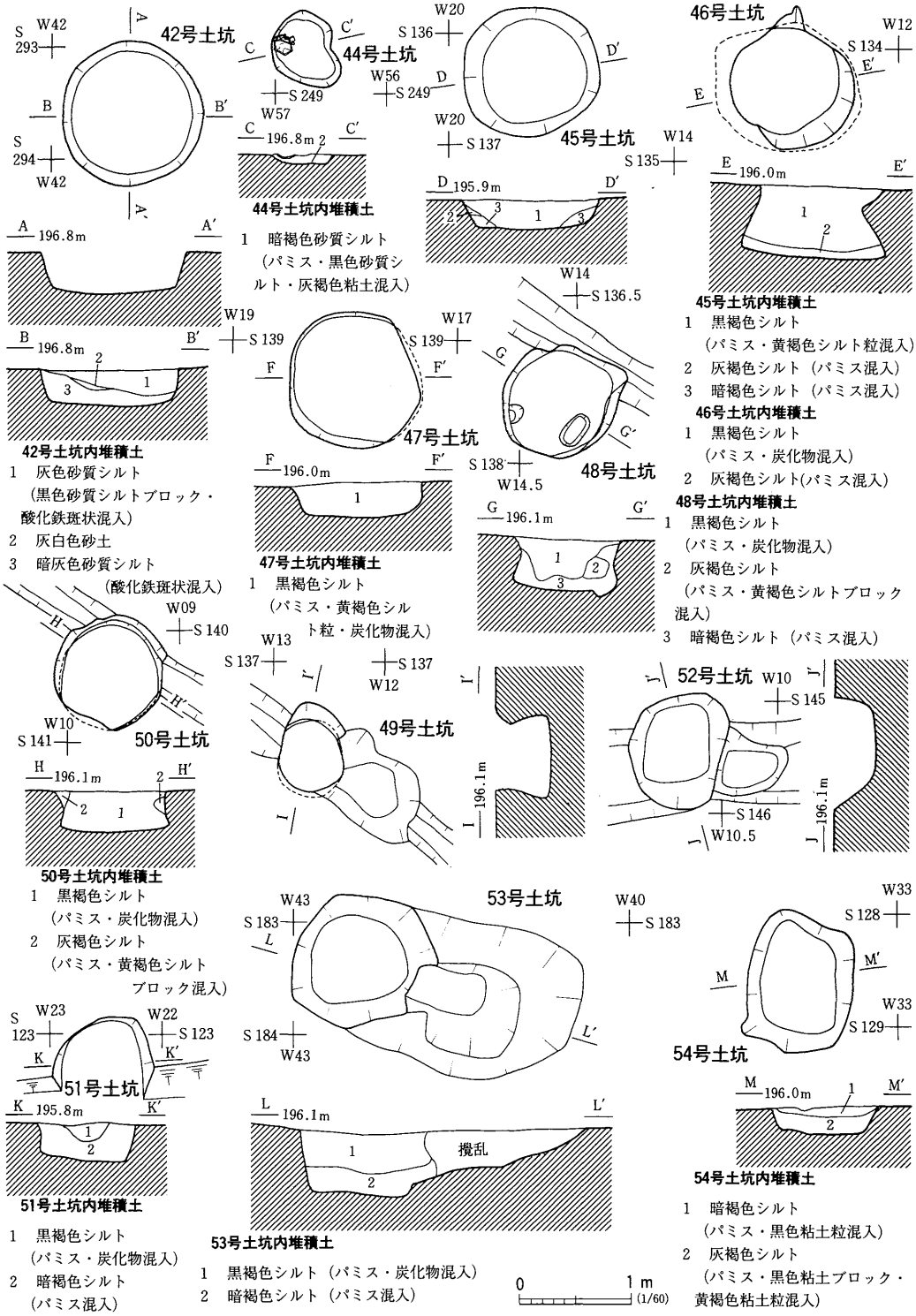
32号土坑内堆積土

1　暗褐色シルト（パミス・炭化物・焼土粒ブロック・灰層状混入）
2　暗褐色シルト（1より暗く，パミス・炭化物・焼土ブロック混入）
3　暗茶褐色粘質シルト（灰層状・焼土粒・炭化物・パミス混入）
4　暗褐色粘質シルト（黄灰色粘質シルト（地山）ブロック・パミス炭化物混入）
5　暗茶褐色粘質シルト（地山粒・地山ブロック・パミス混入）
6　暗茶褐色粘質シルト（5より暗く，炭化物・パミス混入）

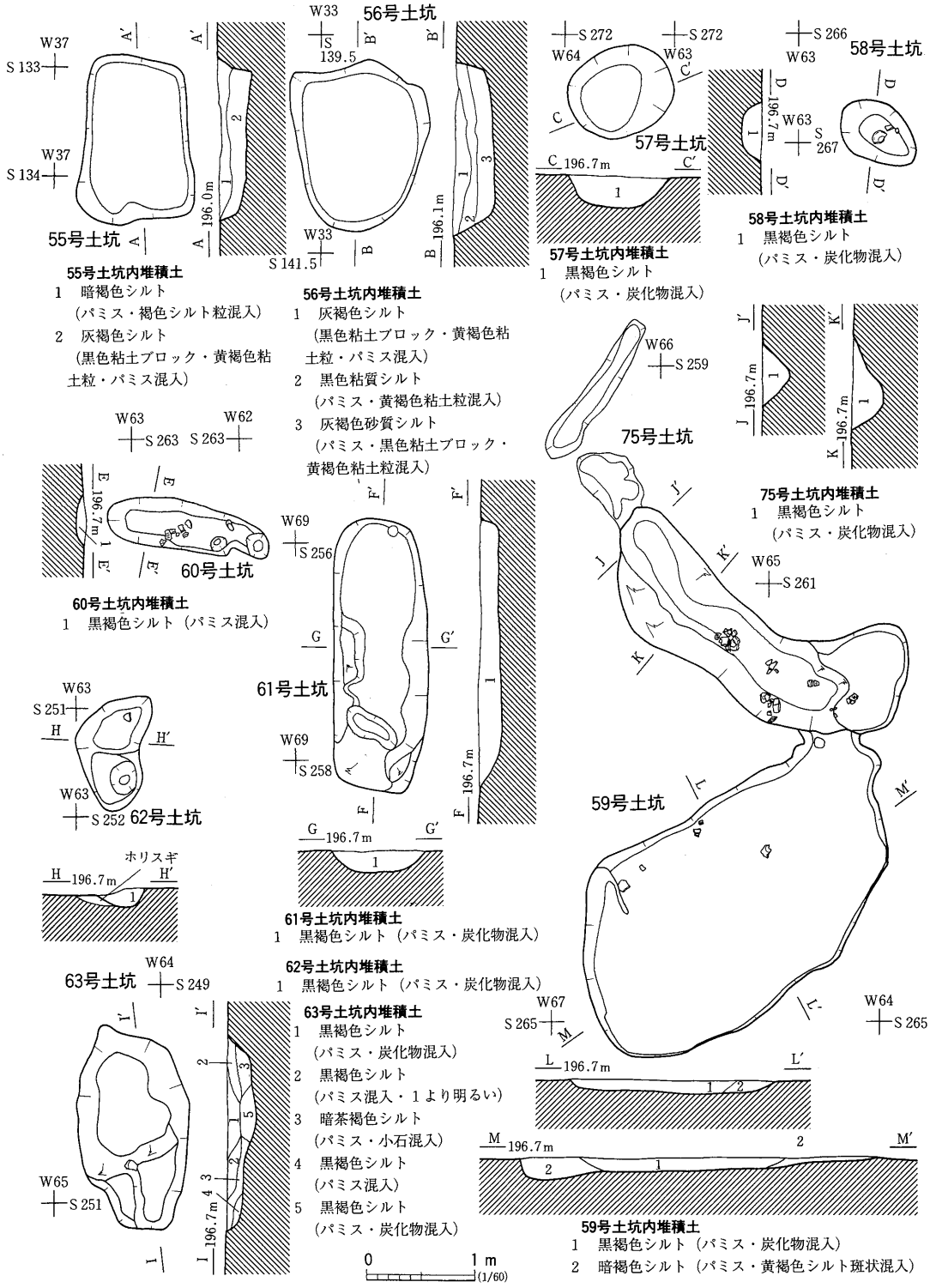
第106図　26～32号土坑



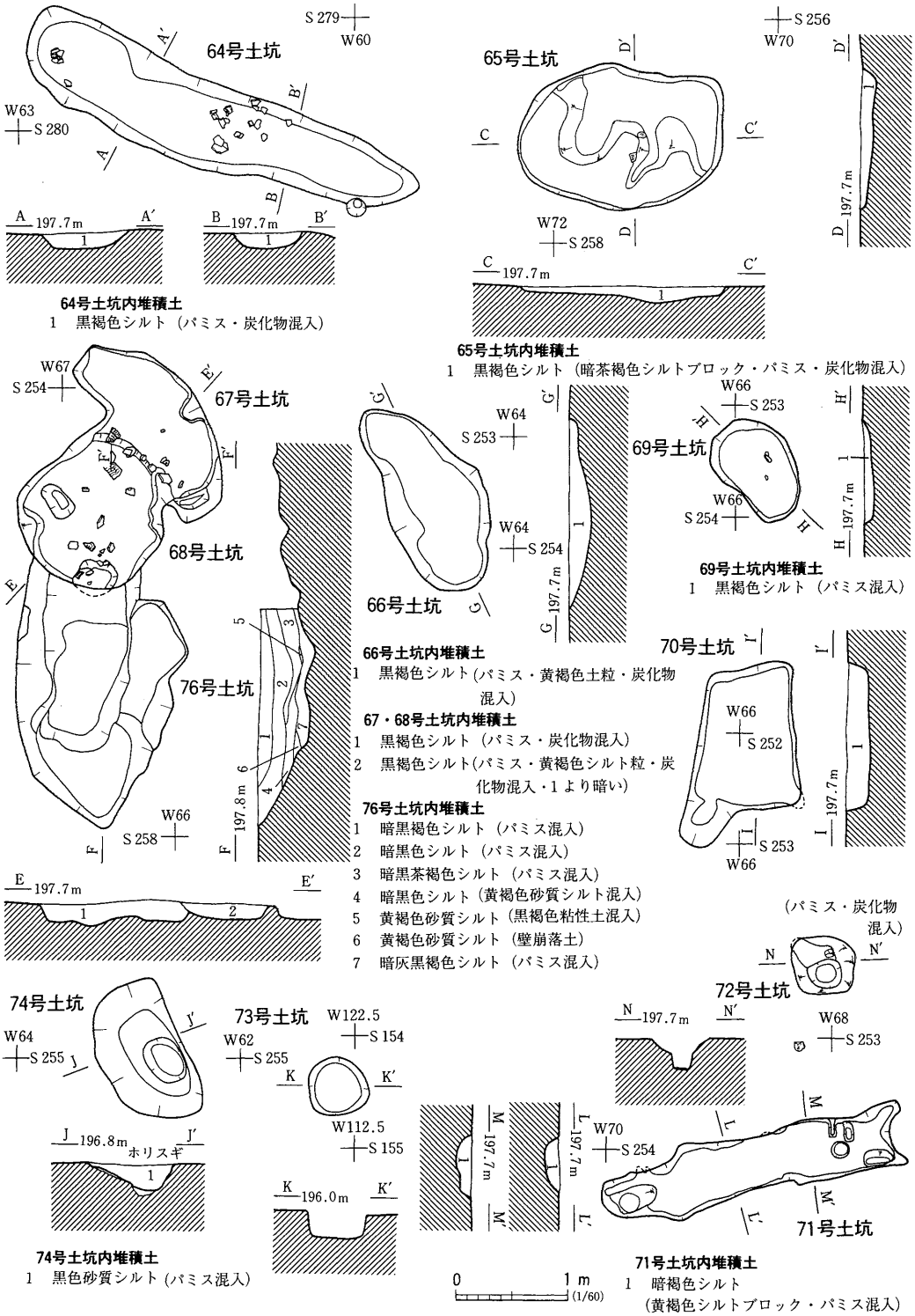
第107図　33～41・43・115号土坑



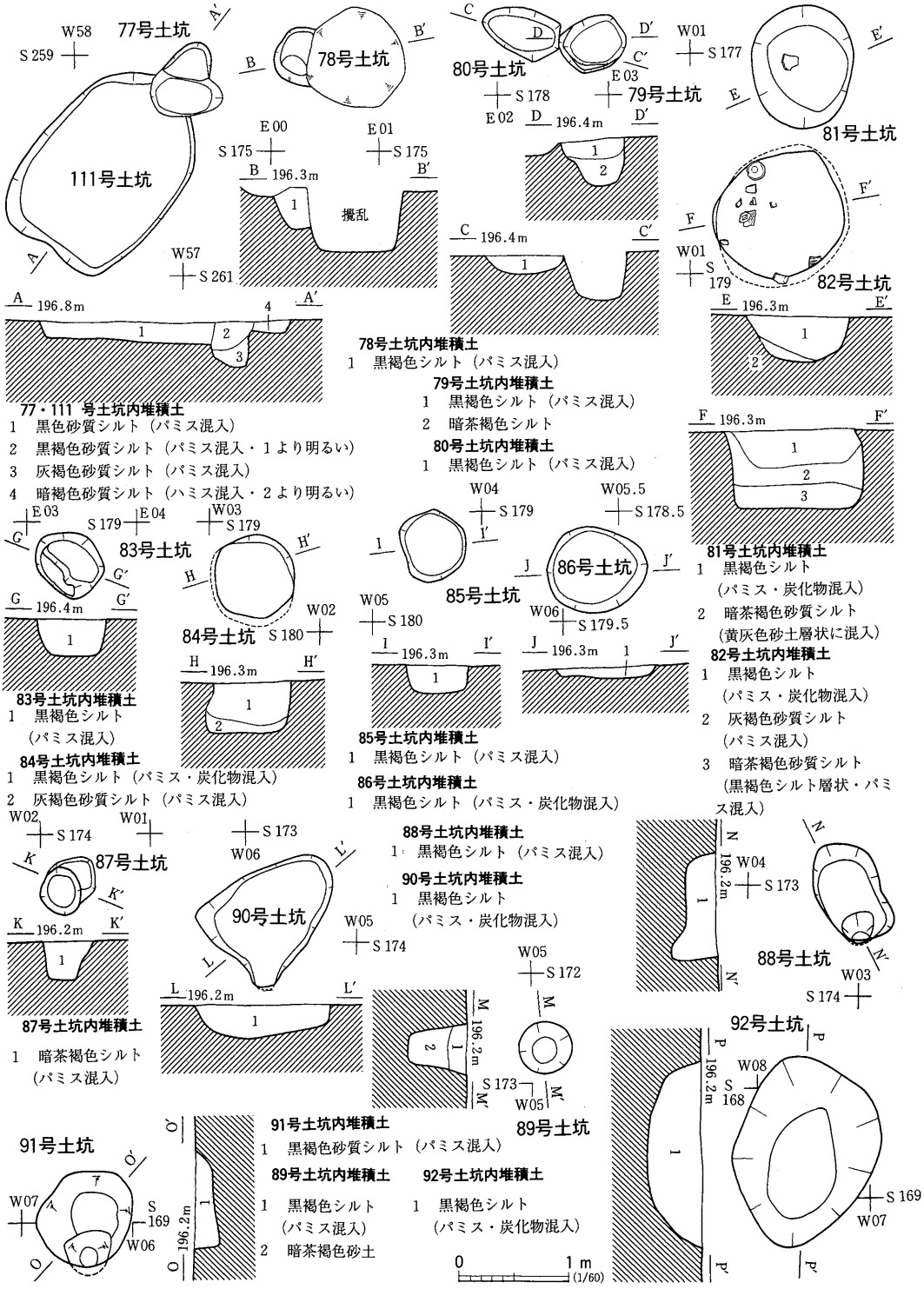
第108図　42・44～54号土坑



第109図　55～63・75号土坑



第110図　64～74・76号土坑



77・111 号土坑内堆積土
1　黒色砂質シルト（パミス混入）
2　黒褐色砂質シルト（パミス混入・１より明るい）
3　灰褐色砂質シルト（パミス混入）
4　暗褐色砂質シルト（ハミス混入・２より明るい）

78号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト（パミス混入）

79号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト（パミス混入）
2　暗茶褐色シルト

80号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト（パミス混入）

81号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト
（パミス・炭化物混入）
2　暗茶褐色砂質シルト
（黄灰色砂土層状に混入）

82号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト
（パミス・炭化物混入）
2　灰褐色砂質シルト
（パミス混入）
3　暗茶褐色砂質シルト
（黒褐色シルト層状・パミス混入）

83号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト
（パミス混入）

84号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト（パミス・炭化物混入）
2　灰褐色砂質シルト（パミス混入）

85号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト（パミス混入）

86号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト（パミス・炭化物混入）

87号土坑内堆積土
1　暗茶褐色シルト
（パミス混入）

88号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト（パミス混入）

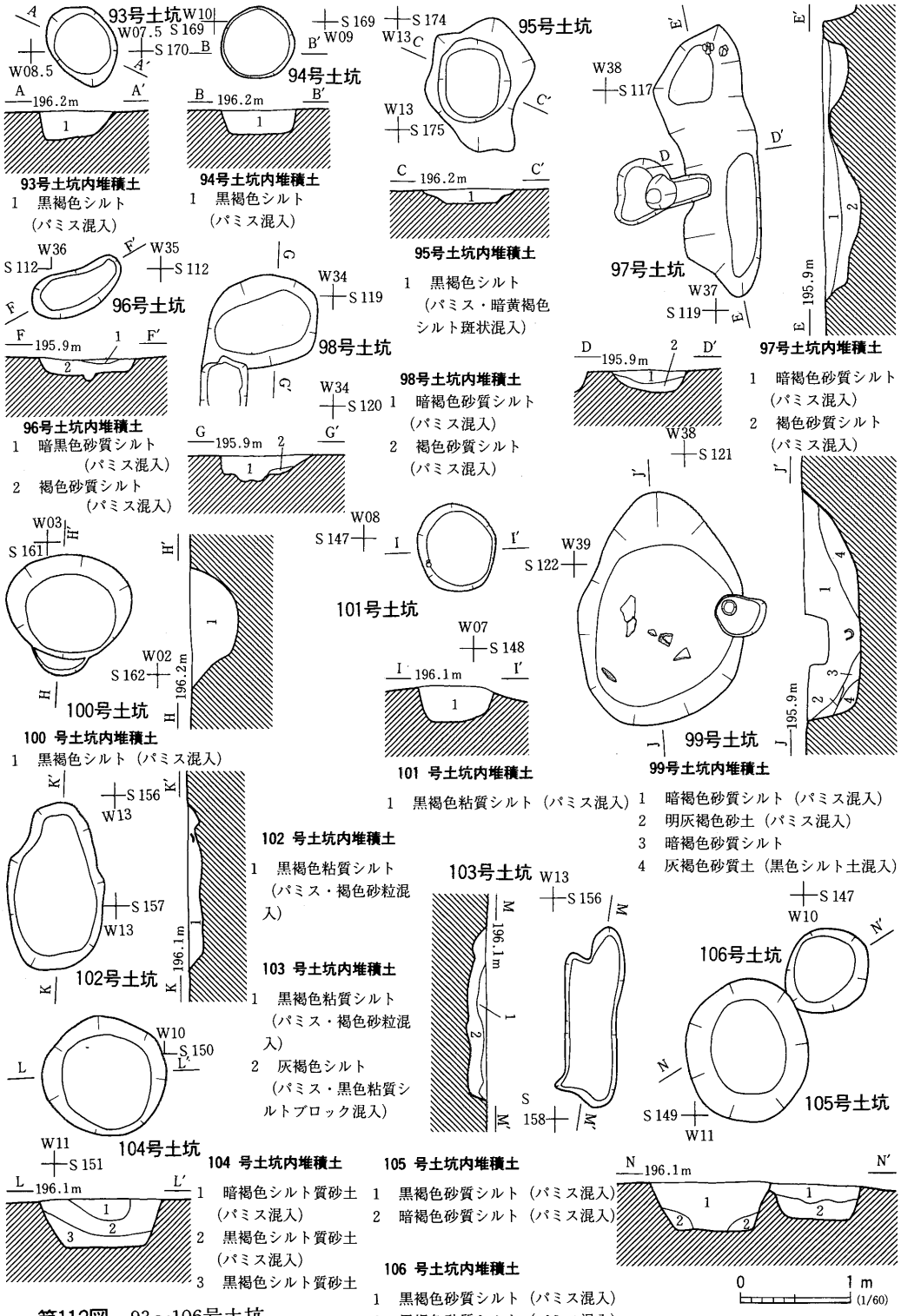
90号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト
（パミス・炭化物混入）

91号土坑内堆積土
1　黒褐色砂質シルト（パミス混入）

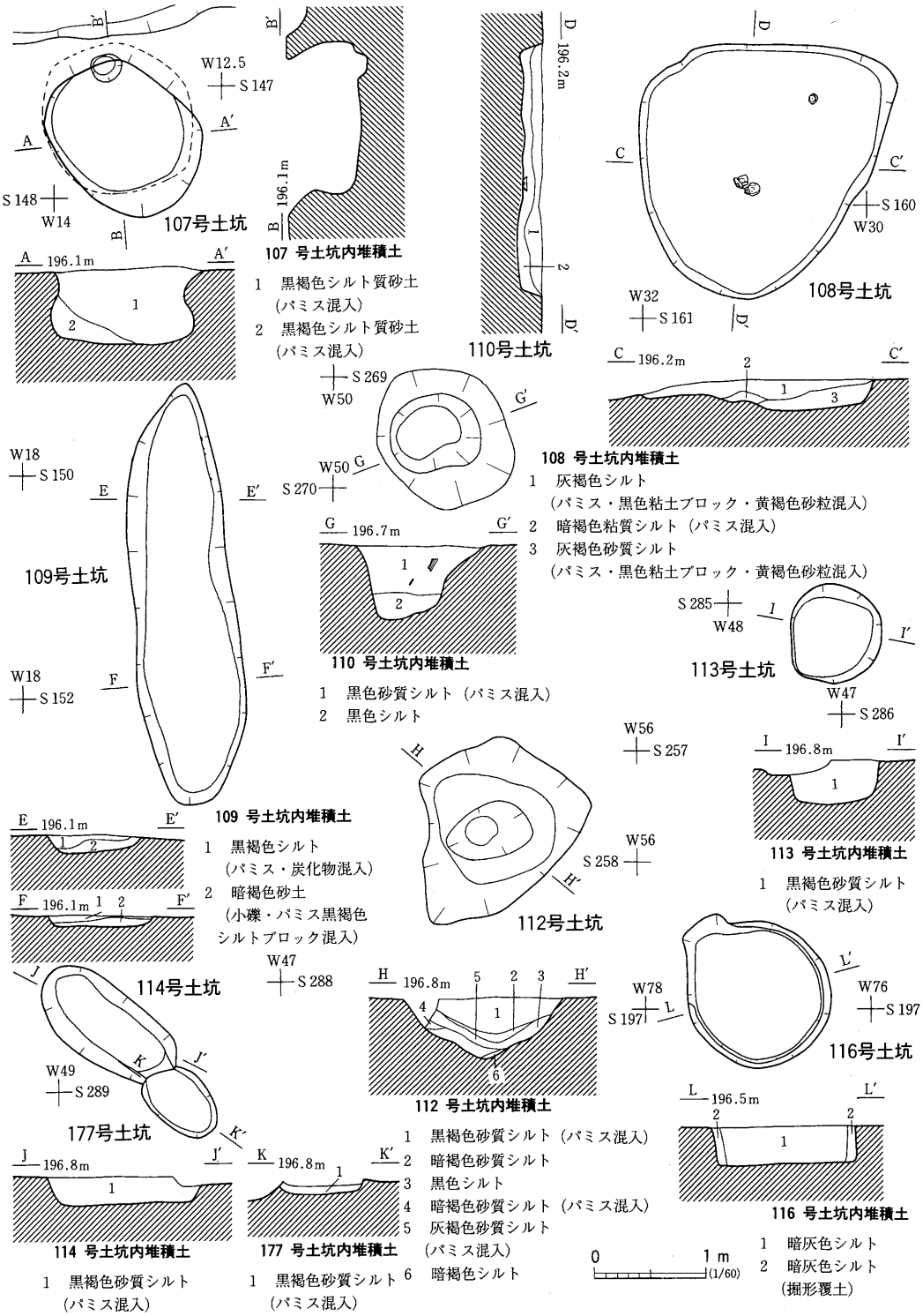
89号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト
（パミス混入）
2　暗茶褐色砂土

92号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト
（パミス・炭化物混入）

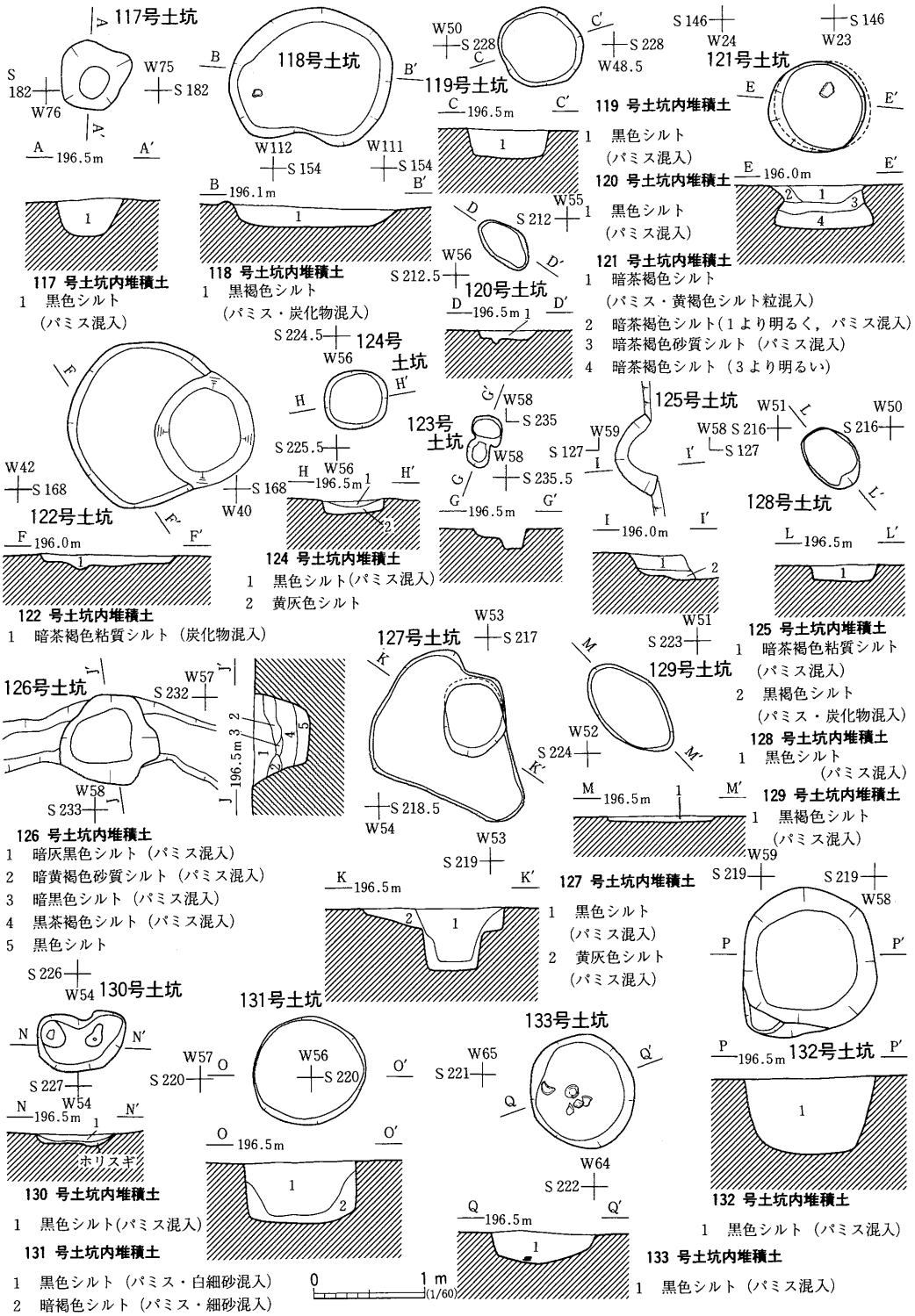
第111図　77～92・111号土坑



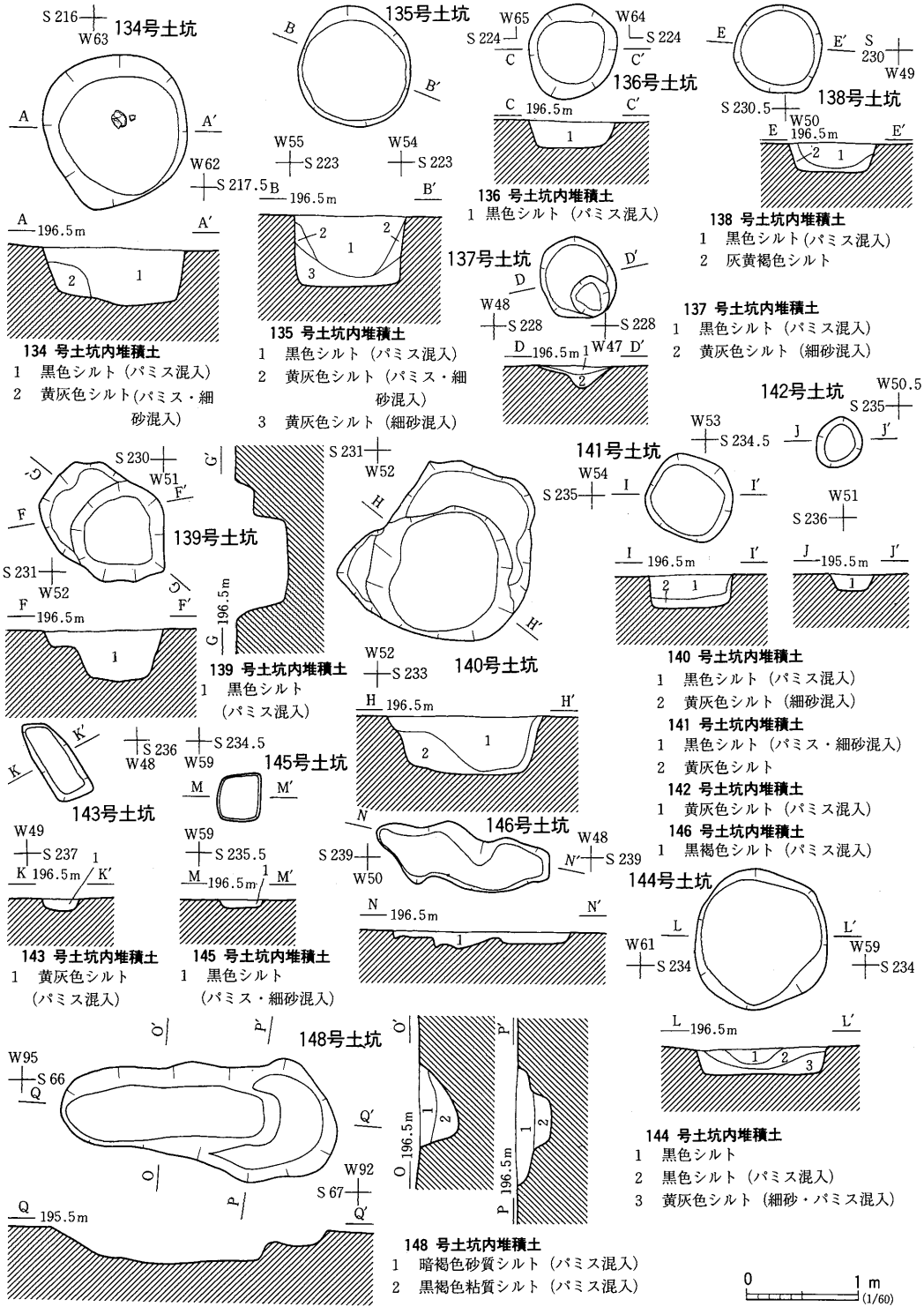
第112図　93～106号土坑



第113図　107～110・112～114・116・177号土坑



第114図　117～133号土坑



134 号土坑内堆積土
1　黒色シルト（パミス混入）
2　黄灰色シルト(パミス・細砂混入)

135 号土坑内堆積土
1　黒色シルト（パミス混入）
2　黄灰色シルト（パミス・細砂混入）
3　黄灰色シルト（細砂混入）

136 号土坑内堆積土
1　黒色シルト（パミス混入）

138 号土坑内堆積土
1　黒色シルト(パミス混入)
2　灰黄褐色シルト

137 号土坑内堆積土
1　黒色シルト（パミス混入）
2　黄灰色シルト（細砂混入）

139 号土坑内堆積土
1　黒色シルト（パミス混入）

140 号土坑内堆積土
1　黒色シルト（パミス混入）
2　黄灰色シルト（細砂混入）

141 号土坑内堆積土
1　黒色シルト（パミス・細砂混入）
2　黄灰色シルト

142 号土坑内堆積土
1　黄灰色シルト（パミス混入）

146 号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト（パミス混入）

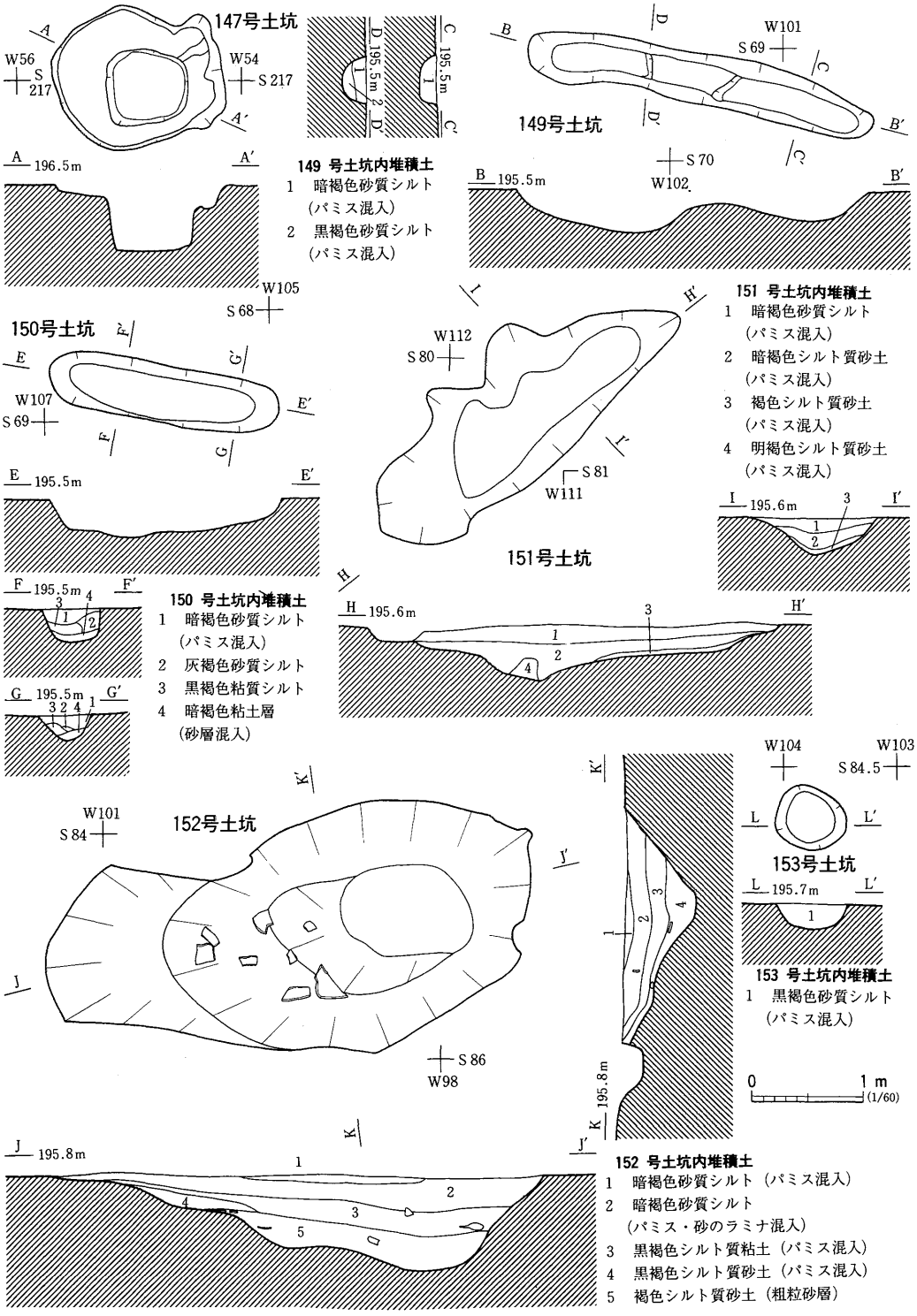
143 号土坑内堆積土
1　黄灰色シルト（パミス混入）

145 号土坑内堆積土
1　黒色シルト（パミス・細砂混入）

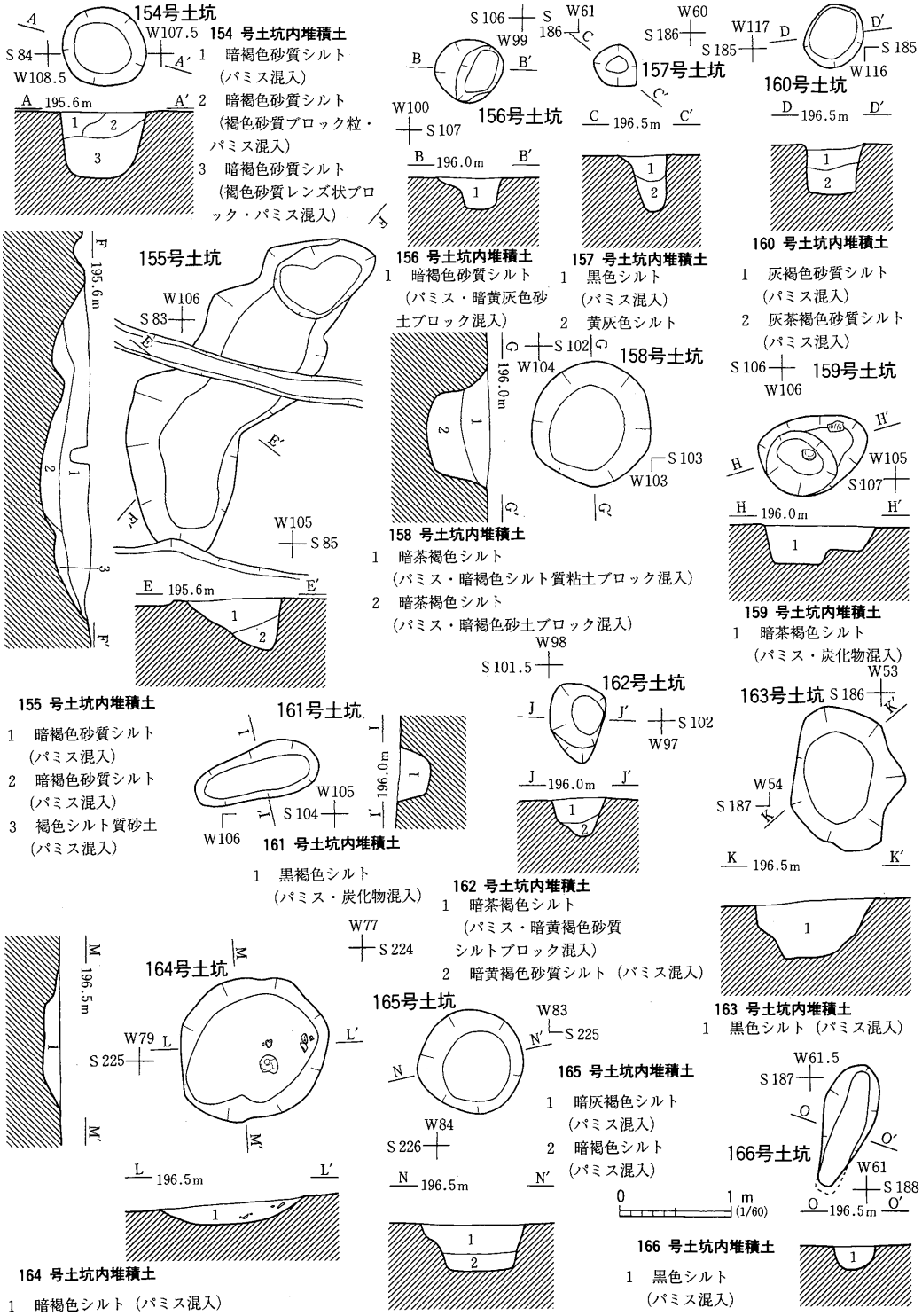
144 号土坑内堆積土
1　黒色シルト
2　黒色シルト（パミス混入）
3　黄灰色シルト（細砂・パミス混入）

148 号土坑内堆積土
1　暗褐色砂質シルト（パミス混入）
2　黒褐色粘質シルト（パミス混入）

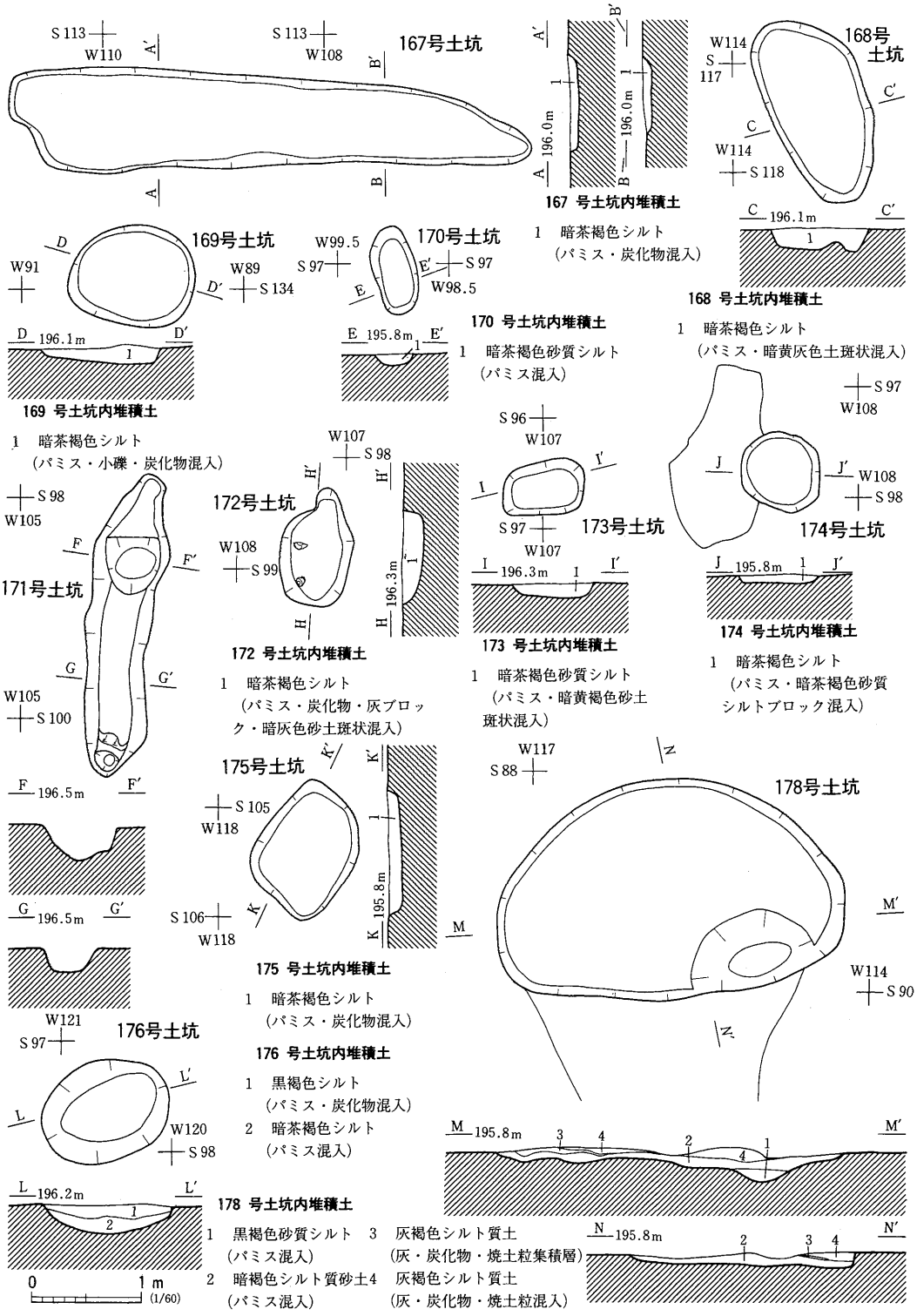
第115図　134～146・148号土坑



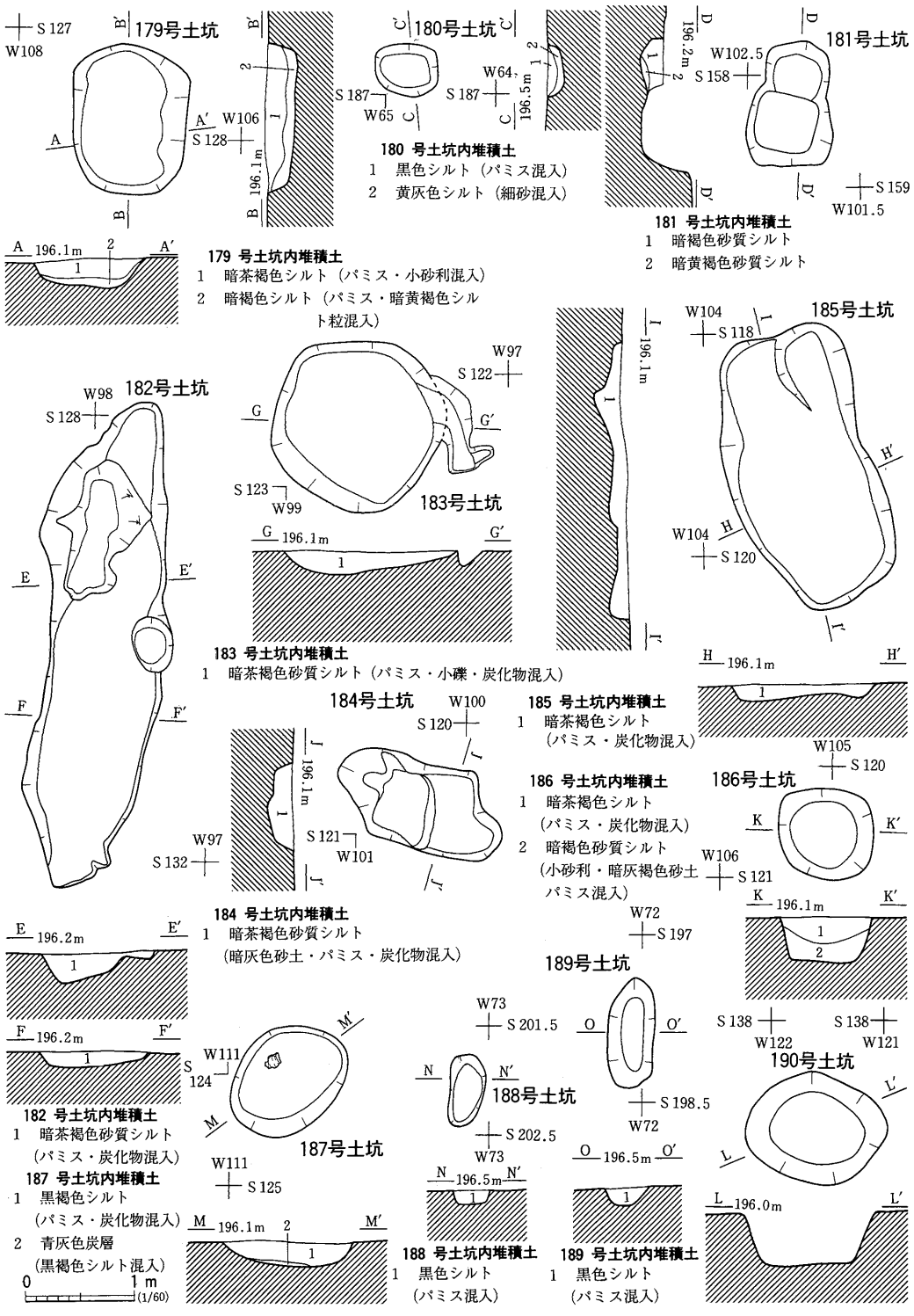
第116図　147・149～153号土坑



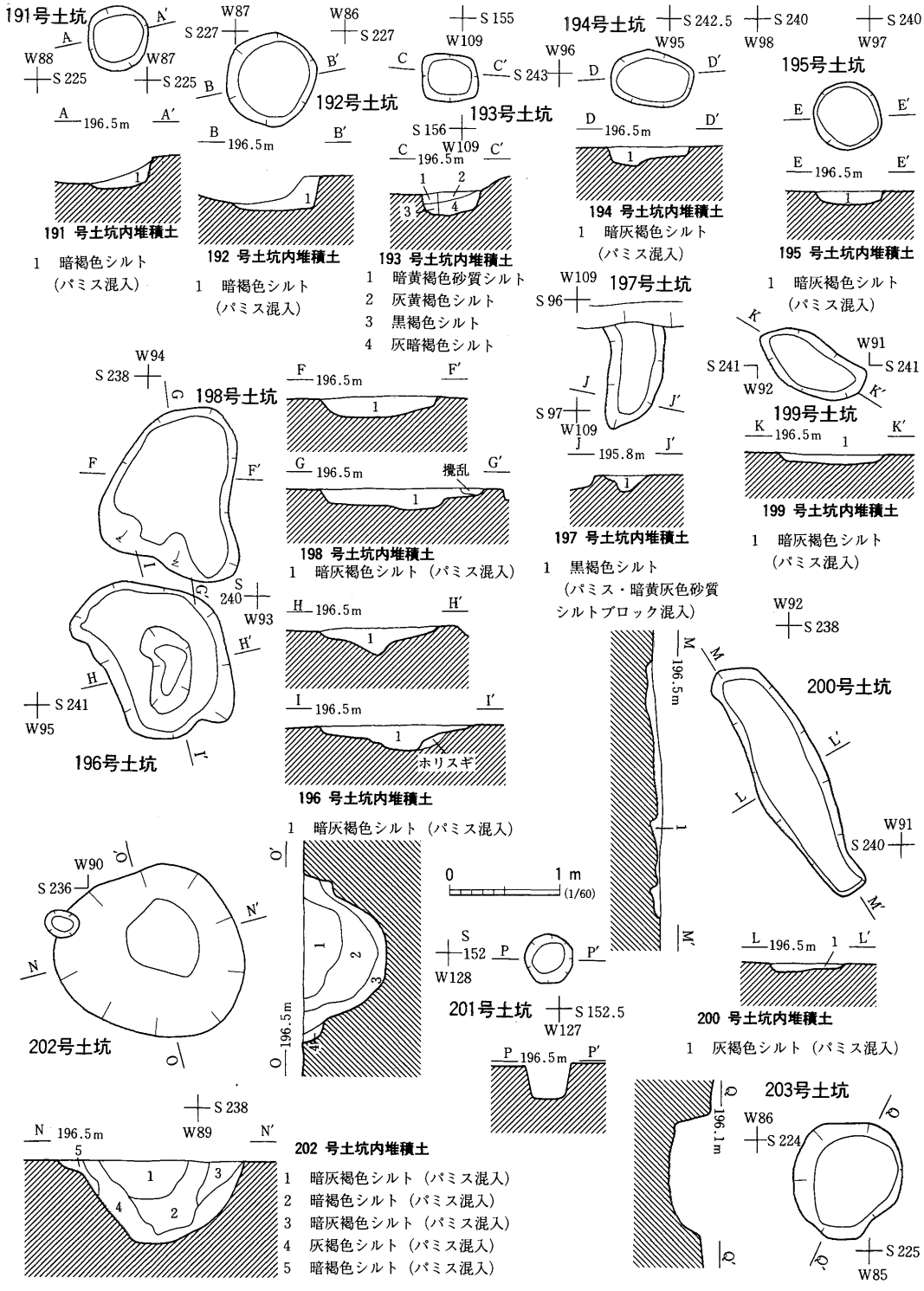
第117図　154～166号土坑



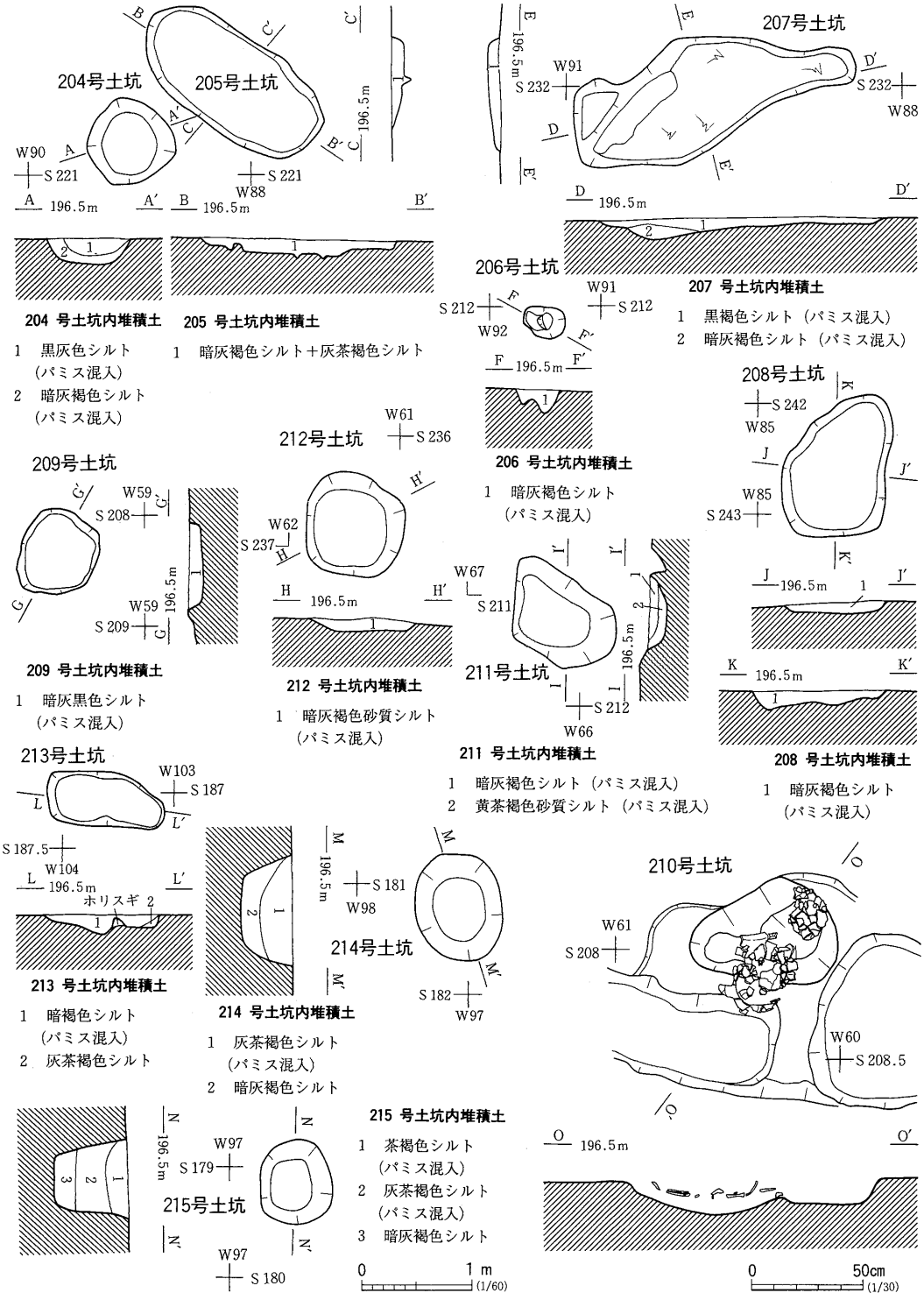
第118図　167～176・178号土坑



第119図　179～190号土坑



第120図　191～203号土坑



204 号土坑内堆積土

1　黒灰色シルト（パミス混入）
2　暗灰褐色シルト（パミス混入）

205 号土坑内堆積土

1　暗灰褐色シルト＋灰茶褐色シルト

206 号土坑内堆積土

1　暗灰褐色シルト（パミス混入）

207 号土坑内堆積土

1　黒褐色シルト（パミス混入）
2　暗灰褐色シルト（パミス混入）

208 号土坑内堆積土

1　暗灰褐色シルト（パミス混入）

209 号土坑内堆積土

1　暗灰黒色シルト（パミス混入）

211 号土坑内堆積土

1　暗灰褐色シルト（パミス混入）
2　黄茶褐色砂質シルト（パミス混入）

212 号土坑内堆積土

1　暗灰褐色砂質シルト（パミス混入）

213 号土坑内堆積土

1　暗褐色シルト（パミス混入）
2　灰茶褐色シルト

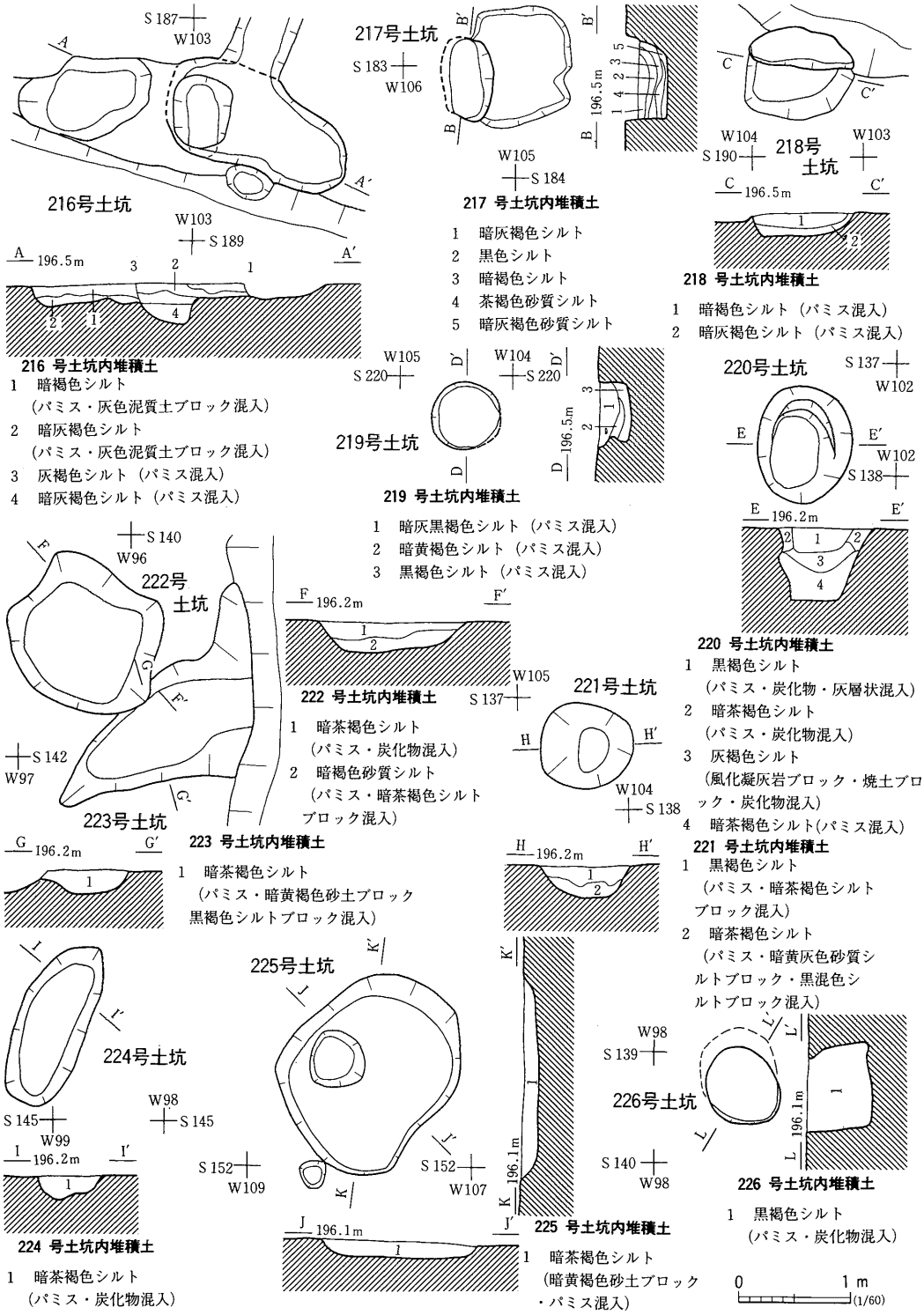
214 号土坑内堆積土

1　灰茶褐色シルト（パミス混入）
2　暗灰褐色シルト

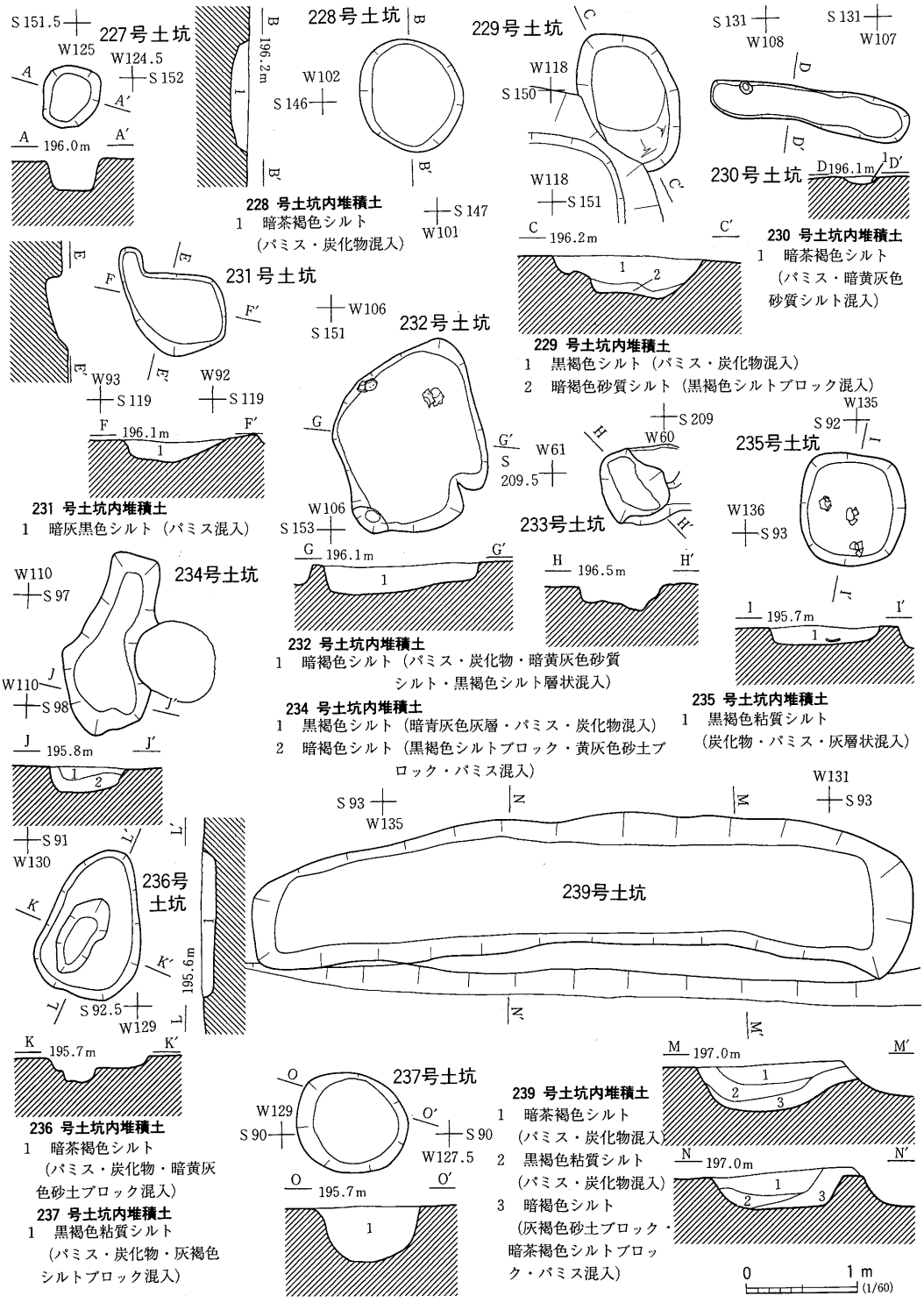
215 号土坑内堆積土

1　茶褐色シルト（パミス混入）
2　灰茶褐色シルト（パミス混入）
3　暗灰褐色シルト

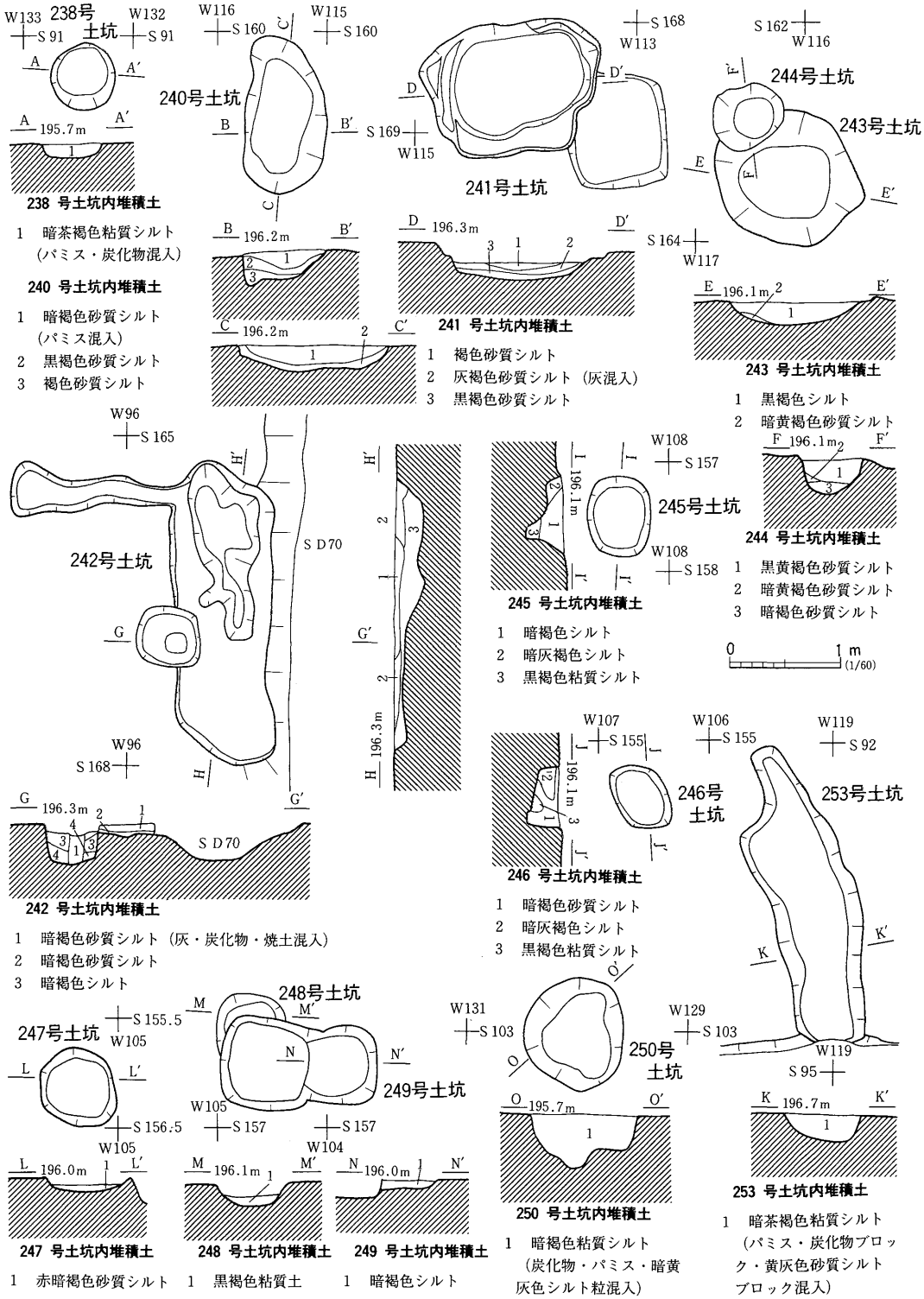
第121図　204～215号土坑



第122図　216～226号土坑



第123図　227～237・239号土坑



238 号土坑内堆積土

1　暗茶褐色粘質シルト（パミス・炭化物混入）

240 号土坑内堆積土

1　暗褐色砂質シルト（パミス混入）
2　黒褐色砂質シルト
3　褐色砂質シルト

241 号土坑内堆積土

1　褐色砂質シルト
2　灰褐色砂質シルト（灰混入）
3　黒褐色砂質シルト

243 号土坑内堆積土

1　黒褐色シルト
2　暗黄褐色砂質シルト

244 号土坑内堆積土

1　黒黄褐色砂質シルト
2　暗黄褐色砂質シルト
3　暗褐色砂質シルト

245 号土坑内堆積土

1　暗褐色シルト
2　暗灰褐色シルト
3　黒褐色粘質シルト

242 号土坑内堆積土

1　暗褐色砂質シルト（灰・炭化物・焼土混入）
2　暗褐色砂質シルト
3　暗褐色シルト

246 号土坑内堆積土

1　暗褐色砂質シルト
2　暗灰褐色シルト
3　黒褐色粘質シルト

253 号土坑内堆積土

1　暗茶褐色粘質シルト（パミス・炭化物ブロック・黄灰色砂質シルトブロック混入）

250 号土坑内堆積土

1　暗褐色粘質シルト（炭化物・パミス・暗黄灰色シルト粒混入）

247 号土坑内堆積土

1　赤暗褐色砂質シルト

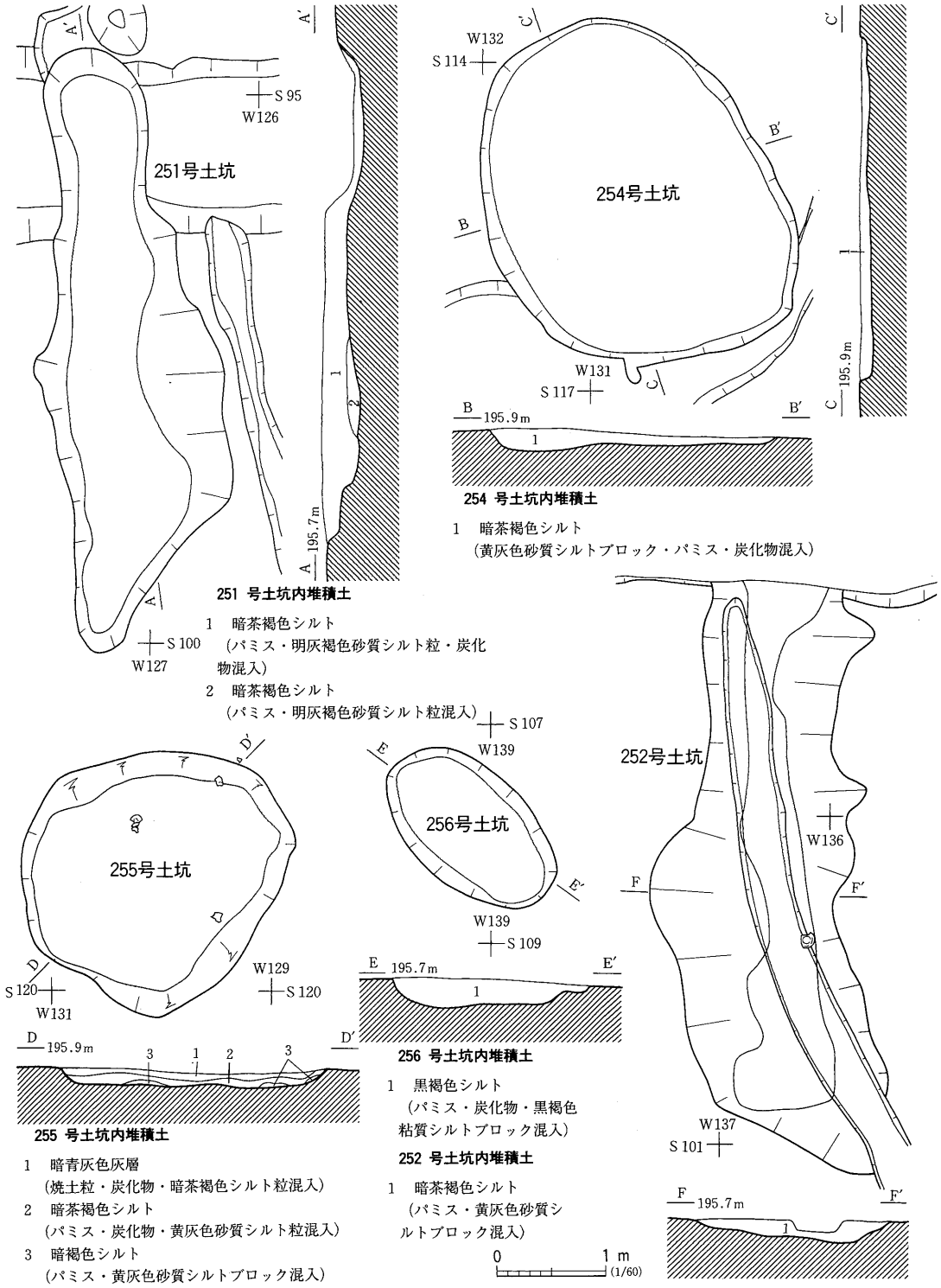
248 号土坑内堆積土

1　黒褐色粘質土

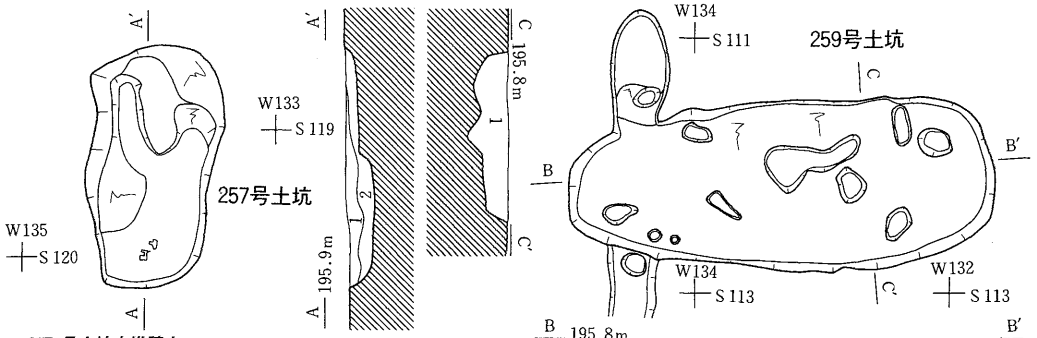
249 号土坑内堆積土

1　暗褐色シルト

第124図　238・240～250・253号土坑

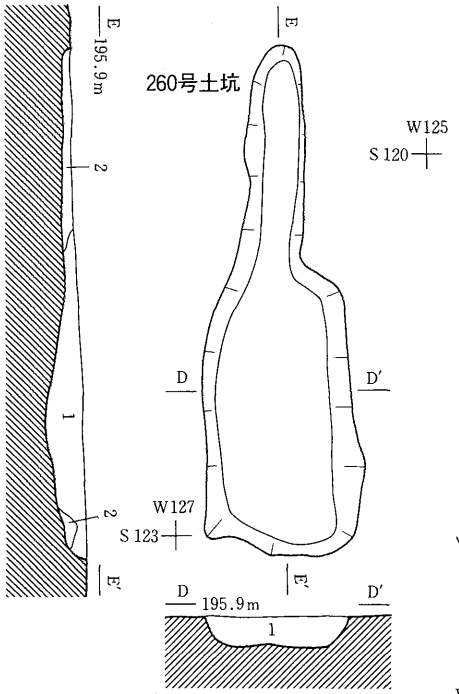


第125図　251・252・254～256号土坑

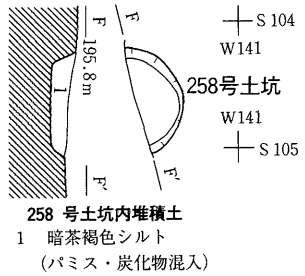


257 号土坑内堆積土
1　暗褐色シルト
（青灰色灰層層状・炭化物・パミス混入）
2　暗茶褐色粘質シルト
（パミス・暗黄灰色砂質シルトブロック・炭化物混入）

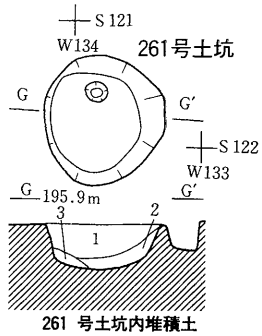
259 号土坑内堆積土
1　暗茶褐色シルト（パミス・暗黄灰色砂質シルトブロック混入）



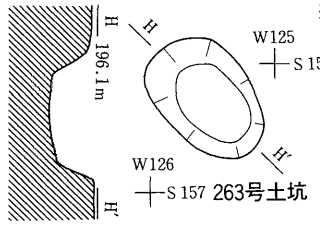
260 号土坑内堆積土
1　暗茶褐色シルト（パミス・炭化物混入）
2　暗褐色シルト（パミス混入）

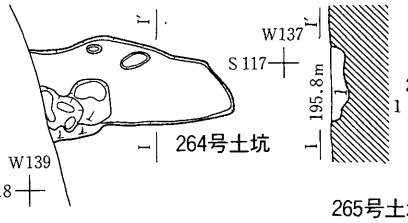


258 号土坑内堆積土
1　暗茶褐色シルト
（パミス・炭化物混入）

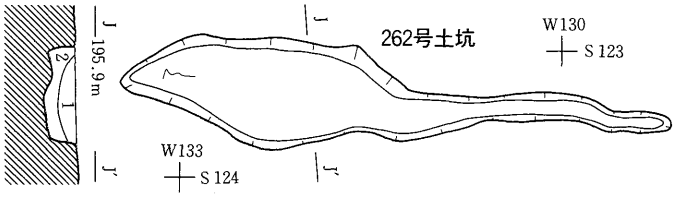


261 号土坑内堆積土
1　黒褐色粘質シルト
（パミス・炭化物混入）
2　暗褐色粘質シルト
（暗茶褐色粘質シルト層状・パミス混入）
3　暗褐色粘質シルト
（パミス混入）

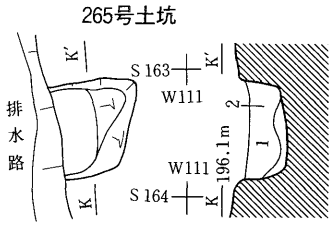




264 号土坑内堆積土
1　暗茶褐色シルト
（パミス混入）



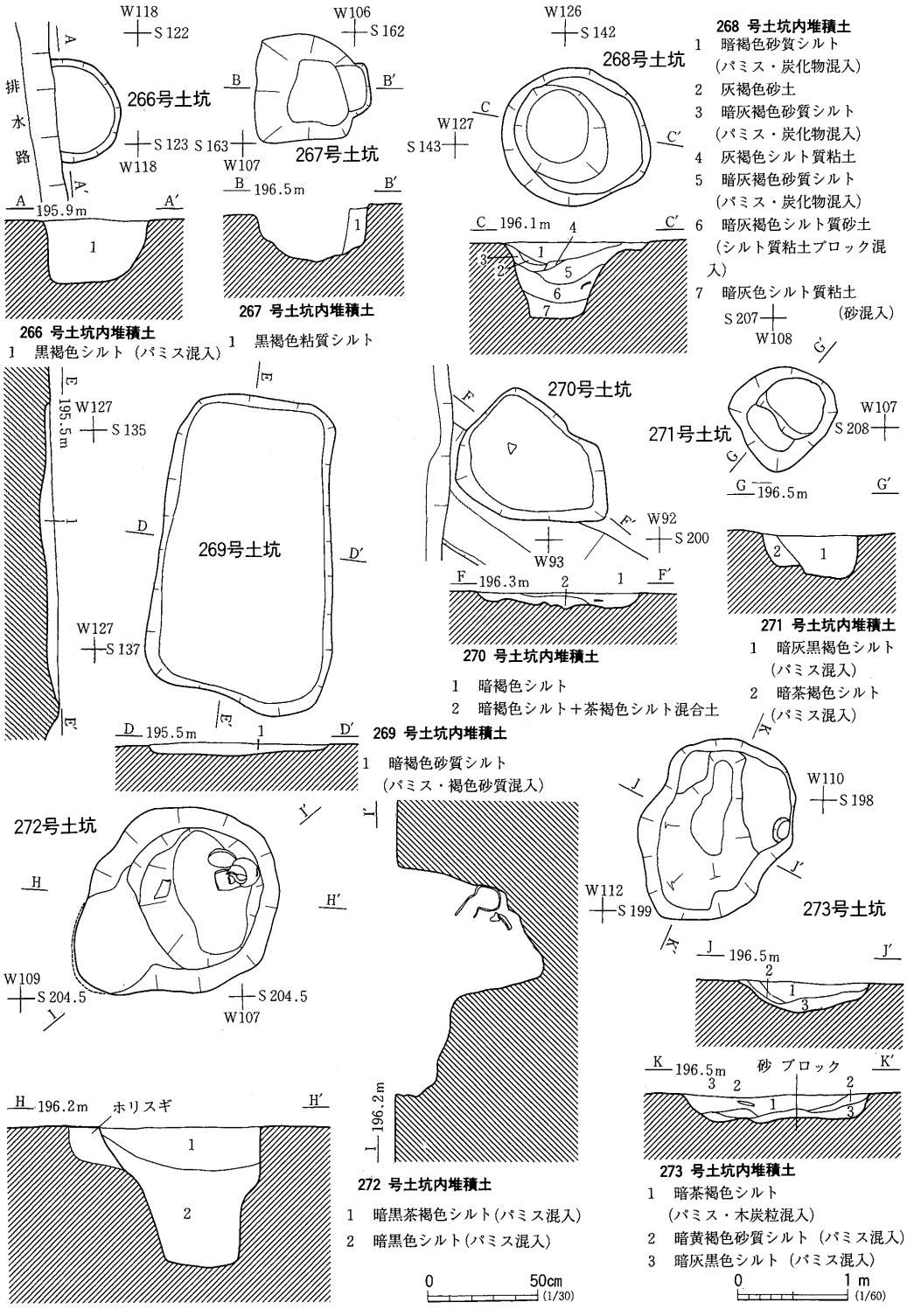
262 号土坑内堆積土
1　暗茶褐色粘質シルト（パミス混入）
2　暗褐色粘質シルト（黄灰色砂質シルトブロック混入）



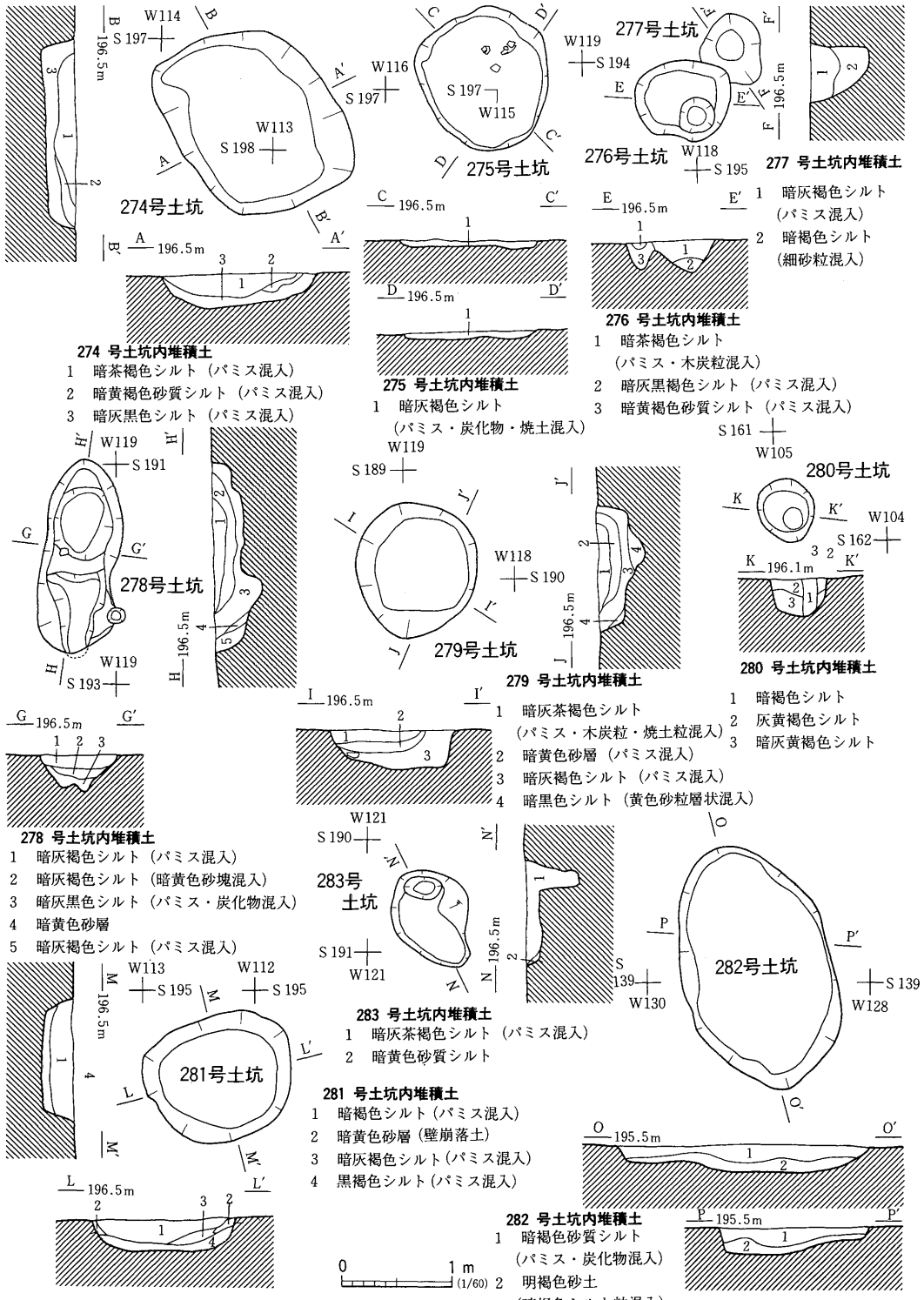
265 号土坑内堆積土
1　黒褐色シルト（パミス混入）
2　明灰黒褐色砂質土

0　1 m
(1/60)

第126図　257～265号土坑



第127図　266～273号土坑



274 号土坑内堆積土
1　暗茶褐色シルト（パミス混入）
2　暗黄褐色砂質シルト（パミス混入）
3　暗灰黒色シルト（パミス混入）

275 号土坑内堆積土
1　暗灰褐色シルト
（パミス・炭化物・焼土混入）

276 号土坑内堆積土
1　暗茶褐色シルト
（パミス・木炭粒混入）
2　暗灰黒褐色シルト（パミス混入）
3　暗黄褐色砂質シルト（パミス混入）

277 号土坑内堆積土
1　暗灰褐色シルト
（パミス混入）
2　暗褐色シルト
（細砂粒混入）

278 号土坑内堆積土
1　暗灰褐色シルト（パミス混入）
2　暗灰褐色シルト（暗黄色砂塊混入）
3　暗灰黒色シルト（パミス・炭化物混入）
4　暗黄色砂層
5　暗灰褐色シルト（パミス混入）

279 号土坑内堆積土
1　暗灰茶褐色シルト
（パミス・木炭粒・焼土粒混入）
2　暗黄色砂層（パミス混入）
3　暗灰褐色シルト（パミス混入）
4　暗黒色シルト（黄色砂粒層状混入）

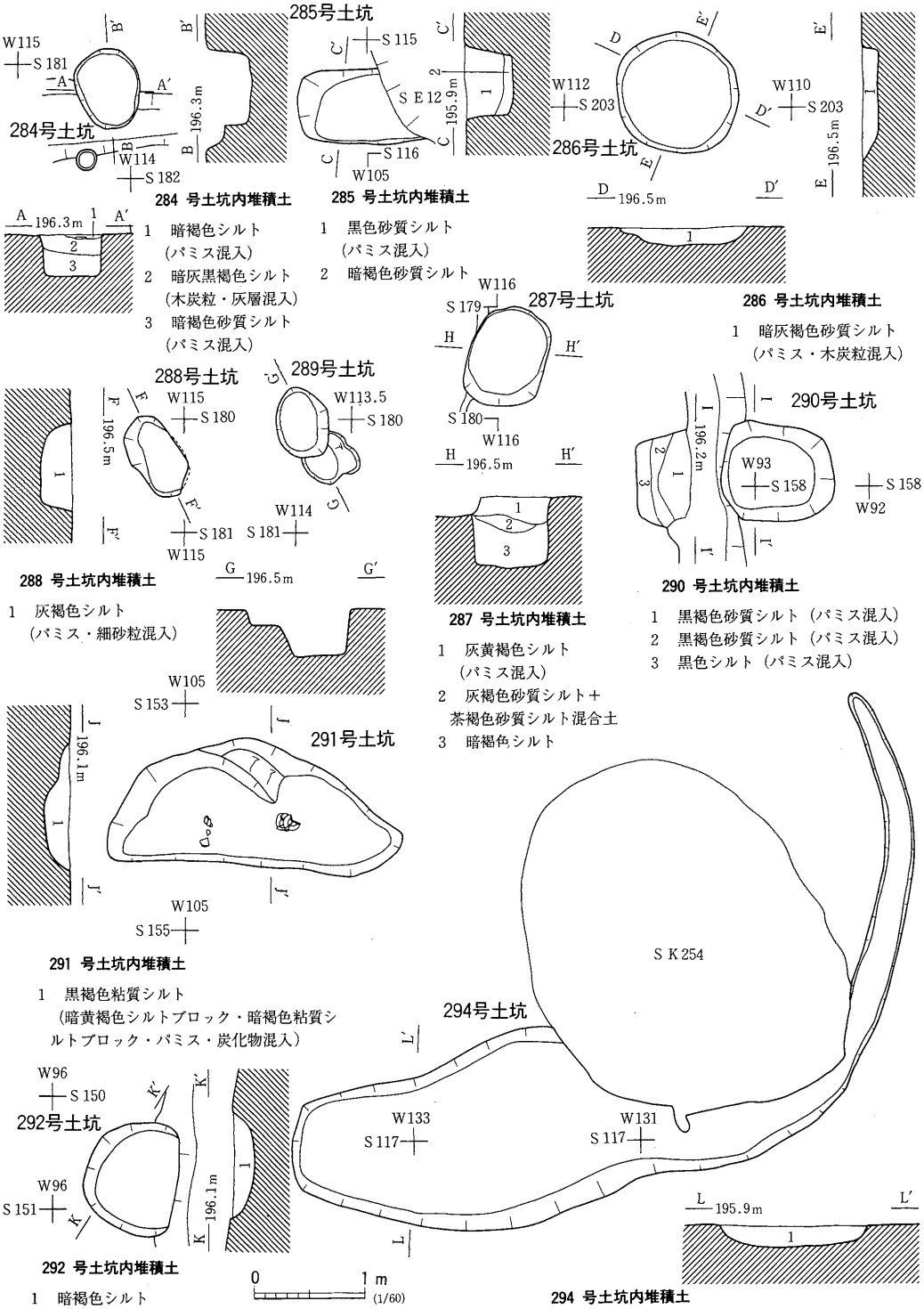
280 号土坑内堆積土
1　暗褐色シルト
2　灰黄褐色シルト
3　暗灰黄褐色シルト

281 号土坑内堆積土
1　暗褐色シルト（パミス混入）
2　暗黄色砂層（壁崩落土）
3　暗灰褐色シルト（パミス混入）
4　黒褐色シルト（パミス混入）

282 号土坑内堆積土
1　暗褐色砂質シルト
（パミス・炭化物混入）
2　明褐色砂土
（暗褐色シルト粒混入）

283 号土坑内堆積土
1　暗灰茶褐色シルト（パミス混入）
2　暗黄色砂質シルト

第128図　274～283号土坑



284 号土坑内堆積土

1　暗褐色シルト
（パミス混入）
2　暗灰黒褐色シルト
（木炭粒・灰層混入）
3　暗褐色砂質シルト
（パミス混入）

285 号土坑内堆積土

1　黒色砂質シルト
（パミス混入）
2　暗褐色砂質シルト

286 号土坑内堆積土

1　暗灰褐色砂質シルト
（パミス・木炭粒混入）

287 号土坑内堆積土

1　灰黄褐色シルト
（パミス混入）
2　灰褐色砂質シルト＋
茶褐色砂質シルト混合土
3　暗褐色シルト

288 号土坑内堆積土

1　灰褐色シルト
（パミス・細砂粒混入）

290 号土坑内堆積土

1　黒褐色砂質シルト（パミス混入）
2　黒褐色砂質シルト（パミス混入）
3　黒色シルト（パミス混入）

291 号土坑内堆積土

1　黒褐色粘質シルト
（暗黄褐色シルトブロック・暗褐色粘質シルトブロック・パミス・炭化物混入）

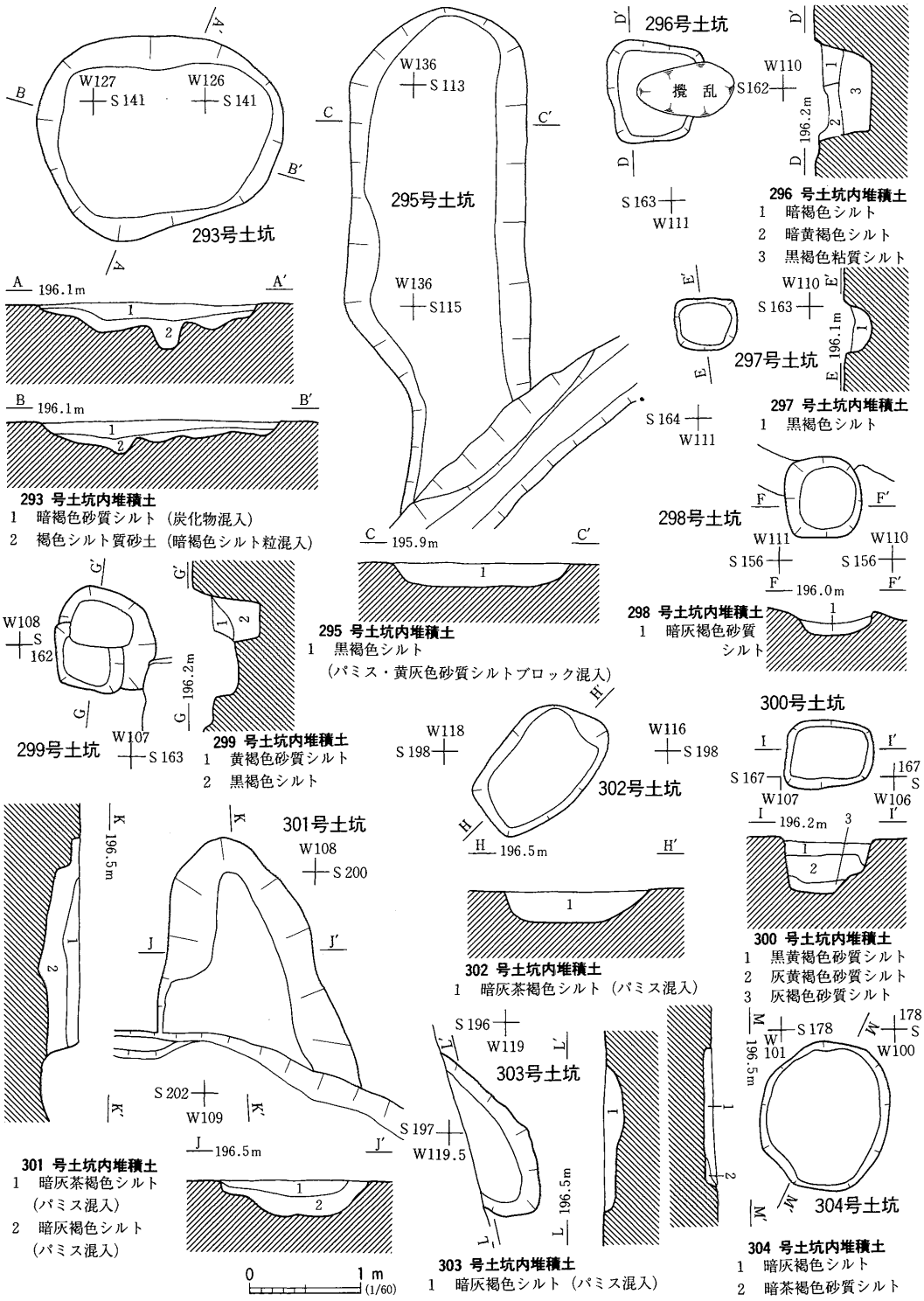
292 号土坑内堆積土

1　暗褐色シルト
（パミス混入）

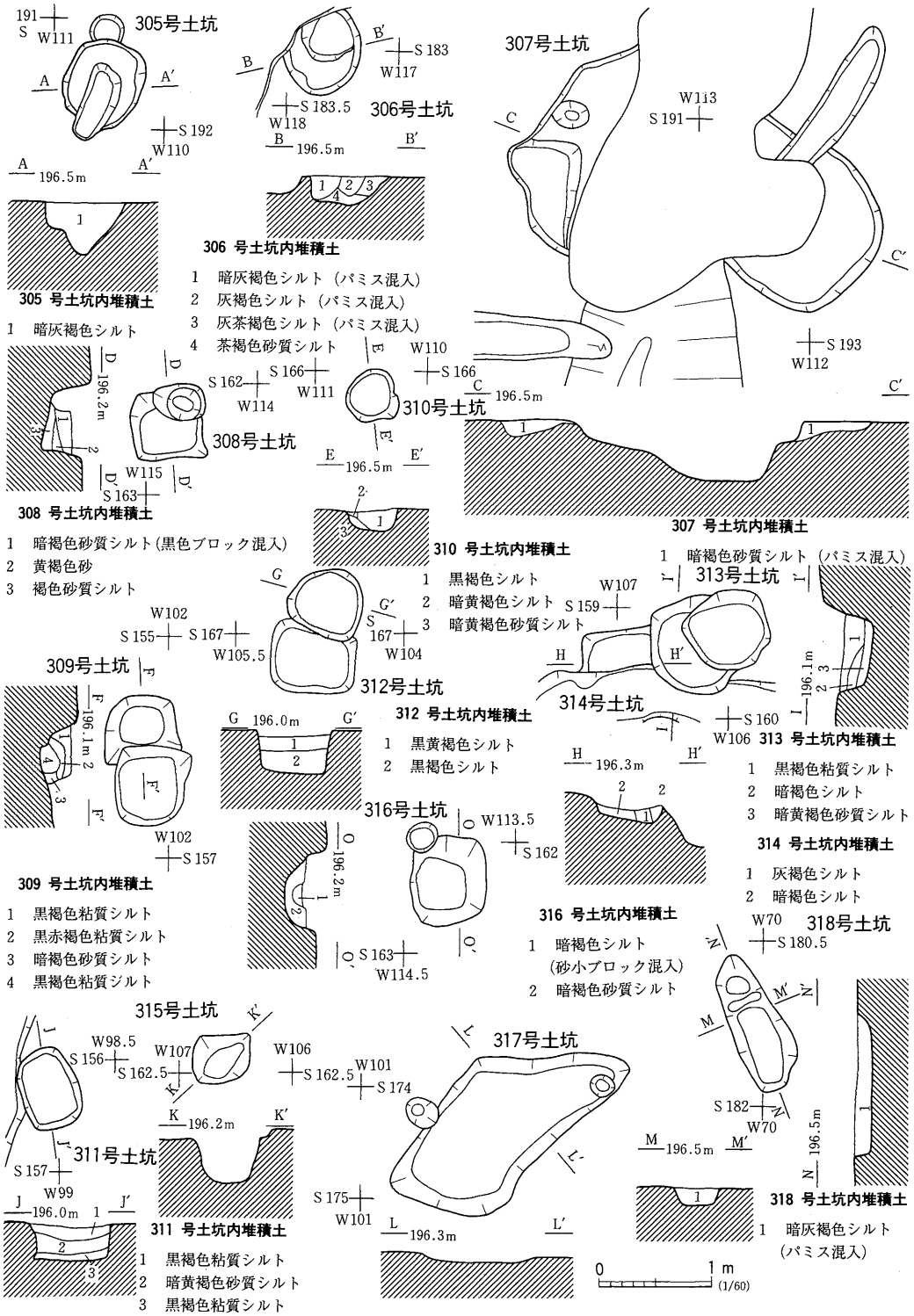
294 号土坑内堆積土

1　黒褐色シルト
（パミス・黄灰色砂質シルトブロック・炭化物混入）

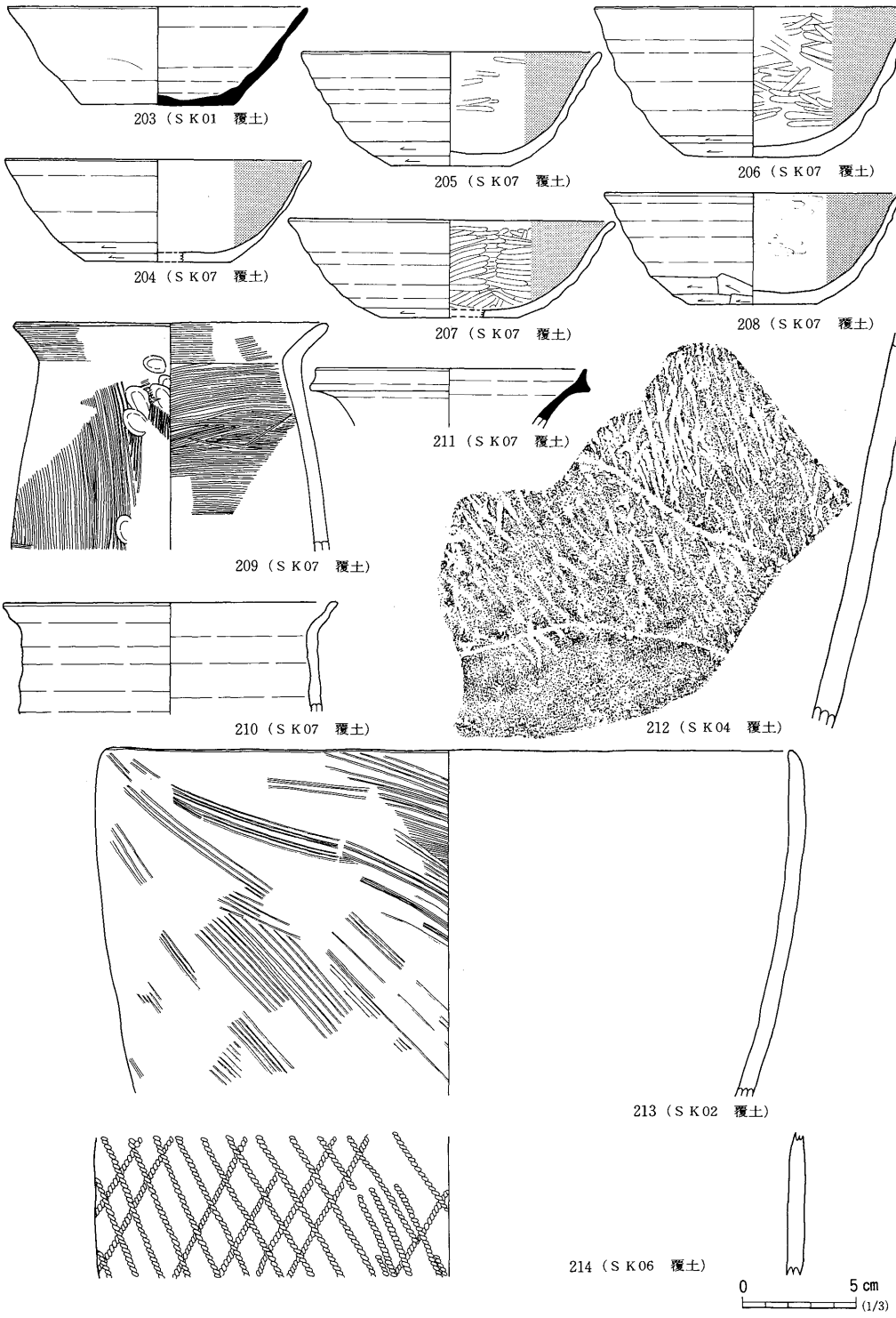
第129図　284～292・294号土坑



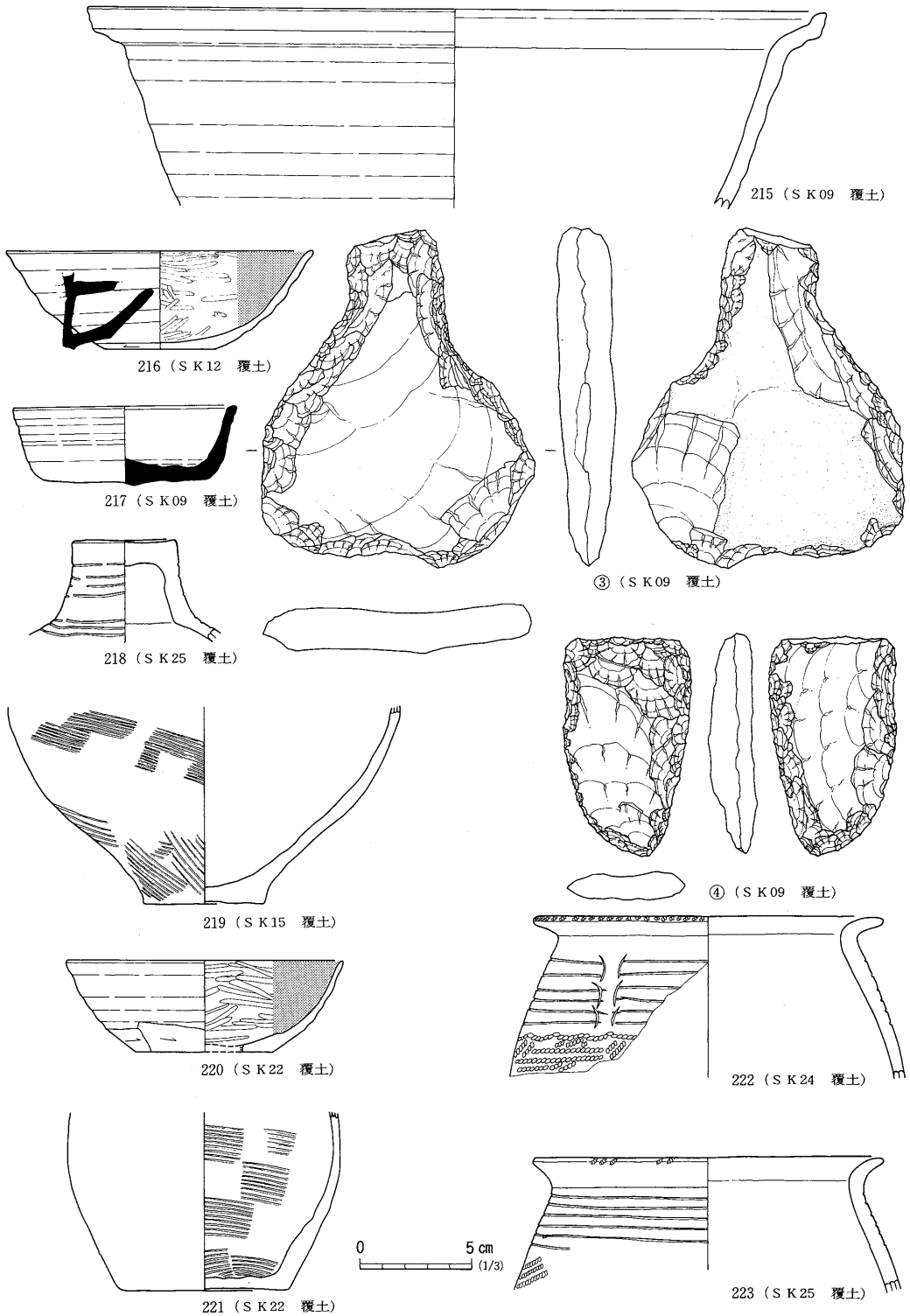
第130図　293・295～304号土坑



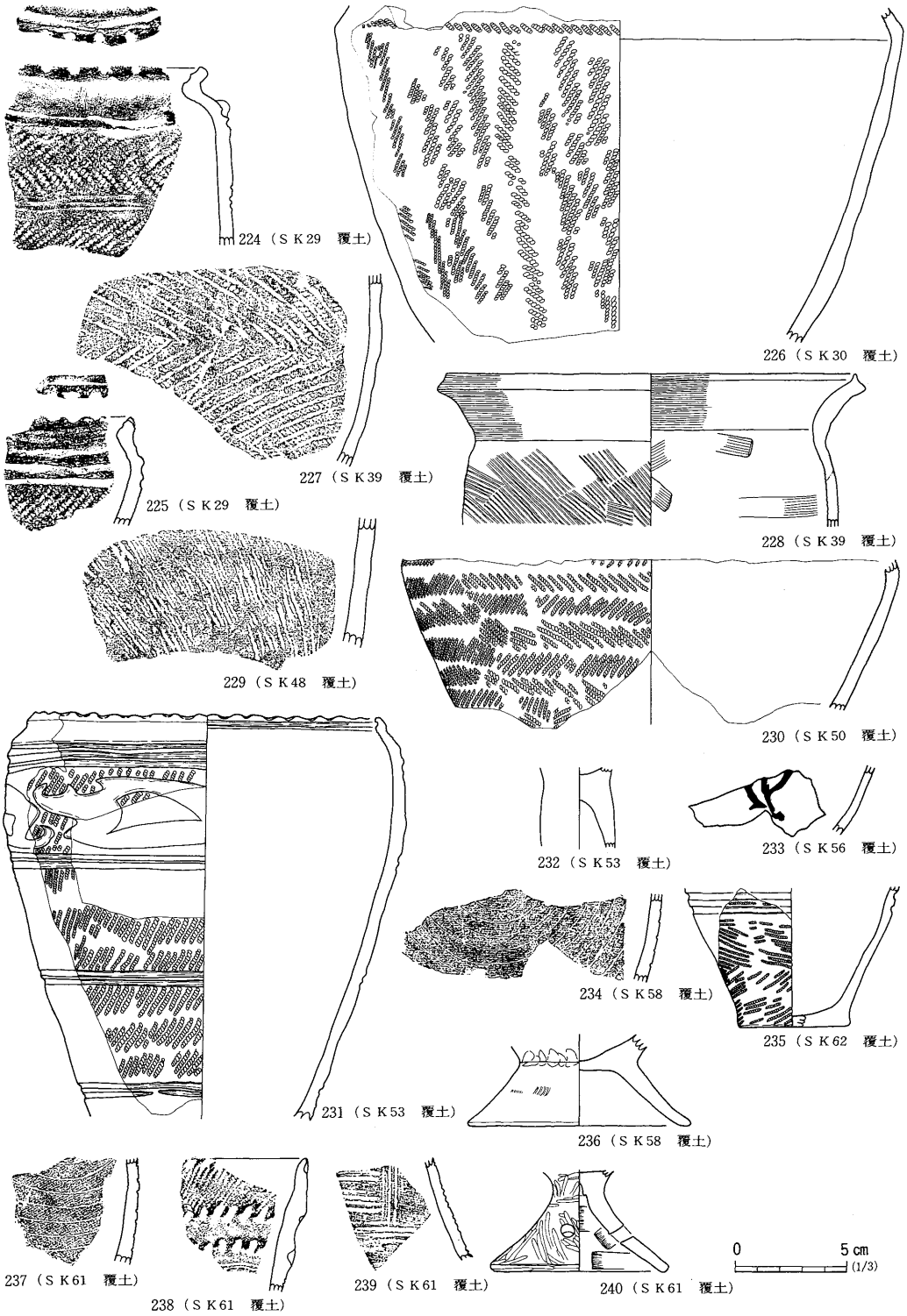
第131図　305～318号土坑



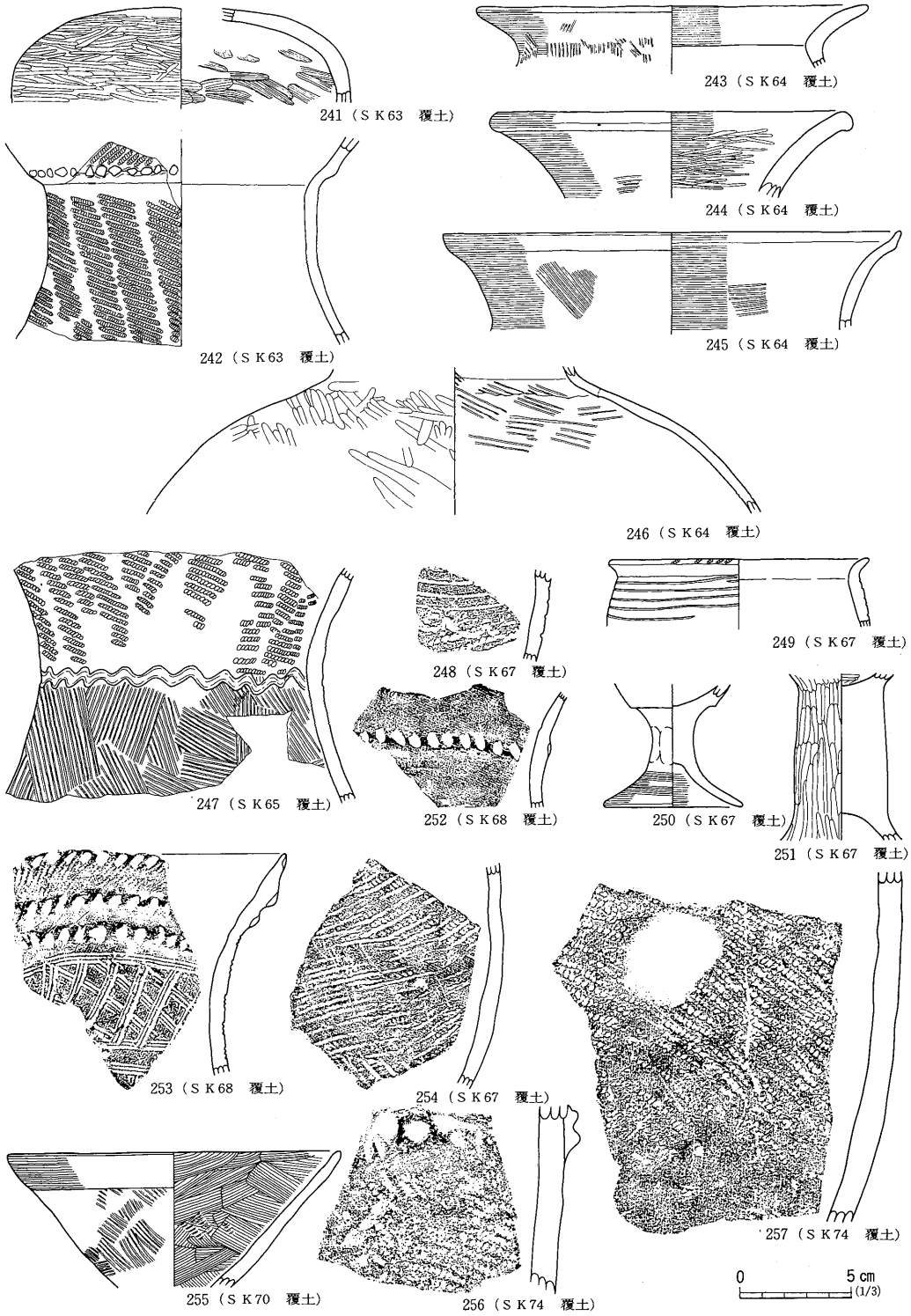
第132図　1・2・4・6・7号土坑出土遺物



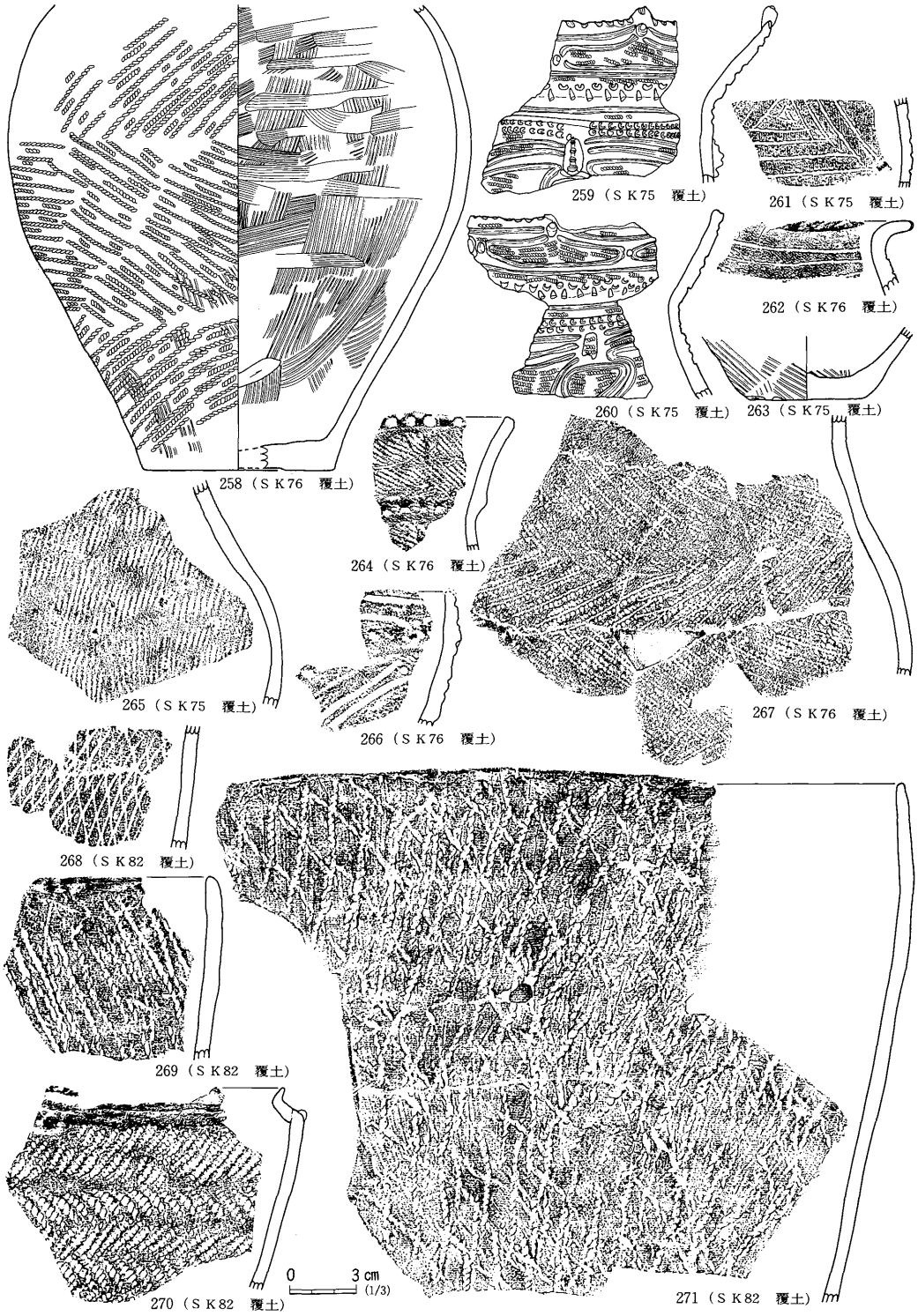
第133図　9・12・15・22・24・25号土坑出土遺物



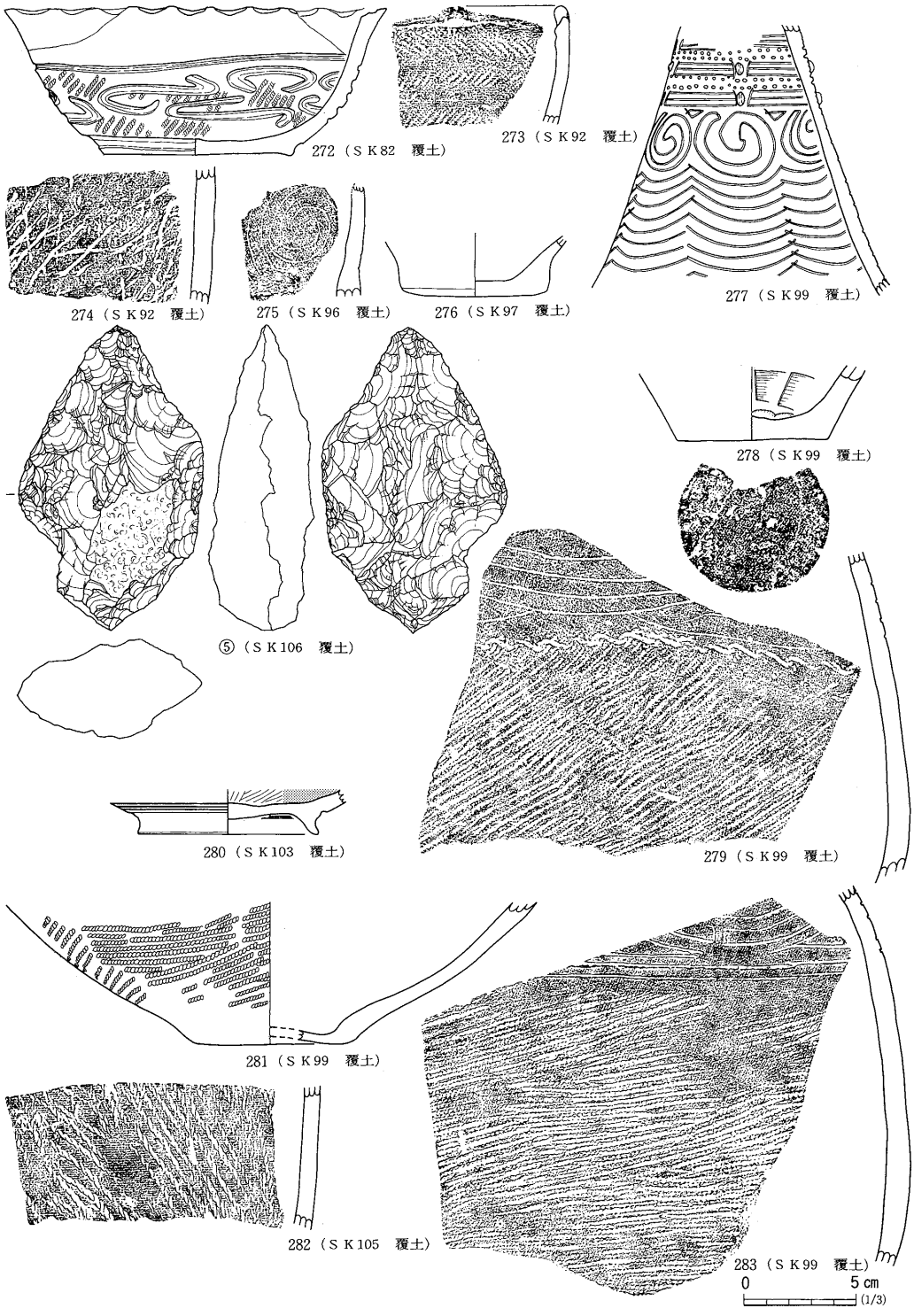
第134図　29・30・39・48・50・53・56・58・60・61・62号土坑出土遺物



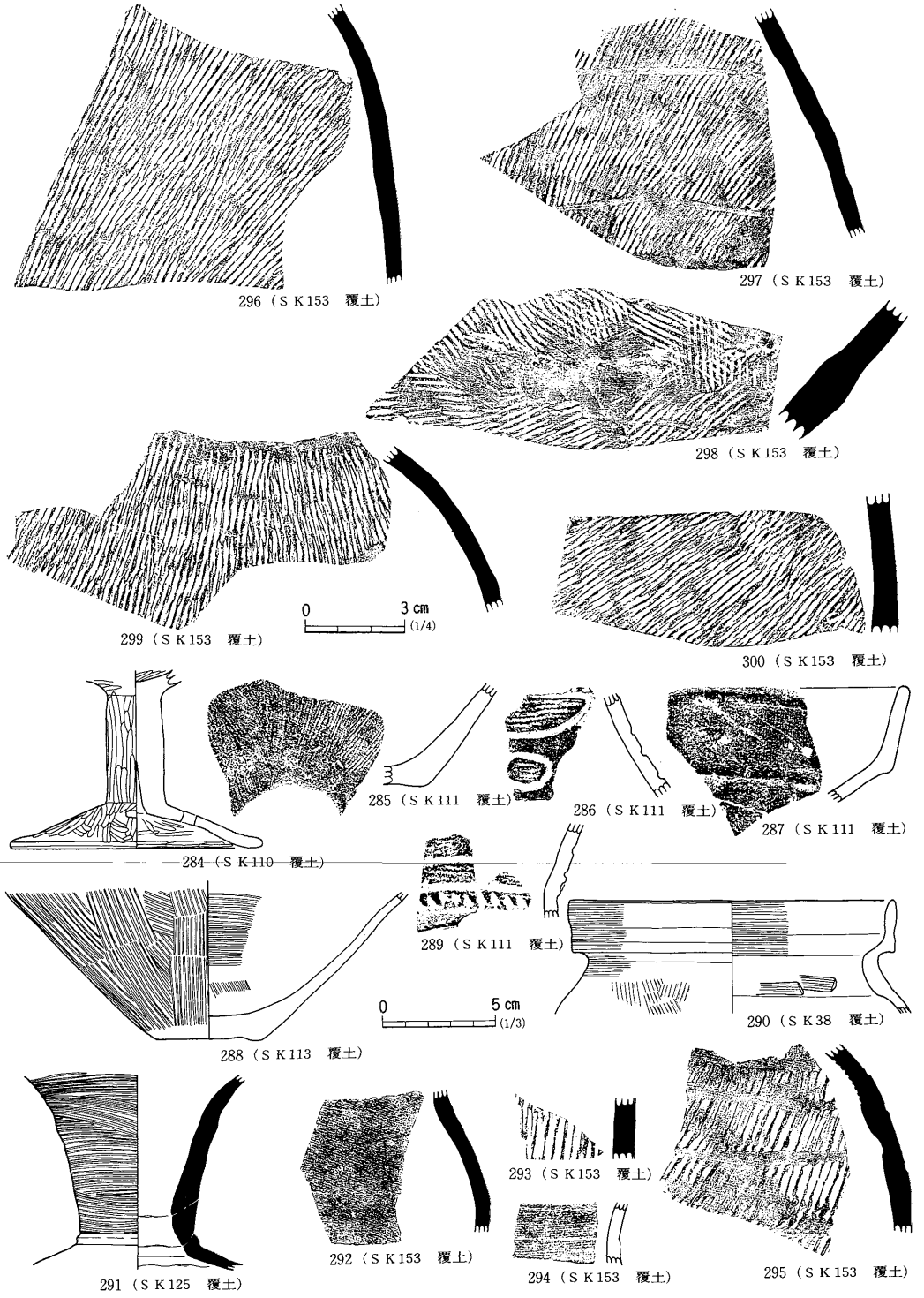
第135図　63～65・67・68・70・74号土坑出土遺物



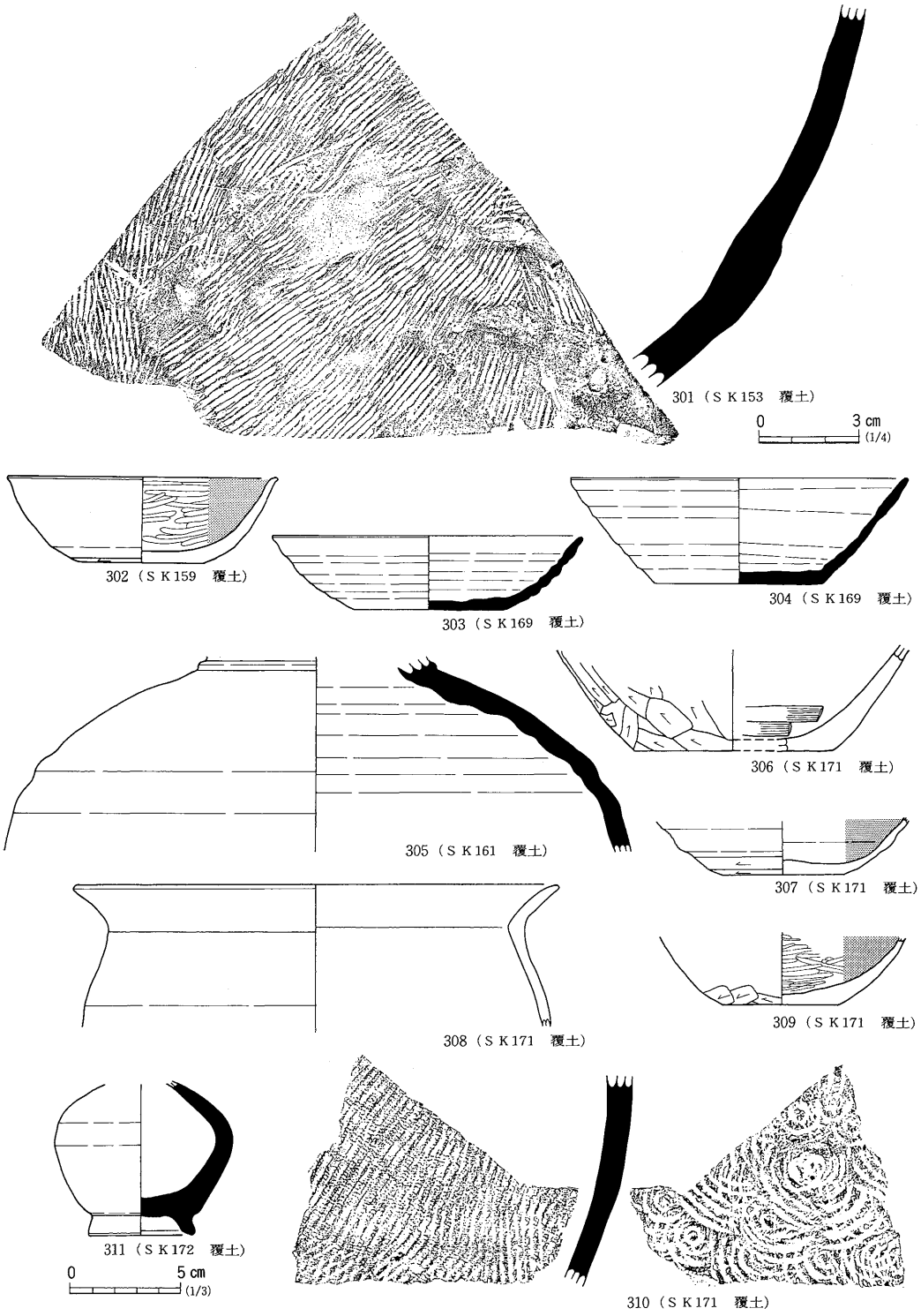
第136図　75・76・82号土坑出土遺物



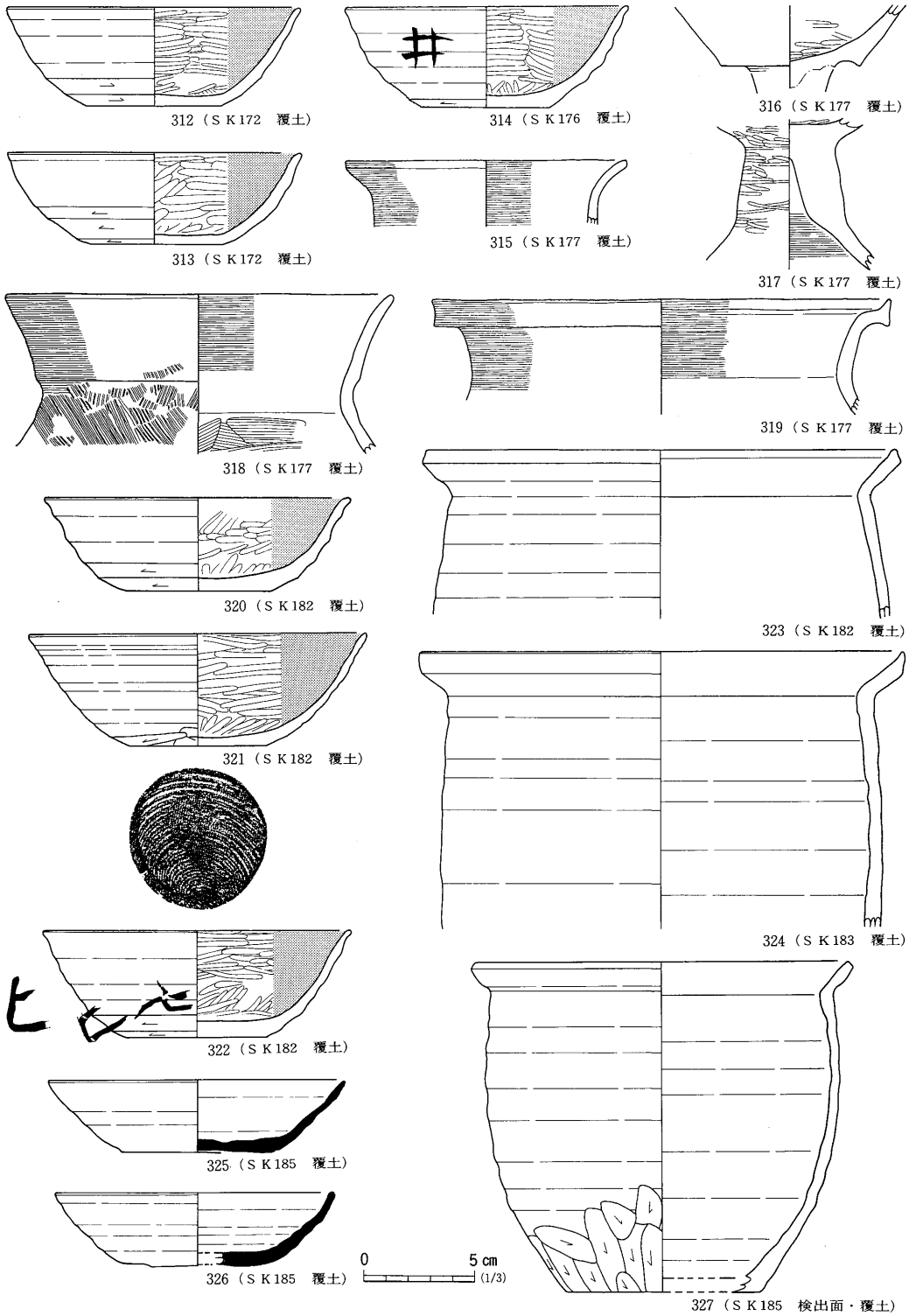
第137図　82・92・96・97・99・103・105・106号土坑出土遺物



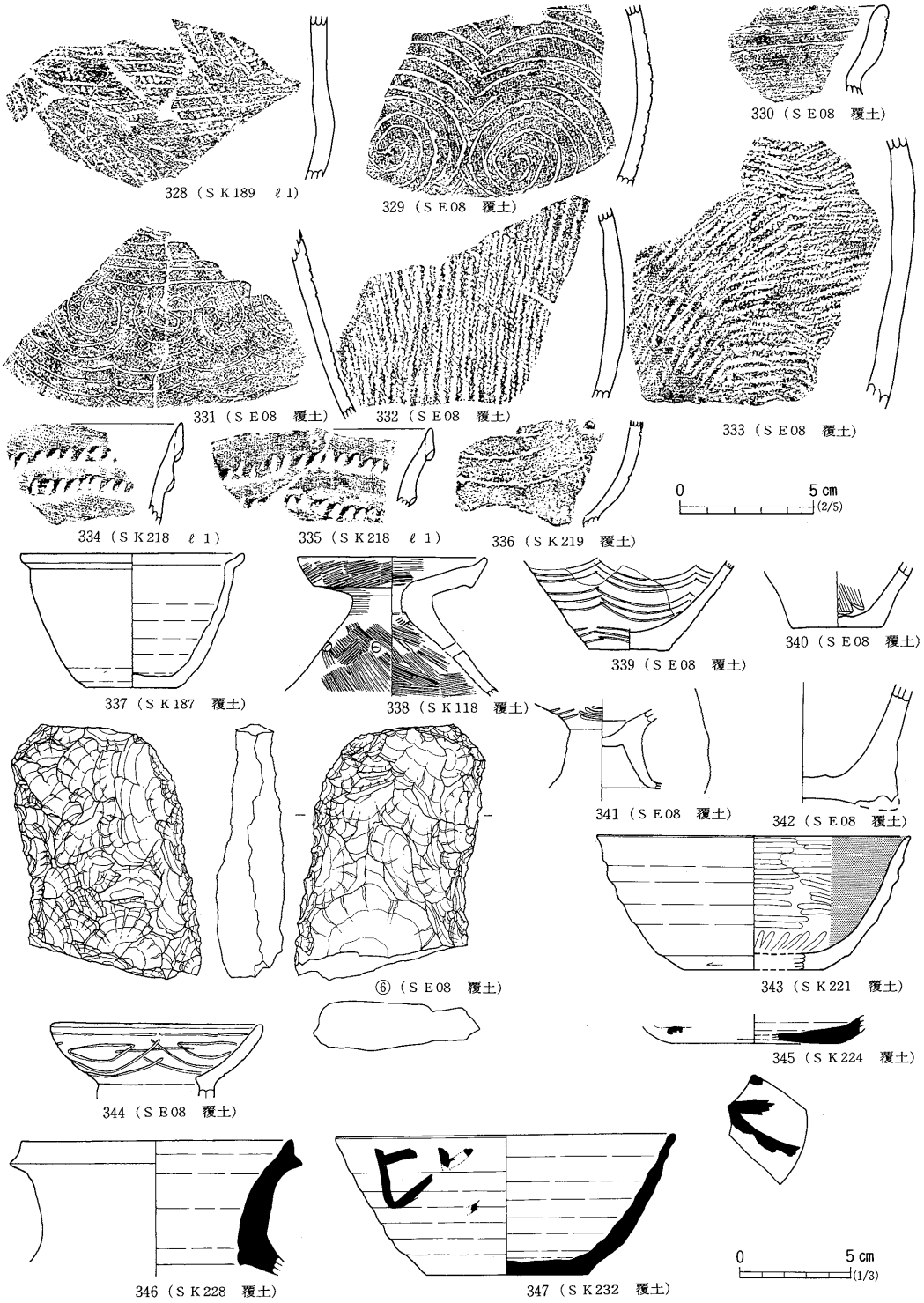
第138図　38・110・111・113・125・153号土坑出土遺物



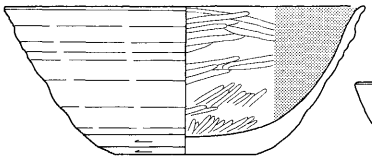
第139図　153・159・161・169・171・172号土坑出土遺物

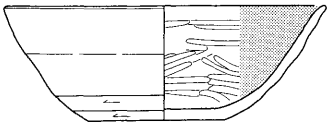


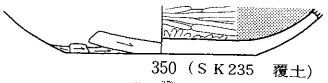
第140図　172・176・177・182・183・185号土坑出土遺物

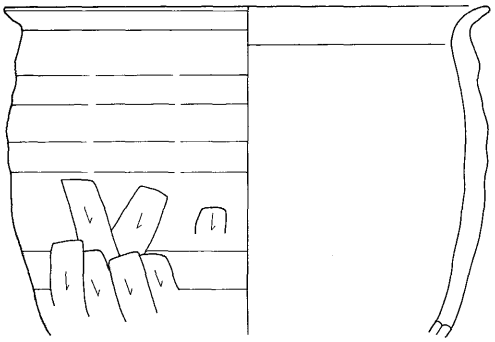


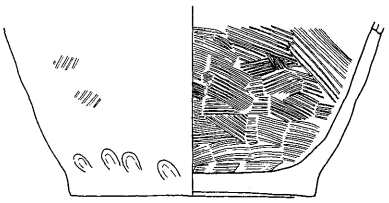
第141図　118・187・189・218・219・221・224・228・232号土坑，８号井戸跡出土遺物

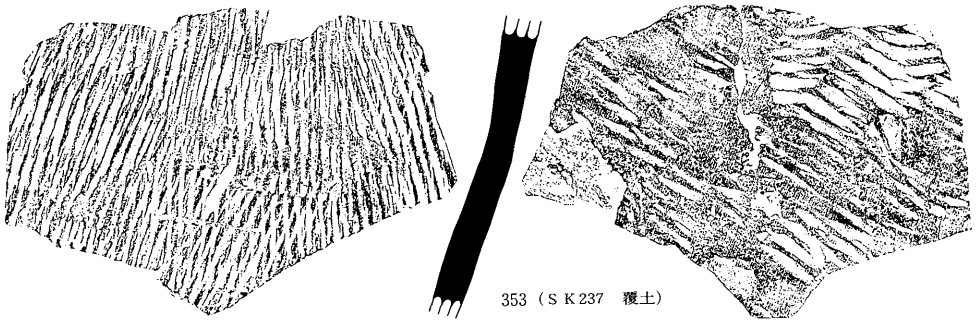

348（S K235　覆土）

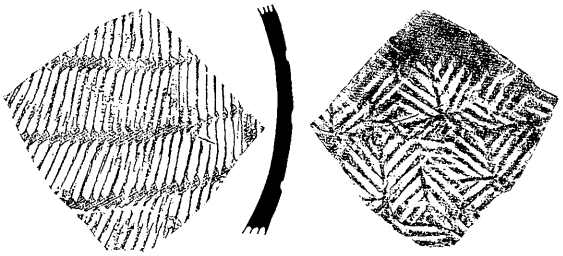

349（S K235　覆土）


350（S K235　覆土）

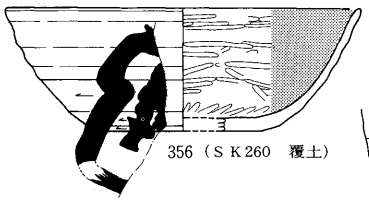

351（S K237　覆土）

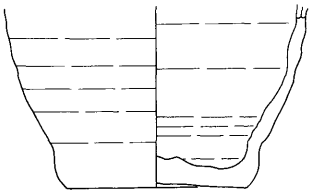

352（S K255　覆土）

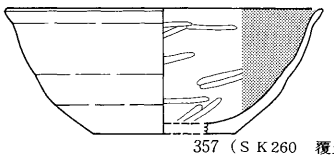

353（S K237　覆土）

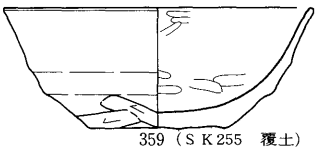

354（S K237　覆土）

355（S K252　覆土）


356（S K260　覆土）

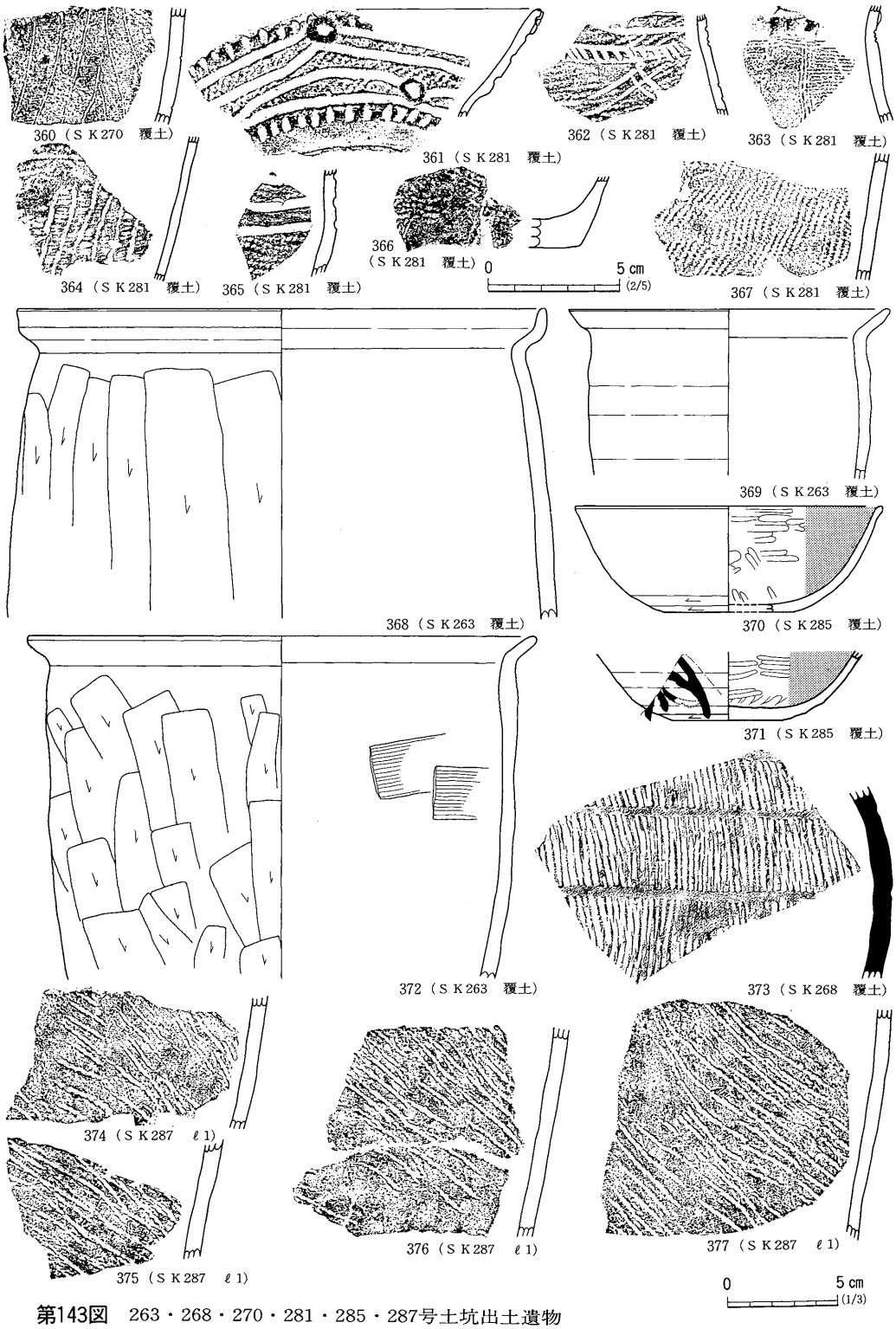

358（S K260　覆土）


357（S K260　覆土）

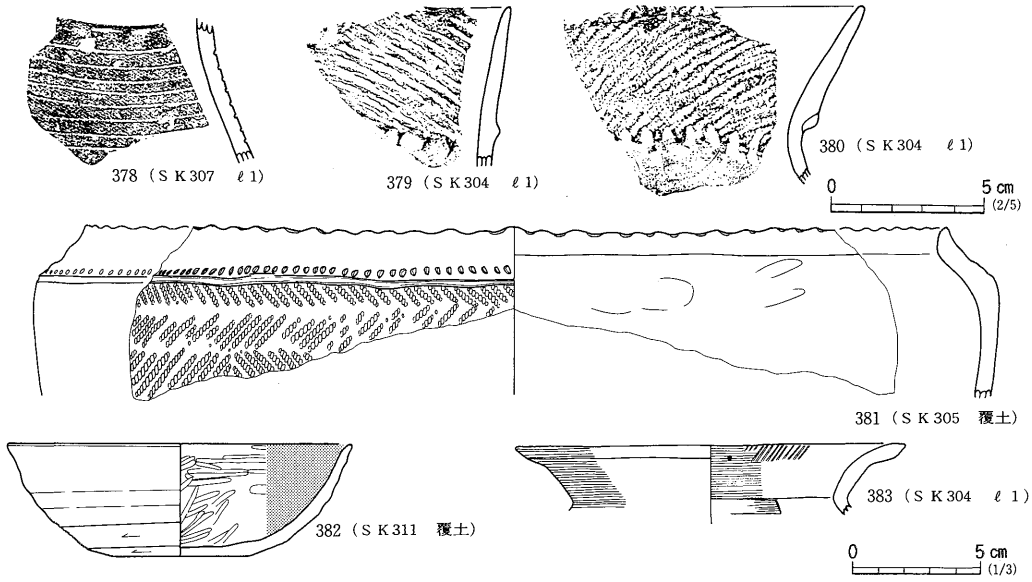

359（S K255　覆土）

0　5 cm
(1/3)

第142図　235・237・252・255・260号土坑出土遺物



第143図　263・268・270・281・285・287号土坑出土遺物



第144図　304・307・311号土坑出土遺物

第5節　井　戸　跡

1号井戸跡　S E01

遺　構　（第146図，図版32）

1号井戸跡はⅡ区の東端，T－4・5グリッドに位置している。検出面はL Ⅲの上面である。切り合い関係はない。素掘りの井戸で，平面形は不整な隅丸の五角形に近い。規模は1.61m×1.41mである。深さは検出面から約1.50mで，底面は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり，上端部付近でやや拡がりをみせる。

まとめ

本井戸跡はⅡ区，T－4・5グリッドで検出された。出土遺物はなく，本井戸が廃絶された時期は不明である。また本井戸にどの遺構が関連しているのかについても不明である。　（中野）

2号井戸跡　S E02

遺　構　（第146図）

2号井戸跡はⅢ区の東南端，P－17グリッドに位置している。検出面はL Ⅲの上面である。遺構の一部は調査区外にあり，平面形は全体を把握することはできなかったが，楕円形と思われる。長径は1.2m以上，短径は1.29mである。検出面からの深さは約0.85mである。底面は平坦で，

壁は上部ほど拡がるように立ち上がる。

まとめ

本井戸から出土遺物はなく，廃絶された時期は不明である。北西方向10ｍに22号建物跡，20ｍに23号建物跡があるが，関連があるかどうかは不明である。（中野）

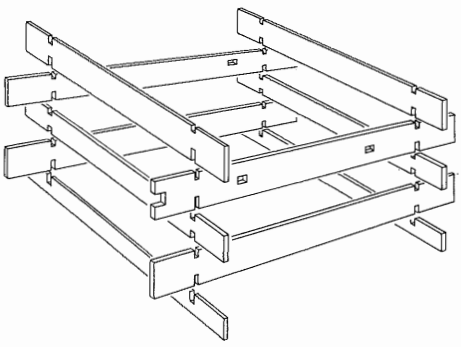
３号井戸跡　ＳＥ03

遺　　構（第145・146図，図版33～35）

３号井戸跡は，Ⅲ区のほぼ中央部のＭ－13グリッドに位置している。遺構検出面はＬⅢ上面である。直接の切り合い関係にある遺構もなく，遺存状態は井戸枠の一部を除いて良好である。井戸跡北側には８号建物跡を中心とする建物跡群がある。そのなかの９号建物跡の柱筋南の延長上15ｍ(50尺)のところに３号井戸跡が位置している。東側にも２棟の建物跡がある。また井戸跡北から西に伸びる50号溝跡が検出された。

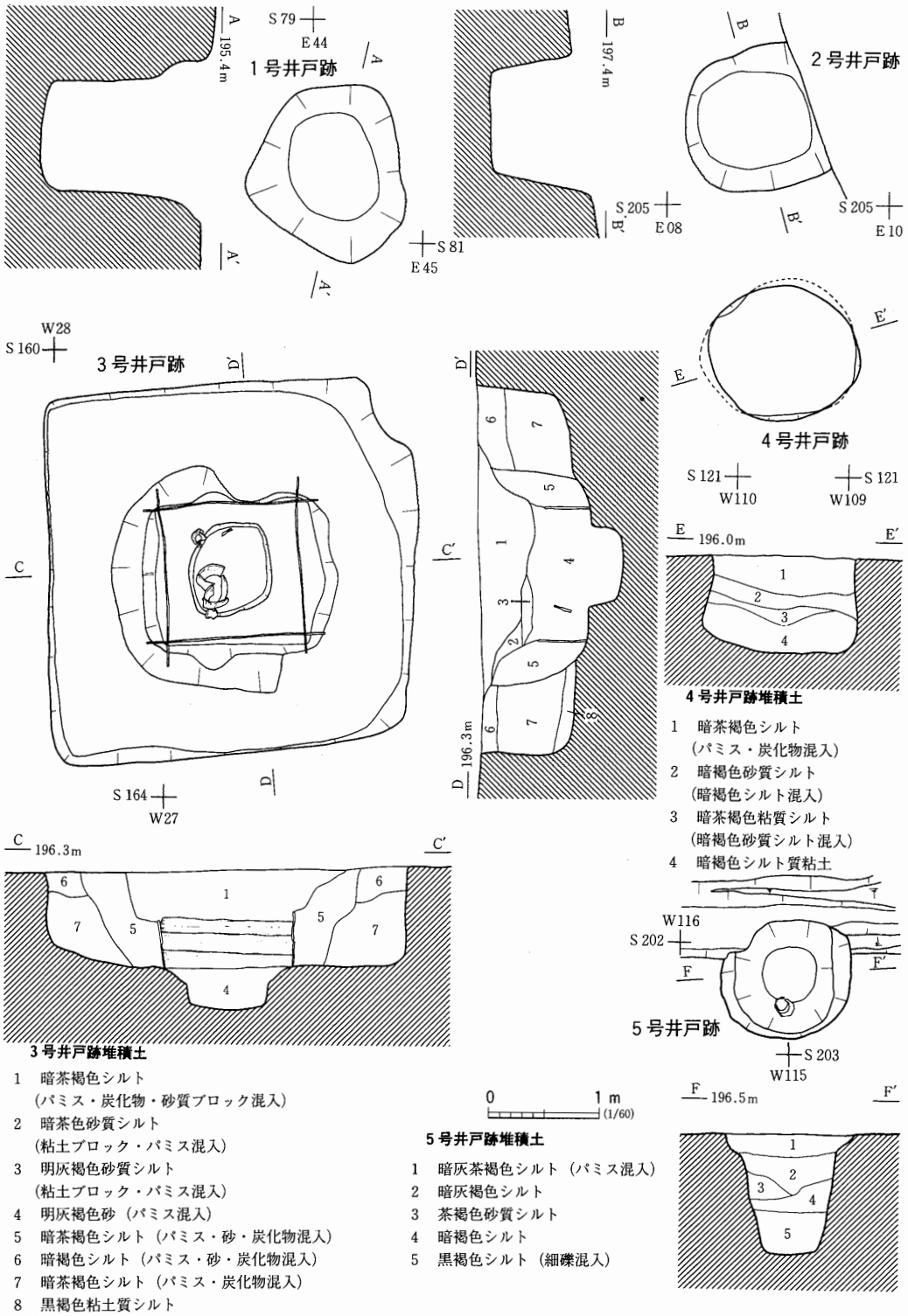
井戸跡は掘形と，中央に据えられた方形の井戸枠からなっている。

掘形は，平面形が長軸6.6ｍ，短軸6.5ｍ，主軸方位がＮ－６°－Ｗの方形を呈する。周壁の立ち上がりは，南東部が急であるが他はほとんど垂直となっている。底面は検出面より0.9～1.0ｍの深さであるが，井戸枠の周囲はさらに20㎝程低くなっている。さらに井戸枠の中央部は，直径約85㎝，深さ25㎝程に掘り込まれており，水溜めの用途に用いたものと考えられる。井戸枠は掘形の中央で周壁よりも約１ｍ内側に，それぞれ掘形の壁と平行に設置されている。平面形は一辺が1.2ｍの方形である。井戸枠の上端から底面までは最大45㎝，検出面からは約40㎝程下がったところである。東と西枠についてはそれぞれ３段，北と南枠については２段組んだ状態で検出された。しかし，北・南枠ともに，最上段の枠の上方側に切れ込みが施されており，また堆積土中からも，崩壊した井戸枠と考えられる木器が，出土していることから，すべて枠は３段以上に組んでいたものと考えられる。



第145図　３号井戸跡井戸枠概略図

井戸枠外側の埋土は４層に分けられた。ℓ６～８はパミスを含む砂土で地山であるパミス質の砂層を掘り込んだ土砂をそのまま埋土に利用したものと考えられる。ℓ５は暗茶褐色の砂質シルトで，これは井戸枠のコーナー部の外側を除き，枠の裏側に接して埋められている。これはまた平面的には各枠より，外側に向かって凸レンズ状の広がりをもつものである。炭化物なども含んでおり，表層付近の土壌を利用して裏込めされているのであ



3号井戸跡堆積土

1　暗茶褐色シルト
（パミス・炭化物・砂質ブロック混入）
2　暗茶色砂質シルト
（粘土ブロック・パミス混入）
3　明灰褐色砂質シルト
（粘土ブロック・パミス混入）
4　明灰褐色砂（パミス混入）
5　暗茶褐色シルト（パミス・砂・炭化物混入）
6　暗褐色シルト（パミス・砂・炭化物混入）
7　暗茶褐色シルト（パミス・炭化物混入）
8　黒褐色粘土質シルト

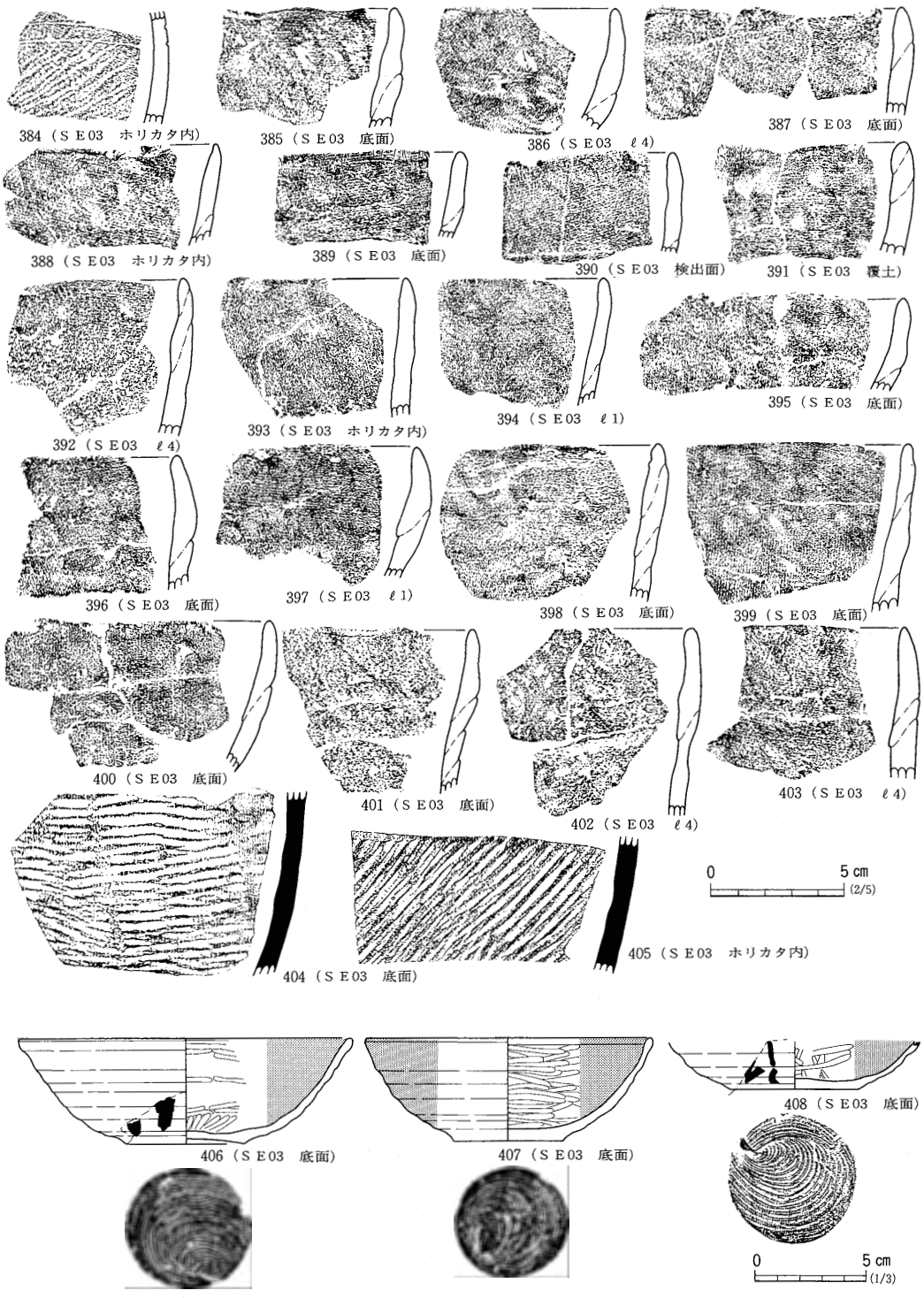
4号井戸跡堆積土

1　暗茶褐色シルト
（パミス・炭化物混入）
2　暗褐色砂質シルト
（暗褐色シルト混入）
3　暗茶褐色粘質シルト
（暗褐色砂質シルト混入）
4　暗褐色シルト質粘土

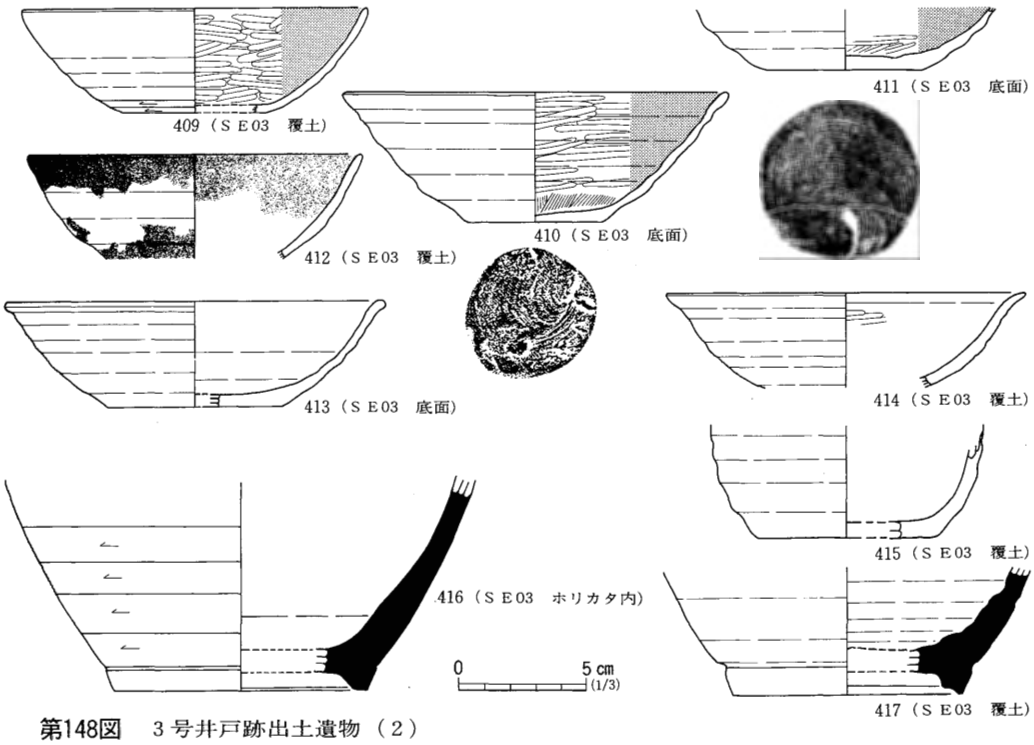
5号井戸跡堆積土

1　暗灰茶褐色シルト（パミス混入）
2　暗灰褐色シルト
3　茶褐色砂質シルト
4　暗褐色シルト
5　黒褐色シルト（細礫混入）

第146図　1～5号井戸跡



第147図　３号井戸跡出土遺物（１）



第148図　３号井戸跡出土遺物（２）

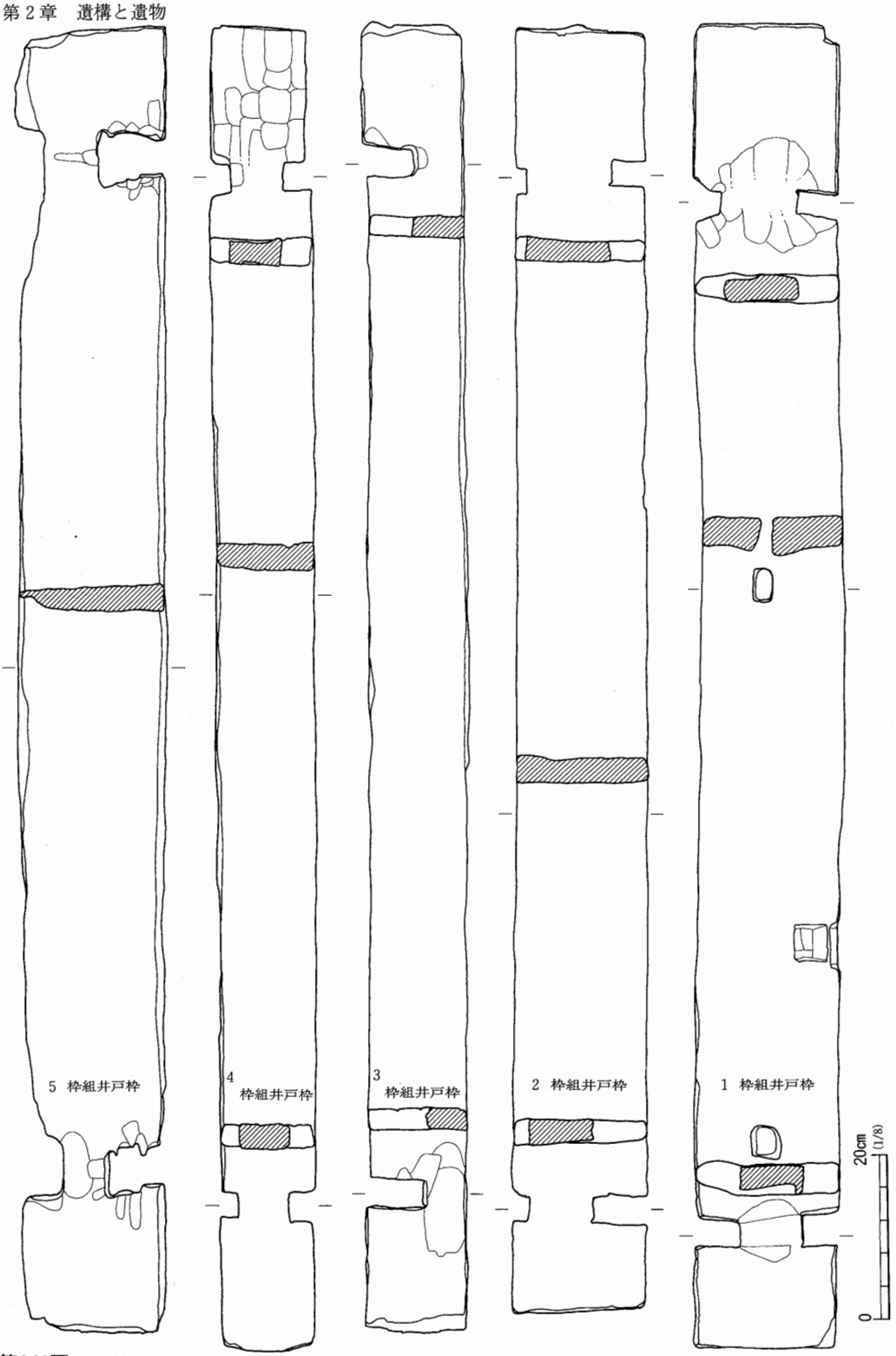
ろう。

井戸枠内の堆積土は４層に区分した。このうちℓ４は井戸廃絶後，一定の水深を保った状態において，粘土やシルト等の細粒な物質が自然に堆積したものである。ℓ１～３については比較的短期間に一時的に土砂が流入し，堆積したものと考えられる。

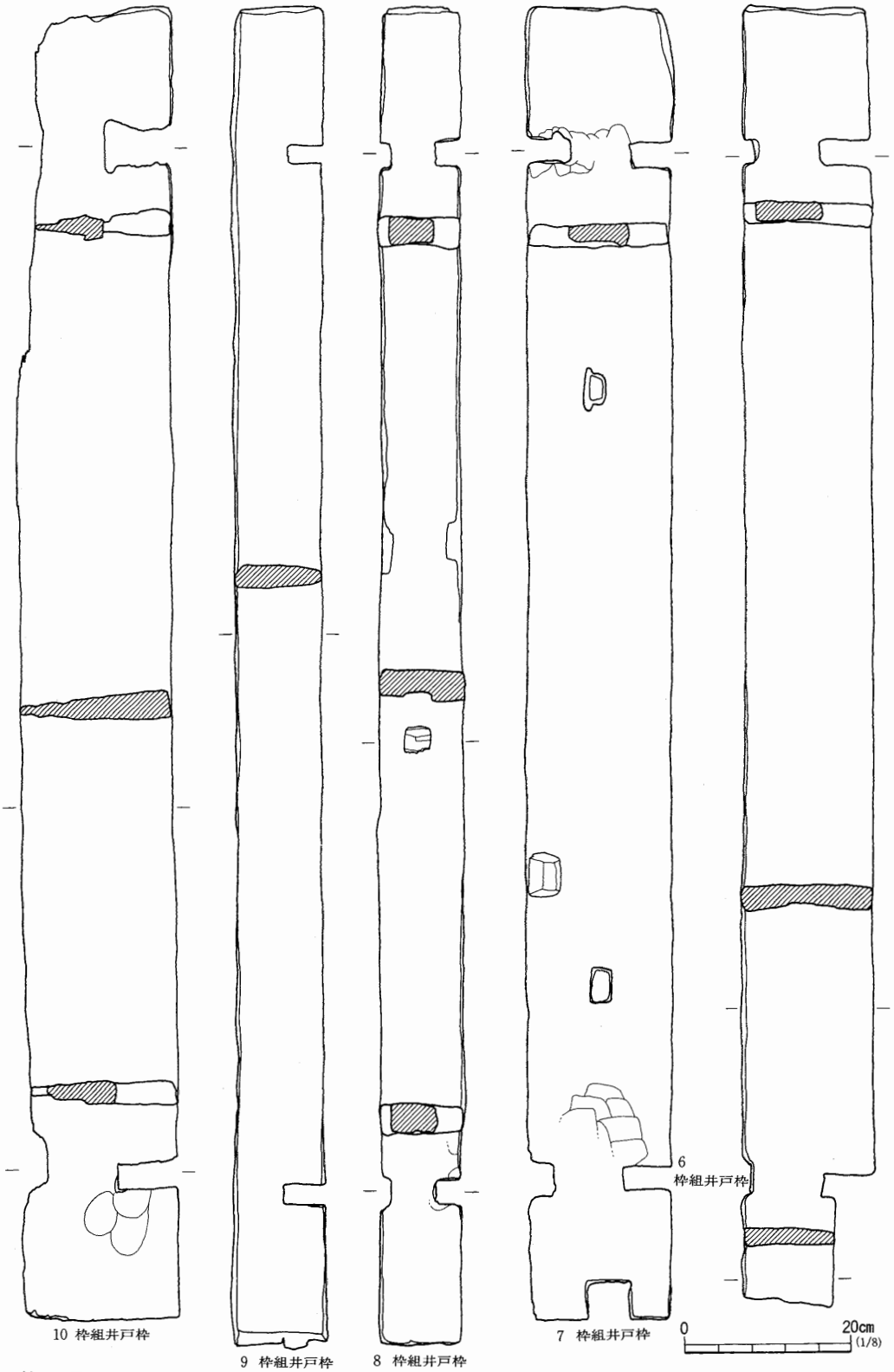
遺　　物（第147～151図，図版70・90・91）

土器　図示資料では，井戸枠内の底部より，406～408・410・413が出土した。406～408・410は土師器の杯である。底部は回転糸切りされ，内面は黒色処理，ヘラミガキが施されている。406・408は体部に墨書が描かれているが，一部が欠損しているため，文字は不明である。413は赤焼土器杯で底部は回転糸切りがなされている。ℓ４より417が出土した。須恵器の瓶である。ℓ１より409～411・414・415が出土した。409・411・412・414は土師器の杯である。409は底部が回転糸切り，内面がヘラミガキされている。411は底部が回転糸切り，内面の底面付近のみがヘラミガキがなされている。414は内面にヘラミガキがなされている。415は土師器の甕で外面にはナデが施されている。416は掘形から出土した須恵器瓶で回転ヘラケズリがなされている。

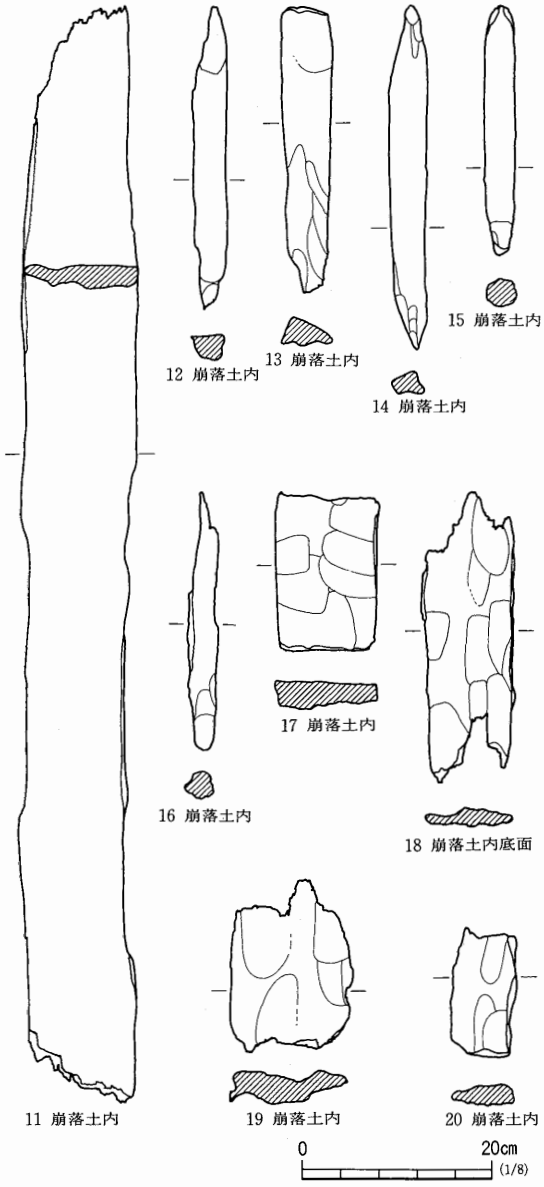
木器　３号溝跡から出土した木器は井戸枠，およびその崩落物と井戸枠外側の杭材である。調査時に組んだ状態で検出された井戸枠は木器番号１～10の10本である。これらは長さが154～162cm，幅11～18cm，厚さ1.3～1.7cmの板材を使用してある。この板材は板目木取の針葉樹材で



第149図　３号井戸跡井戸枠（１）



第150図　3号井戸跡井戸枠（2）



第151図　３号井戸跡出土木材

ある。内法が120cmになるように切れ込みが作られている。最下部の井戸枠である，３・９は片側にのみ，その板材幅の約半分まで切れ込まれている。一方他の井戸枠は板材の上下両側に切れ込みが作られているが，これは枠がずれるのを防ぐ目的で，一つの枠材と直交する枠材を上下両方から組ませるためのものである。そのほか崩落板材であるが11が長さ115cm，幅11cm，厚さ2.4cmで，前述した南か北の最上段，３段目の井戸枠に相当するものと考えられる。さらに12～15・17は組んだ井戸枠下に置かれたものなどで，枠と地山の間にはさみ，枠の傾きの修正などに用いられたものであろう。ここでは15のみが広葉樹のクヌギ材である。

木器は主に杉の板目材であるためか，全般に表面の加工痕はそれほど明確ではない。しかし，一部に手斧および鉇（やりがんな）によるものと見られる痕跡がある。

まとめ

３号井戸跡は一辺が120cmの方形の井戸枠，およびその掘形からなる井戸である。井戸枠底面付近で出土した土器が10世紀前半に比定されるところから，本井戸跡もそのころに機能していたものと考えられる。またこの井戸は９号建物跡の主軸の南に位置しており，８号建物跡を中心とするⅢ区の遺構群の一部と考えられる。　（香内）

４号井戸跡　ＳＥ04

遺　　構　（第146図）

調査区内のⅤ区北部の中央部のＤ・Ｅ－９グリッドに位置する。他の遺構との切り合い関係はない。保存も良好である。検出面は，周辺の遺構と同様にＬⅢ暗黄褐色砂質シルト上面となっている。

素掘の井戸で何等施設は持たない。平面プランは円形に近い楕円形を呈し，上端で東西方向の長軸では146cm，南北方向の短軸では122cmを測る。検出面からの深さは，下端中央の最深部で85cmである。東～南側の壁面はほぼ直立している。一方，西～北側の壁面はややオーバーハング状に上端が内側に向かって傾斜している。底面は平坦である。

堆積土は4層に区分した。下部のℓ3・4については，粘土質の堆積物を主体とするものである。堆積土上部のℓ1は周辺の遺構と同様なパミスを含んだ暗茶褐色シルトからなる。中間のℓ2については，暗褐色砂質シルトである。これらの堆積土は井戸の放棄後も，水深がある程度を保った状態で，水中においてシルトおよび粘土などの細粒な物質の堆積により形成されたものである。同時に水深は浅くなるが，ある程度の水深中に中間部が堆積し，最後に上部層をつくる堆積土が周辺より一時的に流入，堆積したと考えられる。以上のことから自然堆積と判断される。

遺　物

遺物は土師器・須恵器の小片が出土しているのみである。

まとめ

直径が130cm程度で，深さが85cmの素掘の井戸である。14～16号建物跡に伴う可能性が高いものと考えられる。年代を直接的に示標する資料はないが，おそらく平安時代のものであると推定される。

（香内）

5号井戸跡　SE05

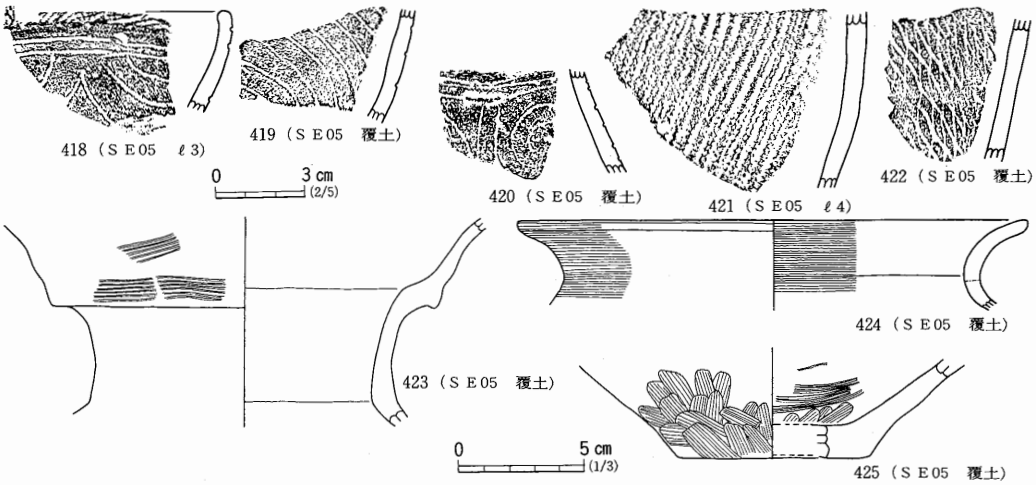
遺　構（第146図）

5号井戸跡はV区の南半部西側E－18グリッドに位置している。検出面はLⅢ黄褐色砂質シルト上面である。118号溝跡と重複関係にあり，5号井戸跡が118号溝跡に切られていることが確認された。

平面プランは，北西壁でやや内側に入り込むものの，ほぼ隅丸方形を呈している。直径は115cm程である。検出面からの深さは，下端中央の最深部で108cm程ある。壁は70～75°の急な角度で立ち上がっていくが，深さ16cm付近で緩やかな立ち上がりとなる。底面は平坦である。堆積土は5層に分層される。ℓ1はパミスを含む暗灰茶褐色シルト，ℓ2は暗灰褐色シルト，ℓ3は茶褐色砂質シルト，ℓ4は暗褐色シルト，ℓ5は細礫が混じる黒褐色シルトである。ℓ3は壁の崩落土と考えられる。湧水点は上端より70cm以下であろう。堆積状況から自然堆積と思われる。

遺　物（第152図）

出土遺物は弥生土器である。424は甕で，頸部から口縁部にかけて遺存する。内外面ともにヨコナデを施している。425は壺であるが，底部から体部下半が遺存し，内外面ともにヘラナデを施し，内面はハケメも施している。423も壺で，頸部から口縁部にかけて遺存する。頸部から口



第152図　５号井戸跡出土遺物

縁部の間に段を有する。外面にヨコナデが施されている。

まとめ

本井戸跡からは，堆積土中より弥生後期の土器のみが出土している。したがって，本井戸跡は弥生時代後期に機能した井戸跡と考えられる。（伊藤）

６号井戸跡　ＳＥ06

遺　　構（第155図，図版36）

６号井戸跡は，Ⅴ区中央よりやや北側のＥ－10グリッドにて検出された井戸跡で，遺構検出面はＬⅢ上面となっている。井戸跡の南側には，28～29号建物跡が位置している。

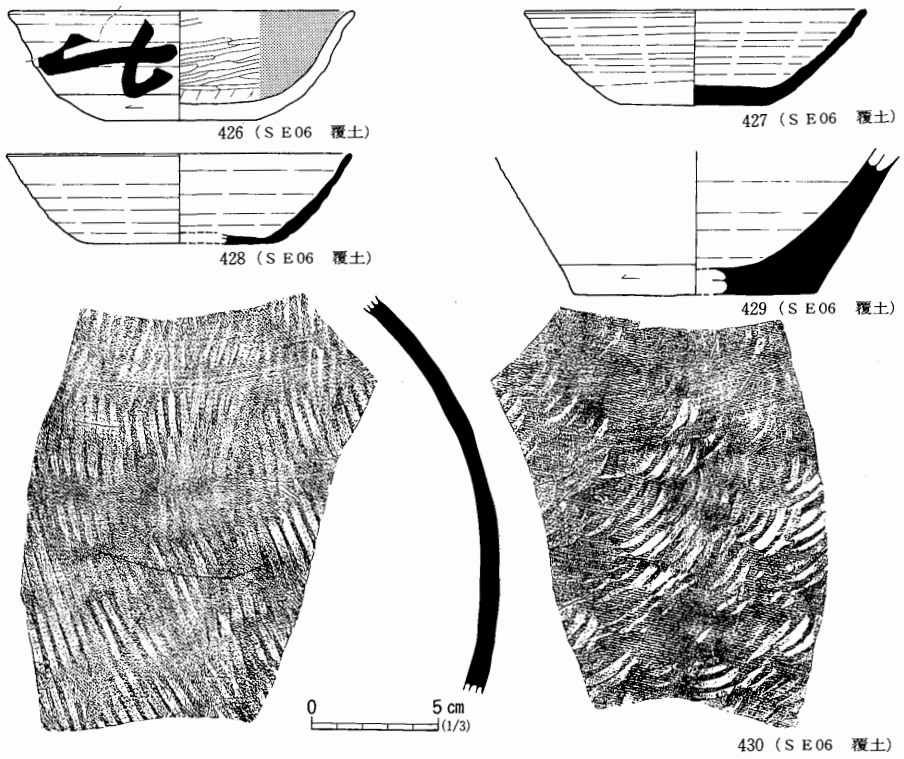
井戸跡の平面形は楕円形を呈し，中央部では更に楕円形状に，一段低く掘られている。その規模は，上端の長軸1.48ｍ，短軸1.30ｍ，中段の上端の長軸0.54ｍ，短軸0.61ｍである。検出面からの深さは，中央部上端までが50㎝，底面中央までが１ｍである。周壁の立ち上がりは急で，底面は中央部がややくぼんだ形態を呈する。堆積土は，パミスを混入する黒褐色シルト２層で，堆積状況は自然堆積となっている。

遺　　物（第153図，図版86）

遺物は堆積土中より，土師器杯・甕，須恵器杯・大甕等が出土している。図示資料では，426が土師器杯で体部に「比」の墨書が認められる。427・428は，底部が回転ヘラキリされた須恵器の杯で429は大甕の底部である。

まとめ

本井戸跡に，明確に伴う遺物は出土しなかったが，堆積土中出土の遺物により，その年代は平安時代（９世紀代）であると考えられる。（藤谷）



第153図　6号井戸跡出土遺物

7号井戸跡　S E07

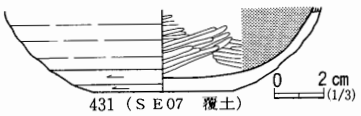
遺　　構　（第155図，図版36）

7号井戸跡は，Ⅴ区ほぼ中央のF－11グリッドにて検出された井戸跡で，南側でピットを切っている。また，井戸跡は周囲が11・27・28号の各建物跡に囲まれた場所に位置している。遺構検出面は，LⅢ上面となっている。

井戸跡の平面形は，南北に長い楕円形を呈する。その規模は，長軸1.50m，短軸1.15m，検出面からの深さが底面中央の最深部で1.02mとなっている。周壁の立ち上がりは急で，北側ではその一部が僅かにオーバーハングしている。底面は，中央部が若干低くなっている。堆積土は，上から暗茶褐色シルト・暗褐色シルト・暗茶褐色シルトの3層からなっており，堆積状況は，人為堆積と考えられる。

遺　　物　（第154図）

遺物は，堆積土中より土師器杯，須恵器杯が出土している。図示資料では，431が底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施された土師器杯である。



第154図　7号井戸跡出土遺物

まとめ

本井戸跡は，建物跡群が集中する地区に位置する素掘りの井戸で，出土遺物より平安時代の９世紀頃に機能したものと推定される。（藤谷）

８号井戸跡　ＳＥ08

遺　　構（第155図，図版36）

Ｖ区Ｇ－17・18グリッドで検出された遺構である。ＬⅢ暗黄褐色砂質シルト層上面で確認された。遺構の周辺には，96・97号溝跡，271・272号土坑，12号住居跡，５号埋設土器などが点在している。

遺構の検出面での平面形は，やや不整な楕円形で長軸2.15ｍ，短軸1.45ｍである。検出面より深さ40㎝程に，足場とも考えられる平場が設けられている。この面から下の部分の平面形は，直径約１ｍの円形である。

遺構検出面からの深さは，底面中央の最深部で1.10ｍあり，中段の平場部分は40～50㎝である。

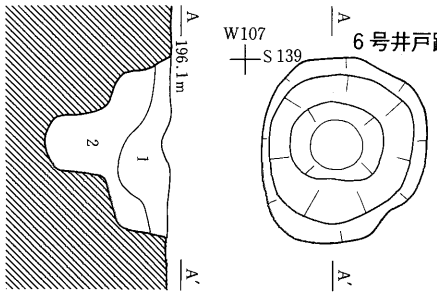
堆積土は８層から成る。ℓ１～５までの平場と同じ高さまでの層は，暗灰黒色シルトで，それぞれパミス・暗黄色細砂粒を含む。ℓ６は壁崩落土と考えられ，ℓ７は暗灰黒色シルトである。ℓ８は砂と黒色シルトの交互堆積であるが，湧水が著しく，何層に細分できるかは観察できなかった。ℓ８中には遺物の他に木の枝などの植物遺体が混入していた。井戸の底面はほぼ平坦で円形である。

遺　　物（第141図，図版58・77）

本遺構からは，ℓ２～４・７・８の各層から遺物が出土している。いずれも弥生土器で24点を数える。340は壺底部から体部下端にかけてのもので，底部に木葉痕が見られる。341は高杯の脚部分である。ナデを行い受口部に沈線による連弧文を施す。330は壺口縁部である。ナデを行い平行沈線文が施されている。口唇部分は半截竹管状工具でキザミが入れられている。331は壺体部上半から頸部にかけてのもので，平行沈線文・渦文・連弧文が施される。渦文外周部分から１区画おきに赤色塗彩が施されている。344は壺口縁部である。沈線によって半月形区画・連弧文を施し６単位から成る。半月形区画外周から１区画おきに赤色塗彩が施されている。332は最下層ℓ８出土のものである。壺で体部に縄文が施されている。この他，ℓ８からは弥生土器の小片が13点出土している。

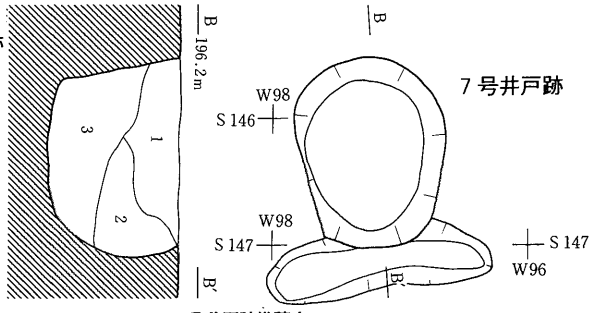
まとめ

本遺構は中段に足場と考えられる平場をもつ井戸である。今回の調査で検出された井戸跡でもやや小型のものである。本遺構の機能した時期は，出土した遺物から弥生時代中期後半と考えられる。（小野田）



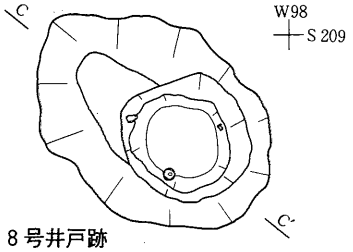
6号井戸跡堆積土

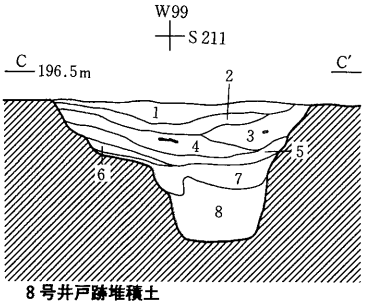
1　黒褐色シルト（パミス・炭化物混入）
2　黒褐色シルト（パミス・灰褐色砂混入）



7号井戸跡堆積土

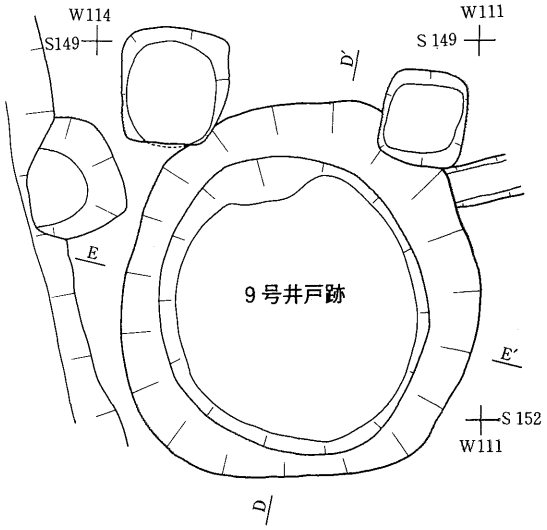
1　暗茶褐色シルト（パミス・砂土・炭化物混入）
2　暗褐色シルト（パミス・砂質シルト混入）
3　暗茶褐色粘質シルト（パミス混入）

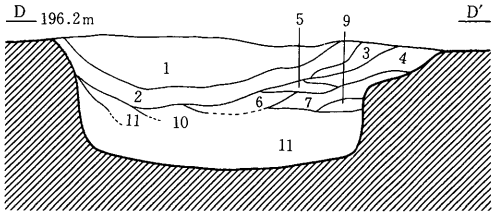


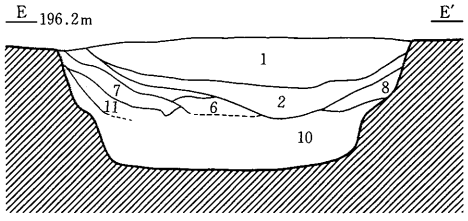


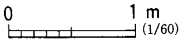
8号井戸跡堆積土

1　暗灰黒色シルト（パミス混入）
2　暗灰黒色シルト（パミス・炭化物混入）
3　暗灰黒色シルト（パミス混入）
4　暗灰黒色シルト（細砂粒・パミス混入）
5　暗灰黒色シルト（細粒砂多量混入）
6　暗黄色細砂
7　暗灰黒色シルト
8　黒色砂質シルト（互層状）





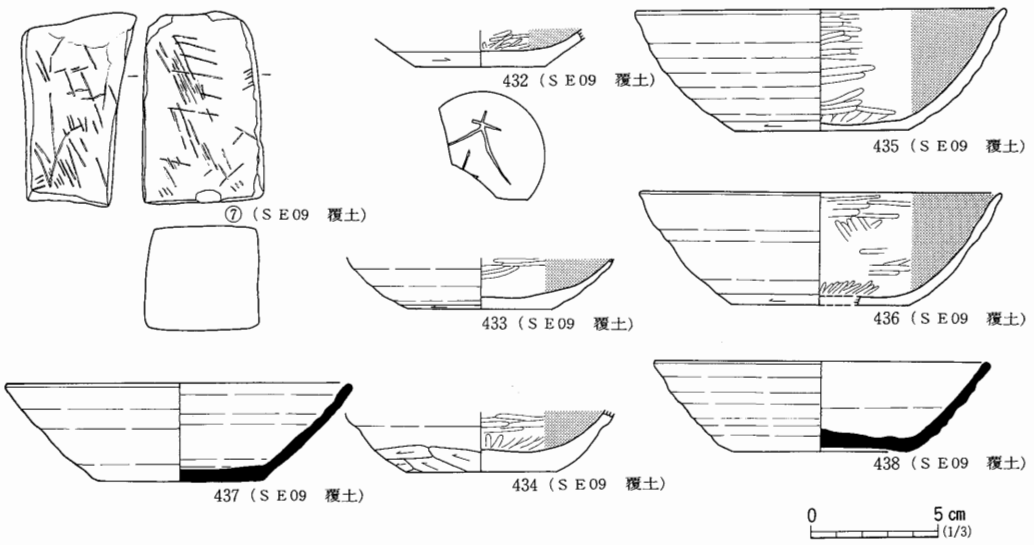




9号井戸跡堆積土

1　暗茶褐色シルト（パミス・炭化物混入）
2　黒褐色粘質シルト（パミス・炭化物・暗茶褐色シルト混入）
3　暗茶褐色シルト（パミス・炭化物混入）
4　黒褐色シルト（パミス・炭化物・暗茶褐色シルト混入）
5　暗褐色砂質シルト（パミス混入）
6　暗褐色砂質シルト（パミス・炭化物混入）
7　暗茶褐色砂質シルト（パミス・暗茶褐色シルト混入）
8　暗茶褐色砂質シルト（パミス・暗黄灰色砂質シルト混入）
9　暗黄灰色砂質シルト（暗茶褐色シルト・パミス混入）
10　暗茶褐色シルト（パミス・炭化物混入）
11　暗茶褐色シルト（黒褐色シルト・暗黄灰色砂質シルト混入）

第155図　6～9号井戸跡



第156図　９号井戸跡出土遺物

９号井戸跡　ＳＥ09

遺　　構（第155図，図版36）

９号井戸跡はＶ区のＤ－12グリッドに位置している。検出面はＬⅢの上面である。切り合い関係では，９号井戸跡は127号溝跡を切っているが，30号建物跡によって切られている。本遺構の西４ｍには10号井戸跡が，南西1.5ｍには５号井戸跡がある。また本遺構の周囲には多数の掘立柱建物跡がある。

本遺構は素掘りの井戸で平面形はほぼ円形で，規模は3.18×2.82ｍ，深さは103㎝である。底面は平坦で，壁は上に向かってやや拡がりをもち，底面から検出面のほぼ中間の高さに段を有する。堆積土は11層に分けられ，炭化物を含む層が多い。また，砂質シルトの層が多い。堆積状況は自然堆積と思われる。

遺　　物（第156図）

遺物として土師器片，須恵器片それぞれ十数点が堆積土中より出土している。図示した遺物は土師器の杯が５点，須恵器の杯が２点，石器が１点である。433・435・436は底部は回転ヘラケズリ，内面はヘラミガキで黒色処理を施している。432は底部は回転糸切りで切り離し，体部下端から底部にかけては回転ヘラケズリで調整している。底部には「大」の線刻がある。434の土師器の杯は，体部下端から底部にかけては手持ちヘラケズリ，内面はヘラミガキで黒色処理を施している。437の須恵器の杯は，底部は回転ヘラキリ，無調整である。438の須恵器の杯は回転ヘラキリの後，ナデで調整している。

まとめ

本遺構はⅤ区のD－12グリッドで検出された井戸跡である。遺物は堆積土中からの出土のため，本遺構が井戸として機能していた時期は不明である。遺物で最も新しいものが9世紀中葉～後葉のものと思われるので，井戸が埋まった時期は，これ以降ということだけがわかる。本遺構の周囲には多数の掘立柱建物跡があるので，井戸跡である本遺構と，それら平安時代(9世紀代)の掘立柱建物跡との関連が考えられる。　(中野)

10号井戸跡　SE10

遺　　構　(第157図，図版36)

10号井戸跡はⅤ区のD－12グリッドに位置している。検出面はLⅢ層の上面である。切り合い関係では，10号井戸跡は229号土坑によって切られている。本遺構の東4mには9号井戸跡が，南東3mには5号井戸跡がある。また本遺構の周囲には多数の掘立柱建物跡がある。本遺構は素掘りの井戸で，平面形はほぼ円形に近く，規模は2.90m×2.56m，検出面からの深さは95cmである。底面はほぼ平坦である。壁は上に向かってやや拡がりをもち，底面から検出面のほぼ中間の高さに段があり，壁はここでさらに拡がりをみせる。堆積土は25層に分けられ，炭化物を含む層と粘質シルトの層が多い。堆積状況は自然堆積と思われる。

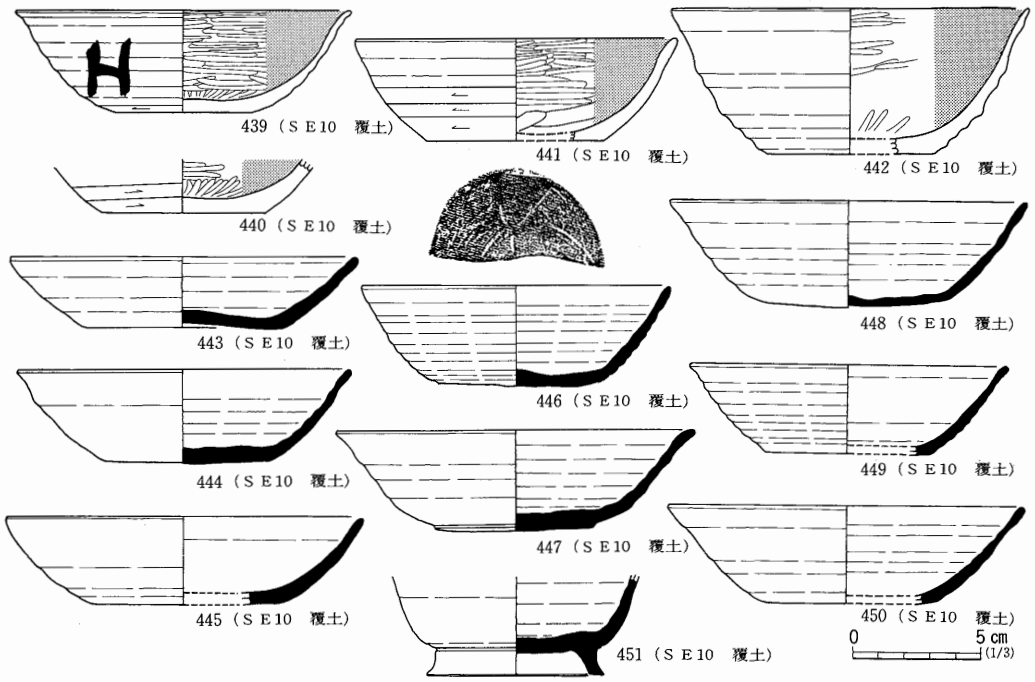
遺　　物　(第157図，図版70・74)

遺物として土師器片，須恵器片それぞれ数十点堆積土中より出土している。図示した遺物は13点である。土師器の杯は4点で，439・441は底部を回転糸切りで切り離し，体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリで調整している。内面の調整はヘラミガキで，黒色処理を施している。439は体部に「工」の墨書がある。442の底部は回転糸切り・無調整で，内面はヘラミガキで調整し，黒色処理を施している。440は体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリ，内面はヘラミガキで調整し，黒色処理を施している。

須恵器の杯は9点である。445～450は底部を回転ヘラキリで切り離し，ナデで調整している。443・444は底部を回転ヘラキリで切り離している。451は高台杯である。

まとめ

本遺構はⅤ区のD－12グリッドで検出された，素掘りの井戸跡である。遺物は堆積土中からの出土なので，本遺構が井戸として機能していた時期は不明である。遺物で最も新しい物が9世紀中葉～後葉のものと思われるので，井戸が埋まった時期はこれ以降ということだけがわかる。本遺構が検出された地域は井戸跡が集中して検出されているが，これらの井戸と関連ある遺構として考えられるのは，Ⅴ区の中央部地帯に集中して検出された建物跡であろう。　(中野)



第157図　10号井戸跡出土遺物

11号井戸跡　ＳＥ11

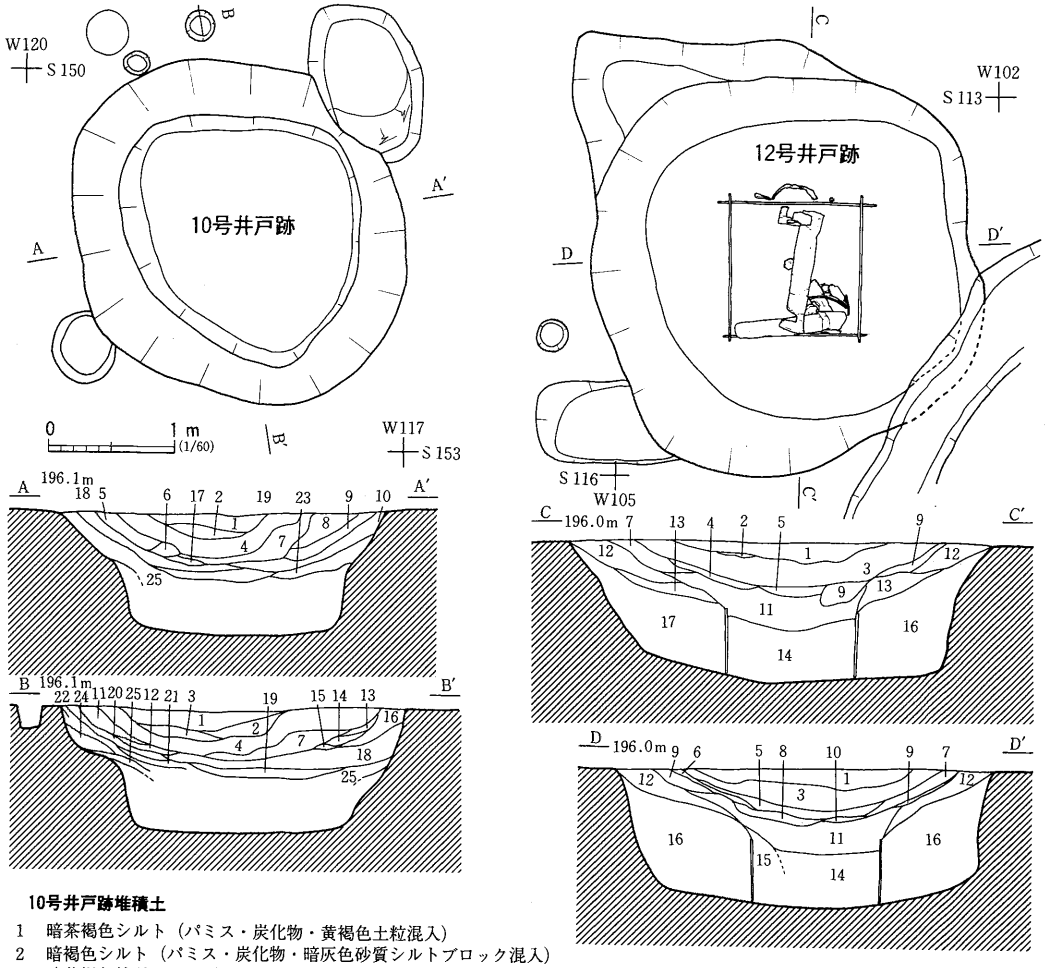
遺　　構（第165図，図版36）

11号井戸跡はⅤ区の南半部北端Ｆ－14・15グリッドで検出された。検出面はＬⅢ黄褐色砂質シルト上面である。遺構の周囲には，214・215・302号土坑および６号特殊遺構が本遺構を取り囲むように位置している。

上端の平面プランは，南北にやや長い楕円形を呈している。規模は上端の長径186㎝，短径が152㎝，下端が90㎝×60㎝で，深さは90㎝を測る。壁は北壁で60°の立ち上がりを見せるが，南壁では80°の急な立ち上がりを見せる。底面は平坦である。堆積土は８層に分層される。堆積土は灰褐色～茶褐色のシルトで，パミスを混入する。これらの堆積土のうち，ℓ７は壁の崩落土と考えられる。また，調査時の湧水点は上端より50㎝以下であった。堆積土の状況から自然堆積と考えられる。

まとめ

出土遺物は土師器の杯・甕，須恵器の杯・甕である。いずれも小片であるため図示するまでには至らなかったが，ロクロ使用のもので，９世紀代のものと考えられる。したがって，本井戸跡は，９世紀代に機能した井戸跡と思われる。（伊藤）



10号井戸跡堆積土

1　暗茶褐色シルト（パミス・炭化物・黄褐色土粒混入）
2　暗褐色シルト（パミス・炭化物・暗灰色砂質シルトブロック混入）
3　暗茶褐色粘質シルト（パミス・炭化物混入）
4　暗茶褐色シルト（パミス・炭化物・暗灰色砂質シルトブロック混入）
5　暗褐色シルト（パミス・炭化物・暗黄灰色シルト粒混入）
6　暗茶褐色粘質シルト（パミス混入）
7　暗褐色シルト（パミス・炭化物混入）
8　暗茶褐色シルト（パミス・炭化物混入）
9　暗褐色シルト（パミス・暗茶褐色シルトブロック混入）
10　暗茶褐色シルト（パミス・暗褐色シルト・炭化物混入）
11　暗褐色シルト（パミス・暗茶褐色シルトブロック・炭化物混入）
12　暗茶褐色粘質シルト（パミス・炭化物混入）
13　暗褐色シルト（暗茶褐色シルトブロック・パミス混入）
14　暗茶褐色粘質シルト（パミス混入）
15　暗灰色砂質シルトブロック混入
16　暗茶褐色シルト（パミス・炭化物・暗灰色砂質シルト粒混入）
17　暗茶褐色粘質シルト（パミス混入）
18　黒褐色粘質シルト（パミス・暗灰色砂質シルトブロック混入）
19　黒褐色粘質シルト（パミス混入）
20　暗茶褐色シルト（パミス・炭化物混入）
21　暗茶褐色シルト（パミス・炭化物混入）
22　黒褐色シルト（パミス混入）
23　暗黄灰色シルト（灰白色シルトブロック・パミス混入）
24　暗灰褐色シルト（暗茶褐色シルトブロック・パミス混入）
25　暗褐色シルト（黒褐色粘質シルトブロック・パミス・炭化物混入）

12号井戸跡堆積土

1　暗茶褐色シルト（パミス・暗黄灰色砂質シルト粒 混入）
2　暗黄灰色砂質シルト（パミス・暗茶褐色シルトブロック混入）
3　暗茶褐色シルト（パミス・炭化物混入）
4　暗黄灰色砂質シルト（パミス・炭化物混入）
5　黒褐色粘土（パミス・炭化物混入）
6　暗褐色砂質シルト（パミス・黒褐色粘土ブロック混入）
7　暗茶褐色シルト（パミス・炭化物混入）
8　黒褐色粘土
9　黒褐色粘質シルト（パミス・炭化物混入）
10　暗褐色シルト（小礫混入）
11　黒褐色粘土（炭化物混入）
12　暗茶褐色シルト（パミス混入）
13　暗茶褐色シルト（パミス・炭化物混入）
14　黒褐色粘土（炭化物混入）
15　暗茶褐色粘質シルト（パミス混入）
16　青灰色砂（黒褐色粘質シルトブロック・黄灰色粘土ブロック・パミス混入）
17　黒褐色粘質シルト（パミス・炭化物・青灰砂土ブロック混入）

第158図　10・12号井戸跡

12号井戸跡　ＳＥ12

遺　　構（第158図，図版39）

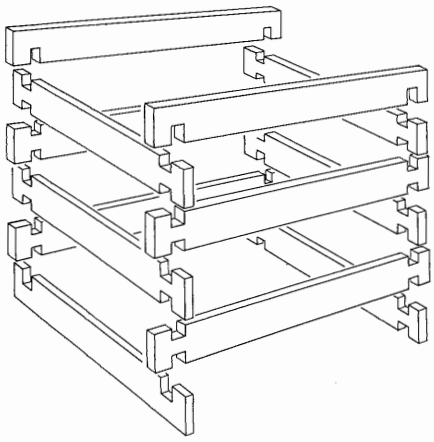
12号井戸跡は，Ｖ区北側のＥ－８グリッドにて検出した井戸枠が遺存していた井戸跡で，80号溝跡に切られ285号土坑を切っている。井戸跡付近には建物跡はなく最も近いもので，西側約10ｍに位置する14号建物跡である。また，遺構検出面は，ＬⅢ上面となっている。

井戸跡は，中央の井戸枠と，その外側の掘形からなる。井戸枠は，11枚のケヤキ材によって組まれている。井戸枠材の規模は110～126㎝，幅13～15㎝，厚さ26～60㎜で，掘形中央に方形に組まれている。北側井戸枠外側には，補強材として板材が使われている。底面はほぼ平坦である。井戸枠内及び，その上部には15層の土層が堆積している。砂質シルト・シルト・粘土が交互に堆積しており，井戸廃絶後に徐々に埋没していった過程を示すものと考えられる。

掘形の平面形は上端で，不整隅丸方形を呈しており，北側の一部には更に段がついている。その規模は，長軸3.28ｍ，短軸2.95ｍである。周壁の立ち上がりは東～南東側が若干，急である。堆積土は，地山と黒褐色粘質シルトのブロックからなる層である。

遺　　物（第159～164図，図版70・73・92～94）

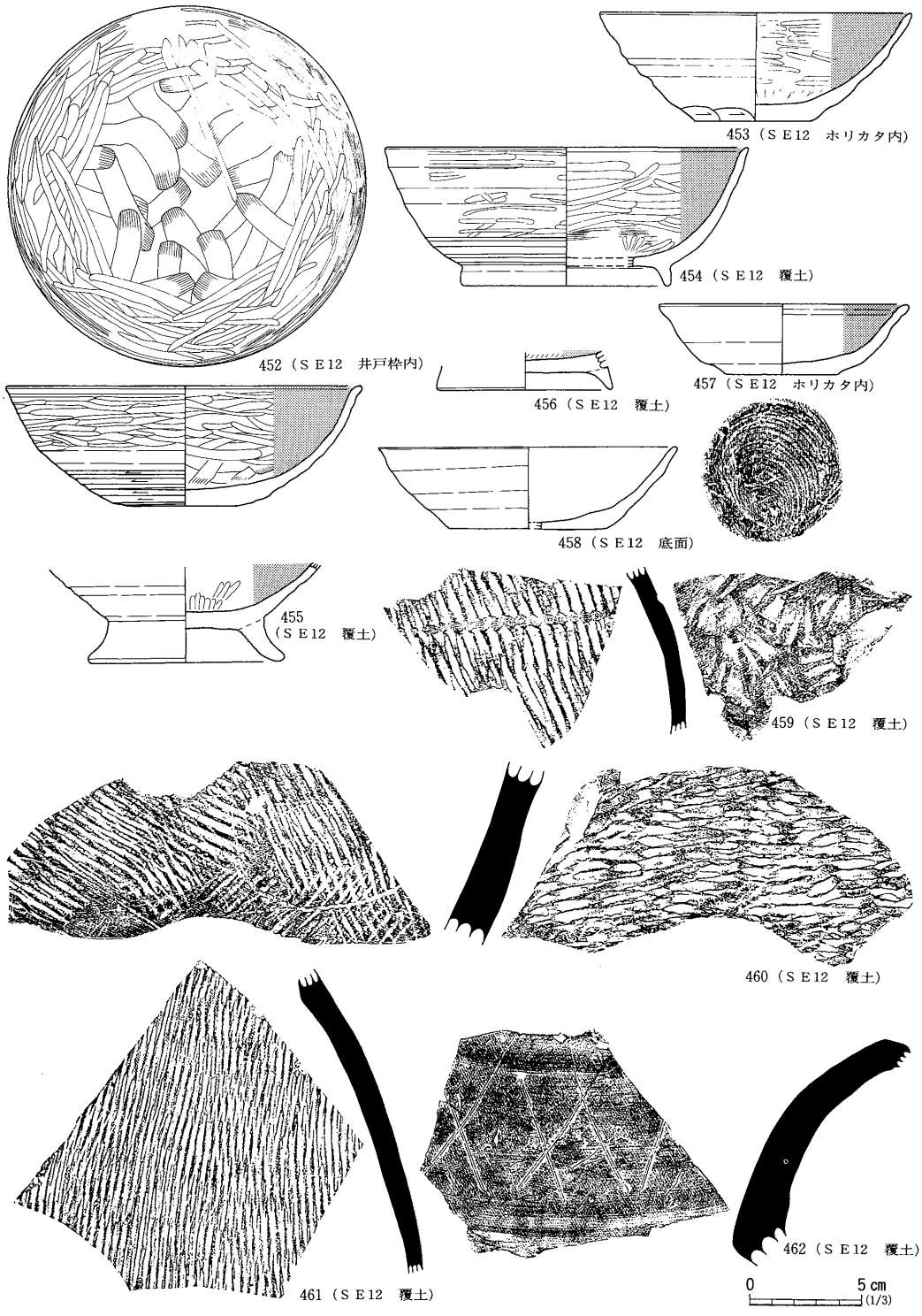
遺物は，井戸枠内，底面，埋没時流入土，掘形内より出土している。遺物の種類には，土師器杯・高台杯・甕，須恵器杯・大甕・赤焼土器杯がある。452・453・457が土師器杯，454が土師器高台杯，463が須恵器杯，458が赤焼土器杯である。452は内面中央がナデられ，体部がヘラミガキされている。外面は，底部から体部下半にかけて細く，丁寧な回転ヘラケズリが施され，更に上半部にはヘラミガキが加えられている。457は器高の低い皿に近い形態の杯で，底部は回転糸切り無調整で，内面は黒色処理されているがヘラミガキは加えられていない。454は，452と同様に内面にナデとミガキが加えられ，外面には回転ヘラケズリとヘラミガキが施されている。図示資料の中では，特に452と454には制作時の技法に強い共通性が認められる点に注目したい。



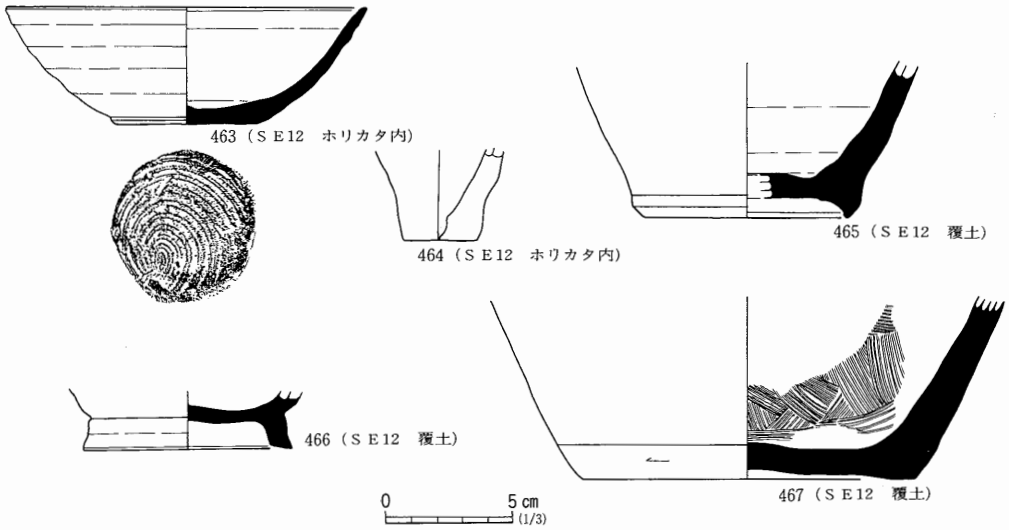
第159図　12号井戸跡井戸枠概略図

まとめ

本井戸跡は，掘形内より10世紀段階の遺物が出土しており，更に井戸枠内からも10世紀段階の遺物が出土しているところから，築造・使用年代は平安時代でも10世紀と考えられる。また，遺跡内の位置では，井戸跡が集中するＶ区中央部より離れた地点に存在するところから，遺構北側と西側に位置する12



第160図　12号井戸跡出土遺物（１）



第161図　12号井戸跡出土遺物（２）

～16号建物跡に伴った可能性が高い。（藤谷）

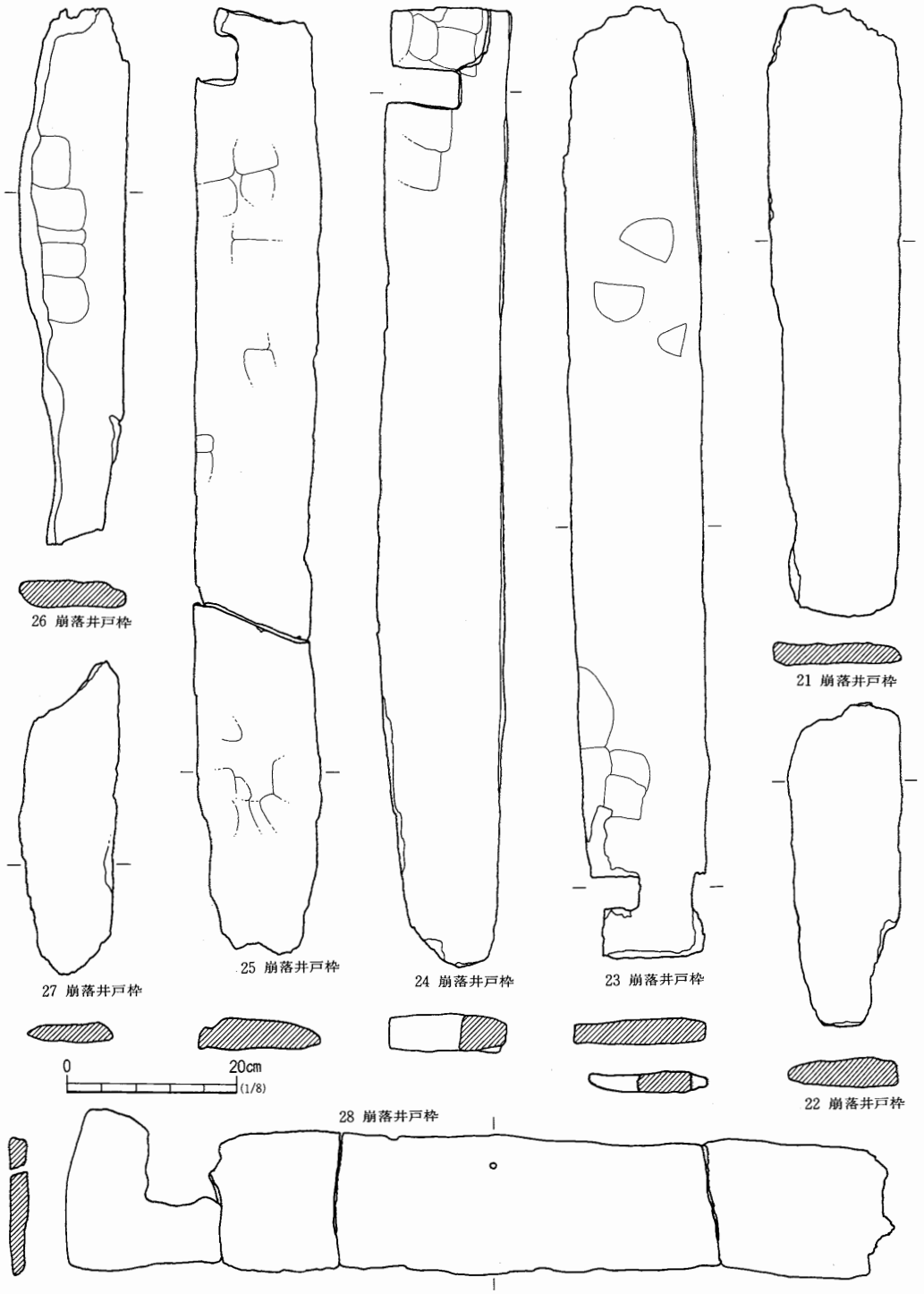
13号井戸跡　ＳＥ13

遺　　構（第165図，図版37・38・39）

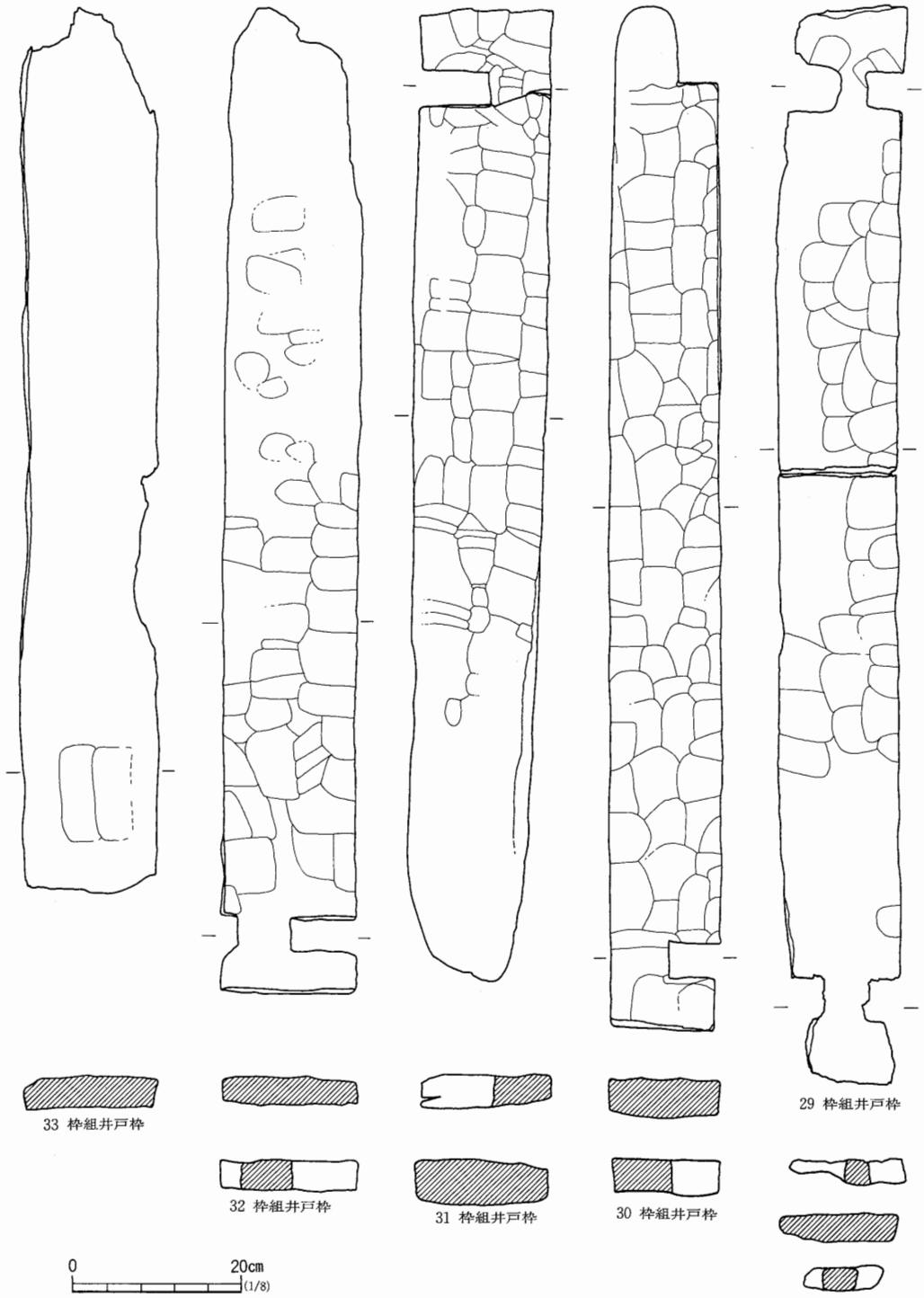
調査区内のⅤ区中央部の西端部のＢ・Ｃ－11グリッドに位置する。83号溝跡を切っている。また南東部は，攪乱により破壊されている。検出面は周辺の遺構と同様にＬⅢ上面である。

平面プランは残存部から判断すると不正な多角形状を呈し，上端の長軸方向で250㎝，短軸方向で230㎝を測る。検出面からの深さは，下端の中央より南部の最深部で90㎝である。壁面は，北側から西側にかけては１～２段になっている。東側はほぼ直立している。南側の壁の一部は底面より40㎝上で内側に30㎝ほどオーバーハング状に突出している。

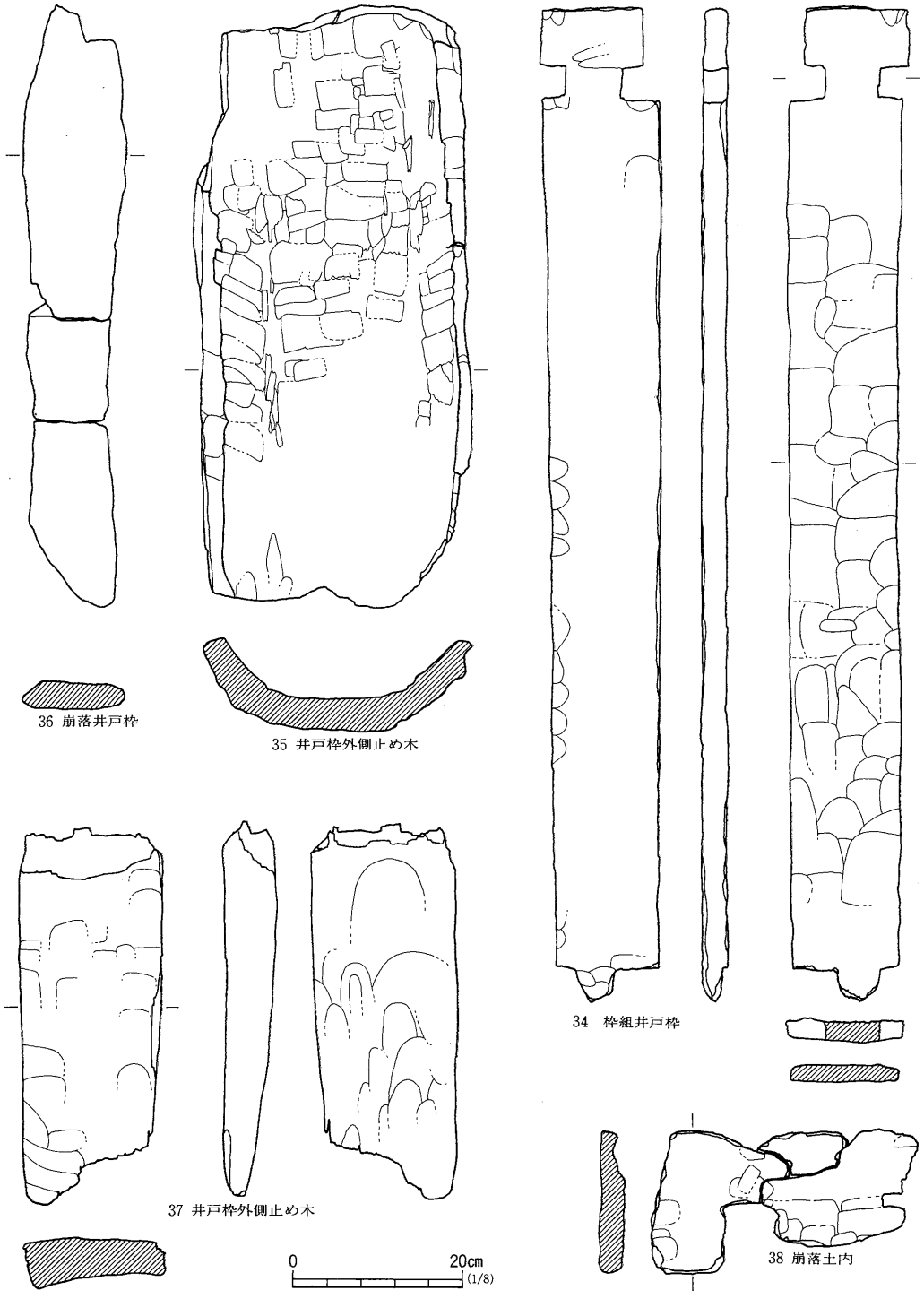
堆積土は17層に区分した。ℓ９以下の下部の堆積土は，砂質の部分も含むが大部分は泥質の堆積物を主とするものである。ℓ１～４の上部の堆積土は他の周辺の遺構と同様なパミスを含んだ暗褐色砂質シルトを主体としている。中間のℓ５～８については，黒褐色のシルト質砂土が主体である。この堆積土は井戸の放棄後，水深がある程度を保った状態で，水中においてシルトおよび粘土などの細粒な物質の堆積が進行した結果，形成されたものである。同時に水深は浅くなり，多少は水の影響を受けながら中間部が堆積し，最後に上部の土壌が周辺より一時的に流入，堆積したと考えられる。以上のことから自然堆積と判断される。なおℓ２・４・６などは周辺の壁をつくる地山とほぼ同質の，黄褐色のパミス質の粗粒砂からなる。自然に壁が崩落したものと考えられる。



第162図　12号井戸跡井戸枠（1）



第163図　12号井戸跡井戸枠（２）



第164図　12号井戸跡井戸枠（3）

まとめ

遺物は，堆積土中からロクロ成形の土師器・須恵器の小片が出土しているが，図示しうるものはなかった。

本井戸跡は直径が240cm程度の素掘りの井戸跡である。36号建物跡の北西部4mに位置するが，30号建物跡の真西13m，また34号建物跡の真北13mでもある。これらの建物跡に伴う可能性もある。年代は出土遺物より平安時代の9世紀代に機能していたものと考えられる。（香内）

14号井戸跡　SE14

遺　構（第165図，図版39）

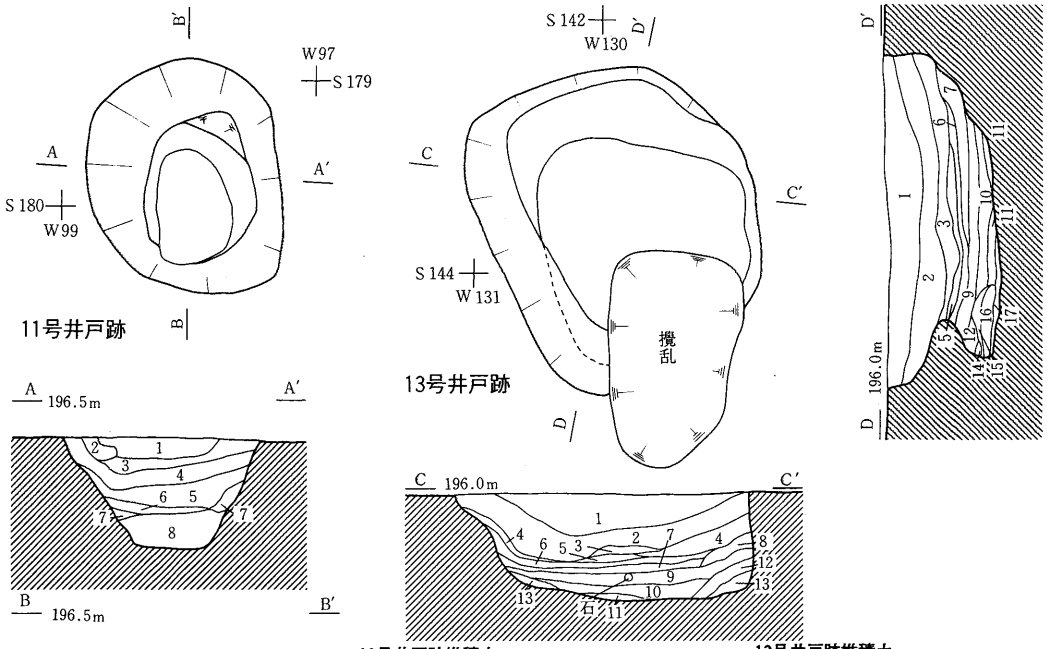
Ⅴ区中央部の西寄り，D・E－12グリッドより検出された井戸跡である。

遺構検出面はパミスの混じった暗黄褐色砂質シルトのLⅢ上面である。この層は上面から40cmまでは比較的粒子が細いが，それ以下は直径5mm前後のパミスと小砂利を多く含む硬い層となり，上面から1m前後の本井戸2次底面付近で粘土層となる。この境目付近から湧水があり，その下は20cm程度の粘土と締まった粗砂の互層で湧水も多くなる。

14号井戸跡の検出された場所は遺構が密集する地区の北の一部に当たり、井戸上部の南西約1/4は19号建物跡の柱穴により切られている。

プランは上面で東西1.45m，南北1.6mの不整楕円形，2次底面では東西1.05m，南北0.85mの不整五角形，1次底面は東西0.9m，南北0.7mの不整楕円形を呈し，上部の北・西側は15～20cmが外に向かって開く。壁は2次底面まではほぼ垂直で，深さは2次底面に据えられた河原礫の上部まで1.0mを測る。2次底面から1次底面までの壁は70～80°で，深さ0.5mを測る。2次底面となるℓ4中には直径45cm，高さ25cmの曲物の筒が据えられ，その回りに数本の板材がたてられ，周辺と内側には5～20cmの河原石が入れられ，曲物の押さえと底面を安定させるのに用いられている。

堆積土のℓ1～ℓ2bは色が若干異なるが，質・混入物はほぼ同じであり，自然に分級が行われた様子は認められないので，人為的に埋めたものと考えられる。ℓ3は有機質を多く含んだ微細砂混じりのやや軟質の黒色シルトで，井戸枠の裏ごめ土と考えられる。ℓ4は10cm前後の比較的薄い粘土質の層であり，この層に曲物が据えられ，周囲には回りを支えていたらしい板が立てられ，そこを河原石で押さえているので，底面形成のため敷かれた粘土と考えられる。以上のことからℓ4を2次底面と解釈した。ℓ5は壁面から崩れたと考えられるやや軟質の砂に小礫が混じる層である。ℓ6はℓ5とほぼ同じ層に有機質を含んだ粘土質ブロックが混じっており，この部分が底面だった時期があることをうかがわせる。これが1次底面である。

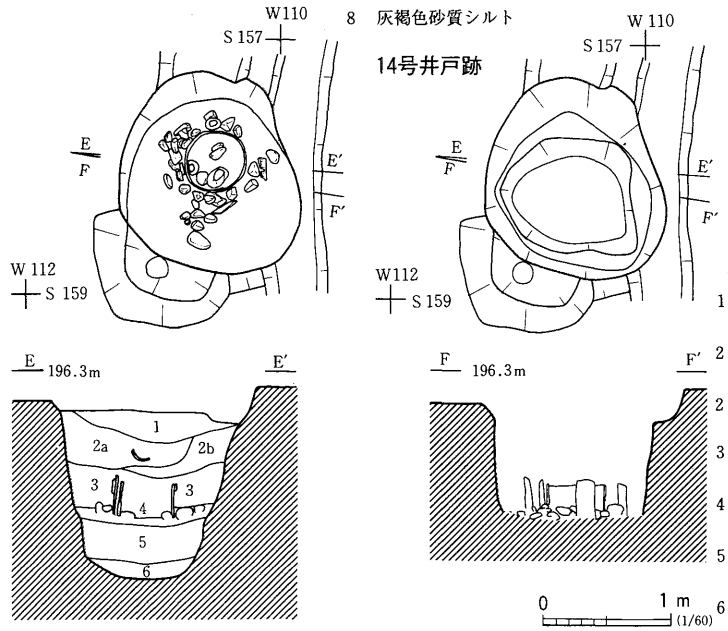


11号井戸跡堆積土

1　茶褐色シルト（パミス混入）
2　暗灰褐色シルト（パミス混入）
3　灰茶褐色シルト（パミス混入）
4　灰茶褐色シルト（パミス混入）
5　灰褐色シルト
6　暗灰褐色シルト
7　灰茶褐色砂質シルト
8　灰褐色砂質シルト

13号井戸跡堆積土

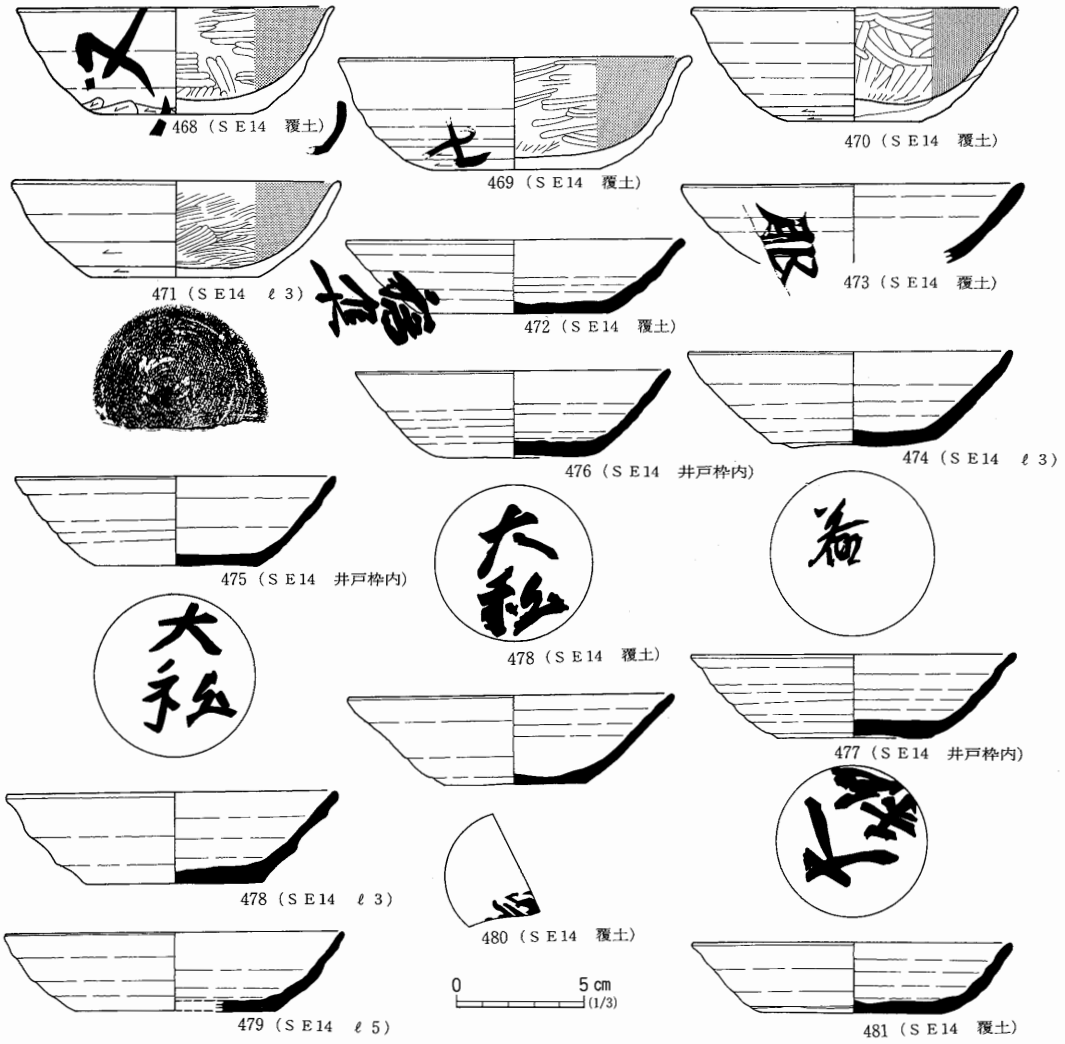
1　暗褐色砂質シルト（パミス混入）
2　暗褐色砂質シルト（パミス混入）
3　黒褐色シルト質粘土（砂混入）
4　暗褐色シルト質砂（パミス混入）
5　黒灰色中粒砂（シルト混入）
6　黒褐色シルト質砂
7　黒褐色シルト質砂
8　赤褐色粗粒砂（パミス混入）
9　黒褐色粘土（植物遺体含）
10　黒色粘土（植物遺体含）
11　黒色粘土（粗粒～中粒砂混入）
12　赤褐色シルト質砂（パミス混入）
13　褐色シルト質砂（パミス混入）
14　黄褐色砂（パミス混入）
15　黒褐色砂質粘土
16　灰褐色粗粒砂
17　黒灰色砂質粘土



14号井戸跡堆積土

1　暗褐色シルト
（砂・酸化鉄・木炭・凝灰岩粒混入）
2 a　暗褐色シルト
（砂・酸化鉄・木炭・凝灰岩粒混入）
2 b　暗黒褐色シルト
（砂・酸化鉄・木炭・凝灰岩粒混入）
3　黒色シルト
（砂混入）
4　黒褐色軟質土
（玉石・砂混入）
5　砂層
（小礫混入）
6　砂層（小礫・黒色軟質ブロック混入）

第165図　11・13・14号井戸跡

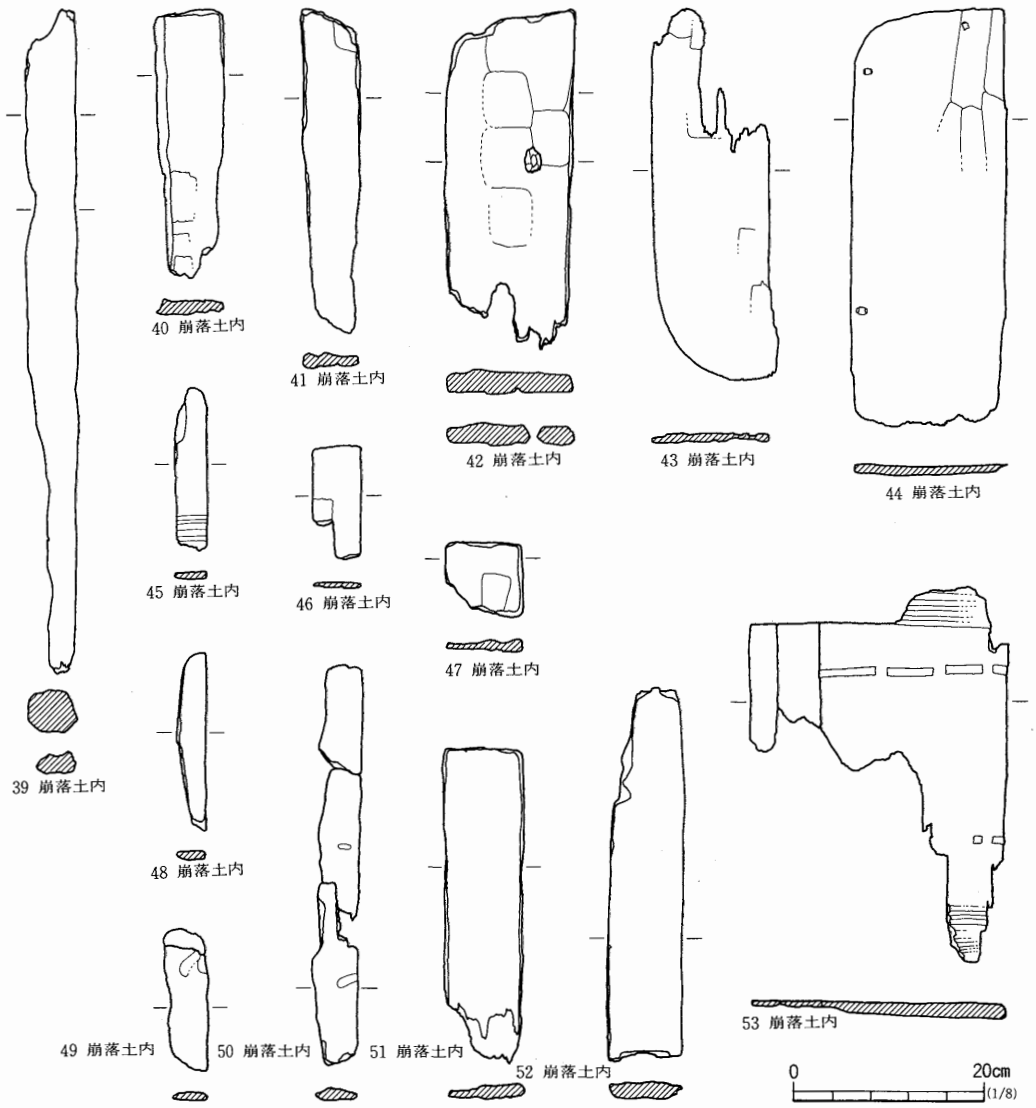


第166図　14号井戸跡出土遺物

遺　　物　(第166～168図，図版74・85・89・102)

２次底面遺構に伴う遺物としては，曲物内堆積下部の土器(475～477)がある。１次底面段階の遺物としてはℓ５出土の須恵器杯(479)がある。裏ごめ土ではℓ３下部の礫群直上から土師器・須恵器の杯(471・474・478)が出土している。これは，２次底面形成時に混入したものである。井戸が埋められた時に混ざったものとしてはℓ１・２の土師器・須恵器の杯(468～470・472・473)がある。

曲物内からは須恵器杯が３点出土しており，これらは底面に回転ヘラキリ痕を残し再調整が加えられていないもので，すべて口径に対する底径の比は半分よりやや小さめで，背の低いほぼ同じ器形のものである。これらには底面に「大私」の墨書があり，「オオキサイ」と読むことができ，

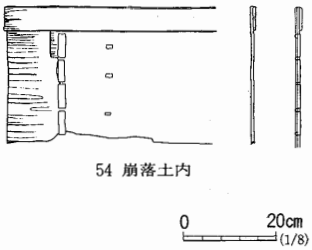


第167図　14号井戸跡出土木製品（1）

人の姓と考えられる。

ℓ5出土の須恵器杯は口径に対し底径が半分よりやや大きく，底面に回転ヘラキリ痕をのこす。2次の裏ごめ出土の土師器杯はロクロ調整・内黒のもので，体部下半から底面にかけて回転ヘラケズリ再調整が加えられている。須恵器杯は2点とも曲物内出土と類似しており，474底面には「益」の墨書，478の墨書は部分のため判読できなかった。

ℓ1・2出土の土師器杯もロクロ調整・内黒のもので，469・470は回転糸切りの後，体部下端に回転ヘラケズリ再調整を加えたもの，468は回転糸切りの後，体部下端に手持ちヘラケズリ再



第168図　14号井戸跡出土木製品（２）

調整が加えられている。468の体部には「又」の墨書があり，底面は一部のため判読は出来なかった。469の体部の墨書は「比」の半分と思われる。須恵器杯は器形が判明したもの３点(472・480・481)，底部が欠損するもの１点(473)である。器形の判明したものは３点とも底径が大きく背の低いもので，底面に回転ヘラキリ痕を残す。この内472の体部には「福集」の墨書がある。また，473の体部にも一部欠損しているが「服」の墨書が認められる。

まとめ

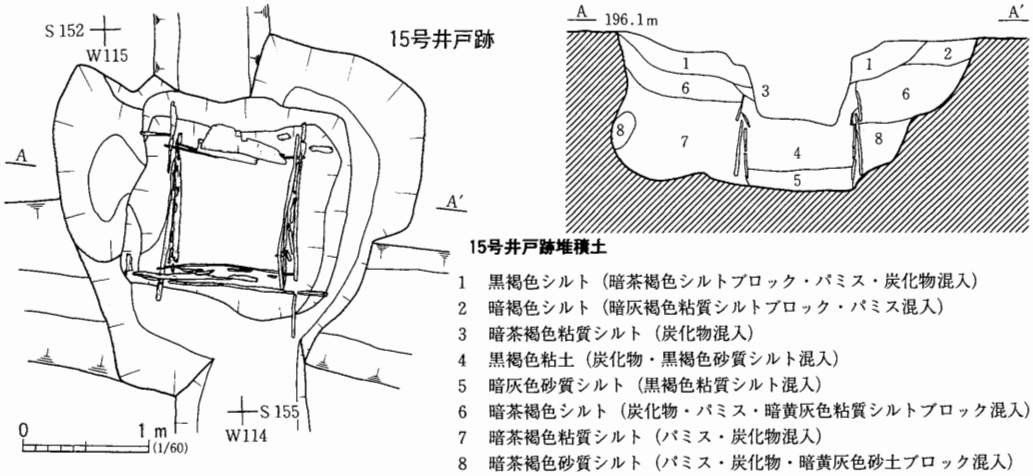
14号井戸跡で遺構に伴う遺物は１次底面の須恵器479と，２次底面曲物内の須恵器475～477のみである。これらは大戸窯跡群の製品と考えられ，479はM19窯に類似している。また475～477はM25窯の杯より底径が小さく背の低い傾向が見られる。しかし，回転糸切りで技法は異なる福島市御山千軒遺跡より出土したもののように底径が小さくはなっていない。この大戸窯跡群のM19・M25は９世紀中葉～後葉，御山千軒遺跡は９世紀後半に位置付けられている。したがって，14号井戸跡が機能していた時期も９世紀中葉～後葉と考えられる。（木本）

15号井戸跡　ＳＥ15

遺　　構（第169・170図，図版40・41）

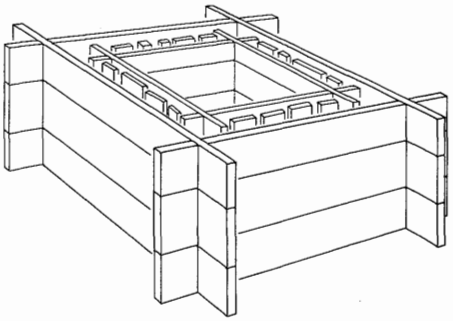
15号井戸跡は，Ｖ区中央よりやや西側のＤ－12グリッドに位置し，中央部をＶ区西側を南北に走る水路に切られ，南半部は東西に伸びる近世以降の溝跡によって切られている。井戸跡南側は，19号建物跡ほか９棟の建物跡が密集して存在する地区となっている。また，北側には，井戸枠を持たない９・10号井戸跡が位置し，更にその北側には，27号建物跡以下４棟の建物群がまとまって位置している。本井戸跡は，このように南北の建物群に挟まれる地点に位置している。遺構検出面はＬⅢ上面である。

井戸跡は，中央の上下２重になっている井戸枠と，その外側に掘られた掘形よりなっている。上部外側の井戸枠は，長さ66～105cm，幅10～23cm，厚さ35～57mmの広葉樹の板材で，中央の井戸枠の外側に，方形に組まれている。このうち，北側の板材は，遺構中央を南北に走る水路によって大部分が破壊されており，外側の一部のみが遺存していた。遺存部では，内側の井戸枠は長さ105～127cm，幅８～18cm，厚さ22～38mmの針葉樹の板材によって井桁状に組まれている。枠内の規模は，一辺95cm程である。井戸枠は，東が４枚，南～北が各３枚によって構成されている。内側枠の上部から井戸の底面までの深さは60cm，また遺構検出面から底部までの深さは，1.15mである。



第169図　15号井戸跡

上部から枠内にかけては５層の堆積土がある。このうち，ℓ４については，湿地に堆積する有機物を多く含む黒褐色粘土で，井戸は廃絶後に人為的に埋められたのではなく，自然に埋没していったと考えられる。また，底面上に拳大の河原石が多数あり，井戸が作られた時に底面に置かれたものと考えられる。内側井戸枠の外側には，それを固定するために補強材として板材が並べて据えられている。材は針葉樹である。

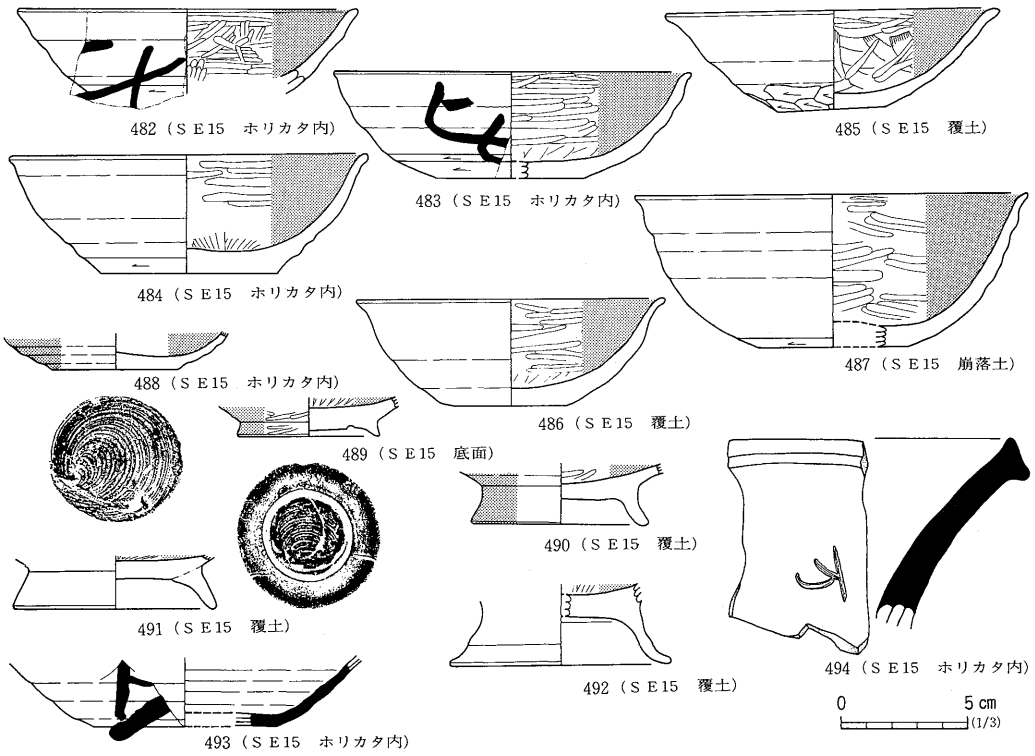


第170図　15号井戸跡井戸枠概略図

掘形は，井戸枠の外側90㎝前後の大きさに掘られており，その規模は長軸2.95ｍ，短軸2.85ｍで，平面形は不整方形を呈している。周壁の立ち上がりは，特に西側が急でオーバーハングしている箇所もある。底面は，井戸枠の周囲が更に30㎝程一段低くなっている。埋土は３層からなり，ℓ７には地山ブロックが多く混入されているがℓ６・８については，それがさほど多くなく，掘り込んだ土をそのまま埋土に使用したのではないと考えられる。考えられるのは，内側井戸枠外側にすえられた板材が，井戸枠が再利用された可能性があるので，他の井戸の土を埋土に利用した可能性がある。

遺　　物　（第171～178図，図版70・86・95～101）

遺物は井戸枠底面，埋没時流入土，掘形内より出土している。遺物の種類には，土師器杯・高台杯・甕，須恵器杯・大甕がある。図示資料では，482・484～488が土師器杯，489～492が土師器高台杯，493が須恵器，494が須恵器大甕である。これらのうち，482・483は墨書土器で「比」の



第171図　15号井戸跡出土遺物

墨書銘が体部にある。494は，口縁部に「万」の線刻がある。高台杯では，高台の高さが低く直立するもの(489)と，高さが高く直線的に開くもの(490・491)，台部下端が外反するもの(492)とがある。また，土師器の杯の底部から体部下端にかけての調整には，回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリとがある。

まとめ

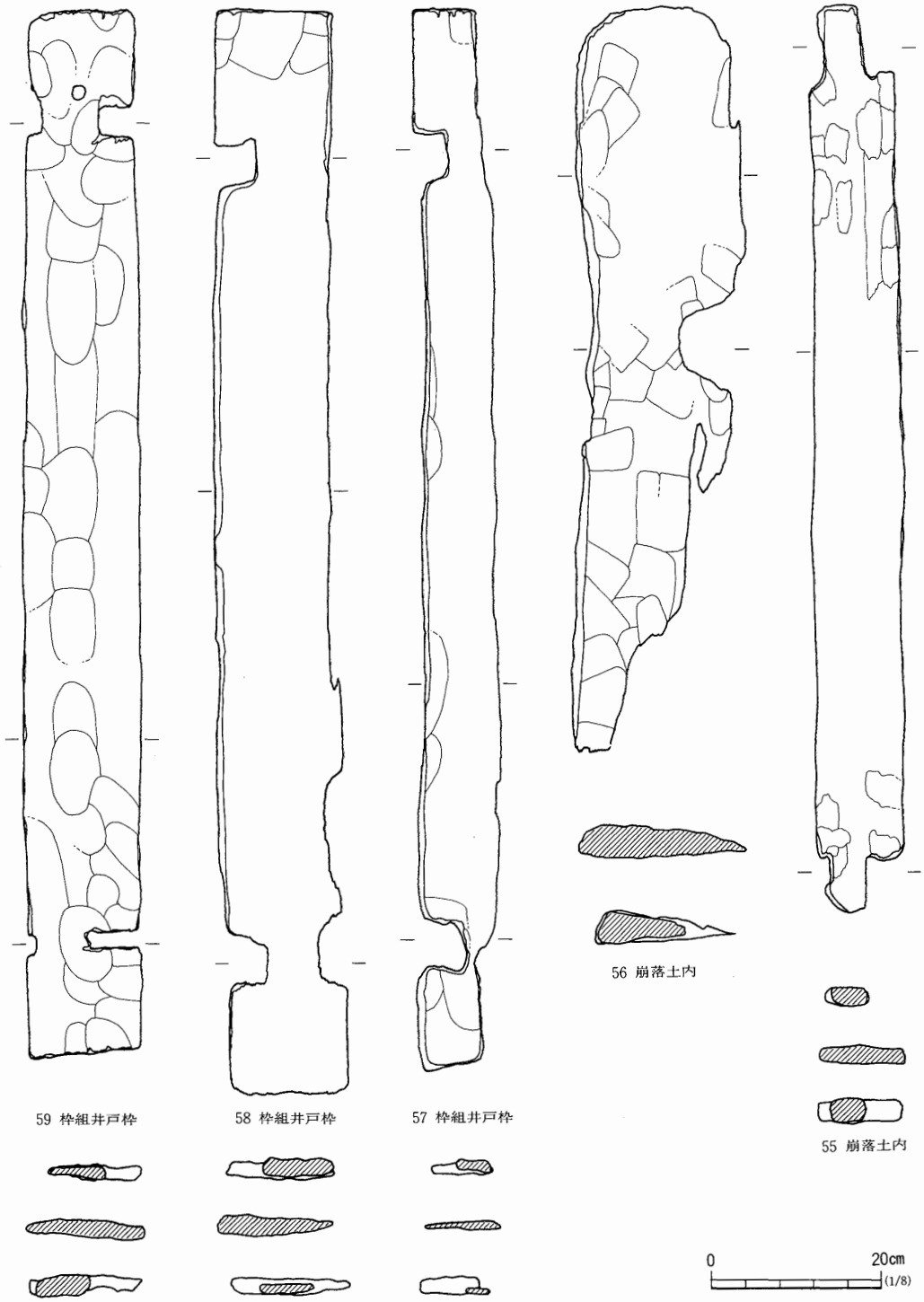
本井戸跡は，板材を井桁に組んだ井戸枠をもつもので，しかも枠組みが二重構造となっている。また，井戸枠外側に補強材として板材が23点も添えられている。その機能した年代は，底面出土遺物より平安時代でも10世紀段階と考えられる。（藤谷）

16号井戸跡　ＳＥ16

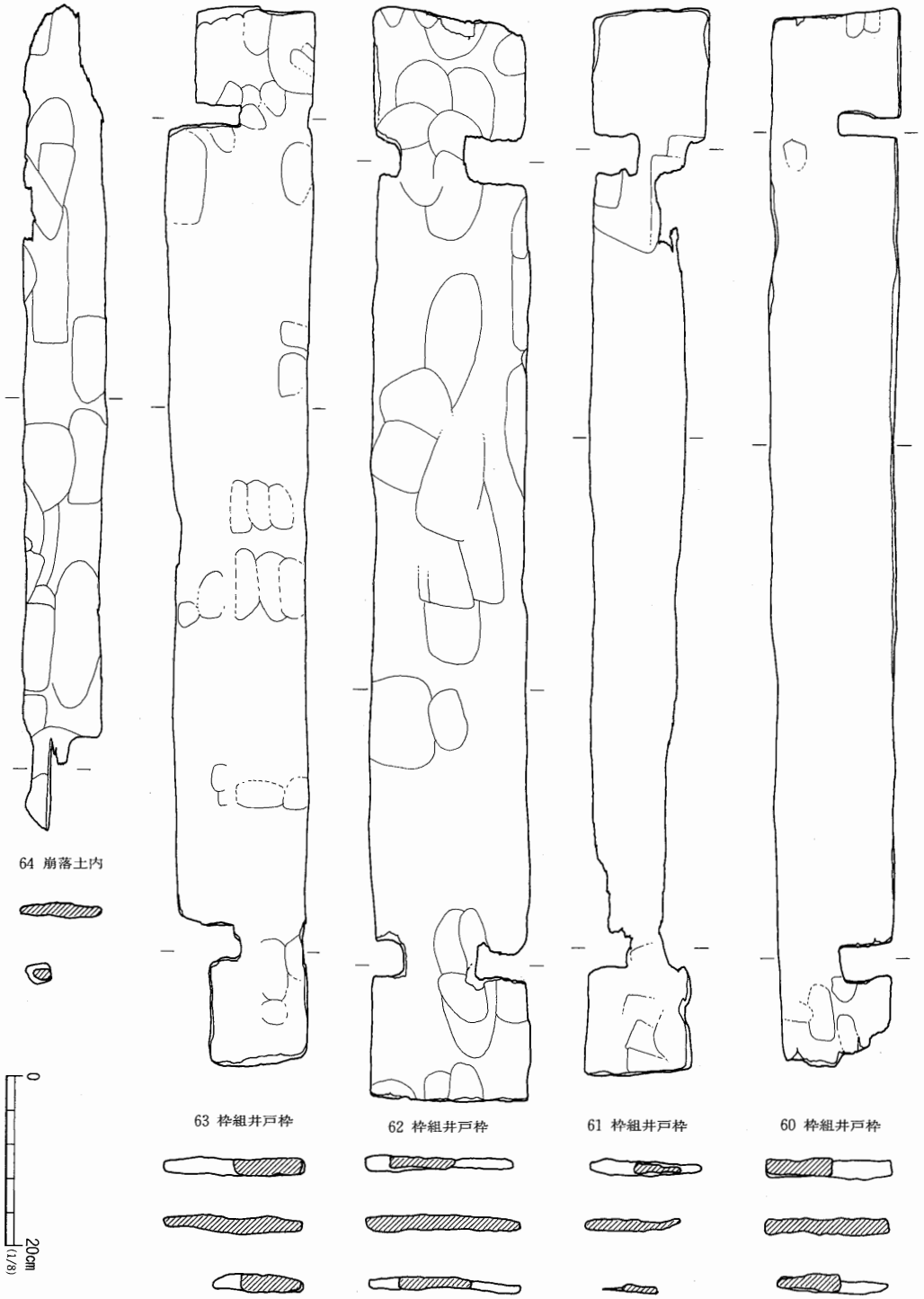
遺　　構（第182図）

16号井戸跡は，Ⅴ区Ｄ－15グリッドで検出され，ＬⅢ暗黄褐色砂質シルト層上面で確認された。遺構は排水溝のため一部が破壊されている。遺構は７号周溝状遺構を切っている。周辺には，５・17号井戸跡，116・143号溝跡などが点在している。

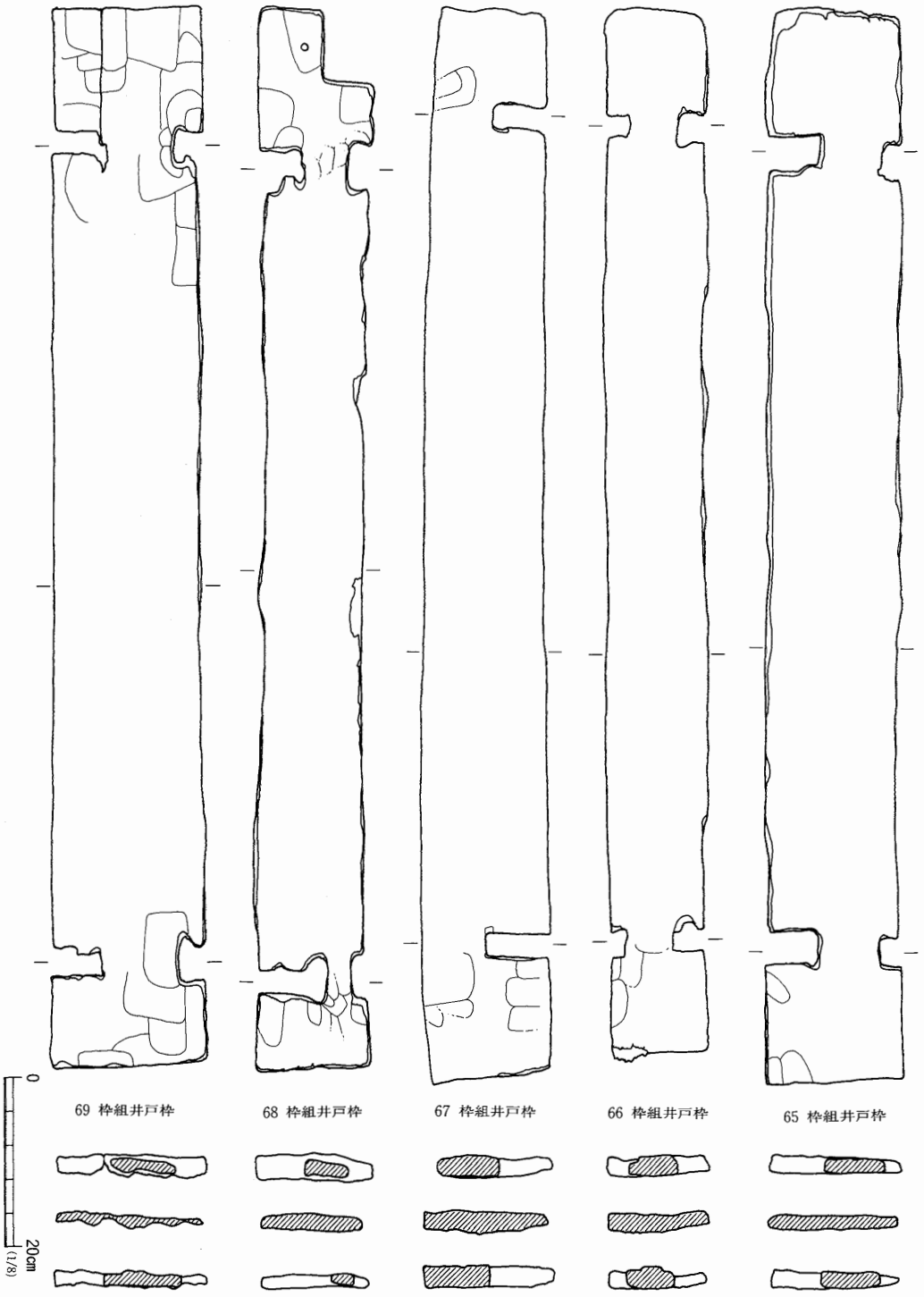
遺構の平面形は，北西部に突出する楕円形で長軸1.6ｍ，短軸1.25ｍを測る。検出面から深さ



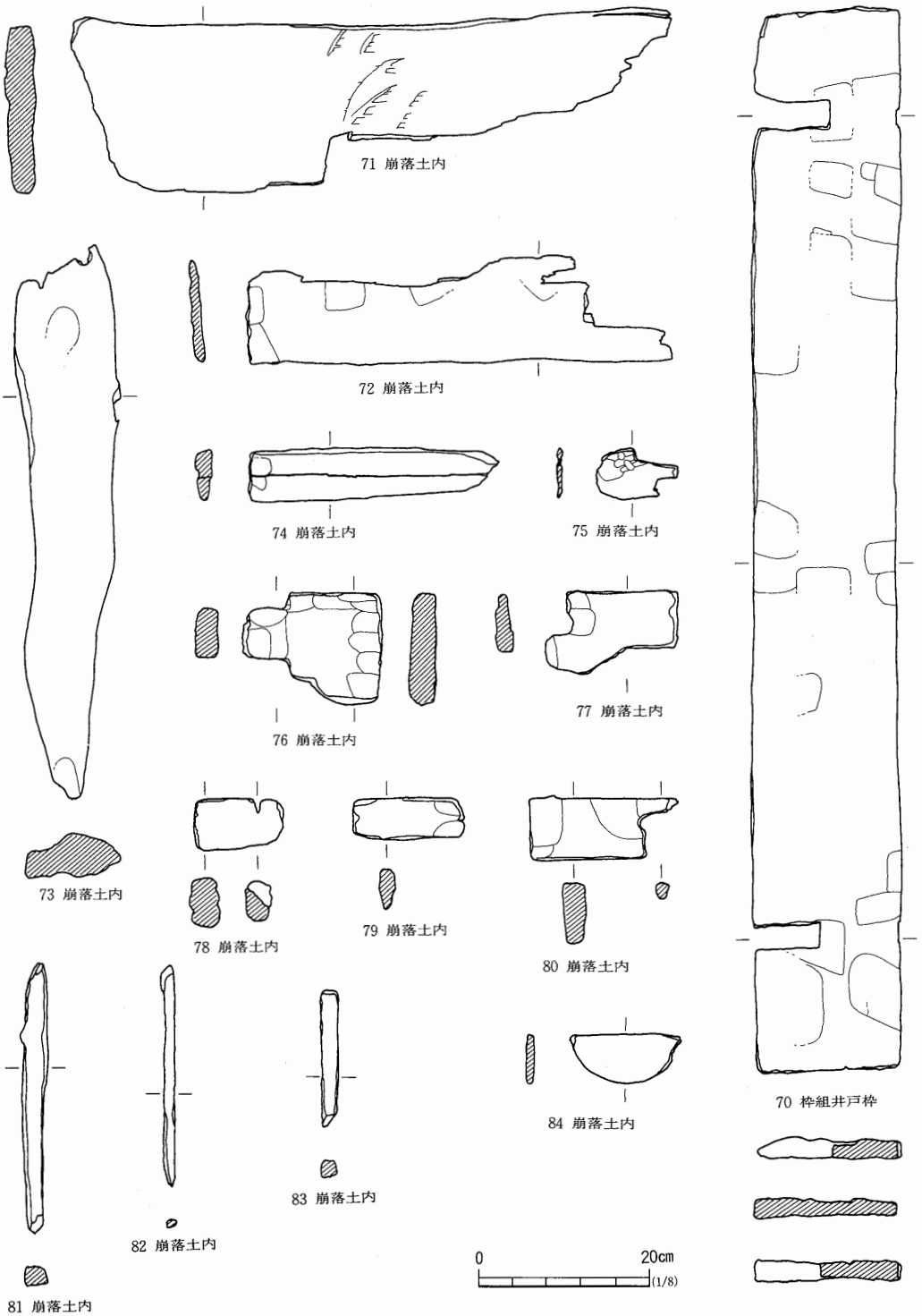
第172図　15号井戸跡井戸枠（1）



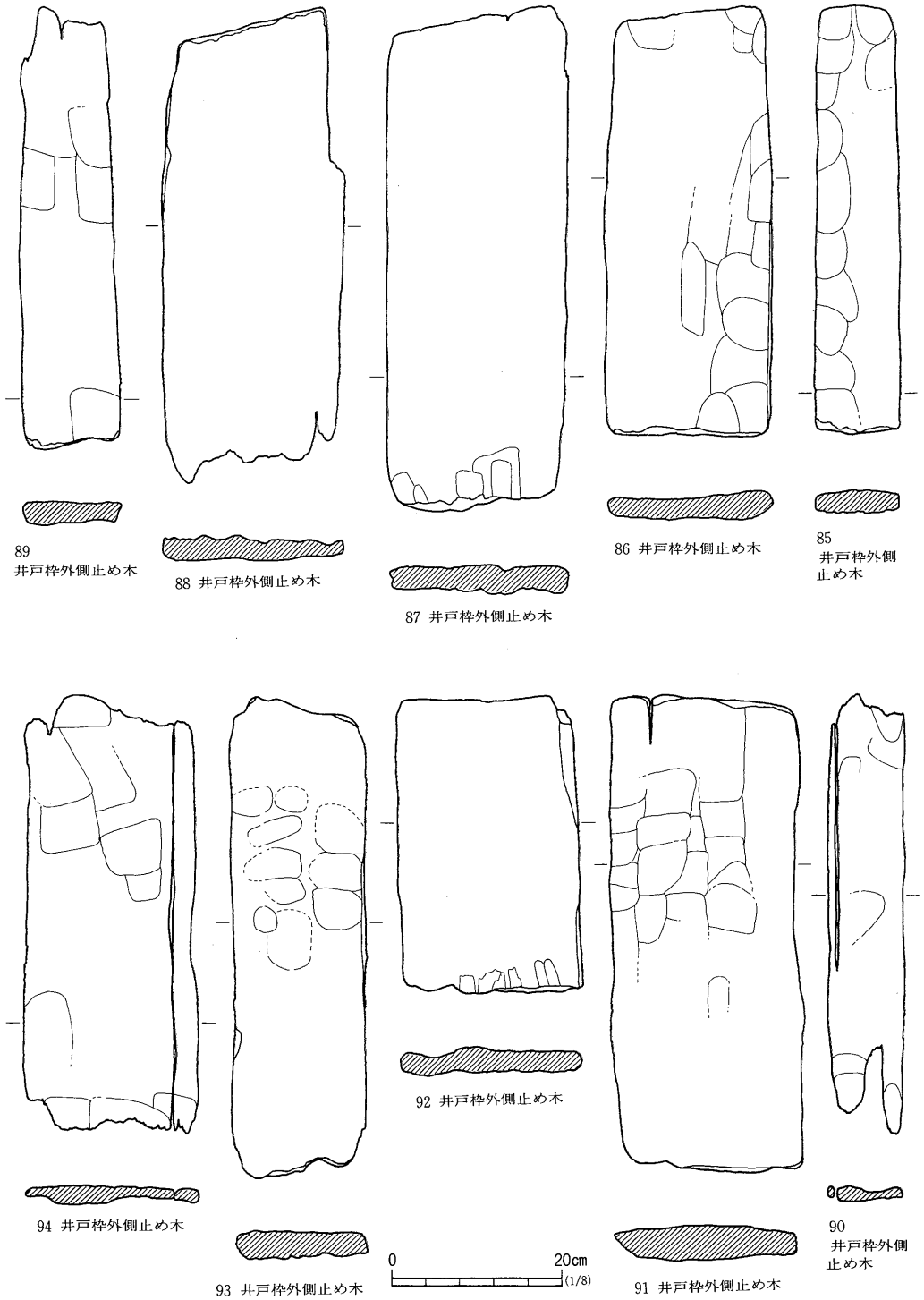
第173図　15号井戸跡井戸枠（２）



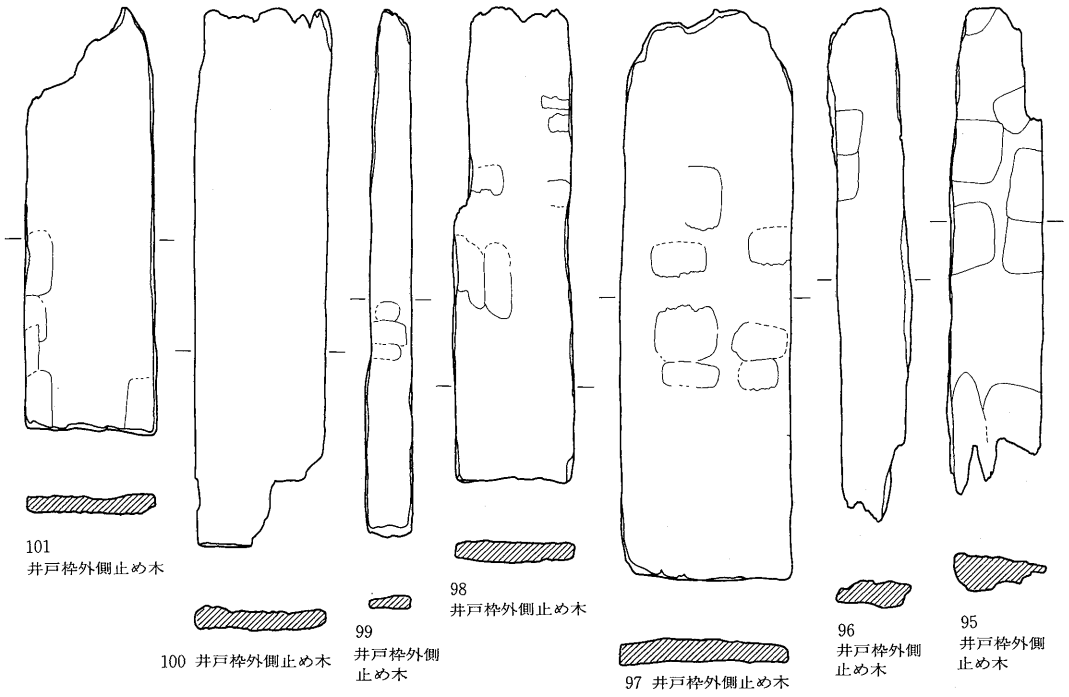
第174図　15号井戸跡井戸枠（3）

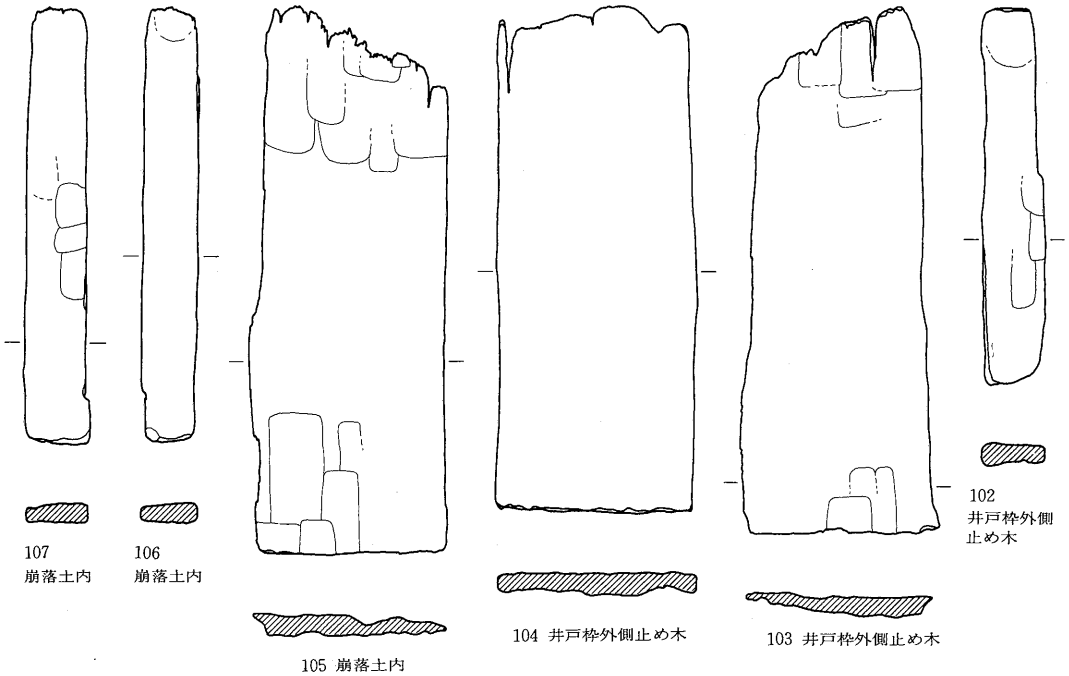


第175図　15号井戸跡井戸枠（４）

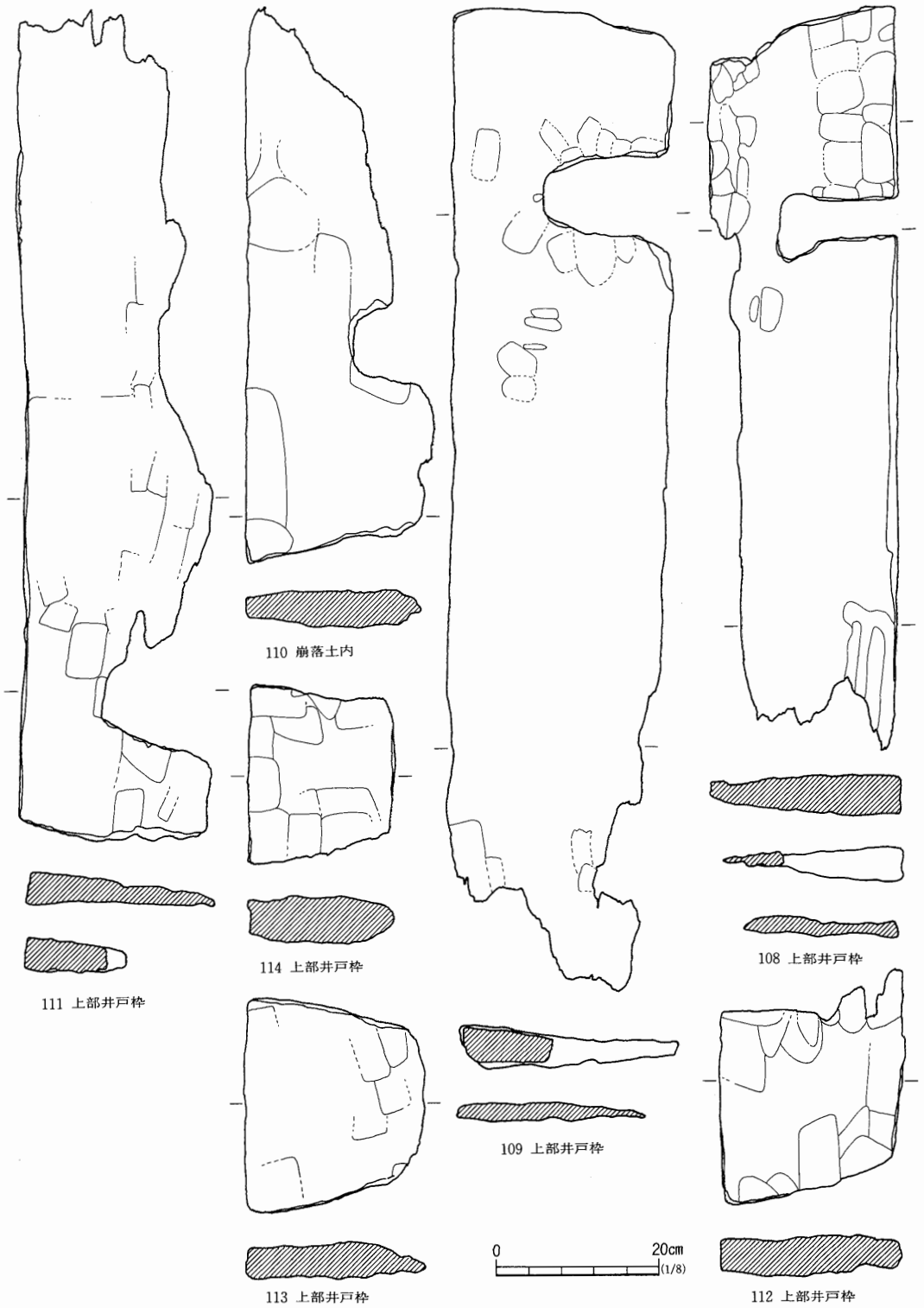


第176図　15号井戸跡井戸枠（5）





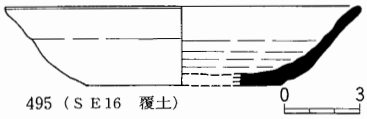
第177図　15号井戸跡井戸枠（６）



第178図　15号井戸跡井戸枠（7）

約30cmのところに足場と考えられる平場が認められた。この平場と同じ高さで井戸の本体部分が掘り込まれている。平面形は北東－南西を長軸方向とする楕円形である。長軸1.45m，短軸1.1mを測る。遺構検出面からの深さは，底面北寄りの最深部で95cm，平均して90cm前後である。底面は比較的平坦である。

堆積土は，３層からなる。暗灰黒褐色シルト・暗黒褐色シルト・暗黒灰色砂層である。ℓ３の下面以下で湧水がある。



第179図　16号井戸跡出土遺物

遺　　物　(第179図)

本遺構からは，各層から遺物が出土している。弥生土器，土師器壺・甕，須恵器甕・杯である。ℓ３からは，弥生土器片６点，古墳時代前期に属すると考えられる土器片11点，須恵器杯片１点である。弥生～古墳時代前期の遺物は，７号周溝状遺構を切っていることから，流れ込みと考えられる。495は，底部が回転ヘラキリされた須恵器杯である。

まとめ

本遺構の時期は，井戸堆積土の最下層から須恵器杯が出土しているが，小片のため調整等は観察できなかった。そのため大まかに平安時代の遺構として捉えておく。　(小野田)

17号井戸跡　ＳＥ17

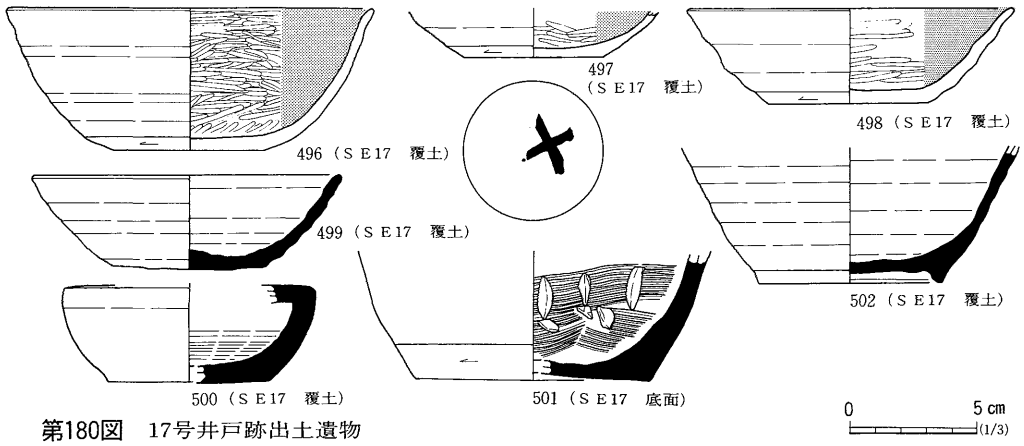
遺　　構　(第182図，図版39)

17号井戸跡は，Ⅴ区Ｅ－15グリッドで検出された。遺構検出面は，ＬⅡ黒褐色シルト下層である。井戸跡周辺には，274・281・275号土坑などが点在し，本遺構は12号周溝状遺構を切っている。

遺構の平面形は，やや不整な円形である。また，その規模は，上端で径1.3m，下端で径1.0m，検出面からの深さが1.22mである。更に，遺構検出面から90cm程のところでは井戸枠が確認された。井戸枠は一部欠如しているものの丸太をくり抜いたもので，井戸のほぼ中央に設置されていた。その大きさは，上部の径が78cm，高さが最も遺存状況の良い部分で42cm程であった。井戸枠上部は材質の軟かい部分は腐蝕のためか欠損している。井戸枠西側部分には折敷の一部分が，かかっていた。

堆積土は５層からなる。井戸枠より上層はℓ１暗灰褐色シルト・ℓ２灰茶褐色砂質シルト・ℓ３暗褐色シルトである。井戸枠内堆積土はℓ４明灰褐色砂層である。堆積土には，木の削屑や枝片，植物遺体が混入していた。ℓ５明褐色砂層は井戸枠外の埋土である。周壁の崩落は一部で著しかった。

井戸の底面は平坦で円形である。



第180図　17号井戸跡出土遺物

遺　　物　（第180図，図版74）

本遺構内からは，弥生土器片，土師器杯，須恵器杯・壺・甕片などが出土している。ℓ１からは，499須恵器杯，498の土師器杯が出土している。499は回転ヘラ切り後底面に「一」の線刻を施す。498は回転ヘラケズリ調整を底部から体部下端にかけて行っている。内面はヘラミガキと黒色処理がなされている。ℓ３からは502の須恵器高台杯，500の須恵器小型壺が出土している。502は底部と体部下端のみの遺存で，底部は回転糸切り後ナデを施している。500は全体の約1/4が遺存しており，底部には回転糸切り痕が認められる。再調整は施されない。井戸枠内ℓ４からは501の須恵器甕底部から体部にかけての破片と，496の土師器杯が出土している。501の外面は体部下端をケズリ調整，内面はハケメ調整を行っている。496は，回転糸切り後，底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整を行っている。内面は丁寧なヘラミガキ及び黒色処理がなされている。器形は体部全体に緩やかな丸味を帯び，口縁は外反している。497はℓ３から出土した土師器杯で，底部に墨書がある墨書土器である。底部は回転糸切りされ，更に回転ヘラケズリをそこから体部下端にかけて施している。内面は，ヘラミガキ及び黒色処理が施されている。墨書は，底部外側から中央に向って「十」の文字が記されている。

まとめ

本遺構は屋敷遺跡の中でも，唯一発見された丸太材をくり抜いた井戸枠をもった井戸跡である。他のほぼ同時期と考えられる横桟組みの井戸跡と比較すれば，やや貧弱な感じを受ける。また，折敷が放棄されていることを考えれば，14号井戸跡との関連もあるであろう。本遺構の機能していた時期は，井戸枠内より出土した土師器杯から考えて９世紀前半代になるものと推定される。

（小野田）

18号井戸跡　ＳＥ18

遺　　構（第182図）

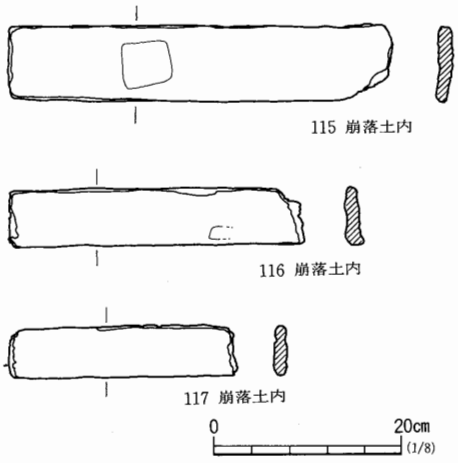
18号井戸跡は，Ⅴ区のほぼ中央部のＦ－14グリッドに位置する。まず，Ｆ－14グリッドの中央やや西よりに12号特殊遺構があり，この12号特殊遺構の床面から18・19号井戸跡の２基の井戸跡が検出された。12号特殊遺構の北壁寄りにあるのが18号井戸跡，中央部にあるのが19号井戸跡である。土層観察により18号井戸跡は，12号特殊遺構の堆積土の上端から掘り込まれている。また19号井戸跡の上面は，12号特殊遺構の床面となっているところから，19号井戸跡→12号特殊遺構→18号井戸跡の順に新しくなる新旧関係が判断された。

井戸跡のプランは，上面・床面とも円形を呈する。12号特殊遺構の床面上での規模は，東西82cm，南北74cm，底面は，東西90cm，南北86cmの規模を有する。12号特殊遺構の床面から井戸底面までの深さは，約82cmを測るが，確認面である12号特殊遺構の堆積土上端からは，1.12ｍを測る。堆積土は，４層に細別されるが，ℓ３に黒色の粘質の土が堆積しているところから，井戸が廃棄された後一気に埋まったものではなく，ある程度の時間をおいて埋まっていったものと考えられる。断面形はフラスコ状を呈するが，側壁が軟らかいため崩壊によってこのような断面形を成した可能性が高い。

まとめ

井戸跡の廃棄等にからむ遺物は，堆積土中から全く検出できなかった。そのため土層堆積状況から12号特殊遺構よりは新しい時期のものと考えることができるが詳しい時期比定はできない。

（芳賀）



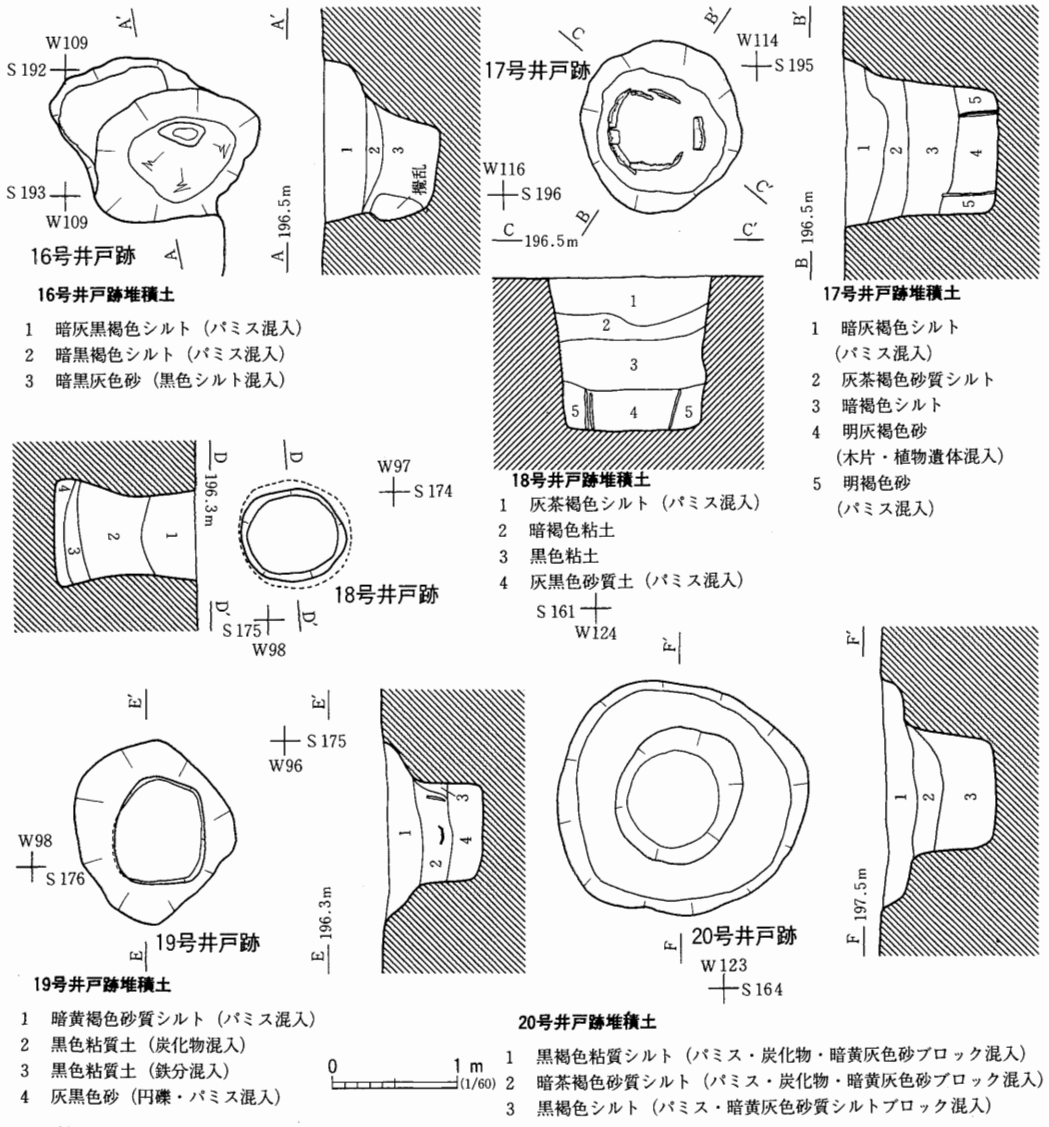
第181図　19号井戸跡出土木製品

19号井戸跡　ＳＥ19

遺　　構（第182図，図版39）

19号井戸跡は，Ｆ－14グリッドに位置し，18号井戸跡に隣接して12号特殊遺構床面で検出された井戸跡である。12号特殊遺構のほぼ中央に位置し，堆積土上面は砂のブロックを多く含み，硬くしまっていた。

井戸跡のプランは，検出面・底面ともに不整の円形を呈しており，断面形は，上部が受口状に開き，下部は円筒形の形を成し，礫層の上部を一部掘り込んで底面としている。検出面上部は，東西1.28ｍ，南北1.45ｍ，



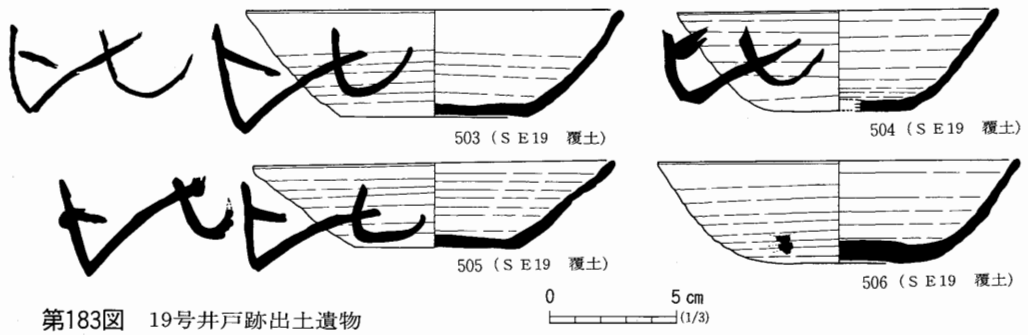
第182図　16～20号井戸跡

筒状を呈する上部は，東西0.72m，南北0.85m，底面は，東西0.7m，南北0.81m，検出面からの深さは0.92mである。

堆積土は4層からなる。ℓ4は，礫を多量に含む土で礫には鉄分の付着が看取され，井戸使用後に堆積した土層と考えるより，井戸使用時に側壁の礫が崩落して堆積した層の可能性が高い。ℓ4の上面に接するようにℓ2から板材や須恵器等が検出されていることも，このことを裏づけている。これらの状況を考え合わせれば，本井戸跡は，自然堆積によって埋没したものと判断される。

遺　物　（第181・183図・図版75・86・87）

遺物は堆積土中より出土している。ℓ2中からは，4点の須恵器杯，3点の板材が折り重なる



第183図　19号井戸跡出土遺物

ように出土している。この板材は井戸枠の可能性もある。第183図に示した須恵器杯は，底部が回転ヘラキリされたもので，このうち503～505の３点には，「比」という墨書がある。いずれも同一書体であり，503・505については体部に２ヶ所，対になるように墨書が観察される。

まとめ

19号井戸跡は，ℓ２出土の須恵器や土層堆積状況から判断して９世紀後半に廃棄されたものと考えられる。須恵器の墨書名や型式的にも12号特殊遺構出土遺物と共通しており，12号特殊遺構よりは古いものと考えられる。しかし，両者の間に際だった時期差を見い出すことはできない。

（芳賀）

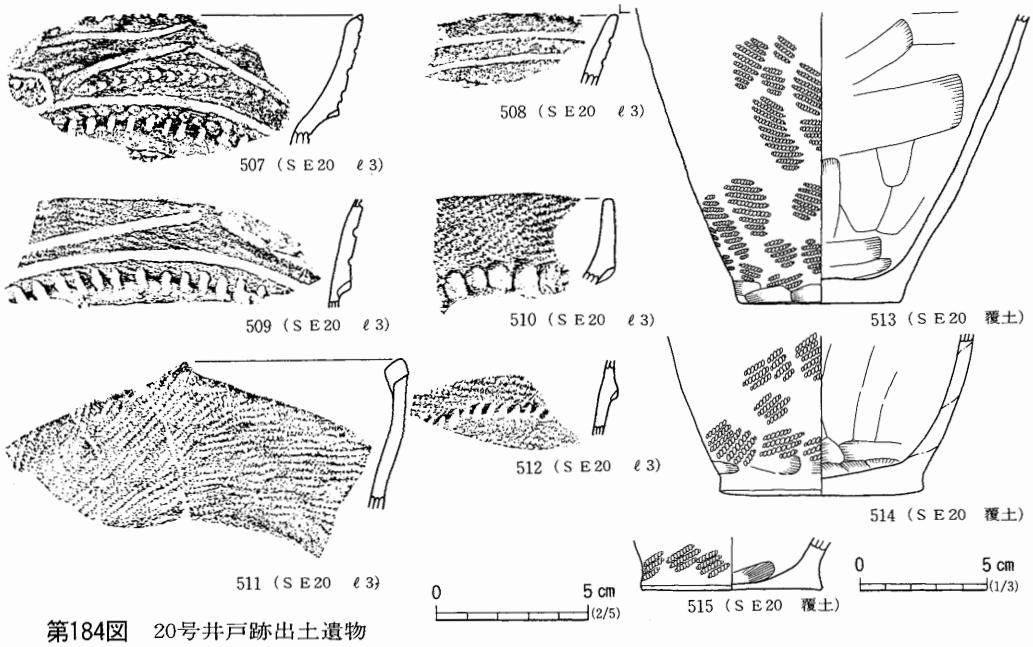
20号井戸跡　ＳＥ20

遺　　構（第182図）

20号井戸跡は，Ⅴ区のＣ－13グリッドに位置している。遺構検出面はＬⅢ暗黄褐色シルト層上面である。他の遺構との直接の切り合い関係はないが，位置関係より34号建物跡と重複関係にある。本遺構は素掘りの井戸で，平面形はほぼ円形に近く，規模は上端での長軸が2.02cm，短軸が1.86cm，検出面からの深さが91cmである。底面は平坦である。壁面は底面から垂直に近い角度で立ち上がり，検出面から約20cmのあたりで段をもつ。この段は９・10号井戸跡よりも明確で，22～42cmの幅で中央の掘込部の周囲を一周している。この段の平坦面から検出面間での壁の勾配は，中心の掘込部よりは緩やかである。堆積土は３層で，暗黄灰色砂ブロック・炭化物が混入している。自然堆積と思われる。

遺　　物（第184図・図版82・83）

遺物は弥生土器が堆積土中より十数点出土している。507～515の土器を図示した。507～509は沈線とキザミによって飾られた壺の口縁部である。510・511も壺の口縁部で，510の口縁部下には押圧が認められる。513～515は何れもℓ３から出土した壺の底部で，体部下半には縄文を施し，体部下端から底部にかけてはナデ，内面にはナデによる調整がみられる。



第184図　20号井戸跡出土遺物

まとめ

本遺構からの出土土器は弥生時代後期に属するものであり，堆積土のℓ3から出土している。ℓ3は最下層で，井戸が使用されていた時期に，ある程度の堆積があったと考えれば，この遺物は，井戸が機能していた時期のものといえよう。したがって，20号井戸跡は，弥生時代後期に機能していたと考えられる。（小野田）

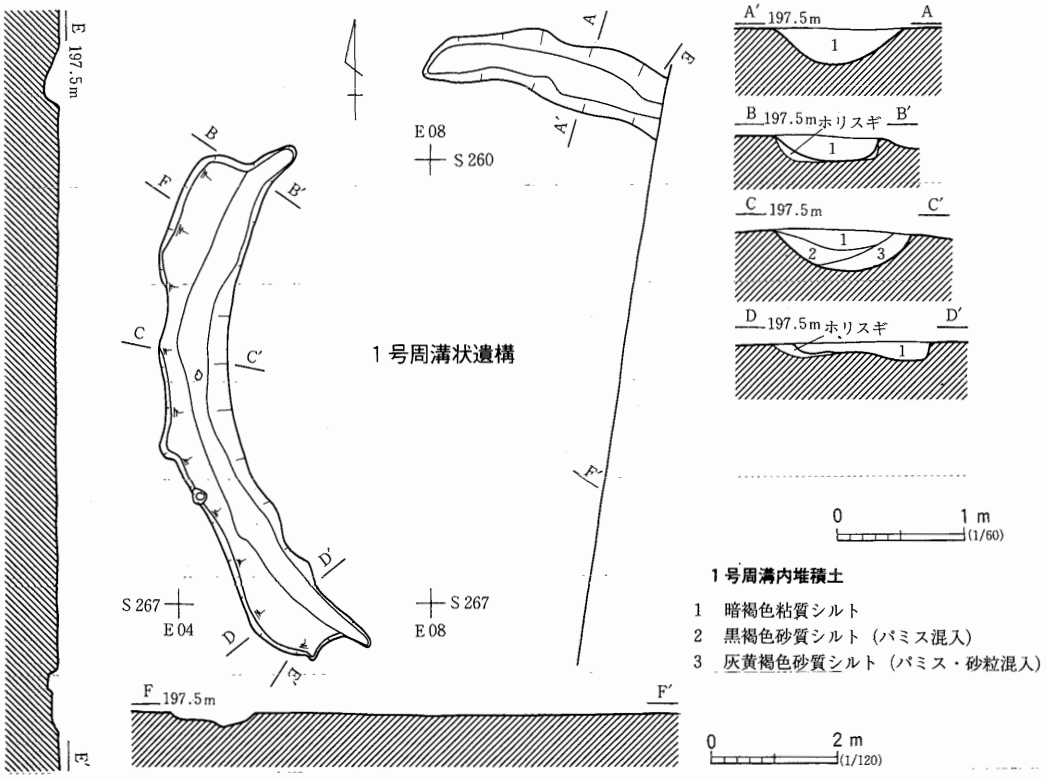
第6節　周溝状遺構

今回の調査によって確認された周溝状遺構は，総数13基である。各周溝状遺構は，各々まとまって検出された。いずれも後世の削平を受けており遺存状態は悪く，完全なプランを留めているものでも，溝の深さが非常に浅い状態であった。また，一部の周溝状遺構は，遺構の半分程度が調査区外に伸びているものもあり，全面調査には至らなかった。

1号周溝状遺構

遺　　構（第185図，図版42）

1号周溝状遺構は，Ⅲ区道路南側のP－22・23，Q－22グリッドに位置している。遺構検出面は，LⅢ上面となっている。東側半分は，調査区外にのびている。周溝は，全周せず北側と西側の2本の周溝間及び，西側周溝南端部で途切れている。周溝の南側には，1号住居跡・2号周溝



第185図　1号周溝状遺構

状遺構が位置している。

周溝の平面形は，遺存部から円形と推定され，その規模は，北側周溝東端から西側周溝南端まで，10.5mとなっている。

北側周溝は，最大幅が1.09m，検出面からの深さが最深で31cmとなっている。周壁と底面との境界は不明瞭で，断面形は椀状を呈する。西側周壁は弧状を呈し，北端部から南端部までの長さが7.90m，最大幅が1.17m，検出面からの深さが最深部で29cmとなっている。周壁の立ち上がりはゆるやかで，中央部では特に，底面との境界が不明瞭となっている。

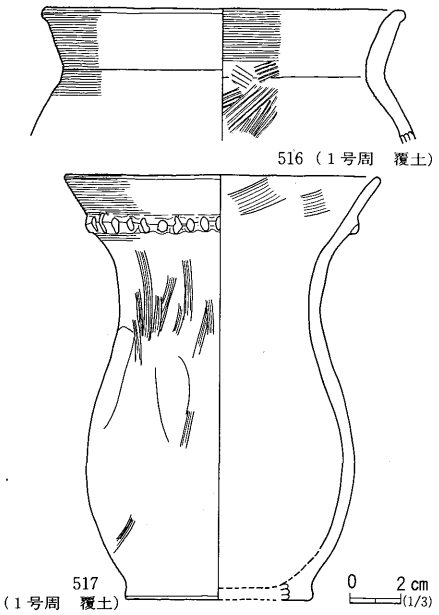
周溝内の堆積土は，暗褐色粘質シルト・黒褐色砂質シルト・灰黄褐色砂質シルトの3層で，堆積状況は，自然堆積と考えられる。

遺　　物（第186図）

1号周溝状遺構の堆積土中からは，弥生土器壺・土師器甕が出土している。図示資料では，517が弥生土器広口壺で，口縁下に隆帯がめぐり，その上に押圧が加えられている。調整は，外面の口縁部にヨコナデ，体部にヘラケズリ後ミガキに近い縦方向のナデが加えられている。内面は口縁部・体部ともにナデが加えられている。516は土師器甕で，口縁部が「く」の字状に外反する形態を呈し，口縁部にヨコナデ，体部(内面)にハケメが施されている。

まとめ

本遺構の所産年代は，堆積土中出土遺物より，弥生時代後期終末～古墳前期と考えられる。（藤谷）



第186図　1号周溝状遺構出土遺物

2号周溝状遺構

遺　構（第187図，図版43）

2号周溝状遺構は，Ⅲ区道路南側のP－23・24グリッドに位置しており，遺構の東半部は調査区外にかかるため，西半部のみ調査を行った。遺構検出面はLⅢ上面となっている。遺構の周辺には北側に1号周溝状遺構が，北西側に1号住居跡が位置している。また，周溝中央部は，16号溝跡に切られている。

周溝の平面形は，西～南側がゆるく東側に曲がり，北西隅が特に湾曲の度合が強くなっており，本来の平面形は隅丸方形と考えられる。その規模は，北端部から南端部までの長さが，9.52m，最大幅が南側で72cm，検出面からの深さが，最深部で24cmとなっている。周壁の立ち上がりは弱く，底面は中央部が若干くぼんだ形態を呈している。

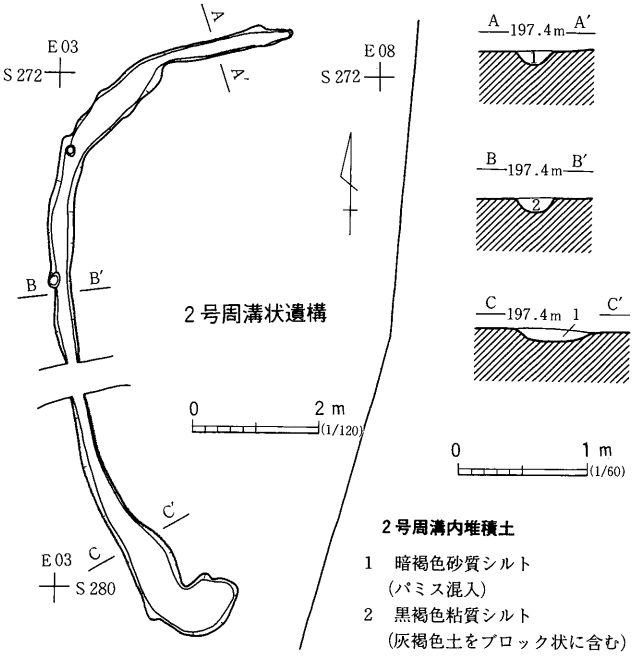
堆積土は，暗褐色砂質シルトと黒褐色粘質シルトの2層からなり堆積状況は自然堆積と考えられる。

遺　物

遺物は，堆積土中より弥生土器壺，土師器甕の小片が出土している。弥生土器は撚糸文が施されたものと，ヘラ描き沈線が施されたものが出土している。

まとめ

本遺構の年代は出土遺物より古墳時代初頭であると考えられる。しかしながら，全容が調査できず，大型住居の壁溝なのか周溝墓であるかは不明であった。（藤谷）



第187図　2号周溝状遺構

３号周溝状遺構

遺　　構（第188図，図版44）

３号周溝状遺構は，Ⅴ区南端部Ｉ・Ｊ－20・21グリッドに位置し，ＬⅢ暗黄褐色砂質シルト層と河川跡と考えられる粗砂帯にまたがって検出された。遺構の西側部分は４号周溝状遺構・126号土坑に切られている。南西部分には，切り合い関係が確認できなかった９号特殊遺構が存在している。なお，この周辺の遺構検出面は，遺構南側の農道下部の調査によって，その検出面が20㎝程度低くなるため，圃場整備の際に削られたものと考えられる。

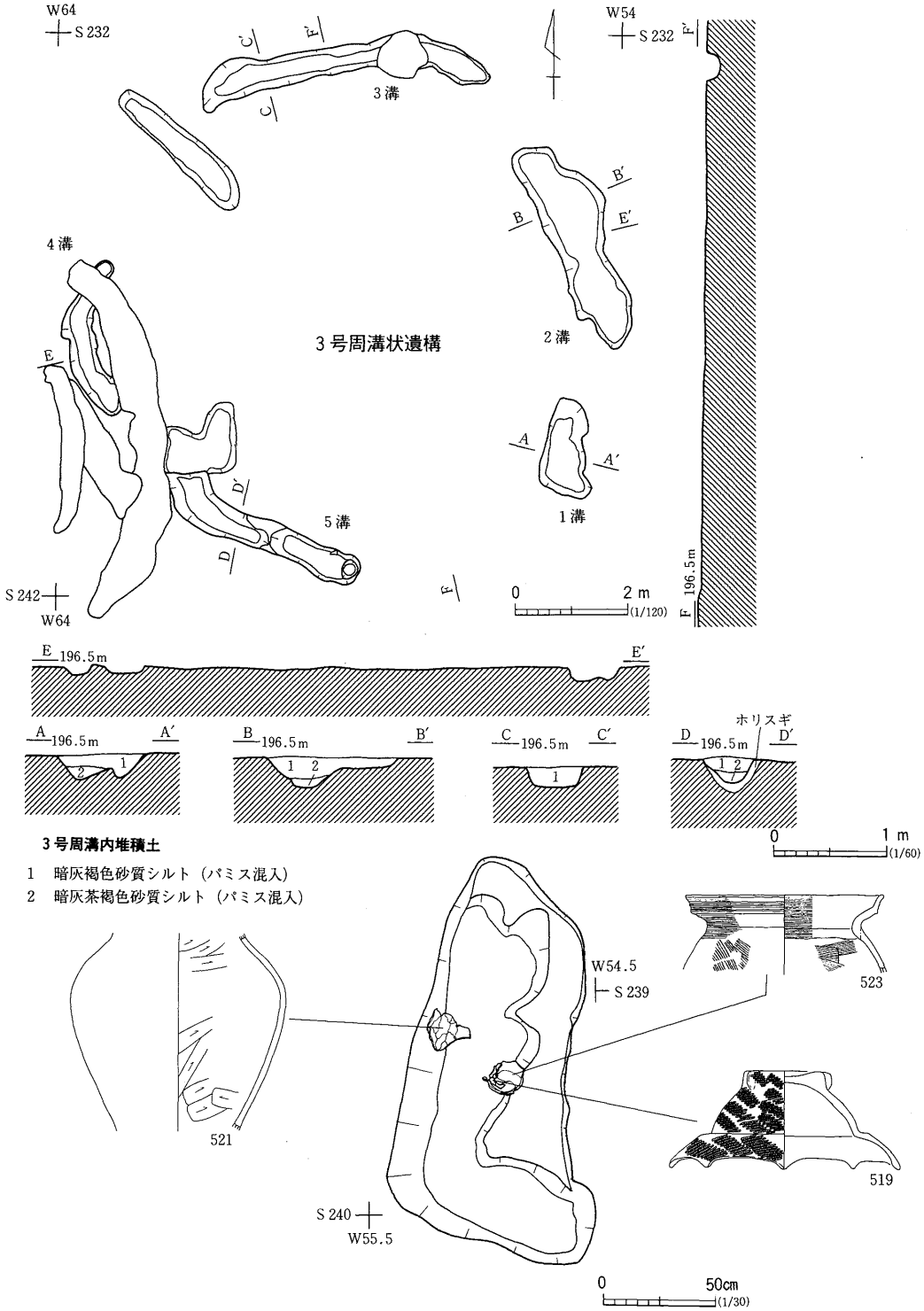
遺構の規模は，東西約10ｍ，南北約9.7ｍの円形で，第188図で見られるように，現況では，南・東・北東・北西・南西の５ケ所が切れる形態を示している。溝幅は50～120㎝，東側の溝幅が広く，北・西側は狭い。遺構検出面からの深さは10～45㎝である。それぞれの溝の形状は，１・２溝の平面形が溝の形状をもちながらも不整形を呈している。底面の縦断面は船底形で，その端部に向かって緩やかに立ち上がる。３・４溝の平面形は比較的整っており底面も平坦である。南西側の５溝は，その北端部が攪乱，切り合い関係にあり，全体の形状は不明であるが，溝を２つ組みあわせたような形であり，その底面は船底形である。

溝中の堆積土は，暗灰褐色砂質シルトと暗茶褐色砂質シルトの２層からなり，いずれの層にもパミスが均一に混入する。粘性は弱く，堆積土のしまりはあまり良好ではない。

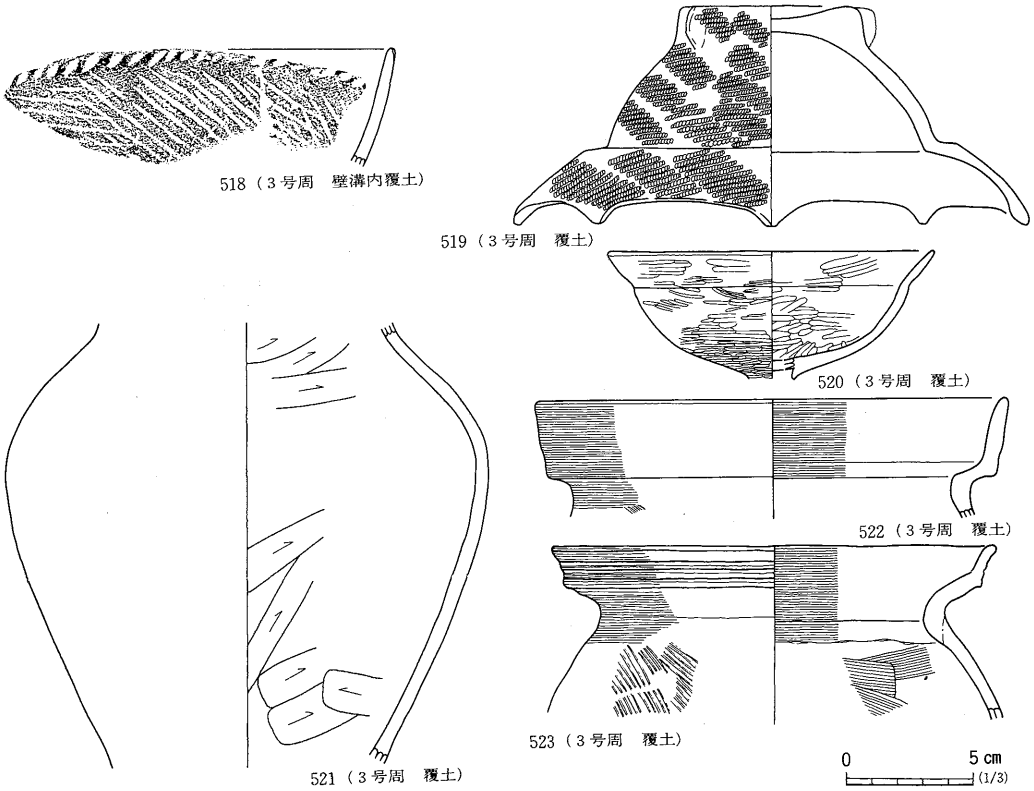
遺　　物（第189図，図版57・66）

本遺構の溝内からの出土遺物は，弥生土器の壺・甕・蓋などである。１溝出土のものは，残存度が高いが，他の溝に関しては小片が多い。出土量は，天箱の1/6程度である。

519は蓋で，第189図に見られるように，溝の中段から底面にかけての斜面部分に，やや浮いた状態で出土した遺物である。円形の底部周辺に粘土を貼りつけ，四隅を突出させている。体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部分は波状を呈し内側に６単位の突起をもつ。地文は縦位のＬＲ縄文が施されるが，体部上端はナデによって消されている。518は甕の口縁部である。口唇部に棒状工具による圧痕が加えられている。521は壺で，体部下端から上端までのもので外面にナデ，内面にケズリが見られる。外面には肩部から下端までススが付着しており黒色を呈する。520は高杯の杯部である。混入品であろうか。内外面ともヘラミガキが施され，色調は赤褐色を呈している。523は甕の口縁から体部にかけてのものである。体部はハケメ調整を行った後ナデを施している。頸部から口縁にかけてはヨコナデを施す。口縁は垂直に立ち上がり，上半から外反する。口唇部は丸味を帯びている。内面は体部がナデ，頸部から口唇にかけてはヨコナデを施している。



第188図　3号周溝状遺構



第189図　３号周溝状遺構出土遺物

まとめ

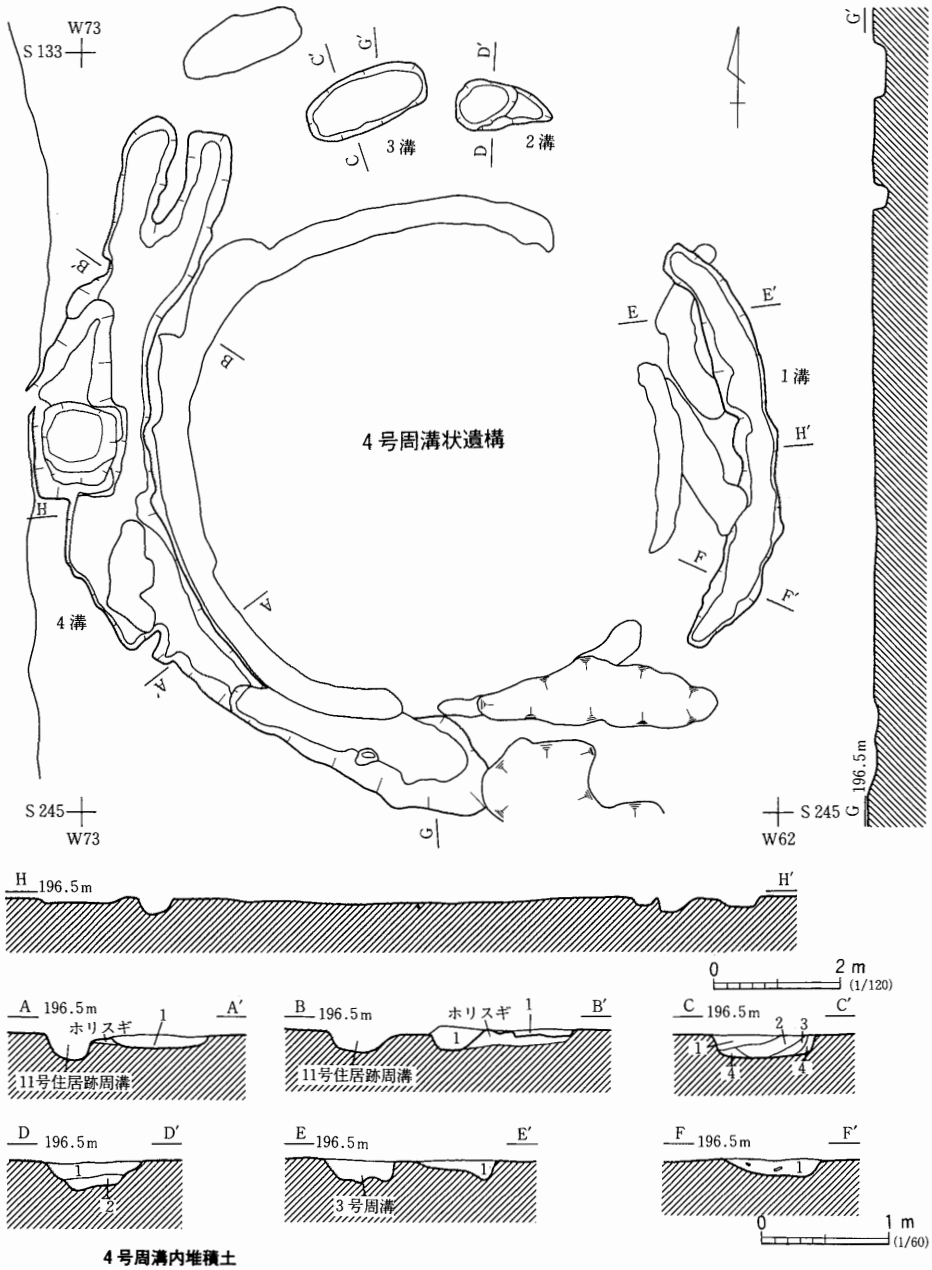
本遺構は，削平を受け現況のような形状となっているが，本来は，周溝の隅の部分がＬ字形に折れる傾向を示しており，方形周溝墓であった可能性が高い。本遺構の時期は，遺物及び切り合い関係から弥生時代後期と考えられる。（小野田）

４号周溝状遺構

遺　　構（第190図，図版46）

４号周溝状遺構は，Ⅴ区南端部Ｈ・Ｉ－20・21グリッドに位置し，ＬⅢ黄褐色砂質シルト上面において検出された。東側部分においては，３号周溝状遺構を切り，91号溝跡に切られている。本遺構は，11号住居跡をほぼ取り囲むような形で溝がめぐり，その南端部が住居跡の壁溝によって切られている。また９号特殊遺構にも一部かかわるが，切り合いを確認するには至らなかった。本遺構の検出面も，３号周溝状遺構の検出面と同様に，農道下部の検出面よりも低い位置にあるため，遺構の上部は削られているものと考えられる。

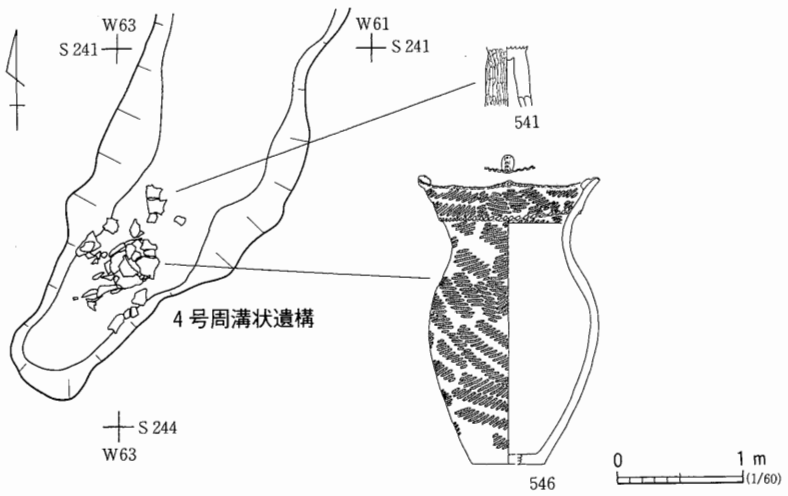
遺構の規模は，東西11.5ｍ，南北11.8ｍ程の円形で，第190図で見られるように，現況では南東部，北東部と北側２ケ所が途切れているが，北側の溝の立ち上がりが緩慢なことから溝の高低



4号周溝内堆積土

1　暗灰黒褐色砂質シルト（パミス混入）
2　暗黄褐色砂質シルト（パミス混入）
3　黒茶褐色砂質シルト（パミス混入）
4　暗茶褐色砂質シルト

第190図　4号周溝状遺構



第191図　４号周溝状遺構遺物出土位置

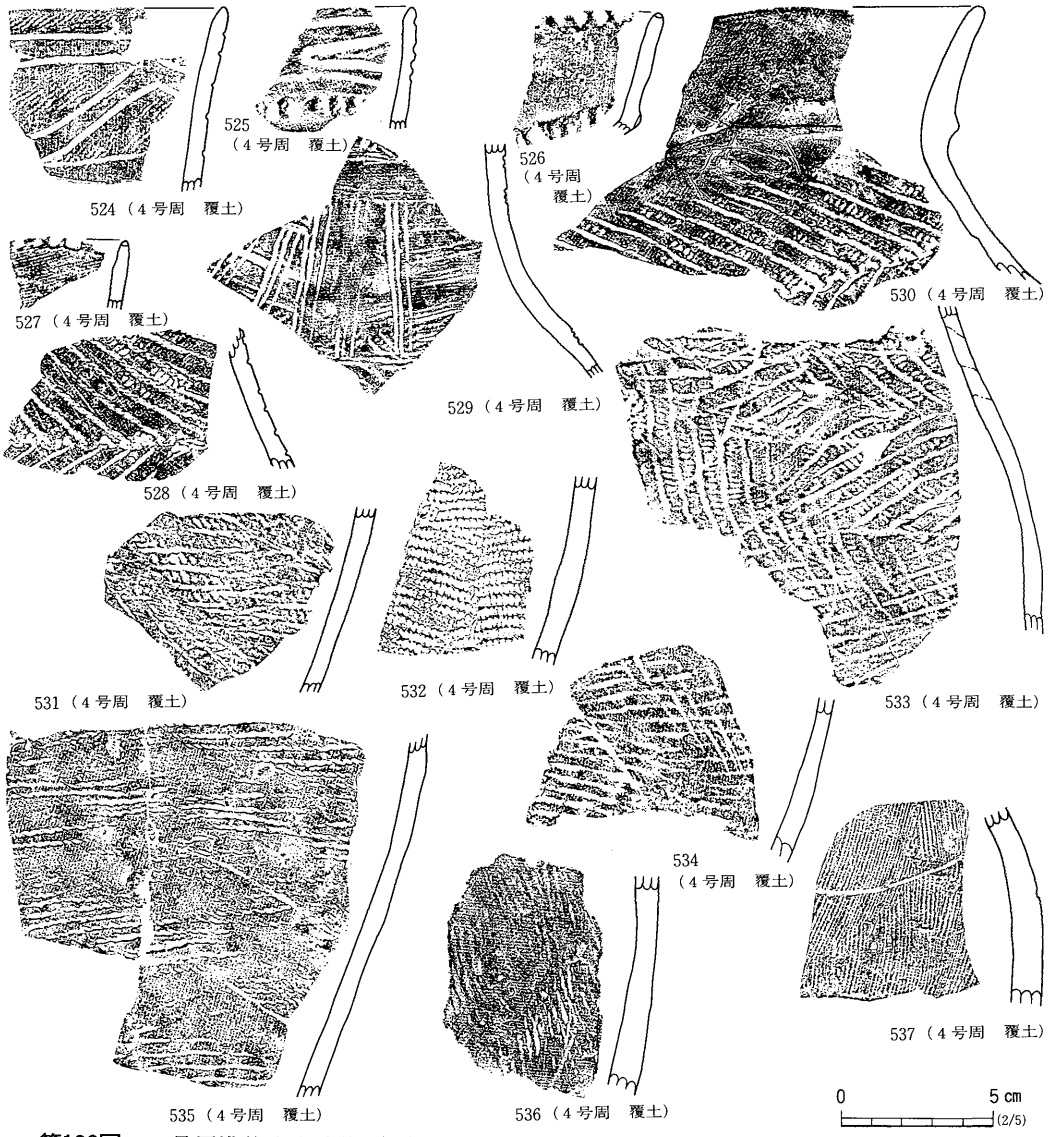
によるものと考えられ，本来は一つの溝であった可能性が高い。溝幅は50～180㎝，東側部分が狭く，西・南部分が広い。遺構検出面からの深さは，５～50㎝程である。それぞれの溝の形状は，１溝は比較的整った形をしており，底面は平坦である。２・３溝は，平面形が楕円形，底面は平坦であるが縦断面は緩慢に立ち上がる。４溝は，北西から南にかけての溝である。北西部分は，非常に浅く堆積土も僅かであった。西側から南西部にかけては攪乱が入り，遺構の一部が溝によって破壊されている。南西部分は，底面の凹凸が著しい。南側部分は，11号住居跡の他に風倒木痕によって破壊されている。底面は比較的平坦である。

溝中の堆積土は，暗灰黒褐色砂質シルト・暗黄褐色砂質シルト・黒茶褐色砂質シルト・暗茶褐色砂質シルトの４層からなる。ℓ１～３はパミスが混入する。粘性はなく，堆積土のしまりは，良好ではない。

遺　　物　(第191～193図，図版47・59・81・82・84)

本遺構の溝内からの出土遺物は，甕・高杯と器形不明の土器を含めて天箱１箱程度である。東側の１溝と西側の４溝から主に出土している。１溝南端部からは第191図に見られるように甕・高杯などが一括で出土している。

524は沈線によって縄文と無文帯を区画するもの，525～527は口縁部と口唇部に押捺を加えているもの，530は結節羽状縄文を施した後，口縁から頸部にかけてヨコナデを施している。528は530と同一個体の可能性がある。529は頸部で縄文を施した後，３本の横位の沈線，縦位の沈線の順に調整されナデによって無文帯を設け，３本の縦位の沈線で文様帯を区画している。調整が粗雑であるため縄文・沈線が消し切れていない。535・536は撚糸を回転させたもの，537は外面はハケメ，内面はナデ調整され，外面に弧を描くような沈線が引かれている。541・546は一括して出土している。546は内湾気味に立ち上がり，体部中央で最大径となって口縁は直線的に緩く外

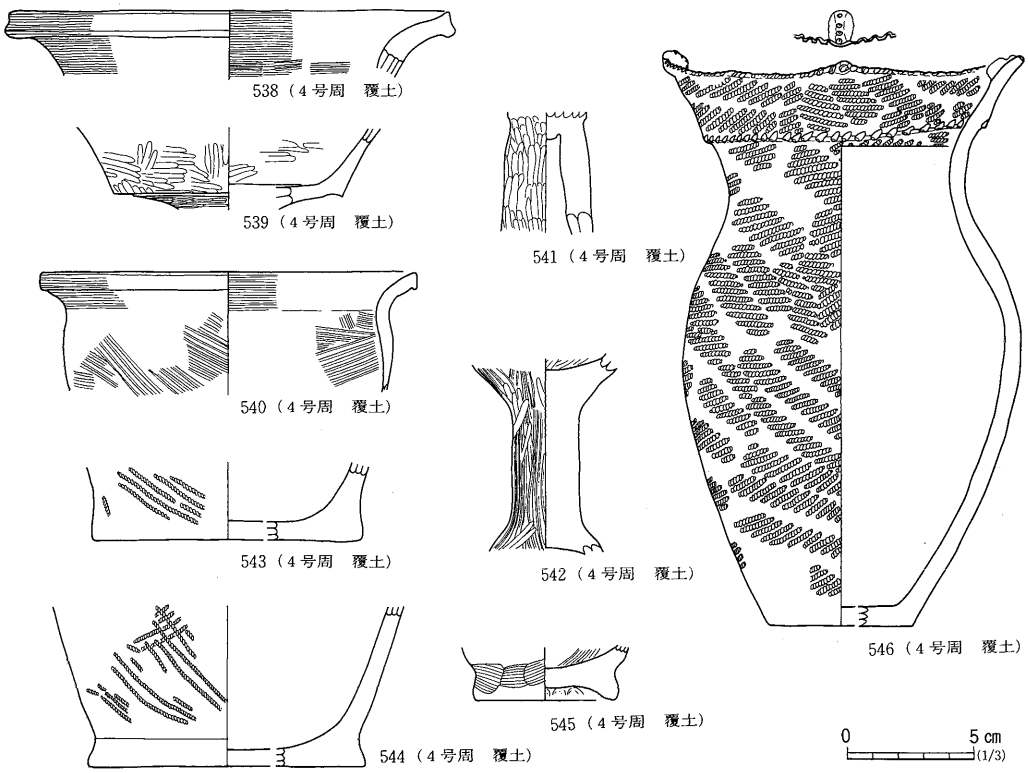


第192図　4号周溝状出土遺物（1）

反する。口唇部には4単位の突起が設けられている。541・542は高杯の脚部で丁寧なヘラミガキが施される。542は周溝状遺構西側の覆土より出土している。528・530・533・534は体部に羽状縄文が施されている。539は541・546と近接して出土したもので，内外に丁寧なヘラミガキが施されている。540は小型の甕で内外面ともハケメ調整，頸部から口縁にかけてはヨコナデが施されている。545は底部で外面に指頭圧痕が認められる。

まとめ

本遺構は3号周溝状遺構と同様に削平を受け，現況のような形状となっているため不明な点も多い。遺構は円形であるが，東側の溝幅と西側のそれが極端に異なるために，切り合いがある可



第193図　４号周溝状遺構出土遺物（２）

能性もあったものの，東側に対応する溝がないことや土層断面からは観察できなかったことも含め，一つの遺構であると断定した。遺物は東側の溝に集中し，西側の溝は点在して出土している。いずれの遺物も弥生時代後期から古墳時代前期初頭であり，３号周溝状遺構との切り合いとも考え合わせれば，本遺構の時期は，弥生時代後期から古墳時代前期初頭のものと考えられる。

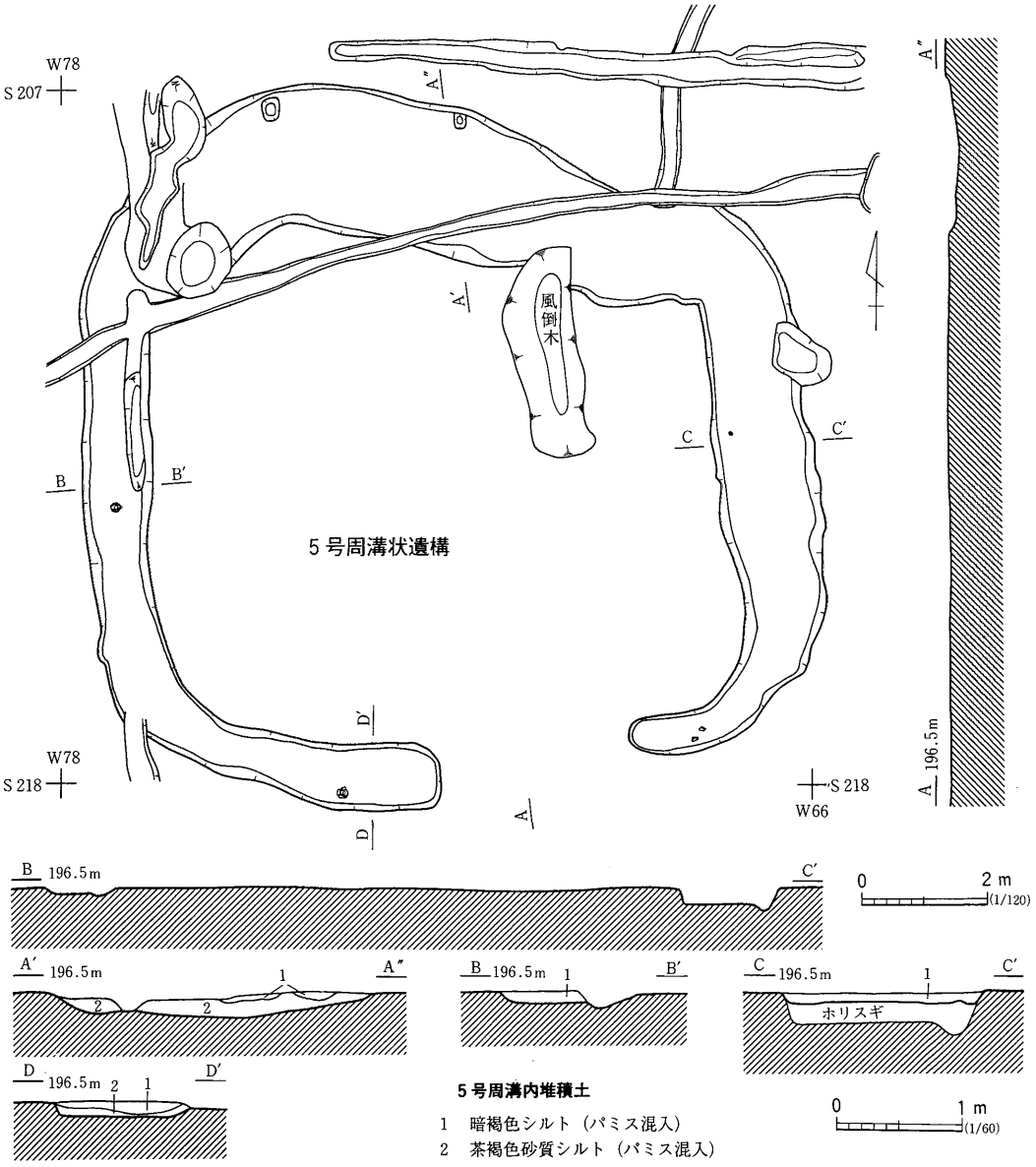
（小野田）

５号周溝状遺構

遺　　構（第194図，図版48）

５号周溝状遺構は，Ⅴ区南半部中央西寄り，Ｈ・Ｉ－17・18グリッドで検出された。遺構検出面は，ＬⅢ暗黄褐色砂質シルトである。旧河川跡が西側を南北に走り，すぐ南には６号周溝状遺構が位置している。57・58・73号溝跡および211号土坑とそれぞれ重複関係にある。新旧関係は５号周溝状遺構が，57・58・73号溝跡および211号土坑に切られており，５号周溝状遺構は，57・58・73号溝跡および211号土坑に先立つものである。

周溝状遺構のプランは，北北西側がやや広がるものの，全体の形状としては方形といえる。南側には周溝の切れ目が存在し，陸橋を形成している。その長さは３ｍを測る。主体部は，全体的

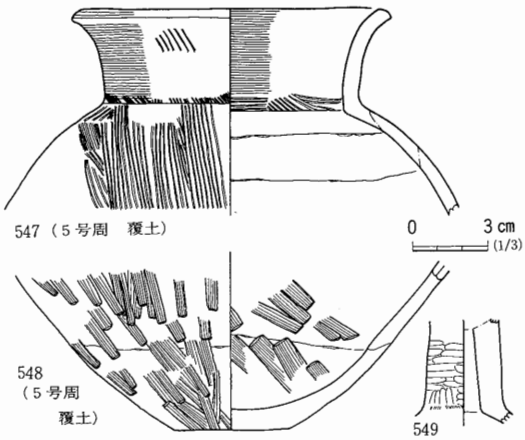


第194図　5号周溝状遺構

に削平が著しいために検出されなかった。規模は長軸で11.6m，周溝の幅は60～240cmを測り，北から南に向かって周溝の幅を狭めていくように見える。深さは8～18cmを測り，底面はほぼ平坦で，断面形は皿状を呈する。堆積土は2層で，ℓ1は暗褐色シルト，ℓ2は茶褐色シルトである。どちらもパミスを含んでいる。主軸線はN－5°－Wの傾きを持つと考える。

遺　物　（第195図，図版49・63）

周溝内から土師器壺・甕が出土している。547は土師器壺で，底面より10cm程高い位置で口縁

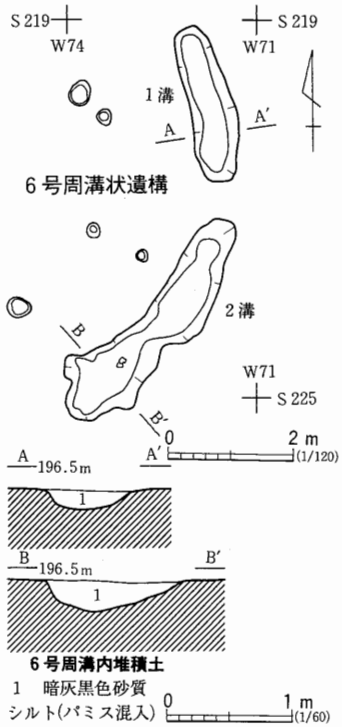


第195図　5号周溝状遺構出土遺物

を上にして検出された。頸部は直立気味に立ち上がり，口縁部でやや外反する。調整は外面においては，胴部上半・頸部ともにハケメを行い，頸部から口縁においては，その後ヨコナデを施している。内面はハケメ・ヨコナデを施している。548は土師器甕で，底部から胴部下半にかけて遺存し，底面より9㎝程高い位置で底部を上にして検出された。底径は狭く，やや内湾気味に立ち上がっていく。内面には繋ぎ合わせの痕が見られる。調整は内外面ともにハケメの後，ナデを施しているが，胴部下端にはヘラケズリの痕跡も見られる。火熱による二次熱変を受けている。549は器台の脚と考えられ縦と横へのヘラミガキが施されている。547～549ともに塩釜式期のものであると考えられる。

まとめ

5号周溝状遺構は，南側に陸橋を有し，本遺跡の周溝状遺構の中でも大型で，はっきりとした方形を呈する方形周溝墓と考えられる。周溝内からは，古墳前期の土器が出土しており，本遺構が造営された時期も，そのころと推定される。（伊藤）



第196図　6号周溝状遺構

6号周溝状遺構

遺　　構（第196図，図版45）

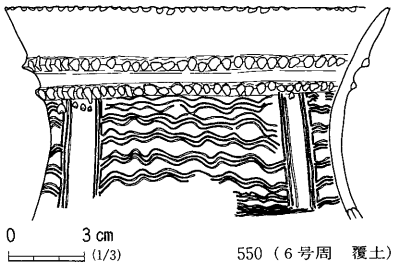
6号周溝状遺構は，Ⅴ区南寄りのH－18・19グリッドにおいて検出された。河川跡と考えられる粗砂上に立地している。本遺構の北側には5号周溝状遺構が隣接し，南方には，3・4号周溝状遺構が接している。遺構の西側部分は，近世～近代の河川によって消失しているため，全体の形状は不明であるが，円形になると考えられる。

遺構の規模は，直径約10ｍになると推定される。第196図で見られるように現況は，二つの溝を残しているにすぎない。溝幅は70～110cm，遺構検出面からの深さは10～20cmである。それぞれの溝の現状は，1・2溝ともに，平面形は直線的である。1溝の南側部分と2溝の北側部分はともに緩慢に立ち上がるため，本来は一つの溝であった可能性が強い。底面縦断面は船底形を呈する。

溝中の堆積土は，暗灰黒色砂質シルトの単独層である。パミスは上面から下面まで均一に混入している。

遺　　物（第197図，図版59）

本遺構の溝内からの出土遺物は，弥生土器壺片１点と，器形不明の小片20点である。図示した遺物は２溝の南端部で，床面より10㎝程度浮いた状態で検出された。



第197図　６号周溝状遺構出土遺物

遺物は口縁部から頸部にかけてのものである。２本の粘土紐を貼りつけた後，ヨコナデを施し，頸部下端に３本の横位沈線を加え，３本同時に鋸歯文を施した後に縦位の垂線をつけている。垂線を付けた後に粘土紐に押捺を連続的に加えている。色調は茶褐色で焼成は良好である。

まとめ

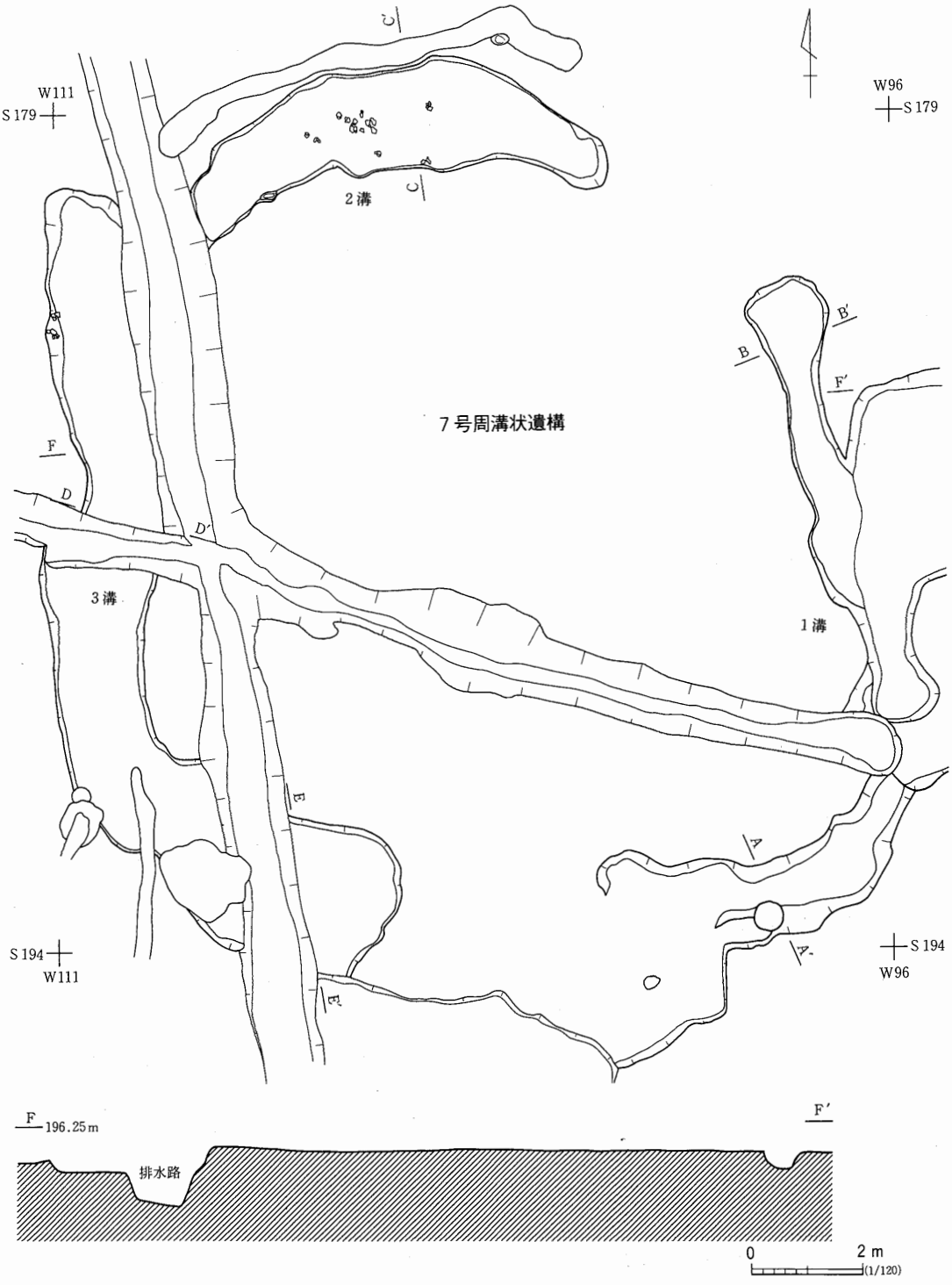
本遺構は河川跡によって西側部分が消失していることに加え，上面が削平を受けていることから，５号周溝状遺構・164号土坑との重複関係を把握することはできなかった。本遺構の時期は出土遺物等から考えて弥生時代後期に位置付けられる。（小野田）

７号周溝状遺構

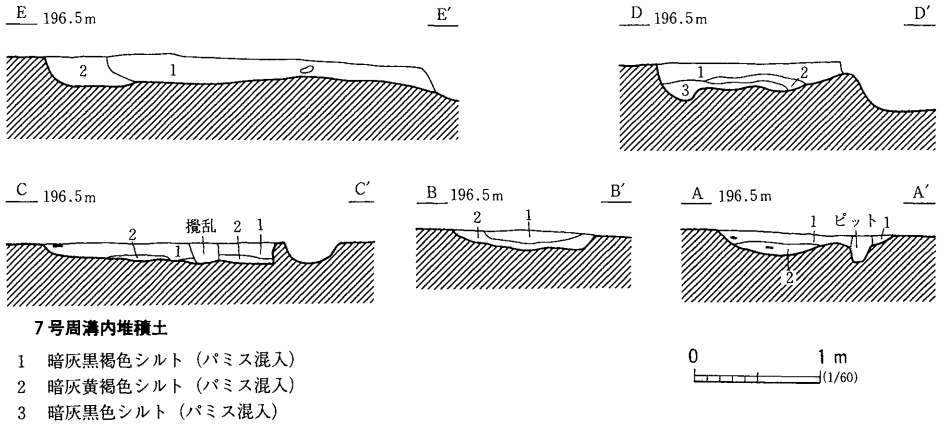
遺　　構（第198・199図）

７号周溝状遺構は，Ⅴ区Ｄ・Ｅ・Ｆ－14・15・16グリッドに位置し，ＬⅢ暗黄褐色砂質シルト上面で確認された。本遺跡で検出された周溝状遺構の中で最大のものである。遺構の南側は，32号建物跡・143号溝跡・16号井戸跡によって切られている。東側は７号特殊遺構によって切られている。西側は11号周溝状遺構と13号周溝状遺構と切り合い関係にあり，本遺構の方が新しい。遺構の北側には13号周溝状遺構の北溝と，それに切られる形で153号溝跡が取り巻いている。

遺構の規模は，東西14.5ｍ，南北約18ｍで，ほぼ方形を呈する。現況は排水路及び遺構によって一部切られているため，遺構南側中央・北東隅・北西隅が切れていると考えられる。溝幅は東側が狭く，西側が広い傾向を示し，１～3.5ｍ程度である。遺構検出面から底面までの深さは10～30㎝である。それぞれの溝の形状は，１溝の陸橋部にかかる部分が，徐々に立ち上がっているため，プランが明確でなく，その形状を捉えることはできなかった。そこから南東コーナーにかけては一部近代の56Ｃ号溝によって切られているため，その形は不明だが急速に幅を縮めてゆるやかに北方に曲折する。底面は比較的平坦であるが，１溝の北端部分は深く急に立ち上がる。北側の２溝は中央部が肥大した弓状である。西端部は排水路に切られているので，３溝と接続する可能性もあると考えられる。底面の形状は凹凸が多く，粗雑な作りである。壁の立ち上がりは急であるが，検出面からの深さは10㎝前後と非常に浅い。西北端から西・南に至る３溝は，北端部分からまっすぐに南下し南西部分でゆるやかに曲折して陸橋部に至る。底面の形状は平坦である。



第198図　７号周溝状遺構（１）



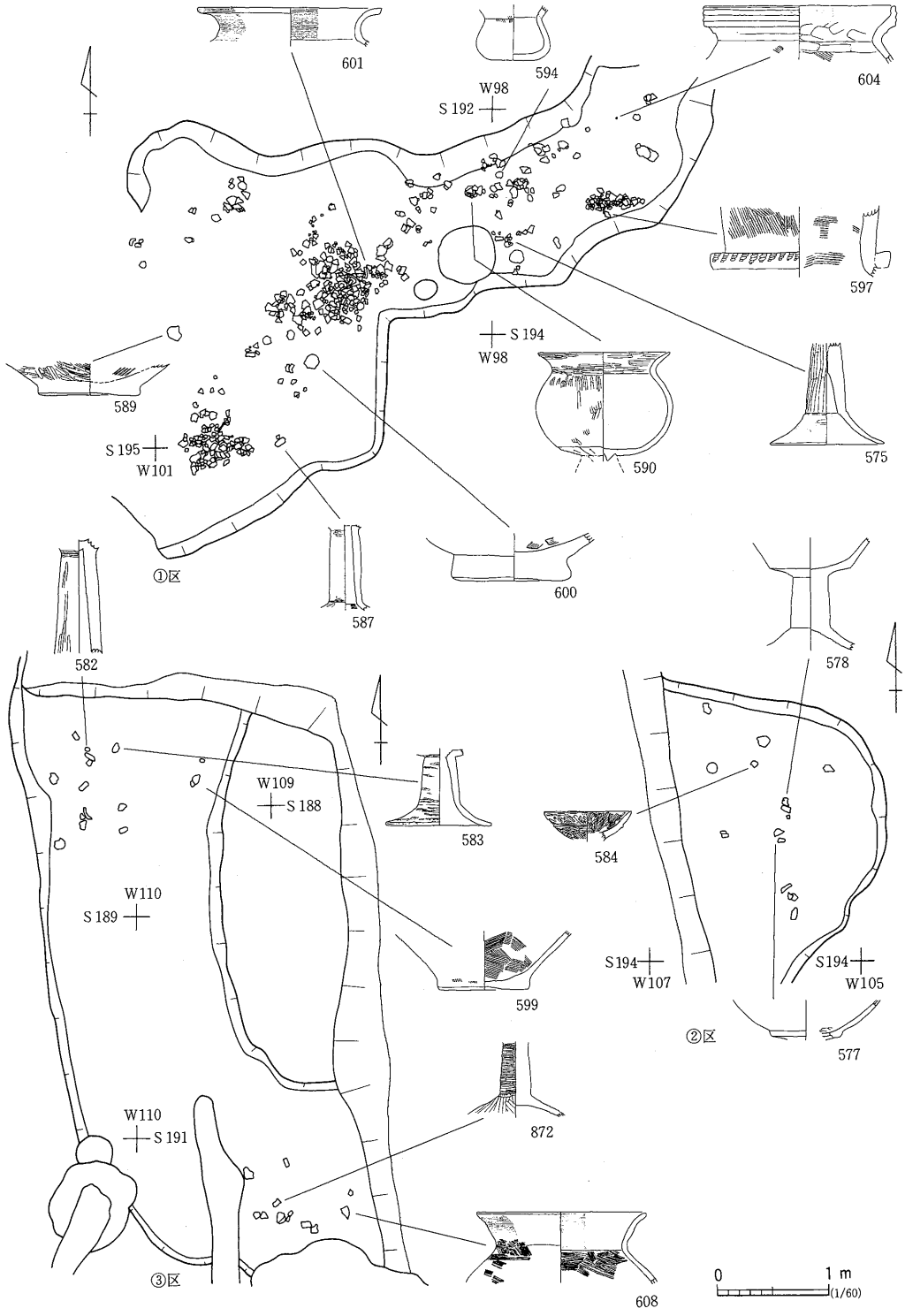
第199図　７号周溝状遺構（２）

溝中の堆積土は暗灰黒褐色シルト・暗灰黄褐色シルト・暗灰黒色シルト・黒色シルトでいずれの層中にもパミスが混入している。粘性は弱く，堆積土のしまりはあまり良好ではない。

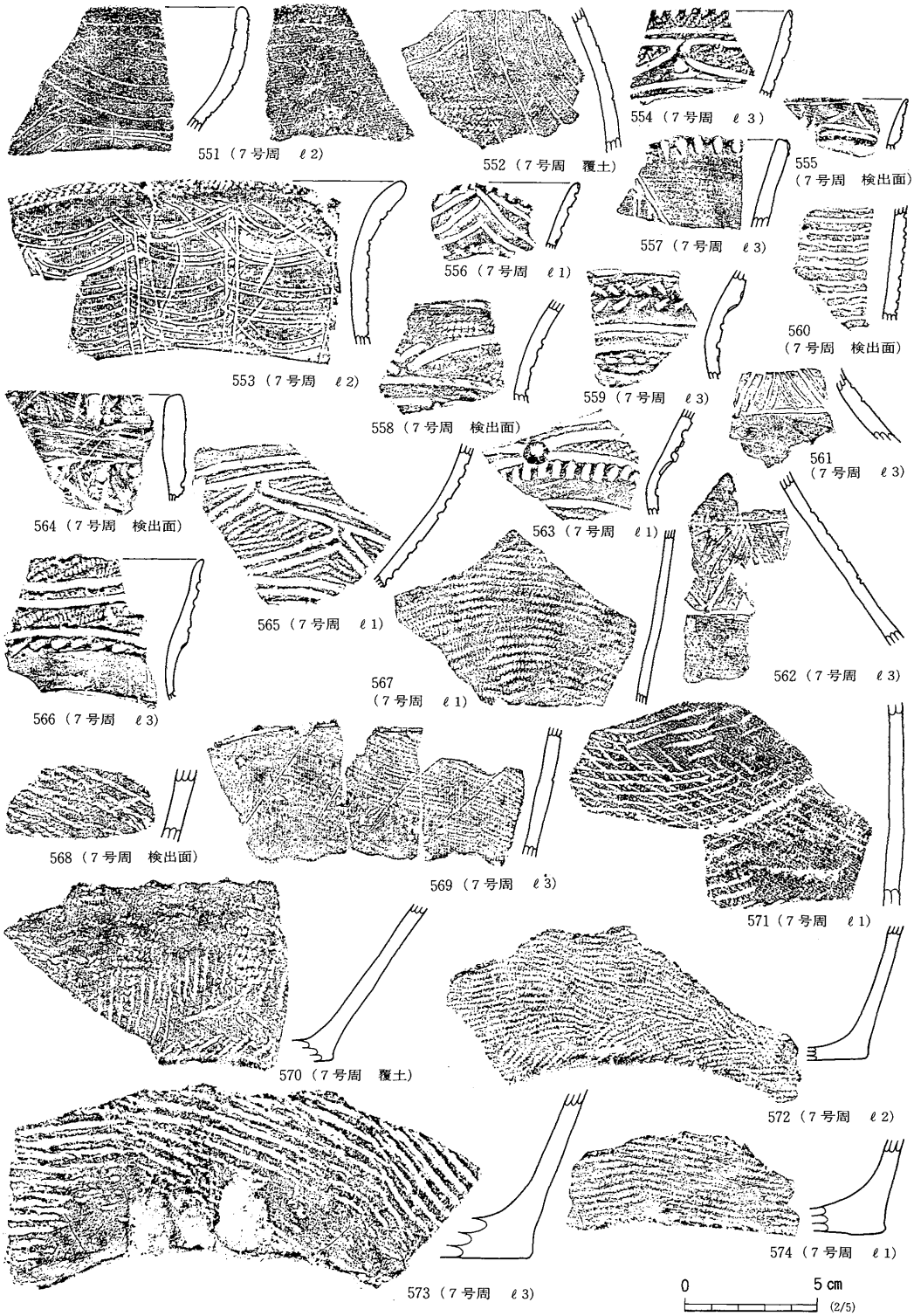
遺　　物　(第200～204図，図版50・51・63・64・66・77・78・83・84)

本遺構は，遺物の集中する箇所が４ヵ所ある。第200図に挙げた①～③と，２溝である。①は遺構の南端にあたり，この地区だけで天箱６箱程の遺物が出土している。出土遺物は，弥生時代中期のものも若干含まれているが，その大半は弥生時代後期～古墳時代前期のものである。

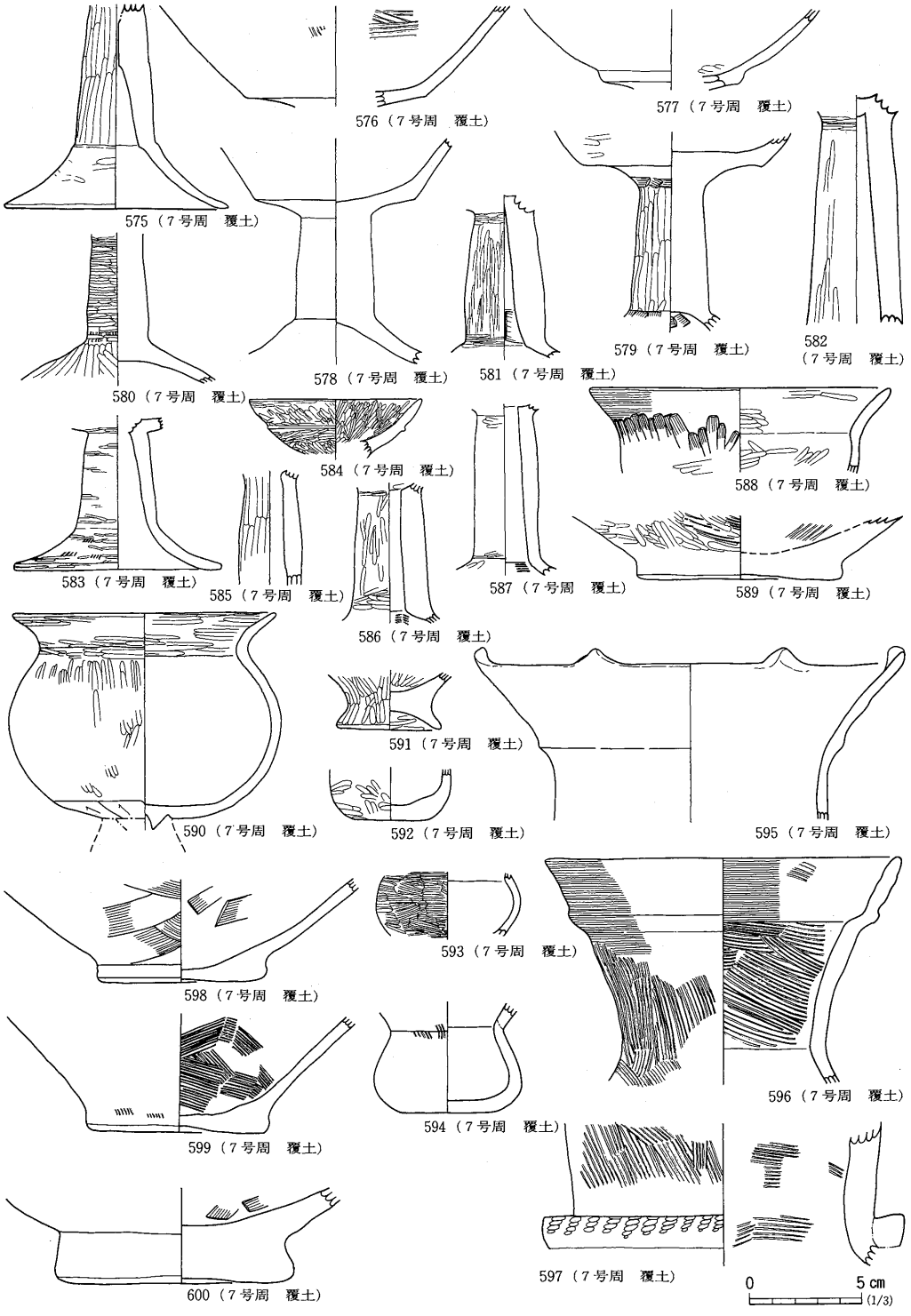
551・552は弥生時代中期の遺物で，沈線によって区画される。554・556・558・559・563・565・566は太い沈線によって区画されるもので，刺突が施されるものと，押圧されるものとがある。565は，内面全面が赤色塗彩され，外面は無文帯のみ塗彩される。555は太い沈線によって区画されるものであるが，他のものとは趣をやや異にする。560は櫛描による波状文，561・562は横位＋斜位の直線文が施されている。557は全体像は不明だが線刻が施される。569はヨコハケを施した後に横位と斜位の線刻が施されている。567・568は地文のみの体部である。570・572～574は，底部から体部下端のもので，572は底部に布目圧痕を残している。576・577・584は高杯の杯部である。576は内外面にハケメ痕を残す。584は丁寧なミガキを施し，赤色塗彩される。577は赤色塗彩されるが調整方法は観察できない。585・587は中空の高杯脚部，575・581～583・586は途中，または杯下部まで中空のもの，578～580は中空にならないもので，580・583のみ横位のミガキを施している。596は口縁から頸部にかけてのもので内外面ともハケメ・ヨコナデを施す。595はナデ調整を行っているが器面は荒れている。口唇部に突起が４単位認められる。592・593・594は小型壺で，592・593は丁寧なミガキ，594はハケメが加えられる。597は粘土紐を貼りつけ突帯を設け，縄文の圧痕を施している。体部は内外面ともハケメ調整が施される。591は器台で内外面にミガキを入れる。598～600は壺底部でミガキを入れるものとハケメのみのものがある。588は小型甕でヨコナデ・ユビナデが施されている。590は小型台付壺であるが脚部は失われている。



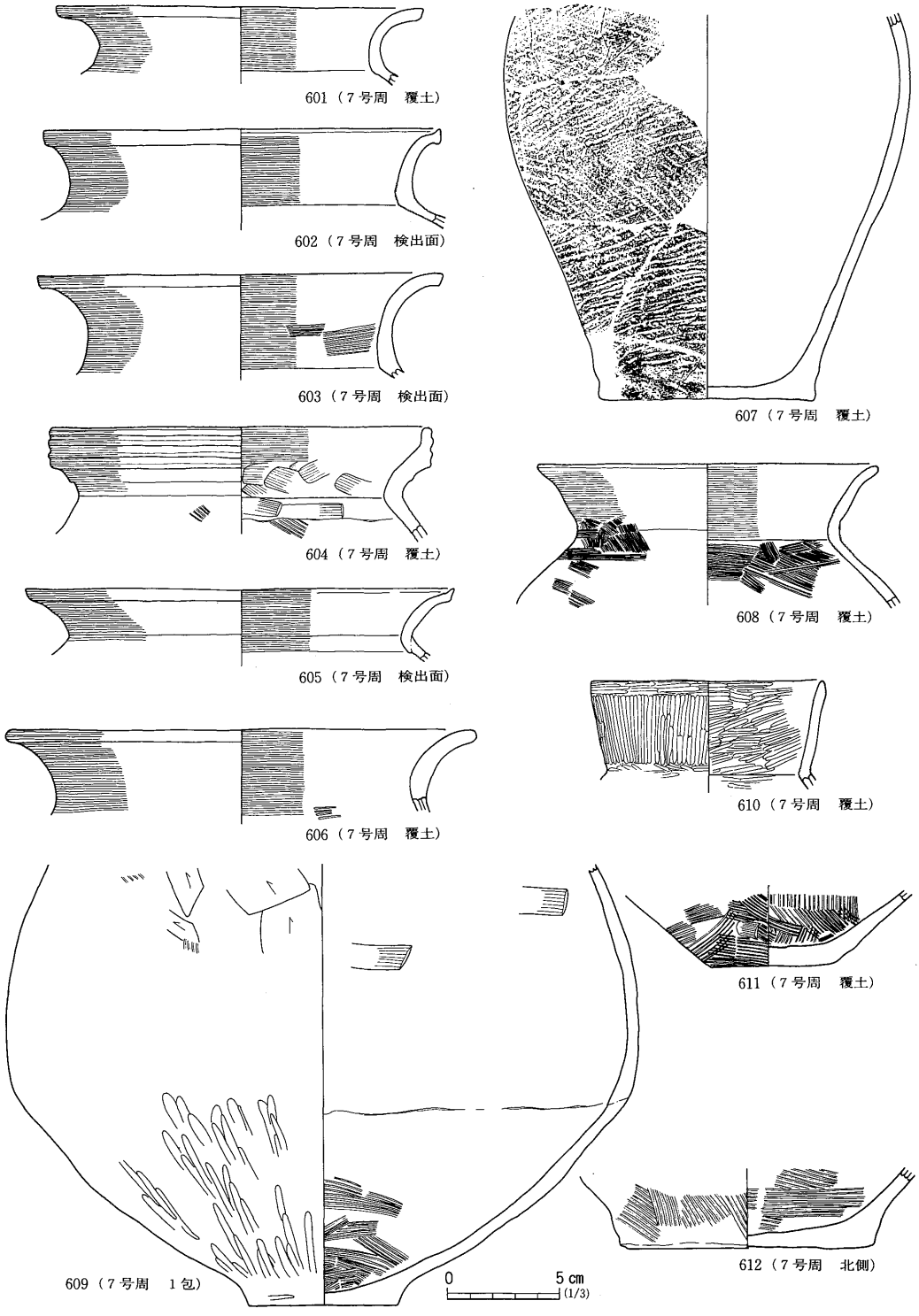
第200図　７号周溝状遺構遺物分布図



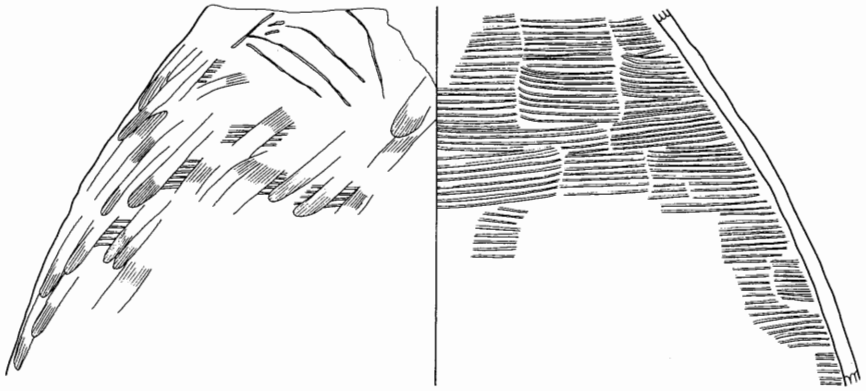
第201図　7号周溝状遺構出土遺物（1）



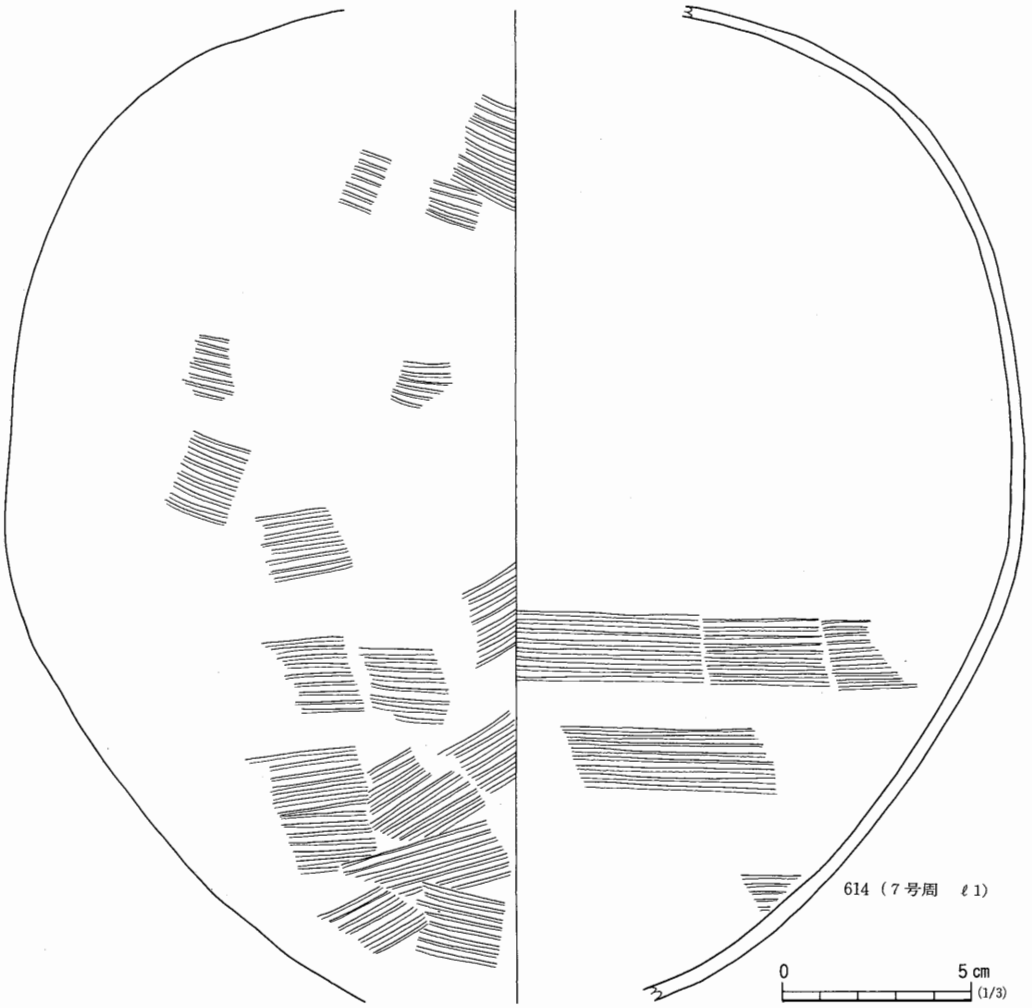
第202図　７号周溝状遺構出土遺物（２）



第203図　7号周溝状遺構出土遺物（3）



613（７号周　ℓ１）



第204図　７号周溝状遺構出土遺物（４）

ミガキ及びユビナデが施されている。604・606は有段口縁のもの，603・605・606・608・610は単純口縁のものである。609の外面はヘラケズリ・ハケメの順に施し，更に体部上面にはナデを下面にはヘラミガキを加えている。内面は上面をヘラナデ，下面はハケメとナデを施している。遺物集中地区①内からは土器の他に粘土塊が若干量採集された。粘土塊の大半は後世のピットによって削り取られており残存量は僅かであった。第200図①の遺物の中からは胴の最大径54cm，残存高50cmの大型土師器壺(614)が横に潰れた状態で出土している。体部表面はハケメを施した後，丁寧にナデも加えられている。613は土師器壺である。体部はヨコハケを施した後，丁寧なユビナデを行っている。内面は横ハケの痕跡が明瞭に認められる。体部上位には鳥の羽状の線刻が認められ，おそらく絵の一部であると考えられる。また，この遺物集中区には，土器類の他に数点の拳大の河原石も確認されている。

まとめ

本遺構は，11・13号周溝状遺構を切って造られ，本遺跡中最大規模の方形周溝墓と考えられる。遺物の量も他の周溝状遺構と比較しても群を抜くもので，総点数約2,800点にのぼっている。遺物の出土は，特に遺構南東端部分から極めて多量に出土している。その部分での遺物の内容は甕類・高杯・小型丸底壺・器台・台付壺などで，同集中部からは，本遺構中で最大規模の甕が出土している。こうした遺物の出土の仕方は明らかに意識的に投棄あるいは供献されたものと考えられ，同遺構中でも他の地点とはやや異なった意味をもつものと考えられる。

本遺構の時期は，出土した遺物と，その切り合い関係から古墳時代前期と考えられる。

(小野田)

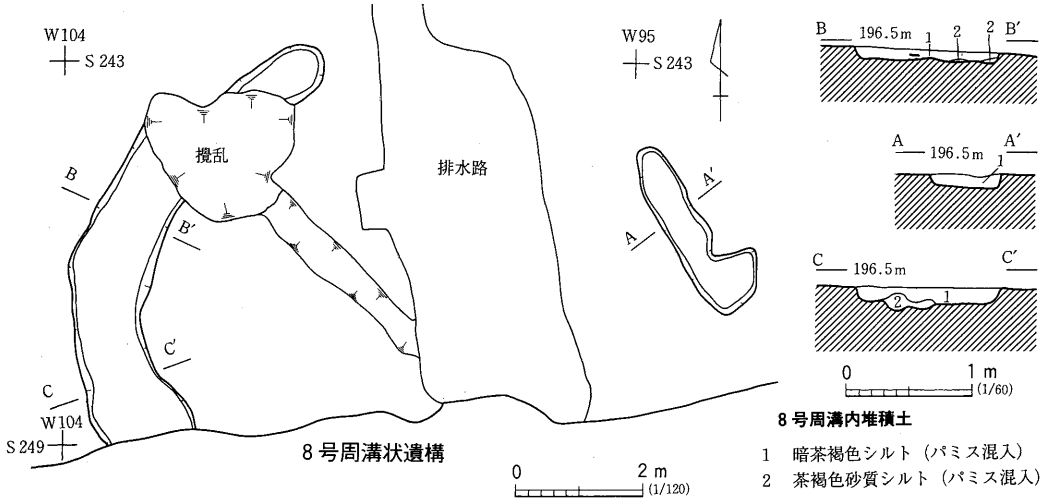
8号周溝状遺構

遺　　構　(第205図)

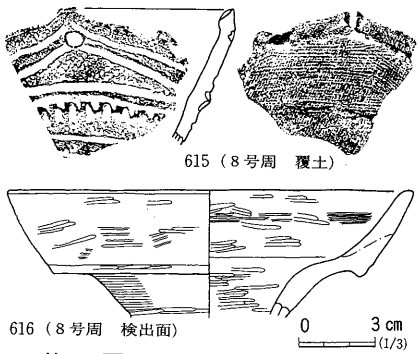
8号周溝状遺構は，Ⅴ区南西端E・F－21グリッドにおいて検出された。LⅡ黒色シルト層下面で確認された。遺構の北西部分は電柱により深く攪乱を受け，中央部分を農業用排水が南北に走っている。遺構の規模は，径10mの円形で，第205図に見られるように北東部が切れる形態である。溝幅は，30～70cmで，東側が狭く，西側が広い。遺構検出面からの深さは10～20cmで底面は平坦である。周溝内の堆積土は暗茶褐色シルト・茶褐色砂質シルトで，ともにパミスが混入している。粘性はややあるものの弱く，堆積土のしまりはあまり良好ではない。

遺　　物　(第206図，図版83)

本遺構の溝中出土の遺物は，弥生土器片20点，土師器片14点，不明10点，剥片1点である。いずれも小片であり，図化したものは弥生土器・土師器である。出土層位は，いずれも覆土中からで，底面から検出されたものはなかった。615は壺の口縁部で口縁部文様帯に沈線による連弧文が，



第205図　８号周溝状遺構



第206図　８号周溝状遺構出土遺物

その下には交互刺突文が施されている。また，口縁内面は面取りされ，波状口縁頂部内面は突出しており，そこにキザミが加えられている。616は複合口縁の壺で，内外面にはヘラミガキが加えられている。その他，出土した小片の遺物の中には，外面をハケメによって調整しているもの，沈線によって渦文を施しているものも含まれている。

まとめ

出土した遺物は極めて少ないが，本遺構の時期は古墳時代前期と考えられよう。　（小野田）

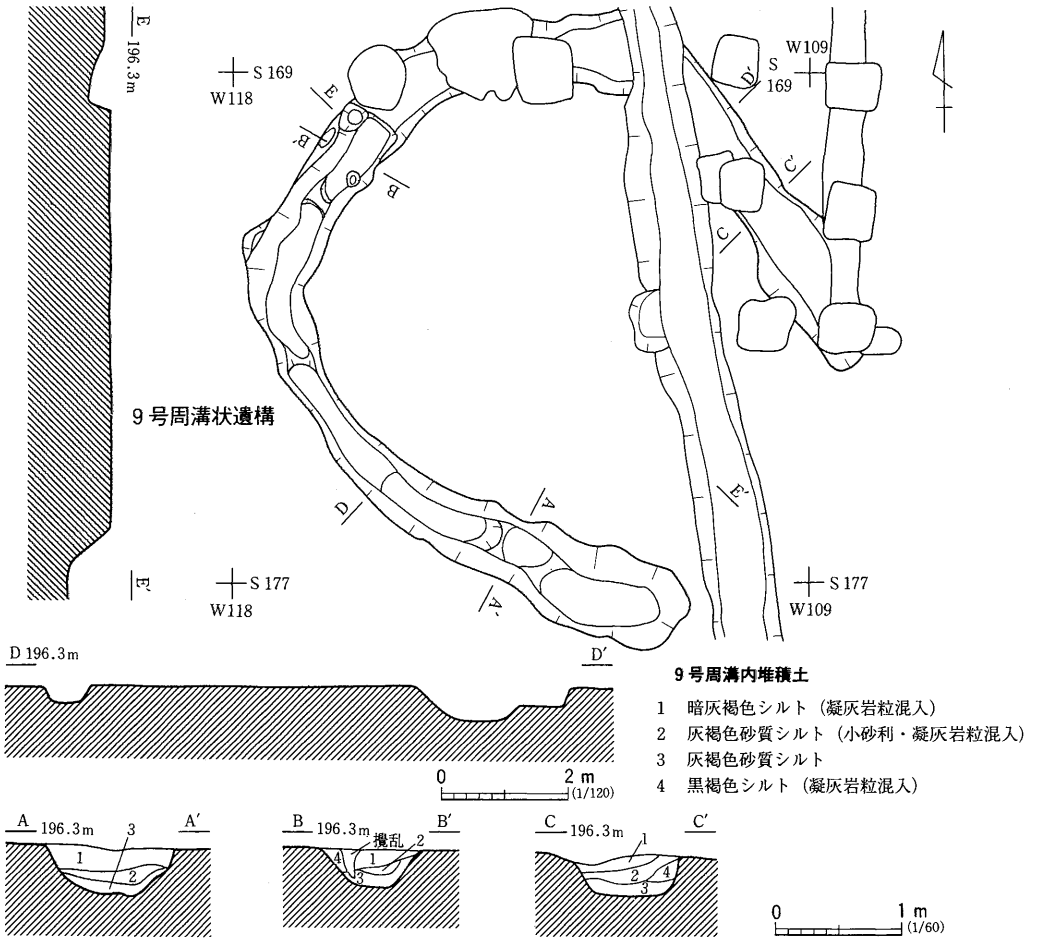
９号周溝状遺構

遺　　構　（第207図）

９号周溝状遺構は，Ⅴ区中央部西側のW108～118・Ｓ168～178の平安時代の遺構群が密集した部分の南にかかって検出された。

遺構検出面は少量のパミスを含んだＬⅢ暗黄褐色砂質シルト上面のやや汚れた面である。一部にはこの上に薄くＬⅡ黒色軟質シルトが見られたが，それを取り除いた段階で遺構は確認できた。

この周溝状遺構北側と東半部では241号土坑・21号建物跡および用水路に切られている。また，21号建物跡は241号土坑を切り，21号建物跡を用水路が切っているので，９号周溝状遺構→241号土坑→21号建物跡→用水路の順となる。



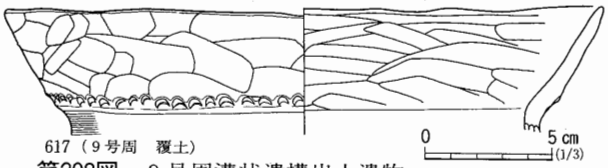
第207図　9号周溝状遺構

平面プランはやや丸みを帯びた「コ」の字形で，南東面が開いている。開いた部分の両側の溝の端部は壁が40°～50°で立ち上がり，深さも20～35cmを測るので，自然に埋没していたと考えられる。全体の大きさは溝の南東端から北西縁までが9.5m，南西縁から北東縁までが8.4mを測り，方位はほぼN－45°－Wを指す。溝の幅が最も狭いのは南西辺の北コーナー近くで50cm，最も広いのは東・南両端部で最大140cmを測る。溝の南西・北西部の底面を観察すると，部分ごとに掘って繋いでいった痕跡が見られ，最も深い部分で45cm，浅い部分で20cmを測る。

堆積土はA－A'の断面からして，ℓ1とℓ2の間には少々の時間の経過があったと思われるが，基本的には自然堆積と考えられる。

遺　物　（第208図，図版60）

溝の南西部分のセクションA－A'付近の底面および北西部分の底面から，弥生式土器の口縁



第208図　９号周溝状遺構出土遺物

部破片が出土したが，７点の破片が接合できたことから，１個の土器を破砕してばらまいた可能性がある。

この弥生式土器はやや内湾気味に斜めに広がる複合口縁を有する甕か壺の口縁部である。口縁は内外面ともケズリにより薄く仕上げられており，若干残る頸部外面にはヨコナデが見られる。口縁下端の稜上には半截竹管を浅く刺してこじったような連続爪形文がつけられている。

まとめ

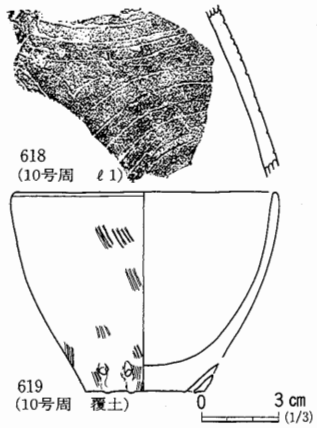
この遺構は弥生後期の方形周溝墓で，Ｖ区中央部西側の遺構集中部で最も古い遺構であり，周溝の内側に盛り土・主体部の痕跡は認められなかった。この部分では，平安時代に大規模な建物造営が行われており，その段階でそれらは破壊されてしまったと思われる。（木本）

10号周溝状遺構

遺　　構（第210図）

10号周溝状遺構は，Ｖ区南端部からＶ区南側のＩ・Ｇ－21グリッドで検出された。確認面はＬⅢ暗黄褐色砂質シルト上面である。遺構の北側には４号周溝状遺構・11号住居跡が存在し，西端は攪乱によって切られ，10号特殊遺構に隣接する。遺構東から南にかけては風倒木痕と70号土坑によって切られている。

遺構の規模は，西側部分が河川跡によって消失しているので，全体像は不明であるが，径8.5ｍの円形になると推定される。溝幅は50～120㎝，遺構検出面からの深さは15～20㎝で，底面は比較的平坦である。71号土坑も本遺構の一部とも考えられるが，遺物の出土がないこと，遺構の形状が弧の一部として捉えるには直線的過ぎることから考えて，とりあえず別遺構としておきたい。

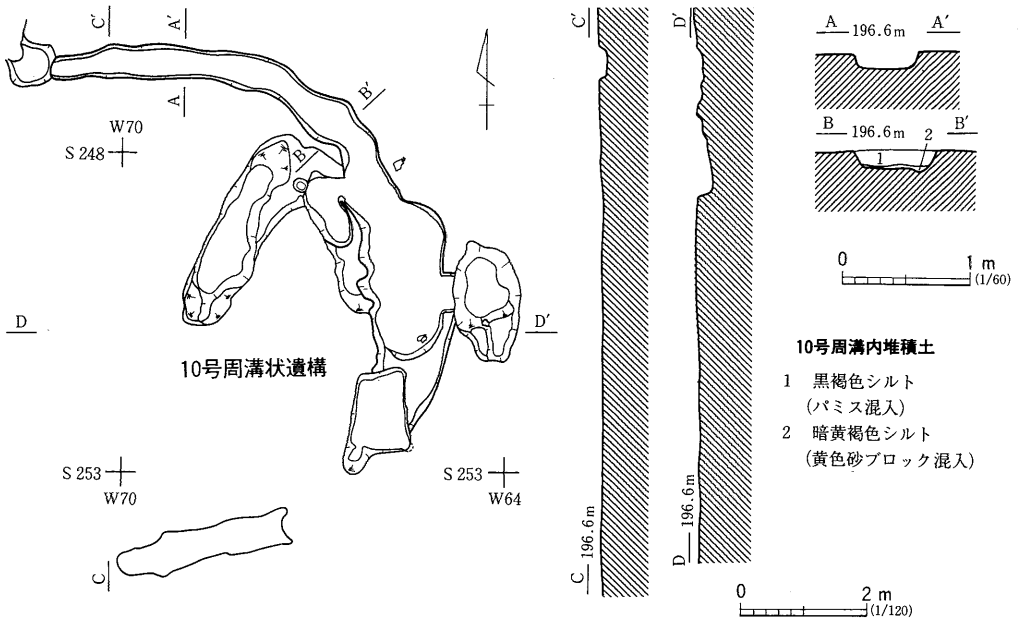


第209図　10号周溝状遺構出土遺物

溝中の堆積土は，黒褐色シルト・暗黄褐色シルトの２層である。

遺　　物（第209図，図版65・77）

周溝中より２点の遺物が出土している。いずれもℓ１からのもので，618は体部上端部に沈線によって渦文が施文されたもので，弥生時代中期のものと考えられる。619は小型の鉢で，底部から外反気味に立ち上がり体部はやや内湾しながら口縁に至る。外面はハケメ整形の後ナデで仕上げられている。外面の体部下端から底部に向かって二つの孔が穿たれている。孔の間隔は刺し込み口で13㎜，



第210図　10号周溝状遺構

底面のそれは８㎜で，土器内面までは通っていない。内面の器面は荒れているが，僅かにナデの痕跡が認められる。

まとめ

本遺構の出土遺物は極めて少なく，時期を決定するのは困難であるが，周囲の遺構の配置及び僅かに出土した遺物から考えて古墳時代前期であると考えられる。　（小野田）

11号周溝状遺構

遺　　構　（第211図）

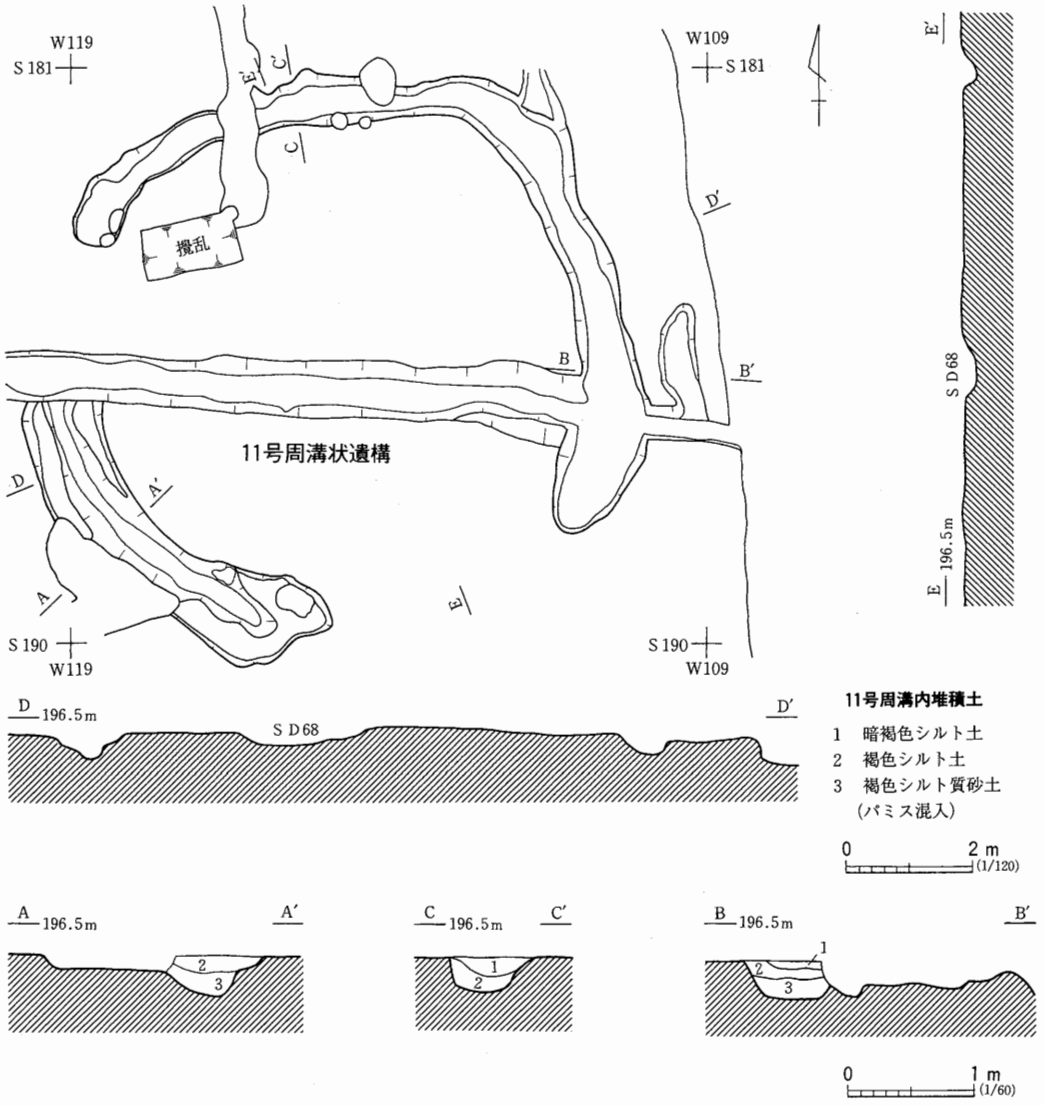
11号周溝状遺構は，Ⅴ区西端部Ｅ－15グリッドにおいて検出された。遺構確認面は，ＬⅡ黒褐色シルト下層である。遺構の東側部分は７号周溝状遺構によって切られ，西側部分は12号周溝状遺構を切っている。また中央を68号溝跡が東西に走っている。

遺構の規模は，東西9.6ｍ，南北約９ｍの隅丸方形で，第211図に見られるように西側と南東側が切れる形態である。南北部分を通る線を軸とすればＮ－22°－Ｗとなる。溝幅は60～120㎝で平面形に凹凸は少ない。断面は部分的に船底形となるが，おおむね鍋底形で凹凸は少ない。

堆積土は暗灰褐色シルト・黒褐色シルト・暗灰褐色シルトでいずれの層中にもパミスを混入する。粘性は弱く，堆積土のしまりは，あまり良好ではない。

遺　　物　（第212図，図版57・83・84）

本遺構の溝内からの遺物は縄文の施されるもの14点，高杯３点，高杯の脚部１点，ハケメ・ナ



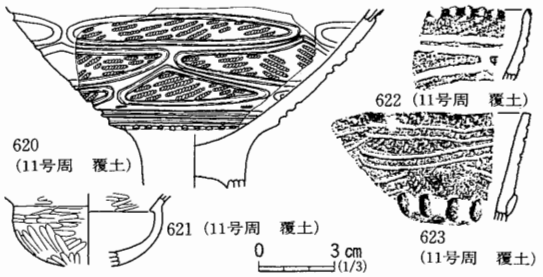
第211図　11号周溝状遺構

デなどの調整を行ったもの58点が出土している。またその他に粘土塊11kgが遺構床面より出土している。図示した遺物のうち，622・623は甕口縁部である。縄文を転がした後に，623は細い線で連弧文を，622は太い線によって区画している。620は高杯である。杯部下端に２本の横位の沈線を廻らし屈曲部に刺突を施している。杯部は太い沈線によって区画を行っている。脚部は丁寧なヘラミガキが加えられている。内外面とも赤色塗彩が施されている。621は高杯の杯部である。口唇部は欠損している。外面及び内面口縁部はミガキを，杯内部はナデを加えている。

まとめ

本遺構は，７・９・12号周溝状遺構とともに，周溝状遺構の集中する地域に造られたもので，

ひとつの墓域を形成するものと考えられる。その切り合い関係から，12号周溝状遺構より新しく，7号周溝状遺構より古いということが判明している。本遺構の時期は，上記のことと遺物から判断して古墳時代前期初頭と考えられる。（小野田）



第212図　11号周溝状遺構出土遺物

12号周溝状遺構

遺　　構（第213図）

12号周溝状遺構は，Ⅴ区西端部のC・D－15・16グリッドにおいて検出された。遺構確認面は，LⅡ黒褐色シルト層下部である。本遺構は第213図で見られるように北側から11号周溝状遺構によって切られている。また，11号特殊遺構，307・281・274・302号土坑，17号井戸跡，144号溝跡によっても切られているため，遺構の残存状況は良好とは言えない。

遺構の規模は，遺構の一部が調査区外にかかっており，その形状は判断しがたいが，12.5m程の隅丸方形状になると考えられる。溝幅は80～210cm，平面形はやや凹凸が多い。遺構検出面からの深さは10～50cm，溝の底面は北側が平坦，東から南にかけては凹凸が著しい。

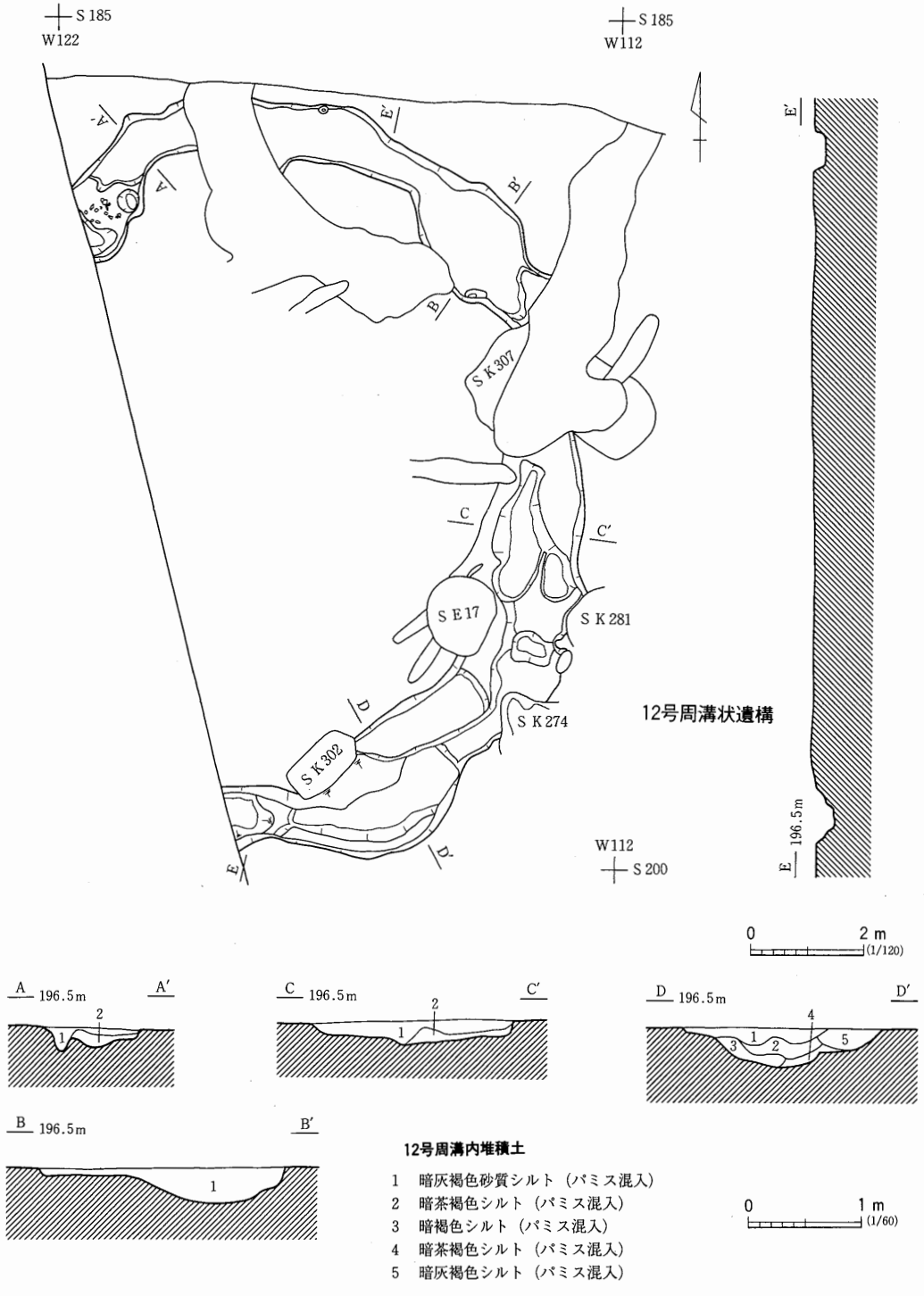
溝中の堆積土は暗灰褐色砂質シルト・暗灰茶褐色シルト・暗褐色シルト・暗茶褐色シルト・暗灰褐色シルトで，いずれの層中にもパミスが混入している。粘性は弱く，しまりはあまり良好ではない。

遺　　物（第214・215図，図版57・59・64・77・78・83・84）

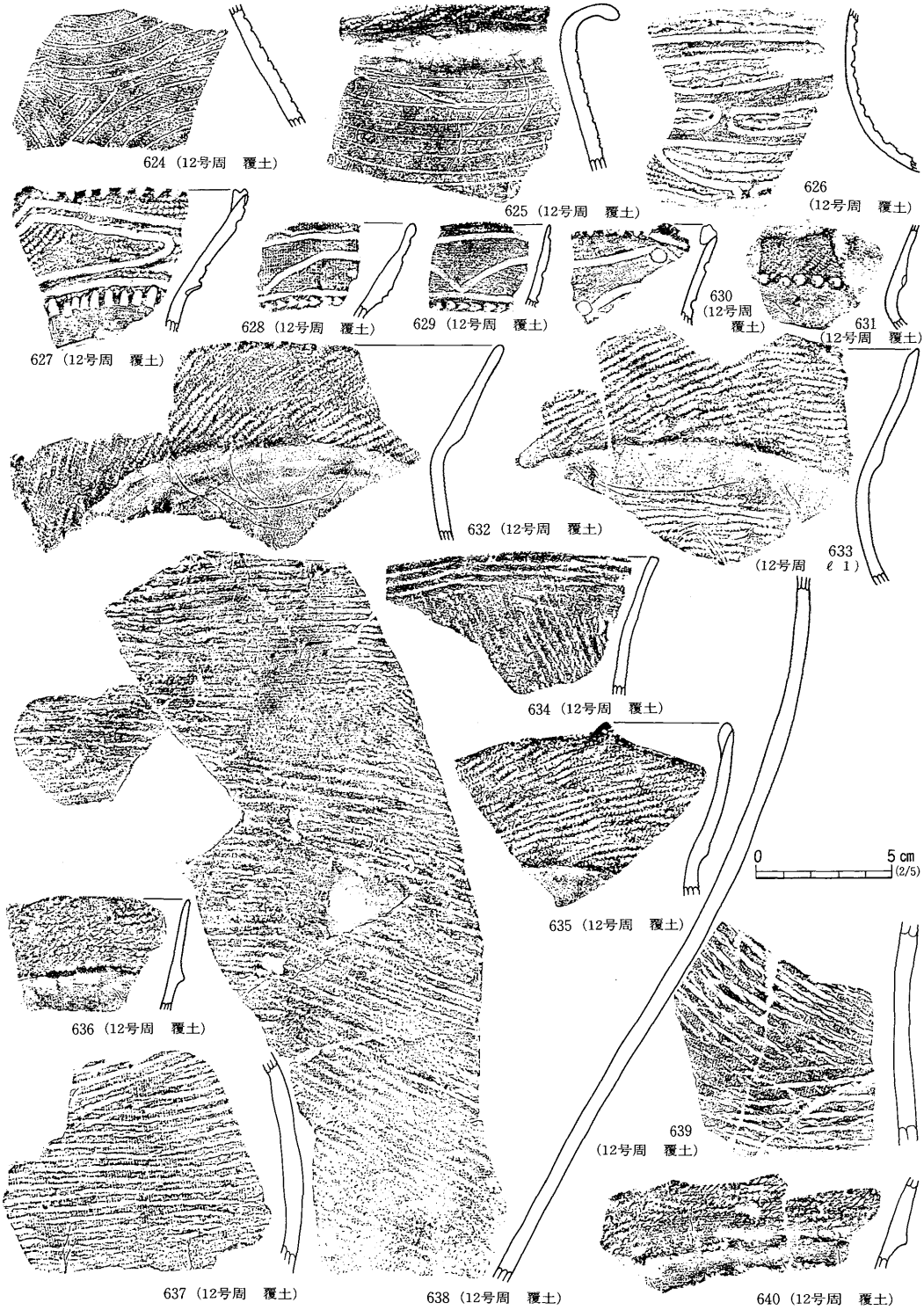
本遺構の溝内からの出土遺物は甕・壺・蓋・高杯である。縄文を施した弥生土器，ミガキ・ハケメ等を加えた土師器等である。多くは小片で図化できなかった。624は渦文の施された弥生土器・壺の体部で，625は平行沈線文が施された弥生土器・甕の体部上半から口縁部にかけてのものである。626・627・629・630は太い沈線によって区画される弥生土器・壺，631は地文と刺突文をもつ弥生土器・壺である。632・633・635・636は，有段口縁の弥生土器・壺で，口縁部は縄文帯となっており，635は口縁に突起を設けているものである。634・638は地文だけのものである。641は高杯で3単位のスリットが付けられ，平行沈線が3組施されている。642は鉢で頸部に交互刺突，体部下端に下向きの連弧文が施されている。643は高杯の一部であると考えられる。体部に綾杉状のハケメが施される。644は，縄文と沈線によって飾られた壺である。646・647は高杯の脚部でヘラミガキが施されている。645・648は甕の底部で，648は縄文を施しているものである。

まとめ

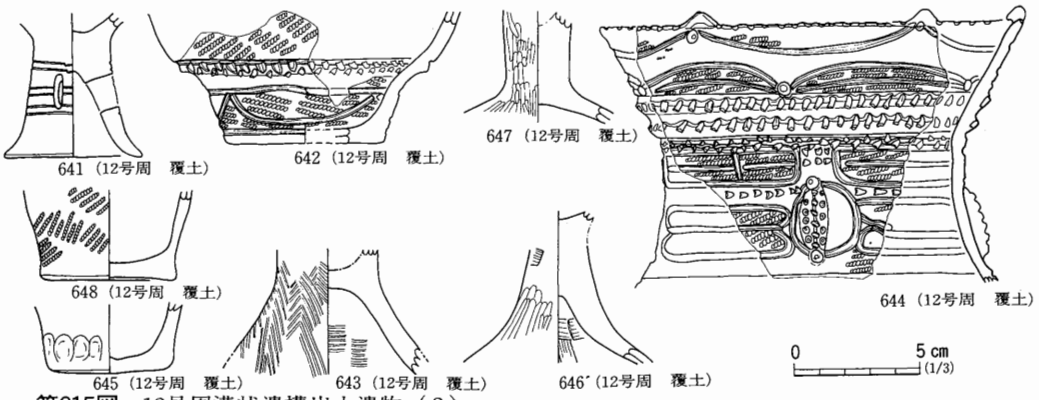
12号周溝状遺構は，その切り合い関係から，この地区で最も古い遺構の一つであると考えられ



第213図　12号周溝状遺構



第214図　12号周溝状遺構出土遺物（１）



第215図　12号周溝状遺構出土遺物（２）

る。遺構の遺存状況は，平安時代の土坑・井戸・溝によって切られ，良好とは言えない。出土した遺物と切り合い関係から本遺構の時期は弥生時代後期～古墳前期と考えられる。　（小野田）

13号周溝状遺構

遺　　構（第216図）

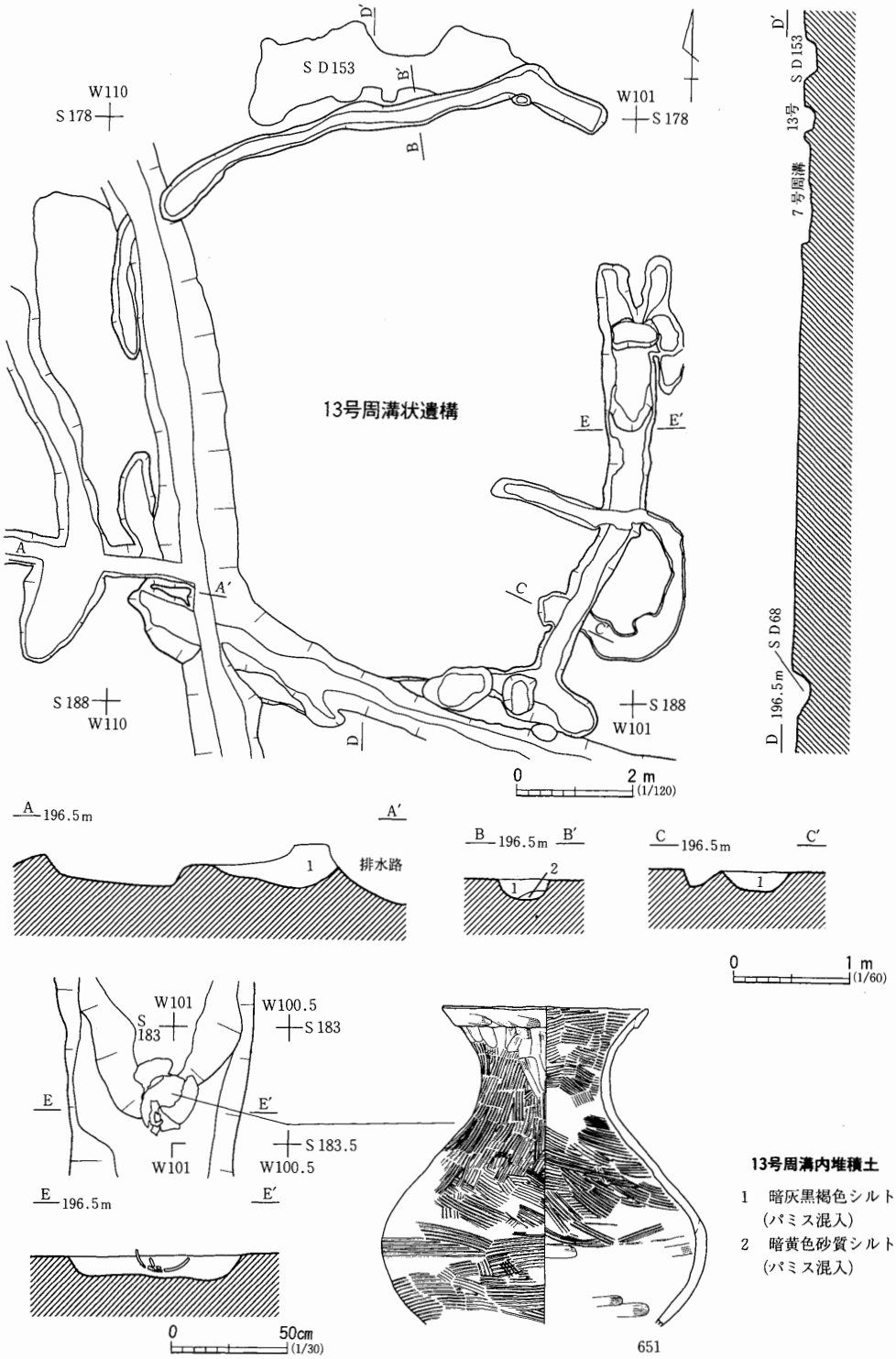
13号周溝状遺構は，Ｖ区Ｅ－15グリッドにおいて検出された。遺構検出面は，ＬⅢ暗黄褐色砂質シルト上面である。本遺構はその南側部分を68号溝跡・216号土坑・排水路などに切られており，その形をとどめていない。東側は一部を木根痕に切られている。北側は７号周溝状遺構北溝と153号溝跡にはさまれ，西側は７号周溝状遺構の西溝に切られている。

遺構の規模は東西9.3ｍ，南北11ｍの方形で，現況では北東コーナーと西側が切れているが，西側は７号周溝状遺構に切られているため，溝の高低差によって浅い部分が失われた可能性がある。溝幅は30～90㎝，溝の底面は比較的凹凸が少ない。遺構検出面からの深さは，７号周溝状遺構に切られている地区を入れなければ10～40㎝である。溝の底面は平坦である。

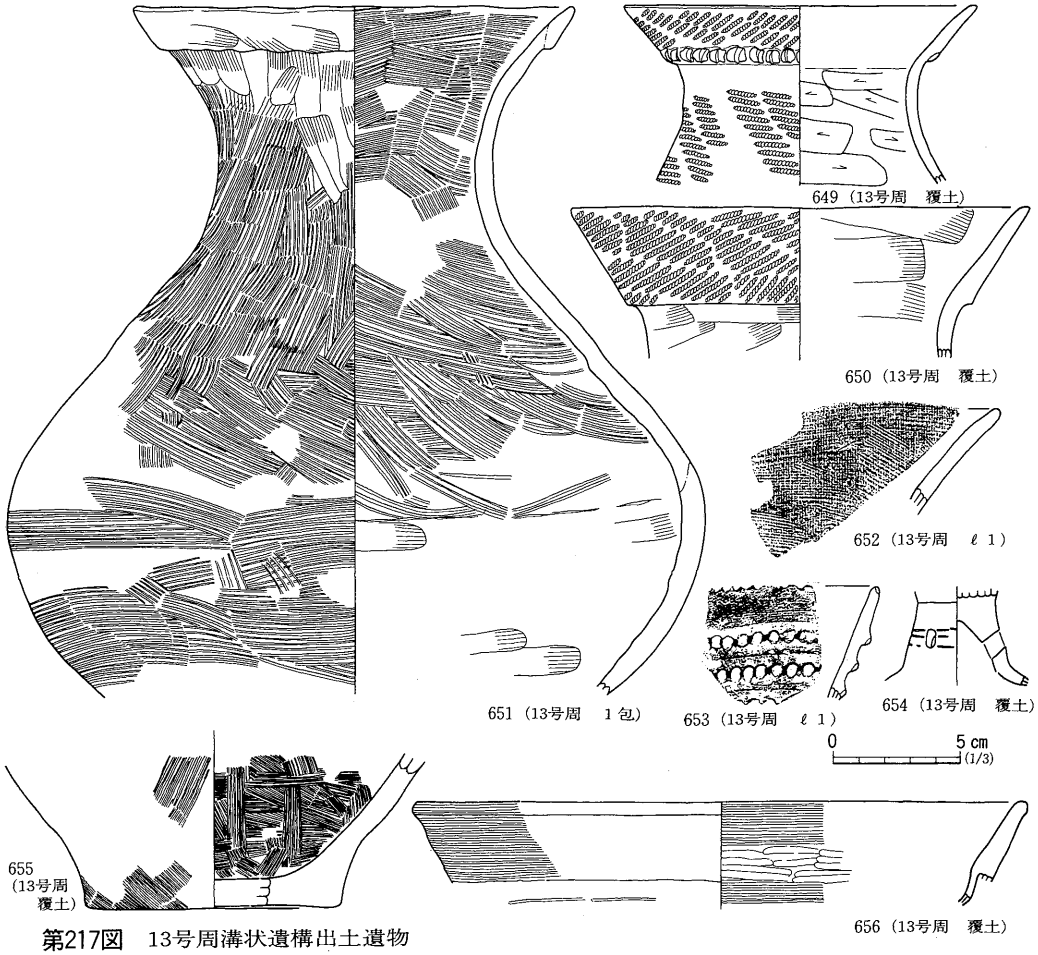
溝中の堆積土は，暗灰黒褐色シルト・暗黄色砂質シルトでともにパミスが混入する。堆積土の粘性は弱く，しまりも良好ではない。

遺　　物（第217図，図版52・59・62）

本遺構における遺物は，東側の溝と北側の溝から多く出土している。弥生土器の壺・高杯と器形不明の土器片23点，土師器片63点である。651は東溝の溝内の斜面部から出土したものである。図にあるように口縁部をやや下向きにして，床よりやや浮いた状態で検出された。底部から体部下半は削平によって紛失している。器形は口縁部が粘土帯を重ねた折返口縁で，体部は体部下半に最大径をもつ，やや下ぶくれ状態である。内外面とも入念なハケメが施され，外部の口縁から頸部にかけてと内面の下半はヘラナデが施されている。649は口縁部には横位のＬＲ，体部には縦位のＬＲ縄文が施されている。655は底部から体部にかけてのもので，内外面ともハケメが施



第216図　13号周溝状遺構



第217図　13号周溝状遺構出土遺物

される。654は器台で3単位のスリットと3本の横位の平行沈線が施されたものである。

まとめ

13号周溝状遺構は，7号周溝状遺構に内包されるような形で存在し，西側が切られている。遺構の南側は溝によって切られ，その全容は不明だが，遺存部の形状から方形周溝墓であると考えられる。本遺構の時期は，切り合い関係及び出土遺物から弥生時代後期終末と考えられる。

（小野田）

第7節　溝　　跡

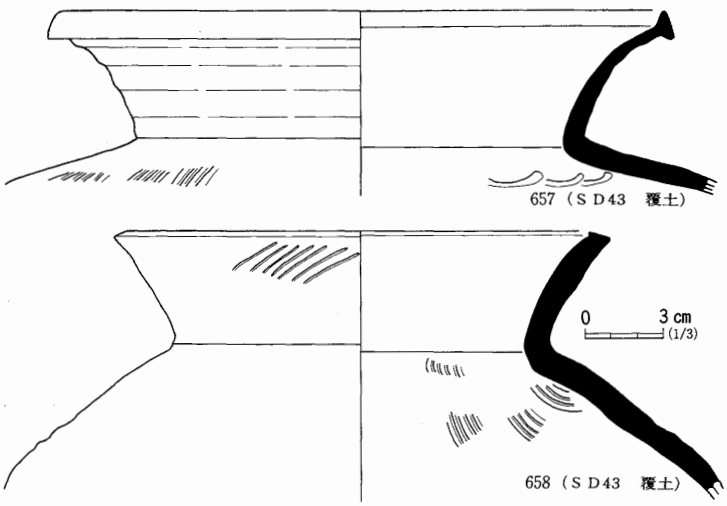
43号溝跡　ＳＤ43　（第218図）

43号溝跡は，ＬⅢ上面で，Ⅴ区北部で検出された。Ｂ－９グリッドから，北東方向にほぼ直進し，Ｈ－３グリッドに至って検出されたものである。両端部とも調査区外にさらに伸びるものである。43号溝跡は西部の排水溝・13号建物跡・70号溝跡・12号建物跡・46号溝跡・152号土坑・61号溝跡・旧河川跡に切られる。そして295号土坑・120号溝跡・15号建物跡・123号溝跡を切っている。

断面は北部では，やや開いたＵ字形を呈する。上端の幅は65㎝，深さは25㎝程度，全長は83.5ｍを測る。堆積土は大部分がℓ１のパミスを含む暗褐色シルトである。

出土遺物としては，堆積土中より土師器・須恵器が出土している。図示資料では，658は須恵器の甕で体部外面にタタキメが残っている。657は須恵器の大甕である。

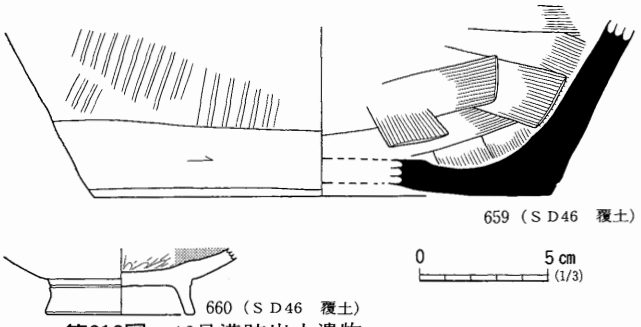
本溝跡の機能した年代は，堆積土中より出土した遺物から，平安時代に機能していたものと考えられる。　（香内）



第218図　43号溝跡出土遺物

46号溝跡　ＳＤ46　（第219図）

46号溝跡は，ＬⅢ上面で，Ⅴ区中央部で検出された。Ｅ－10グリッドから，東方にのびＧ－10グリッドにおいて，北に屈曲し，70号溝跡の外側をほぼ平行に南北に走り，Ｆ－５グリッド付近で緩やかに西北西に向きをかえ，さらにＤ－５グリッドで北に屈曲し，Ｄ－４グリッドにまで達する。すべての遺構を調査区内で検出できたものである。46号溝跡は70号溝跡に切られる以外は関連するすべての遺構を切っている。その遺構は，87号溝跡・48号溝跡・101号溝跡・36号溝跡・106号溝跡・152号土坑・155号土坑・60号溝跡・54号溝跡である。なおＥ－10グリッドの端部の



第219図　46号溝跡出土遺物

西側からさらに延長するように71号溝跡が伸びている。

断面は南部では逆台形状，北部ではやや開いたＵ字形を呈する。上端の幅は南部では100cm，北部では約60cmである。深さは25cm程度である。全長は102ｍを測る。底面の標高は南側が高く北部にいたるにつれ，低くなる。堆積土は全面にℓ１のパミスを含む暗褐色シルト質土，部分的に粘質土が下部に堆積している。

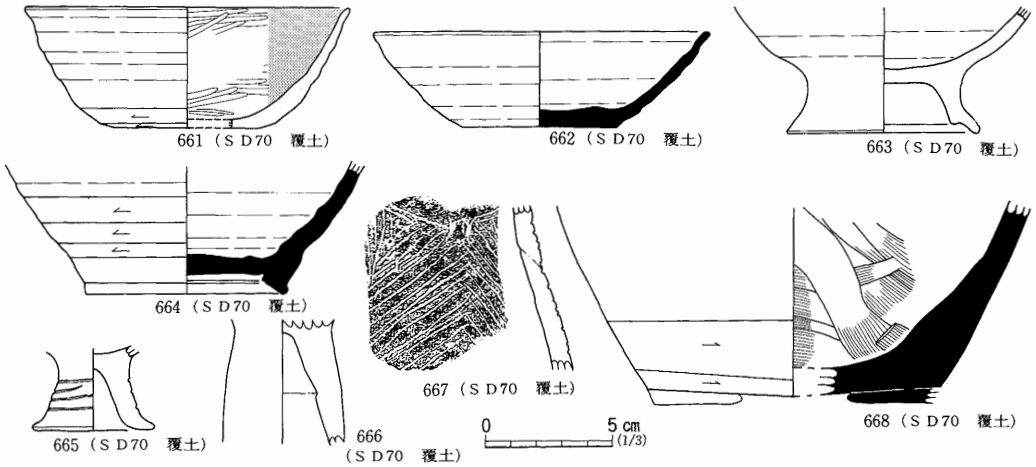
堆積土中より，土師器・須恵器の小片が出土している。図示資料では660が土師器の高台杯でナデ後ヘラミガキ，内面は黒色処理ヘラミガキがされている。本溝跡は出土遺物より平安時代に機能していたものと考えられる。（香内）

70号溝跡　ＳＤ70　（第220図）

70号溝跡は，Ｖ区中央部を東西南北方向にＬ字状に走る，今回の調査で検出された中では最大の溝跡である。Ｖ区北側の南北に走る部分では，西側は更に調査区外に走っている。溝跡は，Ｖ区で調査された遺構の中では最も新しく，近世溝以外の切り合い関係にある全ての遺構を切っている。掘立柱建物跡では11・13・33・35号，土坑では239・251・252・197・223・253・242・292号，溝跡では120・123・43・107・80・99・87・46・166・168・165・161・92・79・125号，特殊遺構では７号がこの溝跡に切られている。また遺構検出面は，ＬⅢ上面となっている。

溝跡の規模は，中央の南北部分の長さが110ｍ，その北側の東西部分が48ｍである。溝跡の幅は，南北部分の北半から東西部分にかけてが広く，それは1.7～2.0ｍとなっている。中央部の南北部分では0.9～1.3ｍとなっている。検出面からの深さは，中央部Ｓ150付近が最も深く48cm，北側W110付近が最も浅く13cm，平均すると約32cmとなる。断面形は，箱形を呈し，底面は概して平坦である。底面のレベルは南から北に，また東から西に向かって低くなっている。

遺物は，堆積土中から土師器杯・高台杯・甕・須恵器杯・瓶類・大甕・弥生土器壺・高杯・甕・赤焼土器高台杯が出土している。溝内でまとまって出土した地点はなく，何れも堆積土中より小片が出土したに留まっている。図示資料では，661が土師器杯，662が須恵器杯，663が赤焼土器高台杯，664が須恵器瓶類，668が須恵器大甕，665が弥生土器高杯，666が土師器高杯，667が弥生土器壺である。遺物は，新しいものでも10世紀代のもので，11世紀以降の遺物は１点も出土していない。



第220図　70号溝跡出土遺物

本溝跡の埋まった年代は，出土遺物より10世紀前半頃と推定される。また，その性格は溝跡の内側にある建物跡からなる集落の外側を巡る区画溝であると考えられる。（藤谷）

71号溝跡　S D71

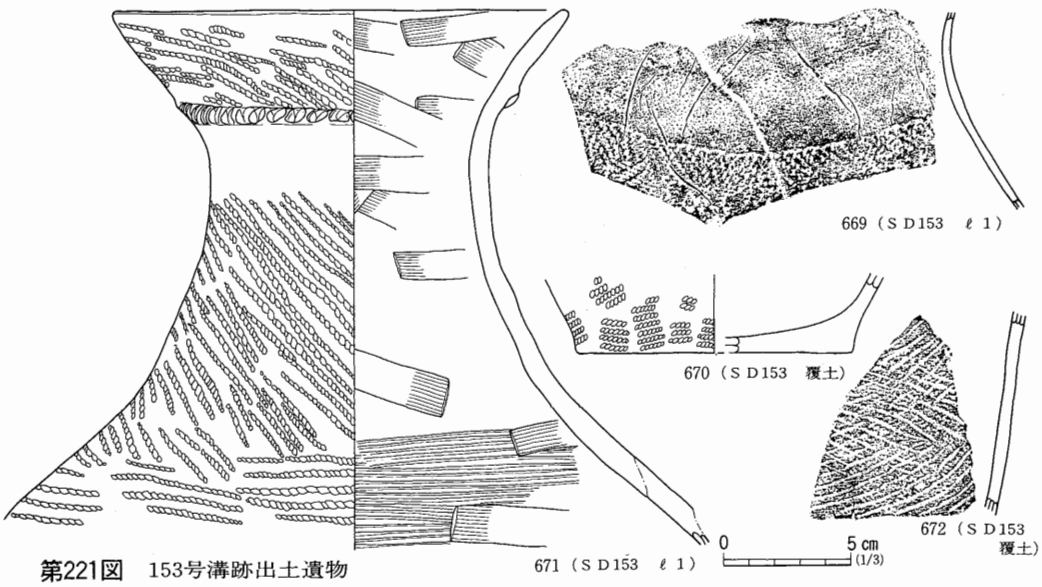
71号溝跡は，Ⅴ区中央部で検出された。検出面はⅬⅢ上面である。Ｅ－10グリッドから西方に伸び，Ｃ－10グリッドにおいて，北に屈曲し，さらにＣ－８グリッドにまで達する。平面的にはＬ字形を呈する。すべての遺構を調査区内で検出できたものである。71号溝跡は西部の排水溝に切られる以外は，関連するすべての遺構を切っている。84・83・82・137号溝跡を切っている。なおＥ－10グリッドの端部の東側から，さらに延長するように46号溝跡が伸びている。

断面は南部では逆台形状，北部ではやや開いたＵ字形を呈する。上端の幅は南部では130㎝，北部では約50㎝である。深さは16㎝程度である。全長は28.8ｍを測る。堆積土は大部分がℓ１のパミスを含む暗褐色シルト質土である。

堆積土中より，土師器・須恵器の小片が出土していることから平安時代に機能していたものと考えられる。（香内）

83号溝跡　S D83

83号溝跡は，ＬⅢ上面で，Ⅴ区中央部西端部で検出された。Ｃ－12グリッドから北方Ｃ－９グリッドの屈曲部を経て，東西方向にのび，さらにＥ－10グリッドの屈曲部から南のＥ－10グリッドにまで達する。平面的には南にひらいた「コ」の字形を呈する。すべての遺構を調査区内で検出できたものである。83号溝跡は排水溝，71・125号溝跡，13号井戸跡に切られ，131・137・82・124号溝跡を切っている。



第221図　153号溝跡出土遺物

断面はやや開いたＵ字形を呈する。上端の幅は70㎝，深さは13㎝程度である。全長は59.4ｍを測る。底面の標高は南側が高く，北部の東西に走る部分が最も低くなる。堆積土は全面にℓ１のパミスを含む暗褐色シルト質土，部分的に粘質土が下部に堆積している。

堆積土中より，土師器・須恵器の小片が出土している。平安時代に機能していたものと考えられる。（香内）

153号溝跡　ＳＤ153(第221図，図版60)

153号溝跡は，Ⅴ区Ｅ－14グリッドで検出された遺構で，ＬⅢ暗黄褐色砂質シルト上面で確認された。本遺構は，その東端部分を13号周溝状遺構の北溝に切られている。また西側は農業用排水路によって失われるが，その西側には伸びてはいない。

遺構の規模は60～150㎝の幅をもち，長さは７ｍ前後になると考えられる。堆積土は３層に分けられる。暗灰黒褐色シルト・暗灰黒色シルト・黒色シルトで，いずれの層中にもパミスが均一に混入する。

本遺構からの遺物は弥生土器甕・土師器甕片などで，図示したものの他に縄文を施した小破片43点，ハケメ・ナデなどを施した小片が16点出土している。中には有段口縁壺の小片も含まれている。671は甕の上半分である。第221図に見られるように，一部はほぼ正立したような状態で検出された。外面は，口縁と体部に撚糸文が施され，頸部上端がナデられている。口縁部下端は，爪形状の圧痕を加えている。内面はヘラナデが施されている。669は無文帯を設けたもの，670は遺構西端で検出されたもの，644は地文だけのものである。

本遺構は，7・13号の両周溝状遺構の北側に位置するものである。溝の位置からすれば，これらの遺構と密接な結びつきを持っていることは明白である。本遺構の時期は出土した遺物，及び13号周溝状遺構との切り合いから考えて弥生時代末～古墳時代前期と考えられる。（小野田）

167号溝跡

遺　構

167号溝跡はV区の中央部西側よりのF－13，E－12～14グリッドで検出された溝跡である。検出面はLⅢ層上面である。本遺構の南側の先端部は21号建物跡の南東隅柱穴を切り，そこから真北に向かって13.5m延び，そこでほぼ東に向きを変え，約11.5m進む。切り合い関係では21～23・25号建物跡の柱穴を切っている。また9号周溝状遺構・168号溝跡を切っている。溝の幅は50～90cm，深さは20～30cmである。堆積土は2層で，遺物は土師器・須恵器破片を堆積土中より数十点出土したが，図示しうるようなものはない。本遺構は切り合い関係をもつ建物跡よりは新しいといえる。（小野田）

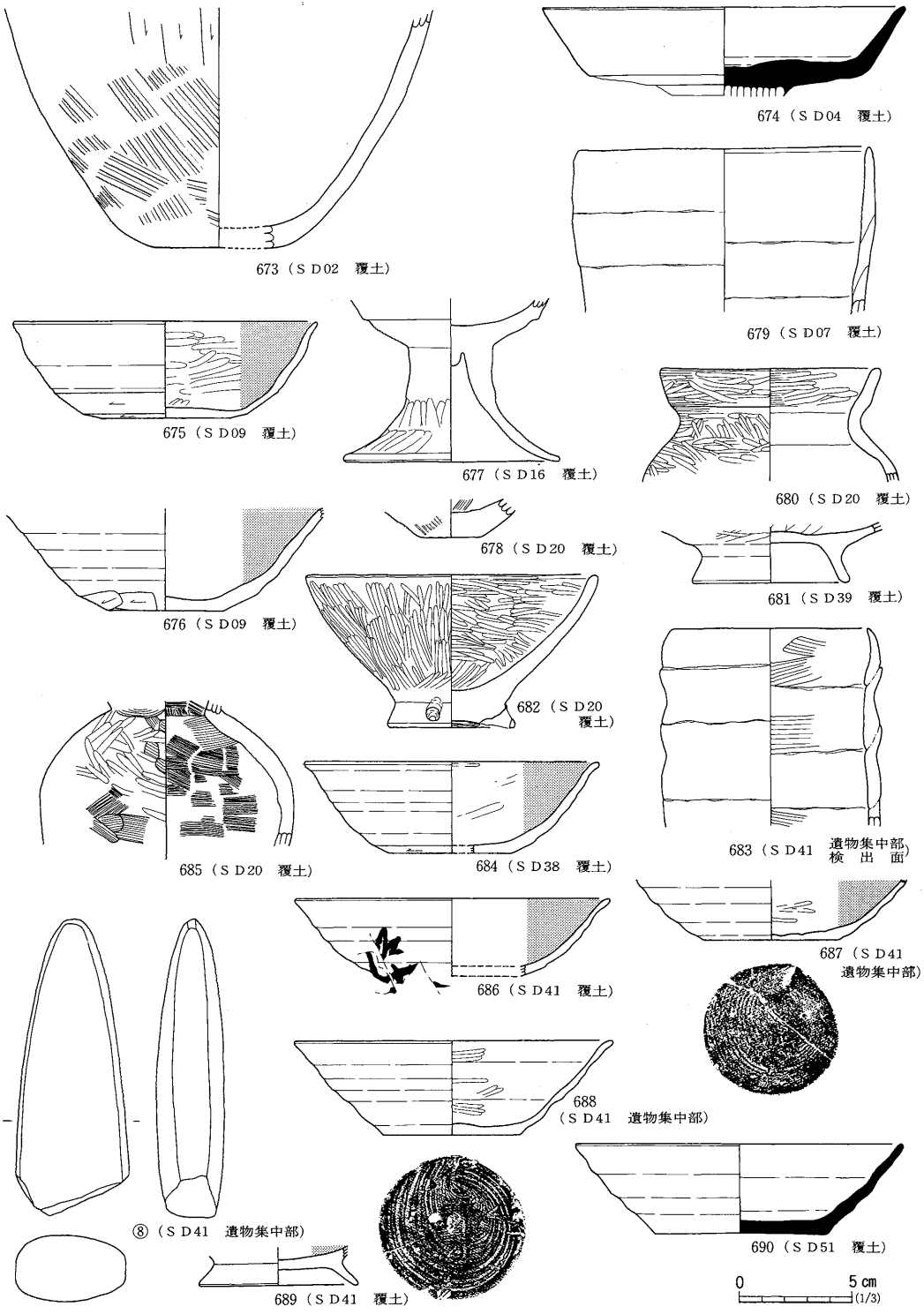
第39表　溝跡一覧表

溝跡番号	挿図番号	位置 区	位置 グリッド	規模(m) 長さ	規模(m) 幅	規模(m) 深さ	出土遺物	遺物挿図	時期	備考（重複関係） 旧→新
1		Ⅰ	X－7～Z－6	22.0	1.4	0.45	土師器・須恵器			
2		Ⅰ	X－6	5.5	0.4	0.1	土師器・須恵器	222		
3		Ⅰ	V－5～X－3	31.0	0.75	0.2	土師器			
4		Ⅰ	X－3	6.2	1.95	0.5		222		
5		Ⅱ	S・T－2	3.7	1.2	0.12	土師器・弥生土器			
6		Ⅱ	S・T－2	3.0	0.85	0.17				
7		Ⅱ	Q－2～R－1	17.2	0.6	0.13	土師器	222		
8		Ⅱ	R－2	7.4	0.8	0.13	土師器			SD08→SK14
9		Ⅲ	M－18～Q－18	38.0	0.6	0.19	土師器・須恵器	222		SD09→SD11
10		Ⅲ	J－12～M－20	94.5	0.85	0.25	弥生土器		弥生	SD13, SD30→SD10→SK53
11		Ⅲ	N－15～P－18	49.6	0.55	0.20				SD09, SD13, SK30→SD11
12		Ⅲ	M－13～N－17	41.8	0.65	0.15				SD12→SD13
13		Ⅲ	M・N－17	18.5	0.45	0.11				SD12→SD13→SD11, SD10
14		Ⅳ	K－30・31	7.4	0.75	0.3	土師器			SD14→SX01
15		Ⅴ	I－25	3.0	0.55	0.14	土師器			
16		Ⅲ	O・P－24	16.6	0.65	0.3		222		2号周→SD16
17		Ⅴ	I・J－25	6.0	0.5	0.14				
18		Ⅴ	J－25	2.9	0.5	0.26				
19		Ⅳ	M－31・32	11.2	0.25	0.17				
20		Ⅳ	L－31・32	6.5	0.6	0.32	弥生土器・土師器	222	古墳	
21		Ⅴ	J－23	3.2	0.35	0.14	土師器			
22		Ⅴ	K－22～24	38.0	0.5	0.16				SK113・114・177→SD22
23		Ⅴ	J・K－24・25	12.9	0.45	0.16				
24		Ⅴ	J・K－25	9.9	0.3	0.11				
25		Ⅴ	K－23	2.5	0.35	0.13				
26		Ⅴ	J－23・24	11.0	0.4	不明				カクラン溝
27		Ⅴ	J・K－25・26	10.0	0.45	0.6				
28		Ⅴ	J－24・25	7.4	0.45	不明				カクラン溝
29		Ⅲ	L－10・11	9.4	0.35	0.17				
30		Ⅲ	K－14	3.5	0.3	0.1				SD30→SD10
31		Ⅲ	M－9～O－11	37.1	0.7	0.24				SK48・49・50→SD35→SD31→SD34
32		Ⅲ	O－9	6.8	0.4	0.08				
33		Ⅲ	O－9・10	3.3	0.35	0.14				
34		Ⅲ	N・O－11	15.0	0.95	0.3	縄文土器・土師器・須恵器			SK52→SD34→SD31
35		Ⅲ	K－11～N－9	38.3	0.45	0.18	弥生土器			SD35→SB08, SD31, SB05
36		Ⅴ	F－6～G－7	20.1	0.75	0.29				SD37→SD36→SD46
37		Ⅴ	F－6・7	11.2	0.6	0.3	土師器			SD37→SD36
38		Ⅲ	K－10	8.0	0.8	0.2	土師器	222		
39		Ⅴ	E－4	6.0	0.5	0.09	土師器・須恵器	222		SD39→SD45
40		Ⅲ	N－12・13	13.4	0.4	0.08				
41		Ⅴ	E－4	1.2	0.25	0.07	石器	222		
42		Ⅴ	G－3・4	10.2	0.6	0.24				
43		Ⅴ	B－8～H－3	83.5	0.65	0.27	須恵器	218		本文参照
44		Ⅴ	C－3～D－4	12.8	0.45	0.13				
45		Ⅴ	D－4～E－5	19.0	0.45	0.13				SD39, SD49, SD69→SD45
46		Ⅴ	D－4～E－10	102		0.27	土師器・須恵器	219	平安	本文参照

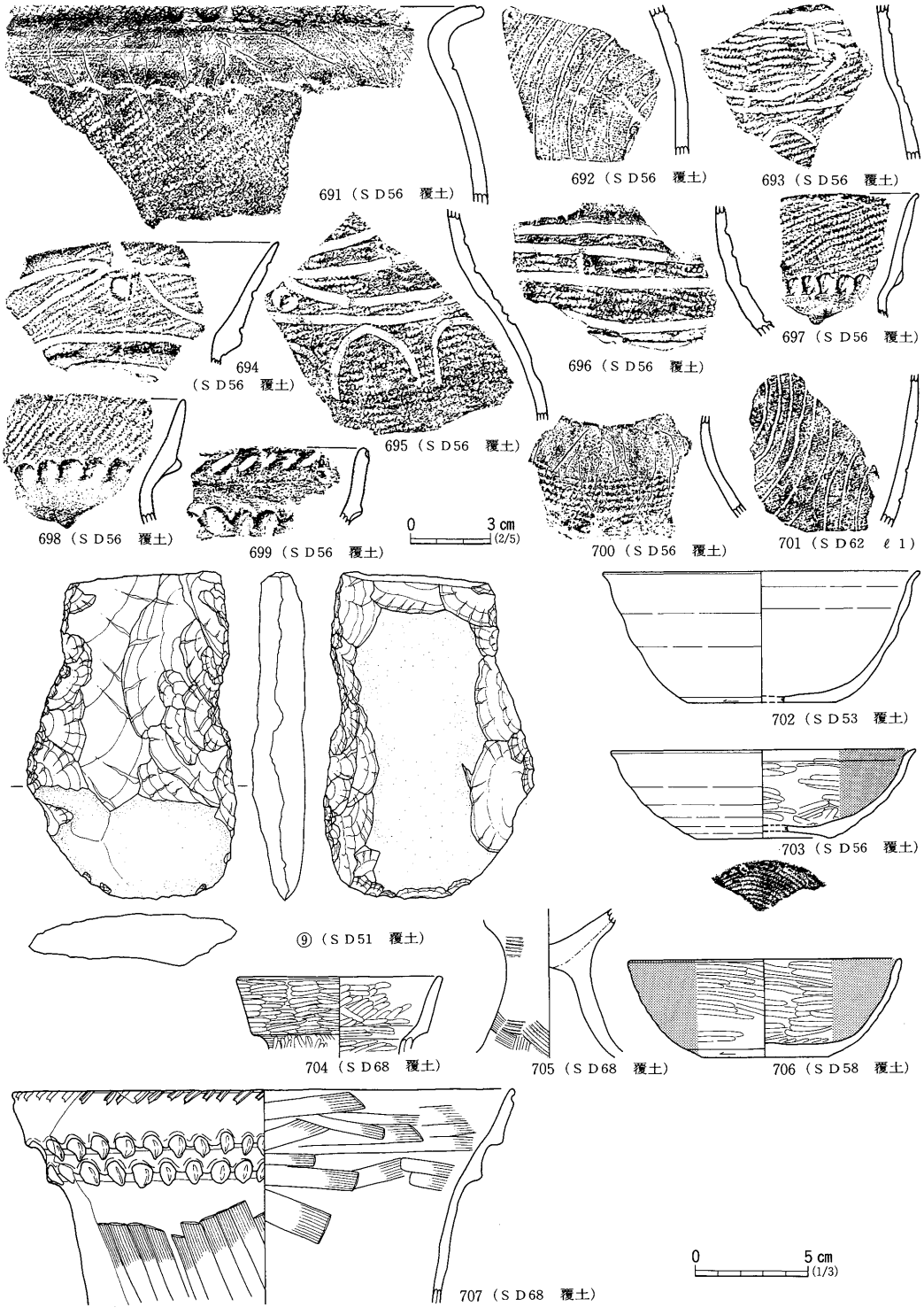
溝跡番号	挿図番号	位置 区	位置 グリッド	規模(m) 長さ	規模(m) 幅	規模(m) 深さ	出土遺物	遺物挿図	時期	備考（重複関係） 旧→新
47		V	C－8・9	8.3	0.2	0.08				
48		V	G－9～12	27.3	0.45	0.09				S D87→S D48→S D46, S B11
49		V	D・E－4	7.5	0.85	0.15				S D49→S D45
50		Ⅲ	K～M－12	21.7	0.85	0.1				S K32,108→S D50
51		Ⅲ	J－10～13	39.7	1.35	0.13	土師器・須恵器・石器	222 223		
52		Ⅲ	J－9	4.3	0.4	0.08				
53		Ⅲ	J－10～12	19.3	0.6	0.17	土師器・須恵器	223		S B08→S D53
54		V	D・E－5	10.4	0.5	0.19				S K151→S D54→S D46
55		V	G－19・20	13.5	1.45	不明				S K191,192→S D55→旧河跡
56		V	G－17～20	24.7	1.5	不明	土師器・弥生土器	223		S K203, S D73→S D56→旧河跡
57		V	H－18～21	39.4	0.5	0.08				S X10, 5号周溝 S D73→S D57
58		V	G－12～H－17	53.0	1.45	不明	土師器・須恵器	223		5号周溝, S D77→S D58→旧河跡
59		V	F－13～G－17	51.0	2.2	0.44	土師器・弥生土器	224		S B33, S D125,165→S D59→旧河跡
60		V	D－5	7.5	0.45	0.17				S D60→S D46
61		V	E－5～F－4	29.5	0.35	0.12	土師器・須恵器			S K155, S D43→S D61 →S K152
62		V	C－7	6.4	0.35	0.12	土師器	223		S D62→S D63
63		V	B・C－7	9.4	0.35	0.14				S D62→S D63→S D43
64		V	B－10～C－8	26.0	0.75	0.15	土師器・須恵器			S B14, S B16→S D64
65		V	E・F－17	11.0	1.20	0.20	土師器・弥生土器・須恵器			S D65→S D97
66		V	E・F－17	13.0	0.40	0.21	土師器・弥生土器・須恵器			S D66→S D97,118
67		V	G－16・17	8.6	0.55	不明	土師器		平安	S D67→旧河跡
68		V	C－15～F－16	27.0	1.0	0.27	土師器・弥生土器・須恵器	223 224		S K218, 7・11・13号周溝, S X11→S D68→S K216,用水路
69		V	D・E－4	7.7	0.65	0.06				S D69→S D45
70		V	A－6～F－17	158.0	1.8	0.48	弥生土器		平安	本文参照
71		V	C－8～F－10	28.8	1.3	0.16			平安	
72		V	D－4	3.8	0.95	0.23				
73		V	E－20～L－17	68.6	0.6	0.2	土師器	224		5号周溝→S D98→S D56・57→旧河跡
74		V	H～J－17	41.2	0.6	0.17	土師器・須恵器			S D76→S D74
75		V	G－18	5.0	0.5	0.18	弥生土器	220		
76		V	I－16・17	13.7	0.45	0.1	土師器			S D76→S D74,73
77		V	H－12～17	35.0	0.5	0.13				S D77→S D58
78		V	H・I－14・15	14.4	0.65	0.17				
79		V	E－16～G－17	14.4	0.35	0.1	弥生土器			S B32, S D79→S D70
80		V	E－9～F－8	14.6	0.85	0.39	土師器・須恵器			S E12→S D80→S K185,70
81		V	E・F－7	3.3	0.35	0.05	土師器・弥生土器			
82		V	D－9～11	16.7	0.45	0.11	土師器・弥生土器・須恵器	224		
83		V	B－12～E－11	59.4	0.7	0.13	土師器・須恵器		平安	S D82・124・131・137→S D83→S E13, S D71,用水路, S D125
84		V	E－10・11	11.7	0.25	0.1				S D84→S D71, S D125
85		V	D－9	3.0	0.45	0.07	土師器・須恵器			
86		V	G－5～7	24.2	1.0	0.17	弥生土器	224		S D86→旧河跡
87		V	F・G－9	7.2	0.4	0.18				S D87→S D46, S D48, S D70
88		V	F・G－9	6.7	0.3	0.12	土師器・須恵器			
89		V	F－8・9	4.0	0.3	0.08				
90		V	I－20	2.9	0.6	不明				
91		V	I－20	5.5	0.4	0.19	土師器・弥生土器・須恵器	224	平安	4号周溝→S D91→S X09, S I11
92		V	E～G－17	20.4	0.75	0.22	土師器・弥生土器			S D92→S D70,97,118, S K301, 用水路

溝跡番号	挿図番号	位置 区	位置 グリッド	規模(m) 長さ	規模(m) 幅	規模(m) 深さ	出土遺物	遺物挿図	時期	備考(重複関係) 旧→新
93		V	F－16	5.3	0.15	0.04				
94		V	F－16	5.8	0.15	0.09	土師器			
95		V	H－20	2.0	0.8	0.2	土師器・弥生土器			
96		V	F－17	5.0	0.9	0.19	弥生土器			
97		V	E－17	7.0	1.35	0.17	土師器・弥生土器	224		SD97→SD92,65,66
98		V	E・F－20	7.4	0.95	0.15	土師器・弥生土器			SD98→SD73
99		V	F・G－8・9	11.8	0.65	0.26				SD101→SD99→SD70
100		V	E－9	2.7	0.35	0.17				SX04→SD100
101		V	F・G－8	4.5	0.65	0.25	土師器			SD101→SD46,99
102		V	G－9・10	15.0	0.5	0.15				SD102→SD155
103		V	G－9・10	7.2	0.35	0.1				
104		V	G－9・10	16.2	0.35	0.07	須恵器	224		
105		V	G－5・6	6.2	0.3	0.15	土師器・須恵器			SD105→SD106
106		V	G－6	4.7	0.95	0.2	土師器・須恵器			SD105→SD106→SD46
107		V	D－6～E－7	6.2	1.15	0.15	土師器・須恵器			SD107→SD70, SB13
108		V	H－13	5.0	0.35	0.07	須恵器			SD108→SD109
109		V	H－13	17.6	0.8	0.2	土師器・須恵器	224		SD77,108→SD109
110		V	F－15	1.4	0.65	不明				SD110→SD59
111		V	F－15	1.0	0.45	不明				SD45→SD59
112		V	F－8	1.5	0.2	0.09	弥生土器	224		
113		V	D－14・15	10.5	0.55	0.17	土師器・須恵器・縄文土器			SD113→9号周溝
114		V	D－15	1.3	0.35	0.16				
115		V	D－16	8.3	0.35	0.22	土師器・弥生土器			SD115→SK274, SK281
116		V	E－16～D－17	11.5	0.3	0.15	土師器・弥生土器・須恵器			SD117, 7号周溝→SD116,118, SK273
117		V	E－16～D－17	11.0	0.4	0.13	土師器・須恵器			SD117→SD116,118, SK273,274
118		V	D・E－17	14.4	1.05	0.34	土師器・須恵器・弥生土器	224		SK301, SE05, SD116,117, 92→SD118
119		V	D－16	1.3	1.0	0.41	土師器・弥生土器			
120		V	B－6～C－8	20.8	0.55	0.13	土師器・須恵器			SK252,ウネ状遺構→SD120→SD43
121		V	B－7	5.0	0.55	0.11	土師器	224		
122		V	B－7	2.7	0.25	0.09	土師器			
123		V	C・D－6・7	17.5	0.35	0.17	土師器・須恵器	224		SD123→SB14, SD43,70
124		V	C－9	4.6	0.55	0.18				
125		V	D－10～F－12	38.0	0.45	0.14				SB27・28・29, SD59・70・83・126・166・168→SD125
126		V	D－10	2.3	0.35	0.11				SD126→SD125
127		V	D・E－11	5.0	0.4	0.13				SD127→SE09
128		V	I・J－12	17.5	0.75	0.12	土師器・須恵器			
129		V	I－12	5.0	1.05	0.13	土師器			
130		V	B－10～12	12.3	0.6	0.23				SD131→SD130
131		V	B－11～C－10	16.6	0.75	0.33	土師器			SD132・133・135・136→SD131→SD83・130・SK259
132		V	B－9・10	6.2	0.45	0.18				SD132→SD131
133		V	B－9・10	6.6	0.3	0.15				SD133→SD131
134		V	C－10	0.6	0.3	0.14				
135		V	C－10	3.7	0.35	0.17	土師器・須恵器			SD135→SD131
136		V	C－10	5.9	0.3	0.12	土師器・須恵器			SD136→SD131
137		V	C－9・10	10.4	0.8	0.17	土師器・須恵器			
138		V	C－10・11	12.9	0.55	0.28	土師器・須恵器			SD138→SK293, SK268,269
139		V	H－4	4.8	0.45	0.17				

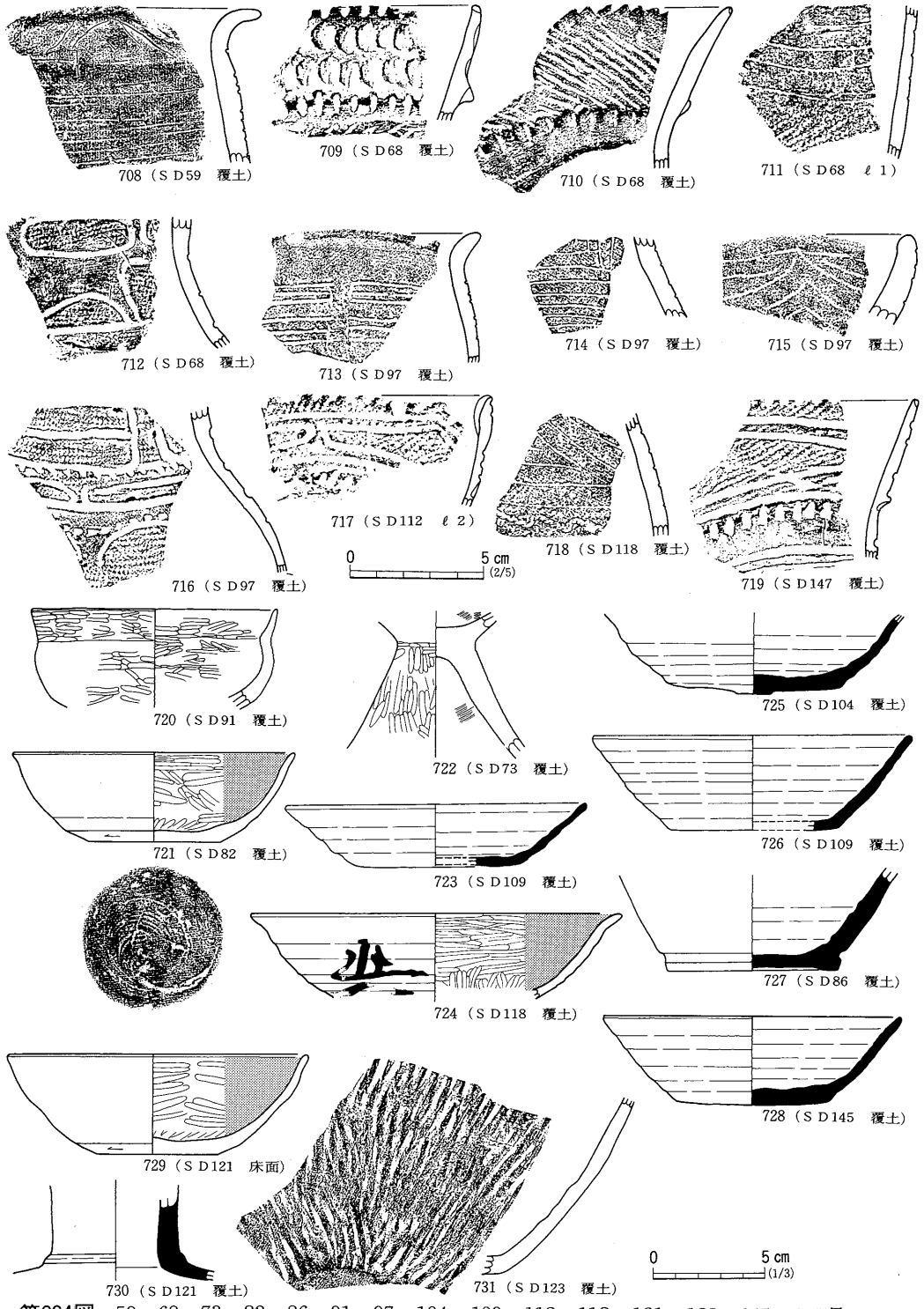
溝跡番号	挿図番号	位置 区	位置 グリッド	規模(m) 長さ	規模(m) 幅	規模(m) 深さ	出土遺物	遺物挿図	時期	備考(重複関係) 旧→新
140		V	H－4	2.2	0.55	0.2				
141		V	H－7	4.9	0.4	0.19				S D152→S D141
142		V	J－20	3.7	0.3	0.18				S I 08→S D142
143		V	E－16	8.2	1.55	不明	土師器			7号周溝,S X13,S D143→S B32,用水路
144		V	E－16	1.4	0.35	不明	土師器			S K307→S D144
145		V	D－16	4.3	0.35	不明	土師器・須恵器	224		12号周溝→S D145
146		V	D－15・16	3.5	0.4	不明				S D146→S K279,11号周溝
147		V	D－15・16	5.8	0.45	0.08	弥生土器	224		11号周溝→S D147→S K278
148		V	E－17	1.4	0.35	0.12				S D148→用水路
149		V	D－17	7.4	0.55	0.2	土師器・須恵器			
150		V	C・D－15	2.2	0.35	0.18				
151		V	D－16	1.4	0.3	0.14				
152		V	H－7・8	11.2	0.85	0.35				S D152→S D141
153		V	E－14	4.6	1.05	0.2	弥生土器	221	弥生	S D153→13号周溝
154		V	H－6～I－8	22.9	2.1	0.08				S D152→S D154
155		V	G・H－9	11.5	0.75	0.12				S D102→S D155→旧河跡
156		V	H－8	10.5	0.6	0.17				S D156→旧河跡
157		V	H－10	1.3	0.25	0.1				
158		V	H－10	3.0	0.25	0.05				
159		V	H－10	3.5	0.4	0.15				
160		V	H－10	3.8	0.3	0.12				
161		V	F－13	2.0	1.05	0.21	土師器・弥生土器・須恵器			S D165→S D161→S D70
162		V	F－14	3.4	1.10	0.04				S D162→S X12,S B26
163		V	F－13・14	6.2	0.25	0.12				
164		V	H－10	2.9	0.3	0.06				
165		V	B－12～F－14	56.5	1.15	0.18				
166		V	E，F－12・13	17.0	0.7	0.2				
167		V	E－14～F－13	24.6	0.95	0.17				S B21,22,23,25,9号周溝,S D168→S D167
168		V	F－12・13	12.0	1.35	0.17				S D168→S D70,43,165,167
169		V	F－16	2.0	0.25	0.07				
170		V	E－20・21	9.4	0.45	0.18				S D170→S D73
171		V	A－7	3.7	0.6	0.21				



第222図　2・4・7・9・16・20・38・39・41・51号溝跡出土遺物



第223図　51・53・56・58・62・68号溝跡出土遺物



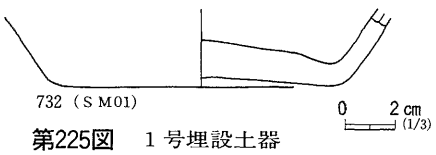
第224図　59・68・73・82・86・91・97・104・109・112・118・121・123・145・147号溝跡出土遺物

第8節　埋設土器

今回の調査によって確認された埋設土器は5基である。各埋設土器は，Ⅲ区とⅤ区で検出しており，地域的なかたよりは見られなかった。いずれの遺構も後世の削平，攪乱を受けており，遺存状態が悪く，正立して埋設されたものは上半部を削られ，横位にすえられていたものは上位にあたる側面部を削平されている。

1号埋設土器　SM01　(第225・228図，図版52)

1号埋設土器は，Ⅲ区中央よりやや東側のN－14グリッドにて検出された。遺構検出面は，LⅢ上面となっている。埋設土器は上半部が削平を受けており，底部のみが遺存している。掘形は，土器より約8㎝前後広く掘られており，検出面からの深さは中央で5㎝となっている。



第225図　1号埋設土器

埋設土器は弥生土器の壺と考えられ，体部下端にはケズリとナデが入っている。　(藤谷)

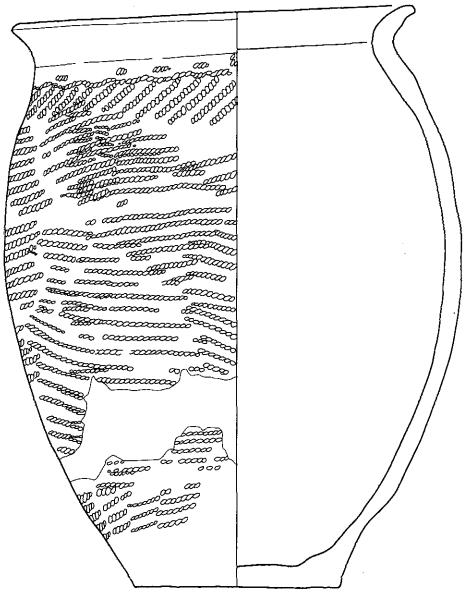
2号埋設土器　SM02　(第226・228図，図版52・61)

2号埋設土器は，Ⅲ区南側中央N－17グリッドにて検出された。遺構検出面はLⅢ上面となっている。土器は底部を斜め下にした状態で，2個体が二重になって埋設されており，上部が土圧にて押し潰された状態で検出された。掘形は，土器の周囲に土器より若干広く掘られており，検出面からの深さは約8㎝である。土器内側及び掘形内に堆積していた土は，パミスを混入する黒褐色シルト1層である。

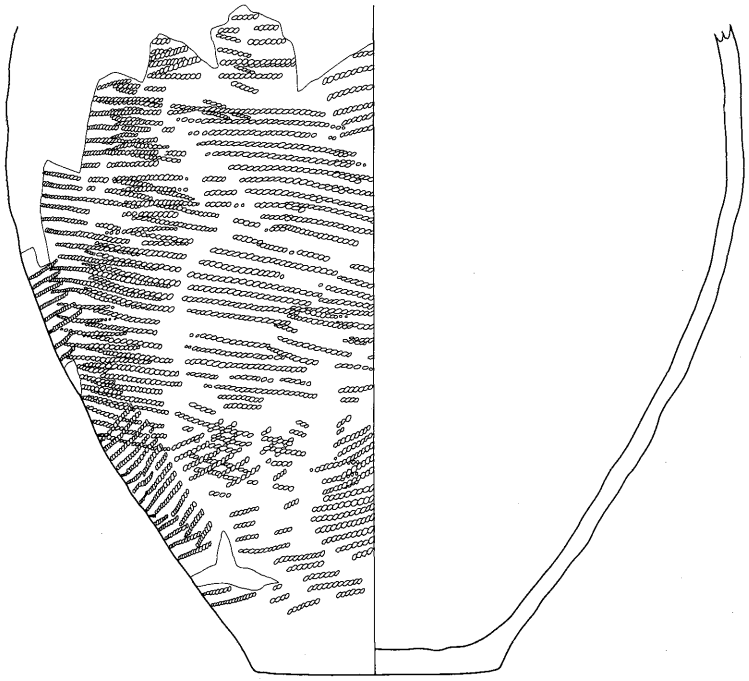
埋設土器はともに弥生土器の甕である。733は内側の土器で口縁下に結節回転文を持ち，地文には直前段多条の縄文が施されている。734は体部下半のみが遺存しており，体部には縦位の直前段多条の縄文が施されている。　(藤谷)

3号埋設土器　SM03　(第227・228図，図版52・60)

本遺構は，Ⅴ区F－14グリッドに位置し，遺構検出面はLⅢ暗黄褐色砂質シルト上面である。周辺には，南側に7号特殊遺構と33号掘立柱建物跡がある。また，遺構の東側部分は後世の攪乱によって破壊されている。掘形の形状は，ほぼ楕円形を呈し，その規模は遺存部の上端で径40㎝程である。また，断面形は鍋底状をしている。土器は正立しており，土器内堆積土中からも土器片が数点出土している。



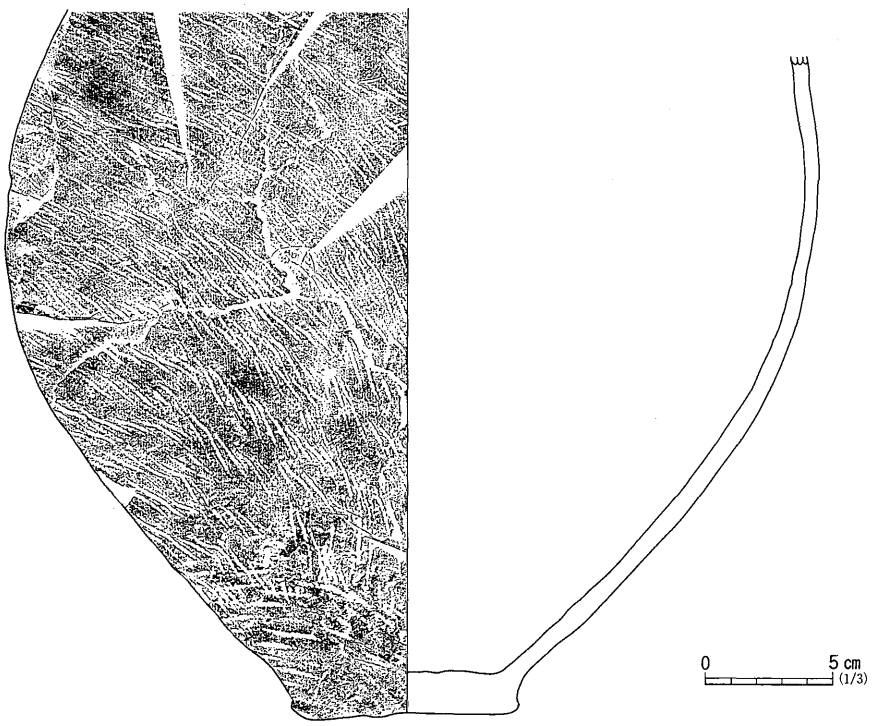
733（ＳＭ02）



734（ＳＭ02）

0　5 cm (1/3)

第226図　２号埋設土器



735（ＳＭ03）

第227図　３号埋設土器

堆積土は，土器内が黒褐色シルト，掘形内が灰黒褐色シルトである。ともにパミスが混入している。

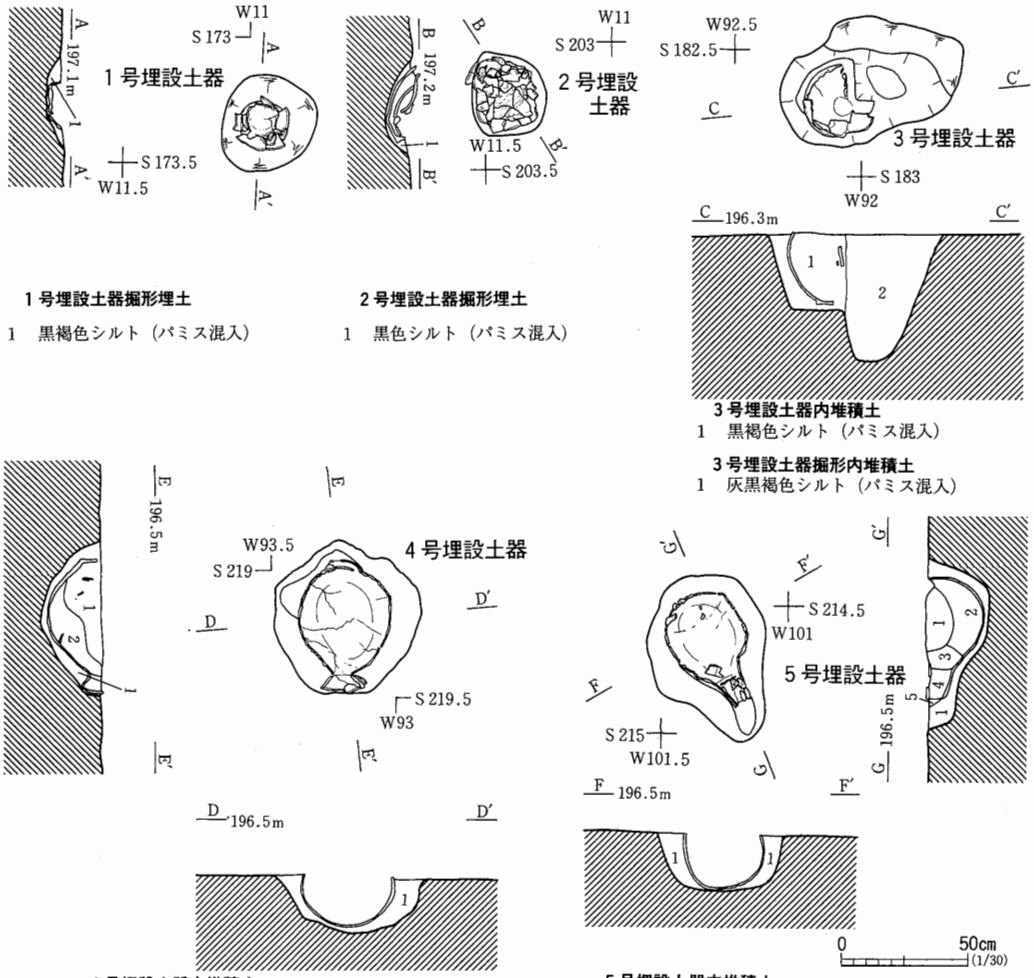
埋設された土器(735)は上部及び体部の1/3を欠損する甕である。器形は，体部下半がやや膨らむ形態を呈している。文様は地文として斜位の縄文が施されている。

本遺構の約半分は後世のピット及び削平によって失われており，僅かに体部下半の地文のみを有する部分が残されているにすぎない。本遺跡において埋設土器が設けられている時期は弥生時代中期後半のものが多く，本遺構もその時期になる可能性がある。（小野田）

４号埋設土器　ＳＭ04　（第228～230図，図版58）

４号埋設土器は，Ⅴ区Ｆ－18グリッドにおいて確認された。遺構検出面は，ＬⅢ暗黄褐色砂質シルト上面である。本遺構の北西10ｍには５号埋設土器がある。掘形の形状は楕円形で，断面形は半円状である。土器は横に据えられており，長軸はほぼ真南を向いている。土器内堆積土中には，底部から体部にかけての甕が1/4個体分混入していた。

堆積土は，土器内が暗黒褐色シルトと暗黄褐色シルトの２層に分かれる。掘形内の堆積土は暗黒褐色シルトで，ともにパミスが混入している。



1号埋設土器掘形埋土

1　黒褐色シルト（パミス混入）

2号埋設土器掘形埋土

1　黒色シルト（パミス混入）

3号埋設土器内堆積土

1　黒褐色シルト（パミス混入）

3号埋設土器掘形内堆積土

1　灰黒褐色シルト（パミス混入）

4号埋設土器内堆積土

1　暗黒褐色シルト（パミス混入）
2　暗黄褐色シルト（パミス混入）

4号埋設土器掘形埋土

1　暗黒褐色シルト（パミス混入）

5号埋設土器内堆積土

1　暗茶褐色シルト（パミス混入）
2　暗灰褐色シルト（パミス混入）
3　暗灰褐色粘質シルト
4　茶褐色シルト（パミス混入）
5　暗灰褐色粘質シルト

5号埋設土器掘形埋土

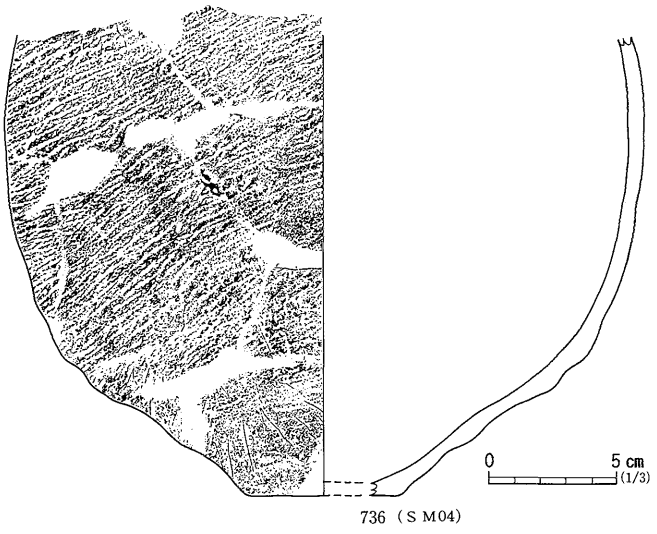
1　暗褐色シルト（パミス混入）

第228図　１～５号埋設土器

遺物は２個体出土している。736と737である。736は737の覆土の中に含まれていたものである。737は弥生土器の壺で，体部の半分が削平されている。器形は体部下半がやや膨らみ，受け口状の口縁が付く形態である。文様は体部上半と口縁部に施されている。体部上半には，平行工具による渦文が５単位施され，渦文間には重三角文が施されている。頸部には，平行沈線の端部を区画した区画文が施されている。口縁部は上部が１条，下部が２条の沈線によって区画され，区画内には上向きの連弧文が施されている。連弧文間の上部の沈線上には突起が貼付されている。

また，体部下半は直前段多条のＬＲ縄文を施している。736は底部から体部下半にかけてのもので，その約1/2が残存している。地文としてＬＲの直前段多条の縄文が施されている。736・737とも土器内面に刷痕が認められる。

本遺構は，土器が横位に据えられていた遺構であるが，上部は削平を受けており下半分のみが遺存していた。土器内部に別個体の土器が含まれるが，埋設土器には土器を二重にする例があり，本遺構も同様と考えられる。時期は出土した土器より弥生時代中期後半川原町口式に相当すると考えられる。（小野田）

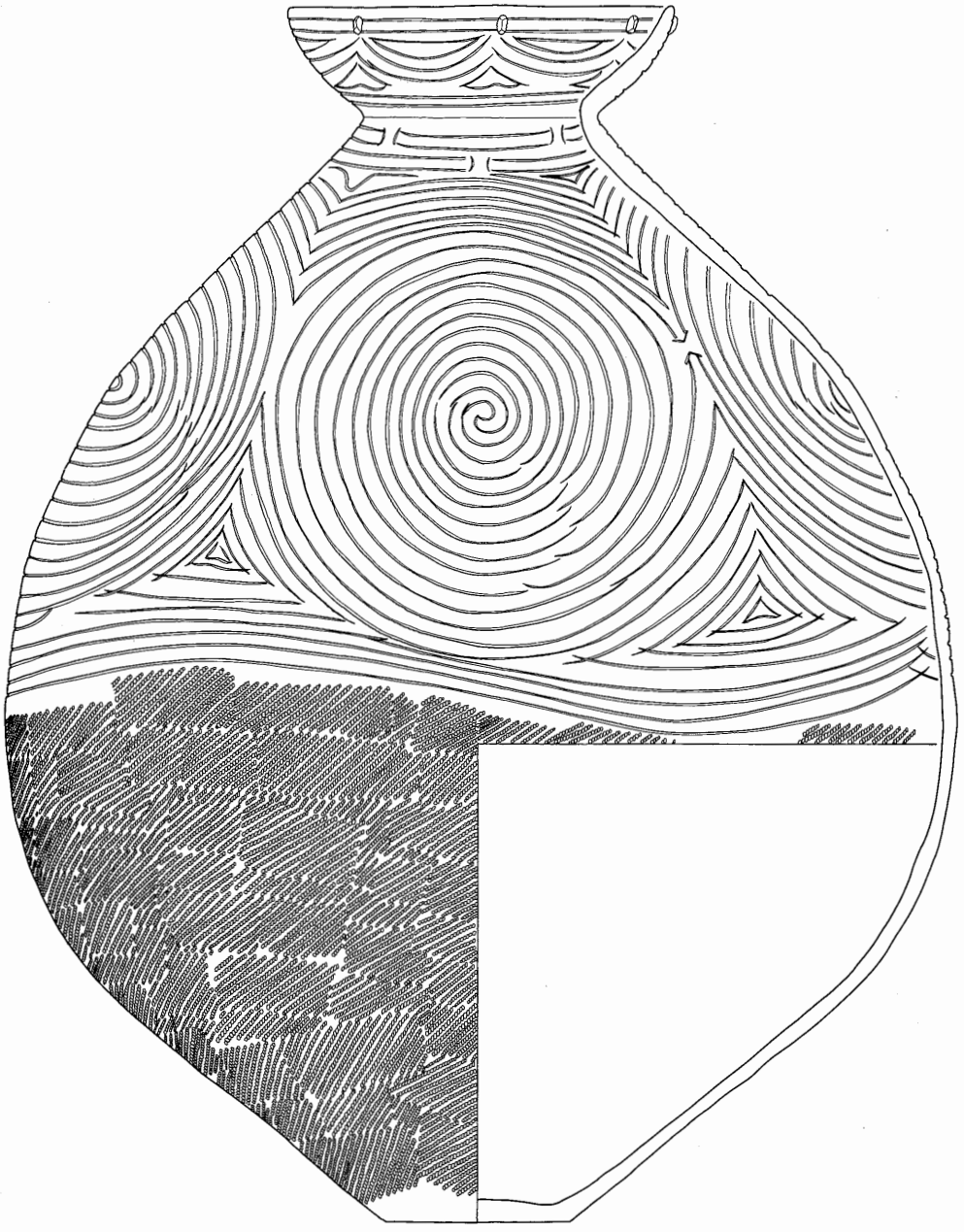


第229図　４号埋設土器（１）

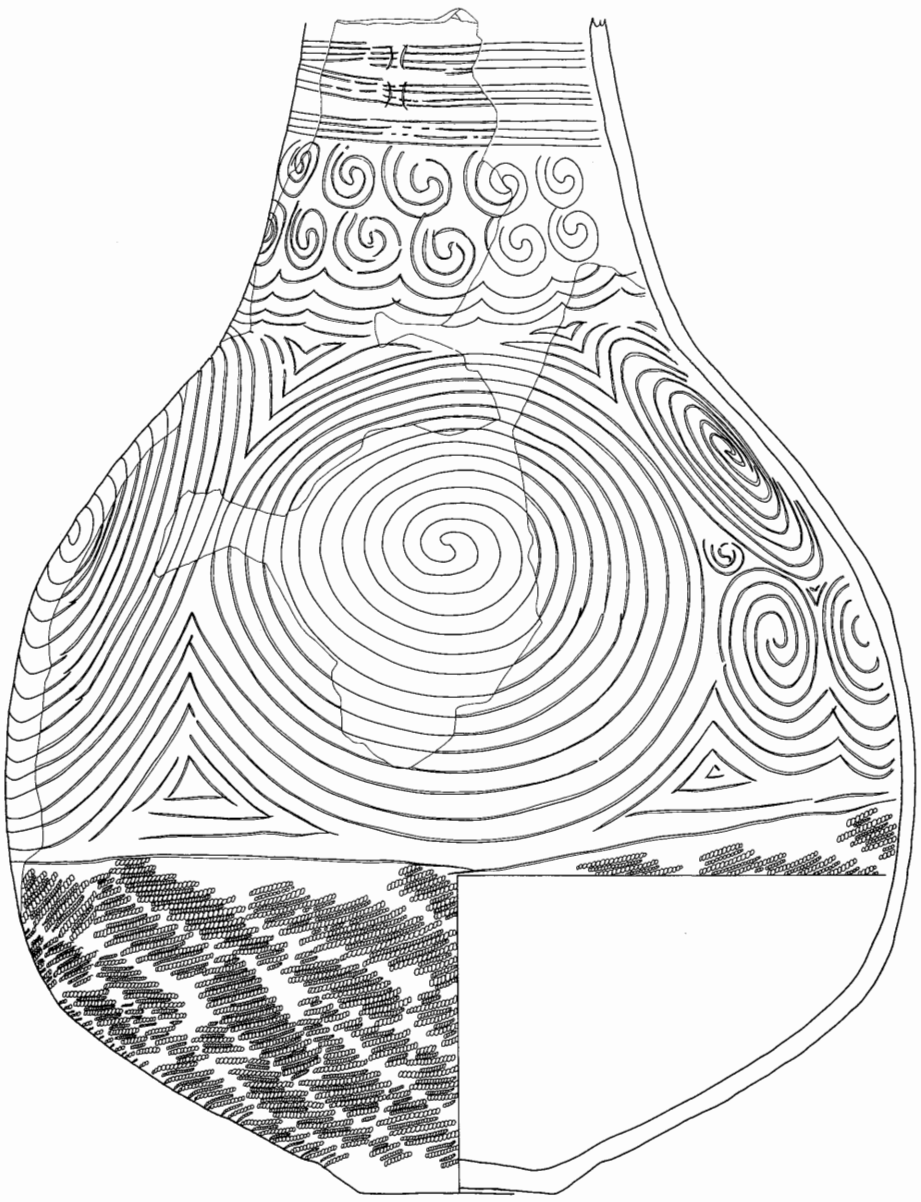
５号埋設土器　ＳＭ05（第228・231図，図版52・58）

５号埋設土器は，Ⅴ区の南半部中央やや西側のＥ－18グリッドで横に埋まっている状態で検出された。検出面はＬⅢ黄褐色砂質シルト上面であるが，埋設土器の胴部片側1/3程度が削平により欠損していた。旧用水路跡が1.4ｍ西側を南北に走っている以外は，近接する遺構は見当たらない。掘形の形状は，平面形で10～24cm程度埋設土器を広げた形をしていて，長径136cm，短径92cmを測る。壁の立ち上がりは急で，断面形は東西方向で船底状，南北方向で埋設土器に沿った形状を呈しており，深さは44cmを測る。掘形堆積土は１層で，パミスを含む暗褐色シルトである。埋設土器内堆積土は４層に分かれる。ℓ１は暗茶褐色シルト，ℓ２は暗灰褐色シルト，ℓ３は暗灰褐色粘質シルトブロック，ℓ４は茶褐色シルトである。ℓ１・３にはパミスが含まれている。

埋設土器は弥生土器の壺で，口縁部と胴部片側1/3程度が欠損している。器形は，体部下半が膨らむ形態の長頸壺で，口縁部については受口状の口縁を持つものと思われる。文様帯は頸部から体部上半に認められる。頸部には上半に平行沈線を３段に巡らし，沈線の間には縦位の区画が入る。下半は２段に左巻きの渦文が施文されている。体部上半は渦文が施文されており，渦文間には上部・下部ともに重三角文が充塡されている。これら施文は，ヘラ状工具によって２本同時に行われており，施文間は１区画おきにミガキおよび朱彩が施されている。体部下半は地文として直前段多条の縄文が斜位に施文されているが，上部は上から下に，下部は底部から上へ施文している。また，底部には布痕が見られる。



第230図　４号埋設土器（２）



738（S M05）

0　5 cm (1/3)

第231図　５号埋設土器

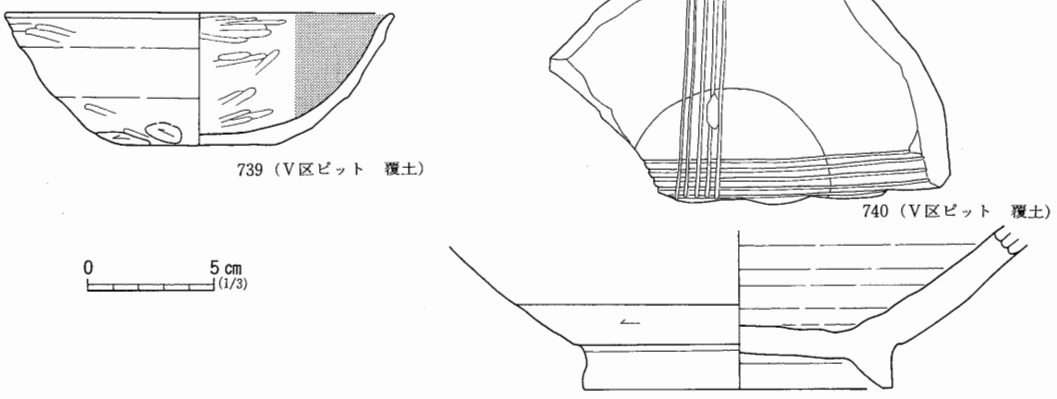
埋設された時期については，５号埋設土器の形態が川原町口式期に属することから，弥生中期後半と考えられる。（伊藤）

第９節　ピット群　（第232図）

調査区内では，前節及び次節以降に示された遺構の他に，径30㎝以下の小規模なピットが多数検出されている。これらのピット群は，形態からＡ類：径20㎝以下の小規模なもの，Ｂ類：径20㎝以上の掘立柱建物跡の柱穴規模のもの，とに分類される。（第４節の土坑一覧表の備考欄でピットとしたものも基本的にはここに含まれる）これらのピット群は，各調査区単位で明確なまとまりが認められる。

Ⅱ区のピット群は，掘立柱建物跡・土坑よりなる遺構群の南側に位置し，全てＡ類となっている。時期は，堆積土が平安期の遺構群と同様なことから同時期と考えられ，小規模な建物跡を形成していたものと考えられる。

Ⅲ区では，６・10号建物跡付近，18・19号土坑南側，10号住居跡とその南側，45号土坑北側，５・７号建物跡周辺，道路南側調査区の１号周溝状遺構内及び西側の７ヶ所に大きなまとまりが認められる。６・10号建物跡付近はＡ・Ｂ類の双方が認められ，堆積土・出土遺物からは配列が不明であるが，平安時代の建物跡を形成する柱穴であると考えられる。18・19号土坑付近のピット群はＡ類のみで，堆積土がそれらと共通するものであるところから，弥生中期の竪穴住居跡を構成する柱穴であった可能性がある。10号住居跡南側のピット群にはＡ・Ｂ両類があり，堆積土も付近の縄文晩期の土坑と共通するところから，同様の時期と推定されるが，その性格は不明で



第232図　ピット群出土遺物

ある。45号土坑北側のピット群はA類のみで構成され，堆積土も付近の縄文晩期と共通するものである。ピット群もほぼ円形の範囲におさまるところから，縄文晩期の竪穴住居跡の柱穴であった可能性がある。5・7号建物跡周辺のピット群も同様な性格が考えられる。道路南側のピット群はA類のみで構成されており，ピット内からは弥生時代終末～古墳時代初頭の土器も出土しており，該期の所産と推定されるが，その性格は不明である。

V区は，大きくみると南側の6号住居跡付近と70号溝跡区画内及びその若干外側の範囲の2ヶ所にまとまりが認められる。6号住居跡周辺のものは，A類のみで構成されている。これらのピット群と同様な規模の柱穴により構成される4号建物跡が付近に位置するところから，このような建物を構成していた可能性が考えられる。その時期は，ピット内より弥生時代終末～古墳時代初頭の遺物が出土しているところから，その時期であると考えられる。70号溝跡区画内には，A類B類ともに認められる。A類にB類が混在する地区は，北側の建物跡群周辺部と中央部建物跡群周辺部で，それ以外の地区はA類によってのみ構成されている。出土遺物は，中央部の36号建物跡東側のB類のピットより中世陶器が1点出土している他は，全て平安時代のものである。また，A類のピットと同様な規模の柱穴によって構成された建物跡に，70号溝跡に切られる35号建物跡がある。A類B類とも本来このような平安時代の建物跡を構成していたものと考えられる。

（藤谷）

第10節　柱　列

1号一本柱列　SA01

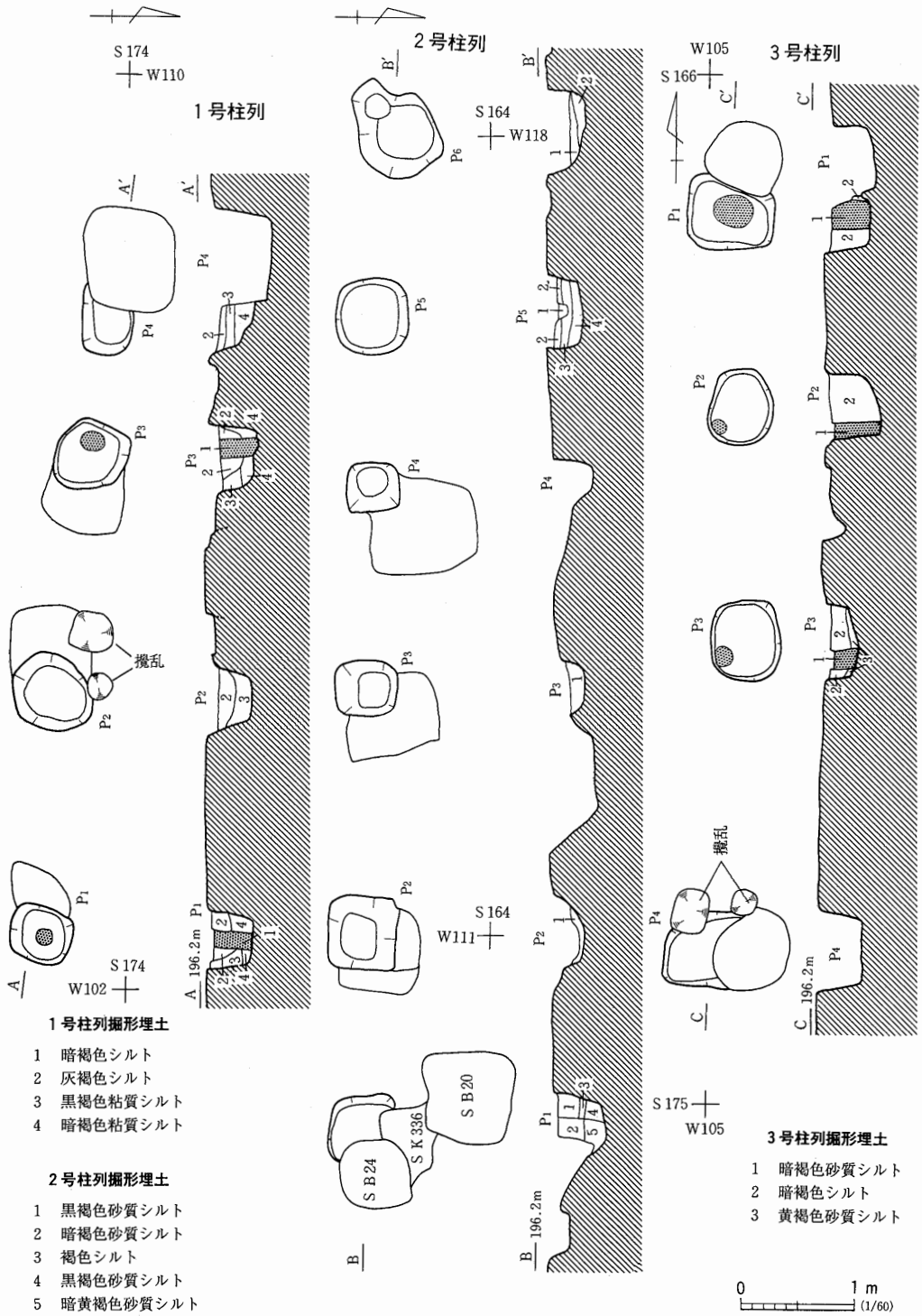
遺　　構（第233図）

1号一本柱列は，V区の中央部西側のG－11グリッドに位置する。検出面はLⅢの上面である。1号柱列は，21号建物跡南柱列の東側に位置し，4つの柱穴が一列に配列されている。最も西側に位置する柱穴は，21号建物跡の南東端の柱穴によって切られている。また，1号柱列は3号柱列の最南端の柱穴を切っている。したがって1号柱列は21号建物跡よりは古く，3号柱列より新しいことがわかる。

1号柱列の方位はN－83°－Wである。柱穴の掘形は56cm×48cm～70cm×66cmの不整形な長方形で，深さは40cm前後である。柱痕は二つ確認されており，その直径は14～18cmである。全体の長さは芯芯で5.5mである。1号柱列は3間の柱列で，柱痕間の間隔は東から2.13m＋2.27m＋1.10mで不均等である。出土遺物はないが，切り合い関係から21号建物跡よりは古いと言えよう。（中野）

第40表　ピット計測表　単位（cm）

P№	P1	P2	P3	P4
長軸	56	70	64	(70)
短軸	48	66	60	44
深さ	40	40	36	38



1 号柱列掘形埋土

1　暗褐色シルト
2　灰褐色シルト
3　黒褐色粘質シルト
4　暗褐色粘質シルト

2 号柱列掘形埋土

1　黒褐色砂質シルト
2　暗褐色砂質シルト
3　褐色シルト
4　黒褐色砂質シルト
5　暗黄褐色砂質シルト

3 号柱列掘形埋土

1　暗褐色砂質シルト
2　暗褐色シルト
3　黄褐色砂質シルト

第233図　１～３号柱列

2号一本柱列　SA02

遺　　構（第233図）

2号一本柱列は，Ⅴ区の中央部西側のH・G－16グリッドに位置する一本柱列である。検出面はLⅢの上面である。

2号柱列は，20号建物跡の柱列を切りながら，南側柱列の外側をほぼ平行するように東西方向に伸びている。また，2号柱列の東端の柱穴は，24号建物跡の南西隅の柱穴を切っている。したがって新旧関係は，2号柱列が20・24号建物跡よりは新しいということになる。

第41表　ピット計測表　単位(cm)

P№	P1	P2	P3	P4	P5	P6
長軸	55	68	54	46	67	74
短軸	(45)	60	50	44	64	72
深さ	46	31	21	36	31	37

2号柱列の方位はN－89°－Wを指し，ほぼ東西に柱穴が配列されている。柱穴の掘形は46cm×44cm～74cm×72cmの隅丸方形が多い。柱痕は1つだけ確認できた。2号柱列の全体の長さは，両端の掘形の芯芯間で測って4.48mである。2号柱列は5間の柱列で，掘形の芯芯間の間隔は東側から測って，0.84m＋1.09m＋0.90m＋0.71m＋0.94mで，各間隔に統一性がなく，間尺は不明である。2号柱列の柱穴から，土師器・須恵器・弥生式土器の小片が十数点出土したが図示しうるような物はない。しかし，土師器小片はその特徴から9世紀前半のものであり，2号柱列はそれ以降のものといえよう。（中野）

3号一本柱列　SA03

遺　　構（第233図）

3号一本柱列は，Ⅴ区の中央部西側のG－16・17グリッドに位置する一本柱列である。検出面はLⅢの上面である

3号柱列は，21号建物跡と26号建物跡の間の，26号建物跡の西側柱列寄りに位置しており，南端の柱穴は1号柱列の柱穴に切られている。

第42表　ピット計測表　単位(cm)

P№	P1	P2	P3	P4
長軸	76	68	70	67
短軸	66	56	60	(42)
深さ	41	45	31	38

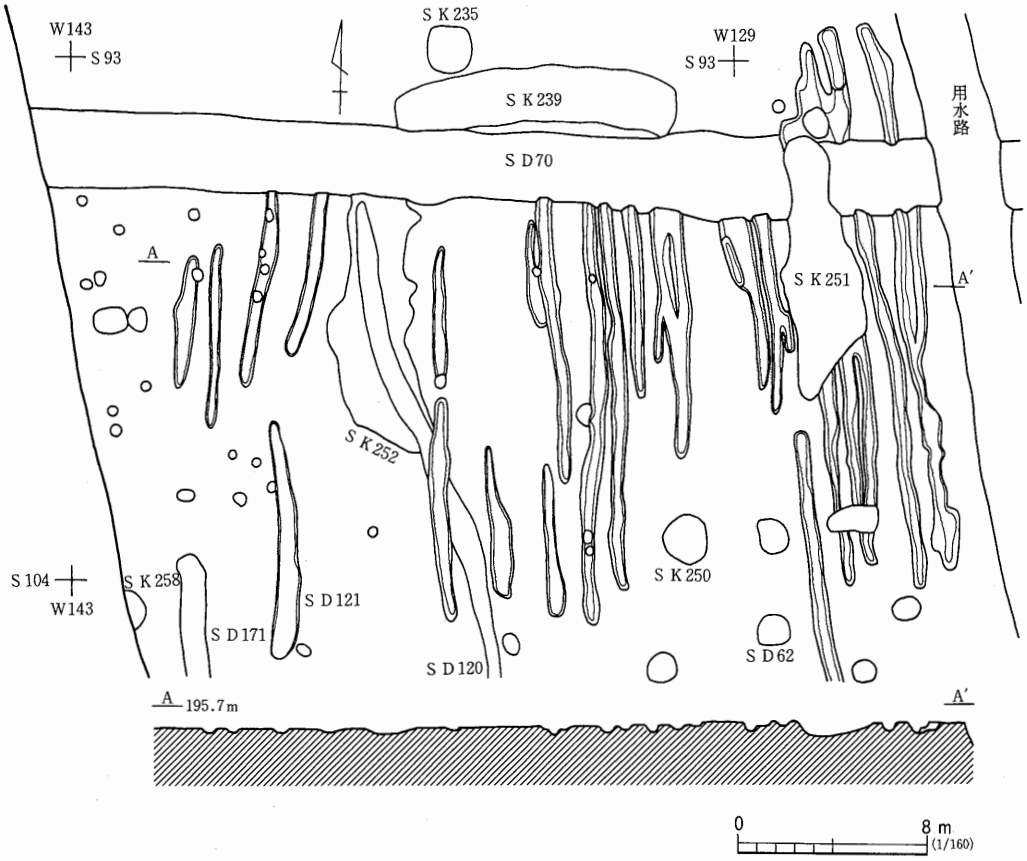
3号柱列の方位はN－2°－Wを指す。柱穴の掘形は68cm×56cm～76cm×66cmの不整隅丸方形・長方形である。柱痕は南端の柱穴を除いて，他の三つの柱穴に確認されている。柱痕の直径は12～28cmである。

3号柱列の全長は6.48mで，北側から掘形の芯芯間で測って1.90m＋2.02m＋2.56mであり，間尺は不明である。出土遺物は数点あるが，図示できないほどの小片であり，遺物から本柱列が機能していた時期について推定することはできない。1号柱列より古いということだけがわかる。（中野）

第11節　畝状遺構（第234図，図版53）

平行する溝が，Ⅴ区北側のＫ－６・８，Ｊ－６・８グリッド内に，約160㎡の範囲にわたって検出された。遺構検出面はＬⅢ上面である。これを畝に伴う溝と推定し，畝状遺構とした。畝状遺構の東側には，７ｍ付近に13号建物跡，更にその東側に12号建物跡が位置している。また，南側には，４ｍ付近に15号建物跡，更にその東側と南側に14・16号建物跡が位置している。切り合い関係では，70号溝跡・251号土坑・120号溝跡の３本の溝跡に切られている。

遺構を構成する溝は，南北方向にのびており，その数は主要なものだけでも17本となっている。畝の長さは最長のもので11.4ｍ，最短のもので2.7ｍとなっている。その幅は最大42㎝，最小20㎝，平均すると約30㎝となる。検出面からの深さは最深部で15㎝，平均すると約８㎝となる。遺物は，堆積土中から土師器と須恵器の細片が少量出土しているのみである。土師器はロクロ使用の杯と



第234図　畝状遺構

甕で，須恵器は杯である。

本遺構は，平安時代の遺構である70号溝跡に切られているところから，それよりも古い時期の遺構と考えられるが，堆積土中から平安時代の土器が出土しているところから，その頃のものと考えられる。（藤谷）

第12節　特殊遺構

1号特殊遺構　SX01

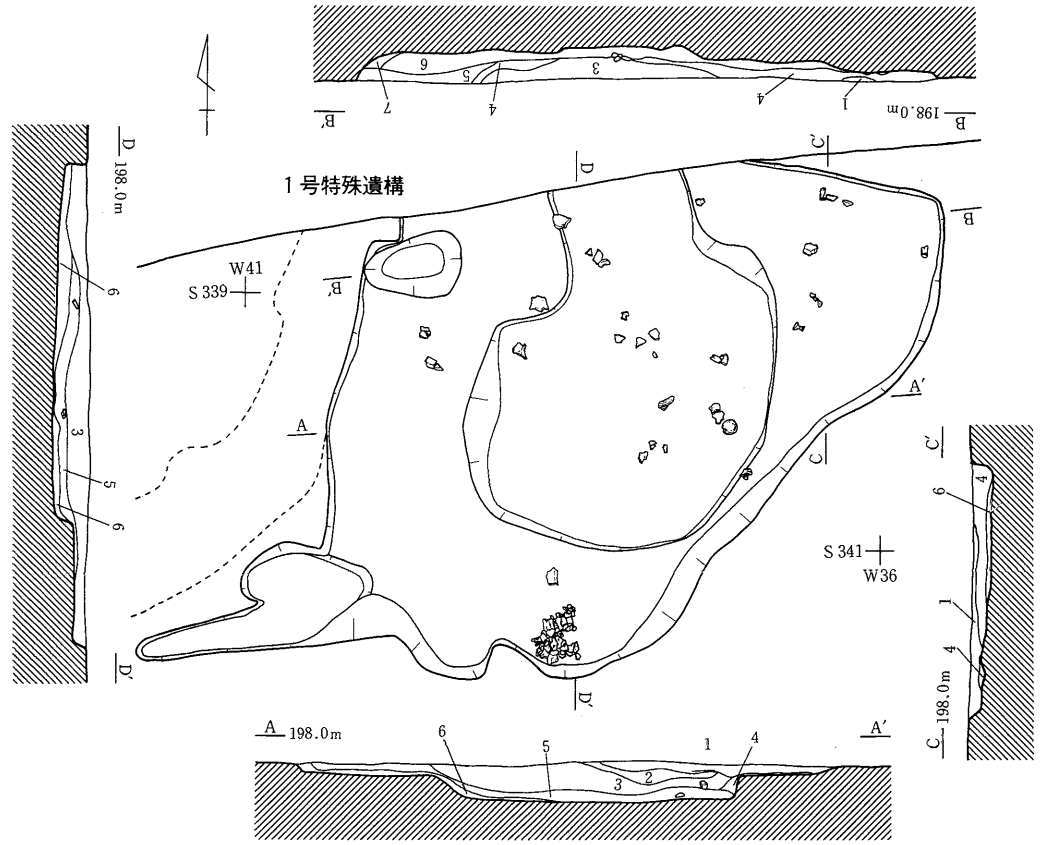
遺　　構（第235図，図版54）

1号特殊遺構は，Ⅳ区北側のK－30・31，L－30・31グリッドに位置しており，遺構検出面はLⅢ上面となっている。遺構の南側には，2・3・5号住居跡が位置し，西側では14号溝跡を切っている。

遺構の平面形は，南西～北東方向に長い不整楕円形を呈しており，北側の一部は調査区外に広がっている。遺構の規模は長軸5.43m，短軸3.68mで，検出面からの深さは，中央の最深部で32cmとなっている。壁面の立ち上がりは，東側が緩やかで他はやや急である。底面は，中央部が長軸2.80m，短軸2.23mの規模で，周囲より一段低くなっている。底面は中央部の一段低くなっている部分も含めて，ほぼ平坦である。堆積土は7層からなっており，堆積状況は自然堆積となっている。

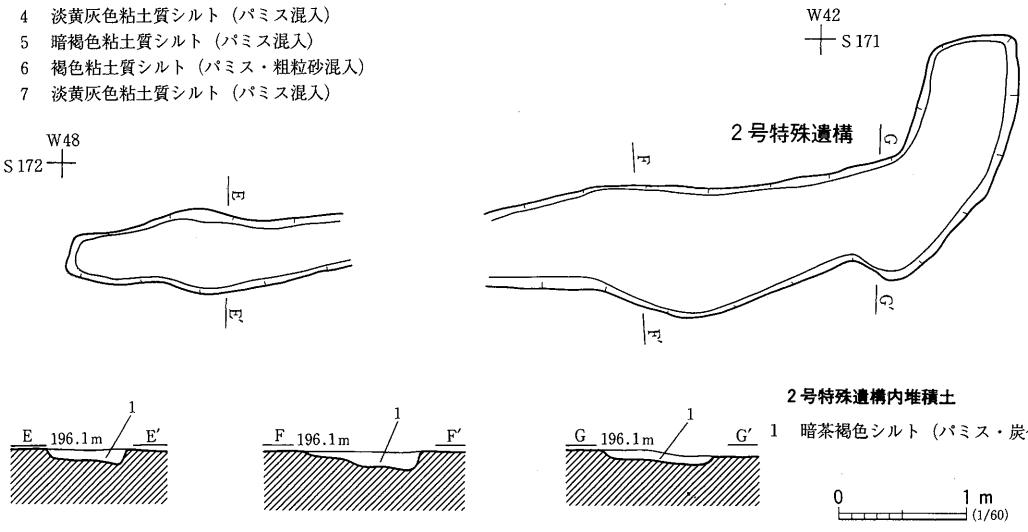
遺　　物（第236・237図，図版62・64・67・68）

遺物は堆積土中より多量の弥生土器・土師器が出土している。弥生土器では壺・甕，土師器では器台・高杯・壺・小型壺・小型丸底壺・甕等の器種がある。図示資料では，741・742が川原町口式の壺と甕である。743は土製紡錘車，744が土錘である。土師器では746～748・751が高杯である。745・749・750は器台で，このうち749・750は円柱状の脚部をもち，台部中央の穴は貫通せずに脚上部でとまっている。752は棒状付文のついた有段口縁の壺で，口縁部はヨコナデされた後，ヘラミガキが加えられている。棒状付文は2本1対になっており，付文上にはキザミが加えられている。また，付文間およびその両側にはナデが加えられている。753は小型丸底壺で，体部外面にヘラミガキ，内面にナデとハケメが施されている。754・755・757は小型壺である。756は体部と口縁部の間に稜線を有する形態の杯で，口縁部にはヨコナデ後ヘラミガキ，体部にはハケメ後ヘラミガキが加えられている。758～764は甕である。758・764は体部から口縁部にかけて「く」の字状に外反する形態を呈し，764の口縁部は更に外側につまみだされた形態となっている。調整は，内外面とも口縁部がヨコナデ，体部がハケメである。759は口縁部外面に点々と



1号特殊遺構内堆積土

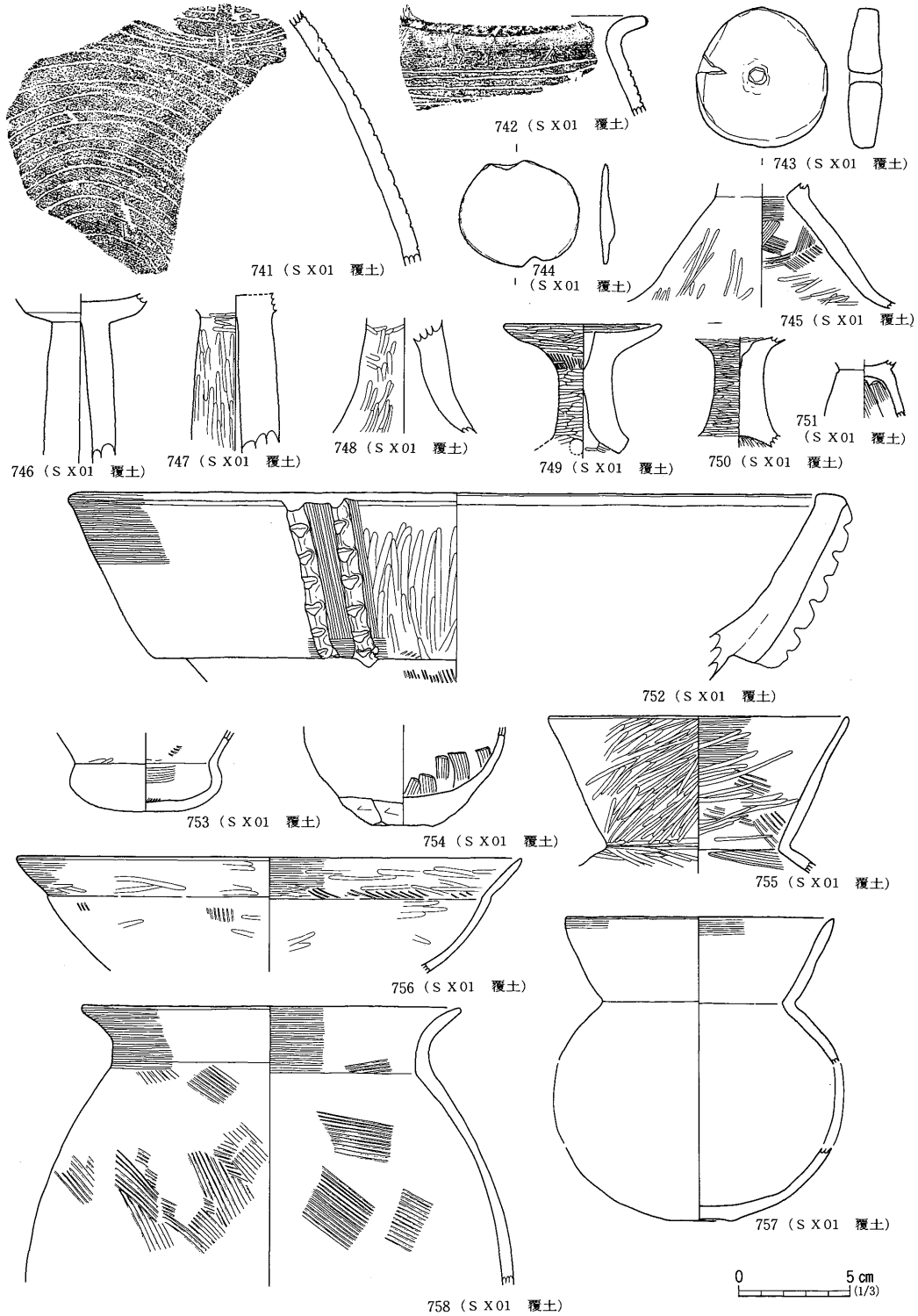
1　赤褐色粘土質シルト（砂・パミス混入）
2　黒褐色粘土質シルト（パミス・赤褐色シルトブロック混入）
3　褐色砂質シルト（パミス混入）
4　淡黄灰色粘土質シルト（パミス混入）
5　暗褐色粘土質シルト（パミス混入）
6　褐色粘土質シルト（パミス・粗粒砂混入）
7　淡黄灰色粘土質シルト（パミス混入）



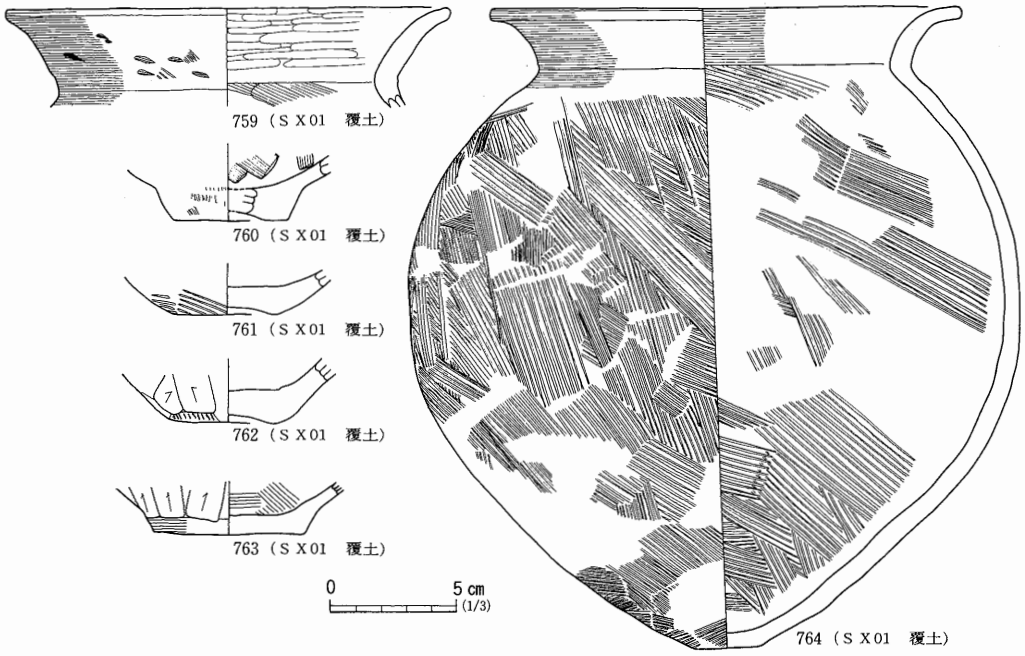
2号特殊遺構内堆積土

1　暗茶褐色シルト（パミス・炭化物）

第235図　１・２号特殊遺構



第236図　1号特殊遺構出土遺物（1）



第237図　１号特殊遺構出土遺物（２）

刺突が加えられ，内面はヘラミガキが加えられている。

まとめ

本遺構の作られた年代は，出土遺物より古墳時代前期と推定される。その性格は，遺物の出土状態からゴミ穴であった可能性が高い。（藤谷）

３号特殊遺構　ＳＸ03

遺　　構（第238図）

３号特殊遺構は，Ⅴ区の中央部東よりのＨ・Ｉ－11グリッドで検出された。遺構検出面はＬⅢ暗黄褐色砂質シルト上面である。他の遺構との切り合い関係はない。周辺には南東方向５ｍに129号溝跡があり，南約15ｍには31号建物跡が位置する。西側には旧河道跡があり，北側には102～104号溝跡が位置する。

本遺構は掘立柱建物と土坑から構成される。当初，鍛冶遺構の可能性が考えられ，特殊遺構とした。掘立柱建物の部分は南北２間，東西２間の南北棟で，方位はほぼ南北方向に並ぶ。建物の主軸は，Ｎ－３°－Ｅである。柱穴の掘形は34㎝×32㎝～80㎝×46㎝の不整隅丸方形で，５基は柱痕が確認されている。柱痕の間隔を見ると，東側柱列は北から2.9ｍ＋2.25ｍ，西側柱列では2.35ｍ＋2.22ｍとなり，南側の間尺がほぼ同じではあるが，全体としての長さには隔たりがあり，形から見ても，北東隅の柱穴はやや位置がずれている。北妻側は西から1.95ｍ＋2.15ｍ，南妻側

は1.95m＋1.92mである。やはり北東隅の柱穴の位置がずれているため同一間尺にはならないが，6.5尺を基本にしていると思われる。

土坑部分は，検出された当初，鍛冶炉の可能性が指摘され，そのため本遺構は鍛冶遺構として精査を行ったが，位置が建物の中心からずれていること，焼土面はなく，鉄滓の付着も確認できなかったこと，また鍛造剝片も採取されていないこと，検出面からの深さも60cmあること等から，この土坑が鍛冶炉である可能性は薄くなったと言わざるをえない。堆積土は，2層からなり，ℓ1は黒褐色砂質シルト，ℓ2は暗赤褐色砂質シルトである。土坑の規模は，長径120cm，短径100cmで，形態は楕円形を呈する。

遺　物

遺物は柱穴と土坑部分から土師器片が十数点出土しているが，図示し得るようなものはない。土坑部分からはロクロ調整された土師器片が出土している。またはタタキメをもつ甕，高台杯の破片と思われる土師器片が出土している。柱穴から出土した土師器片はすべて小破片で，形態・技法等は不明である。

まとめ

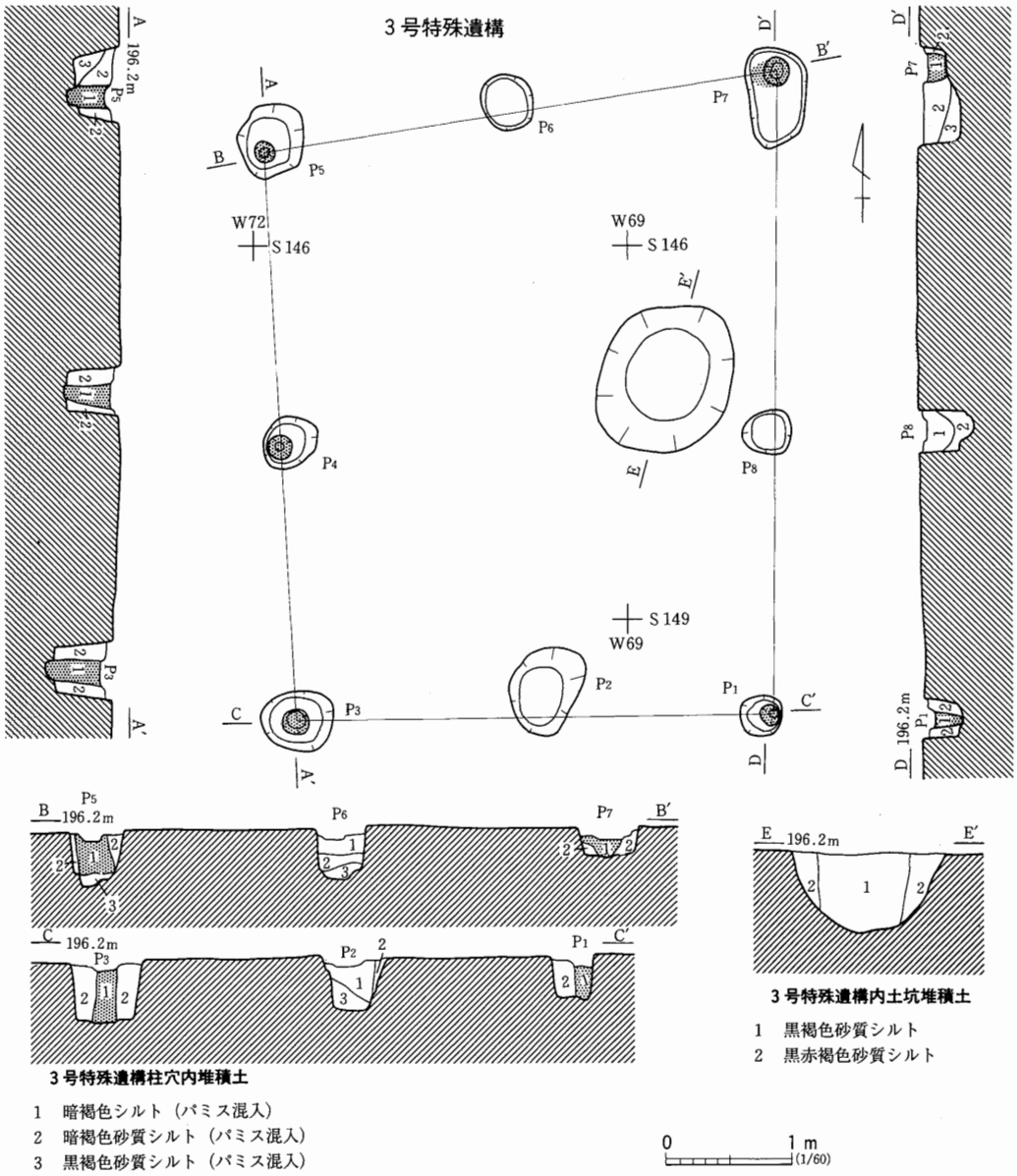
当初，建物跡と土坑部分で一組の遺構を形成し，鍛冶遺構の可能性が期待されたが，精査の結果，積極的に支持する根拠は薄くなった。建物跡と土坑部分についての関係は，周辺に平安時代の遺構がなく，ともに平安時代の遺物を出土しているところから同時に機能していた可能性が高いといえよう。しかし，それらの機能については不明である。また，その時期については，堆積土中の遺物及びその位置より平安時代(9世紀代)である可能性が高い。　(中野)

5号特殊遺構　SX05

遺　構　(第240図)

5号特殊遺構は，V区の中央部のE・F－13グリットで検出された不整形の浅い大型の土坑状を呈する遺構である。位置はW99～102・S167.5～170である。遺構検出面は，LⅢ暗黄褐色砂質シルト層上面のやや汚れた部分である。この遺構は26号建物跡と重複しており，26号建物跡の西半部建物内にスッポリ入るような形で検出された。その平面プランは，上面で東西3.08m×南北2.55m，底面で東西2.95m×南北2.47m，深さ20cmを測る隅丸方形に近い不整形を呈する。壁は南側の一部を除いて急であり，底面には小さな凹凸がある。底面には硬質な特別締まった部分は認められなかった。

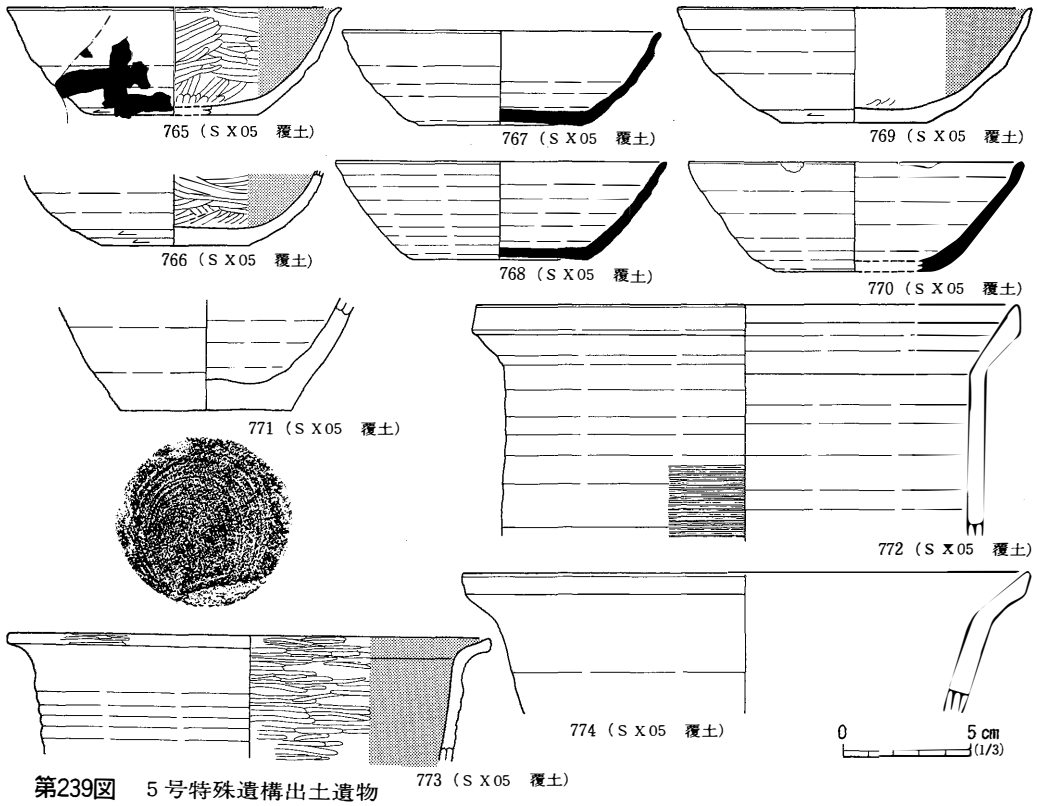
堆積土は，6層に分けられたが，ℓ5のような薄い灰の純粋層か，大きなブロック状をなす焼土・木炭・灰混じりの層である。このような状況から，この堆積は人為的に一時に埋められたと考えられる。



第238図　３号特殊遺構

遺　　物　（第239図）

ℓ１～３層中から土師器の杯・甕，須恵器の杯の破片が出土している。土師器杯(765・766)はロクロ調整・内黒のもので，体部下端から底面にかけて回転ヘラケズリ再調整を加えており，一部底面に回転糸切り痕を残すもの(766)もある。土師器甕(772～774)はロクロ調整で，内面が磨かれた内黒のもの(773)，体部外面にカキメ(772)のあるものも見られる。須恵器杯(767・768・770)は底面に回転ヘラキリ痕を残し，やや深めの形で，口径：底径は，1：0.5～0.53である。



第239図　５号特殊遺構出土遺物

まとめ

５号特殊遺構埋土からは９世紀前半と考えられる土器が出土しており，これと類似した様相のものが26号建物跡の柱穴掘形からも出土しており，両者は近い時期のものと考えられる。また，遺構相互の位置関係，５号特殊遺構埋土に多量の灰・焼土を含む点からも，26号建物跡が火災にあった後に，片付けをした遺構と考えられる。　（木本）

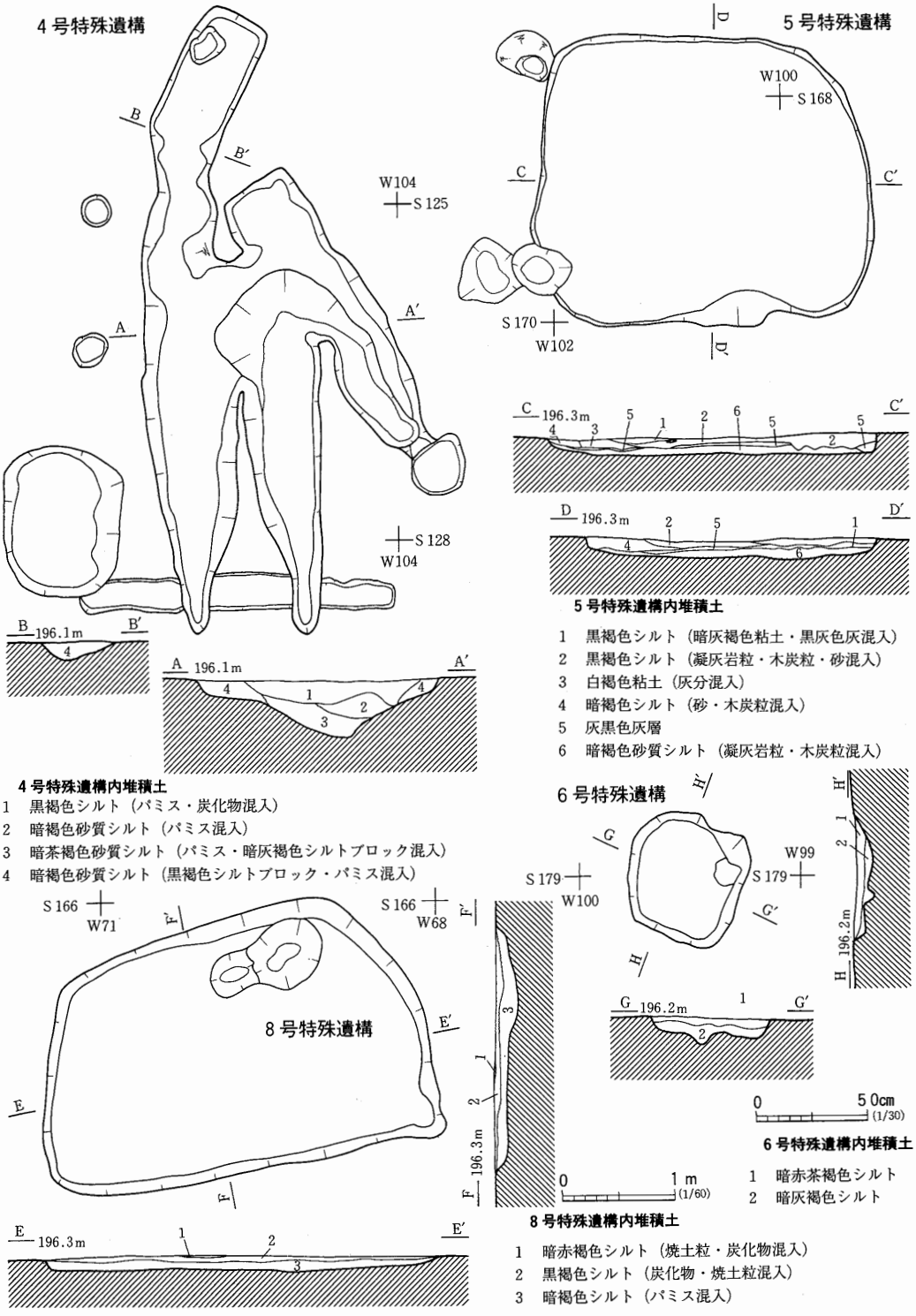
６号特殊遺構　ＳＸ06

遺　　構（第240図）

６号特殊遺構は，Ｖ区Ｆ－14グリッドに位置しており，遺構検出面はＬⅢ暗黄褐色砂質シルト上面である。他の遺構との切り合い関係はない。また遺構周辺には，12号特殊遺構・11号井戸跡・394号土坑が位置している。

遺構の平面形は隅丸方形で，長軸55㎝×短軸50㎝である。遺構検出面から遺構底面までの深さは11㎝前後で，断面形は鍋底形を呈している。壁面の立ち上がりは緩やかで，底面は比較的平坦である。

堆積土は２層に分けられる。ℓ１は暗茶褐色シルトで強い火を受けたと考えられる。ℓ２は暗



4号特殊遺構内堆積土

1　黒褐色シルト（パミス・炭化物混入）
2　暗褐色砂質シルト（パミス混入）
3　暗茶褐色砂質シルト（パミス・暗灰褐色シルトブロック混入）
4　暗褐色砂質シルト（黒褐色シルトブロック・パミス混入）

5号特殊遺構内堆積土

1　黒褐色シルト（暗灰褐色粘土・黒灰色灰混入）
2　黒褐色シルト（凝灰岩粒・木炭粒・砂混入）
3　白褐色粘土（灰分混入）
4　暗褐色シルト（砂・木炭粒混入）
5　灰黒色灰層
6　暗褐色砂質シルト（凝灰岩粒・木炭粒混入）

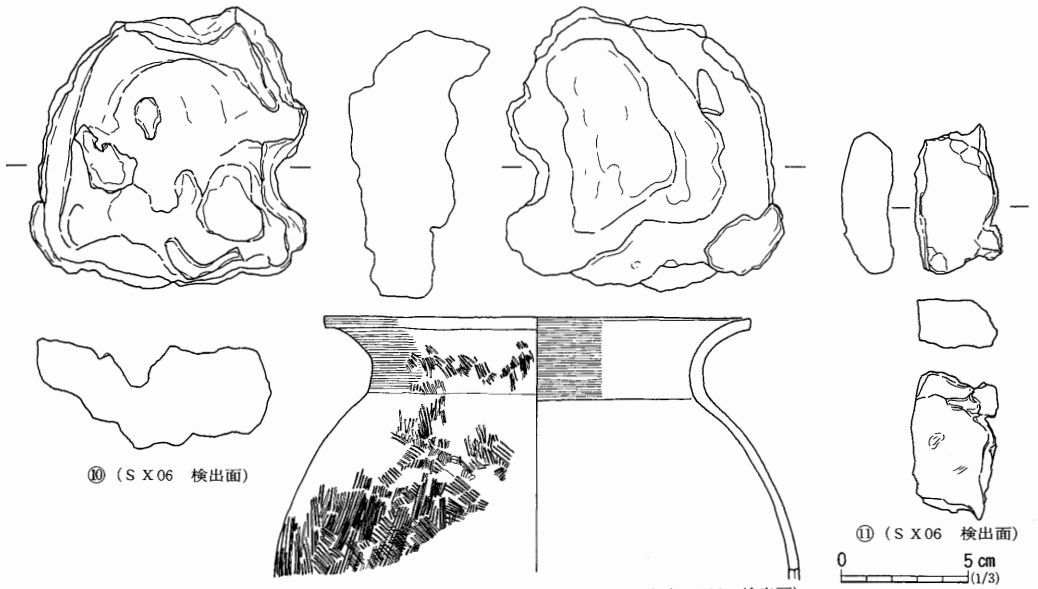
6号特殊遺構内堆積土

1　暗赤茶褐色シルト
2　暗灰褐色シルト

8号特殊遺構内堆積土

1　暗赤褐色シルト（焼土粒・炭化物混入）
2　黒褐色シルト（炭化物・焼土粒混入）
3　暗褐色シルト（パミス混入）

第240図　４～６・８号特殊遺構



第241図　６号特殊遺構出土遺物

灰褐色シルトである。

遺　　物（第241図）

遺構上面付近より２点の鉄滓の出土が認められている。２点とも重さがあり，表面が赤く酸化していることから鉄滓と考えた。⑩はその形状から椀形滓と考えられる。表面の一部には炉壁と考えられる土塊が付着している。形態自体も表面の所々に空気穴があき凹凸が著しい。⑪もそれに類すると考えられるものであるが，表面の一部は滑らかである。他に検出面から混入品と考えられる土師器の甕(775)が出土している。口縁部が強く外反する器形で，口縁端部が面取りされている。調整は外面の口縁部がハケメ後ヨコナデ，体部がハケメ，内面は口縁部がヨコナデである。ハケの原体は比較的細かいものである。

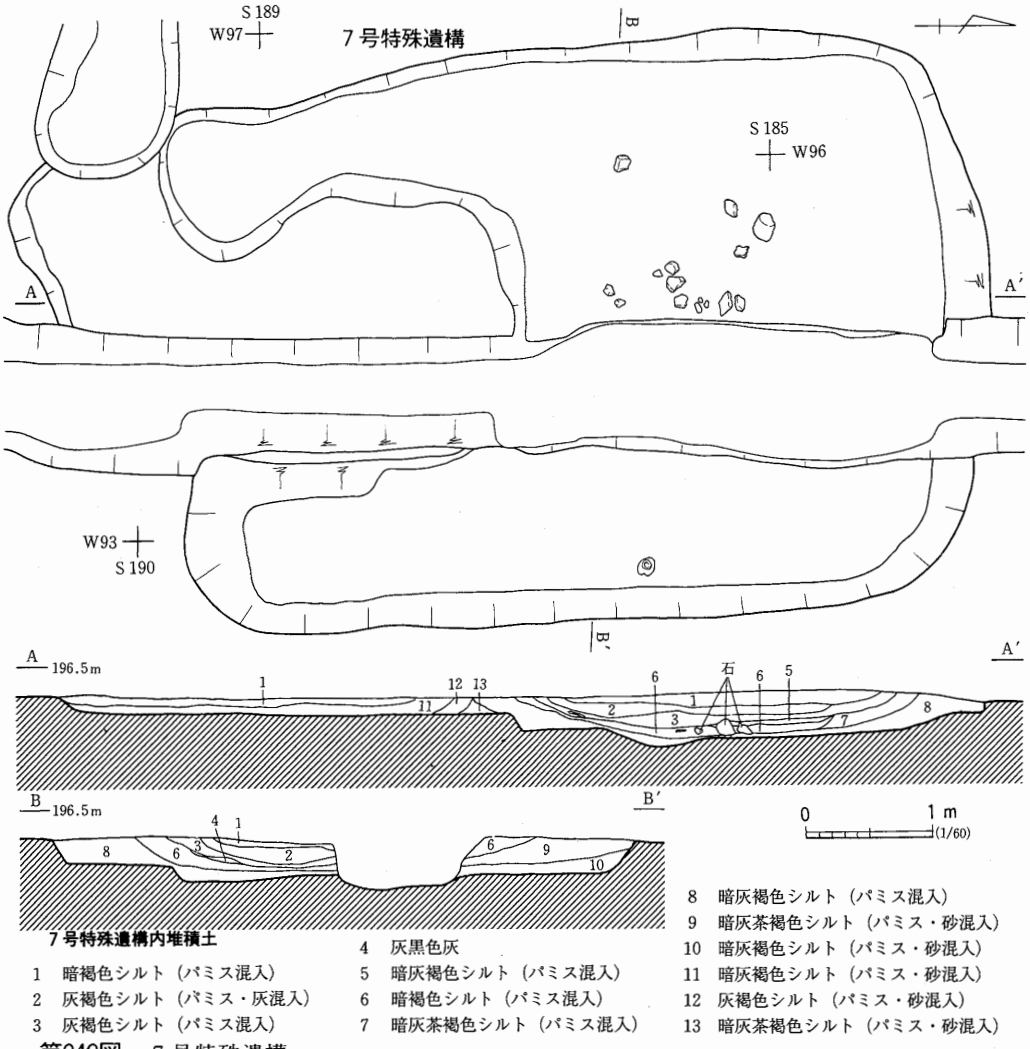
まとめ

本遺構は，底面より土器等の出土遺物はなかったが，２点の鉄滓と考えられる遺物が出土した。鉄滓は，付章の金属学的調査でも，精錬鍛冶滓と鍛造鍛冶滓であるといった結果がでている。こうした結果から本遺構は鍛冶遺構であったといえよう。また，その時期については，出土遺物がなく，不明である。（小野田）

７号特殊遺構　ＳＸ07

遺　　構（第242図）

７号特殊遺構は，Ⅴ区Ｇ－15グリッドにおいて検出され，ＬⅢ暗黄褐色シルト上面において確認された遺構である。７号周溝状遺構・33号建物跡を切り，68・70号溝跡によって切られている。

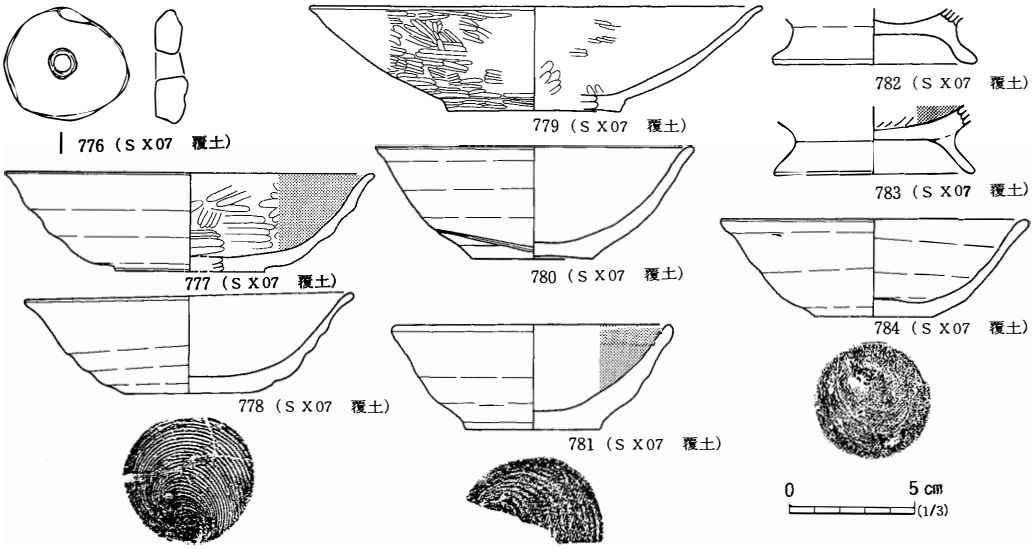


第242図　７号特殊遺構

遺構の平面形は，南北に長い長方形を呈する。長軸７ｍ，短軸4.5ｍを測る竪穴状の遺構であるが，遺構内南半部中央にはテーブル状の盛り上がりが残されている。遺構検出面からの深さは20～40㎝である。

堆積土は13層に分けられる。ℓ１～８までは，炭化物を多量に混入している。ℓ９～13は暗褐色を基調にしたシルト質の層である。遺構内には投棄されたと考えられる土師器・須恵器と焼けた礫などが出土している。

遺構の底面は平坦であるが，踏み締まり等はまったくなかった。遺構内東側寄りの部分からは33号建物跡の西妻柱列が遺構底面から検出されている。



第243図　7号特殊遺構出土遺物

遺　　物（第243図，図版70・73）

遺物はℓ1～8から集中して出土している。776は土製紡錘車である。779は高杯で脚部が失われている。内外面ヘラミガキが加えられ，朱彩されている。782・783は高台付椀の高台部分である。782は赤焼土器で，783は内面ヘラミガキされ，黒色処理されたものである。777・781は土師器杯で底部回転糸切り無調整である。内面はヘラミガキされ，黒色処理が施されている。777は二次焼成を受けている。778・780・784は赤焼土器の杯である。784は床面のほぼ直上で検出されている。

まとめ

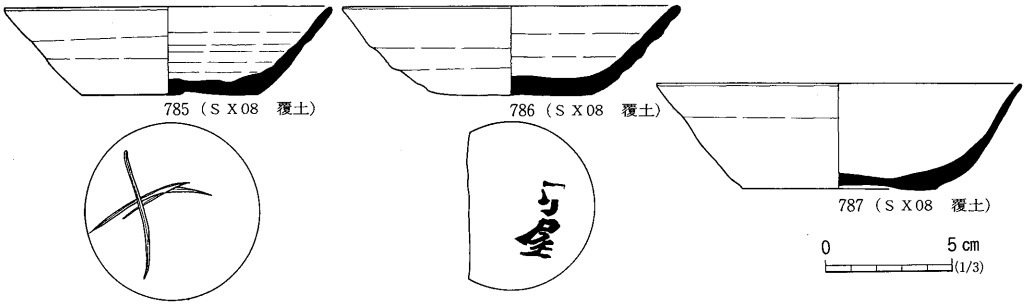
本遺構は，堆積土の状況や出土遺物，遺構の切り合い関係から，33号建物跡が焼失した際に，この遺構を掘って不要品を廃棄したものであると考えられる。本遺構の作られた時期は，出土遺物から10世紀前半であると考えられる。（小野田）

8号特殊遺構　S X08

遺　　構（第240図）

8号特殊遺構は，Ⅴ区H・I－13グリッドにまたがって検出された。西側に31号建物跡・109号溝跡が位置する。検出面はLⅢ上面である。平面プランが台形の浅い竪穴状遺構である。

遺構の規模は，南辺が3.56m，北辺が2.46m，東辺が2.38m，西辺が1.72m，西壁付近での検出面から床面までの深さは約12cmを測る。床面はほぼ平坦であるが，住居跡のように固く締まっておらず，北東コーナー寄りに2ヶ所ピット状の窪みが検出されている。



第244図　８号特殊遺構出土遺物

遺構内堆積土は，３層に細別された。ℓ１・２では焼土粒や炭化物を多く含んでおり，人為的に投棄された土層と判断される。また，焼土や炭化物に混じって土師器・須恵器の遺物が検出された。

遺　　物（第244図，図版75）

ℓ１・２からは若干の土師器・須恵器が出土し，またℓ３ではわずかに弥生後期の土器が出土している。785～787は，ℓ１・２から出土した須恵器杯である。ロクロ整形後回転ヘラキリによって底部を切り離し，その後ナデによって底部調整をしている特色を有する。このうち，786では底部に「石屋」と判断した墨書を有し，785の底部にはヘラ記号がある。これらの須恵器は，何れも大戸産で，９世紀後半代の特徴をもっている。

まとめ

８号特殊遺構は，柱穴を持たず，床面の状態などから住居跡でないことは確実である。土層堆積を観察すると上層部に炭化物や焼土粒を多く含むことから，火災等によって生じた廃棄物の投棄やゴミ焼却を行った遺構と考えられる。出土した須恵器から判断して，遺構の年代は，９世紀後半と判断される。（芳賀）

９号特殊遺構　ＳＸ09

遺　　構（第245図）

９号特殊遺構は，Ⅴ区の最南端のＩ－21で検出され，遺構の北東には，91号溝跡・３号埋設土器，また西側には風倒木痕が２ヶ所ある。遺構検出面はＬⅢ上面である。それぞれの遺構との新旧関係は，91号溝跡が土層観察により９号特殊遺構より古いものと判断されたが，３号埋設土器との関係は，９号特殊遺構の調査時に，その北側がすでに調査されていたため不明である。

遺構は，全体の3/4ほどが現存しており，長楕円形のプランを呈する竪穴状遺構と考えられる。現存部分での規模は長軸5.14ｍ，短軸3.08ｍを測り，断面形は皿状を呈し，壁はゆるやかに立ち上がり南壁付近の検出面と遺構中央部付近の床面とのレベル差は－32㎝を測る。

堆積土は，５層に細別された。総体的に黒褐色シルトの堆積である。ℓ１・２を中心に遺物の出土が多く，炭化物も含まれているが，一部に遺物等の投棄がみられるので，自然流入堆積と判断したい。

遺　　物（第245～248図，図版55・56・63・64・66～68）

遺物は，一部，弥生式土器も散見されるが，ℓ１～３を中心に古墳時代前期の遺物が多数出土している。土師器は甕・壺・高杯・高台・小型丸底壺・杯がある。甕は，口縁が「く」の字状に屈曲するが，端部を面取りして内傾させている特色を有する。808・809では，内外面にきわめて粗いハケメ調整を施しているが，体部下半は，いったんヘラケズリを行ったのちハケメ調整を施している。また，底部が小さく丸底状を呈するのも特色のひとつである。壺は有段となる口縁を有するものが２例みられ，また798の内面口端には，棒状工具による等間隔のキザミが施されている。さらに高杯・器台を観察してみると，ともに脚部が柱状となり，789のような器高の低い受部がつく特色がある。795は，小型丸底壺で底部があげ底となっている。

土師器以外では，西壁寄りで，白色粘土塊がかたまって出土し，また，大型の凝灰岩製の長方形を呈する磨石が１点出土している。

まとめ

本遺構は，出土遺物から判断して古墳時代前期，４世紀後半に廃棄されたものと判断される。遺構の性格については，出土した遺物が，自然流入堆積の過程で廃棄されたものと考えられ，直接遺構の性格と結びつけることはできず不明である。（芳賀）

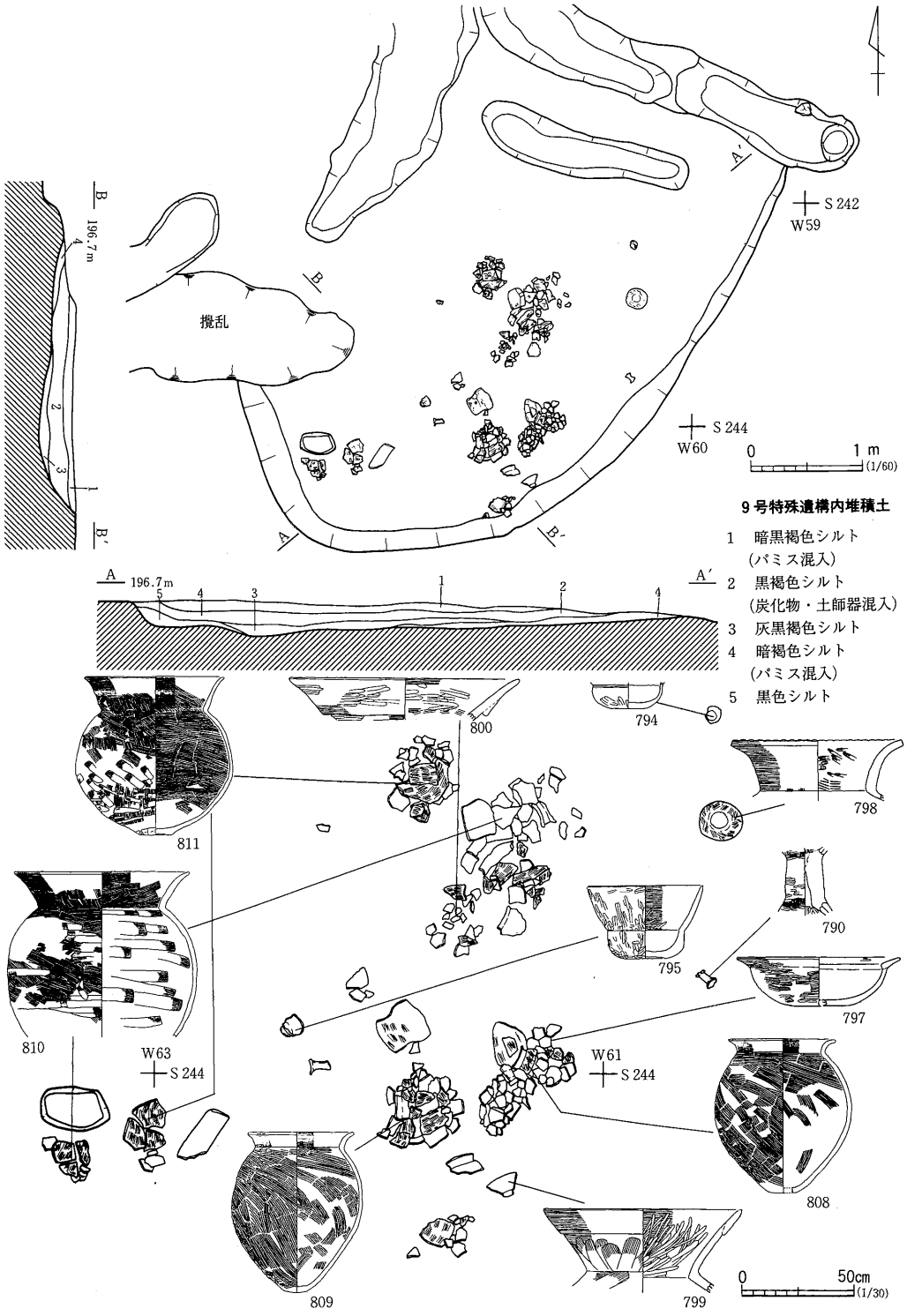
12号特殊遺構　ＳＸ12

遺　　構（第250図）

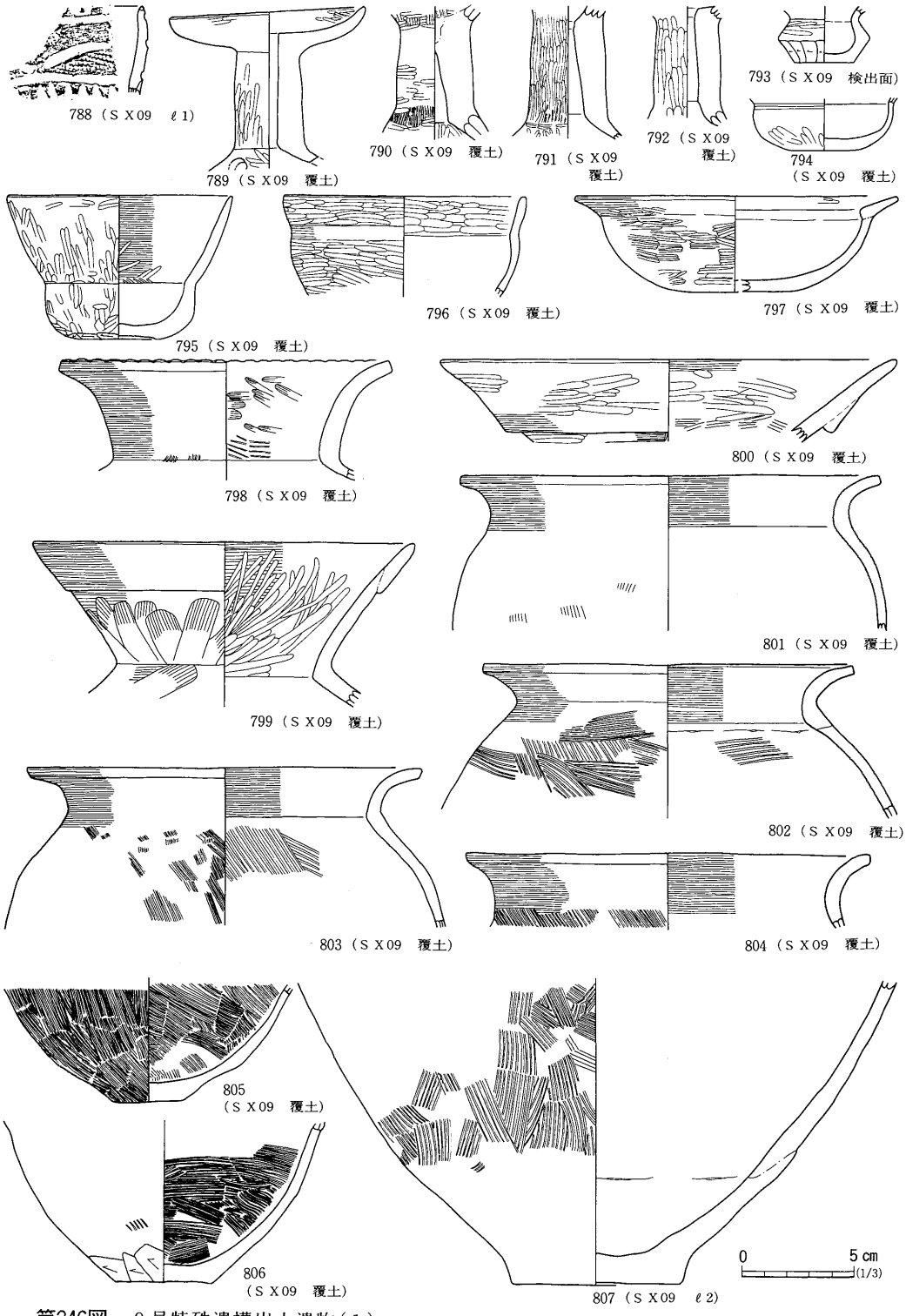
12号特殊遺構は，Ⅴ区のＦ－14の西半に位置し，北側に26号建物跡，東側に70号溝跡があり，162号溝跡，18・19号井戸跡と切り合い関係を有する。それぞれの遺構は，19号井戸跡→12号特殊遺構→18号井戸跡の順に新しくなり，162号溝跡は，12号特殊遺構より古い溝であるが，19号井戸跡との関係は不明である。

遺構平面プランは，やや不整の方形プランを呈している。遺構中軸線上の規模は，東西4.50ｍ，南北4.24ｍを測り，北辺の一部がやや張り出している。南壁部分での検出面から床面までの深さは，約28㎝である。各側壁ともに床面からゆるやかに立ち上がっている。床面は，ほぼ平坦であり，あまり固く締まっていない。床面中央部やや東寄りには島状の高まりがあり，北東コーナーには柱穴が１個ある。島状の高まりは，床面に堆積した土砂ではなく，遺構構築の際に意図的に掘らずに残したものである。また，遺構内に18・19号井戸跡も存在する。

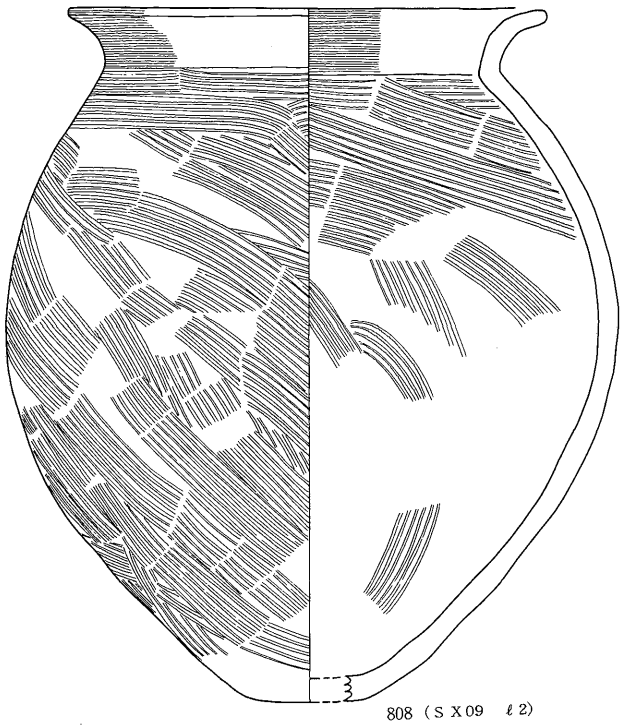
土層堆積は，４層に細別された。ℓ１～３には炭化物や灰・焼土粒を多く含む土層で，人為堆積



第245図　９号特殊遺構遺物分布図



第246図　9号特殊遺構出土遺物（1）

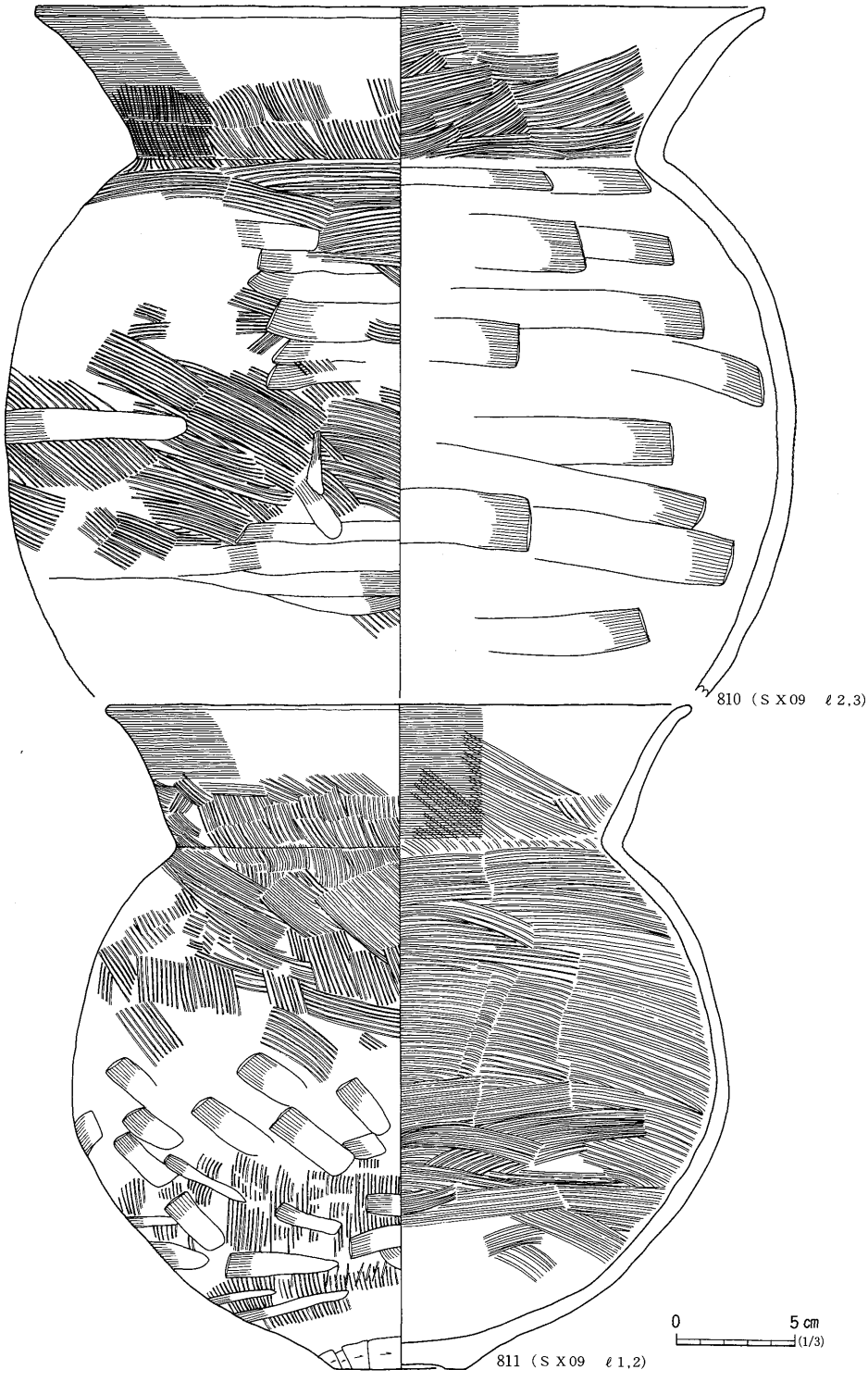


808（ＳＸ09　ℓ2）

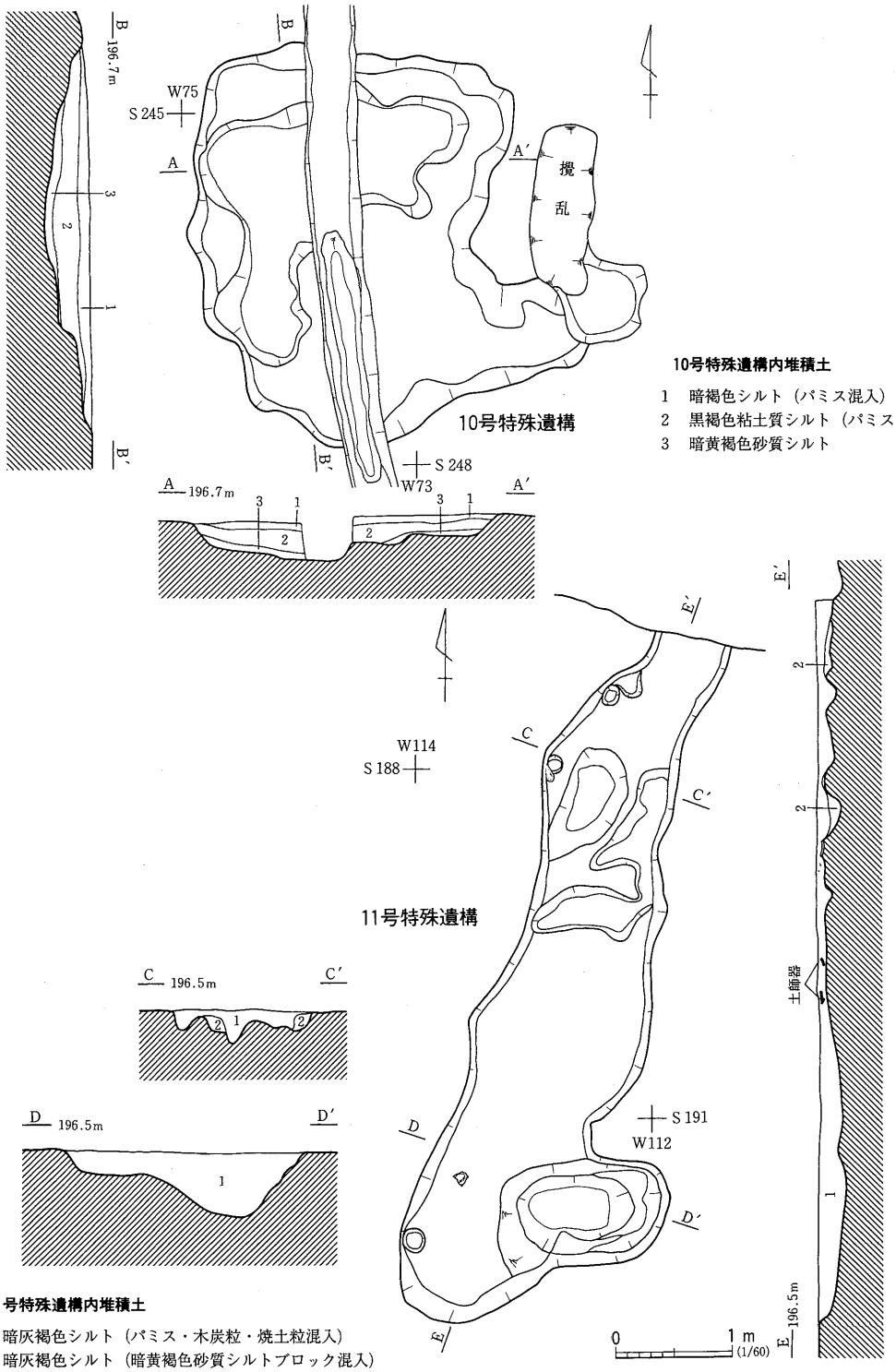
809（ＳＸ09　ℓ1）

0　5 cm (1/3)

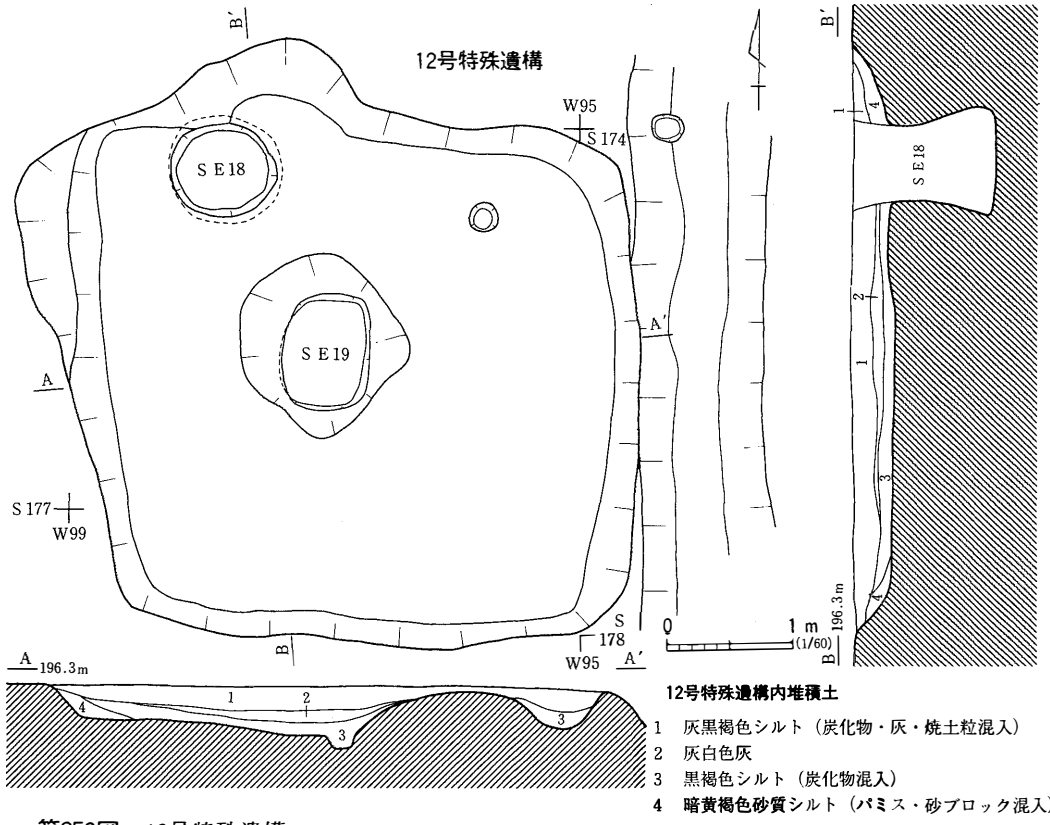
第247図　９号特殊遺構出土遺物（２）



第248図　9号特殊遺構出土遺物（3）



第249図　10・11号特殊遺構

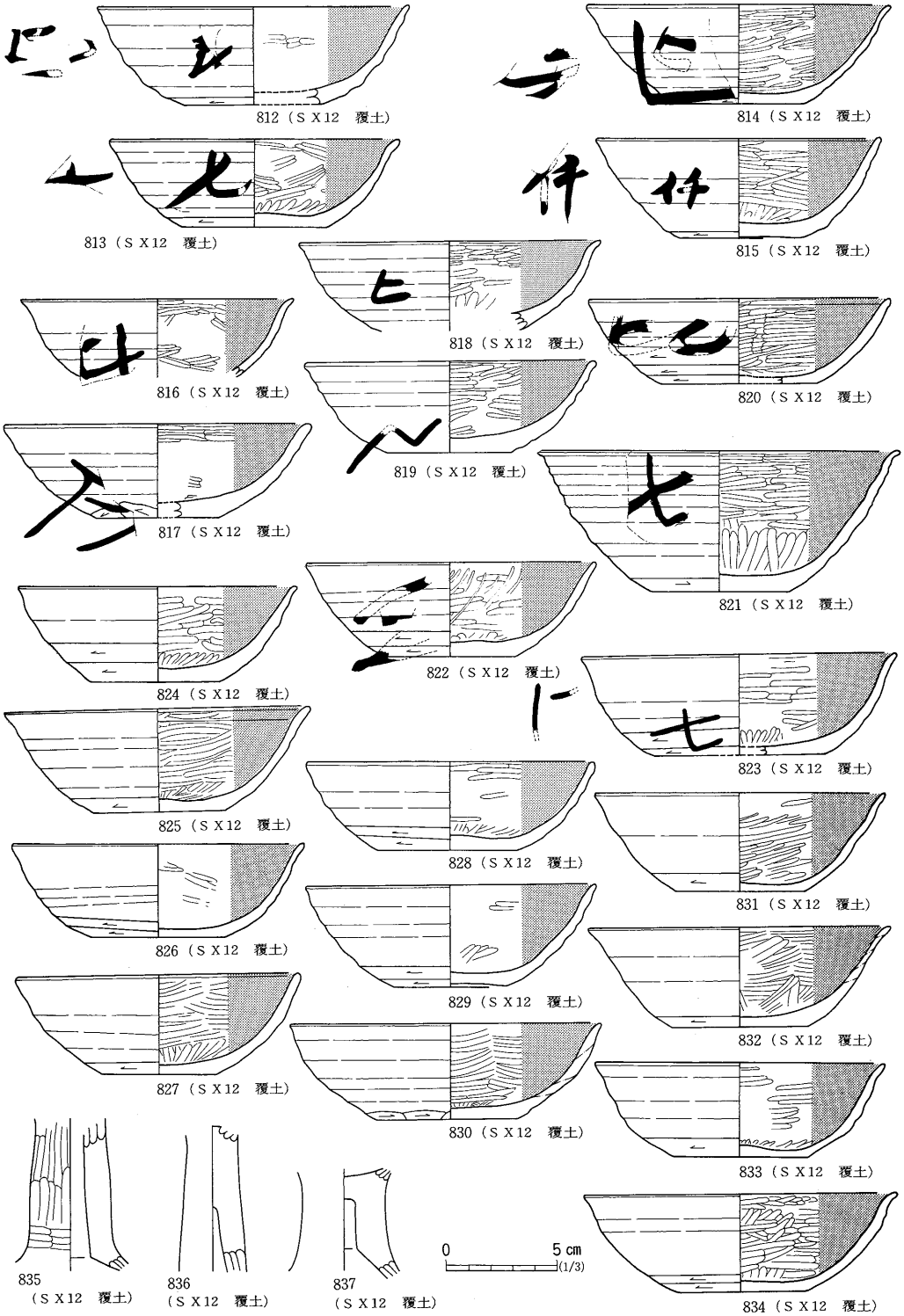


第250図　12号特殊遺構

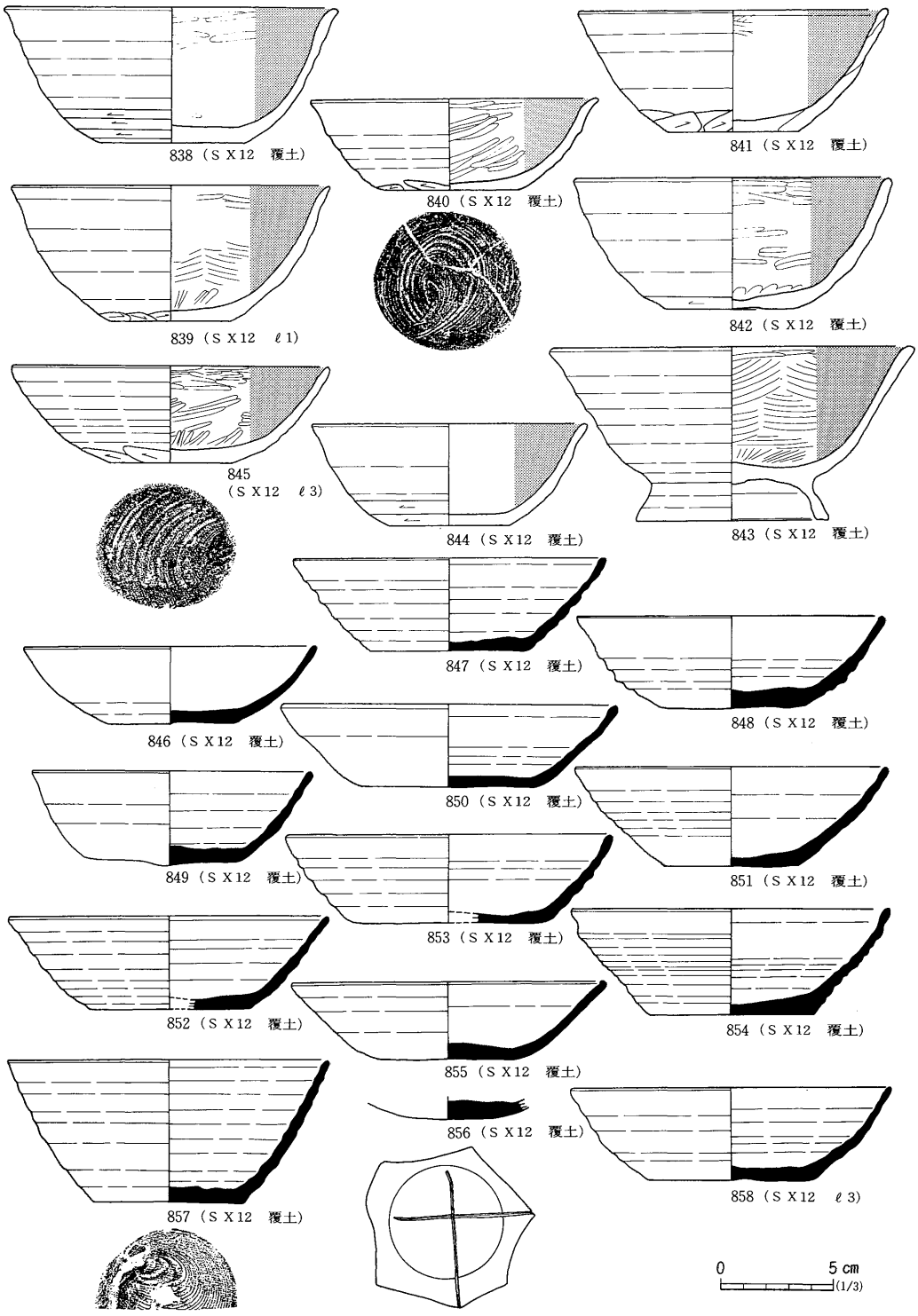
を示しており，多くの遺物が出土している。

遺　　物　（第251～254図）

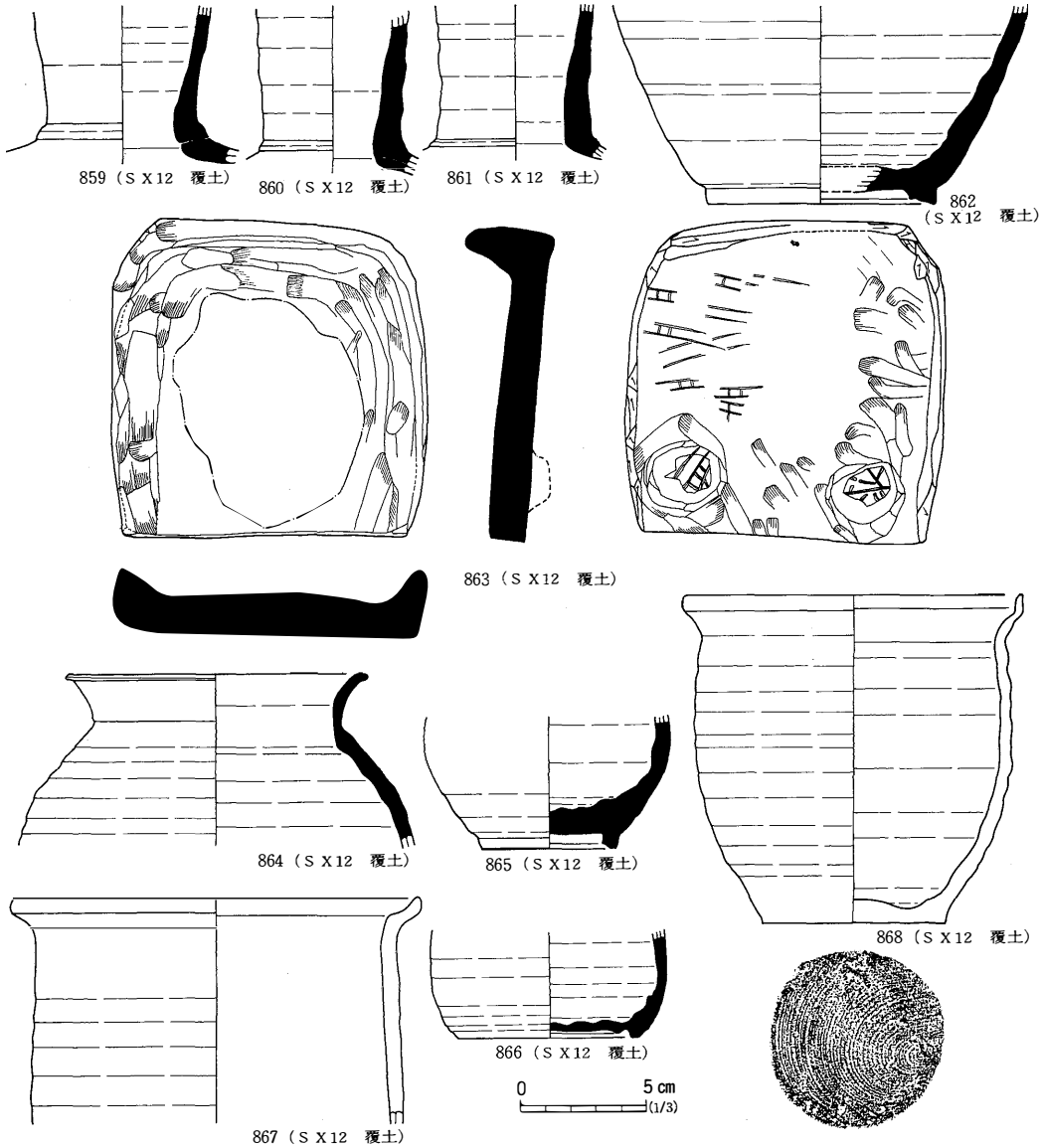
堆積土のℓ１～３からは，多数の遺物が出土している。わずかに古墳時代の土師器（高杯・器台）も出土しているが，主体となるのは９世紀後半を中心とする遺物である。812～834・838～842・844・845が土師器の杯である。すべて内面にヘラミガキ・黒色処理を施したロクロ成形のものである。また，底部～体部下端の調整には，回転ヘラケズリのものと手持ちヘラケズリの双方が認められるが，主体は回転ヘラケズリのものである。底部には，回転糸切り痕を残すものも少量混じる（840・845）。これら土師器の杯には，体部に墨書銘をもつものが12例ある。文字は「仟」以外は「比」と考えられる。また，体部の２ヶ所に墨書銘があるものも４点（812～815）ある。高台杯は椀形を呈する内黒のものが出土している（843）。甕はロクロ成形のもので小型のものは底部に回転糸切り痕を残す。須恵器は杯・大甕と短頸・長頸の瓶が出土している。杯は浅いもの（846～856・858）と深い形態のもの（857）の２種類が出土している。底部切り離しは，浅いものが回転ヘラキリ，深いものが回転糸切りである。他に底部にヘラ記号を有するもの（856）もある。瓶類では，体部と口縁部の接続が２段構成のものがある。大甕は体部外面にタタキの入るもので，他に口縁



第251図　12号特殊遺構出土遺物（１）



第252図　12号特殊遺構出土遺物（2）

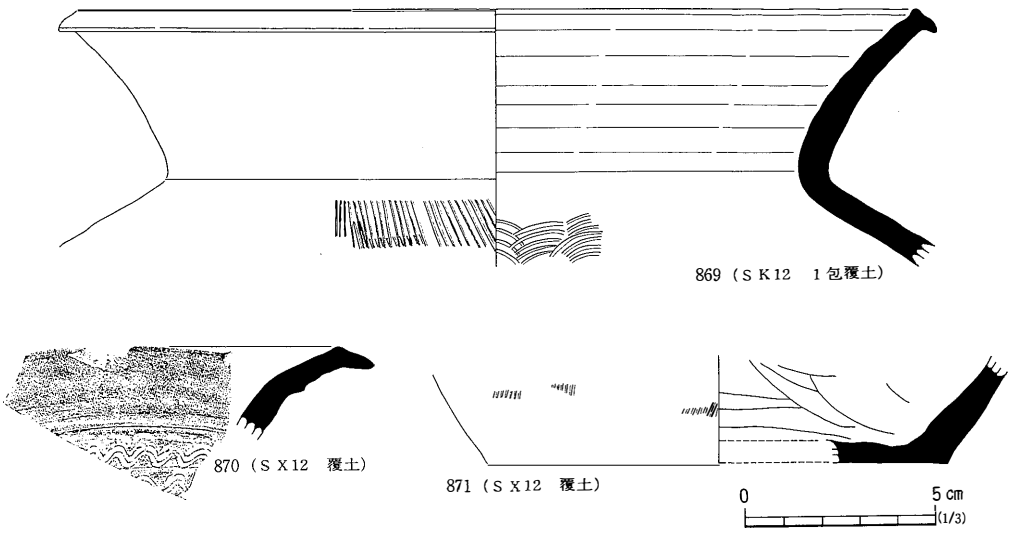


第253図　12号特殊遺構出土遺物（３）

部に櫛描きの波状文が入るもの(870)がある。また，脚部が欠損している以外はほぼ完形の有脚の風字硯(863)が１点出土している。内外面は，ナデとヘラケズリによって調整されている。

まとめ

12号特殊遺構は，床面から住居跡と考えられる柱穴や壁溝は検出されていない。それ以外のプランや壁の立ち上がりを観察してみると，竪穴住居跡に近い形状を呈している。この掘り込みが当初から廃棄物を処理するために行われたかは判断しかねるが，最終的にはこの目的に本遺構は用いられている。遺構の廃棄年代は，出土遺物から９世紀後半頃と考えられる。　（芳賀）



第254図　12号特殊遺構出土遺物（４）

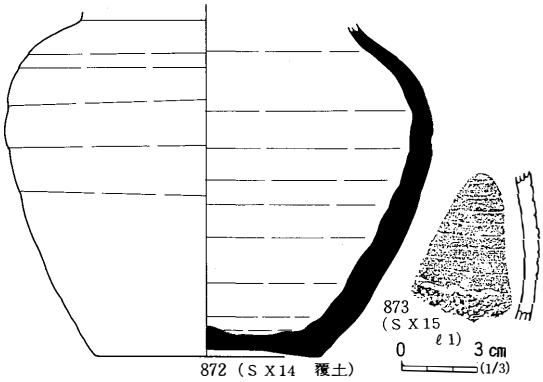
14号特殊遺構　ＳＸ14

遺　　構（第256図）

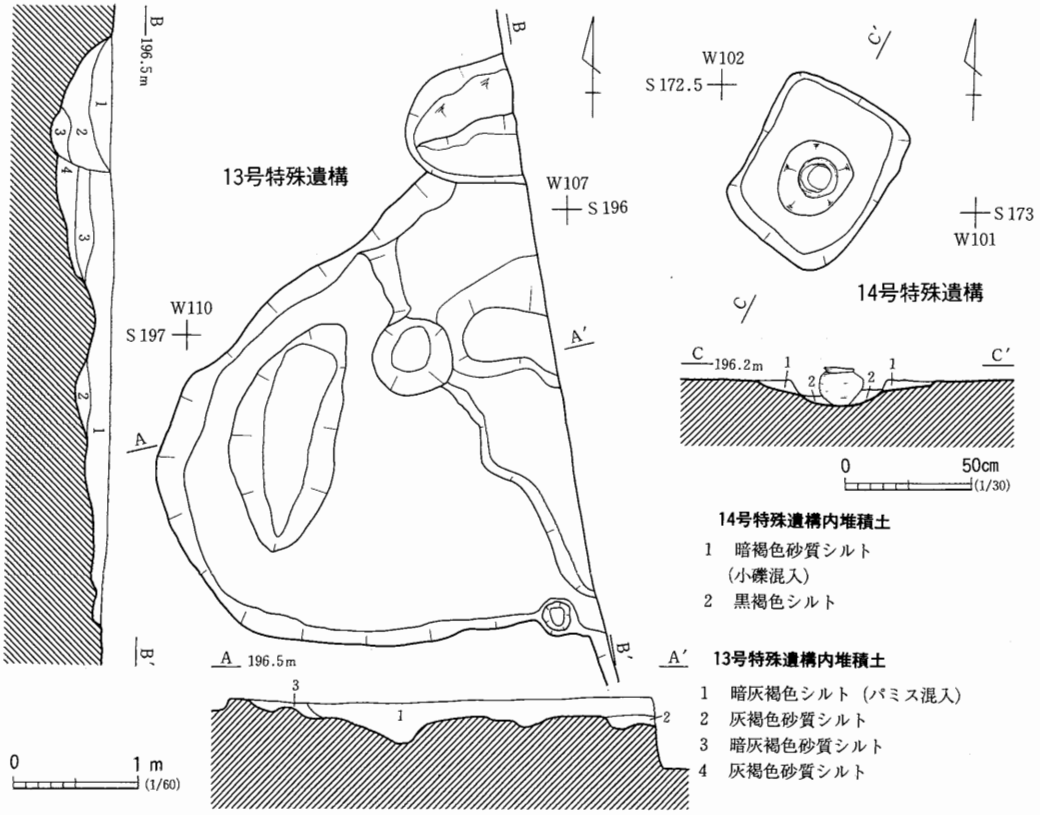
14号特殊遺構は，Ⅴ区中央部のW102・Ｓ173から検出された。遺構検出面はＬⅢ暗黄褐色砂質シルト上面となっている。遺構は，Ⅴ区中央の掘立柱建物跡群からなる遺構集中部の南端部に位置している。周辺には，北側に26号建物跡・５号特殊遺構，東側に12号特殊遺構，西側に１号１本柱列が位置している。遺構の平面プランは長方形状を呈しており，その規模は長軸70cm×短軸55cm程である。また，検出面からの深さは６～10cm，中央の円形で深い部分で20cmを測る。この中央の部分に須恵器の小型甕が埋められていた。そこの埋土は軟質の黒色シルトで，周囲の掘形らしい部分は小砂利混じりの暗褐色シルトが埋められている。

遺　　物（第255図）

出土したのは須恵器の小型甕と弥生土器の甕である。須恵器小型甕(872)は，体部はやや肩の張る到卵形で，底面はほぼ平らで回転ヘラキリ痕の上をなでて消している。頸部は短く外反するか直立すると思われる。弥生土器(873)は混入品と考えられる。甕の体部上半の破片で，多条の平行沈線文の下に結節回転文が施されている。



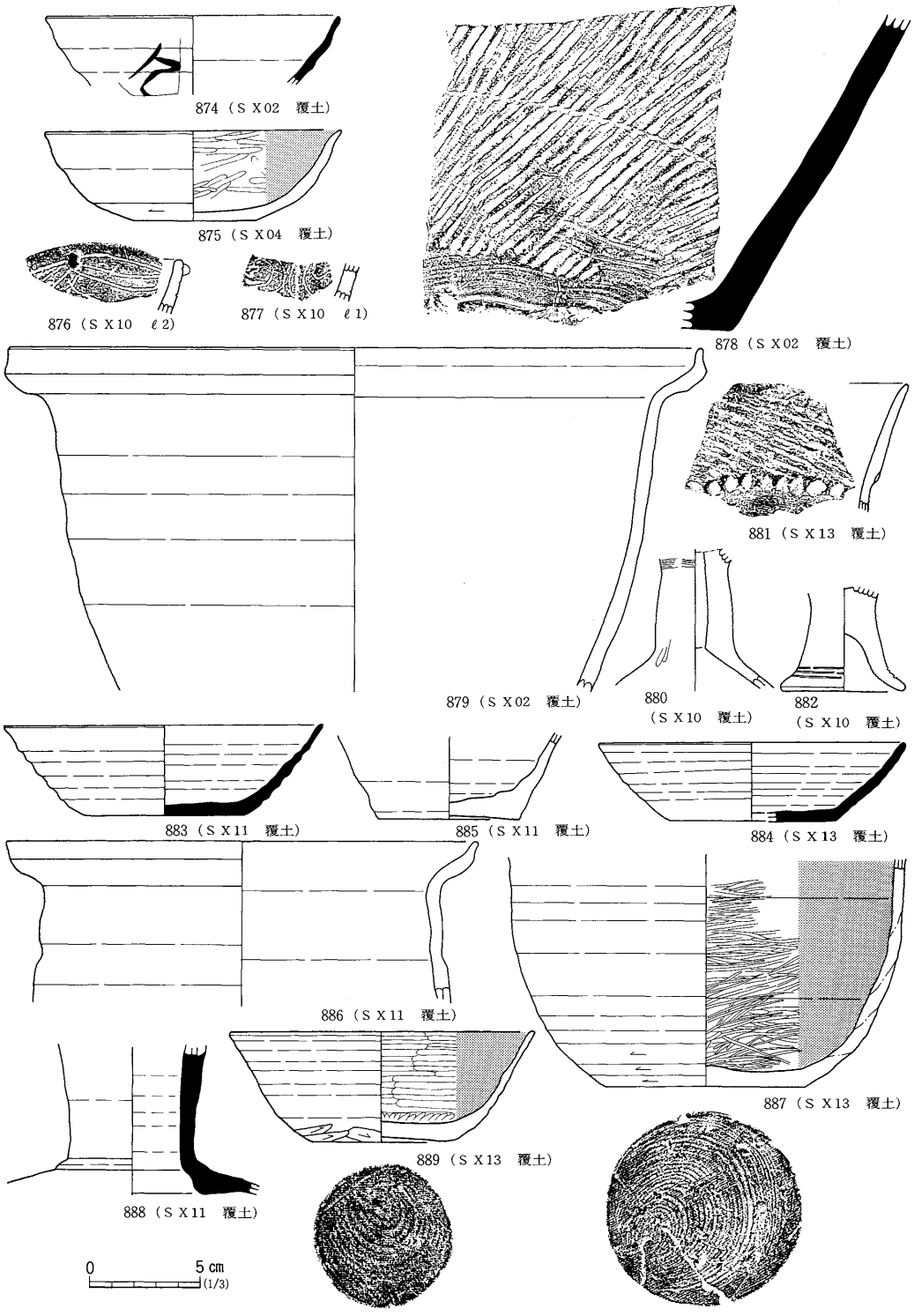
第255図　14・15号特殊遺構出土遺物



第256図　13･14号特殊遺構

まとめ

872の須恵器と同じ器種が大戸窯跡群M19窯の灰原で出土しており，器形から９世紀のものであると考えられている。当遺構は，周囲の建物との関係から９世紀の地鎮に関する遺構と考えられることもできる。（木本）



第257図　2・4・10・11・13号特殊遺構出土遺物

第13節　遺構外出土遺物（第258～277図）

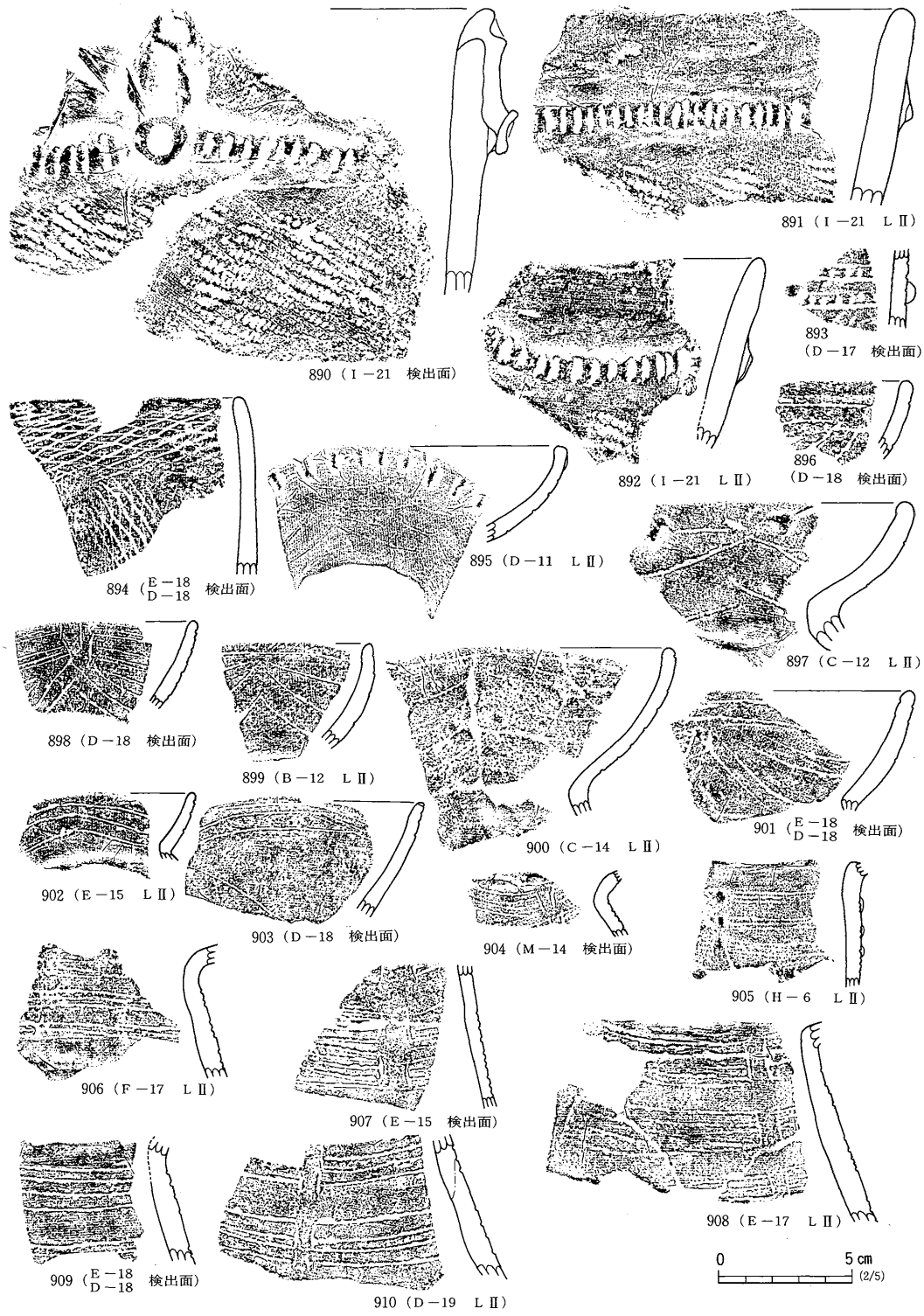
今回の調査では，遺構外からも大量の遺物が出土している。遺物の種類は，縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・砥石・石鏃・フレイク・古銭等である。これらの遺物のうち，出土量が最も多かったのは，土師器で平箱にすると57箱になる。それ以外では，須恵器が35箱，縄文・弥生土器が６箱，石器類が２箱となる。

出土地区では，Ⅴ区が最も多く，Ⅲ区がそれに次ぐ。Ⅴ区の中でも遺構密度が特に高かった70号溝跡内側での出土が最も多かった。出土層位は，表土以下のＬⅡ及び遺構検出面である。

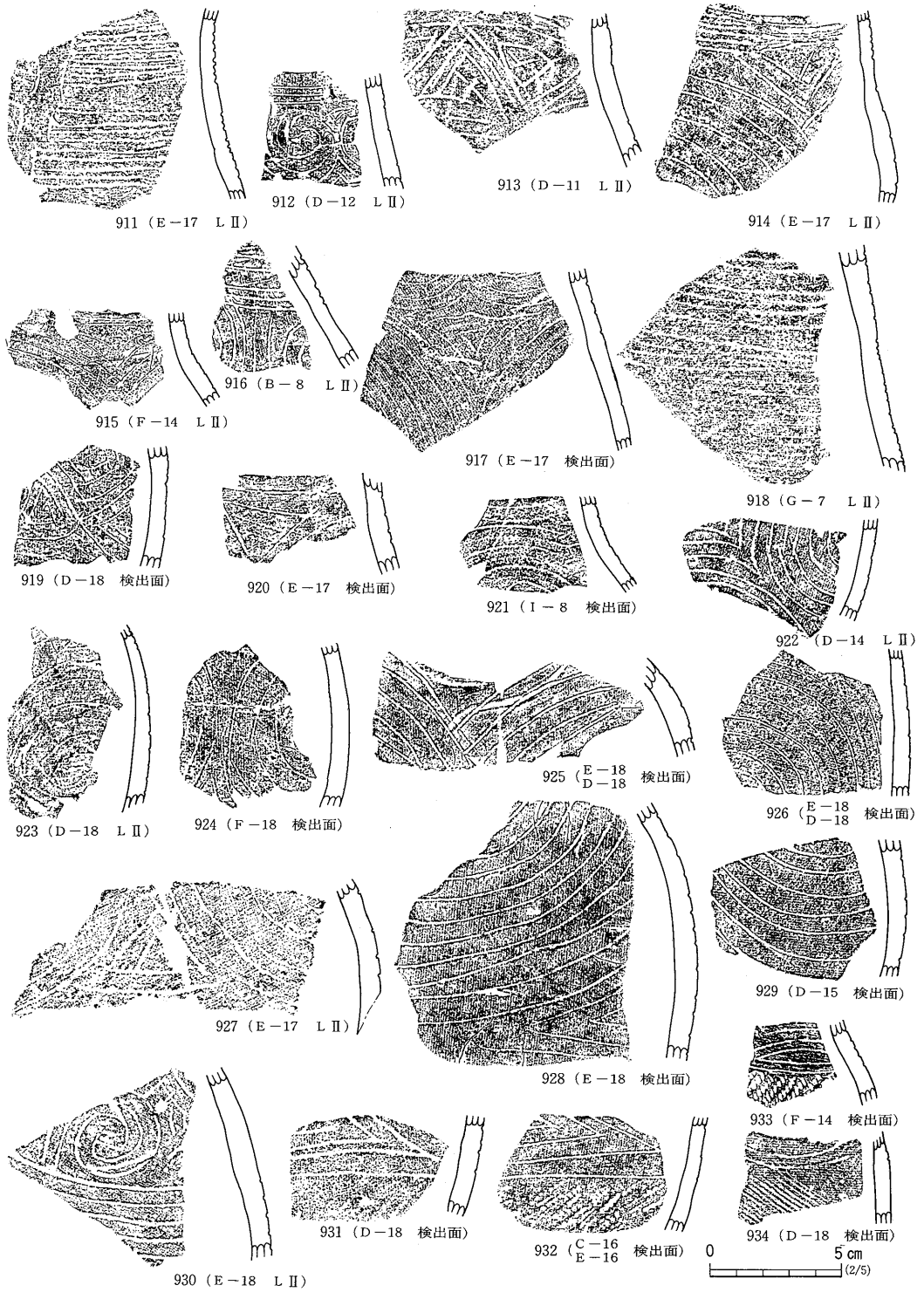
縄文土器では，後期初頭の深鉢(890～892)，晩期の深鉢(894)を図示した。この他，Ⅲ区の晩期の遺構がまとまっている地区からは，その時期の土器もやや多く出土している。

弥生土器では，中期末のものと後期のものが出土している。中期末のものには，壺(895～934)・甕(935～952)・鉢(953・955)・片口鉢(954)・高杯(1090)がある。壺は，口縁部に連弧文，頸部に平行沈線文，体部に渦文が入るもので，ほとんど画一化したものである。甕は，体部上位に平行沈線が入りその下に結節回転文が施されるもの(935～942)，結節回転文のみが施されるもの(943～950)がある。後期のものには，太い１本引きの沈線と磨消縄文手法によって装飾されるものと，多条の沈線によって装飾されるもの，縄文のみあるいは無文で，それに刺突・押圧文が組み合わされて装飾されるものがある。太い沈線と磨消縄文のものには，壺(956～986)・高杯(989～991・994)・鉢(992)・甕(985・987・988)等の器種がある。この中で，高杯と鉢には，縄文が入らず沈線とキザミによってのみ装飾されるものがある。また，甕は口縁部と体部に縄文原体圧痕が巡るものである。多条の沈線によって装飾されたものでは，壺(996～1001・1017)が出土している。これらには，細い沈線によって体部に小波状文が施されるもの(998・999)，同じく格子文が施されるもの(1000・1001)，太い沈線によって体部に縦横の区画文が施されるもの，同じく口縁部に小波状文が施されるものがある。縄文のみのものには，口縁部縄文帯下に押圧が施されるもの(1003～1006)，そこにキザミの施されるもの(1002・1007・1008・1010)，縄文帯のみのもの(1014)，口縁部無文帯下にキザミの施されるもの(1092)，口縁部無文帯に押圧の施されるもの(1091)がある。無文のものには，口縁部内外面にケズリが加えられ口縁下に押圧が加えられるもの(1031)がある。この他には，櫛描文の施されたもの(1029)，無文の壺(1108・1109)，内外面にハケメの施された壺がある。また，地文のみの体部及び底部の地文には，単節縄文・付加条縄文・撚糸文がある。このうち，付加条縄文には，羽状を呈するものもある。

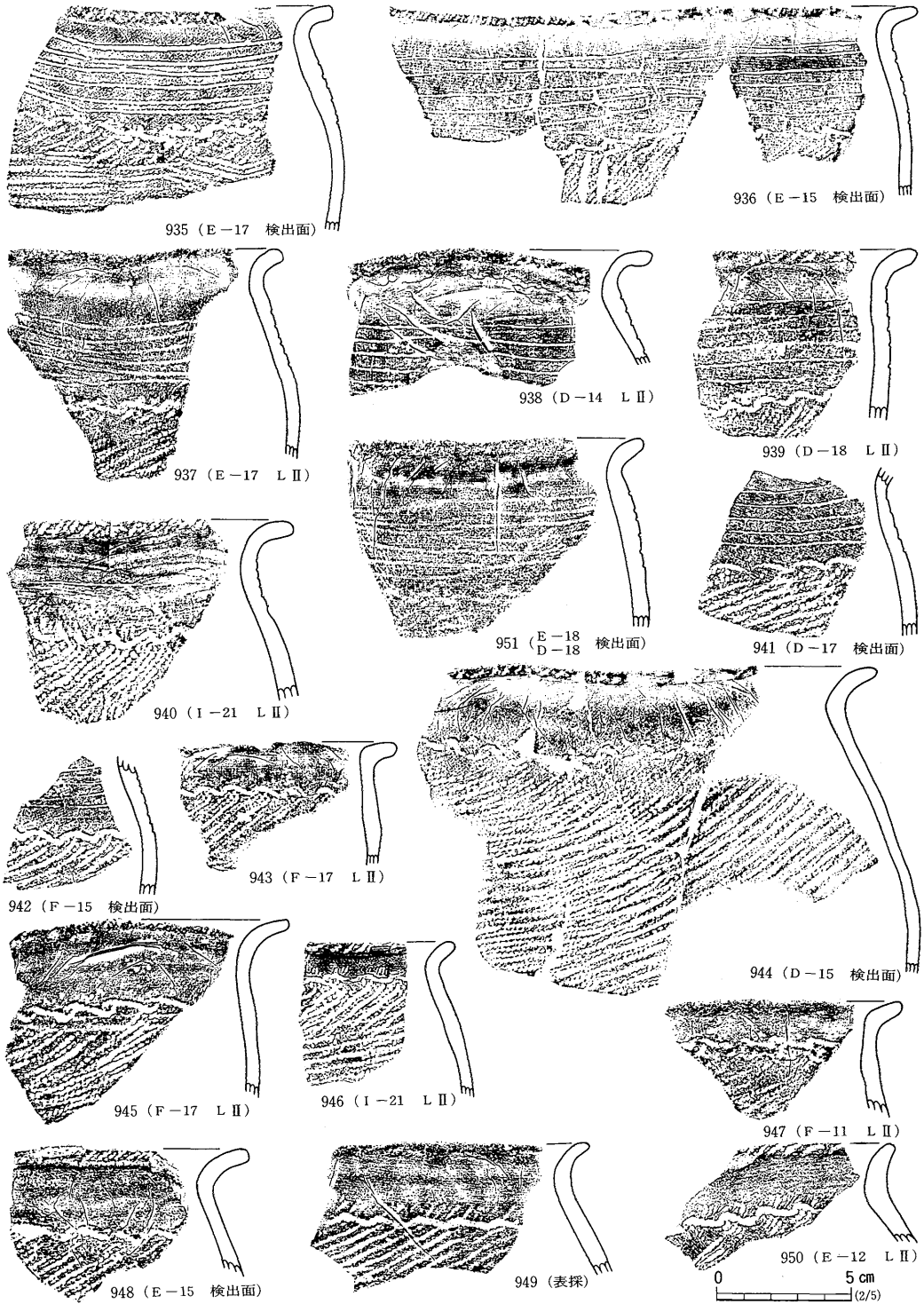
古墳時代の土師器には，壺(1097・1105)・器台(1098)・高杯(1094)・杯(1104)・台杯甕(1110～1113・1116)がある。壺には，口縁部の長い有段のものがある。高杯には，中実の柱状脚部の



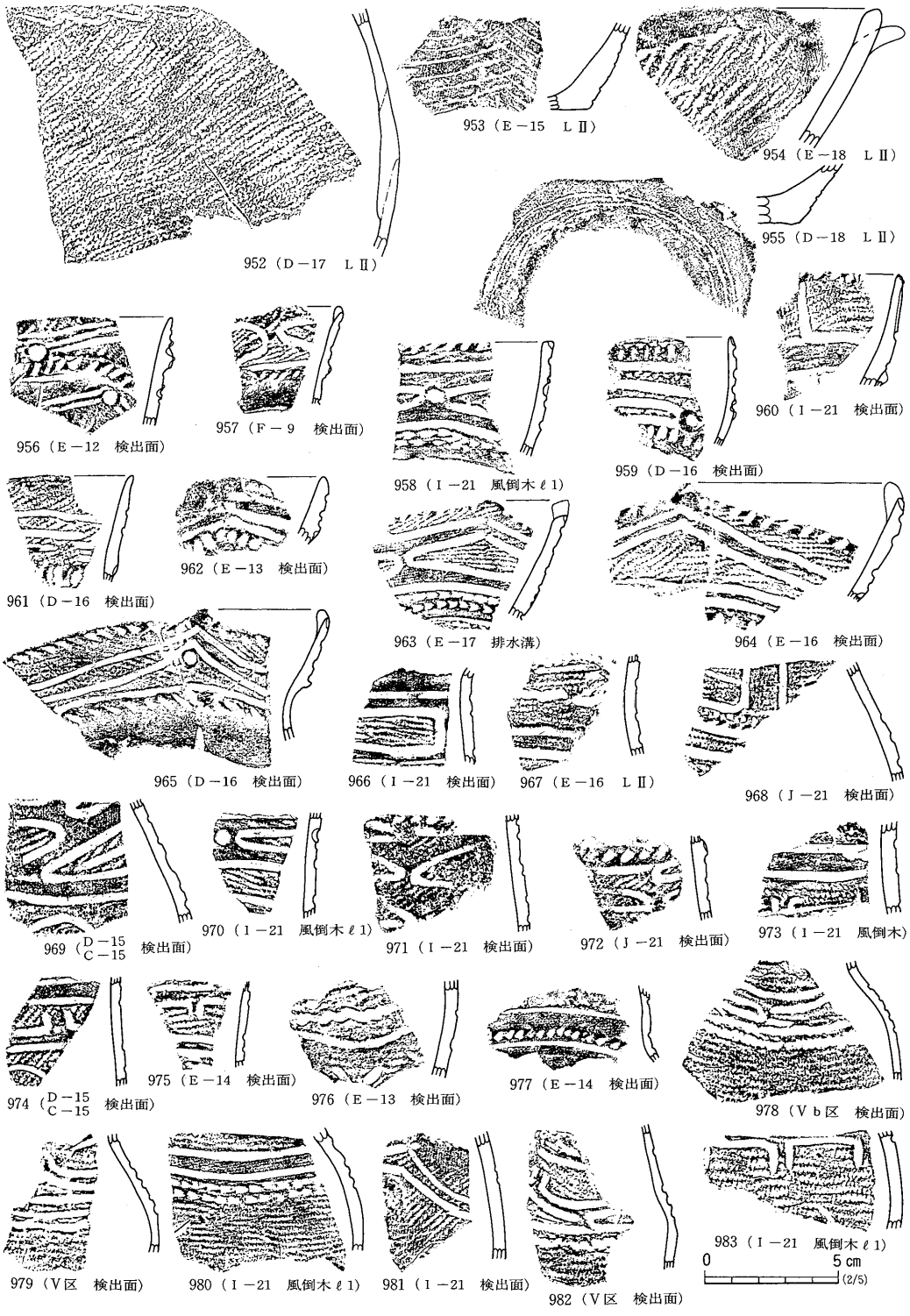
第258図　遺構外出土遺物（1）



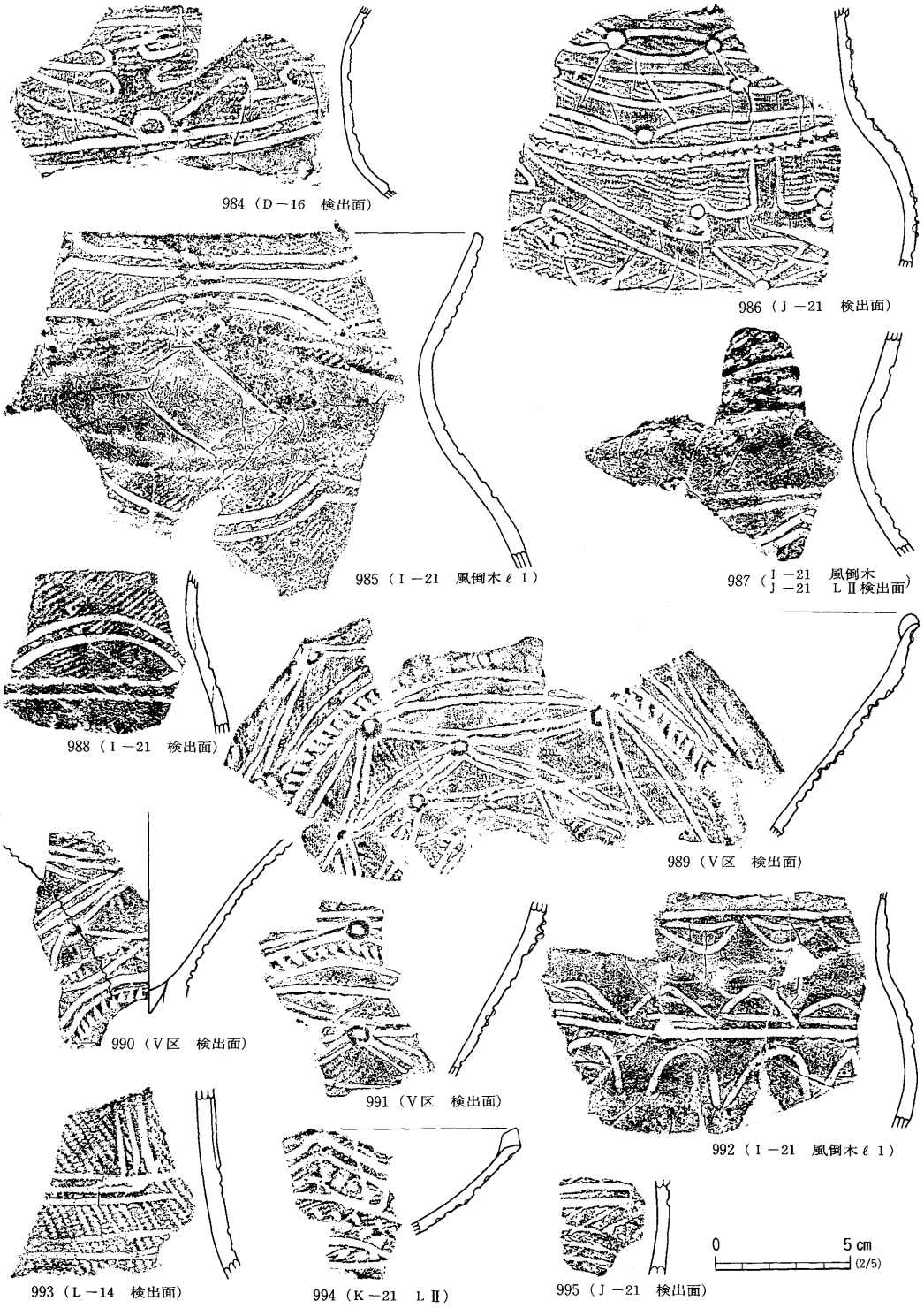
第259図　遺構外出土遺物（２）



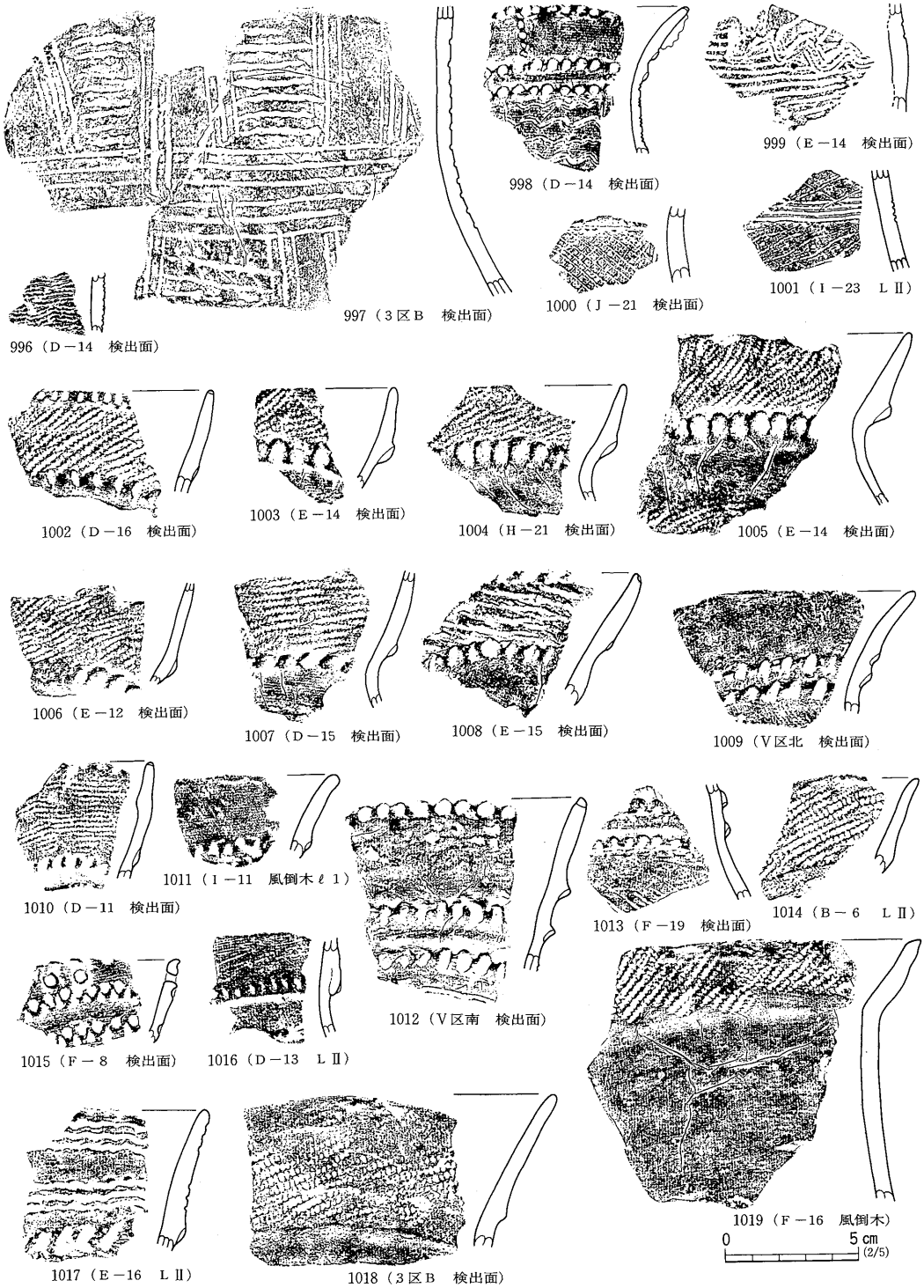
第260図　遺構外出土遺物（3）



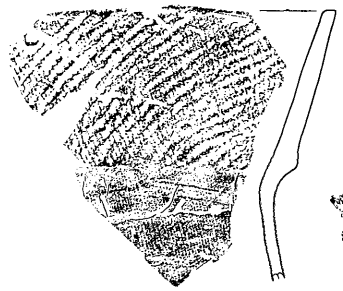
第261図　遺構外出土遺物（４）

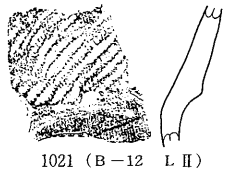


第262図　遺構外出土遺物（5）

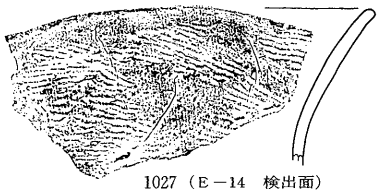


第263図　遺構外出土遺物（６）

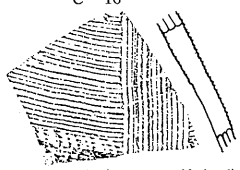

1020（V区　検出面）


1021（B－12　L Ⅱ）

1022（E－16 / C－16　検出面）

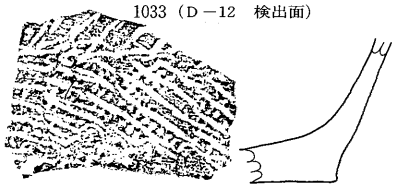

1027（E－14　検出面）

1028（I－21　風倒木 ℓ 1）

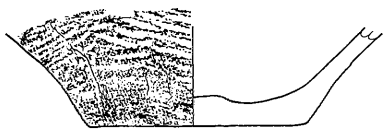

1029（D－14　検出面）

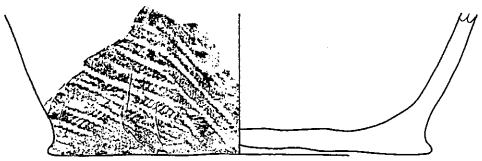
1030（F－14　検出面）

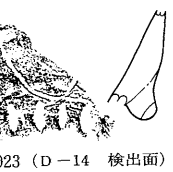
1033（D－12　検出面）

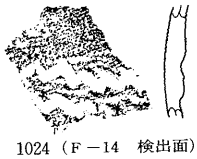

1034（A－12　L Ⅱ）

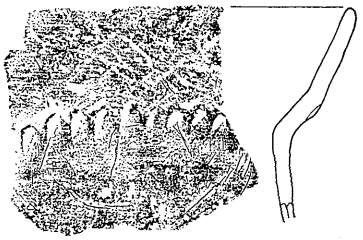
1039（D－14　検出面）


1035（C－12　検出面）


1036（E－14　検出面）

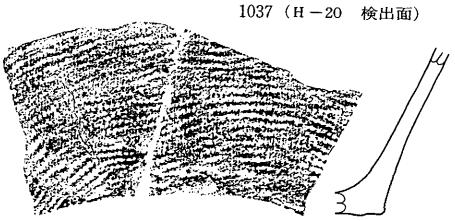

1023（D－14　検出面）

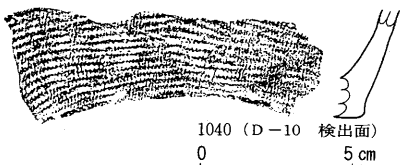

1024（F－14　検出面）

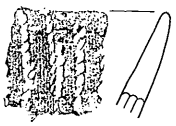

1031（D－15　検出面）

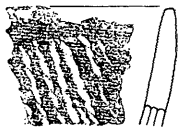
1032（D－13　攪乱）

1037（H－20　検出面）


1038（D－14　検出面）

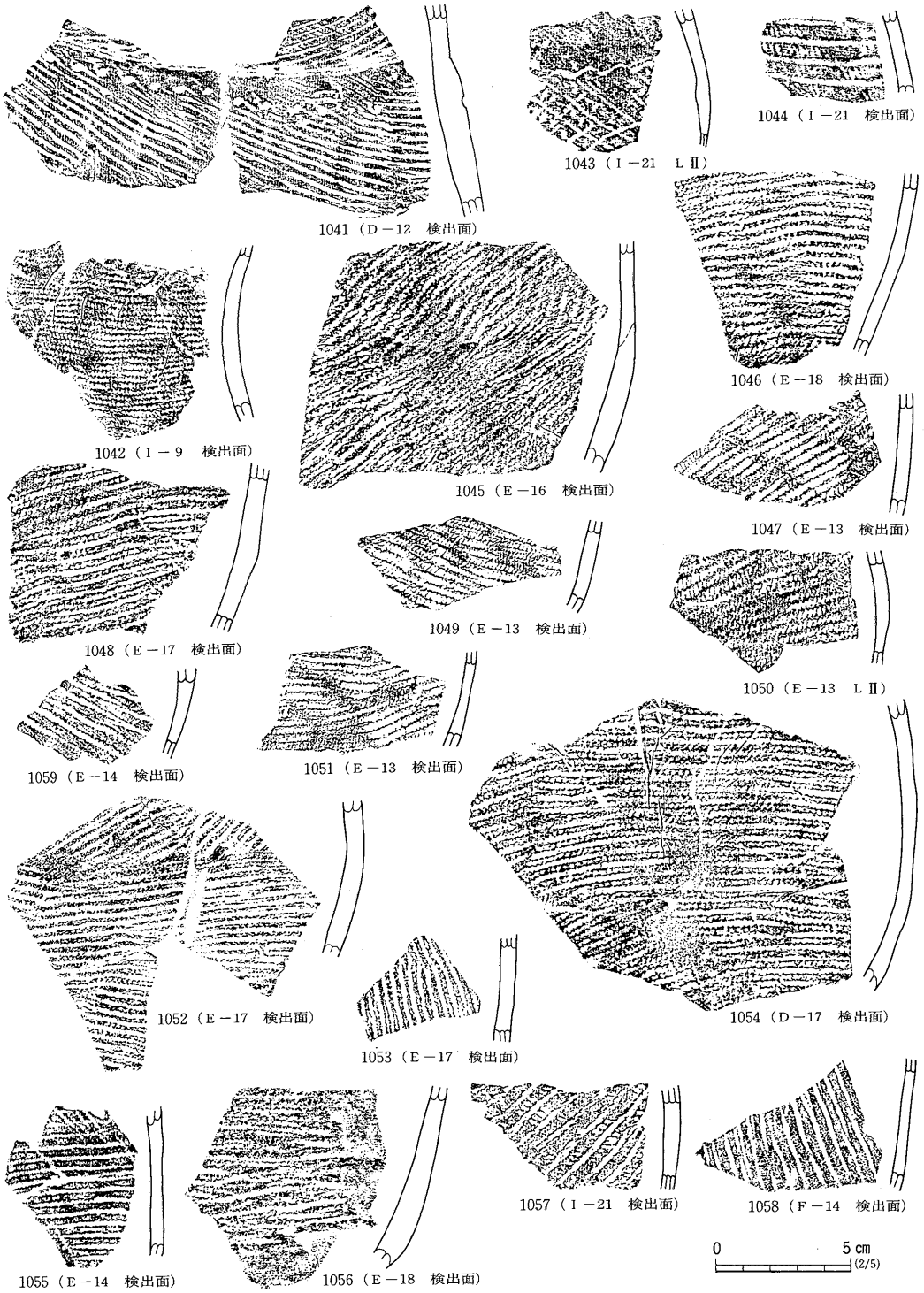

1040（D－10　検出面）


1025（C－10 / B－10　検出面）

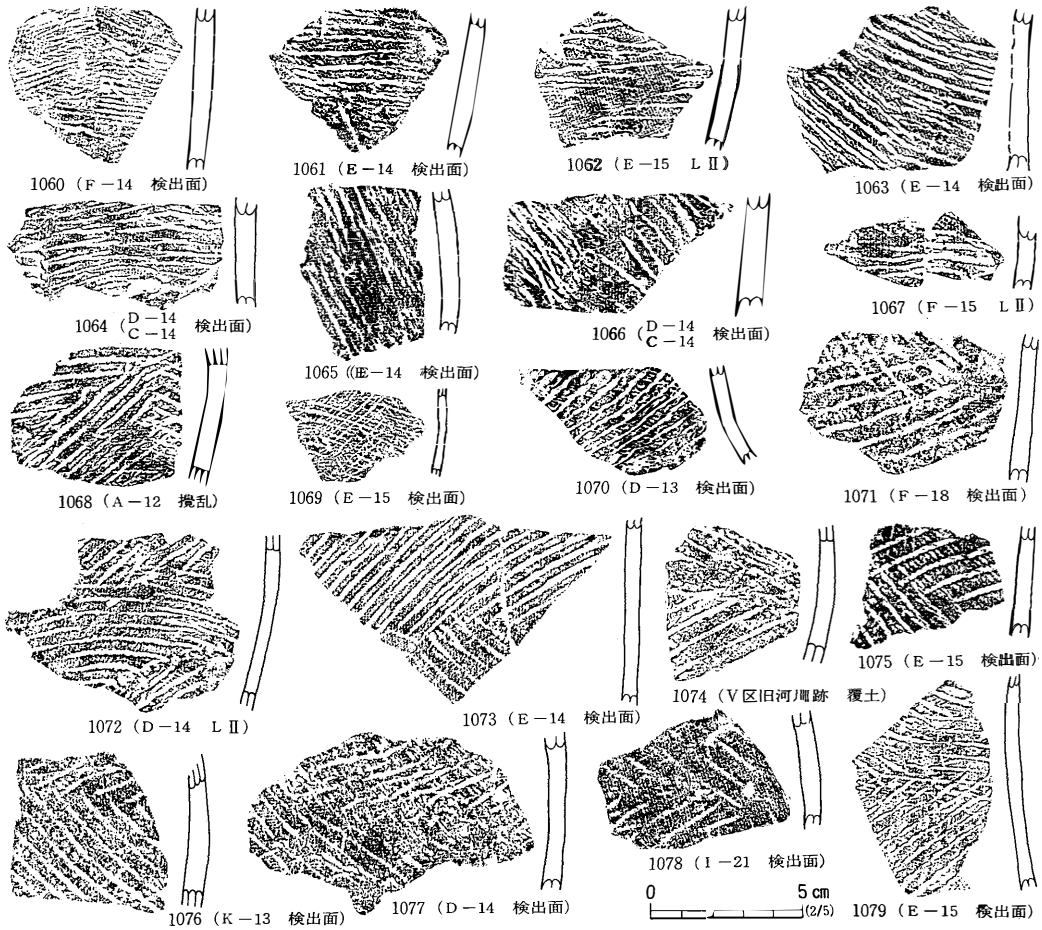

1026（M－14　検出面）

0　5 cm (2/5)

第264図　遺構外出土遺物（7）



第265図　遺構外出土遺物（８）



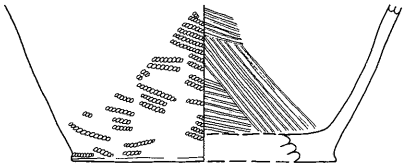
第266図　遺構外出土遺物（９）

もの，中空の柱状脚部のもの，中空の円錐台状脚部のものがある。甕には，体部内外面ハケメ調整のもの，外面ハケメで内面ナデのものがある。

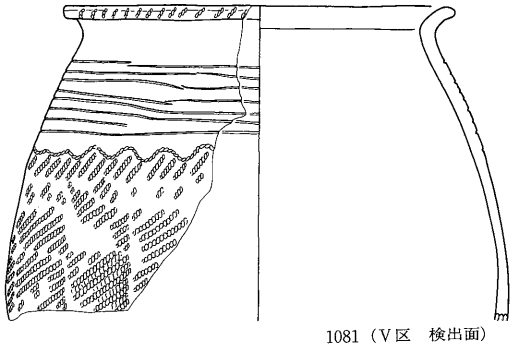
平安時代の土師器には，杯(1117～1165・1168)・高台杯(1170～1173)・蓋(1178)・鍋(1175)・甕(1176・1177・1179)・筒形土器がある。中でも杯には，底部～体部下端にかけての調整に手持ちヘラケズリが施されるもの，回転ヘラケズリが施されるもの，無調整のものがある。この他赤焼土器には杯(1166・1167・1169)が，土師質土器には，皿(1174)がある。

平安時代の須恵器では，杯(1183～1206・1212)・高台杯(1210)・蓋(1207～1209)・長頸瓶(1214～1220・1223)・横瓶(1221)・広口瓶(1227)・甕(1234)・大甕(1239・1240)・風字硯(1242)が出土している。

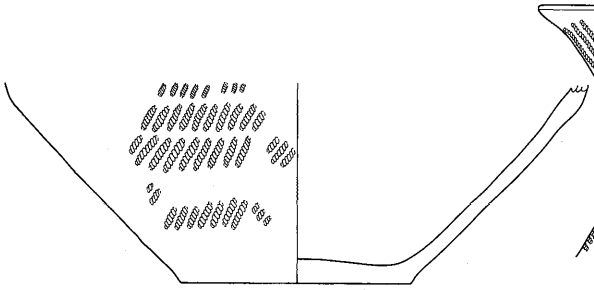
石器には，石鏃(⑮・⑯)・打製石斧(⑲～㉑)・凹石(㉒)・砥石(㉓～㉖)が出土している。他には，中国銭(⑫・⑬)・鉄製品(⑰)・環状銅製品(⑱)がある。　(藤谷)



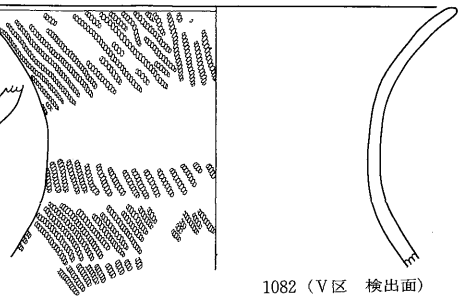
1080（Ⅴ区　検出面）



1081（Ⅴ区　検出面）

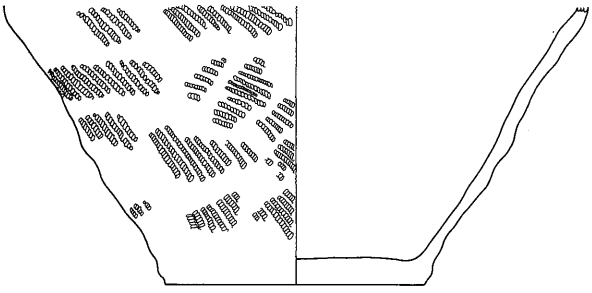


1083（C－12 / E－12　検出面）

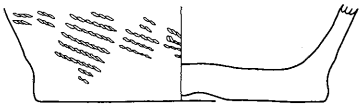


1082（Ⅴ区　検出面）

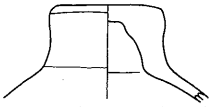
1085（E－13　検出面）



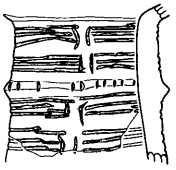
1084（M－18　LⅡ）



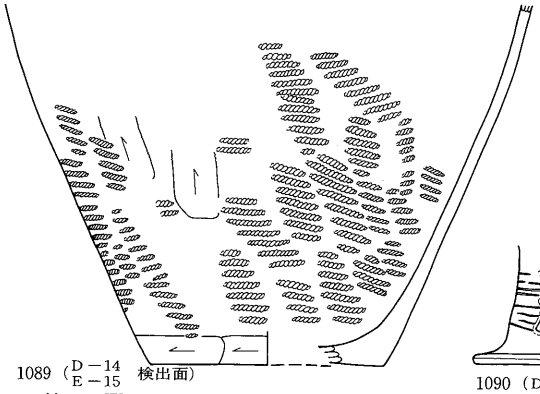
1086（E－15　検出面）



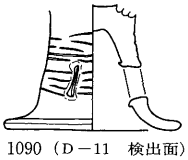
1087（E－18　検出面）



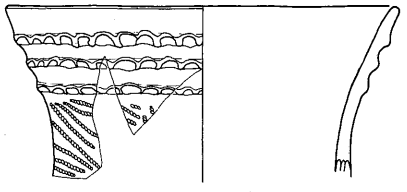
1088（E－18　検出面）



1089（D－14 / E－15　検出面）



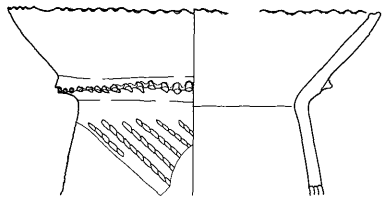
1090（D－11　検出面）

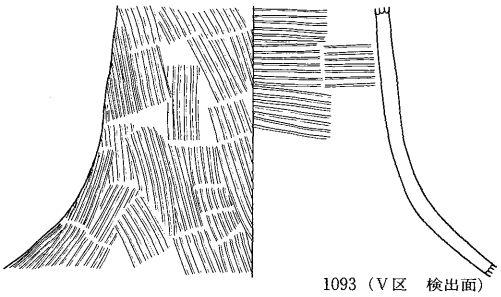


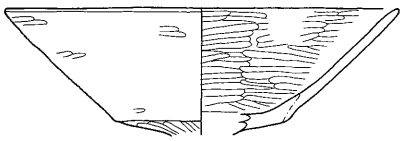
1091（Ⅴ区　検出面）

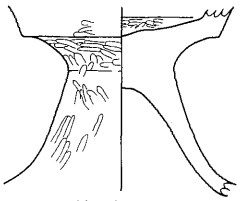
0　5 cm (1/3)

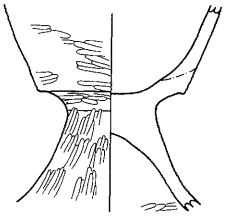
第267図　遺構外出土遺物(10)

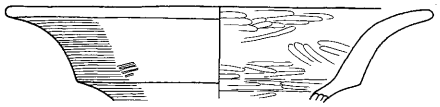

1092（V区　検出面）

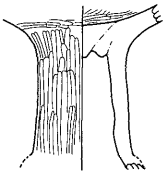

1093（V区　検出面）

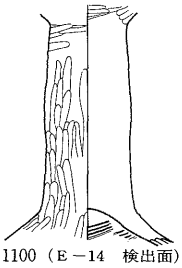

1094（D－15　検出面）

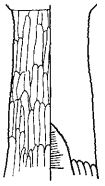

1095（I－20　検出面）

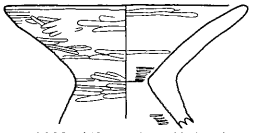

1096（D－15 / C－15　検出面）

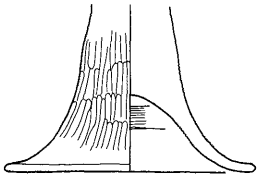

1097（F－15　検出面）

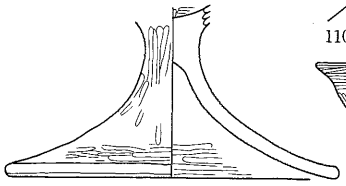

1099（E－16 / C－16　検出面）

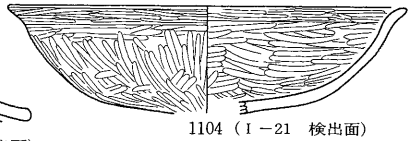

1100（E－14　検出面）

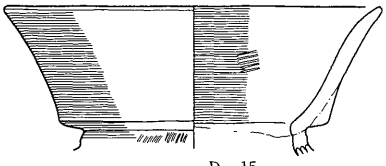

1101（C－12　L Ⅱ）

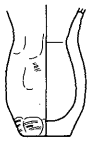

1098（V区北側　検出面）


1102（E－16　排水溝）

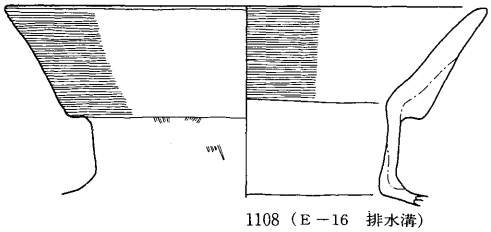

1103（E－16 / C－16　検出面）

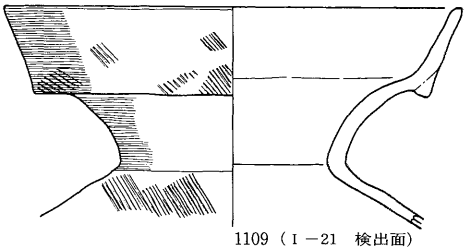

1104（I－21　検出面）


1105（D－15 / C－15　検出面）


1106（E－13　検出面）

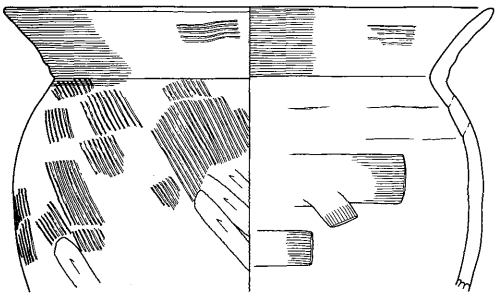
1107（D－9　検出面）


1108（E－16　排水溝）

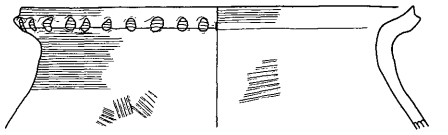

1109（I－21　検出面）

0　5cm (1/3)

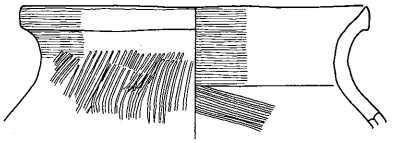
第268図　遺構外出土遺物(11)



1110（Ⅴ区　検出面）

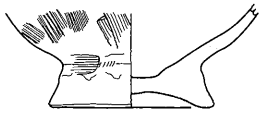


1111（Ｄ－16　検出面）

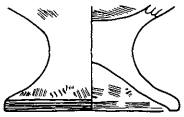


1112（Ⅴ区　検出面）

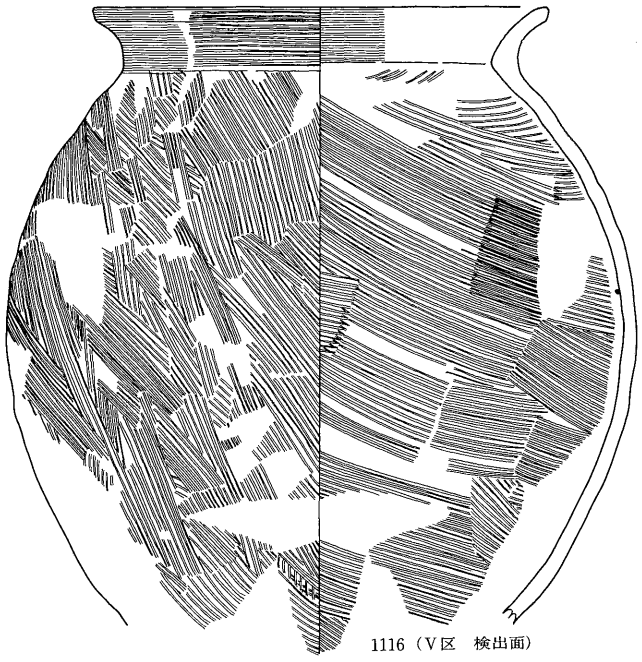
1113（Ⅴ区　検出面）



1114（Ⅰ－21　風倒木）



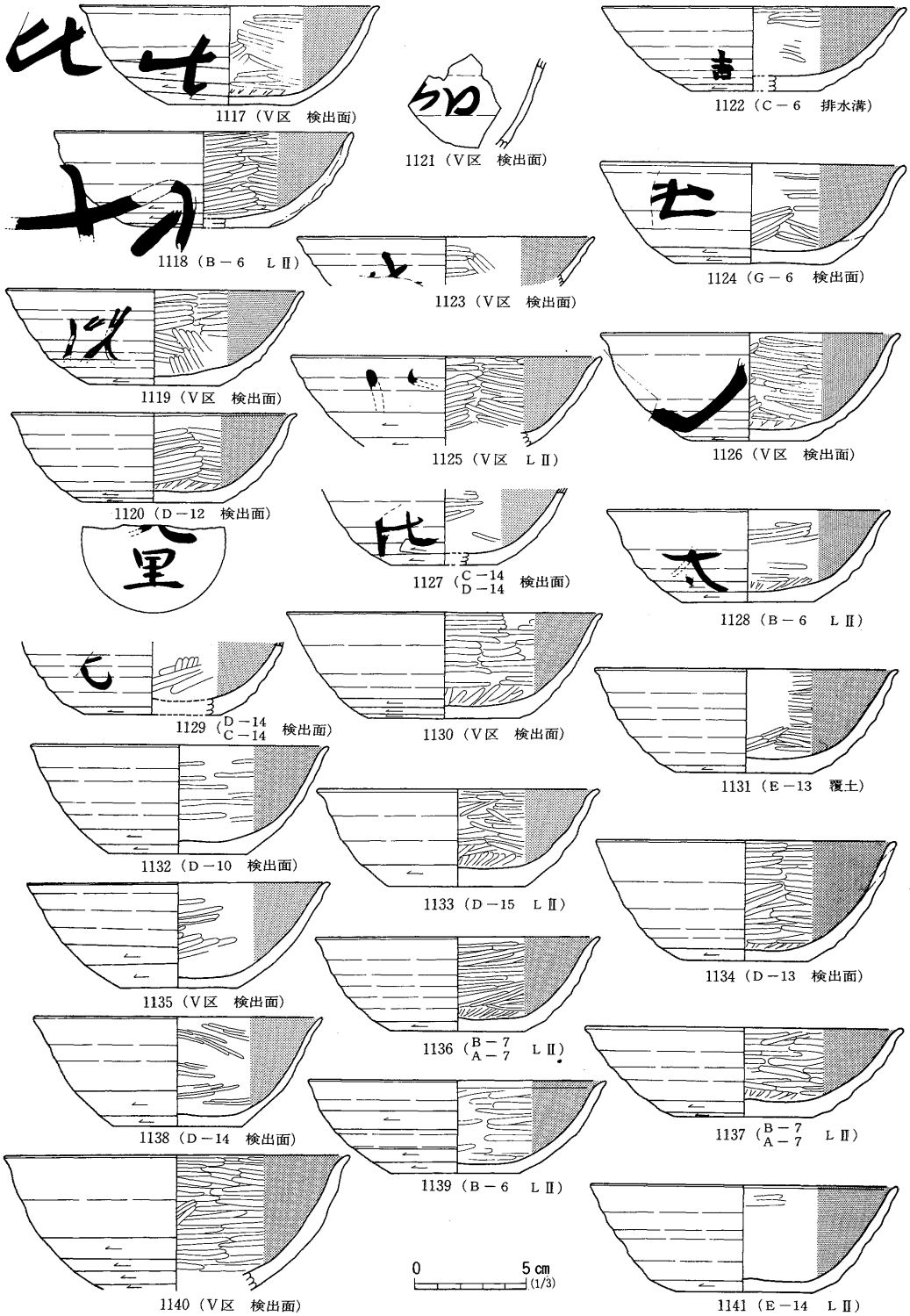
1115（Ｄ－16　検出面）



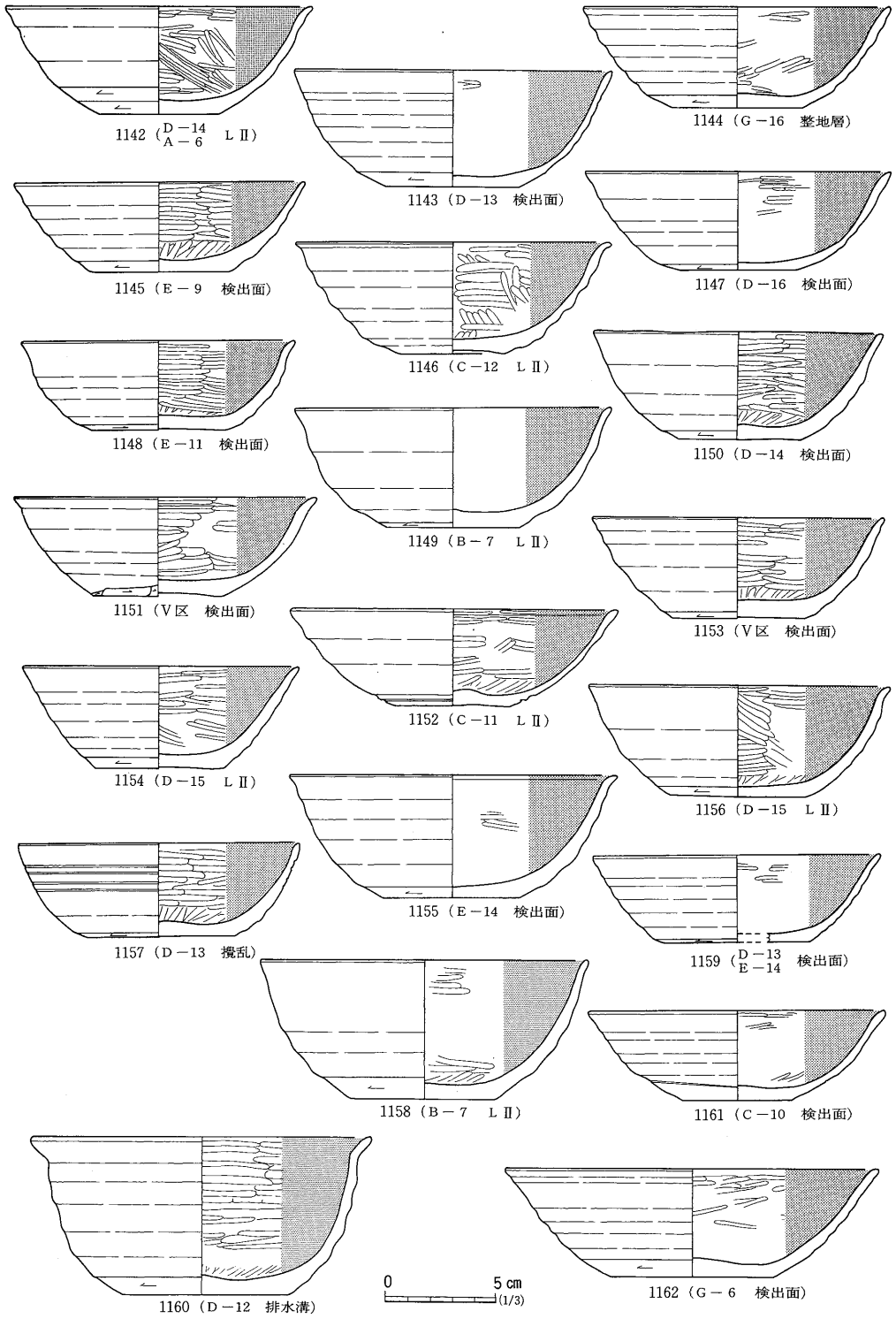
1116（Ⅴ区　検出面）

0　5 cm (1/3)

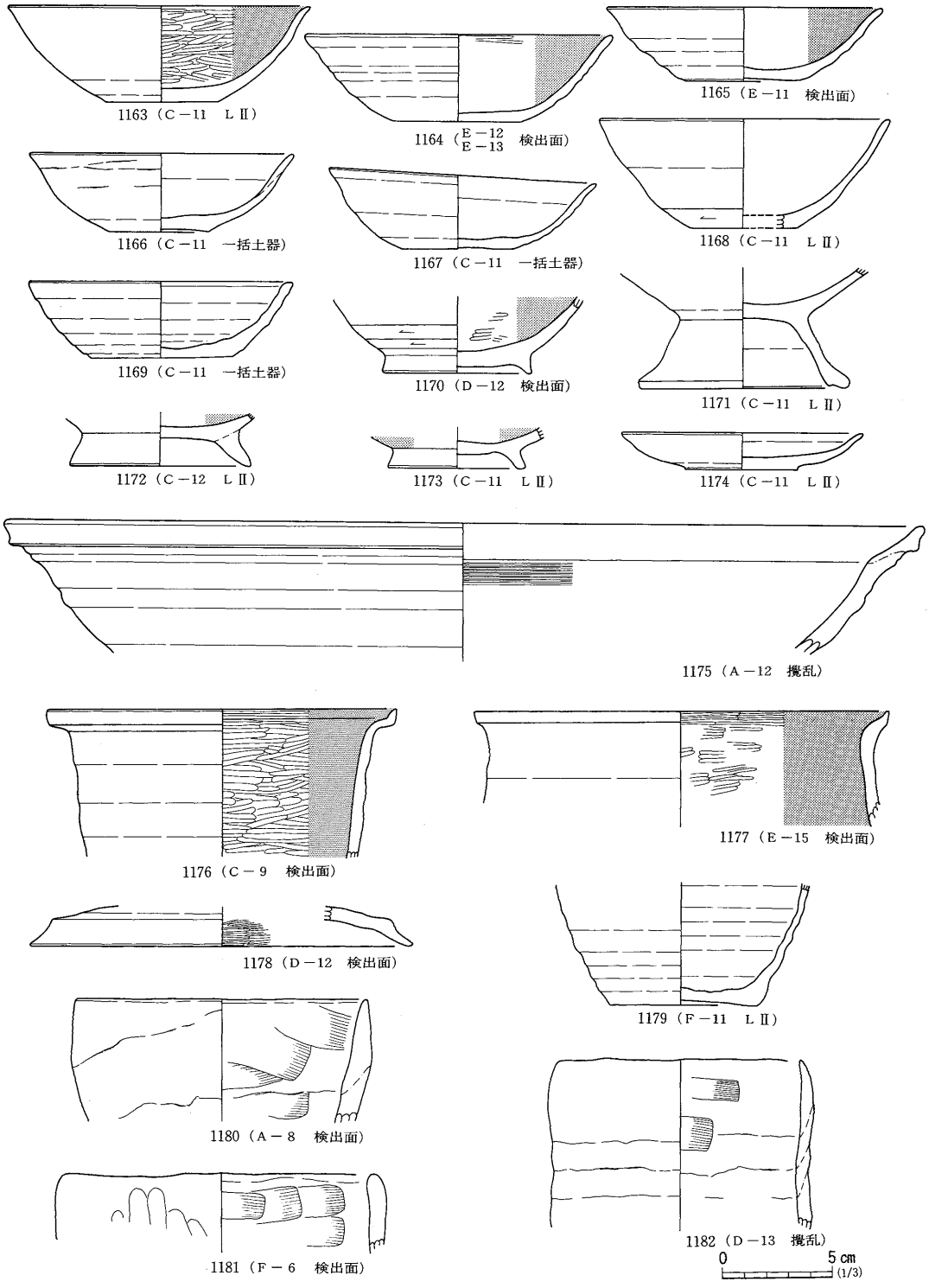
第269図　遺構外出土遺物（12）



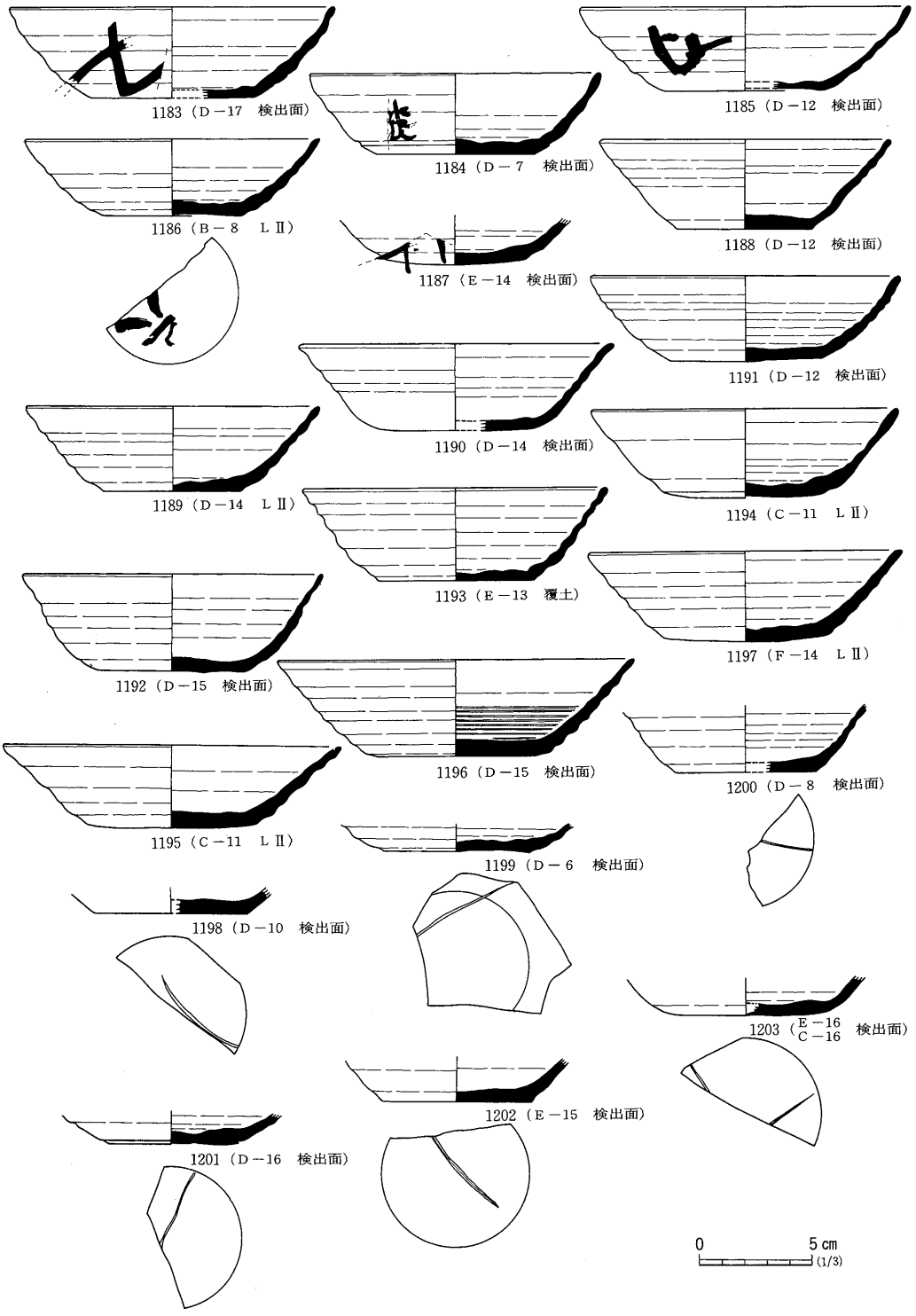
第270図　遺構外出土遺物（13）



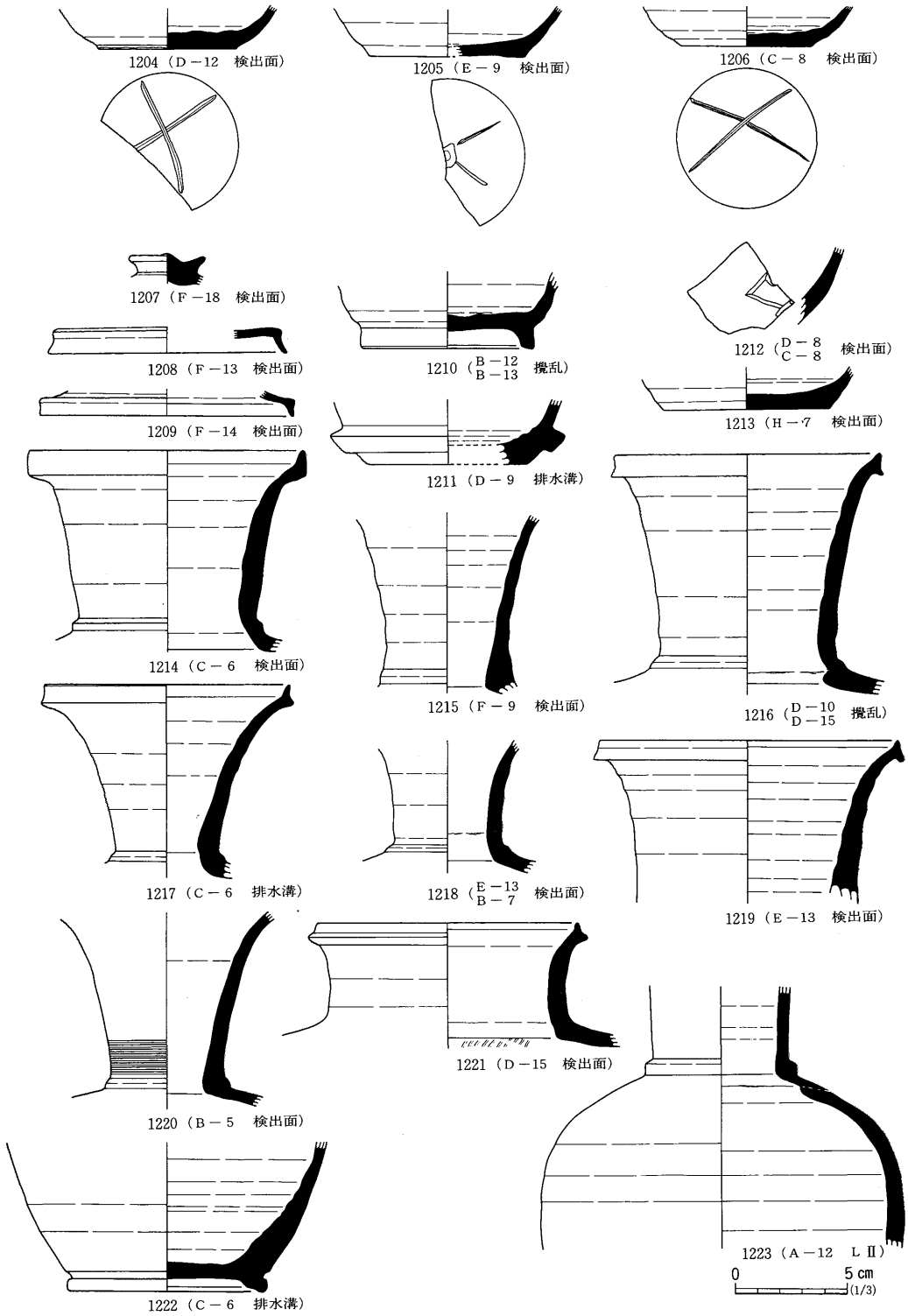
第271図　遺構外出土遺物(14)



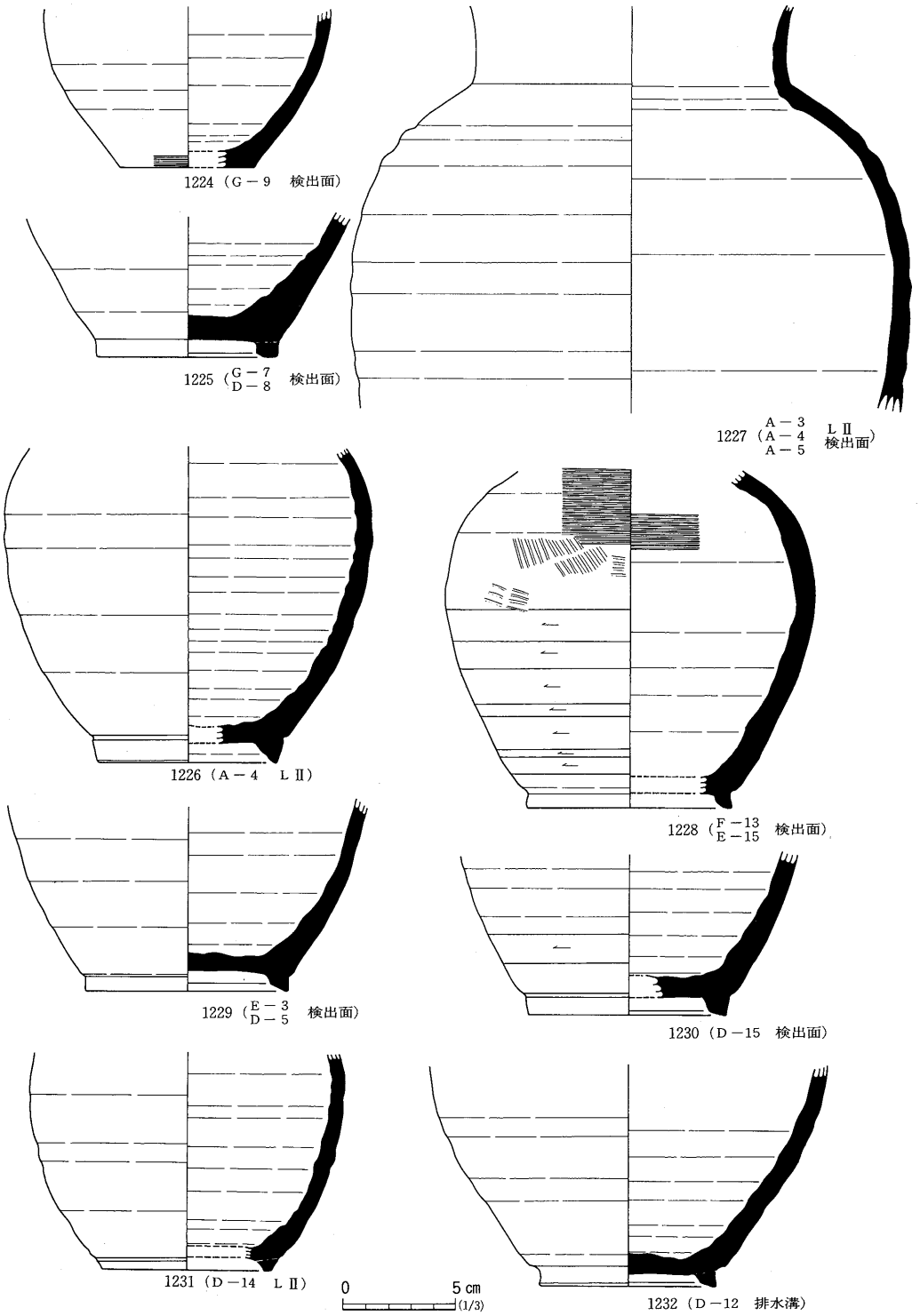
第272図　遺構外出土遺物(15)



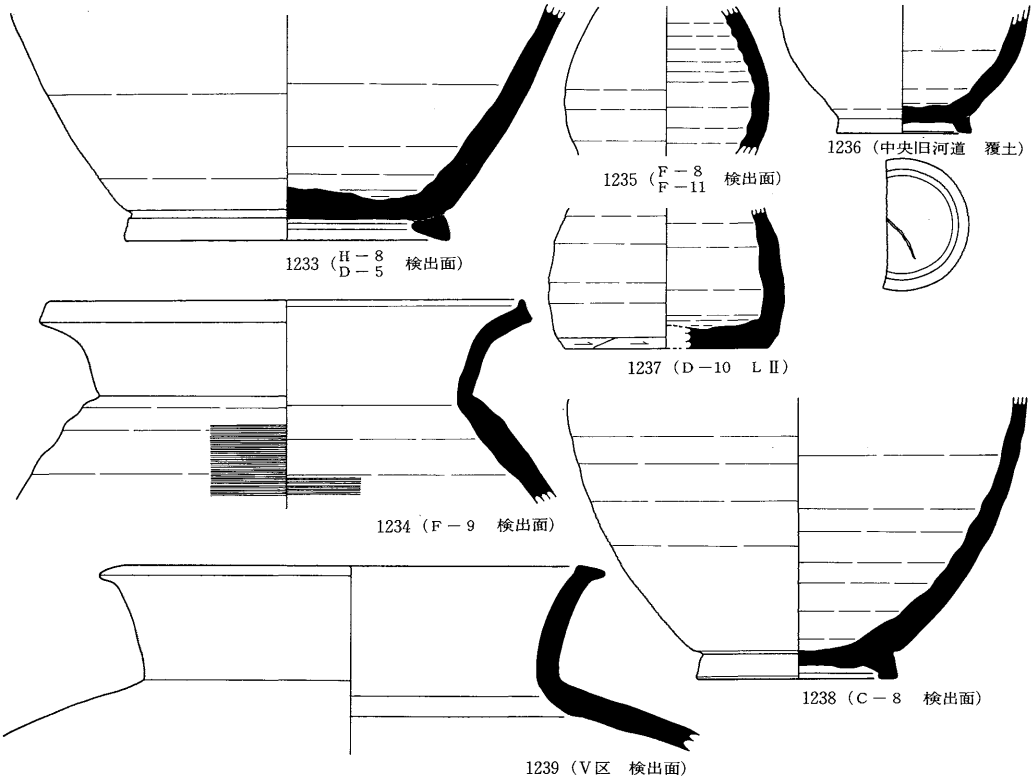
第273図　遺構外出土遺物(16)

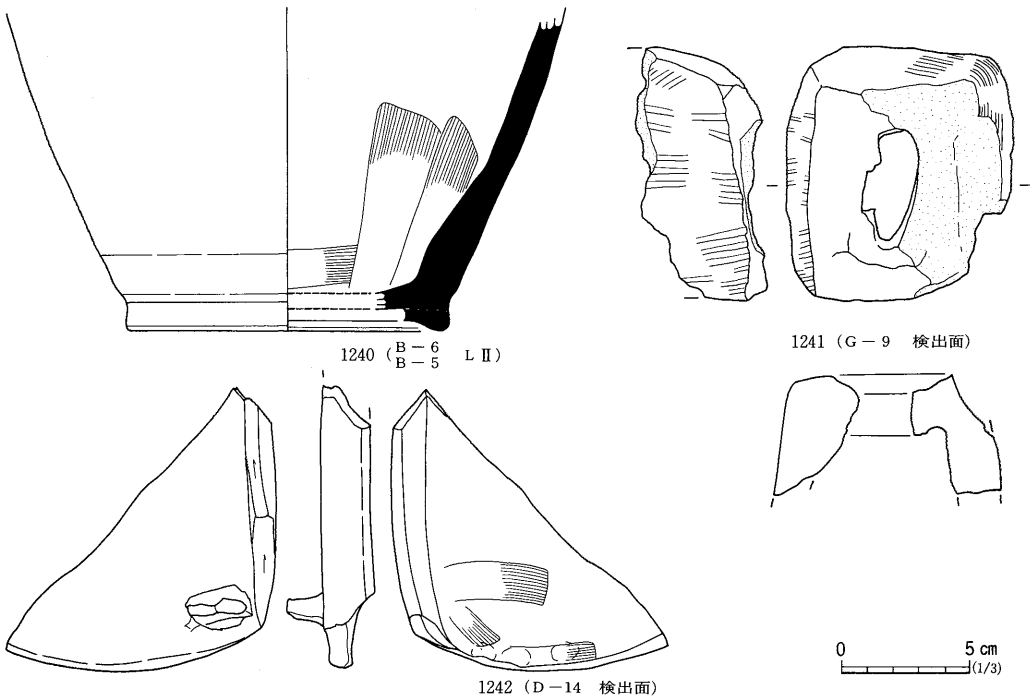


第274図　遺構外出土遺物(17)

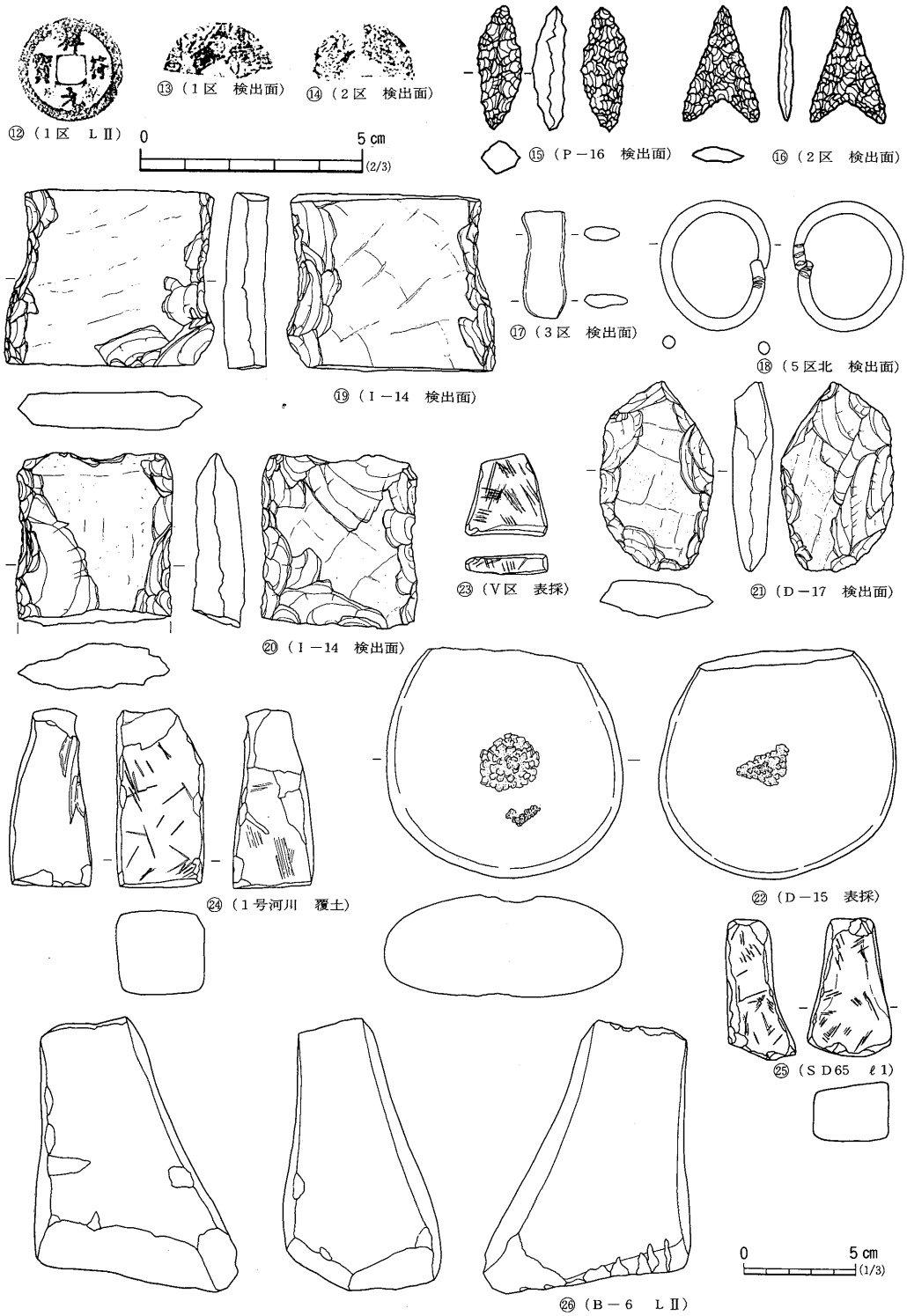


第275図　遺構外出土遺物(18)





第276図　遺構外出土遺物(19)



第277図　遺構外出土遺物（20）

第43表　遺物観察表　（1）土器

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
1	土師器甕	S I 01	覆土					灰褐		ハケメ			拓113
2	弥生土器壺	S I 01	壁溝覆土					橙灰		羽状付加条縄文			拓86
3	土師器甕	S I 01	覆土	18.8		11.6	5	明褐黒	ハケメ→ヨコナデ・ナデ	ハケメ→ヨコナデ ハケメ→ナデ		O	㉘
4	土師器甕	S I 01	覆土	20.6		15.0	30	明褐	ヨコナデ・ハケメ→ナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ハケメ ハケメ・ナデ		O	㊱
5	土師器甕	S I 02	覆土					灰褐	粗いハケメ	粗いハケメ			拓37
6	弥生土器壺	S I 02	覆土					明橙灰		平行沈線			拓87
7	土師器壺	S I 02	覆土	19.2		5.7(残)	5	灰褐	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ヨコナデ		I	103
8	土師器壺	S I 02	覆土	12		6(残)	10	赤褐	ハケメ→ヘラミガキ 内外面朱彩	ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ	朱彩	B 3	75
9	土師器甕	S I 02	覆土	14.4		6.7(残)	30	明灰褐	ヨコナデ　ハケメ	ヨコナデ　ハケメ		Q	86
10	土師器甕	S I 02	覆土	21.8	5.0	25.6	30	茶褐					㊾
11	土師器甕	S I 02	検出面覆土		3.5	3.7(残)	10	茶褐	ハケメ	ハケメ		S 3a	100
12	土師器壺	S I 02	覆土		4.6	1.1(残)	10	灰褐	指頭圧痕　ハケメ	ヘラナデ　ハケメ			116
13	土師器甕	S I 02	覆土	16.6		14.0	30	明橙灰	ヨコナデ→ハケメ ヘラケズリ→ハケメ	ヨコナデ　ハケメ		P 2	⑳
14	土師器甕	S I 02	覆土		4.6	11.0	30	明橙褐	ハケメ	ハケメ		S 3a	㉚
15	土師器甕	S I 05	覆土	18.7		3.7	5	明灰褐	ヨコナデ　ハケメ	ヨコナデ→ハケメ		K	638
16	弥生土器壺	S I 05	壁溝覆土					明灰褐	平行沈線	平行沈線文　渦文			拓57
17	弥生土器壺	S I 06	壁溝内					暗灰褐		平行沈線			拓88
18	弥生土器壺	S I 06	検出面					灰褐		連弧文			拓117
19	弥生土器壺	S I 06	P覆土					灰褐					拓92
20	弥生土器壺	S I 06	壁溝内					暗灰褐		渦文			拓133
21	弥生土器壺	S I 06	検出面					明灰褐		平行沈線　綾絡文		A 2	拓70
22	弥生土器甕	S I 06	覆土					明灰褐		刺突文		B 2	拓96
23	土師器杯	S I 06	周溝内覆土	14.0		4.0(残)	30	茶褐	黒色処理 ハケメ→ヘラミガキ	ヘラミガキ		B	80
24	土師器甕	S I 06	覆土	14.0		2.0(残)	5	橙灰	ヨコナデ→ハケメ	ハケメ→ヨコナデ		L	118
25	土師器高杯	S I 06	覆土		18.2	5.6(残)	5	赤褐	ハケメ→ヘラミガキ	ハケメ→ヘラミガキ	朱彩	D	127
26	土師器台付甕	S I 06	周溝内覆土		8.8	8.6(残)	50	茶褐	ナデ→ハケメ	ヘラケズリ・ナデ		B	99
27	土師器壺	S I 06	覆土		5.1	3.7(残)	20	橙灰	ヘラミガキ・ユビナデ	ヘラミガキ			114
28	土師器壺	S I 06	検出面			4.6(残)	10	明橙灰	ハケメ→ナデ	ヘラミガキ	丸底		207
29	土師器甕	S I 06	覆土	16.0		3.4(残)	5	明赤褐	ヨコナデ→ナデ	ハケメ→ヨコナデ		P 2	137
30	土師器甕	S I 11	壁溝覆土	16.2		7.9	20	明赤褐黒褐	ハケメ→ヨコナデ ケズリ気味のナデ	ハケメ→ヨコナデ ハケメ		C 3b	㉗
31	土師器甕	S I 11	壁溝覆土		10.8	7.7(残)	15	橙褐	ナデ(ユビナデ)	ハケメ		S 1a	61
32	弥生土器壺	S I 12	検出面		最大径(18.0)	11.5	20	暗褐		渦文			738
33	弥生土器壺	S I 12	検出面					明橙灰		羽状付加条縄文			拓189
34	弥生土器壺	S I 11	壁溝覆土					黒褐		磨消縄文	炭化物付着	B	拓116
35	弥生土器壺	S I 11	壁溝覆土					黒褐		交互刺突文		B	拓95
36	弥生土器壺	S I 11	壁溝覆土					灰褐		押圧			拓106
37	弥生土器壺	S I 11	壁溝覆土					明橙灰		口唇にキザミ 羽状付加条縄文			拓132
38	弥生土器壺	S I 11	壁溝覆土					暗褐	ケズリ				拓112
39	弥生土器壺	S I 11	壁溝覆土					暗褐					拓102
40	弥生土器壺	S I 11	壁溝覆土					灰褐		羽状付加条縄文			拓111
41	弥生土器壺	S I 11	壁溝覆土					暗褐		押引文			拓84
42	弥生土器壺	S I 11	壁溝覆土					明橙灰	ハケメ				拓72
43	弥生土器壺	S I 11	壁溝覆土					暗灰褐					拓71
44	弥生土器壺	S I 11	壁溝覆土					暗橙灰	ナデ				拓73
45	土師器甕	S I 11	壁溝覆土					明灰褐	ハケメ	ハケメ			拓119
46	土師器甕	S I 11	壁溝覆土					橙灰	ナデ	ハケメ			拓103

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
47	土師器甕	SI11	壁溝覆土					暗灰褐	ケズリ	ハケメ			拓114
48	土師器甕	SI11	壁溝覆土					橙　灰	ハケメ	ハケメ			拓10
49	弥生土器壺	SI11	壁溝覆土		6.2	3.3(残)	10	暗　褐				T1b	22
50	土師器台付甕	SI11	壁溝覆土		6.2	2.8(残)	30	橙　褐		ハケメ→ナデ		C1	44
51	弥生土器壺	SI11	壁溝覆土		6.6	4.9	30	明橙灰					18
52	弥生土器壺	SI11	壁溝覆土		5.0	2.9(残)	20	茶　褐	ヘラナデ	ナデ・ヘラケズリ			71
53	弥生土器壺	SI11	壁溝覆土		7.0	6.0(残)	30	暗　褐					11
54	弥生土器壺	SI11 SI13	壁溝覆土			14.8	15	にぶい橙		鋸歯状文		C4a	㊹
55	土師器杯	SB10	P8	14.0	5.8	3.9	30	灰　褐	黒色処理・ヘラミガキ	回転糸切り 手持ちヘラケズリ			84
56	須恵器杯	SB11	埋土	14		5.9(残)	20	灰					233
57	土師器杯	SB13	P9		6.6	3.2(残)	15	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ 回転糸切り			186
58	須恵器杯	SB13	P9	14.6	7.0	3.7	20	明　灰		回転ヘラキリ→ナデ			78
59	須恵器杯	SB13	埋土	13.0	6.2	2.8	40	明灰褐		回転ヘラキリ→ナデ			16
60	土師器甕	SB13	埋土	13.0		3.6(残)	5	橙　褐	ハケメ ハケメ→ヨコナデ	ナデ　ヨコナデ			310
61	土師器高台杯	SB13	P3		5.5	2.5(残)	30	緑　杯					426
62	須恵器大甕	SB13	P7					暗　灰	当て具痕	タタキ			拓176
63	土師器甕	SB14	P16	26.0		6.0(残)	10	明褐灰					242
64	土師器杯	SB15	P7		5.8	2.9(残)	10	灰　褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			194
65	須恵器杯	SB19	埋土	15		2.6(残)	10	灰			墨書(体部)「比」		443
66	土師器杯	SB20	埋土		6.2	3.0(残)	25	明黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 回転糸切り			243
67	土師器杯	SB20	埋土		5.4	1.5(残)	25	明橙灰		手持ちヘラケズリ 回転糸切り			256
68	土師器杯	SB21	埋土	14.2		3.8(残)	15	明褐灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			360
69	土師器杯	SB21	埋土		7.0	2.3	10	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			246
70	須恵器杯	SB21	埋土	14.2	7.4	4.9	10	灰　白		回転ケラキリ			238
71	土師器小型土器	SB21	埋土		1.5	2.3	20	明橙褐	ナデ	ナデ			241
72	弥生土器壺	SB25	整地層		5.0	2.5(残)	5	明橙褐	ナデ	斜位LR　底部ナデ			274
73	土師器高杯	SB25	埋土			6.1(残)	25	橙　褐		ヘラミガキ			273
74	土師器杯	SB25	柱痕	15.4	6.8	5.2	50	茶　褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			340
75	土師器杯	SB25	埋土		4.9	3.9(残)	30	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			341
76	土師器杯	SB25	埋土		5.8	1.6	15	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			262
77	土師器杯	SB25	埋土		6.6	2.5	15	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転糸切り			263
78	須恵器杯	SB25	P11		6.8	2.1	10	明黄灰		回転ヘラキリ	ヘラ記号(底部)		254
79	須恵器杯	SB25	P14		7	1.75(残)	10	灰　白		回転ヘラキリ			240
80	土師器杯	SB25	埋土		4.6	1.1(残)	20	明灰褐		回転糸切り			306
81	須恵器甕	SB25	埋土	24.0		5.5(残)	5	灰　白					361
82	土師器甕	SB25	P14	20		5.0(残)	5	明黄灰	カキメ	ハケメ			253
83	土師器杯	SB26	埋土		6.6	1.0(残)	10	褐　灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 回転糸切り			289
84	須恵器杯	SB26	埋土		7.0	2.6(残)	10	灰　白		回転ヘラキリ→ナデ			259
85	須恵器杯	SB26	P3		7.4	2.4	10	明　灰		回転ヘラキリ→ナデ			234
86	土師器高台杯	SB26	埋土		7.0	2.4(残)	20	浅黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	ロクロナデ			288
87	須恵器高台杯	SB26	P1		8	4(残)	10	明褐灰					235
88	土師器甕	SB26	埋土	17.0		3.4(残)	5	明灰褐					293
89	土師器杯	SB28	埋土		6.2	2.1(残)	20	明黄灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 回転糸切り			359
90	土師器杯	SB28	埋土		6.8	1.5(残)	15	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	墨書(体部)「？」 ヘラ記号(底部)		309
91	土師器杯	SB28	埋土		6.4	2.2(残)	30	灰　白		回転ヘラキリ→ナデ			258
92	須恵器瓶	SB28	埋土		8	5.3(残)	10	灰					232
93	須恵器杯	SB29	埋土	13.4	6.6	3.7	50	灰	ナデ	回転ヘラキリ			344
94	土師器杯	SB30	埋土	12.8	5.2	3.8	30	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 回転糸切り			497

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
95	須恵器杯	SB30	埋土	12.8	8.2	4.2	35	灰白		回転ヘラキリ			345
96	須恵器瓶	SB30	P8		10.0	3.7(残)	10	灰		釉	釉(体部)		550
97	土師器杯	SB33	埋土	12.4	4.7	4.0	60	明黄灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			495
98	須恵器杯	SB33	埋土	13.3	7.2	3.8	15	灰白		回転ヘラキリ			343
99	土師器杯	SK11	覆土	11.8	5.4	3.9	20	灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			52
100	土師器杯	SK11	覆土	12.6	5.6	3.8	40	明黄灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	二次熱変		51
101	土師器杯	SK13	覆土	14.0	5.6	4.4	60	明黄白	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			5
102	土師器杯	SK13	覆土	13.0	5.9	5.2	90	明白褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			10
103	土師器杯	SKI3	覆土	14.0	5.5	5.0	50	灰白	黒色処理 ヘラミガキ	回転糸切り 回転ヘラケズリ			21
104	土師器杯	SK13	覆土		8.0	2.2(残)	20	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			54
105	土師器甕	SK13	覆土		8.8	2.4(残)	10	黄灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			39
106	土師器杯	SK13	覆土		5.6	3.5(残)	40	暗灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			34
107	須恵器瓶	SK13	覆土		11.4	7.4(残)	10	青灰	ユビナデ	回転ヘラケズリ→ロクロナデ			131
108	弥生土器壺	SK18	ℓ1					灰褐	平行沈線	波状文		A	拓2
109	弥生土器壺	SK18	覆土					明灰褐		波状文		A	拓56
110	弥生土器壺	SK18	ℓ1					暗褐		渦文		A	拓4
111	弥生土器壺	SK18	ℓ1					灰褐				A	拓30
112	弥生土器壺	SK18	ℓ1					暗褐		渦文		A	拓7
113	弥生土器壺	SK18	覆土					暗褐		渦文		A	拓8
114	弥生土器壺	SK18	ℓ1					暗灰褐		平行沈線 渦文 刺突文		A	拓32
115	弥生土器壺	SK18	ℓ1					暗茶褐		渦文		A	拓20
116	弥生土器壺	SK18	覆土					明橙灰		渦文		A	拓5
117	弥生土器壺	SK18	覆土					明黄灰		渦文		A	拓6
118	弥生土器壺	SK18	ℓ1					明橙		渦文		A	拓26
119	弥生土器壺	SK18	ℓ1					暗灰褐		渦文		A	拓34
120	弥生土器壺	SK18	覆土					明橙		渦文		A	拓25
121	弥生土器壺	SK18	ℓ1					明灰褐				A	拓22
122	弥生土器壺	SK18	ℓ1					明橙灰				A	拓35
123	弥生土器壺	SK18	ℓ1					橙		平行沈線 綾絡文	赤彩	A	拓27
124	弥生土器壺	SK18	ℓ1					明橙灰		渦文		A	拓36
125	弥生土器甕	SK18	1包	17.4		5.9	10	暗褐		平行沈線		A2	③
126	弥生土器甕	SK18	覆土	10.0		5.6(残)	20	褐灰		綾絡文	二次熱変によりねじまがっている	A3	228
127	弥生土器壺	SK18	覆土		5.2	1.9(残)	5	橙褐		底部布圧痕			58
128	弥生土器壺	SK18	覆土		5.4	2.8(残)	10	赤褐		底部布圧痕			120
129	弥生土器壺	SK21	底面	13.6		8.0	20	黄橙灰	ハケメ 一部にナデ	ハケメ・沈線文 隆帯・貼コブ		F1	85
130	弥生土器？高杯	SK21	底面		20.3	4.7(残)	10	橙灰	ヘラミガキ	ヘラミガキ	朱彩	D	124
131	弥生土器甕	SK21	底面	19		9.5(残)	10	茶褐	ヘラケズリ→ヨコナデ	ハケメ→ヨコナデ		H1	106
132	土師器高台杯	SK32	覆土		9.0	3.2(残)	20	橙灰	黒色処理 ヘラミガキ				109
133	須恵器甕	SK32	覆土		17.0	6.8	10	明灰	ヘラナデ	タタキ ヘラケズリ			⑪
134	弥生土器壺	SK34	覆土					黒褐		格子文			拓49
135	弥生土器壺	SK34	覆土					黒褐		キザミ		C3	拓45
136	土師器高杯	SK37	覆土		6.6	4.3(残)	30	明橙褐				C2a	144
137	土師器小型丸底壺	SK37	覆土	8.0		3.4(残)	10	赤褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ			197
138	土師器甕	SK37	覆土	25.0		10.6	15	灰黄褐	ハケメ→ヨコナデ ナデ	ヨコナデ→ハケメ		N	㉜
139	弥生土器壺	SK37	覆土	16.2		5.6(残)	10	暗灰褐				D4	149
140	弥生土器壺	SK37	覆土					明橙	ケズリ				拓50
141	弥生土器壺	SK37	覆土					明橙褐		渦文		A	拓50
142	弥生土器甕？	SK37	覆土					橙灰	ハケメ	格子文			拓59

No	器　種	遺　構	層　位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色　調	器面の特徴　(内)	器面の特徴　(外)	備　　考	分類	登録No
143	弥生・注口土器	ＳＫ43	覆　土			7.85	60	赤褐～明褐	縄文→沈線→ナデ→刺突				㊽
144	弥生土器壺	ＳＫ43	覆　土	17.6		9.1(残)	5	茶　褐		交互刺突文		Ｂ２	142
145	弥生土器壺	ＳＫ43	覆　土	19.0		4.0(残)	10	橙　褐		ハケメ→縄文 ヨコナデ		Ｄ４	66
146	土師器壺	ＳＫ43	覆　土			9.6(残)	5	赤　褐			朱彩	Ａ	132
147	土師器高杯	ＳＫ43	覆　土		7.0	4.0(残)	40	橙　褐	ヘラミガキ ヨコナデ	ハケメ　ヘラミガキ ヘラケズリ ヨコナデ	内外面朱彩	Ｊ	60
148	土師器甕	ＳＫ43	覆　土		6.6	8.8(残)	30	茶　褐	ヘラナデ 一部のみにハケメ	ハケメ		Ｓ２	93
149	土師器器台	ＳＫ43	覆　土			4.5(残)	20	橙　褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ		Ｆ1a	188
150	土師器小鉢	ＳＫ43	覆　土	7.6	4	6	50	明器灰	ヨコナデ　ハケメ	ヨコナデ　ハケメ		Ｂ１	128
151	土師器甕	ＳＫ59	覆　土					暗灰褐		粗いハケメ			拓129
152	弥生土器壺	ＳＫ59	覆　土					暗灰褐		連弧文			拓131
153	土師器甕	ＳＫ59	覆　土					明橙灰	ハケメ	ハケメ			拓128
154	土師器甕	ＳＫ59	覆　土					明灰褐	ハケメ	ハケメ			拓127
155	土師器甕	ＳＫ59	覆　土					暗灰褐		粗いハケメ	129と同一		拓130
156	弥生土器?壺	ＳＫ59	覆　土			6.2(残)	5	明　橙	ハケメ→ヨコナデ 指頭痕	ハケメ→ヨコナデ 隆帯・キザミ		Ｆ２	101
157	土師器高杯	ＳＫ59	覆　土		15	5.3(残)	30	明黄褐	ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ	ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ		Ｆ	77
158	土師器壺	ＳＫ59	覆　土			4.4(残)	5	明橙灰	ヨコナデ ハケメ(後)	ヨコナデ ハケメ(後)			33
159	土師器高杯	ＳＫ59	覆　土			7.5(残)	30	明橙灰		ヘラミガキ			156
160	土師器高杯	ＳＫ59	覆　土			6.8	20	橙	ヘラミガキ→ヘラケズリ			Ｋ3b	171
161	土師器高杯	ＳＫ59	覆　土			5(残)	10	明赤褐		ヘラミガキ		Ｋ3b	172
162	弥生土器壺	ＳＫ59	覆　土		5.6	3.7(残)	5	茶　褐					155
163	土師器高杯	ＳＫ59	覆　土			3(残)	30	橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ			110
164	弥生土器壺	ＳＫ59	覆　土		6.2	3.0(残)	10	灰　褐	ハケメ				35
165	土師器小型丸底壺	ＳＫ59	覆　土		1.8	1.7(残)	50	茶　褐	ユビナデ	ヘラミガキ　ヘラケズリ→かるいヘラミガキ	黒色被膜付着（漆か炭化物か不明）	Ｄ	28
166	土師器壺	ＳＫ59	覆　土			2.6(残)	10	橙　褐	ヘラナデ	ヘラケズリ→ハケメ→ヘラミガキ	丸底		30
167	土師器高杯	ＳＫ72	底　面	17.9		8.2	70	橙　褐	ヨコナデ ヘラミガキ	ヨコナデ ヘラミガキ		Ｉ	㉔
168	土師器甕	ＳＫ72	覆　土		7.0	2.2(残)	5	橙　褐	ナデ				107
169	土師器杯	ＳＫ108	覆　土		5.6	5.3	70	灰黄白	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	墨書有「比」(体部)		25
170	土師器杯	ＳＫ108	覆　土	13.4	4.8	4.5	70	暗橙灰	黒色処理のみ	回転ヘラケズリ			15
171	土師器杯	ＳＫ108	覆　土	16.4		5.5(残)	20	灰　褐	黒色処理 ヘラミガキ				117
172	弥生土器壺	ＳＫ29	覆　土					暗　褐	平行沈線	波状文		Ａ	拓３
173	弥生土器壺	ＳＫ29	覆　土					明橙灰		多状沈線 羽状付加条縄文		Ｃ３	拓24
174	弥生土器壺	ＳＫ29	覆　土					暗　褐	ハケメ	小波状文　ハケメ			拓94
175	縄文土器深鉢	ＳＫ112	覆　土		11.6	6.1(残)	20	明灰褐		木葉痕－底部			38
176	弥生土器甕	ＳＫ112	覆土中	17.6		5.5(残)	10	灰　褐	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ		Ｃ1a	676
177	弥生土器壺	ＳＫ112	覆　土	12.8		3.6(残)	10	橙　褐	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ヨコナデ・ヘラミガキ	朱彩	Ｊ	55
178	土師器?甕	ＳＫ112	覆　土	15.8		4.7(残)	5	明橙褐	ヨコナデ　ハケメ	ヨコナデ		Ｄ	130
179	土師器壺	ＳＫ112	覆　土		6.5	2.0(残)	10	明橙褐	ヘラナデ				23
180	縄文土器深鉢	ＳＫ121	覆　土	18.6		11.2	15	暗　褐		突起・羽状縄文			⑦
181	土師器甕	ＳＫ126	覆　土	24		3.6(残)	10	明黄橙	ハケメ→ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ・		Ｍ	374
182	土師器高杯	ＳＫ126	覆　土			4.9(残)	30	明　橙	ハケメ	ヘラミガキ			423
183	土師器小型甕	ＳＫ133	覆　土	12.1		8.8	80	茶　褐	ヨコナデ・ユビナデ	ヨコナデ ナデ→ハケメ		Ａ	190
184	土師器台付甕	ＳＫ133	覆　土	14.6		6.6(残)	30	赤　褐	ハケメ	ハケメ→ヨコナデ		Ｂ	317
185	土師器杯	ＳＫ133	覆　土	17.4		6.2(残)	30	黒　褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ		Ａ４	339
186	弥生土器壺	ＳＫ133	覆　土	19.0		4.1(残)	5	明橙褐		キザミ		Ｅ１	424
187	須恵器風字硯	ＳＫ134	覆　土			2.5	50	灰	ヘラケズリ				408
188	須恵器杯	ＳＫ152	覆　土	12.8	5.4	4.1	98	黄　橙			回転ヘラキリ→ナデ		82
189	須恵器高台杯	ＳＫ152	覆　土		6	3.6(残)	20	灰			底部ヘラ記号		378
190	須恵器大甕	ＳＫ152	覆　土					明　灰	タタキ	ナデ			拓230

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴　(内)	器面の特徴　(外)	備考	分類	登録No
191	土師器甕	SK152	検出面覆土	13.2	6.4	14.0	70	黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ			⑬
192	土師器甕	SK164	底面		7.4	12.4	20	灰黄褐	ヘラケズリ	ナデ　ヘラケズリ			⑲
193	土師器甕	SK210	覆土	20.0	3.6	14.5	50	茶褐	一部ハケメ→ヘラケズリ	ハケメ			㊳
194	土師器甕	SK210	覆土	16.0		8.5	30	明褐	ヨコナデ→ハケメ ヘラケズリ→ハケメ	ヨコナデ　ハケメ	内面ハケメは外面より大きい	P1a	182
195	土師器甕	SK210	覆土		5.0	8.0	20	茶褐	ユビナデ	ヘラナデ		S3b	㉕
196	須恵器杯	SK254	覆土	14.4	7.0	3.3	20	灰褐		回転ヘラキリ→ナデ			398
197	土師器高杯	SK254	覆土		9.4	4.7(残)	30	明黄橙					404
198	土師器高杯	SK261	覆土		10.0	6.3(残)	40	赤褐	ハケメ 単位不明瞭なナデ	ヘラミガキ	朱彩	K8	400
199	土師器壺	SK272	覆土		2.6	2.9(残)	10	明黄灰	ハケメ→ヘラナデ	ヘラミガキ			342
200	土師器小型丸底壺	SK272	覆土	11.0	4.0	19.1	80(口縁の一部)	橙	ヘラミガキ・ナデ	ヘラミガキ		C3	401
201	土師器杯	SK275	覆土	13.0	5.0	4.8	100	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			389
202	土師器杯	SK291	覆土	14.6		2.8(残)	10	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ		墨書(体部)「比」		557
203	須恵器杯	SK01	覆土	13.5	6.7	4.3	50	灰白		回転ヘラキリ→ナデ			92
204	土師器杯	SK07	覆土	13.6	6.4	4.5	20	明黄灰	黒色処理	回転ヘラケズリ			62
205	土師器杯	SK07	覆土	13.2	5.2	5.0	40	橙褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			89
206	土師器杯	SK07	覆土	14.0	6.1	6.6	40	茶褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			63
207	土師器杯	SK07	覆土	14.4	6.0	4.25	30	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			27
208	土師器杯	SK07	覆土	13.0	5.6	4.9	50	明褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ・回転糸切り			7
209	土師器甕	SK07	覆土	14		10(残)	10	明黄褐	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・指頭圧痕			97
210	土師器甕	SK07	覆土	14.8		4.8(残)	10	明橙灰					12
211	須恵器広口瓶	SK07	覆土	12.0		2.5(残)	5	灰					193
212	縄文土器深鉢	SK04	底面					明橙灰		網目状撚糸文			拓41
213	縄文土器深鉢	SK02	覆土	30.5		15.3	40	明灰褐	単位不明瞭な状痕				⑰
214	縄文土器深鉢	SK06	覆土			6.2	5	明灰褐		網目状撚糸文			㊶
215	土師器甕	SK09	覆土	32.0		8.9	10	明黄橙					⑱
216	土師器杯	SK12	覆土	13.8	5.0	4.4	80	明黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	墨書(体部)「比」		434
217	須恵器焼台	SK09	覆土	9.8	7.2	3.3	50	灰褐					8
218	弥生土器蓋	SK25	覆土	4.8		4.2(残)	35	暗褐				A	94
219	土師器甕	SK15	覆土		5.4	8.9	20	橙灰	ナデ	ハケメ			⑤
220	土師器杯	SK22	覆土	12.4	6.2	4.0	30	茶褐	黒色処理 ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ			76
221	土師器小型甕	SK22	覆土		7.2	7.8(残)	30	明黄橙	ハケメ				95
222	弥生土器甕	SK24	覆土	15.4(残)		7.2(残)	15	茶褐		平行沈線		A2	42
223	弥生土器甕	SK25	覆土	16.0		6.0(残)	10	暗灰褐		平行沈線		A2	2
224	縄文土器深鉢	SK29	覆土					明橙灰		口縁にキザミ			拓31
225	縄文土器深鉢	SK29	覆土					明橙		口縁にキザミ			拓28
226	縄文土器深鉢	SK30	覆土			15.0	20	明橙褐					㉝
227	弥生土器甕	SK39	覆土					暗灰褐		羽状付加条縄文			拓38
228	土師器甕	SK39	覆土	18.4		6.8(残)	10	茶褐	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ		G	41
229	弥生土器壺	SK48	覆土					暗橙灰					拓43
230	縄文土器深鉢	SK50	覆土	22.4		7.6	10	明褐					④
231	縄文土器深鉢	SK53	覆土	15.4	10.0	18.4	15	明橙灰		磨消縄文			㉟
232	土師器高杯	SK53	覆土			3.6(残)	10	明黄褐					222
233	土師器杯	SK56	覆土					褐			墨書(体部)「?」		212
234	弥生土器壺	SK58	覆土					灰褐		渦文		A	拓126
235	弥生土器壺	SK62	覆土		5.0	6.2(残)	40	明褐				E2	13
236	土師器台付甕	SK58	覆土		10.0	4.3(残)	5	明橙褐	ナデ	ハケメ→ナデ		C2b	203
237	弥生土器壺	SK61	覆土					明灰褐		渦文		A	拓152
238	弥生土器壺	SK61	覆土					明　橙		刺突文			拓139

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
239	弥生土器壺	SK61	覆土					明橙		多条沈線文		C3	拓138
240	土師器高杯	SK61	覆土		8.0	4.5(残)	40	橙褐	ヘラミガキ ヘラナデ	ヘラミガキ		K1b	139
241	土師器壺	SK63	覆土			4.3(残)	20	暗赤褐	ユビナデ	ヘラミガキ	朱彩		141
242	弥生土器壺	SK63	覆土			9.3(残)	10	明橙褐	ヘラナデ	押圧		D1b	167
243	土師器甕	SK64	覆土	17.6		2.8(残)	5	茶褐		ハケメ・ヨコナデ		Q	161
244	土師器壺	SK64	覆土	16.6		3.6(残)	5	明橙灰	ヨコナデ ヘラミガキ	ハケメ・ヨコナデ			164
245	土師器甕	SK64	覆土	20.6		4.3(残)	10	にぶい黄褐	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ヨコナデ		N	163
246	土師器壺	SK64	覆土			6.5(残)	10	明橙灰	ハケメ→ナデ	ハケメ→ヘラミガキ			176
247	弥生土器	SK65	覆土			11.2(残)	30	明褐	ナデ	ヘラナデ→ハケメ			158
248	弥生土器甕	SK67	覆土					明灰褐		平行沈線文　綾絡文		A2	拓154
249	弥生土器甕	SK67	覆土	11.7		2.0(残)	5	灰褐		平行沈線文		A2	162
250	弥生土器高杯	SK67	覆土		6.2	5.5(残)	70	明黄灰		ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	C	299
251	土師器器台	SK67	覆土			7.4(残)	30	明橙灰	ナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ		K5a	185
252	弥生土器壺	SK68	覆土					暗茶褐	ナデ	刺突文			拓153
253	弥生土器壺	SK68	覆土					橙		刺突文　格子文		C	拓134
254	弥生土器壺	SK67	覆土					明橙	ナデ	付加条縄文			拓155
255	土師器鉢	SK70	覆土	14.8		6.0(残)	30	黄橙				C	79
256	縄文土器深鉢	SK74	覆土					明灰褐		隆帯			拓148
257	縄文土器深鉢	SK74	覆土					暗灰褐					拓40
258	弥生土器壺	SK76	覆土		8.4	20.7	40	明橙褐	ハケメ→ナデ(ユビ) ヘラケズリ(カキトリ)	ハケメ→ナデ→縄文			㊵
259	弥生土器甕	SK75	覆土				5	明灰褐 暗褐		磨消縄文	260と同一	B2	96
260	弥生土器壺	SK75	覆土			8.2(残)	5	明灰褐		磨消縄文	259と同一	B2	115
261	弥生土器壺	SK75	覆土					橙		重三角文		A	拓77
262	弥生土器甕	SK76	覆土					明橙灰		平行沈線文		A2	拓61
263	土師器甕	SK75	覆土		4.9	2.8(残)	20	褐	ナデハケメ	ハケメ・ヘラケズリナデ			45
264	弥生土器壺	SK76	覆土					橙灰		キザミ		D2	拓60
265	弥生土器壺	SK75	覆土					暗褐					拓69
266	弥生土器壺	SK76	覆土					灰褐		磨消縄文・刺突文		B	拓146
267	弥生土器壺	SK76	覆土					灰褐	ナデ	羽状付加条縄文			拓166
268	縄文土器深鉢	SK92	覆土					明橙		網目状撚糸文			拓120
269	縄文土器深鉢	SK82	覆土					灰褐		撚糸文			拓52
270	縄文土器深鉢	SK82	覆土					茶褐		羽状縄文			拓51
271	縄文土器深鉢	SK82	覆土					灰褐		網目状撚糸文			拓262
272	縄文土器浅鉢	SK82	覆土	17.0	8.2	6.5	80	茶褐	ミガキ	磨消縄文・ミガキ			147
273	縄文土器深鉢	SK92	覆土					暗灰褐		山形突起・羽状縄文			拓63
274	縄文土器深鉢	SK92	覆土					明橙灰		網目状撚糸文			拓64
275	弥生土器甕	SK96	覆土					明橙灰		渦文	二次熱変		拓62
276	土師器甕	SK97	覆土		6.6	2.4(残)	10	明黄橙		底部ヘラケズリ			104
277	弥生土器壺	SK99	覆土			12(残)	10	茶褐 黒褐		渦文・貼コブ	文様は7単位	A1	143
278	土師器壺	SK99	底面		6.6	3(残)	10	暗赤褐	ヘラナデ＋ナデ	ユビナデ　底部布痕			119
279	弥生土器壺	SK99	覆土					明橙灰		綾絡文		A	拓136
280	土師器高台杯	SK103	覆土		8.1	2.0(残)	20	明黄灰	黒色処理 ヘラミガキ	カキメ			112
281	弥生土器壺	SK99	覆土		残7.2	6.3	10	茶褐			縄文	T1a	㉛
282	縄文土器深鉢	SK105	覆土					暗灰褐		撚糸文			拓65
283	弥生土器壺	SK99	覆土					明橙灰		渦文		A	拓137
284	土師器高杯	SK110	覆土		11.2	7.7(残)	70	橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ		K4	140
285	土師器甕	SK28	覆土					暗褐		ハケメ			拓21
286	弥生土器壺	SK28	覆土					暗茶褐		磨消縄文			拓17

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
287	土師器甕	SK28	覆土					橙					拓18
288	土師器甕	SK113	覆土		4.6	6.5(残)	15	橙褐	ハケメ	ハケメ		S3a	122
289	弥生土器壺	SK28	覆土					橙褐		刺突文			拓16
290	弥生土器甕	SK38	覆土	14.4		5(残)	20	橙褐	ヨコナデ ヘラナデとナデ	ハケメ→ヨコナデ		C3a	83
291	須恵器長頸瓶	SK125	覆土			8.2(残)	10	灰		カキメ			373
292	須恵器甕	SK153	覆土					灰	ナデ	ナデ			拓164
293	須恵器大甕	SK153	覆土					明灰	ナデ	タタキ			拓163
294	土師器甕	SK153	覆土					明橙灰		輪積み痕			拓165
295	須恵器大甕	SK153	覆土					灰	ナデ	タタキ・ナデ			拓161
296	須恵器大甕	SK153	覆土					明灰	タタキ	タタキ	297～301と同一		拓157
297	須恵器大甕	SK153	覆土					灰	ナデ	タタキ	296・298～301と同一		拓159
298	須恵器大甕	SK153	覆土					明灰	タタキ	タタキ	296・297・299～301と同一		拓158
299	須恵器大甕	SK153	覆土					明灰	ナデ	タタキ	296～298・300・301と同一		拓160
300	須恵器大甕	SK153	覆土					明灰	タタキ	タタキ	296～299・301と同一		拓162
301	須恵器大甕	SK153	覆土					明灰	タタキ	タタキ	296～300と同一		拓156
302	土師器杯	SK159	覆土	12.2	5.6	3.8	50	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	二次熱変有		261
303	須恵器杯	SK169	覆土	14.0	6.6	3.3	45	明灰褐		回転ヘラキリ			26
304	土師器杯	SK169	覆土	15.0	7.4	4.7	60	明黄灰		回転ヘラキリ→ナデ			48
305	須恵器瓶	SK161	覆土			8.7	10	灰					⑥
306	土師器甕	SK171	検出面		8.9	4.5(残)	10	明黄橙	ヘラナデ	ヘラケズリ			166
307	土師器杯	SK171	検出面		5.4	2.4(残)	20	暗茶褐	黒色処理のみ	回転ヘラケズリ			49
308	土師器甕	SK171	検出面	21.4		6.4	10	明橙灰					⑩
309	土師器杯	SK171	検出面		5.0	3.4(残)	30	灰白	黒色処理 ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ 回転糸切り			437
310	須恵器大甕	SK171	検出面					灰	当て具痕	タタキ			拓124
311	須恵器小型壺	SK172	覆土		4.6	6.8(残)	80	灰白					264
312	土師器杯	SK172	覆土	13.2	5.9	4.4	80	赤橙褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			19
313	土師器杯	SK172	覆土	13.2	6.0	4.1	50	明橙褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			260
314	土師器杯	SK176	覆土	12.4	5.6	4.5	45	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 回転糸切り	墨書(体部)「井」		392
315	土師器甕	SK177	覆土	12.8		3.0(残)	5	暗灰褐	ヨコナデ				192
316	土師器高杯	SK177	覆土			3.7(残)	20	明橙灰	ナデ・ヘラミガキ	ナデ	朱彩		218
317	土師器高杯	SK177	覆土			5.8	30	明橙褐	ヘラミガキ ユビナデ	ヘラミガキ	朱彩	K3a	135
318	土師器甕	SK177	覆土	17.4		7.2(残)	5	暗茶褐	ヨコナデ・ユビナデ	ハケメ→ヨコナデ		J1	134
319	土師器甕	SK177	覆土	20.6		4.5(残)	10	明橙褐	ヨコナデ	ヨコナデ		I	88
320	土師器杯	SK182	覆土	13.8	6.5	4.2	50	灰白	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラキリ 回転糸切り			514
321	土師器杯	SK182	覆土	15.2	6.3	5.0	80	明黄灰	黒色処理 ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ 回転糸切り			47
322	土師器杯	SK182	覆土	13.8	6.2	4.8	60	明茶褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	墨書(体部)2ヶ所「比」		17
323	土師器甕	SK182	覆土	20.1		7.3(残)	10	明黄橙					318
324	土師器甕	SK183	覆土	11.5		12.4	10	黄橙灰					㊲
325	須恵器杯	SK185	覆土	13.4	6.8	3.2	10	灰白		回転ヘラキリ→ナデ			211
326	須恵器杯	SK185	覆土	12.8	5.8	3.2	40	灰		回転ヘラキリ			165
327	土師器甕	SK185	検出面 覆土	16.6	4.8	14.9	45	灰褐		ヘラケズリ			㉒
328	弥生土器壺	SK189	ℓ1					暗灰褐		羽状付加条縄文			拓141
329	弥生土器壺	SE08	覆土					灰褐		渦文		A	拓175
330	弥生土器壺	SE08	覆土					暗褐		平行沈線文		A	拓187
331	弥生土器壺	SE08	覆土					灰褐		渦文・連弧文			拓179
332	弥生土器壺	SE08	覆土					灰褐					拓178
333	弥生土器壺	SE08	覆土					明橙褐					拓174
334	弥生土器壺	SK218	ℓ1					暗褐		キザミ		C1	拓183

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴　(内)	器面の特徴　(外)	備考	分類	登録No
335	弥生土器壺	SK218	ℓ1					暗灰褐		キザミ		C1	拓190
336	弥生土器壺	SK219	覆土					暗橙灰		連弧文		A	拓200
337	土師器小型甕	SK187	覆土	10.2	4.0	6.0	30	茶褐		回転糸切り			160
338	土師器器台	SK118	覆土		8.6	6(残)	60	黄橙灰	ヨコナデ・ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ		B	315
339	弥生土器浅鉢	SE08	覆土		3.6	3.9(残)	20	灰褐			底部布痕	A	153
340	土師器壺	SE08	覆土		4	2.9	5	茶褐	ヘラナデ	ナデ 底部線刻　木葉痕			170
341	弥生土器高杯	SE08	覆土			3.7(残)	20	暗茶褐		連弧文		A	223
342	弥生土器壺	SE08	覆土	9.6	8.6	5.3(残)	10	灰褐	ナデ 底部周縁に刺突	ナデ			202
343	土師器杯	SK221	覆土	14.0	6.0	6.0	20	暗灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			351
344	弥生土器壺	SE08	覆土	9.6		3.3	5	茶褐				A	150
345	須恵器杯	SK224	覆土		8.2	7	5	明黄灰		回転糸切り	墨書(底部・体部)「?」「?」底部ヘラ記号		216
346	須恵器横瓶	SK228	覆土	12		5.4(残)	10	灰					291
347	須恵器杯	SK232	覆土	15.2	7.0	6.2	100	明灰		回転ヘラキリ→ナデ	墨書(体部)「比」		302
348	土師器杯	SK235	覆土	14.2	5.6	5.8	65	暗灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			245
349	土師器杯	SK235	覆土	12.6	5.2	4.5	50	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			577
350	土師器杯	SK235	覆土		7.6	1.9(残)	20	明黄灰	黒色処理 ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ 回転糸切り			422
351	土師器甕	SK237	覆土	19.0		12.9(残)	20	明赤褐		ヘラケズリ			403
352	土師器甕	SK255	覆土		9.6	6.5(残)	5	橙灰	ハケメ	ハケメ→ナデ 指頭痕		S1b	316
353	須恵器大甕	SK237	覆土					明灰	タタキ	タタキ			拓231
354	須恵器大甕	SK237	覆土					灰	タタキ	タタキ			拓168
355	須恵器杯	SK252	覆土	14.0	6.8	3.7	70	明灰褐		回転ヘラキリ→ナデ	墨書(体部)「貞」		397
356	土師器杯	SK260	覆土	14.0	6.0	4.8	30	明橙褐	黒色処理 ヘラミガキ	ヘラケズリ 回転糸切り	墨書(体部～底部)「?」		337
357	土師器杯	SK260	覆土	12.4	5.6	4.9	30	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			399
358	土師器小型甕	SK260	覆土		7	7(残)	40	明橙灰		回転糸切り			402
359	土師器杯	SK255	覆土	12.3	5.2	4.7	40	明橙灰	かるいヘラミガキ	回転ヘラケズリ			287
360	弥生土器壺	SK270	覆土					暗灰褐		渦文		A	拓198
361	弥生土器壺	SK281	覆土					茶褐		波状沈線文　キザミ		B	拓207
362	弥生土器壺	SK281	覆土					暗灰褐		キザミ　連弧文			拓209
363	弥生土器壺	SK281	覆土					茶褐		多条沈線文		C3	拓206
364	弥生土器壺	SK281	覆土					明橙褐		羽状付加条縄文			拓215
365	弥生土器壺	SK281	覆土					明灰褐					拓212
366	弥生土器小形土器	SK281	覆土					暗橙灰	指頭圧痕				拓217
367	弥生土器壺	SK281	覆土					灰褐					拓225
368	土師器甕	SK263	覆土	24.0		14.0	30	明橙褐		ヘラケズリ			㊺
369	土師器甕	SK263	覆土	14.6		7.5	10	赤褐					297
370	土師器杯	SK285	覆土	14.0	5.9	4.8	40	明黄褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			286
371	土師器杯	SK285	覆土		4.8	3.0(残)	30	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	墨書(体部)「?」		523
372	土師器甕	SK263	覆土	23.0		15.6	30	明橙褐	ヘラナデ	ヘラケズリ			㊹
373	須恵器大甕	SK268	覆土					灰	ナデ	タタキ・ナデ			拓177
374	弥生土器壺	SK287	ℓ1					明橙灰		撚糸文			拓220
375	弥生土器壺	SK287	ℓ1					明橙灰		撚糸文			拓216
376	弥生土器壺	SK287	ℓ1					明橙灰		撚糸文			拓219
377	弥生土器壺	SK287	ℓ1					明橙灰		撚糸文			拓222
378	弥生土器壺	SK307	ℓ1					明灰褐		平行沈線文		A	拓203
379	弥生土器壺	SK304	ℓ1					橙褐		押圧　撚糸文		D1a	拓226
380	弥生土器壺	SK304	ℓ1					明橙灰		刺突		D2	拓208
381	縄文土器深鉢	SK305	覆土	34.0		6.7	10	明灰褐		キザミ			⑮
382	土師器杯	SK311	覆土	13.6	5.4	4.4	98	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 回転糸切り			335

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
383	土師器甕	SK304	ℓ1									M	742
384	弥生土器壺	SE03	堀形内					灰褐		平行沈線			拓78
385	土師器筒形土器	SE03	底面					明橙灰	ナデ	輪積み痕　指頭圧痕			拓68
386	土師器筒形土器	SE03	ℓ4					灰褐	輪積み痕　ナデ	輪積み痕　指頭圧痕			拓98
387	土師器筒形土器	SE03	底面					明灰褐	ナデ	輪積み痕			拓79
388	土師器筒形土器	SE03	堀形内					明橙灰	ナデ	輪積み痕			拓105
389	土師器筒形土器	SE03	底面					暗褐	輪積み痕　ナデ	輪積み痕			拓99
390	土師器筒形土器	SE03	検出面					明橙灰	ナデ	指頭圧痕			拓89
391	土師器筒形土器	SE03	覆土					明褐	輪積み痕　ナデ	輪積み痕			拓83
392	土師器筒形土器	SE03	ℓ4					明橙灰	輪積み痕　ナデ	輪積み痕			拓82
393	土師器筒形土器	SE03	堀形内					橙灰	ナデ	輪積み痕			拓85
394	土師器筒形土器	SE03	ℓ1					明灰褐	ナデ	輪積み痕			拓67
395	土師器筒形土器	SE03	底面					暗灰褐	ナデ	輪積み痕　指頭圧痕			拓115
396	土師器筒形土器	SE03	底面					明灰褐	輪積み痕　ナデ	輪積み痕			拓118
397	土師器筒形土器	SE03	ℓ1					暗茶褐	輪積み痕	輪積み痕　指頭圧痕			拓90
398	土師器筒形土器	SE03	底面					灰褐	輪積み痕　ナデ	輪積み痕			拓101
399	土師器筒形土器	SE03	底面					明橙灰	ナデ	輪積み痕　指頭圧痕			拓107
400	土師器筒形土器	SE03	底面					明橙灰	輪積み痕　ナデ	輪積み痕　指頭圧痕			拓97
401	土師器筒形土器	SE03	底面					暗茶褐	ナデ	輪積み痕			拓66
402	土師器筒形土器	SE03	ℓ4					明橙灰	ナデ	輪積み痕　指頭圧痕			拓81
403	土師器筒形土器	SE03	ℓ4					明灰褐	輪積み痕　ナデ	輪積み痕			拓80
404	須恵器大甕	SE03	底面					灰	当て具痕	タタキ			拓123
405	須恵器甕	SE03	堀形内					青灰	ハケメ　当て具痕	タタキ			拓122
406	土師器杯	SE03	底面	14.8	5.3	4.7	40	灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転糸切り	墨書(体部)「?」		65
407	土師器杯	SE03	底面	12.8	4.8	4.6	70	黒	黒色処理 ヘラミガキ	回転糸切り 黒色処理			1
408	土師器杯	SE03	底面		5.7	2.1 (残)	40	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転糸切り	墨書(体部)「?」		70
409	土師器杯	SE03	覆土	13.6	5.6	4.2	20	暗灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			67
410	土師器杯	SE03	底面	15.0	5.1	5.5	70	暗茶褐	黒色処理　ヘラナデ ヘラミガキ	回転糸切り			20
411	土師器杯	SE03	底面		6.0	2.4 (残)	40	明黄灰	黒色処理　底面付近のみヘラミガキ	回転糸切り			73
412	土師器杯	SE03	覆土	13		4.1 (残)	10	浅黄橙			外面・内面 漆付着		206
413	赤焼土器杯	SE03	底面	15.0	7.0	4.2	20	明橙褐		回転糸切り			522
414	赤焼土器	SE03	覆土	14		3.7 (残)	30	明橙灰	ヘラミガキ				136
415	土師器甕	SE03	覆土		7.0	4.4 (残)	10	明黄灰		ナデ（切り離し痕不明）			72
416	須恵器瓶	SE03	堀形内		10.0	8.2 (残)	10	緑灰		回転ヘラケズリ	底部に付着物有り		123
417	須恵器瓶	SE03	覆土		9	4.8 (残)	10	明褐					46
418	弥生土器壺	SK300	ℓ3					明橙灰		連弧文　平行沈線文		A	拓201
419	弥生土器壺	SK300	覆土					橙灰		渦文		A	拓199
420	弥生土器壺	SK300	覆土					暗灰褐		渦文		A	拓205
421	弥生土器壺	SK300	ℓ4					明橙灰					拓210
422	弥生土器壺	SK300	覆土					橙灰		網目状撚糸文			拓228
423	土師器壺	SE05	覆土			8.3 (残)	30	黄橙	ナデ(単位不明)	ハケメ ナデ(単位不明)		L2	371
424	土師器甕	SE05	覆土	20		3.5 (残)	10	暗灰褐	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ		Q	296
425	土師器甕	SE05	覆土		7.6	3.5 (残)	5	赤褐	ハケメ→ナデ	ヘラケズリ→軽いナデ			298
426	土師器杯	SE06	覆土	13.7 (復元)	6.2	4.3	60	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			347
427	須恵器杯	SE06	覆土	13.4	6.2	3.7	70	灰		回転ヘラキリ→ナデ			265
428	須恵器杯	SE06	覆土	13.6	6.6	3.5	10	明灰		回転ヘラキリ			269
429	須恵器甕	SE06	覆土		9.6	5.4 (残)	5	灰		回転ヘラケズリ			405
430	須恵器大甕	SE06	覆土					明灰	当て具痕＋ナデ	タタキ			拓167

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
431	土師器杯	SE07	覆土		5.5	3.2(残)	20	明杯褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			183
432	土師器杯	SE09	覆土		5.0	1.2(残)	15	灰黄褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 回転糸切り	刻線(底部)「大口」		210
433	土師器杯	SE09	覆土		5.7	2.0(残)	10	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			191
434	土師器杯	SE09	覆土		6.0	2.3(残)	40	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ			221
435	土師器杯	SE09	覆土	14.4	6.8	4.7	30	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	ヘラケズリ 回転ヘラケズリ			187
436	土師器杯	SE09	覆土	14.2	7.0	4.4	25	橙　灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			181
437	須恵器杯	SE09	覆土	14	6.4	3.8	70	灰		回転ヘラキリ			189
438	須恵器杯	SE09	覆土	13.2	6.8	3.3(残)	30	灰　白		回転ヘラキリ→ナデ			208
439	土師器杯	SE10	覆土	13.2	5.4	4.0	30	橙　褐	黒色処理　ヘラミガキ　回転糸切り	回転ヘラケズリ	墨書(体部)「エ」		195
440	土師器杯	SE10	覆土		6.5	2.1(残)	40	明褐灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			220
441	土師器杯	SE10	覆土	12.6	7.4	3.9	50	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 回転糸切り			180
442	土師器杯	SE10	覆土	14.0	6.6	5.7	40	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転糸切り			219
443	須恵器杯	SE10	覆土	13.6	7.6	2.8	30	明黄灰		回転ヘラキリ			200
444	須恵器杯	SE10	覆土	13.2	5.6	3.6	60	灰		回転ヘラキリ			320
445	須恵器杯	SE10	覆土	14	8	3.4	20	灰　白		回転ヘラキリ→ナデ			201
446	須恵器杯	SE10	覆土	12.2	6	4.9	40	灰		回転ヘラキリ→ナデ			178
447	須恵器杯	SE10	覆土	14.2	5.0	4.0	45	灰		回転ヘラキリ→ナデ			325
448	須恵器杯	SE10	覆土	13.8	7.0	3.9	50	灰　白		回転ヘラキリ→ナデ			179
449	須恵器杯	SE10	覆土	12.4	6.4	3.5	10	灰		回転ヘラキリ→ナデ			204
450	須恵器杯	SE10	覆土	14	6.4	3.8(残)	30	灰　白		回転ヘラキリ→ナデ			157
451	須恵器高台杯	SE10	覆土		7	3.9(残)	20	青　灰					151
452	土師器杯	SE12	覆土	15.5	5.3	5.4	95	明橙灰	黒色処理　ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ 回転ヘラケズリ			278
453	土師器杯	SE12	堀形内	14.0	5.3	4.8	40	明黄灰	黒色処理 ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ			328
454	土師器高台杯	SE12	覆土	16.2	8.4	6.1	30	明黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	ロクロによるミガキに近いヘラナデ			566
455	土師器高台杯	SE12	覆土		8.2	4.2(残)	30	黄　橙	黒色処理 ヘラミガキ	回転糸切り			565
456	土師器高台杯	SE12	覆土		7.8	1.7(残)	30	明黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	回転糸切り			365
457	土師器杯	SE12	堀形内	11.2	5.0	3.1	35	明　褐	黒色処理　ナデ	回転糸切り			381
458	赤焼土器杯	SE12	底面	13.2	7	3.6	80	明橙灰		回転糸切り			231
459	須恵器大甕	SE12	覆土					灰　褐	当て具痕	タタキ			拓170
460	須恵器大甕	SE12	覆土					明　灰	タタキ	タタキ			拓172
461	須恵器大甕	SE12	覆土					明　灰	ナデ	タタキ			拓171
462	須恵器大甕	SE12	覆土					黄　灰	ナデ	格子文　ナデ			拓169
463	須恵器杯	SE12	堀形内	14.3	5.8	4.6	45	灰褐～薄褐	底面以外はロクロ目があまり目立たない	回転糸切り			333
464	土師器小型鉢	SE12	堀形内			3.5	15	灰　褐	ナデ	ナデ			466
465	須恵器甕	SE12	覆土		8	5.9(残)	10	明黄灰					283
466	須恵器瓶	SE12	覆土		8.2	2.3(残)	5	灰	指頭痕				312
467	須恵器甕	SE12	覆土		13.0	7(残)	5	灰	ハケメ	回転ヘラケズリ			294
468	土師器杯	SE14	覆土	12.6	6.0	4.2	70	明黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ 回転糸切り	墨書(体部)「双」		473
469	土師器杯	SE14	覆土	14.0	6.6	4.5	60	明黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 回転糸切り	墨書(体部)「比」		327
470	土師器杯	SE14	覆土	12.9	6.1	4.5	40	明薄褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 回転糸切り			332
471	土師器杯	SE14	覆土	13.0	6.7	3.75	40		黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			331
472	須恵器杯	SE14	覆土	13.4	7.4	2.9	60	明　灰		回転ヘラキリ→ナデ	墨書(体部)「福集」		481
473	須恵器杯	SE14	覆土	13.4		3.1(残)	10	灰　白			墨書(体部)「服」		446
474	須恵器杯	SE14	覆土	12.8	6.4	3.7	100	明灰褐		回転ヘラキリ→ナデ	墨書(底部)「益」		447
475	須恵器杯	SE14	覆土	12.6	6.4	3.5	70	灰		回転ヘラキリ	墨書(底部)「大私」オオキサイ		449
476	須恵器杯	SE14	覆土	12.4	6.2	3.3	70	灰		回転ヘラキリ→ヘラナデ	墨書(底部)「大私」		442
477	須恵器杯	SE14	覆土	13.6	6	3.3	80	灰		回転ヘラキリ	墨書(底部)「大私」		450
478	須恵器杯	SE14	覆土	12.9	5.4	3.5	20	灰　白		底部ヘラキリ→ヘラナデ	墨書(底部)「?」		482

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
479	須恵器杯	SE14	覆土	13.2	7.0	3.6	100	褐		回転ヘラキリ	赤彩		323
480	須恵器杯	SE14	覆土	13.9	8.0	3.1	30	灰		回転ヘラキリ→ナデ			321
481	須恵器杯	SE14	覆土	12.6	7.0	2.8	100	明黄灰		回転ヘラキリ→かるいナデ			324
482	土師器杯	SE15	堀形内	13.4		3.3(残)	5	灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	墨書(体部)「比」			555
483	土師器杯	SE15	堀形内	14.0	5.8	4.2	30	灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	墨書(体部)「比」		471
484	土師器杯	SE15	堀形内	19.4	7.0	4.7	30	灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 回転糸切り			415
485	土師器杯	SE15	覆土	13.2	4.3	3.9	90		黒色処理 ナデ→ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ			326
486	土師器杯	SE15	覆土	12.4	4.4	4.2	25	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			330
487	土師器杯	SE15	崩落土	15.5	6.0	6.0	30	明黄灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			329
488	土師器杯	SE15	堀形内		5.0	1.5(残)	30	黒	黒色処理	黒色処理 回転糸切り			384
489	土師器高台杯	SE15	底面		5.6	1.6(残)	20	黒	黒色処理 ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理 回転糸切り			411
490	土師器高台杯	SE15	覆土		7.0	2.4(残)	25	黒褐	黒色処理	黒色処理 ヘラミガキ			387
491	土師器高台杯	SE15	覆土		8.0	2.3(残)	15	明橙褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転糸切り・ヘラミガキ			412
492	土師器高台杯	SE15	覆土		8.7	3.2	15	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ				386
493	須恵器杯	SE15	堀形内		7.0	2.8(残)	15	明黄灰		回転ヘラキリ	墨書(体部)「比」		521
494	須恵器大甕	SE15	堀形内			8.5(残)	5	灰			線刻(体部)「万」		554
495	須恵器杯	SE16	覆土	14.0	3.8	3.1	30	明灰		回転ヘラキリ→ナデ			322
496	土師器杯	SE17	覆土	14.4	5.9	5.6	60	明黄褐	黒色処理 ヘラミガキ	ヘラケズリ・回転糸切り・回転ヘラケズリ			338
497	土師器杯	SE17	覆土		5.4	1.8(残)	30	黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 底部回転糸切り	墨書(底部)「＋」		468
498	土師器杯	SE17	覆土	13.0	約6.6	3.7	40	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			350
499	須恵器杯	SE17	覆土	12.6	6.4	3.4	100	灰		回転ヘラキリ→ナデ			301
500	須恵器小型壺	SE17	覆土		6.6	3.7(残)	20	灰褐		回転糸切り→ナデ			299
501	須恵器甕	SE17	底面		9	5(残)	10	灰	ハケメ	回転ヘラケズリ			314
502	須恵器高台杯	SE17	覆土		7.2	5.3(残)	20	灰		回転ヘラキリ			311
503	須恵器杯	SE19	覆土	15	7.5	4.15	100	灰白		回転ヘラキリ→ナデ	墨書(体部)「比」・「比」		444
504	須恵器杯	SE19	覆土	12.6	5.4	3.9	30	灰白		回転ヘラキリ	墨書(体部)「比」		494
505	須恵器杯	SE19	覆土	14.3	6.4	3.4	100	灰		回転ヘラキリ	墨書(体部)「比」・「比」		445
506	須恵器杯	SE19	覆土	14.2	7.6	4	70	褐		回転糸切り→ヘラナデ	墨書(体部)「?」		448
507	弥生土器壺	SE20	ℓ3					黒褐		キザミ・沈線区画文		B2	拓237
508	弥生土器壺	SE20	ℓ3					黒褐		平行沈線文			拓239
509	弥生土器壺	SE20	ℓ3					灰褐	ハケメ	キザミ・磨消縄文		B2	拓251
510	弥生土器壺	SE20	ℓ3					暗灰褐		押圧		D1a	拓245
511	弥生土器壺	SE20	ℓ3					暗褐	突起				拓236
512	弥生土器壺	SE20	ℓ3					黒褐		キザミ			拓249
513	弥生土器壺	SE20	覆土		6.4	11.4	10	暗褐～濃褐	ナデ	ナデ		T1b	380
514	弥生土器壺	SE20	覆土		8.0	6.3	10	暗褐	強いナデ			T1b	420
515	弥生土器壺	SE20	覆土		7.0	2.0(残)	5	暗褐	ナデ	ナデ	底部に木葉痕	T1b	419
516	土師器甕	1号周	覆土	14		5(残)	10	明黄褐	ハケメ→ヨコナデ・ハケメ	ハケメ→ヨコナデ		J2	57
517	弥生土器壺	1号周	覆土	12.4	7.8	16.6	20	灰褐	ナデ(ユビナデ)	ヨコナデ・ヘラケズリ→ヘラナデ		E2	227
518	弥生土器壺	3号周	壁溝内覆土					灰褐		燃糸文	二次熱変		拓39
519	弥生土器蓋	3号周	覆土	10.0		13.6	70	赤褐	波状口線(6単位) ナデ・突起－4単位	ナデ 縦位L$\frac{R}{R}$縄文		B	152
520	土師器高杯	3号周	覆土	13.0		5.0(残)	15	橙		ヘラミガキ		H	169
521	弥生土器壺	3号周	覆土			17.5	40	黄橙					㉖
522	土師器甕	3号周	覆土	19.2		4.4(残)	5	にぶい橙	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ ハケメ		C3a	671
523	弥生土器甕	3号周	覆土	17.4		6.8	5	明橙褐	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ ナデ・擬凹線		C1a	154
524	弥生土器鉢	4号周	覆土					暗灰褐		磨消縄文		E2	拓55
525	弥生土器壺	4号周	覆土					暗灰褐		磨消縄文 押圧		B3	拓109
526	弥生土器壺	4号周	覆土					橙 灰		キザミ			拓75

No	器　種	遺　構	層　位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色　調	器面の特徴　(内)	器面の特徴　(外)	備　　考	分類	登録No
527	弥生土器壺	4号周	覆　土					橙　灰		口唇にキザミ			拓110
528	弥生土器壺	4号周	覆　土					暗　橙		羽状付加条縄文			拓11
529	弥生土器壺	4号周	覆　土					明　橙		多条沈線文		C 3	拓104
530	弥生土器壺	4号周	覆　土					橙　褐		羽状付加条縄文			拓15
531	弥生土器壺	4号周	覆　土					明橙灰					拓54
532	弥生土器壺	4号周	覆　土					灰　褐					拓93
533	弥生土器壺	4号周	覆　土					橙	輪積み後	羽状付加条縄文			拓493
534	弥生土器壺	4号周	覆　土					明橙灰					拓485
535	弥生土器壺	4号周	覆　土					明橙灰					拓108
536	弥生土器壺	4号周	覆　土					明橙灰	ケズリ	撚糸文			拓100
537	土師器甕	4号周	覆　土					橙　灰	ナデ	ハケメ			拓48
538	土師器甕	4号周	覆　土	17.4		2.6(残)	10	にぶい褐	ハケメ→ヨコナデ	ヨコナデ			672
539	土師器高杯	4号周	覆　土			3.2(残)	15	赤　褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	朱彩	E 2	391
540	土師器甕	4号周	覆　土	15		4.6(残)	10	茶　褐	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ		H 2	59
541	土師器高杯	4号周	覆　土			4.7(残)	30	にぶい橙		ヘラミガキ		K 2b	390
542	土師器高杯	4号周	覆　土			7.4(残)	30	橙　褐	ヘラミガキ	ハケメ→ヘラミガキ		K 5a	108
543	弥生土器壺	4号周	覆　土		10.8	3.1(残)	5	灰　褐		ヘラナデ			685
544	弥生土器壺	4号周	覆　土		11.0	6.3(残)	10	黄　橙	ナデ				673
545	土師器高台付甕	4号周	覆　土		5.6	2.1(残)	10	黄橙褐	ナデ　指頭圧痕	ナデ			198
546	弥生土器壺	4号周	溝　内	14.2	5.6	22.7	90	茶　褐				D 2	㊸
547	土師器壺	5号周	覆　土	11.2		8.1	30	明橙灰	ハケメ・ヨコナデ・ナデ	ハケメ・ヨコナデ			168
548	土師器甕	5号周	覆　土		4.4	6.1(残)	30	橙	ヘラナデ	ヘラケズリ→ヘラナデ・底部ヘラナデ	二次熱変	S 3b	209
549	土師器器台	5号周	覆　土			4.2(残)	30	赤　橙		ヘラミガキ		F 3	730
550	弥生土器壺	6号周	覆　土	15.0		8.3(残)	20	茶　褐		ミガキ・多条沈線		C 2	199
551	弥生土器壺	7号周	ℓ2					灰　褐	平行沈線文	連弧文		A	拓268
552	弥生土器壺	7号周	覆　土					暗灰褐		渦文		A	拓283
553	弥生土器甕	7号周	ℓ2					灰　褐		助骨文		A 1	拓274
554	弥生土器壺	7号周	ℓ3					暗灰褐		キザミ　沈線区画文		B 3	拓269
555	弥生土器壺	7号周	検出面					明灰褐		沈線区画文			拓273
556	弥生土器壺	7号周	ℓ1					明灰褐		キザミ　連弧文		B 2	拓272
557	弥生土器壺	7号周	ℓ3					灰　褐		キザミ			拓271
558	弥生土器壺	7号周	検出面					明灰褐		沈線区画文		B 2	拓284
559	弥生土器壺	7号周	ℓ3					暗灰褐		刺突文		B 2	拓278
560	弥生土器壺	7号周	検出面					明橙灰		小波状文		C 4c	拓285
561	弥生土器壺	7号周	ℓ3					橙　灰		ハケ	562と同一		拓280
562	弥生土器壺	7号周	ℓ3					明橙灰		重三角文	561と同一		拓286
563	弥生土器壺	7号周	ℓ1					黒　褐		沈線区画文		B 2	拓277
564	弥生土器鉢	7号周	検出面					灰　褐	ナデ				拓270
565	弥生土器高杯	7号周	ℓ1					橙　灰		変形工字文		B 3	拓282
566	弥生土器壺	7号周	ℓ3					暗灰褐		刺突文　連弧文		B 2	拓267
567	弥生土器壺	7号周	ℓ1					灰　褐					拓281
568	弥生土器壺	7号周	検出面					明灰褐		撚糸文			拓276
569	弥生土器壺	7号周	ℓ3					明橙灰		沈線文			拓287
570	弥生土器壺	7号周	覆　土					明橙灰					拓275
571	弥生土器甕	7号周	ℓ1					黄　橙		網目状撚糸文			拓489
572	弥生土器壺	7号周	ℓ2					明灰褐					拓289
573	弥生土器壺	7号周	ℓ3					明　橙	ケズリ	撚糸文			拓290
574	弥生土器壺	7号周	ℓ1					暗橙褐					拓288

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
575	土師器器台	7号周	覆土		10.0	9.0(残)	60	明橙灰	ナデ	ヘラミガキ・ナデ		K7	547
576	土師器高杯	7号周	覆土			4.4(残)	20	明橙褐	ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ		F	515
577	土師器高杯	7号周	覆土			3.5(残)	20	橙	ヘラミガキ			G	568
578	土師器高杯	7号周	覆土			9.1(残)	70	褐	ナデ	ナデ		F	541
579	土師器高杯	7号周	覆土			9.0(残)	40	明黄橙	ヘラナデ	ヘラミガキ ヘラナデ		F	526
580	土師器高杯	7号周	覆土			6.8(残)	60	橙	ナデ	ハケメ　ヘラミガキ		K5b	553
581	土師器器台	7号周	覆土			7.2(残)	20	明橙褐	ナデ+ヘラナデ	ヘラミガキ→ナデ		K3b	542
582	土師器高杯	7号周	覆土			10.1(残)	20	橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ		K2b	544
583	土師器器台	7号周	覆土		9.4	6.9(残)	20	明赤褐	ナデ	ヘラミガキ　ハケメ		F2	532
584	土師器器台	7号周	覆土	7.7		2.6(残)	30	橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ		C	531
585	土師器器台	7号周	覆土			5.0(残)	10	橙		ヘラミガキ		F4	467
586	土師器器台	7号周	覆土			6.2(残)	30	橙	ヘラミガキ ハケメ→ナデ	ヘラミガキ		F4	512
587	土師器器台	7号周	覆土			7.6(残)	20	赤褐	ハケメ	ヘラミガキ		F4	543
588	土師器鉢	7号周	覆土			3.7(残)	10	明褐灰	ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラナデ ヘラミガキ			516
589	土師器壺	7号周	覆土		9	2.8(残)	5	黒褐 橙褐	ハケメ→ナデ	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ		T2a	485
590	土師器台付甕	7号周	覆土	11.8	1.4	9.6	80	橙褐	ヨコナデ→ヘラミガキ・ナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ ヘラミガキ・ナデ		A	545
591	土師器台付鉢	7号周	覆土		4.8	2.6(残)	20	明黄橙	ヘラミガキ			C3	478
592	土師器小型丸底壺	7号周	覆土		3.3	2.3(残)	20	赤褐	ナデ	ヘラミガキ			527
593	土師器小型丸底壺	7号周	覆土			3.0(残)	20	橙	ナデ	ヘラミガキ			528
594	土師器小型丸底壺	7号周	覆土		4.0	5.1(残)	70	橙褐	ナデ	ハケメ→ナデ		D	479
595	弥生土器壺	7号周	覆土	19.0		7.8	10	明黄灰	ナデ	ナデ		E4	530
596	土師器壺	7号周	覆土	15.8(推定)		10(残)	5	赤褐	ハケメ→ヨコナデ ハケメ・ナデ	ヨコナデ→ハケメ		G	502
597	土師器壺	7号周	覆土			6.3(残)	10	明黄橙	ハケメ→ナデ	ナデ　ハケメ 縄の原体圧痕		R	509
598	土師器壺	7号周	覆土		7.4	4.5(残)	20	灰褐	ナデ・ヘラナデ	ヘラナデ		T2a	501
599	土師器壺	7号周	覆土		7.8	4.9(残)	15	明橙灰	ハケメ	ハケメ→ナデ		T2a	503
600	土師器壺	7号周	覆土		約10.5	3.6(残)	5	明橙灰	ヘラナデ・ナデ	ナデ		T2b	524
601	土師器甕	7号周	覆土	16.4		3.2(残)	10	黄橙		ヨコナデ		P2	488
602	土師器甕	7号周	検出面	17.7		4.4(残)	5	明橙灰	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	ヨコナデ		O	674
603	土師器甕	7号周	検出面	18		4.7(残)	5	暗赤褐	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ		P2	487
604	土師器甕	7号周	覆土	17.0		4.7(残)	10	茶褐	ヨコナデ→ナデ ハケメ→ヘラナデ	ヨコナデ ハケメ→ナデ・凹線		C2	519
605	土師器甕	7号周	検出面	19.0		3.2	5	灰褐	ヨコナデ	ヨコナデ		O	679
606	土師器甕	7号周	覆土		21.0	3.9(残)	10	黄橙	ハケメ→ヨコナデ	ヨコナデ		P2	677
607	弥生土器壺	7号周	覆土		9.4	17.1	30	明橙灰					㊷
608	土師器甕	7号周	覆土	15		6.1(残)	10	明橙褐	ヨコナデ　ハケメ	ヨコナデ→ハケメ		R1	490
609	土師器壺	7号周	1包		6.6	19.6	40	橙褐	ヘラナデ+ナデ ハケメ→ナデ	ヘラケズリ→ハケメ →ナデ・ヘラミガキ			㊻
610	土師器壺	7号周	覆土	10.4		4.8(残)	10	明橙灰	ヘラミガキ	ヘラミガキ		C1	675
611	土師器甕	7号周	覆土		5.2	3.1(残)	10	明褐	ハケメ	ハケメ		S3a	486
612	土師器甕	7号周	北側		11.4	3.5(残)	5	橙褐	ハケメ	ハケメ　ヘラケズリ		S2	686
613	土師器壺	7号周	ℓ1				5	明橙灰	ハケメ	ハケメ→ナデ	体部上位に絵		㊽
614	土師器壺	7号周	ℓ1			52.0	40	橙褐	ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ			㊾
615	弥生土器壺	8号周	覆土					明橙灰	ハケメ	磨消縄文・ 交互刺突文		B1	拓188
616	土師器壺	8号周	覆土	16		5(残)	5	橙褐	ハケメ→ヘラミガキ(ナデに近い)	ハケメ→ヘラミガキ(ナデに近い)		J	319
617	弥生土器壺	9号周	覆土	23.4		5.3(残)	10	橙褐	ヘラケズリ	ヘラケズリ・ハケメ 指頭圧痕		E3	535
618	弥生土器壺	10号周	ℓ1					明灰褐		渦文		A	拓253
619	土師器鉢	10号周	覆土	10.4	4.8	7.8	70	明橙褐	ナデ	ハケメ→ナデ 2ヶ所に孔		B2	475
620	弥生土器高杯	11号周	覆土			7.6(残)	30	黄橙		磨消縄文・変形工字文・刺突文	朱彩	B3	570
621	土師器小型丸底壺	11号周	覆土			2.8(残)	40	橙	ヘラミガキ・ナデ	ヘラミガキ		C	520
622	弥生土器壺	11号周	覆土					明灰褐		キザミ　沈線区画文		B2	拓246

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
623	弥生土器壺	11号周	覆土					暗灰褐		連弧文　押圧		A3	拓240
624	弥生土器壺	12号周	覆土					明橙褐		渦文		A	拓252
625	弥生土器甕	12号周	覆土					明橙灰		平行沈線文		A2	拓235
626	弥生土器壺	12号周	覆土					明灰褐		磨消縄文			拓259
627	弥生土器壺	12号周	覆土					灰　褐		キザミ・沈線区画文		B2	拓238
628	弥生土器壺	12号周	覆土					赤　褐		刺突文・沈線区画文	赤彩	B4	拓484
629	弥生土器壺	12号周	覆土					赤　褐		沈線区画文・刺突文	赤彩	B4	拓244
630	弥生土器壺	12号周	覆土					灰　褐	突起	磨消縄文			拓247
631	弥生土器壺	12号周	覆土					灰　褐		刺突文			拓248
632	弥生土器壺	12号周	覆土					明橙褐				D4	拓255
633	弥生土器壺	12号周	ℓ1					明橙灰				D4	拓232
634	弥生土器鉢	12号周	覆土					灰　褐		撚糸文			拓242
635	弥生土器壺	12号周	覆土					暗　褐	突起				拓234
636	弥生土器壺	12号周	覆土					灰　褐				D4	拓243
637	弥生土器壺	12号周	覆土					灰　褐					拓487
638	弥生土器壺	12号周	覆土					暗灰褐		撚糸文			拓256
639	弥生土器壺	12号周	覆土					明橙灰					拓492
640	弥生土器甕	12号周	覆土					暗橙褐					拓491
641	弥生土器高杯	12号周	覆土		5.4	5.2(残)	10	橙　褐	ナデ	スリットは3ヶ所		A1	249
642	弥生土器鉢	12号周	覆土		6.2	5.1(残)	20	明橙褐	ヘラナデ	交互刺突文・区画文		E1	569
643	土師器高杯	12号周	覆土		4	4.5	20	暗赤褐	ハケメ→ナデ	ハケメ		K1b	250
644	弥生土器壺	12号周	覆土	16.6		10.2	15	暗茶褐		刺突文・磨消縄文		B2	571
645	土師器壺	12号周	覆土		4.8	2.7(残)	10	橙　褐	ナデ	指頭痕ナデ　ハケメ			452
646	土師器高杯	12号周	覆土			5.9(残)	40	赤　褐	ヘラナデ	ヘラナデ ヘラミガキ	朱彩	K1a	456
647	土師器高杯	12号周	覆土			4.5(残)	15	橙		ヘラミガキ		5a	460
648	弥生土器壺	12号周	覆土		2.8	3.5(残)	5	茶　褐	ヘラナデ			T1b	248
649	弥生土器壺	13号周	覆土	13.8		6.9(残)	10	暗赤褐				D1b	427
650	弥生土器壺	13号周	覆土	18.0		5.9(残)	5	明黄橙	ナデ(ユビナデ)			D4	687
651	土師器壺	13号周	1包	17.4		27.1	60	橙	ハケメ　ナデ	ナデ→ハケメ	炭化物付着	P	㊾
652	弥生土器高杯	13号周	ℓ1					明橙褐	ハケメ	ハケメ			拓486
653	弥生土器壺	13号周	ℓ1					暗灰褐		キザミ			拓490
654	弥生土器高杯	13号周	覆土			3.5(残)	10	明橙褐		平行沈線	孔3ヶ所	A1	377
655	土師器甕	13号周	覆土		10	5.6(残)	10	橙　褐	ハケメ	ハケメ		S2	375
656	土師器壺	13号周	覆土	24.0		4.0(残)	5	明橙褐	ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラミガキ・ハケメ			680
657	須恵器大甕	SD43	覆土	23.7		7.1(残)	5	灰	当て具痕	タタキ			407
658	須恵器甕	SD43	覆土	18.2		10.4(残)	5	灰　褐	当て具痕	タタキ			282
659	須恵器大甕	SD46	覆土		18.0	6.4	5	明灰褐	ヘラナデ	タタキ　ヘラケズリ			⑭
660	土師器高台杯	SD46	覆土		5.8	2.6(残)	30	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ				439
661	土師器杯	SD70	覆土	12.8	5.6	4.7	20	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			81
662	須恵器杯	SD70	覆土	13.2	5.8	3.7	30	明　灰		回転ヘラキリ→ナデ			24
663	赤焼土器高台杯	SD70	覆土		8.0	4.8(残)	10	明茶褐					6
664	須恵器瓶	SD70	覆土		8.0	5.3(残)	10	明　灰		回転ヘラケズリ			4
665	弥生土器高杯	SD70	覆土		4.8	3.2(残)	20	黄　灰		平行沈線		A2	113
666	土師器高杯	SD70	覆土			4.8(残)	10	橙　褐	ナデ	摩滅のため不明			177
667	弥生土器壺	SD70	覆土					明灰褐		平行沈線			拓1
668	須恵器甕	SD70	覆土		11.0	10.9	20	青　灰	ヘラナデ	回転ヘラケズリ	底部に須恵器杯口縁部が溶着		⑧
669	弥生土器壺	SD153	ℓ1					暗　褐					拓233
670	弥生土器甕	SD153	覆土		10.6	3.1(残)	10	明橙灰	ヘラナデ				459

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
671	弥生土器壺	SD153	ℓ1	18.0		21.0	40	明橙	ハケメ→ヘラナデ	ナデ		D1b	㊼
672	弥生土器壺	SD153	覆土					明灰褐					拓250
673	土師器甕	SD02	覆土			11.5(残)	20	明橙灰		ヘラケズリ→タタキ			225
674	須恵器高杯	SD04	覆土	16.0		3.9(残)	70	青灰色					43
675	土師器杯	SD09	覆土	13.6	5.8	4.3	70	明灰白	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			32
676	土師器杯	SD09	覆土		5.2	4.2(残)	50	灰褐	黒色処理	手持ちヘラケズリ・回転糸切り			111
677	土師器高杯	SD16	覆土		9.6	7.3(残)	60	明黄橙		ヘラミガキ	朱彩	D	50
678	土師器甕	SD20	覆土		2.6	1.2(残)	10	明橙褐	ヘラナデ	ハケメ	朱彩	S3a	74
679	土師器筒形土器	SD07	覆土	12.8		7.2(残)	20	明橙褐					105
680	土師器壺	SD20	覆土	9.8		5.0(残)	10	明黄橙	ヨコナデ→ヘラミガキ	ヨコナデ→ヘラミガキ		B1	68
681	土師器高台杯	SD39	覆土		6.8	2.3	25	黒灰	黒色処理 ヘラミガキ	黒色処理 ヘラミガキ			121
682	土師器鉢	SD20	覆土	13.0	5.6	6.8	70	明黄橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ・ナデ			217
683	土師器筒形土器	SD41	遺物集中部検出面	9.0		8.8(残)	30	明茶褐	ユビナデ				40
684	土師器杯	SD38	覆土	13.0	5.5	4.1	50	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			29
685	土師器壺	SD20	覆土			6.3(残)	20	明橙灰	ハケメ→一部ナデ	ハケメ→ナデ→ミガキ			196
686	土師器杯	SD41	覆土	14.0		3.5(残)	20	灰白	黒色処理		墨書(体部)「?」		213
687	土師器杯	SD41	遺物集中部		5.8	2.7(残)	40	明橙褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転糸切り			56
688	土師器杯	SD41	遺物集中部	14.0	6.1	4.2	50	明灰褐	ヘラミガキ	回転糸切り			90
689	土師器高台杯	SD41	覆土		7.2	1.7(残)	15	灰白	黒色処理 ヘラミガキ				425
690	須恵器杯	SD51	覆土	14.6	7.6	4.0	70	明灰白		回転ヘラキリ			31
691	弥生土器甕	SD56	覆土					明橙灰		綾絡文		A3	拓12
692	弥生土器壺	SD56	覆土					黒褐		渦文		A	拓202
693	弥生土器壺	SD56	覆土					明橙褐		沈線区画文		B2	拓213
694	弥生土器壺	SD56	覆土					明橙灰		沈線区画文		B4	拓211
695	弥生土器壺	SD56	覆土					暗褐		沈線区画・連弧文			拓14
696	弥生土器壺	SD56	覆土					暗褐		平行沈線			拓13
697	弥生土器壺	SD56	覆土					明橙灰	ヘラナデ	押圧		D1a	拓191
698	弥生土器壺	SD56	覆土					暗灰褐		押圧		D1a	拓224
699	弥生土器壺	SD56	覆土					灰褐		押圧　刺突文			拓193
700	弥生土器壺	SD56	覆土					明橙灰					拓218
701	弥生土器壺	SD62	ℓ1					暗灰褐		渦文		A	拓194
702	土師器杯	SD53	覆土	14.0	6.6	5.8	20	明橙灰		回転ヘラケズリ			91
703	土師器杯	SD56	覆土	13.4	6.0	3.9	20	橙灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転糸切り			69
704	土師器壺	SD68	覆土	9.0		3.6(残)	5	赤褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ ヨコナデ	朱彩	B2	388
705	土師器台付甕	SD68	覆土			6.1(残)	10	明灰褐	ナデ	ハケメ・ナデ		K1b	376
706	土師器杯	SD58	覆土	12.0	5.6	4.3	60	暗茶褐	黒色処理 ヘラミガキ	黒色処理・ヘラミガキ・回転ヘラケズリ			37
707	弥生土器甕	SD68	覆土	22.0		9.5(残)	10	橙褐	ヘラナデ・ナデ	押圧・ヘラナデ		E1	393
708	弥生土器甕	SD59	覆土					暗褐		平行沈線		A2	拓9
709	弥生土器壺	SD68	覆土					明橙灰	ナデ	キザミ・押圧			拓192
710	弥生土器壺	SD68	覆土					明橙灰		押圧・撚糸文・キザミ		D1a	拓227
711	弥生土器壺	SD68	ℓ1					明橙灰		渦文		A	拓197
712	弥生土器壺	SD68	覆土					明橙灰		沈線区画文			拓196
713	弥生土器壺	SD97	覆土					明橙灰		平行沈線文		A2	拓184
714	弥生土器壺	SD97	覆土									A	拓186
715	弥生土器壺	SD97	覆土					橙灰		連弧文		A	拓185
716	弥生土器壺	SD97	覆土					明橙灰	ハケメ　ナデ	沈線文　刺突文			拓180
717	弥生土器壺	SD112	ℓ2					明橙灰		キザミ　磨消縄文			拓195
718	弥生土器壺	SD118	覆土					暗灰褐		綾絡文			拓254

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
719	弥生土器壺	SD147	覆土					暗灰褐		沈線区画文・刺突文	238と同一	B2	拓241
720	土師器小型鉢	SD91	覆土	11.0		4.4(残)	15	暗茶褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ			457
721	土師器杯	SD82	覆土	12.6	6.0	4.0	80	明黄灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ・回転糸切り			429
722	土師器高杯	SD73	覆土			6.5(残)	30	明黄橙	ハケメ→ナデ	ヘラミガキ	朱彩	K1b	458
723	須恵器杯	SD109	覆土	13.4	7.2	2.8	45	灰		回転ヘラキリ→ナデ			266
724	土師器杯	SD118	覆土	16.6		3.8(残)	30	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ		墨書(体部)「安」		559
725	須恵器杯	SD104	覆土		7.6	3.6	60	灰		回転ヘラキリ			268
726	須恵器杯	SD109	覆土	14.2	7.6	4.2	15	灰白		回転ヘラキリ→ナデ			281
727	須恵器瓶	SD86	覆土		7.6	4.3(残)	10	灰					205
728	須恵器杯	SD145	覆土	13.2	6.6	3.8	60	灰白		回転ヘラキリ→ナデ			431
729	土師器杯	SD121	床面	13.5	5.5	4.5	60	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ再調整			410
730	須恵器長頸瓶	SD121	覆土			3.8(残)	5	灰					372
731	土師器甕	SD123	覆土					明灰褐	ナデ	タタキ			拓173
732	弥生土器壺	SM01			11.0	2.7(残)	5	明褐		ケズリ・ナデ			300
733	弥生土器甕	SM02		13.8	8.2	23.0	60	明褐				A3	⑫
734	弥生土器甕	SM02			9.6	26.5	30	明茶褐	輪積み痕			A	㉑
735	弥生土器埋甕	SM03			9.0	27.8	60	灰褐		ヘラケズリ			㊷
736	弥生土器壺	SM04			3.6	16.3	20	橙褐					㊷
737	弥生土器壺	SM04		15.4	7.4	49.5	50	茶褐			モミ痕	A2	㊸
738	弥生土器壺	SM05		11.8	7.6	46.5	60	明茶灰				A1	㊵
739	土師器杯	V区ピット	覆土	15.4	6.0	5.2	30	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	ヘラミガキ 手持ちヘラケズリ			276
740	中世陶器擂鉢	V区ピット	覆土		12	5.2(残)	5	黄灰		回転ヘラケズリ			313
741	弥生土器壺	SX01	覆土					明橙灰		渦文		A	拓42
742	弥生土器甕	SX01	覆土					明橙灰		平行沈線		A2	拓53
743	土製紡錘車	SX01	覆土			1.5	95	明黄橙					226
744	円版状土製品	SX01	覆土	長5.3		厚さ0.6	90	明灰褐					364
745	土師器器台	SX01	覆土			5.3(残)	30	明橙灰	ナデ ハケメ ヘラミガキ	ナデ→ヘラミガキ		F1b	214
746	土師器高杯	SX01	覆土			6.9	20	暗茶褐	内外面摩滅著しく調整不明			K2b	175
747	土師器高杯	SX01	覆土			6.5(残)	20	赤褐		ヘラミガキ		K2b	174
748	土師器高杯	SX01	覆土			5.2(残)	5	明黄橙		ヘラミガキ		K1b	224
749	土師器器台	SX01	覆土	7		5.7(残)	60	橙褐	ヘラミガキ	ハケメ→ヘラミガキ 孔3ヶ所		E1	148
750	土師器器台	SX01	覆土			4.8(残)	45	明橙褐	ヘラミガチ	ヘラミガキ		E2	145
751	土師器器台	SX01	覆土			2.4(残)	5	明黄緑	ヘラナデ	磨消のため不明			173
752	土師器壺	SX01	覆土	32.6		8.5(残)	15	橙褐	内面調整摩滅のため不明	口縁部(ヨコナデ→ミガキ→ナデ)頸部(ハケメ)		H	102
753	土師器小型壺	SX01	覆土			3.5(残)	20	明黄灰	ハケメ ナデ	磨消のため不明瞭ながらもヘラミガキ		C	159
754	土師器小型壺	SX01	覆土		2.6	4.5(残)	50	明橙灰	ヘラナデ	ヘラケズリ			98
755	土師器壺	SX01	覆土	13.4		6.7(残)	20	明赤褐	ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ ユビナデ	ヘラミガキ		C2	64
756	土師器杯	SX01	覆土	22.6		5.1(残)	10	明橙褐	ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ	ヨコナデ ヘラミガキ ハケメ		A3	138
757	土師器小型壺	SX01	覆土	12.0	3.0	口縁6.4 底部3.2	70	(淺黄橙)赤褐	ヨコナデ 単位不明 瞭なナデ	ヨコナデ 単位不明瞭なナデ ヘラケズリ	朱彩	C2	⑯
758	土師器甕	SX01	覆土	17.0		12.5	20	黄橙灰	ハケメ→ヨコナデ ハケメ→ヘラナデ	ヨコナデ ハケメ→ナデ		P2	㉓
759	土師器壺	SX01	覆土	17.4		3.8(残)	5	明黄橙	ヘラミガキ ユビナデ	ハケメ→ヨコナデ 刺突文			133
760	土師器甕	SX01	覆土		4.6	1.9(残)	10	暗茶褐	ヘラナデ	ハケメ			129
761	土師器甕	SX01	覆土		4.2	1.4(残)	20	黄橙	ハケメ(前)ヘラナデ	ハケメ		S3a	125
762	土師器甕	SX01	覆土		3.9	1.9(残)	10	にぶい黄橙	ナデのみ	ヘラケズリ ハケメ		S3a	126
763	土師器甕	SX01	覆土		6	1.8(残)	10	橙褐	ハケメ ナデ	ヘラケズリ かるいユビナデ		S3a	53
764	土師器埋甕	SX01	覆土	8.6		25.2	80	橙褐	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ		P1b	㉞
765	土師器杯	SX05	覆土	13.8	6.2	4.2	25	灰白	黒色処理 ミガキ	回転ヘラケズリ	墨書(体部)「比」		257
766	土師器杯	SX05	覆土		5.8	2.8	40	明黄灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 底部回転糸切り			247

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴　(内)	器面の特徴　(外)	備考	分類	登録No
767	須恵器杯	SX05	覆土	12.6	6.4	3.7	40	灰白		回転ヘラキリ→ヘラナデ			549
768	須恵器杯	SX05	覆土	13.0	6.8	3.8	50	灰白		回転ヘラキリ→ナデ			280
769	土師器杯	SX05	覆土	13.9	5.7	4.5	40	黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	二次熱変		564
770	須恵器杯	SX05	覆土	13.0	6.6	4.3	30	灰白		回転ヘラキリ	油煙付着		239
771	土師器甕	SX05	覆土		6.6	4(残)	10	灰褐		回転糸切り			265
772	土師器甕	SX05	覆土	21		9(残)	10	明橙灰		カキメ			379
773	土師器甕	SX05	覆土	19.0		4.7(残)	10	明黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	ヘラミガキ			237
774	土師器甕	SX05	覆土	22.2		5.6(残)	10	橙					451
775	土師器甕	SX06	検出面	16.8		10.2(残)		橙	ヘラミガキ+ユビナデ ヨコナデ　ナデ	ヨコナデ ハケメ(先)		P2	534
776	土製紡錘車	SX07	覆土	長軸 4.9	短軸 4.4	厚さ 1.2	100	灰白			朱彩		363
777	土師器杯	SX07	覆土	14.6	5.8	3.9	30	浅黄橙	黒色処理(一部) ヘラミガキ	回転糸切り無調整			290
778	赤焼土器杯	SX07	覆土	13.2	4.8	3.9	90	明黄橙	ナデ	回転糸切り			304
779	土師器高杯	SX07	覆土	17.8		4.1(残)	10	橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ		G	362
780	赤焼土器杯	SX07	覆土	12.6	4.6	4.4	70	明橙褐		回転糸切り			270
781	土師器杯	SX07	覆土	11.0	5.2	4.1	40	明黄橙	黒色処理　ヘラナデ	回転糸切り			428
782	赤焼土器高台杯	SX07	覆土		8.0	1.8(残)	20	橙					275
783	土師器高台杯	SX07	覆土		8.0	2.7(残)	25	にぶい橙	黒色処理 ヘラミガキ	回転糸切り			285
784	土師器杯	SX07	覆土	12.4	5.5	4.3	90	明橙褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			432
785	須恵器杯	SX08	覆土	13.2	7	3.4	70	灰		回転ヘラキリ	ヘラ記号(底部)		236
786	須恵器杯	SX08	覆土	13.5	6.6	3.5	60	灰白		回転ヘラキリ→ナデ	墨書(底部)		305
787	須恵器杯	SX08	覆土	14.4	7.6	4.1	80	明黄灰		回転ヘラキリ→ナデ			284
788	弥生土器壺	SX09	ℓ1					暗灰褐		磨消縄文　キザミ		B2	拓214
789	土師器器台	SX09	覆土	8.8		7(残)	70	橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ		D	508
790	土師器高杯	SX09	覆土			6.1(残)	40	橙	ハケメ　ヘラミガキ	ハケメ→ヘラミガキ		K3b	518
791	土師器器台	SX09	覆土			6.0(残)	30	橙褐		ハケメ→ヘラミガキ		F3	272
792	土師器器台	SX09	覆土			5.1(残)	30	橙		ヘラミガキ		F3	271
793	土師器小型器	SX09	検出面		2.6	2.3(残)	60	にぶい赤褐		ヘラミガキ ヘラケズリ			406
794	土師器小型丸底壺	SX09	覆土		2.8	2.2(残)	70	明黄橙	ナデ	ヘラミガキ		A	517
795	土師器小型丸底壺	SX09	覆土	10.1	3.7	6.5	80	橙	ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ+ナデ　ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ ヘラケズリ ヘラミガキ+ナデ ヨコナデ		B	500
796	土師器	SX09	覆土	11.0		4.6(残)	20	明橙	ナデ(単位不明)	ヘラミガキ ヨコナデ			308
797	土師器杯	SX09	覆土	14.6	6.2	4.3	30	橙	ナデ+ヘラミガキ	ヘラミガキ+ナデ		A1	529
798	土師器壺	SX09	覆土	15		5(残)	20	橙	ハケメ→ナデ（不定方向）	ハケメ→ヨコナデ			507
799	土師器壺	SX09	覆土	15.4		6.8(残)	10	褐	ヨコナデ→ヘラミガキ　ナデ	ヨコナデ　ナデ		N	540
800	土師器甕	SX09	覆土	20.6		3.7	10	明黄灰	ヨコナデ→ハケメ→ヘラミガキ	ヨコナデ→ヘラミガキ		I	548
801	土師器甕	SX09	覆土	19		7(残)	20	にぶい橙	ヨコナデ　ナデ	ヨコナデ ハケメ→ナデ		P2	252
802	土師器甕	SX09	覆土	16.6		6.5(残)	30	赤橙褐	ヨコナデ ハケメ+ナデ	ヨコナデ ハケメ(先)		P2	510
803	土師器甕	SX09	覆土	18.0		7.0(残)	10	茶褐	ヨコナデ　ハケメ	ヨコナデ　ハケメ		P2	244
804	土師器甕	SX09	覆土	18.2		3.2(残)	5	橙褐	ヨコナデ	ヨコナデ ハケメ(後)		P2	251
805	土師器小型甕	SX09	覆土		3	5.2(残)	10	明赤褐	ハケメ	ハケメ		C1	255
806	土師器小型甕	SX09	覆土		4.4	7.3(残)	20	明黄橙	ハケメ	ハケメ→ナデ ヘラケズリ		C2	484
807	土師器甕	SX09	ℓ2		7.6	13.7	40	明橙褐	ナデ	ハケメ　ナデ		S2	㊼
808	土師器甕	SX09	ℓ2	18.5	5.0	27.4	80	茶褐	ヨコナデ　ハケメ	ヨコナデ　ハケメ		P1a	㊺
809	土師器甕	SX09	ℓ1	18.0		28.5	80	茶褐	ヨコナデ　ハケメ	ヨコナデ　ハケメ		P1a	㊸
810	土師器大甕	SX09	ℓ2,3	31.0		29.5	70	茶褐	ヨコナデ→ハケメ ヘラナデ	ヨコナデ　ハケメ ハケメ→ヘラナデ		P2	㊶
811	土師器甕	SX09	ℓ2,3	25.0	5.6	28.2	70	灰褐	ハケメ→ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ　ハケメ ヘラナデ	スス状炭化物付着	P1	㊽
812	土師器杯	SX12	覆土	14.0	6.2	4.4	40	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	墨書(体部)2ケ所「比」		563
813	土師器杯	SX12	覆土	13.0	6.6	3.9	70	明黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	ヘラケズリ 回転ヘラキリ	墨書(体部)2ケ所「比」		496
814	土師器杯	SX12	覆土	13.6	5.7	4.4	60	灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ (回転糸切り)	墨書(体部)2ケ所「比」		472

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
815	土師器杯	SX12	覆土	13.0	5.6	4.5	100	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	墨書土器「什」2ヶ所 体部		349
816	土師器杯	SX12	覆土	12.4		3.5 (残)	5	明黄橙	黒色処理 ヘラミガキ		墨書(体部)「比」		556
817	土師器杯	SX12	覆土	14.0	5.4	4.2	25	明黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り	墨書土器「比」体部		462
818	土師器杯	SX12	覆土	13.6		4.0	30	明黄灰	黒色処理 ヘラミガキ		墨書土器「比」体部		463
819	土師器杯	SX12	覆土	13.2	5.6	4.1	50	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 回転糸切り	墨書土器「比」体部		461
820	土師器杯	SX12	覆土	13.6		3.8	25	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	墨書土器「比」体部		464
821	土師器杯	SX12	覆土	16.2	6.1	6.3	40	明黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 回転ヘラキリ→ヘラナデ	墨書(体部)「比」		562
822	土師器杯	SX12	覆土	13.0	6.0	4.2	100	灰白	黒色処理 ヘラミガキ	ヘラケズリ 回転糸切り →ナデ＋ヘラミガキ	墨書有「?」(体部)		438
823	土師器杯	SX12	覆土	14.2		4.5	40	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 回転糸切り	墨書土器「比」体部		465
824	土師器杯	SX12	覆土	12.6	5.8	4.3 (残)	80	明橙褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			576
825	土師器杯	SX12	覆土	14.0 (推定)	5.8	4.6	30	薄褐 黒斑	黒色処理 ミガキ	回転ヘラケズリ			385
826	土師器杯	SX12	覆土	13.2	6.1	4.2	80	橙褐	黒色処理 ヘラミガキ	ヘラケズリ (ヘラミガキ) 回転ヘラキリ→ナデ	二次熱変		533
827	土師器杯	SX12	覆土	13.0	5.1	4.5	80	薄褐～ 赤褐(黒斑)	底見込みは放射状ミガキ 黒色処理 ミガキ光沢あり	回転ヘラケズリ			413
828	土師器杯	SX12	覆土	13.0	6.2	4.0	70	明橙褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	二次熱変		368
829	土師器杯	SX12	覆土	13.0	5.0	4.6	60	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	二次熱変		370
830	土師器杯	SX12	覆土	13.5	6.0	4.3	60	薄褐 黒斑(口縁部)	黒色処理 ミガキ光沢アリ	手持ちヘラケズリ 回転糸切り			416
831	土師器杯	SX12	覆土	13.0	5.8	4.4	40	浅黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			470
832	土師器杯	SX12	覆土	13.6	6.1	4.45	50	薄褐 黒斑(口縁部)	黒色処理 ミガキ光沢アリ	回転ヘラケズリ			417
833	土師器杯	SX12	覆土	13.0	6.1	4.2	60	明黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			469
834	土師器杯	SX12	覆土	14.1	5.6	4.4	30	黒褐	黒色処理 ヘラミガキ	ヘラケズリ 回転糸切り			474
835	土師器器台	SX12	覆土			6.8 (残)	30	橙		ヘラミガキ		F4	454
836	土師器器台	SX12	覆土			6.5 (残)	30	明褐	磨滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	朱彩	K3b	455
837	土師器高杯	SX12	覆土			4.6 (残)	10	橙褐	磨滅のため調整不明	磨滅のため調整不明			453
838	土師器杯	SX12	覆土	14.8	6.2	6.0	70	明黄灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			367
839	土師器杯	SX12	ℓ1	14.1	5.2	6.0	30	明薄褐 薄黒斑	黒色処理 ミガキ	手持ちヘラケズリ 回転糸切り			418
840	土師器杯	SX12	覆土	12.8	6.0	4.0	70	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ 回転糸切り			279
841	土師器杯	SX12	覆土	13.6		5.4	30	赤褐	黒色処理 ヘラミガキ 荒れて大部分ミガキ不明 口縁の一部にミガキ	ロクロメ 手持ちヘラケズリ	二次熱変		383
842	土師器杯	SX12	覆土	14 (推定)	6	5.9	口縁部～底部	明褐	黒色処理 ヘラミガキ有	回転ヘラケズリ 回転糸切り			366
843	土師器高台杯	SX12	覆土	16.1 (推定)	8.6	7.7	40	薄褐	黒色処理 ミガキ	ロクロメ			382
844	土師器杯	SX12	覆土	12.2	5.2	4.5	70	明橙褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	二次熱変		369
845	土師器杯	SX12	ℓ3	14.0	5.4	4.3	70	明黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ 静止糸切り			430
846	須恵器杯	SX12	覆土	12.9	6.2	3.5	25	灰白		回転ヘラキリ→ナデ			355
847	須恵器杯	SX12	覆土	13.8	6.7	4.1	30	灰		回転ヘラキリ			435
848	須恵器杯	SX12	覆土	13.4	6.3	4.1	70	灰		回転ヘラキリ→ナデ			354
849	須恵器杯	SX12	覆土	12.6	6.8	4.2	95	灰		回転ヘラキリ→ナデ			303
850	須恵器杯	SX12	覆土	15.0	7.9	3.7	15	灰白		回転ヘラキリ→ナデ			353
851	須恵器杯	SX12	覆土	13.7	6.1	4.4	15	灰		回転ヘラキリ→ナデ			357
852	須恵器杯	SX12	覆土	14.2	7.3	4.1	40	灰		回転ヘラキリ→ナデ			346
853	須恵器杯	SX12	覆土	14.3	8.0	3.9	25	灰白		回転ヘラキリ			356
854	土師器杯	SX12	覆土	14.0	7.6	4.7	95	明黄灰		回転ヘラキリ			567
855	須恵器杯	SX12	覆土	13.8	5.7	3.5	30	灰		回転ヘラキリ→ナデ			352
856	須恵器	SX12	覆土			5.9	0.9	10	灰白		回転ヘラキリ	底部ヘラ記号	358
857	須恵器杯	SX12	覆土	14.0	6.4	6.3	50	灰		底部回転糸切り			394
858	須恵器杯	SX12	ℓ3										743
859	須恵器長頸瓶	SX12	覆土			6.6	10 (頸部)	明褐	軽くロクロナデ調整	ロクロナデ調整			492
860	須恵器長頸瓶	SX12	覆土			6.4	10 (頸部)	灰			外部(一部灰釉・一部焼き跡)		491
861	須恵器長頸瓶	SX12	覆土			6.0 (残)	20 (頸部)	青灰					493
862	須恵器瓶類	SX12	覆土		9.0	7.8 (残)	5	灰					499

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
863	風字硯	SX12	覆土	最大幅12.6	最大径12.6	3.4	95	青灰～灰褐					560
864	須恵器壺	SX12	覆土	11.9		6.9(残)	10	灰					395
865	須恵器小型かめ	SX12	覆土		5.2	5.7(残)	20	灰			最大径 9.7		421
866	須恵器壺	SX12	覆土		6.9	4.2(残)	10	暗灰					498
867	土師器甕	SX12	覆土	16		9.9(残)	5	橙褐	歯ブラシのあと				409
868	土師器甕	SX12	覆土	13.4	7.2	13	50	灰褐		回転糸切り			483
869	須恵器大甕	SX12	1包覆土	44.0		12.5	10	灰	当て具痕	タタキメ			㊶
870	須恵器大甕	SX12	覆土	63.0		7.0	5	灰褐					㊵
871	須恵器大甕	SX12	覆土		24	4.7(残)	5	灰	ナダ	タタキ→ロクロナデ			504
872	須恵器壺	SX14	覆土		8.6	13.5	80	灰					㊻
873	弥生土器壺	SX15	ℓ1					灰褐					拓264
874	須恵器杯	SX02	覆土	13.0		3.1(残)	5	灰白			墨書(体部)「?」		558
875	土師器杯	SX04	覆土	13.4	5.6	4.0	30	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラキリ			277
876	弥生土器壺	SX10	ℓ2					明灰褐		連弧文			拓265
877	弥生土器壺	SX10	ℓ1					明灰褐		渦文			拓266
878	須恵器大甕	SX02	覆土					灰	ナデ	タタキ			拓229
879	土師器甕	SX02	覆土	31.0		15.4	10	明橙					㊴
880	土師器器台	SX10	覆土			6.3(残)	40	明橙	不明	ナデ+ヘラミガキ		F3	513
881	弥生土器壺	SX13	覆土					赤褐		撚糸文　キザミ		D1b	拓263
882	弥生土器高杯	SX10	覆土		5.6	4.6	40	茶褐				A2	546
883	須恵器杯	SX11	覆土	14.2	7.0	4.0	45	灰白		回転ヘラキリ→ユビナデ			480
884	須恵器杯	SX13	覆土	13.6	7.2	3.5	80	灰白		回転ヘラキリ→ナデ			506
885	土師器甕	SX11	覆土		6.2	3.7(残)	20	暗褐		底部切り離し摩滅のため不明			511
886	土師器甕	SX11	覆土	21.2		7.3	10	明橙灰					477
887	土師器甕	SX13	覆土		8.8	10.1(残)	40	明薄褐 明橙褐	黒色処理　ミガキ	回転ヘラケズリ 回転糸切り	最大径残存体部中位17.6cm		414
888	須恵器長頸瓶	SX11	覆土			6.6(残)	5	灰					505
889	土師器杯	SX13	覆土	13.6	6.0	4.9	40	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ 回転糸切り			525
890	縄文土器深鉢	I21	検出面					灰褐		隆帯　キザミ			拓494
891	縄文土器深鉢	I21	L Ⅱ					明橙灰		隆帯　キザミ			拓335
892	縄文土器深鉢	I21	L Ⅱ					明橙灰		隆帯　キザミ	335と同一		拓340
893	縄文土器深鉢	D17	検出面					明灰褐		刺突文			拓315
894	縄文土器深鉢	E18･D18	検出面					橙灰		網目状撚糸文			拓313
895	弥生土器壺	D11	L Ⅱ					明橙褐		連弧文		A	拓331
896	弥生土器壺	D18	検出面					橙灰		連弧文		A	拓295
897	弥生土器壺	C12	L Ⅱ					明橙灰		連弧文		A	拓332
898	弥生土器壺	D18	検出面					明灰褐		連弧文		A	拓296
899	弥生土器壺	B12	L Ⅱ					明灰褐		連弧文		A	拓297
900	弥生土器壺	C14	L Ⅱ					黄橙		連弧文		A	拓336
901	弥生土器壺	E18･D18	検出面					暗灰褐		連弧文		A	拓298
902	弥生土器壺	E15	L Ⅱ					明橙灰		連弧文		A	拓338
903	弥生土器壺	D18	検出面					灰褐		平行沈線文		A	拓312
904	弥生土器壺	M14	検出面					暗灰褐		平行沈線文		A	拓349
905	弥生土器壺	H6	L Ⅱ					明橙灰		平行沈線		A	拓341
906	弥生土器壺	F17	L Ⅱ					橙灰		平行沈線文		A	拓330
907	弥生土器壺	E15	検出面					暗灰褐		平行沈線文		A	拓318
908	弥生土器壺	E17	L Ⅱ					暗橙灰		平行沈線		A	拓342
909	弥生土器壺	E18･D18	検出面					橙褐		平行沈線文		A	拓317
910	弥生土器壺	D19	L Ⅱ					橙灰		平行沈線文		A	拓310

No	器　種	遺　構	層　位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色　調	器面の特徴　(内)	器面の特徴　(外)	備　　考	分類	登録No
911	弥生土器壺	E17	L　Ⅱ					暗灰褐		平行沈線文		A	拓327
912	弥生土器壺	D12	L　Ⅱ					明橙灰		渦文		A	拓319
913	弥生土器壺	D11	L　Ⅱ					橙　褐		重三角文		A	拓324
914	弥生土器壺	E17	L　Ⅱ					暗灰褐		渦文		A	拓325
915	弥生土器壺	F14	L　Ⅱ					明灰褐				A	拓321
916	弥生土器壺	B 8	L　Ⅱ					明橙褐		渦文		A	拓291
917	弥生土器壺	E17	検出面					灰　褐		渦文		A	拓305
918	弥生土器壺	G 7	L　Ⅱ					明橙灰		平行沈線文		A	拓328
919	弥生土器壺	D18	検出面					暗灰褐		重三角文		A	拓303
920	弥生土器壺	E17	検出面					灰　褐				A	拓301
921	弥生土器壺	I 8	検出面					明灰褐		渦文		A	拓314
922	弥生土器壺	D14	L　Ⅱ					暗灰褐		渦文		A	拓316
923	弥生土器壺	D18	L　Ⅱ					灰　褐		渦文		A	拓323
924	弥生土器壺	F18	検出面					灰　褐		渦文		A	拓306
925	弥生土器壺	E18･D18	検出面					明灰褐		渦文		A	拓300
926	弥生土器壺	E18･D18	検出面					橙　灰		渦文		A	拓307
927	弥生土器壺	E17	L　Ⅱ					灰　褐		渦文		A	拓348
928	弥生土器壺	E18	検出面					灰　褐		連弧文		A	拓299
929	弥生土器壺	D15	検出面					灰　褐		渦文		A	拓308
930	弥生土器壺	E18	L　Ⅱ					灰　褐		渦文		A	拓329
931	弥生土器壺	D18	検出面					灰　褐				A	拓311
932	弥生土器壺	E18･D18	検出面					明灰褐				A	拓294
933	弥生土器壺	F14	検出面					暗灰褐		連弧文		A	拓292
934	弥生土器壺	D18	検出面					橙　褐		偽縄文	植物茎回転	A	拓304
935	弥生土器甕	E17	検出面					灰　褐		平行沈線文　綾絡文		A 2	拓352
936	弥生土器甕	E15	検出面					明灰褐		平行沈線文　綾絡文		A 2	拓355
937	弥生土器甕	E17	L　Ⅱ					明灰褐		平行沈線文　綾絡文		A 2	拓345
938	弥生土器甕	D14	L　Ⅱ					明橙灰		平行沈線文		A 2	拓346
939	弥生土器甕	D18	L　Ⅱ					明橙灰		平行沈線　綾絡文		A 2	拓343
940	弥生土器甕	I 21	L　Ⅱ					灰　褐		平行沈線文　綾絡文		A 2	拓344
941	弥生土器甕	D17	検出面					明灰褐		平行沈線文　綾絡文		A 2	拓302
942	弥生土器甕	F15	検出面					橙　褐		平行沈線文　綾絡文		A 2	拓309
943	弥生土器甕	F17	L　Ⅱ					明橙灰		綾絡文		A 3	拓334
944	弥生土器甕	D15	検出面					橙　褐		綾絡文		A 3	拓354
945	弥生土器甕	F17	L　Ⅱ					暗灰褐		綾絡文		A 3	拓347
946	弥生土器甕	I 21	L　Ⅱ					暗灰褐		綾絡文		A 3	拓322
947	弥生土器甕	F11	L　Ⅱ					暗灰褐		綾絡文		A 3	拓339
948	弥生土器甕	E15	検出面					明灰褐		綾絡文		A 3	拓350
949	弥生土器甕		表　採					灰　褐		綾絡文		A 3	拓353
950	弥生土器甕	E12	L　Ⅱ					明橙灰		綾絡文		A 3	拓333
951	弥生土器甕	E18･D18	検出面					明橙灰		平行沈線文　綾絡文		A 2	拓351
952	弥生土器壺	D17	L　Ⅱ					暗灰褐		綾絡文			拓480
953	弥生土器浅鉢	E15	L　Ⅱ					暗灰褐		連弧文		A	拓320
954	弥生土器片口鉢	E18	L　Ⅱ					明橙褐		綾絡文			拓326
955	弥生土器浅鉢	D18	L　Ⅱ					暗灰褐		平行沈線文			拓337
956	弥生土器壺	E12	検出面					明橙灰		刺突文		B 3	拓378
957	弥生土器壺	F 9	検出面					明橙褐		キザミ　沈線区画文		B 3	拓379
958	弥生土器壺	I 21	風倒木					明灰褐		キザミ　磨消縄文		B 3	拓388

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
959	弥生土器壺	D16	検出面					暗灰褐		刺突文		B3	拓380
960	弥生土器壺	I21	検出面					橙　褐		磨消縄文			拓377
961	弥生土器壺	D16	検出面					橙　褐		押圧		B2	拓385
962	弥生土器壺	E13	検出面					橙　灰		刺突文		B2	拓381
963	弥生土器壺	E17	排水溝					暗橙褐	突起	磨消縄文　キザミ 刺突文		B2	拓383
964	弥生土器壺	E15	検出面					灰　褐	突起	キザミ　磨消縄文		B2	拓386
965	弥生土器壺	D16	検出面					明橙灰	突起	キザミ　連弧文		B2	拓392
966	弥生土器壺	I21	検出面					灰　褐		磨消縄文			拓364
967	弥生土器壺	E16	LV					暗灰褐					拓363
968	弥生土器壺	J21	検出面					明灰褐		沈線区画文 交互刺突文			拓371
969	弥生土器壺	D15·C15	検出面					暗灰褐		磨消縄文			拓356
970	弥生土器壺	I21	風倒木ℓ1					暗灰褐		磨消縄文			拓366
971	弥生土器壺	I21	検出面					灰　褐		沈線区画文			拓370
972	弥生土器壺	J21	検出面					灰　褐		磨消縄文　キザミ			拓367
973	弥生土器壺	I21	風倒木					橙　褐		磨消縄文			拓369
974	弥生土器壺	D15·C15	検出面					明橙灰		沈線区画文			拓361
975	弥生土器壺	E14	検出面					暗灰褐		磨消縄文			拓368
976	弥生土器壺	E13	検出面					明灰褐		沈線区画文			拓360
977	弥生土器壺	E14	検出面					灰　褐		刺突文			拓359
978	弥生土器壺	V-b区	検出面					橙　灰		沈線区画文	979,982と同一		拓376
979	弥生土器壺	V-b区	検出面					明橙灰		沈線区画文	978,982と同一		拓358
980	弥生土器壺	I21	風倒木ℓ1					茶　褐		連続刺突文			拓422
981	弥生土器壺	I21	検出面					暗灰褐					拓357
982	弥生土器壺	V　区	検出面								978, 979と同一		拓384
983	弥生土器壺	I21	風倒木ℓ1					暗灰褐					拓365
984	弥生土器壺	D16	検出面					暗灰褐		磨消縄文			拓373
985	弥生土器甕	I21	風倒木ℓ1										拓391
986	弥生土器甕	J21	検出面					明灰褐		磨消縄文 交互刺突文	987,988と同一	B	拓375
987	弥生土器甕	I21 J21	風倒木 LⅡ検出面					灰　褐		連弧文 縄文原体圧痕文	986,988と同一	B	拓374
988	弥生土器甕	I21	検出面					暗灰褐		連弧文 縄文原体圧痕文	980,987と同一	B	拓362
989	弥生土器高杯	V　区	検出面									B2	拓395
990	弥生土器高杯	V　区	検出面					明橙灰		磨消縄文　刺突文	円盤充填 991と同一	B2	拓394
991	弥生土器高杯	V　区	検出面					明橙褐		刺突文　磨消縄文		B2	拓393
992	弥生土器鉢	I21	風倒木ℓ1					明橙灰		山形連弧文			拓387
993	弥生土器壺	L14	検出面					明橙灰					拓372
994	弥生土器壺	K21	LⅡ					明橙灰	突起	刺突文		B1	拓382
995	弥生土器壺	J21	検出面					明灰褐					拓432
996	弥生土器壺	D14	検出面					明黄橙		多条沈線			拓450
997	弥生土器壺	3区B	検出面					明橙灰		多条沈線文		C4b	拓389
998	弥生土器壺	D14	検出面					黄　褐		キザミ　小波状文		C2	拓455
999	弥生土器壺	E14	検出面					明橙褐		波状文		C3	拓483
1000	弥生土器壺	J21	検出面					暗灰褐		格子文			拓429
1001	弥生土器壺	I23	LⅡ					灰　褐		格子文			拓293
1002	弥生土器壺	D16	検出面					灰　褐		キザミ		D2	拓397
1003	弥生土器壺	E14	検出面					明橙褐		押圧		D1a	拓451
1004	弥生土器壺	H21	検出面					明橙褐		押圧		D1a	拓452
1005	弥生土器壺	E14	検出面					黄　褐		押圧		D1a	拓479
1006	弥生土器壺	E12	検出面					橙　灰		押圧		D1a	拓417

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
1007	弥生土器壺	D15	検出面					明橙褐		押圧		D1b	拓464
1008	弥生土器壺	E15	検出面					橙　褐		キザミ　押圧　撚糸		D1b	拓463
1009	弥生土器壺	V区北	検出面					橙　褐		刺突文		E1	拓457
1010	弥生土器壺	D11	検出面					明橙褐		キザミ			拓439
1011	弥生土器壺	I11	風倒木ℓ1					明橙灰		刺突文		E2	拓440
1012	弥生土器壺	V区南	検出面					明橙灰		キザミ			拓404
1013	弥生土器壺	F19	検出面					橙　褐		キザミ			拓423
1014	弥生土器壺	B6	LⅡ					暗灰褐				D4	拓416
1015	弥生土器壺	F8	検出面					黄　褐		刺突文			拓444
1016	弥生土器壺	D13	LⅡ					明橙褐	ハケメ	ハケメ　キザミ			拓453
1017	弥生土器壺	E16	LⅡ					暗橙褐		キザミ　小波状沈線		C4c	拓403
1018	弥生土器壺	3区B	検出面					明橙褐				B4	拓472
1019	弥生土器壺	F16	風倒木					明橙灰				D4	拓467
1020	弥生土器壺	V　区	検出面					明橙褐				D4	拓456
1021	弥生土器壺	B12	LⅡ					明　褐				D4	拓441
1022	弥生土器壺	E16・C16	検出面					明橙褐				D4	拓443
1023	弥生土器壺	D14	検出面					橙		キザミ　沈線文			拓420
1024	弥生土器壺	F14	検出面					明橙灰		小波状沈線文			拓433
1025	弥生土器壺	C10・B10	検出面					橙　灰		撚糸文			拓402
1026	弥生土器壺	M14	検出面					橙　灰		撚糸文			拓413
1027	弥生土器壺	E14	検出面					黄　褐		撚糸文			拓468
1028	弥生土器壺	I21	風倒木ℓ1					暗　褐					拓447
1029	弥生土器壺	D14	検出面					明橙褐	ハケメ	櫛描文			拓398
1030	弥生土器壺	F14	検出面					暗灰褐	ハケメ				拓454
1031	弥生土器壺	D15	検出面					明橙褐	ケズリ	キザミ　ケズリ		E3	拓476
1032	弥生土器壺	D13	攪　乱					橙　褐		撚糸文			拓477
1033	弥生土器壺	D12	検出面					暗灰褐					拓448
1034	弥生土器壺	A12	LⅡ					明橙褐					拓471
1035	弥生土器壺	C12	検出面					明橙褐					拓469
1036	弥生土器壺	E14	検出面					明橙褐		付加条	底部ナデ		拓465
1037	縄文土器深鉢	H20	検出面					明橙褐		網目状撚糸文			拓458
1038	弥生土器壺	D14	検出面					橙　褐					拓470
1039	弥生土器壺	D14	検出面					明橙褐					拓466
1040	弥生土器壺	D10	検出面					暗灰褐					拓461
1041	弥生土器壺	D12	検出面					明　褐	ハケメ	刺突文　撚糸文			拓481
1042	弥生土器壺	I9	検出面					明黄橙					拓478
1043	弥生土器壺	I21	LⅡ					明灰褐		網目状撚糸文			拓415
1044	弥生土器甕	I21	検出面					橙　褐					拓446
1045	弥生土器壺	E16	検出面					茶　褐					拓459
1046	弥生土器壺	D18	検出面					橙　褐					拓410
1047	弥生土器壺	E13	検出面					橙　褐					拓396
1048	弥生土器壺	E17	検出面					明橙褐					拓411
1049	弥生土器壺	E13	検出面					灰　褐					拓405
1050	弥生土器壺	E13	LⅡ					橙　褐					拓406
1051	弥生土器壺	E13	検出面					橙　褐					拓408
1052	弥生土器壺	E17	検出面					明橙灰					拓460
1053	弥生土器壺	E17	検出面					灰　褐					拓482
1054	弥生土器壺	D17	検出面					灰　褐					拓474

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
1055	弥生土器壺	E14	検出面					明橙褐					拓438
1056	弥生土器壺	E18	検出面					明橙褐					拓473
1057	弥生土器壺	I21	検出面					明橙褐		撚糸文			拓401
1058	弥生土器壺	F14	検出面					暗杯褐		撚糸文			拓407
1059	弥生土器壺	E14	検出面					明灰褐		撚糸文			拓409
1060	弥生土器壺	F14	検出面					暗橙褐					拓424
1061	弥生土器壺	E14	検出面					暗灰褐					拓445
1062	弥生土器壺	E15	LⅡ					灰　褐					拓421
1063	弥生土器壺	E14	検出面					橙　灰					拓434
1064	弥生土器壺	D14･C14	検出面					明　橙					拓418
1065	弥生土器壺	E14	検出面					暗灰褐					拓436
1066	弥生土器壺	D14･C14	検出面					橙　灰					拓435
1067	弥生土器壺	F15	LⅡ					灰　褐					拓431
1068	弥生土器壺	A12	攪　乱					明橙灰					拓414
1069	弥生土器壺	E15	検出面					明橙褐					拓425
1070	弥生土器壺	D13	検出面					明橙褐					拓442
1071	弥生土器壺	F18	検出面					灰　褐					拓427
1072	弥生土器壺	D14	LⅡ					暗灰褐					拓412
1073	弥生土器壺	E14	検出面					明橙褐					拓437
1074	弥生土器壺	V区旧河川跡	覆　土					明橙褐		羽状付加条文			拓399
1075	弥生土器壺	E15	検出面					橙　褐					拓428
1076	弥生土器壺	K13	検出面					明橙灰		羽状付加条文			拓400
1077	弥生土器壺	D14	検出面					暗橙褐	ケズリ				拓449
1078	弥生土器壺	I21	検出面					明橙灰	ナデ				拓430
1079	弥生土器壺	E15	検出面					明橙灰					拓426
1080	弥生土器甕	V　区	検出面		10.4	6.1	15	暗　褐	ハケメ		縄文		14
1081	弥生土器甕	V　区	検出面	15.4		12.4	15	暗　褐			縄文　沈線	A2	①
1082	弥生土器壺	V　区	検出面	19.0		9.9	10	橙　褐			縄文	D5	②
1083	弥生土器壺	C12･E12	検出面		9.0	7.9(残)	10	明灰褐	ナデ	ナデ　ミガキ			611
1084	縄文土器深鉢	M18	LⅡ		10.2	11.0	10	明　褐			縄文		㊺
1085	弥生土器壺	E13	検出面		10.4	2.9(残)	10	にぶい橙	ヘラナデ	ヘラケズリ			619
1086	弥生土器壺	E15	検出面		11.4	3.7(残)	10	明黄橙	黒色処理	撚紋 ヘラケズリ　ナデ			620
1087	土師器蓋	E18	検出面		4.1	3.7(残)	60	明灰褐			布痕	C	626
1088	弥生土器長頸壺	E18	検出面			6.4(残)	5	灰　褐	ヘラケズリ			A1	601
1089	弥生土器壺	D14･E15	検出面		9.0	14.2	30	にぶい褐	ヘラケズリ	ヘラケズリ→縄文 ヘラケズリ			603
1090	弥生土器高杯	D11	検出面		7.0	4.8(残)	30	黄灰褐	ナデ			A1	602
1091	弥生土器壺	V　区	検出面	15.4		6.8(残)	5	灰　褐	ナデ	撚糸文　口唇に縄文			215
1092	弥生土器壺	V　区	検出面	15		7.2(残)	10			撚糸　小波状口縁		D3	3
1093	弥生土器壺	V　区	検出面			10.6	10	明橙褐					739
1094	土師器器台	D15	検出面	15.8		5.0(残)	20	にぶい橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ＋ナデ ヘラミガキ		F	630
1095	土師器高杯	I20	検出面		最大径7.7	7.5	40	明赤褐	ヘラミガキ　ナデ	ヘラミガキ	内外面赤色塗彩	E2	635
1096	土師器高杯	D15･C15	検出面		最大径8.5	7.8	40		ナデ　ヘラミガキ	ヘラミガキ	外面赤色塗彩	E1	656
1097	土師器壺	F15	検出面	17.0		3.6(残)	20	橙	ヨコナデ→ヘラミガキ	ハケメ→ヨコナデ		K	653
1098	土師器器台	V区北側	検出面	9.6		4.8	20		ハケメ→ヘラミガキ＋ナデ ハケメ→ナデ	ヨコナデ→ヘラミガキ＋ナデ		A	658
1099	土師器高杯	E16･C16	検出面		最大径6.4	6.5	35		ヘラミガキ	ヘラミガキ	内外面赤色塗彩	K2a	657
1100	土師器器台	E14	検出面			9.3(残)	30	明黄橙	ヘラミガキ ハケメ後ナデ	ヘラミガキ (ナデに近い)		K5a	629
1101	土師器器台	C12	LⅡ			7.5(残)	20	明　橙	ヘラナデ (ケズリに近い)	ヘラミガキ (ナデに近い)		K4	628
1102	土師器高杯	E16	排水溝		10.0	7.1(残)	45	橙	ヘラナデ＋ナデ	ヘラミガキ＋ナデ		K6	631

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
1103	土師器高杯	E16・C16	検出面		13.2	6.7(残)	20	橙　褐	ヘラミガキ　ナデ	ハケメ→ヘラミガキ		K1a	664
1104	土師器杯	I 21	検出面	15.7			40	橙	横ヘラミガキ 縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ 横斜縦ヘラミガキ	外面に煤の付着が顕著	A 2	634
1105	土　師　器	D15・C15	検出面	15.0		5.8(残)	10	橙　褐	ヨコナデ　ハケメ	ヨコナデ　ハケメ		M 2	650
1106	土師器小型土器	E 13	検出面		1.8	5.2(残)	60	黄灰褐	ナデ	指頭痕＋ナデ＋ハケメ			669
1107	土師器小型丸底壺	D 9	検出面			3.6(残)	30	明橙灰	ハケメ→ヘラミガキ	ハケメ　ヘラミガキ(ナデに近い)			665
1108	土師器壺	E 16	排水溝	19.0		7.6(残)	10	明橙灰	ヨコナデ	ヨコナデ　ハケメ		M 1	621
1109	土師器壺	I 21	検出面	18.0		7.7(残)	10	明　橙	摩滅のため調整不明	ハケメ　ヨコナデ		L 1	623
1110	土師器甕	V　区	検出面	残19.4		11.2	20	明橙灰	ハケメ→ヨコナデ ヘラナデ	ハケメ→ヨコナデ ヘラケズリ→ハケメ		Q	⑨
1111	弥生土器瓶	D 16	検出面	15.4		4.7(残)	5	橙	ヨコナデ　ハケメ	ハケの押圧文 ヨコナデ　ハケメ		E	648
1112	土師器甕	V　区	検出面	13.6		4.7(残)	5	茶　褐	ヨコナデ＋ナデ ハケメ	ヨコナデ＋ハケメ(先)		F	489
1113	土師器甕	V　区	検出面		5.0	1.4(残)	5	橙　褐	ハケメ	ハケメ		S 3a	184
1114	土師器台付	I 21	風倒木		6.2	3.7(残)	5(底部のみ)	橙　褐	ナデ	ヘラナデ　ハケメ ナデ		C 3	649
1115	土師器台付	D 16	検出面		6.8	4.2(残)	40	明橙灰	ハケメ→ナデ ハケメ　ヘラナデ	ハケメ ハケメ→ナデ		C 4	627
1116	土師器甕	V　区	検出面	18.0		25.5	70	明橙灰	ヨコナデ　ハケメ	ハケメ→ヨコナデ ハケメ		P 2	㉙
1117	土師器杯	V　区	検出面	13.4	5.4	4.4	80	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	墨書(体部)「比」		590
1118	土師器杯	B 6	L II	13.4	5.8	4.3	70	明橙褐	黒色処理　ヘラミガキ　放射状ミガキ有	回転ヘラケズリ	墨書(体部)「比」		591
1119	土師器杯	V　区	検出面	13.3	6.0	4.3	40	灰　黄	黒色処理　ヘラミガキ　ヘラナデ	回転ヘラケズリ 回転ヘラキリ	墨書(体部)		709
1120	土師器杯	D 12	検出面	13.0	6.4	4.0	40	明橙褐	黒色処理 ヘラミガキ	底部回転ヘラケズリ	墨書(底部)「大カ里」		597
1121	土師器杯	V　区	検出面			4.2(残)	10	明黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	墨書(体部)「加」			476
1122	土師器杯	C 6	排水溝	13.5	5.8	3.7	20	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	墨書土器体部「吉」		596
1123	土師器杯	V　区	検出面	13.4		2.2(残)	5	浅黄橙	黒色処理 ヘラミガキ		墨書(体部)「比」		707
1124	土師器杯	G 6	検出面	13.6	6.8	4.5	25	明　褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	墨書土器体部「?」		595
1125	土師器杯	V　区	L II	14.2		4.0	80	明褐灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	墨書体部「?」		633
1126	土師器杯	V　区	検出面	13.4	5.3	4.8	70	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			440
1127	土師器杯	D14・C14	検出面		4.7	3.4(残)	20	にぶい黄　橙	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	墨書(体部)「比」		693
1128	土師器杯	B 6	L II	12.6	6.0	4.2	20	灰　白	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	墨書(体部)「?」		617
1129	土師器杯	D14・C14	検出面		6.2	3.3(残)	20	明橙褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 回転ヘラキリ	墨書(体部)「比」		605
1130	須恵器	V　区	検出面	14.0	6.6	4.8	55	明黄灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			579
1131	土師器杯	E 13	覆　土	13.6	6.0	4.7	30	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			609
1132	土師器杯	D 10	検出面	13.4	6.2	5.5	40	灰　褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ ヘラケズリ			613
1133	土師器杯	D 15	L II	12.7	6.0	4.4	70	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			600
1134	土師器杯	D 13	検出面	13.4	5.5	5.5	45	灰　褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	外面に黒色炭化物付着(油煙か?)		592
1135	土師器杯	V　区	検出面	13.6	7.2	4.8	70	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			588
1136	土師器杯	B 7・A 7	L II	12.8	6.0	4.3	30	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ (切り離しは不明)			606
1137	土師器杯	B 7・A 7	L II	14.2	6.2	4.0	70	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			585
1138	土師器杯	D 14	検出面	13.0	5.8	4.9	90	橙　灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			537
1139	土師器杯	B 6	L II	13.4	5.8	4.2	30	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ ヘラケズリ			612
1140	土師器杯	V　区	検出面	15.6		6.0	30	(外面)灰　白	黒色処理 ヘラミガキ				637
1141	土師器杯	E 14	L II	13.8	6.0	4.8	50	橙　灰	黒色処理 ヘラミガキ(器面調整のためほとんど不明)	回転ヘラケズリ	二次熱変		625
1142	土師器杯	D14・A 6	L II	13.8	5.4	4.8	70	明黄橙	黒色処理　ヘラミガキ　ヘラケズリ	回転ヘラケズリ			572
1143	土師器杯	D 13	検出面	14.2	6.0	5.2	60	橙　褐	黒色処理 ヘラミガキ(摩滅のため一部のみ)	回転ヘラケズリ 切り離しは不明			539
1144	土師器杯	G 16	整地層	13.6	5.8	4.5	50	明橙褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			574
1145	土師器杯	E 9	検出面	13.0	6.0	4.0	70	灰　白	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			581
1146	土師器杯	C 12	L II	14.2	4.8	5.0	40	灰　褐	黒色処理　ヘラミガキ(ナデに近い)	回転糸切り			643
1147	土師器杯	D 16	検出面	13.6	5.2	4.4	100	明黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	二次熱変		536
1148	土師器杯	E 11	検出面	12.4	6.0	4.0	35	灰　白	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			607
1149	土師器杯	B 7	L II	14.2	6.0	5.3	65	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ(摩滅しているがおそらく)	回転ヘラケズリ	二次熱変		583
1150	土師器杯	D 14	検出面	13.0	5.4	4.3	65	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 回転糸切り			586

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
1151	土師器杯	V区	検出面	13.6	5.8	4.4	70	明橙黄	黒色処理 ヘラミガキ	回転糸切り後手持ちヘラケズリ (底部は少しヘラケズリ)			589
1152	土師器杯	C11	LⅡ	14.7	5.2	4.3	30	明黄橙	黒色処理 ヘラミガキ	回転糸切り			644
1153	土師器杯	V区	検出面	13.0	5.8	4.5	80	明灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			578
1154	土師器杯	D15	LⅡ	12.4	5.8	4.6	35	明灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ (底部回転糸切り)			599
1155	土師器杯	E14	検出面	14.6	6.0	5.5	40	明橙褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			608
1156	土師器	D15	LⅡ	13.4	6.0	5.0	75	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			593
1157	土師器杯	D13	攪乱	12.8	6.4	4.2	75		黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			587
1158	土師器杯	B7	LⅡ	14.8	6.5	6.2	70	灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			584
1159	土師器杯	D13・E14	検出面	12.8	6.4	3.9	60	橙	黒色処理ヘラミガキ(摩滅のため上部のみ識別可	回転ヘラケズリ			575
1160	土師器杯	D12	排水溝	15.0	7.5	7.0	70	明黄灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ	二次熱変		580
1161	土師器杯	C10	検出面	13.0	5.0	4.0	55	橙褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転糸切り			598
1162	土師器杯	G6	検出面	16.6	7.3	4.8	50	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ			573
1163	赤焼土器杯	C11	LⅡ	13.8	5.0	4.4	80	橙	ヘラミガキのみ	回転糸切り			646
1164	土師器杯	E12・E13	検出面	14.0	5.8	4.0	60	暗灰褐	黒色処理 ヘラミガキ	回転糸切り無調整			616
1165	土師器杯	E11	検出面	12.6	5.2	3.3	50	明橙褐	黒色処理　ナデ (ヘラミガキはなし)	底部回転糸切り無調整			610
1166	赤焼土器杯	C11	一括	12.4	4.6	3.6	100	灰白	輪積み痕 回転ヘラケズリ				654
1167	赤焼土器杯	C11	一括	12.2	5.0	3.5	90	灰白		回転糸切り			538
1168	土師器杯	C11	LⅡ	13.3	4.6	5.0	30	明黄橙	内面は器面があれて調整処理は不明	回転ヘラケズリ			642
1169	赤焼土器杯	C11	一括	12.0	6.5	3.6	100	明橙灰		回転糸切り			334
1170	土師器高台杯	D12	検出面	11.4	6.8	3.5(残)	10	明橙灰	黒色処理 ヘラミガキ	回転ヘラケズリ 回転糸切り			624
1171	赤焼土器高台杯	C11	LⅡ		9.4	5.5(残)	60	にぶい橙		ヘラナデ　ヨコナデ			645
1172	土師器高台杯	C12	LⅡ		8.4	2.4(残)	10	明橙灰	黒色処理　ナデのみ	回転糸切り			615
1173	土師器高台杯	C11	LⅡ		6.2	1.9(残)	20	黒褐	黒色処理 ヘラミガキ	黒色処理　ヘラミガキ　回転糸切り			614
1174	土師質土器皿	C11	LⅡ	11.0	5.0	1.7	80	明橙灰		黒色炭化物付着 回転糸切り			622
1175	土師器鍋	A12	攪乱	42.0		6.0	10	橙	カキメ				㊻
1176	土師器甕	C9	検出面	16.0		6.7(残)	5	暗灰褐	黒色処理 ヘラミガキ				604
1177	土師器甕	E15	検出面	19.0		5.2(残)	5	明黄灰	黒色処理 ヘラミガキ				618
1178	土師器蓋	D12	検出面	10.2		4.2(残)	5	明黄灰	ヘラミガキ				705
1179	土師器甕	F11	LⅡ		6.8	5.5(残)	20	暗赤褐		回転糸切り			632
1180	土師器	A8	検出面	13.2		5.5(残)	10	橙	輪積み　ユビナデ		墨書(体部)		652
1181	土師器筒形土器	F6	検出面	14.2		3.6(残)	10	浅黄橙	ナデ(ユビナデ)	ナデ(ユビナデ) 指頭痕			651
1182	土師器筒形土器	D13	攪乱	11.0		7.8(残)	20	明黄橙	ユビナデ	輪積み痕	二次熱変強い		647
1183	須恵器杯	D17	検出面	14.5	7.6	4.1	20	灰白		回転ヘラケズリ→ヘラナデ	墨書(体部)「比」		706
1184	須恵器杯	D7	検出面	13.0	7.0	3.6	40	明灰		回転ヘラキリ→ヘラナデ　ユビナデ	墨書(体部)「?」		660
1185	須恵器杯	D12	検出面	14.8	7.2	3.7	40	灰白		回転ヘラキリ→ヘラナデ	墨書(体部)「比」		640
1186	須恵器杯	B8	LⅡ	13.2	6.2	3.4	30	浅黄橙		回転ヘラキリ→ナデ	墨書(底部)「六」		639
1187	須恵器杯	E14	検出面		6.5	2.2(残)	25	灰白		回転ヘラキリ→ヘラナデ	墨書(体部)「?」		710
1188	須恵器杯	D12	検出面	13.0	6.0	4.0	60			回転ヘラ切り→ナデ			668
1189	須恵器杯	D14	LⅡ	13.2	6.2	3.8	50	灰白		回転ヘラキリ→ユビナデ			663
1190	須恵器杯	D14	検出面	14.0	7.4	3.8	40	灰		回転ヘラキリ→ヘラナデ			661
1191	須恵器杯	D12	検出面	13.8	6.8	4.0	60	灰		回転ヘラキリ→ヘラナデ			662
1192	土師器杯	D15	検出面	13.4	6.6	4.3	50	灰白		回転ヘラキリ			655
1193	須恵器杯	E13	覆土	13.6	6.8	4.1	60		ロクロ回転ヘラケズリ	ロクロ回転ヘラケズリ ロクロ回転ヘラキリ(→ナデ)			667
1194	須恵器杯	C11	LⅡ	13.6	7.0	4.0	80	灰白		回転ヘラキリ→ヘラナデ			659
1195	須恵器杯	C11	LⅡ	13.0	7.8	3.7	65	灰白		回転ヘラキリ			708
1196	土師器杯	D15	検出面	15.8	7.0	4.3	70		ロクロ成形　カキメ	ロクロ成形 回転ヘラキリ→ナデ			666
1197	須恵器杯	F14	LⅡ	13.8	7.2	4.0	100	明橙灰		回転ヘラキリ→ナデ			582
1198	須恵器杯	D10	検出面		6.8	1.2(残)	5	灰白		回転ヘラキリ→ナデ	線刻(底部)		713

No	器種	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	色調	器面の特徴（内）	器面の特徴（外）	備考	分類	登録No
1199	須恵器杯	D 6	検出面		6.6	1.3(残)	15	灰		回転ヘラキリ→ユビナデ	ヘラ記号(底部)		734
1200	須恵器杯	D 8	検出面		6.3	3.0(残)	10	灰		回転ヘラキリ	ヘラ記号(底部)		712
1201	須恵器杯	D16	検出面		6.2	1.5(残)	15	灰白		回転ヘラキリ→ヘラナデ	ヘラ記号(底部)		732
1202	須恵器杯	E15	検出面		6.6	2.0(残)	30	明灰		回転ヘラキリ→ユビナデ	ヘラ記号(底部)		736
1203	須恵器杯	E16・C16	検出面		6.6	1.7(残)	10	黄灰白		回転ヘラキリ→ヘラナデ	ヘラ記号(底部)		733
1204	須恵器杯	D12	検出面		6.4	1.8(残)	20	灰		回転ヘラキリ→ユビナデ	線刻(底部)		737
1205	須恵器杯	E 9	検出面		6.8	2.1(残)	25	灰白	回転ヘラキリ→ユビナデ		ヘラ記号(底部)		726
1206	須恵器杯	C 8	検出面		6.2	1.8(残)	35	青灰		回転ヘラキリ→ヘラナデ	ヘラ記号(底部)		735
1207	須恵器蓋	F18	検出面			1.4(残)	5	灰					721
1208	須恵器蓋	F13	検出面		10.8	1.1(残)	5	灰					723
1209	須恵器蓋	F14	検出面		11.4	1.2(残)	5	灰					722
1210	須恵器瓶類	B12・B13	攪乱		7.7	3.5(残)	10	灰					692
1211	須恵器鉢	D 9	排水溝		7.3	2.9(残)	5	灰白					688
1212	土師器甕	D 8・C 8	検出面				5	明黄灰			体部線刻「?」		641
1213	須恵器杯	H 7	検出面		7.5	1.9(残)	10	灰白		回転ヘラキリ→ヘラナデ			731
1214	須恵器長頸瓶	C 6	検出面	12.4		9.0(残)	20	灰					702
1215	須恵器長頸瓶	F 9	検出面			8.1(残)	10	灰					700
1216	須恵器長頸瓶	D10・D15	攪乱	10.8		10.8(残)	10	灰					690
1217	須恵器長頸瓶	C 6	排水溝	11.1		8.7(残)	5	灰					720
1218	須恵器長頸瓶	E13・B 7	検出面			5.9(残)	10	緑灰					703
1219	須恵器壺	E13	検出面	13.4		7.3(残)	5	灰					715
1220	須恵器長頸瓶	B 5	検出面			8.6(残)	10	灰白		カキメ			689
1221	須恵器横瓶	D15	検出面	11.8		5.6(残)	10	灰	タタキ				704
1222	須恵器瓶	C 6	排水溝		8.8	6.7(残)	20	灰					717
1223	須恵器瓶	A12	LⅡ			11.8(残)	20	灰					741
1224	須恵器壺	G 9	検出面		6.0	7.1(残)	20	暗灰		カキメ　回転糸切り			694
1225	須恵器瓶類	G 7・D 8	検出面		8.2	6.2(残)	15	黄灰					697
1226	須恵器壺	A 4	LⅡ		10.0	14.1(残)	30	灰					699
1227	須恵器壺	A3・A4・A5	LⅡ検出面			17.9	15	灰					㊼
1228	須恵器瓶	F13・E15	検出面		9.0	15.0	30	灰白	カキメ	ヘラケズリ→カキメ→タタキ			740
1229	須恵器瓶類	E 3・D 5	検出面		9.2	8.2(残)	25	灰					714
1230	須恵器瓶	D15	検出面		8.6	7.1(残)	15	灰		回転ヘラケズリ			718
1231	須恵器瓶	D14	LⅡ		7.6	9.6(残)	40	灰					636
1232	須恵器瓶	D12	排水溝		7.8	9.8(残)	10	灰					716
1233	須恵器甕	H 8・D 5	検出面		12.8	9.0	5	明黄灰					719
1234	須恵器甕	F 9	検出面	21.0		7.8	20	灰	カキメ	カキメ			698
1235	須恵器小型壺	F 8・F11	検出面			5.9(残)	30	灰					696
1236	須恵器	中央旧河道	覆土		5.2	5.0(残)	30	灰		ヘラケズリ	線刻(底部)		691
1237	須恵器壺	D10	LⅡ		8.0	5.5	20	褐灰		回転ヘラキリ			711
1238	須恵器瓶	C 8	検出面		7.9	10.8(残)	20	灰					695
1239	須恵器甕	V 区	検出面	12.7		6.1	10	灰	当て具痕　ヘラナデ	タタキ			㊾
1240	須恵器甕	B 6・B 5	LⅡ		12.8	12.7(残)	20	灰	ナデ				725
1241	土師器	G 9	検出面				30	明橙灰					670
1242	風字硯	D14	検出面				40	灰					724

第44表　遺物観察表　（２）木製品

No	名称	遺構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	材質	備考	No	名称	遺構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	材質	備考
1	井戸枠	ＳＥ03		159.6	17.2	47	ヒノキ	北㊤（西）	49	井戸枠	ＳＥ14		15.0	4.8	9	スギ	No 4
2	〃	〃		154.7	15.6	34	スギ	北㊤（西）	50	〃	〃		42.5	4.8	14	アスナロ	No 6
3	〃	〃		158.0	12.0	13	スギ	西㊦（北）	51	〃	〃		34.0	8.5	15	アスナロ	No13
4	〃	〃		159.0	12.8	37	スギ	西㊥（北）	52	〃	〃		40.0	8.0	18	スギ	No13
5	〃	〃		157.8	18.0	17	アスナロ	西㊤（北）	53	〃	〃		40.0	37.0	16	スギ	ℓ－5
6	〃	〃		157.0	15.5	32	スギ	南㊦（西）	54	〃	〃		44.8	29.0	6		
7	〃	〃		159.0	18.0	16	ヒノキ	南㊤（西）	55	〃	ＳＥ15		105.3	10.0	30	ヒノキ	No12
8	〃	〃		161.5	10.5	45	スギ	東㊥（北）	56	〃	〃		93.0	19.3	42	クリ	No10
9	〃	〃		62.4	11.1	16	スギ	東㊦	57	〃	〃		124.0	8.5	22	スギ	No38東 1
10	〃	〃		158.0	18.0	31	スギ	東㊤（北）	58	〃	〃		126.4	13.4	25	スギ	No39東 2
11	〃	〃		115.0	11.7	24	スギ	崩落	59	〃	〃		122.5	13.5	25	スギ	No40東 3
12	〃	〃		32.5	3.5	27	ヒノキ	南西隅（南）	60	〃	〃		123.3	14.8	24	スギ	No41東 4
13	〃	〃		30.5	5.5	29	アスナロ	南西隅（南）	61	〃	〃		124.5	13.5	20	スギ	No42南 1
14	〃	〃		36.5	4.1	24	アスナロ	南西隅（西）	62	〃	〃		127.5	18.0	22	スギ	No43南 2
15	〃	〃		26.5	3.2	30	クヌギ	南西隅（西）	63	〃	〃		123.0	17.5	23	スギ	No44南 3
16	〃	〃		27.5	3.3	29	カシ？	北西隅（北）	64	〃	〃		96.0	9.5	35	スギ	No 3
17	〃	〃		17.3	10.5	30	スギ	北西隅（北）	65	〃	〃		125.5	16.0	24	スギ	No45西 1
18	〃	〃		31.0	9.3	20	スギ	底面	66	〃	〃		123.0	11.8	27	ヒノキ	No46西 2
19	〃	〃		18.1	13.0	30	アスナロ	底面	67	〃	〃		126.0	15.0	28	スギ	No47西 3
20	〃	〃		14.0	70	23		？	68	〃	〃		123.5	13.5	32	スギ	No48北 1
21	〃	ＳＥ12		111.2	15.5	25	ケヤキ	No 3	69	〃	〃		123.5	17.2	27	アスナロ	No49北 2
22	〃	〃		38.5	13.3	34	ケヤキ	No 4（東一部）	70	〃	〃		124.5	17.0	38	スギ	No50北 3
23	〃	〃		111.0	15.8	30	ケヤキ	No 2（北）	71	〃	〃		70.0	21.0	35	クリ	No 1
24	〃	〃		113.0	14.0	60	ケヤキ	東No 3（北）	72	〃	〃		48.5	11.8	13	ハンノキ属	No 2
25	〃	〃		110.0	15.0	37	ケヤキ	西No 7（北）	73	〃	〃		64.5	12.0	52	クリ	南側掘形
26	〃	〃		62.5	12.4	33	ケヤキ	No 5（東一部）	74	〃	〃		29.8	6.0	28	スギ	掘形内
27	〃	〃		32.3	11.3	23	ケヤキ	南No 4（西）	75	〃	〃		6.4	6.0	6	クリ	No 3
28	〃	〃		95.5	21.0	22	ケヤキ	No 2	76	〃	〃		16.7	13.0	31	ヒノキ	No15
29	〃	〃		126.8	14.0	34	ケヤキ	北No10（東）	77	〃	〃		15.2	10.0	21	スギ	南西枠上
30	〃	〃		120.0	13.0	47	ケヤキ	北No12（東）	78	〃	〃		10.6	5.9	35	スギ	No13
31	〃	〃		113.8	15.6	54	ケヤキ	西No 9（北）	79	〃	〃		13.1	4.7	18	ヒノキ	No13
32	〃	〃		115.6	16.1	36	ケヤキ	西No 8（北）	80	〃	〃		12.5	7.1	29	スギ	No14
33	〃	〃		104.0	15.8	40	ケヤキ	南No 6（西）	81	〃	〃		32.8	3.8	23	ヒノキ	掘形内
34	〃	〃		120.0	13.6	26	ケヤキ	北No11（東）	82	〃	〃		26.5	1.6	13	アスナロ	〃
35	〃	〃		69.5	31.5	44	オニグルミ	くい北側中央	83	〃	〃		16.3	2.3	20	スギ	〃
36	〃	〃		74.5	12.0	33	ケヤキ		84	〃	〃		5.8	8.0	9	スギ	〃
37	〃	〃		43.6	17.0	62	スギ	枠北側中央	85	〃	〃		49.7	10.0	30	スギ	No15東外 1
38	〃	〃		32.0	17.0	30	ケヤキ	No 1	86	〃	〃		50.0	19.5	34	アスナロ	No16東外 2
39	〃	ＳＥ14		69.0	5.0	45	アスナロ		87	〃	〃		57.5	21.0	35	アスナロ	No17東外 3
40	〃	〃		28.5	7.5	17	アスナロ	No14	88	〃	〃		55.0	21.7	31	アスナロ	No18東外 4
41	〃	〃		34.5	6.0	17	ヒノキ		89	〃	〃		51.0	11.5	27	アスナロ	No19東外 5
42	〃	〃		36.3	13.5	27	アスナロ	No15	90	〃	〃		55.5	8.7	18	アスナロ	No20南外 1
43	〃	〃		40.0	12.5	11	スギ	No 4（西）	91	〃	〃		56.0	21.8	40	アスナロ	No21南外 2
44	〃	〃		43.5	16.2	8	スギ	No12	92	〃	〃		35.0	21.5	32	アスナロ	No22南外 3
45	〃	〃		17.0	3.6	9	スギ	ℓ－5	93	〃	〃		56.0	16.5	33	ヒノキ	No23南外 4
46	〃	〃		12.3	5.0	6	スギ	No 7	94	〃	〃		50.5	20.5	23	アスナロ	No24南外 5
47	〃	〃		8.0	8.8	15	ヒノキ	No13	95	〃	〃		51.3	9.8	38	スギ	No25西外 1
48	〃	〃		19.0	3.7	10	スギ	ℓ－5	96	〃	〃		53.7	7.8	28	スギ	No26西外 2

No	名称	遺構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	材質	備考	No	名称	遺構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	材質	備考
97	井戸枠	ＳＥ15		60.0	18.0	28	スギ	No27北外３	108	井戸枠	ＳＥ15		89.5	22.5	48	クリ	No４
98	〃	〃		49.5	12.5	23	ヒノキ	No29北外５	109	〃	〃		118.5	26.2	50	クリ	No５
99	〃	〃		55.0	4.8	14	ヒノキ	No27北外４	110	〃	〃		66.5	22.7	55	クリ	No６
100	〃	〃		56.2	14.3	26	アスナロ	No30北外６	111	〃	〃		99.5	23.5	40	クリ	No８
101	〃	〃		49.5	13.8	21	スギ	No31北外７	112	〃	〃		24.0	21.5	47	クリ	No７
102	〃	〃		40.0	6.5	24	スギ	No32北外８	113	〃	〃		26.7	22.0	46	クリ	No11
103	〃	〃		55.0	19.8	20	アスナロ	No33北外１	114	〃	〃		21.7	17.7	57	スギ	No９
104	〃	〃		53.2	21.0	26	アスナロ	No34北外２	115	〃	〃		41.5	8.0	16	スギ	No３
105	〃	〃		57.4	20.5	22	スギ	No35北	116	〃	〃		31.5	6.0	18	スギ	No１
106	〃	〃		45.3	5.7	22	アスナロ	No36北	117	〃	〃		24.5	5.0	15	スギ	No２
107	〃	〃		45.6	6.9	21	アスナロ	No37北									

第45表　遺物観察表　（３）石・金属製品

No	名称	遺構	層位	長軸	短軸	厚さ	材質	No	名称	遺構	層位	長軸	短軸	厚さ	材質
1	砥石	ＳＫ09	覆土	15.3	12.3	2.5	細粒凝灰岩	14	古銭			2.3	1.6		
2	打製石斧	ＳＢ25Ｎ		6.2	6.2	2.1	流紋岩	15	石鏃	S 200 W 10		2.8	1.0	0.7	珪質頁岩
3	〃	ＳＫ09	覆土	15.3	12.3	2.5	細粒凝灰岩	16	〃	２区		2.6	1.7	0.3	硬質頁岩
4	〃	ＳＫ09	〃	9.9	5.8	2.1	流紋岩	17	鉄製品			4.8	1.9	0.7	鉄
5	尖頭器	ＳＫ106	〃	13.5	8.3	4.7	凝灰質頁岩	18	銅釧	５区北	検出面	5.8	4.9	0.5	銅
6	石鍬（鋤）	ＳＥ08	〃	13.5	8.5	4.1	細粒凝灰岩	19	打製石斧	S 180 W 70	〃	9.4	8.9	1.8	細粒凝灰岩
7	砥石	ＳＥ09	〃	7.5	4.9	4.1	〃	20	〃			7.7	7.0	2.3	〃
8	摩製石斧	ＳＤ41	遺物集中部	13.3	5.1	3.0	安山岩	21	スクレィパー	S 210 W 70	検出面	8.5	5.0	1.8	安山岩
9	打製石斧	ＳＤ51	覆土	14.5	9.7	2.3	細粒凝灰岩	22	磨石	S 190 W 120	表採	11.6	10.7	4.6	石英安山岩
10	鉄滓	ＳＸ06	検出面	10.3	9.4			23	砥石	Ⅴ区	〃	3.6	3.7	1.1	細粒凝灰岩
11	〃	〃	〃	5.5	3.3			24	〃	1号河川（3Ｔ）	覆土	8.1	4.0	3.8	〃
12	古銭			2.3	2.3			25	〃	ＳＤ65	ℓ 1	6.2	3.8	2.7	〃
13	〃			2.5	1.5			26	〃	S 100 W 140	Ｌ Ⅱ	12.3	9.2	7.1	石英斑岩

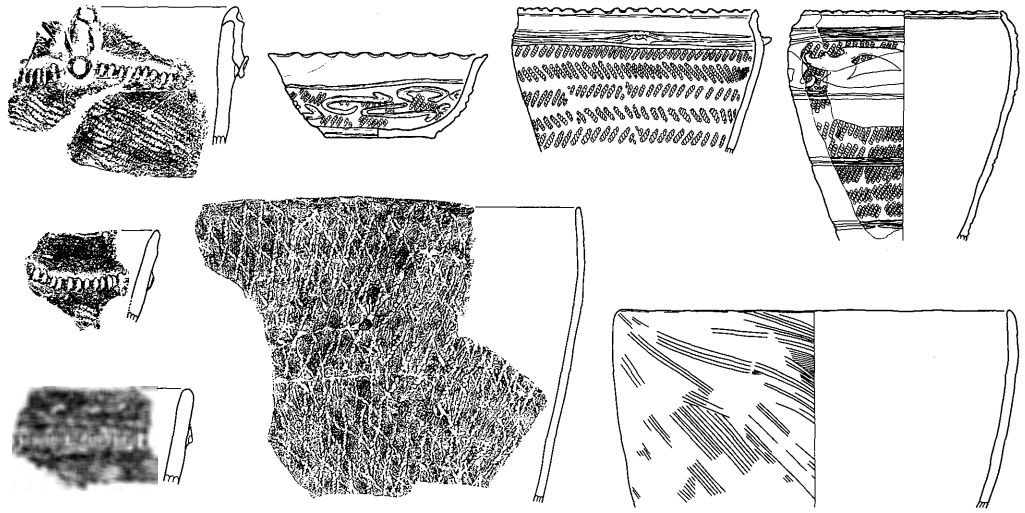
第３章　考　　察

第１節　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構としては，竪穴住居跡と土坑が検出されている。土坑は，Ⅲ区東半部にそのほとんどが位置している。土坑の形態は，平面プランが円形を呈しており，断面の形態は，フラスコ状を呈している。住居跡については，円形の壁溝をめぐらしたものが検出されている。土坑については，堆積土及び底面から縄文晩期の遺物が出土しており，大洞Ｃ２式の深鉢・浅鉢が出土している。竪穴住居跡もその位置関係から，同時期のものと考えられる。

縄文時代の遺物では，古いところでは，後期初頭に位置付けられる深鉢が遺構外から出土している。口縁下に隆帯を巡らし，隆帯にキザミが加えられているもので，新潟県下に分布する三十稲葉式に用いられる手法の影響を強く受けている。

晩期の土器は，比較的その量も多く，そのほとんどが大洞Ｃ１式に比定されるもので，少量の大洞Ｃ２式土器がそれに混じっている。器種も粗製の深鉢，精製の鉢，浅鉢が出土している。深鉢では，体部に撚糸文が施されたものがほとんどである。精製の鉢では，体部上位が屈曲し，沈線が巡るものと陽刻的な磨消縄文が施されたものが出土している。浅鉢は，やや丸みを帯びた体部に外反する波状の口縁部が付く形態のものが出土している。体部の沈線で区画された幅広い文様帯の中に幅広の沈線によって退化した形態の雲形文が描出されている。



第278図　遺物分類図１　縄文土器

第2節　弥生～古墳時代の遺物について

（1）　土器の分類について

土器群の分類にあたっては，まず，土器の形態を便宜上の区分の目安とし，いくつかの器種を設定し，次に各器種の中を文様の有無・調整技法・器形を総合した上でいくつかの類型に分類したい。

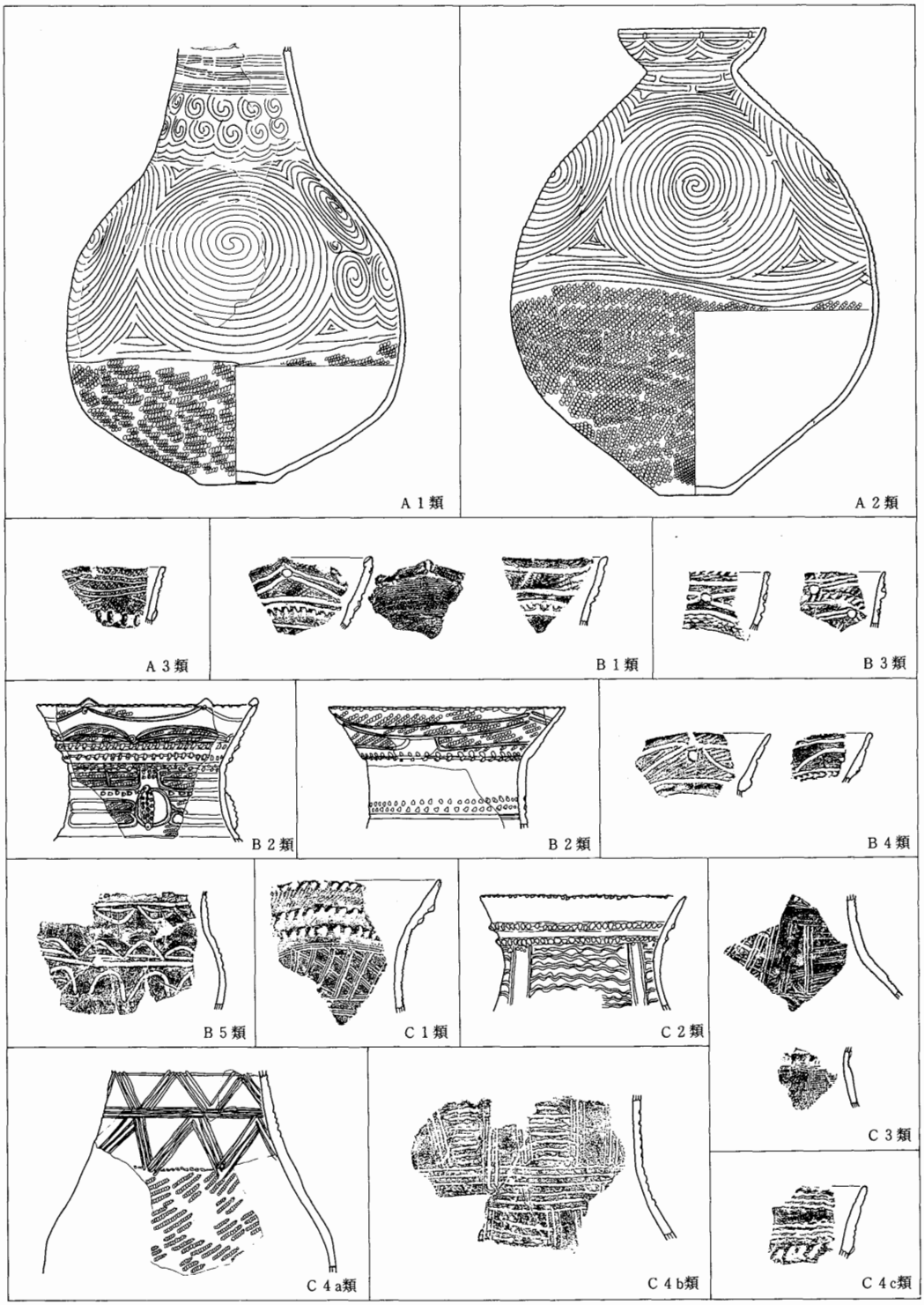
器種の設定にあたっては，器形の全容の判明しているもの以外でも口縁部あるいは底部等の特徴的な部位が遺存しているものについても分類の対象とする。器種については，中・大型壺，小型壺，小型丸底壺，小型鉢，杯，高杯，器台，鉢，蓋，注口土器，ミニチュア土器，小型甕，台付甕，甕の14器種を設定し，以下で各器種の分類を行う。

①中・大型壺

A類：細いヘラ描き沈線によって飾られた壺で，器形より以下の3類に細別される。長頸で，受口状の口縁部には波状文，頸部には，数カ所で区画された平行沈線文，体部には渦文が描出されており，体部は，下膨らみの器形を呈するもの（1類）。短頸で，受口状の口縁部には波状文，体部には渦文が描出されているもの（2類）。口縁下に指頭による押圧文が施され，口縁との間には，2条の沈線による連弧文が施されているもの（3類）。

B類：1本引きの太い沈線，刺突文・キザミによって飾られた壺である。器形の全容が判別するものは，出土していない。そこで，特徴的な口縁部を中心に器形・施文手法・文様とで細別することができる。口縁内面が面取りされ，口縁部文様帯下に交互刺突文が施文されるもの。文様帯には，連弧文が施され，連弧文の交点には，円形の刺突文が施されるものもある（1類）。口縁内面は，明確に面取りされず，1類と比較して器壁も薄くなり，口縁部文様帯下にキザミあるいは崩れた交互刺突文が施されるもの。文様帯には，端部が連結した連弧文あるいは変形工字文に近い文様が描出される。口縁には，平口縁のものと波状口縁のものがあり，波状口縁の頂部内面には貼り瘤を持つものが多い（2類）。口縁部の文様帯内に描出される文様が完全に区画文と化したもので，口唇にキザミが施されるものと施されないものがある。波状口縁の頂部には貼り瘤を持つ。また，口縁部文様帯下の隆帯自体も文様帯内に入り込み，その構成自体も崩れたものもこれに含まれる（3類）。平口縁で，器壁が薄く口縁端部がややとがる形態を呈し，口唇にはキザミが入らず，口縁部文様帯下には，隆帯あるいは押引文に近い連続刺突文が施されるもの（4類）。体部のみの破片であるが，前出の1～4類とは異質で，地文に縄文をもたず，連弧文と平行沈線文によって文様が構成されているもの（5類）。

C類：3本以上の多条沈線及びキザミ・刺突文によって飾られた壺である。器形が明確に判別



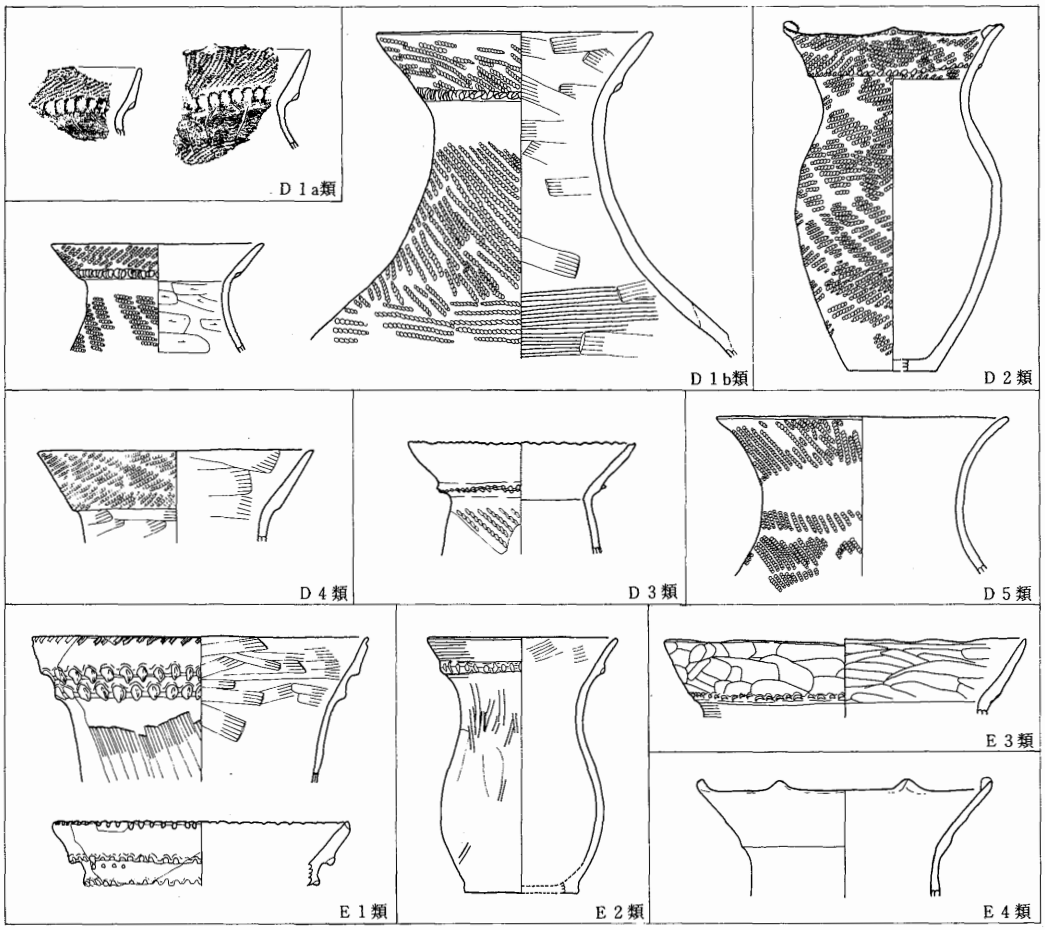
第279図　遺物分類図２　壺（１）

できるものは出土しておらず，口縁部と体部の文様・器形により細別される。口縁直下及びその下の2段の隆帯上に刺突文が施され，頸部文様帯には3本1組の細い沈線によって格子文が描出されており，口縁下には，単節の斜縄文が施されているもの(1類)。頸部文様帯に3本1組の細い沈線による縦位の区画文と横位の小波状文が施文されており，口唇及び口縁下の2段の隆帯上にキザミが加えられているもの(2類)。縦位の区画文に横位の直線的な細い沈線文を組み合わせた文様が体部に描出されているもの(3類)。太い多条沈線によって文様が構成されるもの(4類)で，文様により，以下の3種に細分される。長頸に近い形態を呈し，3条の沈線によって鋸歯文が描出されているもの(a類)。縦位の区画文間に横位の沈線が充塡される文様構成をもつもの(b類)。口縁下に刺突文が加えられ，口唇とそのあいだに3条の沈線による2段の小波状文が施されているもの(c類)。

D類：縄文のみあるいはそれにキザミ・押圧が加わり，装飾されているもので，形態・縄文以外の装飾手法により，以下の5類に分類される。口縁部に段を有し，そこに縄文，その縄文帯下に押圧が加えられるもので，押圧の種類・形態よりさらに2類に細分される(1類)。単純な押圧が施されており，口縁内面は内湾気味で，縄文は単節縄文であるもの(a類)。内部に条線が入るタイプの押圧が施されるもので，縄文には，単節縄文と撚糸文がある。また，内面調整には，ヘラケズリ・ハケメ・ヘラナデが入る(b類)。口縁部に軽い段を有し，そこに縄文，その縄文帯下あるいは口唇下にキザミの入るもの(2類)。口縁部が無文で口縁部下に隆帯をもち，その上にキザミが加えられているもの。頸部には撚糸文が施され，口唇にはキザミが加えられている(3類)。口縁部に段をもち，口縁部に単節縄文が施されているもの。平口縁のものと口縁に突起を持つものがある(4類)。口縁部に段あるいは隆帯を持たない広口のもの(5類)。

E類：刺突文，あるいはキザミ，小波状突起等の装飾的な要素を残しながらも縄文も含めて，その他の装飾的要素をもたないものをE類とした。以下の4類に細分することができる。口縁にキザミ，口縁下の隆帯上に，指頭による押圧，あるいはキザミを有するものである。隆帯と口縁に爪形の押圧文をもつものも存在する。調整には，ヘラナデが認められる(1類)。器形の全容が明確なもので，最大径を体部下部にもつ，下膨らみの広口壺である。口縁下の隆帯にはキザミが加えられ，体部外面にはミガキに近い細いヘラナデが加えられている(2類)。口縁部内外面がヘラケズリされており，口縁下の不明瞭な段には爪形の押圧が施されるもの(3類)。口縁に山形突起を有し，口縁部下に段をもつ形態のもの(4類)。

F類：口縁下に隆帯をめぐらし，その上にハケの原体によるキザミを入れ，ハケメ・ナデ調整を主体としている壺であり，以下の2類がある。頸部から口縁に向かって外反気味に立ち上がる器形を呈しており，頸部に沈線と貼瘤を有するもの(1類)。有段口縁の壺で，口縁下の隆帯の他に，有段部にもハケメによるキザミが施されているもの(2類)。　G類：口縁部下にナデによる段が



第280図　遺物分類図３　壺（２）

形成された壺で，ハケ・ナデによる調整が施されている。

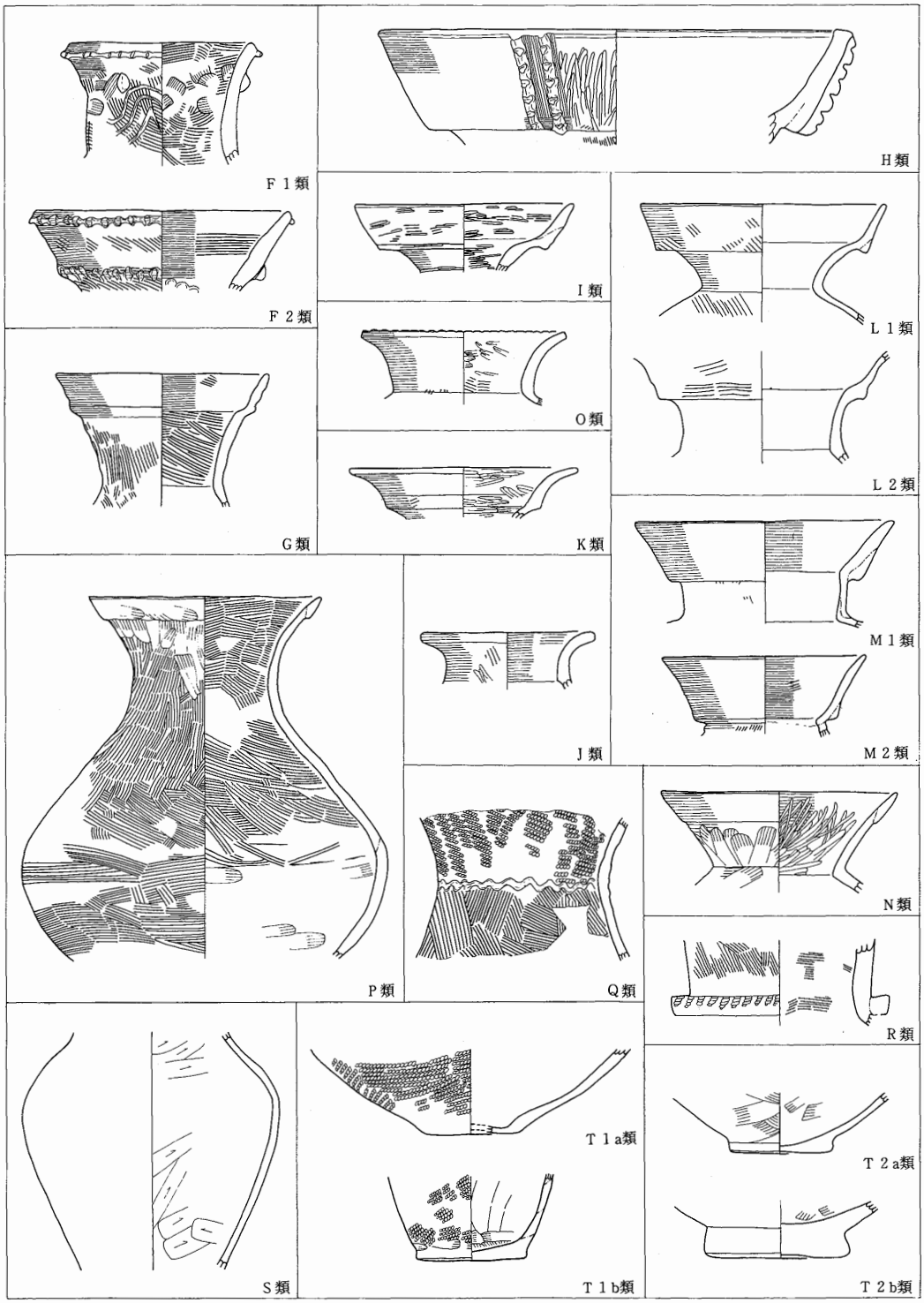
Ｈ類：大型の複合口縁の壺で口縁部に棒状浮文を有するもの。

Ｉ類：複合口縁の壺で，口縁部は内湾気味に外傾し，頸部はすぼまる形態を呈するもので，口縁部内外面にヘラミガキ調整が施される。

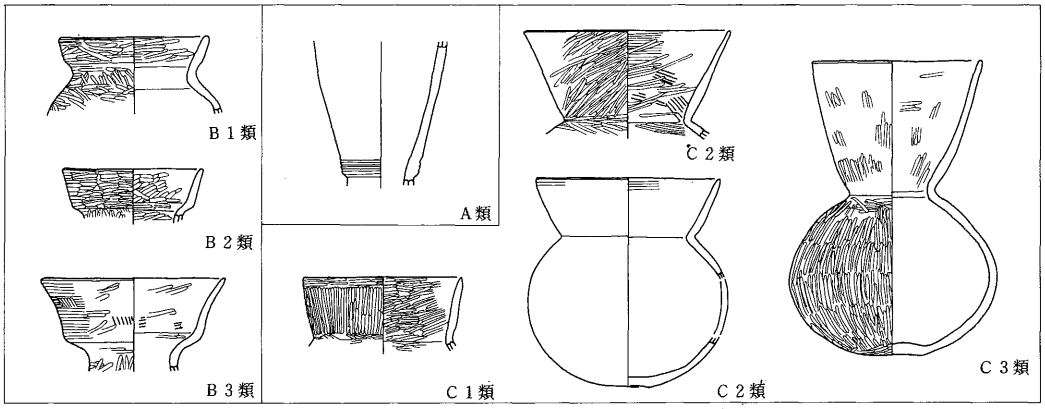
Ｊ類：口縁端部が，強く外反する形態の壺で，内外面にはヨコナデ調整が施される。

Ｋ類：口縁が強く外反し，頸部との境界に段をもつ形態の壺で，外面にヨコナデ，内面にヘラミガキ調整が施される。

Ｌ類：器壁がやや薄手のタイプの複合口縁の壺で，複合部内面が凹む形態を呈する。内外面の調整はヨコナデである。以下の２類がある。体部と頸部の境界の屈曲が著しく，口縁部にかけて強く外反し，口縁部が直線的に外傾するもの（１類)。頸部が直立気味に外傾し，口縁端部が外反するもの（２類)。



第281図　遺物分類図4　壺（3）



第282図　遺物分類図５　小型壺

M類：有段口縁の壺で，幅広の口縁部を有し，口縁部が外反気味に外傾し，口縁部の調整がヨコナデであるもの。以下の２類に細分される。頸部が直立し，口縁部内面にも明確な段を有するもの（１類)。口縁部が１類よりも広く，外面端部がやや外反気味になるもの（２類)。

N類：折返口縁の壺で体部との境界に明確な屈曲部を有し，頸部から口縁にかけて外反するものである。調整にはヨコナデの他にナデ・ヘラミガキが施される。

O類：単純口縁の壺で頸部と体部の境界に明確な稜線を有し，口縁端部が面取りされる形態のもので，口唇にはキザミが入れられる。調整はヨコナデ・ナデ・ハケメである。

P類：ハケ調整の折返口縁の壺で，頸部がすぼまる形態を呈する。

Q類：頸部のみのもので，器形の全容は不明であるが，頸部中位の波状沈線文を境界として，上部に縦位の縄文，下部にハケメが施されるものである。

R類：頸部と体部の境界に隆帯がめぐり，隆帯上には縄文原体の圧痕文が施されるもの。

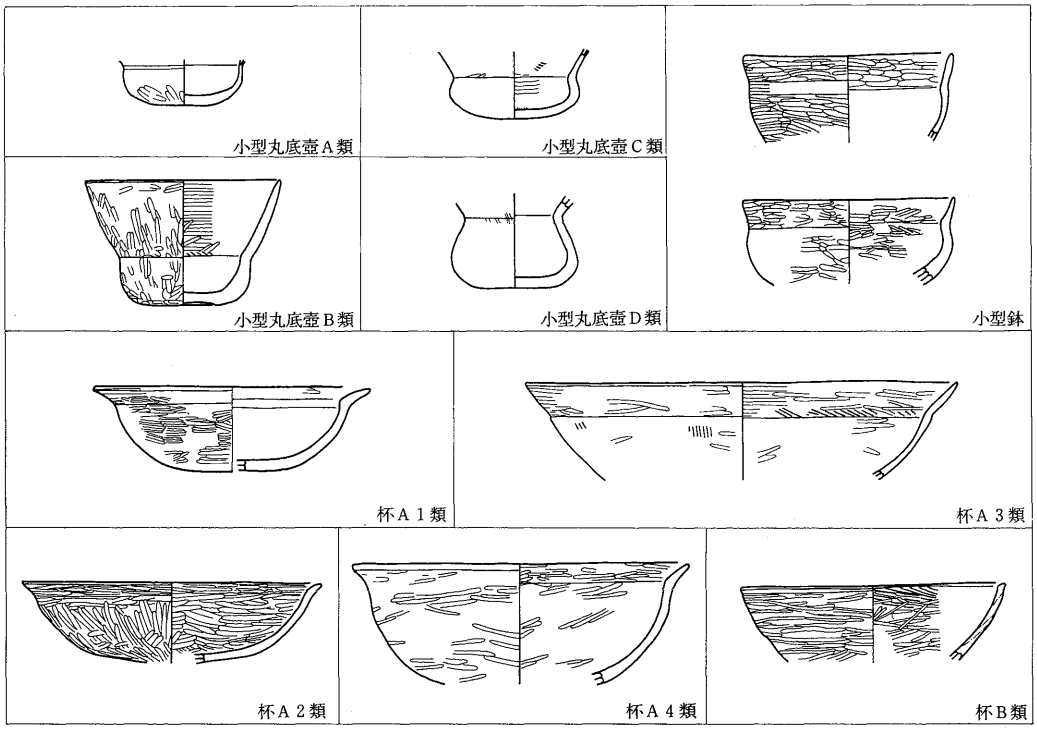
S類：内面にケズリが入る無文の壺で，体部下端にヘラケズリの入るものがある。

T類：壺の底部を一括した。縄文が施されたものと，それが入らないものの２類に細分される。縄文の施されるもの（１類)で，小ぶりの底部から体部に向かって，開き気味に立ち上がるもの（a類)。大ぶりの底部から体部に向かって，直線的に立ち上がるもの（b類)。縄文の施されないもの（２類)で，底部と体部に稜線をもち，幅広の底部が作出されるもの（a類)と台状の底部となるもの（b類)がある。

②小型壺

A類：細頸壺，口縁部と頸部との境界に段を有し，３状の沈線を巡らすもの。

B類：有段口縁の壺で，口縁部の形態より３類に細分される。内外面は丁寧にミガかれている。直立する頸部に，外反する幅広の口縁部がつくタイプである。有段口縁の内側は若干くぼむ（１類)。口縁部が直立気味に外傾する形態で，口縁内面はほとんどくぼまない形態のもの（２類)。短



第283図　遺物分類図6　小型丸底壺・小型鉢・杯

い頸部に幅の狭い外傾する口縁部のつく形態のもの(3類)。

C類：口縁部に段をもたない壺で調整はヘラミガキが主体である。口縁部の形態より以下の3類に細別される。口縁部が直立気味に立ち上がる形態のもの(1類)。直線気味に開く口縁部に球形の体部がつくと推定されるもの(2類)。口縁部の下半が僅かに膨らむ長い形態で，体部中位がやや張り出すもの(3類)。

③小型丸底壺(坩)

A類：底部から体部が張り出さず，底部から口縁部と体部の境界まで丸みをおびて移行する形態を呈するもの。

B類：体部上位が直線的に立ち上がる形態で，器形の全容が判明しているものでは，内湾気味に開く長めの口縁部がつく形態を呈している。

C類：体部中位が張り出す形態の体部をもつもの。

D類：体部下位が張り出す形態の体部をもつもの。

④小型鉢　器形的に小型丸底壺より大型のもので，短い口縁部がつくものを小型鉢として分離した。調整はヘラで丁寧に磨かれている。

⑤杯　口縁部と体部の形態により2類に大別される。A2～A3類は高杯の可能性もある。

A類：口縁部が外反する形態のもので，以下の4類に細別される。口縁部が外反し内面がやや

肥厚する形態で，器高の低いもの(1類)。浅めの杯で口縁内面の口縁部と体部との境界に明瞭な段を有するもの(2類)。体部から口縁部にかけて内湾気味に開き，直線的に外傾する口縁部がつく形態のもの(3類)。深めの杯で，口縁部の内面の体部との境界に段を有する形態のもの(4類)。

B類：口縁部と体部の境界に段をもたない形態のもので，内外面はハケメ調整された後，ヘラミガキが施されている。

⑥高杯

A類：細いヘラ描き沈線によって飾られた高杯で器形の明確に判明するものはなく，透し孔を有し，脚部中位まで平行沈線が巡っているもの(1類)と透し孔を有さず，平行沈線が巡るもの(2類)がある。

B類：太い1本引きの沈線と刺突文・キザミと縄文によって飾られた高杯で，文様・器形により3類に細分される。波状口縁を呈し，文様帯内に波状沈線と刺突による文様が描出され，口縁頂部内面には貼付文を有するもの(1類)。上向きの連弧文と刺突が施された粘土貼り付け文からなる文様が描出されているもので，杯部下位は細く，円盤充填法による成形がなされているもの(2類)。磨消縄文手法による沈線区画文が主文様となっており，波状口縁を呈し，文様帯下端には刺突文が施されているもの(3類)。

C類：杯部下端に段を有し中実の柱状部に円錐状の脚部がつく形態の小ぶりの高杯である。調整はナデが主体である。

D類：体部下位に段を有し，長い外反する口縁部を有する器形で，中空の上部に円柱状，下部に円錐状の脚部がつく形態と考えられる。調整はハケメ後ヘラミガキである。

E類：直線気味に立ち上がる杯部に円錐状に広がる脚部が付く有段の高杯で，調整は内外面ともヘラミガキである。杯部下位の幅が狭く，内面に段をもたないもの(1類)と杯部下位の幅が広く，内面に段を有するもの(2類)がある。

F類：杯部下端に段をもち，口縁部に向かって内湾気味に開く形態のもの。脚部の付くものでは脚部が中実の円柱状，裾部が円錐状となっている。

G類：浅めの杯部を有するもので，杯部下端には2段の段をもっているもの。

H類：体部と口縁部との境界に稜線をもち，口縁部が外反する形態の杯部がつくもので内外面にはミガキが施されている。

I類：浅い椀形の杯部に円柱状の脚部がつく形態のもので，内外面にはヘラミガキが施されている。

J類：下端に段を有する杯部に低い円錐状の脚部がつく形態のもの。

K類：脚部のみを一括した。その形態より5類に大別される。円錐形の脚部のもの(1類)には脚部下位が大きく外側に開く形態のもの(a類)，脚部の開きが小さく，脚部上位まで中空となっ

ているもの(b類)，小ぶりの脚部で1ヶ所に透し孔がつくもの(c類)がある。中空の円柱状の脚部で，上部に円盤充塡成形による突起を残すもの(2類)には，器壁が薄く，下部が広がる形態のもの(a類)と器壁が厚めで，脚自体の長いもの(b類)がある。上部が中空の円柱状，下部が円錐状の脚であると推定され，円柱部の中空部上位は，すぼまる形態であるもの(3類)には，円柱部が短く，内面は脚部中位に段を有し，外面調整は横方向のミガキであるもの(a類)と円柱部が長く，脚下位に段を有するもの(b類)がある。上部が円柱状，下部が円錐状の脚で，円柱部中位までが中空となっており，上位は中実となっているもの(4類)。脚部の全てが明確なものでは円錐部に透し孔を有する。上部が円柱状，下部が円錐状の脚で，円柱部は中実となっているもの(5類)。外面に縦位のミガキの入るもの(a類)と外面に横位のミガキの入るもの(b類)がある。中実の円柱状脚上部から境界をもたずに裾部に向かって広がる形態のもの(6類)。円錐台状の裾部に中空の円柱状の脚部がつき，脚部の中空部は2段となるもの(7類)。直立する中実の脚部に円錐状の裾部のつくもの(8類)。

⑦器台

A類：脚部と台部の境界が「く」の字状に屈曲する形態のもの。調整はミガキである。

B類：円錐台状の脚部に有段の台部がつくもので内外面に顕著なハケメ痕跡を残し，脚部中位には透し孔を4ヶ所に有する。

C類：台部のみのもので，中位に段をもって内湾ぎみに開く。

D類：円柱状の脚部に円錐状の裾部がつき，段をもたない内湾する台部が付く形態のもの。

E類：円柱状の脚部に円錐状の裾部の上に浅い台部がつくもので，台部中央の孔は貫通しない。調整は横方向のヘラミガキである。脚部の状態より，脚部中位まで中空となっているもの(1類)と脚部下位は中実のもの(2類)がある。

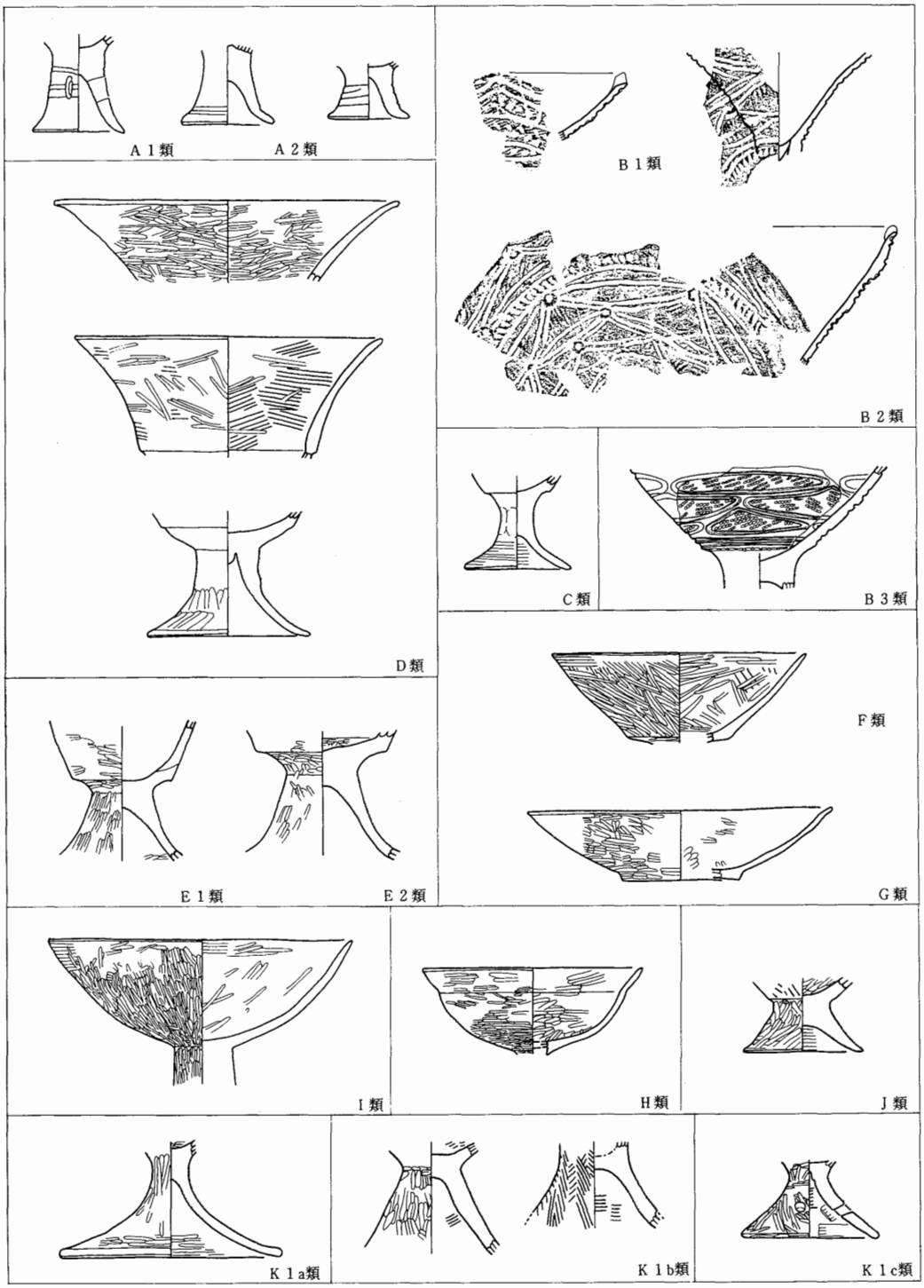
F類：脚部のみのものを一括した。以下の4類に分類される。円錐状の台部のもの(1類)は，脚部と台部との境界に凸帯を有し，脚部下位の2ヶ所に透かし孔を有するもの(a類)，裾部に向かってやや強く開く形態のもので，台部との境界は屈曲するもの(b類)がある。円柱状の脚部から円錐状の裾部に稜線をもたずになだらかに移行するもの(2類)。円柱状の短い脚部に円錐状の裾部がつくもの(3類)。円柱状の長い脚部に円錐状の裾部が付くもの(4類)。

⑧鉢

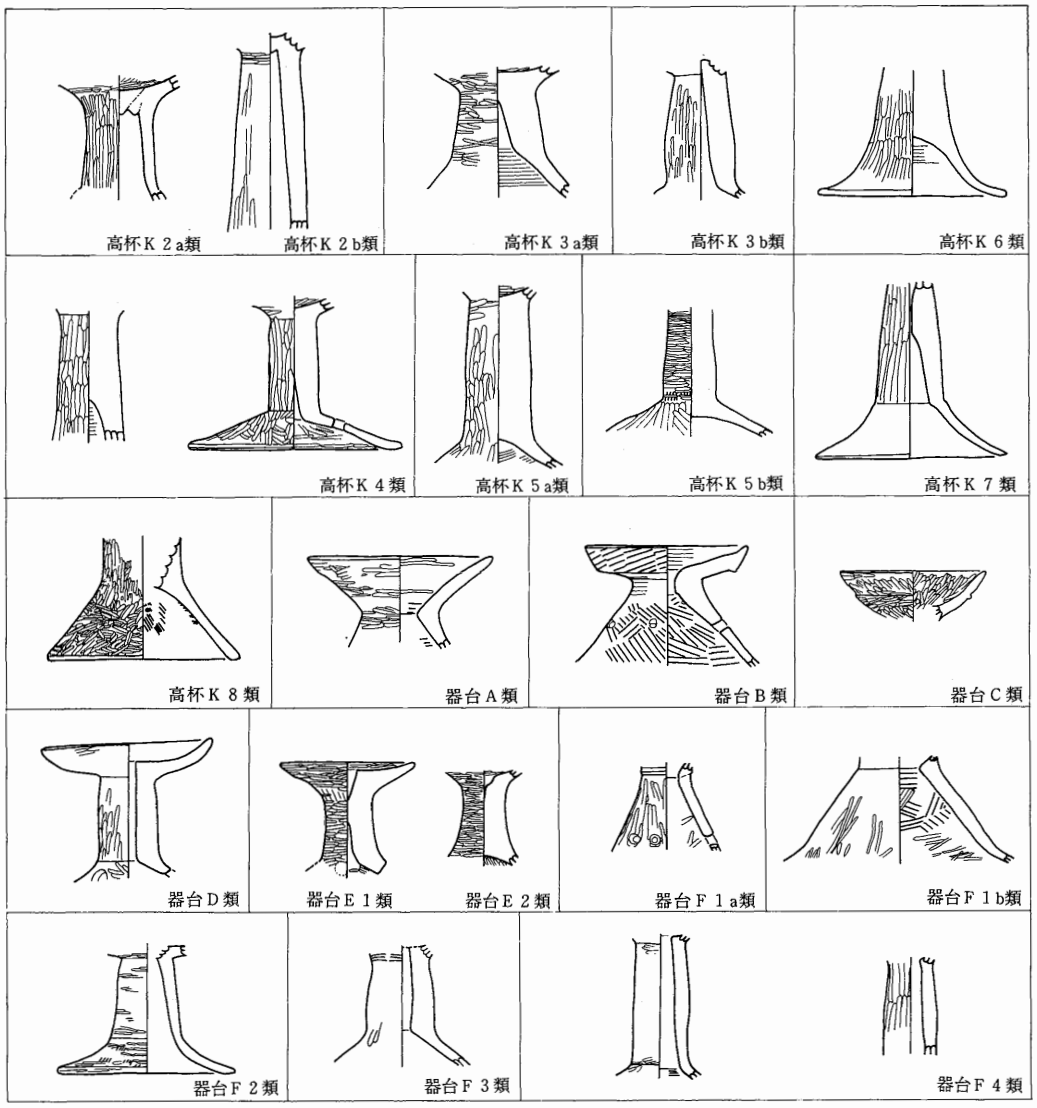
A類：細い沈線によって飾られた浅鉢で，3本一組の沈線によって上向きの連弧文が描出されている。

B類：コップ形を呈する鉢で，底部の形態から2類に細別される。底部が肥厚し，台状を呈するもの(1類)。底部は肥厚せず，2ヶ所に貫通孔を有するもの(2類)。

C類：体部下位から口縁部に向かって直線的に開く形態のもので，調整は内面にナデとハケメ



第284図　遺物分類図７　高杯（１）



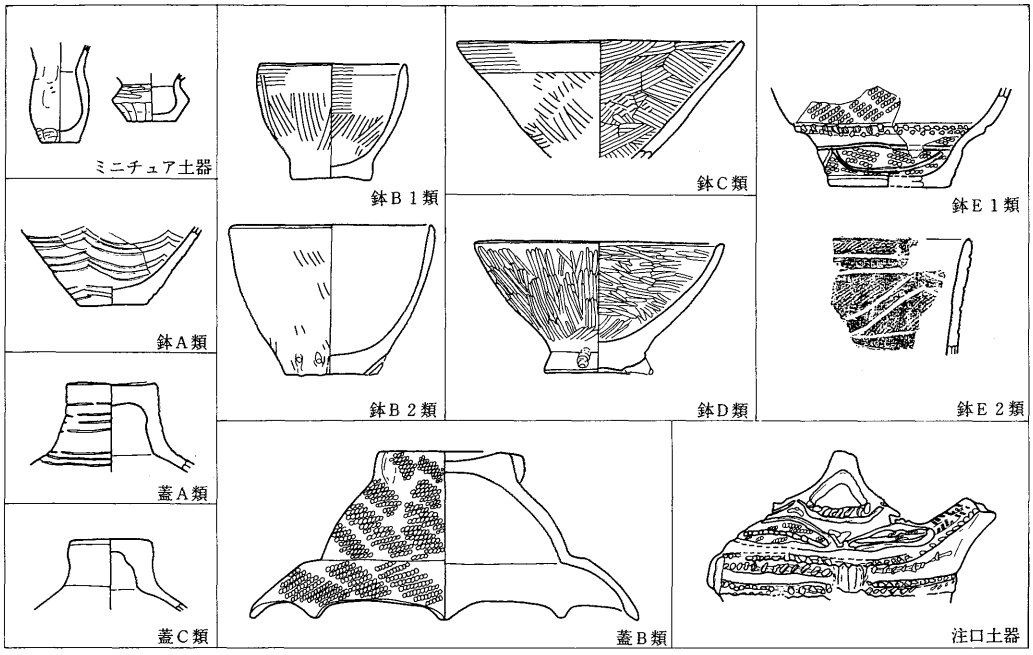
第285図　遺物分類図8　高杯・器台

が施されている。甑となる可能性もある。

D類：底部が台状を呈し，口縁部に向かって内湾気味に開く形態のもので，底部1ヶ所に貫通孔を有する。調整はヘラミガキである。

E類：太い沈線と縄文・刺突文が組み合わされた文様によって飾られたもので，器形より2類に細別される。口縁部と体部との境界に段を有し，段上には交互刺突文が施され，体部の文様帯には太い沈線による区画文が施されているもの(1類)。直立気味に立ち上がる口縁部のみで，沈線による区画文が施されているもの(2類)。

⑨蓋



第286図　遺物分類図９　鉢・蓋・注口土器・ミニチュア土器

Ａ類：細い沈線によって飾られたもので，体部中位が湾曲する形態のもの。

Ｂ類：縄文のみによって飾られた蓋で，体部と口縁部の境界に段を有し，口縁は５単位の波状口縁を呈し，底部には４ヶ所に粘土の瘤が付く。

Ｃ類：無文の蓋で体部中位が湾曲する形態のもの。

⑩注口土器　太い沈線・刺突文・縄文によって飾られたものがある。

⑪ミニチュア土器　２種類が検出されている。

Ａ類：体部中位が屈曲し，口縁部が外反する形態のものがつくと推定されるもの。

Ｂ類：長い体部に外反する口縁部がつくと推定されるもの。

⑫小型甕　器形の全容が明確なものも出土しており，形態により３類に分類できる。

Ａ類：球形に近い体部に外反する長い形態の口縁部がつくもの。体部との境界は強く屈曲する。

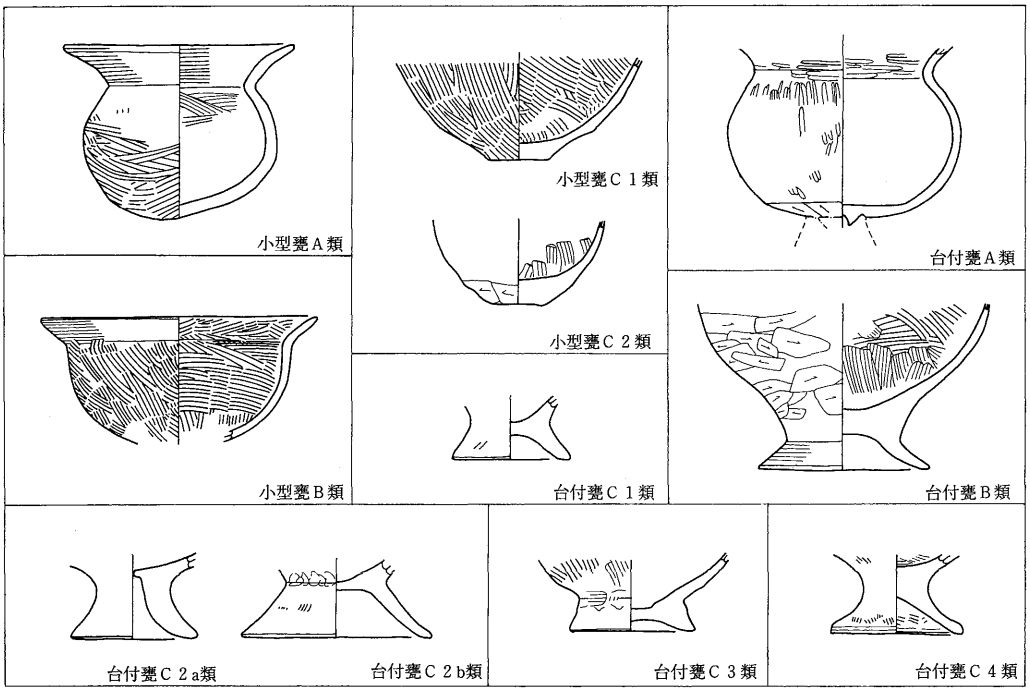
Ｂ類：体部下端から上位に向けて内湾気味に立ち上がり，口縁部が直線的に開く形態のもの。

Ｃ類：底部のみのものを一括した。体部下端の調整より，体部下端までハケメ調整のもの（１類）と体部下端にヘラケズリの入るもの（２類）がある。

⑬台付甕　器形の全容が判明するものは出土しなかった。

Ａ類：体部中位が膨らみ，外反気味に開く口縁部のつくもの。調整は口縁部，体部内外面はヘラミガキ，体部下端はヘラケズリである。

Ｂ類：体部下半から台部にかけてのもので台部は低く，体部外面にはヘラケズリ，内面はナデ



第287図　遺物分類図10　小型甕・台付甕

調整がされている。

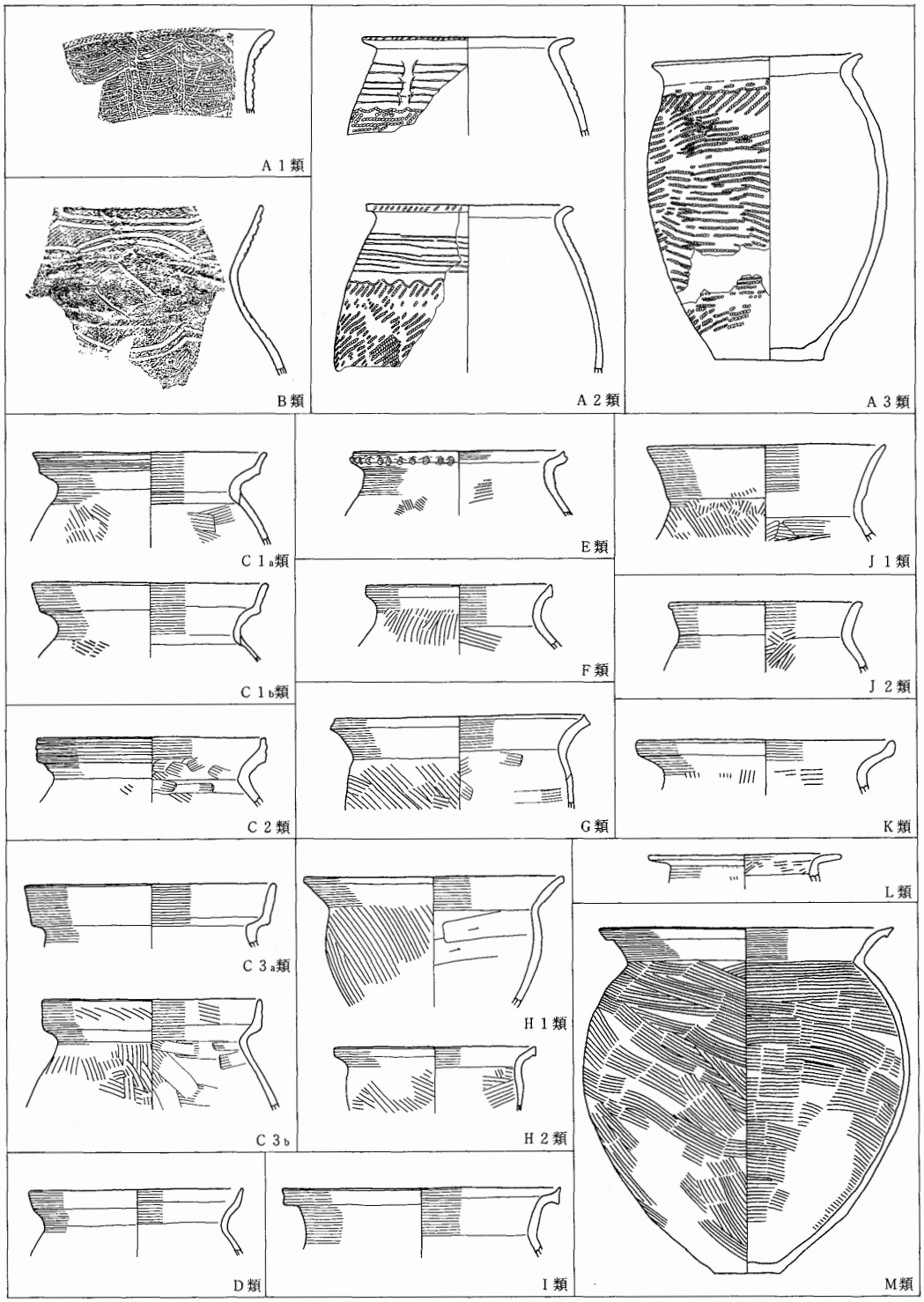
C類：台部のみのものを一括した形態より，以下の4類がある。低い厚手の台部で，体部下端から端部に向かっては直線気味に開くもの(1類)。体部下端から，底部に向かって，外反気味に開く形態の台部のもの(2類)で，薄手の長めの台部がつき，体部との境界には明確な稜線がつくもの(a類)と厚手の台部がつくもの(b類)に細別される。やや直線的に開く，短い台部のもの(3類)。外反気味に開き，端部が面取りされているもの(4類)。4類は台付鉢となる可能性もある。

⑭甕

A類：細い1本引きの沈線，あるいは縄文のみによって飾られたもの。器形文様により3類に細分される。口縁部から体部上位に2本一組の沈線によって肋骨文が施されているもの(1類)で，口縁部は外反し，口唇には縄文が入る。体部上位に平行沈線文が施され，口縁部は屈曲する形態のもの(2類)。縄文のみの甕で，2類と同様な形態のもの(3類)。

B類：太い沈線と縄文によって飾られたもので，口縁部と体部の文様帯には連弧文が描出されているもの。

C類：有段口縁の甕形土器をC類とした。器形・文様により以下の3類に細分される。口縁部が外反気味に開く形態で，口縁下の内面には稜線が認められるもの(1類)。文様の有無で口縁部に凹線文を有するもの(a類)と口縁部が無文のもの(b類)に細別される。口縁部が直立するもの



第288図　遺物分類図11　甕（１）

で，器壁が厚く口縁に凹線文を有するもの(2類)。口縁部が直立するもので無文であるもの(3類)で，口縁内面が大きく凹むもの(a類)と口縁内面のくぼみが小さいもの(b類)がある。

D類：C類に近い形態を呈するが，口縁部外面に明瞭な段が形成されないもの。

E類：胴が張り出す形態を呈し，口縁部が強く外反する形態を呈するもの。口唇にはハケ状工具端部を用いたキザミが入れられる。

F類：E類と同様に胴部が張り出し，頸部はやや直線的に広がる形態を呈し，口縁外面は面取りされているものである。

G類：長胴の体部に外反する口縁部がつくと推定される形態で，口縁端部外面は面取りされ，断面は三角形状を呈する。口縁端部は上方につまみ出されている。

H類：口縁端部が面取りされ，下部に段が形成されるもので，器形・調整より口縁部が外反気味に開き，体部内面にヘラケズリの入るもの(1類)と外反気味に開く，短めの口縁部をもつもので，体部の調整はハケメであるもの(2類)がある。

I類：口縁外面が面取りされ，複合口縁状を呈し，口縁端部が上方につまみ出されているもの。

J類：頸部の屈曲が弱く，外反気味に立ち上がる口縁部のつく形態のもの。器形により口縁部下端に稜線を有し，口縁部は長く端部は外反するもの(1類)と口縁部は短く，端部外面は肥厚するもの(2類)がある。

K類：口縁外面に稜線を有し，受口状の口縁をもつもの。

L類：口縁部が横方向に屈曲するタイプのもので口縁端部は面取りされている。

M類：体部中位よりやや上に最大径をもち，口縁部は外反し外面が面取りされているもので，下部には明瞭な段を有する。

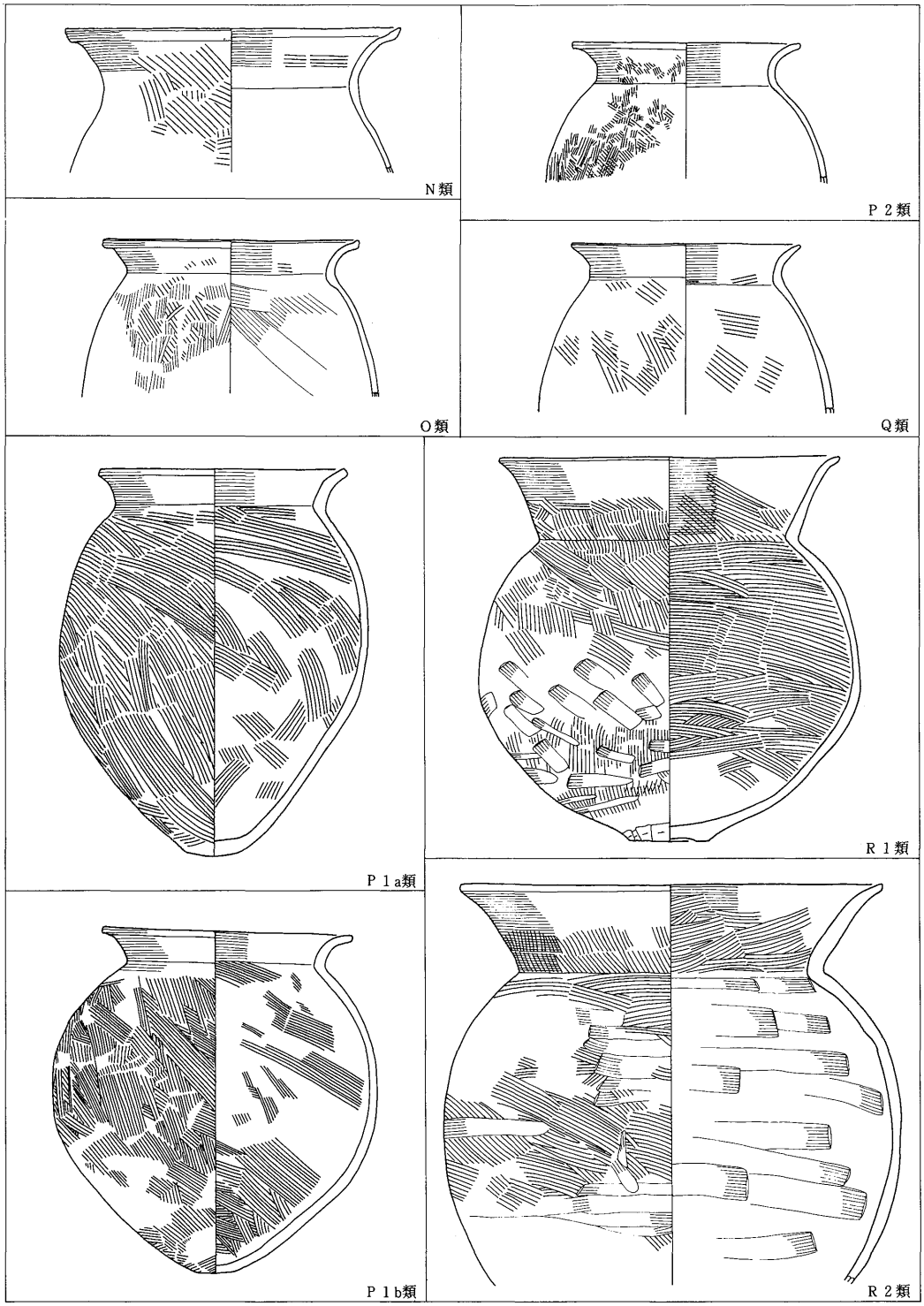
N類：胴部から口縁部に向かって明確な段をもたずに湾曲し，口縁が斜め上方につまみ出され，口縁外面が面取りされているもの。

O類：口縁外面が面取りされており，端部が上方につまみ出される形態のものである。調整は内面にヘラナデ，外面にハケメとナデである。

P類：口縁端部が面取りされているいわゆる「能登甕」で，器形・形態より3類に細分される。胴部最大径を中位にもち，口縁部が「く」の字状に外反し口縁部中位で2段に屈曲する形態のもの(1類)で，長胴・丸底で，胴部内外面には粗いハケメが入るもの(a類)と底部が小さく，a類と比較すると胴部が短く，ハケメも細かなものが入るもの(b類)がある。口縁部の屈曲も途中で段をもたない形態のもので，胴部調整にはハケメのみのものとハケメとナデの双方が入るものがある(2類)。

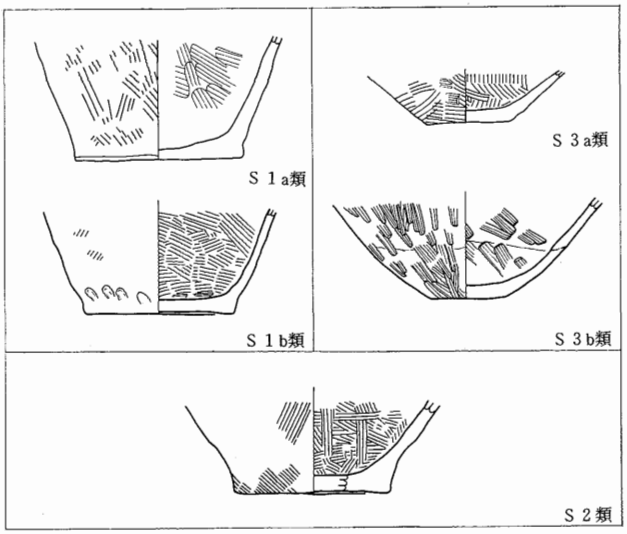
Q類：口縁端部が面取りされず，口縁部が屈曲する形態のもの。体部調整はハケメである。

R類：頸部の幅が広い甕で，球形に近い胴部に長めの外反気味に開く口縁部がつく器形のもの



第289図　遺物分類図12　甕（２）

で，器形・調整より２類に細分される。口縁端部が面取りされるもので，外面調整はハケメ→ナデ，内面調整はハケメであるもの（１類）。口縁端部が面取りされないもので，調整は外面がハケメあるいはハケメ→ナデ，内面がハケメあるいはナデであるもの（２類）。



第290図　遺物分類図13　甕（３）

Ｓ類：甕の底部を一括した。形態より以下の４類に分類される。広めの底部から，体部が急な角度で立ち上がる形態のもの（１類）で，外面ハケメ，内面ナデあるいはヘラナデのもの（ａ類）と内外面ハケメ調整のもの（ｂ類）がある。直立気味の厚い底部から体部にむかって広がる形態で，調整は内外面ともにハケメであるもの（２類）。小ぶりの底部から体部に向かって，大きく開く形態のもの（３類）で，内外面ともにハケメのもの（ａ類）と内外面ともにナデのもの（ｂ類）がある。

（２）　主要遺構での出土状況

まず，住居跡では，１・２・６号住居跡が明確に弥生時代後期～古墳時代前期の遺構である。しかし，遺物は堆積土中よりの出土がほとんどであり，遺構に伴うと考えられるものは６号住居跡の壁溝より出土している杯Ｂ類・台付甕Ｂ類・高杯Ｄ類のみである。２号住居跡の堆積土中からは，遺物がまとまって出土しており，甕Ｍ・Ｐ２類が出土している。

土坑では，18・24・25・99号土坑が弥生中期の土坑であり，堆積土中から壺Ａ類，甕Ａ類，蓋Ａ・Ｃ類が出土している。この他，弥生後期～古墳前期の土坑では，21・37・39・43・59・61・64・67・72・75・76・110・112・115・126・133・164・177・197・210・272・304号の22基がこれに該当する。これらの土坑の内明確に遺構にともなって遺物が出土した土坑は21号土坑で，壺Ｆ２類・高杯Ｄ類・甕Ｈ２類が，底面より出土している。

井戸跡では，５号井戸跡と20号井戸跡より該期の遺物が出土している。このうち，20号井戸跡からは，堆積土中であるが，壺Ｂ２・Ｄ１ａ類が出土している。

周溝状遺構では，周溝内から遺物が出土しており，明確に遺構にともなうと考えられる遺物が出土しているのは，３・４・７・９・13号周溝状遺構である。３号周溝状遺構からは壺Ｓ類，高杯Ｈ類，蓋Ｂ類，甕Ｃ１ａ・Ｃ３ｂ類が，４号周溝状遺構からは，壺Ｄ２類，高杯Ｋ２ａ類が，出土している。また，本遺跡最大の７号周溝状遺構からは壺Ｅ４・Ｇ・Ｒ類，小型丸底壺Ｄ類，

高杯Ｆ・Ｇ・Ｋ２ｂ・Ｋ３ｂ・Ｋ６・Ｋ５ｂ類，器台Ｃ・Ｆ２・Ｆ４類，台杯甕Ａ類，甕Ｃ２・Ｏ・Ｐ２類が出土している。この他，９号周溝状遺構からは，壺Ｅ３類が，13号周溝状遺構からは，壺Ｐ類が出土している。

特殊遺構では，１・９号特殊遺構から遺物が多量に出土している。これらの遺構は，最終的に遺物の廃棄のために使用されたと考えられ，遺物には，１号特殊遺構では，壺Ｈ類，小型壺Ｃ２類，小型丸底壺Ｃ類，鉢Ａ類，高杯Ｋ１ｂ・Ｋ３ｂ類，器台Ｅ・Ｆ１ｂ類，小型甕Ｃ２類，甕Ｐ１ｂ類がある。また，９号特殊遺構では，壺Ｉ・Ｎ・Ｏ類，小型丸底壺Ａ類，杯Ａ１類，高杯Ｋ３ｂ類，甕Ｐ・Ｒ類がある。

（３）　制作技法について

土器の制作技法の検討にあたっては，胎土と整形・調整技法及び装飾方法についてそれを行う。

まず，胎土については，肉眼観察と胎土分析の結果をもとに分類することが可能である。肉眼観察では，胎土混入物には，石英粒・長石と考えられる白色の砂粒，カンラン石・カクセン石等の黒色の微粒が認められる。これらは，混入物の多寡と密度によってほとんどが，分類することができる。これら胎土混入物は，原材料の粘土に混入していたものと混和材として使用されたものがある。肉眼観察で明確に混和材と認められるものには，１㎜前後の大きさの石英粒がある。特にこの混和材が胎土中で際立つのは，他の白色の砂粒，黒色の微粒が認められないか，あるいは極少量であるといった特徴をもつ。石英粒自体も透明度の極めて高いものが精選されている。この胎土をもつものは，壺Ｃ１ａ類である。

胎土分析では，該期の土器について40点をピックアップし，それを在地系の磨消縄文系の弥生土器，太平洋側に多く分布する多条沈線文系の弥生土器，北陸系の弥生時代後期～古墳時代初頭の土器，それ以外の古墳時代前期の土師器の４つに大まかに分類し，分析を依頼した。分析結果の詳細は付編を参照していただきたいが，結果を見る限りでは，それらが，一様に制作地の違いを表す可能性は，低いといえる。胎土のみでみれば，北陸系とした甕Ｃ・Ｄ類は，Ⅱ群Ⅲ群双方の胎土が認められた。また，太平洋側の多条沈線文系の土器群でも同じ様な結果となった。

整形・調整及び装飾技法について，中・大型壺では，縄文・沈線・押圧・キザミ・刺突によって飾られたもの（Ａ～Ｆ・Ｔ類）と，それ以外のものに大きく分けられる。前者では，施文具として①鋭いヘラ状の工具，②端部が丸い棒状の工具あるいは細い竹管，③櫛歯状の工具が用いられたと考えられる。①の工具を２本束ねて施文したのがＡ類である。②の工具を用いて施文されたのがＢ類である。他には，③の工具を用いて施文したもの（Ｃ１～３類）と②の工具を数本用いて③と同様な文様を施文したのがＣ４類である。また，縄文には，単節縄文・付加条縄文・撚糸文がある。このうち，付加条縄文は，横位のものと縦位のものがある。また，キザミがはいるもの

には，隆帯の上にそれが入るもの(Ｃ２・Ｄ３・Ｅ２・Ｆ類)が特徴的である。また，この中には，内面にハケメの入るもの(Ｂ１・Ｄ１ｂ類)，ヘラケズリの入るもの(Ｄ１ｂ・Ｅ３類)もある。飾られない壺には，口縁部の外面にヨコナデの入るもの(Ｇ・Ｈ・Ｊ～Ｏ類)，ヨコナデの上にヘラミガキが入るもの(Ｉ類)，ナデとハケメのみのもの(Ｐ類)がある。他には，口縁下部にナデによって稜線が作り出されているもの(Ｇ類)もある。体部の調整には，ハケメとナデがあるが他にヘラケズリの入るもの(Ｓ類)もある。

小型壺では，Ａ～Ｂ類ともに，ヘラミガキが最終の調整となっている。これは，小型丸底壺・小型鉢・杯でも同様である。この中には，ヨコナデ及びナデの後にヘラミガキが入るものの他に，杯では，ハケメの痕跡を残すもの(Ａ３・Ａ４類)も存在する。

杯及び器台では，縄文・沈線・キザミ等によって飾られたもの(高杯Ａ・Ｂ類)とそれ以外のものがある。飾られないものでは，ハケメをそのまま残す器台Ｂ類を除いて，ヘラミガキが最終の調整になっている。ヘラミガキの方向は，杯部及び台部は横方向であるが，脚部については，縦方向が主体となっている。しかし，高杯Ｋ３ａ・Ｋ５ｂ類，器台Ｅ・Ｆ２類については，横方向のヘラミガキが入っており，少数ながら異質な感じを受ける。また，高杯の杯部と脚部の接続方法には，中空の脚部内面上位が突出する形態の円盤充塡法によるもの(Ｂ２・Ｋ２類)とそれ以外のものがある。

小型甕は口縁部にヨコナデ，体部にハケメが施されるものが出土している。台付甕では，器形の全容のわかるものは出土していないが，台部が高い発達した形態のものは出土していない。

甕では，縄文・沈線によって飾られたものとそれ以外のものが出土している。飾られたものでは，壺の施文具①(Ａ類)及び②(Ｂ類)が用いられている。それ以外のものの口縁部の調整は，全てヨコナデが主体であるが，他に凹線及び擬凹線が入る口縁のもの(Ｃ１ａ・Ｃ２類)，ハケの原体によってキザミが入れられているもの(Ｅ類)がある。後者の手法は壺Ｆ類と共通する手法である。体部の調整は，外面はハケが主体であるが，一部にハケの上にナデが加えられたもの(Ｐ２・Ｒ類)がある。内面はヘラケズリとヘラナデあるいはナデのものが半々であるが，ヘラケズリが施されたもの(Ｈ１類)も一部ある。底部は，ほとんどが平底と考えられるが丸底のもの(Ｐ１類)も存在する。

(4)　まとめ

本遺跡出土の該期の土器については，①弥生中期末の平行沈線文系の土器，②弥生後期の磨消縄文系の土器(A)，多条沈線文系(櫛描沈線文を含む)の土器(B)，③無文の北陸系の後期弥生土器～古式土師器，④在地(南東北)系の古式土師器に大別することが可能である。

①平行沈線文系土器　Ⅲ区の18・99号土坑出土の土器及び，Ⅲ・Ⅴ区の２～５号埋設土器から

なる。器種では，壺Ａ１・Ａ２類，高杯Ａ類，鉢Ａ類，蓋Ａ・Ｃ類，甕Ａ類がこれに該当する。２本１組の平行沈線によって装飾されたもので，弥生中期末の川原町口式に比定される。

②Ａ．磨消縄文系土器　Ⅴ区南側の43・76・281号土坑，中央部の20号井戸跡および遺構検出面より出土している。器種では，中・大型壺Ｂ類，高杯Ｂ類，鉢Ｅ類，蓋Ｂ類，甕Ｂ類，注口土器が，該当する。型式学的には，天王山式に後続する内容をもつもので，壺Ｂ類では，天王山式と以下の違いが認められる。ａ．山形突起は内面に肥厚し，ｂ．口縁部は長めの直線的に開くものになり，ｃ．交互刺突文は崩れたものが多くなり，ｄ．口縁部の文様帯は無文あるいは，１本引きの沈線から波状文が連結した区画文となる。

Ｂ．多条沈線文系の土器　61・68号土坑，４・６号周溝状遺構等から出土しているがまとまって出土したものではない。器種では，壺Ｃ類が該当する。文様構成より，八幡台式に比定されるもの(Ｃ１・Ｃ２・Ｃ４ａ・Ｃ４ｃ類)と十王台式に比定されるもの(Ｃ３・Ｃ４ｂ類)の新旧２段階のものが認められる。

③北陸系土器　器種では，中・大型壺Ｆ１・Ｇ・Ｌ・Ｍ類，小型壺Ａ・Ｂ類，高杯Ｄ・Ｋ２ａ・Ｋ８類，甕Ｃ～Ｋ・Ｎ～Ｑ類がこれに該当する。これらの内，法仏式に比定されるものは，壺Ｆ１類・Ｌ類・甕Ｃ１・Ｅ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｋ類である。月影式に比定されるものは，壺Ｍ類・小型壺Ａ・Ｂ２・Ｂ３類・高杯Ｄ・Ｋ２ａ類・Ｋ８類・甕Ｃ３類である。また，Ｃ２類は猫橋式，そのほかは府クルビ式期以降のものと考えられる。

④在地系の古式土師器　１～３・６号住居跡，７号方形周溝状遺構，１・９号特殊遺構からまとまって出土している。器種では，壺Ｈ・Ｉ・Ｋ・Ｒ類，小型壺Ｃ類，小型丸底壺，杯，高杯Ｆ～Ｊ類・Ｋ１・Ｋ２ｂ～Ｋ７類，器台Ａ・Ｃ・Ｆ類，鉢Ｂ～Ｄ類，小型甕・台杯甕・甕Ｑ類が，これに該当する。遺構単位の出土遺物では，７号周溝と９号特殊遺構が若干新しく丹羽編年のⅡＢ段階以降，それ以外のものについても，ⅡＡ段階前後の時期に比定される。

本遺跡で出土した土器は，各系統のものが含まれている。特に会津地方において天王山式に後続する型式が認められた点と，弥生終末の時期に多様な北陸系の甕を中心とした器種が認められ，器種の中でもその変化がおえるものが出土している点が注目されよう。　(藤谷)

第3節　弥生～古墳時代の遺構

（1）　竪穴住居跡

本遺跡にて検出された11軒の竪穴住居跡のうち，弥生時代から古墳時代にかけてのものと考えられるものは7軒ある。これらの内，明確に時期が特定できるのは，1・2・6・11・12号住居跡である。1・2・6号住居跡は，出土遺物は古墳時代前期に比定される土器が出土している。11号住居跡については，古墳時代前期初頭に比定される土器が出土している。また，12号住居跡からは，弥生中期後半の土器が出土しており，時期もその頃と推定される。

弥生時代の12号住居跡は，円形を呈するものである。近年東北地方でも，弥生時代初頭の集落跡の調査が行われているが，竪穴住居跡の形態は，縄文晩期以降の系譜をもつ円形プランのものが基本となっている。また，本県でも，弥生時代の住居跡の調査例はあるが，ほとんどが後期で，中期のものでは，伊勢林前遺跡2号住居跡が不整円形，朝日長者遺跡52号住居跡が隅丸方形，一ノ堰B遺跡1号住居跡が方形である。本遺跡の12号住居跡は，県内の中期の住居例とは若干異なり，円形プランを呈しており，縄文晩期からの系譜をもつものといえる。

古墳時代の住居跡は，円形プランを呈するもの（2・12号住居跡）と隅丸長方形を呈するものがある。定型化した方形プランの住居跡以外のものが検出されていることが，本遺跡の一つの特徴となっている。このうち円形プランの2号住居跡については，床面の状況から平面プランが方形→円形へと変化しており，通常とは反対の変化をたどっている。円形プランを呈する該期の住居跡は，県内では本屋敷古墳群2号住居跡に類例がある。遺構内からは，土師器とともに東関東系の終末期弥生土器も出土しており，異系統の土器が混在する状況は本遺跡と共通する。隅丸長方形の住居跡は，古墳前期よりも主に弥生後期に認められる形態で，弥生時代の系譜を強く引くものといえる。

遺跡内での位置についてみれば，単独で検出された弥生中期の住居跡では，土坑群がやや集中して存在するⅢ区南側からは西側80m程に離れて位置している。またⅤ区南側の埋設土器がまとまって位置している地区には隣接している。

古墳時代の住居跡は，Ⅲ区南側，Ⅳ区，Ⅴ区南側と遺跡内でも南側の地区に集中する傾向を示している。これと対象的なのが周溝状遺構で，Ⅲ区に位置する1・2号を除いて，Ⅴ区中央西半部から南側にかけてまとまって位置している。時期的に，一部ずれるものもあるが，同時期のものが多く，古墳時代前期では竪穴住居跡からなる南側集落域と，方形周溝墓からなるその北側の墓域が明確に分離して，遺跡を構成していたと考えられる。（藤谷）

（２）　周溝状遺構について

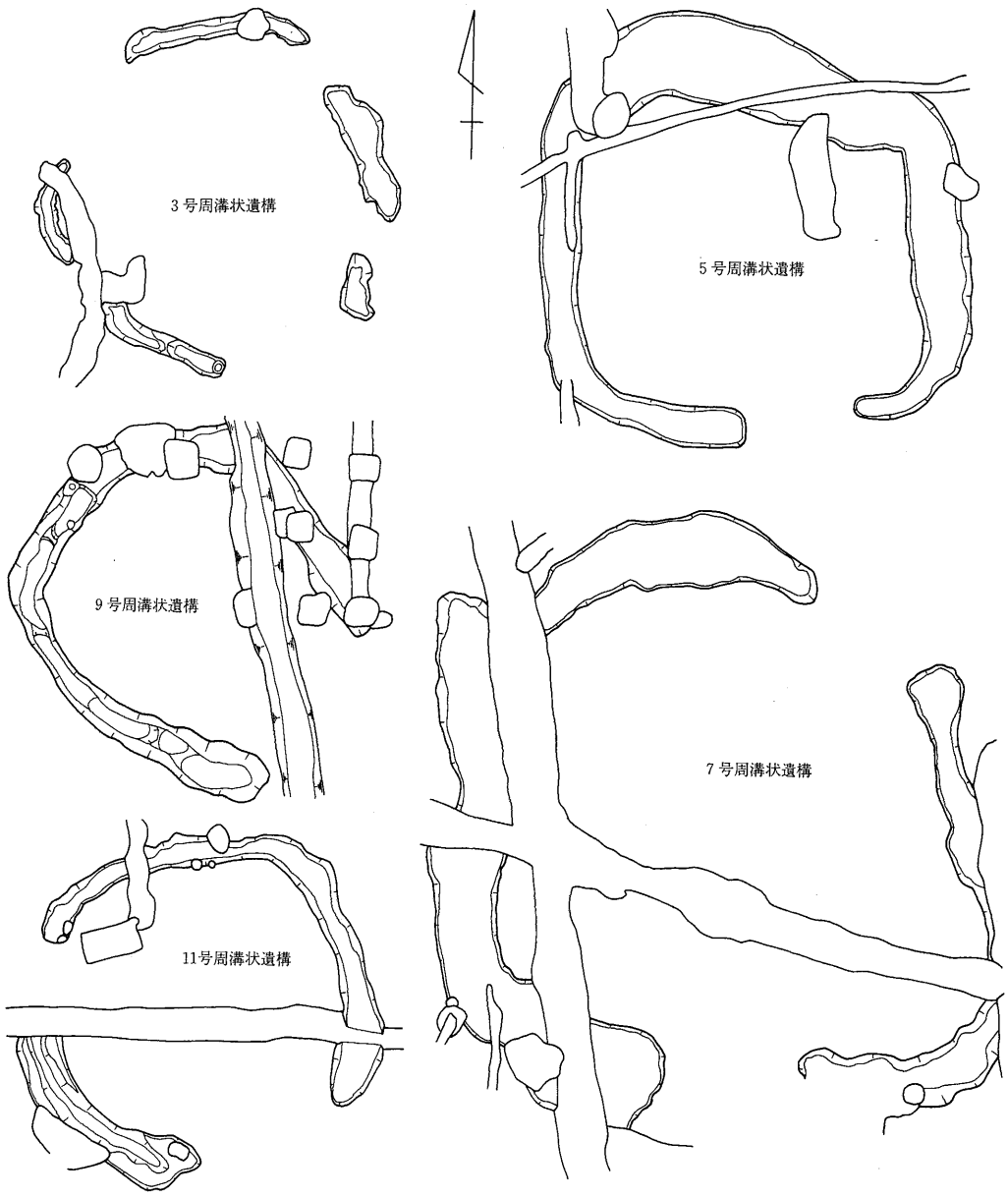
屋敷遺跡では方形周溝墓らしい遺構は13基検出されている。しかし，この遺跡は平安時代にも集落が営まれ，さらに昭和30年頃に圃場整備の工事が行われるなど削平が激しく，溝の底面のみを残すものも多かった。したがって，検出状況から方形周溝墓とすることができるのは３・５・７・９・11・12号の６基のみである。今回，方形周溝墓としたものは溝幅が広く，３または４方向に溝が周り，一部が調査区外となる12号を除いて，すべて南側に陸橋部が確認されているものである。他のものは大型竪穴住居の周溝のみが残ったものか，単なる溝の一部である可能性も否定できないものである。

形態からいくと，３・7号周溝墓は，陸橋部と考えられる部分以外でも溝のとぎれが見られる。その場所はコーナー近くであるが，直線的に伸びた溝の端が向かい合いコーナーを形成する部分ではなくややずれており，溝がコーナーでとぎれる方形周溝墓とは異なるものである。しかしこれらは上部が削平され溝が浅くなっており，必ずしも本来の形態を残しているとは限らないものである。屋敷遺跡においても東西北と溝がめぐる９号周溝状遺構でも溝底面のレベル差は約25㎝あり，上部が削平された場合，溝がとぎれる形態に見えることもありうる。したがって，今回，方形周溝墓としたものはすべて少なくとも３辺ともとぎれず溝が巡る形態と考えられる。そして12号周溝状遺構を除くものはすべて南辺に陸橋部を有するものである。しかし，これらにも２形態があり，３・５・７号では陸橋部が南辺の中央部にあり，南辺両端の溝は陸橋部側にむかって折れている。これをＡ類とする。それに対し９・11号は南辺のほぼ全面が開き陸橋部となるものであり，これをＢ類とする。12号周溝状遺構は南辺と西辺の大部分が調査区外となるため正確な形態は不明である。しかしＡ類である可能性は高いと思われる。

次に年代別に見ると３・９号周溝状遺構は弥生時代，５・７号周溝状遺構は古墳時代前期，11・12号周溝状遺構は弥生時代末～古墳時代前期のものである。３号周溝状遺構出土の土器は天王山式系のものと北陸の法仏式に類似したものがあり，弥生時代末頃と考えられる。９号周溝状遺構の土器は口縁内外面に削りを加えた類例が会津には無いものであるが，いわき市八幡台遺跡に近いものがある。したがって弥生時代のものは共にその終末に近いものである。古墳時代前期のものでは，５号周溝状遺構は土師器の甕・高杯の形態から塩釜式中頃と考えられる。７号周溝状遺構の土師器には柱状の高杯の脚が含まれており，塩釜式中葉～後葉と考えられる。

時期と周溝墓の形態の関係を見ると，各時期ともＡ・Ｂ両類が見られるので，屋敷遺跡では時期による周溝墓の形態変化は確認することはできなかった。また上面がかなり削平されているため埋葬施設の痕跡も検出できなかった。

屋敷遺跡の方形周溝墓は，弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけてのものである。その一方，会津盆地では４世紀後半とされる会津大塚山古墳，４世紀前半とされる堂ヶ作山古墳など大



第291図　検出方形周溝墓

型の前方後円墳をはじめ何基かの中・小型の前期古墳が確認されている。したがって，屋敷遺跡の方形周溝墓はこれらに先行するものと，並行するものといえる。古墳の初期段階では大型の高塚古墳と中・小型の高塚古墳，そして方形周溝墓が共存することが会津盆地でも確実になったといえよう。今後，方形周溝墓の出現の時期や形態の変化について検討していく必要がある。(木本)

第4節　平安時代の遺物について

(1)　はじめに

屋敷遺跡の調査により，平安時代の遺物を伴った遺構としては，掘立柱建物跡の柱穴，井戸跡の井戸枠内や裏込め埋土，そのほか土坑・特殊遺構・溝跡などがある。この内一括性が高いのは，井戸枠内・土坑・特殊遺構に伴うものであるが，土坑出土遺物は量が少ない。確実に特殊遺構に伴うものは1点のみであり，他は周囲から投げ込まれた状態の覆土から出土しているので，一定の条件の下でなければ使用し得ない。したがって一括性が高い遺物は井戸枠内のものであるが，井戸の使用期間も考えると完全な一括とは限らないので遺物の形式的面も考慮しなければならない。井戸枠裏込め土の遺物は，埋める段階で井戸枠を据えた時期の遺物が入ったと考える。したがってそれは井戸枠内出土遺物よりは前の時期のものである。ただし周辺に古い時期の遺物が散乱していたり，旧表土が直前の時期の包含層になっている場合はそれが混じる可能性もあり，慎重な扱いが要求される。このような前提で見た場合，屋敷遺跡では井戸枠内遺物を一つの基準として他の遺物と比較する方法をとることとしたい。

また，切り合いのある遺構に伴う遺物により編年を行う方法もあるが，屋敷遺跡では切り合いのある遺構は数多く検出されているが，大部分は遺構に伴う遺物が極めて少なく，この方法は全面的には用いられない。しかし，遺物の一括性に不安定さを含むものの切り合いならば33号建物跡と7号特殊遺構のような例もあり，このようなものは条件付きで用いることとしたい。

さらに須恵器では近くに大戸古窯跡群という大生産地があり，明らかに大戸製と思われるものも出土しているので大戸古窯跡群の中の近い時期との比較をする必要がある。具体的には屋敷遺跡の須恵器杯の形態を，まず大戸古窯跡群でもまとまっている資料と比較し，さらにそれらと他の比較的年代の明らかな須恵器群と比較しその位置付けを考えてみたい。

また平安時代の土師器も屋敷遺跡では数種類出土しており，これらも現在まで積み重ねられてきた土師器の編年との比較や遺跡内での須恵器・赤焼土器との共伴関係からその位置付けについて検討を行う。このように繁雑な方法を取るのは，屋敷遺跡における平安時代の土器が比較的量はあるが一括資料が少ないためであることをことわっておきたい。

次に，このような一括遺物の比較を行う場合の土器分類の基準について述べておきたい。ただし屋敷遺跡では土器類の大部分が杯類であり，一括遺物もほとんどが杯類であるため土師器・須恵器の杯類の分類とその組み合わせを中心としてグループ分けを行い，それを編年の基準とするのはいままでの通りである。その土師器杯の分類は制作技法を中心に器形的要素を加えたもので第46表の通りである。須恵器の場合は制作技法が回転ヘラ切りのままが圧倒的であり，大戸古窯跡群の

各時期もその傾向が見られる[注1]ので，特別なものを除いて器形的比較を主としたい。

（2）　一括土器の検討

屋敷遺跡の平安時代の遺構に伴う，ある程度量のある一括土器はあまり多くはない。3・14・19号井戸跡の井戸枠内，7・13・182号土坑が比較的安定した資料と思われるものである。井戸枠の裏込め・覆土のものはまとまった量のあるものもあるが，前に述べたような理由で用いることはできない。特殊遺構については，その遺物の出土状態の性格によって個別に検討しなければならないので後に触れることにする。

第46表　ロクロ土師器杯・椀の分類

1．技法による分類

1種　回転篦削り（体部下半～底面）　2種　回転篦削り（体部下半～底面周縁）
3種　手持篦削り（体部下半～底面）　4種　手持篦削り（体部下半～底面周縁）
5種　再調整なし

a類　回転ヘラ切り　　b類　回転糸切り　　c類　静止糸切り

	1類	2類	3類	4類	5類
a類	1a類	2a類	3a類	4a類	5a類
b類	1b類	2b類	3b類	4b類	5b類
c類	1c類	2c類	3c類	4c類	5c類
不明	1類	2類	*	*	*

2．形態による分類

Ⅰ類　底径の大きめなもの
Ⅱ類　底径の小さなもの
Ⅲ類　大型で深く底径の大きめなもの
Ⅳ類　大型で深く底径の小さなもの

＊＊＊　Ⅰ類・Ⅱ類は杯、Ⅲ類・Ⅳ類は椀　＊＊＊
＊＊＊　Ⅰ1a類、Ⅲ2b類のような用い方とする　＊＊＊

まずこれらの一括遺物のありかたを検討してみたい。各遺構・層の出土遺物の構成は第47表の通りである。そこから遺構での遺物のありかたを見ると，次のように分けることができる。3号井戸跡は土師器杯Ⅱ5b類を中心にし，それに赤焼土器杯Ⅱ5b類が伴うもので，これを2群土器としたい。また同類の赤焼土器杯は13号井戸跡の井戸枠内からも出土している。それに体部下半・底面は丁寧な回転ヘラケズリ，体部上半と内面はミガキを加えた大型の内黒土師器椀が伴っている。この井戸の覆土からも同じ技法の大型台付椀が出土しており，2群土器に伴うと考えられる。

14・19号井戸跡出土土器は須恵器杯Ⅱ5a類のみからなっている。7・13号土坑出土土器は土師器杯Ⅱ1類が多く，それに土師器杯Ⅱ2b類・4b類が伴う。2b類と4b類という異なった種類が伴うが，他の遺跡で土師器杯のⅡ1類が主体で，それに2b・3・4b類などが伴う例が確認されている[注2]ので，7・13号土坑の土器は同じグループと考えておく。

ここで問題となるのは14・19号井戸跡の土器が須恵器のみからなり，7・13号土坑の土器が土師器のみからなるという点であり，この両者の関係も検討しなければならない。そこで12号特殊遺構について見てみたい。この遺構は大型の不整形で壁が斜めに立ち上がるやや浅い土坑であり，覆土はレンズ状に近い堆積であるが灰層・焼土層・炭混じり層が大きなブロックを形成しており，建物の火災の後片付けの土坑と考えられる。したがって，そこより出土する遺物も，火災建物に関係したものを後片付け時に投棄したと解釈され，一括に準ずるものとして扱うことが出来よう。ℓ1出土の土師器杯はⅡ1類が2点・Ⅱ3類1点・Ⅱ4b類1点と量は少ないが，7・13

号土坑と近い組み合わせとなる。ℓ3では土師器杯は20点とまとまっており，組み合わせはⅡ1類13点・Ⅱ1ｂ類3点・Ⅱ3ｂ類1点・Ⅱ4ｂ類3点でⅡ1類の系統が大部分で，それにⅡ類の他の種類が伴うという形である。椀もⅣ1類1点・1ｂ類2点と杯のありかたと矛盾せず，これがこの時期のセットの本来的ありかたと考えられる。ここでは須恵器杯はⅡ5ａ類が8点伴っており，この関係からすると14・19号井戸跡出土土器と7・13号土坑出土土器は同じ時期の一部であると考えられる。したがって14・19号井戸跡，7・13号土坑，12号特殊遺構の土器群を1群土器とする。

（3）　土器の編年

次にこの2群と1群の前後関係を検討する。しかし，土器群を設定した遺構の間には，切り合いや遺構掘り込み面の層位的前後関係は確認出来ない。また14号井戸跡は19号建物跡に切られているが，19号建物跡出土遺物は須恵器杯の小片1点のみである。これは口縁が直線的な浅い器形になると推定されるが，詳しくは不明な点が多く，他のどの遺構の土器に対応するかもはっきりしない。このような状態なので，これらの遺構からは直接両群の前後関係は導き出すことはできない。そこで，少量でも両方の遺構から各土器群が出土して切り合いのあるものを検討してみたい。この条件に合うものとしては33号建物跡と7号特殊遺構がある。

7号特殊遺構が33号建物跡を切っており，7号特殊遺構は覆土から33号建物跡はＰ6の掘形埋土から土器が出土している。したがって7号特殊遺構の土器は33号建物跡よりは新しい事になる。ここで問題になるのは7号特殊遺構の土器の一括性であるが，この遺構の形態・覆土のありかたは12号特殊遺構と同じでありほぼ一括に準ずるものとして扱うことが出来るものである。

7号特殊遺構の土器は土師器杯はⅡ5ｂ類2点・高台付き杯2点（1点は回転糸切り痕を残す）・赤焼土器杯2点があり，土師器杯と赤焼土器杯から2群土器とすることができる。33号建物跡の土器は同じ柱穴掘形埋土から出土しており，土師器杯Ⅱ1類と須恵器杯Ⅱ5ａ類が1点ずつであり1群土器と考えられる。したがって1群土器→2群土器の変化が想定出来る。

ここで土器から見た遺構について見ると，土師器・須恵器の各点数が少ないものや出土状態から一括と考えられないものを除いて第46表のごとく，ほとんどが1群か2群に属している。ただし，遺物が出土しなかったり，断片的で比較対象にならないような遺構もかなりあるので屋敷遺跡に1・2群土器の時期以外の遺構が無かったことにはならない。

これらの土器群がどのようなものか再度まとめてみると次のようになる。

2群土器の土師器杯はロクロ調整・内黒で，底径が小さく底面が回転糸切り無調整（Ⅱ5ｂ類）である。赤焼土器杯は口径が12～13㎝の大きいほうのもので，底面に回転糸切り痕を残す再調整の無いものである。それに少量の内外両面を丁寧に磨いた内黒の大型の椀・台付椀が伴う。

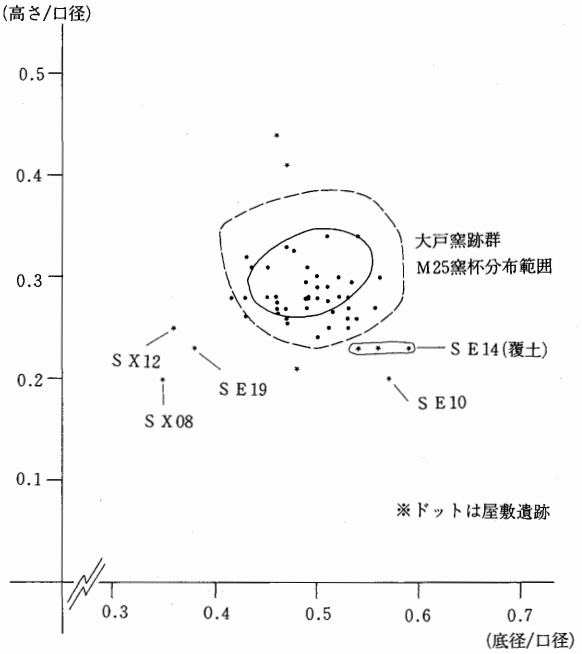
1群土器の土師器杯はロクロ調整・内黒で，底径が小さく体部下半から底面に回転ヘラケズリを加えたもの(Ⅱ1類)が主体をなす。それに少量の底部再調整が手持ちヘラケズリのもの(Ⅱ3類)や回転糸切りで体部下半に手持ちヘラケズリを加えたもの(Ⅱ4b類)が伴う。土師器甕はロクロ調整とロクロを用いないものがあり，若干ロクロ調整で内黒のもの(5号特殊遺構)もある。須恵器杯は底径が小さく底面が回転ヘラキリで無調整のものである。長頸壺の頸部にはリング状の隆帯がめぐるものである。

また1・2群土器とは異なった様相を示すものに13号井戸跡の井戸枠裏込め出土須恵器杯・14号井戸跡覆土出土の須恵器杯がある。これらは他の時期の混入の可能性のある出土状態ではあるが，土器を個別にみれば差異が確認される。13号井戸跡の須恵器杯はやや深めで底径の小さな，底面回転糸切り無調整のものである。土師器杯はⅡ3類・Ⅱ5b類が出土している。この須恵器杯は胎土分析の結果では大戸窯・その他の会津盆地の須恵器窯群とは異なるものであるという結果が出ている。14号井戸跡の須恵器杯は3点ありすべて回転ヘラキリ無調整であるが，底径が大きく浅い器形のものである。これらの位置付けは他の遺跡の資料との対比が必要となる。

(4)　土器群の年代

屋敷遺跡の平安時代の遺物では直接年代を示すものは出土していないので，他の遺跡の例や現在までの研究成果との比較を行い検討してみたい。

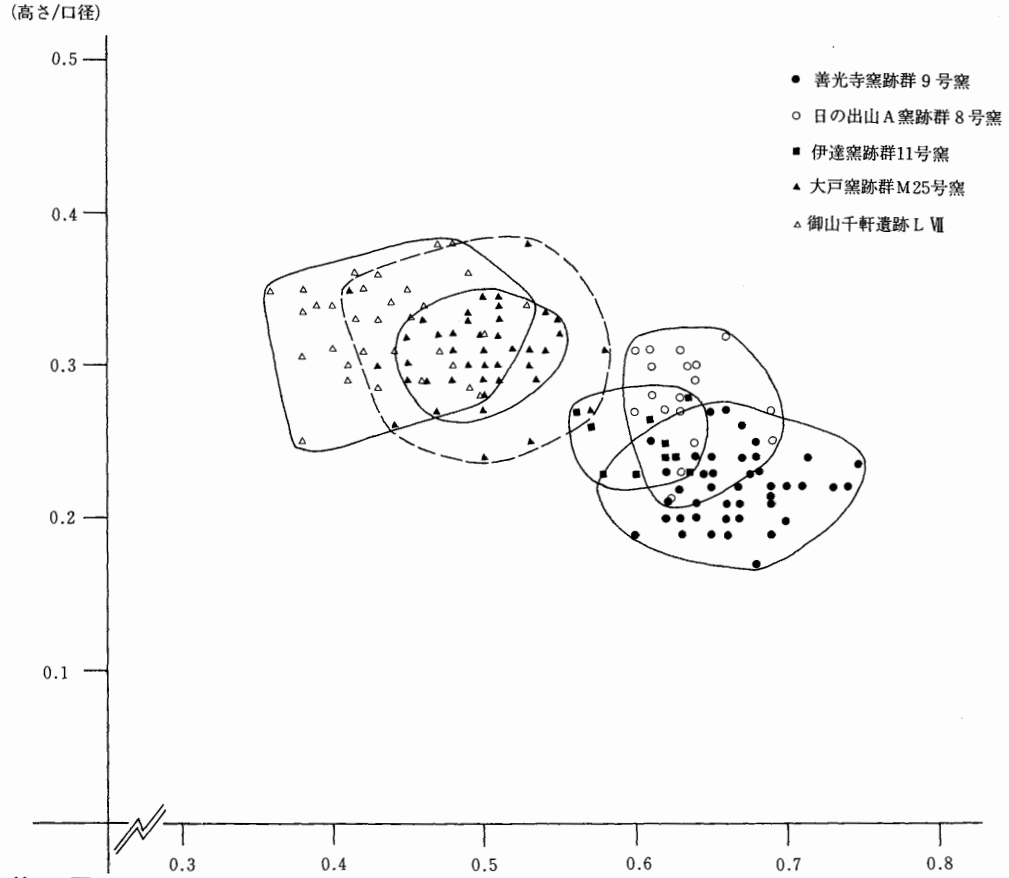
まず古い段階の1群土器であるが，これは土師器の面と須恵器の面から検討を行わなければならない。ここで主体となる杯のⅡ1類は技法的に見ればロクロ調整で体部下半から底部に回転ヘラケズリが加えられたグループに属する。これはロクロを用いない土師器との対比・共伴関係，須恵器との共伴などから8世紀末～9世紀前半に位置付けられている。その中でも底径の小さいもの(Ⅱ1類)は底径の大きなものと分離されるものであり，このグループでも後半に置かれている。これに続く杯のⅡ3・Ⅱ4b・Ⅱ5b類を主とする土器群は須恵器との関連で870年頃には成立している[注3]ので，1群土器の土師器は9世紀前半でも新しい時期か9世紀中頃に位置付けることができる。



第292図　屋敷遺跡・大戸M25須恵器杯分布

1群土器の須恵器杯はⅡ5a類であり，これは大戸古窯跡群のM25窯の杯と類似したものである。その器形を比較するため底径／口径・高さ／口径を取りグラフにプロットすると，両者はほとんど重複する(第293図)。また胎土分析でも大戸古窯跡群と同じ傾向を示している。したがって，この須恵器杯は大戸古窯跡群で生産されており，年代はM25窯の時期と考えられる。この大戸古窯跡群M25窯の須恵器は9世紀中葉～後葉のものであろうといわれている[注4]。しかしこれではかなりの年代幅があるので，本当にこのような年代幅を持つのか，この内のどの時期にあたるのかについて検討しなければならない。

ただし，大戸古窯跡群での所見によればこの地域の須恵器は8世紀後半から9世紀にかけてはほとんどが回転ヘラキリ無調整のため，切り離し・再調整技法の変化による対比は出来ない。そこで杯の器形の対比を行ってみたい。ただし，対比資料の集中する福島県でも奥羽山脈より東，宮城県の地域は8世紀末～9世紀には回転糸切りがだんだん主流になるので，制作技法の異なるものと細かな器形のみの対比だけでいいのかという問題もある。そこで須恵器杯の器形対比と同時にそれに伴う土師器にも注目したい。



第293図　遺跡別須恵器杯形態比較

底径／口径・高さ／口径に注目すると８世紀初頭～後半の善光寺９号窯・日の出山窯跡群Ａ地点・伊達窯跡群11号は底径が大きく背が低い傾向を示す[注5]。それに対し大戸古窯跡群Ｍ25(屋敷遺跡Ⅱ５ａ類)・御山千軒遺跡は底径が小さく背が高いもので伊達窯跡群の一部を除いてほとんど器形上の重複は見られない。しかし大戸古窯跡群Ｍ25のほうが御山千軒遺跡よりやや８世紀のグループに近い傾向を示す。土師器との共伴関係を見ると御山千軒遺跡の土師器杯はⅡ３類・Ⅱ４ｂ類・Ⅱ５ｂ類であり９世紀後葉に位置付けられている。それに対し屋敷遺跡で須恵器杯Ⅱ５ａ類に伴うのは土師器杯Ⅱ１類が主である。ロクロ土師器杯で底部に回転ヘラケズリのあるものは９世紀前半のもので，Ⅰ１類・Ⅰ２ｂ類を中心としたものが古くⅡ１類は新しい段階とされている。須恵器杯の器形のみでなく土師器との共伴からも御山千軒遺跡より屋敷遺跡の須恵器杯Ⅱ５ａ類をやや古くするのは妥当であろう。年代としては９世紀後葉よりは古く９世紀初めよりは新しい時期，９世紀中葉のものと考えられる。したがって大戸古窯跡群Ｍ25の須恵器もこのような年代が与えられるべきであろう。

２群土器は土師器杯Ⅱ５ｂ類・赤焼土器杯Ⅱ５ｂ類に両面ミガキ・内黒の椀・台付椀が伴うものである。土師器杯Ⅱ５ｂ類・赤焼土器杯Ⅱ５ｂ類の組み合わせは多賀城跡において10世紀前葉に位置付けられている。この年代は屋敷遺跡においても１群土器との関係に矛盾はない。また両面ミガキの椀も赤焼土器に伴う例が見られるので，10世紀前葉のこの土器群に伴うものと考えられる。このような年代を用いる場合，１群と２群の間に御山千軒遺跡のような土師器のありかたを示すグループを設定しなければならない。ただ，屋敷遺跡では良好な一括遺物が少ないためこのような土器群は把握されなかったのではなかろうか。　　(木本)

第47表　遺構別出土遺物一覧（平安時代）

遺構名	出土位置	遺物名および点数
ＳＢ 10	Ｐ8掘形埋土	土師器杯Ⅱ４ｂ類　１点
ＳＢ 11	Ｐ6掘形埋土	須恵器椀Ⅲ類　１点
ＳＢ 13	掘形埋土	土師器杯Ⅱ４ｂ類　１点　土師器甕（ハケメ）１点　須恵器杯Ⅱ５ａ類　１点　須恵器高台付き杯　１点
ＳＢ 14	Ｐ16掘形埋土	土師器甕（ロクロ）１点
ＳＢ 15	Ｐ7掘形埋土	土師器杯Ⅱ１類　１点
ＳＢ 19	Ｐ3掘形埋土	須恵器杯Ⅱ類　１点
ＳＢ 20	掘形埋土	土師器杯Ⅱ１ｂ類　１点　土師器杯Ⅱ４ｂ類　１点
ＳＢ 21	掘形埋土	土師器杯Ⅱ１類　２点　須恵器杯Ⅱ５ａ類　１点　手づくね土器　１点
ＳＢ 25	掘形埋土	土師器杯Ⅱ１類　２点　土師器杯Ⅱ５ｂ類　２点　土師器甕（ハケメ）１点　須恵器杯Ⅱ５ａ類　２点 須恵器甕　１点
	柱痕内	土師器椀Ⅳ１類　１点
ＳＢ 26	掘形埋土	土師器杯Ⅱ２ｂ類　１点　土師器高台付き杯　１点　土師器甕（ロクロ）１点　土師器杯Ⅱ５ｂ類　２点 須恵器高台付き杯　１点
ＳＢ 28	掘形埋土	土師器杯Ⅱ１類　１点　土師器杯Ⅱ２ｂ類　１点　須恵器杯Ⅰ５ａ類　１点　須恵器長頸壺？　１点
ＳＢ 29	掘形埋土	須恵器杯Ⅱ５ａ類　１点
ＳＢ 30	掘形埋土	土師器杯Ⅱ１類　１点　須恵器杯Ⅰ（？）５ａ類　１点　須恵器長頸壺？　１点
ＳＢ 33	掘形埋土	土師器杯Ⅱ１類　１点　須恵器杯Ⅰ５ａ類　１点
ＳＥ 03	井戸枠内	土師器杯Ⅱ５ｂ類　４点　須恵器長頸壺？　１点　赤焼土器杯Ⅱ５ｂ類　１点
	井戸枠裏込め	土師器杯Ⅱ１類　１点　土師器杯Ⅱ５ｂ類　１点　土師器杯不明　２点　土師器小型甕（ロクロ）１点 土師器筒形土器　１点　須恵器長頸壺？　１点
ＳＥ 06	覆土	土師器杯Ⅱ１類　１点　須恵器杯Ⅰ５ａ類　１点　須恵器杯Ⅱ５ａ類　１点　須恵器壺？　１点
ＳＥ 07	覆土	土師器杯Ⅱ１類　１点　須恵器杯Ⅰ５ａ類　１点
ＳＥ 09	覆土	土師器杯Ⅱ１類　３点　土師器杯Ⅱ２ｂ類　１点　土師器杯Ⅱ３類　須恵器杯Ⅱ５ａ類　２点
ＳＥ 10	覆土	土師器杯Ⅱ１類　２点　土師器杯Ⅱ１ｂ類　１点　土師器椀Ⅳ５ｂ類　１点　須恵器杯Ⅰ５ａ類　１点 須恵器杯Ⅰ５ａ類　７点　須恵器台付椀？　１点
ＳＥ 12	覆土	土師器高台付き杯　２点　須恵器高台付き杯　１点　須恵器壺？　１点
ＳＥ 13	井戸枠内	土師器椀Ⅳ１類（両面ミガキＡ）１点　赤焼土器Ⅱ５ｂ類　１点
	井戸枠裏込め	土師器杯Ⅱ３類　１点　土師器杯Ⅱ５ｂ類　１点　須恵器杯Ⅱ５ｂ類　１点
	覆土	土師器台付椀（両面ミガキＡ）１点

ＳＥ 14	井戸枠内(2次)	須恵器杯Ⅱ５ａ類　３点　(「大私」の墨書)
	一次の埋立	須恵器杯Ⅱ５ａ類　１点
	井戸枠裏込め	土師器杯Ⅱ１類　１点　須恵器杯Ⅱ５ａ類　２点
	覆　　土	土師器杯Ⅱ２ｂ類　２点　須恵器杯Ⅰ５ａ類　３点　須恵器杯不明　１点
ＳＥ 15	井戸枠内	土師器高台付き杯　２点
	井戸枠裏込め	土師器杯Ⅱ１類　１点　土師器杯Ⅱ１ｂ類　１点　土師器杯Ⅱ３類　１点　土師器杯Ⅱ５ｂ類　１点
		須恵器杯Ⅱ５ａ類　１点　須恵器甕　１点
	覆　　土	土師器杯Ⅱ１類　１点　土師器椀Ⅳ１類　１点　土師器高台付き杯　２点
ＳＥ 17	井戸枠内	土師器椀Ⅳ２ｂ類　１点　須恵器壺？　１点
	覆　　土	土師器杯Ⅱ２ｂ類　１点　須恵器杯Ⅱ５ａ類　１点　須恵器小型壺　１点　須恵器壺？　１点
ＳＥ 19	井戸枠内	須恵器杯Ⅱ５ａ類　４点　(「比」の墨書底径が極めて小さく浅いもの１点を含む)
ＳＫ 07		土師器杯Ⅱ１類　３点　土師器杯Ⅱ４ｂ類　１点　土師器椀Ⅳ１類　１点　土師器甕　２点(ロクロ１・ハケメ１)
		須恵器長頸壺　１点
ＳＫ 11		土師器杯Ⅱ１類　２点
ＳＫ 12	ℓ－１	土師器杯Ⅱ１類　１点
ＳＫ 13		土師器杯Ⅱ１類　５点　土師器杯Ⅱ２ｂ類　１点　須恵器壺？　１点
ＳＫ 22		土師器杯Ⅱ３類　１点　土師器小型甕(ハケメ)　１点
ＳＫ103		土師器高台付き杯　１点
ＳＫ108		土師器杯Ⅱ１類　１点　土師器椀Ⅳ１類　１点　土師器椀Ⅳ類　１点
ＳＫ125		須恵器長頸壺(頸部にリング状隆帯)　１点
ＳＫ129		土師器高台付き杯　１点　須恵器甕　１点
ＳＫ134		風字硯　１点
ＳＫ171		土師器杯Ⅱ１類　１点　土師器杯Ⅱ４ｂ類　１点　土師器甕　２点
ＳＫ172		土師器杯Ⅱ１類　２点　須恵器小型壺　１点
ＳＫ176		土師器杯Ⅱ２ｂ類　１点
ＳＫ182		土師器杯Ⅱ１類　１点　土師器杯Ⅱ１ｂ類　１点　土師器杯Ⅱ４ｂ類　１点　土師器甕(ロクロ)　１点
ＳＫ185		土師器甕(ロクロ)　１点　須恵器杯Ⅱ５ａ類　２点
ＳＫ167		土師器小型甕(ロクロ)　１点
ＳＫ221		土師器椀Ⅳ１類　１点
ＳＫ228		須恵器小型甕　１点
ＳＫ232		須恵器椀Ⅳ５ａ　１点
ＳＫ235		土師器杯Ⅱ１類　１点　土師器杯Ⅱ４ｂ類　１点　土師器Ⅳ１類　１点
ＳＫ237		土師器甕(ロクロ)　１点
ＳＫ252		須恵器杯Ⅱ５ａ類　１点
ＳＫ254		須恵器杯Ⅱ５ａ類　１点
ＳＫ255		土師器杯Ⅱ３類　１点　土師器甕(ハケメ)　１点
ＳＫ260		土師器杯Ⅱ１類　１点　土師器杯Ⅱ２ｂ類　１点　土師器甕(ロクロ)　１点
ＳＫ263		土師器甕(ロクロ)　３点
ＳＫ275		土師器椀Ⅳ１類　１点
ＳＫ291		土師器椀不明　１点
ＳＫ311		土師器杯Ⅱ１類　１点　土師器杯Ⅱ１ｂ類　１点
ＳＫ322		土師器杯Ⅱ１類　２点
ＳＫ336		土師器杯Ⅱ１類　１点
ＳＤ 02		須恵器甕　１点
ＳＤ 04		須恵器高杯　１点
ＳＤ 07		土師器同筒型土器　１点
ＳＤ 09		土師器杯Ⅱ１類　１点　土師器杯Ⅱ４ｂ類　１点
ＳＤ 38		土師器杯Ⅱ１類　１点
ＳＤ 39		土師器高台付き杯　１点
ＳＤ 41		土師器杯Ⅱ５ｂ類　２点　土師器杯Ⅱ類(不明)　１点　土師器高台付き杯　１点
ＳＤ 43		須恵器甕　２点
ＳＤ 46		土師器高台付き杯　１点　須恵器甕　１点
ＳＤ 51		須恵器杯Ⅱ５ａ類　１点
ＳＤ 53		土師器椀Ⅳ１類　１点
ＳＤ 56		土師器杯Ⅱ５ｂ類　１点
ＳＤ 58		土師器杯(両面ミガキＢ)Ⅱ１類　１点
ＳＤ 70		土師器杯Ⅱ１類　１点　須恵器杯Ⅱ５ａ類　１点　須恵器甕(？)　２点　赤焼土器高台付き杯　１点
ＳＤ 82		土師器杯Ⅱ４ｂ類　１点
ＳＤ 86		須恵器杯Ⅱ５ａ類　１点
ＳＤ109		須恵器杯Ⅱ５ａ類　１点　須恵器杯Ⅱ５ａ類(浅い)　１点
ＳＤ118		土師器杯Ⅱ類(「尖」の墨書あり)　１点
ＳＤ121	床　　面	土師器杯Ⅱ１類　１点
	覆　　土	須恵器長頸壺(頸部にリング状の突帯あり)　１点
ＳＤ145		須恵器杯Ⅱ５ａ類　１点
ＳＤ161		土師器杯Ⅱ１類　１点
ＳＸ 02	覆　　土	土師器甕(ロクロ)　１点　須恵器杯Ⅱ類　１点
ＳＸ 04	覆　　土	土師器杯Ⅱ１類　１点
ＳＸ 05	覆　　土	土師器杯Ⅱ１類　２点　土師器杯Ⅱ２ｂ類　１点　土師器甕(ロクロ)　３点　土師器甕(ロクロ内黒)　１点
		須恵器杯Ⅱ５ａ類　３点
ＳＸ 07	覆　　土	土師器杯Ⅱ５ｂ類　２点(大型１　小型１)　土師器高台付き杯　２点　赤焼土器杯Ⅱ５ｂ類　３点
ＳＸ 08	覆　　土	須恵器杯Ⅱ５ａ類　３点
ＳＸ 11	覆　　土	土師器甕(ロクロ)　２点　須恵器杯Ⅱ５ａ類　１点　須恵器長頸壺(頸部にリング状の突帯あり)　１点
ＳＸ 12	覆土(ℓ１)	土師器杯Ⅱ１類　２点　土師器杯Ⅱ３類　１点　土師器杯Ⅱ４ｂ類　１点　土師器台付椀　１点
		土師器甕(ロクロ)　２点
		須恵器杯Ⅱ５ａ類　３点　須恵器椀Ⅳ５ｂ類　１点　須恵器長頸壺(リング)　３点　須恵器華瓶(？)　１点
		須恵器小型甕　１点　須恵器甕　２点　風字硯　１点
	(ℓ３)	土師器杯Ⅱ１類　13点　土師器杯Ⅱ１ｂ類　３点　土師器杯Ⅱ３ｂ　１点　土師器杯Ⅱ４ｂ類　３点
		土師器椀Ⅳ１類　１点
		土師器椀Ⅳ１ｂ類　２点　須恵器杯Ⅱ５ａ類　８点(底小さいもの１点)　須恵器壺　１点　須恵器甕　１点
	(ℓ４)	土師器杯Ⅱ２ｂ類　１点　須恵器小型甕　１点
ＳＸ 13	覆　　土	土師器杯Ⅱ４ｂ類　１点　土師器甕(ロクロ内黒)　１点　須恵器杯Ⅱ５ａ類　１点
ＳＸ 14		須恵器短頸壺(？)　１点

第5節　平安時代の遺構

（1）　掘立柱建物跡

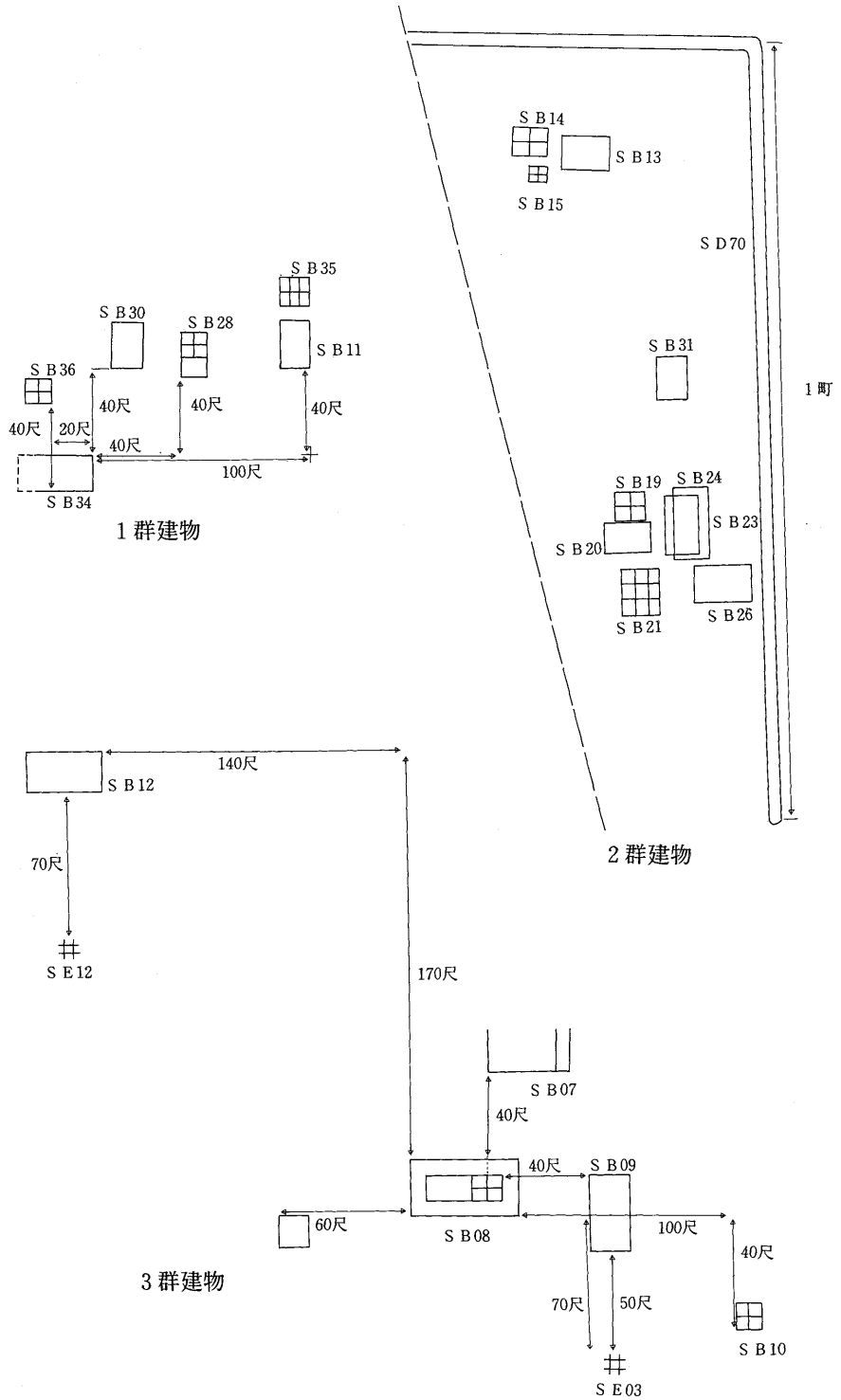
掘立柱建物跡はその方位が南北軸がN－6°－Eを中心としたもの，真北を指すもの，N－4.5°－Wを中心としたものに分けられる。これらを1群・2群・3群と呼ぶことにする。

1群の建物は遺跡中央の西側に集中しているが，この群の建物どうしの切り合いはなく，単一時期と思われるもので，11・28・30・34・35・36号建物跡がそれである。これらは第294図のごとくどの辺かの間隔が10尺単位となっており，規格的配置をとっていたと考えられる。最大の建物は34号建物跡で南北2間・東西5間と推定される。11・28・30号建物跡は南北棟が東西に並ぶ配置で，共に2×3間であり28号建物跡は北半分は床があるものである。35・36号建物跡は総柱建物でそれぞれ11・34号建物跡の北に位置している。他の群との切り合いは28号建物跡が29号建物跡と重複しているが前後関係は不明である。11号建物跡は70号溝跡に切られており，1群はこの溝よりは古いものである。

2群も1群とほぼ同じ場所に集中している19・20・21・23・24・25・26号建物跡がそれである。これらのうち20号建物跡の南側柱列と25号建物跡の南から1間めの柱筋が通っており同時存在が考えられる。21・24・26号建物跡も同時存在が考えられ，前後関係は20号建物跡←24号建物跡である。その他にも建物があるので少なくとも3小期には分けられる。これらはその東を南北に走る70号溝跡と同じ方位を有するのでこの溝との関連で作られた建物群と考えられる。70号溝跡は北で92～93°の角度で西に折れる。その内側にあり南北軸がやや東に振れる14・15・16号建物跡の建物群も2群に属すると考えられよう。しかしどの小期に属するかは不明である。

3群は遺跡中央部東側の7・8・9・10号建物跡と3号特殊遺構と北側の12号建物跡である。これは第294図に示した通りかなり規則的に配置された建物群である。東側の建物群では今回の調査区最大の8号建物跡が中心になっており，その構造は南北2間・東西5間の身舎の東2間分に床を持ち，身舎の周りには四面に廂を有する特別なものである。その周辺の同時期と考えられる建物にも7・9号建物跡のような大型のものが見られる。したがって建物の規模から見るかぎり，この地区は遺跡の中でも特別な部分である可能性が大きい。そして9号建物跡の棟方向の南50尺には3号井戸跡があり，その配置からして3群に伴うものであろう。しかし，この地区を他から区画するような塀や溝の痕跡は認められない。

井戸をこの様に見ると問題になるのは12・14号井戸跡である。14号井戸跡は西と北に1群の建物がある広場的場所に位置しており，次の時期の19号建物跡に切られており1群に伴うと考えて矛盾はない。また，12号井戸跡は距離的には14号建物跡に近いが，配置から見ると3群の12号建



第294図　時期別建物配置

物跡の正面70尺にあり12号建物跡に伴うと考えられる。

次に建物群の年代を検討したい。まず1群と2群であるが前にも述べた通り，11号井戸跡と70号溝跡の切り合いから1群→2群の順序であり，3群との関係は不明である。土器との関係では1群建物の時期の14号井戸跡には1群土器が伴うので，その年代9世紀中葉が与えられる。3群建物の時期の3・13号井戸跡には2群土器が伴うので10世紀前葉の時期と考えられる。2群建物は1群建物より新しいので1・3群建物の間か，3群建物の後の時期が考えられる。しかし3群建物期の遺構からは2群土器に特有な赤焼土器・両面ミガキの椀がまったく出土しないので，2群土器の成立以前，つまり1・3群建物の間の時期9世紀後葉の年代が妥当であろう。以上のことから屋敷遺跡の掘立柱建物跡群は平安時代前半の9世紀中葉～10世紀前葉のものと考えられる。

この建物群の性格であるが，ほかに同時期としては県内に類例のないものである。この時期の一般集落の場合，必ず竪穴住居のブロックを伴うが，ここではそれが見られない。しかし建物配置は規格的である。また郡家跡のように同じ位置に同規模・同構造の建物を作るというパターンはない。8号建物跡のような大規模な建物でも1基のみで存在し官衙的配置は取っていない。したがって，官衙や一般集落と異なるものとして郡司か富豪層の屋敷跡を想定しておきたい。　（木本）

（2）　井戸跡

井戸跡は全部で19基検出されている。時期は出土遺物から弥生時代中期～後期・平安時代のものと考えられる。形態は素掘りのもの（1類）と井戸枠を有するもの（2類）とがある。井戸枠は板材を井桁に組んだもの（a）類，曲げ物を用いたもの（b類），丸木を筒状にくりぬいたもの（c類）がある。そして，これら全て1.5～1.8mと比較的浅いものである。この遺跡は昭和30年頃の圃場整備で上面が削られているが，残った掘立柱建物跡の柱穴の深さからして井戸の深さを大幅に変えるようなものでなかったと思われる。したがって，この遺跡の井戸はもともと浅かったものであろう。

時期別に見ると4号井戸跡と11号井戸跡が弥生時代のものであり，4号井戸跡が弥生時代後期，11号井戸跡が弥生時代中期の川原町口式の時期である。

平安時代のものでは，14・17号井戸跡が9世紀中葉，19号井戸跡が9世紀後葉，3・13号井戸跡が10世紀前葉である。6・7・9・10・12・15号井戸跡では上部の埋まり土からのみ遺物が出土しており正確な時期は決定出来ないが，出土する遺物は9世紀前葉～後葉に限られるので9世紀代と考えることができるものである。したがって，これらの井戸跡は平安時代でも前半期とすることが出来る。

次に時期と井戸の形態について検討してみたい。

弥生時代の4・11号井戸跡ともに井戸枠やその痕跡は確認されていないので素掘り（1類）でで

あったと推定される。これらは２例と数は少ないが，上面径が約1.5m，底径が約50cmと平安時代の井戸に比べて小型である。

平安時代の井戸跡では14号井戸跡が曲げ物の井戸枠（２ｂ類），17号井戸跡はくりぬきの井戸枠（２ｃ類），３・13・15・19号井戸跡が板材を井桁に組んだもの（２ａ類）である。時期的に見ると14・17号井戸跡は９世紀中葉，19号井戸跡が９世紀後葉，３・13号井戸跡が10世紀前葉となっており，２ｂ・２ｃ類は２ａ類に先行するものであろう。その他に覆土から平安時代の土器を出土し井戸枠が検出されないものもあり，素掘りのものも並行して存在する可能性もある。

他の遺構との関連をみると，弥生時代の場合は井戸の南東に竪穴住居跡がみられるが時期が異なり，この集落に伴う井戸ではないと考えられる。平安時代のものでは３号井戸跡がその位置からして８号掘立柱建物跡を中心とした建物群に伴うと考えられる。他には12・14号と１群建物のように遺跡内には井戸跡と同じ時期の掘立柱建物跡群がみられるのでこれに伴うのは間違いないであろう。ただし，屋敷遺跡では同時期の集落遺跡に比べ井戸跡が極端に多くなっている。遺跡内に平安時代の竪穴住居跡がまったく見られない点，大型の建物群が多い点などとあわせこの遺跡の特殊な性格を表しているのかも知れない。（木本）

（３）　溝跡

屋敷遺跡では，今回の発掘調査で総数171条の溝を検出した。これほど多数の溝跡が検出された調査例は県内では他に例を見ず，遺跡における溝跡の重要性を物語っているように思われる。これら検出された溝跡の規模は多種多様であり，長い溝では全長100m以上にもなる。分布の状況も遺跡内で一様ではなく，幾つもの時代の溝が複雑に切り合っている所も見られる。本節では，発掘調査で得られた結果を基に，これらの溝の時期および性格について考察を述べてみたい。

弥生・古墳時代　弥生時代の溝と考えられるのは10・12・13・20・30・79・112・147・153号溝跡である。溝の規模は小さくその形態から弥生時代の集落にともなうような区画および防御を目的とした溝とは考えられない。10・12・13・20・30・79・112号溝跡については水路的な溝，147・153号溝跡については周溝状遺構との類似性があることから，他の周溝状遺構の一部と推測される。古墳時代の溝と考えられるのは35・73・168号溝跡である。168号溝跡は，その形態から遺跡内で数多く検出されている周溝状遺構と似通っており，その可能性も考えられる。

平安時代　遺跡における溝跡出土遺物の半数以上が表杉ノ入期に所属することから，平安時代の溝が数多くあると考えられる。その形態から区画を目的とする溝に特徴を見出だす事ができる。一棟の建物跡を区画している溝として78・109号溝跡が考えられる。78号溝跡は17号建物跡を，109号溝跡は31号建物跡を，それぞれ南側を除く三方向から取り囲んでいる。雨落ち溝と同時に，区画の意味も含まれているものと考えられる。同じ形態をもつ溝がある遺跡として新潟県の今池

遺跡や小丸山遺跡などがあり，9世紀後半頃と考えられる。また，数棟の建物跡を区画している溝として46・71・83・167号溝跡が考えられる。これらは恐らく9世紀代の溝で大きな時期差はなく，連続的に建物跡の変遷に関わって形成されていったものと思われる。46号溝跡と71号溝跡は同時期の1つの溝と考えられ，2つの溝の間が土橋の可能性も考えられる。さらに，大集落を区画している溝として70号溝跡が考えられる。70号溝跡は真北方向に南から北に向かって約110m走り，西方向に直角に曲り調査区外に伸びていく。出土遺物からは判断できないが9世紀後半に存在したと思われる2群建物に伴う大区画溝であったと推測できる。同じような大区画溝は先の今池遺跡でも9世紀後半の一辺約100mの大区画溝が発見されている。今池遺跡は，国府内の正庁内域から外れた官人住居域を示唆されている。屋敷遺跡でも，一般集落では考えられないような建物跡(8・34号建物跡など)が発見されており，70号溝跡の存在から考えても一般集落とは違った集落であったとも推測される。

本節では，屋敷遺跡における溝跡について，一部を断片的にしか述べることができなかった。発掘調査で得られた結果と屋敷遺跡の立地条件から考えて，稲作などのための水路と建物・集落の区画に，溝跡の性格を大別できると考え，本節のまとめとしたい。　(伊藤)

第6節　遺跡の立地について

ここでは，屋敷遺跡が立地している場所の自然条件と，当時の人間生活との関連について述べていくことにする。

屋敷遺跡からは19の井戸跡が検出された。これらの井戸跡内堆積土は大部分が自然に埋積されたものである。このうち堆積土の下部は，泥・シルトあるいはそれらの互層状の細粒な堆積物からなっている。これは明らかに水中に堆積したものである。すなわち，井戸放棄後，埋積が進行している間もほぼ一定の地下水位が保たれていたことを意味すると考えられるのである。堆積土の上部は，周辺の遺構内堆積土と同様なパミスを含んだ暗褐色砂質シルト土である。これは井戸周囲の土砂が淘汰されないままに一時的に流入・堆積したものと考えられる。下部と上部との間は，それらの中間的な層相を示している。ここでは下部の泥質堆積物の上限を，埋積時の地下水面高とほぼ一致するものと考える。

検出した井戸跡の上端・下端・泥質堆積物の上限について示したのが第295図である。これから埋積時の地下水位を推定すると，標高195.3m前後であり，検出面から約0.6m下になる。現在の地下水位はボーリング資料によると，地表下約0.5mである。また発掘調査期間中においての地下水位は井戸跡の下端よりは下がらず，常時ある程度は採水できる条件であったことを確認している。これらのことを総合すると，井戸が機能していた当時の地下水位は当時の地表面から

0.4～1.0m程度であったと推定される。

この地下水位が浅い原因については，第1章で記述した地形・地質条件に制約をうけているためと考える。ここでは表土，その下に井戸が掘り込まれている沼沢浮石質砂層がある。沼沢浮石質砂層下には埋没土壌と考えられる細粒な堆積物があり，さらには砂礫層となっている。この沼沢浮石質砂層は直径1～最大10cmにもおよぶ多孔質のやや円磨された軽石およびそれらの間を埋める砂礫からなり，未固結の状態である。しかし井戸跡内堆積土中に壁が崩落したと考えられる堆積物は僅かであり，比較的安定した状態であったと判断できる。表層地下水にとってはこの沼沢浮石質砂層が帯水層ならびに透水層として，その下の埋没土壌が不透水層として機能し，地下水位をほぼ一定の水準に高めているものと考えられる。また立地している場所は，平面的に低位沖積段丘の東限と西限の中間であり，このことも地下水位を安定に保っていることの条件の一つといえよう。井戸が機能していた当時の水質については，不明である。今後，堆積物中の微化石などの検討により明らかにされる部分もあろう。現在湧出している水は渋みがあり，飲料水として良好なものとは言えない。しかし井戸枠をもつ井戸の直接の裏込めが，軽石等をもちいず，暗褐色シルト質土を用いていることにはなんらかの意図が込められているのではないだろうか。

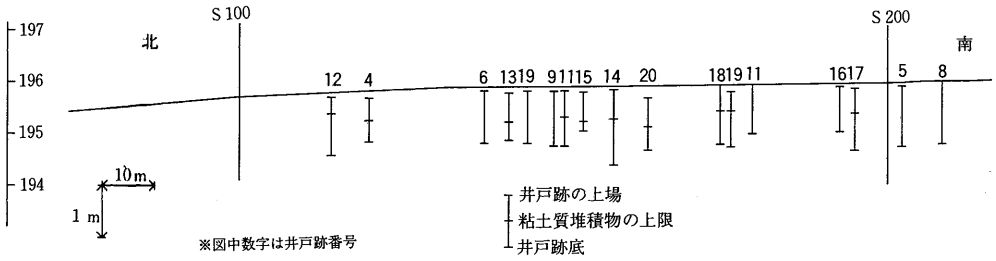
屋敷遺跡付近の土壌は，粘土や砂，軽石を含むシルトを主とする土壌である。礫などの大きいものは見られない。つまりこの付近は沼沢浮石質砂層堆積後は礫などが堆積する環境にはならなかったことを意味するのである。したがって屋敷遺跡付近の土壌は沼沢浮石質砂層堆積後，当初の一時期は大川により，大部分は東側を流れる中小河川等により，運ばれたものであろう。

現在の会津盆地内の土壌区分によると，屋敷遺跡付近の土壌は一部が黒泥土であるが大部分は細粒質灰色低地灰褐系とされている土壌区分に相当するもので，高堂太統ないしは四奈川統とされている。これは会津盆地の低位沖積段丘上に発達する土壌の典型的な例とされる。今から約300年前に書かれた会津農書によると，この高堂太統に区分される土壌は，黄真土と称され，水田土壌としては最高の性質をもつものにランクされていた。また土壌直下に沼沢浮石質砂層があるため水田も著しい湿田とはならなかったと考えられる。

またこの会津農書には，冬水と呼ばれる流水客土に相当する方法が行われていたとの記載がある。これは秋から冬までの間に，河川をせき止め，多雨時に増水した濁水を水田に引き込み，懸濁成分を客土することである。これは意図的に行われていたものである。しかし屋敷遺跡の場合は前述したように，東側を流れる中小河川の河床の標高が高い部分もある。これは近年の河川改修後の値であり，かってはこれらの河川は蛇行し，幅が狭く，河床もより高かったものと考えられる。したがって，以前は多雨時には現在よりも比較的氾濫しやすかったといえるであろう。意図的ではないにせよ自然に客土がなされ，肥沃な土壌が維持されていたことが想像される。しかし，これらの河川の氾濫はそれほど大規模なものでもないであろう。

気候条件については，前述したように5月以降夏季にかなり気温が上昇する。特に夏季の高温も当時の稲の成育に欠かすことのできない条件であったと考えられる。冬季間の降水量は大部分が降雪によるものである。しかし，これらの積雪は4月～5月にかけて雪解け水として河川の水量の増加をもたらす。これは田植え時期の水田経営にとっては非常に重要なことである。また夏季の降水量も比較的安定している。

会津盆地の平野部，特に屋敷遺跡が立地する場所においては地形・地質・気候の自然条件は，開田・稲作にとってたいへん都合の良いものであったと考えられる。　　（香内）



第295図　屋敷遺跡井戸跡模式断面図（Ⅴ区）

第7節　まとめ

（1）　弥生～古墳時代

今回の調査では，弥生時代中期末の川原町口式の資料と後期後半から古墳時代前期にかけての時期の資料が遺構・遺物ともにまとまって出土している。

中期の川原町口式は，弥生土器の中でも各器種が明確な土器群である。川原町口式の前段階の二ツ釜式の資料については，1988年に調査された会津若松市一ノ堰B遺跡から良好な各器種のセットが検出されている。器種では，壺・甕・鉢・ミニチュア土器が検出されている。本遺跡の出土土器は，前述の一ノ堰B遺跡の資料に明確に系譜を求められる土器群で，特に器形の上での大きな変化は認められず，装飾手法の一部が変化したにすぎない。

また，本遺跡では該期の円形の土坑と埋設土器が検出されている。これは土坑墓の流れを汲むものと理解できよう。また，埋設土器も当該時期の他の遺跡同様，乳幼児甕棺と理解されよう。

弥生後期～古墳前期の時期について，福島県内においても古墳前期の資料が比較的まとまってきている。しかしながら，弥生後期後半～終末の時期は，太平洋側のいわき地方を例外として発掘調査による資料自体に乏しく，その実態が不明瞭な時期といえる。

弥生土器では，天王山式土器に後続する土器群として1987年に白河市明戸遺跡の調査がなされ，遺物包含層から天王山式に後続する土器群がまとまって出土しており，踏瀬大山式の範疇に入り，更にいわき地方の八幡台式に並行するものとして報告されている。また，会津地方では，1988・89年に会津坂下町能登遺跡が調査され，遺物包含層から天王山式に比定される土器群が極めて多量に出土し，該期の良好なセット関係が捉えられている。本遺跡の磨消縄文系の土器群と比較すると明らかに古相の土器群である。天王山式土器について厳密な定義付けの一つの手がかりになると考えられる。また，十王台式土器についても研究が進み，古式土師器との関係については近年の研究では，その共判例が10例以上に及ぶことが明確となってきている。

土師器の研究では，福島県内でも田中敏によって，中通り・浜通り地方の古式土師器の編年・細分作業が行われたが，会津地方については，南原遺跡・倉道遺跡等の調査例はあるものの，全体として発掘調査例が少なく，古式土師器についても不明な点が多く資料も提示されなかった。しかし，1987年以降，会津坂下町での調査例が飛躍的に増え，古式土師器の資料も増加している。この中でも，細田遺跡と館ノ内遺跡からは北陸系の土師器が出土しており，屋敷遺跡を考える上で重要なものとなっている。特に，本遺跡では，甕といった出土量の多かった器種については，在地系の古式土師器と考えられるものは少なく，北陸系のものが多い結果となっている。

方形周溝墓については，1971年に初めて東北地方での方形周溝墓が宮城県今熊野遺跡で発見されて以後，東北地方での調査例は30例以上に及んでいる。福島県でも山中日照田遺跡にて発見されて以来調査例が増加している。これら方形周溝墓はいずれも古墳時代のものであり，北陸地方では，北陸系の終末期の弥生土器を出土する遺跡で周溝墓が検出されているのとは対照的に，在地の弥生土器を出土する遺跡からの検出はなく，東北地方においてその墓制が伝播したのは，古墳時代以降といった認識が一般的であった。しかしながら，屋敷遺跡で発見された13基の周溝状遺構の内，4・9号については，明らかに弥生時代の方形周溝墓と考えられるもので，東北地方では初の検出となる。周溝内から北陸系の土器が出土しており，また本遺跡自体からも多様な系統の土器が出土している点は，大型の古墳が出現する前夜の段階の状況を端的に示すものであると考えられる。すなわち，当地においては弥生的な方形周溝墓といった墓制自体北陸地方からの影響によってもたらされた可能性が強く，本遺跡から検出された遺物・遺構はそれを示すと考えられる。（藤谷）

（2）　平安時代

屋敷遺跡の平安時代の遺構は掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡・土坑などからなっている。掘立柱建物跡群の時期は9世紀中葉～10世紀前葉で大きく3期に分かれ，各時期ともほぼ規格的配置が見られる。9世紀中葉の1群建物は遺跡中央西側に集中し，9世紀後葉の2群建物はそれより分

布範囲が広くなり，３～４小期に細分できるようである。この時期は建物群の東と北を溝が区画しており，東の１辺の長さが約１町である。10世紀前葉の３群建物は遺跡東半部に中心を持つが，西側にも一部分布が見られる。この段階の遺跡東半部には身舎が２×５間に４面廂を有する大規模な建物が出現する。そして，１・３群建物の場合は建物のブロックごとに井戸が伴っている。どのブロックに伴うか不明のものも加えるとかなりの井戸が検出されており，日常の生活に関連する遺跡であることが推測される。

ただ，このようにまったく竪穴住居が検出されないこの時期の大規模な一般集落は県内では知られていない。また掘立柱建物からなる例としては郡家跡があるが，その典型的例である関和久遺跡・関和久上町遺跡と比較すると，かなり異なっている。おそらく，全体が大規模である点，建物に大規模なものも見られ規格的配置がみられる点，日常生活と関連が考えられる点などから，郡司または富豪層など土地の有力者の屋敷あとではないかと推定される。

その場合１群建物に伴う14号井戸跡から出土した須恵器にある「大私」は氏姓を表すと考えられるもので，ここの主は大私氏であった可能性が強い。この大私氏は出雲から越前にかけての日本海側に見られ，郡司・軍団幹部など地方の有力者も見られる。この「大私」銘墨書は会津地方における平安時代の須恵器が日本海側との関連で考えられる点とも合わせると重要な意味を持つものと思われる。

遺物では屋敷遺跡の須恵器は大部分が大戸古窯跡群製であり，杯は１群土器に伴うⅠ５ａ類が多い。これは大戸M25窯の時期のもので，今まで漠然と９世紀中頃～後半とされていたが，今回の調査で９世紀中葉に年代をしぼることができた。２群土器は赤焼土器の杯を伴うもので，10世紀前葉に位置付けられる。これには両面ミガキの内黒台付椀が伴っており，東北地方でもこのようなものが10世紀前葉には成立していたことが知られる。

また９世紀中葉の遺跡としては屋敷遺跡の北西３㎞にある上吉田遺跡がある。ここは多量の墨書土器が出土する祭祀遺跡であり，祓所的性格を持つものと思われる。したがって，在地の有力者と祭祀の係わりも検討しなければならない。その意味で居宅跡と考えられる屋敷遺跡と祭祀遺跡である上吉田遺跡の関係も今後会津郡でのこの地区の位置付けという面からも考えなければならない。　　（木本）

＜引用文献＞

（1）1990　石田・辻・他　「大戸古窯跡群発掘調査概報Ⅱ」会津若松市教育委員会

（2）1990　木本元治　「福島県内の黒色土器－平安時代－」『東国土器研究３』東国土器研究会

（3）1983　木本・渡辺・他　「東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅵ－御山千軒遺跡－」『福島県文化調査報告書第109集』福島県教育委員会

（4）1984　柳内・長島・他　「南原埋蔵文化財調査概報」会津若松市教育委員会

（5）1989　木本・大越　「国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅴ－善光寺遺跡（第２次）－」『福島県文化財調査報告書第109集』福島県教育委員会・㈶福島県文化センター

＜引用・参考文献(注以外)＞

1957　氏家和典　「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史 第14揖』東北史学会

1972　馬目順一他　『伊勢林前遺跡』いわき市教育委員会

1974　岡田茂弘・桑原滋郎　「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所

1980　白鳥良一　「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅵ』宮城県多賀城跡調査研究所

1980　馬目順一他　『八幡台遺跡』㈶いわき市教育文化事業団

1981　鈴木重美他　『朝日長者森跡・夕日長者遺跡』いわき市教育委員会

1982　木本元治・広岡　他　「東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅴ－鳴神・柿内戸遺跡－」福島県教育委員会

1982　柳沼賢治・高松俊雄他　『郡山東部Ⅱ』郡山市教育委員会

1983　石本　弘　「下堀際遺跡」『国営会津農業水利関連遺跡調査報告Ⅰ』福島県教育委員会㈶福島県文化センター

1983　谷内尾晋司　「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川県考古学会

1984　辻　秀人・藤原妃敏・森　幸彦　『明戸遺跡発掘調査概報』福島県教育委員会

1985　伊藤玄三他　『本屋敷古墳群の研究』法政大学

1985　丹羽　茂　「今熊野遺跡Ⅰ」『宮城県文化財調査報告書』第104集 宮城県文化財保護協会

1987　田中　敏　「福島県内における古墳時代前期土器群の様相について」『福島県立博物館紀要』第1号

1988　芳賀英一他　「一ノ堰Ｂ遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅵ』福島県教育委員会

1989　阿部朝衛　「土師器からみた東北地方古墳成立期の様相」『帝京史学』第4号

1989　川村浩司　「越後の古代集落の素描　遺跡の類型とその展開」『新潟考古学談話会会報』第3号

1989　古川利意他　『館ノ内・細田遺跡』会津坂下町教育委員会

1990　大越道正他　「能登遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告10』福島県教育委員会 ㈶福島県文化センター
日本道路公団

1990　弥生時代研究会　『「天王山式期をめぐって」の検討会記録集』

1966　只見川第四紀研究グループ　只見川・阿賀川流域の第四紀の編年，とくに沼沢浮石層の層位学的諸問題について　第四紀，No.8，PP.76～79。

1972　鈴木敬治他　福島県地質調査報告「若松地域の地質」福島県 61P

1977　鈴木敬治他　土地分類基本調査5万分の1「磐梯山」表装地質，27－33，福島県

1977　鈴木敬治他　会津盆地における後期新生代層の層位学的研究と会津盆地の発達史，地質学論集14　17－44

1977　鈴木敬治他　東北地方南部地域における内陸盆地の発達史について　地質学論集14　45－64

1986　鈴木敬治他　北村　信編「新生代東北本州弧の地質資料集」3，島弧横断ルートNo.28(柏崎－守門岳－只見－会津若松－郡山)地質図・地質断面図および同説明書，宝文堂，P15

1987　鈴木敬治　猪苗代湖北西部地域の第四系の層位・構造と猪苗代湖盆の形成について　福島大特定研究報告「猪苗代湖の自然」

1987　庄子貞雄・安藤　豊　会津盆地の土壌　URBAN KUBOTA No.26　久保田鉄工株式会社

1988　山本地質調査事務所　東北横断自動車道会津若松西地区構造物基礎調査報告書

1990　香内　修　「船ヶ森西遺跡・上吉田遺跡 序章 第2章」『東北横断自動車道遺跡調査報告9』福島県教育委員会，㈶福島県文化センター

1991　気象庁　「日本気候表 その1 月別平均値」

付　　編

付編１　屋敷遺跡出土土器の蛍光Ｘ線分析

奈良教育大学　　三辻利一

１）はじめに

会津若松市大戸には東北地方最大の須恵器窯群がある。それ故，福島県下の平安時代の須恵器の伝播・流通の研究においては，大戸窯群が中心的な役割をもっていると見られる。それで，蛍光Ｘ線分析による産地推定でも地元の母集団として大戸群が優先的に選び出される。分析によって得られた遺跡出土須恵器の科学特性が大戸群に対応するかどうかが調べられる。また，大久保窯などの，県下に在る規模の小さい窯の製品と大戸群の製品との相互識別の可否，さらには，これら小規模の窯の製品がどのように伝播・流通していたかといった問題も興味深い。

本報告では，大戸群と大久保窯・入大光寺窯・小田原窯などの小規模の窯の相互識別の結果を報告するとともに，屋敷遺跡から出土した須恵器の産地を推定した結果について報告する。また，同遺跡から出土した弥生土器・土師器・赤焼土器の胎土の化学特性についても言及する。

２）分析法

従来通り，土器試料の表面を研磨して粉砕後プレスし，コイン状の試料の蛍光Ｘ線分析を行った。分析値は標準試料として使用した岩石標準試料ＪＧ－１で標準化された値で表示した。

３）分析結果

はじめに，地元のいくつかの窯間の相互識別の結果について説明する。図１には大久保Ａ・Ｂ窯の須恵器のRb－Sr分布図を示す。両窯の須恵器は大久保領域に混在しており，その相互識別は困難であるとみられるので，これらを一括して大久保群とした。それで，両窯のサンプルのほとんどのものを包含するようにして大久保領域を描いてある。勿論，この領域は定性的な意味しかもたないが，他の窯の分布領域と比較する上には目安となる。

図２には，定量的な２群間判別分析法を使って，大戸群と大久保群の２母集団の相互識別を試みた結果を示す。両軸にとった$D^2_{(1)}$，$D^2_{(2)}$はそれぞれ，大戸群・大久保群の重心からのマハラノビスの汎距離である。マハラノビスの汎距離とは各母集団の重心から，どの程度離れているかを示す統計学上の距離のことである。この距離が近ければ，その母集団に帰属する可能性をもつことになり，逆に，距離が遠ければ，その母集団に帰属しなくなる。どの程度に近づけば，帰属できると判断できるかは窯跡出土のサンプルを多数分析することによって実験的に求められる。図２をみると大戸群のサンプルは２点を除いてすべて，大戸領域〔$D^2_{(2)} \leqq 10$，$D^2_{(1)} > 10$〕に分布しており，他方，大久保群のサンプルも１点を除いてすべて，大久保領域〔$D^2_{(1)} \leqq 10$，$D^2_{(1)} > 10$〕に分布し，両者はほぼ，完全に分離していることがわかる。このようにして，図２は両群の相互識

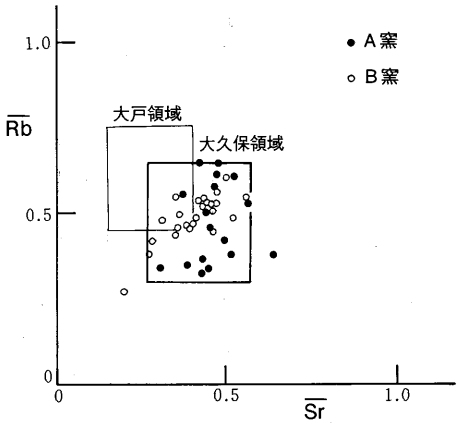


図1　大久保窯跡出土須恵器の
Rb－Sr分布図

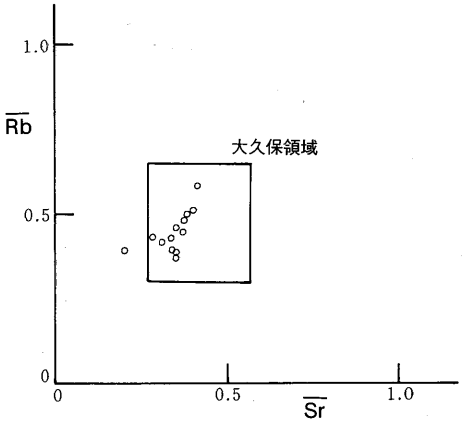


図3　小田原窯跡出土須恵器の
Rb－Sr分布図

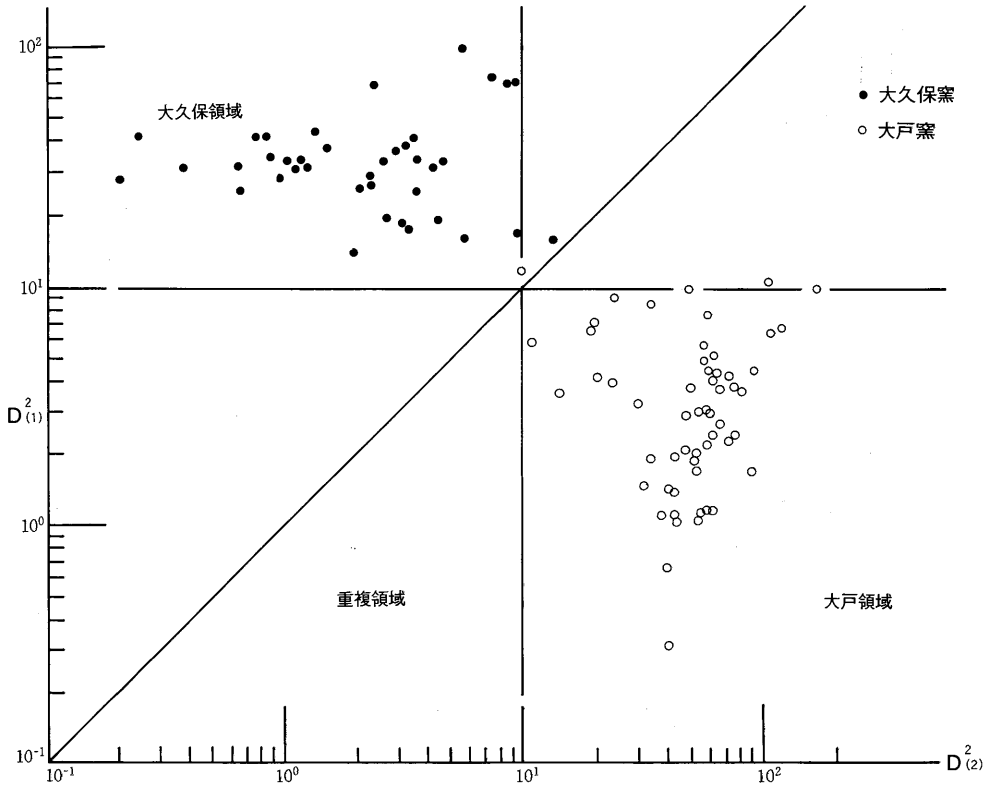


図2　大戸群と大久人群の相互識別（K，Ca，Rb，Sr因子使用）

別が十分可能であることを立証している。図1のRb－Sr分布図でも，両群の分布領域は明らかにずれており，定性的にも相互識別できることがわかる。

図3には小田原窯の須恵器のRb－Sr分布図を示す。1点を除いてすべて，大久保領域に分布しており，大久保群の須恵器と類似した化学特性をもつことを示している。実際，両者の2群間判別でも部分的にしか分離しなかった。

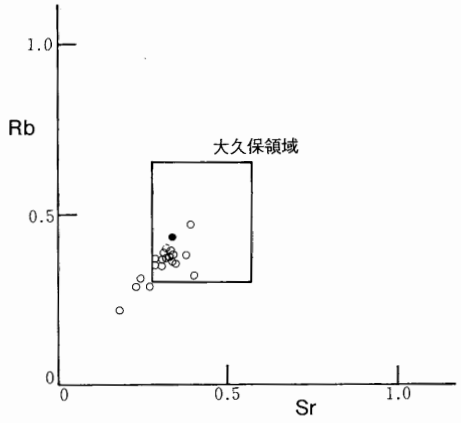
図4には，もう一つの小規模の窯である入大光寺窯の須恵器のRb－Sr分布図を示す。大久保領域の左下端部分に片寄って分布しており，Rb，Sr量とも大久保群の須恵器に比べて，やや少ないことを示している。K因子でも同様な傾向が認められた。従って，K，Ca，Rb，Srの4因子で両者の相互識別ができる可能性はある。2群間判別分析でも，過半数のサンプルが，相互識別されることが示された。

図5には入大光寺群と大戸群の2群間判別の結果を示す。$D^2_{(1)}$，$D^2_{(3)}$はそれぞれ，大戸群・入大光寺群からのマハラノビスの汎距離である。図2と同様，図5でも両群の相互識別は十分可能であることがわかる。

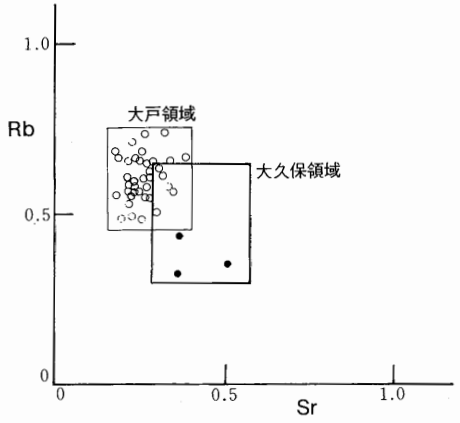
このようにして，大戸群は地元の小規模の窯，大久保窯・入大光寺窯・小田原窯から十分相互識別されることが示された。従って，福島県下の遺跡に，これらの小規模の窯の製品が大戸群の製品にまじって，どのように供給されていたかを追跡することは可能である。

次に，屋敷遺跡から出土した土器の分析結果について説明する。まず，分析値を表1に示す。また，大戸群・大久保群・入大光寺群・小田原群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値も表1に記してある。母集団への帰属条件は$D^2 \leqq 10$である。この帰属条件を満足する母集団が産地と推定される訳である。多くのサンプルは大戸群に対して，この条件を満足していることがわかる。こうして産地推定された結果も表1に記した。ほとんどの須恵器が大戸群産と推定された。他方，大戸群に対する帰属条件を満足しなかったNo46は小田原群には満足し，小田原窯産と推定された。しかし，No41，No98の2点はどの窯にも対応せず，産地不明となった。No41にはK量が多く，逆に，No98には少ない。従って，それぞれ別産地の製品とみられる。以上の推定結果を確認するため，図6にRb－Sr分布図を示しておく。No41・46・98の3点を除いた他はすべて，大戸領域に分布し，計算結果とよく対応していることがわかる。このようにして，屋敷遺跡出土の大半の須恵器は大戸群産であることが証明された訳である。また，No52の中世陶器も大戸群産と推定された。大戸群の中世陶器も須恵器と類似した化学特性をもつことは既に示されている。

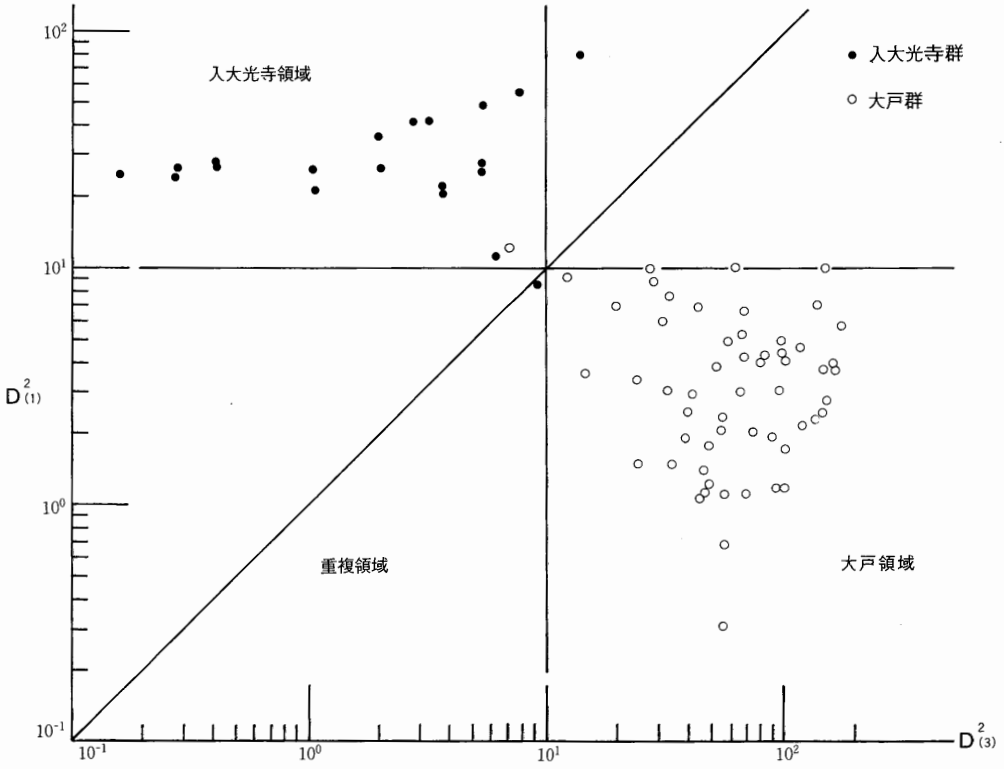
次に土師器・赤焼土器・弥生土器の分析結果について説明する。まず，これらの土器のRb－Sr分布図を図7に示す。全体として眺めると大きくばらついており，種々の胎土をもつ土器が含まれていることを示している。つまり，いろいろの産地で作られた土器が含まれていることを示唆している。そこで，クラスター分析により，これらの土器を分類してみることにした。クラス



4図　入大光寺窯跡出土須恵器の
Rb－Sr分布図



6図　屋敷遺跡出土須恵器の
Rb－Sr分布図



5図　大戸群と入大光寺群との相互識別(K,Ca,Rb,Sr因子使用)

ター分析は集団の中から異質の特性をもつものを摘出する上に役に立つ。図８にはクラスター分析の結果を示す。縦軸にはクラスター番号で示した試料を並べてある。クラスター分析ではインプットする試料の順にNo１から遂次番号が付けられていく。そのため，試料番号とクラスター番号が一致しなくなる。各試料のクラスター番号は表１に示してある。一方，横軸にはK，Ca，Rb，Srの４因子を使って最短距離法で計算した類似度を示してある。デンドログラムでは類似したものが一本の枝に結び付けられていく。例えば，図８ではクラスター番号１・６・33・28・29の５点のサンプルが一本の枝にまとめられている。従って，これら５点のサンプルは類似した化学特性をもつとみられる。そして，クラスター番号29と２の間で類似度にギャップが認められる。ここで，化学特性に差異がある可能性があるので，一応，ここで区切ってみることにした。それで，クラスター番号１から29までをⅠ群としてみた。このようにして，類似度に違いがありそうなところで区切り，Ⅰ群からⅣ群までに分類してみた。ただ，この方法ではこの区切り方が妥当であるかどうかを何か他の方法で確かめてみなければならない。ここではRb－Sr分布図を使うことにした。Ⅰ群のRb－Sr分布図を図９に，Ⅱ群を図10に，Ⅲ群を図11に，Ⅳ群を図12に，そして，分類できなかったものを図13にプロットした。それぞれまとまって分布しているが，群ごとに分布位置がずれていることがわかる。Ⅱ・Ⅳ群は少し領域が広く，Ⅲ群には５点ほど，少しずれて分布したものがある。これらを除いてⅢ群領域とした。これらの分布図のクラスター分析による分類が完全とは言えなくても，大筋は妥当であることを示している。

そこで，上記の分類結果をもう少し詳しく点検することにした。図９より，試料番号No１・42・43・56の４点の赤焼土器は同質の胎土をもち，同じところで作られた製品である可能性を示している。これに対し，No37・50の赤焼土器はⅣ群に分類された。赤焼土器にも２種類の胎土をもつものがあることが示された。No90は分類されなかったものの中に含まれているが，Rb－Sr分布図上ではNo37・50と類似する。従って，少なくとも赤焼土器も別々の２ヶ所で作られたものであることを示した。

Ⅰ群に分類された弥生土器はないが，Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群に分類されたものはある。土師器も同様である。これらの土器はいくつかの場所で別々に作られたことを示している。弥生土器には壺が多いが，Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群に分類されており，とくに，壺が特定の１ヶ所で作られたものでもないことを示している。

土師器も４群に分類されたNo９の筒形土師器はⅠ群に分類され，No１・42・43・56の赤焼土器と同じ胎土をもち，同じところで作られた可能性をもつ。これに対して，もう一つの筒形土器，No19はⅡ群に分類された。また，器形からみて，古墳時代の北陸系の土師器とみられるNo11・20・24・89・93のうち，No11・89はⅢ群に，また，No20・24はⅡ群に分類された。このように，器形からは北陸系の一グループであるが，胎土からは２群に分かれ，単純に器形に対応しないことが

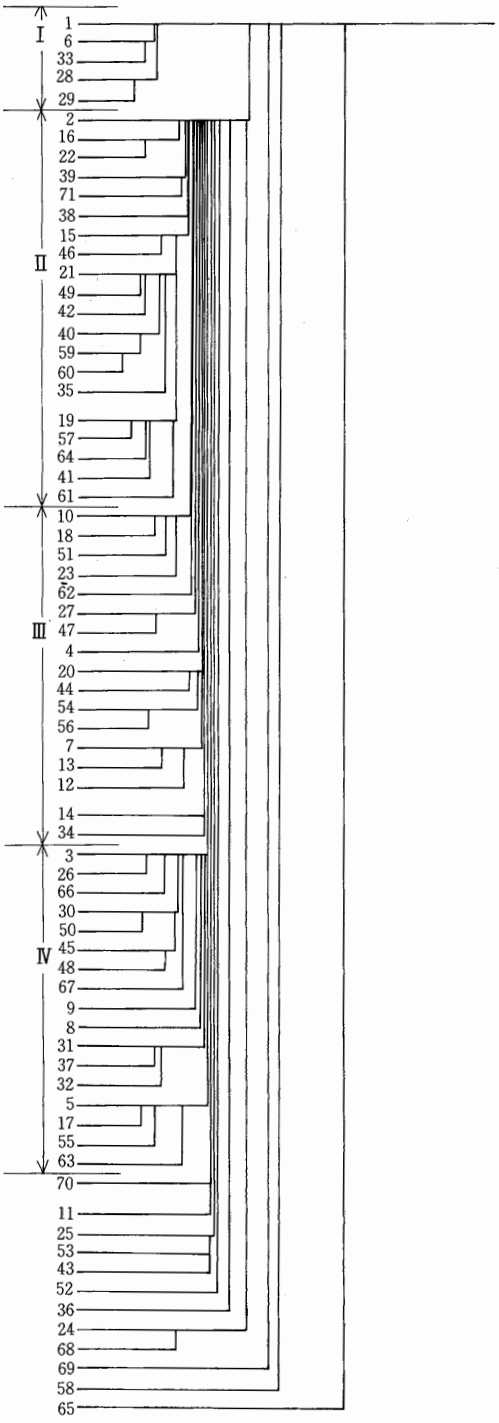


図8　土師器・弥生土器・赤焼土器のクラスター分析
（K，C，Rb，Sr因子使用）

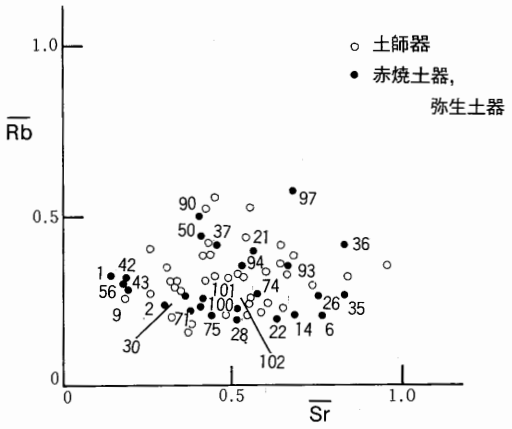


図7　屋敷遺跡出土土器のRb－Sr分布図

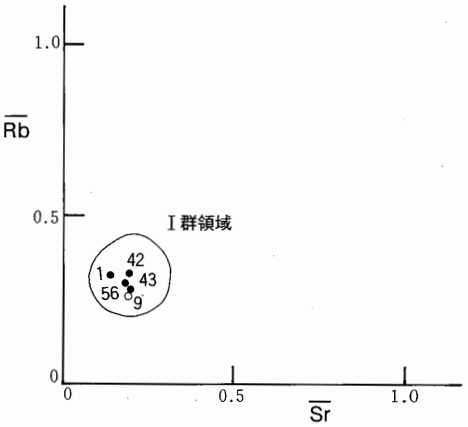


図9　Ⅰ群の土器のRb－Sr分布図

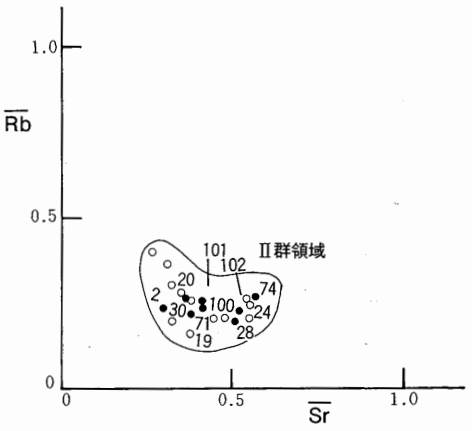


図10　Ⅱ群の土器のRb－Sr分布図

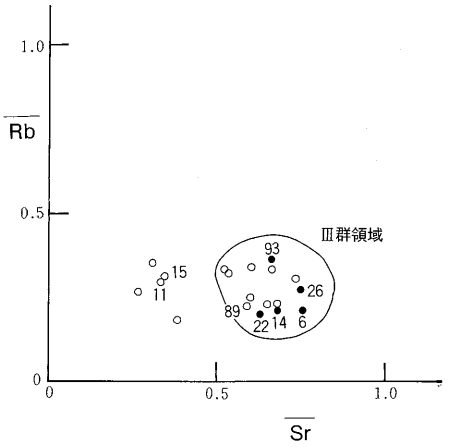


図11　Ⅲ群の土器のRb－Sr分布図

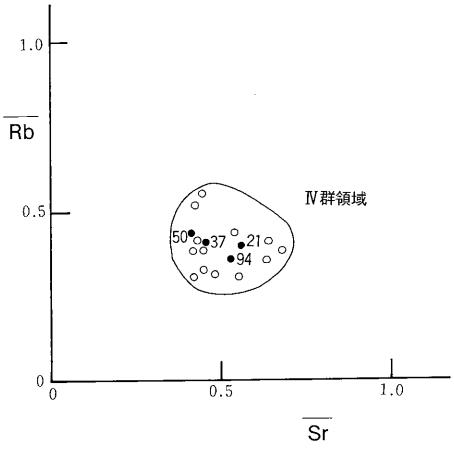


図12　Ⅳ群の土器のRb－Sr分布図

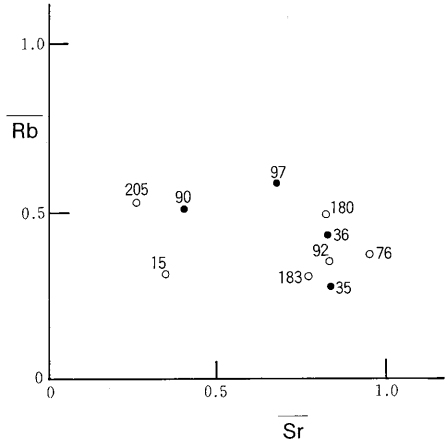


図13　分類できなかった土器，粘土のRb－Sr分布図

示された。この他，古墳時代の土師器でも，No12はⅣ群，No16・17・18・34・38・65・81・95・103はⅢ群，No66・80・86・96・10はⅡ群に分類され，Ⅱ・Ⅲ群に分類されたものが圧倒的に多いという興味ある結果を示した。しかし，平安時代に入ると，Ⅳ群に分類されるものが圧倒的に多くなり，土師器の生産地が時代によって変動したことを示した。

このように，窯跡の残っていない土器類の産地推定は難しく，目下のところ，上述したような仕方で，各地域ごとに基礎データを集積している段階にある。

弥生土器・土師器・赤焼土器で大戸群の須恵器と類似した胎土をもつものがなかった点も注目される。このことは大戸地域では弥生土器・土師器は作っておらず，平安時代に入って，硬質土器の材料である良質の粘土の産地として工人集団に見つけられたことを示唆している。そして，

大戸では須恵器に引き続いて，中世陶器も焼成されており，越前陶器の福井県宮崎村などと同様，この地域の粘土が陶器用に如何に適したものであるかを示している。

表1　屋敷遺跡出土土器のデータ

試料番号	クラスター番号	種類	器種	遺物番号	備考	K	Ca	Fe	Rb	Sr	大戸群から	大久保群から	入大光寺群から	小田原群から	推定産地
1	1	赤焼土器	高台杯	663	平安時代	0.318	0.100	2.27	0.316	0.136					Ⅰ
2	2	弥生土器	壺	1092		0.316	0.248	2.76	0.235	0.301					Ⅱ
3		須恵器	瓶	664	平安時代	0.567	0.104	1.59	0.573	0.236	2.8	43	53	88	大戸群
4		須恵器	杯	59	平安時代	0.668	0.142	1.57	0.650	0.260	1.4	69	84	196	大戸群
5	3	土師器	杯	410	平安時代	0.359	0.292	2.60	0.386	0.444					Ⅳ
6	4	弥生土器	壺	47		0.243	0.549	2.04	0.208	0.762					Ⅲ
7		須恵器	杯	303	平安時代	0.597	0.092	1.63	0.665	0.231	5.7	52	116	128	大戸群
8	5	土師器	杯	688	平安時代	0.340	0.478	2.92	0.442	0.535					Ⅳ
9	6	土師器	筒形土器	700	平安時代	0.319	0.124	4.08	0.263	0.185					Ⅰ
10		須恵器	杯	188	平安時代	0.613	0.132	1.56	0.551	0.260	2.0	54	37	116	大戸群
11	7	土師器	甕	290	古墳北陸系	0.472	0.254	2.71	0.304	0.334					Ⅲ
12	8	土師器	壺	129	古墳時代	0.503	0.325	2.39	0.393	0.415					Ⅳ
13	9	土師器	杯	205	平安時代	0.437	0.367	1.50	0.311	0.423					Ⅳ
14	10	弥生土器	甕	259		0.271	0.616	3.20	0.211	0.683					Ⅲ
15	11	土師器	台付甕	26	古墳時代	0.368	0.465	2.63	0.311	0.338					
16	12	土師器	壺	156	古墳時代	0.426	0.234	3.10	0.268	0.264					Ⅲ
17	13	土師器	壺	752	古墳時代	0.472	0.303	2.46	0.346	0.305					Ⅲ
18	14	土師器	壺	7	古墳時代	0.230	0.241	2.23	0.181	0.378					Ⅲ
19	15	土師器	筒形土器	696	平安時代	0.214	0.395	3.15	0.164	0.371					Ⅱ
20	16	土師器	甕	178	古墳北陸系	0.331	0.345	4.03	0.282	0.347					Ⅱ
21	17	弥生土器	壺			0.324	0.475	2.92	0.400	0.558					Ⅳ
22	18	弥生土器	壺	139		0.252	0.627	3.92	0.196	0.627					Ⅲ
23		須恵器	高台杯	451	平安時代	0.719	0.121	1.46	0.706	0.217	3.9	96	150	327	大戸群
24	19	土師器	甕	523	古墳北陸系	0.260	0.542	2.80	0.251	0.553					Ⅱ
25		須恵器	杯	450	平安時代	0.562	0.074	1.61	0.486	0.186	6.4	54	38	107	大戸群
26	20	弥生土器	壺	247		0.261	0.697	3.46	0.266	0.749					Ⅲ
27		須恵器	杯	326	平安時代	0.558	0.137	1.43	0.608	0.269	1.7	35	63	71	大戸群
28	21	弥生土器	壺	242		0.255	0.409	4.00	0.204	0.506					Ⅱ
29		須恵器	広口瓶	211	平安時代	0.546	0.166	1.16	0.580	0.330	2.9	25	28	33	大戸群
30	22	弥生土器	壺	550		0.334	0.295	3.73	0.273	0.360					Ⅱ
31		須恵器	杯	445	平安時代	0.599	0.100	1.31	0.591	0.224	2.7	54	66	126	大戸群
32		須恵器	瓶	727	平安時代	0.631	0.101	1.69	0.567	0.282	9.6	58	37	103	大戸群
33		須恵器	杯	438	平安時代	0.551	0.169	1.24	0.615	0.306	1.6	28	54	52	大戸群
34	23	土師器	甕	548	古墳時代	0.204	0.747	3.19	0.253	0.601					Ⅲ
35	24	弥生土器	壺	1031		0.286	0.337	1.34	0.274	0.830					
36	25	弥生土器	壺	517		0.311	0.690	3.21	0.421	0.830					
37	26	赤焼土器	杯	458	平安時代	0.328	0.329	1.86	0.412	0.447					Ⅳ
38	27	土師器	甕	803	古墳時代	0.307	0.634	3.48	0.324	0.532					Ⅲ
39		須恵器	杯	427	平安時代	0.689	0.095	1.23	0.685	0.166	5.5	96	178	340	大戸群
40		須恵器	杯	723	平安時代	0.606	0.108	1.33	0.656	0.243	3.7	52	100	128	大戸群
41		須恵器	杯		平安時代	0.553	0.128	1.58	0.442	0.358	22	33	52	35	不明
42	28	赤焼土器	杯	780	平安時代	0.255	0.134	2.26	0.317	0.193					Ⅰ
43	29	赤焼土器	高台杯	782	平安時代	0.258	0.133	1.86	0.276	0.190					Ⅰ
44		須恵器	杯	768	平安時代	0.546	0.164	1.20	0.545	0.272	0.97	32	33	67	大戸群

45		須恵器	甕	658	平安時代	0.507	0.148	1.81	0.500	0.221	4.9	31	36	73	大戸群
46		須恵器	杯	787	平安時代	0.440	0.212	2.42	0.329	0.364	18	14	58	7.8	小田原群
47		須恵器	杯		平安時代	0.629	0.096	1.52	0.663	0.208	4.2	65	127	185	大戸群
48		須恵器	甕	467	平安時代	0.568	0.171	1.30	0.639	0.300	1.6	32	71	71	大戸群
49		須恵器	杯	849	平安時代	0.542	0.074	2.35	0.489	0.250	10	40	23	57	大戸群
50	30	赤焼土器	杯	778	平安時代	0.341	0.233	2.31	0.442	0.406					Ⅳ
51		須恵器	大甕	657	平安時代	0.705	0.200	1.49	0.747	0.317	4.6	69	130	230	大戸群
52		中世陶器	擂鉢	740	中世時代	0.661	0.091	1.61	0.740	0.262	11	67	147	176	大戸群
53	31	土師器	杯	485	平安時代	0.384	0.317	1.11	0.417	0.643					Ⅳ
54	32	土師器	杯	453	平安時代	0.336	0.351	1.70	0.357	0.637					Ⅳ
55		須恵器	杯	728	平安時代	0.611	0.052	1.47	0.669	0.181	10	67	148	178	大戸群
56	33	赤焼土器	杯		平安時代	0.353	0.124	2.36	0.302	0.181					Ⅰ
57		須恵器	杯	95	平安時代	0.633	0.120	1.38	0.575	0.265	3.7	60	43	126	大戸群
58		須恵器	杯	852	平安時代	0.518	0.192	1.28	0.573	0.338	2.6	18	27	22	大戸群
59		須恵器	杯	855	平安時代	0.628	0.102	1.42	0.611	0.212	2.4	65	84	175	大戸群
60		須恵器	杯	850	平安時代	0.555	0.159	1.25	0.611	0.259	1.8	34	77	89	大戸群
61		須恵器	杯	848	平安時代	0.645	0.136	1.38	0.575	0.233	1.1	69	58	190	大戸群
62		須恵器	杯	853	平安時代	0.584	0.222	1.16	0.667	0.382	5.2	26	54	48	大戸群
63		須恵器	甕	81	平安時代	0.548	0.088	1.26	0.626	0.267	8.3	35	70	73	大戸群
64		須恵器	長頸瓶	291	平安時代	0.624	0.151	1.20	0.663	0.279	1.4	50	88	130	大戸群
65	34	土師器	甕	181	古墳時代	0.156	0.580	2.08	0.227	0.649					Ⅲ
66	35	土師器	甕	655	古墳時代	0.208	0.398	4.51	0.261	0.376					Ⅱ
67	36	土師器	杯	457	平安時代	0.265	0.248	1.54	0.534	0.548					
68	37	土師器	高台杯	843	平安時代	0.344	0.302	2.19	0.387	0.681					Ⅳ
69	38	土師器	杯	488	平安時代	0.419	0.232	2.74	0.400	0.263					Ⅱ
70	39	土師器	高台杯	492	平安時代	0.339	0.198	1.31	0.305	0.324					Ⅱ
71	40	弥生土器	壺	689		0.267	0.376	2.93	0.222	0.375					Ⅱ
72		須恵器	杯	196	平安時代	0.545	0.120	1.71	0.532	0.213	2.7	41	48	94	大戸群
73		須恵器	小型壺	685	平安時代	0.583	0.111	1.19	0.562	0.217	1.9	51	57	120	大戸群
74	41	弥生土器	壺	186		0.258	0.483	3.24	0.273	0.568					Ⅱ
75	42	弥生土器	壺	649		0.233	0.413	3.84	0.210	0.437					Ⅱ
76	43	土師器	杯	833	平安時代	0.245	0.628	2.53	0.362	0.950					
77	44	土師器	杯	831	平安時代	0.224	0.613	2.99	0.301	0.730					Ⅲ
78	45	土師器	杯	834	平安時代	0.341	0.223	1.63	0.525	0.423					Ⅳ
79		須恵器	杯	881	平安時代	0.551	0.159	1.19	0.664	0.328	5.0	26	75	49	大戸群
80	46	土師器	甕	612	古墳時代	0.198	0.337	3.67	0.198	0.317					Ⅱ
81	47	土師器	甕	1112	古墳時代	0.324	0.573	2.95	0.327	0.516					Ⅲ
82		須恵器	長頸瓶	859	平安時代	0.629	0.159	1.48	0.508	0.294	5.5	57	30	113	大戸群
83	48	土師器	杯	97	平安時代	0.393	0.190	1.25	0.562	0.445					Ⅳ
84		須恵器	壺	866	平安時代	0.675	0.083	1.53	0.595	0.231	8.0	82	62	190	大戸群
85		須恵器	瓶	862	平安時代	0.657	0.138	1.59	0.694	0.251	2.3	66	126	190	大戸群
86	49	土師器	甕	502	古墳時代	0.223	0.435	2.65	0.207	0.480					Ⅱ
87		須恵器	長頸瓶	886	平安時代	0.564	0.088	1.31	0.556	0.172	5.1	54	79	139	大戸群
88	50	土師器	杯	320	平安時代	0.306	0.230	1.62	0.417	0.434					Ⅳ
89	51	土師器	甕	604	古墳北陸系	0.244	0.682	2.08	0.221	0.585					Ⅲ
90	52	赤焼土器	杯	413	平安時代	0.493	0.242	2.04	0.498	0.401					
91		須恵器	杯	887	平安時代	0.587	0.089	1.82	0.569	0.223	4.0	52	54	110	大戸群
92	53	弥生土器	壺	595		0.289	0.602	2.27	0.338	0.838					
93	54	弥生土器	壺	546		0.276	0.578	2.91	0.361	0.662					Ⅲ
94	55	弥生土器	壺	671		0.323	0.433	2.77	0.356	0.534					Ⅳ

95	56	土師器	甕	810	古墳時代	0.279	0.528	2.04	0.334	0.663					Ⅲ
96	57	土師器	甕	1116	古墳時代	0.290	0.517	3.04	0.252	0.550					Ⅱ
97	58	粘土			古墳時代	0.353	0.486	2.48	0.576	0.680					
98		須恵器	杯	463	平安時代	0.198	0.421	2.50	0.361	0.500	77	22	30	187	不明
99		須恵器	硯	863	平安時代	0.592	0.071	1.20	0.583	0.234	7.6	53	54	105	大戸群
100	59	弥生土器	壺	529		0.244	0.356	3.24	0.230	0.411					Ⅱ
101	60	弥生土器	壺			0.250	0.331	4.41	0.241	0.405					Ⅱ
102	61	弥生土器	壺			0.205	0.502	4.05	0.227	0.520					Ⅱ
103	62	土師器	甕	808	古墳時代	0.205	0.701	2.88	0.341	0.599					Ⅲ
104	63	土師器	甕	4	古墳時代	0.287	0.417	2.51	0.331	0.452					Ⅳ
105	64	土師器	甕	10	古墳時代	0.238	0.572	3.31	0.213	0.548					Ⅱ

付編２　屋敷遺跡井戸跡出土の植物遺体

福島大学名誉教授　　鈴木敬治

１．分析資料　　屋敷遺跡Ｖ区　13号井戸跡ℓ９・10のシルト質粘土

２．分析方法　　資料約500ｇを120メッシュのふるい上で水洗し，砂泥を取り除いた後アルコール溶液に保存した後，倹鏡する。

３．分析結果　　出土した植物遺体を検討した結果，次のようになった。

	出土量
Polygonum sp.	VA
Prunus sp.	C
Euphorbia (?) helioscopia L	C
Compolithes sp.1 (Elatine?)	R
Compolithes sp.2 (Tradescantia)	R
Carex sp.	R
甲虫の羽	R
不明	

VA－豊富　　C－普通　　R－まれ

４．考察

全般に同定し得えた種の種類が少ない。又同定し得なかったものもある。ℓ9・10は砂混じりのシルト質粘土で水中に堆積したものと考えられる。そのためか *Polygonum* sp. *Carex* sp.などの水草～湿地性の植物が産出した。しかし特に水草が多いというわけではない。全般的には野生の植物の種子や果と異なって，栽植されたものが多いように思われる。すなわちℓ９・10堆積時の人為的な影響を強く受けた付近の植生の一部を表したものと考える。

採集者によれば堆積物中に広葉樹の葉片も認められたとのことであったが，今回の分析資料中には認められなかった。今後はより多量のサンプルを処理すること，あわせて花粉・珪藻などの微化石の検討を合わせて行うことが重要であろう。特に今回のような湿性堆積物で埋積されている井戸跡のような遺構は，微化石の検討を行うための好条件をそなえたものである。

付編３　屋敷遺跡出土鉄滓の金属学的調査

大澤正巳

概要

平安時代に属する，屋敷遺跡出土鉄滓を調査して，つぎのことが判った。

〈1〉，出土鉄滓は，鍛冶炉の炉底に堆積形成された椀形状鍛冶滓である。大小２通りある。大は540ｇで，荒鉄(製錬炉で還元された直後の不純物を含んだ小鉄塊)の成分調整で排出された精練鍛冶滓であり，小は鉄製品製作時に排出された鍛練鍛冶滓(小鍛冶滓)であった。(破片で55ｇ)

〈2〉,鍛冶に供された鉄素材は,チタン(Ti)分の高い塩基性砂鉄(赤目)を原料とした荒鉄である。精練鍛冶滓の鉱物組成は，ウルボスピネル(Ulvöspinel；$2FeO \cdot Ti_2$)とヴスタイト(Wüstite；FeO)を晶出し，二酸化チタン(TiO_2)を7.8％，バナジウム(Ｖ)を0.11％含有する。鍛練鍛冶滓はヴァスタイトのみで，二酸化チタン(TiO_2)は2.13％，バナジウム(Ｖ)は0.034％であった。

〈3〉，特殊遺構として検出された隅丸方形の直径50－60㎝，深さ10㎝でレンズ状に酸化を受けた焼土面は，鍛冶炉と認定できる。

１．いきさつ

屋敷遺跡は，福島県会津若松市大字始字屋敷地内に立地する。遺跡は，縄文時代晩期，弥生時代中期－古墳時代前期，平安時代にいたる複合遺跡である。

今回調査した鉄滓は，平安時代の掘立柱建物跡群に近接して発見された特殊遺構(鍛冶遺構)の脇から検出されたものである。

この出土鉄滓２点について，福島県文化センターより専門調査の依頼があったので，科学的手法にもとづく調査を行った。

２．供試材

第１表に供試材の履歴と調査項目を示す。AWYS－２は椀形滓の破片である。

３．調査結果

第１表　供試材の履歴と調査報告

試料番号	試　料	出土位置	計測位		調査項目		
			サイズ(㎜)	重量(ｇ)	顕微鏡組織	ビッカーズ断面硬度	化学組成
AWYS－1	椀形鉄滓	SX01遺構検出面	100×　102×　23	540	○	○	○
AWYS－2	椀形鉄滓	SX01遺構検出面	28×　50×　16	55	○	○	○

(1)AWYS－１　椀形鍛冶滓(精錬鍛冶滓)

①　肉眼観察；表面側は赤黒色で，肌は木炭痕と凹凸を有し，荒れている。裏面は木炭痕に反応痕をもつ。破面は，コークス状の黒色多孔質であるが，比重は大きい。

② 顕微鏡組織；付章図版1の①②③に示す。鉱物組成は，淡褐色多角形のウルボスピネル(Ulvöspinel；$2FeO \cdot TiO_2$)と白色粒状のヴスタイト(Wüstite)，それに淡灰色盤状結晶のファイヤライト(Fayalite；$2FeO \cdot SiO_2$)から構成される。

③ ビッカース断面硬度；付章図版1の④にヴスタイト結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は473Hvである。ヴスタイトの文献硬度値は450－500Hvであるので，妥当な値である。同じくウルボスピネルは，⑤に示すように606Hvである。マグネタイト(Magnetite；Fe_3O_4)の文献硬度値が500－600Hv[注①]であるので，これもチタン(Ti)分の溶け込みで若干高めとなっている。

④ 化学組成；第2表に示す。鉄分が多く，ガラス質成分の少ない鍛冶滓組織である。すなわち，全鉄分(Total Fe)が55.8%に対して，酸化第1鉄(FeO)が43.8%，酸化第2鉄.(Fe_2O_3)が31.1%の割合である。ガラス質成分($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$)13.44%と低めである。

砂鉄に由来する二酸化チタン(TiO_2)は7.84%，バナジウム(V)0.11%は高めで，塩基性砂鉄が製鉄原料となる荒鉄の処理であったことを示す。酸化マンガン(MnO)は0.24%，硫黄(S)0.047%は若干高目である。

化学組成からも精練鍛冶滓と判定される。

(2)AWYS－2，椀型鍛冶滓(鍛練鍛冶滓)

① 肉眼観察；表裏共に赤褐色を呈す。表面は木炭痕を残すが，肌は荒れてはいない。裏面は反応痕を僅かに有して，木炭痕も認められる。破面は黒褐色多孔質。

② 顕微鏡組織；付章図版1の⑥⑦に示す。大きく成長した白色粒状のヴスタイト(Wüstite；FeO)と盤状結晶のファイヤライト(Fayalite；$2FeO \cdot SiO_2$)から構成される。該滓のヴスタイト結晶内には，鉄－チタン析出物のウルボスピネル(Ulvöspinel；$2FeO \cdot TiO_2$)の小結晶は認められない。鍛練鍛冶滓の晶癖である。

③ ビッカース断面硬度；付章図版1の⑧に示す。硬度値は455Hv，464Hvである。ヴスタイトと同定できる。

④ 化学組成；第2表に示す。精錬鍛冶のAWYS－1より鉄分は増加して，チタン(Ti)分や

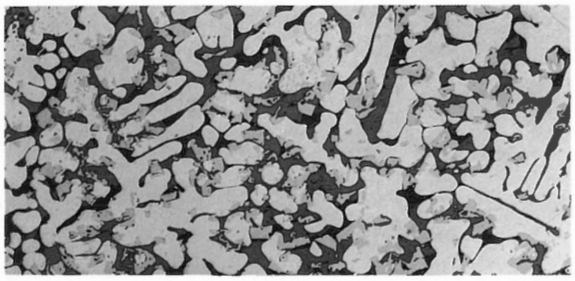
第2表 鉄滓の化学組成

試料番号	試料	全鉄分 (Total Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K_2O)
AWYS－1	精練鍛冶滓	55.8	43.8	31.1	8.94	2.40	0.84	1.06	0.13
AWYS－2	鍛練鍛冶滓	59.6	61.2	17.18	10.58	2.41	1.51	0.62	0.43

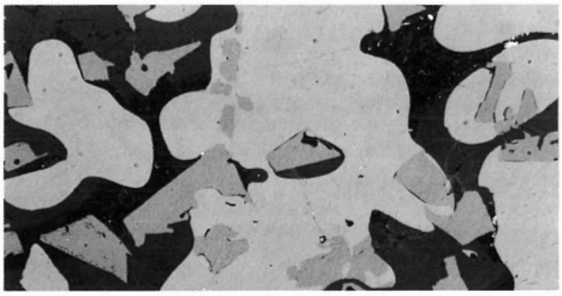
試料番号	酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	5酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)
AWYS－1	0.07	0.24	7.84	0.03	0.047	0.266	0.29	0.11	0.003
AWYS－2	0.19	0.11	2.13	0.03	0.033	0.287	0.18	0.034	0.002

(1) AWYS-1
屋敷遺跡
(ＳＸ06鍛冶遺構出土)
精練鍛冶滓

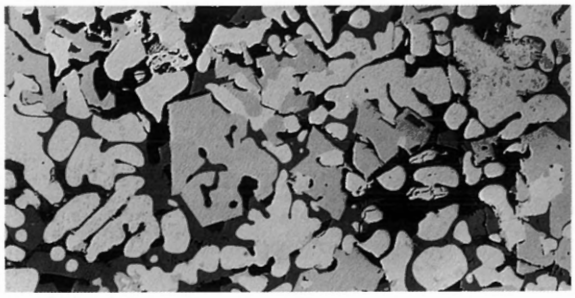
外観写真 1/2.7



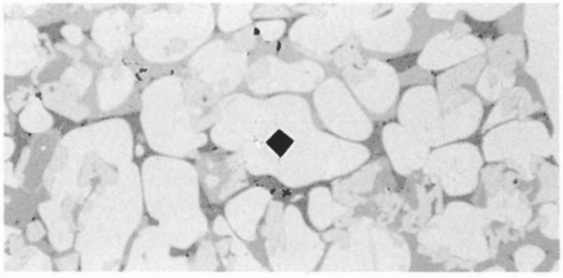
①含チタン Wüstite　×100



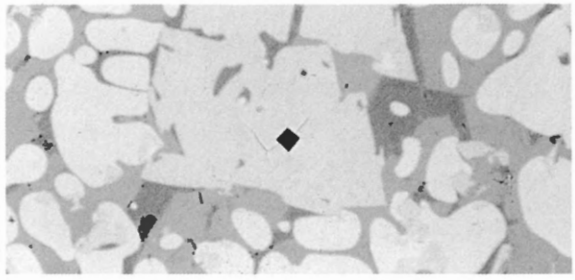
②含チタン Wüstite　×200



③Ulvöspinel＋Wüstite　×100

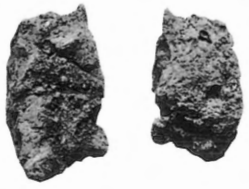


④圧痕 Wüstite 473Hv　荷重100ｇ　×200



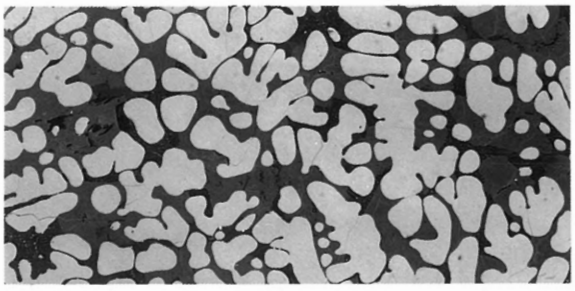
⑤圧痕 Ulvöspinel 606Hv　荷重100ｇ　×200

(2) AWYS-2
屋敷遺跡
(ＳＸ06鍛冶遺構出土)
鍛練鍛冶滓

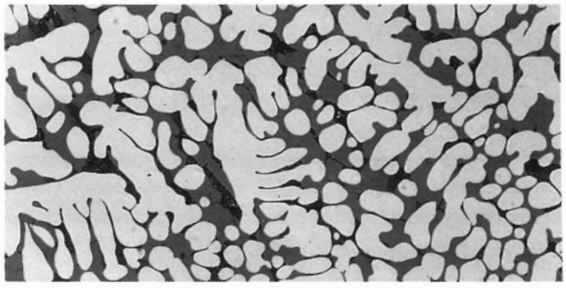


(表　側)　(裏　側)

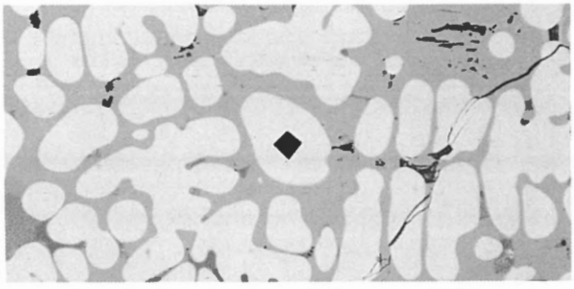
外観写真 1/2.7



⑥Wüstite　×100



⑦Wüstite　×100



⑧硬度圧痕 455Hv,464Hv　荷重100ｇ　×200

図版１　鉄滓の顕微鏡組織

バナジウムは減少する。

全鉄分(Total Fe)は59.6%に対して，酸化第1鉄(FeO)は61.2%，酸化第2鉄(Fe_2O_3)は17.18%である。ガラス質成分は15.74%と，さほど多くなく，二酸化チタン(TiO_2)2.13%，バナジウム(V)0.034%と減少している。酸化マンガン(MnO)も低減されて0.11%となっている。鍛錬鍛冶滓に分類できる。

4．まとめ

平安時代の屋敷遺跡には，鍛冶工房の操業があった事が実証できた。鉄素材は，チタン分の高い塩基性砂鉄(赤目)を原料とするもので，精練鍛冶から鍛練鍛冶まであったと想定される。

注

① 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968

符号	硬度測定対象物	硬度実測値	文献硬度値 ※1
	Fayalite ($2FeO \cdot SiO_2$) ※2	560,588	600～700 Hv
	磁鉄鉱 ※2	513,506	530～600 Hv
	マルテンサイト ※2	641	633～653 Hv
	Wüstite (FeO) ※3	481,471	450～500 Hv
	Magnetite (Fe_3O_4) ※4	616,623	500～600 Hv
	白鋳鉄 ※5	563,506	458～613 Hv
	亜共析鋼 (c：0.4%) ※6	175	180～213 Hv

※1 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968年他。
※2 滋賀県草津市野路小野山遺跡出土遺物 7C末～8C初
※3 兵庫県川西市小戸遺跡出土鍛冶滓 4C後半
※4 新潟県豊栄市新五兵衛山遺跡出土砂鉄製錬滓Ulvöspihel 平安時代
※5 大阪府東大坂市西之辻16次調査出土鋳造鉄斧 古墳時代前期
※6 埼玉県大宮市御倉山中遺跡鉄鏃 5C頃

付編４　屋敷遺跡出土木製遺物の用材について

福島県立博物館主任学芸員　　松田隆嗣

１．はじめに

屋敷遺跡からは井戸枠を中心に数多くの木製品が出土している。これらの遺物について樹種鑑定を行ったので報告する。

井戸枠の用材としては針葉樹(スギ，ヒノキ，アスナロ)，広葉樹(クリ，ケヤキ)が用いられている。各井戸により用材は異なるが，個々の井戸ごとの部材はほぼ同種の材が用いられている場合が多い。

なお，今回の同定により明らかになった樹種上記の５種以外に広葉樹(オニグルミ，ハンノキ属，クヌギ，シナノキ，トネリコ)の合わせて１０種類である。また，同定を行った資料は130点である。

２．同定方法

樹種の同定は遺物の破折面などからカミソリの刃を用いて木口，柾目，板目面の切片直接作成するか，資料によってはその一部をブロック状に採取した後，三方向の切片を作成した。

これを，光学顕微鏡により内部形態学的特徴を観察し現生材の特徴と比較することにより材の同定を行った。

３．同定理由

針葉樹

スギ　*Cryptomeria japonica* D. Don　(スギ科　Taxodiaceae)

垂直・水平樹脂道とも存在しない。春材から夏材への移行はやや急激であるが，緩やかなものも存在する。材は仮道管，樹脂細胞，放射柔細胞からなる。分野壁孔はスギ型で１分野に２～３個存在する。

ヒノキ　*Chamaecyparis* obtusa Endl.　(ヒノキ科　Cupressaceae)

垂直・水平樹脂道とも存在しない。春材から夏材への移行は緩やかである。材は仮道管，樹脂細胞，放射柔細胞からなる。分野壁孔はヒノキ型であり１分野あたりほぼ２個存在するが，崩壊の進んでいる材が多い。

アスナロ　*Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.　(ヒノキ科　Cupressaceae)

垂直・水平樹脂道とも存在しない。春材から夏材への移行は緩やかであるが，やや急激なものも存在する。材は仮道管，樹脂細胞，放射柔細胞からなる。放射柔細胞内部に樹脂を認めるものが多いが全てに認められる訳ではない。分野壁孔はスギ型で，１分野あたり２個存在する。

広葉樹

オニグルミ　*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. siboldiana Kitamura　（クルミ科　Juglandaceae）

道管はほぼ均等に分布する（散孔材），年輪外側へ移行するに従い道管径を徐々に減少する。道管の多くは楕円形で単独あるいは２～３が放射方向に複合する。短接線状柔組織が顕著である。放射組織は平伏細胞からなる同性であるが，やや異性がかる。細胞幅は１～４列である。

ハンノキ属　*Alnus* spp.　（カバノキ科　Betulaceae）

道管はほぼ均等に分布する（散孔材），その数は極めて多い。大半は２～７個が放射方向に複合するが２～４個のものが多い。３～４層のターミナル柔組織を認める。穿孔は階段穿孔でその段数はほぼ25段である。放射組織は平伏細胞よりなる同性で，単列であるが，所々に集合放射組織を認める。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　（ブナ科　Fagaceae）

円形あるいは楕円形の大きな道管が年輪界に沿って２～３列に配列する（環孔材）。孔圏外で道管はその径を急激に減少するとともに２～３個が集まり，火炎状に配列する。道管は単穿孔。放射組織は平伏細胞からなる同性で，細胞幅は単列のみである。

クヌギ　*Quercus acutissima* Carruth.　（ブナ科　Fagaceae）

楕円形の大きな道管が年輪界に沿って１～２列に配列する（環孔材）。道管は全て孤立管孔よりなりその膜厚は厚い。圏外で道管はその径を徐々に減じるとともに放射方向に配列する。穿孔は単穿孔。放射組織は同性で単列放射組織と広放射組織よりなる。

ケヤキ　*Zelkova serrata* Makino　（ニレ科　Ulmaceae）

楕円形の大きな道管が年輪界に沿って１列に配列する（環孔材）。孔圏外の小道管は，多数が不規則に集まって斜線状に配列する。穿孔は単穿孔。小道管壁にラセン肥厚を認める。放射組織は異性で細胞幅は１～８列で６～８列のものが多い。

シナノキ　*Tilia japonica* Simonkai　（シナノキ科　Tiliaceae）

道管はほぼ均等に分布する（散孔材）が，晩材部に移行するに従いその径を少し減少する。道管の大半は２～６個が放射方向に接合する。短接線状柔組織，１～３層のターミナル柔組織を認める。穿孔は単穿孔。道管側壁にラセン肥厚を認めるが組織の崩壊が進み消失している部分が多い。放射組織は全て平伏細胞からなる同性で，細胞幅は１～６列であるが，４～６列のものが多い。

トネリコ　*Fraxinus japonica* Blume　（モクセイ科　Oleaceae）

円形から楕円形の大きな道管が年輪界に沿って１～２列に配列するが，所々でその配列はとぎれる（環孔材）。孔圏外で道管は急激にその径を減じるとともに，２～３個が放射方向に接合する。道管の膜厚は厚い。周囲柔組織，連合翼状柔組織，３～４層のターミナル柔組織を認める。道管は単穿孔。放射組織は平伏細胞からなる同性で，細胞幅は１～２列であるが，２列のものが多い。

第1表　遺構別材質一覧表

遺構名	出土位置	針葉樹 スギ科 Cryptomeria属	針葉樹 ヒノキ科 Chamaecyparis属	針葉樹 ヒノキ科 Thujopsis属	広葉樹 カバノキ科 Alnus属	広葉樹 クルミ科 Juglans属	広葉樹 ブナ科 Castanea属	広葉樹 ブナ科 Quercus属
SE03	枠組井戸枠	スギ (7)	ヒノキ (2)	アスナロ(1)				
	井戸中央（木枠）							
	崩落板材	スギ (4)	ヒノキ (1)	アスナロ(3)				クヌギ(2)
SE13	枠組井戸枠							
	崩落井戸枠							
	井戸枠外側止め木	スギ (1)				オニグルミ(1)		
	崩落板材							
SE14	崩落板材	スギ (8)	ヒノキ (1)	アスナロ(5)				
	井戸中央（曲物）	スギ (1)						
	（内側タガ）	スギ (1)						
	（外側タガ）	スギ (1)						
SE15	枠組井戸枠	スギ (11)	ヒノキ (2)	アスナロ(1)				
	上部井戸枠	スギ (1)					クリ (4)	
	井戸枠外側止め木	スギ (6)	ヒノキ (3)	アスナロ(11)				
	崩落板材	スギ (7)	ヒノキ (3)	アスナロ(3)	ハンノキ属(1)		クリ (7)	
SE17	崩落板材	スギ？ (1)						
SE19	崩落板材	スギ (3)						
合計	（点）	50※	12	24	1	1	11	2
比率	（%）	41	9.8	19.7	0.8	0.8	9	

遺構名	出土位置	広葉樹 ニレ科 Zelkova属	未同定	合計（点）
SE03	枠組井戸枠			10
	井戸中央（木枠）	ケヤキ (1)		1
	崩落板材		(1)	11
SE13	枠組井戸枠	ケヤキ (8)		8
	崩落井戸枠	ケヤキ (7)	(1)	8
	井戸枠外側止め木			2
	崩落板材	ケヤキ (3)		3
SE14	崩落板材			14
	井戸中央（曲物）			1※
	（内側タガ）			
	（外側タガ）			
SE15	枠組井戸枠			14
	上部井戸枠			5
	井戸枠外側止め木			20
	崩落板材			21
SE17	崩落板材			1
SE19	崩落板材			3
合計	（点）	19	2	122※
比率	（%）		1.6	99.9

樹種名の後（ ）内の数字は点数を示す。
※SE14のタガの用材2点を除く。

4．結果及び考察

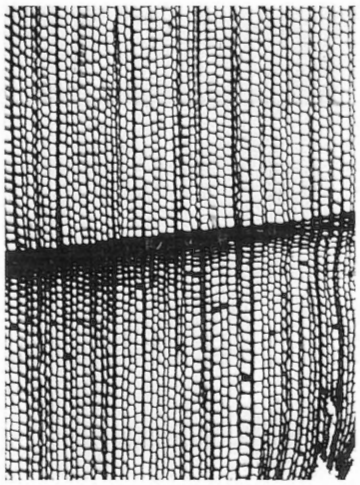
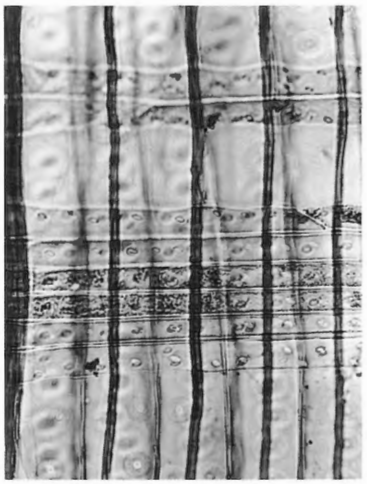
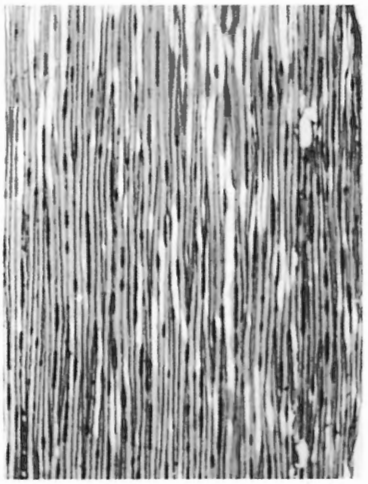
各井戸跡からは明らかに井戸枠あるいはその部材と考えられる資料ばかりではなく，もともとは井戸枠の部材に用いられていたと考えられる板材（崩落板材）が多数出土している。

これら全てについてその用材をみると，表－1に示すようにスギの利用が41.0%と極めて多く，ついでアスナロ(19.7%)，ケヤキ(15.6%)，ヒノキ(9.8%)，クリ(9.0%)と続く。スギ，アスナロ，ヒノキといった針葉樹は桶，樽，曲物，風呂桶などに利用されることからもわかるように水湿に強く，耐朽性が高い材である。また，ケヤキ，クリと言った広葉樹も強度が大きい上に木理が美しく，耐朽性が高い材として知られている。特にクリは，家屋の土台，屋根板，浴室用材，土木用材（橋梁，杭など），枕木などに用いられており，枕木は防腐剤を注入せずに使用する随一のものとされる。

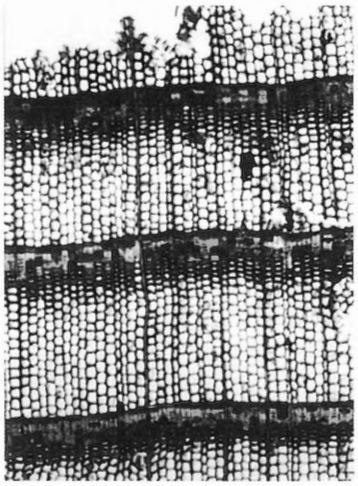
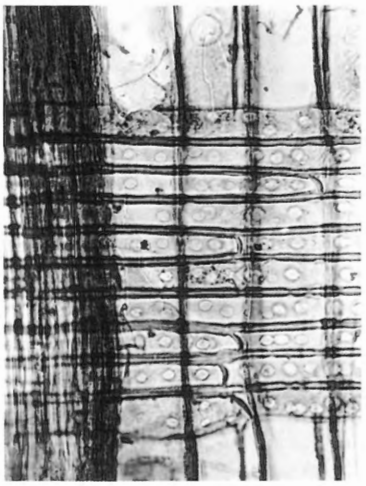
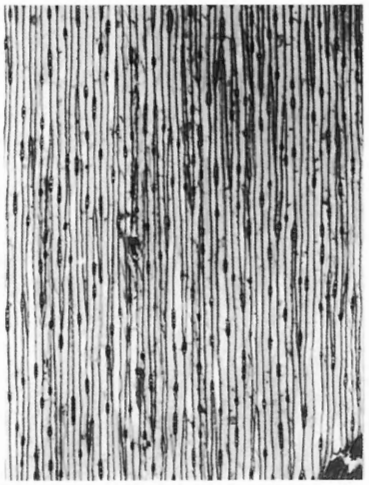
これらの樹種は，耐朽性に加えてその木の径がかなり大きくなること，材の入手が容易であったことなどからこれらが多く用いられたものと思われる。

各井戸についてみると，3・13・15号井戸跡では，枠組井戸枠の部材の用い方について少し相違がみられる。3号井戸跡では枠組井戸枠の部材の多くは，スギが用いられヒノキ，アスナロが補足的に用いられている。13号井戸跡では，ケヤキのみが用いられスギ，ヒノキ，アスナロといった材は用いられていない。(崩落井戸枠についても未同定の1点を除き他は全てケヤキである。この崩落井戸枠が枠組井戸枠の一部が崩落したものか，あるいは井戸枠の痛みがひどくなったため取り壊し新たにケヤキの材を用い井戸枠を作ったのか不明である。)15号井戸跡では，上部井戸枠にはクリを主に用い，枠組井戸枠には3号井戸跡と同様スギを主にヒノキ，アスナロを補足的に用いている。また，15号井戸跡の井戸枠外側止め木は，アスナロを主に用いスギ，ヒノキがこれに続く。枠組井戸枠の用材とは逆の順序になっており，井戸の部位により用材を選択して用いているようにも思える。

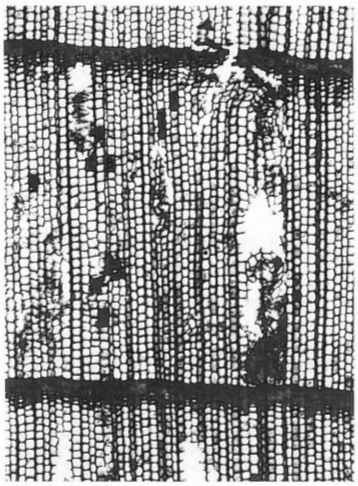
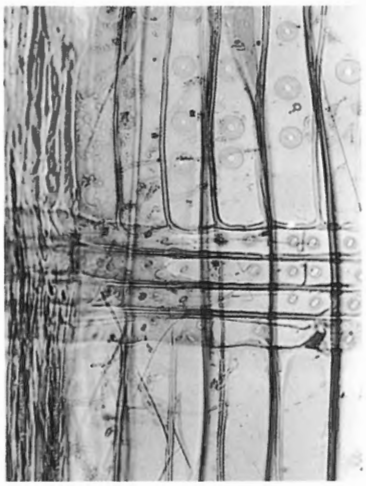
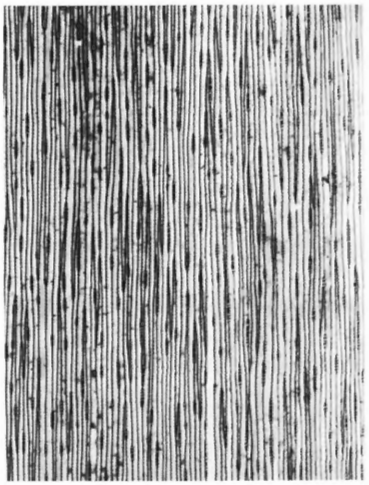
井戸により用材の利用の仕方が異なることがどのようなことに起因しているのかは不明であるが，その用材としては耐朽性のある材が使用されており，材を選択して井戸枠を作ったことがうかがえる。

1　スギ　C-30×　R-200×　T-50×
（23　ＳＥ03　枠組井戸枠）

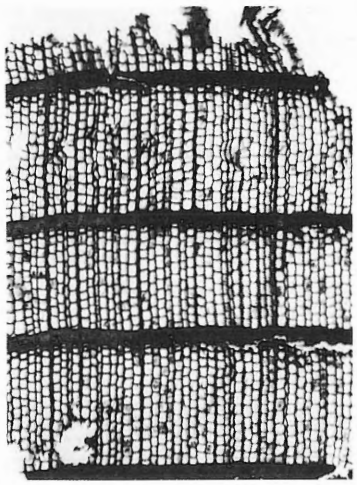




2　スギ　C-30×　R-200×　T-50×
（34　ＳＥ15　枠組井戸枠）

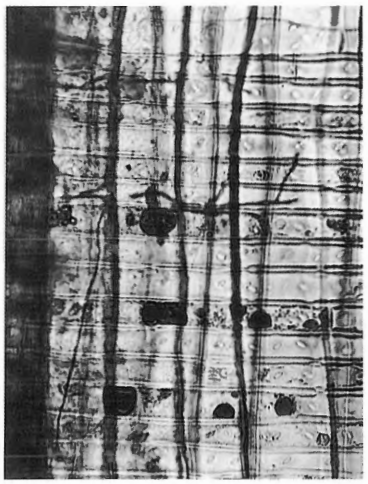
3　ヒノキ　C-30×　R-200×　T-50×
（67　ＳＥ15　崩落土内）

Ｃは木口，Ｒは柾目，Ｔは板目面を示し，後の数字は写真の倍率を示す。

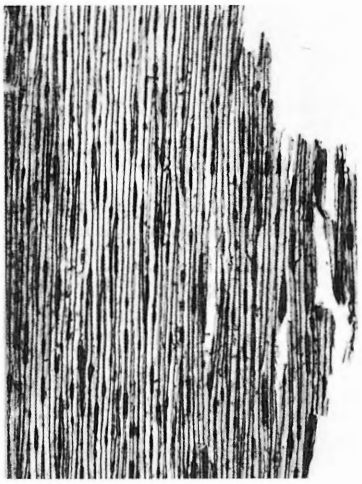


4　アスナロ　C-30×

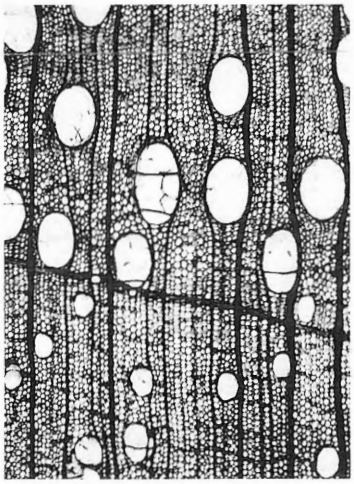
(86　ＳＥ15　崩落土内)



R-200×

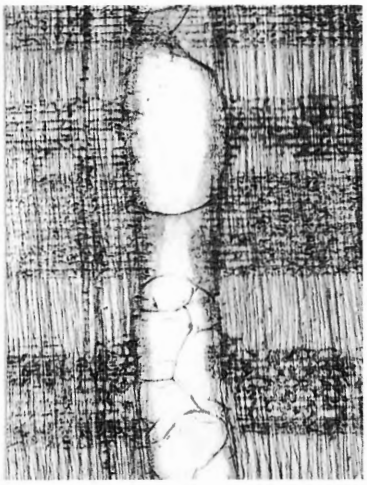


T-50×

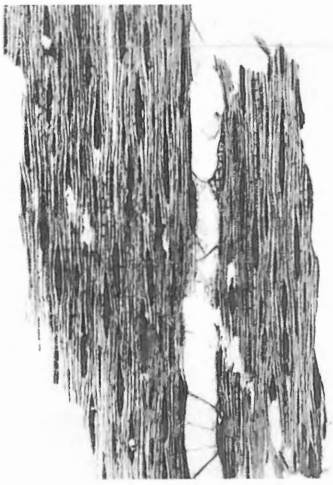


5　オニグルミ　C-30×

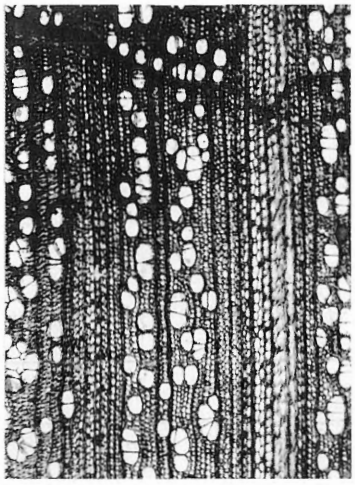
(62　ＳＥ13　井戸枠外側止め木)



R-100×

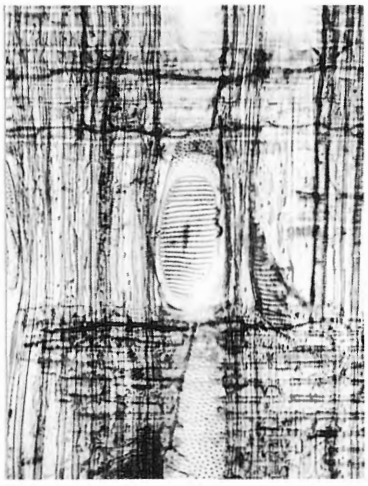


T-50×



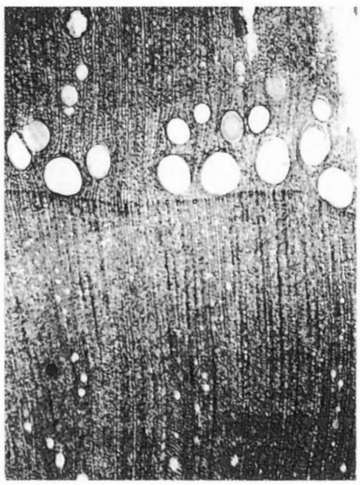
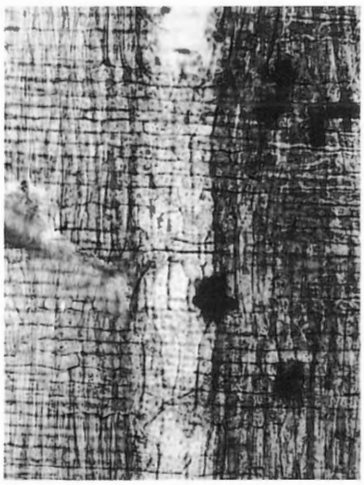
6　ハンノキ属　C-30×

(74　ＳＥ15　崩落土内)

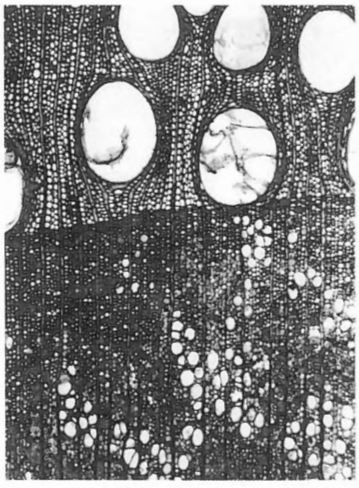


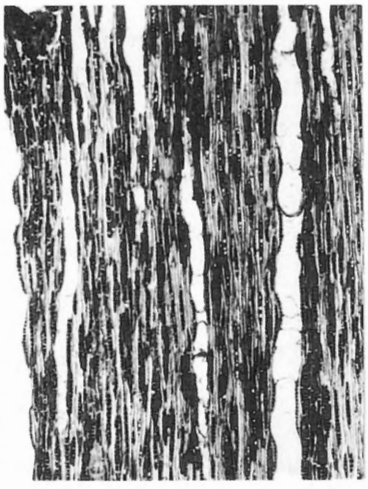
R-100×

T-50›

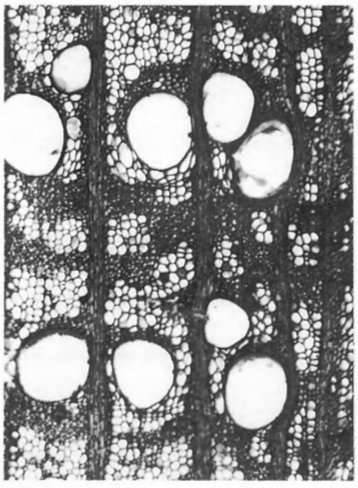



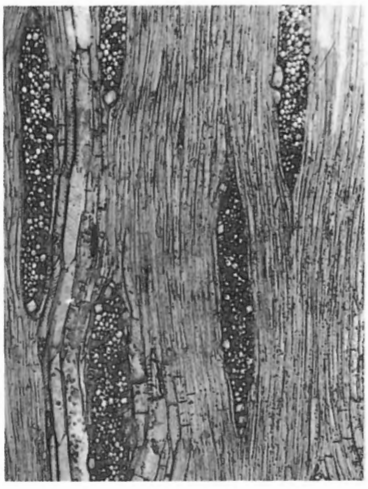
7　クヌギ　C-30×　R-100×　T-50×
（105　ＳＥ03　崩落土内）



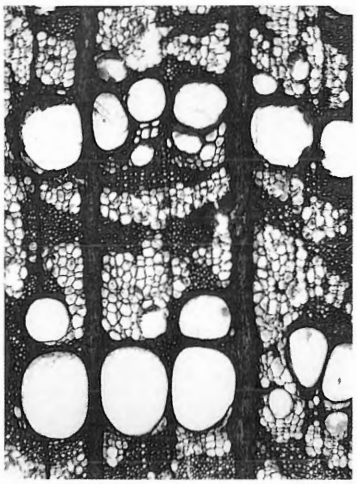


8　クワ　C-30×　R-100×　T-50×
（66　ＳＥ15　崩落土内）





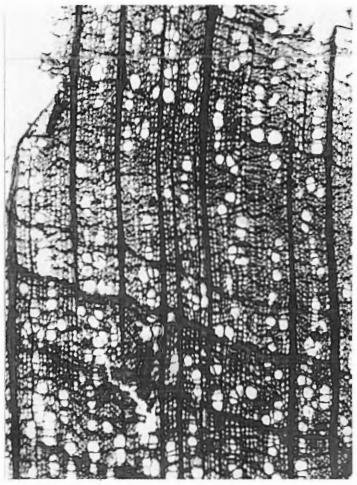
9　ケヤキ　C-30×　R-100×　T-50×
（2　ＳＥ13　枠組井戸枠　東中）



10　ケヤキ　C-30×
（12　ＳＥ13　崩落井戸枠）

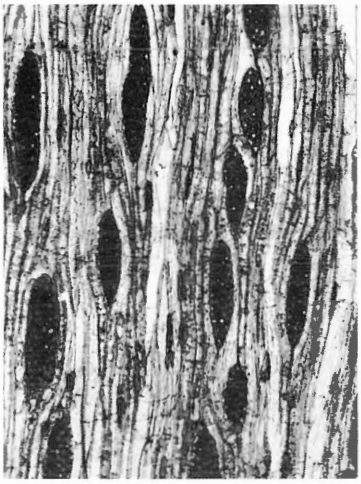
R-100×

T-50×

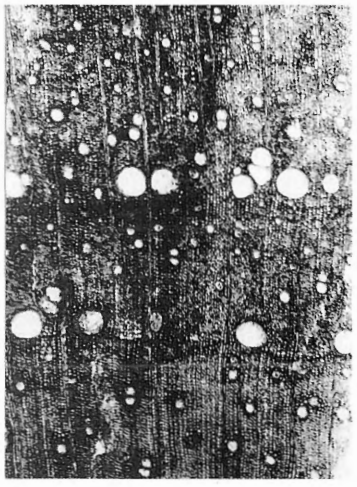


11　シナノキ　C-30×
（17　ＳＥ17　No.３）

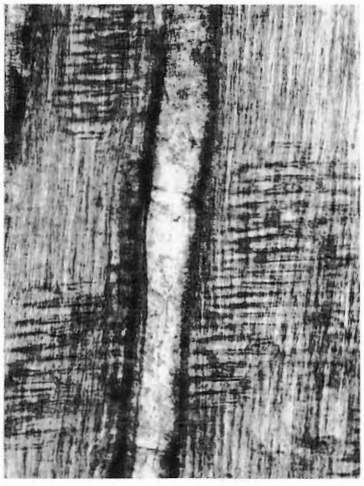
R-100×



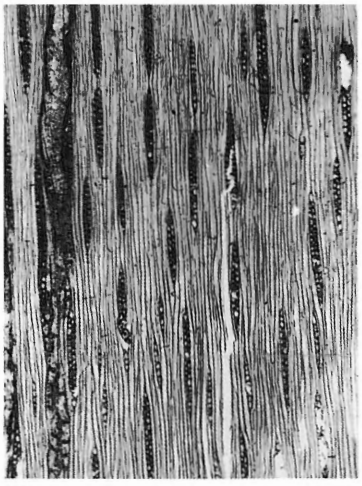
T-50×



12　トネリコ　C-30×
（用水路出土木材）



R-100×



T-50×

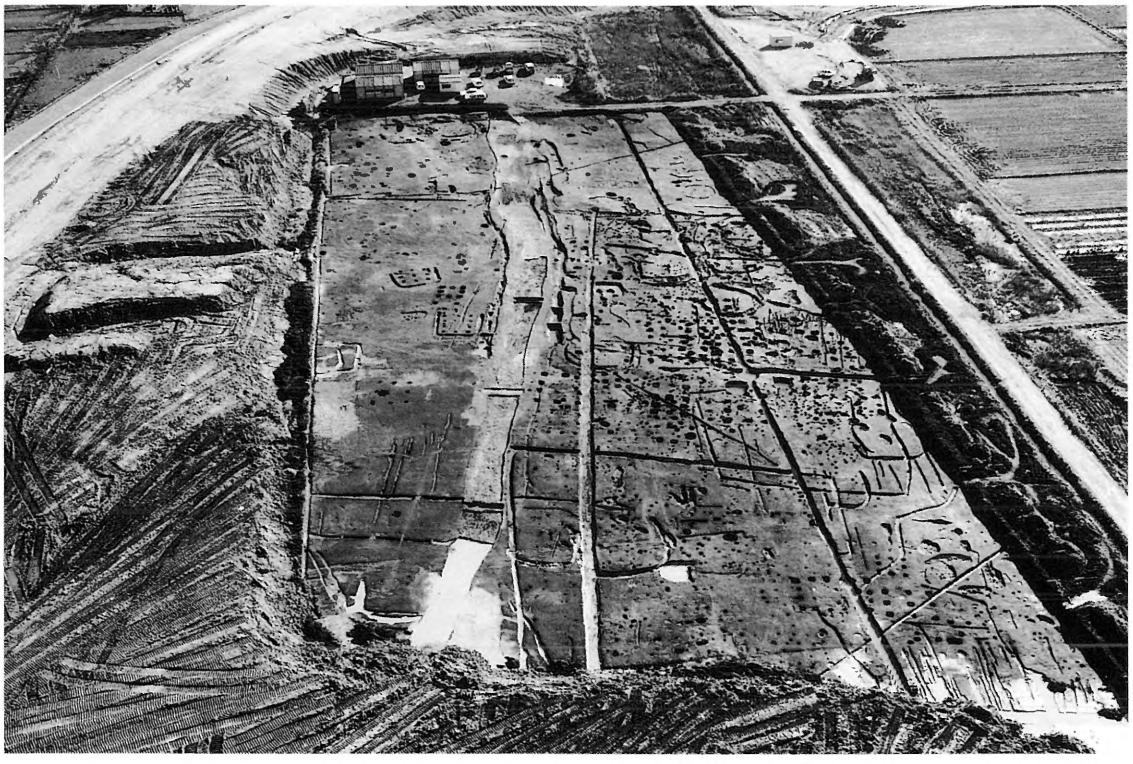
写真図版

図　版　目　次

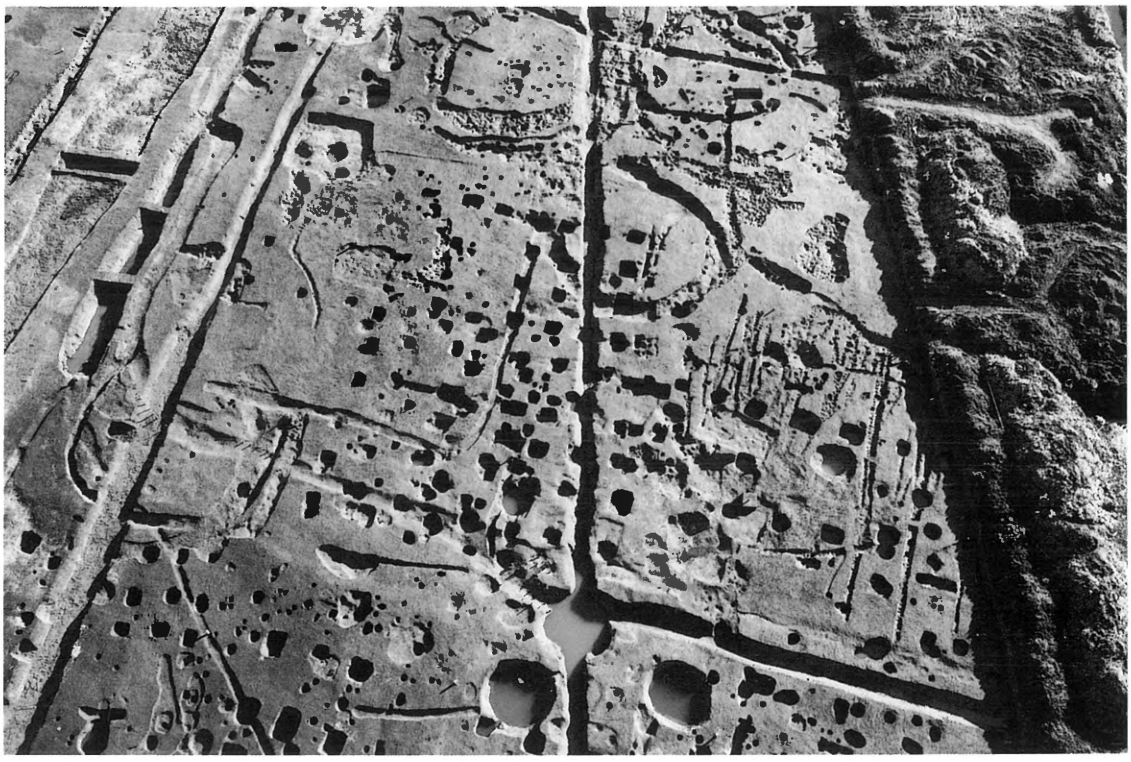
1　屋敷遺跡周辺航空写真……399
2　Ⅲ区全景……400
3　Ⅴ区全景……400
4　Ⅴ区遺構集中部(掘立建物群中心)……401
5　1号住居跡……401
6　2号住居跡遺物出土状況……402
7　2号住居跡遺物出土状況細部……402
8　6号住居跡……403
9　7号住居跡……403
10　11号住居跡……404
11　12号住居跡……404
12　5号建物跡検出状況……405
13　6号建物跡……405
14　7号建物跡……406
15　8号建物跡検出状況……406
16　9号建物跡検出状況……407
17　10号建物跡……407
18　12号建物跡検出状況……408
19　14号建物跡検出状況……408
20　15号建物跡検出状況……409
21　16号建物跡……409
22　17号建物跡……410
23　18号建物跡……410
24　20号建物跡検出状況……411
25　21号建物跡……411
26　24号建物跡……412
27　27号建物跡検出状況……412
28　28号建物跡検出状況……413
29　29号建物跡検出状況……413
30　31号建物跡検出状況……414
31　33号建物跡検出状況……414
32　1号井戸跡……415
33　3号井戸跡検出状況……415
34　3号井戸跡井戸枠……416
35　3号井戸跡細部……416
36　6～11号井戸跡……417
37　13号井戸跡遺物出土状況……418
38　13号井戸跡……418
39　12～14・17・19号井戸跡……419
40　15号井戸跡上部……420
41　15号井戸跡下部……420
42　1号周溝状遺構……421
43　2号周溝状遺構……421
44　3号周溝状遺構検出状況……422
45　6号周溝状遺構検出状況……422
46　4号周溝状遺構……423
47　4号周溝状遺構遺物出土状況……423
48　5号周溝状遺構……424
49　5号周溝状遺構遺物出土状況……424
50　7号周溝状遺構遺物出土状況(1)……425
51　7号周溝状遺構遺物出土状況(2)……425
52　13号周溝状遺構遺物出土状況，
　1～3・5号埋甕，一括土器……426
53　畝状遺構……427
54　1号特殊遺構……427
55　9号特殊遺構遺物出土状況……428
56　9号特殊遺構遺物出土状況細部……428
57　土器(1)縄文土器・鉢，弥生土器・壺，蓋……429
58　土器(2)弥生土器・壺……430
59　土器(3)弥生土器・壺……431
60　土器(4)弥生土器・壺，甕……432
61　土器(5)弥生土器・壺，甕……433
62　土器(6)弥生土器・注口土器，壺……434
63　土器(7)弥生土器，土師器・壺，小型丸底壺……435
64　土器(8)土師器・高杯……436
65　土器(9)土師器・高杯，器台，鉢……437
66　土器(10)土師器・甕，小型甕，台付甕……438
67　土器(11)土師器・甕……439
68　土器(12)土師器・甕……440
69　土器(13)土師器・杯……441
70　土器(14)土師器・杯……442
71　土器(15)土師器・杯……443
72　土器(16)土師器・杯……444
73　土器(17)土師器・甕，赤焼土器・杯……445
74　土器(18)須恵器・杯……446
75　土器(19)須恵器・杯……447
76　土器(20)須恵器・長頸瓶，風字硯……448
77　土器(21)弥生土器・壺……449
78　土器(22)弥生土器・甕……449
79　土器(23)弥生土器・壺，高杯……450
80　土器(24)弥生土器・壺，甕……450
81　土器(25)弥生土器・壺……451
82　土器(26)弥生土器・壺……451
83　土器(27)弥生土器・壺……452
84　土器(28)弥生土器・壺……452
85　墨書土器部分(1)……453
86　墨書土器部分(2)……454
87　墨書土器部分(3)……455
88　墨書土器部分(4)……456
89　墨書土器部分(5)……457
90　3号井戸跡・井戸枠(1)……458
91　3号井戸跡・井戸枠(2)……459
92　12号井戸跡・井戸枠(1)……460
93　12号井戸跡・井戸枠(2)……461
94　12号井戸跡・井戸枠(3)……462
95　15号井戸跡・井戸枠(1)……463
96　15号井戸跡・井戸枠(2)……464
97　15号井戸跡・井戸枠(3)……465
98　15号井戸跡・井戸枠(4)……466
99　15号井戸跡・井戸枠(5)……467
100　15号井戸跡・井戸枠(6)……468
101　15号井戸跡・井戸枠(7)……469
102　14号井戸跡他出土木製品……470

1　屋敷遺跡周辺航空写真

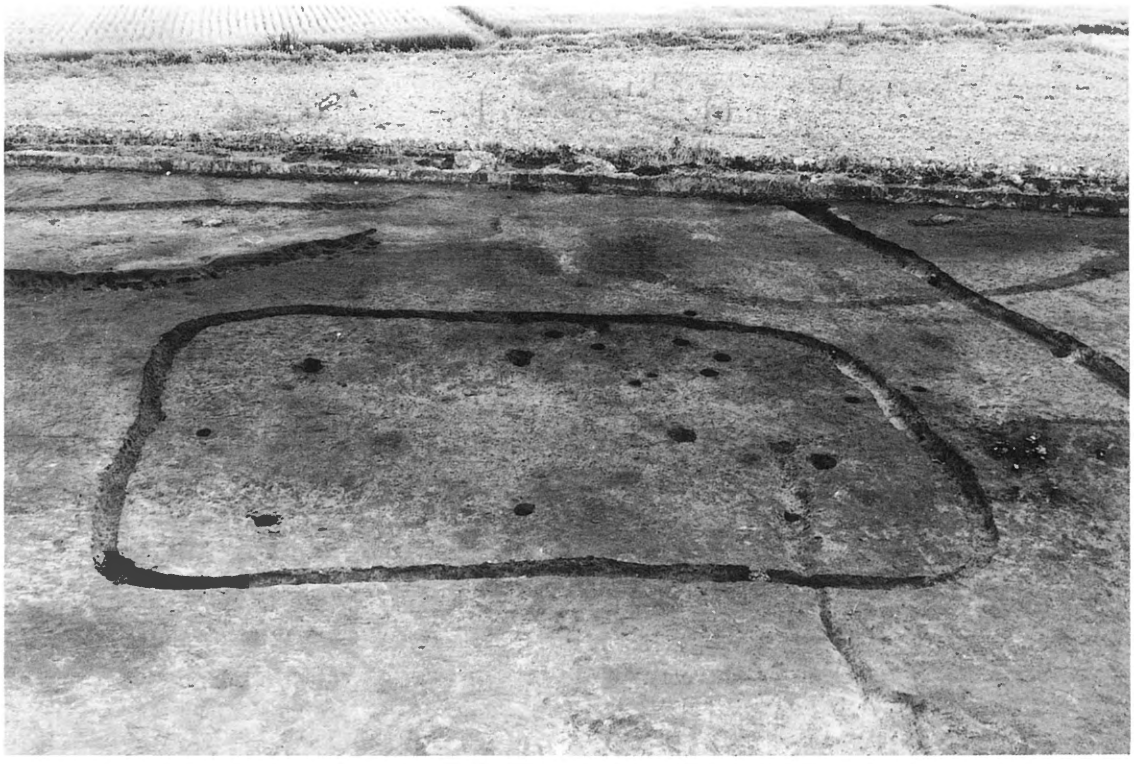
2　Ⅲ区全景



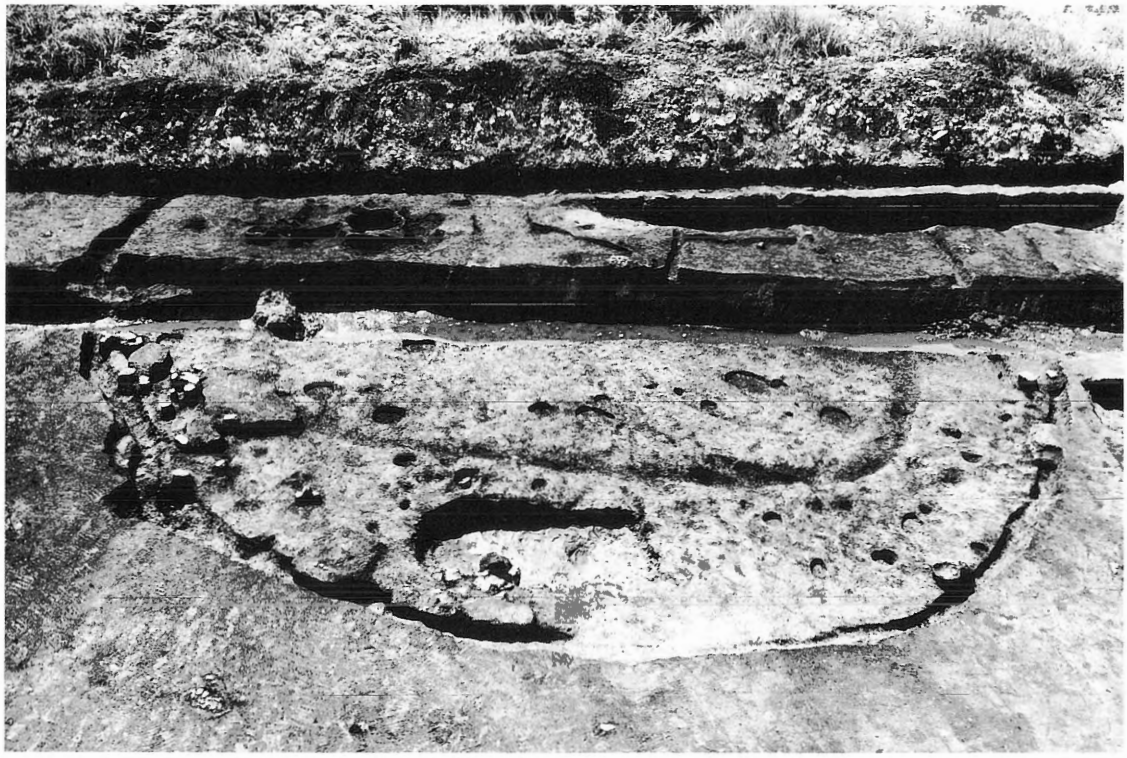
3　Ⅴ区全景



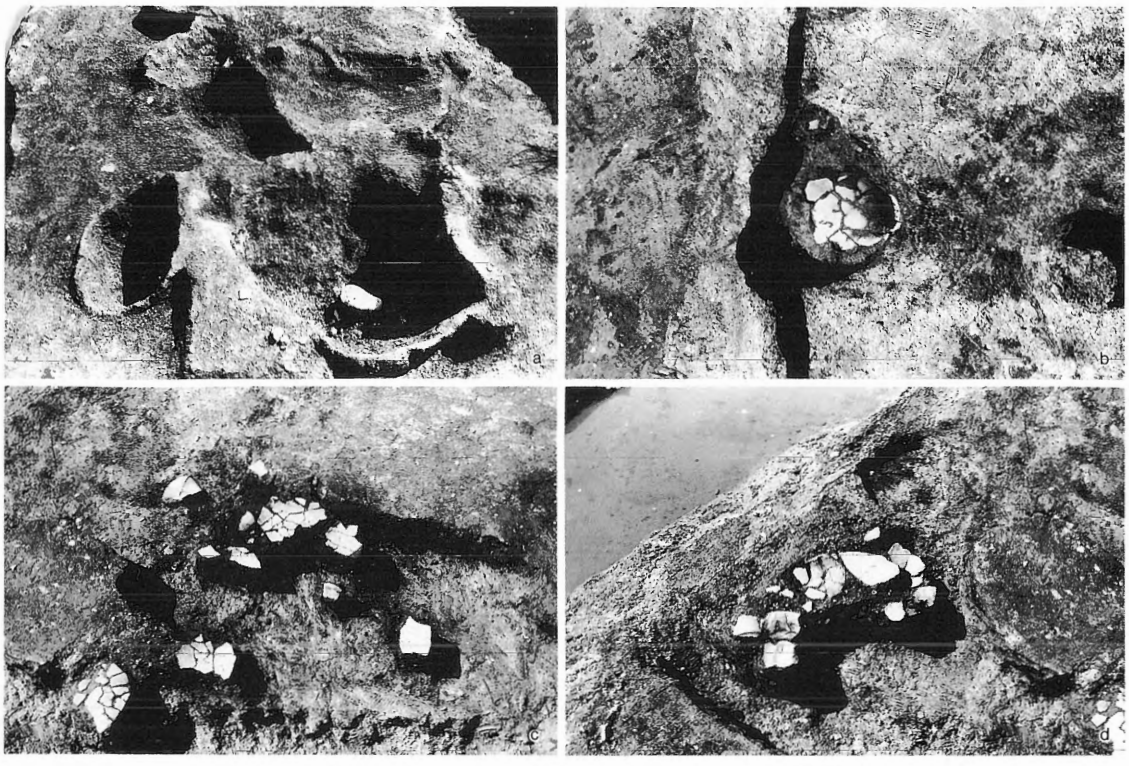
4　Ⅴ区遺構集中部(堀立建物群中心)



5　1号住居跡(西から)

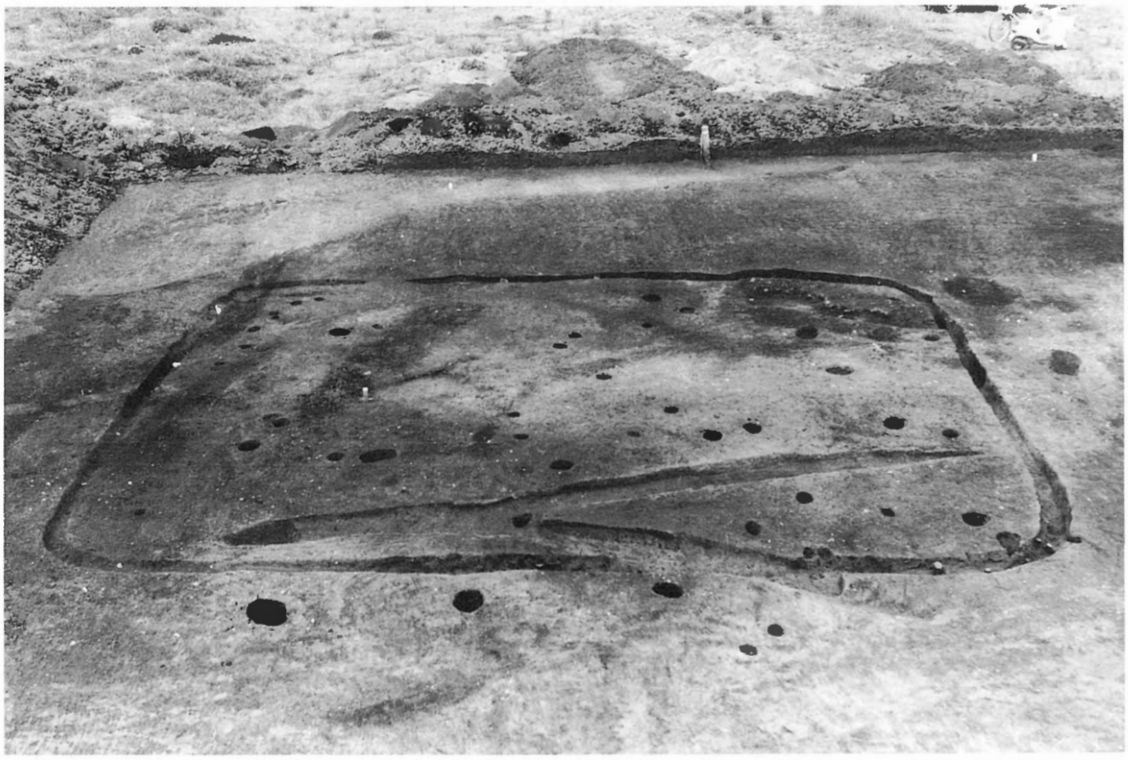


6　2号住居跡遺物出土状況(西から)

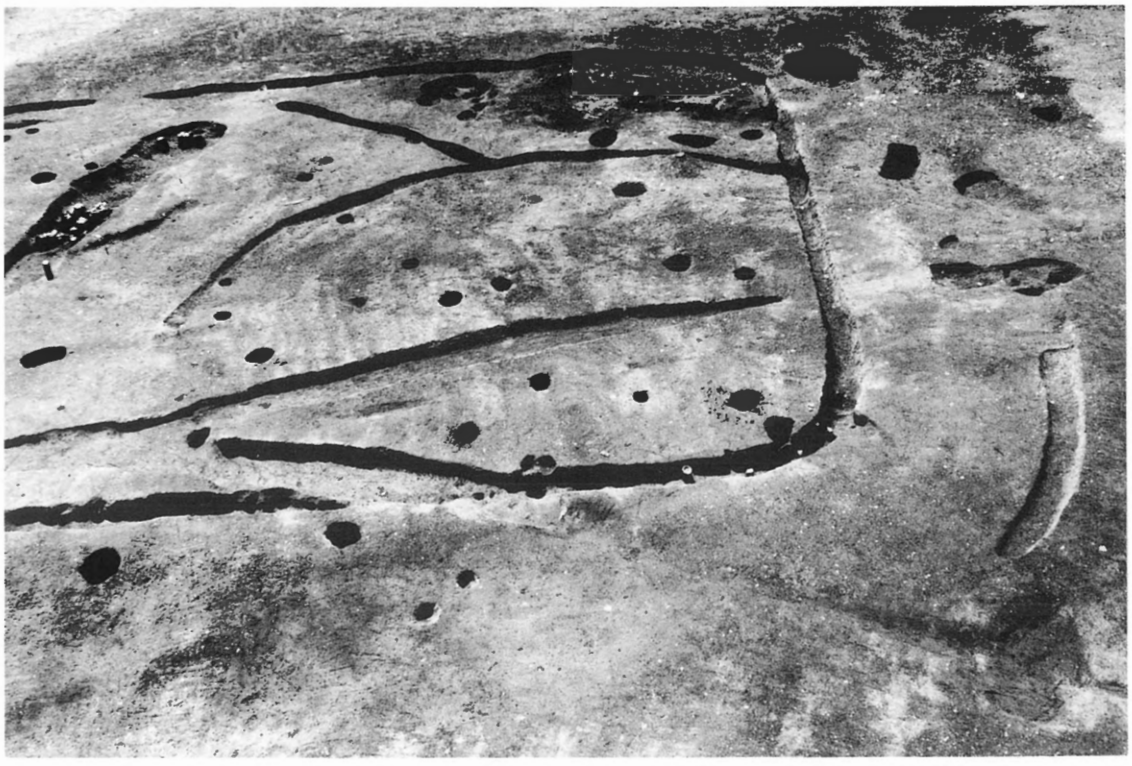


7　2号住居跡遺物出土状況細部

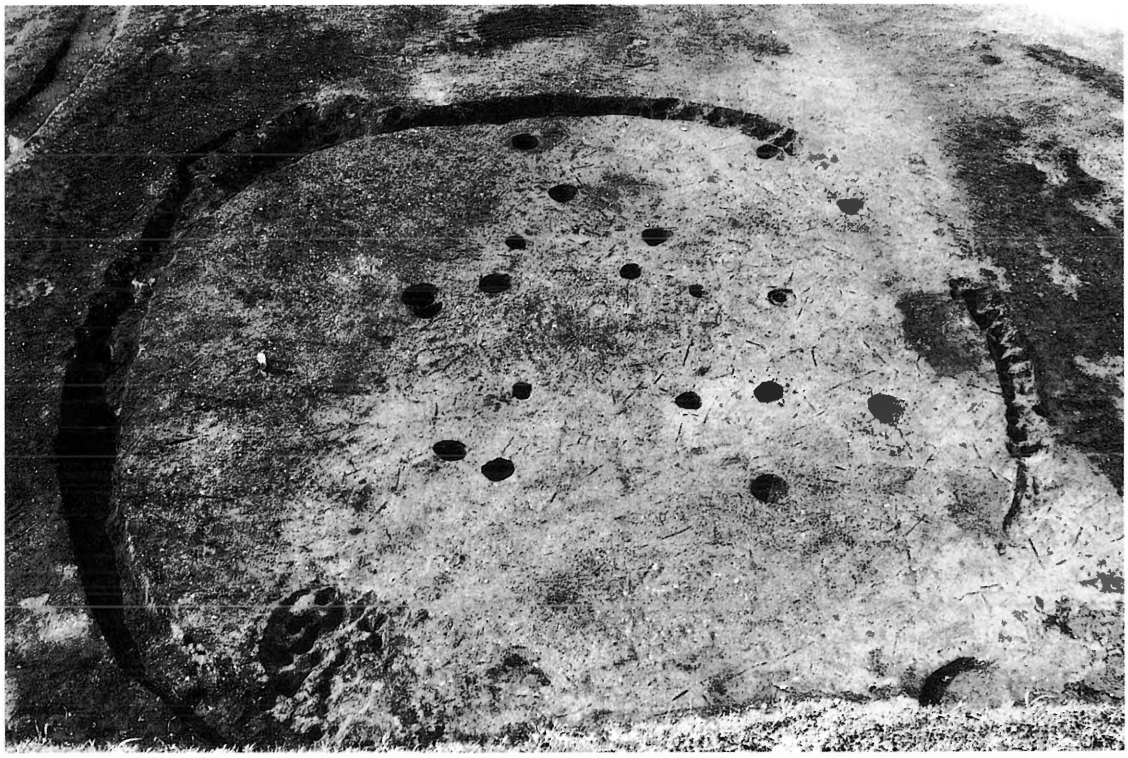
a．南炉(北から)　b．北側壁際
c．南側遺物集中部(南)　d．中央部(南)



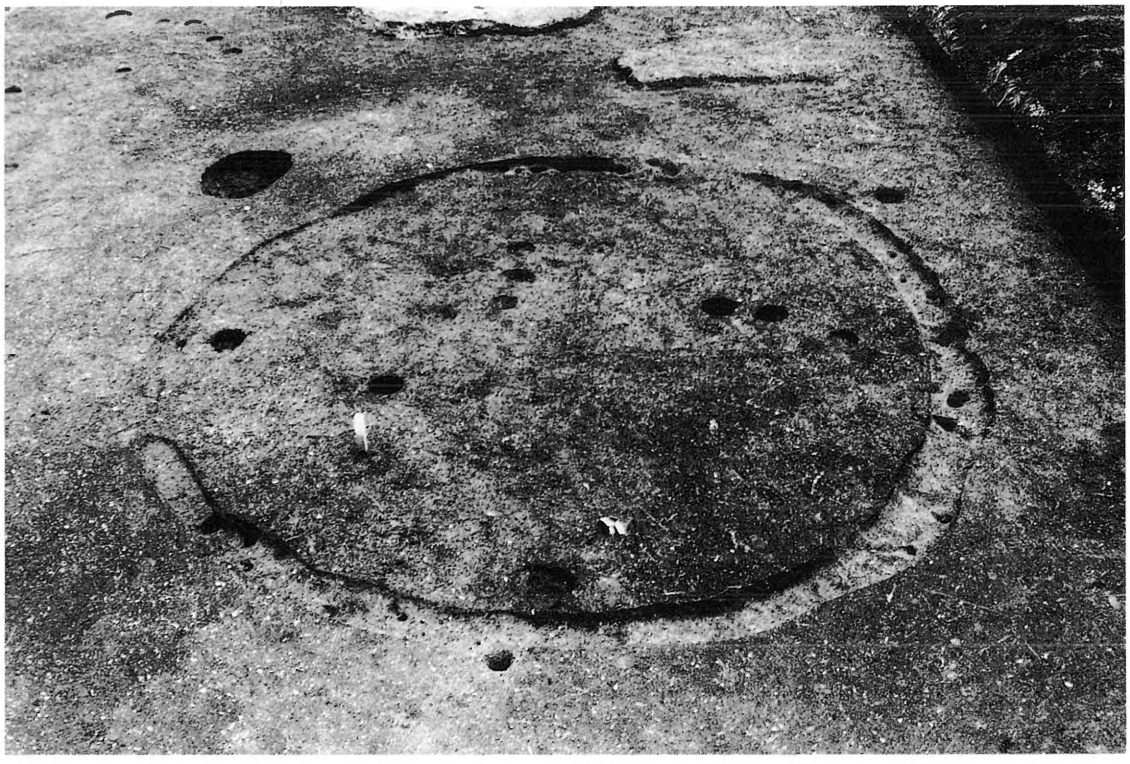
8　6号住居跡（東から）



9　7号住居跡（東から）



10　11号住居跡(南から)



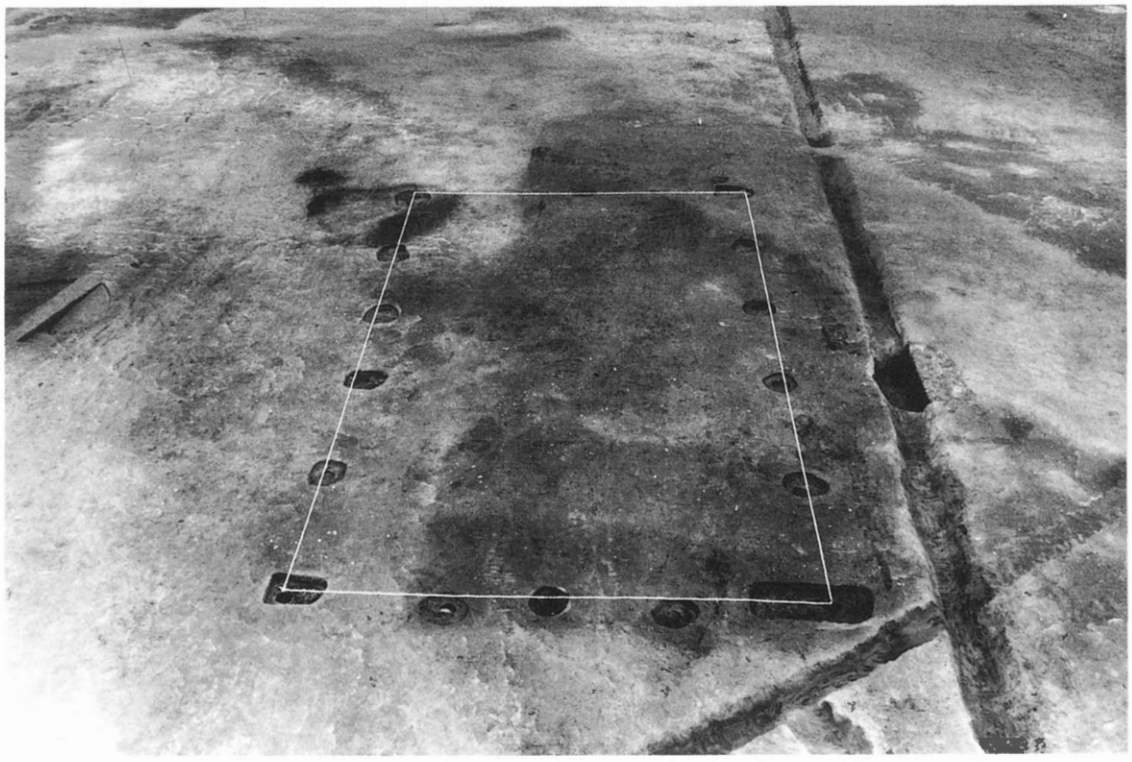
11　12号住居跡(南から)

12　5号建物跡検出状況(南から)

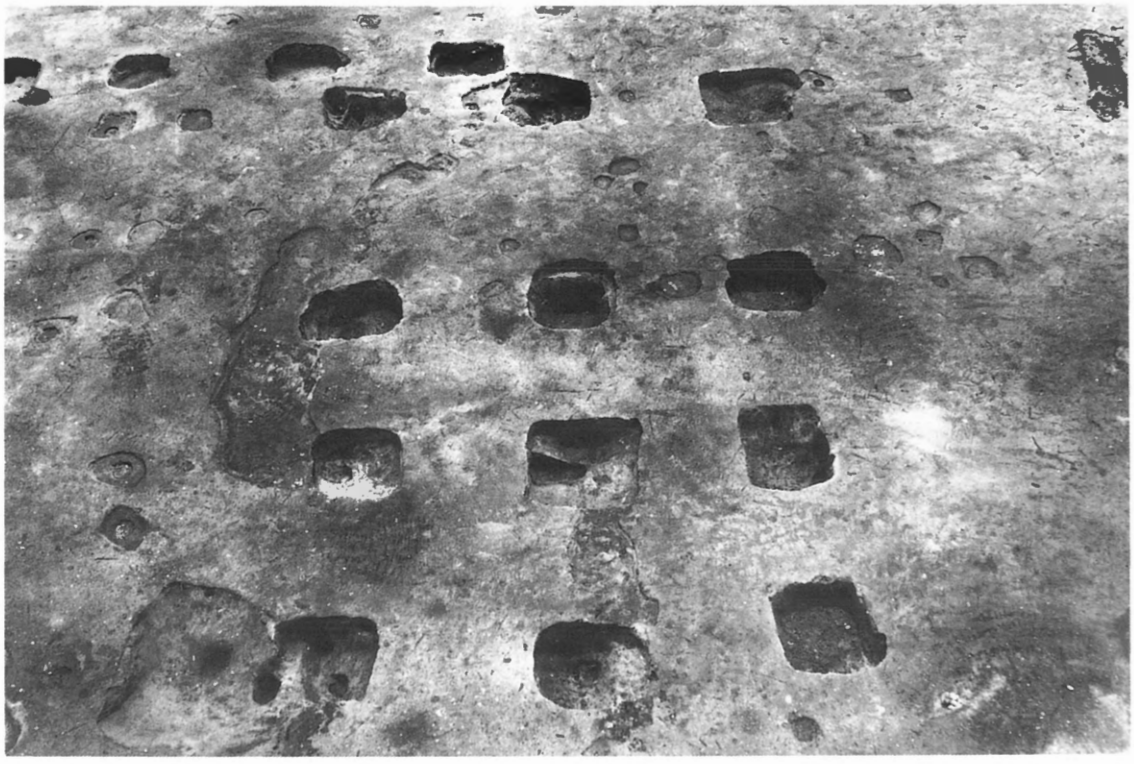
13　6号建物跡(南から)

14　7号建物跡(南から)

15　8号建物跡検出状況(南から)



16　9号建物跡検出状況(北から)

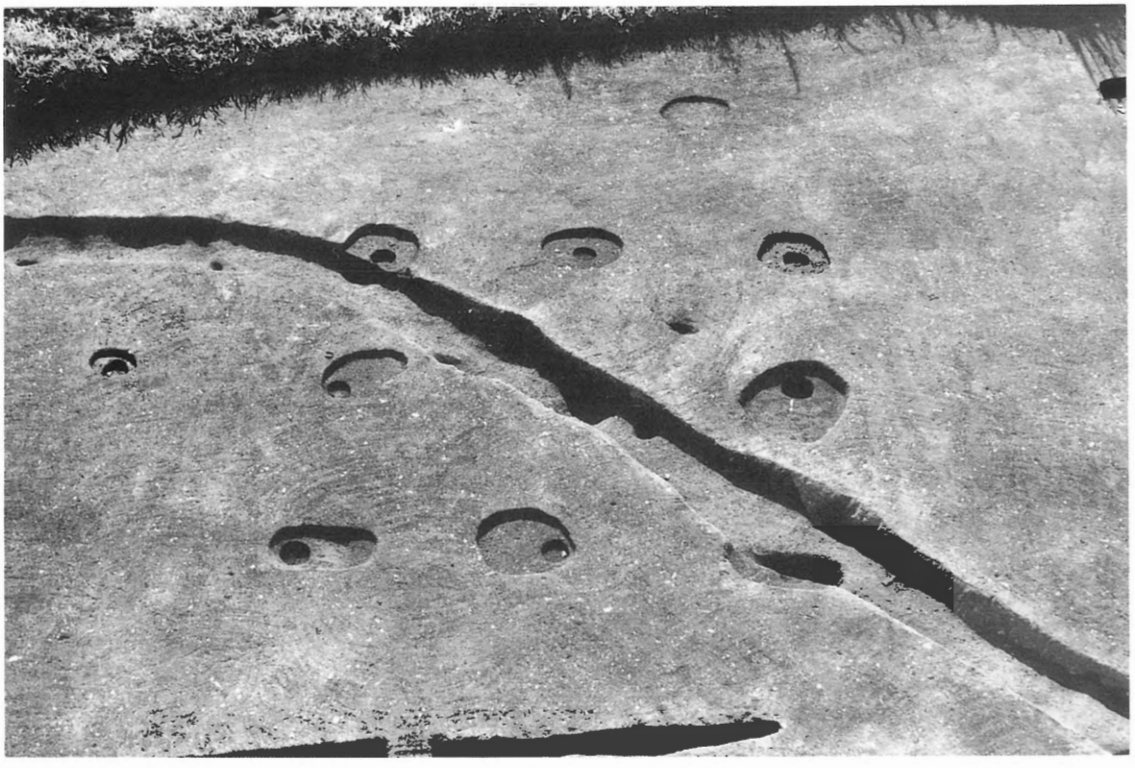


17　10号建物跡(北から)

18　12号建物跡検出状況（東から）

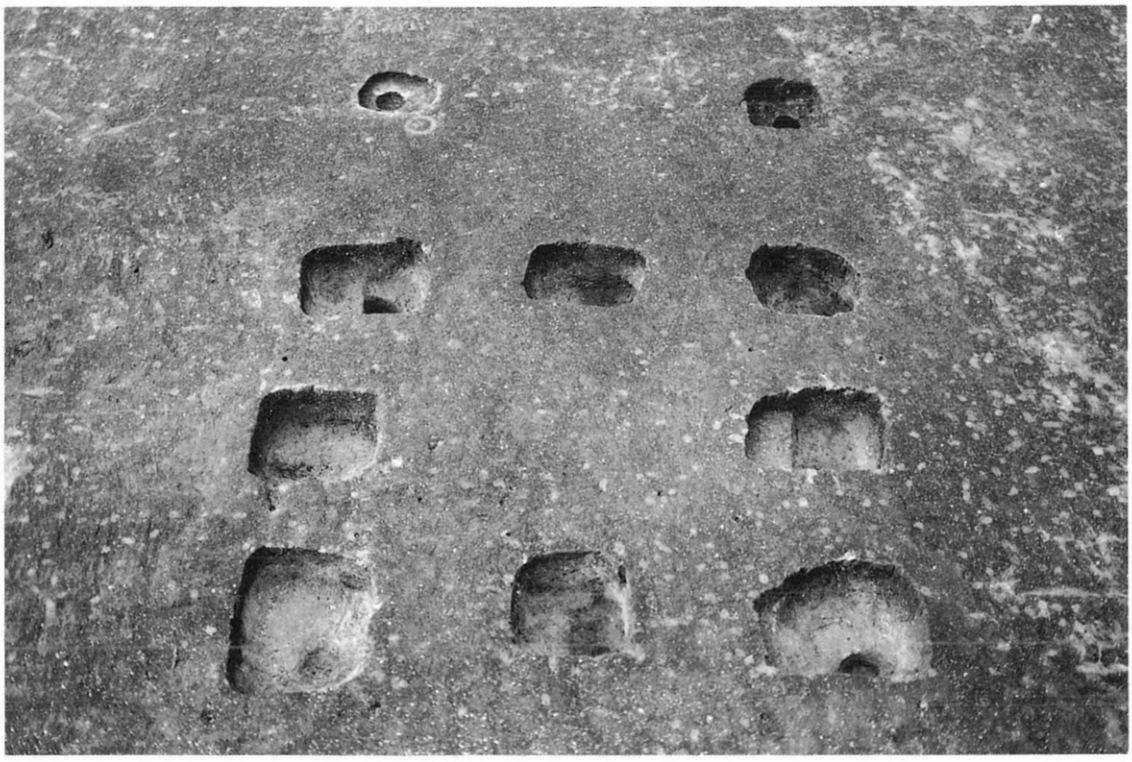
19　14号建物跡検出状況（北から）

20　15号建物跡検出状況（北から）

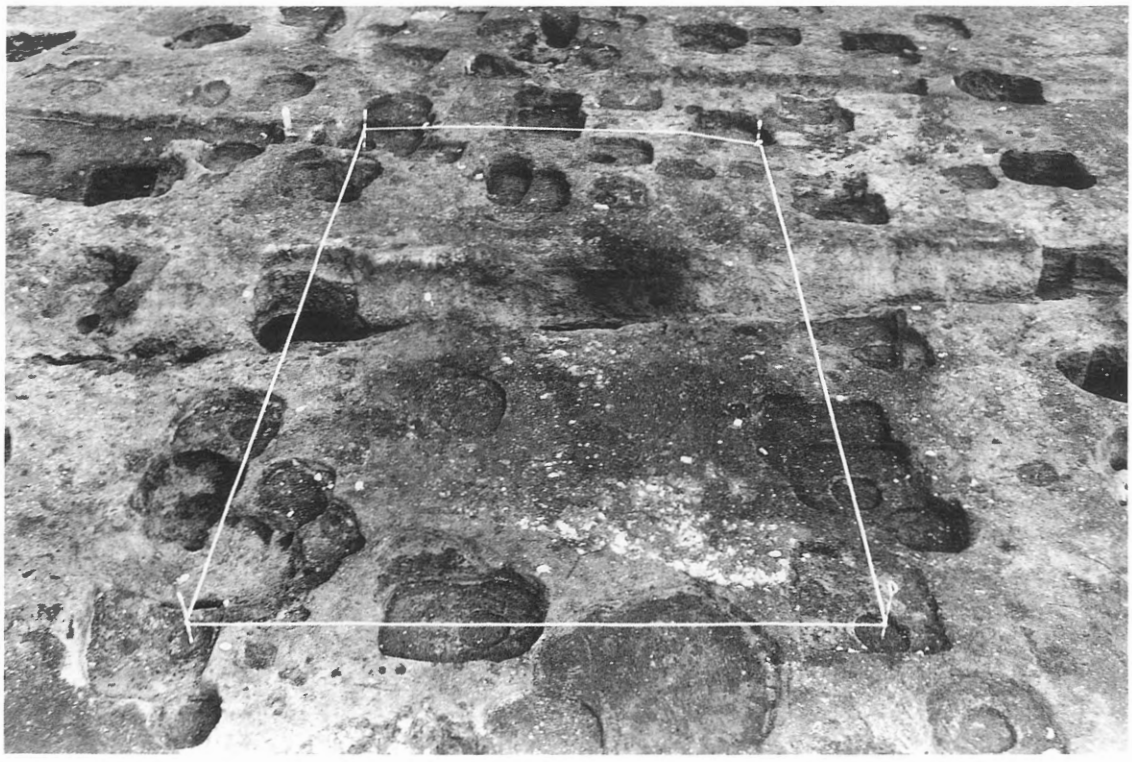


21　16号建物跡（東から）

22　17号建物跡（南から）



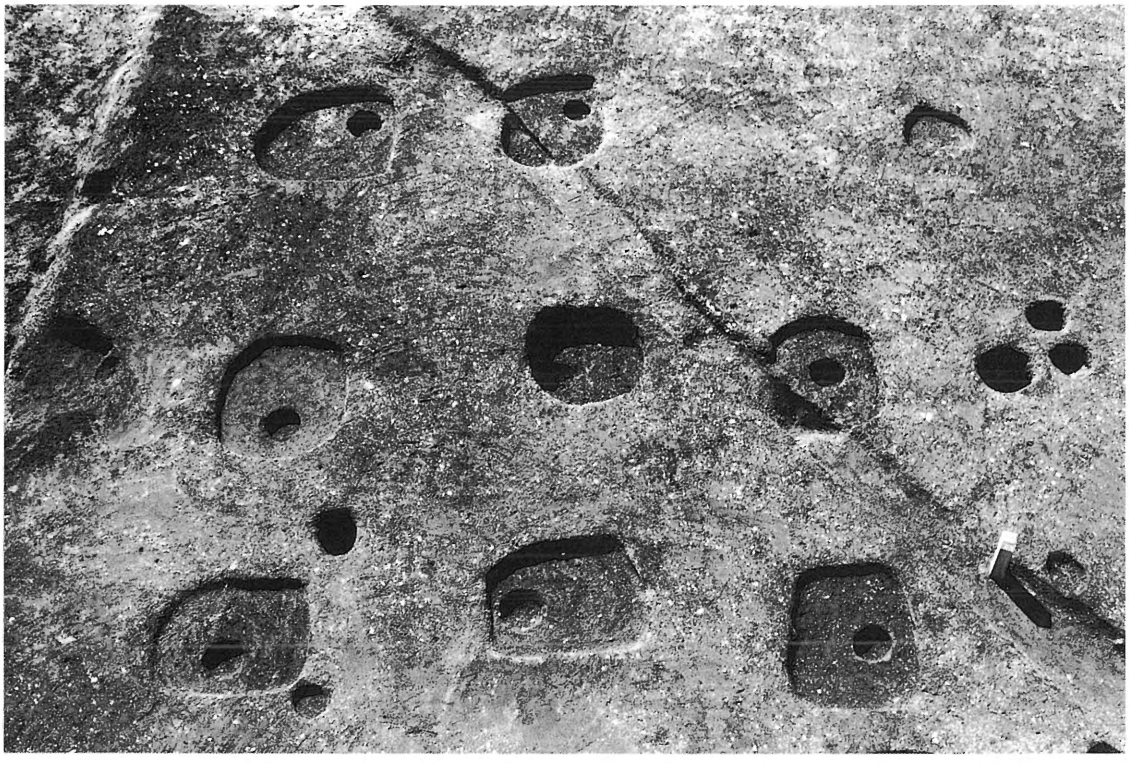
23　18号建物跡（南から）



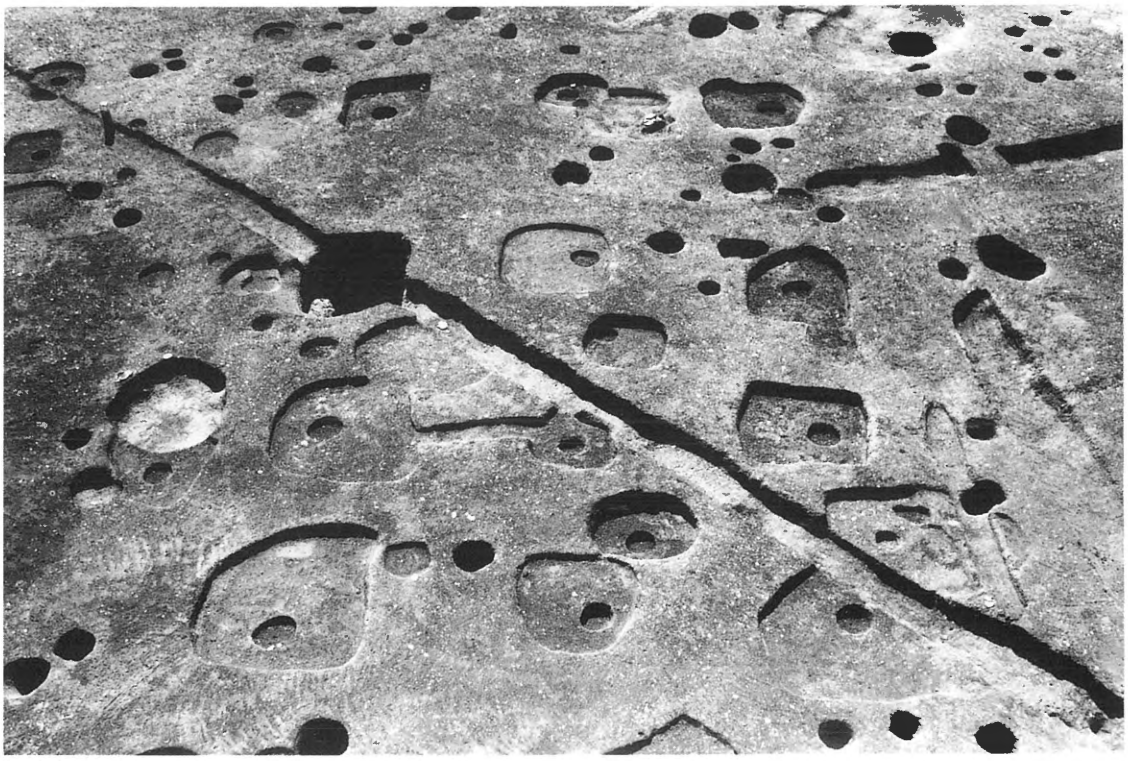
24　20号建物跡検出状況（西から）

25　21号建物跡（西から）

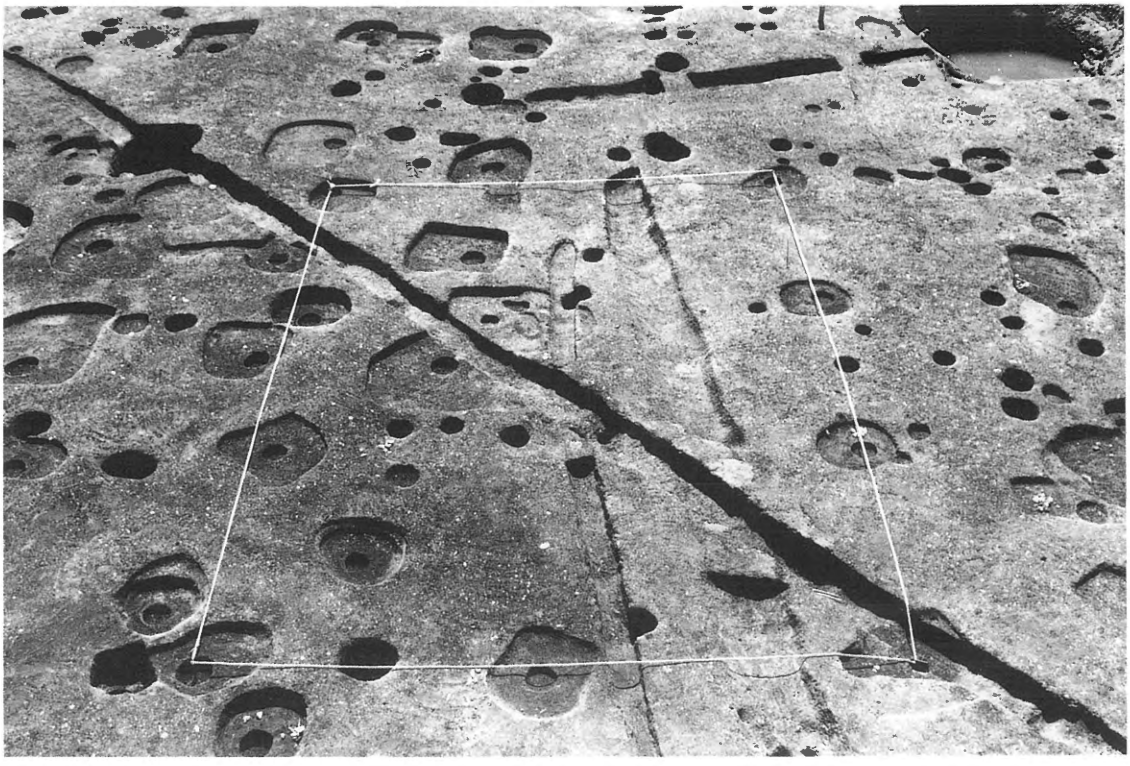
26　24号建物跡（東から）



27　27号建物跡検出状況（北から）

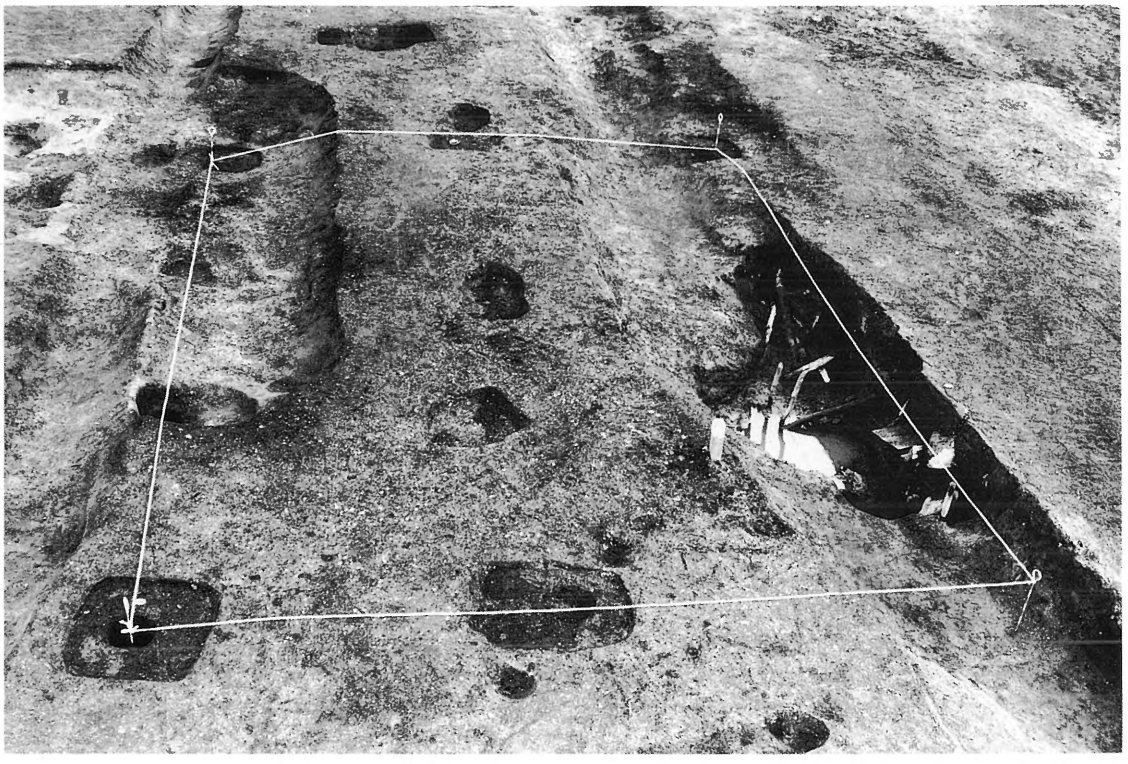


28　28号建物跡検出状況（北から）



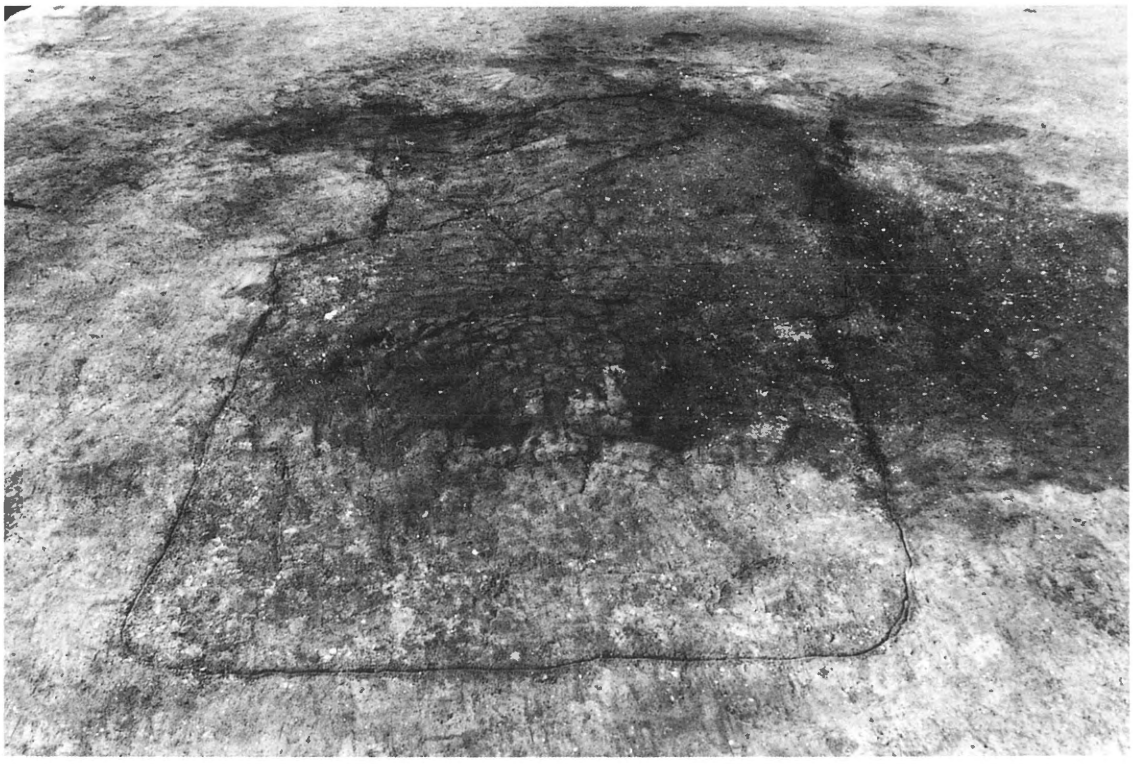
29　29号建物跡検出状況（北から）

30　31号建物跡検出状況（南から）

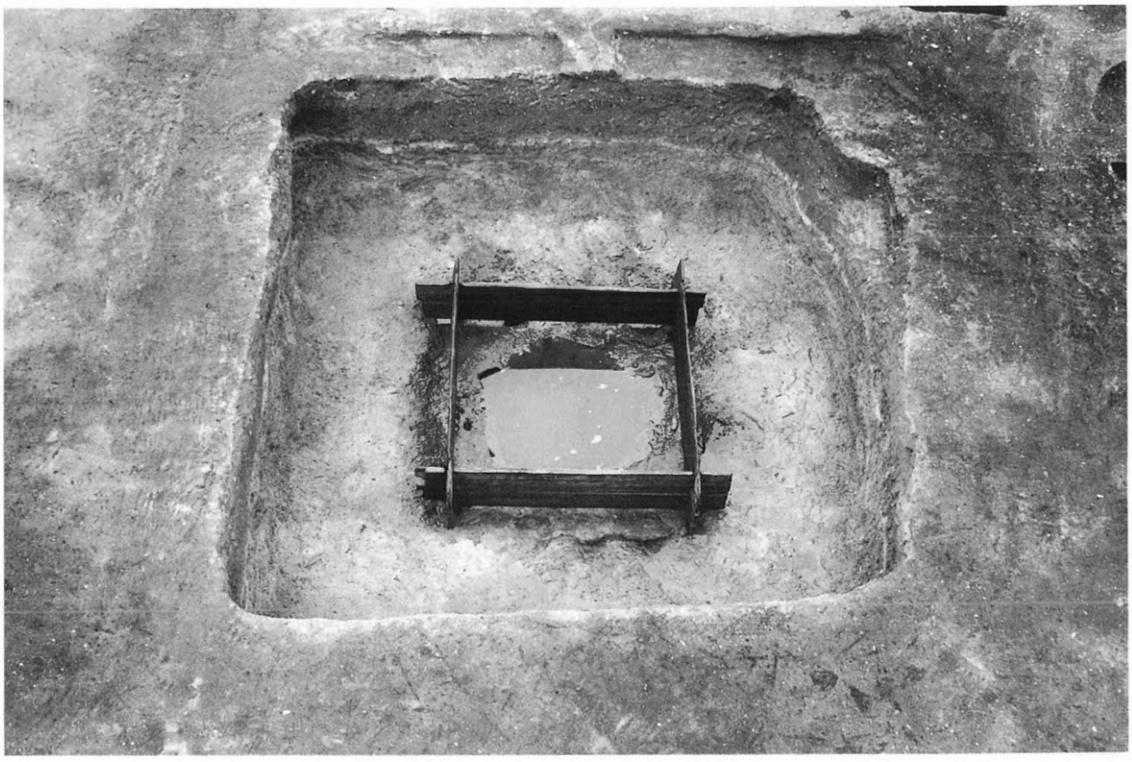


31　33号建物跡検出状況（南から）

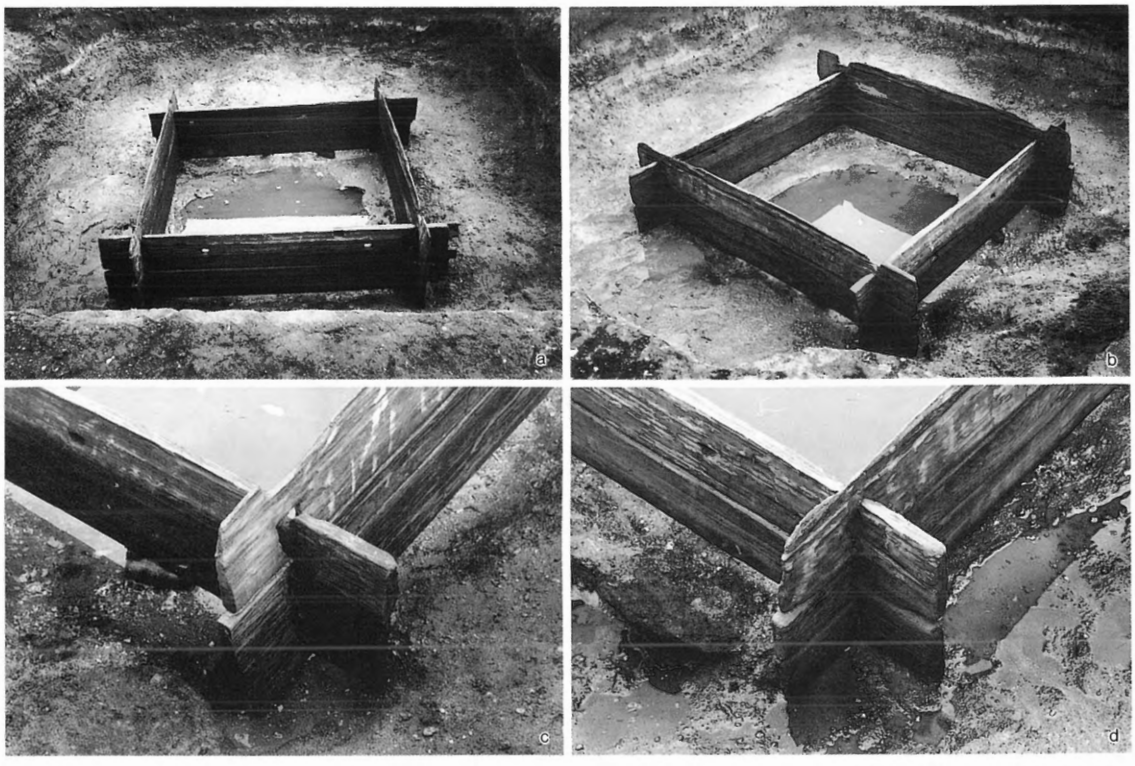
32　1号井戸跡(西から)



33　3号井戸跡検出状況(南から)

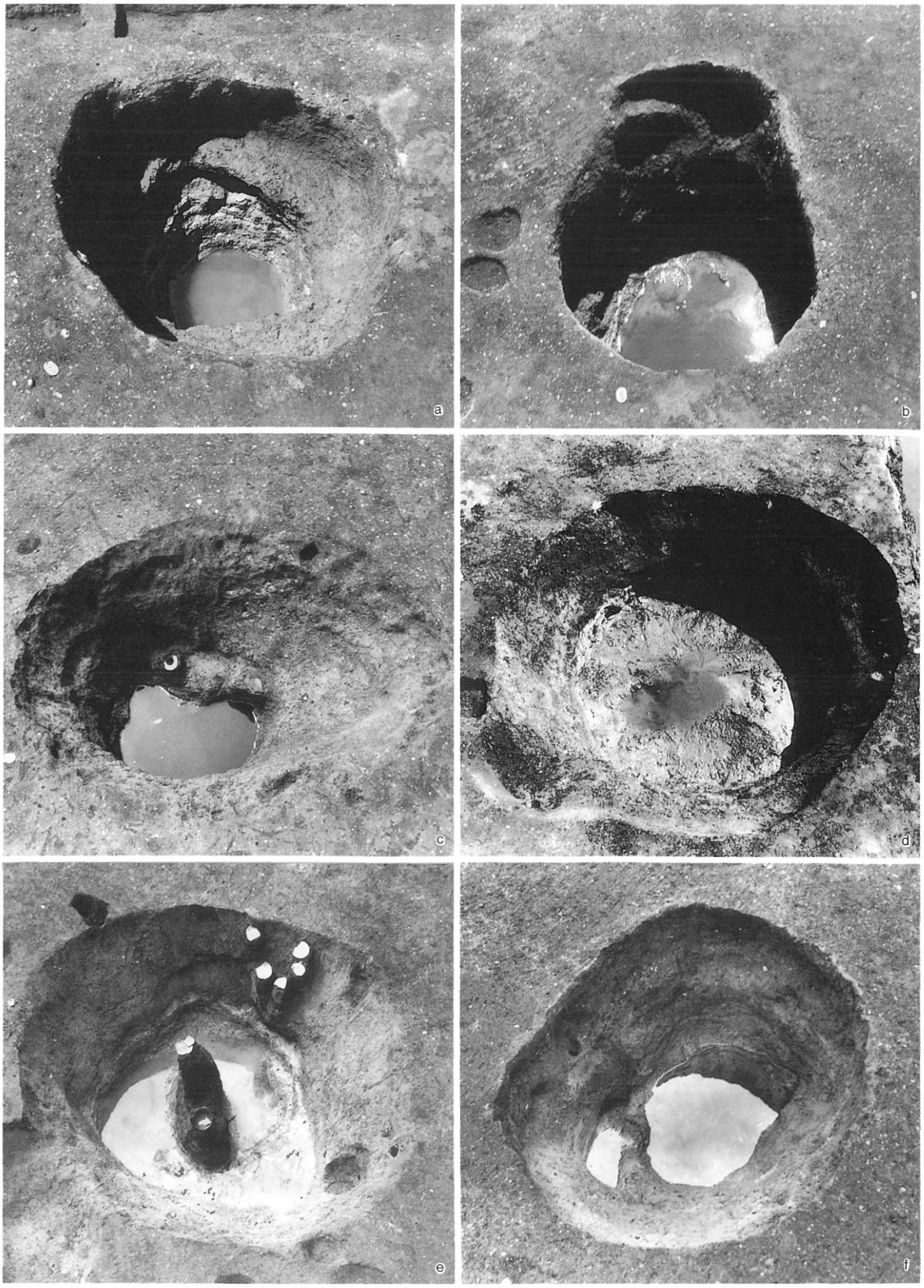


34　3号井戸跡井戸枠(南から)



35　3号井戸跡細部

a．枠(南から)　b．枠(東から)
c．枠(北西部分)　d．枠(南西部分)

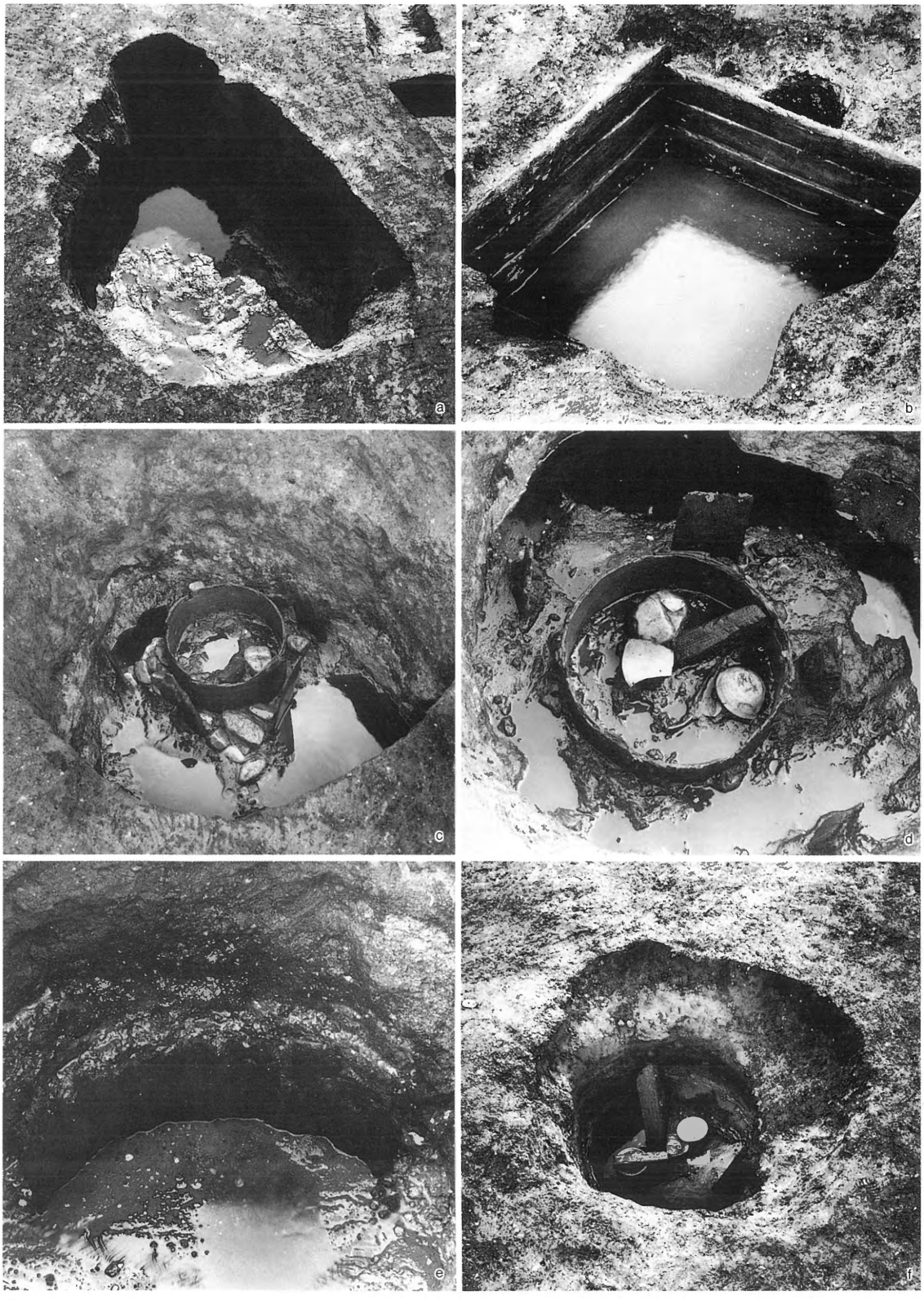


36　6～11号井戸跡

a．6号　b．7号　c．8号
d．9号　e．10号　f．11号

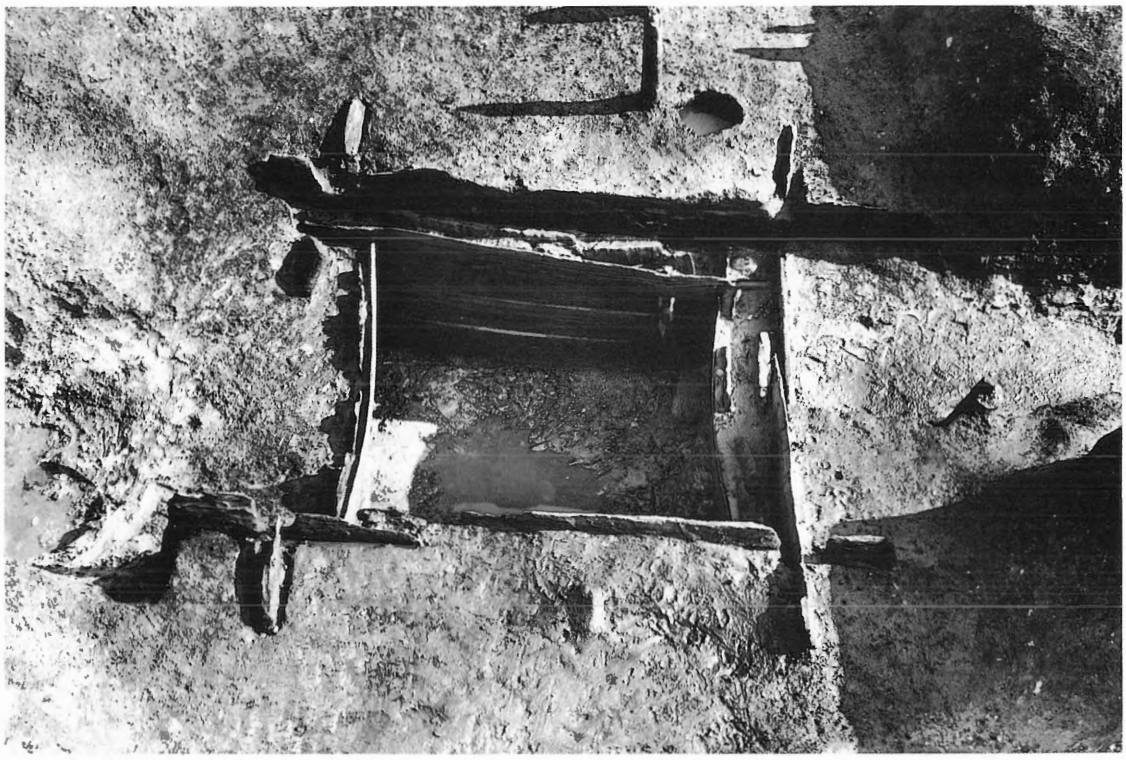
37　13号井戸跡遺物出土状況（北から）

38　13号井戸跡（北から）

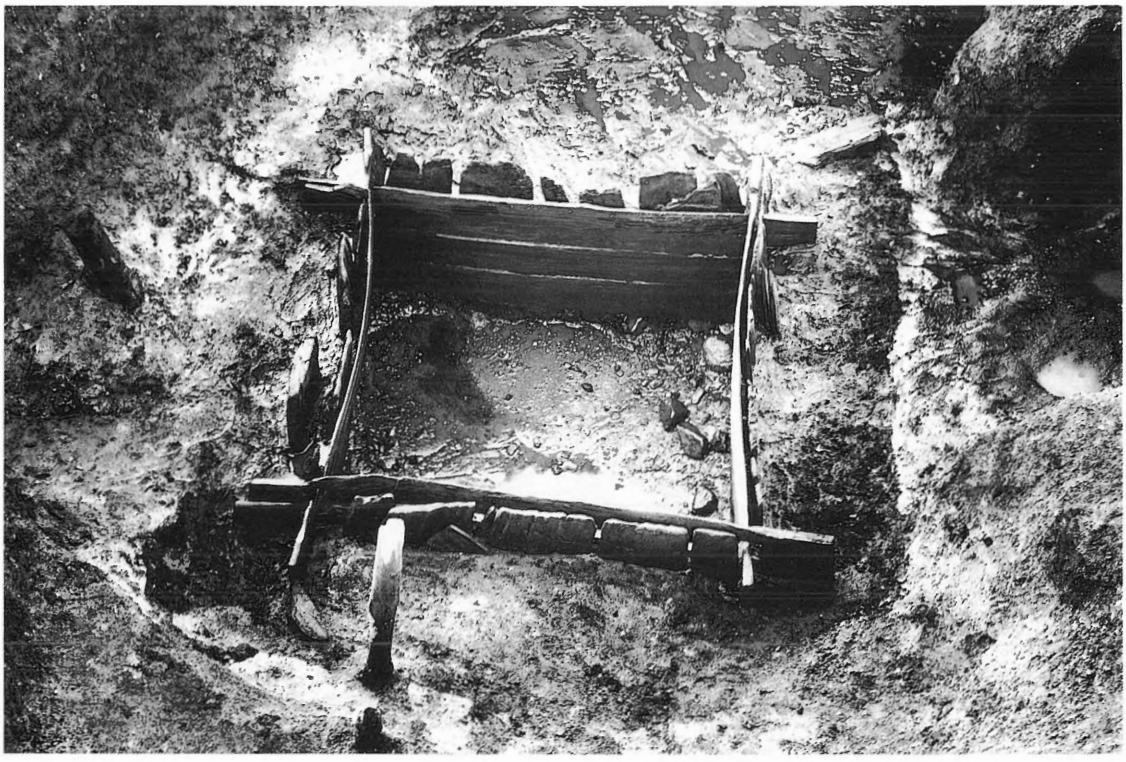


39　12～14，17，19号井戸跡

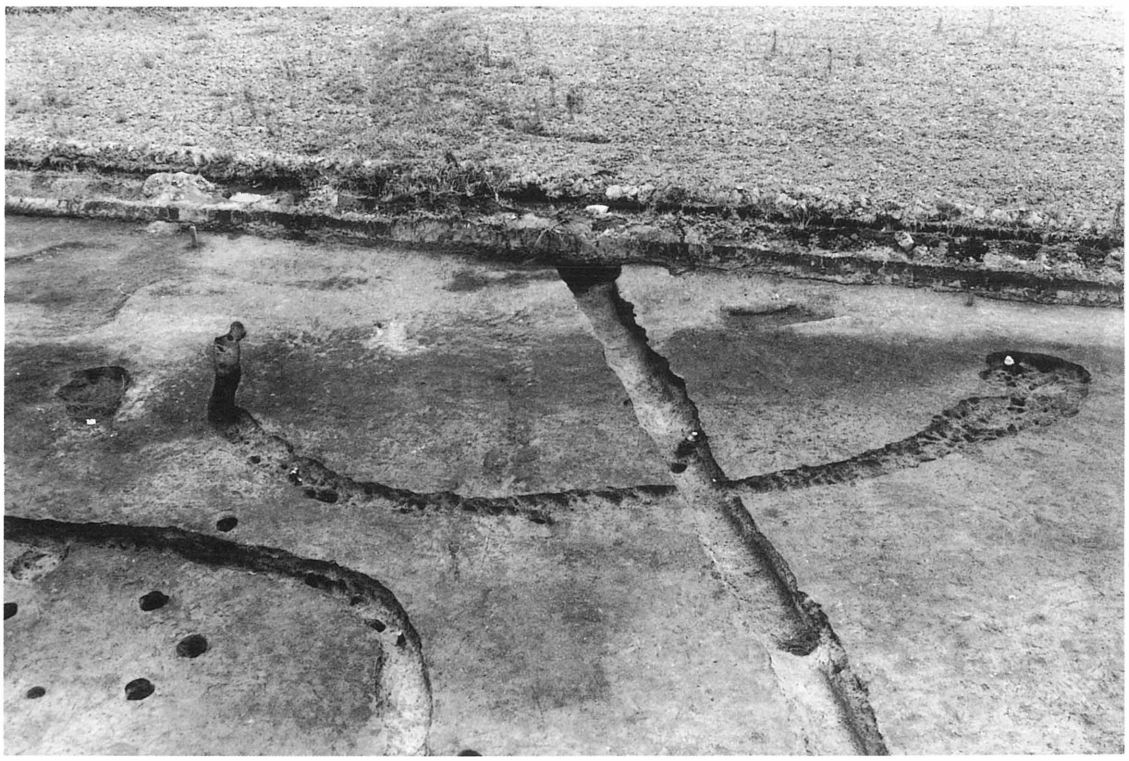
a．12号　b．13号　c．14号遺物出土(南から)
d．14号遺物出土(北から)　e．17号　f．19号



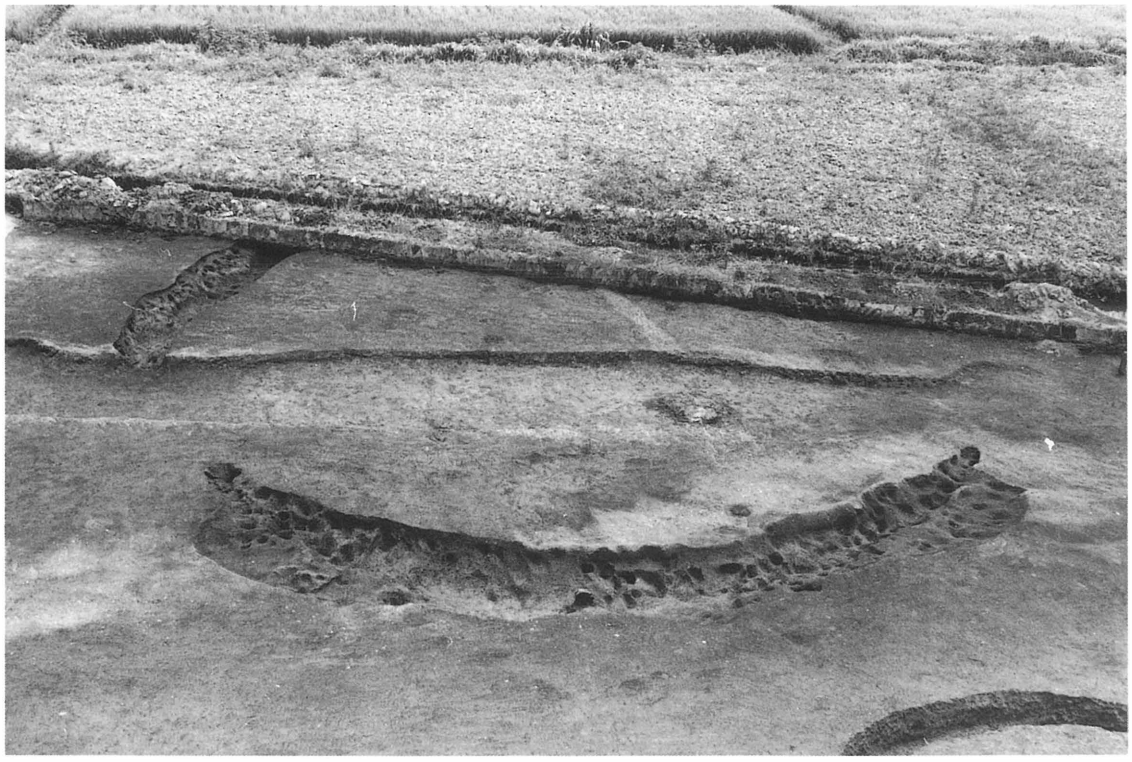
40　15号井戸跡上部(北から)



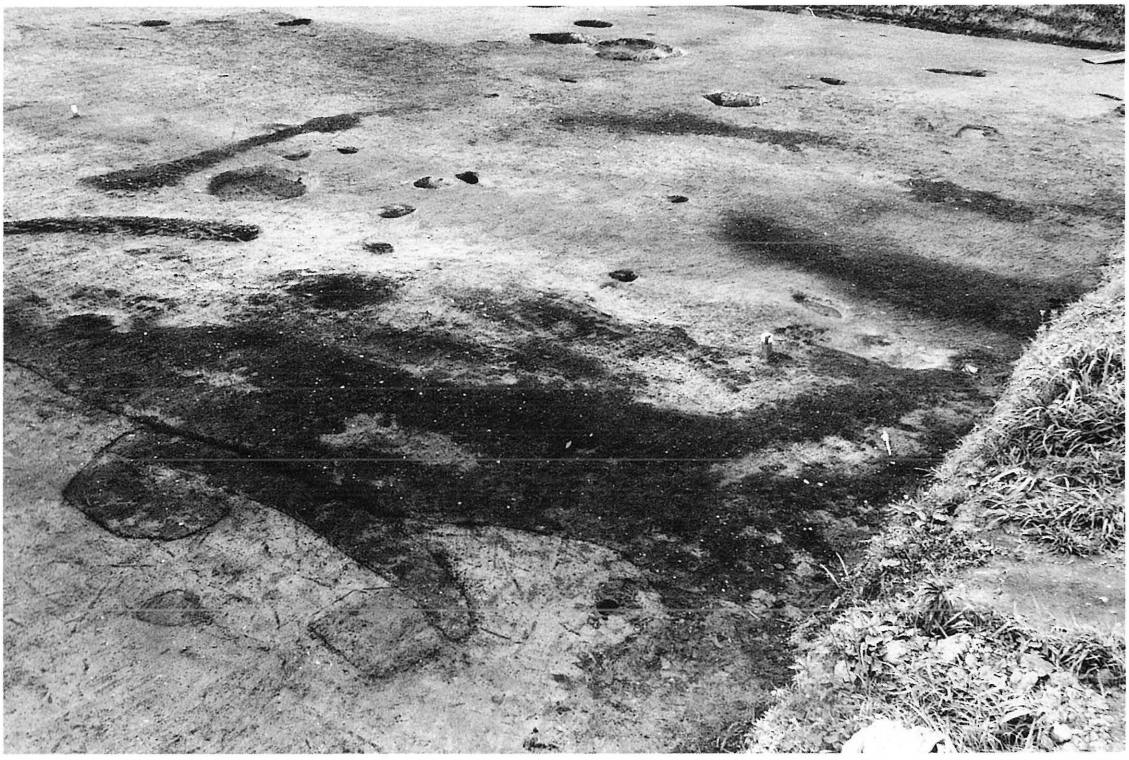
41　15号井戸跡下部(南から)



42　1号周溝状遺構（西から）



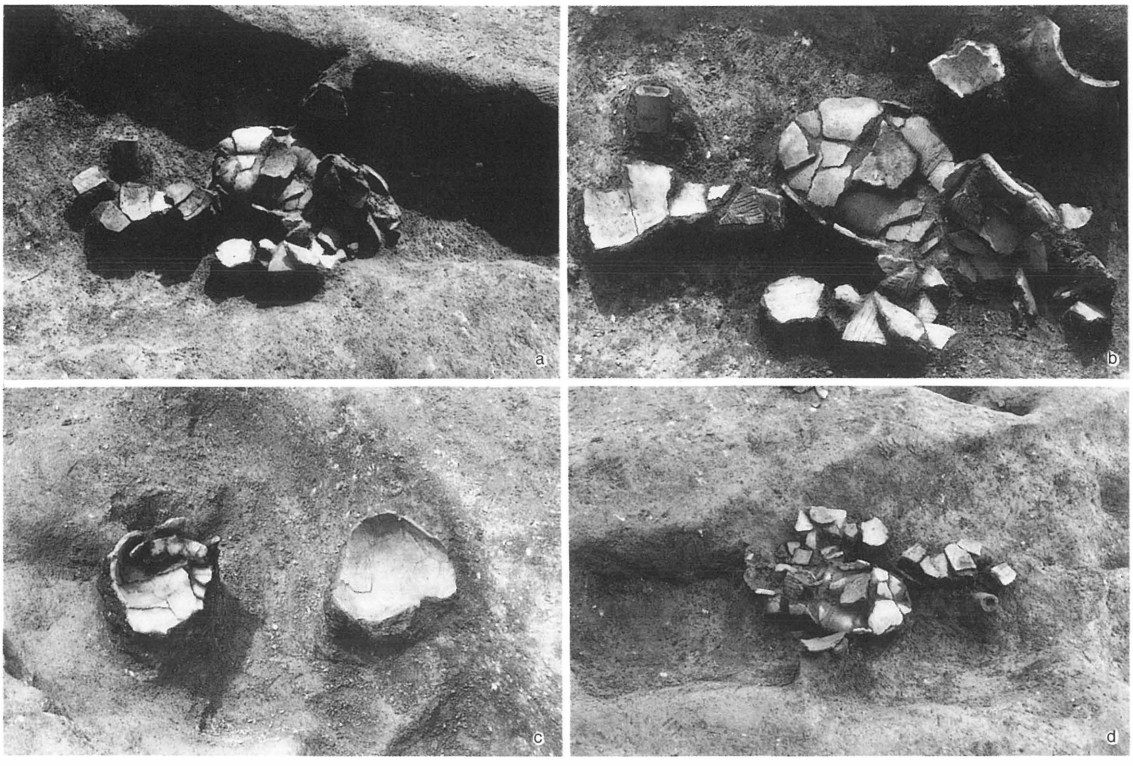
43　2号周溝状遺構（西から）



44　3号周溝状遺構検出状況（西から）

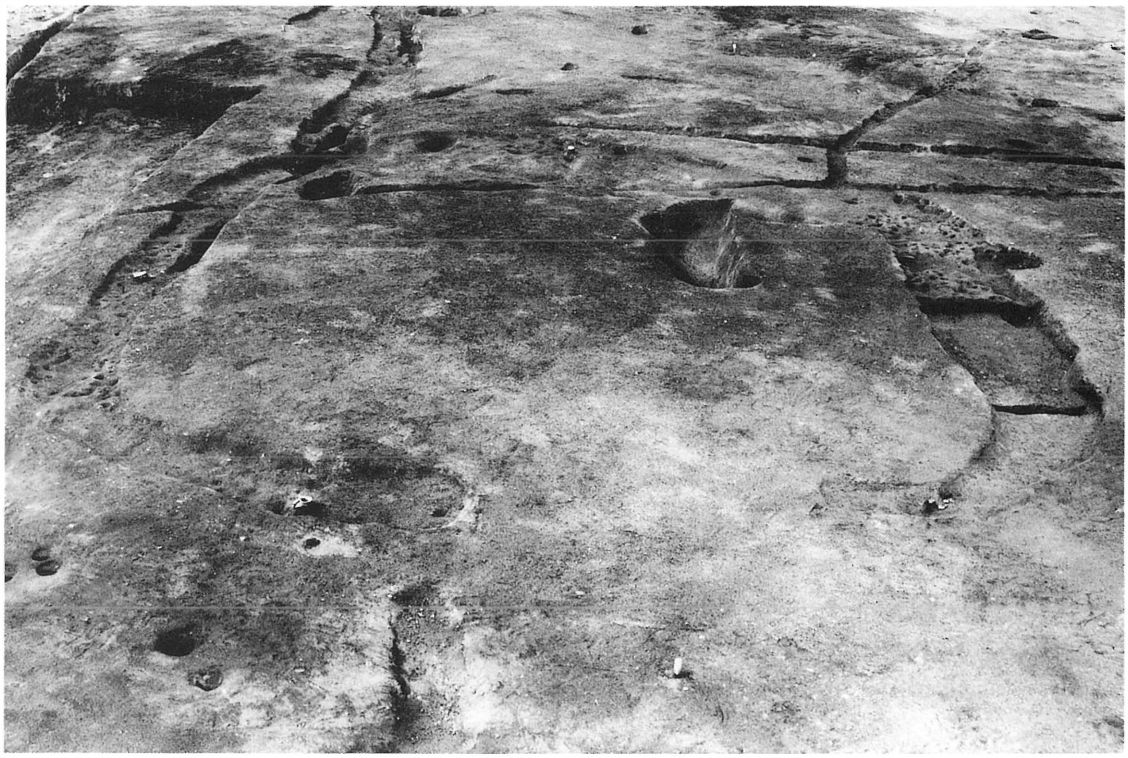
45　6号周溝状遺構検出状況（北から）

46　4号周溝状遺構（北から）



47　4号周溝状遺構遺物出土状況

a．（北から）　b．（北から）
c．（西から）　d．（南から）

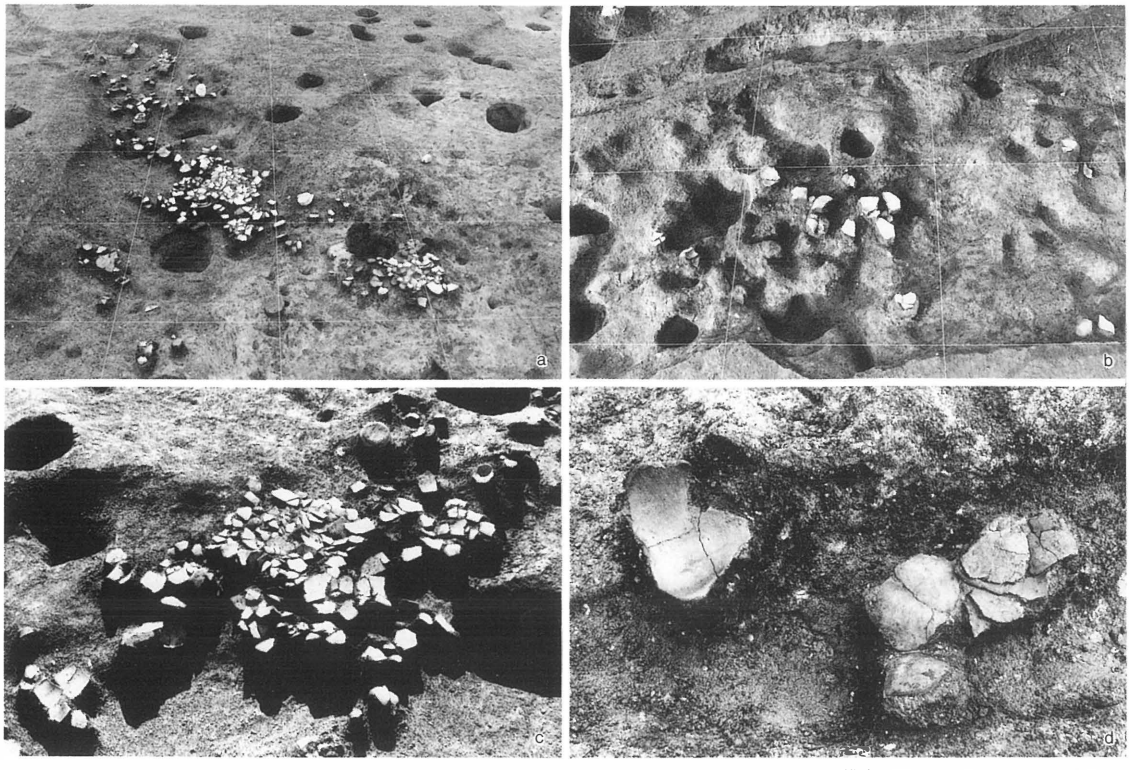


48　5号周溝状遺構（南から）

49　5号周溝状遺構遺物出土状況

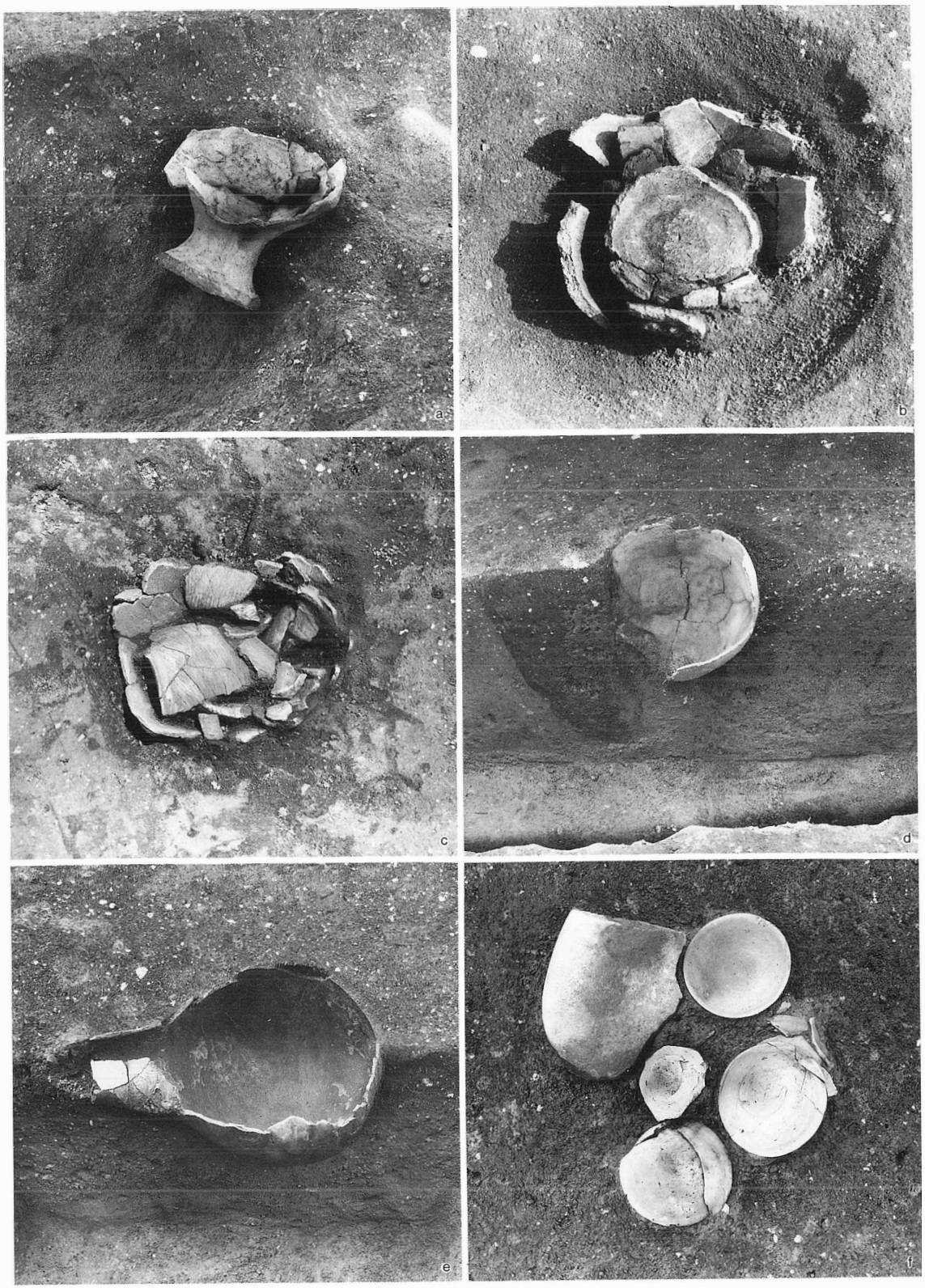
a．壺細片　b．壺細片
c．壺底部　d．壺口縁部

50　7号周溝状遺構遺物出土状況（1）（東から）



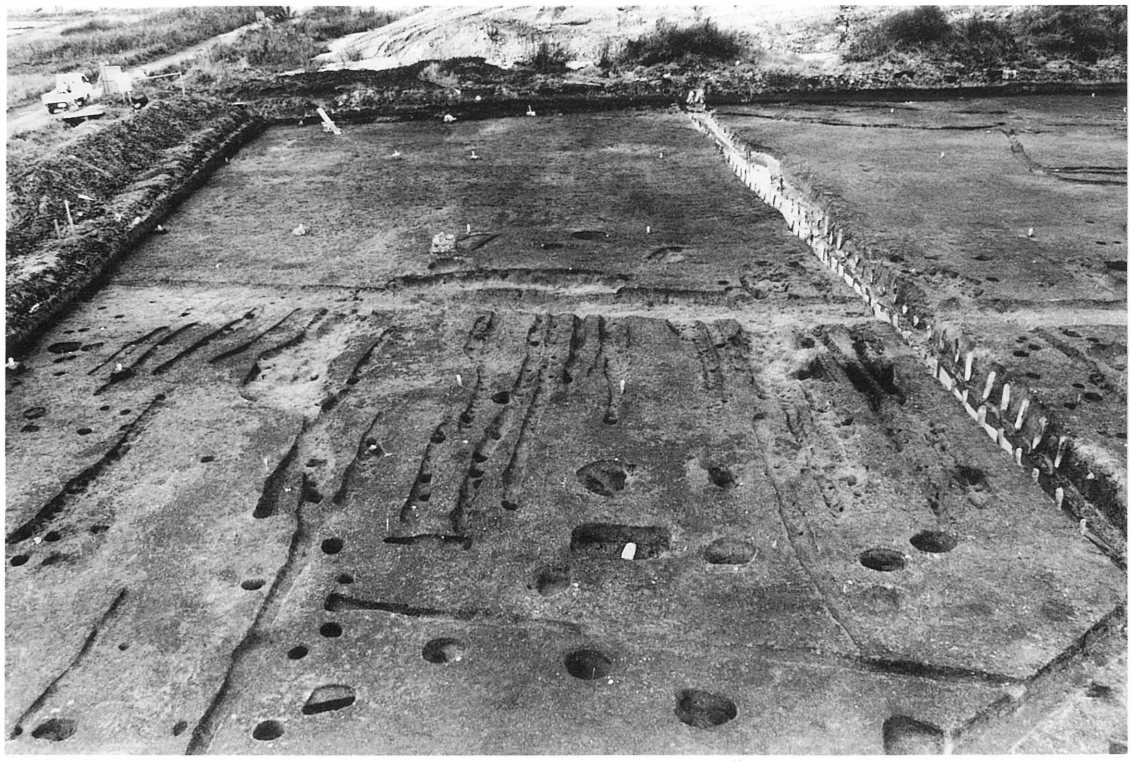
51　7号周溝状遺構遺物出土状況（2）

a．北溝（西から）　b．北溝内細部
c．北溝内細部　d．（S182 W111 ｜内

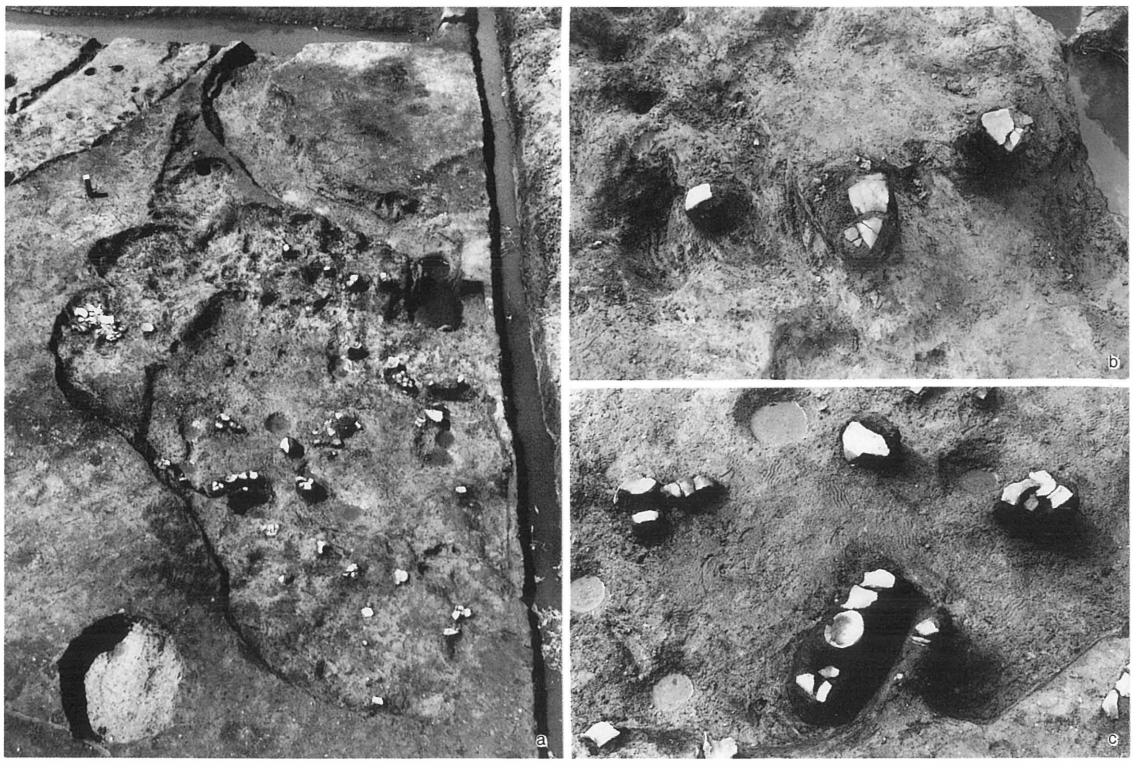


52　13号周溝状遺構遺物出土状況，1 ～ 3 ・ 5 号埋甕，一括

a．13号周構内　b．1号埋甕　c．2号埋甕
d．3号埋甕　e．5号埋甕　f．S 140・W130内一括



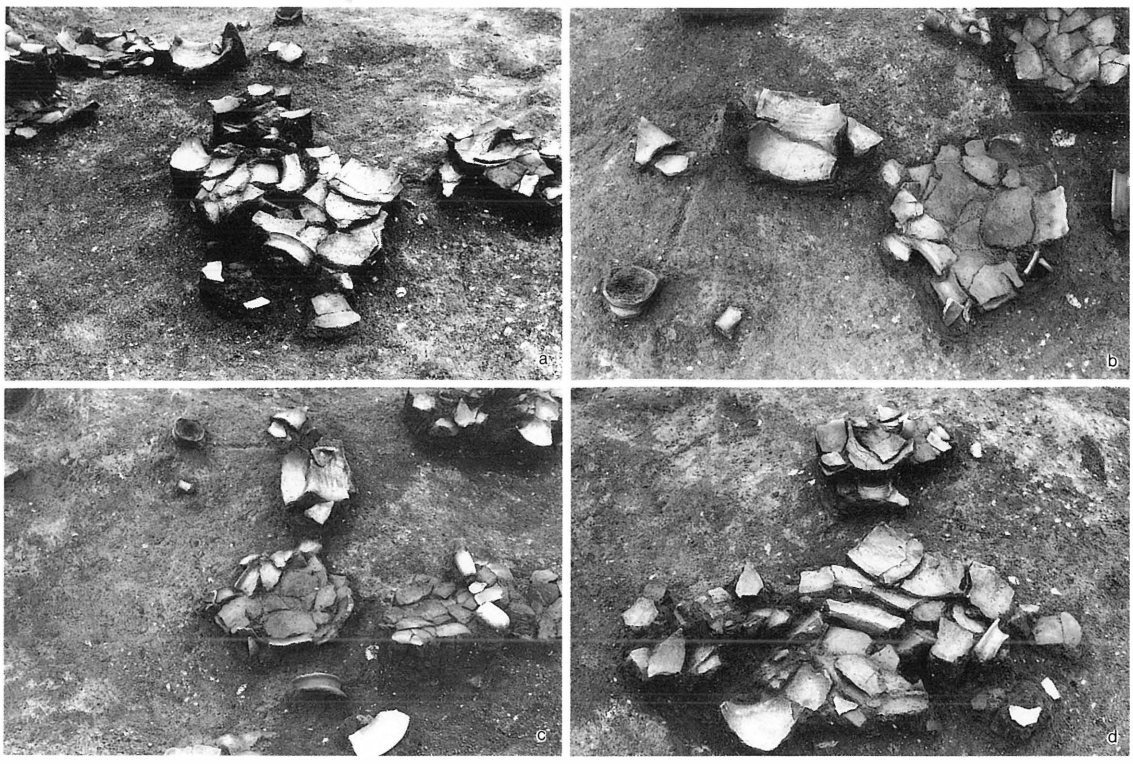
53　畝状遺構（南から）



54　1号特殊遺構

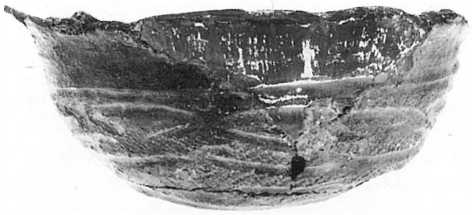
a．完堀　b．遺物出土状況
c．遺物出土状況

55　9号特殊遺構遺物出土状況(北から)



56　9号特殊遺構遺物出土状況細部

a．810　　b．795,809,810
c．799,808～810　　d．810,811



272

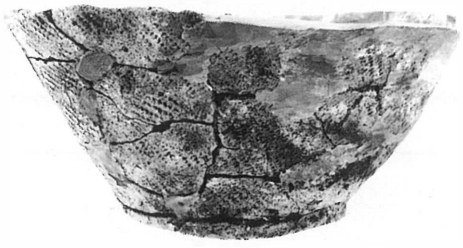
519

231

218

180

641



1084

620

57　土器(1)　縄文土器・鉢，弥生土器・壺，蓋

738

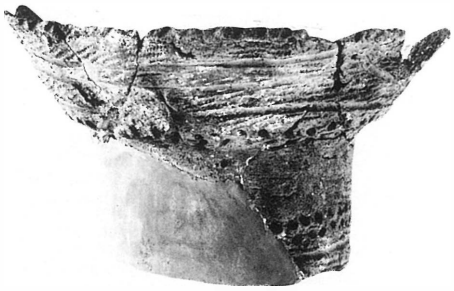
344

277

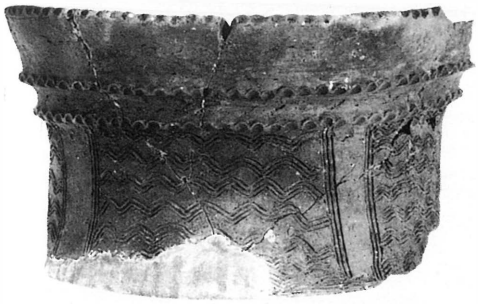
737

54

58　土器(２)　弥生土器・壺



144



550

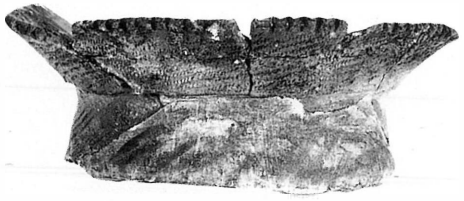
260

649

644

546

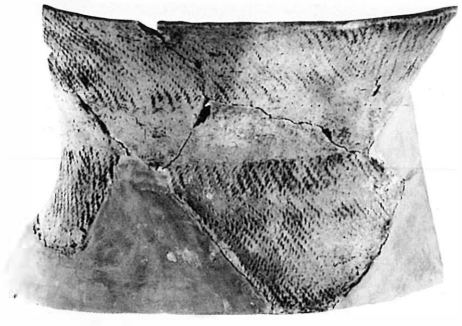
59　土器(３)　弥生土器・壺



139

735

671

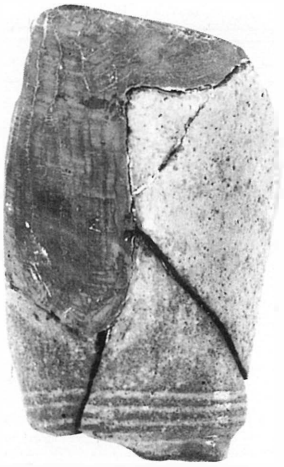


1082

258

617

60 土器(4) 弥生土器・壺，甕



146

1081

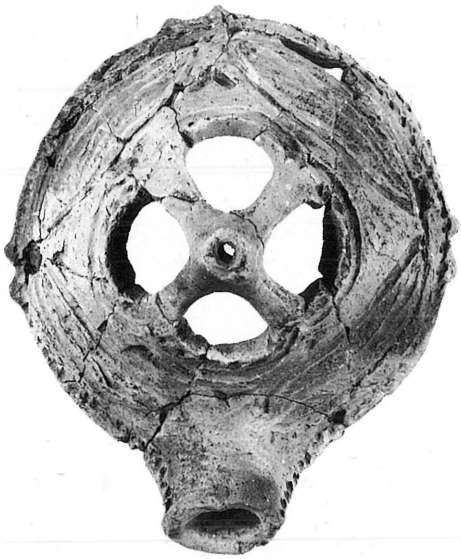
247

222

734

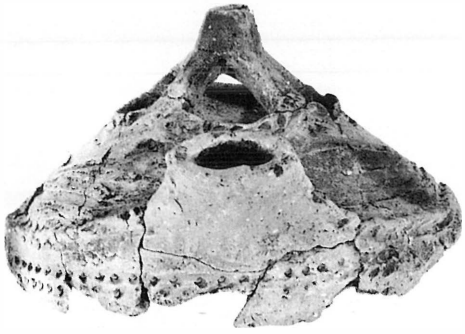
733

61　土器(5)　弥生土器・壺，甕



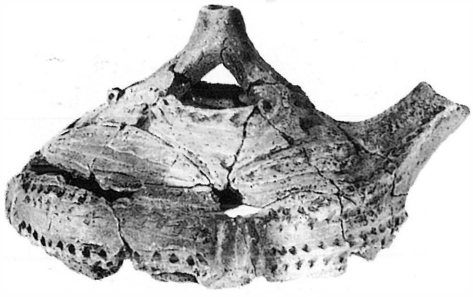
143

755

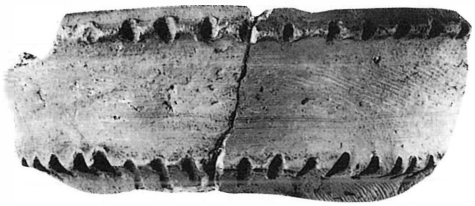


143

651

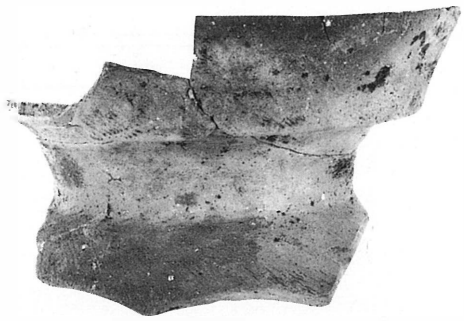


143



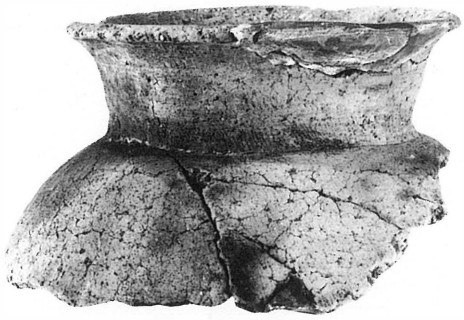
156

62　土器(6)　弥生土器・注口土器，壺



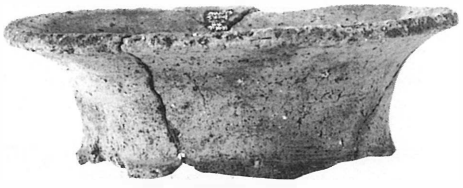
1109

795



547

8



798

609

200

63　土器(7)　弥生土器，土師器・壺，小型丸底壺

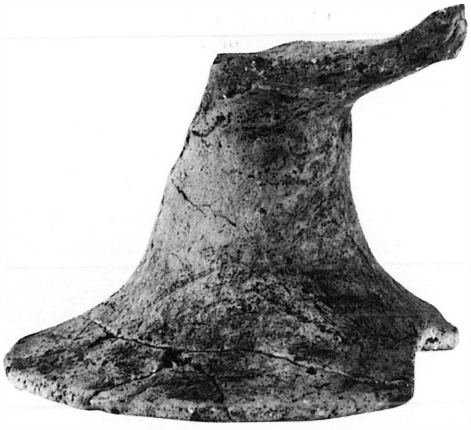
584

198

789

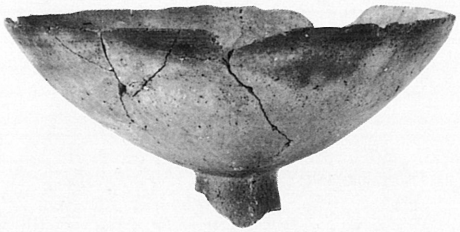
643

749



677

64　土器(8)　土師器・高杯



167

619

284

150

338

682

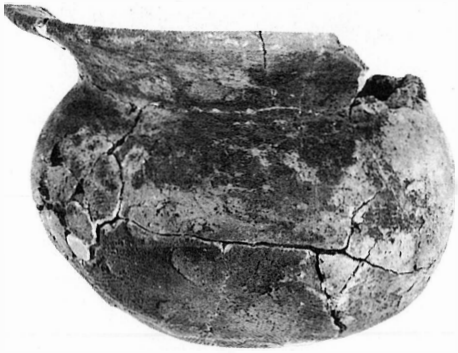
65　土器（9）　土師器・高杯，器台，鉢

590

811

145

1116



183

523

66 土器(10) 土師器・甕，小型甕，台付甕

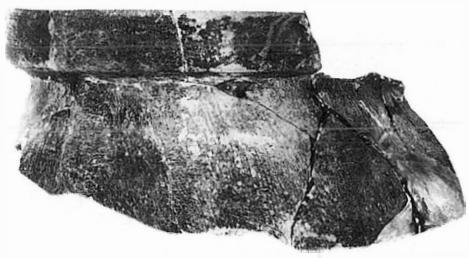
809

808

10

764

67　土器(11)　土師器・甕



30

192

290

148

13

807

195

68　土器(12)　土師器・甕

102

304

103

312

169

321

170

322

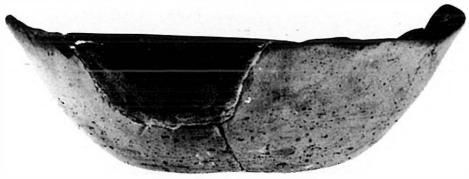
201

382

69　土器(13)　土師器・杯

410

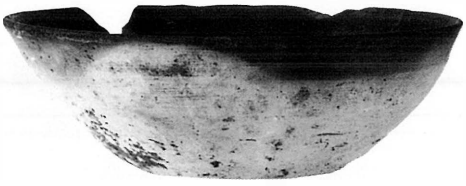
729



441

784

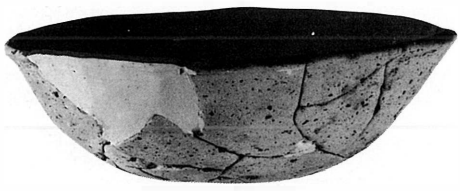
452



815

485

822



684

824

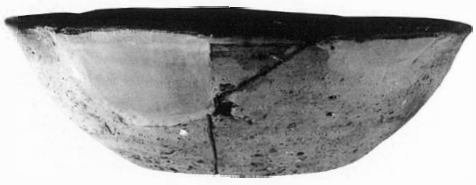
70　土器(14)　土師器・杯

827

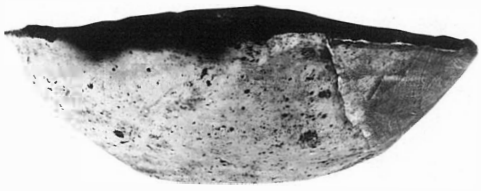
854

829

1118



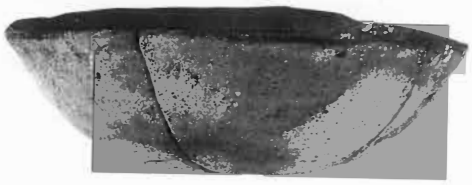
840



1126

842

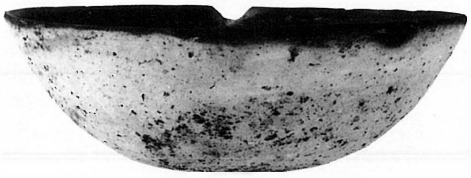
1135



844

1138

71　土器(15)　土師器・杯



1147

1156

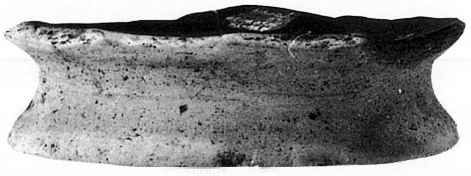
1149

1157

1150

1160

1151



1172

1153

1173

72　土器(16)　土師器・杯

191

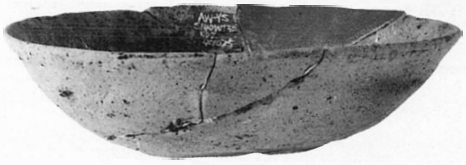
458

778

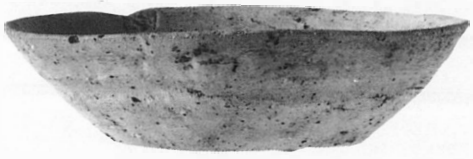
327

780

372

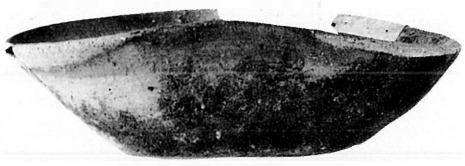


1167

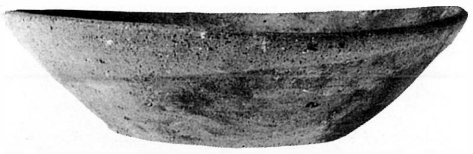


1169

73　土器(17)　土師器・甕，赤焼土器・杯



188



474

347

477

355

479

444

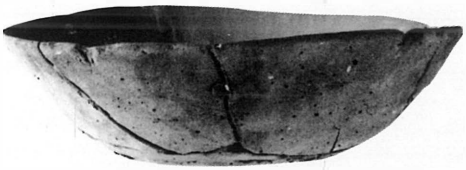
481

472

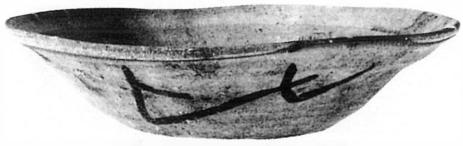
499

74　土器(18)　須恵器・杯

503

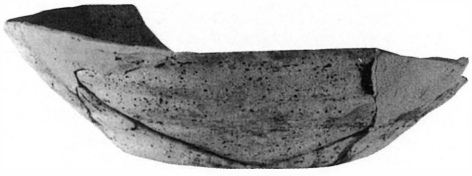


787



505

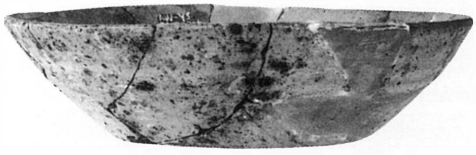
849



690

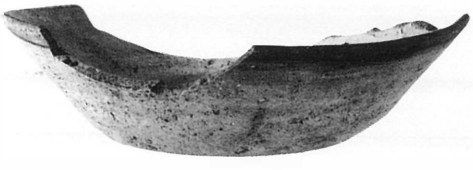
857

785



884

786



1197

75　土器(19)　須恵器・杯

861

187

872

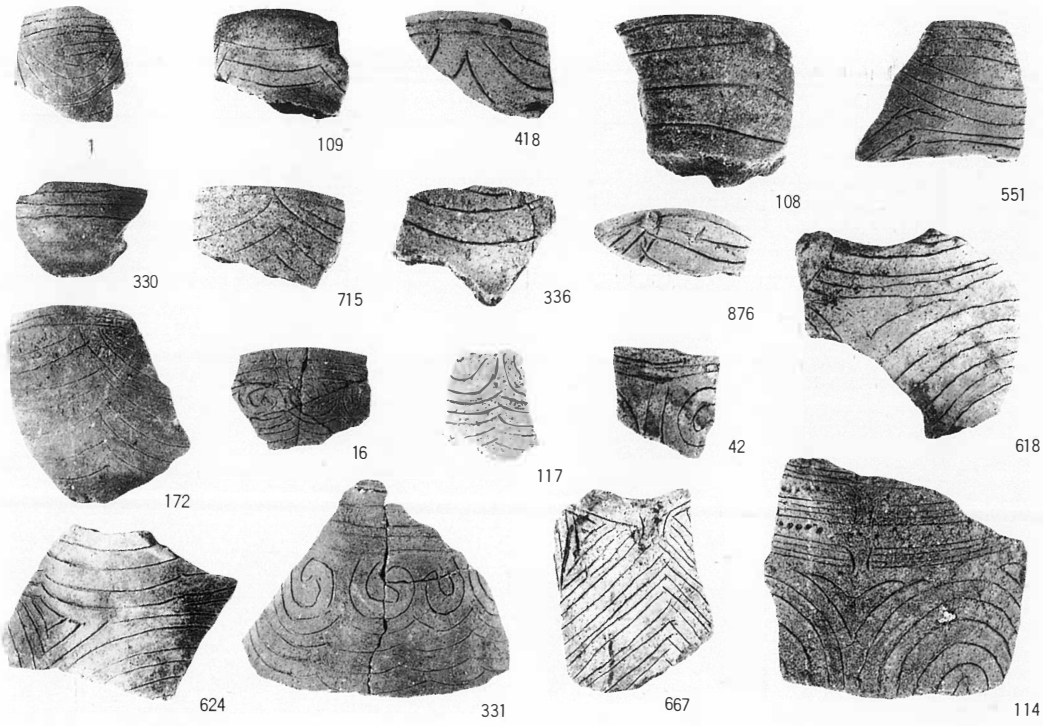
863(上)

863(断面)

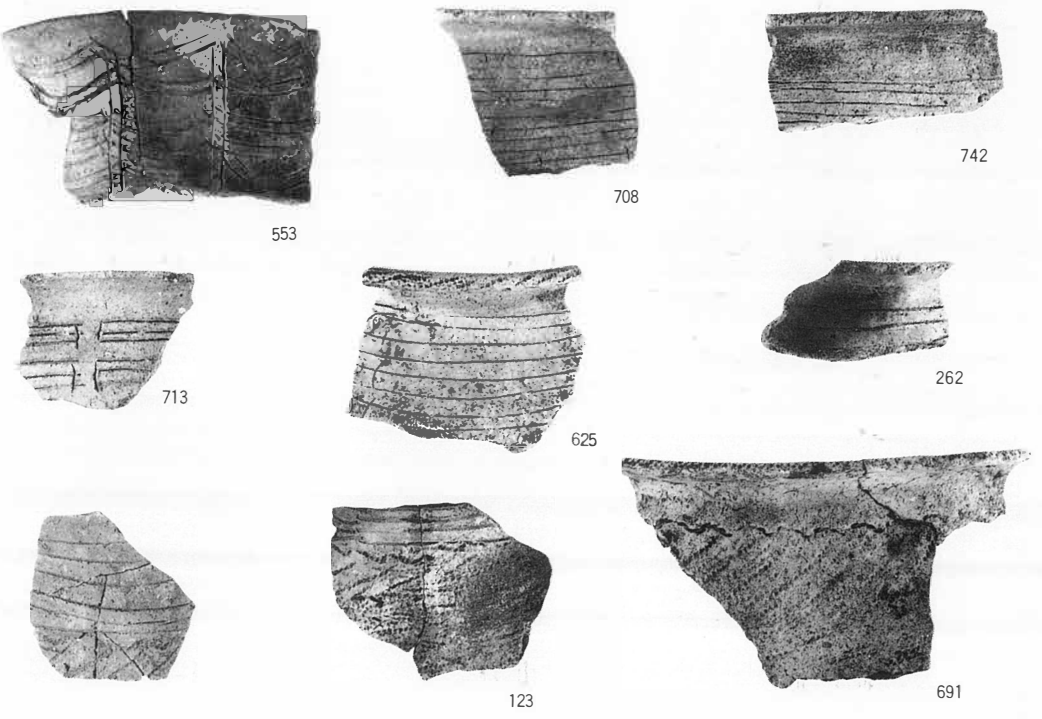
311

863(裏)

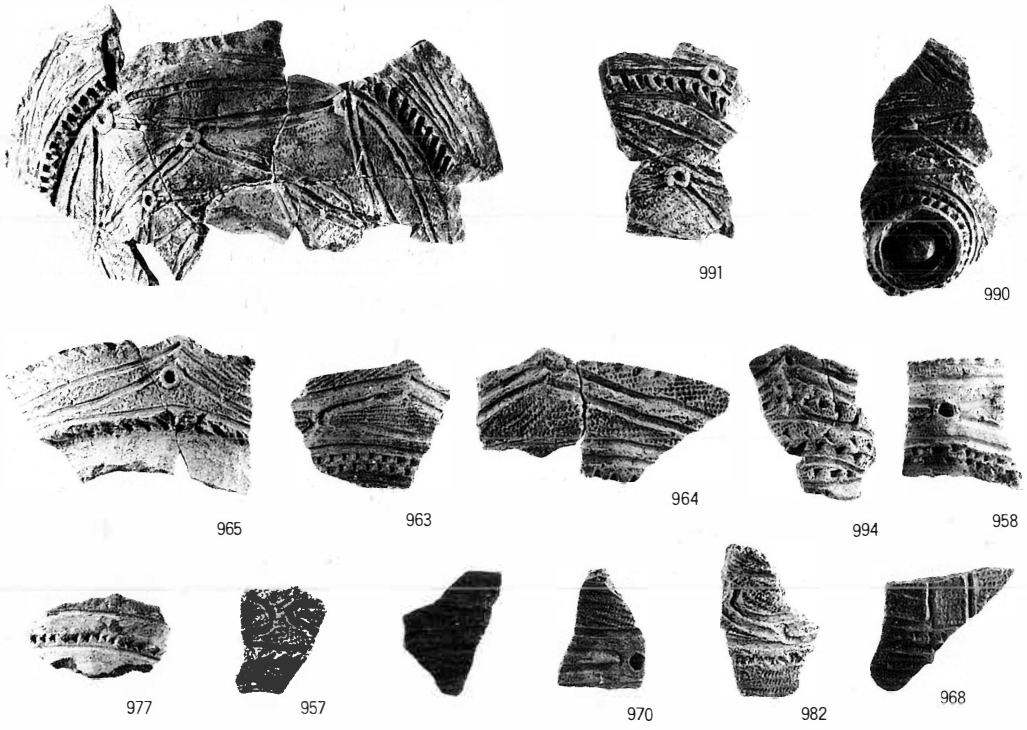
76　土器(20)　須恵器・長頸瓶，風字硯



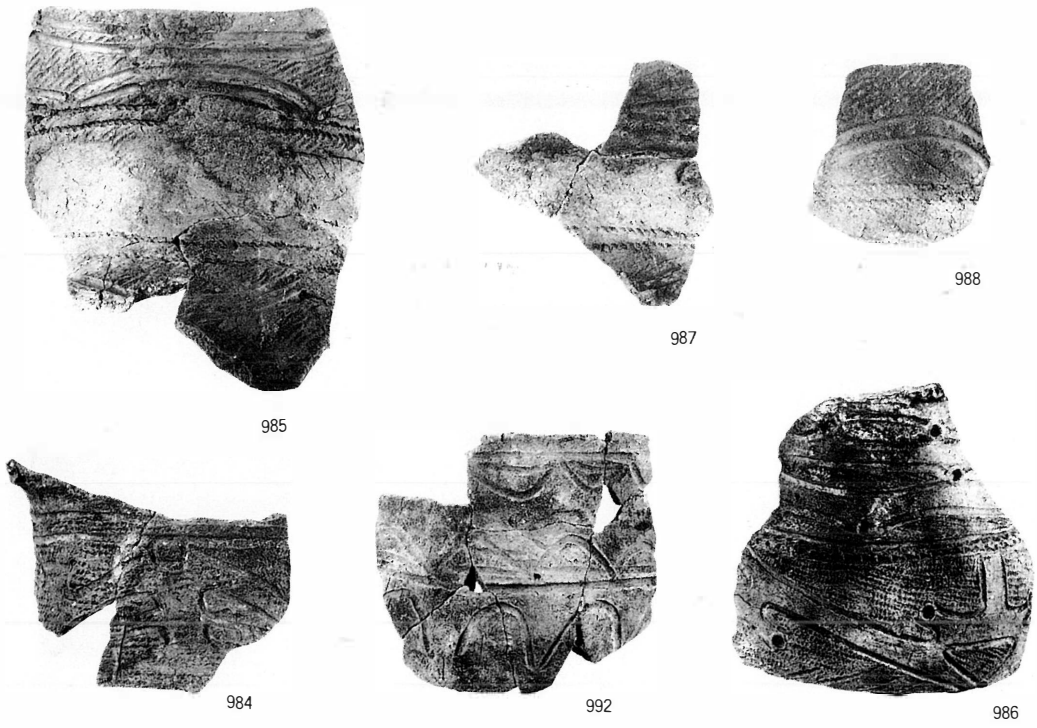
77　土器(21)　弥生土器・壺



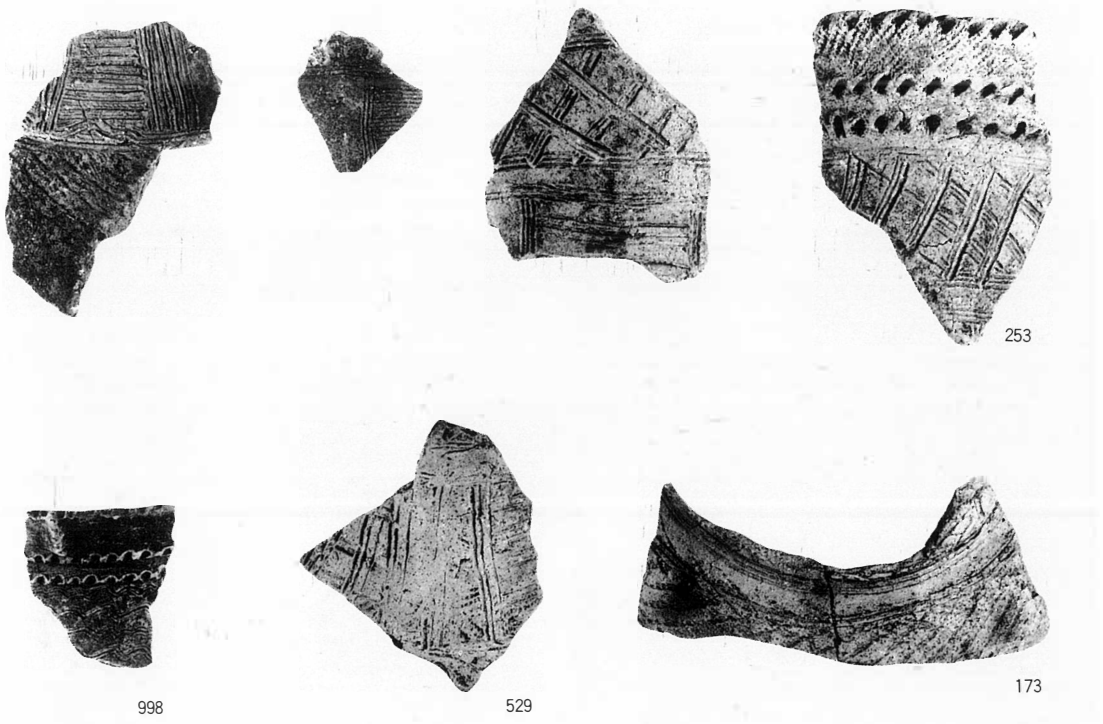
78　土器(22)　弥生土器・甕



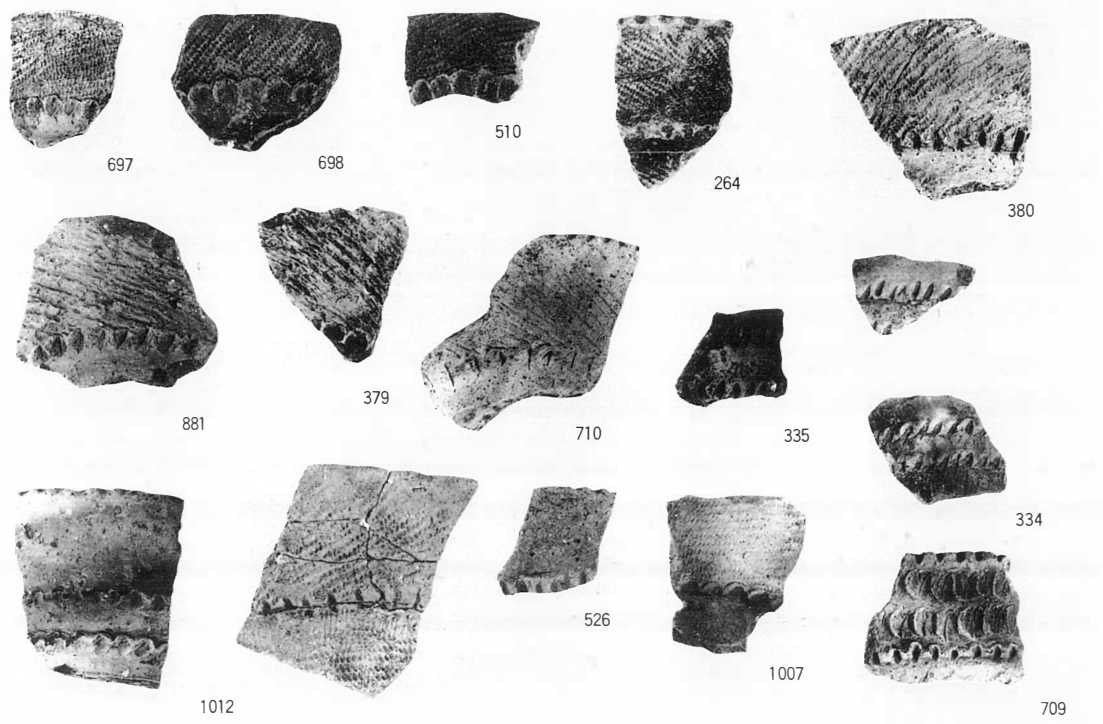
79　土器(23)　弥生土器・壺，高杯



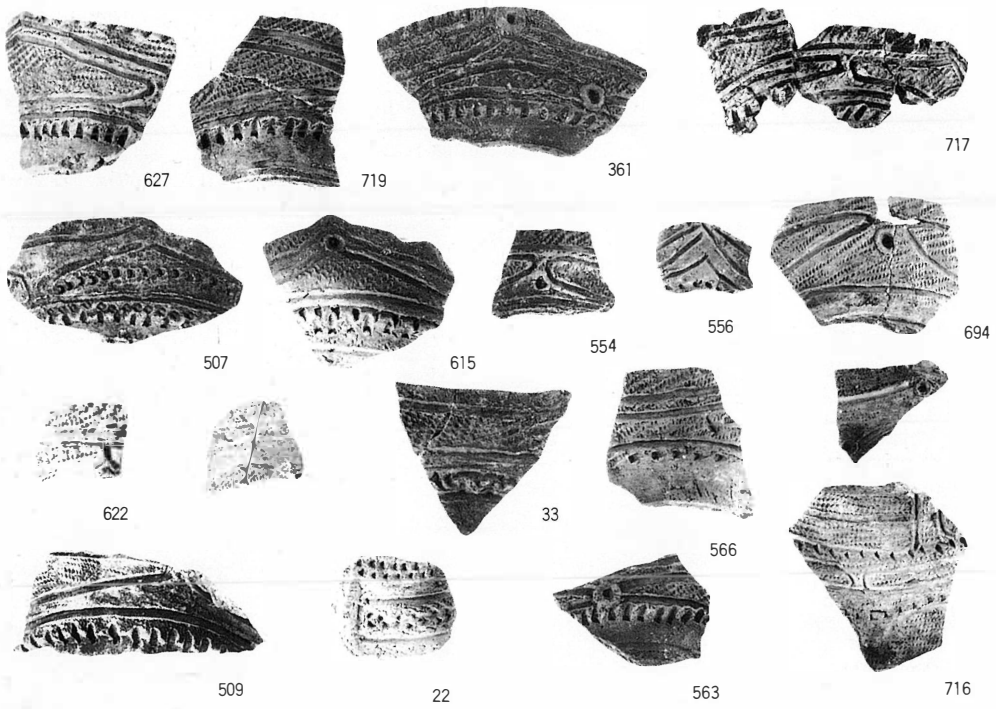
80　土器(24)　弥生土器・壺，甕



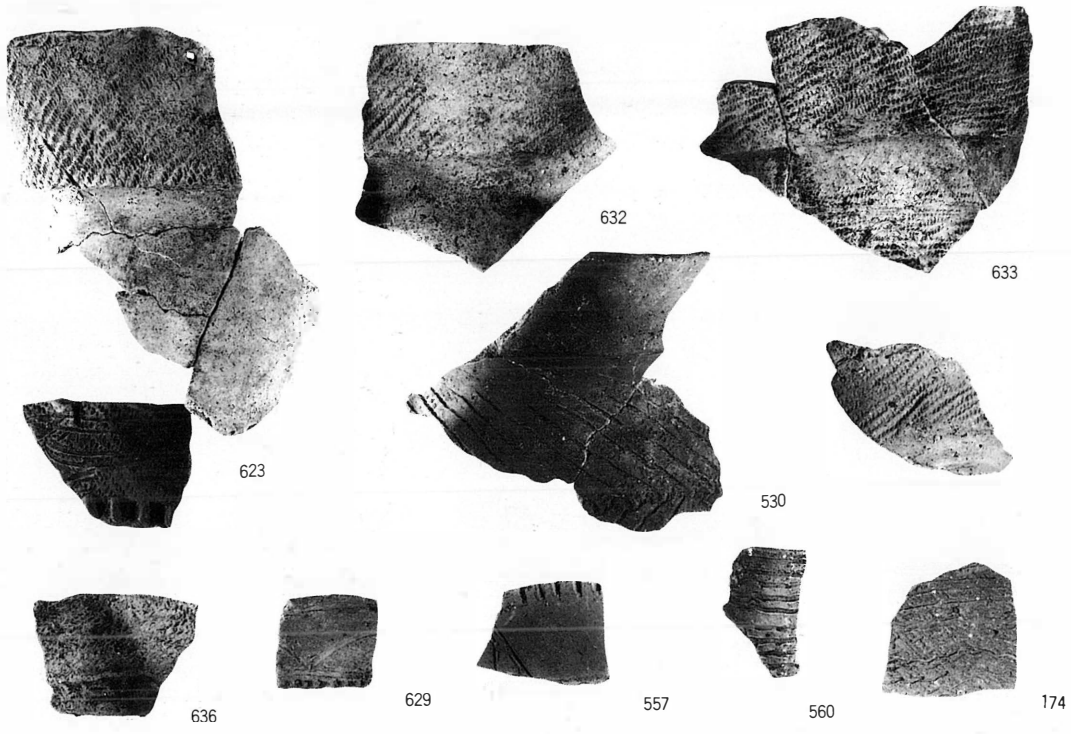
81　土器(25)　弥生土器・壺



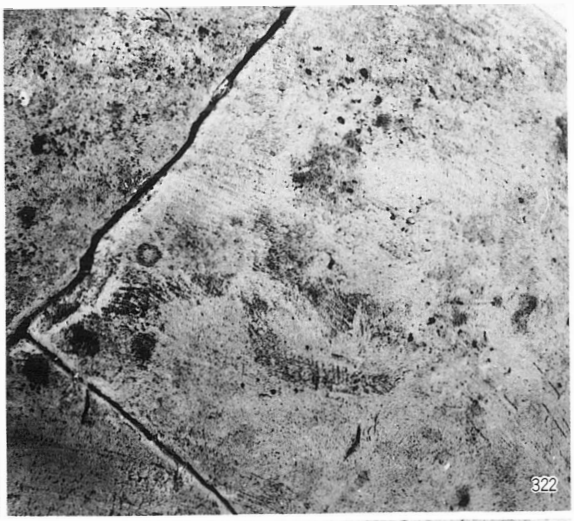
82　土器(26)　弥生土器・壺

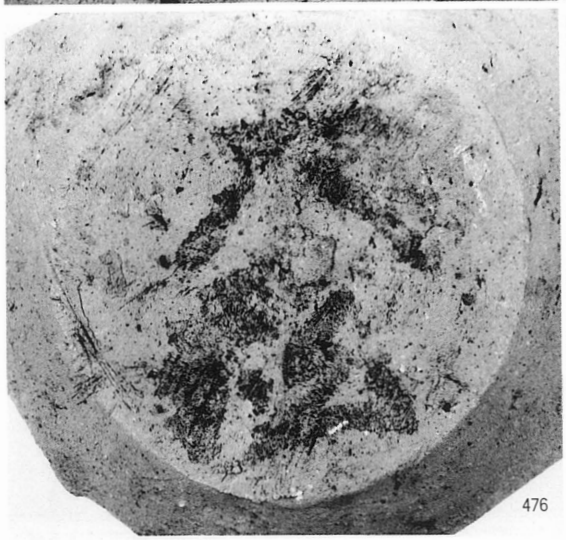


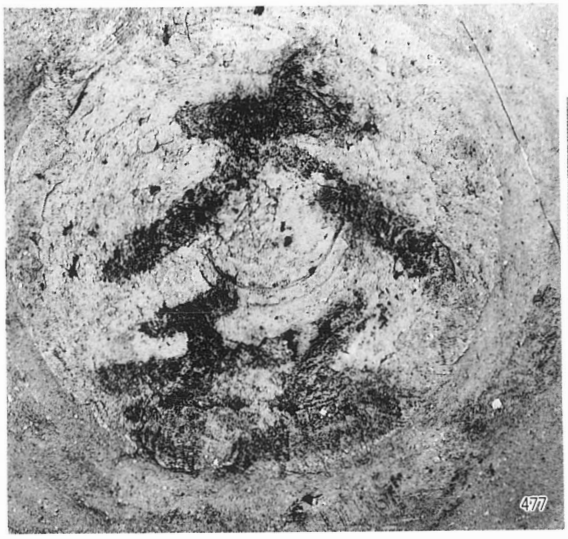
83　土器(27)　弥生土器・壺

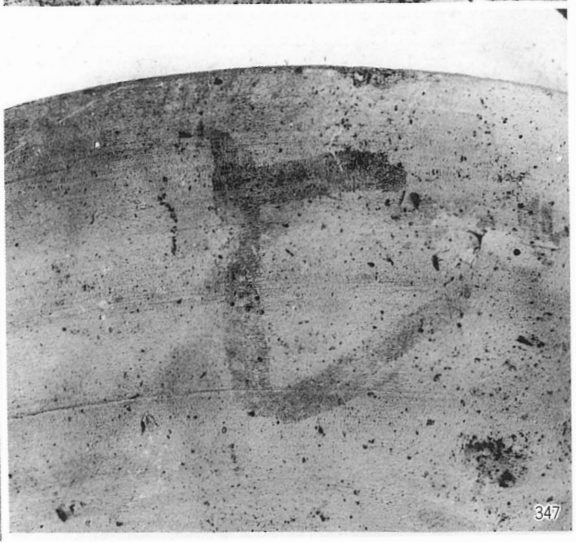


84　土器(28)　弥生土器・壺

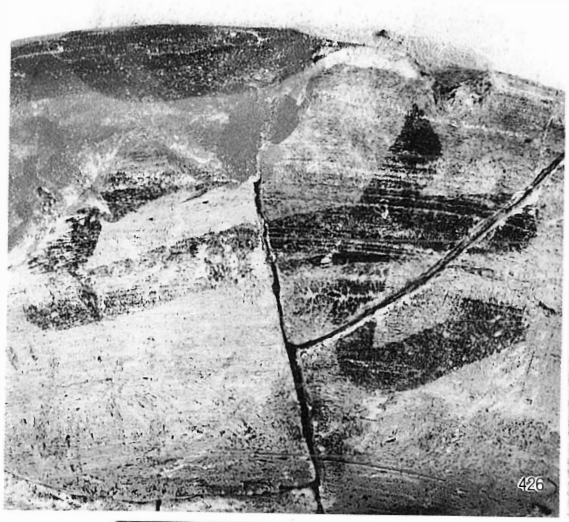


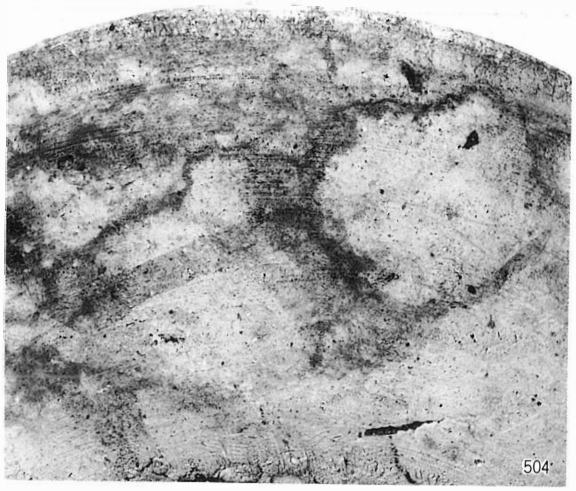




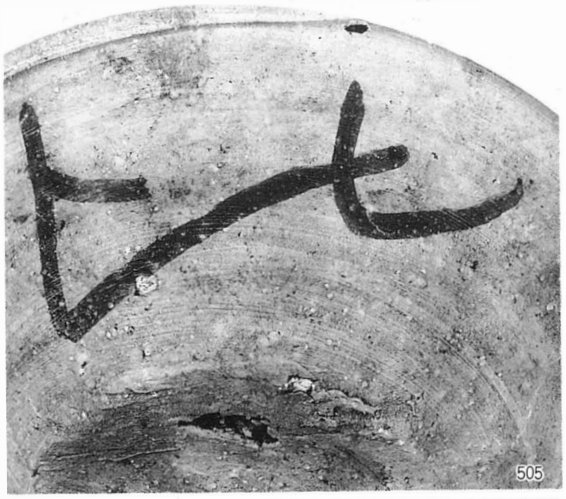


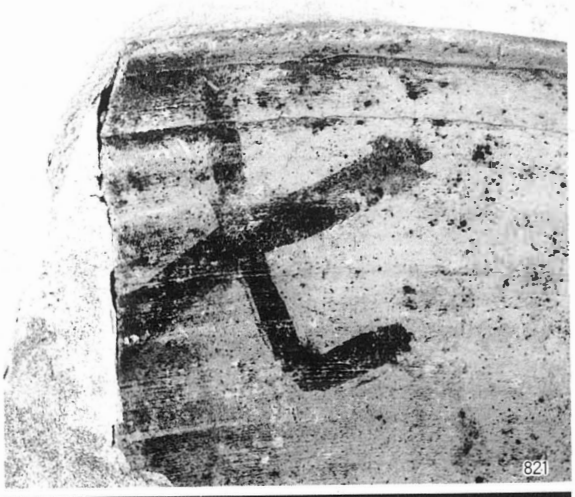
85　墨書土器部分（1）

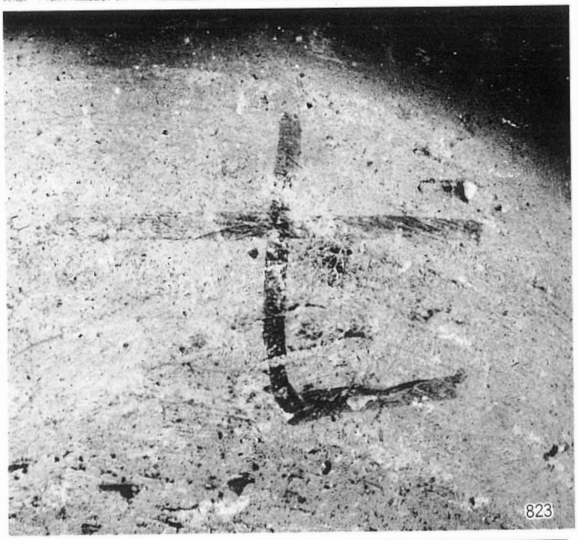


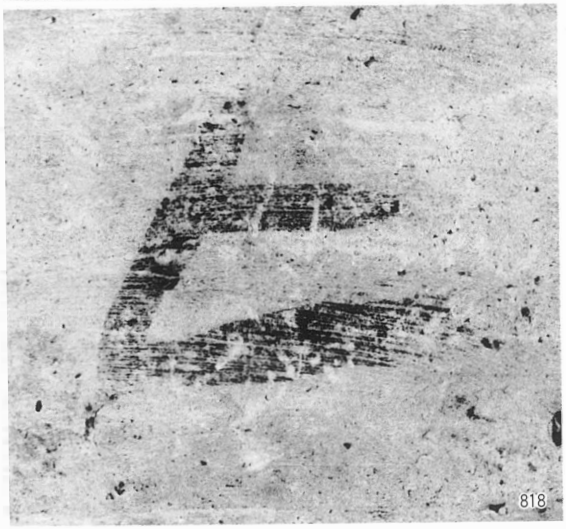


86　墨書土器部分（2）

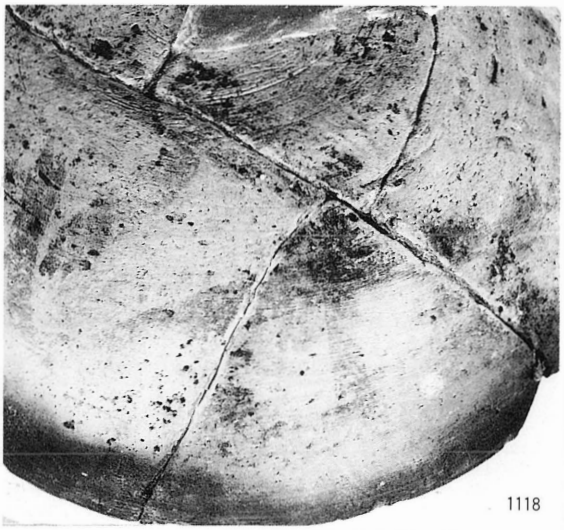


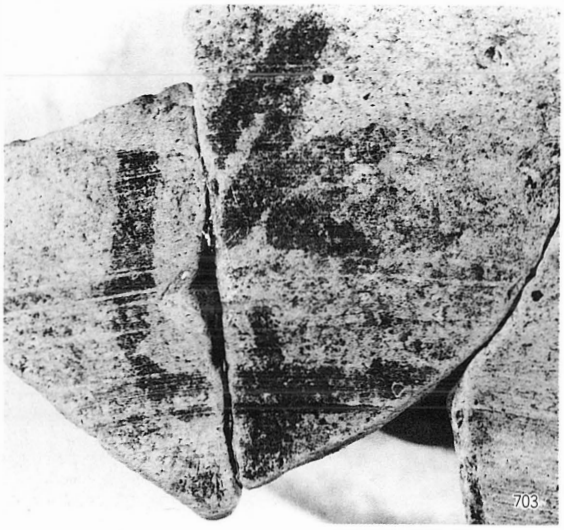






87　墨書土器部分（３）



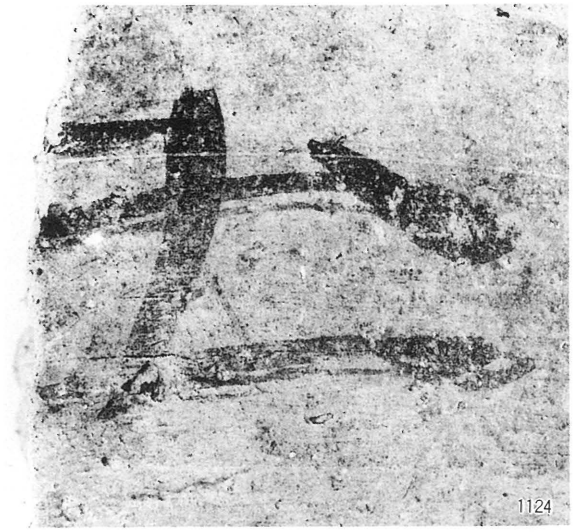


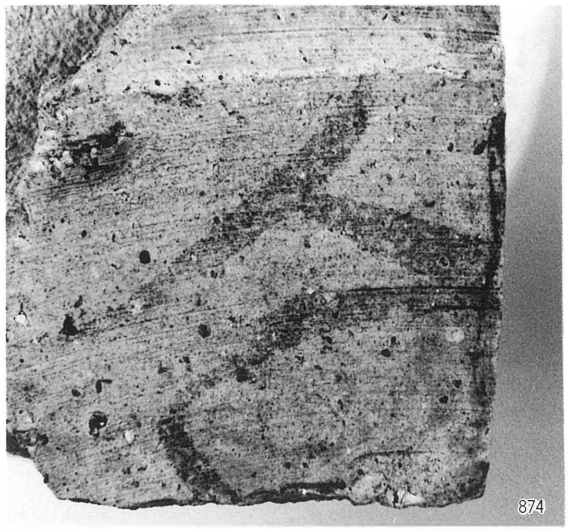
88　墨書土器部分（4）

473

1122

474

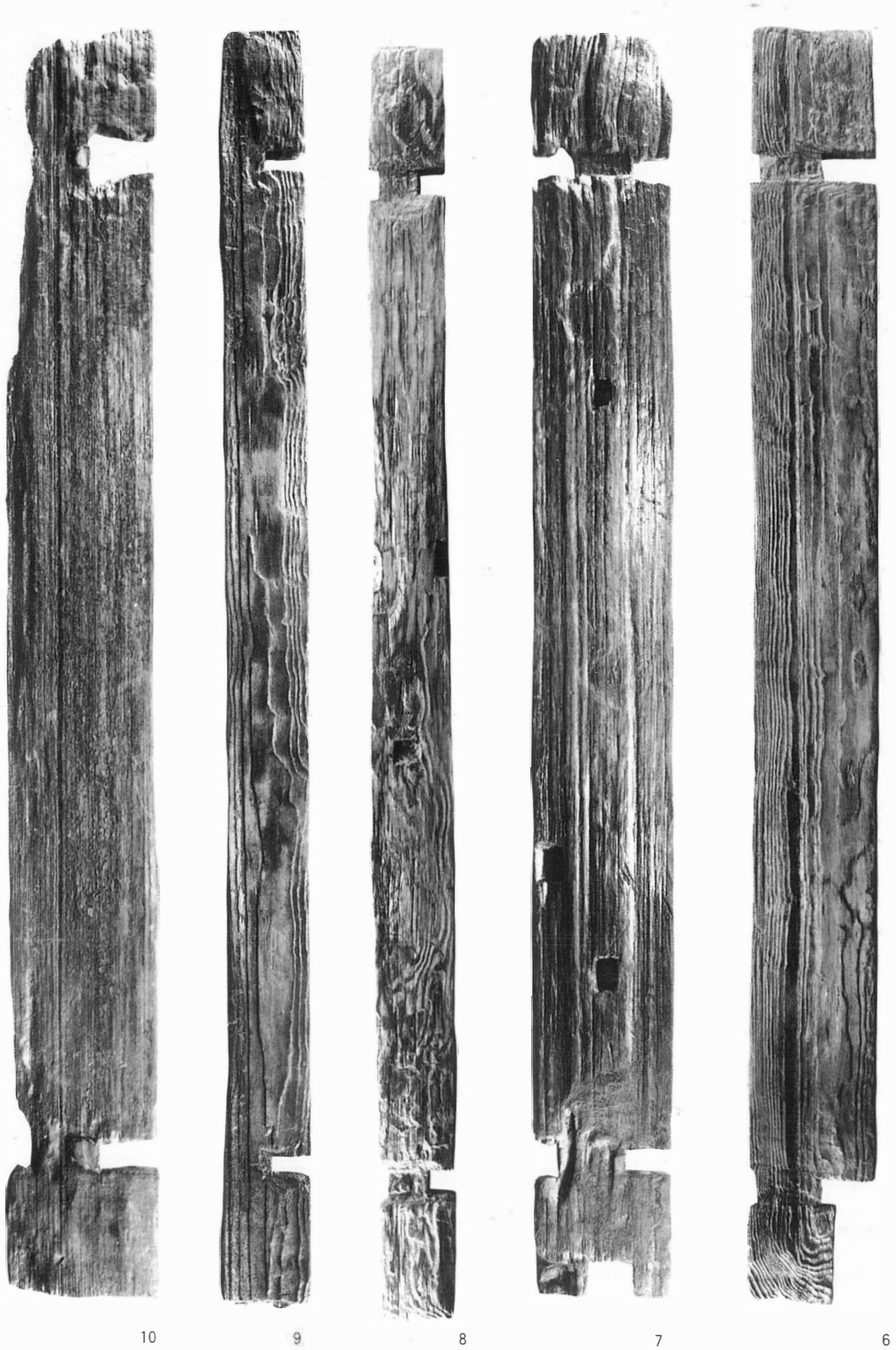

1124


874

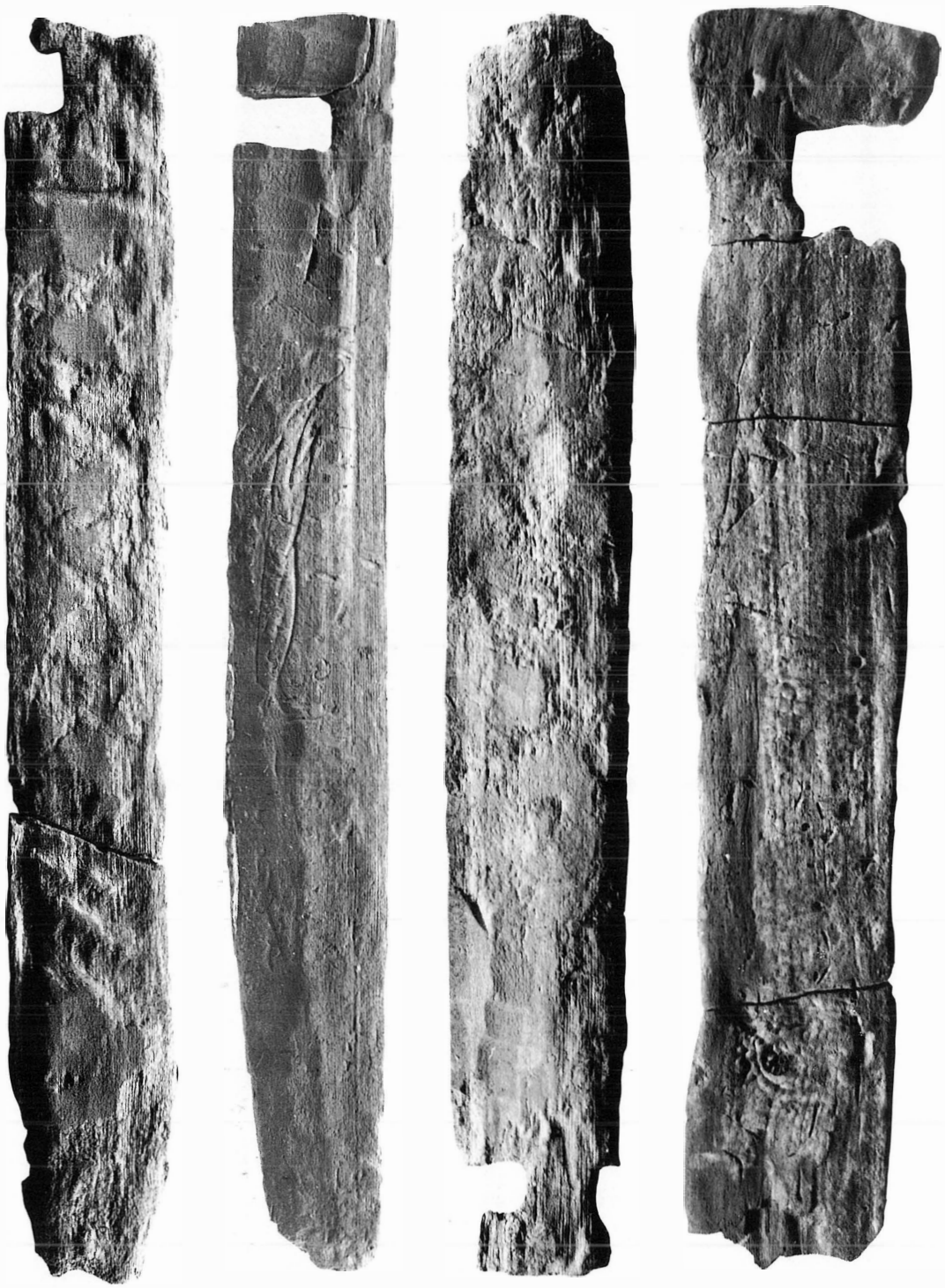
1128

89　墨書土器部分（5）

90　3号井戸跡・井戸枠(1)

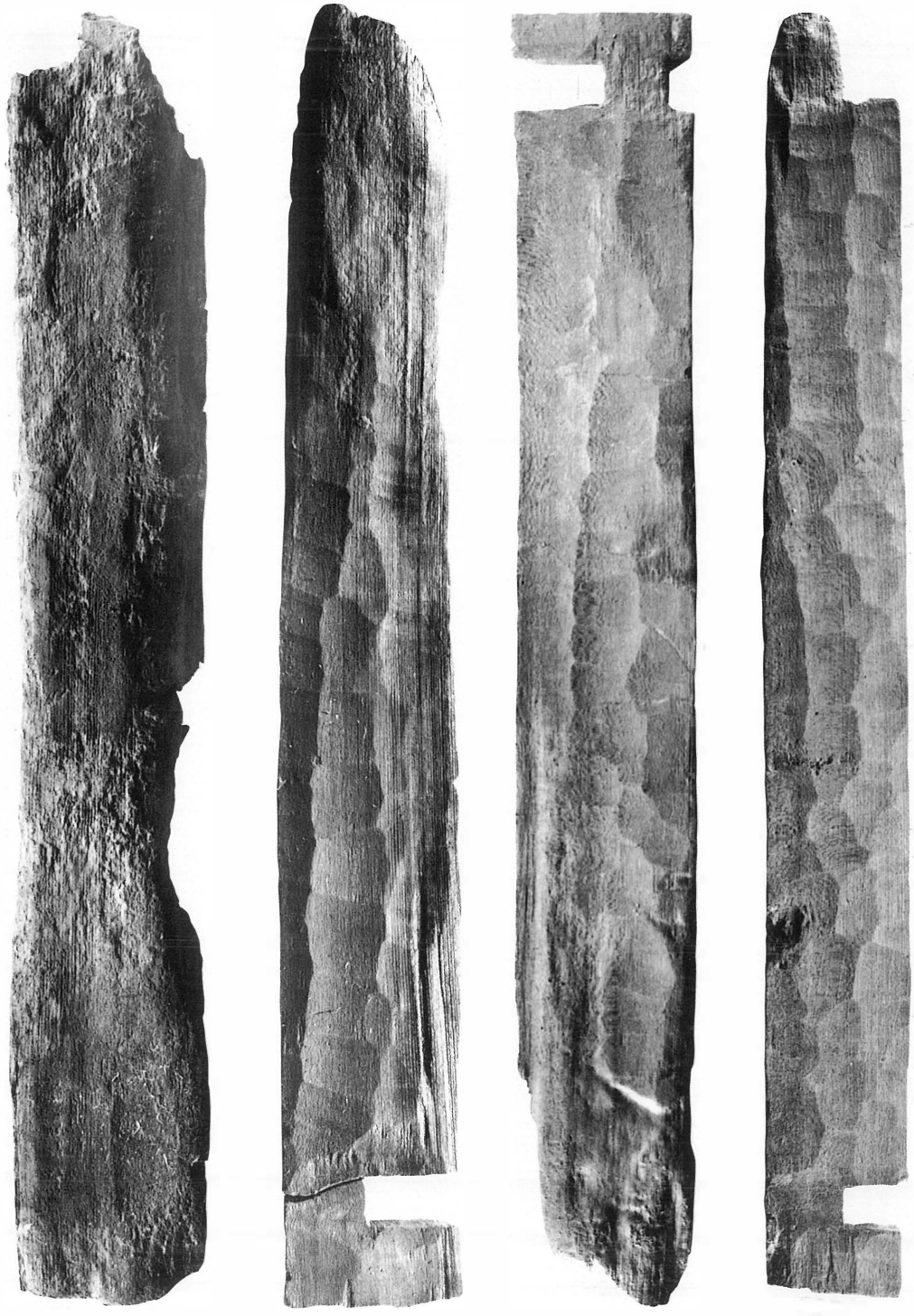


91　3号井戸跡・井戸枠(2)



25　24　23　28

92　12号井戸跡・井戸枠（1）



33　32　31　30

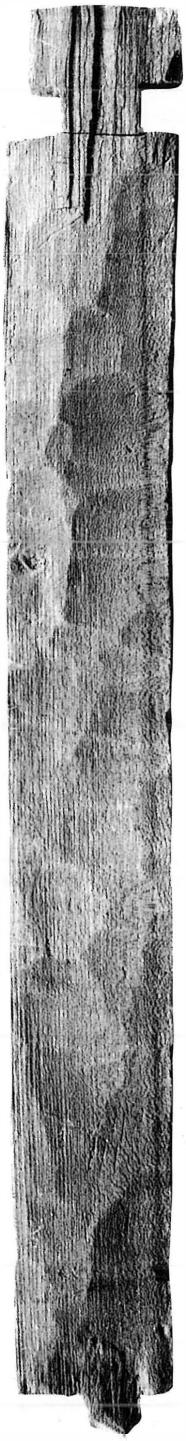
93　12号井戸跡・井戸枠（2）

36

35

21

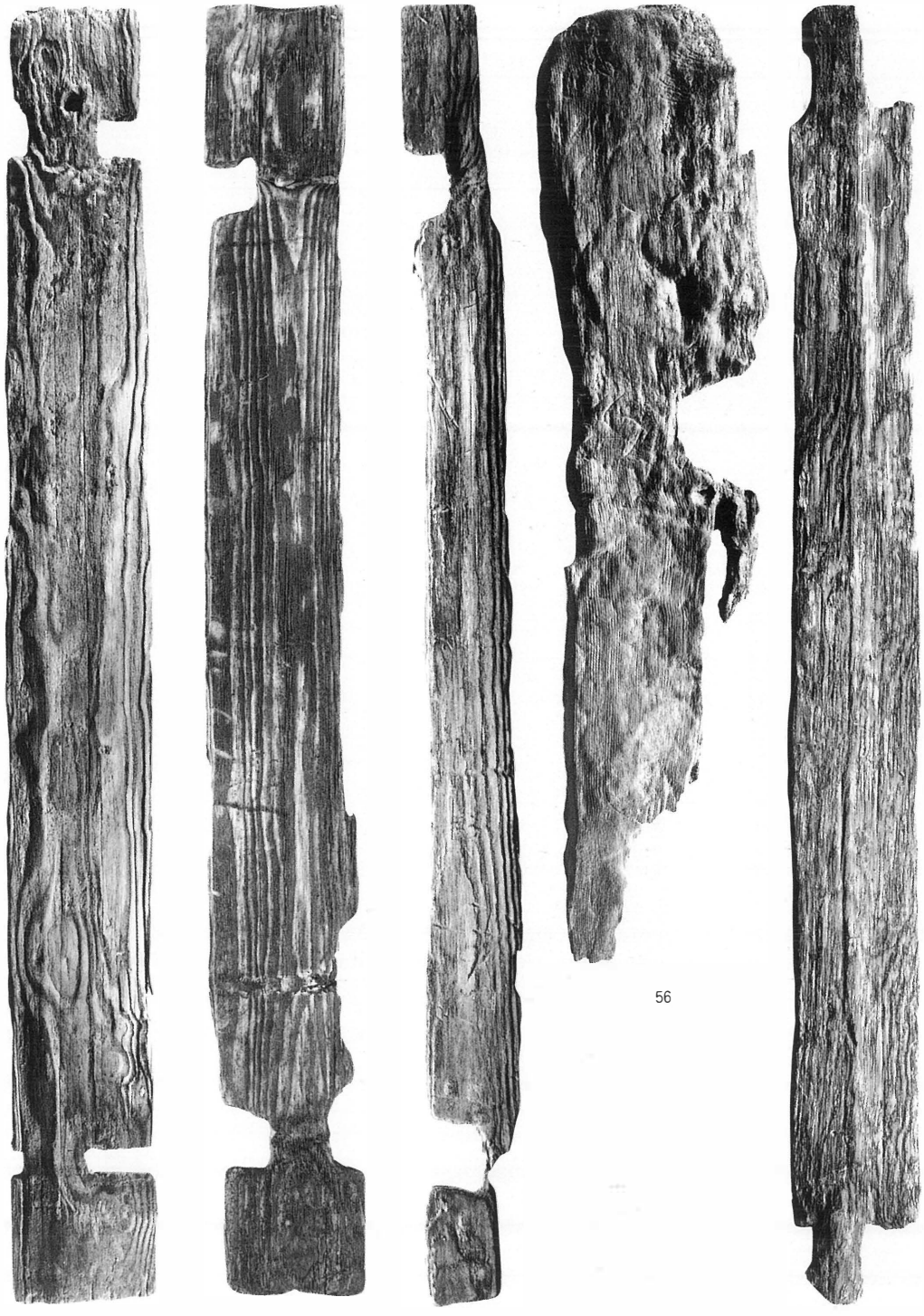
37



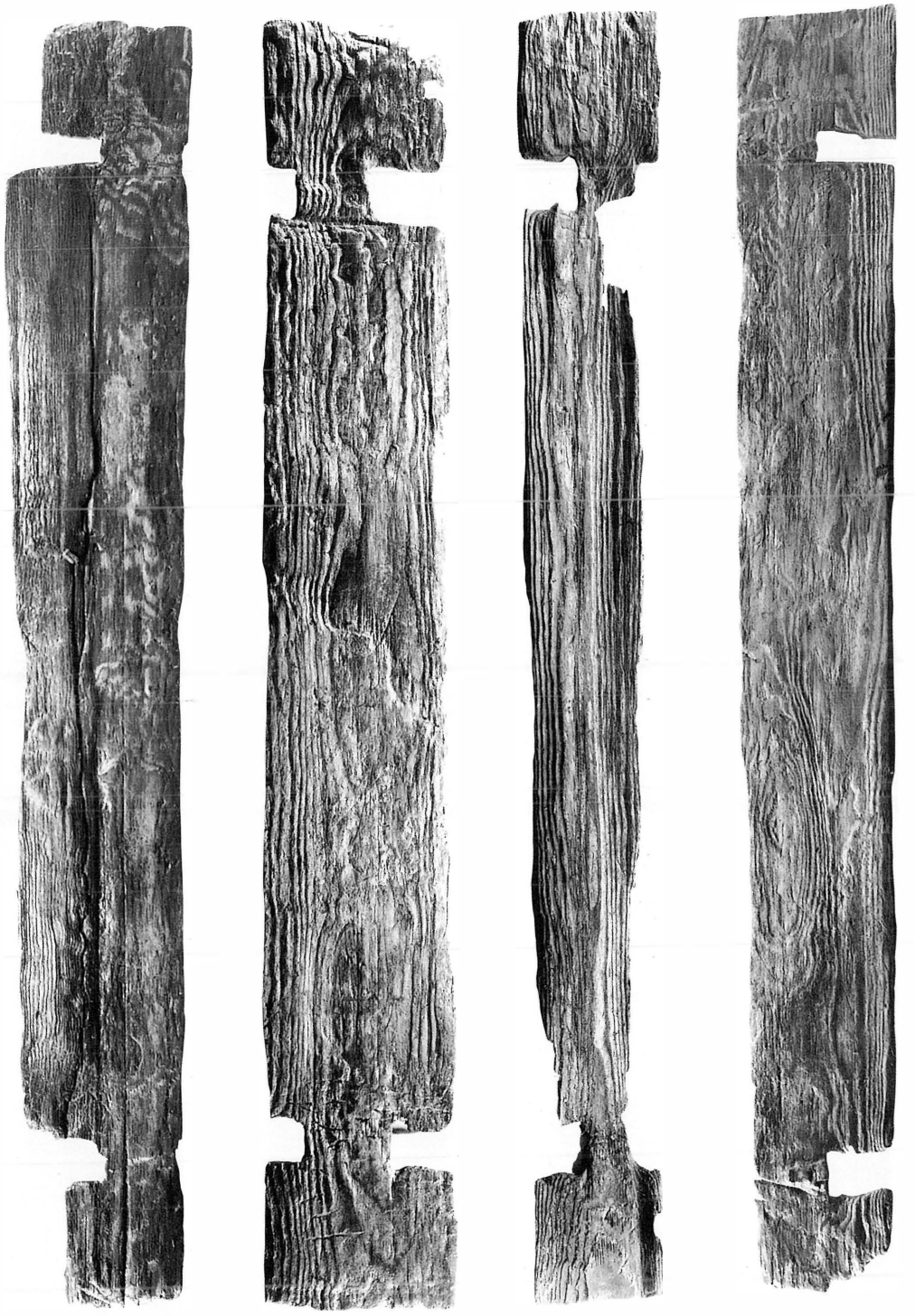
34

29

94 12号井戸跡・井戸枠(3)

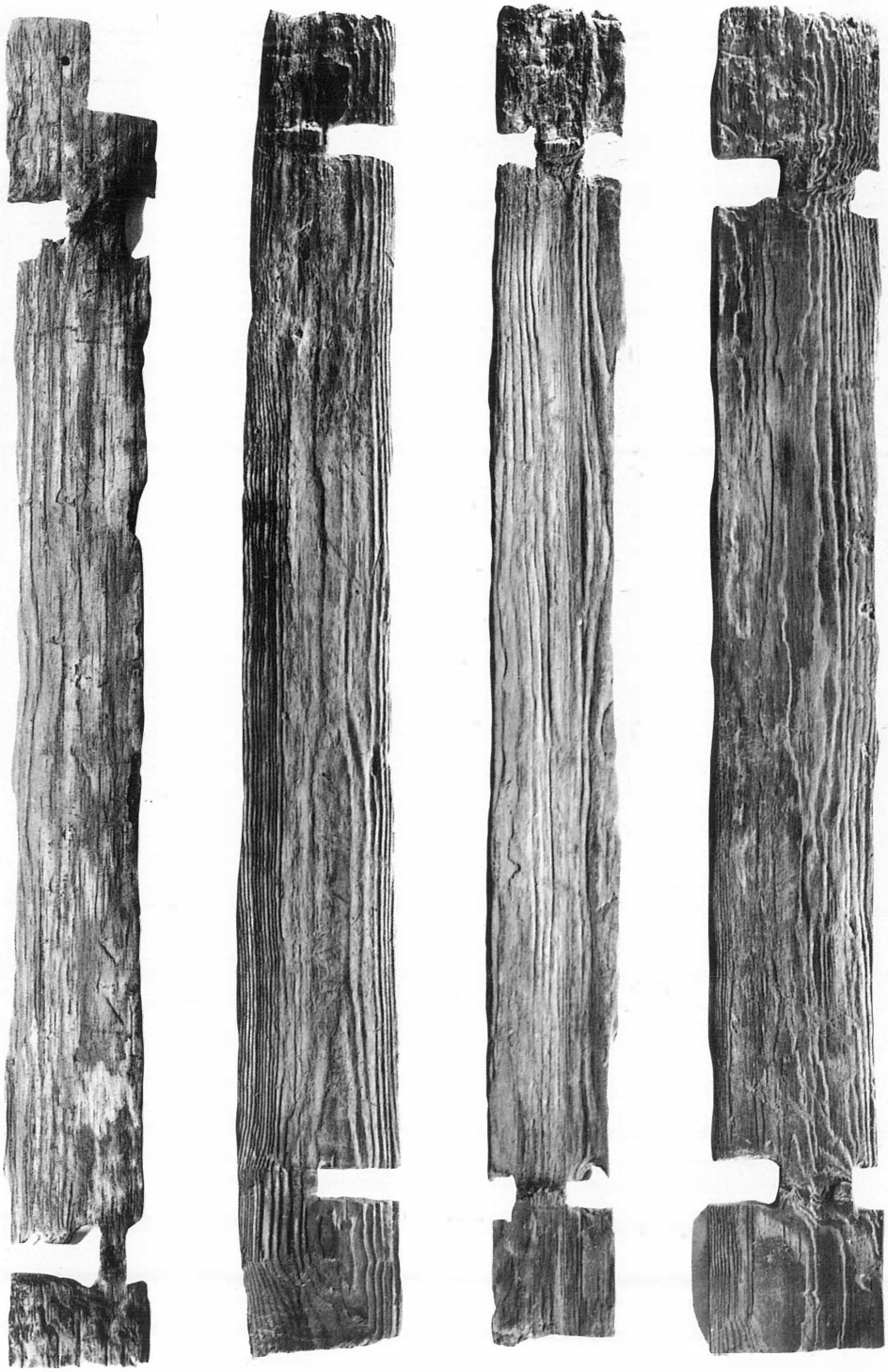


95　15号井戸跡・井戸枠（1）



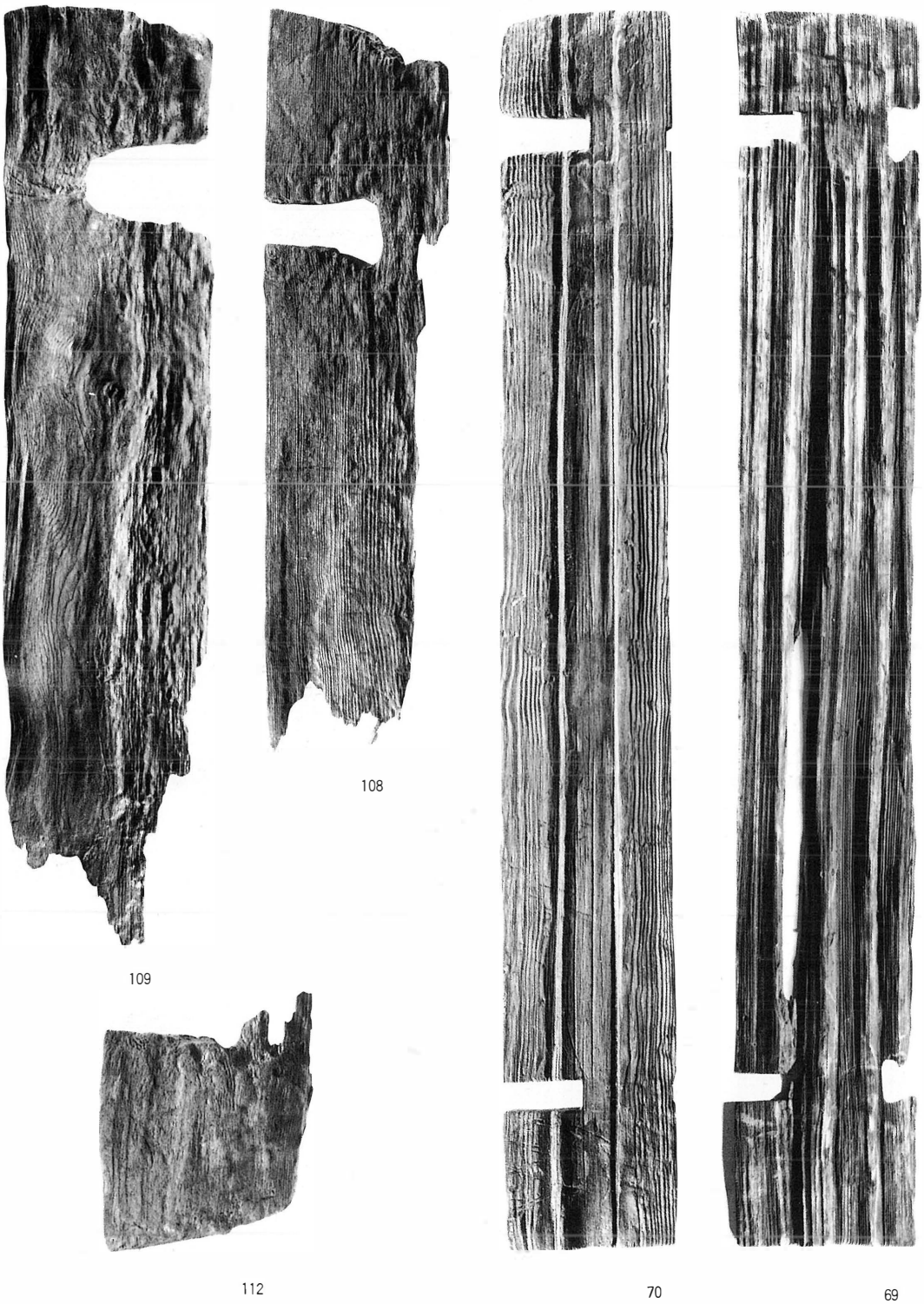
63　62　61　60

96　15号井戸跡・井戸枠（2）



68　67　66　65

97　15号井戸跡・井戸枠（3）



98　15号井戸跡・井戸枠（4）

85

111

110

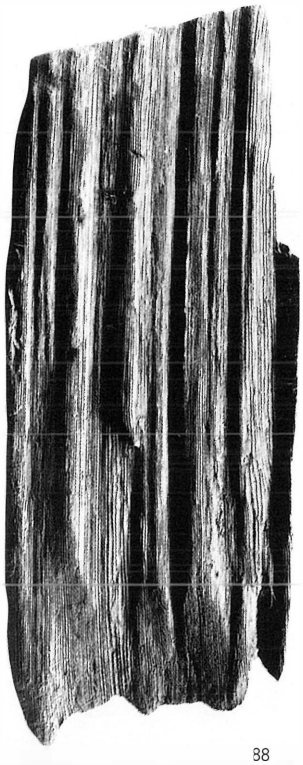
86

113

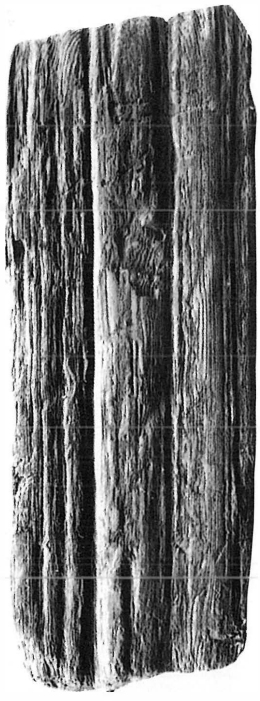
114

99　15号井戸跡・井戸枠（5）

91

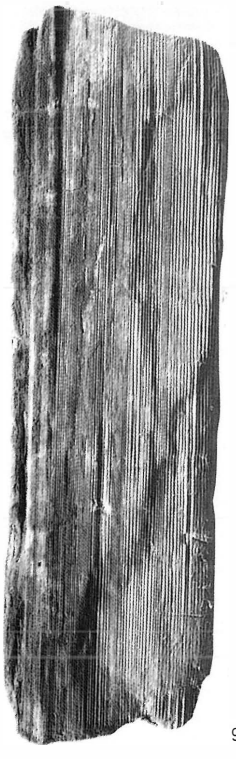


88

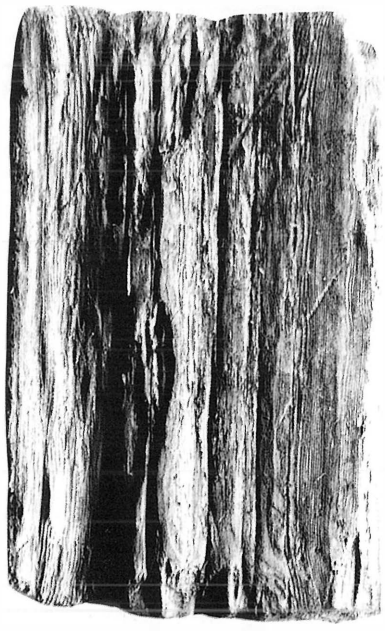


87

94

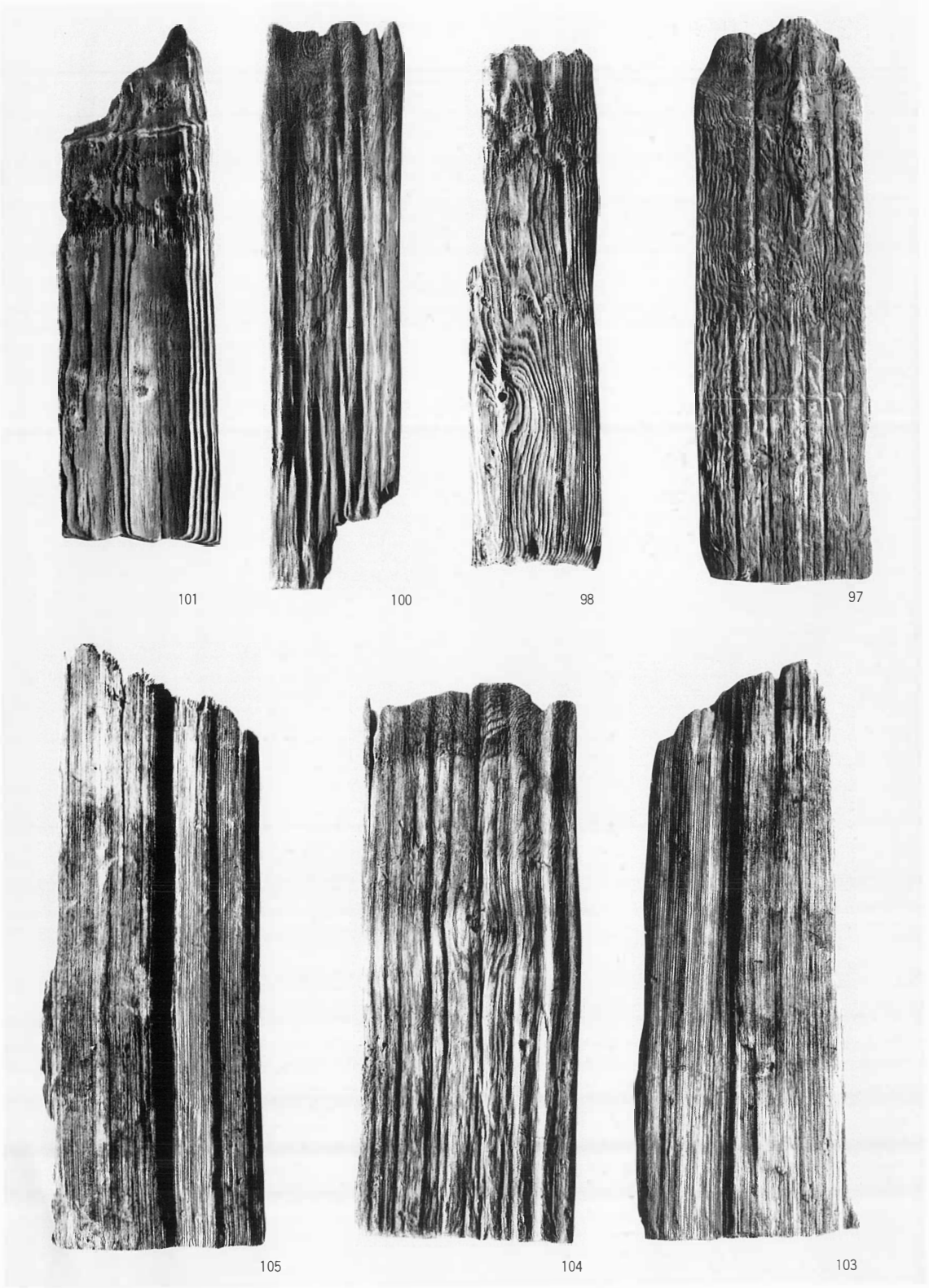


93

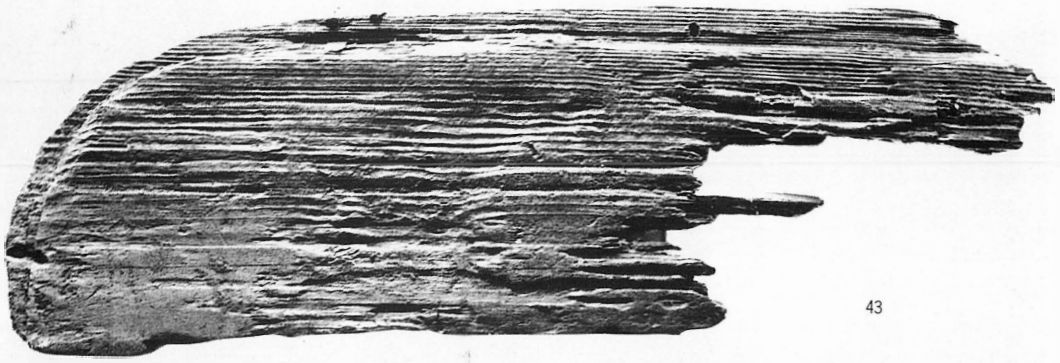


92

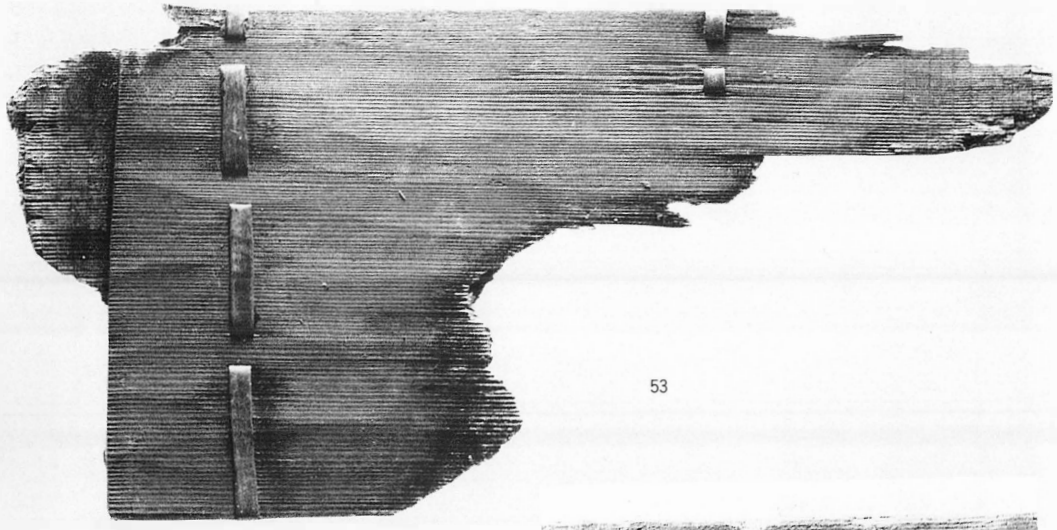
100　15号井戸跡・井戸枠（6）



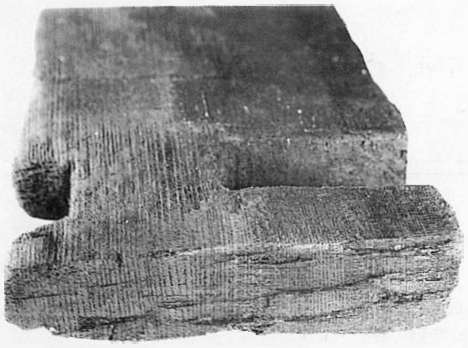
101　15号井戸跡・井戸枠（7）



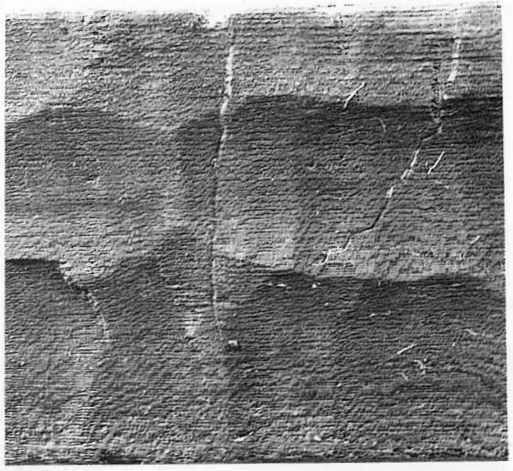
43



53



32(端部加工状況)



32(平面部加工状況)

102　14号井戸跡他出土木製品

福島県文化財調査報告書第262集

東北横断自動車道遺跡調査報告12

屋敷遺跡

平成３年12月15日発行

編　集　(財)福島県文化センター（遺跡調査課）
発　行　福島県教育委員会　(〒960)福島市杉妻町２－16
(財)福島県文化センター(〒960)福島市春日町５－54
日本道路公団仙台建設局会津若松工事事務所
(〒965)会津若松市一箕町大字八角字中村東196－１
印　刷　キング印刷㈱　(〒960)福島市吉倉字前田６－１

本報告書は中性紙を使用しています。
（本　文　王子製紙　サンファンタジー90kg
写真版　十條製紙　ダイヤコート135kg）